
Fate/Fantasy lord [Knight of wrought iron]

花極四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/Fantasy Lord
「Knight of
Wrought iron」

【Nコード】

N9415G

【作者名】

花極四季

【あらすじ】

誰かを救いたいと願った騎士の末路は、救いを与えた存在の裏切りによって幕を降ろす。守護者となった彼に救いは与えられなかった。しかし、英霊となる前に出会った友、凜と再び出会う事で彼の運命は変わる。消えゆく刹那、彼女の最期の言葉が、彼にとつての唯一の救いだった。そんな彼が辿る、もうひとつの運命の物語。

いつのまにかPVが500万を突破していました。正直信じられ

ないです。これからもご愛読の程お願い致します。

東方キャラ：ステータス紹介 ネットバレ注意（前書き）

本編で後書きなどで掲載した作者がオリジナルで考案した内容を纏めたものが掲載されます。よって、ここでは本編と通じる多大なネタバレ要素がある為、ここを見るのは一度小説を見通してからにすることを推奨します。

このページでは、本編では紹介していないキャラステータスも随時公開していきます。当然、本編を通して重大なネタバレにならないキャラのみが対象となります。

キャラの表記順は、初登場した話数を順に追う形となります。ここで初登場したキャラの場合、スキル紹介の部数がNEWと表記されています。

逆に言えば、ここで重大なネタバレにならないということが既にネタバレなんだろうなー、どうしろってんだよー

東方キャラ：ステータス紹介 ネットバレ注意

八雲 紫 初登場：第1部 スキル紹介：第9部

属性：混沌・善

筋力：C

耐久：B

敏捷：B

魔力：A+

幸運：C

宝具：A+

クラス別能力

陣地作成：A+ 彼女にとって有利な状況を作り出す、境界、の形
成が可能

保有スキル

カリスマ：B→A+ 威厳。それは状況によって変化する。

宝具

式神を使う程度の能力：C→A+ 対人宝具 レンジ：1 最大補
足：二人

式神を召喚する能力。召喚する式によりランクは変化。式自身が命令無く行動する場合、強制的にランクはCとなる。命令に忠実に動けばランクを超える能力を発揮する場合もある。

境界を操る程度の能力：E→EX 対軍宝具 レンジ：1→100
0 最大補足：1000人

冥界と顕界の境界、妖怪と人間の境界、夜と昼の境界、春と冬の境界、睡眠と覚醒の境界、極楽と地獄の境界…あらゆる境界を操る程度の能力。

能力の発動定義は、基本的に対となる事象に関係すること。それ以外の方法でも使用は可能だが、矛盾の度合いが高まる程にランクは減少する。

その力の届く範囲は無限に等しく、彼女が死ぬか自らの意思で解除しない限り、永久に効果が続く。

境界（結界）を操る事がどれだけ危険で強大な力なのかは計り知れない。

耐性を得るには、彼女の魔力を超える抗魔力が必要となる。

世界の修正力による重圧に耐えられる者で無いと使用は不可能。

それを使いこなせている彼女の実力は、語らずとも理解出来るだろう。

射命丸 文 初登場：第7部 スキル紹介：第9部

属性：中立・秩序

筋力：C

耐久：B

敏捷：A+

魔力（霊力）：C

幸運：D+

宝具（程度の能力）：B+

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：D 通常弾幕で傷つくが、威力によっては補正が

掛かる。

直感：C 戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。陣地作成の範囲にいる場合、そのランク以下の場合無効になる。

保有スキル

神速：A 目にも留まらぬ速さで移動を可能とする。Aは千里眼B+以上で無いと視認する事は不可能なレベル。

宝具

風を操る程度の能力：D→B+ 対人・対軍 レンジ：1→100

最大補足：100人

文字通り風を使役し、支配する能力。風と言う概念ならどんなものでも操作可能。葉団扇と神速のスキルを併せることでランクはA+にまで昇ることも。

比那名居 天子 初登場：第19部 スキル紹介：第61部

属性：中立・善

筋力：D-

耐久：B+

敏捷：C

魔力（霊力）：C

幸運：C

宝具（程度の能力）：B

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：B 通常弾幕に対し高度の抵抗力を持ち、スペルカードなど大がかりな攻撃にもある程度の耐性を得る。
直感：C 戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。敵の攻撃を初見でもある程度は予見することができる。

保有スキル

戦闘続行：A 往生際が悪い。瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。
不滅の肉体：A 周期的に発生する条件を達成することによって得られる不老不死。一種の世界との契約。
天界の恵み：C 天界に生えていると言われる桃を定期的に食べることによって得られる鋼の肉体。一切の概念が付与されていない純粹な武器に対して、絶対的な耐性を得る。

宝具

大地を操る程度能力：B 対軍宝具 レンジ：1～1000 最大補足：1000

文字通り、大地を操ることが出来る。地震を起こしたり、地形を変更したり等、戦場では敵味方問わず恐れられる。
土の柱を造ったりする場合、周囲の土を媒体として生成する。
質量保存の法則と、発動場所が地面であるということ以外に制約はなく、その能力の本質はランクでは推し量ることは出来ない。

緋想の剣：C EX 対人宝具 レンジ：1 最大補足：1 対軍宝具 レンジ：1～99 最大補足：1000

天人専用の武器。この武器そのものが、気質を見極める程度の能力を内包している。事実上の彼女の第二の能力。

敵によってその性質を常に変え、弱点を的確に突くことが出来る究極の宝具。

相手の気質を霧に変え、霧は天候へと到り、気質の弱点である性質を自ら纏うことで効果を発揮する。

周囲の気質を極限まで萃めることで、対軍宝具として使用も可能とされている。

天人以外も所持は可能だが、効果は一切発動せず、その際はランクC程度の剣となる。

エアと並び、エミヤシロウが解析不可能とされる宝具。

要石：C 対人宝具 レンジ：1～10 最大補足：1

注連縄つきの岩。大地に挿すことで地震を鎮めることが本来の用途だが、思念で自在に動く空飛ぶ岩の為、武器としても盾としても扱うことの出来る、汎用性の高い宝具。宝具というよりも、概念武装に近い。

サニーミルク 初登場：第20部 スキル紹介：NEW

属性：中立・中庸

筋力：E

耐久：D

敏捷：D

魔力（霊力）：D

幸運：C

宝具（程度の能力）：C

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（靈力）：D 通常弾幕で傷つくが、威力によっては補正が掛かる。

直感：E 戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。彼女の場合、悪戯がバレた時にかに逃走を行うかで培われたのでランクが低い。

保有スキル

仕切り直し：E+ 戦闘から離脱する能力。また、不利になった先頭を戦闘開始ターンに戻し、技の条件を初期値に戻す。このランクだと相手の戦闘力が互角でも発動しない場合がある。

太陽の癒し：C+（35）→D+（25）→ 自然治癒能力。太陽から出る光の強さで効果が変動する。夏の際は常にワンランク上昇し、太陽が隠れている時は発動しない。

宝具

光を屈折させる程度の能力：C 対人 レンジ0～10 最大捕捉：10人

文字通り光を屈折させる能力。自らの位置を誤認させたり、屈折を重ねて完全に身体を隠すことも可能。

能力の強さは光の強さに左右され、夏の季節ではどんなに視力に優れた存在であろうと違和感すら感じなくなり、逆に光の少ない夜などでは能力を発動すら出来ない場合がある。

但し、気配を消すことは不可能な為、実力の高い者と相対した時や音を出してしまえば、当然バレる。

ルナチャイルド、スターサファイアが揃うと並みのアサシンよりも優れた気配遮断効果を得る。

ルナチャイルド

初登場：第20部 スキル紹介：NEW

属性：中立・善

筋力：E+

耐久：D

敏捷：C

魔力（霊力）：D

幸運：D+

宝具（程度の能力）：C++

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：D 通常弾幕で傷つくが、威力によっては補正が掛かる。

保有スキル

カリスマ：E 軍団を指揮する天性の才能。これがある為か、三人行動の際にリーダーを取ることが多い。

月光の癒し：C+（35）→D+（25）→ 自然治癒能力。月の満ち欠けで効果変動する。満月の時はワンランク上昇し、新月の時や月そのものが無いときには発動しない。

宝具

音を消す程度の能力：C++ 対人 レンジ0～10 最大捕捉：10人

音を消す、というよりも範囲内の空間を操作し、音を遮断する世界を形成する能力。固有結界とは別物であり、歩行などによる自力での脱出は可能。

空間に作用する為、効果範囲外へ出るか能力の発動を停止させる以

外で防ぐ手立ては無い。

五感のひとつを奪うというのは戦闘で多大なるアドバンテージとなるが、使用者も範囲内では音が聞こえないという欠点がある。

使用者の知恵ひとつで、毒にも薬にも、最弱から最強にもなれる能力である。

サニーマルク、スターサファイアが揃うと並みのアサシンよりも優れた気配遮断効果を得る。

スターサファイア 初登場：第20部 スキル紹介：NEW

属性：中立・悪

筋力：E

耐久：E

敏捷：C

魔力（霊力）：C

幸運：C

宝具（程度の能力）：C+

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：D 通常弾幕で傷つくが、威力によっては補正が掛かる。

気配遮断：C 完全に気配を断つにはかなりの集中力を要するが、不可能ではない。

保有スキル

千里眼：D 純粋な視力の良さ。遠距離視や動体視力の向上。高いランクの同技能は透視・未来視すら可能にするという。

自然治癒：C 傷の治りの早さ。一切の条件なしに発生するが、速度は常に一定から変化しない。

宝具

生き物の動きを捕捉する程度の能力：C + 対人 レンジ0～100 最大捕捉：50人

遠くに有る存在を探ることができる、レーダー能力。

動いている、いないにかかわらず生き物だけ判別が可能。但し、生き物の種類は大きさ以外判別不可。例外として、余程強力な力を持った相手を探知した場合、何かしらの形で他とは差異が出る。

集中力如何でかなりの広範囲を探知を可能とする。欠点として、同時に大量の生物を探知した場合、重要な情報が埋もれてしまうことがあるということ。

サニーミルク、ルナチャイルドが揃うと並みのアサシンよりも優れた気配遮断効果を得る。

森近霖之助 初登場：第27部 スキル紹介：NEW

属性：中立・中庸

筋力：D

耐久：C

敏捷：C

魔力（霊力）：D +

幸運：C

宝具（程度の能力）：B

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：D 通常弾幕で傷つくが、威力によっては補正が掛かる。

道具作成：C 魔力を帯びた器具を作成できるが、成功確率は低い。

保有スキル

探究心の賜物：C あらゆる方面で会得した知識から、より興味のあるものに対しての執着心。逸話として有名になっている宝具を目にした場合、それなりの確率で真名を看破することができる。

宝具

未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能力：B 対人 レンジ0～10 最大捕捉：1

全く知らないアイテムであろうと、確実に名称と用途を看破出来る能力。保有スキルである探究心の賜物は、この能力から零れ落ちたもの。効果は使用者の視界に入ることと成立する。

私生活の物質を看破しても大して意味を成さない能力ではあるが、その効果範囲は宝具にも届き、対サーヴァントの能力としては一級品であり、これ程恐ろしい能力は無いだろう。

魂魄 妖夢 初登場：第29部 スキル紹介：第45部

属性：善・秩序

筋力：D -

耐久：D

敏捷：C +

魔力（霊力）：C

幸運：C

宝具（程度の能力）：C

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：D 通常弾幕で傷つくが、威力によっては補正が掛かる。

保有スキル

仕切り直し：C 戦闘から離脱する能力。また、不利になった先頭を戦闘開始ターンに戻し、技の条件を初期値に戻す。

心眼（偽）：B 視覚妨害による補正への耐性。第六感、虫の報せとも言われる。天性の才能による危険予知である。

宝具

剣術を扱う程度 of 能力：C 対人・対軍 レンジ：0～10 最大

補足：1人

剣術を扱うに於いての才能の総称。

その才能は主に刀に対して大きな効果を発揮するが、西洋の剣等のジャンルの異なる剣も初見である程度扱うことが可能。

その力は、斬撃を弾幕として飛ばすことができる程。

彼女の身の丈に合わない刀を軽々と振り回せるのも、この能力があるところ。

エミヤシロウとは別のベクトルで、剣という存在に恵まれていると言える。

楼観剣：D～B 対人・対軍 レンジ：1 最大補足：1人

魂魄妖夢が扱う二刀の内の長刀の方。

妖怪が鍛えたとされるこの刀には、一振りで幽霊10匹分の殺傷力を持つという概念が定着しており、対霊の相手にはランクが2上昇する。

対してそれ以外の相手にはDランクで固定される。

霊の範囲には、精霊、亡霊、英霊と、霊の名を冠した者全てが該当する。

白楼剣：E - B - 対人・対軍 レンジ：1 最大補足：1人

魂魄家の家宝であり、斬られた者の迷いを断つことが出来るという概念により、此方は高位の霊よりも、漫然とした存在である低位の霊に対して大きな効果を発揮する。

幽霊に使えば成仏するという概念から、ランクは一段階上昇する。

それ以外の相手には、ランクが一段階下がる。

魂魄家以外の者が扱うと、ランクが二段階下がる。

伊吹 萃香 初登場：第33部 スキル紹介：第53部

属性：中庸・善

筋力：A (B)

耐久：B

敏捷：B (C)

魔力（霊力）：C

幸運：C

宝具（程度有能力）：A

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：C 通常弾幕に対し高度の抵抗力を持つが、スペルカードなど大がかりな攻撃は防げない。

保有スキル

泥酔：B+（40～80）酒の力により威圧・混乱・幻惑といった精神干渉のある程度無効化する能力。また、一部のスキルとステータスをランクアップさせる。

思考透視：D（20）相手の考えを言葉を通じてある程度理解出来る能力。ランクDなら、相手の言葉の正否の判断が出来る。つまり、嘘が見抜ける。

カリスマ：D（20）～C（30）～ 大軍団を指揮・統率する才能。だが、泥酔の効果によりワンランクダウンしている。

宝具

密と疎を操る程度の能力：A 対人 レンジ0～50 最大捕捉：100人

物を萃めたり散らしたりする能力。戦闘に直接関係する能力ではないが、その汎用性の高さは他の追隨を許さない。

物質から精神に至るまで、あらゆるものを萃めたり疎めたりすることが出来る上に、自分自身を散らして分身を作ったり文字通り霧散したり、能力を草や木などの、動物を除いた生命体に一時的に譲渡し、自分そのものをその譲渡したものから引き寄せたり離されたりすることも出来る。当然、解除しない間は能力は使用できないどころか、空も飛べなくなるとデメリットも大きい。

鍵山雛 初登場：第54部 スキル紹介：第54部

属性：混沌・善

筋力：E

耐久：D

敏捷：D

魔力（霊力）：A+

幸運：E-

宝具（程度の能力）：B+

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：B 通常弾幕に対し高度の抵抗力を持ち、スペルカードなど大がかりな攻撃にもある程度の耐性を得る。

陣地作成：D→B+ 厄神として有利な陣地を作り上げる技能。身体に付与されている厄を放出することで形成可能。陣地の性能は、溜め込んだ厄に依存する。

効果としては、自身の強化ではなく他者の弱体化。範囲内の敵味方問わず、幸運をC→E-までランクダウンさせ一部スキルを使用不可にする。使用後は厄が空になる。

保有スキル

不幸体質：厄神故に付きまとう厄のせいで幸運がE-まで強制ランクダウンさせられる。

魔力放出：B 彼女の場合は魔力は厄を指す。元々の身体能力故肉弾戦では無意味だが、純粹な放出のみでランクB以下の耐魔力の相手のステータスをワンランクダウンさせることが可能。

神性：B+ 神霊適性の高さ。高ければ高いほど、神との交わりが深いことをしめている。世界が生み出した純粹な神なので本来はA+だが、周囲に展開する厄がランクダウンさせている。

宝具

厄をため込む程度能力：B＋ 対人 レンジ0～50 最大捕捉：
50人

あらゆるものに付与されている不幸の概念を自らへと収束する能力。
その力は自分にとってプラスにもなればマイナスになる時もある。
名義としてはため込むと書かれているが、放出も可能。効果はスキ
ル参照。

厄を取られたものは、一時的に幸運がランクアップする。ある意味
幸運の女神。

epilogue and prolog(前書き)

始めまして。初投稿になります。

この作品は、Fate/stay nightと東方projectのクロスオーバー作品となっております。

二次創作の為、多少原作と異なっていたり、語弊があつたりする場合もございますが、多めに見てくれると助かります。

あと、作者はFate的な世界観をなるべく崩したくない為、国語力が無いですが出来るだけ厨二文で物語を描いていきたいと思っています。

それらに不快感を寄せる方は読まない事をオススメします。

epilogue and prolog

踏みしめる大地は、いつか見た荒野に似ていた。
あたりには何も無い。

何もかも吹き飛んだ山頂には、もう、余分な物など何もなかった。

——戦いは、終わったのだ。

聖杯を巡る戦いは終幕が過ぎ、彼の戦いもまた、ここに幕を閉じようとしていた。

それがどのくらい長かったのかなど、彼には判らない。

ただ、永遠に自己を縛り付けるであろう積念が、今は無い。

終わりはただ速やかに浸透し、この時代に現れた彼の体を透かしていく。

『アーチャー……！』

呼びかける声に視線を向ける。

走る余力などないだろうに、その少女は息を乱して駆けてくる。

それを、彼は黙って見守った。

『はあ、はあ、はあ、はあ………！』

彼の下まで走り寄った少女は、乱れた呼吸のまま騎士を見上げる。

——風になびく赤い外套に、見る影はなかった。

外套は所々が裂け、その鎧もひび割れ、砕けている。
存在は希薄。

以前のまま、出会った時と変わらぬ尊大さで佇む騎士の体は、その足元から消え始めていた。

『アー、チャー』

遠くには夜明け

地平線には、うつすらと黄金の日が昇っている。

『残念だったな。そういう訳だ、今回の聖杯は諦める凜』

特別言うべき事もないのか。

赤い騎士はそんな、どうでもいい言葉を口にした。

『――』

それが、少女には何より堪えた。
今にも消えようとするその体で、騎士は以前のままの騎士だったのだ。

信頼し、共に夜を駆け、皮肉を言い合いながら背中を任せた協力者
振り返れば『楽しかった』と断言できる日々の記憶

――それが、変わらず目の前であってくれた。

この時、最期の瞬間に自分を助ける為に、残っていてくれたのだ。
主を失い、英雄王の宝具を一身に受けた。
現界などとうに不可能な体で、少女に助けを求める事なく、彼女たちの戦いを見守り続けた。

その終わりが、こうして目の前にある。

『アーチャー』

何を言うべきか、少女には思いつかない。
肝心な時はいつだってそうなのだ。
ここ一番、何よりも大切な時に、この少女は機転を失う。

『――』

騎士の口元に、かすかな笑みが浮かぶ。

そんな事は、初めから知っていた。

赤い騎士にとって、少女のその不器用さこそが、何よりも懐かしい思い出だったのだから。

『残念だったな。そういう訳だ、今回の聖杯は諦める凜』

特別言うべき事もないのか。

赤い騎士はそんな、どうでもいい言葉を口にした。

『
』

それが、少女には何より堪えた。

今にも消えようとするその体で、騎士は以前のままの騎士だったのだ。

信頼し、共に夜を駆け、皮肉を言い合いながら背中を任せた協力者
振り返れば『楽しかった』と断言できる日々の記憶

——それが、変わらず目の前にあってくれた。

この時、最期の瞬間に自分を助ける為に、残っていてくれたのだ。
主を失い、英雄王の宝具を一身に受けた。
現界などとうに不可能な体で、少女に助けを求める事なく、彼女たちの戦いを見守り続けた。

その終わりが、こうして目の前にある。

『アーチャー』

何を言うべきか、少女には思いつかない。

肝心な時はいつだってそうなのだ。

ここの一番、何よりも大切な時に、この少女は機転を失う。

『く——』

騎士の口元に、かすかな笑みが浮かぶ。

そんな事は、初めから知っていた。

赤い騎士にとって、少女のその不器用さこそが、何よりも懐かしい思い出だったのだから。

『——な、なによ。こんな時だったのに、笑うことないじゃないっ』

むっと、上目遣いで騎士を見上げる。

『いや、失礼。君の姿があんまりにもアレなものでね。お互い、よくここまでボロボロになったと呆れたのだ』

返してくる軽口には、まだ笑みが残っている。

『――』

その、何の後悔もない、という顔に胸を詰まらされた。
いいのか、と。

このまま消えてしまつて本当にいいのか、と思つた瞬間。

『アーチャー、もう一度わたしと契約して』

そう、言つべきではない言葉を口にした。

『それは出来ない。凜がセイバーと契約を続けるのかは知らないが、私にその権利はないだろう。』

それに、もう目的がない。私の戦いは、ここで終わりだ』

答えには迷いがなく、その意思是潔白だった。

晴れ晴れとした顔は朝焼けそのもので、それを前に、どうして無理強いする事ができるだろう。

『……けど！　けど、それじゃアンタは、いつまでたつても――』

救われないじゃないの、と。
言葉を呑みこんで、少女は俯いた。

それは彼女が言うべき事でもなく、仮に騎士をこの世に留めたところで、与えられる物ではないのだから。

『——まいったな　この世に未練はないが』

この少女に泣かれるのは、困る。
彼にとって少女はいつだって前向きで、現実主義者で、とことん甘くなくては張り合いがない。

その姿にいつだって励まされてきた。
だから、この少女には最後まで、いつも通りの少女でいてほしかった。

『——凜』

呼びかける声に、少女は俯いていた顔をあげる。
涙を堪える顔は、可愛かった。
胸に湧いた僅かな未練をおくびにも出さず、遠くで倒れている少年に視線を投げ、

『私を頼む。知つての通り頼りないヤツだからな。

——君が支えてやってくれ』

他人事のように、騎士は言った。

それは、この上ない別れの言葉だった。

……未来は変わるかもしれない。

少女のような人間が衛宮士郎の側にいてくれるのなら、エミヤという英雄は生まれない。

そんな希望が込められた、遠い言葉。

『——ア、ーチャー』

……けれど、たとえそうなれたとしても、それでも——既に存在してしまっている赤い騎士は、永遠に守護者で有り続ける。

彼と少年は、もう別の存在。

スタート地点を同じにしただけの、今ここにいる少年と、少年が夢見た幻想だった。

『———』

……もう、この騎士に与えられる救いはない。
既に死去し、変わらぬ現象>からだとなった青年に与えられる物
はない。

それを承知した上で、少女は頷いた。
何も与えられないからこそ、最後に、満面の笑みを返すのだ。

私を頼む、と。

そう言ってくれた彼の信頼に、精一杯応えるように。

『うん、わかってる。わたし、頑張るから。アンタみたいに捻くれ
たヤツにならないように頑張るから。きっと、アイツが自分を好き
になれるように頑張るから……！
だから、アンタも———』

———今からでも、自分を許してあげなさい。

言葉にはせず。

万感の思いを込めて、少女は消えていく騎士を見上げる。

———それが、どれほどの救いになったのか。

騎士は、誇らしげに少女の姿を記憶に留めたあと、

『答えは得た。大丈夫だよ遠坂、オレも、これから頑張っていくから』

ざあ、という音。

騎士は少女の答えを待たず、ようやく、傷ついたその体を休ませたのだ。

声が、聞こえた。

身体が消滅し力の一端に還る刹那、声の主はこう言った。

——チャンスを、あげましょうか？

その脳に直接送られた様な言葉は、更に続いていく。

彼女の言葉、無駄にしたくないでしょう？

声色は分らない。

その喋り方で語り手は女性だと仮定する。

騎士はそれに答える様に言葉を紡ぐ。

——貴様は誰だ。

肉体が消滅している彼の声もまた、誰にも届く筈は無い。
しかし、そいつは答えた。

そんな事はどうでもいいじゃない。
私は貴方に質問をしているだけ。

——答えは、如何なものかしら？

芝居のかかった口調で、騎士に促す。

確かに私は凜の言葉を無駄にはしたくない。幸せになって欲しい、と。

決して口には出さなかったが、彼女が私へと込めた想い。
こんな私を、最期まで心配してくれた、彼女。
これ以上、彼女を裏切りたくはない。

しかし、彼の口から出たのはその想いとは裏腹の言葉。

それは願ってもないものだが、私が何をした所で居場所など作れはしない。

——大人しく消えるのを待つさ。

こうしている間にも、記憶は原初へと遡っている。
ほんの少しずつ、あの時の戦いの記憶が無かった事にされる。
記憶の侵蝕が、彼の精神を不安定にさせる。

——ならば、与えましょう。

居場所の無くなった存在が集う世界へ、貴方を誘いましょう。
貴方がそこで幸せになれる保証はありません。
傷つき、悲しむ事だつてあるでしょう。

でも、それと同等の価値ある幸せが訪れる事だけは、保証しましょう。
う。

しかし、その保証はあくまで貴方がどんな境遇に陥っても挫けない
と言う条件のもとでしか成立しません。

——貴方の頑張りを、観察させてもらいますわ。

そう告げると同時に、虚無の空間の一部が縦に割れる。

歪んだその空間が広がっていく。

中から見えるのは、紫色の空間と、夥しい量の眼。

一言で言うと、不気味。

それらの眼は明らかに此方を観察している。
その眼がそいつのものは定かではないが、敵意が無いその眼は逆
に気持ち悪さに拍車をかける。

そして、先程の語り……………。
完全に此方が案に乗る事を前提に話していた。
いや、最早決まっているのか——？

そいつは、言うべき事は無いのか此方の答えを待っている。

——よからう。

お前が何者かは知らないが、断った所でまたあの醜悪な世界に召喚されるだけ。

ならば抗おう。

永遠に変わることない未来から。
この愚かしい輪廻から。

——自分自身の存在から。

ならば口車に乗るだけ。

例え手の平の上で踊らされているだけだとしても、それは今までの私となんら変わりはない。

ならば不変より、変化を望もう。
踊る権利さえ与えられれば、無様だろうが、滑稽だろうが、踊り続けよう。自分が望んだ舞台に登り詰める為に。

——まったく、素直じゃないわねえ。

彼女との約束を守るならば、例え火の中水の中戦場の中！くらい言えないのかしら。

——私はそんなキャラではないのだがな。

はあ、と溜め息を吐く。

そして気がつく。

先程まで存在していなかった身体が、再びその姿を表している事に。薄れかけていた記憶も、鮮明。

『一体、何をした？』

当然の疑問を口にする。

ちよつと、貴方の存在を弄っただけよ。

貴方は最早守護者ではないわ。

流石に、サーヴァントと言う存在までは消せなかったけどね。

守護者じゃない、だと——？そんな簡単に言ってしまうているが、此方としては嘘にしか聞こえない。

嘘ではないわよ。

残念ながら物的証拠はないけど、守護者じゃないったら守護者じゃないの。

信用しなさいな。

此方の思考を読んだかの様に的を射た答え。

『信用するかは、貴様に会ってから判断しよう』

なら、暫くは信用されないって訳ね。

言っただでしょう？観察させてもらうって。

貴方と私は、虫籠の中に居る虫と飼い主みたいな関係よ。

余程の事がない限り、同じ目線に立つことはないと思いなさい。

信用されていない事に腹を立てたのか、多少高圧的な発言になる。

その言葉を最後に、そいつの声が再び聞こえることは無くなった。

それを頃合いと判断し、騎士は歩み始める。

こんな異質な空間が、彼の第三の人生のスタートかと思うと、恵まれていない気がする。

一度目は、訳も分からないままランサーに心臓を穿たれ、瀕死になった。

二度目は、訳も分からないまま遠坂邸の屋根へと落下した。

しかし、決して不幸ではなかった。

それをきっかけに彼女と戦い、勝利を得ることが出来た。

自分の信念を貫ける世界へと訪れることが出来た。

ならばきつと、今回も素晴らしい出会いや出来事がある筈。そう、信じて再び歩を進める。

どれくらい歩いただろうか、いつまでたっても何も変化はない。地に足が着いた感覚がないこの空間は、居るだけで常人なら気が狂

い出すだろう。

しかも辺りにあるのは無関心に向けられた無数の眼。すれ違いざま、なんとなく気になった程度にしか関心がないその眼だが、それがずっと続いたらどうなると思う？

好奇心も畏怖も哀悼も憤怒も憎悪も嫌悪もなにもない。まるで人形に見られてるかの様な。

この空間は、危険だ。

人の精神を崩壊させるのに十分な材料が揃いすぎている。

私も安全だとは最初から思っではいなかったが、まさかこれほどとはな…………。

空間の裂ける音。

それは、騎士の身体が妙な浮遊感を覚えたのと同じだった。

反射的に下を見る。

そこには、青が敷き詰められている。

更に着地場所には建物ときた。

私が彼女に召喚された時となにひとつ変わらない状況。

ただ違うところは、此方がその状況を冷静に判断出来ていることと、建物が西欧的なものではなく、その形から、神社だと言うこと。

ああ、またか——と内心呟く。

何故、こうも奇抜な始まりに縁があるのか。

まあ、それが私らしいと言えばそうなのだが。

身体は重力によって先程までの空間から物凄いスピードで離れていく。

自身の身体を隅々まで”強化”している間に聞こえたそいつの声が、

今度は鮮明に聞こえる。

『私のことを信用しなかった罰よ。
少し痛い目に遭いなさい』

バツ、と声が聞こえた方向を見るが、歪んだ空間があるだけでそこに声の主はいない。
それに気が逸れてしまったせいで、“強化”が中断されてしまう。

『しまっ——』

もう遅い。

騎士は眼前に迫った神社の屋根へと無様に落下した。

遥か上空。

紫を貴重としたドレスと、フリルが特徴的な傘を差した女性が、その光景を傍観し、まるで無垢な子供の様にクスクスと笑っていた。

epilogue and prolog(後書き)

はい、いかがでしたでしょうか(笑)

駄文なんてレベルじゃありませんね。

まあこう言ったのは自己満足出来ればそれだけでも頑張りに繋がりますから、これから精進していきたいです。

このサイトでは、アーチャーになりかけた衛宮士郎を主人公に書いたものばかりだった為、ならばエミヤなアーチャーが主人公だっ方がいいじゃない！ってことが発端。

一応小説経験はありますが、まるで成長していない…… by 安西先生

アーチャーの設定ですが、彼と言う存在は、全てのルートを体験している、と言うものです。

hollowも体験済み。

それは矛盾とかではなく、英霊だから可能なものと解釈して下さい。

よって、彼が投影を行える範囲はかなりのものです。

構造が複雑な機械を投影出来て、剣以外の武器を投影出来ない訳がない！と言う無茶思考で、下手をすると相性とは全く異なる武器を投影したりする可能性もあります。

原作を超えた実力のアーチャー、と言うのを表現出来るかはわかりません。

それでも、応援してくれると嬉しいです。

不器用な正義の味方と不器用な風祀の少女（前書き）

一話完結のノリで書いてるので、一回一回の話が長いです。自分不器用なのでどこで中断したらいいのか分からないでそこらへんご了承ください。

不器用な正義の味方と不器用な風祀の少女

太陽の光が窓から差し込み、私に朝の実感を与える。

日はそこまで昇ってはいないが、いつも食事の準備で朝早くに起き
ているので慣れている。

それでも、今日は遅く起きた方だ。その理由は……。

『神奈子様も諏訪子様も、昨日から帰ってこないなあ……………』

普段早く起きる原因の二人が、なにやら付き合いでどこかへと出か
けてしまったからだ。

と言うか、神様が神社を空けると言う行為自体、間違っている気が
しなくもないが。

でも、この世界じゃそんな私の常識なんてあつて無いもの。

納得はいかないが、此方が折れるしかない。でないとキリがないか
ら。

まあなんにしろ、今はそんな多忙な状況ではない為、それに甘える
様にゆつたりとした朝を迎える。

一人での食事は少し寂しかったけど、たまにはいいものだ。

普段はお二人の他愛のない会話を聞いたりして、笑ったり怒ったり。
まるで本当の家族みたいに。

いや、あの二人からすればもう私も家族なのだろう。

でも私は、そんな関係にひとり細い線を引いている。

そうしないと、私の存在意義がなくなってしまういそうで。

かぜはふり

風祝と言う立場が消えてしまえば、肩を並べた食事なんて二度と出
来なくなるかもしれない。

いや、それだけでは済まされない。

今まで過ごしてきた時間さえも、無に帰してしまう可能性だってある。

お二人にそれを話せば間違いなく怒るだろう。

お二人共優しいから。

心の底から慕ってくれてるって、分かってるのに。
それでも、恐怖が拭えることはない。

『最低だなあ、私って』

誰もいないにも関わらず、表情を隠すように身体を丸める。
だって絶対に今の私、顔がぐしゃぐしゃだから。

涙は出ないし、嗚咽もない。

決して泣いてはいない。外側からは分からない様に、必死に抑制する。

そろそろ、大丈夫かな――

あれから数分、精神的に落ち着いた私は、頃合いかと思い顔をあげようとした刹那、それは起こった。

メキメキと言う音が聞こえたのも束の間、屋根の材木が折れ、木屑と共に太陽の光が差し込んだ。

その組み合わせがダイヤモンドダストと似た美しさを醸し出している、と普段なら結構冷静にその様を観察していただろう。

この世界では建物なんてよく壊される。

決してわざとではないらしいが、それでもこちら被害者には関係のない事で。

でも、今回は違った。

屋根が崩れると同時に、人間のようなシルエットが一瞬見える。それは床に叩きつけられると同時に舞う木屑等の埃で隠れてしまい視認出来なくなる。

『え……ええええ！？』

驚くのも無理はない。

屋根が崩れる程の高さから落ちてきたそれ。
妖怪ならば怪我も大したものではないだろうが、人間は別だ。

——死体の第一発見者だけにはなりません様に。

そつ心の中で祈った後、恐る恐る着弾点へと近づく。埃も薄れてきて、その姿が鮮明になる。

——一瞬、目を疑った。

白髪のアールバックに、羽織られた赤いコートとその下に隠れた黒の軽鎧。

それはまるで、教科書や文献に出てくる騎士そのもの。

そんな騎士が、まるで不釣り合いな東洋の神社の屋根を突き破り、倒れている。

『ええええと、どうしよう………』

不測の事態に冷静になれないのも、現代っ子らしいと言えばらしいのだが。

『ん………』

空気が漏れたかの様な、僅かな声。

『良かった、生きてる……………』

ほっ、と胸を撫で降ろす。

えと、こういう時は確か揺らしたりしちや駄目なんだっけ……………。

『あ、あの。大丈夫ですか？』

多少警戒心を覚えながら、騎士へと話しかける。

それに反応するかのようにその人は目を少しずつ開いていく。

その視線が、こちらを捉える。

その顔は、簡単に言ってしまうばかりの美形だった。

幻想卿には、何故か男性が少ないらしい。

こちらの世界で昔から巫女をしていた私の友達曰く、理由は不明らしい。

それに外の世界でも、ここまでカッコいい人は見たことがない。思わず見惚れてしまう。

だがすぐにそんな思考は振り払い、再び彼の安否に集中する。ゆっくりと口を開いて発した彼の第一声は、こうだった。

『君の方こそ、大丈夫か……………？』

『……………へ？』

思わず間抜けな声が漏れる。

なんで私の心配をするの？

自分の方が怪我をしていそうなのに。

思考が目紛しく回転する。

『いや、君の顔が泣いてるように見えたのでね。すまない、私の勘違いのようだ』

その言葉に、私は凍りつく。

嘘……私、泣いてる様に見えた？

目の付近を中心に触れてみるが、外観では分からない筈。

それに、私は泣いてなんかいない。

この人は、私の外側ではなく、中身を視たって言うの？

たったの一回、目を合わせただけで。

信じられない。

自分の辛い顔は、昔から見せない努力をしていた。

だから昔から、私は笑顔の子だって色んな人から言われていた。

神奈子様や、諏訪様にだってバレたことはなかった。

唯一私の仮面の下を視たのは、こちらに来ての私の初めての友達、博麗霊夢だけだった。ついさっきまでは。

霊夢さんとは、ある事件をきっかけに出逢い、その後何かと話す機会が増えた。

そんな他愛のないある日、変わらぬ表情で言われた。

——私と話してて楽しくないなら、無理して話さなくてもいいのよ？と。

別に霊夢さんと話してるのがつまらなかった訳では決して無い。ただその日、少し憂鬱な気分になる出来事があっただけ。

必死になつて弁解し、その時は事なきを得たが、何度か仮面を見破られる内に、注意された。

霊夢さんは、それからその話題に関しては何も言わなくなった。諦めたのか、私が上手くなったのかは分からない。

でもこれで理解した。

私の仮面は、月日が経ち過ぎて、崩れかけてるんだと。

『……………大丈夫か？』

『——え？』

気づけば目の前の騎士は既に起き上がり、こちらの様子を観察していた。

『は、はい！ごめんなさい！』

『何故謝るのは知らないが……………こちらこそ済まなかった』

『なにが、ですか？』

『いや、理不尽な目に遭つたとはいえ、これを壊したのは私自身だからな』

そう言つて、上を見上げる。

そこには風通しと光が射しやすくなった空間がひとつ。太陽は、まるで祝福するかのように彼のみを照らしている。

すっかり忘れていたが、この人は屋根の上から落ちてきたのだ。

『そ、そうでした！怪我はありませんか！？』

慌てて彼に詰め寄る。

パツと見、怪我はない様に見えるけど、打撲とかしてるかもしれない。

『私は大丈夫だ。それでも存外丈夫に出来ているのでね』

『駄目です！そういう人に限って無茶をするんですから』

彼の言葉を見無視し、腕や足を捲り入念に調べる。

確かに外傷はないが、その際に見た幾多の古傷が、逆に彼女の心配を促進させる。

何をしたらこんな傷がつくのか。

斬られた傷、刺された傷、挟まれた傷、撃たれた傷、穿たれた傷。そのどれもが彼の人生を物語っているかの様。

『ほら言わんことか。大丈夫だと言ったのだから、そんな過剰になる事はない』

彼は捲られた服や裾を直すと、何処かへ行こうとした。

『ま、待って下さい！どこへ行く気ですか？』

『いや、屋根の修理をと思ってね。そうだ、出来ることならば釘や木槌の類があると助かるのだが』

『そんな、先程落ちてきたばかりなのに無茶しちやいけません』

『とは言ってもな。もしこれから雨が降ったりしたらどうする？晴れているとはいえ降らない保証なんてないだろうに』

彼は行くと言うと私は引き留める、の繰り返しが続く。
その間に私が感じた疑問。

——どうして他人の方をそこまで優先するのか。

確かにそれは悪い事ではない。

寧ろ凄いいことだと思う。

でもそれには下心があるのが常。

でも彼の言動からすると、それがあたかも当然の様な物言いである。
答えている。

対価を求めない善意など、自己満足でしかない。

そんな彼を、機械みたいと思ってしまった。

ある一定の言葉や事柄に反応して命令を実行するロボット。

そんな感じがしたから。

彼は屋根を壊した償いで直そうとしてるのではなく、私が屋根が壊れて困っていると思ったから直そうとしている気がする。

それはあくまで個人的見解にすぎないのだが、なんだか少し私と似ているせいかなんとかなくだが理解>わかってしまう。

はあ、と溜め息を吐く。

『分かりました。これ以上言っても無駄なので、許可します。ですが、条件として私も手伝う事を許可しないと、認めません』

『分かった。その代わり、怪我をしても知らないぞ？』

彼は少し考える素振りをした後、納得のいかない顔つきではあったが、承諾してくれた。

『では、私は必要なものを揃えてきますので、待ってて下さい』

私は彼に言われた道具を調達しに、その場を後にした。

少女がその場から去ったのを確認し、砕けた木材から使えるものを探し出す。

しかし、あの速度で落下して無事な木材は殆どなく、修繕には暫くかかりそうだと判断した。

『予想はしていたがな……………』

取り敢えず使えそうな木材に”強化”を施す。

強化したそれは、軽さは変わらず、強度は鉄並になる。

問題はこれからだ。

材木がないのでは、調達するしかない。

だが、木を切ることから始めるとなると、一日ではまず終わらない。だからと言ってここに世話になるのも厚かましい。

こちらの状況が分からない以上、無闇には使いたくないが、仕方がない。

トレースオン
『———投影・開始』

想像する。

材木の性質と構造を。

計算する。

あの穴に必要な材木の総量を。

構成する。

頭に描いた形状を、魔力で物質化させる。

伽藍、と音を立てて色々な形状の材木が床にばらまかれる。

それらにも”強化”を施し、準備が整う。

アーチャーは今投影した材木をまじまじと見つめる。

『——完璧すぎる』

それは自画自賛の言葉ではなく、不自然な物事に対しての言葉。

元々私は>剣<の投影以外は中途半端で、魔力の消費も尋常じゃない筈。

にも関わらず、これだけの量の物質を投影し、魔力がまるで消費していないなんて、おかしい。

それだけではない。

質が、本物と同等なのだ。

最初の材木と投影した材木を比べても、それは目を見張る位に。決してそれ以上でもなく、それ以下でもない。

こんな事が偶然に起こる程魔術は単純じゃない。

では何故だ——？

疑問に感じている所に、パタパタという音を立てて先程の少女が走って来る。

その腕には木槌と釘が抱えてある。

『お待たせしました。少し探すのに手間取ってしまっ……』

そう言い終わるか否や、私はコツンとその少女の頭を小突く。

『いきなり痛いです……。なにか不満な点がありましたか？』

『木槌はともかく、釘をそんな風に抱えるんじゃない。しかもそんな大量に……。転んだりしたら大変な事になっていたぞ』

『ですが、待たせてはいけないと思って……。』

『私は別に急いで欲しいとは言っていない。それに急ぐことが必ずしも最短に繋がる訳ではない。』

そう説教をするも、内心彼女の心使いに暖かい気持ちになる。

『それでも、君の心使いには感謝するよ』

そう言っただけ微笑むと、先程までの落ち込んでいた表情が花開いたかのように明るくなる。

『では行こうか。その荷物は私が持とう』

彼女の持っていた道具を半ば強引に貰い、外へと歩く。

手持ち無沙汰になった彼女は迷わず置いていた木材を手取る。

『こんなに使える木材、ありましたっけ？』

『……………ああ』

魔術の事は出来るだけ隠した方がいいだろう。話すことでも無いし、何よりそれが原因でこちら側の事情に巻き込まれる可能性だってある。それだけは絶対に避けたかった。

太陽はその頂上に届こうとしている時刻、守矢神社の屋根に二つの影。

ひとつはその神社で風祝件現人神を務めている巫女——つまり私もうひとつは今現在の作業の原因でもある、西洋風の赤い騎士さん。私は壊れた屋根を修理しようと思気込んで着いてきたはいいものの、殆ど見ていることしかできなかった。

理由は明白。

彼の手つきがとんでもなく素早いのだ。

木材を手に取り、それを打ち付けるまでの動作に無駄が一切ない。

素人にもそれが分かってしまう程に、彼の動きは流れるものだった。私も負けられないと変に對抗意識を燃やして釘を打っていたが、それを見ていたのか彼に釘の持ち方から説教されてしまう。

彼は決して、私の事を邪魔とは言わなかった。寧ろやり方を丁寧に教えてくれて……………。

確かに叱られはしたが、その口調に怒気は感じられなかった。

危なっかしいと言う理由なら、とつくに私は地面の上で見上げる事しか出来なかったの筈なのに。

だから私はそれ以上作業をする事はなかった。

また私がヘマをすれば彼はまた私の為なんかに時間を割くだろう。それがなんだか、申し訳なかった。

『ごめんなさい。本当ならもっと早くに終わっていたのに……………』

『気にしなくてもいい。私も人にモノを教えているとなかなか楽しくなってる。少し熱中してしまった』

彼を機械だ、と思ってしまった自分を叱咤する。

彼はこんなにも人間らしくて、人間らしくないのに。

最後の板に釘を打ち終わると、彼は肩を回し、首を鳴らしていた。

『お疲れ様でした』

タオルをあげようと思ったが、この太陽が照りつける中の労働にも関わらず、彼は汗ひとつかいていなかった。

殆どなにもしていない私はほんのり汗をかいている程度だが、その違いは第三者が見ても明らかだ。

単純に慣れの問題なのかな。今の私はそう結論付けていた。

『さて、私はこれで失礼するよ。長居して済まなかったな』

3メートルはあろう神社の屋根から軽々と飛び降りるか否や、そう言って立ち去ろうとする。

『ま、待って下さい！』

私は慌てて屋根から降りて後を追いかける。

『あの……………何処へ行くんですか？』

何故、止めたんだろっ。

『さあな。生憎死ては無い。』

自分でも分からない。

『——だったら、ここに泊まりませんか？』

だからこそ、こんな事を言ってしまったのかもしれない。

『気持ちは嬉しいが私にその資格はないだろう。屋根を壊して更にそこに世話になるのは押し付けがましいにも程がある』

この時、私がなにも言わなければ彼はそのまま立ち去っただろう。それで全て元通り。いつも通りの日常が帰ってくるだけ。

でも、なんでだろう。

ここで別れたら、二度と会えない気がして。

そんな事、外の世界じゃあるまいしある訳がないのに。

『——私は、屋根を修理して欲しいなんて一言も言ってますよね？』

その言葉に、先程まで背中を向けたままだった彼がこちらを向く。

『なのに貴方は自分勝手な行動でうちの神社を修理し、何事もなく立ち去るうとしてる。——そんな事は許されません』

自分でも何を言っているのか分からない。
言葉を選ぶ余裕なんて無い。

ただただ、必死だった。

何に必死になつてるかも分からない。

そんな事を考える暇がない位に、私は我を失っていたのだろう。

『私は一方的に善意を押し付けられて黙っていられる程、駄目な人間ではありません。——だから貴方はここに泊まる事で、恩返しをしなければいけないんです』

幼稚な言い訳。

子供だつてもう少しましな言い訳をする。

はっ、と我に還ると、先程までの自分の発言に恥ずかしさを覚える。

『あ、あのっ……………！』

慌てて今までの発言を撤回しようとする。
すると、彼は目を見開いていた。

それはそうだろう。

先程までの私とはまるで違い、とても強引だから。

幻滅、したかな。

こっちが本当の私だつて知つて。

——— 本当の私？

いつの間に、私は仮面を取っていた？

いや、寧ろ外された———？

こんな事、始めて。

知らない内に素の自分を晒していたなんて。

そんな気配りをする余裕がない位に、私は動揺してたって事？

——彼に自分の気持ちをぶつけて、どうだった？

久しぶりに、自分の言いたい事をきちんと言えたんじゃない？
すっきりしたんじゃない？

そして気づく。

ああ、そっか——

私が彼を引き留めた理由。

それはひどく単純な事。

子供みたいな理由。

それは——

彼の優しさ、身勝手さ、強引さ、それら全てに、私は惹かれたんだ。

それは恋心とは違う、不思議な感情。

出会ってまるで時間は経ってないのに。

ただ出会いがとんでもないハプニングからのスタートだけで、
何も代わり映えしないのに。

だから、確かめたい。

この気持ちがなんなのかを。

——身勝手なのは、私も同じか。
心の中で自嘲する。

『それで、どう……ですか？』

未だに見開いたままの彼に恐る恐る尋ねる。

すると突然、

『くっ——』

何の前触れもなく笑い出した。

『なにが可笑しいんです？』

『すまない。少し昔を思い出してね。——君は、私の知り合いに似ているよ』

その言葉に、どう対応すれば良いか微妙な気分になる。

彼がこちらへと、一歩ずつ歩んで来る。

その距離はあつという間に、手を伸ばせば容易く触れることが出来る所までたどり着く。

『——いいのか？』

それは恐らく、先程の会話の答え。

『駄目なら最初から言いません』

『そうか』

ふつ、と彼はほんの少し笑みを溢し、私へと手を差し出す。

『ならば、お言葉に甘えましょう。——すまないが、よろしく頼む』

私はその手を取る。

『こちらこそ、よろしくお願いします』

彼に応える様に、私は微笑み返した。

『では、自己紹介ですね』

そうなのだ。

こう言った悶着をしていたにも関わらず、お互い名前を知らなかったと言う笑い話にもならない出来事が残っていた。

『私は東風谷早苗、こちやさなえくと言います』

『私は……アーチャーとでも呼んでくれ』

アーチャー……？やっぱり西洋の人なのかな。

それにしても、名前が単語だなんて、変わってる。

『はい。ではアーチャーさん、行きましょう！』

握手した時の手を再び強く握ると、私はそのまま走り出す。

『待て待て、そう焦ることは………』

そんな彼の言葉を無視し、私はアーチャーさんとの出会いの場所へと向かった。

不器用な正義の味方と不器用な風祀の少女（後書き）

F a t eや東方を知らない人の為のキャラ紹介コーナー

第一回目はこの小説の主人公的位置にいる、アーチャーの紹介

なお、下記の内容は本編のF a t e / s t a y n i g h tのネタバレ要素しか含んでいません

よって、それらに不快感を感じるようならば、読まないことをオススメします

小説の冒頭が既にネタバレじゃね？とかいう人は

別に、君を倒してしまっても構わんのだろう？

と問いかける刑に処す

因みに本当に基本的な事に関しては記述しないので、あしからず

真名：エミヤシロウ

身長：187cm / 体重：78kg

属性：中立・中庸

イメージカラー：赤

特技：ガラクタいじり、家事全般

好きなもの：家事全般（本人は否定） / 苦手なもの：正義の味方

とある未来の世界で死すべき百人を救うために世界と契約した衛宮士郎その人である。全てを救うという理想を追い求め続け、限界にぶち当たった彼は、「英霊になれば、きっと全てを救えるはず」と世界と契約を交わし、その百人を救った。しかし、その後待ち受けていたのは「霊長の守護者」という残酷な現実であった

理想を追い続けたその生涯は最後まで報われることなく、彼は自分が助けた相手からの裏切りによって命を落とす。それでなお、誰一人恨むことはなかった。死後、英霊となった彼に与えられた役割は霊長の守護者として、拒絶不可能な虐殺に身を投じることだった。さらにはその過程で人の暗黒面をまざまざと見せ付けられる。その結果が信念の磨耗と理想への絶望である

基本的に気障で皮肉屋な現実主義者。それでいて、根本的にはお人好し

辿ってきた数奇な人生を語るかのような、その背中が印象的な漢

戦闘スタイル等は、戦闘が始まった際にでも載せます

二人の神（前書き）

更新速度なんて飾りです。作者みたいな人にはそれが分かんのですよ。

二人の神

『ささ、上がって下さい』

早苗に促され、私は再び神社の中へと入る。

『ここは拝殿で、この奥が本殿となっています』

そして入るが否や、彼女は神社の中を案内し始める。

改めて観察すると、この神社がどれだけ規模の大きいものかが理解
>わかくる。

それ故にこの神社の神がどれだけの靈的加護を誇っているかも想像
がつく。

見た目と反してかなりの年期を誇っているのも、歴史の深さ故だろ
う。

歩く際に聞こえる床板の軋む音の大きさ、直接触れて理解した材木
の触感。

それらは全て質の古い材木に該当するそれだ。

だが決してこの神社が今にも倒壊しそうとか言うのではなく、寧ろ
大規模な衝撃にも下手をすれば耐えうるかもしれないと言う事実
に、私は関心を覚える。

多少摩耗していた部分は、彼女にバレない様に密かに”強化”を施
しておいた。

これでその部分からの破断は起こらないだろう。

『君は、何処に住んでいるのだ?』

彼女の案内について行く際に、気になった事を口にする。

大まかに見た感じでは、どこも祭事に使うようなところばかりで、少なくとも人が住んでよいような場所は見当たらない。

『それは最後に案内する予定だったんですよ。アーチャーさんだつてそこで暮らすんですから』

——泊まる、から暮らす、になっていたのは気のせいだろうか。指摘しようとも思ったが、彼女の楽しそうな顔をそんな小さいことで崩すのは無粋だろう。

『さあ、次ですよ』

そう言つて彼女が足を向けた方向は、外だった。

境内に関しても、とても丁寧に掃除をしているのか、汚れは殆ど見当たらない。

手水舎も水垢が綺麗に拭き取られている。

『掃除は好きなのか？』

ふと、そんなことを聞いてみる。

『好きか、ですか。』

どうなんでしょう。毎日やってるから、感情云々じゃなくてこう、身体に染み付いているって言うんでしょうか。

当たり前の事だったから、そんな風に思ったが事なんてなかったです』

『立派だな、君は』

まだまだ遊び盛りの年齢であろう彼女がそこまでしつかりすると言
うのは、そう簡単に出るものではない。

毎日やっけるなら尚更投げ出しなくなるだろうに、それでも彼女は
それをおくびにも出さず頑張っている。

『そ、そんなことないですよ』

『そんなことはあるさ。普通ならばこんな事務的なことは君みたい
な年齢、ましてや女子がするなんてのは稀だ。もう少し誇ってもい
い。私が保証しよう』

そんな自分も、昔は色々な雑務を引き受けていた事を思い出す。

彼女と違い、昔の私はただの世話焼きで自分の描いた理想を押し付
けてきた愚か者だ。

それは他人から見れば純粹に褒められる行為かもしれないが、私の
本質を識くくっている者ならば呆れ返る事だろう。

正義の味方と言う、子供が描く様な理想。

最後までその理想を追い求め、私は挫折した。

それは決して、私では掴めなかった理想。

でも私は、>私くに教えられた。

——それは決して間違っではないんだ、と。

最後の最後まで、>私くは理想に対して貪欲で、己を曲げることは
なかった。

——それは、私には出来なかった本来あるべき姿。

何度蔑まされようが裏切られようが、自分の存在を確執してきたその信念だけは曲げてはいけなかったのに。

私は元より、正義の味方等を目指す資格なぞ無かったのだ。自分の中の約束を守れない存在が、他人の為に何か出来ると考えるだけでも浅はか愚かしい。

そう、理解しているのに。

私はそれでも、正義の味方であることを望んだ。誰にも理解されなくてもいい。

元より私の存在を認めてくれる様な変人は稀だ。

——ならば孤独に道化を演じるのも、悪くはないだろうさ。

『——アーチャーさん？』

その声に反応する。

目の前には心配そうな表情でこちらを伺っている早苗がいた。

『ああ、すまない。ぼーっとしていた様だ。
で、なんだ？』

『いえ、そろそろ最後の案内になりますので……………』

最後、つまりは彼女が寝食をしている場所へと向かうのだろう。

『そうか。ならば案内を——』

そう言おうとしてふと、疑問が浮かんた。

それは、決して軽率に聞いてはいけない答えが返って来るやもしれない疑問。

それは恐らく避けることは出来ない疑問。

でも、聞かないと彼女自身から話す事になる。

それが私が想定する最悪の答えならば、尚更それを彼女から言わせる訳にはいかない。

『家族とかは、いるのか？先程から親族の方らしき人は見かけていない様だが』

ならば私から宣言する事で、彼女の気持ちは私に対する負の気持ちによって多少は軽減されるだろう。

私が傷ついて彼女の精神が安定されるなら、喜んで汚れ役を承ろう。

ここまで脊髄反射的に他人の事となれば自己犠牲を優先させてしまう様では、凜にまた愚痴を溢されてしまうな。

『家族、ですか。——物心付いた時には、父や母は居ませんでした』

やはりか、と自分自身に悪態を吐く。

分かっていても、聞いてしまった自分が許せないという矛盾。 >私 <を信じる事が出来ても、私自身は信じる事が出来ない。

>私<ならば、もっと巧くやっていたかもしれないな——

『でも、独りではありませんでした。私には、二人のお偉い同居人がいましたから』

次に出た言葉は、予想外に明るいものだった。

同居人がいる、と言う事実だけで私はほっとする。

それに小さな頃からの同居人と言う事は、それは東風谷早苗の人格形成に携わっていた存在と言っても過言ではない。

余程彼女を理解し、大事にしていたかが分かる。

そうでもなければ、こんな純粋な瞳ではいられない。

『偉い同居人？』

ただの同居人ではなく、英雄王の様な無駄に威張り散らしてる奴なのだろうか。しかしそれならば早苗のこの成長結果には伴わないだろう。

そんな奴がいるからこそしっかりした性格になった、とも考えられるが、育ての存在の場合ならそれも微妙だろう。

『はい。偉いなんてものじゃないですね。
なにせ——』

そこで彼女ははっとした。

『どうした？』

『そうでした……二人の存在をすっかり忘れていました……』

がつくりと項垂れる彼女を見て、なんとなくその理由が分かった。

『私の、ことか？』

『はい。その場のノリで決めてしまいましたから、その事なんて記憶にもありませんでした』

その名も姿も知らない二人に同情する。
それにしても、最後にポ力をやらかす所も似ているな。
まるで凜と桜が合わさったみたいだ。

『私なら一向に構わないが？元々私から頼んだ訳でもないからな』

『そんな！いけません！』

ずい、とこちらへ顔を押し寄せて来る。

少女ではあるが、その女性特有の匂いが鼻孔を撥る。

『私がどうにかして説得しますから、アーチャーさんは気にしないで下さい』

……………これ以上何を言っても押し切られてしまうと判断し、私は口を閉ざす。

やれやれ、どうして私の周りの女子はこうも頑ななのか……。

それとも私が押しに弱いだけなのだろうか。

……………そんな気がしてきたぞ。

それを是としたのか、彼女は歩き出した。

彼女に気づかれない様に溜め息を吐く。

決して嫌な訳ではないが、この手のタイプが相手だと個人的に疲れるのだ。

それは生理的なものではなく、私の周りにはそんなのばかりがいたせいで敏感になっているのだ。

——そして今でもこうして押し切られている。

どうやらこの縁からは何処へ行こうとも逃れられない様だな。

——そろそろこちらから向かった方が良いかな。
先程から首筋に感じる視線。
敵意はない様だが、流石にそろそろ気持ち悪い。

『——そろそろ姿を現してはどうだ？害はない様だが、流石に不愉快だ』

『あら、やっぱりバレてたのね』

『まああれだけジロジロ見てたらね』

一人かと思っていたが、どうやら二人の様だな。

『その声は………』

早苗がそれに気づき、声の方向へと振り向く。
それと同時に社殿の影から姿を現した。

一人は胸に鏡、腰に小さな注連縄を締めている女性。もう一人は相対的に幼く、何とも形容し難い帽子を被っている少女。

それらから直感的に感じ取る。

——あれは人間なんかじゃない。

サーヴァントと同様、人が常識を逸脱した存在か、人の形を成してはいるが、元々人間ではないか。

どちらにせよ、警戒をするに越したことはないだろう。

左手で彼女を庇う様に構える。

こちらから攻めることは無いが、場合によっては戦闘も止むを得ない。

それが例え、彼女に魔術のことがバレたとしてもだ。

だがそんな事も露知らず、早苗は私の腕を押し退けて叫んだ。

『神奈子様！諏訪子様！』

『——知り合いなのか？』

『はい。先程言った、私の同居人の、神様二人です』

——神、だと？

『そんな馬鹿な話があるか。神だと？そんなの信じられる訳ないだろう』

私自身、サーヴァントと言う人外ではあるが、そんなものとは格が違う。

『いきなりご挨拶ねえ。あんたもここにいるんだったら神様の一人や二人くらい——』

注連縄の女性が口を閉ざしたかと思うと、今度ははっとしてこちらの視線を捉えた。

『なるほど。あんた外人だね。ならその反応にも納得がいくわ』

外人、と言う聞き慣れない単語が表れる。

『待て。一人で納得している様だが、こちらからすれば訳が分からない』

ここにいれば神様の一人や二人、と言う言葉が引つかかる。神が実体を成しているなんて国や市なぞ聞いた事がない。

ある人を神と崇める狂人的な宗教なんかとは対峙したことはある。でもそれは所詮人でしかない。

決して神には成り得ないのに、神と崇め崇められ。でもこの二人はそんな哀れな部類なんかではない。

神ではないと仮定したとしても、この二人には何かしらの力がある。それは私もその位までに昇り詰めてしまったから分かる事。

人ではない者、つまり世界の大多数の人間から見た異質な存在は、一重に化物と称され、畏怖される。それを神とするならば納得がいく。

人を超えた力と言うのは、恐怖の対象となると同時に、奇跡とも成り得る。

彼女らは恐らくそう言った部類なのだろう。

『うーん、なら説明するよ。でも立ち話は嫌だな。今帰って来たばかりだからクタクタなんだ』

帽子の少女が、疲れたというのを強調する様に身体を前にだらけさせる。

『すまないが、こいつの我が侘に付き合ってやってくれないか。その代わり、あんたが疑問に思っていることを出来る範囲で答えてあげるから』

『そのくらい構わないさ。そうでもなければ罰が当たるからな』

『よし、決まりね。早苗、行くわよ?』

先の今まで話に入っていけなかった早苗が、何やら呆けていた。

『え、あ? はい。じ、じゃあ行きましょう!』

そんな状態から話かけられたせいか、喋りが不安定になっている。

——そこまでなる会話が、先の部分にあっただろうか?

まあそんな事は些末事に過ぎないだろうが。

私達は、早苗の先導のもと目的地へと向かった。

二人の神（後書き）

第二回目は、恐らくヒロイン的な位置付けの、東風谷早苗さん

名前：東風谷早苗＞こちやさなえく

種族：人間

能力：奇跡を起こす程度有能力

二つ名：祀られる風の人間

公式設定は恐らく小説の中でばちばち語られるでしょうから割愛。
だから二次創作な紹介を。

原作の主人公である博麗霊夢の2Pカラー（ルージュ的な意味で）
と呼ばれている。

現役女子校生。

でも巫女らしさと胸の大きさでは勝つてたり。

神様二人を養う為に今日も働くい子。

嫁に欲しいね。

髪には蛇と蛙の髪飾りがついてるが、それは二人の神の恩恵を貰っている証拠でもあり、崇拜している対象の分かりやすさを示してたりと、年頃の女の子が着けない様な装備にも理由がある。

意外と自身過剰で考えが暴走しがち。

数少ない良識人と言うせいでよく弄られる対象になったりするけど
毎日楽しく生きています。

今回は恐らく神二人を同時紹介（その場合内容薄っぺらいのは仕様です）します。

エミヤシロウ（前書き）

こつ言つた文章を書いてると、自分で何書いてるか分からなくなります。よつて細かい事は深く考えないで読んだ方が楽しめるかと思ひます（笑）

エミヤシロウ

神社の裏にひっそりとあった一軒家の茶の間に私達は集まっている。この家は決して小さくはないが、それは家同士で比較した場合で、大規模な神社と比較しては霞むのも仕方ない。

『さて、説明の前に自己紹介するわね。私は八坂神奈子。さっき神を否定してたけど、早苗は嘘は吐いてないわ。簡単に言うと、私は山を司る神よ』

注連縄の女性が、そう答える。

『そして私がこの神社——守矢神社って言うんだけど、ここの祭神で土着神の洩矢諏訪子。因みに神奈子は天津神っての』

帽子の少女が無邪気な笑顔でそう答えた。

『私はアーチャーだ』

特に説明する事もないので、簡潔にそう述べた。

『アーチャー……弓兵ね。因みにそれは本当に実名？俄には信じられないわ』

『残念だが、真実だ』

私がサーヴァントである限り、衛宮士郎が存在する限り、私はエミヤシロウと名乗る事は出来ない。

『嘘ね』

ぴしゃりと神奈子が否定する。

『普通の人なら誤魔化せるでしょうけど、こっちは大衆を見守る神よ？ あんた、嘘が下手な訳ではないけど、分かりやすいよ。——
本当に嘘を吐きたいなら、そんな哀しそうな顔をするな』

私は、何も言えなくなる。

確かに私は嘘を吐くのは嫌だった。

しかしそれは誰にも迷惑をかけたくないから行なってることであり、無意味なものではない。

——でもまあ確かに、名前に関してだけはこちらの我が侘なんだろうが。

彼と私は別の存在ではあるが、本質的な部分や根源は何も変わらない。本物や偽物という感覚以前に、双子と言う考えの方がまだ理解しやすい。

彼と私は、未来というパズルから分離したひと欠片のピースでしかない。

それひとつでも個と成り得るが、全てを填めることでも個と成り得てしまう。

簡単に言ってしまうえば、個としての存在が曖昧なのだ。

衛宮士郎と言う完成品の中に紛れた、エミヤと言う偽りのピース。それは決して完成品の中には混じれないが、完成品の中に紛れる事で填まる可能性が生まれる。

その可能性の産物が英霊エミヤに過ぎないのだ。

そんな偽物が、衛宮士郎になる事を望まれるなら——

『分かった。降参だよ。——まったく、敵わないな』

この真名を口にするのも久しいな。
頬を緩め、軽い笑みを溢す。

アイツの全てを認めてはいないが、それでも彼は私の妥協に行き着いた。

ならば私自身、許容してもいいだろうさ。

『私の真名はエミヤ。エミヤシロウ。
しがない弓兵さ』

『エミヤシロウ……ね。うん分かった』

神奈子が満足そうに頷く。

『じゃあシロウ。貴方の疑問を解消しちゃいましょうか』

どんと来いと言わんばかりに手を扇ぎこちらへと促している。

『ならば問おう。まず、ここはどこなんだ？』

『漠然とした質問ね。ここはあんたが住んでいた世界から隔離された場所だよ。でも別次元って訳でもない。それなりの力と奇跡を伴えば入ることは出来るのさ』

隔離された世界……。

まるで監獄と言うことが。

『だからと言って別に行動に制限が課せられる訳でもないわよ。寧ろ逆、この世界では殆どの生物が好き勝手やってるわ』

こちらの心を読んだかの様な的確な点を突いた返答が来る。

『つまりなんだ、この世界は言葉通りの自由の世界なのか』

『まあね。でもやり過ぎるとこの世界を守る守護者みたいな奴にばっこぼこにされるけど』

守護者、と言う言葉に少し反応する。あくまで比喻でしかないのだろうが、その言葉には少し因縁がある。嫌でも気にしてしまうものさ。

『そんな楽園の名前——それは幻想郷。外の世界で忘れ去られたり存在を否定された存在が集う選ばれし者の楽園』

楽園、か。

私は幻想郷とやらの実態は知らない為、取り敢えずはこの話を鵜呑みにするしかない。

『忘れ去られた存在とは、どういう事だ？』

『言葉通りよ。妖怪や異能の力——魔法とかね。そういった外の世界で？そんなものある筈がない？と否定された哀れな存在のことよ』

それは何とも言い難い話だ。

妖怪は確かに史実に存在はするが、この近代その存在は認識されていない。

そういったものは夢幻の空想の存在と決めつけられてしまうのは仕方ないことなのだろう。

人間は、興味を持ちやすい生き物であると同時に飽きやすい生き物だ。

よって、大多数の人間が「妖怪はいる」と言う再認識をするまでにいかなかったそれらは、それと同時にこの世界からも消滅していた、と言うことか。

皮肉なものだな。妖怪と言う定義を決めた存在がそれ自体を否定するなんて。

問題は魔法だ。

魔術師ならば、魔法の存在は知っている。

魔術師の存在は、やはり大多数には含まれないと言うことか。

それはつまり、魔術師も異能の力として認識されたに過ぎない。

『それは神様も然り、よ。科学化の進んだ現代、私達の様な非科学的な存在は否定されてしまう。それは同時に信仰が失われることもある』

何を想うのか、神の話になると神妙な顔つきをする。

悲しみか、苦しみか。

どちらにせよ、良い思い出はない様だな。

『信仰心が失われるということは、私達にとっては存在価値が薄まるのと同義。つまり——分かる？』

ここまで言われたら誰だって勘づきはするだろう。

神みたいなの神秘くは、信仰を糧に存在している。

逆に言えば、信仰が薄まれば形を成す事も出来ない。

『消滅する、だろ？』

つまりは、そういう事だ。

『正解。私達はそれを逃れる為にここに来たって訳』

『ここに居るだけで、君達は消滅しないのか？』

それはあまりにも都合が良すぎやしないか。

『ええ。ここはそんな普通以外の存在には快適な世界。幻想卿はすべてを受け入れる——なんて言葉もある位だからね』

すべてを受け入れる、か。

ただのそれだけで片付けられる程都合がいいなんて、出来すぎている。

『まるで屁理屈だな』

『事実だけどね。まあそれだけが理由って訳じゃないけど』

今まで黙っていた諏訪子が口を開く。

『こっちでは外の世界みたいに信仰が否定されてないからね。そこに早苗が頑張って布教してくれたから、私達はこんなに人間みたいに実体があるんだよ。早苗には感謝してる、本当に』

『わ、私なんか全然……一重にお二人が素晴らしいからですよ』

『謙遜するな早苗。お前は本当によくやってる』

わしゃわしゃと早苗の髪を撫でくり回しす神奈子。

その光景はまるで、姉妹の戯れだ。神と人という大きな隔たりなぞ存在しないかのように、自然に振る舞っている。

—— 凄いことだと思う。神が視覚化された存在として顕現していることの驚きなんか、最早どうでもいい。

今はただ、この微笑ましい光景に頬を緩ませることしかできない。

『そうだぞ早苗。お前は偉い！』

更に早苗の背中から抱きつく諏訪子。

姦しくも楽しそうな空間を壊すのはいけないことではあると思うが、此方が切り出さないと話が進まない気がした。

『取り敢えず重要なことに関してはそれくらいか』

話を再び切り出すと、三人がこちらへと向き直る。

『そうか。じゃあこちらからも質問していいかい？』

『何だね』

『—— あんた、何者？』

神奈子の言葉に、場の空気が先程よりも明らかに引き締まる。

恐らく、誰もがそれを気にしていたのだろう。いや、私だって当事者なら気になる。

『それは私も思った。あんたからは邪悪な空気は一切感じられない。寧ろ善良な方に入る。——でも、あんたの纏っている雰囲気、とても只の人間のものではない。それが気になった』

続いて諏訪子も疑問をぶつけて来る。

早苗に関しては、状況についていけず、ただ交互の様子を伺っていた。

——言つべきなのだろうか？

彼女の言葉を信じるならば、ここには私の存在を知るものはいないし、それに巻き込まれる事も恐らくはない。

でもそれはあくまで可能性の話。

そんな僅かな可能性にすら、臆病になる。

それは悪いことではないのは分かっている。

それは同時に、他人を遠ざける事も。

他人が受け入れられないものは、自分にも許容されない。自分自身のこととは、他人の認識の方が正確な様に、他人が違つと言つならそれが嘘で無い限りはそれが正しい。

自己の事は、どうしても自覚しづらいのだ。

だから彼女達が話して欲しいと望むなら答えるべきなんだろう。

深い沈黙。

ほんの僅かしか経っていない時間が、無限に感じられる刹那。

『——どうしても嫌なら話さなくてもいい。誰だって嫌なことはある』

でも、と彼女は続ける。

『出来ればいつか話して欲しい。——あんたの背負ってる業が、私達なんかに聴かせるなんて厚かましいものでも、ね。だって、寂しいじゃん？せつかくこんな狭い世界にいるんだ。外の世界なんかより近所付き合いつてのが多いのに、同じ穴のムジナなのに、理解出来ないって』

彼女の哀愁漂う笑みが、心に突き刺さる。

ああ、彼女は本当にそう思ってくれている。

それなのに私のこのザマはなんだ。他人を巻き込むのが怖い？
そんなのは只の言い訳だ。

巻き込んで後悔するくらいなら、守り切ってみせろ。

世界が敵に回ろうとも、関係ない。

私は、本当の>守護者<になるチャンスを手掴んだのだ。
すべて零れ落としても、掻き集めればいい。

——絶対に後悔しない結果には辿り着けないだろうが、それでも私は足掻いてみせる。それが私が理解した自己の在り方。正義の味方らしさ。

未来なんてものは分からない。

ならば常に前を見据えろ。

自分自身を認める事が出来たのだ、それくらい造作もないだろうエミヤシロウ——！！

『——分かった。全て話そう。私がどういった存在か。今まで何をしていたか。その残酷さ、しかと焼き付けよ』

迷いの消えた瞳で、彼女達を一瞥し、私は総てを話した。

エミヤシロウ（後書き）

第三回は、守矢神社のお母さん（見た目的な意味で）の八坂神奈子

やさか かなこ
八坂神奈子

種族：神霊（実体有）

能力：乾を創造する程度有能力

二つ名：山坂と湖の権化

見た目：注連縄しめなわは、蛇の絡まる姿を表している。

脱皮を繰り返す蛇は、復活と再生、永遠の象徴。

諏訪子に勝った事も表している。

鏡は、諏訪大社の宝物＞真澄の鏡＜。

背中には御柱＞オンバシラ＜を背負っている。

性格：一言で言うところフランク。

気さくな姉御タイプ。

威厳たっぷりにも見えてどこか隙が多い可愛い奴。

因みにかなりの年m（オンバシラ

諏訪子との関係は、最初は敵同士だったが、今ではかなりの仲の良さを披露。

蛇とは、豊穰神、天候神として古くから信仰を集めていた。

また光を照り返す鱗身や閉じることのない目が鏡を表していることから、太陽信仰に於ける原始的な信仰対象ともなった。

神としての在り方（前書き）

今回でやっと本当のプロローグが終了って感じです。文才無いから纏めれないのですよ……。今までシリアスっぽかった分、次からはどうにかしてギャグを書いていければいいなと思います。

神としての在り方

彼の瞳が私を捉える。

それは流れる様に諏訪子、早苗へと伝って行く。

先程の迷いと憂いの籠った瞳ではなく、決意の瞳。

それに思わずどきっとしてしまいが、直ぐに気を引き締める。

予感がする。

今からする話は軽い気持ちで聞いて良いものではない、と。

陳腐だが、虫の報せや女の勘みたいなものだ。

『……………話してくれ』

こちらにも決意の下聞いたのだ。

生半可な気持ちではない。

他人を知ることとは、簡単だ。

問題はそれを受け入れる事。知ったからにはそれを受け入れる義務がある。

相手の深く深くを知れば知るほど、その因果からは抜けだせなくなる。

それから逃げることは、相手を否定すると同時にそれに関わる全てを否定する事と等しいからだ。

それでも逃げる様な自分勝手な存在は、怨みや妬みを買われてもな
んらおかしくはない。

彼は仮に私が逃げたとしても、そんな事はしないだろう。寧ろ話した事に対しての謝罪が来るに違いない。

そっじゃなきゃ、あんな哀しそうな顔で嘘なんか吐けない。

それは、お互いにとっても辛いこと。

だから私は、彼の話す事柄全てを受け入れる覚悟をする。神様だからどうかではなく、いち幻想卿の住人として、すべてを受け入れる覚悟を。

あれから一時間、既に夕陽は殆ど沈み、宵闇の時間が訪れる。

彼は総てを話してくれた。

いや、それが本当に総てかは分からないが、それでも彼を知るには十分すぎた。

始まりと思われる、無限の赤。

そこで養子として衛宮切嗣なる人物に助けられた事。

彼が呟いた正義の味方になりたかったと言う夢を引き継いだ事。

切嗣が死に、彼が教えてくれた魔術なるものを独学でひたすらに鍛錬し続けた事。

高校生になったとある日、サーヴァントなるものを目撃し、殺され、凜と言う人物に助けられた事。

彼自身もサーヴァントを召喚し、聖杯戦争なるものを終わらせるべく、魔術士同士の殺し合いに身を投じた事。

聖杯戦争を終え、正義の味方で在り続ける為に、ありとあらゆる所で使命を果たしている時、本来救えない筈の存在を世界と契約した事で救った事。

そんな彼の最期は、救いを与えた存在の裏切りだった事。

世界と契約した彼は二度目の生を都合の良い掃除屋として扱われた

事。

それを行なっていく内に、全てに否定的になり、そんな自分自身を呪った事。

なんの因果か、彼は昔助けられた存在の凜にサーヴァントとして召喚された事。

しかも召喚されたのは過去——かつて身を投じた聖杯戦争の時に凜のサーヴァントとして共に闘っていたアーチャーとして召喚され、それと同時にかつて正体も何も分からなかった彼の正体も知る。

彼はそれを理解し、過去の衛宮士郎がもし自分の様に成り下がるならば、殺してしまおうと考えていた事。

そんなある日、運命をねじ曲げるの為に全てを裏切った事。自分のマスターである凜でさえも。

マスターのいない状態で彼は闘い、士郎との闘い時には最早魔力にも限界が近づいており、それで尚彼は闘った。若かりし別人の自分からの答えを得る為に。

最終的に、彼は憎んでいた自分自身と、裏切ってしまった少女によって救いを与えられてしまった事。

少女は望んだ。

エミヤシロウが幸せになる事を。

こんなにも赦せなかった自分自身への償いはそれしかないと言わんばかりに。

愚直にただただ己だけを呪い、これからもそう生きていくのが、少女には耐えられなかった。

エミヤシロウはこんなにも、誰かを救ったのに、そんな彼自身が救われないなんてのは間違っている。

そう思ったから。

そして彼は、その願いを聞き入れた。

——これで話は終わり。

途中分らない部分にも事細かに答えてくれた。
サーヴァントとは、マスターとは、聖杯戦争とは。
それらは、私の予想なんかに及びつかないものだった。

そして彼の話を聞いている内に沸き上がる感情。

怒り。

悔しさ。

悲しみ。

噛み締めていた下唇が、音を立てて血を流す。

『おい、大丈夫か!?!』

そんな心配してくれる彼を尻目に、私は彼の胸ぐらに掴みかかる。
その様子に、諏訪子も早苗も驚いただろう。

『お前はっ……………どうしてそんなに……………!!』

どうしてそこまでされて、彼は未だに人を信じていられる？
一度絶望した世界に、どうして希望を見い出せた？

——何故、これまで話していた時の表情が、あんなにも穏やかだった？

『……………ッッ!!』

突き放す様に彼の胸ぐらを解放する。

気付けば私は涙目になっていた。

そして何故こんなにもムキになっている？

これ等は全て過去の出来事。私が彼に当たった所で何も変わりなし

ない。

胸が、ちくりと痛む。

あれは一人の人間が背負って良いものではない。

彼の正義の味方で在りたいと言う信念は、かなりのものだったろう。それが崩れるというのは、生半可なものではない。それは心に掛かる負担も然り。

彼がそうになってしまうのは、必然だったろう。

寧ろそれでも精神が壊れなかっただけでも凄い位だ。

彼の精神は、己を呪い続けることだけで保たれていたのかもしれない。

自分自身を殺したところで幾度となく甦るその身体。

それが彼に与えられた罰の欠片。

等感覚で額に落ち続ける水滴は、人間を容易く崩壊させる。

彼は、それと何ら変わらない立場にいるに等しい。

世界に絶望してもその世界に囚われ続けた青年は、何を思っただろう。

人間の奥底にあるどす黒い感情に蝕まれた青年は、何を感じただろう。

理想の果てに現れた現実を突き付けられて青年は、何を嘆いただろう。

口や文章なんかで伝えれる事なんて限りがある。

状況を説明するには十分だが、その時に感じた感情なんかは、上辺

のカタチなんかでは到底想像もつかないもの。
だから私のこの感情なんかは、彼のものに比べれば兎戯に等しいものなんだろう。

その事実を突き付けられた様で、やり場の無いこの憤りを爪が食い込む程に拳を握り締めることで抑える。

神だなんて大層な事言われてるけど、所詮こんなもの。

目の前の青年の言葉をただ聞くことしか出来ない、無力な存在。

これなら、神なんてものはただの偶像だと言われても仕方ない事。
外の世界での信仰が薄れるのも、当然よね。

『神奈子………』

諏訪子が心配そうにこちらを伺っている。

それもそうだろう。私がここまで感情的になったのは、随分と昔の話だ。

神は常に毅然とあるべし。

神は常に大局を見据えるべし。

——神は常に大衆の為にあるべし。

私は自分の存続を優先して幻想郷へと行き着いた。

そしてぬくぬくとした毎日を送っていた。

——外ではこんなにも手を差し伸べるべき存在が居ることも気付かずに。

『くそつ——！！』

堪らなくなり、地面に拳を殴りつける。

何度も何度も、ただひたすらに。

そのボロボロになった手が、ふと温もりに包まれた。それは、エミヤの両手が私の拳を優しく包んでいたからだった。決して優しく、でも決して逃そうとはしない、そんな力強さ。

『すまない——そして、ありがとう』

それは、我が生涯で最も堪えた言葉となった。

泣くことは出来ない。

泣いてしまえば、彼をまた苦しめてしまう。

彼は最早そんな苦労なんかしなくて良いんだ。

今にも泣き出しそうな表情を隠す為、私は暫くうつ向いたままで過ごす。

彼の手の暖かさが深く浸透する錯覚に身を委ねると、不思議と安心した気持ちになっていった。

『すまないね。みつともない所を見せて』

先程まで少女の様に震えていた彼女は、今は落ち着いた様子だ。

『いや、私なんかの為にそこまで感情的になってくれて正直嬉しいよ』

正直な感想を言う。

会って間もない相手の為にあそこまでするなんてのは、そうそう出

来るものではない。

純粹で、強い心を持っている。

『それはそうとエミヤ。こんな遅くまで付き合わせてしまったんだ。今日はここに泊まっていきなよ』

神奈子のその言葉に、ハツとする。

そしてそれは早苗も同じだった様だ。

『どしたの早苗？』

諏訪子がその変化に反応する。

淡々と話を聞いているだけの二人だったが、彼女達は私の話を聞いて何を思ったのだろうか。

聞く権利なぞ無いのは分かっているが、心配になる。

こんな話をして、不快な気分になしてしまったのではないかと。

『実はその……アーチャーさんの泊まる件についてちょっと』

『なんだ、こいつが泊まる事に不満でもあるのか？』

『いえいえ！そういう訳ではなくてですね……。実は、お二人がいない間にこちらで勝手に泊める様に勧めてたんですよ』

人差し指を合わせて気恥ずかしそうに上目遣いで神奈子達の顔色を伺うその動きは可愛らしかった。

『ならいいじゃないか！諏訪子だって異論はないだろ？』

先程とは打って変わって豪快な声が響く。

『まあ私はいいけどねぇ。と言うかシロウに行く宛なんか無いだろうし、一日とは言わず暫く泊めてあげたら？』

『それはいいな。よし、決定だ！』

会話の中心を放置してとんとん拍子で話が進んでいく。

長年の経験から、こんな状況では何を言おうと無駄なので、黙ってその様を見守っているしかない。

気前が良いのか、只のお節介か。何にせよ有難いことに変わりはない。幸いここは私の居た世界とは異なる為、常に神経を研ぎ澄ましている必要はない。

サーヴァントという身でも、疲れはする。

とは言っても、一般の人間を基準にしたら、1週間以上神経を常に研ぎ澄ましているも平気という時点で、疲れ知らずと思われても不思議ではないのだが。

そして一番気になるのは、自分は今どう生きながら得ているのかと言う事。

アーチャーのサーヴァントである私は単独行動のスキルがある為、魔力供給対象と繋がりがなくても身体は保っていられる。

しかし今の私はマスターのいない状態。

いつ消えても何ら不思議ではないのだ。

下手に動く危険な状況では、拠点を築くのが最善の身を守る方法だろう。

何より彼女達の好意を無下にはしたくない。

下手に一人で行動する道を選んで心配される位ならば、目の届く範囲にいた方が気を張らなくても済む。

少し過剰な気もするが、彼女達を巻き込んだ以上、無駄死には出来ない。

そして何より、凜の為にも。

『よしっ！なら今日は飲むぞー！早苗！酒持ってたきな！』

『は、はいっ！』

早苗はそのまま部屋を急いで出ていく。

その様子を見ていたほんの刹那で、神奈子は側面から私の肩に腕を回す形で抱きついてくる。

『これからよろしくね、シロウ』

彼女の笑顔は、とても無邪気なもので、こちらも自然と優しく微笑んでいた。

『よろしくっ！』

この輪に諏訪子も入って来る。

純粹に今を楽しんでいるその姿は、彼女達が神であることを忘れさせる。

『やれやれ、今宵はこれからということか』

早苗が日本酒と思わしき瓶と枳を乗せた盆を運んできたのを確認し、月明かりに目を向ける。

三日月の光が私達を視ている錯覚を覚えさせる。

初めて出会ったのが彼女達で本当によかった。
ここでなら私の答えが見つかるかもしれない。
そんな根拠もない予感が、今の私への最高の肴になりそうだった。

神としての在り方（後書き）

第四回は口り人妻の洩矢諏訪子の紹介を。

洩矢諏訪子＞もりや すわこく

種族：神霊（実体有）

能力：坤を創造する程度有能力

二つ名：土着神の頂点

見た目：諏訪の神は蛇で、蛙を生贄にする神事であることから、敗者である洩矢が蛙という扱い（公式設定）

壺装束＞つばししょうぞくくや市女笠＞いちめがさくといった、平安期に女性が徒歩で外出する際に着たものを愛用している。

市女笠には蛙の目玉がついており、二次創作ネタで、最早別の生き物として扱われてる場合が多い。

性格：見た目はあれでも中身は大人なので、子供っぽい雰囲気はない。だがたまに見せる子供っぽい台詞や動きが、母性本能を擲る。あーっ！。

彼女は、祟り神ミシヤグジを統括する存在である。

祟り神は丁寧に祭れば強力な守護神となり、大きな恩恵を授かることができる為、信仰は意外とあつたりする。

坤＞こんくとは八卦＞はつけくで 地 を表す。

風神である神奈子は 天 を表す乾＞かんく。

坤は母、婦徳、補佐役、鈍重、大衆、迷いなども意味する。

河童の川流れ（前書き）

パソコンを開けばリトバスをやりたいくなる。その誘惑に負けた結果がこれだよ！

河童の川流れ

早苗達は、愕然としていた。

『どうした、口に合わなかったか？』

目の前にあるまるで高級レストランで出される様な料理の数々に圧倒されていた。

遡ること数刻。

早苗は朝食の支度をするべく朝早くに台所へと向かおうとしていると、その方向からトントンと言う聞き慣れた音と食欲をそそる多種の匂いが立ち込めてきた。

それに誘われる様にふらふらと向かうと、そこには昨日から守矢神社に居候する（してもらう）ことになったアーチャーさん——もとい、エミヤシロウさんが居た。

私は驚きの余り、何をしているのかと言う素頓狂な質問をしてしまった。

答えは言わずもがな。

しかも、調理の進み具合とその量から想定して、私より一時間は前に起きたのではないだろうか。

それだけではない。

彼のその調理作法のひとつひとつが、まるで踊るかの様に優雅で自然な動きをしていた。

それに見とれていると、くう、と言う可愛らしい音がする。

私のお腹から発したそれは、シロウさんにも気付かれてしまった。彼はふっと笑うと、小皿に味噌汁をよそい、こちらに差し出してきた。

反射的にそれを受け取ってしまい、仕方なく口にしたが、これが何とも美味だった。

塩分は控え目に、しかし味は薄くなく、出汁であろう魚の骨は、身もきちんと調理されて無駄が一切無い。

見た目はただの味噌汁、変哲もなく質素に見えるかもしれないが、その中に潜んでいる悪魔は、私を魅了させてくる。

私は誘惑に負けて何杯かご馳走になった。

今更ながら、とても恥ずかしいことをしたと思う。

でもそれ程に、彼の作った味噌汁の虜になっていたのだから仕方ないと言いつつ試してみる。

『い、いえ。そうではなくて、逆ですよ。』

こんなに美味しいものを食べたのなんて久しぶりです』

『確かに。早苗の作る食事だって美味しいけど、悪いけどこれはそれ以上だ』

神奈子様からも賞賛の声ひたすらが漏れる。

諏訪子様は・・・只黙々と只管に箸を卓袱台の上にある数多の皿へと動かしている。

それは声に出さずとも、美味いと言っているに等しい行為だろう。

シロウさんは、それを見て聞いてか、顔を綻ばせる。

『シロウって、料理好きなの？』

諏訪子様が、箸を動かしながら聞いてくる。

その行儀の悪さには何も言わず、ただ彼は優しく答えた。

『好き・・・なのだろうか。』

恐らくはそうなのだろうが、最近までは意固地になっていたからな。自分でも良く分からん』

意固地・・・それは、過去の自分と今の自分に対しての否定の意味が込められているものだ。

でも今はそれは最早過去の事と言わんばかりに、彼は穏やかな顔をしている。

それに釣られて頬が緩むと同時に、彼の料理のスペックに嫉妬していた。

『因みに・・・和食以外もできるんですか？』

今卓袱台に置かれているのは和食だけ。

理由は簡単。そういった食材しか家には無かったからだ。

『そうだな。一応和、洋、中とできるが・・・。』

昔は私の身近に居た女性二人に、和以外は勝てなくてな。それが悔しかったのか、練習していた時期もあったよ』

『へえ・・・シロウでも勝てない相手かあ』

『だが今では負ける気はしないな。』

元々才能はないが、努力は人一倍以上しているつもりだからな』

昨日の彼の話が反芻される。

彼が生涯に渡って培ってきた努力のすべてが。

彼の類い稀なる努力が真に実る事はなく、その努力と反比例した脆い一撃が、彼という果実を容易く落としてしまった。誰よりも努力をした彼は、その努力の結果破滅を生んだ。

在るべき理想は、理想であるが故に脆く儚い。

虚なる存在は、実の前には認識される範囲が違いすぎる。

理想と現実、なんて言葉が正にそれ。

生き物は目に見えるものと見えないもの、どちらを信じるかと言われれば間違いなく前者だろう。

他人の思想を読み取る事だつて出来ないし、他人が口にした言葉だつて、真実ばかりではない。

自分が認めたものだけが、自分の世界に介入する。

それ以外はただの空虚扱い。

だからこそ、彼は裏切られたのかもしれない。

自分の世界に現れたイレギュラーを、排除するかの様に。

正義の味方と言う不文律を矯正出来ないなら、消せばいい。

救われた恩を忘れ——救われたことにすら気づいていないのかも知れないが——ただ自己防衛の為に易々と彼を敵として扱った。

それは酷い事であると同時に、哀しい事。

人間は一人では生きていけないくせに、簡単に人を裏切る。

駒の様に利用して、駒の如く捨てる。

まるで自分以外は無機物だと言わんばかりに。

——やめよう、こんな事を考えるのは。

せつかくのシロウさんの料理なのに、不粹だよね。

『ご馳走様でした』

両手を合わせて一礼した後、私は自分の食器を流しへと持っていくとする。

『早苗、食器は水に浸けて置いておくだけでいいぞ。片付けも私がやるからな』

『え…………ご飯を作ってもらったって言うのに片付けまで任せる訳にはいきませんよ』

『何、これくらいは問題ないよ。』

それに洗濯や何やらは早苗に頼まないといけないからな』

『どっか行くの?』

いつの間にか食べ終わっていた諏訪子様が割り込んでくる。

『ああ、当てはないが、取り敢えず地理を把握しないと不便だからな』

『地図使う?』

『すまないが、貰うよ』

『んじゃ探してくるよ』

小走りにその場を去っていった。

『私も何か手伝うよ。流石に一人だけ何もしないのもアレだし』

『ならば食器を運んでくれないか。この量はなかなかだからな』

『了解』

『それでは行ってくる』

『なるべく早く戻ってきて下さいね』

早苗に見送られ、私は神社を後にする。

神社の境内の最上段から階段を見下ろすと、まるで終わりが無い一本道かと思わせる程ひたすらに続いていた。

今更ながら、空中に投げ出された時の風景を思い出す。

微かの間に見えた風景は、明らかな高低差を示していた。

遠くに見えるのは豆粒みたいなもの。

近くに見えたのは大量の木々。

それらはつまり、神社はとても高い場所に設置されており、更には森の様に生い茂った土地が周囲にあると言うこと。

恐らく——ここは山だろう。それも途方もない程に高い。守矢神社はその山頂に聳え立つ、象徴となっているのだろう。

——しかしこんな険しそうな山に参拝客は来るのだろうか。

『分社があるのだろう、きっとそうだ、うん。』

木が薙ぎ倒されていくのだ、目の前に現れた>何か<によって。

その女の子が、>何か<を追いかけている。

しかしその>何か<の歩幅は彼女のそれを軽く凌駕していて、全速であろうがそれに追いつく気配はない。

そしてそれは、地震の正体であると同時に、普通の人間には手に負えない存在だった。

それは、書物や文献でしか拝めない、究極の種。

狩りという行動のみに特化していた故に滅んだ最強の種。
それが目の前にいた。

『あつ、そこにいる人！逃げてえっ！！』

少女が叫ぶ。

それは恐らく私に向けられたもの。
当然だ。

>これ<を前に棒立ちになり、逃げようとしてもしていないのだから。

『こいつを止めればいいのか？』

少女の言葉を見せず、そう答える。

『止めれるならとっくに止めてるよっ！』

『———そうか』

距離は10メートルを切り、全体像が露になっていく。

巨大な身体を覆う鱗。

万物を噛み砕き、飲み込んでしまえる程の巨大な顎。

本当に爬虫類なのかと思わせるほど、それは凶悪で、畏怖の対象。

そんな存在——ティラノサウルスが、こちらを見下している。
身長差があるのだから当たり前なのだが、不愉快なことに変わりはない。

こいつを止める手段は色々あるが、膨大な魔力を使うのは控えたい。
軽い散歩で戦って相打ちなんてのは、笑えない話だからな。

手に取るのは白と黒の双剣、>干将・莫耶<。

弓兵であるにも関わらず、恐らく彼が最も愛用した二対の中華剣。
宝具としてのランクも低く、本来白兵戦の為の武器であるにも関わらず、彼はこの状況下でこれを選んだ。

柄を強く握り締め、走る。

そいつはこちらを捕らえようとその前爪を振りかぶる。

通常の人間の平均速度ならば既に肉塊と化していただろうが、英霊に昇華した存在には、関係のない話。

『のろまが』

容易く背後に回りこみ、軸足の腱を断つ。

更にバランスを崩したところに膝を斬り付ける。

巨大な敵というのは得てして下半身をどうにかしてしまえば事足りる。

こいつも例外ではなく、轟音と共に呆気なく地に伏していった。

——しかし、不思議だ。

こいつは咆哮どころか、断末魔すら上げなかった。

本来、生物ならばそうだったことはない筈なのだが。

思考を中断し、先程の少女の方へ振り返ると、呆氣にとられた顔でこちらと恐竜を交互に見つめていた。

——少し軽率な行動だったか？

神奈子曰く私の様な力を持っている存在はここにはいくらでもいるらしいが、それにしても奇異なことに変わりはない。

『あーその、大丈夫か？』

何て言えば良いか分からず、常套句が漏れてしまう。

どうにもこういった時に気の利いた事が言えないのは昔からで、できれば直したいものだが。

『凄い、凄いよ！あいつをあんな簡単にやつつけるなんて！』

いきなり表情が明るくなり、驚いてしまう。

まるで新しい玩具を与えられた子供みたいな顔でこちらを見つめてきた。

少女はこちらに近づいてくると、投影した干将・莫耶をまじまじと見つめる。

『さつきは驚いてなにも言えなかったけど、これ、何もないところから出したよね？どうやったの？物凄い科学技術で見えなくしてたとか物凄く小さくできていつでも大きさを変化出来るとか？』

まるで機関銃のように喋っている。

先程の表情は、単に予想外の出来事に驚いていただけの様だ。

『それにこの剣、あいつの皮膚を簡単に切り裂くんだもん。本の内

容だと物凄い強い動物だつて書いてたから私も最高級の部品で造つただけ、この剣はそんなのより凄いので出来てゐることだよ
ね！？」

好奇心の塊がこちらにずいと近寄ってくる。

『待て、落ち着け』

両肩を押して引き剥がすと、ひとつ溜息を吐く。

『取り敢えず聞くが、あれはなんだ？君は先程造つたと言つていたが』

そう言つて倒れているそれを指す。

『ん？これはねー、恐竜だよ？』

『そんなの見れば分かる。

そうではなく、これは作り物だと言つのか？』

こんなに恐竜を完璧に模していて、しかも等身大であろつ大きさであるそれは、どこをどう見ても本物にしか見えない。

『そだよ。ほら、さつき斬つた場所見てみなよ』

すると、そこから見たのは血ではなく、高圧電流が音を立てて外へ漏れていた。

『——たしかに機械のようだが』

『そんなことよりっ！』

少女は私から剣を奪い取ると、なにやら観察し始める。

『うーん、見たところ材質はあつちの方が遥かに優れているのにまるでそれが嘘みたいに負けてしまった。

ならこの剣には秘密があるはず！』

『残念ながら秘密など無いよ。強いて言えばそれは遥か昔に創られた剣だつて事だな』

『そんな昔に創られている筈なのに、まるで風化してないのは、やはり凄い技術の賜物なんじゃ——』

少女の言葉は遮られる。

先程の彼がもの言わずそっちへ突っ込んできたからだ。

抱きかかえる様な体勢でごろごろと転がる。

背負っていたリュックのせいで、必要以上に打ち付けられる。

『うう・・・一体何なのさ』

『すまない。しかし聞く暇が無かった』

『聞く暇つて——』

少女が見たもの。

それは先程まで倒れていた恐竜が、再び起き上がりこちらを睨み付けている姿。

『嘘・・・さっきやつつけたんじゃあ』

『君が造ったんだよな？ あれは』

『そ、そうだけど』

『君の技術力も、まんざらでは無いと言うことだよ』

嫌に冷静に答える。

彼は立ち上がると、背中を見せたまま問いかける。

『どうやらあれは、本気で止めないと危険だぞ』

こちらを完全に敵として認識してしまっているそれは、逃げようにも逃げられないだろう。

ならば、答えはひとつしかない。

『・・・うん』

出来れば壊れては欲しくなかったが、仕方ない。

今まで造った中で上位にランクインするであろうが、そんなことを言ってる場合ではない。

『——安心しろ、一瞬で済ませる』

私にか、それとも恐竜に言ったのか分からない言葉と告げると、彼の両手には先程とは異なるものが存在していた。

左手には、何の特徴も無いシンプルな黒い弓。

右手には、その矢と思わしき螺旋状の何かがあった。

無駄の無い動きでそれを番えると、一呼吸を置いて、言葉を紡ぐ。

『——偽・螺旋剣>カラドボルグ<!!』

同時に、それは放たれた。

見えなかった。

矢を見ていたにも関わらず、いつ指を離したのか正確には理解できない。

いつの間にかそれは放たれていて、
いつの間にかそれは恐竜きかいの頭を貫いていた。

一点に凝縮された威力は、岩を砕く水滴を想像させる。
まるで粘土に杭を打ち込むみたいに、穿たれた場所以外には全くの損傷は無い。

最初からその孔が存在してたと勘違いさせる程綺麗に貫かれている。

一発必中、と言う単語が頭に浮かぶ。

その一撃が彼にとっての全てで。

しかしそれが外れるなんて考えは徒労でしかなく。

彼が矢をつがえたその時から、既に貫く事が決定されている様な錯覚を覚える程に、その一撃は研ぎ澄まされていた。

命中した瞬間を見た訳では無いのに、そんな事を思ってしまう。

否、そんなものは必要無いのか。彼が放った矢が、孔けっかを作った事で、対象は二度と起き上がる事は無い。
ただ、それだけ。

『終わったぞ』

こちらへと人間が振り返る。

表情は、無。

ぞくり、と背筋が凍る。

怖い訳ではない。

ただ、私の本能が告げている。

——こいつには楯突かない方がいい、戦えば間違いなく勝てないと。

『どうした？』

『あ、いやいや、なんでもないよ』

でも不思議とこいつから逃げたいとは思わない。
逆に何故か安心してしまう。

『すまない、出来るだけ損傷は広げたくなかったのだが・・・』

申し訳なさそうな顔でこちらを見つめる。

『ううん、最小限だよ、十分に。』

それに私のミスでこんな事になったんだもん。全壊されたって文句は言えない』

私もこの恐竜きかいがこんな易々機能を停止させられるなんて思いもしなかった。

あの博麗の巫女相手でもそう簡単にはやられない絶対の自信があったのに。

私の過大評価だったのか、こいつの強さがそれを凌駕しているのか。というか。

『あんだ、ここらじゃ見ない顔だね』

そうだ。

こんな強さを持った存在なら幻想郷に知られていてもおかしくないのに、私はこいつを知らない。

『ああ、私か。』

どうやら私は君達が言うところの外来人と言う者らしい』

外来人。

それは幻想郷の外に住まう存在が、何らかの方法でこちら側に来てしまったものを指す。

そんな存在は滅多にはいないらしく、こっち側に来たところで下級の妖怪に食われてしまうのがオチ。

今まで一度も見たことは無かった存在が今、目の前にいる。なんとも不思議な感覚だった。

『そうなんだ。じゃあここはどこか分かる？』

『いや、詳しくは知らない』

『——ここは妖怪の山。名前通り、妖怪がわんさかいる場所だよ』

『では君も・・・』

物分りがいい人間だ。

一度誰かと接触してるのかな。

『そそ、私は河城にとりゝかわしろにとりゝ。
河童の妖怪さ』

河童の川流れ（後書き）

第五回は、かつぱっぱーな河童にとり。

河童にとり>かわしろ にとり<

種族：河童

能力：水を操る程度の能力

二つ名：超妖怪弾頭

見た目：緑の帽子に青髪ツインテール、河童が作業する時に使用すると思われるポケットが大量にある水色の服を着用している（光学迷彩機能付きらしい）

背中のリュックは、胸にある鍵を中心にして紐で繋がれている。恐らく鞆の鍵なのだろうが、微妙に不便な気がする。

てかそのせいで胸元が強調されてフヒヒみたいn（ry

河童なのだから頭に皿があるのだろうが、その真相は明らかではないし、個人的に凹むから嫌だ。

水かきはついていない。

あと腕が繋がっているという話は、色んな絵師さんが書いてる中では殆ど無い。

性格：人間の事が好きなのに人見知りなエンジニアで、人間に対しては友好的。

原作ではこれ以上危険なところへ行かせまいと博麗霊夢達の前に立ちふさがる。

にとりのBGMとして、「芥川龍之介の河童」と言うものがある。

芥川龍之介と河童の関係は、小説になっている河童が元ネタらしい。この小説の「二」の書き出しは「（前略）僕は仰向けに倒れたま

ま、大勢の河童にとり囲まれていました。」という文で始まるのだが、

この一部を抜き出すと「大勢の河童にとり囲まれていました。」と言う理由から名前がにとりになったっぽい。

二次創作ではネタの宝庫。

存在理念（前書き）

ギャグを書くとか言っというて、まったく書いてませんね。ごめんなさい。書けないんです・・・昔からギャグは。

存在理念

河城にとりと名乗った少女は、自分を河童だと答えた。文献や知識でしか識^しらなかった存在が、目の前にいる。

しかし、どうにも信じ難い。

それは何処の誰が作ったかも分からない文献から得た知識が固定概念となって刻まれているからで、決して少女の言葉が嘘に聞こえた訳ではない。

頭の皿は帽子に隠れて見えないが、見せろと言っても見せてはくれないだろう。

泳ぎやすくなるとされる水かきは手には無い。

手には無くて足にあつたら不自然だろうし、足にも無いのだろう。少なくとも、私の中で構成されていた姿とは程遠いものだった。

『しかし困ったな……直すことは出来ても、どの部分が壊れているのかが分からないと直しようが無いし、こんな馬鹿でかいものを分解して調べるつたら……トホホ』

にとりががつくりと頂垂れている。

出来るだけ被害は抑えたとはいえ、彼女にとっては大被害だろう。

口では取り繕っていたが、自分の作られた物が名前も知らない他人に壊されては落ち込みたくはなるだろう。

だからこそ、何かしてやりたかった。

『私なら、分かるかもしれない』

『へ？』

『不備のある場所だよ。そのな』

額が射抜かれている恐竜きかいを指差す。

『でも、どうやって』

『なに、すぐに終わる筈さ』

彼女の質問には答えず、それに近寄る。
久しぶりだな、こんな事をするのは。

『——トレース オン
同調、開始』

空気が振動する程度の声量で呟く。

私の原点であり、恐らく最期でもある言葉。

私にはこれしかなく、故にこれで私を超える者は存在しない。
私の歩んで来た道は、決して戻れないという事を自己に刻む為、私
は唱える。

『——基本骨子、解明』

懐かしむように一語を紡いでいく。

全てに劣るなら、唯一を極めることだけに専念すればいい。

才能の無い存在は、自分に来ることを闇雲に探すしかない。
茨の道を辿り見つけた答えは、理解されない物かもしれない。

『——構成材質、解明』

それでも、間違ひなんかじゃない。

> 俺く自身の言葉。

でもそれは決して俺には辿り着けなかったもの。

『――損傷部位、確認』

受け売りだろうが、それでも構わない。

元より私は真似事しか出来ないのだから。

ならばとことん模倣すればいい。

あらゆる材料で構成された人形、ツギハギだらけの自分。

見た目は違えど本質はなんら変わらない欠陥品^{にせもの}。

『――構成材質、変更』

――だがそれが完成品^{ほんもの}に劣るなど、誰が決めた？

ありとあらゆる本物が組み合わさった結果が偽者になる訳が無い。

何故なら、それ自身は既にひとつの欠陥品^{ほんもの}。

世界にただひとつの、誰も真似出来ない1としての存在理念が構成されている。

私は、そんな存在になりたいと思った。

正義の味方という、誰もが一度は考える妄想。

そのひとつひとつで構成された妄執になりたい。

自分勝手だと否定されたところで、何を今更のこと。

今度は、絶対に折れたりはしない。

誰に対する誓いでもないそれは、空っぽな器としては私には十分すぎるものだ。

『――トレースオフ 全工程、完了』

ふう、と一息吐く。

こんな大掛かりな物を弄ったのはいつ頃だろうか。

『……………終わったの？』

『ああ。しかしすまない、調べるだけのつもりが直してしまった』

『……………はい？』

うわ、何言ってるのこイツみたいな目でこちらを見てくる。

確かに、傍から見ればただ触れているだけにしか見えないのだから仕方ないのだろうが。

『完全に直ったかは分からない。動かしてみてくれないか？』

『うん、分かった』

幾重にもあるポケットのひとつを弄り、制御機器と思わしきリモコンを取り出す。

それは家でよく見かけたテレビのチャンネルと酷似していた。

器用にそれを弄っていると、機械音が聞こえた。

倒れていた体を地鳴りと共に起き上がらせる。

『嘘……………ほんとに動いちゃった』

ポカンと口を開けてそれを見上げている。

コロコロと表情を変える少女は、まるで子供のようだ。

『頭部は恐らく君なら直せるだろうし、これで問題はない筈だが』

答えは返ってこない。

未だに呆気に取りられている少女に背を向け、立ち去ろうとする。

『ま、待って!』

『——何かね?』

『あんたの事に興味が湧いたよ。ちょっと話でもしない?』

『私は構わないが、それはどうする気だ?』

『こんなのは後でもいいよ。面倒なのはあんたがやってくれたようだし。——それに、その面倒なことをあんな一瞬で何をやったのか知りたいんだ』

ふむ、と一瞬考える。

少なくとも敵ではないようだし、問題は無いか。

『分かった。出来る範囲でなら教えてやらんこともない』

『ありがとう!なら早速行こう、今すぐ行こう』

グイグイと腕を引っ張られ、早足で歩く。

——似たやり取りを、少し前にした気がする。既視体験では絶対はない。

幻想郷とやらには、こつも強引な奴ばかりなのだろうか。

何とも言い難い自分に対する軽い憤りを感じながらも、それに嫌とは言えない自分が矛盾していることに笑ってしまう。

こついった出会いも悪くは無いと思うが、少し奇抜な気がしてならない。

——それほどでもない、か。

クツと笑うと、にとりが神妙な顔つきをしていたが、特に何も聞いては来なかった。

連れてこられたのは、ぼつかりと空いた洞窟。

奥行きのあるそれを歩いて行くと、次第に光が薄暗い中から見えてくる。

その眩しさに慣れてきたところで、驚愕する。

開けた空間に出たかと思えば、その広さは城を連想させるものだった。

洞窟であることに変わりはないのだが、そんな事は気にならなくなる。

目の前にある建造物が、彼の視界を支配していた。

『凄いでしょ。これが私の製造工場兼バックヤードだよ』

そこにはありとあらゆる機械が場所を独占していた。

その殆どは私が見たことのあるものばかりであったが、ところどころに差異がある。

そこは彼女のアイデアなのだろうが、一人でこれだけの物を管理しているのは、感心に値する。

『ああ、これは凄いな』

単純な返答しか出来ないほど、私は魅入っていたのだろう。ふと彼女を見ると、嬉しそうな顔でこちらを見つめていた。

『ささ、こつちこつち』

再び腕を掴まれると、そのまま奥に見えた小さな穴——この場と比較してだが——に入る。

さつきとは改まって、和風な生活模様の部屋が現れる。

卓袱台に座布団は和風だが、少し見渡すと彼女の作ったと思わしき生活用品が所々に設置されている。

訂正、和洋折衷の和4の洋6だった。

『座っていいよ』

それに黙って頷き、腰を下ろす。

同時に台所へと消えていったが、すぐにお盆にお茶を二つ乗つけて戻ってきた。

それを置き、彼女も腰を下ろすと、私は彼女を見据える。

『では、聞きたいことはあるかね？』

『うん。まず最初に、さつきの機械解析の方法。あれはあんたの力なのかい？』

やはり力はこの世界では常識の位置に存在するらしい。

『そうだな。君にも力があるのか？』

『うん。水を操る程度の能力っての』

程度の、と言うのが気になったが、些末事だろうし聞き流す。

『私の力を教える前に、まずは聞かなくてはならないことがある。』

——魔術を知っているか？』

『魔術？魔法じゃなくて？』

『——私個人としては、魔法という単語が出てきたことの方が驚きなんだが……まあいい』

こちらでは魔術はマイナーで、魔法のほうがメジャーだと言う感覚に少し違いを感じる。

こういう所にも、世界の違いを感じさせられる。

『魔術とは、人為的に奇跡・神秘を再現する行為の総称だ。魔術に出来ることは人間に出来る。機械の構造を調べるなど、知識があるものなら誰にだって出来るだろう？』

『いやでも、あんたみたいに分解しないで調べるなんてことは——』

『可能じゃないか。君がよく触れている物の力があれば、ね』

『あ』

『あれだって人間が作れる代物だ。他にも炎を出したりなどもあるが、それだって文明の利器があれば容易いこと。』

魔術と言うものが無くても、人間にはそれ以上を短時間で、労力も控えて、高威力を引き出せる。

故に、私の世界では魔術は一般には知られていない、意図的に隠蔽されたものとなった』

『幻想郷じゃこんな技術を行使してるのは河童くらいだけだね』

『河童にしかこの技術力が浸透していないのか？』

『そこまで必要とされないから、普及もされないのさ。私達は決して隠してなんかいないよ』

やはりそこも、私達とは違うのか。

科学なしでは生きられない存在にまで堕ちた人間。

ここは、そんな悲劇とは無縁の世界なのか。

『んじゃあ、魔法は？詳しくは知らないけどこっちの世界じゃ魔法はそれなりにメジャーだからなあ』

にとりが話を元に戻す。

『魔法は、私のような魔術師が目指す、魔術とは異なり本当の意味で「奇跡」と呼べる現象を引き起こす神秘。いくら資金・時間を注ぎ込もうとも実現不可能な”結果”をもたらす物だな。人間には不可能な次元の範疇にそれが入る』

『うーん、そんな極端な違いは無いのか』

『いやいや。魔術は人間が神になろうとした結果で、魔法は神の代行者が成す大業。』

かなり違うとは思わないか？』

『——まあ、言いたいことはわかるけど』

まだ納得していない様子だ。

『ならば、こんなのはどうだ？』

そう言うが否や干将・莫耶を投影し、卓袱台に置く。
突如目の前に現れたそれに驚いた様子。当然の反応だ。

『これは、さっきの』

『これが私の魔術、投影だ』

『これも魔術なの？』

『術者の創造理念が真作を再現する特殊な魔術で、魔力によってオリジナルの鏡像を物質化するんだ。私がさっき見せた解析や変化は、これの下位にあたるものだ』

『????』

『投影というのはとても穴だらけの魔術でな、一から十まで全て魔力で再現する為には人間のイメージじゃあとても補えやしない。物質化できたところでオリジナルとは程遠い性能で、しかも投影した物は幻想であるが故に世界に修正され、魔力の気化に応じて段々と薄れていく。こんな非効率的な魔術を、誰が使おうと思う？』

『え？え〜つと……………ん？』

物凄く混乱している。頭から火が出る、という喩えがよさそうな状況だ。

『えっと、でもこうやって置いたままのこの剣に変化は見られないけど……………』

どうにか整理したのか、当然の疑問を口にする。

『私は少し特殊だね。投影に関しては誰にも負けないと自負しているよ。理由は――省略させてもらおう。言っても分からないだろうしね』

前の段階でオーバーヒートしているんだ。これ以上は追い討ちしない方がいいだろう。

『とにかく、私が投影したものは半永久的に存在し続け、質も本物に多少劣る程度にまで昇華出来る。ただし、武器関係、それも剣に限定された武装で無いと厳しいがな』

『……………うん、半分は理解した』

半分理解出来れば上々だろう。

まずここが常識が常識である場所だと言つのも起因しているだろうが。

『難しく考える必要もないし、必要ないなら忘れてくれても構わないさ』

『逆に印象深くて忘れられないと思うけどね。うーん、機械のことなら一瞬で理解できるんだけどなー』

少女は苦笑して双剣に目をやる。

品定めをするような目つきは、まさに職人のそれだ。

『でも、本当に剣だけなの？こんな複雑そうなのより、もっと簡素

なものだったらもつと造れるんじゃない？」

『造れなくはないが、それ相応の対価が必要になる。無理をすると疲れるだろう？そんな単純な考えでいい』

『万能に見えてそうじゃないんだね』

『この世はそう都合良く出来てはいないということだね』

この場に静寂が訪れる。

先程の騒がしさが恋しく感じる。

『そろそろおいとまさせてもらおう』

これ以上居ても迷惑になるだろう。

『あ、うん。あ、ひとつだけ言うておくよ』

『何だ？』

『魔術に詳しいあんたなら魔法に関しても興味あるんでしょ？——
——なら紅魔館か魔法の森に行ってみな。あそこには魔法に詳しい奴
らが住んでるから』

『そうか、ありがとう』

『でも気をつけた方がいいよ。あんたの実力を疑ってる訳じゃない
けど、そこらは危険だよ。特に紅魔館は何の情報もなしに入ること
はオススメしない』

『忠告、感謝しよう』

その言葉を最後に、私はその場を後にした。

洞窟内の人工的な光とは異なるそれが私の視界を眩ませる。

太陽は真上、ちょうど昼頃か。

一度戻ろうかとも考えたが、流石に早すぎる。

元より空腹にはならないこの身体、さしたる問題はないだろう。

近場にあつた木へと跳躍し、辺りを見回す。

視界は未だ緑色の割合が強い。

洞窟の近くに河があつた為意外と進んでいたのかと思っていたが、そうではないようだ。

『あやや、木の上に登つてる変な人がいるから興味本位で来てはみましたが……、面白そうな人がいますね』

ふと、そんな声が聞こえる。

掠れる程に遠くにいるのか、声色が高低を繰り返す。

その声へと振り返ると、そこには特異な状況が実現されていた。

人間が、空を飛んでいる。

否、人間ならばあんなものはついてはいないだろう。

鴉のような漆黒の羽を器用に羽ばたかせ、一眼レフと思わしきものでこちらを覗いている。

時折シャッターを切る動作をするが、ちゃんと撮れているのだろう

か、なんて下らないことを考える。

あちらが私の視線にやっと気づいたのか、一連の動作を止め、スタンディングの体勢を取る。

——そこからは一瞬の出来事だった。

確かに私の彼女の距離は取るに足らないものとは思っていた。だが、それでも。

刹那、彼女は最高潮の新幹線を連想させる速度で私へと迫っていた。警戒を解いていた油断から、構える時間さえ無かった。

その少女は、1秒も経たずに眼前に佇んでいた。

『どうもー清く正しい射命丸と申します。あなたの事を取材したいんですが、よろしいですか？』

驚愕している私を尻目に、にっこりと目の前の少女は微笑み、そんな質問をした。

存在理念（後書き）

どうしよう！書くことがない！

今回最後に登場したキャラは次に説明したほうがよさそうなのでパス。

というわけで、簡単なアンケートまがいなものでも

1・この小説は面白いですか？（その理由などを）

2・面白くないと答えた場合、どこに不備があるのかを教えてください（1の回答者は無視して構いません。短所を含めた答えなら可）

3・作者はどうですか？（もう存在価値から）

4・基本一話一話の更新が遅いですが、一回の内容が薄くて何話も出ずか、今のスタンスでやるか、希望があれば言って下さい。

5・お気に入りのキャラを出して欲しい！という要望があれば記述して下さい。

6・Fateの原作では、宝具にはもの凄いルビが振ってありますよね（エクスカリバーなら、約束された勝利の剣など）。もしオリジナルで神話の武器を出して欲しい場合、そのルビを含め考えてみてください（作者の頭が弱いせいですごめんなさい）。

7・作者の厨二度（国語力ない時点でテンでだめでしょうが一応聞きたいです）。

こんなものでしょうか。

これの答えに関しては感想欄に記入して提出してください！（お

幻想郷のブン屋（前書き）

リアルの都合により更新が遅れました。しかも中身薄っぺらいです。その分次の話くらい読み応えがあるものにしたいです・・・。

幻想郷のブン屋

おはこんばんちは。

幻想郷最速かつ幻想郷一のブン屋、射命丸文です。

今日も今日とて取材の毎日。ネタ捜しはキツイですが、やりたい事をやっているのだから決して辛くはないです！

いやホントですよ？決して誰もまともに取材を受けてくれないからってあること無いこと新聞になんかしてませんよ？

高速で移動する私ならではの、一日に色々な場所へ赴いてはネタになりそうなものを手当たり次第に集める、なんてスタイルがお決まりなのですが、今日は少しゆっくりと辺りを観察してみようかと思っています。

うーん、やはりあの疾走感が無いと物足りないですね。

今からでも元のスタイルに戻しましょうかねえ。

そんな事を考えてると、ふと洞窟が視界に入りました。

あそこは確かにとりさんが機械を創るのに最適な環境を作り出した場所だった筈。

私が愛用しているこの一眼レフ、これだつてにとりさんによる改良により通常の1.5倍の距離まで綺麗に撮れる様になったり、水に落としても壊れなくなったり——河童である彼女が水の中で使えない物を創る筈も無いですが——と、結構な恩があります。

普段外からも聞こえる機械音が聞こえていないのは、彼女が留守か単なる休憩か。

何にせよ今がチャンスです。これを機に取材でもさせてもらいましょうか！

洞窟の近くにまで移動し、着地する。

そこで気が着いたのですが、とても大きなトカゲが寝そべる様に倒れていました。

びっくりして声を上げかけましたが、いかんせんここで下手な刺激を与えるのは得策では無いでしょうし、反射的に口を塞ぎました。でも冷静に観察すると、そいつは身体をピクリとも動かしません。普通生物は寝ているなら呼吸による器官の上下によって、お腹にしる肩にしる動きがあります。

それがないということはつまり、こいつは死んでいる。

安堵感に胸を撫で下ろし、揚々と近づいていく。

うーん、本当に死んでいますね。ピクリともしないし、息をする気配もなし。

さて、問題も解決、早速潜入取材を――

そう思った矢先に洞窟の奥から人の気配を察知したので、慌てて身を隠す。

影だけしか見えませんでした。そこにあった形はどう見てもにとりさんの形はしていませんでした。

どちらかと言うと、かなりの大きさの男。女性であんな体格がいたら引くレベルでした。

幻想郷の生き物は、基本外の世界の人間よりも背が小さいらしいです。

そんな情報を仕入れて来るのは、あの妖怪以外に想像つきませんが、信用は出来ません。

あの方は何を考えてるかまったく分からない。

まるで世捨て人みたいな生活をしてるかと思うと、それとなく幻想郷の異変に関しては敏感で博麗の巫女の手伝いをしていたりと、動きに脈絡が無いように感じます。

つと、そんなことを考えてる内に、影が姿を現しました！

——驚いて声も出ませんでした。

その男は、身長180を超えてると予測される程の大男で、白髪オールバック、西洋風の黒の鎧に、赤い外套。

顔立ちは整っており、一言で言えばそれなりに美形な部類に入るでしょう。

だがしかし、そんな事を気にしては記者としては三流。相手が誰であろうと平等な記事を作成するには、私事など捨てるしかないのです。

……まあ、かつこいい事に変わりはありませんが。

あの人は、恐らく外来人なのだろう。

あんな目立つ人が幻想郷に住んでいたのならば、この私が見逃す筈もありません。

彼はこちらに気づくことも無く、一本の木を見上げている。

何をするのでしょうか、興味が湧きます。

その瞬間、彼はその高さ4メートルはあると予想される大木を、たった一回の跳躍でその頂点に足を乗せていました。

嘘でしょ？あんな事、普通妖怪にだって易々と出来るものではない。飛ぶ能力を基本持ち合わせている妖怪は、意外と身体能力は高い。

例外はいるが、基本人間よりも丈夫で長生きなだけで、極端に違いはない。

その常識を覆す決定的瞬間を、私は見てしまいました。

胸が、ドキドキしています。

こんなに取材しがいのありそうな人に巡り会えるなんて、ああ神様！感謝します！

私は、興奮を抑えながら彼と同等の位置まで飛び、すう、と息を吸う。

『あやや、木の上に登ってる変な人がいるから興味本位で来てはみましたが……、面白そうな人がいますね』

わざと彼に聞こえる様に声を出す。

ちよつと人間からすれば遠い気もしますが、妖怪の視力的にはこれでも見えるのでさじ加減が取れません。

しかしそんな私の考えは徒労に終わり、的確にこっちの姿を捉えている。

その正面姿を、私の相棒であるこの一眼レフで何回も撮る。不安定な足場にいるにも関わらず、彼は微動だにしません。

どれだけ身体能力が高いのでしょうか。ますます興奮してきます。

ある程度撮り終わった為、今度は直接取材です。

自分の中で早く取材したいという気持ちが昂ぶり、そこに地面があるかの様に空を蹴り、私は爆ぜた。

一瞬で彼の目の前に立つと、彼は驚いた顔をしていた。

まあ確かに、彼が本当に外来人だとするなら、こんな速く飛ぶ生物なんていないでしょうし。

——そもそも、人間みたいな身体に羽が生えている生物がいないのだろうか。

それにしても、確かに彼は驚きはしていましたが、しっかりと私から視線を外さなかったことには疑問を感じます。偶然なのかもしれません。

『どうもー清く正しい射命丸と申します。あなたの事を取材したいんですが、よろしいですか？』

私は思考を止め、目の前にいる取材対象^{えもの}へと話しかけた。

『取材？』

『はい、取材です』

あっけらかんと目の前の少女は答える。

『何故私が取材を受けなければならないのだ？』

『貴方に興味が湧いたからです』

さも当たり前のように答えた。

『……………』

『では取材開始しますね、まず貴方の名前を——』

『待て、私は取材をしていいと言っていないぞ』

『いいじゃないですか、減るものじゃありませんし』

『減る減らないじゃない。それに私は、マスコミじみた事は好きじゃないんだ』

『そうなんですか？』

『ああ。マスコミは確かに一部の場面では優秀な存在だろう。けど私からすれば中途半端な存在だ。相手の事情などお構いなしに問い詰めるかと思えば権力にはつき従う。私からはそんな印象しか取れない』

『そう、ですか』

彼女が口を閉ざすと、辺りは一斉に静かになる。
少し言い過ぎただろうか。

しかし、彼女は何かを決意したかの様な瞳でこちらを見据える。

『安心して下さい！私は決して貴方を裏切るような事は書きません。
私の記者魂に懸けて！』

先程のどんよりした雰囲気は何処へやら。すっかり元に戻っている。
真っ直ぐな瞳だ。

『……………分かった。だが君と私は初対面、かつ今の関係はこうだ。
全てを喋る気はないがそれでもいいか？』

『はい。私みたいな職業だと、人に信用されること自体が難しいから慣れてます』

自嘲気味な笑顔で答える彼女を見て、罪悪感を覚える。
だが、こう言った相手は警戒しておかないと、後で酷い目に会う可能性がある。

私みたいな個人が集団で群れを成している相手に下手に情報を与え

ると、もし完全に敵対してる相手なら恐らく何も出来ずに大群によって殺されてしまうだろう。

だからといって完全な拒否は相手への宣戦布告になる場合がある。結果的に、譲歩するしかないのだ。

個人としての無力さが、私の理想を破壊した。

力無き理想など、只の徒労だ。

それは我が身を以って理解している。

絶対的な力なぞ存在しない。

1が大軍に匹敵する力を備えていても、それ以上が相手になれば負けるのは必定。

数は力なり、まったくもってそのとおりだ。

だから私は臆病になるしかない。

こんな平和そうに見える世界でも、何があるかは分からない。

可哀相だが、彼女を信用するにはまだ時間が足りなさ過ぎる。

でも、信じる事が出来ない訳ではない。

彼女の真摯な瞳は、少なくとも嘘を言ってる風には感じなかった。

だから、要点だけなら問題ないだろう――

そう思い、私は話し始めた。

あれから十分程度。彼は当たり障りの無い程度の内容を公言してくれた。

『では、纏めるとこんな感じでしょうか』

名前はエミヤシロウ。彼は外来人で、死ぬ寸前に謎の声に導かれて

幻想郷へと辿りついた。丁度守屋神社の屋根に落ちてそれを修理した彼は、その礼に守屋神社に居候させてもらっている。

『ああ、そんなものだ』

………なんですかこのフラグ男。

偶然に偶然を重ねた結果が、女三人（二人は神だが）の住居に居候だなんて、世界中のモテない男性に二つの音叉の間に縛られて只管鳴らし続ける刑に処されてもおかしくはないですね。

しかも本人はそれを全く美味しい状況だと理解していない時点で度し難いです。

まあ私には関係のないことですが。

『まあいいでしょう。今日は取材にご協力いただき、ありがとうございます』

ぺこりとお辞儀をすると、彼もそれに応えた。

では、これで失礼させてもらいましょう。

『では、また会えることがあれば会いましょう！そのときはもっといろんなことを教えて下さいね〜！』

それを最後の言葉にして、私は飛び去る。

空を切る音が心地よい。

やはり飛ぶのはこの位速くなければいけませんね。

さてさて、これをどう記事にしましょう。

内容的にも大々的な記事にするのは難しそうですし、しかし腐らせる訳にもいかない。

誇大発言も考えましたが、今回は止めておきます。

彼の真剣な気持ち。

嫌い、というきちんとした理由を話してくれた。

私そのものではなく、私の行為の否定。

今まで取材を断られた理由の大半は、私のせいと言われていました。記事にするとあること無いこと書かれる、と。

否定はしません。記憶が曖昧なときはよくやってしまいますから。でもそれは恐らく本当の理由ではない。

自分の弱みを晒け出たくないが故に他人のせいにする。

その矛先は、最も敵として認識され易い存在。

つまりは、私だ。

汚れ役だと理解していても、心は痛む。

それを承知でこの仕事に就いていても、辛いことに変わりはない。風は気持ちいいけど、心はブルー。

やはりネガティブになるのは性に合いませんね。

突如、視界が歪む。

正確には、視界内の空間が歪んでいる。

空間が裂ける様に横に開いていく。

あれは、幻想郷の住人ならば誰もが見た事があるであろう”境界”。

誰もがあれに巣食う者の正体を知っているであろう。

幻想郷で最強と謳われている妖怪。

私が先程思考した、世捨て人じみた妖怪。

その姿が露になっていく。

体を表す様に紫を基調としたドレス、何の為に所持しているか不明

の傘、たなびく金髪の中に伺える読めない笑顔。
まごうことなきその正体は――

『八雲、紫――』

最悪だ。

彼女に会うときは大抵口くなことがない。

偶然鉢合わせになったとは思えない。

彼女の能力を知っている者なら誰だってそう思う筈。

だからこそ、最悪。

意図的な事なら尚更質が悪い。

彼女と会ったのは久しぶりだ。よって怨み関係ではない、はず。

それにあの妖怪が個人に対して動くと言うのは滅多にない。

心当たりが全く無い。

考えることをしてる内に、彼女の目の前まで移動していた。

一瞬、そのままスルーしようかとも考えたが、無駄なので止めておいた。

たとえば私が本気で逃げたとしても、彼女にとっては止まっているのと同義。

それにそれがきっかけでつきまとわれるのは迷惑極まりない。

私は観念して、八雲紫の眼前で停止した。

『ご機嫌よう、鴉天狗』

『…………貴女に出会った事で気分は最悪ですけどね』

やり場の無い憤りをぶつけてみたが、本人は全く気にしていない様子。

くそ、この余裕が神経を逆撫でさせる。

『私に何か用ですか？忙しいんですから、後にして下さい』

『私の用はね、貴女のその忙しい行為に関係するの』

何を言っているんだ？

『貴女、先程取材した男の事を記事にするのは止めなさい』

先程までの悠々とした目付きではなく、威嚇に近い目付きが私を捉えている。

『正確には、止めてもらえないかしら？が正しいわね』

『——何故です？』

あの人間と彼女がどういう関係かは知らないが、こちらも易々と引く訳にはいかない。

『彼と言う存在は、まだ幻想郷全ての人に知られる訳にはいかないのよ』

『理由になっていません』

『今は分からないでしょうけど、これは充分すぎる理由よ』

『話になりません』

そんなその場凌ぎな言い訳、聞く耳持ちません。

『どうしても駄目かしら』

『こちら仕事なもので』

『——そう』

諦めか落胆か読めない表情。
でも私は確信していた。

こう言った意見の相違が起こる事、それはつまり——

『なら、闘って貴女の口を封じます』

——闘いのゴングが鳴る瞬間だと言ったことを。

幻想郷のブン屋（後書き）

今回の紹介は、巷で人気のある射命丸文です。

射命丸文＞しゃめいまる あやく

種族：天狗（作品によって微妙に変化）

能力：風を操る程度の能力

二つ名：伝統の幻想ブン屋

見た目：髪色は黒。その頭には頭襟とぎんが乗っかっている（被っている？）。

頭襟とは山伏がしている格好のひとつで、天狗は山伏の格好をしているとされている。

他にも梵天袈裟ぼんてんけさと呼ばれるものがある。

腰には天狗の象徴とも言える葉団扇が差してある。

これは風を操る程度の能力の大本となっているもの（のはず）で、恐らくこれがないと発動は出来ない或いは威力が激減するかなるかと思います。

もちろん足には天狗下駄（一本歯下駄）を履いている。

因みに風神録で着ているYシャツは神主（作者）のものからきているのかなんとか。

首にはカメラ（作者によってデジカメとか古式なものと様々）を下げており、ネタ帳は常に忍ばせている。

性格：真面目だが融通が利かない。記事のポリシーは「真実だけを客観的に」というだけあって特に記事のネタの信憑性にはこだわりを見せる。その割りにいい加減な記事が多いのはご愛嬌。

新聞屋という仕事の性格上誰に対しても人当たりが良い。他の天狗たちと違い他種族の出来事も積極的に記事にするため人妖双方に極

めて顔が広い。

妖怪の山に住む鴉天狗はゴシップ好きな種族であると言われ、鴉天狗たちは自分たちで新聞を作りその内容を競う大会を開いているらしい。彼女自身も幻想郷に住む少女たちの噂を集めるのが大好きで情報収集のためなら三日三晩の張り込みも辞さない。文は「文々。

新聞」（ぶんぶんまるしんぶん）という新聞を発行しており、東方文花帖（現実で売っているよ！）では彼女の記事と言う形で幻想郷の日常が語られている。

物凄い機動力を持ち、幻想郷最速の座を欲しいままにしている。

物凄い酒飲みで、鬼と同等の飲兵衛である。

その鬼の一人からは、『強い者には下手に出、弱いものにはきつくあたる。強いのに惚けた振りをする』という評価を貰っており、その性格故に嫌われている面もある。

境界の戯れ（前書き）

東方神居祭行ってきました。もうね、ああいった場所はテンションがおかしくなるね。同人誌とか買い漁ってグッズ買い漁って無計画な金銭の使い道に凹んだり。まあそんなことはどうでもよく、久しぶり（この小説以外）の戦闘描写故に至らない場所がいくつか見られると思いますがそんなときは作者を罵倒して下さい。

境界の戯れ

『なら、闘って貴女の口を封じます』

その瞬間、辺りの空気が死んだ。

風の音も、鳥の鳴き声も、動物の喧騒もすべてがこの空間には存在しない。

今、この空間には私達しか存在しない。

『…………境界を造りましたね？』

『ええ。彼にこの闘いを見られる訳にはいきませんもの』

それと同時に、私は既に彼女の掌からは逃げられなくなっているのだろう。

他人に私達を認識させなくしたのか、

空間自体を隔離したのかは分からない。

だが、そんな大事にしてまで私を止めようとしている彼女からは、本気を伺える。

いつもの様なのらりくらりとした雰囲気は今は絶え、妖怪らしい――

――その獲物を狩るが如し――視線が私を呑み込んでいる。

分かっている。

こいつには勝てないんだ、と言うことは。

私も普段から弾幕勝負に関して本気を出すことは滅多にない。自分で言うのもなんですが、そんな事する必要がないんです。

自惚れですが、私はかなり強いです。

本気になれば博麗の巫女だって容易く倒せるでしょう。

しかしそれは、スペルカードという、人間と妖怪、互いの力が平等になるべくバランスを保つ為に考案されたルールが枷となり、厳しいものとなっています。

とは言っても、それでも恐らく倒せはないのでしようが、倒したからどうにかなる訳でもない闘いに本気になるはずもなく。まあ私はあくまで新聞記者ですから。

でも、たとえそんなルールが存在しなくたって。

目の前の賢者に勝てるか？と言われれば間違いなく、ノーと答えません。

妖怪である私を>化け物くと思わせる存在。

同じ妖怪のはずなのに、こうも違うのか。

存在するだけで理解できる、この圧倒的な実力差。

でも、こうなった以上どうしようもない。

勝つか負けるか、それが決まらない限りこの空間からはオサラバできそつにありませんし。

ふう、と溜め息を吐く。

我ながら、無駄な戦いを挑んだと思う。

やるからには、勝つ。

相手もこんな空間を造ったのは、スペルカードなしの実力行使に出る為でもあるんでしょう。

腰に差している葉団扇を抜くと、彼女も差していた傘を閉じ、こちらへ突きつける様に構える。

ああ、このカメラ、高いんですけどねえ。

間違いなく壊れる（壊される）相棒に心の中で黙祷する。

未練がないと言っては嘘になりますが、気にしていれば負けは必定。

仮に勝ったところでタダでは済まないだろうなら、諦めるしか道はないのだ。

『準備はいいかしら？』

妖怪の賢者が催促を始めた。

相変わらずの余裕の表情。

せめてその表情だけでも——！！

彼女の言葉を見殺し、私は葉団扇を横に薙ぐ。

それと同時に生成される数多の真空の塊。

風を操るというのは、なにも風だけを攻撃に使わなくてもいい。

一定の空間内の気圧を完全に遮断し、風の塊によって外側を固定する。

それによって、擬似的な真空を生み出す。

多少不完全だが、充分刃としては使用できる。

一見無理に思える事も、私には可能。

風という概念に於いては私にも自身があります。

紫は傘の先端を照準とするかのように見えない筈のそれらへとひとつひとつ確実に狙いを定める。

その全てを捉える一瞬、私のそれと同等の光弾が放たれた。

パン、と言う小気味良い音が鳴ると同時に、纏っていた風が拡散する。

思わず私はにやりとした。

これが狙い。

真空によって隔離された空間が開放されると同時に、そこにあるべき

ものが収束する。

その戻る力を私の力で放出する力へと変更。

反発する運動エネルギーは、絶対的な力を産む。

自然の恩恵をフルに活用した、私の連携を味わいなさい——！！

先程の倍以上の速度の風圧が彼女の身を引き裂く。
はずだった。

命中するはずの弾幕は、彼女の肌に触れることなく元の摂理に還る。
彼女は、何事もなかったかの様に悠然と立ち尽くしている。

その光景に思わず舌打ちをする。

これくらいであの妖怪に当たるとは思っていました、ここまでくると笑えません。

『次はこちらからいきますわよ？』

不気味な位の笑みを浮かべ、手に持った傘を振り下ろす。

それと同時に、視界は私の放った風の数倍はあろう光弾が支配した。
後ろにも、恐らく同等の数の弾幕が静止している。

威力はさほど持たないだろうが、元々弾幕に極端な力はいらない。
彼女の行動は正しいが、ひとつ誤りがある。

『こんなもので私を倒せると？』

『倒せれば貴女はそれまでの存在ですわね』

言ってくる。

予備動作無く弾幕は放たれた。

隙間無く埋められた弾幕は、私を捕らえて逃がさない。

私めがけて高速で迫るそれらは、絶望そのものにさえ見えるだろう。思考する慈悲すらも存在しない。

しかしそれはあくまで力を持たない弱者の結末。彼女が高速を放つならば。

——私は神速に至るだけだ。

腰を落としそのまま捻り、先程と同じ横薙ぎの姿勢を取る。先程と違うのはただひとつ。

敗北が目の前に潜んでいるって事だけ。でもこの程度の逆境なら、まだ止めるのは容易い。

私は身体そのものを軸として、ひたすらに回転する。

回転によって生み出されるつむじ風を、限界まで強化する。

木の葉ひとつ巻き上げるにしか至らないそよ風が、万物を彼方へ吹き飛ばしかなない程の竜巻へと昇華する。

一秒にも満たないその一瞬だが、その刹那で行った回転数は、凡そ100。

それは轟々と音を立てて地に生えた木々を薙ぎ、草を巻き上げ、土を砕く。

自然の怒りと比喻されるそれは、皮肉にもその自然を破壊していた。

だが、今破壊すべきものはそんなものではない。

この刹那も迫っている。絶望くを打ち砕く、ただそれだけ。

目である自分は、上空へと飛ばされた光弾をただ見守る。

その全てを防ぎ、竜巻を止める。

相変わらずの余裕の表情は変わらないが、多少引き締まったようにも思える。

それは願望か、事実か。

どちらにしろ活力にはなる。

『あまり余裕ばかり見せてると、負けたとき言い訳できませんよ？』

『大丈夫よ、負けるなんて思ってたませんもの』

うわ、なんていい笑顔。

身震いするくらいに美しい。

敵という立場じゃなければそんなことを考えてただろう。

『あとそうそう、上を御覧なさい』

『そんな子供騙しには引っこかりませんよ』

『そう、ならさよならね』

180度踵を返す八雲紫。

そのあまりの無防備さに、逆に呆けてしまう。

追いかけてようと足に力を籠めたその刹那。

世界が、白んだ。

『人の忠告は聞くものよ?』

再び振り返ったその先は、草木一本と無い焦土と化していた。その中に、夥しい数のクレーターが存在する。

風の能力で上空に舞い上がることを予測し、その一部をスキマに吸い込む。

それを違うスキマから追い出すとアラ不思議。上に昇っていた弾幕が、下に向かって急降下。

天狗の少女の姿は微塵も無い。

彼女が居たであろう半径100メートルには見当たらない。

あれによって分子レベルまで分解された?なんて馬鹿な事を考える。

今眼前に存在する焦土だつて嘘の世界。

私がこの境界を世界と繋げれば、全てが境界を造る前に元通り。

でももし、私が造っていない彼女が消滅したのなら――

『ご愁傷様』

それは私の管轄外。

彼女が消えたことで幻想郷は軋むだろうが、それは所詮妖怪からすれば一歩進むくらいの時間でしかない。

誰かが一人消え、何かがひとつ消え、誰かが一人産まれ、何かがひとつ創られる。

たったそれだけのこと。

一行程度の文でしかないその一瞬は、世界を動かすには至らない。

世界は悠然と回り続ける。

くるくる、ゆっくりと。

いや、世界を動かす出来事なんで、生物には不可能なのかもしれない。

無論、神にもだ。

突如、視界が弾ける。脇腹に強い衝撃。
空を舞う身体。

攻撃を受けた、と言う認識は予想外の痛みによって遮断される。

次は背中。

肩、足、胸、頭、と息つく暇も無い位の乱打が私を襲う。

あまりの衝撃に思考がブラックアウトし欠けるが、その痛みが逆に
此方側へと引き上げる。

生き地獄、まさにそれだった。

いつそ死なせてくれれば、なんて願望すら許されない拷問。
妖怪である身体を、久しぶりに恨んだ。

その見えない攻撃は腹部を最後に終わり、そのまま凹凸の地面へ叩
きつけられた。

『がつ……はっ——』

仰向けになった身体から、吐血をするのを拒絶する。

このままでは血で窒息するが、身体が動かない。

左腕は折れている。

肋骨が臓器に数本刺さっているが、そんな事では死にはしない。
打撲が何十ヶ所か、数えていたらきりがない。

地獄の次も地獄。

この死へ隣接した感覚は、久しぶり。

スperlカードなんて生温い決闘ではなく、純粋な命の取り合い。

——その生温さに浸かっていた結果が、この惨劇。

可能な限りの力を込めて身体を持ち上げる。

右手しか使えない分負担も桁違いだが、ここで気を抜いたら間違いなく暫く起き上がるのは不可能。

ボロボロの自分に鞭を打ち、身体を起こした。

『げほっ！ごほえっ！』

一斉に血の塊が体内から抜け落ち、軽い目眩を覚える。

鮮血は土色と混濁して、黒ずんだ池が世界の一部と化す。

ヒューヒューと空気が漏れる程度の呼吸も、今は天の恵みにさえ感じる。

呼吸が落ち着き、冷静になったところで私は敵を睨みつけた。

『一瞬の油断がその結果です。呪うなら自分の甘さを呪って下さい』

空には服の所々が裂け、首に掛けていたカメラのレンズもひび割れた姿の射命丸文が佇んでいた。

どうやらあの弾幕をかるうじて抜けて、スキを伺っていたのだろう。

とは言っても彼女自身も満身創痍らしく、団扇を持った手はダランと垂れ下がり、逆の手も肩を押さえるのに当てがわれている。

あんなにボロボロにも関わらず、彼女は私をここまで追い込んだ。油断もあつたが、腐っても天狗ということか。出歯亀行為にばかり勤しんでばかりでヘタれているかと思いきや……私も慢心が過ぎたようね。

あのひとつひとつの一撃は弾幕ではなく彼女自身の打撃だったのだらう。

手の甲からは皮膚が裂け骨が露出仕掛けている。

綺麗だった脚も青痣と擦り傷があちこちに増えている。

天狗下駄の歯の部分も、片方は取れてしまっている。

妖怪の身体を殴ってタダで済まないのを分かっていただろうに。

余程切羽詰まっていたか、そんな事は最早どうでもよかったか。

ただ愚直に暴力を振るい、勝利を掴もうとした。

結果は、相打ち。

『ぐっ……ヤバいですね。少々無計画過ぎましたか』

ひとり愚痴っているが、彼女の選択は正しかったと思う。もし弾幕だったなら、例え音速だろうが神速だろうが一撃が軽い為結界を貼る式を構成出来ただろう。

でも一撃が必殺の打撃は私の思考を阻害した。彼女ははからずとも最良の判断をしたのだ。

ギリ、と唇を噛むと血が出たが、口の中は常に鉄の味で覆われていて味では認識出来ない。

『全く……平和ボケかしら』

自嘲気味に呟く。

まさか賢者と呼ばれた私が新聞記者に負けたなんて、笑えない。

彼女を見上げていた形だったが、左右に不安定に動きながら下降していき、最後には着地の前に力尽き、地に伏した。

それに慌てて身体を起こし、引きずる形で彼女へと近づく。

『なに……慌ててるんですか。貴女が負わせた怪我でしょうに』

荒い息を立てながらかるうじてそう呟く。

先程まで虚勢を張っていたのだろっ、よく見れば私よりも重症だ。

『馬鹿、喋るんじゃないやありません!』

『馬鹿って……貴女に言われるとは思いませんでしたよ』

本当にだ。馬鹿と天才は紙一重と言つのは満更嘘では無いらしい。

『取り敢えず貴女を永遠亭に送ります。だから今は眠りなさい』

『その隙に止め、なんて事は無いですよ?』

『そんな力、私には残ってません。それにそんな心配した所で逃げられるとは思えません』

『……まあ、そうですね』

お互い、少女の様に無邪気に笑った。雨降って、僅かに地が固まった様だ。

『取り敢えず、シロウさんの取材の件ですが……』

そうだった。

私達の闘っていた原因は彼だった。

そんな事を忘れる程、彼女個人に固執していたのか。

『取り敢えず今は貴女の言う通りにします。何せこの身体じゃまともな記事は書けませんでしょうし』

『結果オーライって事かしら』

『代償がとても大きな気がしなくもないですがね』

その言葉を最後に、彼女は意識を失った。

穏やかな表情で瞳を閉じた姿は、戦乙女を連想させる。

私はその姿を見守る。

埃にまみれた黒髪を撫でる。

闘った事で、彼女と言う存在を少しは認識出来たからだろう、こんなに心穏やかなのは。

予備動作なくスキマが開かれ、文の身体を沈めていく。

その姿を瞬きせず見据える。

完全に沈み切り、歪んだ空間が矯正されると、私は糸が切れた様にその場に崩れ落ちた。

私も治療をしないとかなり危険な状況だが、その選択は最初から思考にはなかった。

これは、贖罪。

彼女に対する慢心と、私の勝手で重症を負わせたことによる。赦されるとは思ってないし、赦されたいとも思っていない。

罪は決して誰かに与えられるものではない。

罰は自身が背負うべき戒め。

地面に顔を埋めながら、瞼を閉じる。

私が造り出した境界は、解除を指示しない限り絶対に解除されないシステムになっている。

力技で壊されない限りは決して私の意志なくして解除は不可能。たとえ、私がこのまま意識を失ったとしてもそれは変わらない。

だからこそ、安心して。
おやすみなさい。

意識は深淵へと沈み、世界は無となった。

境界の戯れ（後書き）

東方のキャラをF a t eステータスで書いたらどうなるかを書いてみるコーナー

尚、これは作者の独断と偏見で書かれておりますので、もし『ここは違っだろカス』って部分がありましたら感想で指摘してくださいな。

かつこで表示されたのは変更した形です。後は原作の書き方にしますが、たとえばとして見て下さい。

射命丸 文

属性：中立・秩序

筋力：C

耐久：B

敏捷：A +

魔力（霊力）：C

幸運：D +

宝具（程度の能力）：B +

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：D 通常弾幕で傷つくが、威力によっては補正が掛かる。

直感：C 戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。陣地作成の範囲にいる場合、そのランク以下の場合無効になる。

保有スキル

神速：A 目にも留まらぬ速さで移動を可能とする。Aは千里眼B
+ 以上で無いと視認する事は不可能なレベル。

宝具

風を操る程度の能力：D└B+ 対人・対軍 レンジ：1└100

最大補足：100人

文字通り風を使役し、支配する能力。風と言う概念ならどんなものでも操作可能。葉団扇と神速のスキルを併せることでランクはA+にまで昇ることも。

八雲 紫

属性：混沌・善

筋力：C

耐久：B

敏捷：B

魔力：A+

幸運：C

宝具：A+

クラス別能力

陣地作成：A+ 彼女にとって有利な状況を作り出す、境界、の形
成が可能

保有スキル

カリスマ：B└A+ 威厳。それは状況によって変化する。

宝具

式神を使う程度の能力：C～A＋ 対人宝具 レンジ：1 最大補足：二人

式神を召還する能力。召還する式によりランクは変化。式自身が命令無く行動する場合、強制的にランクはCとなる。命令に忠実に動けばランクを超える能力を発揮する場合もある。

境界を操る程度の能力：EX 対軍宝具 レンジ：1～1000
最大補足：1000人

冥界と顕界の境界、妖怪と人間の境界、夜と昼の境界、春と冬の境界、睡眠と覚醒の境界、極楽と地獄の境界：あらゆる境界を操る程度の能力。

境界（結界）を操る事がどれだけ危険で強大な力なのかは計り知れない。

世界の修正力による重圧に耐えられる者で無いと使用は不可能。

それを使いこなせている彼女の實力は、語らずとも理解出来るだろう。

刹那の至福の時（前書き）

今回更新が早い分薄っぺらいです。中身が薄い理由は区切りが
いい理由です。そんな理由で一話の内容が薄くなる場合があります
がご了承下さい。

刹那の至福の時

射命丸と名乗る少女と別れた後、私は何事もなく下山出来た。先程までとは比較にならない程に視界は開け、思わず天を仰ぐ。太陽の光を手で傘を作り間接的に覗く。

山の中、更に木の上に登っていた時とまるで変わらない眩しさ。時刻は、恐らく正午を過ぎて一時間かそこらか。

久しぶりの平地に足が悦ぶ。

山道は下りの方が肉体には負担が掛かる為、いい骨休みになる。

辺りは木々が数本生えているがそれ以外は雑草と歩いた事によって出来た道だけで、面白味はない。

だが、ありきたりな風景だろうと場所そのものが初めてならば自然と興味が惹かれる。

遠目に見えるのは、浴衣を着た数人の人間がまばらに歩いて行く姿。鞆を持っている者もいれば、親子と思わしき姿で手を繋いでいたり様々だ。

どこを見ても、何世代前を想像させる姿ばかり。にとりが言っていた様に、科学が普及していないが故なのだろう。

すれ違い様に色々な人から挨拶をされた。

近所付き合いが習慣となっていた時代と何もかもが同じなのだろう。私はそれらに笑顔で応える。

なんだか暖かい気持ちになっていくのが分かる。

『あれは………村か？』

黙々と歩いていると、喧騒が僅かながらに聞こえてくる。それはつまり、人通りの多い場所へと近づいていると考えるのが常だろう。まばらだった人通りも、今ではそれなりのもの。

そして眼前に見えるは、どう見ても村。

ここで色々な情報が聞けるかもしれない。

それに、早苗達に世話になりっぱなしも悪い為、なにか出来る事が無いかも探すべきかもしれない。

私は、村へと足を踏み入れる。

中は、住んでいる者、商人、子供による活気で溢れている。それらを観察しながら歩を進める。

その中で一際目立った集団が居た。

銀のロングヘアー、弁髪帽に6つの穴が開いた水色のロングスカートを穿いている女性が、沢山の子供達に囲まれて何やら騒いでいる。

『けーね先生、あそぼー！』

けーねと呼ばれた女性は、何やら戸惑った様な表情で子供を諭している。

『まったく、授業が終わったら現金な奴だ。だが私にもやらないといけない事があってだなあ……………』

彼女は子供が言ったように先生で、小さな子供を中心とした人なのだろう。彼女自身本気で拒否している訳ではなく、本当に仕方ないからなんだろう。

それを見ていた私は、無意識にそちらへと足を運んでいた。

こつう事こそ、私の本分だったな。

『すまない、いきなりだが私に子供達の遊ぶ役を任せてはくれないか？』

『——あなたは誰だ？見たところ里の者ではない様だし、何よりあんたみたいな風貌の人間は見たことがない』

『それはそうだろう、私は先程山から降りてきたのだから』

『山、だと？』

その単語に僅かに反応した時の表情は、険しかった。

『妖怪の山から降りてきた……。それは、あんたが妖怪だって取っていいのか？』

子供達を押しつけ、こちらへと対峙する。

先程までの穏やかな表情は、敵を見るような目になっている。

『待て、違う。私はれっきとした人間だ』

『じゃあ何故妖怪の山から降りてきた？』

その表現方法だと、そこに住んでいるとしか思えないのだが』

『確かにあの山には住んでいる。いや、あの山にある神社に居候しているんだ』

『——そうなのか？』

いきなり空気が軽くなる。

感情の緩急が激しいのだろうか？

それとも他人を信じやすい性質なのだろうか。

『しかしそれが本当だったとしても、いきなりこの子達を任せるのは流石に・・・』

子供を預かる身としては当然の反応だな。

逆にこれで素直に引き渡すのなら、彼女に良い印象は持たなかっただろう。

『しかし君も仕事があるのだろうか？

私とは言わないが、せめて頼れる相手に頼んだ方がいい。子供を野放しにすると危険が多いからな』

弁髪帽の女性は黙り込む。

口元を歪ませうんうんと唸っている。

その真剣な姿を、私はどこか自分と重ねていた。

他人の為にここまで考えたり、困ったり、怒ったり。

益のない行為にも罪悪感を感じる責任感の強さ。

自分がやらないといけないと思う狭い思考と視野。

何から何まで、私を連想させた。

『……………わかった。では私はこの子達と遊ぶ、そしてそれにお前も参加するんだ』

『いや、それでは私が遊ぶ意味がないではないか』

『なに、仕事と言っても今すぐにやらなきゃいけないものでもない。

それに、そうやってお前の事を監視すれば、この子達を預けるに値するかを見極めれる。信用するに足ると判断すれば、すぐにでもお前に任せるさ』

恐らく彼女は精一杯の譲歩をしたのだろう。

自分が後に苦勞する道を選択した彼女に、私は少し悲しくなった。

自分と似ているからこそ理解^{わか}る。

その意思是鋼より堅いものだと言うことも。

『ああ、それで構わんよ』

『ならば行こうか』

『いー！』

子供達が一斉に声を上げる。

待ちわびた様にそわそわしている。

そしていきなり介入した私を気にした様子は無い。

子供故の純粹さか、彼女の事を信賴してか。

『そうだ、私の名前は上白沢慧音>かみしらさわ けいね>と言う。名前を聞かせてくれないか？』

『私はエミヤシロウ、好きに呼んでくれ』

『ではシロウ、遊ぶ道具を運ぶから付いてきてくれ』

『了解した』

彼女は両手を子供の手で塞ぐと目的の道へと歩きだす。
私はその後続いた。

不思議な男だと思った。

最初敵かと思えば一切の邪気が感じられないわ今は本人も子供みたいにうちの生徒と無邪気に遊んでいる。

面子めんこや独楽ひとまわしを不器用に扱い、皆に笑われ、そんな自分にまた本人も笑っている。

無邪気なその集まり。

輪にいなかった筈の子供達もどんどん彼を中心として引き寄せられている。

そんな中私は自然とその枠から外れていた。

いや、入るべきではないと思ったからだろうか。

皆、彼と言う存在に惹かれている。

それは私も然り。あんな子供みたいな大人の男を見たのは初めてかもしれない。

大人になれば自然と道徳や世間体を気にするものだ。

やりたい事も出来ないジレンマを抑えてしたくない事ばかりを優先する生き物、それが大人。

だがシロウはそんな常識から乖離した存在に感じる。

人間とか妖怪とかそういう概念以前に、ひとつの個体として、彼

は特殊だ。

自由人、と思われればそれまでだが、決して私はそうは思わない。
取り敢えず言える事、それは――

『…………この子達を任せても良さそうだな』

彼が決して悪い奴ではないと言うこと。

あんな無垢な青年が悪事を働くようならば、彼ではなくそんな世界
を呪うと思う。

それぐらい、私は彼を信用し切っていた。

『シロウ』

『ん、何かね？こちら結構忙しいのだが』

忙しい、と言う声にはそんな気は一切感じられず、寧ろ喜んでい
る風にさえ思える。

『――ここが私の家だ。子供達の子守りが終わったら来てくれな
いか？礼がしたい』

さらさらと持ち合わせの小筆と紙に漠然とした地図を描く。

墨が掠れて多少不格好だが、恐らく問題はない筈。

『いや、礼を言われる事をした訳ではない。何よりこれは私が望ん
で動いた結果。感謝しこそすれ、礼を言われる筋合いは無いさ』

そう言っ紙を受け取ろうとはしなかった。

その言動は、彼の特殊さを再認識させる。

見返りを求めないその聖人じみた思考。
それは決して悪くはないと思う。

『しかしそれでは私の気が済まない。出来ればいい。来てくれ』

しかしそれは時として人を疑心暗鬼に陥れる。

益を求めないで誰かを助けるなんてのは普通の思考では有り得ない。
人間とは俗物的で、身勝手で、貪欲な生き物だ。

だからこそ、自分達と異なる同じ存在に出くわせば、利用するか敬
遠されるかが殆どだろう。

人間や妖怪は潜在能力こそ違えど本質は変わらない。

彼がいつもこの様な事をやっているのかは分からないが、それでは
いけない。

こう言った無益の救済を続けていけば、いずれ独りになってしまう。

そんな事にはさせたくない。

彼の様な人物は、決してそんな対象として見られるべきものではない。
い。

私が人間を好きだから救いたいと思う事以前に、彼と言う存在を救
いたいと思った。

救う、なんて大それた事は第三者には無理かもしれない。
それでも、私の選択が彼の人生に光を見い出せるのなら。

『——分かった。考えておこう』

しぶしぶ彼は紙を受け取ってくれた。

強制はしてないからもしかすると来ないかもしれないが、強要は出

来ない。

私自身が、誰かの歴史を動かす決定的な存在とはなっではいけないから。

『ありがとう。では子供達を頼んだ』

そう言ってお互い踵を返す。

未練がましく後ろを振り返りもしたが、自身でそれを律する。彼を信じると決めたのだ。なのにこんなに残る髪を引かれては決意が腐ってしまう。

私はそれから振り返ること無く自宅へと早足で向かった。

『お兄ちゃん、またねー！』

『またー！』

あれから数時間は経ったであろうか。子供達と古き懐かしの玩具で遊んでいたらいつの間にか太陽が傾き初めている。

急いで帰らなければ、と思い走ろうとしてガサツ、と言う擬音に思い出す。

慧音が渡した家への道なりが記されたくしゃくしゃになった粗雑な紙がポケットに入っている。

明日にするのもアリだが、それはそれで後味が悪い気がする。

先程は否定していたが、彼女が望むなら私には何も言えない。

ただ礼をするだけだ、すぐ終わる。

そう判断し、私は急いで彼女の下へ^{もと}と向かった。

刹那の至福の時（後書き）

今回は（私が）世界一授業を受けたい先生の上白沢慧音。

上白沢慧音>かみしらさわ けいねく

種族：ワーハクタク

能力：歴史を食べる（隠す）程度の能力、歴史を創る程度の能力
二つ名：知識と歴史の半獣

見た目：銀のロングヘア、その上には弁髪帽の上部と思わしき物。
ロングスカートには六つの穴。これはハクタクの胴体に6つほどあるという目を表現している。

ハクタク時はその特徴に二本の角が増え、尻尾（獅子と同じ）が追加される。

なぜかその際にロングスカートの色は青から緑になっている。

性格：真面目、お堅い。

人間を愛しており、人里を襲う妖怪がいれば率先して里を守るために動く。

ハクタク化すると好戦的な性格に変わる。

ハクタク化は満月に起こり、その時に彼女に近づくと大変なことになります。

ハクタクとは中国の伝説上の妖怪。白澤とも書くが日本語では一般的には白沢。

ただ中国神話の妖怪とは言っても、日本（江戸時代）にも伝わっており日本にも白沢に祈願する風習はあった。

ヒゲの生えた人面牛に胴体を含め6本の角が生え、そして体中に目玉がついているというあまり見かけたくない外見をしているらしい麒麟や鳳凰と同じ聖獣の一種で、世を治める施政者の前に姿を現すと言われる。

なおハクタク化した慧音には別に体に目玉がついていたりするわけではない。慧音は後天性の半獣であるため変身しても人間の形を保つ（多分。慧音の裸を見た事がある奴が居たら情報提供を求めると共に殴らせろ）。頭に2本の角が生え、髪の色が変わると共に衣装チェンジするくらいである。

非常に聡明で万物の知識を持つと同時に病魔避けの力を持っており、白沢に出遭う事が出来た者は子孫まで繁栄すると言われていたため、古の施政者は白沢に関するものを身近に置く事が多かった。

あるとき中国の帝が白沢に遭い、悪霊などについて話を聞いたところ、1万種以上に及ぶ悪霊についてクドクドと説明をし始めたらしい。慧音のクドい性格はモデルから由来しているものだったのだろうか？

因みに上白沢という名前はワーハクタクのもじり。

原作では慧音は背が低い可能性がある。

二次では大人のお姉さんで通っているが。

慧音をけいおんと読まないように。

それを言ったら彼女がエレキギター持って暴れます（演奏的な意味で）。

月夜の転生（前書き）

なんか文体と内容がグダグダになってきました。忙しかったもので
……………（ー、）

月夜の転生

漠然とした地図では距離までは図れず、すぐに着くだろうと軽い気持ちでいたのが間違いだった。

意外とこの村は広い。下手すれば冬木よりも広いかもしれない。それだけの人口がここに集結している。だがこれならあの賑わいよりも頷ける。

『ここ、だろうか』

そして着いたのが、世辞にも大きいとは言い難い普通の家。だが古い訳ではなく寧ろ新しく思える風にも見える。機械では表せない匠の技術が、ここにある。

横引きの扉を数回ノックする。

………無言の答え。留守、なのだろうか。

そう思ったその時、いきなり音を立てて扉が引かれた。だがそこに居たのは慧音ではなく、銀を思わせる程煌めいた長い白髪の少女だった。

『あんだ、誰？』

眠そうな顔をしながらそう尋ねてくる。

『人にもものを尋ねる時はまず自分から、だと思っただが』

『……………私は藤原妹紅。^{ふじわらのもいづ}ほら、答えたよ』

めんどくさそうにしながらも律儀に答えてくれた。

悪い奴では無さそうだな。

『私はエミヤシロウ。訳あって上白沢慧音に呼ばれた者だ。ここは慧音の家だと踏んでいたのだが、間違えた様だ』

『いや、ここは紛れもなく慧音の家だよ。表札にも書いてあるですよ？』

指差した先には、確かに慧音の名前があった。

——その横に、彼女の名前も。

『どうした妹紅。まだ用は済まないのか——』

家の奥から歩いてきたのは、弁髪帽は脱いでいるが、明らかに慧音だった。

『来たのか、私は来ないものと不安だったぞ』

明らかな喜び様に、私の選択は正しかったのだと安堵する。
こんな小さなことでも、人は笑顔になれる。それは、素晴らしいことだ。

『ここまで遠い所にあるとは思ってなかったぞ』

『す、済まない。絵心は無いものでな』

『絵心以前の問題な気はしなくもないがな』

妹紅を挟んで会話が続く。

そんな中、妹紅は常にこちらを眠そうな目で見つめている。

『ねえ慧音』

『ん、何だ？』

『こいつ彼氏？』

『ぶっ！？』

開口一発何を言い出すんだこの女は！

『い、いやいや違うぞ！こいつとは今日会ったのが初めてでその時に世話になったからその礼をしたいから招待したけど強制はしてないから来ないかなとか思ってたけど来てくれたから嬉しくてとかああそうじゃない！』

顔を真っ赤にして、わたわたと空回りなジェスチャーを繰り返している。

先程までの凜とした彼女との差が激しく、それをつい可愛いと思ってしまう。

『あゝはいはい。取り敢えず上がらせたら？お礼するんでしょ？』

そんな彼女の言葉を聞き流す様に話を進める。

からかっているだけなのか、天然なのか……。

『あ、ああ。済まない。ささシロウ、粗雑な所だが上がってくれ』

冷静さを取り戻した慧音は私を家へと招き入れる。

粗雑、と言っていたがまるでそんな部位は無い。
汚れもなければ、置物に関しても風水に則ったレイアウトで、几帳
面な面が伺える。

『これは妹紅がやったんだ。私にはよく分からないが、法則通りに
物を置くと何かしらの恩恵を貰えるらしい』

私の視線から考えてる事を読んだかの様に説明を始める。
彼女の言葉に、思わず妹紅の方へ向く。

『なにその信じられないって顔』

不機嫌そうな声と表情で批判をする。

否定はしない。

彼女への第一印象は、何事も適当にやりそうな雰囲気——それこ
そ世捨て人じみた——を纏っている感じだったから。

『まあ別に気にしないけどね。自分でもそう思うし』

自虐めいた言葉だが、本人は本当に気にしていない様だ。

私達はちやぶ台を中心に座り込む。

慧音と私は向かい合い、その間に妹紅が両手を後ろに着く体勢で座
っている。

『改めて、子供達の遊び相手になってくれて感謝する』

深々とお辞儀をする慧音。

私はそれと交互になるように返した。

『いや、先程も言ったがこれは私が望んでやった事。だがその気持ちには受け取っておこう』

こちらもお辞儀を返す。

『……………なんだか私は邪魔っぽいね』

だらけていた妹紅が、ひとり愚痴る。

その呟きは、彼女以外には届くことはない。

『さて、礼の件だが……………。何かして欲しい事とかはないか？私が決めるのは難しいと思ったのでな』

それならば結構、と言おうと思ったがそれを留める。

『……………ならこの世界、幻想郷の事を教えてくれないか？私は新参者でな、まだ地理に詳しくないんだ』

きよとん、とした顔をした後直ぐに納得した顔付きになった。

『成る程。お前は外来人だったのか。ならその風貌と私が知らないのも納得がいく』

私”が”知らない、と言う発言に引つ掛かりを感じたが、その思考に介入する様に話は続いていく。

『分かった。ものを教えるのは私の分野だ、どんと来てくれ』

得意気に胸をドンと叩く慧音。

因みに妹紅は欠伸をしながらそこら辺をゴロゴロしている。
私の事なんぞまるで気にしていない。

『そうだな、では早速だが地理を把握したい。ここに地図はあるが
名称云々は書いていないものだから道なりに進んでいたんだ』

『そうね……覚えるものは色々あるけど、分からない部分があつ
たら遠慮なく言ってくれ』

『感謝する』

『ではまず、今現在居るここ——人間の里から説明しよう』

すつ、と地図の一点を指差し説明が始まる。

『名の通り、ここは幻想郷の中で最も多くの人間が住む場所。ここ
は妖怪も利用したりする店もあるが、大抵そう言った知慧のある妖
怪はここを襲つたりはしないから割と安全なんだ』

『そんな保証は何処から来るんだ？』

『妖怪退治を生業とした人間も多く住んでいるし、何よりここは妖
怪の賢者が眼を光らせているからな』

『妖怪の、賢者？』

『そう、名の通り賢者と呼ばれる程の頭脳を持ち、強大な力を持った存在だ』

『何故そいつは人間の味方をする？利益があるとは思えないが……』

『自然の摂理を大局的に見た結果だろう。人間が減ぶと妖怪だって困るのだから』

それは、やはり食糧としてなのだろうか。

それではまるで、人間は”生きている”のではなく”生かされている”だけではないのだろうか。

だからと言って妖怪を否定する事も出来ない。

少なくとも私の出会った二人はそんな事をするとは思えない。

しかしそれも所詮数分程度の会話で浮き出た表層の一部に過ぎない。今この瞬間だって、もしかすると――

『――どうした？』

『え？あ、いや………』

『かなり険しい表情をしていたが、何か分からない事があったか？』

『いや違う、少しばーっとしていただけだ。続けてくれ』

今考えるのは止めよう。考えた所で何も変わりはない。

慧音の話に集中しよう。

『そうか、では次は幻想郷と外との境界に位置する博麗神社だ』

先程指した場所から一気に端まで指が動き、地図のギリギリにある小さな建物を指した。

『ここには博麗の巫女である博麗霊夢が居て、異変解決を主として
いる』

『異変とは？』

『妖怪等が起こした幻想郷全てに変化を起こす程の変異の事を指している。色々あるが、順に追うと、幻想郷を紅い霧で覆い尽くしたり、春を奪ったり、ずっと夜が続いたり、春夏秋冬の花が咲き乱れたり、生物の中に存在する”気質”を吸い取り大地震を起こしたり、幽霊が大量に地下から湧いて出たりと様々だな』

『……………それら全て博麗の巫女が解決したのか？』

『そう、だな。協力者もいたりもしたらしいが、最低半分は彼女の
実力があってこそその結果だろう』

私の中で、表現出来ない程の高揚を覚える。

私の理想そのものが、そこにはある。

正義の味方としての在り方、絶対的な力。

それらは、私の中でどんどん膨らんでいく。

まるで、正体を明かさないヒーローの姿を想像するかの様に。

『それは素晴らしい人物だ。是非あやかりたいものだな』

『……………』

『どうした？』

『いや、何でもない』

慧音は、ぐつと堪えた。

今の彼の子供みたいな表情。

それは明らかに博麗霊夢に対しての憧れのそれだ。

彼の中では、正に正義の味方みたいな想像を孕んでいるのだろう。
だからこそ、言えなかった。

現実とは、かくも厳しいものなのだ。

『つ、次は魔法の森だ』

少し顔を引きつらせて彼女は不自然に話を続ける。

『ここは最も湿度が高い場所で、人間も妖怪も足を踏み入れない原生林なんだ。ここに生えている茸の胞子が、両者にとって好ましいものではない為だな。だが逆に考えればその胞子に耐えられるのならば、ここはかなり安全な場所になる。魔法の森、なんて呼ばれるのはその茸のせいなのが殆どなんだ』

『殆ど？』

『そう、殆どだ。残りの理由は、ここには魔法使いが住んでいるからなんだ』

『魔法使い、だと——？』

『なんでも茸の幻覚作用が、魔法使いの魔力を高めるのに効果があるらしい。』

まさに魔法使いにとって最高の環境と言う訳だ』

にとりが話していた魔法使い。

外とどれほど差異があるかは分からないが、興味がある。

道なりのにもここからさほど遠くはないし、暇なときにでもその魔法使いを探してみるとしよう。

『そうだった、人間の里と魔法の森の間に鎮座している、外の世界の道具を商品として扱っている店があつて、お前ならそういったものの使い道が分かるんじゃないか？』

『見てみないことには分からないが・・・その店主はそんな用途不明なものを売っているのか？』

『いや、その店主の能力が、名前と用途が分かるものなんだ。本人曰く、使用法までは分からない中途半端な能力だと嘆いていたがな』

『面白い能力じゃないか。まさに天職だな』

『まあ使用法が分かってそれが使えるものなら、売りに出すかも怪しいがな』

——それもどうかと思うが、思うだけに留めておく。どうせ言ったところで意味などない。

『次はここ、通称霧の湖なんだが。ここには氷の能力を操る悪戯好

きな氷精がいるから近づかない方がいい。とは言っても、博麗神社に行くなら間違えて近くを通る場合もあるかもしれないが、その妖精に会った場合、適当にクイズでも出せばそれに没頭して周りが見えなくなるだろうから、そのスキにでも逃げれるぞ』

彼女は、その地図に先程言った妖精の特徴と思わしき絵を描く。

——質に関してはノーコメントとしようか。意外と楽しそうに描いているのに邪魔をするのは、本音を口にすることよりも愚かなことだ。

『そしてここも危険区域だ。霧の湖を抜けた先にある紅で覆われた屋敷、紅魔館。ここには吸血鬼の姉妹に、強力な能力を持った人間のメイドに、妖怪の門番がいる。並みの実力者では、この布陣は崩せないだろうな』

吸血鬼、か。

最強の種族と名高い真祖の吸血鬼とまではいかないだろうが、それでも姉妹となるとサーヴァントでも倒すのは困難を極めるだろう。いや、下手をすれば成す術もなくやられる可能性だってある。もともとそんな相手と戦う気はさらさらないが、何かの拍子になんてこともある。

対吸血鬼用の武器の投影も試しておかないとな……。

『人間の里から見て、妖怪の山の真逆に位置するのが、迷いの竹林だ。ここに用事があるなら、妹紅に案内を頼むといい。彼女は道に詳しいからな』

横を見ると、惰眠を貪っている妹紅がいた。

それを見て慧音は優しい表情で微笑んでいる。

私からすれば、何とも危機察知能力に欠けている奴だと思う。

普通知らない奴が家に上がるとなると警戒するものじゃないか？
はあ、と溜め息を吐くと、慧音が不思議な顔をしていた。

『そして——そこを抜けた先にあるのが、永遠亭。ここには天才
と自他共に認める薬師と、姫がいる』

『姫？』

薬師に姫、か。その姫とやらは病でも患っているのだろうか。
そうでもない、同じ屋根の下でそんな身分不相応の二人が住む理
由はないだろうし。

『本人曰く、月から降りてきた姫のようだ。まあ私は直接見てはい
ないから何とも言えないが……』

そう答えると、彼女の視線はちらりと妹紅の姿を捉えていた。その
刹那に感じた憂いの空気。

しかしその違和感もすぐに消え去り、慧音は再びこちらを見た。

『妹紅のことなんだが……。もし永遠亭に用があるなら、彼女で
はなく私に声を掛けてくれ』

『——それでは先程の案内の件はどうなるんだ？』

『あくまで竹林の案内だけだ。』

彼女自身そこにいくのは拒むだろうし、私からも出来れば拒否した
い』

『何故そこまで？』

『…………それに關しては私は何も言えない。妹紅から聞くしかないだろうが、恐らく答えてはくれんよ』

ここまで頑なに拒む程の理由が、永遠亭に存在するのだろうか。今こんなにも穏やかに眠っている少女を、大きく変化させるほどの何かが。

『そうか。なに、私からは何も聞かんよ。彼女から話すとなれば聞かない訳にもいかないがな』

『——ありがとう』

再び深い礼をされる。

『よしてくれ、私が勝手にそう結論しただけなんだ。礼を言われた訳ではない』

『——先程から思っていたのだが、そうやって感謝を拒まなくても良いのではないか？

それは時として人の気持ちを踏みにじるのにも繋がるんだぞ？』

『それ、は——』

突然の説教により、思考が上手く回転しない。

『感謝をされたなら、それを受け取る。たったそれだけだろう？子供にも出来るそんな単純な事すら出来ない程、お前は餓鬼なのか？』

『——』

何も、言えない。

私の正義の味方としての在り方の否定。
それに憤りを感じると同時に、妙に納得してしまう自分にも同じものを感ずる。

餓鬼かと言われれば、正にその通りだと思う。
正義の味方で在りたい、なんて事を信じ続けている時点で餓鬼なのは理解している。

それよりも、彼女の言葉。

私が今までしてきた行為の否定の全て。
無償の救済、それは間違いだと。

『私は、餓鬼、か——』

ひとり呟く。

今までそれが正しいと信じていた事が、容易く一蹴される。
普通ならば、それを認められないものだ。

しかし、今の私はそんな常識とは真逆の感情を覚えている。

それはすなわち、自分でも理解^{わか}っている、と言うこと。

彼女に言われる以前から、どこかで理解していたのかもしれない。
しかし私は餓鬼だから。だから幾度やり直して、ここに来てまで誰かに突きつけられる。

私の人生は、無駄だらけだったのだろうか？

『そうかも、しれないな』

『——分かっているなら、考えを改めた方がいい。これも私の勝手な好意の押し付けに過ぎないからこれ以上は何も言わない。人と

言うのは疑り深い生き物だからな。本人が良かれと思っている行為にだって裏があるかと疑う。それこそ、代償を支払わない行為ならば、尚更』

私が今まで救った存在には、礼をする者もいれば何かしらの物資を提供する者もいた。

私はそれを拒んだ。

救いを求めると言うのは、切羽詰まった状況以外では起こり得ない。だから私は受け取らなかった。それが正しい判断だと信じていたから。

しかし、彼女の言った通りそれによって私と言う存在を眼鏡で見えなくなったのなら。

掛け慣れない眼鏡は視界を歪ませる。

自然と直視出来なくなると、視野も一気に狭まる。

彼等の世界も、色を変える。

私と言う存在にも、歪みが生まれる。

それによって正義を悪と認識してしまう事だってあるのかもしれない。

実際、私はそれによって命を落とした可能性がある。

救いを与えた存在による裏切り。

あらゆる感情が渦巻く中現れた一寸の光。

それは希望に見えると同時に、何か分からない存在が現れると言う考えにも至れる。

認識力が曖昧になる程他人を恐れる存在の自己防衛方法。

それは、自分以外を信じない事。

自分の色を何色にも染めないこと。

その結果、人は狂気に走る。

孤独では生きていけない存在が、創り出した世界に^{じぶん}押し潰される残酷な結末。

考えてしまえば、こんなにも浮かんできてくる他人の痛み。

私は、ひたすらに立ち止まる事が無かった。

だから、こんなにも深く考える余裕が無かった。

いや、考えるくらいなら一人でも救う選択をしていたのだ。

それが必ずしも望んでいた救いに繋がる訳ではないのに。

今やっと理解した。

他人の本当のキモチを知らなければ、救いにはなり得ないんだと。本当に救われない事なぞ、全ての存在が私と一緒に訳がない。

私のしてきた事は一方的な好意の押し付けと何ら変わりはない。

『——クッ』

最早笑うしかない。

私の理想は、現実にも成り得ない虚像だったという事だ。

衛宮士郎を否定し、それすら覆えされ、最後に全ては足掻きだと気付かされる。

—— なんていう、運命。

衛宮士郎として生き、アーチャーとして生き、今エミヤシロウとして生きている。

もっと、もっと早く、何かしらの形でそれに気づいていたなら、全ては狂わずに済んだのだろうか。

もっと、誰もが笑って終われる結末が用意されたのだろうか——

気がつくと、私の頬に熱いものが流れていた。

それが涙だと気づくのに、かなりの時間を要した。

今までずっと、泣くなんて事が無かった。

涙腺が消え失せたのかと思う程に、私は冷酷だったのだろう。

ただただ救済する為だけの存在。

ただ誰かを助けたい、と言うプログラムだけ組み込まれた自動人形。それだけしか搭載されず、それ以外は何も成せない。

そしてそのたったひとつの存在意義さえ、贗作^{わたし}には見い出せない。

——今の私は、いったい何なのだろう？

ふわりと、暖かいものが私を包み込む。

首の後ろから回された腕、目の前にいない慧音の存在が、暖かさの正体を自然と教えてくれる。

背負う様な体位なのに、逆に全てを預けてしまいたい感覚。

それほどまでに、今の私は弱っているのだろうか。

『——何故泣いたのかは分からないが、泣ける時に無理はするな。哀しいことは溜め込むべきじゃない。

泣け。そして全てぶちまけろ』

彼女の言葉ひとつひとつが、染み込んでいく。

それが、軽い引金となった。

ただひたすらに、私は涙を流した。

嗚咽も、身体の震えすら無い。

そんな機械的な動作で起こした涙だが、私にとってはこれ以上無い程の奇跡だった。

『では、これで失礼するよ』

あれから暫く経ち、精神的な復活を遂げると私は今の時間帯を聞き、その結果退散することにした。

内心かなり焦っているが、それを表に出す程今の私は弱ってはいない。

慧音のおかげだよ。

そして、ここまで弱い所を見せたのは、彼女が初めてかもしれない。全く、常に冷酷だった頃が懐かしいよ。
もう、昔の私には戻れないな。戻る気もさらさら無いが。

『ああ。こんな遅くまで申し訳なかった』

『いや、君には感謝してるよ。あらゆる面でな』

『———そうか』

顔を綻ばせた彼女は、とても満足げだった。

それを見てこちらも自然と頬が緩む。

やはり私達は、どこか似ているのかもしれないな。

『地理に関して殆ど教える事ができなかったから、暇な時にでも尋ねるといい。いつでも———とは言わないが、なるべく時間を割ける様に努力をする』

『ああ、感謝するよ』

先程とは心境が異なるせいか、彼女の好意も自然に受け取ることが

出来た。

確かに遅すぎたスタートではあったが、決して手遅れではないと信じよう。

この先、遅れた分以上に挽回出来るんだと、信じ続ける。

それが、彼女への最大の恩返しだ。

踵を返し、私は歩く。

新しい自分の我が家、エミヤシロウ守屋神社へと。

今までのシリアス加減は何処へやら。彼は人気の無い場所に着いた途端全速力で走り出す。

端から見れば、その表情の焦りぶりに笑ってしまいかもしれない。ただ闇雲に、辿ったであろう道筋を走る、走る。

ものの十分程度で境内にまで辿り着いた彼の足の速さは、流石は英霊。

まあ彼の場合足に強化を掛けているからこそそのそれなのだが。

恐る恐る戸を引き、茶の間へ向かう。

異様な静けさが、彼の不安を向上させる。

ススス、という音と共に身体を強ばらせる。

茶の間に存在するのは、早苗の正座した姿と恐らく私のものと思われるであろう食事がちゃぶ台の上に寂しそうに置かれているだけ。シロウに気付いた早苗は、にこりと微笑んだ。

しかしそれは、彼には地獄のトラウマを呼び起こすものだった。

あかいあくま、ドS似神父と全く一緒の笑み。
それを理解>わかつている彼は、顔を引きつらせ、身構える様に
一歩後ずさる。

早苗は、それを合図としたかの様に大きく息を吸い込み、それを振
動として放出した。

『シロウさん！そこへ直りなさい！』

『は、はいっ！！』

そのあまりの剣幕に、自然と従ってしまう彼の姿は、正に過去の自
分そのものだった。

最早失われていたと思っていた人格が、酷く懐かしく、虚しさを募
らせた。

『……………まあ、早めに帰ってきて下さいとは言いましたが、まだ地
理に詳しく無い以上多少なら仕方ないと譲歩してましたが——流
石に遅すぎます！』

彼女から感じたことの無い気迫に、彼は顔すら上げれない状態だっ
た。

『貴方とはまだ浅い部分しか知り合っていないませんが……………他人の事
を優先、自分を蔑ろにする傾向があることはしつかりと理解させ
てもらいました』

笑顔が、怖い。

誰もがそんな感想を抱くだろう。

言い訳も出来ないシロウは、正座で折檻を後30分以上は続けられると言う、恐ろしい体験を堪能させられる羽目になった。

夜は、まだ始まったばかりである。

その頃の蛇蛙・s

『ガクガクブルブル』

『早苗、怖すぎるわよ……………』

襖の隙間から二人の事情を覗いて諏訪子は蛇に睨まれた蛙の如く脅え、神奈子は今まで見たことのない早苗の姿に怯んでいた。

月夜の転生（後書き）

おまけーね

彼を見送った後、私はその場に留まったまま思考する。

何故、私はあんな行動に出た？

説教に関しては前に感じた事をぶつけただけに過ぎない。

しかし、彼が涙を流した瞬間、私は無心で彼の背に抱きついた。
今思い出すだけでも、恥ずかしいことこの上無い。

慰めるにしても、他に手段はあつたろうに。
分からない、自分の事が分からない。

一旦思考を中断し、居間へと戻る。
すると先程まで寝ていた妹紅が起きている。

『起きたのか。言ってももう夜は更けているからまた寝るのだろう
が——』

そこで、妹紅が何やらニヤニヤ顔でこちらを見ていたことに気づく。

『ど、どうした？』

その顔は、彼女が悪戯な思考を持った時に必ずする合図。
正直、嫌な予感しかない。

『いや、慧音は彼氏じゃないって否定してたけど、そんな相手に対してあんな大胆な行動をするとは…………。』
『やっぱりデキてるんじゃないの?』

『——っ!』

なっ、ななっ!~!』

動揺を隠せない。

あの時、彼女は寝ていた筈では。

『実は慧音が歩く振動で起きちゃってね。
寝ぼけ眼で姿探したらなんか物凄いことになってるじゃん? みたいな』

き、気づかなかった。

あの姿を見られた、と言う事実にも動揺が倍増する。

『で、結局どうなの?』

妹紅の質問責めのせいで、今宵は眠れそうになかった。

教訓：無計画な行動は事故のもと

異常変化（前書き）

感想で色々注意をもらったので、今度こそ大丈夫かなーとか思いながら投稿。

異常変化

昨夜の出来事など、世界にとってはそこ等の小石よりも価値がないものかもしれない。

だが、そんな瑣末事で精神的グロッキーに陥っている青年が、馬車馬の如く働かされている。

理由は単純。埋め合わせだ。

早苗なりに彼のことがかなり心配だったようで、彼が誠心誠意謝った姿を見、誠意の証拠として今に至っている。

早苗にとっては罰のようなものだったが、それは考えが甘い。

彼にとつては御褒美当然の行動に過ぎない。

その証拠として、彼の働く姿はとても生気が宿っており、仕事に雑なところなど一切無い。

寧ろ彼女の知らない家事の方法を一部見せ付けられ、逆に悔しい思いをしていたりする。

彼を縛る、と言う点ではかなり有効な策ではあるが、何とも釈然としない早苗は縁側で彼が物干し竿に洗濯物を干す姿をつまらなさそうに眺めていた。

『うつは………なにアイツの楽しそうな顔。初めて会ったときの整然とした顔が嘘みたいに緩みきってるわよ』

そんな彼女の横に腰掛ける神奈子。

彼女は神ではあるが、ひとりの生物でもある。

参拝客がいないと、一介の女性となんら変わらない。

そんな時間は、他の生き物と同等に自由な生活をしている。

『……………そうですね』

不機嫌そうに顎を手の平に乗せ身体を預けている早苗の姿に、神奈子は軽く溜め息を吐く。

『———そうやって不貞腐れている位なら、シロウの隣に行って手伝ってやったらどうだい？』

『それじゃ罰になりません』

『全く……………あれのどこが罰に見えるってんだい』

洗濯物一杯の籠を抱え陽気な鼻歌を歌う姿は、どこからどう見ても見た目以外は家事大好きな家政婦にしか見えない。

『そこ！家政婦ではない、執事バトラーと呼べ！』

『誰に向かって言ってるんですか……………』

明後日の方向に叫んだシロウに突っ込みを入れる早苗。それに苦笑する神奈子。

とても平和な一日の一幕だった。

『さて、次はお買い物です。とは言ってもまた一人にしたら同じ結

果になりかねないので、私も付いていきます』

神社内で出来る仕事は滞りなく終了し、次は買い物と言うことになった。

シロウの手際の良さは、主婦をノックアウトさせるのなぞ容易い、とその背中が語っている風にさえ見えた。

その甲斐あって、まだ日もそこまで昇らない時間帯に行けるようだ。

『おいおい、流石に二度目は——』

『信用出来ません』

ぴしゃり、と一蹴される。

その時の早苗の笑みは、昨夜の出来事トラウマの再来だった。

『ぐっ』

もう二度と味わいたくない、と切に願った一線を踏み超えかけた事にひやりとする。

幾多の死線を超えた彼でも、彼女の冷やかな視線にはかなわない様だ。

これも、彼の変化の一部でもある。

どんどん人間だった頃に性質が戻りつつあるのだ。

破綻者である頃の彼に。

『——諦めるしかない、か』

聞こえない程度の愚痴を溢す。

それに、自業自得と言われればそれまでなのだから。

『分かった。付き添いよろしく頼むよ』

承諾の言葉を聞いた早苗は花開く様に微笑む。
何とも、感情の起伏が激しいなと彼は思った。

『では、お金はもうありますし、行きましようか』

『そうだな』

二人はその場から立ち去る。

そんな二人を見つめる二つの影が、笑う。

『諏訪子、行くわよ』

『了解』

悪戯な表情の神が、その後続いた。

人間の里は、相変わらずの賑わいを見せ、衰える事を知らない。
そんな中、二人は歩いている。
しかし、少しだけ何かが違う。

『なあ早苗』

『なんでしょうか』

『何故私達は腕を組んでいるんだ？』

その違いとは、前までこんな行動を起こさなかった彼女が、大胆にも彼の腕に抱きつく様に歩いていることだ。

シロウ自身、顔には出ていないがかなり動揺している。

『気にしないで下さい』

『気にするな、と言う方に無理がありすぎるぞ……………』

『いずれ慣れますよ』

『慣れる程される予定なのか……………』

先程から感じる周囲からの視線。

彼等が何を思っているかは知らないが、正直放っておいて欲しい。

だが、そうは問屋が卸さない。

『お、シロウじゃん』

前方からポケットに片手を入れ、もう片方の手を振りながら歩いてくる妹紅の姿を確認する。

シロウは、確信した。

間違いなく、何かが起こる、と。

それも（私が）不幸な結果の。

『あ、ああ、妹紅か』

平静を装つとするが、多少表情が引きつる。

『お知り合いですか？』

早苗がそのままの体勢で質問する。

『うん。昨日うちに押しかけてきてね。その時に知った』

その質問は、シロウより先に妹紅が答えてしまった。

『押し……かけ……？』

早苗の腕を掴む力が強くなる。

俯いて表情は分からない。

『待て、それではまるで泥棒に入ったような言い分じゃないか』

『んじゃ訂正。私と一緒に住んでる慧音って奴に家に来るように言われて来た』

『なにかしたんですか？アーチャーさん』

『いや………単に子供と遊んだだけなのだがな』

こちらには何も非はないのだが、下手になにか言えば勘違いを増幅させる可能性がある。

だからと言って不自然にこの場を立ち去るのも難しい。

言葉を選んで、時間を稼ぐしか彼には良い逃げ道は浮かばなかった。心眼（真）のスキルはこんな状況にまで対応するほど万能ではないことを、何度彼は悔やんだことか。

『らしいけど。その時に慧音とも知り合ったらしいけど、どうにもそんな雰囲気を感じなかったんだよね』

その時、シロウと妹紅の視線が交差する。

シロウは、彼女の瞳の奥からとても邪悪なものを感じた。

妹紅は、彼の僅かに変化した表情から愉快的気分になった。

『へえ……。そのところの話、もう少し詳しく聞かせてくれませんか？』

先程よりも強力な締め付けが全身の感覚を一点に集中させる。前を見据えたときの早苗は、瞳に光が無かった。

シロウは鮮明な既視感を覚える。桜が、こんな表情をしていたのを幾度と無く見ていた。

桜と早苗が似ている、という感覚は間違っていなかったらしい。もしかしたら、早苗も――

『逃げないでくださいよ？』

恐ろしい程に冷たい声。

蜘蛛の糸に絡め取られたみたいに、もがけばもがく程支配力が強まる。そう直感が告げた。

『――はい』

素直に言う事を聞く以外、彼に道はなかった。

『成る程。そんなことが……………』

『うんうん。吃驚^{びっくり}したよ。起きたら慧音がシロウに抱きついてるんだもん』

あれから数分。

妹紅の尾鰭のついた事実を早苗に一寸の見落としなく説明していた。まるで最初から見ていたかのように。

面白可笑しく捏造された部分だけでも修正しようと奮闘したが、昨日の件もあつてか信用した風には感じなかった。

文字通り、万事休すである。

『シロウさん』

いつものアーチャーさんと言う呼び方に感じる穏やかな雰囲気は、一切削ぎ落とされている。

逆に感じたのは、絶対的強迫観念を想像させる程の恐怖。

それはもしかすると、未来視かと思わせるほど鮮明にこの後の結果が浮かび上がる。

『私があんなに心配していたのに、当の本人は女性の家に上がりこみ、更には二人も女性をはべらせてたんですね』

ここまで予想通りだと、逆に清々しい位の勘違い。

こうなる事は分かっていたが、止められない事も分かっていた。

もどかしい。

まるで身体の内側に蛆が這いずり回ってそれを駆除出来ない位に。

『誤解だ。確かに上がりこんだのは事実だが、はべらせるだなんてそんな真似なんか出来るものか』

『少し、頭冷やそうか……………』

彼女には最早、誰の言葉も届かない。

ただエミヤシロウと言う存在だけを、虚ろに捉えているだけ。

言葉と共に取り出された御幣^{ごへい}。相も変わらず彼の腕は拘束されている。

そうこうしている内に、星型に羅列されていく無数の光の弾。

辺りの人達は、ざわざわと動揺の音が聞こえる。対して妹紅は、楽しそうにその様子を傍観している。

『ま、待て！こんなところでそれを撃つたら村に被害が——』

『そんなの、知りません』

先程まで掴んでいた腕がいきなり突き飛ばす様に離され、反動でシロウの身体はよろめいてしまう。

その刹那、光の雨が彼を飲み込んだ。

私と諏訪子は、二人にバレない程度の距離を保ちつつ様子を観察し

ている。

端から見ればカップルに見えなくもないが、どちらかと言えば兄妹の方がしっくりきそうな雰囲気だ。

最近の早苗の行動は、アイツに依存してきている気がする。最初の時の初々しさも抜けて、遠慮なく接せる様になった。それだけなら、こんな行動に出ようとは思わなかった。

昨日の、シロウに対する早苗の豹変ぶり。

私は一度もあんな早苗を見る機会は無かった。

私が何かしらの理由で神社を空けたり酒を呑み散らかしたりしても、多少のお小言程度で済んでいた。

しかしあの時の早苗の張り上げた声。

感情の籠ったそれ。

私が、彼女と接して一度も感じたことのなかった気迫。

——私の知らない早苗が、そこにはいた。

今まで早苗が素顔を隠していたのかなんてのは、さしたる問題ではない。

何故、あいつなのか。

ぽつと出の彼が何故、素顔を晒すきっかけになったのか。

何故、早苗が産まれてからずっと近くに私達じゃないのか。

——それとも、ただの偶然なのか。

とてもそうは思えないが、そう考えるしかない。

そう、勝手に自己完結してしまいたい。

そうでもしないと、悪い方向ばかりに考えてしまう。

私達は、まだ理解し合えてなかったのか。

早苗は私達の事を良く思っていないのか。

——私達の中にあつた笑顔は、全て虚像だったのか。

ぶんぶん顔と顔を振り雑念を払う。

そんなことを考えても仕方がない。

それを確認する為に、今こうやって尾行をしているんだから。

『うつわゝ見てよ神奈子。あんな嬉しそうな顔して腕組んでるよ』

——対してコイツは私の気持ちを知らないで楽しそうにしている。
まあ、そのお陰で落ち着きは取り戻した。
釈然としないけど、心の中で感謝しておこう。

『うん、あんな早苗、久しぶりに見たよ』

嘘。

初めてなのに、どうしても言えなかった。
言いたくなかった。

『お、村に入つて行くよ』

あの二人ばかりに集中していて周囲の状況なんて全く目に入ってい
なかった。

いつの間にかそんな所まで移動していて、無駄な集中力に自分の事
ながら呆れた。

『どうする？まだ尾行する？』

『うゝん……、一応私達の顔を知っている人も居るだろうし、こ
のまま行くのは得策じゃないね』

こんな滑稽な事をしているが、一応神である。

早苗の頑張りで私達の名はそれなりに知られている筈。

もしそうなら私達は最も尾行に不向きな条件しか揃っていない。

『んじゃ神力使う？』

諏訪子の予想外の提案に、呆れて物が言えない。

『神力使って他人から認識されない様にすれば気兼ね無く尾行出来るしょ？』

はあ、と溜め息を吐く。

『あんたねえ、そんな事に神力使うとか……………』

『こう言ったのはケチケチせずに使わないと、結局溜めに溜まって持ち腐れるだけっしょ？』

諏訪子の言い分は分からなくは無理。

神力は文字通り、神の力。

その範疇は、信仰心が集まっている程広がる。

それ如何によつては、地殻変動や天候変化すらも可能とする。

実際、山の神である私は天候を操り人間や妖怪に住み良い環境を提供しているつもりだ。

別に信仰心の許容量に限界がある訳では無いが、そんな一気に使う様な奇跡を起こす事など無いだろうし、持て余す可能性はかなり高い。

『——仕方ないねえ。どうしてもって言うなら使いましょ』

まあ、ここまで来てサヨナラなんてのもつまらないし。
神にだって娯楽は必要だ。

——でも結果如何によつては私からすれば少し遠慮したい気分にはなるが。

そんな先のことを悩んでも意味がない。

なら、最後まで見届けるのが、首を突っ込んだ者の義務だろう。

『おっけー。んじゃ、ほいっと』

諏訪子の人差し指が私達をなぞる様に空を舞い、その後には僅かに光の線が確認できる。

『よし完了。じゃあ行こっか』

一秒程度でしか無いその動作を終え、諏訪子は何事も無かった様に早苗達が向かった方向へと歩き出す。

『因みに、どんな効果の使ったの？』

自分自身に効果が付与されていると、意外と分からないもので、不安になって聞いてみる。

『私達を認識した相手に、強制的に”私達は神社に居る”と言う嘘の認識を与え、そこから発生する矛盾によつてここに居る私達の存在を曖昧にさせて、五感全てで私達を知ることが出来なくなる仕組み』

『何ともまあ、難しい方法でやってるわね。別にもっと楽な方法が

あるでしょうに。霊体化するとかさ』

そう言つて、ハツとする。

『ほら、やっぱりケチくさい。別に悪い事ではないけど、見切りをつけれる様にしないと無駄に苦労するだけだよ?』

『ううっ』

何で説教されてるんだろっ、私。

『因みに早苗なんだけど』

早苗、と言つ言葉に私は過剰反応する。

『見失っちゃったよ』

『——へ?』

先程まであの二人がいた方向に目を向けると、影も形も無かった。

『い、急ぐよ!』

慌てて後を追おうとする。

『この近くだと………里が一番近いから、そこを当たろっ』

諏訪子もそう思っていた様で、間も無く頷いた。

里まで文字通り飛んで辿り着いた瞬間、爆音が響き渡った。

『ッ———！！』

余程の威力なのか、爆心地は見えないのに余波が伝わってくる。

『あの二人は大丈夫かな』

至って冷静に諏訪子が呟く。

『全く、里に何かあったら白沢と博麗が黙ってないってのに、何処のどいつがそんな無謀なことを……………』

爆心地に向かって移動する。

その辺りには野次馬らしき喧騒と輪が出来ていた。

『上から覗いた方が速そうだな』

浮いた身体を二人はそのまま上昇させる。

土煙が煙幕となり確認が取れない。

『あれって……………！！』

徐々に煙が晴れていくに連れて表わになっていく何者かの輪郭。そのカタチに見覚えがあった。

『早苗！』

その中心に居た早苗の眼前にある幾つもの孔。
先程まで一緒に居た筈のシロウの姿はない。

『どうしたのさこれ。それにシロウは——！』

私の声に反応し、こちらを振り向いた早苗の表情にゾクリとする。
目が笑っていないのに、口元は吊りあがる様に歪んでいる。
まただ。

また私の知らない早苗がいる。

『ああ、シロウさんですか？少しお仕置きをしたんですよ。でもおかしいなあ。さっきまで目の前にいたのに。もしかしたら、消滅しちゃったかな？』

クスクスと楽しそうに笑うその姿に、冷や汗がでる。

シロウのことだから、早苗の弾幕で死ぬなんて事は有り得ないだろう。

でも早苗は、そんなことにすら気づかない程、おかしくなっている。

異常。

前みたいな変化なら、まだ喜ばしかったのかもしれない。

でも、温和な彼女が親しい相手に危害を加えるなんて、余程のことが無い限り——。

『——待てよ？』

温和な早苗自体が仮初の姿だったら？

何かがきつかけとなってその皮が剥がれたのだとしたら？

『早苗』

諏訪子が早苗に語りかける。
それに振り返ろうとした瞬間、諏訪子が早苗の顔を覆うように片手を突き出す。

眩しい位の光がそこから放たれ、それが消え行くと早苗が力が抜けたみたいに身体を崩す。
それを私は慌てて受け止める。

『取り敢えず意識を失わせた。今の早苗には何を言っても恐らくまともな答えは返ってこないだろうし、落ち着かせた方がいい』

『う、うん』

至って冷静な諏訪子に少し違和感を感じるも、早苗のことが心配ですぐにその事を忘れる。

『因みに今の力が働いたことによってさっきの力の効力が失われるから、急いでここを離れたほうがいい』

『シロウはどうするのさ！』

『神奈子だって、アイツが死ぬなんて思っちゃいないんだろ？
ならほとぼりが冷めた所を見計らって戻ってくるさ』

『そう、だよな』

諏訪子の冷静さが、今は有り難い。
直接見てはいないから安心は出来ないが、アイツの実力が本物なら無事である筈。

私は不安を拭い切れないまま早苗を担いでそのまま守矢神社へと戻った。

異常変化（後書き）

おまけ

『あゝ、少しやりすぎたかなあ……………？』

先程の騒ぎによって出来た野次馬に押しのけられ、その光景を遠めに見守っている。

少しからかうだけのつもりが、隣の少女の過剰な反応と行動により予想外の結果を迎える。

『さゝて、私は悪くない悪くない、っと』

そそくさとその場から去ろうと踵を返す。

『妹紅』

その動きを阻むように対峙しているひとつの影。
その見知った影、私は一步後ずさる。

『け、慧音……………』

『あの騒ぎはなんだ？』

『あ、あれはシロウとその付き添いがいたんだけど、その付き添いが暴走して弾幕を撃ったんだよ』

『何故だ？』

『そ、そんなの知るわけ無いじゃん』

『ふむ、変だな。あの輪の中から妹紅が出てくるのを見たのに、その騒ぎの理由を知らないのは不自然だな』

——もしかしてとは思うが、全て見ていたのにこんな不毛な質問をしているのではないか？
さつきから発言や仕草が演技っぽいし。

『——慧音？』

『お仕置きだな、妹紅』

やっぱりいいいいいいいい！！

『騒ぎを起こしたのが彼女だとしても、焚きつけたのはお前だからな。』

ああもちろん守矢の巫女も叱るから安心しろ』

鼻息が荒く、顔が高潮している慧音に、ひとしきりの恐怖を感じた。

『そついう問題じゃないいいいいいい！！』

ああ、父さん、母さん、妹紅はお嫁にいけない身体になりそうです。
ずるずると首根っこを掴まれ抵抗虚しく暗がり（昼だけど）に消えていった。

二種の宵闇（前書き）

投稿間隔がまばらな男、スパイダーマツ！

二種の宵闇

爆音に引き寄せられる野次馬。

その中心に位置する原因。

その原因の発端となつた私が、鷹の目を用いて遠くからその光景を眺めている。

『しかし……参つたな』

先程のは、本当に危なかつた。

咄嗟に脚に強化をかけ、全力で地面を蹴つた瞬間その場が粉々に破壊されている光景が広がっている様は、まるでひとつの自分の可能性^{みらい}を思わせた。

早苗はどうやら神奈子に回収された様で、ひとまず安心する。

だが、全てが終わつた訳では無い。

今私が戻れば先程の再来なんて事も有り得る。

そんな修羅の道を通りたいとは、少なくとも私は思わない。

私自身がどうなるから、と言うより早苗が不安定になるのは見えない。

『やれやれ、いきなり宿無しになるとはな』

暫くは彼女から離れた方がいいかもしれない。

決して彼女を嫌いになつた訳では無く、それが最善だと判断したからだ。

女性関係の揉め事に関しては、嫌と言う程理解がある。

神奈子や諏訪子がどうにかしてくれる事を祈るしかない。

決して逃げてる訳では無いぞ？

『さて、どうしたものかな』

食事を摂らなくても良い身体とはいえ、久しぶりにその感覚を覚えてしまうと忘れられなくなるものだ。

自然と小腹が空く。

何とも中途半端な身体よ。

更には宿無しになった事にも問題がある。

まだ幻想郷と言う世界を全く理解していない自分にとって、野宿なんて行動は身を滅ぼすだけ。食事はどうとでもなるが、こっちに関しては厳しいものがある。

『考えていても始まらないか……………』

未だ知らない道を歩き出す。

咄嗟に飛び出した為ここがどの方位を向いているかも分からない。木に昇って確認するのもいいだろうが、今は下手に目立ちたくない。手遅れな気がしなくもないが。

出来るだけ里から離れる様に歩き出す。

喧騒が薄れていくに連れて身が引き締まる。

ここからは未知の世界。

何が起こつても自身の力で解決するしかない、孤独な空間。

『誰かを頼る、なんて思考が出る時点で私も変わったものだな』

孤独で戦場を駆け、それを是とした私が、心細さを感じている。

これは、弱さなのか——？

ガサリ、と草を掻き分ける音に咄嗟に身構える。

その先から現れたのは、黄色の髪に少し綻びのある赤いリボン、模様が一切無い黒地のベストとスカートに相反する無地のＴシャツの少女が腹部を押さえてふらふらとこちらへと近づいて来る姿。どうやら私には気がついていない様だ。

『おい、大丈夫か？』

怪我でもしているのか、不安定な動きを支えるべく少女の身体に触れる。

それに反応してか、うつ向いていた顔を、こちらへと向ける。

虚ろな瞳は、真紅に染まっており、幼いながらも誰かを虜に出来る妖艶さを出している。この子は間違いなく将来美人になるだろう。

『…………お、——』

搾り出した様な声が耳に届く。

その精一杯の言葉に集中する様に彼女の顔前に近づく。

『おなか、すいた……………』

その言葉を最後に、少女の身体は体重を預ける形で崩れ落ちた。

『……………空腹なだけか』

怪我ではない事に安心しつつ、自身の持ち物を確認。
ポケットは、その用途を果たしていなかった。

『——これでは駄目人間ではないか』

今思えば、私の置かれている状況はかなりヒモに近い。
働いていないし女の家で暮らしているその様は、典型的なそれだ。

『働き手でも探しておかないと、流石に不味いか』

とは言ったもののアテは無い。

里は早苗と出会う可能性があるので選択肢には入らない。
暫くは、職探しの旅になりそうだ。

『さて、と』

支えていた少女を近くの樹にもたれかけると、私は弓を出し、魔力も一切無い矢を投影する。獲物を捕らえて、この子に何か食べさせないといけない。

ぐるりと辺りを見回す。

お逃え向きに、猪が無防備に歩いているのを発見。

——猪なぞまともに見たのはこれが初めてかもしれない。

流石幻想郷、と適当に完結する。

標的に向かって弓を引く。

狙うは当然、急所。

出来るだけ苦しみを与えない為に、その一点に集中が深まる。

『許してくれ、とは言わない。恨むなら恨め』

風を切る音と共に音速が走る。

人間には見えない程の距離にいた標的は、一秒を以てその命を絶つ

た。

少女をおぶってその場へと向かう。

こめかみを貫かれた猪は、もの言わぬ肉となっている。

私はその皮を剥ぎ取り、適当に集めた木の枝と火打ち石を用意する。
こんなアウトドアみたいな事をするのは久しぶりだ。

空腹に飢えた難民を救う手段として自然と覚えていったからな。
やはり、こう言った知識は無駄にはならない。

肉を等分して投影した鉄の串に刺し、火で炙る。

食欲をそそる匂いが立ち込めると、自分も空腹な事を思い出す。

——食事は心の贅肉だと言っていた自分が懐かしく感じる。
クツ、と一人笑いを漏らす。

『ん、んう——』

『起きたか』

『……………いい、においがする』

微睡んだ目で辺りを見回していた少女だが、ひとつの物に視界を奪われる。

『お肉だー！』

先程までの力のなさからは想像もつかない機敏な動きで焚火に近づく。

『ほら、こっちは熱いからこれを食べるといい』

少女の為に多少冷ました方の串を渡す。

『食べていいのかー？』

いきなり食べたりしない所に躰の良さが伺える。

でも、それ以前にこの子に尻尾があったら間違はなく振り続けてるだろうと思える程に催促をしているその瞳に敵う者など恐らくないだろう。

『勿論。これは君の為に焼いてる様なものだからな』

『ありがとうー！』

とても元気な声で返事をした少女を見て、嬉しくなった。

正直、驚きを隠せないでいる。

猪一匹丸々焼いたのは少し量が多かったかもしれないと多少後悔していたが、それは杞憂に過ぎなかった。

『こちそーさまー』

丁寧に両手を合わせて礼をする少女の前にあった肉は、影も形もない。

肉の八割を完食してしまった少女を見て、どうすればこんな小さな

身体にそんなに入るのかと疑問に感じる。

セイバーや藤ねえで見馴れている光景とはいえ、それはあくまで成長が安定している身体だからまだ妥協出来なくはないが、こんな小さな頃からこんな暴食とは……将来はどうなるのやら。常識を覆す事ばかり起こっているな、私の身の回りでは。

『君は何故そんな倒れるまで何も食べなかったんだ？』

こんな小さな子供が、こんな森の中で空腹になるまで何も食べていないとなると、迷子なのだろうか。

里の子ならば騒ぎになっていてもおかしくは無いが、その気配は感じなかった。

『んとね、夜にならないと食べちゃ駄目って言われてるの』

『食事は三食バランス良く摂らないと免疫力や成長の阻害になるんだぞ。誰に言われたのかは知らないが、きちんと食べた方がいい』

『そーなのかー』

本当に分かっているのか、楽しそうに両手を横水平にし歩き回っている。

『どれ、私が親御さんの所へ連れてってあげよう。
君の名前は？』

『ルーミアだよー』

ルーミアと名乗った少女がこちらへ向かって来る。

『あと、ルーミアには親はいないよー』

『——、え?』

屈託の無い笑みでそんな事を言うものだから、間抜けな声が漏れてしまう。

『そ、それは済まない。軽率だった』

『気にしてないのだー』

気にしてない、とは言うがこちらがどうしても気にしてしまう。

『で、では何処に住んでいるか漠然とでもいいから分かるかい?』

『じじー』

ぐーりとその場で回転するルーミア。

『それは、どういう意味だ?』

『この森に住んでるのだー』

『——嘘だろ?』

こんな子供が、いつ襲われるかも分からない様な深い森の中で暮らしていると言う事実が、私の胸を貫く。

『家とかは、あるのか?』

『無いよー』

更なる言葉が私を苦しませる。

何故？

何故こんなにも笑顔でいられる？

他の生活を知らないから？

しかし里からの距離は決して遠くはない。

あの活気に惹かれることだって一回はあっただろうに。

さも当たり前のように楽しそうな笑顔を浮かべる少女は、何を思っているのだろう。

『…………里に行こう。私が慧音に聞いてどうにか暮らせる場所を提供してもらってから、一緒に行こう』

少女の小さな手を握り、問答無用で引き返す。

自分の置かれている状況など、すっかり記憶になかった。

ただ、目の前の少女に救いを与えられるなら、と必死だった。

『駄目』

しかし少女はその手を剥がす。

そこまで強く握っていなかったとはいえ、この位の少女が出せる腕力とは思えない力だった。

『そんなことしたら、霊夢に怒られる』

霊夢、とは巫女の博麗霊夢のことだろうか。

『私はあそこにいちゃ駄目なんだよ』

『何故だ？そんな事はない。誰にだって最低限度の衣食住を有する権利は持っているんだ。』

君だけがその対象外なんて事は有り得ないんだ』

『それは、法律って言うんだよね？人間を律する為に制定された力のある文章。』

——でも、そんなの私には関係ない』

だって、と私が介入する隙間も与えず続ける。

『ルーミアは、妖怪だもん』

空気が変化する錯覚を覚えた。

先程の笑みは今は失せ、感情の読めない表情が支配している。

『妖、怪？』

『そう、妖怪。』

私が夜しか食べちゃいけないって言われていたのは、人間の事。夜に出会う人間は、自業自得として私の糧となるの。

それが、摂理』

少女と対峙している筈なのに、もっと大きな何かと対峙しているものと錯覚してしまう。

それほどまでに、彼女の雰囲気は初見の頃とかけ離れていた。

『そんな私が人間が沢山いる場所なんかで生きていけると思う？貴方にだって判る筈よ』

『それ、は——』

このプレッシャーはなんだ。

そこにいるだけで相手を押し潰しかねない程の何かが、私に向けられている。

『——済まない。一度ならず二度までも』

『……貴方は優しいね。』

私が妖怪だって分かってても逃げようとせず、私の話を真摯に聞いてくれて、悩んでくれてる』

そんなことはない。

また私は傷つけている。

良かれと思った結果がこのザマだ。

『それに免じて貴方は食べないであげる』

そう言つてルーミアは踵を返す。

『待つ、——!!』

静止の言葉を放つ前に、彼女の身体は不自然な闇に消えていった。

私は、その光景を見守るしか出来なかった。

一体、彼女は何者なのか。

見た目相応の性格であるかと思えば、人格が入れ替わったみたいに存在感が強まった。

どっちが本当のルーミアなのだろうか。

それを確かめるには、圧倒的に彼女との時間が足りない。

優しいね、と言われた時に見えたあの憂いの表情。

あれは、何を意味しているのか。

私に突き付けられた理想を想像し、叶わぬと理解しているから？

それとも、必死になつていた熱弁していた私に対して、自身は叶わぬ理想だと理解しているから憐れんでいるのか。

『どちらにせよ、今の私には彼女は救えない』

他人の心を理解出来ない私には、誰も救えやしない。

ならば、救える様になるまで努力するだけ。

初心に帰って視点をクリアにする事で世界が変わるかもしれない。

元より私には才能なんてものは存在しない。

ただ救う、というだけの最短ルートを走り続けても凡人には所詮茨の道でしかない。

ならば、ひとつずつ確実にこなしていけばいい。

一步一步が辛くとも、それが最も最短ルートになるのだ。

その為にまずは、自身の身の回りの事をどうにかしなくてはいい。

『——働き口を探さねば』

そうして話はループする。

二種の宵闇（後書き）

そーなのかーとわはーで有名なルーミアの紹介death！

ルーミア

種族：妖怪

能力：闇を操る程度の能力

二つ名：宵闇の妖怪

見た目：殆どは作中で表現したが、彼女のリボンに関しての説明はまだ。

リボンは御札で、リボンは取りたくてもルーミア本人では触れることすら出来ない。

これを取る事で彼女自身の封印が解除される（封印解除後の説明は機会があれば）。

性格：何を考えてるか良くわからないキャラの一人。

明るい性格で、いつも笑っている。

そーなのかー、が口癖らしい（二次創作的な意味で）。わはーは作中では言っていないが、某ギャルゲのキャラと被るせいかそのキャラの口癖が彼女に憑いてしまった。

可愛いからいいけど（二人とも）。

Rumiaという地名があり、スペイン語で反芻、転じて沈思、黙考、繰り返しの考えを指す。

よく食べるキャラ。双壁を成す一人として、西行寺幽々子と言うキャラもいる。

ルーミア自身説明することは少ないのだが、彼女のリボンのお陰が二次創作的な思考だと恐らく一番ネタが尽きないのではないかと。色んな妄想によって顕現したルーミアは数知れず。これも愛ゆえにか。

人形少女（前書き）

更新が遅れた理由は、携帯を修理していたから。え？パソコンでやれって？いやあくまいったな。パソコンを開くとゲームばかりやってしまつてうわなにをするやめ（ry

人形少女

お久しぶりです。毎度お馴染み射命丸です。

さて、あれから私がどうなったかと言うと、目覚めた時には永遠亭の診察台の上にいました。

その永遠亭に住まう幻想郷いちの天才薬師の八意永琳氏曰く、私はその場所にいきなり現れていたとか。

それで八雲紫の仕業だろうと踏んでいたのでしょうか。特に詮索はしてきませんでした。

彼女もあの時ボロボロだったにも関わらずこんな事をしてくれたと言っこともあり、私は彼女が住まう土地、マヨヒガへと向かいました。

勿論お礼をする為です。

そして今、マヨヒガの中にある八雲家の前に到着しました。

『ごめんください』

横引き戸にノックをしてすぐに、それは開かれました。

しかしそこにいたのは八雲紫本人ではなく、彼女が使役する九尾の狐の式である八雲藍氏でした。

『おや、あんたが正面堂々と来るなんて珍しいな』

おや失敬ですね。まるで私がいつもこそそそ侵入してるみたいない分ですな。

『八雲紫さんに会いたいですけど居ますか?』

彼女の答えは無視の方向で話を進めましょう。

『紫様なら——』

『ここよ』

その声が聞こえた瞬間、首の横から二本の手が生え、巻きついてきた。

『——紫さんですね?』

『正解』

と言うか、こんな奇抜な登場の仕方をするのは彼女以外殆どいませんし。

藍さんは呆れた表情をしています。彼女の悪戯好きには手を焼いているようで。

どっちが使役されてるのやら。

『私に用事かしら?』

『ええ。この前の事で少しお話が』

『この前………ああ、あの時』

どうやら思い出したようで。

痴呆が進んでるんでしょうか。

『立ち話もなんだし上がって頂戴。藍、お茶の準備を』

『はい』

屋敷の中に消えていく藍さんに続いて私達も入りました。

因みに紫さんはスキマで先に移動してます。本当に便利極まりないですね。

紫さんの部屋へ到着するとほぼ同時に藍さんがお茶菓子と緑茶を盆に乗せて登場。

因みに既に紫さんは部屋で寝転がっていました。

主がこれなのによくもまあ愚痴も言わずに働いて。

鏡ですね、全く。

『さて、礼の話でしたっけ』

寝転がらせていた身体を起き上がらせ、こちらへ向かい合う。

先程までの緩んだ表情はない。

『ええ。事の発端と経過が何であれ貴女に助けてもらったのは事実ですし』

取材の妨害、それによる武力介入。考えればこちらが礼を言う筋合いなんてまるで存在しないのだが、こう言った所で得点を稼いでおけば後々便利な可能性もありますし。物事は常にポジティブに考えなきゃ。

『そう。——なら、私のお願いを聞いてくれないかしら？』

妖しく笑うその表情に不安を覚える。

『厄介事でも頼むつもりで?』

『いいえ、今回は至極簡単なこと。この通りに動けばいいの』

スツ、と白紙の紙がちゃぶ台を這って私の目の前まで持つてこられる。

しかし白紙と思った紙は近づくに連れてうつすらと何かが書かれてるのが分かる。

それを受け取り、目を凝らし内容を確認する。

ここまで他の人物にこの内容を知られたくない理由が、私にはわかりませんでした。

『お願い出来るかしら』

『ええ。この程度の事なら実益も兼ねれますし喜んで』

『そう。じゃあ頼んだわよ』

その後は他愛のない会話をするだけで、特に何も変わった事は起きませんでした、まる。

相変わらずの森の中、私は闇雲に代わり映えしない道を歩いている。辺りは最早漆黒に包まれ、視界も多少濁る真夜中。

恐らく、妖怪もこのくらいの時間が一番活発になる時刻なのだろう。

そう考えると、今の私はかなり危険な状況に陥っていると言っても過言ではない。

戻ると言う選択肢が無い今、私は愚直に歩き続け辺りを見回すことに専念する。

せめて何かしら身を隠せる場所を探さなくてはならない。

出来れば家位の規模のものがいい。

だが、そんな都合のいい展開なぞ――

『……………あるものだな』

豪邸を持つ上流階級の持つ別荘程の規模の屋敷が、私の視界に収まる。

窓から漏れる光の存在から、人が居ることは明白だろう。

屋敷の玄関まで近づく。

大きな屋敷ではあるが、それ特有の喧騒は聞こえない。

就寝にしては早いだろうし、何より電気をつけて寝る癖のある人物なんて滅多にいないだろう。

そんな特殊な人物ではない事を祈りつつ、ドアをノックする。

『はい、どちら様？』

間も無く女性の声が聞こえる。

――最近女性としか会話及び出会いが無い気がする。男が恋しい、なんて思うとは思わなかったぞ。

ガチャ、と音を立てて現れたのは、首下程の長さの金髪にカチューシャをつけ、外側をなぞる様に細い青の線が描かれているケープを羽織り、服とスカートも青色で構成されている少女だった。

その風貌は、西洋人形を思わせる程に整っている。

だが、人形には真似出来ない生気の宿った蒼の瞳が彼女が生きている事を認識させる。

恐らく寝ている彼女の姿は、人形と相違無いのだろう。

『済まないが、君はこの主かね？』

『ええそうよ。』

もしかして、泊めてもらいたいのかしら』

『確かにそうだが……良く分かったな』

『だって、ここにはこの森で迷子になった人間が良く懇願してくるから泊めてあげてるの。』

——でも貴方、そこまで困った風には見えないわね』

彼女の言う通り、極端に困っている訳ではないが、それはあくまでまだ何にも遭遇してないからであって。

『顔に出ない性分だね。それでも心底困っていたりする』

『そう……。まあいいわ、上がって頂戴』

不審な目で見られるも、承諾してくれた。

彼女の後に続き、館にお邪魔する。

外装通り作法も西洋のものらしく、靴は脱がない様だ。

リビングらしき所へ到着する。

そこには、所狭しに人形が大量に飾られていた。

西洋だけでは無く、日本人形もある。

『人形が好きなのか？』

『ええ。大好きであると同時に作る趣味もあるわ』

『ほう。それは何とも可愛らしい趣味だな』

『…………馬鹿にしないかしら』

『そんな事はない。こう言った趣味は感受性を豊かにする。それに、素人目からでも君が人形を大事にしているのは分かる。君がどれほどまでこの人形達を愛しているかが分かるよ』

事実部屋一杯、大量にあるにも関わらず人形にはひとつも埃が被っておらず、汚れも無い。

本当に好きで無ければ、こんな丹念には出来やしない。

『…………そう。ありがとう』

感謝をする彼女はこちらを向いてはおらず、箱らしき物を漁っていた。

『何をしているんだ？』

『人形作る為の材料をね。暇なら見る？』

『いいのか？』

『別に減るものじゃないしね』

彼女の隣まで移動し、中身を見てみる。

……やはり素人には分からないな。

服を作る為の布とから分かるが、シリコンみたいなものの用途は如何なるものやら。

『これは人形自身を構成する部分、つまり身体の部品よ』

視線から察したのか、説明を始める。

『特にこれは魔法で構成された特殊なもので、本当の生き物みたいに身体を動かせる様になる代物よ。まあ生き物の様に、だから腕一周とか首一回転みたいな事は出来ないんだけど』

『これが魔法、か』

何とも不思議な感じだ。

こちらの世界の魔法は、些か魔術に近い気がする。

とは言ってもこれしか魔法を見ていないから断言は出来ないが。

『魔法の道具を使うって事は、君は魔法使いなのか？』

そう言うと、何やらキョトンとした顔をする。

『……ここに魔法を使えないのに住んでるとか、どんな変人よ』

『そうなのか？』

森に住むと言うのは確かに不便な部分もあるだろうが、変人呼ばわりされる程では無いのではないか？

『——因みにここが何処だか分かってる?』

『森だろ?』

『何の、森?』

『——??』

彼女の言ってる意味が理解出来ない。

何の、と言われても森は森ではないのか——

『あ』

間抜けな声が漏れる。

慧音の言葉が脳内をよぎる。

『……その様子じゃ、やっと気付いたみたいね』

呆れた様に溜め息を吐く少女。

それもそうだろう。

もう少し周りに気を配ればここが何処だか簡単に分かる特徴をしているのに。

『魔法の森、か』

『正解』

窓から外を眺める。

中から漏れた光が闇に侵入して、空中に浮いている物質が何かを容

易に理解させる。

『それにしてもこんなに孢子が大量に浮いてるのに良く気がつかなかったものね』

多少馬鹿にした口調でこちらに問いかける。

『返す言葉もないな』

この程度の孢子なら身体に影響は起こらないだろうが、違和感ぐらい覚えるものだろうに。

『でも孢子が身体に影響してないってのなら……。貴方、魔法使い？』

『いや、私は魔術使いだ』

『魔術、使い？そんな聞いた事も無いわよ』

『それもそうだろう。これは外の世界の力だからな』

『外の、世界の？』

その言葉に彼女は何か強く反応する。

『貴方、外人だったのね』

『まあ、そういう事になるな』

外人人とは珍しいものなのか、開口一番で判断は今の所されていな

い。

判断出来る方が凄いい気はするが。

『——じゃあさ、ここに泊める代わりにその魔術ってのがどんなものか教えてくれるかしら？』

『それは構わないが、君の魔法とやらも拝見したいな』

『ええ、構わないわよ』

『成程ね。しかし、聞けば聞くほど不思議な感じがするわね。その魔術っての』

『幻想郷と外では科学の普及率が大きいから、そう思うだけだろう。文明の違い故に違和感を覚えるのは仕方の無い事だろう』

こちらにはコンロで火を使用する文明の力は無く、魔法の素材の調合等は大釜を使用するらしい。

魔法使いらしいと言えらしい。

寧ろ機械の力に頼った時点で魔法や魔術はその意味を無くすだろうから、彼女自身羨ましが事ななかった。

『でも貴方が使う魔術——投影、だっけ？それは間違いなくその範疇に収まるものでは無いわね。貴方が使う場合だけ、でしょうけど』

『それは単に私が異端なだけに過ぎない。まあ私はその恩恵にあやかっているのだが』

『貴方の場合得手不得手の問題ではなくて本質が”剣”だから、別に魔術以外でも剣が関係するなら貴方は最大限に力を発揮出来る。ただ、運命が貴方を魔術の世界に引き込んだに過ぎないだけで』

運命、か。

私は自分の意思で進んできた道だと思っていたが、こんな些細な分かれ道も運命に左右されていたのだろうか。
衛宮切嗣に出会った事。

第四次聖杯戦争の終焉と共に訪れた地獄の荒野の中で生き耐えた罪も無い人々。その中で、唯一生き残った自分。

今の私が存在するのはそんな犠牲の下に成り立っている。

でもそれすら、何処の誰かも知らない——神と呼ばれる存在——
—奴の気紛れで起こった結果だと言っのなら。

そんな神を私は決して、好きにはなれないだろう。

神奈子や諏訪子は神としてではなく、生物の一人として接しているから何も問題は無いが、もし彼女達が私の許せない決断をする様なら、私は——

私は、どうすればいいんだ？

『——ちよつと、聞いているの？』

気がつくと、目の前にいる彼女は少々怒った表情でこちらを睨んでいた。

最近どうも、深く考えすぎて周りが見えなくなっている。
少し、自重しなければ。

『すまない、聞いていなかった』

『はあ……、だと思ったけど。もう一回言うわね。貴方の魔術でこの子達の自律化は出来ないかしら』

いつの間にやらテーブルの上に置かれていた二体の人形。

ひとつは赤のリボンに白と青のドレスを纏った少女の人形。

もうひとつは紅色一色のドレスとリボンに薄いピンクの羽を生やした少女の人形。

どちらも共通して金髪でロングヘア。姉妹みたいなものなのだろうか。

『この赤いリボンの子は上海、んでこっちは蓬莱』

その言葉に反応するように目の前の人形が動き出し、会釈したり手を振ったりしてきた。

『驚いた？これが私の魔法。魔法の系で彼女達を操ってるの』

成程、彼女は人形師か。

人形師に関しては詳しくはないが、魔術師にとっての魔法の使い手のひとりの姉に、人形師がいると言う情報を聞いたことがある。

しかしそれしか情報がない為、こちらの魔法とどれほどの差異があるかは分からない。

恐らくはそこまで違いはないのだろうか。

『ああ。人形師を拝見するのは初めてだよ。こんな細かい動き、並

みの技術ではあるまい』

『そうね。ここらじゃ私以外には出来ないでしょうね』

自慢げに話す姿は、先程まで感じた素っ気なさを感じさせなかった。

『さて、本題。この子達の自律化の話なんだけど。

この子達はこうやって私が操ってはいるけど、魂がきちんと存在してるの。想いを込めたりしながら作ったりすることでその想いに惹かれて器である人形に宿ったり、付喪神——東洋の民間信仰における観念で、年月の経った依り代に神や靈魂などが宿ったものの事なんだけど、この子達にはそれがあるの。

だから、彼女達が動くこと自体は不可能ではないの。

でも、完全に自律させるにはこの身体じゃ不十分なの。依り代の形が変わると付喪神だろうと惹かれた魂だろうと乖離してしまうから、改造なんて真似は出来ない訳』

『西洋の人形でも付喪神と言う観念は成立するのか？』

『ええ、要は概念だから。それにここじゃ西洋も東洋もへったくれもないしね』

『身も蓋もないな』

『事実ですもの』

便利極まりないな、この世界。

『話が脱線したけど、さっきの挨拶の動きは私が操ったんじゃないの。あくまで彼女達が動ける環境を造り出したに過ぎないの。だから

らさっきの動きはこの子達の意味って訳」

『ソウダヨ』

『スゴイデシヨ』

再び二つの人形が動いたかと思えば、今度は喋り始めた。

そこは流石に多少機械的な感じではあったが、全く気にならない程度の差だ。

ここまで来ると、やはり魔術とは違うことを思い知らされる。

『で、私にどうしろと言うんだ？』

『貴方の強化魔術を、この子達にやってみてもらえないかしら』

『———どう言うことだ？』

『さっきも言ったけど、改造を施すとそれと同時に魂が乖離する可能性があるから無闇に手出しはできないんだけど、貴方の強化魔術なら物理的な改造を施さないで内面だけ変化出来るかもしれないって事よ』

『……………そんな都合の良い結果になるだろうか。』

第一、私は強化をそんな風に使ったことは無い。

武器の強化、身体強化がいい所。

人間の身体と人形の身体じゃ構造が似て非なる為、逆にどう弄ればいいかが分からない。

『———失敗する可能性は、考えないのか？』

『大丈夫。精一杯のフォローはするわ。私にとってもこの子達は特別だから、絶対に壊させたりはしない。それに一方的に頼んでおいで失敗したことを咎めるなんてお門違いじゃない？』

彼女の瞳から伺える真剣で力強い意思。

まるでそれは、我が子の生死を賭けた手術に立ち会う母親みたいな瞳。

母性溢れるものを感じさせた。

『——そうか』

ならば最早何も言うまい。

ここまで本気の意味を見せられたのだ。ここで断るなんて選択は出来ない。

『いくぞ』

私の言葉に頷くと、構えを始める人形師の少女。

それを開始の合図とし、上海と呼ばれる人形を持ち上げ、想像する。

脳内に製図された上海の構造。

彼女が求めていたのは、この人形の自動人形化。

限りなく生物に近づけるなら、それ相応の対価がいる。

その対価とはつまり、魔力。

人間の構造に関しては理解しているつもりなので、肉付け自体には問題はないだろう。

だが、これは限りなく魔法に近い異形。

人形が生物と化するなんてのは、常識では在り得ない。いとも容易く世界に修正されてしまう。

だが、ここは幻想郷。常識から逸脱した世界。在り得ない事が蔓延する空間。

そんな世界の修正ならば、或いは――！！

正直、驚いている。

彼の言う魔術の性能が知りたくてこんなお願いしたけど、とんでもないものだ。

完全自律とはいかなかったが、予め魔力を込めることで稼動出来るようになっていた。

それも二体とも。

そんな莫迦げた事を成し遂げた存在は、今私のベッドに横たわっている。

魔力の使いすぎでブツ倒れたようだ。

私が目指していた究極の一を、倒れるという代償だけでやってしまった常識はずれの男。

自身が倒れるまで、さつき出会ったばかりの魔法使いの願いを叶えてくれた彼。

最初はいつも通り、一晚泊めるだけで次の日には立ち去る、と言う変わらない毎日が来ると思っていた。

でも、世界は狂った。

僅かながらの確率で起こった偶然の中に孕んだ奇跡。

広大な台地から四葉のクローバーを見つけるくらいの確率に過ぎない今の状況。

彼と言う存在が、私の世界を狂わせた。

『……………ありがとう』

それに呼応するように、彼の表情が緩んだ気がした。

まどろみの中から意識を戻す。

視界には天井一杯の白と、それに反射する太陽の光が、今の時刻を予想させる。

身体を持ち上げると、ベッドの上に昨日の人形、上海と蓬萊がまるで寝ているように横たわっているのを発見する。
二人をそっと持ち上げどかし、次に自身の身体をベッドから抜け出させる。

『あら、起きたのね。起きたりして大丈夫？』

それと同時に部屋に現れた、昨日の人形師の少女。
その手にはトレイがあり、お粥らしきものが乗せてある。

『ああ。それにしても昨日の記憶が曖昧なのだが』

『結果的には、失敗ね』

『そうか……………』

やはり、私程度の魔術と魔力では叶わぬ夢だったか。

『でも！成果はあつたわよ！』

こちらの落ち込みように気づいたのか、慌てた様子で取り繕つてきた。

『完全自律には至らなかったけど、魔力を込めておくことで自律人形に限りなく近い人形になったわ』

『そ、そうか』

成功ではないが、決してマイナスに働いたわけではないようだ。彼女があればどこまでに大事にしている人形を壊したなんて事になったら、冗談では済まされない。

『んで、そのせいで貴方は倒れたの。蓬莱も全く同じ性能にして、ね』

『そ、それはすまない。ベットにまで運んで、重かつただろうに』

『確かに重かつたけど、上海と蓬莱が手伝ってくれたの。——まるで恩を返すように、ね』

先程の人形を再び見つめる。

可愛らしい寝顔で二人抱き合って寝ている。

私のやったことは、間違いではなかったようだ。

『それで倒れたんだし、ゆっくりしていきなさいよ。あんな無茶やっただけなら身体への負担はかなりのものでしょう？』

『いや、私は一刻も早くやらないといけなことがあってね。その粥を貰ったら失礼させてもらうよ』

手渡された粥からは、米特有の匂いと薬味の匂いが漂っている。病人だろうと、これは食欲をそそるものがあるだろう。

『やること?』

『ああ。実は私は職を探していてね。一刻も早く稼ぎを得ないと申し訳が立たないのだよ』

『ふん。世間一般で言うところのニートかしら』

『ぐっ』

『でもまあ、職探ししてるなら違うかもしれないけど。——つと、そくだ。職といえばなんだけど、今日の朝天狗がこんなビラを配っていたわよ』

突きつけられた紙には、ありとあらゆる職及びバイトらしきものが載っていた。

『執事としての雇用、剣術指南役、薬師の手伝い、死神のパートナー、取材の手伝い、家庭教師、ペットの育成……。とんでもなく多いな』

『しかもその雇用先がどこも癖のある場所ばかりなのよ。そして職を探すあなたを待っていたように配られたこのビラ……。どうにも怪しいのよね』

『心配してくれるのは有難いが、虎穴に入らずんば虎子を得ず。今の私には危険も承知で潜り込む価値があるものだよ』

『べつ、別に心配なんかしてないわよ！ただ、私がこれを見せたせいで向かった先で貴方何かあったら目覚めが悪いってだけなんだから！』

『世間一般では、それを心配してくれる、というのではないのか？』

『うつ』

彼女みたいな反応をする相手には心得があるからな。受け流すのも揚げ足取るのも容易い。

『とにかく！行くなら最新の注意を払いなさい！』

ビラを無理やり受け取られ、そのままどこかへ行ってしまった。少しからかいすぎた様だな。

改めてビラを見る。

慧音から教えてもらった紅魔館等も雇用先にはあった。

確かに危険かもしれないが、あくまで仕事で行くのだから大丈夫だとは思うが……

さて、どこへ行こうかな？

人形少女（後書き）

はい、今からアンケートを取りたいと思います。

内容は、小説内で記述しましたが、シロウのこれからの運命^{ルート}です。

記述方法は、1から3（もっとあるならそれでも構いません）まで今から書く内容の行き先で行ってもらいたい場所を書いてください。なお、数字は1が最優先で、数字が小さくなるほどに優先度は下がります。

アンケートに答えてくれた総合的な順位で決めたいと思います。アンケート集計の為執筆には時間がかかると思いますがご了承下さい。

アンケートは感想で書いてください。

紅魔館で執事として働く

白玉楼で幽々子の剣術指南（という名目の妖夢の剣術指南）

永遠亭で永琳の助手その他もろもろ

普段仕事をサボる小町のお目付け役

射命丸の取材の手伝い

天子の家庭教師（と言う名のお目付け役）

お隣とお空のご主人様

アンケートの方ご協力お願い致します。

てかこの後書きって読まれてるのだろうか……

決断（前書き）

はい、また更新が遅いですね。パソコンで後書き等を書くのですが、そのパソコンがおじゃんになったので直るまで停滞してました。

決断

私はマヨヒガから立ち去った後すぐに帰宅し、執筆を開始しました。その内容は、チラシ作成。それも就職活動の。

紫さんが渡したリストの中には古今東西の就職口が書いてあり、その中には新聞記者——つまり私達天狗の仕事までが記載されており少々驚きはしました。

しかし私達の仕事はともかくとして、他の雇用先には癖を超越した所ばかりで、こんな所に就職しようなんて物好きはそうそういないでしょう。

そしてもうひとつ。私がこのチラシを配る訳なのですが、紫さんはその場所を指定しました。

本来この様なものはありとあらゆる存在の目に留まるべくして作られるもの。

それを限定的な場所にしか落とさない、と言うのも不自然過ぎます。

そしてその配布先は……魔法の森、アリス・マーガトロイド亭付近と言う狭い範囲。

何を目的としてそんな事をするかは分からない。

それでも私は仕事を続けるだけです。

………なんだか紫さんの悪巧みに協力してる様な気分になります。悪巧みなのかは分かりませんが極秘裏に行われる時点で怪しいですし。

走らせていたペンを置き、椅子に寄りかかる形で身体を伸ばす。

時刻は深夜2時。

明日の明朝までにこれを配らないといけないらしいので、書き終わっても大して休む暇ありません。

まあ仕事上慣れてはいますが。

『さて、もうひと頑張りいきますか』

だらけさせていた身体を再び机に向け、ペンを取り執筆を再開した。

手に持ったペンをベッドに置き、お粥を食べる事に専念する中、思考する。

紅魔館での執事としての仕事。

確かに私にとつての天職ではあるが、慧音に念を押されて言われる程に得体のしれない館。

そんな所へ易々と入るのは流石に無謀過ぎる。

剣術指南は、私には無理だ。

私の戦いは、剣を使えると言うだけで、そこには型も形式も存在しない。

ただ生き残る為の、誰かを殺めるだけのものだ。

剣術、と言われるのすらおこがましいもの。

よって、優先順位からは下がる。

薬の実験……あからさまに危険な匂いがする。

この様な裏の仕事みたいなものは給金は高い。

しかし長い目で見れば人間一人の価値とはかけ離れた安い金額に過ぎない。

命を張ってまで稼ぎたい、と言うほど先を見ていない訳ではない。

新聞記者、で例の少女を思い出す。

射命丸文、だったかな。

取材されたりもしたが、私に関した内容の新聞は未だ見ていない。

それはともかく、これも厳しいかもしれない。

何せ幻想郷の地理を把握してもいないのに取材だなんて、時間の無駄以外に他ならない。

それに、彼女のあのスピード。

あれ位は出来ないと幻想郷で新聞記者はやっていけないのかもしれない。

足を強化してもあれには及ばないし、何より地より空の方が圧倒的に効率が良い。

よってこれも駄目。

仕事のパートナー。最も的を射ない内容で、しかも雇用先は地獄ときたものだ。

それが比喻なのか事実なのかはともかく、嫌な予感を感じないのは何故だろう。

それはさておき、ペットの飼育。

これはかなり楽な部類に入るかもしれない。

しかし動物など飼った事のない男がいきなり他人のペットを引き受けるのは流石に失礼にあたる。

命を預かる立場にある癖にそれを全う出来ない奴には決してなりたくはない。

結果最後に残ったのは、家庭教師。

これでも戦いばかりしていた訳ではなく、教養は人並には身につけているつもりだ。

——魔術と言うか、そっち方面の知識の方が濃いのは致し方ない事ではあるが。

部屋の奥へ消えていった人形師の少女が姿を現す。

『もう決めたの？』

決めた、と言うのは勿論今手に持っているこれの事だろう。

『そうだな……。様子見でまず家庭教師辺りを当たってみようかと思う』

『そう。でも確か、家庭教師だけは雇用先が表記されて無かった気がするんだけど』

彼女の言う通り明確な部分は表記されてはいないが、指定された場所ばかりと書かれている。

直接の場所を書かないのには理由があるのだろうが、大して不審には感じない。少なくとも他の雇用先に比べたら。

ただ一つ問題があるとするなら――

『よりによって妖怪の山頂上とはな……。』

その指定場所が、今最も会うのが憚られる者達が住まう所に近いなんて言うレベルでは無い所だったりする。

今更語るのもあれだが、私と早苗は今気まずい状況にある。とは言っても気まずいと感じてるのはこちらだけかもしれないが。

少なくとも、あの時の早苗は私がどうこう出来る問題とは思えなかった。

神奈子や諏訪子に負担はかけたくないと言って私が向かえば恐らく悲劇が繰り返されるだけで、本末転倒だろう。

心苦しいが、私が出る幕は無い。

『何か問題があるの？』

『ああ。あそこで、と言うかあそこに住まう人に少し迷惑をかけてしまっていてな。

本当は私が出向くべきなのだが、それは火中の栗を拾う事に繋がってしまうのだよ』

伏し目がちなシロウの表情を見て、少女は何か考えている様子。それで何か思ったのか、うんうんと頷いている。

『——仕方ないわね。一回だけでいいならあそこの奴等に会わない様注意を逸らすわよ。

あんたの言い分だと、その相手って守矢神社の誰かでしょ？面識が無い訳じゃないから多少は役に立てるわよ』

と、いきなり提案して来た。

『いや、そこまでしてもらわなくてもこちらでなんとかする。何より君に負担がかかる。そこまでしてくれる義理もなかつ』

私の答えに少女は溜め息を吐く。

『義理、ねえ。大有りよ、そんなもん。

何せ私の目指していた世界を見せるだけじゃなく、カタチにしてしまったんだから。

自分の力で到達出来なかったのは悔しいけど、まだ完璧って訳じゃ無いからここからは私の領分。後は仮定で使ったツケの精算だけ。

——それに、借りの作りっぱなしは私の性分じゃないの。そうい

ったのはパパツと済ませないとこつちの気が収まらないのよ!』

一気に捲し立てるその姿を見て、懐かしい影を重ねる。

一緒に地を駆け空を駆け、いつも傍らにいた戦友であり、遙か昔に憧れた存在と目の前の人形師が、あまりにも似ていた為だ。

見た目はまるで違うが、本質はこうも同一だと、生まれ代わりかと勘違いしてしまう程だ。

だからこそ一瞬で理解出来る。

彼女には、何を言っても曲げない確固たる信念が根付いてると言うことを。

……ここは大人しく好意を受け取っておくでしょう。

確かに見返りを拒むと言う行為はしようとは思わないが、それでも私にはこの条件が等価交換には思えなかった。

『分かった。しかし私が安全なところまで行っただけだと言う確認が取れないのではないか?』

『それなら安心して。』

私は本当に世間話をしに行くだけだもの。貴方の護衛は副産物として考えてくれて構わないわ』

あれ程義理がどうのと言ったのに今更ついで扱いなのは、彼女なりの虚勢なのだろうか。理由は分からないが。

全く、何故こんなにも凜の様な少女と縁があるのか。

『そうか。それでも感謝するよ』

それを最後に彼女は横にそっぽを向く。

その行動に笑いが漏れそうになるが堪える。

『取り敢えず向かうわよ。ほら、ちゃっちゃとする!』

問答無用と言わんばかりに腕を引っ張る。

だが、その前にやらなければいけない事があった。

『まあ待て、ひとつ大事なことを忘れている』

『なによ。そんなもので構わないわ』

『いやいや。これは至極大事なことなんだ』

そう、これは絶対に外してはいけない。

本来なら昨日やるべきだったのだが、どうにもタイミングが無かったし、彼女自身も気づく様子も無かった。これ以上先延ばしにする
と機会は訪れないかもしれない。

こちらの強い意思に気付いたのか、彼女は腕を離し軽く溜め息を吐く。

『……………早く済ませないと気が変わるわよ』

『なに、ものの数秒もかからんよ』

そうして離された腕を私は彼女の前に差し出す。

『私はエミヤシロウ、君は?』

……………こちらの意図が読めないのだろうか。彼女は私の顔と手を交互に観察している。

『…………何これ』

『何って、名前の交換と握手だよ』

それでやっと理解したのか、すっきりした表情になる。

『私はアリス・マーガトロイドよ』

お互いの手が重なり、握手が成り立つ。
それに満足し、私は軽い笑顔を浮かべる。

『さあ、これで用事は済んだ。行こう』

『そうね。上海、蓬萊、行くわよ』

その言葉に反応し、ふわふわとベッドから旅立つ二体。

…………二体？それとも二人なのだろうか。

『今のは自律状態なのか？』

『そうね。』

不思議なことにこの子達は寝てると自然と魔力を回復、つまり取り込む事が出来るみたい。まあ最低魔力が残留してる場所じゃないと無理なんでしょうけど』

……………そこまで凄いことをした覚えは無いのだが。
いや、意識が無かったんだ。いつも通り無茶をしたんだろう。
無意識で無茶出来るなんて、天然記念物ものだな。

『つまりは、魔力を行使しない限りこの子達は半永久的に活動出来るのよ』

まるでサーヴァントだな。

違いなんて、躰の構成材質だけだ。

そこで考える。

そんな事が可能なのか、と。

いや、目の前に結果があるのだから信じざるを得ないのだが、少なくとも私程度の魔術と魔力でどうにかなった時点でおかしいのだ。初めて守矢神社に來た時に投影した木材。あれだって違和感がある。魔力を帯びたものでは無い為魔力の消費は微々たるものだが、精巧過ぎたのだ。

通常、私が投影する物質は自然と元の物質よりランクがひとつ落ちる。それは必然なのだが、あの時の木材はそれを感じさせなかった。まるで本物を引き抜いて來たかのような。

あの時はさほど気にしなかったが、今回の件で理解した。

エミヤシロウは、何処か壊れているんだと。

マイナスにならない破損なんてものは有り得ない。いつかフィードバックの際にプラス以上の破壊に繋がるだろう。だからと言って出し惜しみる気は毛頭無いが。

ふわふわと近づいてきた上海は、何故か私の頭に着地する。蓬萊はアリスの隣を浮遊している。

『……………何故こうなっている』

頭に乗った上海を持ち上げ、抱える様に胸元に持つていく。
上海は、まるで頭の上が恋しいかの様に天を仰いでいる。

『貴方はこの子達に身体をあげた人だもの。父親だと思っているんじゃない？』

『ほう、それなら君は母親か？』

そう言われればそう返すしかあるまい。
案の定、彼女は顔を真っ赤にしている。
言われるまで気付かない、と言うのも不幸だな。

『——ッ！』

馬鹿な事言わないでよね！』

理性が崩壊しているのか、上海を抱えてる私を殴るという奇行に走り出した。

だがそんな素人なパンチなんか当たる筈もなく、易々と片手でそれを受け止める。

荒い息を立てて上目遣いに睨むアリス。

その剣幕から、決して悪いことをした訳では無いのにこちらが悪人に感じてしまう。

『ほら、君が早く行くと急かしたのだろう。
その君が足止めするのは間違いではないか？』

『……………分かってるわよそんなの』

振るった拳を引き、手首を回す少女。

全く、第一印象は冷静だと呑んでいたのだが。

私達は今度こそアリスの館を後にし、妖怪の山へと足を向けた。

決断（後書き）

アンケートの結果、天子の家庭教師ルート、つまりは緋想天ルートが一位となりました。

アンケートが予想以上に集まり、小説を書かせてもらってる身としては感慨深いものがあります。

そんなこんなで、その感動の恩返しとして、緋想天ルート以下2位と3位になったルートも本編に交え、余裕ができれば他ルートもIFストーリーとして書きたいと思っています。

せっかくのアンケート無下になる選択だと思う人もいるかもしれませんが、それほど喜んだと思って頂けたら幸いです。

IFに関してはどうなるかは正直今は検討もつきませんが、出来るだけちまちまと書けたらいいな。

2位と3位は各自想像してお待ちください（笑）

さて、アリス・マーガトロイドの紹介をひとつ。

アリス・マーガトロイド

種族：魔法使い

能力：人形を操る程度の能力

二つ名：七色の人形遣い

見た目：金髪にカチューシャ、肌の色は薄く人形のような容姿に、西洋風のドレスを着用している。

魔法の森の小奇麗な白い洋館に住む少女。

大量の人形を自由自在に操ることができ、視界の外ですら人形10

体以上を同時かつ精密に操る。

家事の殆どは人形にやらせている。他に雪かきや割れた窓の修復などもさせている。

戦闘は人形に武器（剣、槍等）を持たせて攻撃させたり、人形がレーザーを撃つたりする。

それ故に肉体での戦闘能力は低い。魔法使いなんだからしょうがない。

人形は爆発させることも出来るが、私の書くアリスはそんなことしません。

圧倒的な力で敵を倒すことは楽しくない為に好まず、常に相手より少し上の力で戦う。

戦いの緊張感の中にも常に心に余裕を持つことが彼女達の美德である。弾幕はブレイン、と豪語している。

求聞史紀にはアリスは元人間の妖怪と記述されているが、旧作と関連付けると彼女は魔界の生まれの生粋の妖怪ということになる（或いは魔族か）。

まあ魔法使いは悪魔の一種なのだが。

二次設定では友達のいない可哀想な扱いの子。

そしてひどいときは人形に話しかけるアブナイ人扱いされたり、と謎にイジラレキャラになっている。

繋がる想い（前書き）

今回は久しぶりのシリアスっぽい内容です。微妙に長いし。シリアスを書くとながくなるのは仕方ないね。

繋がる想い

『さて、ここからは二手に分かれましょう。
万一近くを通りかかる場合だってあるだろうし』

妖怪の山の中枢付近でアリスはそう提案して来た。

彼女の言う通り、もし早苗達が私を探しているとしたら出来るだけ目立つ行動は控えた方がいい。二人での行動は意外と目立ちやすい。余裕を持ってここで別れるのは正しい判断だと思う。

『了解した。私は裏から周るように迂回して向かう。早苗達に出会ったら出来るだけ引き付けてくれると助かる』

『まあ、私はやりたい様にするだけよ』

そう告げると彼女はゆっくりとした足取りで直進していった。

さて、こちらは出来るだけ気配を絶って行動しなければ。
急いで向かう場合見つかるリスクも高い。

なにも早苗達だけではない。この山の住人に搜索の協力を頼んでいる可能性だってある。

そう考えるとかなり行動に制限がかかる。

まあ、もし見つかったとしても早苗本人ではないならなるようになるだろうが。

魔力供給ラインを絶つことでの霊体化は供給源が分からない以上下手に動かすことは出来ない。

そう、未だに自分の魔力の供給源が特定出来ていない。

あんな大量の魔力を使用したにも関わらず意識を取り戻した時には使う前より多少消費した程度にまで回復していた。

聖杯が幻想郷にあるとは到底思えないし、つまりはサーヴァントを一人で顕現させれる程の魔力の持ち主がマスターと言うことになる。

一瞬、この世界に連れてきた時の声の主では無いかとも考えたが、何故かそれはないと自己完結していた。

『時間指定はされていないが、急ぐに越した事はないか』

流石に24時間体制で待っている筈も無いだろうが、こっちは雇われる身なのだからのんびりはしてられない。

出来るだけ早足、かつ消音で指定された場所へと向かった。

シロウと別れた後、私は守矢神社へとひたすら歩いた。

久しぶりの山道はインドア派の自分には耐えがたいもので、肩で息をする程の疲労感を覚えている。

飛んでいくのは容易いが、彼がなんぼもしない内に辿り着いてしまふと足止めが出来なくなる。ま、別に”ついで”だから私が気に病む必要なんか無いんだけどねっ。

疲労感の甲斐あってか、境内に見える神社の屋根が見える場所まで

辿り着いた。

別れてから約一時間程。

妖怪が大量に生息する山であるにも関わらず誰にも気付かれなかった。それ以前に、殆ど人の形をした生物と出会わなかった。

『……………今日は妖怪の休日なのかしら』

未だ整わない呼吸を吐き出しながら呟く。

蓬莱がこちらが何もせずともハンカチで汗を献身的に拭いてくれる姿に感動を覚えながらも、私は歩を進める。

ふと、疑問に思う。

蓬莱の行動によって気付かされたが、よくよく見ると上海の姿が見当たらない。

『ねえ蓬莱、上海知らない？』

なんとなく推測はつくが、一応聞いてみる。

『おとーさんのところー』

お父さん、とはシロウの事だろう。

上海はシロウの事をいたく気に入っていた為か、そのままついていってしまったのだろうか。

と言うか、お父さんと言う言葉を使う辺りに、彼への信頼の表れが覗ける。

『じ、じゃあ、私の事はなんて言うの？』

先程の質問の答え故か、何故かそんな質問をしてしまった。そんな

自分を心の中で罵倒する。

別に私がなんて言われようと、許容する範囲ならば何の文句はない。そう思っている筈なのに、アイツが面白半分にした質問が頭から離れない。

——では君は母親か？

思い出すだけで顔が熱くなるのが分かる。

その言葉が脳内で反芻して止まないのは疲れてるからだ。うん、絶対そう。

何時まで経っても収まらないそれを、疑問にしてぶつける事で解決しようとした。

この突拍子もない莫迦げた思考をとっと振り払う為にも。

僅かな空白。

蓬葉が考えているその間、私は無意識に緊張しているのに気付く。

たった一言を聞くだけなのに、私の鼓動は山登りの時よりも早鐘を鳴らしている。

疲労も相まって目眩を起こしそうになるが、必死にそれを堪える。

——私は、何を期待してるの？

そう疑問に感じた瞬間、蓬葉の口が僅かに動くのを捉えた。

そこからは、まるでスローモーションの世界だった。

絶対的な集中力の賜物だろうが、それが逆にもどかしかった。

『——だよ』

『え、なんだって？』

『アリスはアリスだよ』

………空気が死んだ気がした。

それは私の予想していた解答とは異なっていた。
それを残念だと思う自分に矛盾を感じる。

——私は母親と呼ばれたかったのだろうか。

私からすればこの子達は本当に子供なのだが、今まで呼ばれる機会
と言つものが無かった為、そんな欲は沸かなかった。

そうしていきなりその機会を与えられた所で整理など出来る筈もな
く、矛盾した思考を繰り返すだけ。そうして出た答えが理想と異な
れば残念がる自分に嫌気が差す。

『そ、そう。まあそうよね』

感情を読まれない様に必死に取り繕う。

この子はもう自由に身体を動かせるのだから、下手に心配されると
逆に傷つける羽目になってしまう。

そんなのは嫌だ。

私はこの子達にそんな想いをさせたくて自律化を研究してた訳じゃ
ないのだから。

いつの間にか荒れていた息は落ち着きを取り戻しており、それを期
に私は守矢神社へと再び歩みを進める。

彼女自身の元々なのか、疲弊している故か、どちらにせよ女相手に軽いと思わせるのは余程の事ではある。

『私は、だい、じょうぶ』

『身体を支えられない様な人間を大丈夫だなんて言うのは無理があるわよ。』

ほら、掴まって』

自主性を尊重する言葉とは裏腹に拒むならば引きずってでも神社の中に連れて行く気概だったが、彼女は意外にも簡単に身体を預けてくれた。

それとも、意思云々なんか関係無しに身体が悲鳴を上げて止まないだけなのか。

神社の中に無理矢理侵入する。

軽いとは言ってもそれは一瞬。時間が経てばその重圧を否定出来なくなってくる。

『早苗！』

静寂に侵された空間に響く声。そこには、紫色の髪の女性が居た。恐らく、こいつが神なのだろう。

『待ちなさいよ』

静止の声に気付きこちらを振り向く姿には余裕が無い。彼女を大事に思っているのだろう。だからこそ苛ついている。

『あんだ、こんなになるまで彼女を放置してたの？明らかに見て取れる異常なのに』

『そんな事あるか！』

私だつて止めたさ！必死に言い聞かせても、無理矢理寝かせても、隙があればいつの間にか早苗は——』

『そんな言い訳はどうでもいい。今のこの子の状態、これが現実よ。あんだがどんなに仮定上頑張ったとしても、結果がこれでは見苦しい言い訳にしかない』

そう、喻え必死に取り組んだ行為も結果に直結するとは限らない。その場に居なかった自分にとにかく言う資格は無いのかもしれない。でもだからって、目の前で無理をして倒れた人がいれば、近くに居た奴を責めたくもなる。そうでもない、自身を納得出来ない。

『——！！』

お、前……！！』

掴みかからん勢いでこちらへと迫って来た神は、突如停止する。

そして私も、その原因を理解する。

その、冷たすぎる視線に。

『その二人。』

喧嘩するのは勝手だけど、早苗をまず運んでからにしろ。あと外でやれ』

早苗の隣には、特異な帽子を被った少女が居た。恐らくはこいつも神の一人なんだろう。

その少女の手は早苗の額から零れる汗をタオルで拭いている。

早苗を見る目は先程とは対象的に、まるで母親の様な慈愛に溢れていた。

『早くして。このままじゃ悪化する一方だよ』

その言葉には、有無を言わさない強制力を感じた。これが、神の威厳と言うものなのだろうか。

私が早苗に駆け寄るともう一人の神が続いてくる。

二人で早苗の身体を慎重に持ち上げる。体格のせいで少女の神は支える形で手伝ってる。

三人の力を以てすれば、一人でさえ軽いと感じた身体が不自然な位軽かった。

予め引かれていた布団に寝かせると、早苗は墮ちる様に眠りについた。

それを見た瞬間、皆の険しい表情が安堵のものへと変化する。

『早苗………』

早苗の枕下で唸っている少女は、先程の恐ろしい程の剣幕が体格相応のものに落ち着いており、素の姿はこちらなのかと理解する。

『………こんなに疲労してるのにあんな事してるなんて、余程のことじゃないわ。』

説明してくれないかしら』

『………悪いけどこれは私達の問題なの。部外者には何も言つ気は無い』

紫髪の神が答えるその言葉に、カチンときた。

『だったら部外者に関わらない様な状況を作りなさいってのよ！偶然にしろ何にしろ関わってしまったんだから、事の経過を教えるのが筋でしょう！？』

『ならこのまま帰ればいい！何も見なかった事にして、何も聞かなかった事にして何もかも変わらない毎日に戻ればいいさ。今日初めて出会う癖して、関係者ぶらないでくれ！』

お互いの額がぶつかりかねない程近くで睨み会う両者。他人から見ると目から稲妻がほとばしってる錯覚が見えていると言う確信が持てる程に、両者の険悪な雰囲気が溢れていた。

『五月蠅い莫迦神奈子』

自身の被っていた帽子を、神奈子と呼ばれた紫髪の女に思いつき深く被せた。

もがき苦しむ姿にざまあみろと思う中傷心と、帽子ひとつでもがき苦しむ理由が掴めない困惑が渦巻く。

『ごめんね、神奈子が迷惑をかけちゃった』

『い、いや、こっちこそ怒鳴り散らしたりしてごめんなさい。病人が居るつてのに』

『それについてはおあいこだよ。』

——さっきの話の続きなんだけど、神奈子を庇う訳じゃないけど確かにこれは私達守矢の問題だから、突然現れた相手にホイホイ教えられる程安いことじゃないの』

神奈子が言つとまた口論になつただろうが、彼女が言つとなんだかなだめられてる気分になる。

外見で判断してはならないと言つのは、彼女の様な相手の為のものなだろう。

『———そっか。そうよね』

だからこんなに頑なだつた心が簡単に解されたのだろう。

私は何も言わず立ち上がろうとすると、少女が服の裾を引っ張り離さない。

『だからさ。今から友達になろう？』

これなら部外者にはならないしね』

一瞬、そこまで話したいのだろうかと思つたりしたが、少女の笑顔は部外者云々の問題関係無しに友達になりたいと訴えてる様に感じた。

その無邪気な笑顔に、私はその掴む手を払ってまで帰ろうとは思つ気などとうに失せていた。

その代わりに、その手をほどいて私の手を握らせる。

『なら名前から交換しましょ。』

私の名前はアリス・マーガトロイドよ』

『———！！』

私は洩矢諏訪子。んでこっちで暴れてるのは八坂神奈子。そしてこの子は東風谷早苗って言つての』

重なるだけの手に力が籠る。

諏訪子と名乗った少女は、一瞬呆けた後とても嬉しそうに各々の紹介をしていった。

たったこれだけの行動でこうなってくれるのらば、こちらとしてもやった甲斐がある。

神奈子は今も帽子のせいでのたうち回っている。

しかし気のせいだろうが、帽子が先程より一回り位大きくなっている気がした。

一方早苗は先程の動悸も収まって、安らかな寝顔を見せている。

その姿を見て、なんだか嬉しくなった。

名前の交換、か。

彼も大事なことだと言っていたなあ。

そして私はそれに影響されていたってことが。

名前は誰かを知るうえで大事なことだとは思ってはいたが、まさか口に出して言う奴がいるとは予想外だった。当たり前だと思っ行為も決して当たり前だと思わず、常に本当に大事な事だと信じているのだろう。

名前の交換を終えた時のアイツの顔、凄く嬉しそうだった。あれだけで未練無く逝けそうな程に。

本当、変な奴。

理由も分からないまま自然と笑みを浮かばせる。

諏訪子はどう捉えたのか、それに合わせた笑みを差し出して来た。

『じゃあ、説明するね』

それを合図とし、場に多少の張りつめた雰囲気が漂い始める。
そんな中でも、神奈子は未だにもがいてるのはシユールな光景だと思ふ。

『昨日のことなんだけどね。早苗とここに居候してる外来人が一緒に買い物に行った時に、ちょっとしたトラブルがあつてね。その外来人に対して早苗が弾幕を撃ってしまったの。』

それが発端となってソイツは未だに帰って来ないの。早苗があんな無茶をしたのは、自責の念からだと思う。

——なんてつたつて、昨日からまともに寝てない所か、食事すら摂ってないんだ。そんなことをしてる暇があるなら探しに行きたい、と言わんばかりに』

一気に説明された内容だが、簡単に言えば痴話喧嘩に近いものなのだろう。

『質問。この子はどうしてその外来人に攻撃なんかしたのか。もうひとつ。普段はこういった事はしない子なの？』

外来人とは十中八九シロウのことを指している。

下手に彼のことを喋ってしまうとシロウの行動が妨げられてしまう。

シロウは自分が行くと火中の栗を拾う結果になると言った。
でも、だからって。

こんなボロボロになってまでアンタの帰りを待っているこの子の気持ちが無下にしてまで、その結果に脅え続けているの？

自身が居て早苗が傷つくと思っているシロウと、シロウが居ないことで傷ついている早苗。

——なんて空回り。

お互いにその気持ちを知りえないままお互いの安否を願っている。痛々しい程に募る想いが、常に心臓に絡まる茨を生み出している。

だからこそ、お互いは惹かれている。

それを無理やり引き離そうとするから、動かない茨へと直進していく。

矛盾した行動が螺旋となり、心を磨耗させていく。

まあ、これは推測に過ぎないんだけど。

『早苗はもともと温和な子だよ。戦いは基本好まないけど、目的の為だったら必死に頑張ってくれる、そんな子。』

だからこそ、早苗のあの時の豹変ぶりには息を呑んだ』

『豹、変？』

『最初の異変は、その外来人が遅くに帰宅した頃だった。早苗はカンカンに怒っててね、深夜にも関わらず2時間以上は説教してたの』

『本気で心配してるにしろ、それは異常ね』

『私達が何かやらかしても、その時みたいな覇気は恐らく空前絶後だろうね』

諏訪子が、少し哀しそうな表情になる。

それは、シロウに対する嫉妬を抑えてるのか。純粹に早苗の対応が、自身らのものとは違うことに距離を感じたのか。

何にしろ、いきなり現れたシロウに早苗をとられたとを考えても不思議ではない。

お互いに無自覚なら、尚質が悪い。

『その次の日に、二人で里へ買い物に行った。その時の早苗は凄く楽しそうだった』

『それなのに、どうして』

『——理由はわからない。私は早苗のもとに駆けつけたときには早苗はおかしくなっていて、外来人は消えていた。

外来人の方は無事だと思う。早苗の弾幕は、威力はさほどのものではないから、一撃で塵すら残らないなんて事はまず有り得ない』

『——その際に怪我をして妖怪に襲われた、って可能性は考えないの？』

彼と会った時には外傷らしきものは一切無かったから、無駄な質問に過ぎない。

『どうしてかな。そいつなら絶対に大丈夫だって思える確固たる自信があるんだよね。』

出会ってから大した時間も経ってないのに。不思議だね』

——彼女の言うとおり、あいつから聞かされた魔術があれば、低級妖怪ならお話にもならないだろう。

彼女はそれを知っているから、そう思っているのだろうか。

『それより早苗のことなんだけど。——気がついて少しは冷静だったけど、ことの経過を話すに連れてパニックになっていった。なんて事をしたんだろう、彼は何も悪くはないのに、と自己嫌悪に陥って、落着かせようとした私達の声なんか、まるで聞こえてなかった風だった』

『そして最終的に今に至る、と』

肯定の頷きをする諏訪子。

『…………私達じゃ今の早苗には何もしてやれない。探しに行きたくても、早苗を見捨てることは出来ない。アイツが帰ってくるのを待つしかないんだ』

いつの間にか帽子の束縛から抜けた神奈子が悔しそうに唇を噛んでいる。

『あ、復活した』

『お陰様で堕ちる寸前まで行っただけだね』

拳で諏訪子の頭を殴りつけ、鼻を鳴らす。

諏訪子は涙目の状態で睨み上げている。

『取り敢えず、これが事の真相だよ』

神奈子がそう告げると、だから早く去れと言わんばかりに睨みを利かせる。

『ありがとう、じゃあ私が居ても力になれそうにないわね』

その視線にも嫌気が差したので、私もここで退散するのでしょうか。シロウは上手くやっただろうか。それだけが気になった。

『んじゃあ外まで見送るよ。神奈子は来ない？』

『当たり前だ』

しっしっ、と子供みたいに煙たがる。

アイツとは、ずっと相容れない確信が持てた。

境内へ辿り着き、伸びをする。

長時間会話した訳でも無いのに、節々は多少固まっており、気持ちが良い。

太陽が眩しい。

身体が酸素を欲するかの様に欠伸が出る。

シロウが居たせいか上手く寝付けなかった分がぶり返してきたらしい。

『ねえねえアリス』

ちよいちよいと手招きと自身の耳に指を向ける諏訪子。

耳打ち、だろうか。

彼女の身長に合わせる様に屈むと、予想通り顔を耳に近付ける。

『シロウの事、知ってるんでしょ』

『——ッ！——』

思わず飛び退いて、しまったと思う。

それはどう見ても肯定の合図にしかない。

愉しそうに笑う諏訪子が、全て理解>わかっていると物語っている。

『やっぱりね。そうじゃなきゃあんな深く関わろうなんて普通思わないもの』

『…………貴女の手の平の上だったって訳ね』

降参する様に両手を上げる。

やっぱりこいつ、タダ者じゃない。

『で？彼の所在が聞きたいの？』

『いんや？そんなのに興味は無いよ』

……………は？

あれだけ早苗のことを心配してたのに、アイツは戻ってくるかもしれない可能性に興味が無いと？

『早苗にとってシロウは抑止力となっているなら、尚更シロウに戻って来られる訳にはいかない。

これは、早苗の為なんだよ』

それは、アイツも言っていた台詞。

それは遠回しに、アイツの存在を否定したがってる様に思えた。

アイツさえいなければ、早苗がこんなになることもなかった、と。

それが錯覚にしる事実にしる、そんなものに納得はいかないし理解も出来ない。いや、したくもない。

他人が否定するのはまだいい。

でも、アイツ自身が自己を否定するのだけは何故か許せなかった。

『——その為なら彼女が苦しむのも仕方ないと？』

『仕方ない、とは言いたく無いけど事実だからね。』

生き物はね、欲しいものは簡単に手に入らない様に出来てるんだよ。欲しいってことはそれが自身には足りないパーツだからで、それは一人一人不平等に構成されてる。そしてそれは試練となり、その為に努力をし、そうやって自らに磨きをかける。

——自身の欲望の根幹にある試練が、辛い訳が無い』

諏訪子の言葉には、とても重みがあった。

我が子の為に、自身の想いとは正反対の行動を辛酸を舐めながら厳しく当たっている母親みたい。

——本当、似た者同士だな。

まるで本当に血が繋がってるみたい。

『…………貴女は、アイツの事をどう思ってるの？』

だからこそ、ここははつきりさせたい。

諏訪子がシロウの事を良く思っていないなら、例え早苗に免疫が出来た所で対象が移るだけだ。

それならば、いっそこから出ていった方が後腐れも無いだろう。

『シロウの事？』

うん。深く考えたことはなかったけど、きっと好きだと思う』

『なっ——』

子供の様に笑う笑顔が、とても眩しい。

あっさりと出た答えが清々しく、とても純粋なものだったことに動揺する。

恥ずかし気もなく、そこにあるのは純真無垢で潔白な事実のみ。

そんな問いた自分は邪な疑念を聞き入れる為に投げ掛けている。
それは、彼女に対する侮辱でもあったのに。

『——ごめんなさい。易々と聞くものでは無かったわね』

『そんなことは無いよ。』

それに、シロウの事を憎んでないと言ったら嘘になるし。
けどそれ以上に彼からは色々な出来事を与えられたから、そんな感情を持つのはお門違いってものだよ』

『……………そっか』

これ以上特別話すことも無いのか、数秒間の沈黙が訪れる。
私はそれを合図として帰りの道へと飛び立とうとする。

『アリス！』

しかしそれは諏訪子の呼ぶ声によって制される。

『今度はそんな話の為にじゃなくて、普通に遊びに来てね』

『神奈子が五月蠅いんじゃないかしら？』

『あんなのほっとけほっとけい！どっせ何回か対面してれば慣れる
って』

いや、それはない。と心の中で宣言する。

『ええ。ではいつかまた、お邪魔させてもらおうわ』

私も出来る限りの笑顔で彼女に応える。

今度は早苗とシロウも、皆が集まっていると楽しくなるかもしれない。

私は今度こそ飛び立ち、諏訪子が見送る視線に振り返らずにその場を後にした。

繋がる想い（後書き）

次回、やっとバイトネタが絡んできます。

やっとですよ、やっと！しかも上手い出だしの内容が思いつかないし（マテ

久しぶりにF a t eをプレイ。凜ルートやっぱりいいね、うん。

あれだけ男が映えるゲームってのは結構珍しいですね（デモン。インとかあやか。びととか）

小説の進行についてですが、東方のキャラは全員出す予定です。そこからやっとな編みみたいに進んでいきます。

今のところ二つくらいは概要が構成されていますねー

てかそんなことしたら何話ぐらい話続くんだろっ……。確か63人位は居た気がする。

・・・／（＾Ｏ＾）¥

竜宮之使女（前書き）

自分の小説を読み返してみると、昔の方が厨二つぷりを発揮してたという事実にはシヨンボリ。取り敢えずこついったパートは厨二つぽく書きづらいいと言い訳しておこう。

竜宮之使女

曇り無き蒼天の下で優雅な暮らしを満喫している天界の住人。

天候は常に曖昧で、お世辞にも優雅な暮らしをしている者など稀にしか居ない地上の住人。

身体が豊かであるが故に心は貧しく在り続ける天人。

身体が貧しいが故に助け合い心に実りをもたらす地上の生物。

私は、そんな者達の狭間に潜む者。

視界は常に薄暗く、気質は常に台風。静電気も常に辺りを覆い、酷い時には常に雷鳴が轟く。それは、そこが雲の中心部に位置しているから。

天候の作用を一身に受けることは、生活するには不便極まりない。

だが、私は存外ここを気に入っている。

だって、私は――

『――ふう』

地上から遙か上空。雲すら突き抜ける程の世界に私は今腰を降ろしている。

太陽を遮断するべき雲を超越した場所にあるにも関わらず、それに対する対処などは行われていない。曰く、天人の皮膚ならばこの日差し位気にもならないらしい。

墮落した毎日を送っている存在にも関わらず身体は丈夫と言うのも、不条理な気がします。

『総領娘様には相変わらず困ったものです』

彼女が起こした異変が解決されて暫く経ちます。

その事件をきっかけに私は彼女のお目付け役として本格的に任される様になりました。

仕事が増えたこと自体に不満はありません。

……しかし、上の方から貰える給金はその仕事内容の何分の一にも満たないものです。

彼女の我が儘により振り回される毎日。心安らぐ機会がまるでありません。

他の仕事もあるのに、こんな状態ではいつか倒れてしまいかねません。

溜め息を吐きつつ思い腰を持ち上げる。

せめて今の時間だけでも安らぎたい。そう思った私はいつもの場所へ向かおうとする。

私以外の存在は滅多に来ないあそこなら、誰にも邪魔されることなく過ごすことができる。

そう思っていたのだが――

その場所へと辿り着くと、見覚えのある人物――いや、妖怪がこちらにひらひらと手を振っていた。

『何か用でしょうか？』

安らぎの場を荒らされた多少の憤りを無視して彼女へと語りかける。

『ええ。貴女にちよつと朗報があるのよ』

『朗報、ですか』

私の彼女への第一印象は、読めない人だ、でした。

彼女の行い全てがまるで柳の様に受け流しつつ、でも常に何かに捕らわれている、そんな感じ。

彼女が何をしたいかなんてのは、私には到底わかりません。面倒でも聞くしかありません。何よりも自身の安息の為に。

『そう。とは言つてもまだ可能性の話ですけれど』

妖しく微笑む妖怪。その動きひとつひとつが、計算されたものにしか感じ得ないのは恐らく気のせいではないのでしょう。

朗報の内容も、自分で仕込んだものに違いありません。

『まず……貴女。貴女は今の状況に多少なりとも不満があるのではなくて?』

『……何が言いたいんです?』

『あの天人に手を焼いているのでしょうか?』

本人が行った行動であるにも関わらず一番損をしているのは自分だなんて、不満が起こらない訳がない』

やはり、彼女は全て見透かしている。そしてそれを理解して尚、私と総領娘様を利用しようとしている。

彼女は総領嬢様——いや、天人と言う存在を嫌悪しているのに関わろうとするんだから、それ程の事なのだろう。

『……………まあ、確かに総領嬢様の我が儘には困り果てていますが、それと貴女の目的と何か関係があるのですか？』

『あら、やはり気づいてたのね。

なら単刀直入に答えるわね。ここに一人の人間がやってくるわ。あくまで確率の話ですけど』

『何の目的でそんなことを』

『その人間の為よ。その為に貴女達を利用させてもらうわ』

利用すると言う時点で最早遠慮の無さが伺える。

ならば、こちらもしは反抗しても罰は当たるまい。

『利用、と宣言する威勢の良さは理解できましたが……………それを易々承諾するとても？』

それを聞いた妖怪は、今度は愉しそうに笑う。

どうやら、この行動もあちらにとっては予想通りのもののようにでした。

『先程も言いましたけど、これは貴女にとっても益のあることなのよ？』

——そうね。彼がここへ来る名目が、あの子の家庭教師というものだからよ』

『なっ——』

驚愕する私の顔を覗いて、彼女は満足そうな笑みを浮かべる。

『これなら貴女が都合の悪いときだけでも彼を雇うことで少しは負担を減らせるって、ことよ』

『……………仕事ならば、上を通さないといけないのではないですか？』

天人を嫌う彼女が、そんなことを行うとは思えないが。

『それは貴女の給料から差っ引くわ。貴女からすれば不満な金額でしょうけど、アルバイトとして少し抜いたところで払うには法外だと思わない？』

明らかな嫌味を混めたそれは、やはり天界の生活への不満が見え隠れしている。

……………確かに、通常の仕事感覚でならその金額は目を見張るものがあるでしょうけれど。

『なら、貴女も嫌と言う程理解してるでしょう？彼女のその呆れるほどの我が儘さを』

そう。その仕事を割に合わないと思う理由の大本として、その部分が露呈しているのです。

あれは余程精神力が強いのか、どれだけ彼女の我が儘を受け流せるかの技量かのどちらかがないとストレスで胃に軽く穴は開きますね。経験者は語る。

因みに私は半々です。

『ええ、だからこそいいのよ。』

言ったでしょう？これはその人間の為の行動だつて。それに、彼なら遣り遂げるわ。確実にね』

先程までの飄々とした雰囲気削げ落ち、私の瞳を同じもので貫いている。

ただの人間に彼女が興味を持つ筈がありません。とすると、その人間とやらも異端の類なのでしょう。

『——因みに確定事項みたいな言い方をしていますが、私がこの件を断つたらどうするんですか？』

『殺すわ。天人に関わる存在すべてを』

黒い旋風が私達を中心に発せられる。

それは辺りに立ち込めた暗雲が彼女の発した霊圧による衝撃で起きたもの。

ビリビリと感じる私に向けられた明確な殺意。冷徹なまでのそれは、否応無しに身体を強ばらせる。

『…………脅しですか？』

『そんなつもりは無いわ。貴女が承諾しても彼が来ないなら契約は無意味だし』

『でも、貴女はここにいる』

それほどまですると言つことは、つまりはそついう事だ。

『——まあ、そんなに脅されてはこちらも承諾せざるを得ないですわね』

彼女が脅しを否定しても、その嘘が肌から離れない。少なくともこうでもない限りは。

『ありがとう。彼は来るとしたら妖怪の山頂上——つまりは天界への昇り道に来るわ。』

暇な時に顔を出してくればそれでいい。その時にその彼がいれば事を運んで頂戴』

あれだけ脅しておいて、私達はただの布石でしかない。それは暇な時と言う時点で丸分かりだ。

しかし彼女のその必死さ故に、どうにも真意が掴めない。

我々は布石程度の役割でしか無い筈なのに、彼女が出した殺気はそんな事実を容易く打ち砕く。

その矛盾した事実のせいで、彼女の目的が分からない。兆しが見えれば多少反撃の余地はありそうなものなんです。

何にせよ、私がここで要求を否定したところであちらにとっては不利な状況足り得ないと言う姑息な手段を盾にされてはこちら側としてはどうしようもない。

彼女は天人に関わる者全てを殺すと豪語した。

それは言葉にする容易さとは反比例する物である。

彼女がああ状況であの条件を出したのは、あわよくば言葉通りの事実を起こしたかったからなのだろうか……。

『はあ……。それにしても、その彼と言う人物は何者なんですか？ 貴女がそこまで固執するのには理由が？』

重苦しい程の殺気が収まり、先程と変わらない空間が訪れたことによりやっと質問を投げ掛けれる。

面倒な人を相手にしている事を、嫌でも認識させられる。

『——英雄よ。理想を追い求め、人間としての自身を殺し、最後にはその理想に溺れた、哀れな”えいゆうさん”よ』

彼女のその言葉は、今までの語りで最も感情が見えなくて、最も哀れんでいる様なものだった。

『そろそろだろうか……………』

裏から回り道すること約二時間程。見たことの無い景色に僅かな既視感を覚えるが、それが間違いだと気付くのに大した時間はかからなかった。

見覚えのある感じのしたそれは、見ていた世界は違えどとても見覚えがある景色でもあった。

胸元で動く感触に目を向けると、相変わらず上海がシロウの腕に抱かれてるのが分かる。

彼自身、どうにか離れて貰える様試行錯誤を繰り返し実行していたが、彼を父親と呼ぶ小さな娘はそれらを頑なに拒んだ。そして最後には、彼が折れてしまう。

もし自身が普通の生活をして、普通に子供がいたのなら、今みたいな状況に悩まされたのだろうか。そんなアリもしない状況で逃避し

たくなる程に、彼は己の甘さに呆れていた。

だが、しかし――

『どうしたの？おとーさん』

仮初めとはいえ、シロウのことを父と慕う少女がいる。

普通の生活には戻れないし戻る気も無いが、結果的にそれと変わらない状況下にあるのだから、結果は恐らく別の自分が何度繰り返そうと不変に等しいのだろう。

ならば、それに甘んじてしまってもいいのでは無いのだろうか。

何事かと見つめる少女の頭を撫でる。

その頭は、撫でるにしてはあまりにも小さなものだが、不器用ながらもその手は少女の頭を優しく撫でる。

少女はそれでも十分過ぎると言わんばかりにシロウに全てを委ねていた。

気持ち良さそうに頬が緩んでいるその姿に、シロウの手はその動作を止める気配を見せない。彼自身も悪い気分にはしていないようだ。

……その感情は、父の愛情か、動物を愛でる感情か。それは本人のみぞ知るが。

『さあ、行こうか』

撫でている手はそのままに再び歩き出す。

頂上までの距離は見た目程のものではなく、あっさりと辿り着いた。

その視界には、遠目に守屋神社が見える。

裏手に回る機会が無かったから知らなかったが、こんな広い土地があったとは思わなかった。

これではアリスが役割を果たしていないと簡単に見つかってしまう。

彼女のことを信じ、目的の場所で待機する。

ここら一体だけ、山とは思えない程の草原と化している。

誰にも侵されなかったこの空間に、私と言う異物が混入している事に、多少の背徳感を覚えたが、過ぎたことを悔やんでも意味がない。ならばせめて、この一瞬だけでもこのこと共にあろう。

——体は草で出来ている。

血栓は維管束、心は根。

幾度の季節を越えて腐敗。

ただ一度の伐採もなく、ただ一度の蹂躪もない。

彼のものは常に在り 草の原にて天の恵みに酔う。

故に、その生涯に意味など問わず。

この体は、無限の草で出来ていた。

『くっ——』

我ながら、即興だがそれなりのものとなったと思う。

こんな莫迦みたいな事を考えてしまう程に、私は暇を持て余していると理解してもらえれば幸いである。

——あれから数十分。私は何もすることが無いままその場に立ち尽くしている。上海は私の腕の中で眠ってしまった為、そつと草の上に寝かせておいた。

太陽が暖かい。風が心地よい。自然が音色を奏でる。微かな土の匂いが癒しを与える。

——ぶつちやけると、眠いのだ。

こんなに睡眠に適した空間であるのに、それに反逆するというのは、拷問に近いと言っても過言では無い。

草の絨毯に腰を降ろすと、一気に体中の力が抜けて、眠気に相乗効果をもたらす。

欠伸を何度も繰り返し、その度に両手で自身の頬を叩く。

——いつの間にこんなに平和ボケした身体になったのだろう。魂から全てが緩み切っているこの墮落した一瞬。それがとても幸福に感じて。

でも、根底では自身の在り方に疑問を持ち続ける。これで良いのだろうか？と。

それが自身の根源から溢れる物なのか、自身に侵食し拭えない程に侵されてしまったこの身体が反応している物なのかは分からない。

凜に言われた言葉を思い出す。

幸せになって欲しいと。

いや、正確には口にはしていない。

私が勝手にそう解釈しただけ。

幸せの定義とは、何なのだろうか。

誰かを救いたいと躍起になっていた者の思考とは思えないだろう。救い〓幸福が一般的な理論なのだから、幸福の全てを理解しているからこそ、全ての者を救いたいと思えるのが普通なのだから。

そんなこと、今更になって考える時点で終わってる。

やはり私は空虚だ。行動理念に中身が伴っていない。

孔の空いた杯が利用価値が無い様に、私自身も孔だらけ。

雫を注ぐ労力も、その杯に対する期待も、全てが溢れ落ちる。

仮に他人がその価値を見出した所で、杯>わたしじしん<が価値を見い出せ無いのなら、それは意味のないこと。

自分自身が認められないことを、他人に期待しようとも思えない。いや、期待した所で実感が持てない。

悲しいかな。結局は他人を優先し続けたが為に自分自身を捨てた結果、優先したものが一番手の届かない所にまで遠ざかってしまい、省みない自身には何も残らない。

握る手の平は、何も掴めやしない。いや、私が握り絞めたいものは本当に掴めるものなのかすら分らない。

今の私は、産まれたばかりの胎児と何が違おう？右も左も分からず、ただ泣き叫ぶことで自身の存在を実感し、何かをしたくても能力と知能が及ばず、他人にそれを求めてもそれを伝える術があまりにも稚拙で難解なもの。

子を産んだ母親でさえ、普通そこらの存在と変わらない理解力しかないのなら、誰が胎児>わたし<を理解してくれる？

——私は、理解されたいのか？
自問自答した結果、新たな疑問にぶつかる。

理解されたからと言って何かが変わるとは思えないし、こんな私を
誰が理解しようと思う？

そんな面倒なこと、誰が好き好んでやろうと思う？

でも、そうしなければ一生ここで足踏みしか出来ないまま終わって
しまう。

私は、きつかけが欲しいのかもしれない。

私の存在意義を確立してくれる何かを与えられるきつかけを。

他人の言葉が納得のいかないものでも、最早それしか矯正する手段
が無いのかもしれない。

知らず、溜め息を吐く。考えれば考える程深みにはまってしまう。
そうなればただのいたちごっこだ。

思考を振り払い、おもむろに仰向けに倒れこむ。

『きやつ！』

その視界に収まる筈だった太陽は、謎の影によって阻まれる。

その影は、まるで何かに触れようとした時にその何か動き出し、
思わず腕を引つ込めた様な形を取っている。

『あの………』

影から声が聞こえる。それでようやく、私は倒れたばかりの身体を
持ち上げる。

そこに居たのは、天女だった。
髪は深海のような蒼。黒の帽子に付いたりボン。そして何より、身体中に纏っている薄桃色に赤のフリルがついた羽衣が、目の前の女性を天女だと認識させるには十分な材料だった。

『もしかして、君が——』

『もしかして、貴方が——』

二人の言葉がシンクロして響き渡る。

二人して目を開かせ、僅かな沈黙の後お互いに軽く笑う。
彼女の微笑みが、先程の禅門等を繰り返していた私の頭をほぐしてくれる感じがした。

『初めまして。私は永江衣玖と申します。』

お互いの勘違いでなければ、貴方が今回家庭教師を名乗り出た——

——

『ああ、そうだろう。私はエミヤシロウ。よろしく』

お互いに握手を交わす。

その時気のせいかな、多少だが手に違和感を感じた。まるで、たわしを軽く握っているような痛み。

握手が終わった後すぐに手の平を確認してみるも、外傷はなし。
やはり、気のせいだろう。

『では、行く前に少し確認させて下さい』

そう切り出してきた彼女の言葉に耳を傾ける。

『まずひとつ。貴方は何故ここを希望したのですか？』

『……………これは面接かなにかかね？』

『いえ、こちらとしての好奇心です』

面接があつたら、多少怖いな。なにせこちらは学生時代の練習以外、そんなものには縁がなかったからな。その頃の曖昧な記憶など、当に果てている。

——寧ろ、面接がないことを前提に動いていた私って……………

『理由、か。』

そうだな、手軽に出来そうだったから、とでも言っておこうか』

『———そうですか』

衣玖の表情が、同情の籠もったものになる。しかし、それに彼は気づかない。

『ふたつ。貴方は天界をご存知ですか？』

『……………天界？』

『もしかして、知らないのですか？』

正直に頷くと、彼女は苦笑する。

『……………えっと、その家庭教師をやってもらいたい相手が、天界——つまり、遙か上空の国の住人なんです』

『——は？』

遙か上空に国？そんなものがあるなんて、そんなところに行くなんて、誰が想像出来よう。

出来る奴はとんでもない誇大妄想狂だ。

『一応、空を飛べない人の為の道はありますけど。そんな物好きは少ないですし、何よりそんな物好きの大抵は空飛べますし』

『……………そうなのか』

『あの、無理なら仰ってください。私に強制する権利はありませんから』

私を心配してか、彼女は様子を伺いつつそう告げる。

確かに天界という、予想だになかった場所への勤務だが、そんなことだけでは私の決断は揺るがない。

何より、私は早苗のことでは何もできないのなら、せめて他のところで彼女達の助けになりたい。その為なら、多少の苦労くらい安いもの。

『大丈夫だよ。多少の苦労なら慣れていくからな』

『そう、ですか』

不安を拭えない表情が数秒続いたが、目を閉じ一呼吸すると、彼女は引き締まった表情になる。

『わかりました。では、今から案内しましょう』

彼女が草原の一画へと進むと、そこが光となって道らしきものが現れる。

『これは、ある一定の条件の下出現する特別な道です。

この条件に合致していない者には触れることはおろか、視ることすら叶いません』

彼女が説明を続けたまま歩くにつれ、階段を上るように斜めに軌道を変えていく。

私もそれに着いて行く。私の足元は光の粒子のみで構成されており、踏み外せば恐らくはそのまま落下するか、何かしらの措置が施されるか。

どちらにせよ望んでそれを確かめようとは思わないが。

段々と上るにつれて、空気が薄くなっていくのが分かる。

ふと、後ろを見ると初めて幻想郷に訪れた時のことを思い出す。

あの時もこれくらいの高さ、いやそれ以上から全景を見下ろしたんだった。

違いは、これほどまで余裕がなかった位だ。

私が居た世界とは異なり、やはりここは美しい。その事実を再認識させられる。

視界に大量に収まる緑。人工的なものは必要最低限のものしか存在せず、その僅かな物も逆に景色を彩る重要な一端になっている。

全てが言葉通り自然に存在しており、全てが均等に世界の一部としてそこに在る。

人間には創造出来ない神秘が、穢れることなく存在しているという

事実だけで、感動を呼び起こすには十分だろう。

更には、今私が踏み締めているこの道。近くでは分からないが、それはまさに天の川だった。

この道は、私達以外には認識できないのであれば、何と勿体無いことかと思う。

私と彼女だけが、今この瞬間の景色を見る権利を与えられている。何の偶然か、ここに来る選択をしなければ私は一生拝むことは出来なかっただろう。

そんな一瞬を、瞼に焼き付ける。奇跡に等しいこの一瞬を。

竜宮之使女（後書き）

今回は、近所にいたら幸せになれるお淑やかな女性、永江衣玖さんの紹介。

永江衣玖　ながえ　いく

種族：妖怪（竜宮の使い）

能力：空気を読む程度の能力

二つ名：美しき緋の衣

見た目：青色の髪、黒色の帽子に付属された赤のリボン、体中に巻きつかれたピンク色で赤のフリルがついた羽衣。

性格：いたって温和な性格であり、争いを起こすのも巻き込まれるのも好まない性格。

龍の世界と人間界の狭間にすむ妖怪。

普段は雲の中を泳いで暮らし、龍神の様子を見守っている。龍の言葉を理解し、重大な内容だけ人間や妖怪に伝えるといわれる。龍神の言葉の伝え方が本当に「伝えるだけ」であり、悲劇的な内容であっても事務的で淡々としている。幻想郷に大きな地震が発生することを感知してそれを伝えるために幻想郷に現れたとき、幻想郷の住人の一部からは誤解され戦闘になってしまった。

彼女の地震予知は地震そのものを無条件で察知するのではなく、緋色の雲の空気を読むことで地震発生を予測するというものである。そのため、天子の起こした人為的な局地的地震には気づいておらず、「これから起こるであろう大地震」に関しては前準備として気質が集められていたため察知はできたものの、人為的なものとは気づい

ていなかった。

空気を読める能力故に、KYキャラとなってしまうた。
羽衣は武器になる。鞭っぽく使ったりドリルにしたり。ガトチュゼ
ロスタイル！

課せられた試練（前書き）

今回は、恐らく今までで最低のクオリティだと思います。前半部分がどうにも納得がいかないのですが、後の内容でカバーしようと思います。

課せられた試練

何の前触れもなく意識が徐々に鮮明になっていく。どうやら寝てしまっていた様だ。

いや、寝ていたと言う解釈は間違っているのかもしれない。この身体にそんな機能は存在しない。

ゆっくりと身体を起こし、一息吐く。

一部関節に多少の動作不良があるが、支障は無い。

辺りの景色で、先程までの経緯を思い出す。

私はアリスと行動を共にせず、エミヤシロウに同行し、謎の虚脱感と共に意識を失って今に至っている。

エミヤシロウの姿は、どこにもない。あるのは先程まで彼が座っていたであろう部分の潰れた草の跡だけ。

なんだろう、この苦しみは。

目の奥が熱い。無い筈の心臓の部位が締め付けられる。冷静でいられない。

何故彼は消えたの？

私を独りにして。

そう考えれば考える程、ここに留まれなくなる。

この苦しみは、私の知らないもの。

私であって私でないもの。

アリスが言っていた。私は誰かの魂を媒介に出来ている、と。

でも、そんなのは知らない。

私の記憶は、あの瞬間まで存在しなかったのだから。

暖かい。私を感じた初めての感覚。

人形である自身には有り得ないそれは、今でも鮮明に説明出来る自信がある。

身体中に染み渡る様に入りこんで来た何か。

アリスにその感覚の理由を聞いたら、シロウの魔力じゃない？と言われた。

そしてそれで理解した。

彼が、私を産んでくれたのだと。

『おとーさん……………』

だからなのだろうか。彼といたとこんなにも変な感覚に陥る。

彼といたとこんなにも自分が自分でいられない。

空虚な身体の中にある更なる虚無。

それは、空虚”だった”からこそ起こり得る事実。

無から無は生まれない。虚と成り得るには、そこに実が存在するのは必定。

ならば、今の私は一体何なのだろうか。

虚から実と成り得たこの身体は、あまりにも不完全で、あまりにも実感を持ってない。

他人の力によって生かされているこの身体。生きていと言うにはあまりにも欠落していて、死んでいると言うにはあまりにも重いこの魂。

この身体が気に入くわないとは思っていない。寧ろ感謝して足りない位だ。

しかし、この身体を得てしまった事で、今こうやって悩んでいる。

私の肉体は、元はある魂を媒介として動いている。

今の意識は、その魂の生前からのものなのか、魂の媒介による事象の変化が、魂に歪みを生じさせたのか。

いったい、どこまでが”上海”なのだろうか。

叫びたい衝動を抑え、私は再びその場に寝転がる。

アリスの支援でやっと動いていた頃の記憶は、今や存在しない。或いは元からそんなものは無いのか。

産まれたばかりの私。

でもそれは転生に近くて。

その事実だけ覚えていてもなんの意味もないのに。

unnecessary 記憶が、自身を貶めている。

これは、進化の代償なのだろうか。

本来昇華する筈のない方向へと歪んでしまったこの身体へ与える、代償。

そうなんだと理解する。いや、強制的にそうさせる。

そうしないと、いつまで経っても繰り返す。

お父さんシロウの事を考える。

彼が私を撫でてくれるときに感じる暖かさ。それはあの時と同じもの。

内側からほんのりと温まってくる感覚は、冷たいボディにあるまじき異変。

でも、疎ましくは感じないし、邪魔だとも思わない。

それ以上に、魂ごとこの身が溶けるように力が抜けるあの感覚に疑問を感じる。

あれが「幸福」の感情なのだろうか。

それは、人形である私には本来理解し得ないもの。

しかしそれでは、その時の感情と思わしきものはなんだったのか説明がつかない。

悩んでいる最中に視界ギリギリの何かを捉える。

『アリス……………』

それは、私のマスターであるアリス・マーガトロイドだった。

空を飛び、魔法の森と思わしき方面へと移動しているのを追いかける。

飛行速度は恐らく同等だから追いつくことは敵わないだろうが、今はそれが最善だと判断した。

魔力の残量というのは自分でもよくわからないもので、常に落ちそうな橋の真ん中に佇んでいるのと大差ない。

取り敢えず、考えるのは後にしよう。なんなら、アリスや蓬萊に相談してしまうのもいいかもしれない。

直ぐに飛び立とうと思い、留まる。

もしも彼が何かしらの要因が働いて私を置いて行くことになったのなら、ここを動くのは彼に不安を与えることに他ならない。

そんな時、アリスがもしもの時に与えてくれた道具を思い出す。

私が持つ為にかなり縮小化されているが、それは紛れもなくペンと紙だった。

恐らく、私が単独で起動停止した際に何かしら記述しておくことで、

拾ってくれる可能性を高める為に持たせてくれたんだろう。

違う形とはなったが、これを持たせてくれたアリスに感謝しつつ、不器用に文字を書く。

アリスの支援で字は多少書いたことがあったので、なんとなくは書けるが、多分大分稚拙な文章なんだろう。

風で吹き飛ばないように、近くにあった大きな石で重石をする。

やっと終わった頃にはアリスの姿は当たり前だが視界で捉えられるものではなくなっていた。

取り敢えずアリスの家へ戻るために飛翔した。

『はっ——！！』

今までに無い位の動揺が走る。

それもそうだ。こんな莫迦な失態をしたのは初めてに等しいのだから。

『どうしましたか？』

声は冷静に、衣玖が問いかける。

『連れを——置いてきてしまった』

『連れ………ですか。しかしそんな人近くに居ましたでしょうか』

『見えていなくても仕方ない事ではあるのだが……。何せこのくらいの大きさだからな』

ジェスチャーを交えて説明する。

『人形程の大きさですね』

『ああ、まさしくそれだ』

衣玖は分からないと言った表情でこちらを見つめている。

『人形を連れというのは変ではありませんか？』

『いや、確かに人形ではあるのだが、彼女は生きているよ』

ますます疑問符を浮かべる衣玖。

埒があかないので、軽く説明をした。

『なるほど……。貴方は普通の人間では無かったのですね』

『いや、普通の人間だよ。』

ただちよつと歪なだけさ』

『なるほど、道理で……。』

今度は考える態勢になる。

彼女の呟いた言葉に意味深なものを感じたが、それは直ぐに別の思考にすり変わる。

『くそっ……………』

ここから上海を捉えるのはなかなか難しい。

眼をどんなに強化しても、それは所詮人間のリミッターギリギリが最高だ。たとえ人間を超越した存在でも元は人間だ。その域を出るのは叶わない。

つまりは、リミッター解除をしても不可能な高さまで私は彼女のことを忘れていたのだ。

今から戻るべきか……？ いや、それでは今度は衣玖に迷惑をかけるしまう。だが結果的に上海を見捨てることに繋がってしまう。私がしたミスで、どちらかに何かしらのマイナスを与えてしまう。

『……なら、これをお渡ししましょう』

そう言つて、身に纏っていた羽衣を脱ぎ、私に被せてくる。

『これは？』

『この羽衣は、人間が纏うことで空を飛べるという逸話があります。試したことはないのだから分かりませんが、これさえあればここから地上へ、逆も然りも可能かと』

『しかし、どうやって飛べばいいのだ？』

『そこまでは……』

沈黙が数秒と続く中、意を決したシロウは、常識外れの行動を起こした。

『なっ———！！』

建物が豆粒ほどに見える高さから、彼は身を投げ出したのだ。あまりにも予想外の行動に、彼女は動揺する。

飛び方を質問したばかりの飛ぶことを知らない青年がするには余りにも愚行。

これでは、自殺となんら変わりはない。

しかし、彼女は再び驚愕する。

彼は、飛んでいた。

いや、飛ぶというにはあまりにも前衛的。

纏わせた羽衣を脱ぎ捨て、まるで鞭のように振るい、空中を踊っていた。

『なんて、出鱈目な――』

確かに私は纏うことで空を飛べるという確証もない事実で羽衣を渡したが、それ以外の用途を知らないのに、何故命掛けの状況で他の選択が出来る？

『……………まともそうな人に見えましたのに、あれほどタガが外れているとは』

いや、それでもなければあの妖怪に目をつけられる筈もなし。

根本的な勘違いだ。

彼女の身内にまともな奴がいるという観念が間違いなのだ。

彼もまた、豆粒ほどの大きさに消えていく。

『……………でも彼なら、』

あんな出鱈目な人ならば、総領娘様を任せても問題ないかもしれない。その言葉は誰にも届くことはなかった。

本来ならば重力に逆らうことなど適わないこの身であるが、彼女が渡してくれた羽衣のお陰で私は未踏の領域に踏み込んでいる。

飛ぶ感覚は、すぐに理解できた。

しかし、身体に纏っていたときに、また感じたのだ。あのチクチクとした痛みを。

それは羽衣を通してか、それを起点として断続的に襲ってきた。そのせいで、飛ぶ感覚は理解できても、それに集中することは出来なかった。

ならばと、私は羽衣を腕に絡ませる様に持ち、羽ばたく様に振るった。

ただの羽衣では、重力と気圧によって振るったところで自由に扱うことは不可能だが、強化を施すことで物理的な干渉ならば今や聖骸布以上の強度を誇る。

多少構成を弄って、鞭に等しいしなりをつけたりもした。後できちんと直して返さなければ。

全力で振るいさえすれば、今なら羽衣は自由に扱える。

私は急ぐべく、空に向かって羽衣を振るう。

するとんでもない速さで地上へ落下していく。

原理としては、慣性に近い。

滑車に乗った相手を押す力によって速さは変わるが、等速で動く法則だけは常に在り続ける。

止める方法は単純。同じ力で押し返せばいい。

簡単に言えば、力加減次第で私は音速をも超えることが出来ると同時に、長時間は無理だが、停滞に近い状態で空を飛び続けることが出来る。

——まあ、空を飛ぶだけならば纏うだけでいいのだが。急ぐ時はこちらの効率がいい。

流石の私でも、今回は無茶な事をしたものと少し反省する。とは言ってもこれは私が犯したミスなのだから、補う為にはこれ位の無茶は仕方ないのでは無いと判断する。

だが、凜や早苗は怒るだろうな。

どうせ彼女らは、『シロウの行動は誰が見ても壊れた秤のようだ』とか言うのだろうが。

まあ冷静に考えると、一度のミスで命を掛けるといのは普通は理解しがたいものなのだろう。

でも今更この身に染みた呪いを矯正するのは容易いものではないのは言われなくても分かってる。

この先何があるかと、こればかりはどうにもならない自慢できない自信がある。

着地すると羽衣を元通りの性能に戻し、私は再び纏う。

再び刺激してくる何か。

『む……………っ？』

羽衣を観察すると、その痛みの理由をやつと理解する。

定期的に放たれる小さな光の線。

紫がかったその線は、誰もが知る自然現象。

静電気。

物体に帯電する状態や、蓄えられている電荷の総称。

現代人ならば、当たり前のように身近にある現象だが、幻想郷では一体どうなんだろう。

上海の姿を探すが、その影はない。

落胆しかけた時、視界の隅からなびく何かを発見する。

近づくと、そこには今にも飛んでいきそうな紙切れが一枚。

重石となっていた小石と一緒に拾いあげる。

そこには、こう書いてあった。

おとーさんへ。

わたしはアリスのところへかえります。

きづいたときにはおとーさんがいなくてビックリしたけど、きっとりゆうがあつたんだよね。

だからしんぱいかけないためにもこうやってかみにかいておきます。どうか、よんでくれますように。

上海

『
——
』

私は、表現し難い感情に圧されていた。

これは恐らく、初めて親に書いた手紙を親が読んで感動する感覚なのだろう。

擬似的な娘であろうと、こんなにも嬉しくなる。

そして、自分のやった事を改めて反省する。

すまない。今度絶対に埋め合わせをしてやるからな。

上海が書いたであろう手紙を大事に仕舞い、先程の階段を今度は駆け上がる。

慣れない飛行よりも、こちらの方が圧倒的に効率がいい。

先導していた衣玖の歩幅が小さかったのだろう。予想以上に短時間で彼女が視界に収まる距離まで辿り着いた。

『お帰りなさい。見つかりましたか？』

私が飛び降りた瞬間の驚きの表情は最早消え去っており、それについて言及しそうな雰囲気も彼女からは感じられなかった。

なかなか肝が据わっているのか、はたまたどうでもよくなっただけか…………。

『いや、どうやら先に帰ったようだ。心配ではあるが、こちらを疎かにしては気を利かせてくれたあの子に申し訳が立たない』

『そうですか』

関心とも無関心とも取れるトーンで答える衣玖。そんな状態であるうと、彼女は笑みを絶やさない。

恐らくは世渡り上手なのだろう。

『そうだ。これは返すよ』

羽衣を持ち主へと渡す。再び彼女が纏うと、天女と化した。

放たれる静電気が、まるで彼女を引き立てるように踊り続ける。それで、あの羽衣は彼女しか使ってはいけない、使いこなせないもの

だと無意識に認識する。

『では行きましょうか。もうすぐでゴールですから頑張ってくださいね』

上を見上げると、終わりのなかった一本道に、僅かな地平線を確認する。

下を見下ろすと、密度の濃い雲で下の状況の一切を見ることができない。

ここまで高いところにあるのならば、天界は独立した国と言っても相違ないのだろう。

封鎖された天界への道、常人が住める環境には程遠い高低差。そこに住む存在は、一体どんな考えを持っているのだろう。

強大な国家の上位に居る奴らみたいに、自分以外の存在を屑にしか見ていないのか。或るいは、その逆か。

いや、そんなことはどうでもいい。

今の私はあくまで家庭教師。他人の領域に土足で上がれる立場ではない。

そんなことばかり考えてしまうのは、やはり職業病みたいなものなのだろうか――

『――あの、着きましたけど』

その言葉で、思考が中断する。

意識を目に集中させると、世界が見えた。

地平線だと思っていたのは恐らく階段の最終段だったのだろう。そうじゃないと、今広がっている光景を説明できない。

私が国と考えていたのは間違いでなかった様だ。

空中にある筈の国は、地面がきちんと存在しており、色んな所にある桃の木のせい、その匂いが鼻腔から離れない。

そこらを歩いている者達も、見た目はまるで人間と変わらない。羽が生えているとかそんな陳腐なものは私だけの思考だったらしい。

地上とは違う所。建物が外の世界寄りで、ここの住人皆は娯楽に勤しんでいる。仕事をしている姿は稀にしか見られない。

裕福なのだろうか、ここの住人は。

『さあ、ついてきて下さい』

彼女に促されるままその後続く。

太陽から圧倒的に近いせいか、多少息苦しさは感じるも、辺りの者は気にも留めていない様子。まあ慣れの問題なのだろうが。

『ここに貴方に会わせたい人が居ます』

着いた場所は、桃の木が辺り一面に広がる庭。

桃の木はあくまで外観だけで、中に入ると芝生が広がる広大な土地に変わる。

その中心に、仰向けに転がっている少女が居た。

青空の様な髪、エプロンドレスの様な服に虹色のフリルが装飾されており、スカートも青空色のものを着こなしている。

恐らく彼女のものであるう帽子は、装飾に桃（本物？）が付いていること以外は衣玖のそれと同質のもので、それは今彼女の顔に被さっている。日除けの為であろう。

衣玖がそれをどかすと、少女の顔が顕になる。

涎を垂らして幸せそうな表情で寝ている姿は、無垢そのもの。
常人なら恐らくは起こすのを躊躇うのだろうが、衣玖は容赦無しに
身体を揺する。これも彼女を深く知り得てるが故か。

『総領娘様、起きて下さい』

その呼びかけに答える様に、少女の身体がピクリと反応する。
少女の顔が明らかに不機嫌なものに変わる。
あれだけ気持ち良さそうに寝ていたのなら仕方ないことではある
が。

『何よ、衣玖……。私に何か用なの？』

『ええ。とても大事なお話が』

気だるそうに身体を持ち上げ、周囲を観察。
そして、目が合った。

『貴方誰？』

『人に聞くのならばまずは自分からでは無いかね？』

『そんなの知らないわよ。まあ、でも答えてあげるわ』

本当に仕方ないから、と言うその言い方に多少彼女に描いていた象
が崩れる。

彼女は、どうやら”黙っていたら”系の部類に入る様だ。
因みに凜もそれだ。

『私は比那名居天子。天人よ』

『私はエミヤシロウ。君達の言う所の外来人だ』

握手をと思い、手を差し出すもそれを受け取る様子は無かった。

『で、その外来人が何でここに居るのよ』

私が起こした行動など眼中に無いらしく、一方的に質問をぶつけて来る。

『それについては私から』

天子の横に佇んでいた衣玖が突然会話に入る。

その自然さは、まるで最初から会話に入っていたのでは無いかと思わせる程。

『彼には、この度総領娘様の家庭教師を勤めて頂くことになりました』

『……………は？』

彼女の素っ頓狂な声に、違和感を感じる。

『ちよつと待ってくれ衣玖。もしかして彼女にこの事を説明してないのか？』

『そうよ！そんな話聞いてないわ！』

二人の疑問と講義を、首謀者に浴びせるも、彼女は至って平静。

『では総領娘様、もし教えていたならば納得と理解をしてくれましたか？』

『そんなの嫌に決まってるじゃないの』

『だからですよ』

事も無げに言い放つ。その清々しさから、取り繕いの言葉ではなく、計画されたものだ と理解した。

天子からは、あからさまな不機嫌さを確認出来る。

それもそうだろう。自分の知らない所で重要な話が進んでいたのだから。

『それに、衣玖が今まで勉強教えようとしてたのになんでコイツなんか――』

コイツ、と言われて多少ムツとするも、衣玖の次の言葉に集中する。

『私も忙しい身なのですよ。総領娘様に構ってられるほど最近は暇ではないのです』

まさかの直接的な一蹴に、二人して間抜けな表情になる。

もう少し柔らかい言いかたもあつたらうに、余程彼女に苦勞しているのか……。

『そんなの知らないわよ！私はコイツの授業なんか受けないからね？』

怒り気味にその場から立ち去ろうとすると、衣玖は表情は笑顔のま

ま口元を歪ませる。

『……………お父様に言いつけますよ?』

その言葉が響いた瞬間、天子の身体が強張り、その場に停止する。振り向いたその表情は、頬が引きつっている。父親に弱いのか、何か落ち度があるのか……………。どちらにしろ、彼女には効果抜群の脅し文句の様だ。

『—————』

静寂。

周囲から聞こえる喧騒が、まるでこの空間だけが世界に取り残されているかの様に思わせる程に、静かな一瞬。

その一瞬が、今終わりを告げた。

『—————分かったわ』

『そうですか。理解していただけで助かりま—————』

『ただし!』

衣玖の言葉を遮る様に放たれた声と共に、私に指指してくる。

『私が出すお題に答えられなかったら、アンタには即、帰ってもら
うわ』

その言葉が私の運命を左右すると共に、彼女にとっての宣戦布告だと言っことを私は理解した。

課せられた試練（後書き）

今回は、超絶我が儘っぷりを誇る天子の紹介。

一比那名居天子 ひななゐ てんし

種族：天人

能力：大地を操る程度有能力、気質を見極める程度有能力（緋想の剣）

二つ名：非想非非想天の娘

見た目：見た目：青色の髪、黒色の帽子に付属されている大小の桃が特徴的。あと緋想の剣（下記説明）を所持している。

性格：我が儘。紅魔館の主と同等の傍若無人っぷり。

天人。ぶっちゃけ凄い奴って解釈で問題無し。

天子の一族「比那名居」は、「名居」の一族に仕える神官の一族で、「名居」の一族がそれまでの功績を認められ天人になった際、ついでのような形で「比那名居」の一族も天界に住む事を許され、天人となった。その時に天子も人間から天人になったので、簡単に言えば親の七光りである。

人間であった時は「地子^{ちこ}」と言う名前で、天人になる際に「天子」と改名。

天人としての修行をしたわけではないので、比那名居の一族は周りの天人からは不良天人などと呼ばれている。

中でも天子はよく言えば自由奔放、悪く言えば身勝手な性格のため色々と手を焼いているらしい。

原作では、天界での毎日に飽きてきた為、幻想郷に異変を起こすこ

とで退屈凌ぎになると思い実行。
その際に、緋想の剣を使用した。

緋想の剣は天人にしか扱えない道具である。

緋想の剣は「天」と「人」に関わる力を持ち、要石（天子が持つて
いる注連縄付きの大きな石）は「地」に関わる力を持つ。

因みに、てんことよく呼ばれる。

俺＞こんにちはT e n k oさん

T e n k o＞何か用かな？

俺＞地震起こしましたか？

T e n k o＞起こした

俺＞そうですかありますがとう緋想の剣すごいですね

t e n k o＞それほどでもない

努力の凡才と努力しない天才（前書き）

キャラごとの内容を執筆していると、どうにも愛が止まらなくなる。執筆前は普通だったキャラとかもいつの間にかグツとくるキャラになってたり。でも一番は決して譲らないが。

努力の凡才と努力しない天才

得意気に仁王立ちしている天子、彼女の発言に呆然としている衣玖、それを達観している自分。

この空間は、今や天子が支配していた。

『総領娘様、まさか弾幕勝負を——』

『違うわよ。何の力も無さそうな外来人に勝負を挑む程愚かじゃないわ。ちゃんと同じフィールドでの戦いになる様に考えてるわ』

なるほど、彼女から見れば私はただの人間と変わらないのか。

まあ、進んでこの力を露呈しようとは思わないが、この様な少女に舐められているのは流石に流石に戴けない。

この勝負とやらでどうにか勝たなくては、色んな意味で私に未来は無さそうだ。

『勝負の内容は、——』

再びしん、と静まり返る。

緊張しているわけではないが、こういった状況はこうなるのが普通だろう。自然と身体が強張る。

『地震についてよ』

地震、つまりは物理学に関する内容か。

『私は大地を操る程度の能力を持っているわ。自身の能力の事だもの、それらに対しての教養が自然と身に付くわ。そんな私に、地震

という理解がある内容で打ち勝つことが出来たのなら、貴方のことは認めてあげる』

「……つまりは、絶対の自信があるからこそこの様な勝負を出した訳か。」

「どうやら、私は彼女には歓迎されてないらしい。
本気で勝ちに来ているその行動から、容赦の無さを伺える。」

「……大丈夫なんですか？」

小声で私に問いかける衣玖。

「大丈夫かは知らないが、やるだけのことはやるさ」

逃げる行為を行うのは簡単だ。でも、退路を探し出せるかどうかは別の話。

ここまで入念に造られた土俵から降りるなんて選択肢、誰が考えよう？

見た目逃げ道はいくらでもあるように見えても、所詮それはそうあってほしいと考えている自身が産んだ幻覚に過ぎない。

この土俵から抜け出す道はただひとつ。目の前で勝利を確信している少女を打ち負かす他無い。

「わかった。その勝負受けよう」

「その心意気や良し。でも結果は見えてると思うけど」

「さて、どうだろうな。油断していると足元をすくわれるぞ？」

お互いに不適な笑みで睨み合うその光景は、不可解であり不気味で

あろう。

かくして、戦いの火蓋は切って落とされた。

『さて、始めようではないか』

『その前に……。あんだ、こんなものどこから出したのよ』

天子が指差す先には、新品のホワイトボードと、ベンと専用のクリナー。

勿論私が投影したものだ。準備があると言って物陰に隠れたときにこっそりと。

『気にするな』

えー、という彼女の言葉を無視し、私は新品のホワイトボードに手をつける。

『地震というのは、普段は固く密着している地下の地盤や岩盤が、一定の部分を境目にして、急にずれ動くこと。また、それによって引き起こされる地面の振動のことを指す。』

では、先ほど述べた内容の前者と後者の名称を何という？』

記憶の引き出しを総動員で開けていく。

地震などの自然現象は、戦いに身を置いた者としては、突如起こる厄災に他ならない。

圧倒的戦力を誇示していても、自然現象には生物である限り敵わない。

知識を得ることによって地形や地盤から地震が起こりやすい土地か、などを見分けられる様にもなり、逆に地震を逆手に取った戦術を組むことも出来た。

戦いは、何も腕っぷしだけで勝敗が決する訳ではない。

弱者は弱者なりに動くことで、勝算の低い戦いにも勝利してきた。利用できるものは常に利用した。

そうでないと待っているのは目に見えた敗北だけ。

『前者が地震、後者が地震動。普段地震と呼ばれるものの大抵は地震動を指す』

つまらなさ気に答える天子。

勝負を挑む気概があるのだから、基礎が分からない訳がない。

……それにしても、戦いの為に憶えた知識が、まさか教える立場となり説明することに使うとは思いもなかった。

それだけ、今の自分が戦いから身を引いているのだらう。意識はしていないが。

『正解。地震が発生する仕組みとして、地球の表層にあるプレートが移動し、押し合いが連続するものがあり、これを？』

『プレートテクトニクス。誰が提唱したかは知らないけどね』

彼女が述べた、提唱した人物を知らないと言う発言に引っ掛かりを感じる。

知らない、と言うことはつまり自己の中にある存在への完全なる否定。聞いたことがある、ならば一度は何かしらの形で触れている可能性を感じられるも、彼女は言葉を濁すこと無く答えた。

と言うことは、この世界と外とは知識——共通する文学であったとしても、何処かしらで差違が発生しているのだろうか。

この世界では私が、いや外の住人には知ることもない様な特別な情報や生活様式などがあると同時に、その分だけ外の世界の一部の知識が渡っていないと仮定すると、彼女の知り得てない情報を当てることが出来れば、多少なりとも活路を見い出せる。

『その通り。地震が発生するのは、プレート間の境界に力が加わる事で歪みが蓄積され、それが限界を超えた時岩盤の一点から破壊が生じ、急激にずれる岩盤によって歪みが開放されるからである。ではその一点のことを何と言うか』

『震源でしょ。このくらいなら常識の範囲内でしょ』

『非常識が常識の世界の住人が言っても説得力ないぞ』

『ですよー』

それにしても、侮っていたわけではないが、こうもスラスラと答えられると逆に教えていて楽しくなってくる。

教え子に恵まれたと考えるか、教え子に対して劣等感ないしは屈辱を覚えるかは人次第だろう。

『地震によって地下の構造に変化が起こり重力値——重力加速度に変化が生じることもある』

その説明をした瞬間、天子の余裕の表情が僅かに崩れたのを見逃さなかった。

『どうした？』

『な、なんでもないわよ。ほら、次に行きなさいよ！』

彼女の動揺から見るに、疑問に感じた部分、あるいは分からない箇所があったのではないだろうか。

しかしこれだけでは確固たる証拠にはなり得ない。もう少し探りを入れる必要がある。

『先ほどプレートが移動し、押し合いが連続するものと言ったが、それはプレート間地震と呼ばれ、海溝型地震もこの部類に入る。まあ余談みたいなものだがな』

苦悩に歪んだ表情が目に見て取れる程に浮き出てきた。

それを悟られないように頬を叩き矯正しているのを気づかないフリをして観察している。

叩いたせいか羞恥のせいか、彼女の頬は多少赤くなっている。

無視していなかったら間違いなく指摘したくなる位の赤面っぷりだな。

……………そういえば、と。

今まで二人だけで会話していたので気づかなかったが、衣玖の姿が見当たらない。

ホワイトボードの裏へ回り、辺りを見回すもその姿は見えない。

仕事に行ったのだろうか。そう結論づけて後ろを振り返ると、ホワイトボードの裏に一枚の張り紙が丁寧に張られている。

その内容を見ると、

空気読んで私はどこかで時間を潰します。

暫くしたら戻りますので二人でゆっくりして行って下さい。

と簡単に書かれていた。

………… お見合いを若いものに任せた家族みたいなことをするな。

確かに彼女が介入するのもよろしくないのかもしれないが、逆にこんな手紙を置かれては私達が邪魔者だと思っていたみたいで心が締め付けられる。

『どうしたの？』

『いや、衣玖が見当たらないなと思ってな』

『ん、確かにいないわね。まあどうせ空気読むだのなんかこじつけていなくなっただんでしょ？』

………… 鋭いな。的を射た答えも、付き合いの長さ故なのか。

天子にそんなことより、と急かされ再び講義を始める。

『ふむ、では続きを。断層のずれによって発生した振動は、地震波という形で周囲に伝わる。地震波には大きく分けて実体波と表面波の2つがあり、実体波はP波とS波、表面波はレイリー波とラブ波にさらに分類される。一般的に地震計で計測されるのは実体波のみであり、震度やマグニチュード、震源位置の推定などは実体波の計測結果から計算される。地震が発生したとき、基本的には、初めに小さなゆれを起こすP波が来て、少し経ってから大きな揺れを起こすS波が来る。しかし、揺れの大きいP波によって被害が出ることもあるほか、震源が近くにある場合はP波とS波がほぼ同時に到達

することもある。地震波を振動として捉えた場合は地震動と呼び、両者は使い分けられる。何か質問は？」

一気に捲し立てて説明する。ここまで来ると自分自身の記憶に自信が持てなくなるレベルだ。

この部分の知識は、必要であり必要でないので言葉として理解していても詳しく説明出来るかと言われたら無理かもしれない。

『――』

天子が俯いたまま黙り込む。そして心なしか身体が震えている気がする。

『おい、どうした？』

肩に軽く前方から触れる。

その瞬間、彼女の身体がそのまま倒れていく。

慌てて空に投げられた腕を掴み、そのまま腰を抱える。

何事かと思ひ表情を伺うと、まるで焼け石の様に顔から蒸気を出しながら、目を回していた。

『重力値……………海溝型地震……………P波……………レイリー波……………実体波……………』

うわ言の様に説明した単語を繰り返して呟く少女。
その姿を見て苦笑する。

『全く、分からないなら素直に聞けばいいものの』

でもそんな少女が、なんだかいじらしく感じ、可愛げを感じた。

『ん…………んう』

倒れた天子を私が膝枕をする形で寝かせて、自身の外套を彼女に掛ける。

夢の中で先程の再現でも行なっているのか、うなされる声が止むことが無い。

起こすべきか放置するべきかを悩みつつ、私はある作業に取り掛かる。

暫く黙々と続けていると、人の気配を察知したのでうつ向き加減だった顔を上げると、衣玖がゆっくりとこちらへと歩いて来ていた。

『あら、総領娘様はどうなされたのですか？』

少し驚いた様子で伏している天子の様子を観察している。

『頭の使いすぎで知恵熱でも起こしたのだろう』

知恵熱なんか出す奴なぞ初めて見たが。

『それで貴方が膝枕を？』

『まあな。勝負に拘らず異変を感じた時にすぐ然るべき対処をしてればこんなことにはならなかったから、これくらいはな』

『いや、それは総領娘様の自業自得なのでは……………』

もつともない分だが、まあそこは私だからな。

改めて考えると、最早脳と身体に刻みつけられた行動が、何とも莫迦らしく感じて来る。

自覚症状で治そうと思わない奴程質の悪い生き物はいないだろう。

この身に刻まれた呪いは矯正しようと考えることすら許さないと無意識下で吼えている。

言い訳にしか聞こえないだろうが、生活習慣病を治す以上には難しいことではあるのは確か。

例えの規模が小さいのは仕様だ。

『それにしても貴方は何を……………』

身を乗り出す様にして覗き込むと、何か妙に納得した表情になる。

『なるほど。そしてこれも総領娘様が倒れた原因でもあった、と』

『まあそうだな。——それよりも、彼女はどれだけ頭が良いのだ？』

途中から感じていた疑問を、衣玖が来たことで着手する。

『私には分かりかねますが……………。一応前まで教えていた私の独断としては、やる気はいつも見られませんでした。それでもそれなりの知識は身につけていたのではないかと。テストを不定期に行なっても、赤点だけは取りませんでしたし』

つまりは、才能はあるのに發揮されないタイプなのか、この子は。まあ確かに彼女の唯我独尊っぷりから判断すると、真面目に教える請おうと考えそうには無いだろうな。

『何故、そのような事を？』

『いや何、単純なことだが、立地条件的に最悪である筈の天界からの仕事要請が、何故下にも行き届いてるのかな、と。——そんな所に範囲を広げてまで教えを請わせる程彼女自身頭は悪くない筈なのに、何故かと思つてね？』

『それは……………』

目に見えて動揺する衣玖。何か不都合な問いだったのは明白だが……。

『ま、別に私の気にする所では無いがね。聞ける身分でもないしな』
軽く鼻で笑いながら肩を竦める。

今のところは何も起きていないのだから、無理矢理答えさせる理由も無いし、意味も無い。

ただ単に、引つ掛かりを解消したかっただけなのだから、これ以上踏み入るのは不粋と言つものだ。

『あの、これからどうなさるのですか？』

先程までの動揺は消えたものの、多少警戒する様にこちらを見据えて来る。

『そうだな。勝負には勝つたから約束通り家庭教師はやらせてもら

うが、彼女自身私が毎日来たら精神衛生上よろしくないだろうし、悪いが不定期なシフトになりそうなのだが構わんかね？』

あの嫌われように更に拍車をかけかねんな。

『はあ……構いませんが、連絡を取れないのは痛いですね。致しかたないのでしょうが』

『すまない、助かる』

会話しながらも休めなかった右手から、ようやく筆が離れる。数枚で構成されたA4サイズの用紙を地面で整頓し、予め投影しておいたホッチキスで纏める。

『そろそろ私は行かなくてはならないが、この子にこれを渡しておいてはくれないか？』

用紙の束を衣玖に向けて差し出すと、それを受け取る。

『これは貴方が渡した方がいいのではないですか？』

『時間に余裕があればそうしたいが……仕事のシフトが こうなつた以上、空いた時間で出来るだけ他にも仕事をやっておきたい。だから直ぐにでも違う仕事のアテを探したいんだ』

それに、と付け加える。

『こんな幸せな顔をしながら寝てるこの子を起こすと言うのは、不粹ではないかね？』

時間が経ったことで容態が安定したのか、苦しみに喘いでた天子の表情は今や最初に見た柔らかな寝顔を晒している。優しく髪を撫でると、気持ち良さそうに僅かに身体を震わせる。その姿はまるで猫みたいだ、と思ってしまう。

『わかりました。その様に計らいます』

その答えに頷き、私は天子を起こさない様にその場を離れる。相変わらずの寝息の整い様で胸を撫で下ろす。

『では、これで失礼するよ』

『また、いつか』

お互いに挨拶を交わし、シロウは階段へ、衣玖は天子の前へ腰を降ろした。

目を閉じている筈なのに、視界には白が大部分を占めている。僅かに開くだけでその白が広がり、不快感を覚えさせる。だから本当はずっとこうしていたかったのだが――

『気がつかれましたか？』

聞き慣れた声に、その甘えは捨てなければいけない事を知る。目を閉じたまま身体を起こし、少しずつ瞼を開いていく。

見慣れたそのディテールは、僅かながらのそれでも目の前の正体を理解させる。

『衣、玖……………』

『はい、衣玖です』

柔和な笑みを浮かべる女性が、こちらを真っ直ぐに見つめている。

『私、なにしてたんだっけ』

記憶がぼやけて先程までの白と黒の世界以外の情景以外が不鮮明になっている。

『総領娘様はシロウ様との勝負に負けた様です』

あまりにも端的な答えに、一瞬混乱したが、すぐに思い出す。

『……………ああ』

自身の情けない姿を想像する。

あの時に問答していた私の姿はアイツにどんな風に映っていたのだろうか。

アイツはさぞいい気味だったろう。

『ってあれ？アイツは？』

周囲を見回してもあの特徴的な赤を捉えることは出来ない。

『シロウ様なら、先程他の用事で出ていかれましたよ』

嘘………それアイツ勝ち逃げしたってことじゃない！
その事実、悔しさに下唇を噛み締める。

『それと、シロウ様が総領娘様にと』

そう言つて差し出された紙の束。

『何よこれ』

『私は中身を見ていないので知りませんが、貴女の為に書いた文章の様ですよ』

紙の一枚目から、所狭しと字が敷き詰められている。

ここで使われている筆が、自身の知らない技術だという点に気付く前に、内容に没頭していた。

最初に書かれていた文章は、アイツの語りだった。

内容は単純なもので、私が倒れたことに対する謝罪と、家庭教師は不定期に行う事実と、最後にこの紙は捨てるも破くも自由だと、あっさりとした言葉が書いてあった。

紙の枚数を数えると、十枚は最低でもあった。

アイツ自身、これを私に読ませたいが為に執筆した筈なのに、破いても構わないと書くのはおかしいのではないだろうか。

『これは私が勝手に書いたものだから、読むも読まないも自由だ、か』

語りに書かれていた一文を独唱する。

莫迦みたい。そんなんじやアイツがやった行動全てが無意味になる可能性だってあるのに。

本当にそれが莫迦らしくて。

だからだろうか、同情のつもりで読んでやろうと思ってしまった。

語り以外の内容占めていたのは、地震の事だった。それもアイツが題したもの全てがともわかりやすく、妥協など無い文章だった。これを見るだけで膨大な労力だと理解する。

私が理解していなかった部分なんかは特にわかりやすい。

もしかして、アイツは全部分かっていたのだろうか。

私が理解に及んでいない部分を全て見抜き、こういった書物として形にした。

『……………お節介』

単純に、そう思ってしまう。

もしかすると職にあぶれる可能性だってあったあの状況で、他人の心配なんかして。

アイツに感じていた苛々がすつと収まっていく。

莫迦もここまで来ると呆れるしか無い。

全て読み終え顔を起こすと、先程と変わらないままの衣玖が佇んでいた。

『どうでしたか？』

感想を聞いてくる衣玖に、私は今の気持ちを答える。

『アイツ、莫迦の塊よ。とんでもない大莫迦』

ここまで莫迦な奴は、初めて見たかもしれない。
でも、だからこそ――

『だからかな。アイツに興味が湧いてきたよ』

あんな面白い奴、興味が湧かない訳が無い。

アイツが家庭教師をやるってのなら、とことん楽しませてもらう
じゃない。

『そうですか。それは何よりです』

一人は太陽の様な、一人は花の様な笑みを交わし合う。
無邪気さと母性が、彼女達を一杯にしていた。

努力の凡才と努力しない天才（後書き）

はい、書くことなし！

取り敢えず天子のストーリーは一時中断という形になります。

次にまたバイトを行い、その次もバイト。そしてそれらを終えたらまた天子にループする方式です。

バイトの内容は次のお楽しみですよフッフ。

普通に執筆してたら滅多にあわなさそうなキャラとかいそうで、そういったキャラはもしかすると無理矢理感が出てくる場合もございますが、ご了承下さい。

あと今回天子の話で地震の内容を執筆しましたが、これは作者の趣味です。

ぶっちゃけ天子ルートはお勉強なので、作者の趣味が入ったお勉強内容になってしまいますが仕様です。気にしたら負け。

悪戯三月精と迷い足の騎士（前書き）

私事で遅くなりました。なんか今回無駄に長いです。なんでこんなに長くなったか自分でも理解できません。あと軽く私事のせいで集中力切れてたので後半文章が変かもしれないませんが、生暖かく見守って下さい。

悪戯三月精と迷い足の騎士

天と地を繋ぐ階段を降りた後、振り返りその姿を焼き付ける。

雲を貫くその壮大な存在感は、私と衣玖らにしか捉えられないこと自体が信じられないほど。

しかし、これだけのものが現れたにも関わらずここら一帯に人気を感じないと言うことが、本当に見えてはいない証拠でもある。

しかし、不定期に来る事を承認したということは、これは常に解放されていると言うことなのだろうか？

そんな事をしては、何かしらの因果によって存在が広まる可能性だってあるのでは無いのだろうか。

それは衣玖にとっても、天人にとっても都合の悪い事。そしてその時に責任を取らされるのは間違いなく……。

階段から背を向け、心無いまま歩き出す。

自分の都合ばかりが視野に納め、大局を見誤ってしまうこの体たらく。昔の自分ならばそんな事は決して有り得なかっただろう。

私が幸せになる事。それが今の自分が生きる明確な目的。

しかし、他人を蔑ろにし自身だけが良い思いをする。それは本当に私にとつての幸せの定義に当てはまるのだろうか。

私の求めるべき幸せとは、誰かのマイナスを自身のプラスへ変える事で成り立つ穢れたものなのだろうか。

皆が言う。私は他人を第一に考え、自身はその枠にすら入っていないのだと。

—— 違う。そうじゃないんだ。

少なくとも、今は違う。そうはつきりと言える。

昔はただの憧れだった。眩しい位に真つ直ぐなその存在が、私の人生そのものを突き動かしていただけ。

自分の意思などそこには無く、まさに傀儡の如くさ迷っていただけに過ぎない。

誰かを救う事は悪いことには決して成り得ない。例えその対象にどんな要因が働いていたとしても。

しかし、私が本当に救いたい者。その殆どが世界の意思によって切り捨てられた者、つまりは存在価値自体を否定された憐れな生き物を差す。

障害者が全て社会不適合者だと言う偏見と変わらない。ただ目先しか見えない事実だけを捉え切り捨てられた結果、その対象はおのずと絞られる。

世界にとって価値が無い者が天秤に掛けられた瞬間、そこに重さは無くなる。いや、元々質量すら無いものと扱われる。

それは余りにも無情で、救いが無い。

運命と諭されて納得出来る様な安っぽい出来事なんかじゃ無いのに、何も知らない者からすればそれ以外の何物でも無い。

知ることと絶望しながら死に絶えるか、知らないまま理不尽と嘆きながら死に絶えるか。その違いなど皆無に等しい。

先行く未来が変わらないのなら、どちらが一番マシと捉えるのか。

私は、それが嫌だった。

意味もなく死に行く人、理不尽に苛まれる人。

運命と言う不確定要素に抗うには余りにも弱い人間を、救いたかった。

この世の誰しもが救えないのなら、弱き者の手を取ろうと思う事は間違いなのか？

涙は枯れ、流れるのは血液のみ。

人としての意識は砕かれ、残るのは無惨な姿の硝子のみ。

これならば機械になればどんなに楽かと思う事すら許されなかった。

私の正義の味方になりたいと思う意思が心のギリギリを支え、それがとてももどかしく、まるで拷問の様に生かさず殺さずを保っていた結果、私が生まれた。

世界に必要な者——つまりは強者ばかりを優先する守護者としての在り方が、私を汚染した。

強者を生かす為に、弱者が屠られる。いや、意思とは無関係にこの手で屠り続けていった。

それが、守護者としての代償だったから、私はその状況に縛られるしかなかった。

でも、それはただがむしゃらだっただけ。

各個たる信念を築き上げたと自惚れたそれには芯が入っていなかった。

これでは私利私欲で動く俗物と何ら変わらない。

救うべき者すら定まらず、自己満足だけで悦に浸っていた莫迦者。

正義という欲望を、弱き者に対して捌け口にする醜悪の権化。

私はその事実に関心くのが遅すぎた。

気がつけば私は衛宮士郎の抹殺と言う望み薄の悪足掻きにすがっていた。

最早自分自身への復讐しか無いと考えていた自分は、盲目的にそれを追い続け、その為に何もかもを捨てた。

殺人に対する背徳感。

躊躇う程に非道な戦術、戦略に対する恥の心。

正義の味方としての私の人生。

——私が今まで救えた者の意味。

仮に衛宮士郎が死に絶え、その影響で私も同じ末路を辿ったとして
う。

ではその後起こり得る未来——本来私が救えた筈の死する運命
にあった存在はどうでもいいと、関係無いと被りを振ってしまふの
か。

私の信念が、正義の味方への思いが弱かったから望んだ我が儘によ
って、何百、何千の人間が死んでしまふ。今考えても自身の莫迦さ
加減に憤りすら覚える。

機械が心を持ち合わせた事による内面からの破壊。

視覚で確認できる肉体の破壊とは違い、それは外側の肉体が変化す
るまで削れなければ、気付かれない。そして、気が付けばもう手遅
れ。

誰かに内面の破壊を認識されない限り、止まる事は無い。

しかし、機械自身にはそんな術は無い。いや、ある筈なのにそこす
らも壊れてしまい、最早自分自身が分からなくなる。

だから誰かが向き合うしか、そのガラクタに救いは無い。

数多の命を救えても、自分自身は救えない。たとえどんなに救いを
懇願したとしても、救われる為に努力したとしても、誰かが手を差
し伸べなければ糸口すら掴めない。

悔しいが、それが自身を投げ打ってきた者への罰なのだろう。

『ふう……………』

この手の事を考えて、何度目の溜息だろう。
何度も問答しては出るのは溜息のみ。虚しいにも程がある。

恐らく前にもしたであろう、顔を左右に振り意識を外へ向ける。
そこで気が付く。

『どこだ、ここは』

迷っていた。

森の中で三つの影が三つの感情を露にしている。

『キャハハハハ！せいこうせいこう！』

愉しそうにぐるぐるその場を回転している金髪の少女。

『ちょっと、そんな大きな声出さないでよ。バレちゃうじゃない』

その姿を叱り付ける金髪で縦ロールの少女。

『——ねえ、やっぱり止めといた方がいいよ……………』

何に対してか怯えをみせつつ、今しがた行った事への中止を訴える
黒髪ロングの少女。

その三人は、形は違えど共通的に羽が生えていた。

幻想郷の住人なら、その姿を見れば一度で理解できる容姿をしている。

妖精。

常にその姿は子供と同等の大きさしかなく、しかしその背中から生えたものから、人間とは違う存在だと認識できる。

人間よりも下位の存在として扱われ、肉体的な死を迎えても蘇り続ける。ある意味不死に等しい存在。

知力もその見た目同等位しかなく、毎日楽しそうに騒ぎを起こしている。そして退治されてはこりずに繰り返す。

そして今この少女達は、ある標的に対して悪戯をしかけていた。そいつはその悪戯に気づかず、右往左往としている。

金髪の少女——サニーミルクは光の屈折を操る程度の持ち主である。

縦ロールの少女——ルナチャイルドは周りの音を消す能力の持ち主。

黒髪ロングの少女——スターサファイアは、生物の動きを補足する能力の持ち主。

彼女達はこの能力を駆使して、対象を迷わせる遊びをよく行っている。

光の屈折で景色に嘘を与え、景色の安定しない森の中を迷わせる。音を消すことで自身の位置を把握させなくする。

補足する能力で対象の位置を常に把握したり、悪戯の対象を簡単に探し出せたりする。

直接的な戦闘ではそこまで意味をなさない能力だが、悪戯限定ならばこれほど有効なものは無いだろう。

『大丈夫だつて。ルナが音消してくれれば逃げ切れるし』

『ったく、それで何回捕まったりしたと思ってるのよ』

金髪二人が軽い言い合いをしている間、もう一人の少女は言うべきか悩んでいた。

それは、少し前に遡る――

『暇』

サニーミルクが、唐突にそう言った。

他の二人は、またかと思いつつその少女へと目をやる。

『そんなのみんな一緒よ』

『ならまたあれやろうよ』

ルナチャイルドがいつもどおりの返しをすると、サニーミルクもまた殆ど変わらない返しをする。

スターサファイアは木陰で小説と思わしきものを読んで、二人に干渉する気は一切なさそうだ。

『こんな時間に？』

ルナが上を指すと、日は傾き初めていた。遊ぶには少々遅い時間帯ではある。

『あれをやるにはもう遅いんじゃない？暗くなればこんな森のになんか誰も立ち寄ろうなんて考えようと思わないでしょ』

『そんなのわかんないじゃん。てか、それを探す為にスターサファイアがいるんでしょ？』

自分の名前を呼ばれたことで、スターが顔を上げる。

『めんどくさい。大体結果的に怪我したりする可能性ばかりじゃない』

冷静にそう答える。

彼女からすれば、その能力のせいで欠かさず連れまわされとばっちりを食うにも等しい位置に立たされているのだから、当然の反応ではある。

『そんなこと言わないで、無敵の「スターサファイア」さんなんとかしてくださいよオー！ーッ！ー！』

『無敵ならやられてないわよ』

ポケモスルー。慣れだろう。

ボタン、と音を立てて本を閉じると、軽い溜息を吐く。

『仕方ないわね。ちょっと待ってて』

拒否を繰り返していても五月蠅いだけと悟ったのか、目を閉じて両手で輪を作り出す。これが彼女が能力を使うときの儀式である。

視界が一切の黒の中、浮かび上がる幻想郷の情景。

四方八方あらゆる位置から覗ける世界を、自身がいる森の中だけに

絞る。

森の中くまなく探し出すと、ひとつだけ存在を感じ取れた。動物とは違う、確かな存在を感じる。

『ひとつだけ……存在を感じれたわ。でも——』

『よし！じゃあそこへ向かうわよ！』

それを聞いた瞬間、サニーがばびゅんと飛び去っていった。取り残された二人は、その姿に呆れ返る。

『仕方ないわね、いきましょ。あいつ場所も知らないのに全く……』

『え、でも——』

全て語り終える前に、ルナもまたサニーの消えた方向へと姿を消した。

『……………でも』

その場でぼつりと呟く。

あのとき感じた存在を容易く感じ取れたのは、森の中にいる生物が少なかったからだけではない。

その存在を捉えた瞬間、理解した。今まで悪戯をしかけた誰よりも——強大な力を所持している奴だったから、引き付けられたのだと。

私達が居住している大木の近くの神社に住まう博霊だったかを探知したときも同じ感想を抱いた気がするが、そんなものが霞んで見え

る位に力強く、雄雄しく、何故か暖かい感じがした。

私が二人の制止への遅れたのは、その暖かさのせいだった。

ただ強大なだけの力ならば、絶対に近寄らない為に必死に止めていたであろうが、その暖かさのせいで、一瞬大丈夫なのではと躊躇ってしまった。

『急がなきゃ』

考えてみれば、そんな不確定な感覚だけで信用できるほど自身の能力が強いと自惚れてはいない。

一度も感じたこともない力なのだから、一目見ない限り不安は募る。死なないからといって、死地に向かうのは愚かではない。でも二人が心配なのは確か。

出来れば二人がその存在に気がついてませんように。そう願い急ぎ追いかけた。

結果、彼女の真摯な願いは叶えられなかった。

追いついた頃にはサニーは能力を発動していた。幸い、能力には気がついていない様。

今更答えても聞いてくれないと判断したのか、彼女は常にその存在へと注意を払っている。

私が時いた種でもあるから、出来る範囲で被害を抑えようとする。

突如、そいつの動きが止まった。

先ほどまで我武者羅に歩いていただけだったそいつは、まるで気配を殺す様にその場にびくりとも身体を止める。

ぞくり、と背筋が凍る。

久しぶりに感じた明確な死の感覚、それに中てられてる。ここにいれば間違いなく死ぬ。そう本能が告げている。

そこからは、一瞬だった。

今まで監視していた奴なんか脇目も振らず、ただ横に居る二人に押し倒すように飛び込んだ。

正直、このとき無意識に二人の口を塞いでたのは僥倖だった。

そうじゃないと、間違いなく逃げ切れない。

ドズン、という音に振り返ってみると、私達がいた場所の後ろにあった巨木に白と黒の剣が深く刺さりこんでいた。

距離に関してはやっと視認できるかどうかだったかのものだった筈なのに、殺気を感じた刹那、一秒経ったか否かの速さで今の状況が出来上がっていた。

見た目武装などしていなかったのに、こんな一瞬で武器を投げて、こんな速さで投擲したって事——！？

二人も現状を理解してないようで、逆に大人しくなっている。それにホッとした瞬間

『君達は……………？』

とても大きな存在が、私達を見下ろしていた。

『君達は……………？』

見られている気配を感じてから数十分程。襲われる気配もなく不気味だった上に、迷って少しイラついてたせいか、少し攻撃的になっってしまった。

今回はちゃんと木に登って位置を確認したのに、何故か歩いてみれば予定外の道。

上り下りを繰り返していれば、大抵は嫌になる。

その結果、目の前にいる少女三人に出遭った。

太陽の様な金髪にカチューシャらしきものを着け、赤色に白を基調としたメイド服っぽい姿をした少女に、こちらは月光が似合いそうな金髪に縦ロール——ルヴィアを連想させる髪型で、白を中心とした催し物に対照的に飾り付けられているリボンが映えている少女に、唯一黒髪でロングヘアの、青を中心としたドレスにリボンの、明らかに脅えた表情でこちらを見ている少女が居た。彼女達のすぐ近くに刺さっている干将・莫耶が、その理由を物語っている。

『あ、その——』

『なにすんじやいスター——!!』

謝罪の言葉を述べようと口を開いたと同時に、金髪少女が上に乗ってかっていた黒髪の少女を飛び起きながら跳ね除ける。

一緒に倒れていたルヴィアな子はやれやれと言わんばかりの表情で、気だるそうに起き上がる。

『いきなり飛び込んで一緒に口塞いで……頭ぶつけちゃったし息できなかつたし——!!』

うがー、と吼えるように怒涛の文句を垂れるその姿から、活発な性格が覗ける。

対してそれに圧されている黒髪の少女からは物静かな印象を与えられるが、微妙に違う感覚も同時に与えられる。

『お、落ち着いて。だってあの時はこうするしか――』

『だってヘチマもない！謝れ！全力で謝れ！』

留まることの知らない孤独の謝れコールが森中を木霊する。

そんな中、痺れを切らしたのかちびルヴィアが吼える少女の後ろから肩を引つ張る。

『なによルナ！今忙しいんだから後に――』

振り向き様にルナと呼ばれた少女が、くいくいはこちらに親指を向けてくる。

その指の先をなぞる様に視線を辿っていくと、私と目が合った。

『あ………』

どうやら今の今まで存在を認識していなかったらしい。目が合ったまま硬直している。

そこから動きがあったのは、右頬だった。冷や汗をかきながら頬をヒクヒクさせている。

その理由を知らない彼としては、この反応はまるで幽霊を見たかのようにだと思っだろう。

事実、彼女はそれと同等の驚きと反応を見せていたから違いはない。

『うわあああああああつ！！』

先ほどまでの一番大きな声よりも遥かに大きな声が響き渡る。腰を抜かしたのか、尻餅についてそのまま後ずさり距離をとる。

『あ、あああんたいつの間にいるのよ!』

『いや、君達が倒れ伏している時にはいたのだが』

『あんたみたいなデカブツが近くにいて、分からない訳ないじゃない!』

デカブツなんて初めて言われた。確かに彼女の身長からすればそうかもしれないが、まるで私はただデカイだけの奴みたいではないか。

『いや、この人が言ってる事は正しいわ』

怒鳴られ続けていた少女——スターだったかと呼ばれていた子が介入してくる。

それで納得したのか、大人しくなる。聞き分けは悪い訳ではなさそうだ。

『すまない。先程まで道に迷ってしまっていてな。どうにも抜け出せなくて躍起になっていたせいで敏感になっていた様だ。まさか君達みたいな子供がこんな時間に森にいるとは予想外だったんだ』

勢い強く頭を下げる。運が悪かったら彼女達に怪我、最悪□してしまっていた可能性だってあったのだ。土下座しても許される筈もない。

『あ、あの……顔を上げて下さい』

『そうはいかない。君達を傷つけてしまう所だったのだ、謝って許してもらえない問題ではないのは承知している』

『――』
重い空気が辺りを支配する。

未遂で済んだのだからそこまで思い詰めるべきでは無いと諭されても、私自身納得していないのに許されるなんて甘い考えは持てない。

『ねえ。頑なになるのは勝手だけどスターが困ってるから頭上げてくれない？』

『……………む』

そう言われてしまうと、反論も反抗も出来ない。
私は言われるがままに顔を上げることにした。

『全く、大の男がちょっとした失態にネチネチと拘って……………。女々しいいたらありやしない』

『ちよつとルナ……………』

いつも私が凜とかに嫌味を言うときと似た体勢で私を罵倒するルナに、それを止めようとするスター！。

『……………すまない』

『だから謝らないでよ。怒ってないのに謝られても無意味にこつちが意識しちゃうじゃないのよ』

『分かった。ではこれ以上は何も言わない』

『よろしい』

自身よりも遥かに小さな子供に説教されてるその姿は、滑稽なものだろう。

スターは未だに表情に不安の色を残したまま。やはり先程のあれの名残があるのだろうか。

しかしこれ以上謝らないと宣言した以上、私はそれを守ることを優先する。

『あ、あの………』

そんな彼女が、恐る恐る尋ねてくる。

『何かね？』

『貴方、誰ですか？』

その言葉には名を尋ねる以外にも含みを感じたが、追求してまで聞くべきことではない。

『私はエミヤシロウ。君達は確か、スターにルナに——』

『サニーだよ。正確にはスターサファイア、ルナチャイルド、サニーミルクだけど』

『ふむ。いい名前じゃないか』

『当たり前じゃない！』

えっへんと胸を張るサニー、それに呆れるルナ、苦笑するスター。

三人寄れば姦しいと言うが、どちらかと言えば彼女を中心としての光景が生まれてるのだろう。

『それにしても、君達みたいな子がどうしてこんな森の中を？』

『えーっとそれはね〜』

サニーが意気揚々と話し始めた瞬間、スターがその口を塞いだ。サニーはもがもがと暴れてるが、スターはそんな事気にも留めていない様子。

『あ、いや。私達は遊んでただけですよ。ねっ？』

『え？うん、まあそうかしらね』

ルナに同意を求める姿には焦りが見られる。何か怪しい感じはしなくは無いが、些末事だろう。

『とにかく、日も落ちかかっているのだし帰った方がいい。森というのは夜になると視界も悪くなると同時に、獰猛な生き物が活発になることが多い』

『大丈夫だよ。そんな危険ならスターがなんとかしてくれるから』

笑顔で親指を立ててスターサファイアへと向けるサニー。

ルナチャイルドはそんな姿を呆れた風に傍観し、スター自身は最早諦めた風に肩を落としている。

『ん？どういう意味だ？』

『スターにはね、生物の動きがわかる能力があるんだ。それさえあれば危ない場所には近づかないさ』

そんな二人を尻目にサニーミルクが語る。

その言葉に私はスターの姿を観察すると、彼女は疑問符を浮かべた。夕闇のせいで視認出来なかったが、集中すればうつすらと生えている透明な、まるで羽化したばかりの蝶のような羽が彼女にあるのに気がついた。

それに連なつて残りの二人も観察すると、皆異なる形の羽がある。

『君達は……………』

『だからサニーに……………』

『違うわよ。名前じゃなくて、羽のことでしょ？』

私の意図を読んできたルナが端的に説明する。
それにサニーもああ、と納得した模様。

『私達は妖精。一度くらいは見たことあるでしょ？』

妖精……………地域によって色んな見解があるが自然崇拜、精霊崇拜等で森羅万象に宿る命を指す、人の形を模した精霊を表している単語現象であるそれらには死という概念は無く、その元となっている物——森の妖精ならば、森という存在をこの世から消さない限り消滅することが無い。

書物以外で初めてその姿を見たが、人の形を模しているとはいえこれは完全に幼い子供ではないか。
これも幻想郷故なのか。

『すまん、見たのは君達が初めてだ』

その言葉に、明らかに驚いた様子を見せる。

『はぁ！？妖精なんてそこらにごまんといるでしょ。それなのに見たこと無いって、どんだけ目が悪いのよ！或いは周りを見てないか』

…………グサつときた。

私は反論する言葉も見当たらず、手と膝を地面に落とす。
なんだ、この無駄な敗北感は。

『サニー、彼つて外から来たんじゃない……………』

スターが遠慮しがちにそう答える。

『そうなの？』

それを確認すべく、こちらへと問いかけるサニー。

『確かにそうだが……………』

『来て何日目くらい？』

すかさずルナが質問する。

『4～5日くらいだろうか』

『それなのに妖精は見たことない』

『……………ああ』

まるで脅迫面接みたいな気分になる。

相手の弱いところに付け込んでボ口を出させる、そんな感じ。

『じゃあやつぱり周りを見てないだけじゃない！』

探偵が犯人に決定的証拠を突きつける、形は違えど状況は一緒だった。

『くつ——！』

負けた……………勝負すら挑んでないのに負けた……………。

がつくりとした先程の体勢に、重みがさらに増す。心が重い。

『ま、まあそんな気を落とさずに……………』

『いや、慰めるところじゃないから』

スターが的外れのボケ（本人は普通に心配そうにしてたが）にルナが的確な突っ込みを入れる。

『そんなことよりも、貴方どこへ向かう気だったの？こんな森の中の先なんて、ロクなもんじゃないわよ』

『宛ては無い。だがじつとしてるわけにも行かないんだ』

この子達にバイトのことを言っても無駄だろう。そう判断して適当に答える。

『ふうん、でもここにいるのはよろしくないだろうし取り敢えず出たら？ここから』

会話をしていた気がつかなかったが、日はどんどん傾いてきており、夜になるのはあと僅かといったところだろう。

『しかし、先程も言ったが迷っていてな。闇雲に歩いているつもりは無いのだが、どうしてもおかしい場所に行き着いてしまうんだ』

その言葉にルナが少し考えた後、サニーに目配せをする。それを理解した様子のサニー。

『森を抜けるならそこから真っ直ぐ行けば出れるよ』

『しかし、先程向かったのだが』

『私を信用して。今度は大丈夫の筈だから』

『……………？』

彼女の自信が分からないが、彼女達のほうがここに詳しいだろうか信用しよう。

『分かった。でも君達はどうするのだ？』

『貴方の言つとおり危ないだろうし、退散するわ』

『そうか。有難う、助かった』

『お礼を言われる程の事じゃないわ』

ルナと会話してる中、後ろでサニーがバツの悪そうにしていたが何かあったのだろうか。

しかしこれ以上会話をして彼女達を留まらせるのはいけないと判断し、聞かないことにする。

『では、またいつか』

『その時は一緒に遊びなさいよねー！』

『まあ、死んでなければね』

『あの………本当にすみませんでした』

三者三様の言葉を背中から受け、私はルナに言われた道を歩き出した。

悪戯三月精と迷い足の騎士（後書き）

三月精を一気に紹介してやるっ……………！！

三人紹介することもあつて小説内で書いた部分の紹介は端折ります。とはいっても重要な部分は書きますが。

サニーミルク

種族：妖精

能力：光を屈折させる程度の能力

二つ名：悪戯好きな日の光

性格：明るく天真爛漫。三月精の中でリーダーっぽい感じ。熱血。

三月精は原作には登場せず、漫画や小説で登場する。よって知名度はそこまで高くない。地味。

結構な出力の光線を放つことも可能なようだが、目くらまし程度の効果しか無い。

太陽の光を浴びると傷の治りが早い。

ルナチャイルド

種族：妖精

能力：音を消す程度の能力

二つ名：静かなる月の光

音を消す能力の効果は、自分を中心として一切の音を消すことが出来る。

たまに無意味に使って存在をアピールしてしまう時もある。

鈍くさいらしいが、私の中だと……………どうだろ。取り敢えず冷静な

観察眼を持つキャラって位置づけ。

月の云々があるせいか、普通より夜更かし。
月の光を浴びると怪我の治りが（ry

スターサファイア

種族：妖精

能力：生き物の動きを捕捉する程度の能力

二つ名：降り注ぐ星の光

星の光の妖精。能力は三妖精の中でリーダー的な役回りで間接的な
がら重要。三妖精の中では唯一天候に関係なく能力が使える。

気まぐれな性格らしいが、私の中では大人しい感じで成り立ってま
すフヒヒ。

大阪人なしやべり方をするらしいが、私の中では（ry

東方内で見た目が酷似しているキャラがいて、その偽者扱いされ
たりする。或いは娘。

絆（前書き）

今回シロウは出ません。その代わりシリアスっぽいです。あと長い
です。

絆

そこは、地獄だった。

鼻につく肉の焦げた臭い。パチパチとかすかに聞こえる万物の燃える音。

私の周りから聞こえる阿鼻叫喚、死者の声。

誰が見ても、ここにいる全ての人は助からないと理解できる。

それ程にこの世界は死に満たされていた。

『お、え——』

今の今まで我慢をしていたが、耐えられなくなり込み上げてきたものを吐き出そうとするが、特別そんなものは無いのか胃液だけが吐き出され喉に痺れを与えるだけに留まる。

でも、ここで吐き出していたなら心が折れていたかもしれない。

だって、この生きた亡者の群れの中で平然と生き延びているという罪悪感に押し潰されそうになるから。

勿論ただ立ち尽くしてた訳ではない。

その惨劇を目撃した瞬間、私は自然と身体を動かしていた。

しかし私が手を差し出しても誰もそれに気付かない。触れようとしても何かに阻まれた様に当たるギリギリで腕が進まない。

それで実感する。

これは、夢なんだと。

夢というのは、無定型でどんな理不尽でも叶えてくれる、まさに夢の様な空間だと思っていた。

しかし今の状況は、まるでアドリブの許されない劇で踊らされている

るに等しい。

僅かな事実すら変えることは決して許されず、それになぞっていくだけ。

これは、本当に夢なの？

こんなにも救われない世界を、何で私が見なければいけないの？

何の、為に――

出来るだけこの光景を焼き付け様と辺りを余すこと無く直視する。それが今の私が出る役目だと、そう言い聞かせて。

そんな中、生存者を見た。

中年男性だろうか。髪、服装とも不精で、あまりにも生活観の無いその姿はホームレスを連想させる。

彼もまた先程の私みたいに瀕死の人達へと手を差し出述べてる。ただ違うのは、彼はこの夢の住人だと言うことだけ。

彼は私と違い、抱き抱える行為や手当てをする事が出来た。でも、そんな事が出来るからって救える訳では無い。

地獄にいる死者を現世へ引っ張り戻すことは不可能なのだから。

それでも彼は生存者を探した。

砂漠の中に落とした指輪を探すみたいに、とても低い確率にすがって。絶対に助けれると信じて。

その姿が、とても痛々しかった。

罪の意識に駆られたその表情。まるで彼がこの地獄を創り上げた張本人だと言わんばかり。

その表情には、救いが無かった。

もし生存者がいなければここで一緒に死に兼ねない位に逼迫してい

る。

私は、自然とその姿を追いかけていた。

誰かが見ていないと、簡単に死んでしまいそうな気がして。

——それと、彼を見つけた時から何故か頭の中で声がしたから。

目を背けてはならない、貴方は知るべきだ、と。

その声に操られるかの様に、私は男を追いかける。

駆け抜ける先には数多の死。

それでも、立ち止まる訳にはいかない。

今の私には、知らない人間なんかの死よりも彼に追いつくことの方が大事だった。

普段の私ならそんな選択はしない。

でも、これは夢だから。

客観的に見せられているだけの存在には、どうしようもないんだ。

どう、しようも。

突如、男が足を止めたかと思うとおもむろに地面に膝を着く。

目線の先には、年端もいかない子供がいる。

茶色の短めの髪少年、どうやらその子はまだ助かるらしい。男が安堵の息を漏らしているその姿からそれを伺える。

よかった、こんな世界にも小粒のような救いはあったんだと嬉しく感じる。

突如、黄金が視界全てを支配する。

男の身体から——いや、その黄金の光がどんどん身体から剥離していくと、ひとつの形を成した。

それは、鞘。

煌びやかに彩色されたその鞘からは、惜しみなく黄金の光を発現している。

見るだけでこれは凡人が持つべき物ではないと理解できる。

これは恐らく、有名な過去の偉人か誰かが持っていた由緒ある代物なんだ。

では、この男が過去の偉人だともいうのだろうか。

……とてもそうには見えない。

男の手元にある鞘が、形を崩していく。

それが、先程の男に起こったものと寸分変わらず少年へと移行した。

身体に染みこんでいく光の粒子。それに比例して少年の身体の火傷傷は癒えていった。

一体どういうことなのか。まるでその思考を遮るかの様に、私の意識が朦朧としていく。

ここまで見せておいて、これ以上踏み入るなどでも言いたいのだろうか。

どんどん薄れてく意識のなか、再び頭の中に声が走る。

——まだ終わりじゃない。けれど今踏み入れば貴女は心がこの世界に囚われる。

強くなりなさい。身体ではなく、心を強くしなさい。それが貴女に出来るただひとつの事柄であり、貴女にとって一番の幸せに繋がる事柄よ。

その意味を理解する前に、私は死の世界から引き剥がされた。

幻想郷で一番の大きさを誇るであろう巨大な建物。

その概観は、真紅に包まれた城のような館、その一言に尽きた。

その巨大さとそこに住む住人達のせいかな、その周囲には人がまる
で無い。

太陽が真紅の壁に反射し、明るさに拍車をかけている。必要以上に
眩しく見えるのは、まるで動物が行う威嚇の様だとも思える。

そんな館の所有者である吸血鬼の少女が、玉座の肘掛に身体を持た
れかけて傍に整然と佇んでいるメイド長へと声をかける。

『ねえ、咲夜』

咲夜と呼ばれたメイド長の少女が、静かに主の方へ向かい合う。

『なんでしょうかお嬢様』

『楽しいこと、無いかしら』

咲夜は、少し呆然としながらも、主の質問に答える。

『その質問、何回目ですか？』

『そんな無駄なことは考えない』

はあ、と呆れた様に溜息を吐く。

主に対して遠慮を感じさせないのも、側近であり、信頼されている
からこそ。

『昼間は太陽出てるから行動が制限されちゃうし、夜になるのを待ってたら意味ないし。何より夜は皆大抵寝てるしそろそろ飽きた』

夜の支配者である吸血鬼とは思えない言動。同族が聞いたら何とちゃうだろうか。

吸血鬼は、太陽に弱く、故に夜を泳ぐ。人間が昼に寝るのは対極的に、吸血鬼は普段昼に寝ているもの。

しかし今日に限って彼女は起きていた。彼女自身が気まぐれな性格である故か、行動に一貫性が無い。

突拍子的に何かを思いついたかと思えばすぐに行動に移す。自身がつまらないと思うことは許せない。常に自分中心がいいと常に考えている。

要するに、我が儘なのだ。

『お嬢様が楽しいと思うことなんて私には簡単に思いつきませんよ』

『役に立たないわねえ』

ぶくーと顔を膨らませるその姿は、愛嬌のあるものだろう。

しかし彼女は吸血鬼。見た目以上に齢を重ねている。戦闘力もかなりある。

だからといって、中身が成長してるかは別だが。

『じゃあ、楽しいことを提供してあげましょうか？』

その声が部屋の中から木霊すると同時に、そこから縦の亀裂が入ると、そのまま面妖にそこから左右へと開いていく。

人が通れる大きさにまで広がると、その中から女性が姿を現す。

幻想郷に住むものならば、恐らく知らない者はいない程有名な女性。

『……………何しにきたのよ』

怪訝そうな表情で突如現れた女性に投げかける。
彼女を知る者ならば、似た答えを出すだろう。

目の前の女性は、それほどに訳の分からない奴だということが理解できるだろう。

『何って、言葉通りの意味よ』

そう告げると、取り出した紙を眼前に突き出す。

そこには、幻想郷のありとあらゆる有名どころから募られたバイトの広告だった。

その中には、この館宛も書かれていた。

『執事……………？』

『そそ。ここにいるメイドなんて咲夜以外にまともなものないでしょ？だから役に立つんじゃないかってね』

楽しいことを提供すると言った割に蓋を開ければお役立ち情報。

確かにこの館に雇われているメイドの9割以上は妖精で、仕事の質はよろしくない。事実上全部咲夜がやってるようなもの。
質より量とはよく言うが、それでは挽回できそうにない。

『ここにいる妖精メイドを全員解雇させてでも雇う価値がある奴でも来てくれるなら僥倖だけど』

9割の妖精と一人の人間または妖怪。腐っても量だけは一人前だから、そんじょそこらの人間とかでは首を縦には振れない。

『さあ、でももしかすると……面白いことが起こるかもしれないわね』

含みのある言い方をするその姿は、怪しさを際立たせるものに他ならない。

こいつが他人の為にどうしようと考えた性格ではないのは承知している。恐らく自分に利がある行動に直結するのだろう。

こいつが何を考えているかは理解したくもないが、ここで断れば負けた気分になる。確実に。

『確かに面白そうではあるわね。ノッてみようかしら』

『でしょ？でも、ここ以外にも雇い先はたくさんあるからもしかしたら誰も来ないかもしれないわね』

にやけた表情が癪に障る。負けず嫌いな彼女にとっては、それが引き下がれない最終ラインを簡単に超える要因になったのは言うまでもない。

『んじゃ、伝えたからね。後は貴女次第よ』

そう伝えると、颯爽と同じ境界から立ち去っていった。

『——』

静かになった空間のお陰か、相応に頭が冷えていく。

だが、冷静になっても先程の発現を撤回する気はなかった。

胡散臭い奴ではあるが、あの女が起こす——それに起因する出来事は常に面白そうなことばかり。そのせいか、アイツが持つてくる

厄介ことは今の私には丁度いい暇つぶしにはなる。

『咲夜、いいわね』

『はあ、私は構いませんが……………』

今まで黙っていた咲夜が、少し要領を得ない風に答えるが聞いた本人は気にしない様子。

先程誰も来ないかもしれないという発言があつたが、あれは明らかに挑発していた。

私の能力を知っているからこそ、あんな言い方をしたのだろう。

運命を操る能力、それが私の能力。

現象、カタチの見えない能力で、私自身未知数だと理解している最強の能力。

アカシックレコードを手中に収めているようなものだ。違うのは、その操れる範囲もその一部でしかないということだけ。

能力を持っている自分自身でさえ全てを把握しきれていない。そんな能力が最強じゃない訳がない。

……………だからこそ、活かし切れない自分に呆れる日々もしばしば。

でも、バイトの人間をここに来させる位の運命操作ならば容易い。生物の動きというのは、意外と網目だらけなのだ。

どこで何をするか、なんてのは絶対に決められたものはない。今日は何をする、ときちんとしたスケジュールを組んでも必ずしもそう動くとは限らない。

私が誰かと出会う計画をしていて、かつ相手との了承があつたとしても、ほんの僅かな時間のズレというのは99%以上の確率で有り得る。

運命という事象は、それ程までに曖昧なのだ。

——これでよし、と

この能力を今の一瞬で起こしているなんて、誰も気づかないだろう。能力なんてそんなものだ。どうやって操ってるのかと言われても、尻尾の無い生物に尻尾の使い方を教えても無意味なのと一緒に身体の一部であるものを、どうやって説明しろというのか。

『夜にそのバイトが来るように仕向けたから、それまで私は寝ることにするわ』

『はい、お休みなさいませ』

咲夜が一礼する姿を背中に受けながら、私はその場を後にした。

『はっ————！』

意識が戻ると、そこはさっきまでの地獄ではなく、見慣れた景色だった。

見慣れた襖、見慣れた畳、見慣れた布団、その上に見慣れた人物。

『神奈子様……………諏訪子様……………』

私の寝ていた布団を枕にして二人画熟睡している。

神奈子の隣にある洗面器と濡れタオル。それが私へのものだというのは言わずとも明らかだった。

ずっと、私を看病してくれていたの——？

目頭が熱くなつていく。それと同時に自責の念が込みあがる。私の間で、二人とは線引きがある。そうやって距離を取っていたことを、改めて後悔する。

やっぱり二人はこんなにも私を想ってくれていた。そして私はその想いに答えられず——いや、答えようとしなかった。

『うつ……うええ……ひぐっ……』

堪えられず、とうとう涙と嗚咽が漏れ出す。

彼女達の前で我慢していたツケが、今清算されている。

止めたたくても、止まらない。壊れた蛇口みたいに、際限なく溢れ出る。

もぞ、と布団が動く。

それは私が動いたからではなく、二人のどちらかが動いたからだ。

泣き止まないと見られちゃう。こんなはしたない姿を見せたくない。二人に釣り合うには、強くなきゃいけないんだから——

『さ、なえ……？』

眠気眼の二人の御身が、涙で歪められて確認できない。否、そんな余裕すら無い。

この一瞬の間にも、二人の意識は覚醒しつつある。しかも目の前でこんな状況が作られていたのなら尚更だ。

『みないで、下さい』

それを本人も理解しているのか、必死に虚勢を張り、拒む。

それが二人を心配させる要因になると分かっている、それしか今

の彼女に抗う術は無かった。

意識が完全に覚醒した二人は、早苗の状態に愕然とする。
早苗が泣いている。

それだけを理解すると、二人は彼女のことを抱きしめた。

『えっ——』

早苗の思考がフリーズする。

泣き顔を見られたことによる恥ずかしさと、突然の抱擁による驚きが交差して混ざり合う。

やめて。

乱さないで。

このままじゃ、何もかもが崩壊してしまう気がする。

私は、二人の事が大好き。

でも、二人は神であり、崇め祀るべき対象なのだ。

現人神とはいっても、所詮私は人間。二人の横に並ぶ資格は持ち合わせていない。

それでも二人は私を家族——娘みたいに優しく、厳しく接してくれて。まるで私が横に並べる存在と勘違いを起こしてしまいそうで、怖かった。

甘えたい、なんて何度思ったことが。

年頃の娘なのだから、悩みだって沢山抱えてきた。

それでも、頼ることは出来ない。

甘えてしまったら、そこからはなし崩しだ。それを切っ掛けにして何度も甘えを見せてしまう。

でも、それじゃ駄目。

二人が私を自身と等価値の存在として認めているのなら、それに応えなくてはいけない。

全能である神に等しくするには、誰かを頼ってはいけなないと、そう想い続けた。

二人の横に立つにふさわしい人間になるには、この暖かさに浸かっ
ていてはいけないのだ。

『離して、下さい』

弱々しく抵抗するも、一向に離す気配を見せない。

そんな中、口を開いたのは諏訪子だった。

『離すもんか。だって、早苗が泣いてるんだよ？』

——嬉しいんだよ』

嬉しい？

その言葉の意味を理解出来ないまま、諏訪子は続ける。

『早苗が物心ついた頃から、私は早苗が泣いた姿を見たことが無かった。』

最初は、強い子なんだと思ってた。

けど違った。早苗は泣いた姿も見せなければ、苦しそうな姿も見せなかった。でもそれが逆に無理をしていると気付く切っ掛けになったんだ』

『早苗が無理をしてまで私達を拒んでる、そんな認識すら憶えたこともあった。』

それはとても悲しくて、辛いこと。

でも私達が問いただしても答えるとは到底思わなかった。自分の無

力を呪ったのは久しぶりだったよ』

諏訪子に続けて神奈子も語り出す。

錆び付いた歯車に油が挿された様に、本来在るべきカタチに戻ろうとしている。

三つの歯車が噛み合う中、遊び歯車は早苗。その左右に隣り合う様に噛み合う諏訪子と神奈子。

早苗がいなければ、二人は同じ力で回ることが無い。

神奈子と諏訪子がいなければ、早苗は回ることすらない。

誰もが欠けてはいけない中、皆がズレた回転をしてたせいで今まで歯車が静止していた。

そのズレを直す切っ掛けを与えてくれたのは――

『そんな中、アイツが――シロウが現れた。アイツは私達みたいに英霊という人間離れた存在だと知って、悔しかった。

私と似た存在であるアイツは早苗の鎖を解いていった。出会って間もない、たった数日の出来事なのに、何年と共に過ごしてきた私達には成すことが出来なかった』

抱きしめる腕に力が籠る。

二度と離す気を感じない程の抱擁は、痛みを憶えても不快感は感じなかった。

この痛みこそ、私へと伝わってくる彼女達の想いなのだ。

『それでもシロウには感謝してる。こうやって早苗が私達の前で弱さを見せてくれた、それだけで私は満足だよ』

早苗の服に顔を埋めていた諏訪子が笑顔を見せた。

涙の痕と思わしき少しの目の腫れが、彼女を愛していることへの何よりの証でもあった。

『早苗、今でなくてもいい。いつか早苗の全てを聞かせておくれ。早苗からすれば頼りない存在かもしれないけど、お願いだ』

『そんな、頼りないだなんて』

そんな事思ったこと無い。思える要因が見当たらない。思ふ必要が無い。

頼れる相手だからこそ、頼るのを拒んだのだから。

それ切り会話が途絶え、三人は抱き合いながら時を過ごす。

この時、三人は初めて”家族”となれたのかもしれない。

名目でも建前でもなく、血の繋がりがなくてもこれはまごうことなき”家族”。

何にも替えがたい、見えない絆で結ばれた繋がりが、何年という遠回りと蛇行を繰り返し、やっと生まれたのだ。

遠回りは決して無駄なことでは無い。すれ違いを重ねる度、強くなる。

すれ違いは認識を生み、認識は成長へと到る。

本物になりたいと距離を詰めた者達。

本物になりたいが為に距離を離れた者。

平行線を辿った行動は、結果として最良のものとなった。

『ごめんなさい、諏訪子様、神奈子様』

今はまだ言えないけれど、いつかきつと、貴女達と同じ道を行ける程に強くなれた時に話します。

それまでは——待っていて下さい。

言葉にできなかった想いが、まるで理解っているかの様に抱きしめる力が強まる。
心が呼応している。
身体が感応している。
まるで一心同体と勘違いする位に、彼女達は全てが見えない糸で繋がっていた。

遙か上空で日傘を差し山の頂上で触れ合いを傍観する八雲紫。
お互いを抱きしめあうその姿を見ていると、昔の自分を思い出す。
式神と使役する者。その式神が使役する式神。

今日の前で起こっている光景は、一度肌で体験したことのあるもの。

主従関係である私達と身分が違う彼女達。状況は違えど本質は何ら変わらない。

私達はそれを乗り越えた。でもそれは、あくまで膨大な時間を費やした結果。

人間と神、肉体的に異なる存在からすれば私達が培った絆は一瞬にも満たない出来事に過ぎない。

でも、だからこそ、人間であるからこそ深めれる絆は私達のそれと勝るとも決して劣りはしない。

妖怪としての生き様よりも、儚い一瞬の時間を生きる人間の生き様の方が私は好きだ。

生きる時間が短いせいで、愚行を繰り返す人間を嫌悪する妖怪は多い。いや、殆どがそうだ。

でもそんな妖怪は基本若い奴らばかり。五〇〇年生きた程度じゃ餓

鬼もいいところ。

本当に経験のある妖怪というものは、達観しているものだ。全てを傍観し、歴史そのものに介入することなく、事実だけを捉える。

そうすることで先入観を捨て、大局を見誤ることも無くなる。

本当に悪い人間というのは、大抵が権力がある者ばかり。

幻想郷が出来る前——まだ妖怪としての齢が浅かった私は色々な戦を目にしてきた。

戦に加担する者というのは、強制的か殺しが好きか位しかない。指揮を執る大將は、高みでふんぞり返り罪の意識も無く簡単に人間を犠牲にする。

大將だけではない。そんな奴に従っている武士らだって自身より地位の低いもの——弱者には容赦が無い。

歴史の中、思想の自由すら奪われた時代があった。

それを実際に目にした私は、胸糞悪い程の怒りを覚えた。

強者の脈絡の無い出鱈目な発言で殺される農民。無意味に増える死体の山。そんな理不尽が罷り通る、そんな時代が本当にあったのだ。

私は、そんな奴らを殺してきた。

一瞬では死なせない。激痛を伴い、かつ肉体的には死なない方法で甚振る。

目玉を潰し、指を一本一本削ぎ落とし、四肢を切り裂き、心臓以外の胴体を貫き、骨を砕き、脳を中身から弄り回し、潰す。

舌は噛み切らせない。ショック死させないように境界能力を使う。理不尽に死に絶えていった人間の何百倍の苦痛を、生きている事を後悔させた。

死にたくない、助けてくれと懇願する言葉なぞ聞く耳持たない。

お決まりと言わんばかりのその台詞を聞くと、吐き気がした。

自身がやってきた罪は背負わず、都合のいい結果が押し通ると少しでも思っていると考えるだけで、苛々する。

私は、人間にとって恐れられる存在となった。

当然、私を討伐しようと集まった輩も多々いた。私の首の値段に釣られた蛮族共。下劣で低俗なそいつらも、武力の下に縛られている哀れな存在であることには変わらない。

だからって何をしても許される訳ではない。結局のところそいつらも弱者を虐げている屑の一介に過ぎないのだから。

そんな奴らを振り返り討ちにして生きていたある時代——全てが空虚に見えていた時期、ある少女と出逢った。

それは、死の操ることの出来る人間の少女だった。

その力故に恐れられていると同時に、その力を利用していた。

屋敷の中で一生を過ごし、自由の無いまま一生を終える。自身の能力と周りの人間のせいだ。

どの時代でも変わらない。この頃の私は、人間をひと括りで判断していた。

根底にあるのは低俗な感情のみ。人間という存在に絶望していた。

最初は興味本位だった。

何も知らないまま言いなりになっている少女を、莫迦にした目で傍観していた。

彼女の死の能力は不安定だと、少し経って気付いた。

彼女の身体からは、常に死の呪いが放出されている。自身で抑制する術は無いらしかった。

近づくだけで死に至る程に強力なそれは、少女を孤独にさせた。彼女の能力を使う時だけ何人も結界士を用いて能力を抑え、指定の場所へ置き去りにする。

生きる即効性の死の鱗粉を撒き散らす彼女は、存在するだけで絶対的な無差別な死をもたらし兵器として扱われていた。

化け物。妖怪でも無い、同じ人間である彼女を、そいつらは呼んだ。哀れに思っただろう。ほんの気まぐれで、私は少女に近づく試みをした。

普段監禁されている屋敷の外には、結界が敷かれていた。並大抵の妖怪では軽く消滅できる威力のものだ。

でもそれは私には意味を成さないものだった。所詮は人間、限界があった。

少女は驚いた顔をしていた。当然だろう、結界を潜り抜けて目の前から現れたのだから。

そう思っていたのだが、少女にとって驚きは別の方向へ向いていた。

——貴女、私と一緒に居て平気なの？

そうだった、と思った。

彼女の死の能力の威力の幅をきちんと知らず、乗り込んでいたのだから。

幸い身体に変化はなかった。それを知ったとなったら少女は勢いよく抱きついてきた。

今でも覚えている。死人の様だった少女の瞳に、初めて生気が宿った姿を。人形のように在った肉体に、生命が吹き込まれた瞬間を。

それから私達は友達になった。

人間の、初めての友達。妖怪の、初めての友達。

少女は私が妖怪だと知っても驚かなかった。寧ろ喜んでいた。そのお陰で貴女と一緒に居られるんだもの、と屈託の無い笑みで言われた。

自然と頬が緩んでいた。

それは、何百年と失われていた感情。

殺戮と破壊をもたらした妖怪の、善の感情なぞ等に捨てたと思っていたそれを、少女は引き出していた。

人々を遠ざける能力を持つ少女は、皮肉にも人々を惹きつける力も持ち合わせていた。

それは、私以外知らないであろうもの。それがなんだか嬉しく思い、優越感に浸れた。

それから暫くして、色々あって少女は死んだ。彼女の最期は、やはり運命に翻弄されたものだった。

若い肉体のまま、今もその死体は朽ちることなく土の中にいる。でも、少女はこの世界に縛られている。

幸か不幸か、そのお陰で少女の魂は肉体から離れた後もこの世に留まっている。

今は亡霊となって冥界の管理を任されている。

『会いに行こうかしら……………』

少女は記憶をなくしていた。過去何があったかの一切を、綺麗さっぱり。

なぜ亡霊として留まっているかも知らない。知っている者は、この世にはもう二人しかいない。

それは、絶対の秘密。少女に教えることは絶対に出来ない。

それが、友達としての私の精一杯の贖罪だった。

恐らく今も少女は能天気に関日を過ごしている筈。

亡霊になってから、少女は過去の記憶ほど活発な様はなくなり、とてもおっとりとした性格になっていた。

マイペースな彼女の行動に、側近の少女も手を焼いているであろう。

眼下で広がっている絆もかなり深いかもしれないが、妖怪には妖怪で培った絆だつて負ける気はしない。

張り合う訳ではないけれど、やはり自慢の友達や式神なんだから当然の思考だ。

ふと、ビラのことを思い出す。

中身には、彼女の居る場所も対象になっている。

にやり、と楽しそうに笑う。

『ついでに厄介事でも持っていけますか』

半ば無計画に構成したビラを取り出し、私は敬愛する友人の下へと飛んだ。

絆（後書き）

書くことないZEE

今回地味に色んなキャラ出しましたね。名前出してなかったりするけど。

シリアスっぱいの久しぶりですね。なんかラストが無理矢理な終わり方な場合が多々あってシヨボンとなっていたり。キリのいい纏め方が思いつかなひ。

さて、どうでもいいでしょうけど、作者の東方内での好きなキャラでも暴露しますかね。（一部登場していないキャラもいますが知らない人はググレ）

風見幽香ことゆうかりん。これはもうナンバーワンだね。踏まれたい。そして弄りたい。

早苗さん可愛いね。健気だったり腹黒だったり、一貫性がないのもいい（笑）

鍵山雛。俺の厄を吸ってくれー！（オイ

小野塚小町ことこまっちゃん。江戸っ子気質だけど時折見せる女の子な感じがグハア

霊鳥路空ことお空。アホの子なのにラスボスだぜ！俺とフュージョンしようぜ！

星熊勇儀。すっごい豪快なお姉さん。額の一本角を握りたい。お酒

に酔ってるときに絡まれない。体操服。

水橋パルスィ。嫉妬してくれるとかまじ可愛すぎなんですけど。抱きしめたい。フヒヒ。

他にもいるけどキリがないです。そんな中上位を書いてみました。でもゆうかりんが一番。異論は認めない。

闇より出でし不夜城（前書き）

新型インフルエンザ発症しました。深夜にめっちゃL5になってました。そりゃまあ小説で書いたら少し面白そうだなあってふと考えた。え？恥部を晒すってDMじゃないかって？やだなあ、小説執筆も恥部晒してるようなもんじゃないですか。てか、私 M ですし。

闇より出でし不夜城

三人と別れて、私は指摘された方向へと黙々と歩き続けている。日は疾うに落ちており、アリスの時と似た状況に陥っている。

ルナチャイルドの事を疑っている訳ではないのだが、私はこの道を通っている。風景に見覚えが有りすぎるのだ。

鷹の目をあらゆる面で使用してた為か、景色の細かな差違を一瞬で理解出来るのだ。

決して自惚れではないが、この力に助けられた状況も少なくはない。私の命を守るに貢献した部位は、信頼に値する。

ならば彼女が嘘を吐いたと？

——馬鹿な。だいたいそうする理由が無い。

元より迷っていた身、それを混乱させた所で無意味だ。

悩みながらも真つ直ぐ道を進んでいく。

悩むのは私の悪い癖だ。悩み抜いて解決しない問題ばかりに頭を使う。そして最後に残るのは徒労のみ。

思考を切り替える為、歩みを走りに変更する。

微かにしか吹いていなかった風が、身体一杯に浴びせられる。

痛い位に染みこむ冷たい風も大して気にならない。この慣れた感覚が、私が今まで通ってきた道というものを認識させる。

息の吐く暇も無いほどの全速力で走り続けていると、闇に染まった森の隙間から光を見つける。

近づけば近づくほどそれは広がっていき、相対的に闇が掃われていく。

しかし久しぶりの世界の白みは、直後再び黒に覆われた。その正体を建造物だと知るのには時間は掛からなかった。

月明かりに照らされたそれは、自身の矮小さを視覚的に理解させる為にやったと言わんばかりの巨大な館だった。

概観は館の筈なのに、その存在感は城を彷彿とさせる。

森の中で遠目から一度確認はしているが、まるで別物に感じる。

血の様な赤で染め上げられた館は、月の光で不気味さを相乗させている。

——紅魔館。その名前が頭の中でよぎる。

これが紅魔館でなければ、これ以上にそれに相応しい館が存在するのかと勘繰ってしまうだろう。

入り口を探す為周囲を迂回していくと、鉄で出来た西洋の門が見えた。

その近くには、門番であろうか、チャイナドレスと龍の印が刻まれている帽子の女性が壁に寄りかかって静止している。

ピクリとも動かないその姿に警戒心を覚えるも、悪事を抱くわけでもなし、すぐに意識を切り替えて女性に近づく。

『すまないが、ちょっといいか？』

声を掛けるも、女性は動かない。

何度か繰り返すも反応はなし。

『……………まさか、な』

恐る恐る顔を覗きこむ。すると予想通りというべきか、瞼は開いておらず、息も静かに整って乱れることがない。

熟睡している。見事なまでのノンレム睡眠であろつ。

器用に倒れることなくこの体勢で寝られるというのは、一朝一夕で身につく技術ではあるまい。恐らく彼女は幾度と無く同じ行動を繰り返しているのだらう。

呆れつつも、今度は身体を揺すつてみる。すると意外と簡単に目が覚めた。意外と浅い眠りだったのだらうか。

寝惚けた表情でこちらを見つめてくる。今にも二度寝しかねないので、話しかけることにした。

『すまないが、いいだらうか』

『え？え……………ええ！？』

ようやくと意識が覚醒したのか、五月蠅い驚愕の聲が辺りに響き渡り、鴉が逃げ惑う。

真正面からそれを一身に受けた私の耳は僅かに耳鳴りする。

『あ、貴方は……………？』

『ああ、私は——』

答えようとした刹那、真後ろから突如放たれる殺気に身体が反応する。

目の前の女性を直ぐ様抱え、身を翻しつつ地を蹴り闇夜へ飛ぶ。

門の上に着地する直前に殺気が放たれた方向を見据えるが、その周辺には誰もいない。

森の中に逃げたのなら僅かにも音がある筈だが、殺気が放たれる直後まで、その何者かの存在に気付けなかった。

腕の中で何があつたかを理解出来ない中華風の女性。彼女に集中してたとはいえ、気を張っていたことに変わりはない。

それなのに察知出来なかったと言うことは、一瞬でその場に現れ、何の痕跡もなく消える事が出来る者が、殺気を放った正体だろう。

しかし、そんな事が可能なのか？

アサシンは限りなくそれに近い動きは出来るが、地を蹴れば足跡は残るし森を通れば葉は落ちる。自然の物理現象に抗いつつ尋常じゃない行動を起こすというのは、不可能に等しい。

——その瞬間だけが全て相手の支配下にならない限りは。

『あ、あの、下ろしてくれませんか？』

私から目を逸らしつつ顔をほんのり赤らめているのに気付く。

ある意味当然の反応かもしれない。何せ咄嗟の事とはいえ、お姫様抱っこ——背中と脚の裏関節付近を支える様に抱き上げる態勢——

——で抱えてしまったのだ。

抱えて解つたが、彼女は間違いなく武道の心得がある。

二ヶ所触れたただが程良く筋肉が引き締まっており無駄な肉が一切無い。だからと言って女性らしいスタイルは損なわれておらず、正に理想の体型と言っても過言では無い。

そんな実力のありそうな女性が見ず知らずの男にいきなり抱えられたのだ。殺気に反応出来ず、果てにはこんな形で時を過ごしている。羞恥で一杯になるのは当たり前だ。

その言葉に従いそつと地面へ降ろすと、ペコリと一礼をした。

謝罪の言葉を述べた後、私はここに來た経緯を説明した。

『バイト、ですか。確かほんの最近紅魔館でもその様なものを募集してましたが……本気ですか？』

バツの悪そうに私に問いかける彼女——先程紅美鈴ほんめいりんと名乗った——が問いかける。

『ああ、一応そのつもりだが………』

『貴方もここがどんな所かぐらいはご存知でしょう？なのに一体何故』

確かにバイト先ならここ以外にもある。執事だからといって目白押ししてる訳でもない。

なのに何故か？そう問いかけられても答える術はない。自分でも分からない。一度この館を見た瞬間——魅了の魔眼にでも中てられたかの様な心の束縛を感じたのだ。

それから今に至るまで、無意識にそこを目指していた。いや、引き寄せられていた——？

どちらにしろ辿り着いてしまったのだ。何もせずに他をあたるのも無駄足になってしまう。

『まあ………何となくだな』

曖昧な返答に、美鈴は困惑する。何となく、で吸血鬼の根城で働こうとしているのだ。命知らずないしは奇人変人と思われるに違いない。

『そうですか。取り合えずこの事を一回報告しないといけませんね。ちよつと待っていてくれませんか？』

美鈴が門へと向かい、私もその後へと続く。

彼女が見張っているせい、門は夜でも開放されていた。

キイ、という金属の擦れる音が静かに響き渡る。

門を潜り抜けると、外からは測れなかった内観が広々と私を受け入れる。

館だけでなく、庭だけでも多大な面積を使用している贅沢極まりない土地に、館の主の権力が伺える。

中心まで歩いた頃だろうか、同じ殺気が真正面から押し寄せる。

目の前には影も形もない、だがそれはさっき理解している。カラクリが何であれ見えなくとも存在はしている。ならばその殺気に対応すべく全身に強化を施し万全に備えるだけ。

殺気の波が強まった、その瞬間からは一瞬だった。

咄嗟に黒鍵を二本投影し、視界に移らない「何か」に向かって身を捻りながら投擲する。

その刹那、私が立っていた場所を小さな何かが通り過ぎる。一切の躊躇いの見えない軌道だった。

一本はそれに命中したのか、火花を散らし金属の音色を奏でる。二本目もそれに連動するように音を鳴らし調律する。

一本は私に向けられたもので、二本目は美鈴の頭部を狙った軌道、三本目は迎撃。そして勘が当たって幸いした。そうでなければ彼女の命は無かった筈。

当の本人は突如放たれた黒鍵に驚いて尻餅をついている。そのお陰か外傷は見当たらない。

カラン、と音を立てて地面に落ちた「何か」を見据える。それは至ってシンプルな銀製のナイフだった。

『美鈴、貴女は門を護るのが仕事でしょう。客を招待するのは私の仕事』

殺気の本体が、美鈴に説教をする。殺気は薄れているが、不穏な空気が同時に渦巻く。

そこには、何の飾り気も無いシンプルなメイド服を着た少女がいた。少女は腕を組み、明確な怒りを美鈴へと向けている。言い訳は許さない、とその場の雰囲気伝えてる。

『……………まあいいわ。取り合えずその貴方』

今度はこちらに意識を向けてくるが、先程までの殺気は一切感じられない。

整った足の動きで目の前まで歩いてくると、ミニスカートの両端をくい、と持ち上げてお辞儀をした。

『ようこそ紅魔館へ。歓迎いたしますわ』

柔和な笑みと見下ろす三日月が、私を歓迎した。

紅魔館の長い廊下を会話無く黙々と歩く私と男。

私は、先程起こった光景を思い返していた。

私が絶対に当たると確信していたナイフが、簡単に落とされた。そんな今まで一度も無かった光景を。

予想外のひとつに、後ろを追ってきている男があった。

美鈴へのお仕置きは、彼への脅しも含めたものだった。あの程度で肝を抜かれるようならば、ここではやっていけない。つまりはその為の度胸試しだ。

体格はかなりのものだから正直初見から期待はあった。だからこそそれに比例した驚きを与えてやろうと意気込んだのだが、逆に驚かされる始末。

予想外その二。私がナイフを投げた直後まで彼は何の構えもしてなければ、あんな剣を隠している素振りすら見せなかった。にも関わらず私が瞬きをした瞬間には二本の剣が両手に装備されていて、二回目の瞬きでは美鈴へと投げたナイフは落とされ、三度目にはその剣が捉えれない筈の私へと正確に襲い掛かっていた。私の能力が無ければ間違いないく串刺しだった。それ程までに早く、迷いの無い一撃だった。

予想外その三。その剣を投げる異常なまでのスピード。

筋肉の動作というのは、伸びたり縮んだりすることで相応の力を発揮できるような作られている。

軽いものと重いものを押すのだったら、筋肉のバネの使う量がてんで異なる。

妖怪の場合人間より遥かにそのバネに差があるが、システムは変わらない。

筋肉の伸縮を利用するのだから、より威力を高めるならば相応の反動を使うのが当たり前。

私が全力で投げたナイフは、能力と合わさって一瞬で美鈴の頭に到達する筈だったのに、彼が放った剣は、まるで筋肉のバネを無視したかのような高速で放たれていた。

直立していた筈のあの一瞬で、どこからか剣を出し、投擲する為の力を込め、放つ。その動作をやつてのけた。その動きのひとつひとつが、まるで因果律を操ったと思わせる程奇怪で、在り得ないものだった。

常識の範疇を超えた能力は、常識の範疇を超えた動きには敵わなかった。とは言ってもそんなのを試したかった訳じゃないけど。

八雲紫の言っていたことを思い出す。

——面白いことが起こるかもしれないわね。

その言葉は、間違いなく彼という存在に向けられたものだった。

只のバイトかと思えば、正体は全く掴めず。

妖怪じみた身体能力かと思えば、どこからどう見ても人間。これほどまで面妖な生き物も珍しい。

『君は何故美鈴にあんな事をしたんだ？』

突拍子もなく男から質問が来る。あんな事、とは間違いなくナイフの件だろう。

『あれはお仕置きですわ。請け負ってる仕事もまともに出来ないのにそれを放棄すると言うのは言語道断では？』

『仕置きで殺すというのは矛盾してる』

『矛盾してませんわ。美鈴はあれじゃあ死にませんから』

『馬鹿な、そんな訳があるか』

『何なら彼女に聞いてみたらどうです？嘘はついてない事が分かりますわよ』

紅美鈴は妖怪だ。見た目も実力も妖怪じみていないから普通の人は気付かない。

妖怪は人を食べると言うが、彼女はそれを嫌うから更に人間っぽく感じる。

妖怪特有の身体能力だけが彼女のアイデンティティという答えるの

に困る威厳の小ささ。哀れである。

妖怪が必ずしも人間より強いという概念を覆す典型的な見本だ。

『それよりも貴方ですわ。あの一撃を防ぐのは身体能力だけはいっぱしの美鈴でも避けられない代物なのに、貴方はそれを無防備な体勢から訳もなく捌いた。常人とは思えないですわね』

『お互い様だろう？君だってその華奢な体で見切れない程のナイフ捌きを出来るとは考え難い。何かしらのズルをしてるとしか思えない』

ズル、か。

確かに私の能力は人間が使いこなせる程の安いものではない。私が妖怪である美鈴を圧倒出来るのも、この能力あつての事。

時を操る能力。自身以外の時を支配し、掌握する能力。それが私の能力。

私が相手からすれば目に見えない投擲を行えるのも、わたしのせかい時間に介入し投げたナイフだけの時を加速させた後、その加速を内包させた状態で静止させる、という手段を用いてるから。

これによって、妖怪すら反応できない一撃が生まれる。

ただ単に時を止めて相手の死角に回り込んだり、ナイフだけの時を止めて何本も空中静止させて遅延型弾幕を創り上げることだって容易い。

そんな反則じみた能力なのだ。ズルと言われても反論できない。

弱点があるとすれば、停止した存在そのものには介入できないこと。例えば美鈴の時を止めた状態で、私自身がナイフを突き立てて攻撃するのは不可能。時が止まっている間は、私ないしは私に關係するもの以外の森羅万象に変化は起こせない。

当たる直前で前述の行動を起こせば、目から脳に信号が伝達し指令を与えるより早く傷を負わせれる。つまりは明確な「死」を与えることが出来る、ということ。

そんな風に時が進んだ瞬間に突き立てれば何の問題もないから、私は安全も重視して投擲という手法を取っている。

そんな反則を、この男は肉体の純粋な動きだけで止めた。

剣をどこから取り出したのか、なんてのは些末事。明らかにこの男は視えていなかった。なのにその動きは洗練されていて、無駄の無いもの。

恐らくこいつは、私が時を止めた瞬間からナイフを止めるに至るまでの行動全てを直感だけで行っていたのだろう。

直感とは、偶然に他ならない。運と言ってもいい。

彼はその直感に全てを委ね、全てが合致した。でも、数ある可能性の中からたったあれだけの動きでさえ一致させるには天文学的な数字が必要とされる。

奇跡と同等のそれはまるで、未来予知クラスの空間、状況把握能力——先の未来を全て見通していたかの様な——。

それ即ち、こいつはそんな状況を幾重にも体験してきた生存者。度重なる戦いの中生き残ってきた戦士。強さの体現。戦闘に於いて最も信頼し、全てを委ねるべき相棒とも言える絶対的な第六感——

——！！

『……………お互い様よ』

そつ、聞こえないくらい小さな声で呟いた。

あの女もとんだ化け物を連れてきたものだ。——だからこそ愉しくなりそうではあるが。

お嬢様の愉快そうな表情を頭に浮かべる。あの人のことだ、こんな面白い奴を見逃す筈もない。

思い耽っていると、いい具合に視界にお嬢様がいる部屋の扉が見える。

お嬢様も、とつくに起きている筈。あの人はプライドが高いから、寝起き顔を見られたというスタートを切れば大恥をかくだろう。私も恥ずかしい。

少し早足に歩いていち早く扉の前に立ち、ノックをする。

お嬢様の声が返ってくる。どうやら準備は整っているようだ。それに続いていいタイミングで男が到着する。私は男に向かい、右手の扉を誘導させる。

『どうぞ、ここがお嬢様のお部屋で御座います』

さあ——お手並み拝見といきますわ。

『どうぞ、ここがお嬢様のお部屋で御座います』

メイドの少女が形式に沿った動きで目の前の扉へ促してくる。

傍らの少女の表情を盗み見ると、僅かながらにほくそ笑んでいるのが映される。

含みのある笑みの中に何を思っているのか。その答えはこの先に見出せる事を期待して扉に二回軽めのノックをした。

『入りなさい』

扉越しにでも分かる、少女の声。しかしそれはとても凜としており、境がある筈なのに一方には全てが筒抜けなのではと思わせる甘い声。淫靡とは真逆のそれなのに、年長者を前にしている気分になる。緊張しているから、なのだろうか。その様な錯覚を覚えるのは。

一瞬で冷静さを繕い、目の前の境を開く。

音も無く開くその先は、仄暗かった廊下とは相まってとても明るい部屋だった。それはこの部屋の彩色が誰から見ても高価な飾りばかりで占められているからだろう。

そんな中10歳かそこの少女が椅子に座っていた。

フリルが目立つドレス、帽子と全てがピンク色に包まれ、腰と帽子には映える様な真つ赤なりボンが飾られている。そこから覗かれる肩程まで伸びたふわふわとした青の髪という対照的な色全てが彼女と言う存在を目立たせる要因として上手く働いている。

しかし幼い身体とは裏腹に、背中から主張する巨大な蝙蝠の翼が彼女が何者かを明確に教えてくれる。

吸血鬼。

もともと吸血種であった「真祖」と後天的に吸血種となった「死徒」の二種類があり、当然真祖の方がその戦闘能力は遥かに上をいつている。

真祖とは、世界の意思によって生み出された超越種の中の一民族で、人間を律する為に都合の良い人を雛型として、ということから精神・肉体の構造は人間を真似て生み出された、所謂世界にとっての都合の良い存在だ。前までの私みたいに。

真祖は世界とリンクしてる為魔力には一切の制限が無い。つまり真祖を倒すと言うことは世界を破壊出来るほどの概念武装を必要とする。

だが実際そんなものは存在する筈もなく、あったところで悪用され

るのが関の山だ。何せ世界を破壊出来る威力を秘めているのだから。月齢によって身体能力に変化が生じ、満月ならば事実上の不死身と化す。

死徒とは、真祖などに血を吸われるかあるいは魔術的要因でなる吸血鬼である。

起源は人間から始まり、屍食鬼グール、生きる死体リビングデッドと成長していき、ヴァンパイアへと至る。そこまで生き残る確率は一万分の一と言う低いものだ。

だが、死徒とは実は寿命さえあれば誰にでもなれるのだ。問題はそんなものは普通有り得ない、と言うだけ。時間さえ掛ければ人間誰しも強くなれると言う解釈でも問題無い。

彼らもまた不老不死ではあるが、エネルギーを補充し続ける必要がある。そうしないと身体を維持できない。

死徒の強さは血を吸った数に比例する、と言っても過言ではない。最も古い時期に死徒となった者達を二十七祖と呼ぶ。古参で在ると言う事は、自然と生命を維持する為に数々そういった行いを繰り返している——つまりはそれだけ強いということでもある。

彼女は真祖ではない。しかし死徒でもない。

真祖は血を吸わない。血を吸えば真祖は堕ちてしまう。彼女から感じる血の臭いは、その可能性を否定させる。

血の臭いというのは、洗ってどうにかなるものではない。完全に落とした様に思えても、その呪いは決して消えることは無い。ましてや吸血鬼として生きているならば尚更判り易い。

だからといって、死徒程の血生臭さは感じられない。あれらは膨大なエネルギーを得る為に血を吸い、手下を増やし、その力でまたエネルギーを蓄える。

彼らの居る所に血が無い場所など存在しない。生きるために、ただ貪欲にそれだけを求め続ける。生きるために生

きるなんて理解し難い。

彼女から放たれる血の臭いは、その中間程だ。

血を吸わないと死ぬ、ないしは能力に変化が生じるから吸っているのだろうが、その量は微々たるものなのだろう。それはつまり、外とは異なる吸血種、となるのではないか。

あのメイドが付き従う存在なのだ。彼女以上の実力を伴っていると考えていいだろう。

『ふん………』

吸血鬼の少女が私を余すことなく吟味する。

好奇心旺盛なその眼からは、身体年齢から測ることの出来る幼さが垣間見える。

しかし、目の前にいるのは紛れも無く人外の域を出た存在。警戒を過剰にしておくに越した事は無いだろう。

『貴方、名前は？』

『エミヤシロウだ——です』

いつもの口調を慌てて矯正する。彼女から放たれる威厳がそうさせたのか、或いは緊張のせいかな。

『無理に敬語にしなくてもいいわよ。ぎこちない受け答えって気分が悪いだけだし』

『そ、そうか』

『ええ、その代わり私の質問には滞りなく答えること』

『了解した』

その返事に満足したのか、僅かに口元を緩ませつつ首を縦に振る。

『んじゃあ始めるわね。まず、貴方がここへのバイトを志望した理由は？』

『私は執事経験が少しあつてな。職探しをしていた所で広告を見て、特技を活かせると判断したからだ』

特別ここに来たいとは考えてなかったが、いつの間にか辿りついてたから、なんて言っても合格は出来ないのは決定的に明らか。

ならば真実を交えた嘘を吐けば罪悪感も薄まるし、嘘だとばれる事も余程のことがない限り無いだろう。

『では貴方はここがどの様に語られている場所かも知ってるのですよう？なのに来るなんて……正気の沙汰とは思えないわね』

挑発する様な笑みでこちらを観察してくる。

この眼は自分が最強だと信じて止まない者の目だ。かの英雄王と酷似したそれは、不快感を煽るには十分なものだった。

しかしそれも私を試しているものだと考え、表情に出さない様に努める。

『私は人から見れば壊れているとよく言われててな。そんな事は重々承知しているよ』

『ふうん………』

私の答えに何を感じたのか、少しだけ表情が変化する。だがすぐにそれは元の高圧的なものへと戻ってしまう。

『貴方、戦闘経験はあるようね』

『どうしてそう思う？』

なんでも彼女が言うには丁度この部屋の窓から外を見渡すと正門から玄関付近に至るまで丸見えらしい。確かに主の部屋が隅とは考えが及ばないだろうが、視られていたのなら気付かない訳が無い。それとも殺気ばかりに気を取られていたせいで視線に気がつかなかったとも言っのか。

それこそ矛盾している。神経を張っていたのならばどの範囲からでも間違いなく察知できる。それが出来なければ私はとつくにくたばっている。

『貴方、咲夜と会っのは初めての筈よね』

『咲夜とは？』

『あら自己紹介してなかったのね。咲夜はメイド長を勤めている私の信賴する従者よ。』

——まあ、貴方を襲った相手が咲夜、十六夜咲夜って言った方がわかりやすいでしょうね』

そこまで言われてようやく人物像が合致する。

少女として整った顔立ち、礼儀正しい口調、柔らかな物腰、それでいて未知の能力による常人を逸した戦闘力。弱点などまるで見当たらない、完全無比な少女の名前。

満月の終わりし夜に咲く者——十六夜咲夜。神秘的で、吸血鬼の

従者としてこれほどぴったりなものはそうは無い。出来すぎていると言ってもいいくらいに。

『それで、一体何の関係が？』

『咲夜はこの紅魔館で私の次に権力があるわ、何せ私の右腕ですもの。でもそれにはただメイドとしての責務を全うするだけでは私は認めない。』

——ここでの権力は、力。相手を制圧し、蹂躪し、支配する誰もが平等に持ち得る、古来から主従関係を理解させる為に用いられた手法のひとつであるそれを、私は最も渴望する。強く、貪欲に、獣の様に』

右の手の平を顔面に当て、指を少しずつ食い込ませていく。

力を込めていくに連れ、話している口元が歪み、目には狂気の色を帯びる。まるで自分の言葉に酔っているかの様に身体は震え、口からは狂気を孕んだ声が断続的に漏れる。

『咲夜は、それを私に認めさせた。夜王である私と肩を並べる価値ありと』

ゆっくりと顔から手が離れ、愉しそうに歪んだそれからは所々から血が滲み出している。そしてそれを少女は指で掬い取り、甘美の表情で舐め続ける。

幼さの中から垣間見える妖艶さは、容姿という概念を瞬く間に否定する。

『そんな咲夜の攻撃を、偶然にしる必然にしる貴方は防いだ。』

——喜びなさい、貴方はこの私に認められているのだから』

その言葉には一片の自惚れも卑屈も無く、ただ事実のみを述べただけの淡々としたものだった。

でも、だからこそその言葉には絶対の自信が籠わっているのが理解わかる。

『光栄だよ、と言っておこうか』

『その素で喜んでいない所を隠そうとしない根性………ますます気に入ったわ』

少女はおもむろに立ち上がると私の目の前まで歩み、止まる。すると私の事を見上げ、こっん、と胸元を小突く。身長差から腕を全快に伸ばしている姿は、背伸びしてる子供みたいだった。

『私の名前はレミリア・スカーレット。貴方を採用するわ。でも相応の働きが無ければ即クビだからね』

その時、初めて少女は見た目相応の笑顔を私に向けた。

闇より出でし不夜城（後書き）

紅魔館はキャラクター一気に出るのでかなりキャラクター説明忙しそうです。

今回は一気に出た三人の紹介をしまっす。

レミリア・スカーレット

種族：吸血鬼

能力：運命を操る程度の能力

二つ名：永遠に紅い幼き月

紅魔館の主人で吸血鬼のお嬢様。双子の妹もいます。10歳にも満たないような背の高さだが、背中に大きな翼を持つためシルエットは大きい。

性格は見た目通りの子供で非常にわがままである。

少食で、人から多量の血が吸えない。また、吸い切れない血液をこぼして服を真っ赤に染めるためスカーレットデビル（紅い悪魔）と呼ばれている。

吸血鬼は日光に当たると危険で、消滅するとかがメジャーですが、作者の小説ではどうしようか迷ってます。因みににんにくとか十字架は効きません。

紅魔館には地下があり、そこには大規模な図書館が建設されている。そしてそこにはレミリアの友人と司書がいます。

「運命を操る程度の能力」とは、彼女のそばにいる者が数奇な運命を辿るようになる能力らしいが、オリ設定である程度は指定することが出来る。

十六夜咲夜 いざなよい さくや

種族：人間

能力：時間を操る程度の能力

二つ名：完全で瀟洒なメイド

紅魔館のメイド長で、紅魔館に住んでいる唯一の人間。実質的に紅魔館を取り仕切る立場にいる。

瞳の色は色々とはばらけがあるが、新月から満月に至るまでで青から赤に変色するってタイプで行こうと思います。

年齢に関しては10〜20前半らしいが、時間止めれるから信用できない（笑）

時間を操る能力を持っており、時間を止めることができる。さらに、時間の流れるスピードを変化させることもできるらしい。しかし、起きてしまった出来事を無かったことにするのは難しく、壊れた物などは時間を戻しても元には戻らないため、事実上時間を戻すことはできないとされる。バイツァ・ダスト持って来い。時間と密接に関係する空間も弄ることができる。

銀製のナイフを投げナイフ用として多数所持しており扱いが上手く、時を止める能力を使用しているだけのタネなし手品も得意としている。投げナイフの腕と料理の腕は比例するらしく、そのため彼女は料理も上手い。

瀟洒な咲夜さんでいくか、砕けた咲夜さんでいくか………どうしよう。

紅 ほん 美鈴 めいりん

種族：妖怪

能力：気を使う程度能力

二つ名：華人小娘

紅魔館の門番を務める中国人風の妖怪。中華風の衣装に身を包み、帽子に付いた星には「龍」の文字が刻まれている。衣装の下には弾幕用のくないが仕込んである。身長は高め。シロウ基準で比較すると、だいたい胸元の真ん中位（という設定）。でけえ。おっぱいも

非常に人間臭い妖怪で、人を襲うことはほとんどなく、逆に人間と親しく話すこともある。侵入者に対しては容赦がないが、非を詫びて館の外に戻った者を深追いするようなことはしないらしい。

能力特化型ではない、いわゆる万能型の妖怪であるため、妖怪としてはそれほど強くない。しかし、武術に長け戦闘能力が高く、弱点らしい弱点もないため、普通の人間相手には強いという。弾幕戦だと常に劣勢な為、門を守りつつ侵入者を退治する、普通に考えたら……… 　　な為、よく叱られてる。ぶっちゃけそういった相手は門なんか通らないで飛んでいける。カワイソス。

気を操る程度能力は、気功を操る能力または他人に気を使う能力として表されている。他人にゝの方は二次創作です。苦勞人。気功を用いて身体強化、治癒能力強化、他人の気を操って身体不全起こしたり様々なことが出来る。シロウとコンビ組んだら強そう。これら全ては全てリーチ1、つまり隣接してないと効果を発揮しない。よって他人の気をゝは結構難しい。一人だと。

次回も2ゝ3人くらいの紹介になるかも。

傍迷惑な図書館騒動（前書き）

ペルソナ3ポータブルが楽しくて更新が遅くなりました。しかもなんか中途半端です。ペルソナ3既プレイな自分でも色々と変更点があったことで飽きが来ないです。

んで、考えたんですけど。東方×ペルソナって書いて見たいなって。

——何と言う莫迦野郎だろうか。まだこちらの小説が序盤で足踏みをしているというのに、その上新規に小説を書きたいだとか？

そんな事をすればどちらかが崩壊する。中途半端な好奇心故に我が身に鞭を打つなぞ、愚の骨頂。

否、だからこそ。

好奇心とは、詰まるところ探究心でもある。自分の満足のいく小説を書きたい、皆何事もやるにして多少なりの向上心は持ち合わせている筈。

その心故に、人は成長する。

とか言ってるけど結局は何となくが発端なんすよねー。皆さんのにはどう思いますかね、考えを下さい。

傍迷惑な図書館騒動

『取り敢えずこの館の住人を紹介するから来て頂戴』

彼女の言葉により私と咲夜はこの館の主人であるレミリア・スカ―レットの後ろを追っていく。

その歩幅は私達の半分ほどしかなく、それも本人も理解しているのか、必死に前を歩こうと早歩きに勤しんでいる姿が可愛い。

咲夜をちらりと覗き見る。恍惚の笑みが咲夜を支配している。レミリアを見てすっげー幸せそうにしている。

先程までの凜とした表情は何処へやら、その緩みきった顔はそんなもの存在しないと完全に否定するようなものだった。やばい、このままじゃ咲夜のイメージが磨耗し切ってしまう。

悦に浸った咲夜の姿を記憶から抹消し黙々と歩き続ける。深夜のせいか、働いている従業員の姿を見ない。流石にこれほど大きな屋敷の中に咲夜だけが従業員と言うのは有り得ないだろう。

数分と歩いただろうか、目の前に大きなドアが現れる。レミリアはそれを軽く開けると、次に現れたのは地下へと続く階段だった。レミリアは何も言わずそれを降りていったので、それに続く。

足元を照らす程度の明かりだけが視界の拠り所で、無駄の一切を削いだ下り道を降りていく。横幅も一人と半分程度で、まさに洋館の地下通路のイメージだ。

『今から会わせるのは私の友人でね。ちょっと人見知りが強いけど悪い奴ではないよ』

『優しいんだな。友人の第一印象のせいで悪い先入観を植え付ける

可能性を考慮してフォローを入れるとは』

『……………妙に難しく言ってるけど、別にそんなんじゃないわ。単に悪印象を持たれて仕事が捗らなくなったら困るからよ』

こちらを見向きもせず、淡々と話す。でも心なしかレミリアの歩幅が広くなった気がする。やはり少しはそのケはあったのだろう。動きから気恥ずかしさが伺える。

間も無く視界に大きな光が写る。それが終点だと理解するのに思考は必要なかった。

暗闇が晴れ、その代わりに視界を覆ったのは、一目じゃ数を把握しきれない程の書庫と無限とも思える大量の書物だった。ここには世界の真理すらも文献として収められているのではないか？と言う錯覚すら覚える。

地下に訪れてから、人の気配が増大する。四、五人といった所だろうか。つまりはこの館に今居るのは十人近く。館の大きさと反比例して、住んでいる数は結構少ないとは、持ち腐れもいいところだ。

『あら、お嬢様に咲夜さん。それと……………誰ですか？』

本棚の隙間から体を覗かせたのは、赤い長髪の少女だった。焦茶色のゆつたりとした服とロングスカートに身を包む姿からは、清楚な物腰を伺える。しかし、背中と側頭部から生えているコウモリのような羽が、彼女が人ならざる者だと言う事を明確に伝えている。

『ああ丁度いいわ。コイツの紹介をしたいの、パチュリーとか呼んできて頂戴』

『分かりました。すぐにでも』

その言葉と同時に身を翻し、背中の羽で器用に飛んでいく。頭の羽の用途が分らない。

『さっきのは小悪魔——こあって言うんだけど、あれはパチュリ―が召喚したサキユバスよ。とは言っても何かしら行使したらしくてサキユバスとしての特性は無くなってるけど』

『そうか。ならパチュリーと言うのが君の友人かね？』

『そう。まあこんな所に住んでるって時点で想像はつくでしょうけど、パチュリーは本の虫ね。寄生虫もいいところよ』

遠慮の無いその物言いの中からは、どことなく愉しげな雰囲気が見えている。信頼関係が深い証拠でもある。

『虫なんて失礼な言い方でないで頂戴。そんな本の中身すら理解出来ない様な奴等と同類なのは頂けないわ』

先程こあと呼ばれた少女が飛び去った方角から、彼女を含め四人の姿が現れる。先程のレミリアの言葉に反発した少女こそ、パチュリ―なのだろう。

腰の辺りまであろう長い紫色の髪、薄紫と濃い紫の縞模様が目立つパジャマの様な服、帽子も紫のふわふわとしたフリル付きのものでアクセサリに赤と青のリボンが右に、左には三日月が装飾されている。

そんな少女が、眠たそうにこちらへと飛んでくる。そして更に、その後ろからこあを含め三人程遅れてやってきた。

一人はこあと瓜二つで、服装も全く一緒。違いと言えばその少女の
ほうが背が小さく、髪はショートボブだと言うことだけ。

もう一人もまたレミリアと似た少女で、髪型は一緒、色は金、服と
帽子も色違いの赤で統一されており、羽はレミリアはシンプルな蝙
蝠の羽だったが、彼女は一本の枝にまるで宝石でも散りばめたかの
ような、羽としての用途があるとは思えない奇怪なものだった。遠
目から見た雰囲気、レミリアと違い見た目相応の幼さを感じる。

『あれ、貴方誰？』

レミリア似の少女が無垢な瞳で見つめてくる。打算の一切無い純粹
なその瞳は、逆に全てを見透かされているような気分にさせられる。

『あらフラン、いたの』

『うん、いたよ。パチュリーにね、面白そうな本無いか聞きにきて
たの。そしたらほら』

両手で持ち上げ自慢するように見せたのは、一冊の童話の本だった。
白雪姫、赤ずきんちゃん、不思議の国のアリス、有名どころの総集
編。そのチョイスに納得してしまう。

『ああ、うん。分かった。それよりもコイツの紹介をするわ。コ
イツはエミヤシロウ。今日からここで執事として働くことになった
の』

『執事………にしては無骨な装備してるわね』

パチュリーがジト目——素のようだけど——でこちらをまじま
じと見つめてくる。

『ああ、執事服ならある』

というか、創れると言った方が正しいのだが。

『そうは見えないけど……まあいいわ。私はパチュリー・ノーレッジ。このヴワル魔法図書館に住んでる魔法使いよ』

また魔法使いか。外だと魔法使いは世界に五人しかいないから、こんな当たり前のようにポンポン出てくるのは違和感しか感じない。

『私はフラン！フランドールだよ！』

ぴょんぴょんと飛び跳ねて自己主張をするフランドール。無邪気な拳動が微笑ましい。

『まあ見ればわかるでしょうけど、私の妹よ。少し生意気だけど仲良くしてやって』

『うわ、お姉様自分のこと棚に上げすぎ。どう見たってお姉様の方が生意気そうだと思うけど』

その言葉に頬をひくつかせるレミリア、対してフランドールは舌を出して子供染みた挑発している。

こあがフランを嗜め、レミリアは——咲夜がいつの間にか取り押さえていた。幸せそうに。

『あ、あの………』

おずおずと目の前に現れたこあ似の少女。何かを言おうとしている

のだが、少し挙動不審な様子。

『緊張しなくてもいい。もっとフレンドリーに接してくれて構わないよ』

出来るだけ緊張をほぐそうと、優しく笑いかける。しかし逆に身体が強張った様子。心なしか顔も赤い気がする。

『わ、私の名前は小悪魔です。けど、それじゃお姉ちゃんと一緒にだからって、パチュリー様が私にはリトルって名前をつけてくれたんです』

俯きながら早口で捲くし立て、肩が上下に動いている。これから会話するのに毎回これだと彼女が苦勞しそうだ。どうにかならないものか。

やはりどうにかして親しくなるしかないのか。でもこの状態じゃあ、私がここにいる間にどうにかなるか不安で仕方ない。

『君のお姉さんはこあ、だっけ。それもパチュリーが？』

『はい。私達はパチュリー様に使い魔として召喚されたんです。一応私はサキュバスなんですけど、今ではこの図書館の司書です』

サキュバスって確か精気を好むらしいけど、この子はこんなんでその……口では言えないことをやってきたのだろうか。想像出来ない、いや、したくない。

『そ、そうか。大変だろう、こんな大量の本を管理してるのだから。これからは私にも手伝わせてくれ』

『い、いえ！確かに本は大量ですけど、パチュリー様との契約時にサキュバスとしての性質を弱めると同時にその分の力を書物探查能力へと移行させたんです。つまりところ今の私達はサキュバスというより本の精霊に近いかもですね』

バツの悪そうに頭を掻くリトル。元はサキュバスで今は本の精霊、本人も複雑な心境なのだろう。

しかしその表情に不満はなく、寧ろ充実した活力のあるものだ。

『私達、確かにサキュバスではあつたんですけど、召喚される前にそれらしい事やってた訳でもなくて、結局肩書きにもならないんですよ。お姉ちゃんとは分からないけど、私が男の人のせ………精気を吸うだなんて——！』

自分で言つて爆発したように顔を赤くさせるリトル。確かにこんなにも免疫がなさそうじゃ勤まる訳もなさそうだ。パチュリーがやったことは意図的にしろ無意識にしろ良い結果を産んだのだ。

『はいはい、お喋りはそこまでにして頂戴。それよりも、シロウ、だっけ？貴方はこの紅魔館に執事として訪れたのなら、相応の自信があるのよね？』

リトルとの会話の中にパチュリーが介入する。それに続くように周囲の喧騒も止み、意識がこちらへと向けられる。

『自信は、無いこともないが自分自身実力を把握をしていなくてな。比較対象が修行時代に巡り合う事がなかった』

『比較対象がいなくて、我流なの？』

『そういう訳ではないのだが、ある女性の下でレクチャーを（強制的に）されてな。マンツーマンで私以外に教えを請うていた者もおらず、彼女が満足のいく結果が、今の私のスキルとイコールで繋がっていると言っても過言ではない。勿論、そこからの精進は我流だが』

『ふうん……。なら咲夜と勝負させてみたら？』

突如、レミリアがそう提案してきた。

『私と、ですか？』

『そうよ。確かにシロウの言い分も咲夜に当てはまるのよね。咲夜自身、ここでメイド長の実績を治めていると言ってもそれはあくまでこの紅魔館という視野でしかない。妖精メイドは咲夜と比較するまでも無い。だから実質その位置に甘んじてるに過ぎない。——咲夜のメイドとしてのスキルはこれが限界とは思えない。だからと言って完璧に近い所に至ったもの程高めるのに困難なものはない。ならばどうするか？』

そこでパチン、と親指を鳴らしその伸びた人差し指を私へと指す。

『ライバルよ。お互いを高めあい、目標とする存在。それが必要なのよ』

『確かにそれは正論ですが……。果たして彼の実力が如何程のものか』

『別に相応の実力を求めている訳では無い。これの主立った目的は、シロウの実力を測ることにあるからね』

レミリアの言葉に納得する。

なるほど。つまりは咲夜と私を勝負させることで、自身のスペックを理解させ、それと同時にお互いの能力向上に繋げる。まさに一石二鳥だ。

『じゃあ、今からやるの？ 私達は夜型だから大丈夫だけど、シロウはそうもいかないんじゃない？あ……………』

心配そうな表情でこちらを覗き込むフランドール。私はその心配の色を消す為に彼女の頭に手を置き、撫で回す。

フランドールは擦ったように目を細め、私の手の動きに身体を預ける。人懐っこい傾向にあるのだろう。

『心配してくれて嬉しいが、もしレミリアがそう言うのなら私はそれに従うまでだ。執事とは、傳く者だからな』

『うにゅっ……………』

話を聞いていたのかが分からない返答だったが、取り敢えず撫でるのを止めてレミリアの方へと向かう。

『そうね、貴方がそう言うなら今やりましょうか。でも仕事は咲夜が殆ど終わらせちゃったからまたやるとなると二度手間が無駄なのよね』

別に君がやるのではないからいいのではないか？とも思ったが黙っておこう。そのせいで適当なものになってはどうにもならない。

『料理は作ってすぐに冷蔵庫ってのもアレだし、掃除は埃被ってる

訳でもなし、洗濯も終了済み。残るものといつたら………」

『……………戦い？』

ポツリとパチユリーが呟く。

『おい待て、それと従者の対決になんの関係がある』

『あながち関係ないものでもないわよ。主に仕えるのならば、ただ仕事をこなすだけでなく主を一切の敵から守る戦闘力があっても何の不都合も無いでしょう？』

『確かに、そうかもしれないが』

それでも本職を差し置いてそれはないだろう。優先順位が明らかにおかしい。

『それもいいかもしれないわね』

『そこ、納得するな。咲夜はどうなんだ、従者として勝負のサジがおかしいとは思わんかね？』

彼女の答えに期待を込め、問いかける。

『私は、お嬢様の言葉に従うまでですわ』

駄目だった。

『んじゃあ今から場所を決めてやりましょうか』

『え、遊ぶの？フランもやるー！』

『遊ぶんじゃないっつの』

駄目だ………また流されてる。分かってても個の意見が尊重されないこの世の中、世知辛い。

『へへ、面白そうだな。私も観戦させてもらうぜ』

その言葉が辺りに響くと、空気が一瞬凍りついた。

先程までの会話の中には無かった声色に、思わず皆がその声の方向へ振り向く。

そこには、十代の中盤ほどの外見の少女が当たり前の様に仁王立ちしていた。

黒色の尖った帽子にそこから覗ける金髪のロングヘアが特徴的な少女で、服は白黒のエプロンドレスを着用している。装飾には帽子には対照的な白のリボン、右側頭部にも小さな白のリボンが結ばれている。

そんな少女の右手には等身以上の長さの箒が握られており、その柄の部分には頭より少し大きめ程度の袋が掛けられていた。

『ま、魔理沙！？』

パチュリーが驚愕し、フランドールが歓喜する声が重なる。

パチュリーは先程までの覇気の無い声とは思えない声を上げ、フランドールは魔理沙と呼ばれた少女に近づき抱きつく。

声には出さないもの他の面々も多種多様の驚きを見せている。

『知り合いか？』

『知り合い………だけど、どちらかと言えば悪い知り合いね。コイツはこの図書館にある書物を盗みまくってるのよ。簡単に言えば泥棒ね』

『おいおい、私はちゃんと返すって言ってるぜ？死ぬ前には』

少し男勝りな口調の少女は、悪びれた風も無く飄々とした態度を見せている。あの袋の中身も、この本という可能性もある。

『なるほど、先程までずっと感じていた気配は君のだったのか』

一部が気付いてたのかよ的な目で睨みつけているが、今はそれよりもこの少女だ。盗みを働いてるのが事実ならば、それを容認することとは出来ない。

それに、こんな幼い子が犯罪に手を染めるなんてのはあってはならないことだ。彼女の人生を悪い方向へと導きかねん。

『それにパチュリー、私は泥棒じゃなくて魔法使いだ』

………またか。これで三人目。外には五人しかないというのに、ここではバーゲンセールの如く存在している。有り難味も珍しげもありはしない。まるで石ころだ。

『——シロウ、咲夜。ちょっと勝負はお預けで構わないわね？』

『え、何が——』

疑問を投げかけようとした言葉は、更に続く言葉に掻き消される。

『魔理沙をとつちめるわよ。不法侵入に窃盗、赦されるとは思っていないわよね?』

レミリアは終始笑顔。だが誰もがそれが表面上だけのものだと分かるだろう。

パチュリーも怒りを静かに露にしている。この少女との戦闘が始まるのは時間の問題だろう。

しかしまずい、そうなると多勢に無勢。彼女に罪があるだろうとはいえそれはあんまりではないのだろうか。幾度となくここで盗みを働いてるのだから彼女自身それなりの実力の持ち主なのは想像できるが、実質の六対一………覆す隙は無い。

『待ってくれ』

『何よ、言っておくけど魔理沙を見逃せてんなら却下よ』

『違う、彼女の躰は私に任せてもらえないだろうか』

レミリアが一瞬きよんとするが、すぐにいつもの表情に戻る。

『理由は?』

『純粹に私の実力を測る舞台を提供してもらいたいんだ。それに咲夜と私を戦わせたのなら、最悪どちらかが仕事をこなせなくなってしまうだろう?だが彼女相手ならば最低でも咲夜が支障をきたすことはない筈だ』

嘘と言うものは案外ペラペラ出るものだな。私一人なら彼女を傷つかせずに勝敗を決することも不可能では無い。下手に助勢があれば逆に手元が狂いかねない。

『それは、私達を侮ってるってこと？』

『侮るもなにも、私はこの館の住人では咲夜の実力しか知らんよ。単なる保険さ』

レミリアは一瞬考えると、すぐ決断する。

『オッケー。ただし言ったからには絶対に捕らえなさい。それが絶対条件よ』

その言葉に満足した私は、不敵な笑みを浮かべ、呟いた。

『了解した、マスター』

『おいおい、そっちで勝手に話を進めてるけど、私は戦う気なんかさらさら無いぜ？』

途端、魔理沙が箒に跨るとそのまま空中へと浮いていく。魔法使い、で誰もが連想する姿がそこにはあった。

『逃げようなんて事は考えないほうがいいぞ。私には君が何処に逃げようと絶対に逃すことの無い自信がある。ならばここで私を撃退したほうが君にとっても都合がいいのではないかね？』

こちらにはフルンディングがある。放てば最後、私が死ぬかそれが破壊さ

れるまで、弾かれようと永遠に標的を追い続ける。相手が逃げの一手で来るのならば、こちらはその間魔力を込めることが出来る。大体四十秒あれば例えセイバーだろうとエクスカリバー無しで止めることは不可能。

とは言っても元より使う気はさらさら無い。言うなればただの脅し文句だ、一切の嘘の無い。

『信じる信じないは勝手だが、後悔することも出来ないかもしれんぞ？』

わざと悪人の様な歪んだ表情で魔理沙を挑発する。

これで立ち向かうならよし、逃げるならば——こちらがどうにかして頑張るしかない。

『——分かった。あんたと会うのは初めてだが、少なくとも嘘を言ってる気はしないな。まあ、個人的に嘘であってほしいがな』

逃げる体勢から、正面に向き合い対峙する。その際にポケットから何かを取り出した。中心に穴の空いた八角形の小さな物体、一つ一つの角の正面には色々な形の模様が刻まれている。

『だからそんな危ないものを出される前に、私はとつと決着をつけることにするぜ』

その物体を両手で力強く構えると、小さな穴から光が収束し始める。

『あれは、魔力か？』

『気をつけてシロウ！あいつの得意技は——』

『もう遅いぜ、パチュリー』

パチュリーが声を大にして叫んだその瞬間、その言葉を最後まで聞く前に空気を裂く音と共に世界が閃光した。

爆音と共に放たれた超極太のレーザー砲——マスタースパーク。魔理沙の得意技であり、最も威力のある魔法。人間が放つには到底不可能な魔力と熱量が、シロウを包む。

衝撃波が図書館全体に伝わり、本棚は倒れ、私はそれに吹き飛ばされそうになる。

そんな中未だ続く攻撃に、私は疑問を覚える。

本来マスタースパークはその莫大な熱量と魔力を用いる為に長時間の放射は理論上不可能。無理矢理魔力を搾り出せば可能だが、その際にかかる負担は尋常なものではない。

今の魔理沙には、両腕は逆に拉げる痛みと、衝撃に耐えるべく踏ん張る胴には激痛が走っていることだろう。

何故、そこまでする必要があるのか。

アイツがあそこまで本気を出すのは滅多に見ない。それが何故、初対面の相手に対して普段見せない本気を晒しているのか、理解が及ばない。

耳を劈く爆音が消え、衝撃で舞った砂埃と膨大な光の余波による視界の不明瞭だけが残る。

『これで、どうだっ……………』

ゼエゼエ、と息を荒げる魔理沙。アレだけの衝撃を抑えるのなら、息をする間もないのも頷ける。

衝撃で帽子はいつの間にか吹き飛んでおり、箒が無ければただの人間にしか見えない。

『シ、シロウ!』

妹様—— フランドール・スカーレットが魔理沙と対峙していた男の名を叫ぶ。男の姿は土煙によって確認が不可能な状況、生死すらも定かではない。

あれを人間がまともに食らえば軽く塵芥になっってしまう。私はしっかりとシロウの身体が閃光に包まれたのを確認した。生存確率は絶望的なものだろう。

煙が晴れると妹様は慌ててシロウのいた場所へと近寄る。あの状態の彼女がこんなに取り乱しているのも珍しい。

斯く言う私は至って冷静。知り合う以前の存在が死んだ所で目の前で死んだという後味の悪さしか残らないし、それも時間が経てば摩耗し最後にはその事実すら私の中で無かったこととなる。

私に限らず、記憶とはそういうものだ。本当に自身を揺さぶる出来事でもない限り生涯残り続ける記憶なんてものは生まれなく、薄情な生き物。それが世界に生きる万物の罪。

次第に鮮明になっていく視界に映ったのは、魔理沙に向かって右手を突き出し立ち尽くしているシロウの姿があった。その姿に傷は見当たらず、先程と変わらない表情で相変わらず魔理沙を見ている。

『嘘……………どうして』

その言葉は私と魔理沙、両方のものだった。

思考のシンクロ、魔理沙も今間違いなく彼が生きてること、いや、彼が無傷だという事実を認められずにいる。

当たり前だ。魔理沙は人間の魔法使いであるものの、決して本家に劣らない魔力を有している。色々な妖怪と対峙し、戦果を上げた実績はそれなりに知れ渡っている彼女の本気を浴びて、無傷という有り得ない光景。まるで理解が及ばない。

『いや危なかった。君が叫んでいなければ間違いなくあれをまともに喰らっていたよ。感謝する』

魔理沙の方を向いたまま、私へと文字通り感謝の言葉を投げ掛ける。

『そんなことより、なんで生きてるのよ!?!』

『私が生きていては不服かね?』

つい声を荒げてしまうが、シロウ自身は至って冷静に答える。その余裕が何だか腹立たしい。

普段はこんなに取り乱したりはしない。ただ、目の前の光景が余りにも信じ難いものだったから。

こんなに我を忘れたのは久しぶりだ。

『シロウ!』

妹様が彼の名を叫び背中から抱きつく。いつの間にあんなに懐いたのか。

『フランドール、すまないが離れてくれないか?まだ仕事の最中でね』

『そんな事より、どうやって魔理沙のマスタースパークを防いだの？』

空気を読まず妹様は興味深々に会話を続ける。シロウもそれに多少困っている様子が背中越しに伺える。

『ああ、あれは盾を使って防いだんだ。とは言ってもあの一撃で壊れてしまったがね。私的には相殺に持ち込めたのは嬉しい誤算だったよ』

盾？そんなものアイツが所持していた風には見えなかった。

隠せるサイズの盾があったとしても、そんなのでは身体全体を防ぐのは無理だ。でも、何かしらで防いだのは事実だろう。あれを一身に受けて服にすら損傷が無いというのは矛盾しているからだ。何よりも生物としての範疇を超えている。

『盾が壊れたんなら、もう防ぐ手立ては無い筈だぜ？』

魔理沙は魔力を再び八卦炉に収束させ、再びあれを放とうとする。無茶もいいところだ。今の彼女は誰が見ても満身創痍、口では平静を装っていても挙動は疲労に満ちている。次放てばどうなるかわかったものではない。

対してシロウは逃げもせず、立ち向かおうともせず魔理沙を睨み付けたまま身動きを取らない。妹様が抱きついてるから動けない訳ではなさそうで、最初から逃げも隠れもしない気なのだ。

『一体、どうする気なの……………？』

レミィ——レミリアと咲夜は何をするでも無くただ有り体を見守

っている。彼の言葉を信用してか、二人の様子を見て楽しんでるかはその表情からは読み取れない。

『これで、終いだ！』

搾り出した様な声で叫ぶ魔理沙の八卦炉は、最早最大まで溜められている。これを再び食らえば今度こそ助からないだろう。

今まさに放たれようとした瞬間、突如シロウの手からも一瞬光が集まったかと思うと、そこには一本の槍が握られていた。それにシロウ以外のこの場の人達が驚愕する。

二メートルあまりはあるであろう真紅の長槍。しかもそれからはとんでもない位の魔力が溢れ出ている。あれではまるで神話に出てくる魔具だ。

……魔具？

私は思考をフルに回転させて今まで読んだ書物の情報を紐解いていく。

あんな感じの槍を、本で見たことがある。それはそう、確か神話の武具に関する書物だった筈。

記憶ではあの様な風体の槍は二本しか確認していない。ゲイ・ボルグとゲイ・ジャルグ、という名前だった気がする。

ゲイ・ボルグは確かケルト神話に出てくるアイルランドの英雄が所持していた槍で、長さも２メートル、丁度あれ位のリーチだ。投げれば３０の鏃となって降り注ぎ、突けば３０の棘となって破裂するという逸話があり、それを足で投擲していたとか何とか。

ゲイ・ジャルグもまたケルト神話に登場する槍で、その持ち主はフイアナ騎士団というものに所属していたらしい。槍の長さはゲイ・ボルグを超えたリーチを持ち、その槍に貫かれたら喻え魔法によって強化された鎧であろうと意味を成さない破魔の効果を持つ槍。

この状況下で出されるのならば、間違いなくゲイ・ジャルグの方だ。だが、それをどうする気なのか。喻えあれが本物の破魔の槍だとし、ても、魔理沙がマスタースパークを放てばあの広範囲の魔法を相手にどう立ち向かう？今から捨て身覚悟で飛び掛つても間違いなく間に合わない。破魔の効果を利用して盾にするにも判定が小さすぎて意味を成さない。

『そんな細っこい槍で私の魔砲は止められないぜ！』

シロウが槍を逆手に持ち替え、担ぐように魔理沙へと切っ先を向ける。

『咲夜！』

私はすぐさま叫んだ。ここにおいては危険だと、本能が告げていたから。咲夜も意図をすぐに理解したようで、小さく頷くとポケットから懐中時計を取り出す。月時計と呼ばれるそれは、咲夜の時間を操る能力の補助装置だ。その恩恵があつてあれだけの性能を誇るようになる。彼女自身の力だけでは大した力が出せない。それが人間に余る力の欠点と言うことだ。

瞬きをする間もなく、世界の全てが反転する。ヴワル魔法図書館に居た筈の私達は、その地下への入り口にまで移動させられていた。突然のことに一部は困惑している。

『二人は？』

妹様が誰にでもなく問いかけた瞬間、紅魔館全体を振動と轟音が包んだ。

その揺れは尋常ではなく、地下でどのような光景が広がっているかが容易に想像できる。

『凄いつ……揺れ……』

『それになんて魔力の波なの！？』

魔力の塊が衝突し合ったことによる衝撃が地下から噴出している。一撃目よりも強大な波は、地下への道と言う狭い道から溢れることでより密集し、その場にいた殆どは吹き飛ばされてしまう。この中で最も魔力抵抗の無い咲夜と子悪魔達は結構な距離を飛ばされ、リトルが怪我をしたのか隣にいたこあが倒れている彼女を抱えている。

『皆さん！大丈夫ですか！』

美鈴が廊下を慌てて走ってくる。彼女もこの異変を察知したのだから、表情は険しいものとなっている。

『大丈夫には大丈夫だけど、リトルが怪我した可能性があるの。安全な場所に運んで頂戴、私達は様子を見てくるから』

『分かりました。気をつけて下さいね』

美鈴がリトルを抱え、バランスの良い走りですの場から消えていく。こあも遅れてそれについていった。やはり姉として心配なのだろう。

私達は浮いて一気に地下を降りていく。階段なんてものを使っている時間はかかるだけだし、何より私の身体が持たない。

辿り着いた瞬間、私は絶句した。

本棚はほぼ全て薙ぎ倒され、それら一部分には引火を起こしている箇所すらあり、まるで嵐の通り道だったかの様な壮絶な光景が眼前に広がっている。

『私の、本が……………』

私は落ちる様に膝を屈する。

これ程大量に納められているのだから、当然この世に一つしか無い物だって存在する。まだ確認した訳ではないけれど、もし僅かにでも綻びが生じてる箇所があったりでもしたらと思うと確かめるのが恐ろしくて堪らない。

だが、そんな私の落胆は誰も意に介している風もなく、ただ一点を見つめていた。

その先には、僅かながらにボロボロになっているシロウと、壊れた八卦炉をもの言わず見つめている魔理沙の姿だけがあった。

傍迷惑な図書館騒動（後書き）

今回も一気に人紹介します。書くのが大変。

霧雨^{きりさめ}魔理沙^{まりさ}

種族：人間

能力：魔法を使う程度の能力

二つ名：普通の魔法使い

魔法の森に住む魔法使い。そして原作を通して主人公の一人を担っている。人間離れた存在の中ではかなり人間に近い。

蒐集癖があり、物が捨てられない性格。負けず嫌いで捻くれ者だが根は真っ直ぐ。努力家で勉強家。何処へ行っても迷惑がられるが、実際に迷惑な行動が多い。

人間の里の大手道具屋「霧雨店」の一人娘であるが、事情があつて勘当されたらしく、絶縁状態にある。彼女が幼い頃その店で働いていた人物があり、物心ついた頃には独立をしていたが、その人物が何度も実家を訪ねていたことで、知り合いではある。

魔法使いとしては光と熱を使った魔法が得意であり、人間の中では最高クラスの威力があるが、物を破壊する程度の効果しかなく多様な魔法は使えない。彼女の使う《マスタースパーク》は原作で最高の威力と判定を誇っており、まさに代名詞と言つてもいい。

口調はくだけくか？ の様な男口調であるが、俺とは言わない。泥棒行為は日常茶飯事。パチュリーは今日も涙目。

パチュリー・ノーレッジ

種族：魔法使い

能力：火＋水＋木＋金＋土＋日＋月を操る程度の能力
二つ名：動かない大図書館

見た目は小説内で記述したが、リボンには魔法力を高める効果が付与されている。

生まれつきの喘息持ちで、さらに「本のそばにいるものこそ自分」と考えており、滅多に外出せず運動もしないため体が弱い。ビタミンAも不足している。

魔法の中でも特に精霊魔法や属性魔法を得意とする。

レミリアとは友人関係で、レミリアから「パチエ」というあだ名で呼ばれ、パチユリーはレミリアのことを「レミィ」と呼んでいる。

小悪魔^{こあくま} こあ リトル

種族：悪魔

能力：不明

原作では中ボスの位置づけで、設定も殆どない。故にその地位にいるキャラは必然的に二次創作で色んなキャラ造りがされている。

私の小説内では、二次創作であるキャラ構成としてロングヘアor ショートヘアの双子の姉妹としています。

その理由は、全国の小悪魔ファンのニーズに応えるべく思案した結果です。

姉の方は、こあと言う名前。

性格はおっとりして、実は芯が備わっている。でも天然。

妹のことを過保護にしており、妹のこととなると普段しっかりして

る反動故にパニックになってしまふ事もしばしば。

妹はリトル。

気が弱くて引つ込み思案。女性が蔓延る幻想郷という環境のせいか、男性に対して免疫が一切無く、更に男性に対する理想像も膨らんでいる。そんな中現れたエミヤシロウに、彼女はどのような感情を持ったのか…………。

他にオリジナル要素として、悪魔の中で更に分類されたサキュバスという種族で通しています。詳しくは小説本文で記述しています。

フランドール・スカーレット

種族：吸血鬼

能力：ありとあらゆるものを破壊する程度の能力

二つ名：悪魔の妹

レミリア・スカーレットの妹。七色に光る特徴的な形状の翼を持つ。身長はレミリアと同じくらい。495年以上生きている。因みにレミリアとは5歳差。

少々気がふれており、そのため生きてきた時間のほとんどを地下室に幽閉されて過ごしていた。こっからオリジナル↓しかし、魔理沙と戦ったことによって精神が多少安定し、それから日にちが経つことによつて紅魔館内を自由に歩きまわれる程になった。

普通、吸血鬼は食事のために、殺さない程度に人間を襲うのだが、長く幽閉されていたため人間の襲い方を知らず手加減ができないため、相手を跡形も残さず吹き飛ばしてしまうという。

「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」とは、打撃による破壊活動ではなく、全ての物には力を加えれば物を破壊できる「目」が存在しており、離れた物の「目」を自身の手の中に移動させることができ、強く握ることで爆発（破壊）させてしまう能力。直視の「点」を突いてるのに近いが、違いはその「目」を自身の手の平に移動させることが出来る、つまるところチートにチートが上乗せされていることになる。

でもこの能力は殆ど使うことが無い。彼女にとって戦いの定義は、遊びだからだ。能力を把握しているが故、それをすれば遊べないと理解しているから。

買きたいオモイ（前書き）

この小説内での魔理沙に対するイメージは、恐らく皆さんとは違ったものだともいますが、詳しい説明は後書きにでも。

貫きたいオモイ

恐怖。それが今の私の全てを支配している感情。

紅魔館の地下深くに存在する図書館で、私は一人の男と対峙している。男の傍にはこの館の主の妹である、フランドール・スカーレットが彼の生存を喜んでいる姿がある。

遠巻きにそれを眺めているのは、その主であり姉であるレミリア・スカーレット、この図書館に住んでいる妖怪の魔法使いパチュリー・ノーレッジ、この紅魔館のメイド長を勤めている従者の十六夜咲夜、パチュリーに召喚されこの図書館の管理及び守護を任されている双子の小悪魔、姉のこあ、妹のリトル。

彼女達もまた、私と同様の驚きを露にしている。

私の全身全霊を込めた一撃が、男に対してまったく意味を為さなかった。

自惚れかもしれないが、私の魔法は妖怪に対しても絶大な威力を誇る、パワー型ものだ。その効果の程は色んな場面で実証されており、それで異変だって解決してきた。

私だってそれを自負しているからこそ、人間であるというハンディキャップがあってもこの幻想郷内でも縦横無尽に駆けることが出来た。

それでも、私には勝てなかった奴がいた。妖怪と人間、ひとりずつに。

妖怪は、皆が知るであろう妖怪の賢者と謳われている、八雲紫。

人間は、この幻想郷で最も強いとされている人間であり巫女、博麗霊夢。

八雲紫に会ったのは、幻想郷から春を奪われ、それを解決しようと思気込んだ時だった。私は紅魔異変を霊夢と解決したことで浮かれていたのかもしれない。

その事件を解決したすぐに起こった、幽明の境とやらが薄くなるという奇怪な事件を解決すべく向かった。

私は一人異変を起こした紫と対峙し、戦った。

結果は、無残なものだった。

魔力は枯れ、衣服も最早その用途を果たしていない程にボロボロ、その裂け目からは大量の傷が余すことなく侵食している。

それとは対照的に、多少の乱れはあるも空を悠然と漂い見下している紫。

その表情があまりにも無機質で——恐ろしかった。

初めて、戦いの中に恐怖を見出した。

絶対的な力の差。自分とは何段階も先を行っている未知の存在。

人間としての限界と矮小さを、厭というほど刷り込まれた。

結局それは霊夢が解決したが、彼女もまた満身創痍だったと記憶している。——気のせいかな、紫は依然として余裕そうだった気もする。

普段は飄々として掴み所の無い奴だが、あの時の彼女はまるで闘うことだけを目的とした人形の様だった。勝利をしても何も思わず、敗者に対して興味も持たず。何もかもが無機質。

そして霊夢。彼女は人間でありながら妖怪なんかを遙かに超越した異端者だ。主に幻想郷を覆う結界の管理をしている巫女だが、妖怪退治のほうで最早彼女を語るに必要な武勇伝となっている。

私は、彼女には殆ど勝てない。勝ててもその時は大抵が腑に落ちな

い結果だつたりと、大手を振って勝ったと思えたものは一度と巡り合えていない。

この男は、この二人と一緒にだ。

対峙してるだけで感じる絶対的な力の差。息が詰まる一秒一秒の感覚。常に恐怖で僅かに震える体。勝てないと理解^{わか}つていても、逃げるなんて考えすら起こらない。背中を見せた瞬間に殺されてしまうのではないかという考えが常に頭を巡る。

目の前にいる男は何をするでもなく、ただ無表情に私の姿だけを捉えている。攻撃してくる気配もなければ、逃がしてくれる気配もない。

こいつは、何者だ。

私のマスタースパークをあの無防備な体勢から盾で防いだと本人は言っていた。

でも、どう見たってあの２メートル近い巨軀を覆いつくすほどの代物を持つている風には見えない。

だが、男は服や鎧にすら傷ひとつついていないと言う視覚的事実が、その矛盾を膨らませる。

私だって怠けていた訳ではない。寧ろ敗北を糧に、毎日魔法の研究を続けた。今度こそ、誰にも負けない力を身につける為に。

しかし、今こうやって嘲笑うかの如く簡単にその努力をへし折られている。

本当は泣きたい。でも、それは今すべきことじゃない。今心も折れれば何もかもが無駄だったと認めてしまいたいそうだから。生きることにすら厭になつてしまいたいそうだから。

『盾が壊れたんなら、もう防ぐ手立ては無い筈だぜ?』

口だけは必死に虚勢を張る。精一杯の抵抗だが、取り繕うにはこれが最も都合がいい。

私は震える両手で力強く相棒であるミニ八卦炉を構える。先程のマスタースパークで身体の節々は悲鳴を上げ続けているせいもあるが、やはり一番は目の前の存在のせいだ。あんな本気の放射は久しぶりで、身体が追いつかなかった。予想通りの結果とはいえ、予想外が連鎖して結果的に無駄な行いとなっている。それがどうにも腹立たしく、悲しかった。

次第に魔力が一点へと集中していく。その反動に更なる悲鳴が身体中から聞こえる。

痺れる手の平から、八卦炉を落としそうになるのをどうにかして持ちこたえるも、限界だった。

『これで、終いだ！』

まともに声は出せない筈だったが、憤りの果てには常人を超えた体力すら持ててしまうとも言わんばかりの大声が空間全体に響き渡る。

目下では、相変わらず私を見上げている男の姿。反撃する雰囲気はなさそうだが、私を掌握するこのねっとりとした雰囲気だけは拭えない。

超高熱が一斉に放射される。妖怪すらも白旗を上げる一撃が、二度目の咆哮を上げる。

再び図書館が私の魔法で埋め尽くされる。

私の全てを搾り取るまで動かないと思っていた思考は、目の前に現れた異物によって阻害された。僅かながらに見える、男の手にある

赤い槍。いつの間に、とは思ったがこの状況ならばこちらが圧倒的有利。

『そんな細っこい槍で私の魔砲は止められないぜ！』

間も無く当たるであろう瞬間、槍を逆手に持ち、担ぐように構えた。まさか、投げるというのか。

無謀な、この状況下でその選択は流石に私でも勝利を確信してしまいうそになる。

思わず頬が緩み、油断が生じる。あの槍がどんな強力なものでも、この魔力の壁を破れるはずがないと、そう信じて疑わなかった。

そんな僅かながらの望みすら、打ち砕かれた。

それは投げられ、マスタースパークに衝突したかと思うとまるでバターを裂くかのように、まるでこの壁なんてなかったのでは無いかという位に加速し、ついには目の前にまで現れた。

——ああ、死ぬのかな私。

死ぬ直前って物事がゆっくりに感じるって言うけど、まさしく今の様子がそれだ。そうじゃなきゃ今頃私の身体には不釣り合いな角が胴から生えている頃だろう。

悔し涙すら流せず、満足しないまま一生を終える。

私が生きた証がそこには無い、まるで虚空の様な人生。

やはり私は”普通の”魔法使いでしか無かったのか。

普通は異端になれない。普通である限り、異端とは渡り合えない。

一番近いと思っていた相手との距離は、誰よりも遠くて。

誰よりも同等でありたいと思った相手との距離はイタチごっここの如く変わらない。

こんなにも努力しても、”才能”と言うありきたりな文字に一蹴さ

れる。そんな、私の人生。

永遠の闇が僅かにまで迫ったとおぼろ気に理解した瞬間、その闇そのものが炸裂する。

比喻なんかではなく、言葉通り音を立てて爆発した。爆薬が装着されてもいない銃が。

私はその爆発の衝撃で箒から吹き飛ばされ、手にしていた八卦炉を離してしまう。体は自由落下をし、主を失った箒と八卦炉もまた、同じ運命を辿る。

背中を思い切り強打して一瞬息が止まるも、その直後の激痛により無理矢理に声が漏れる。

『か、っは——。っ痛う』

痛みに唸りを上げる中、小気味良い音と不愉快な音がほぼ同時に聞こえてくる。

ガラン、という箒の木製の柄が奏でる音と——カシャン、という八卦炉の碎ける音だった。

『あっ——』

その光景に呆然としてしまっても、身体だけはしっかりと八卦炉の方へと動いていた。

辿り着いた刹那、私は闇雲に碎けた八卦炉を拾い上げる。それはまだ持てない位の熱を内包していたが、そんなのお構い無しに拾い続ける。

手は火傷と切り傷で一杯。これが料理の練習で起きた結果ならば可愛らしいだろうが、これはただ情けないだけの傷だ。

失くしてしまつた、私の宝物。

私の相棒でもあり、私そのものでもある。そんな片割れを。私は自然と涙を流していた。当たり前と思えるだろうが、私は決して誰かにこんな姿を晒した事は無かつた。

弱みを見せれば、付け込まれる。強い奴が蔓延るこの世界では、弱い私はそんな事があつてはいけないから。

でも今、片割れを破壊された事で私の心も壊されたらしい。半身を失つたのだ。その悲しみは想像を遙かに凌駕する。

正面から靴音が聞こえる。間違いなくアイツのものだ。

私は服の袖で乱暴に涙を拭き取ると、うつ向いていた顔を上げてその姿をキツと見据える。

その姿は先程と何一つ変わらず、整然とした姿を保っている。

ただ違う所があるとすれば、そこから敵意は一切感じられないのと、

——その表情が言葉では言い表せ無い程の悲しみに包まれていた事だけだった。

勝敗は決した。しかし私は自身に対して憤りしか感じられなかった。勝利の余韻など欠片も無い。自身を制御無しに殴れるならば今すぐにしてしまいたい位に、私の心は荒んでいた。

レミリア達の数の暴力を抑える為の単独戦闘。それはつまり、選択の自由が有り余る程に私には存在していると言うこと。

あつた筈だ。目の前の少女が泣くことも傷つくこともない最善の結

果が。

なのにこのザマだ。彼女が大切にしていたであろう炉は原型を留めておらず、それを拾い上げた彼女の手には火傷と破片による切り傷が無数に出来ている。

私が変わって拾ってやりたかったが、それは彼女の心に追い討ちをかける事と同義。私はただこうやって彼女の泣き腫れた目から鮮明に感じる明確な敵意を一身に受けることしか出来ない。

滑稽だな。誰かを救いたいのが為に全てを棄てた者がいざ何かを得ようとすれば、その対価と言わんばかりに何かを溢してしまう。

やはり私みたいな不器用な者には、二兎を得る事は叶わないのか。

凜——、君は私に幸せになつて欲しいと願つたな。私には分からんよ。誰かの幸せを踏み台にしてまで得た幸せが、ホンモノの幸せなのか。

私が傷つかなければ幸せか？

私が平穩無事に生きていれば幸せか？

——俺がこうしている事が幸せか？

——違うだろ、遠坂。

幸せなんてものは多種多様だ。笑っているだけで幸せな奴、誰かをコケにしていれば幸せな奴、誰かを殺していれば幸せな奴。人にはそれぞれの悦楽の方程式があり、俺がどうこう出来るものではない。人間なんてのは、自身の幸せの為なら何でも犠牲にする。他人を犠牲にするつてのは、それが一番簡単な選択肢だからだ。何せ自分に關するものでは無いからな。

俺が壊れてるつてのは、それとは真逆だからなんだと思う。

自分が幸せになるべき定義に当てはまらないんじゃない、他人が幸せになる事が俺にとっての一番の幸せなんだ。だから俺は喜んで誰

かを助けているんだ。

確かに最初は罪の意識からだったかもしれない。でも、根底では少しずつだけそれが生き甲斐になっていた、自身でも知らない内に少なくとも、こんな結果は私の幸せの定義には当てはまらん。狂っていると言われても、これが自身にとつての”普通”なのだ。これを覆すと言ふならばそれは私という存在をゼロにしなければ不可能と言ふもの。

『シロウ!』

背後からよく聞こえるレミリアの声が響く。それに振り返ると、遠目に見ていた面々が一斉に近づいてくる。いや、小悪魔姉妹とパチユリーがその輪には入っていなかった。

『勝った、の?』

フランドールが魔理沙の様子から状況を汲み取る。私はそれにああ、と弱く呟いた。

『レミリア』

私は意を決して話しかける。彼女もまた、その雰囲気気が付いた様で変わらぬ表情で私を見上げる。

『私を殴ってくれ。出来れば手加減無しで頼む』

その言葉に、周りがざわつく。

当然だ。第三者からすればそんな事をする理由が思い当たらない。あるとすれば図書館の無惨な姿のせいぐらいだが、それはパチユリ

ーに言うべき問題だ。

これは純粋な罰だ。いや、ただの自己満足かもしれない。こつ言った不器用な形でしか己を律せないのは未熟な証拠かもしれない。別に一生熟練に至れるとは思ってもいないが。

『下手すれば死ぬわよ』

『死ぬ気なら頼まんよ。これは生きる為の枷だ』

その言葉にレミリアが押し黙るも、すぐに頷いてくれた。

『理由は聞かないけど………アンタは莫迦ね』

『私もそう思うよ』

二人して薄く笑い、そのまま私は強烈な衝撃と共に紅魔館の壁を突き破った。

空を浮いた私は何度も地面を弾き、身体はそれに従って不規則に捻れる。

これは痛い。強化は一切かけてなかった故か、まるで痛みを感じない。強すぎる一撃でどうも脳の一部が麻痺したのかもしれない。

それでも何とか立ち上がる事が出来るのも、サーヴァントの恩恵故か。

外傷を魔術で確認する。胴に対する一撃だった様で、肋骨が何本か逝ってしまっている様だ。更には臓器に刺さるというオマケつき。理解した瞬間に、猛烈な痛みが全身を支配する。口から僅かながらに漏れる血を拭き取り、立ち上がる。

意外にまともに歩ける。レミリアが手加減したのか、私が無駄に丈夫なだけか——どちらにしろこれ以上は流石に危険だ。身体はボロボロでも、心は晴々としている。決してマゾな訳では無い。

壊れた紅魔館の壁から再び中へと入る。すると近くまで皆が近づいて来ており、私を迎え入れてくれた。

『全く、アンタはどこまで私を驚かせれば気が済む訳？』

呆れながらもその表情には笑みを忍ばせているレミリア。あれは手加減だったのか、と聞く前に腹に再び衝撃が訪れる。

やばい、あたまがくらくらする。

これ以上は駄目だと警告していた脳が、なにもいつてくれない。流石に、死んだかもしれんな——朦朧とする思考の中、そんな事を悠長に考えていた。

私の身体は慣性の赴くまま、背中から倒れていく。最後に見えたのは、私に止めの一撃を放った張本人である、フランドールの姿だった。

『——ウ』

声がする。それは必死に叫んでる様に聞こえる。何をそんなに必死になっているんだい？

その言葉は誰に届くことも無く、私の中で霧散する。

『——て——ロウ』

同じ言葉が反芻される。曖昧にしか聞き取れないのに、何故かそれが同じものだとして理解してしまう。

揺さぶられる身体。この声の主が起こそうとしているのだろうか。

——ならば期待に答えないと。

『起きてよシロウ！』

完全に覚醒した意識の中、フランドールが私の顔を覗き込む様に身を乗り出して体重を預けている。

『シロウ！よかった………！』

フランドールの目から大量の涙が溢れ出す。それを見たことで先程までの経緯を思い出す。

私は魔理沙に勝ち、その決し方に納得がいかずレミリアに頼み込んで全力で殴ってもらい、そこに追い討ちでフランドールの突進をもらい、今に至ると。

彼女は恐らく私に対する罪の意識で一杯だったのだろう。何せ全面的に私のせいとは言え彼女がトドメを刺したのは誰の目から見ても明らか。

ワザとでは無いから、こんなにも涙してくれるのだ。この子が罪悪感に囚われるべき所は何ひとつ存在しない。

私はフランドールの頭を片手で抱きよせ、その手の平でそのまま撫でる。

『心配してくれてありがとう。私は大丈夫だから、泣き止んでくれないか？』

未だ腹部は痛むが、こんな時くらい他人を優先したって誰も咎めたりはせんだろう。ランサー辺りなら、男が廃るだのとか言いかねん状況だ。

『ごめんなさい……………！ごめんなさい！』

鼻水混じりの潜った声で精一杯謝罪をするフランドール。
痛々しい程に純粋な少女。その儂げな姿を消してしまわない様、もうひとつの腕でも少女の身体を抱き締める。

『君が泣いていては身体が治っても心は苦しいはまだ。
——それに、君は元気に笑ってる方が似合っている』

心配させまいと、精一杯笑みを浮かべる。
彼女はそれを見て、涙ながらに笑みを返してくれた。

『うん……………っ。ありがとうシロウ』

フランドールは私の抱擁から逃れ、今まで座っていたであろう椅子に再び腰を下ろす。

その際に私の片手は少女に握られたまま。優しい、暖かみのある握り方が心の癒しとなり、浸透していく。

『それはこちらの台詞だよ。大方私にずっと付き添っていたのだろ
う？』

すまない、君を縛るつもりは毛頭無かったのに』

『いいの。私はシロウの怪我を治せる訳でも無いから、せめてこうしていたかったの。』

——何もしないでなんていられないもん』

怪我——そういえば、と。

『私の怪我なのだが………何だか殆ど治っている気がするのだが』

痛みは残っているものの、あの折れた肋骨は見る影もなくなっていた。

傷の回復ならば、基本は魔力さえあれば事足りる。しかし、その魔力の減りが軽い戦闘程度にしか消費されてない事に違和感を感じる。

『私が倒れてから、どのくらい経った？』

『んつと………一日も経過してないよ。今は午後二時くらいかな』

それならば、長く眠っていた最中に魔力の回復を図っていたという結論には至らない。だがしかし、それでは辻褄が合わない。

ベッドの毛布を捲ると、ギプスと包帯をつけられた私の身体が露になる。無駄のない包帯の巻かれ方から、手掛けたのはそれなりに医学の心得がある者だと予想する。

『手当ては一体誰が？』

『永遠亭って所の医者を咲夜が呼んだの。』

私はその場に立ち会えなかったけど、外からその医者の何だか驚いた様な声は聞こえた』

驚いた、か。その驚愕の理由は関与する事では無いだろう。

『医者か……。何だか迷惑かけっぱなしだな』

私自身、ここまで丁寧な扱いをされるとは予想していなかった。良いとこ包帯を無理矢理きつく縛る、悪いと放置なんて結果の方が強いと睨んでたのだが。

『あ、そのことなんだけど……、お姉様がね、治療費分はタダ働きさせるつもりだから大丈夫みたいなこと言ってた気が……』

『……………なるほどな』

いい感じに縛るこじつけを与えられた、と言うことか。

私に対する治療費がいくらかは分からないし、聞いた所で口止めが利いてるだろうから知る術は無いと考えてもいいだろう。

これは、早苗の頃合いを見て辞めるつもりが、そうもいけなくなっただ様だな。

『でも……………嬉しい。そしたらシロウがずっと居てくれるから』

握られた手に力が籠る。フランドールの表情は、とても晴々としたもので、それを拝めただけでこの予定外の計画も満更ではなくなっていた。

『シロウは、嫌？』

涙目ながらに訴える。

——全く、敵わないな。

『そんな事はないさ。誠心誠意、仕えさせてもらっよ』

『うん、ありがとう！』

この屈託の無い笑みはイリヤを連想させる。無邪気に、本心から物事を楽しむ純粹な心。中身はしっかりとした大人なのに、見た目は心に比例して成長していない。そんな所も似ている。この子は吸血鬼なのだから、私よりも歳上なのは想像がつく。

しかし何だろう、この違和感は。

イリヤを連想させたのは、本当にそれらの記号だけが当てはまったからか？

軽く自己問答するも、余計に引っ掛かりがもどかく感じるだけに終わる。

『そうだ、お姉様達に報告しないと。私行くね』

唐突に立ち上がると、小走りで部屋の出口まで移動する。そしてノブに手をかけた所で、彼女は再び私の方を少し恥ずかしい気に見た。

『あの、ね？もしシロウの都合がいい時でいいから、一緒に遊んでくれる？』

何だか申し訳なさそうな雰囲気醸し出してたから、深刻な話かと思えば。

『そんなことか。仕事に支障しない程度ならば幾らでも構わないさ』
頼ってくる者を拒める程、私は人間出来てない。それに、私自身も

頼られて嬉しいのだから、別に悪い事でも無いしな。

『じゃあ、行くね』

その言葉と共にドアが開かれ、彼女もまたその奥へと消えていった。私は、静かになった部屋から漏れる自然の音を聞きながら、時が経つのを待った。

『パチュリー、あれは一体なんだったんだ？』

パチュリー・ノーレッジと的を得ない質問をした友人、レミリア・スカーレットは今テラスで咲夜が淹れてくれた紅茶をたしなみなながら、緩やかな午後の一時を過ごしていた。

陽射しに弱いレミリアの為に、日時によって影になる場所で基本こつこつとした行為が行われる。保険の為パラソルをテーブルに刺せる式のを使って十分な対策は施してあるが、パチュリー自身は徒労にしか思っていない。

本来この様な時間帯には、パチュリーは図書館で相も変わらず本を読んでいる筈だが、昨日の深夜近くに起こった騒動がその予定を見事に破壊してくれた。

本棚は倒壊、当然書物の殆どは雪崩れる様に床に山を作っており、彼女にとっては正に惨劇の光景が出来上がっていた。

それをやった原因の一人はレミリアに殴られてダウン。もう一人は強制労働中、勿論修繕の為のだ。

とは言っても、ソイツは目を離すと逃げるか盗むかするから見張り

が必要になり、実質いない方がいいのではないかと言う疑問すら覚える。こちらは罰と言う名目でやってる筈なのに、どうにも腑に落ちない。

『あれって？』

『シロウが出した槍だよ。あれを何処に隠し持っていたのかはどうでもいい。似たような奴がいるしな。』

だがあれは別だ。あの槍に秘められた膨大なまでの魔力の量。その威力はマスタースパークを凌駕した。あんな槍、見たことも聞いた事も無いけど、パチエなら本の知識からあれを確認しているかもしれないでしょ？』

『確かに、あの槍には心辺りがあるけれどそれと該当するかはまた別の話よ。』

—— だいたい、その憶測が当たっていたら、逆におかしな事が誘発するのよ』

もしあれが彼女にとっての”正解”ならば、何故そんな過去の—— いや、神話時代の遺物が存在してるのか疑問視される。

明確な年数が捉えられない程の過去の話。逸話さえも正しいと判断出来ないこのご時世、物質そのものが風化すらしていない、それ以前に存在しているなんて莫迦げた話があるとは考えにくい。

『それでもいいさ。真実云々には元々しちやいない。ただ、あれほどの魔力を帯びた槍を所持しているアイツが何者なのか—— 少し気になっただけ』

『そう……。でも恐らくあの槍の持ち主イコール本人では無いわよ。』

あれは破魔の紅薔薇。^{ゲイ・ジャルグ} 神話の英雄、デイルムツド・オディナが所持していた槍のひとつで、魔力の流れを完全に断ち切る力を秘めてい
ると言われてるわ』

『へえ………だから魔理沙にマスタースパークを撃たれても無傷だったの？』

『もしあれが本物なら、ね。とは言っても、その結果は前に見たでしょう？』

感心しながら頷いているレミリア。彼女も槍を戦いに使う故か、話に深く聞き入っているのだろう。

『でも、彼はデイルムツド・オディナでは無いわ。彼の英雄は、類に異性を魅了する呪いを帯びた黒子があつたとされてるわ。でも、そんなものは彼からは確認していない。それほどまでのものを隠し通せる筈も無いし、間違いなく別人よ』

『フランはまるでそれに魅了されたかの様にアイツにべつたりだけどな』

愉快そうに笑うレミリア。何処の馬の骨とも分からない男にいきなり妹を取られたに等しい状況になって複雑な心境かと思えば、意外に落ち着いている。

『それは彼自身の魅力か何かなんじやないかしら。
つまり、彼は何かしらの方法を用いてあの槍を手に入れたと言つことになるわね』

『シロウ自身は英雄でも何でも無い、そう言いたいのか？』

『…………分らない。彼自身からも相当な魔力を感知出来るのよね。しかも下手な魔法使いなんか上回る程の、ね』

パチュリーは少し思案し、伏し目がちに答える。

『パチエよりも？』

『…………悔しいけどね。でも初めて会った時にはそこまで魔力を持っていた様には感じなかったのよね。魔理沙のマスターパークに包まれた後からかしら、そう感じたのは』

レミリアは魔法使いとしての自分を卑下するパチュリーを珍しいと思いつつも、会話を続ける。

『ふうん。つまりアイツは魔力を隠してたってこと？』

パチュリーは静かに首を横に振る。

『自身の身体から漏洩する魔力と言うのは隠せるものではないのよ。魔力の程度にもよるでしょうけれど、あれほどの魔力を有しているのなら、素人だろうが簡単に分かっちゃうわ。

可能性としては、何かしらの魔法を使って隠蔽していたってのが挙げられるわね。

最も、理由に関しては関与する所では無いけれど』

パチュリーは話が終わったと言わんばかりに手元にあった本を広げて目を通し始めた。

レミリアもそれを引き金に、冷め切ってしまった紅茶に口を付ける。

再び静かな一時が訪れると疑わなかった世界が、一瞬の内に破壊された。

『お姉様！』

テラスに続くガラスの扉をを乱暴に開けるフランドールの姿を迷惑そうに二人は見詰める。

『騒々しいわよフラン。もう少し慎みを持ちなさい』

『シロウが起きたの』

その言葉に二人とも耳を深く傾ける。面白いくらいに連続するシロウに対しての出来事。まるで運命の巡り合わせと言わんばかりに上手く物事が動いている。

『それは丁度いいわ。彼には聞きたい事が幾らか出来たから、見舞いも兼ねて会いに行ってくるわ』

開いて間もない本を再び閉じて、ゆったりとした物腰で立ち上がる。

『フラン、貴女はここに残りなさい。
他愛も無い質問をちよつとするから』

パチュリーの後をついて行こうとしたフランドールを制し、先程までパチュリーが座していた椅子に座る様促す。

その指示に少し疑問符を頭に浮かべつつも、素直に従う。

『一体どうしたの？』

フランドールが切り出すと、レミリアはテーブルに両肘を立たせ、そのまま指を絡ませる体勢で妹の眼を覗き込む。

『いやなに、何でアンタがあんなにもシロウに固執するのかなって。会って間もない筈なのにあの有り様は少し異常じゃないか？』

異常、という言葉に厭に反応すると予想していたが、それとは真逆に砕けた様に頬が弛み切った光景が広がっていた。

『私も最初は特に意識はしてなかったんだけど、頭を撫でられた時にね、こう、身体の奥がポカポカしてきて、優しい気持ちになれたの。』

もつと撫でてもらいたい、そんな気持ちにもなったの』

身振り手振りでその時の心境を表現する。漠然と理解出来る程度のそれは、必死に伝えようとしてるが故か、物事を端的に伝えられないが故か。

『暖かみ、ねえ』

出会って間もない奴から与えられるものなんて程度が知れてる。

私達は彼のことを何も知らない。ただ雇って、魔理沙と勝負して勝って、私に殴って欲しいと懇願してきて……。

——今にして思えば、その一連の行動に脈絡が無い。

まるで本能のまま赴く獣そのものだ。想像もつかない行動を起こすという部分では飽きさせないから楽しめるが、逆に言えば捉えどころが無い。

運命を操ることの出来る私にさえも掴めないと思わせるなんて、余程のことだ。

——何だか面白くない。

久しぶりに感じる奥底から沸き上がるモヤモヤが、不愉快と言う感情に昇華していく。

『それでね、撫でられたり抱き締められた時に、シロウがまるで——お父様みたいに思えたんだ』

恥ずかしげに俯くフランドールの姿を意識半分に眺める。

彼女はシロウに対して父性を感じたという。

よりによって、父として認識されてしまっているのだ。人間である男が五百歳近くの吸血鬼に対して。これはいい笑い話だ。

『父親？アイツはどちらかと言えば兄寄りじゃないか？』

『うーん、お兄様だとちょっと違う気がするんだよね。自分でもよく分からないけど』

つまりは、アイツはなんとなくで父親として認識されていると言うことだ。見た目はいいとこ20代後半辺りだろうに。滑稽過ぎて救いようが無い。

『父親、か』

その言葉には、私に対して強い何かを与えてくる。

吸血鬼と言うものは、眷属——人間が吸血鬼の血を飲んで吸血鬼化した場合もそれに該当する。

私達姉妹が純血なのか眷属なのか、そんなものは知る由も無い。

何せ五百年だ。古い記憶なぞ憶えていられる筈もない。特にそれが、

自身にとっての些末事だったのなら尚更だ。私が憶えている最古の記憶。それは私達だけがこの紅魔館に住んでいるというもの。

父親や母親が居たかなんてものは記憶の彼方だ。思い出そうとしても恐らくは二度と叶うまい。

それはフランドール自身もそうだったに違いない。そうじゃなければ、見知らぬ男に父性なぞ感じる——いや、求める訳が無い。

彼女が彼を父親として認識しようとしてるのは、兄妹としての愛情よりも、父親としての愛情に飢えているからなのかもしれない。

『なら、さ。いつそのことそう呼んじゃえば？』

悪戯を思いついた子供の表情をさせながら、そう答える。フランドールも唐突なことで要点を掴めていない。

『全く、何を呆けてるの。貴女がシロウを父親として敬愛するんなら、それに相応しい呼び名で呼ぶのが自分にとって最良の選択だと私は思うわ。』

貴女がシロウをどれだけ好きなのか、呼び方ひとつで伝わる筈よ』

『——！——！』

その瞬間、飛び跳ねる様にその場から発つ。

その消え際に、待ちきれ無いと疼いている少女は敬愛する姉の方を振り向く。

『ありがとうお姉様！私、シロウに言ってみる！』

それを彼女は何も言わず、ただ軽くその消え行く姿に手を振った。その余韻に僅かながらに浸った彼女はその容姿には似合わないぐら

いの悪人顔を浮かべた。

『さあて……。これでアイツを弄るネタは決まったわね』

そんな彼女の思考は、これからの館の生活をどう面白く彩るかを考えるのかで一杯だった。

貫きたいオモイ（後書き）

では、私がこの小説内で書いている魔理沙のイメージおぼ。

彼女は人間です。それは妖怪という人外が存在するなかでの、生まれながらにしてハンディキャップを背負っているということです。彼女は、魔法使いでありながら人間として生きることが望んでいます。それは彼女が幻想郷で誰とも対等でありたいと望んで弛まぬ努力を続けた証を——意味を残したいからです。それは彼女のプライドでもあり、信念でもあります。

博麗霊夢とは親友でありながら、劣等感を抱える相手でもあります。彼女は、生まれながらにして退魔の力を持ち、才能もありました。関係で言えば凜とシロウですね。何代も魔術師としての血と魔力を受け継いできた遠坂と、まるで才能も無ければ魔術師としての素養も無い衛宮では、スタートラインが地上と富士山ほどの高低差があると云っても大袈裟ではありません。

誰にも努力している姿を見せず、ただ只管に、最初からそうであった、と見せかけています。

紅魔館の本盗みとかもそれです。彼女自身も何をやっているかは理解しています。無論、それが悪いことだとも。

泥棒という不名誉な呼び方をされてでも、彼女は強くなることを渴望しました。そうでもしなければ、本物の魔法使いと対等ではいられないし、ましてや霊夢には届く訳がない。

つまりは、泥棒してるのは霊夢のせいだと（お

恐らく皆さんがイメージする魔理沙は、常に笑っていてそれが絶えることもなく、人間でありながら妖怪を薙ぎ倒せる”特別な”人間

つてところだと思います。

しかしこの中ではそれとは真逆で、特別な存在に対する激しい劣等感を奥底に抱え、常に平等でありたいが為に口調も強気なものを使い、弱いところを決して他人には見せない”普通の”人間として書いています。

魔理沙のイメージが崩れた方、申し訳ありません。

こつからは違う話を

フランのシロウへの愛はやりすぎた感があります。でもいいや、そんなもんだ。

予想以上に紅魔館の話長くなりますね。せめてあと1〜2話は連続しますね。

ペルソナの話ですが、誰にも期待されてないようなので、投稿は控えて保存したままのをちまちま書いていく方式でいこうと思います。作品が投稿されるかすら怪しいものですな。

どうでもいいことですが、ゲイ・ジャルグを詳しく調べる為に検索をかけたら、ログのそれなりに上の所にこの小説の直リンクがあつてびつくりしました。なんかそれだけで嬉しく感じます。

これから頑張っていきますぜ。

父親として（前書き）

ニソっていいね。ていうか靴下全般。リリンが産み出した文化の
キワミアッーーーー！

父親として

窓から入り込む少しだけ肌寒い風がカーテンを靡かせ、私の身体へと吹き抜ける。

私はベットに座り込んでた身体を持ち上げ、窓を閉じて外界との接点を絶つ。これで、今本当の意味でこの空間に居るのは私だけだ。

フランドールがこの場から去ってから三十分は経っただろうか。静かすぎるこの部屋へ訪れる影の気配は無く、同時に私はこの場から動くべきかどうか思索していた。

正直言えば、あのヴワル魔法図書館での出来事以来あそこが今どうなっているかが気になっていた。

記憶に残っている凜としていた趣のある構造は最早存在せず、言葉通り地震が発生した後の屋内と大差ない惨状が出来上がっていたのを、鮮明に憶えている。

あれを造り上げてしまったのは、他でもない私だ。私には片付ける責任と義務がある。

しかしフランドールが言うには、今は午後を過ぎて暫くが経過している。とつくに片付けられていてもおかしくは無い。

——だが、私はあの図書館の全てを見た訳ではないからそう思えるだけで、目に見えないところではそれこそ見るに堪えない惨劇が出来上がっていた可能性だってある。それならば通して作業していたとしても終わるかどうかわからないもの。

『……………悩んでる位なら行動したほうがいいかもしれんな』

答えを導けない禅問答程無意味なものはない。私は一旦思考を振り払って出口へと足を運び、ノブに手を掛ける。

しかしそのまま押し出すつもりだったドアはいきなり前へと進み、掴んでいた手ごと身体が引つ張られ踏鞴を踏む。

『あら、どこへ行こうとしてたのかしら？』

目の前には、此方を訝しげな目で見つめているパチュリーの姿があった。どうやらお互いに偶然ドアを開けようとしていた様だ。

『図書館の様子を知りたくて、今から向かおうかと思っていた所だ。何せあの始末だったからな、心配にもなる』

『ああ、図書館なら現在進行形で修復中よ。ったく、派手にやってくれたわね本当に』

明らかな棘を含んだ物言いが心に突き刺さる。彼女にとって、あそこは聖域に等しい場所だったに違いない。そう考えると心苦しさが増大する。

『私も手伝わせてくれ。あれを造り上げたのは他でもない私だ、手伝うのは当然の義務だと思うのだが』

『まあそうでしょうね。でも結構よ。もう大半が終了してるし、何より貴方には怪我が治った暁には給料分足して壁の修繕費分働いてもらうつもりだから、早く治って貰わないと此方としても困るのよ』

抑揚の無い声に覇気の無い瞳。儚そうなイメージが漂う彼女だが、言動はアグレッシブそのもの。

ここまで元気なら、後ろめたく感じる必要性もなさそうだ。

『そうか、なら今は休ませてもらうとしよう』

私は再びベットの傍に戻ると、そこへ腰掛ける。とても柔らかに沈むそれは、見た目相応の高級感を漂わせる。

『身体を休ませてるついでだから、幾らか質問させてもらっわよ。少しは心当たりがあるんじゃない？』

『——む』

『順を追って質問するわ。まず貴方——一体何者なの』

『言っただろう、エミヤシロウだ。人間だよ』

予想と違った質問をされて内心戸惑うが、冷静に返す。

サーヴァントと答えても理解されないだろうから、一応人間ということにしておく。矛盾は残るだろうがそれはその時だ。

『少なくとも、デイルムツド・オディナではないと信じていいのかしら』

その名前が出てきたことに驚いた。私はてっきり、あの時使った槍の事を質問されるとばかり考えていたから。

『——ほう。君は知っているのか、彼の英雄を』

『舐めないで貰いたいわ。私は知識を識る事に関しては誰にも劣るつもりは無い。そういった知識に関しても例外では無いわ』

ふん、と鼻を鳴らして誇らしげに胸を張るパチュリー。

しかし、私が驚いたのはそこでは無い。デイルムツド・オディナと

言う存在を知らしめる物が幻想郷に存在する事に、だ。

私はこの世界と私の居た世界との接点の低さの程度を知らない。境界線があるというだけで、どこまで情報が届いていないなんてのは知る由も無い。

だが、これで理解したのは、彼の名を彼女が知っている——つまり、神話時代の文献や書物、情報がこの世界には浸透していると言うことだ。

程度の差こそあれ、恐らくは有名なヘラクレス、アーサー辺りなら誰もが知る所だろう。

そんな英雄の中からあの槍を一瞬見ただけで特定出来た彼女の記憶能力と知識は、確かに賞賛に値するかもしれん。

『ああ。私はそんな大層な人間では無いよ。歴史に身を列ねる価値もない』

『随分と謙虚——いえ、卑屈なのね。まあいいわ。ならあの槍の事を説明して貰えるかしら。貴方の言動から、あれが破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルクだと言うのは確信したから、ならそれを何故貴方が所持しているかを聞きたいわ』

『……………分かった。君は知識がある様だから、詳しく説明しなくても理解してくれるだろう。あれは投影というものを行使して作成した贋作だ。本物よりも性能は幾分か劣化している』

『投影……………？あの槍が贋作？』

当然とも言える驚きを見せる。だが彼女自身も理解はしてるだろう。そうじゃないとあれが今ここに存在する証明にならない。原物を所

持してると言うより、造り出したと言った方がまだ信用出来る。

『嘘ではない。ほら』

瞬時に徒手空拳だった右手に投影した破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルグが出現する。パチュリーは興味深そうにそれを品定めするかの様に眺める。

『投影、と言ったけれど。こんな瞬時に造り出すなんてまるで——』

『魔法、か？』

続きに出るであろう言葉を、同じ言葉で遮る。パチュリーは口を紡ぐと、少し考える様な表情をする。

『でもこれだけの奇跡を体现するには、大魔法クラスの媒体、魔法陣、魔力、時間、知識を必要とするわ。でも貴方はその内の媒体、魔法陣、時間をカットしてる。にも関わらず貴方の手にあるそれはまるで本物と変わらない見た目、魔力を内包してるわ。はつきり言つて目茶苦茶よ』

『目茶苦茶、か。そんな事は理解してるつもりだよ。確かにこれ程までに再現出来るのは私以外には無理な話だろうな。だがそれと同時にそれ以外の魔術は扱えない半端者さ』

『……………魔術？魔法じゃなくて？』

キョトンとした表情で私の顔を見詰めるパチュリー。見開いた彼女の目は意外にも幼さを醸し出しており、先程までの隠鬱な雰囲気はそこからでは読み取れない。

『魔術を知らないのか？てっきり知っているものだと思っていたが』

『投影つてのは貴方が付けた魔法式の字ゝあざなくだと勘違いしてたわ。魔術と魔法は異なるものなの？』

興味深そうに身を乗り出して質問をしてくる。ここの住人は興味を示した事柄に対して子供の様になる傾向が強い気がするのだが、気のせいだろうか。

私は、持てる知識の中の魔術の存在、魔術と魔法の違い、投影魔術の詳細を要約して話した。

それにも関わらず、彼女は大体を理解してくれた様だ。流石は自分で言うだけあって脳内で纏めるのも得意なのだろう。

『取り敢えずは理解したわ。あと、貴方がここの住人じゃないことも、ね。まあ確かに、貴方の異端がここに最初から居れば間違はなく何かの拍子に噂にはなるでしょうからね。知らない訳がない』

『それは褒めてると受け取っていいのか』

『変人扱いしてる』

ぴしゃりと正される。まあ当然だが。

『それはいいとして、初撃は一体何で防いだの？流石にその槍では貴方の身体全てを守る訳が無いし、何よりあの時の貴方はまるで無防備で構えも取っていなかった。貴方、あの時も投影魔術を使ってたんでしょ？』

『ああ。あの時投影したのは熾天覆^{ロー・アイアス}う七つの円環という名の投擲に対する絶対の耐性を持った概念武装だ。彼女の使った魔法に対して効果があるかは不安だったが、どうやらギリギリ互角らしい』

『見たことがあるわ。トロイア戦争でアイアスが用いた青銅の盾に7枚の牛皮を重ねた盾よね。英雄ヘクトールの投槍を防いだって理由で耐性があるってこと？』

『まあ有り体に言えばそうだが、先程も述べたが熾天覆^{ロー・アイアス}う七つの円環は概念武装と呼ばれるもので、儀式や積み重ねた歴史、語り継がれる伝承などにより付与された概念に依って特定的能力を発揮する強力な武装の内のひとつだ。歴史上でヘクトールの投擲を唯一防いだ、という事実が浸透されたことにより、対投擲に関しては一級概念武装と変貌するのだよ。因みに私が纏っているこの外套も、外界に対する一級の守りを持つ聖骸布で出来ている』

『凄いわね……。それ、私用にも作れないの？』

『別に問題はないが……。身体のサイズを知らないことにはどうにもできませんよ。』

それとも君は会って間もない男にスリーサイズを教えるような女なのか？』

その言葉に、明らかに不機嫌な様子になる。怒らせたのはわざとだが。そうでもしなければ色々強請られそうな気がしたから。

『……………考えさせて頂戴』

『それがいい』

ようやく一段落着いたと思いい息を吐こうと思った瞬間、再びこの部屋のドアが乱暴に開かれる。

ああ、またか——と内心呟く。

この部屋はいつになれば先程までの静然とした雰囲気を取り戻せるのだろうか。

『シロウ——！』

『フランドールか。どうしたそんなに必死になって』

息を乱しながら現れた少女は、私の顔を見た途端顔を俯かせ、服の裾を力強く握り締めた。

『あ、あのね………？シロウにお願いがあるの………』

何かに脅えるように問いかけるフランドールは、俯いた姿勢のまま此方を見向きもしない。

断られるのを恐れているのだろうか。

『なんだ？私の出来る範囲でなら幾らでも聞いてやるが』

『妹様には喜び勇んでお願いを聞くくせに、私の願いは一蹴するのね』

『あれは私の出来ない範囲だ』

嫌味たらしく茶々を入れるパチュリーの発言を受け流し、私は再度脅えた少女の方へと視線を向ける。

しかし少女は先程までとは違い、俯かせた顔を上げ決意の宿った瞳で私を見つめ返していた。

『わ、私の——お父様になって下さい!—!』

刹那、空気が死んだ。

『——は?』

聞き間違いだろうか。今どうにも父親になって欲しいと言う言葉が聞こえた気がしたが。

傍らにいるパチュリーも、呆然とした顔でフランドールを見詰めている。

『す、済まない、どうにも混乱してるみたいだ。もう一度言ってくれないか?』

『お、お父様になって下さい!』

——何ということだろうか。結果先程のは聞き間違いでも何でもなく、ただそうあってほしかったと望んだが故の悪足掻きだったに過ぎなかった様だ。

『……何故そういう結論に行き着いた?』

『お姉様にね、シロウがまるでお父様みたいな雰囲気を出してた。って話をしたら、じゃあ頼んでみたら?って言われて』

思わず頭を抱える。何だか胃も痛くなってきた。

『あのミニマム吸血鬼、余計なことを……』

ぼそりと悪態を吐く。そうでもしなきゃやってられない。

『間違いなくレミイは楽しんでるわね』

『そうだな……………』

全身の力が抜け欠けている私を尻目に、フランドールは期待する様な目でじつと見詰めてくる。

やめてくれ、物凄く辛い。

『———だいたい、どうやって父親になれと言った。私は雇われ執事で、配属一日も経っていないんだぞ。君とも出会って間もない。そんな私が父親になれる訳がなかるう』

これに関してはフォローが出来ん。流石に道德や常識的に考えて有り得ない。

彼女が私に対して父性を感じたと言っつのは、間違いなく気の迷いだ。突拍子のない話なぞ得てしてそうだ。

彼女には悪いが———、

『駄目、なの———？』

涙目を浮かべるフランドール。狙ってやってはいないと分かっているからこそ、心に来るものがある。

『ああ、私は君の父親にはなれん』

『ふえ……………』

心を鬼にして再び宣告すると、彼女の涙腺が今にも崩壊しそうになっていた。

何故そこまでして固執する？

私にはそれが理解出来ない。出来る要因が存在しない。

こんな理不尽にさえ思える状況の中でも、私は私らしい。

目の前でこの少女が泣くだけは嫌だ。でも彼女の要求を呑むことは出来ない。

そんな矛盾が螺旋となり、交わることなく形を成す。

くそっ、なんだってこう——！

『——だが、そう呼ぶのだけなら構わんが。パチュリーがレミリアをレミイと呼ぶ様に、字ゝあざなくとしてそう呼ぶのなら私に拒む理由はない』

『へっ——？』

彼女がこれで満足出来るのかは分からないが、私にはこれが精一杯の譲歩だ。

私は彼女の父親には決してなれない。

しかし、父親の贋作なら勤められるかもしれない。

格式も繋がりも一切無い、見栄えだけの関係。

私にとっての父親の記憶は、普通の親子の生活とはかけ離れたものだろう。そんな家族という常識の無い男に出来ることなんて程度が知れてる。

——それでも、この少女が涙を流さなくてもいい様な結果が造り出せるのなら、私はその為に精一杯努力したいと望む。

『いい、の？』

弛まった涙腺は未だに引き締まることなく、堪えてるつもりなのだろうが、端から漏れだしている。

先程までの悲しみの涙の続きなのか、私の言葉によつての嬉し涙なのか——どちらにせよ彼女次第だ。

『形だけのものだがな。とは言つても、君が望めば遊んであげたりだつてする。約束もしたしな』

『——！！』

そう言うが否や、少女は私に向かつて飛びついてきた。

衝撃が全身に伝わる。前とは違い、今度は受け止めることができた。少女は泣きじゃくった笑顔を私へと向ける。憂いが晴れた、いい笑顔だ。

『有難う、お父様』

フランドールの頭を帽子越しに軽く撫でる。それを彼女は気持ちよさそうにしてそのまま私に身体を預ける。

こういったことは、親父にもしてもらつたっけな。不器用で、少しごつごつした、まさに大人の男つていう手で。

当時の俺はそれがなんだか恥ずかしくて、事あるごとに振り払つてた気がする。それでも、親父は何度も撫でようとしていた。

子供ながらに変な羞恥心があつたせいで、満足するまで撫でさせたことは最後まで無かつた。決して嫌ではなかつたのも、親父は分かつてたんだと思う。そうじゃなきゃそんなに繰り返すとは思えない。本質が似ているから、何となく理解^{わか}つてしまう。同じ正義の味方に、なりたかつた。者同士、血が繋がってなくてもそれ以上の繋がりが

が俺達には存在していた。

『フランドール、ひとつ聞いていいか』

『フラン』

私の腰に顔を埋めたままの少女に問いかけると、鸚鵡返しするかの様に自身の名を答えた。

私はその意味を理解出来ず、少し呆然とする。

『フラン、って呼んで。他人行儀みたいで嫌だから』

—— ああなるほど。

私は納得し、彼女に言われるままその言葉を紡いだ。

『フラン』

『なあに？お父様』

今度はきちんと答えてくれた。確かにこんな曖昧な関係なのだから、どこかで矛盾を矯正しておけば変に思われることも少ない。

—— いや、そんなことしても腐るほど矛盾は残るが。

それよりも、私達の姿を見て愉しそうにしているパチュリーが何だか腹立たしい。すまきにして転がしたい衝動に駆られる。

『で、なあに？』

少し思い耽っていた所をフランが戻してくれたことで、再び意識を少女に向ける。

『いや、至極どうでもいいことであり、かなり重要なことでもあるんだが……。――私は父親と呼ばれる程に老けているのか？』

これはある意味沽券に関わる質問だ。

自分の生前の歳なぞ忘れてしまっていたが、若いつもりではあった。やはり白髪か、これがいけないのか。

『老けてはいないと思うけど……。私が今まで出会った人達の中では一番肉体年齢が高いかもしれないね。で、でもそれが理由って訳じゃないよ。何だかこう、雰囲気が、ね？』

後半しどろもどろになって、手が右往左往と落ち着きなく動いている。

雰囲気、か。そんなじじくさい雰囲気でも醸し出してたのか。こんなにシヨックを受けたのは久しぶりだ。

何だか鬱になってきた……。

と言うかパチュリーが顔だけを後ろに回し、口元を押さえてるその姿を見て、すまき転がしからすまき吊るしにしようと内心誓う。

『とにかく！お父様は若いよ！』

『そ、そうか……。』

先程までの名残故か、そう言われても説得力が無い。
私は頂垂れた姿勢のまま負の余韻に浸る。

『まあいいじゃない。私達自身男性に会う事が稀だから、基準がイマイチ掴めないのよね』

細々と笑っていたパチュリーがいきなり真面目な表情になり語りかけて来る。その切り替えの速さは無意味に凄かった。

『男が——？』

ふと、私自身の記憶を遡る。

確かに、ここに来てから未だに私以外の男を殆ど見ていない。見た男は人間の里と天界にいた者だけで、直接関わりがあった訳じゃないから考え方によってはノーカウントだ。それらを切り捨てた場合、私は女性としか会っていない事になる。

『いつたい、どういうことなんだ？』

拭えぬ疑問を再びパチュリーへと返す。

『そこまでは知らない。けれど何故か能力を所持しているのは殆どが女性ね。あくまで私が出会った範囲でだけ』

『……………意味が分からないな』

『別に気にすることでも無いでしょ、困る訳でもないし。でも貴方の場合なら、確かに男性との巡り合わせも必要かもしれないわね』

前に一度思った、男が恋しいと言っ言葉を思い出す。

女性が苦手な訳ではないが、ここまでいくとそんな考えに到ってもおかしくはないと思う。

好きな食べ物を食べ続けても、いずれは飽きてしまう。何処かに違

う食べ物、なんなら飲み物でもいいから落ち着かせないと意味がなくなる。

『そうね……………だったら行かせてみようかしら』

ブツブツと独り言を呟いてるパチュリー。いつの間にか本人の中では話が進んでいる模様。

『貴方どうせ今は何も出来ないだろうし、そんなに壊したりした責任を気にするんだったら、私の頼みを聞いて貰えないかしら』

『頼み？』

『魔法の森の中にある、香霖堂って店に行つて来て欲しいの。彼処は外から流れてきた色々な物を商品として扱ってね、そこに何か面白いものがあるかを探してきて貰いたいの』

慧音が話していたものと符合する言葉が幾つか当てはまる。つまり慧音が言っていた店とは、彼女が言う香霖堂のことらしい。

『その店に関してはある人物に聞いている。私も興味があったから、君の頼みは都合がいい』

怪我が治れば暫くは紅魔館での仕事に明け暮れる筈。そうなれば時間の都合がまた掴めなくなるのは明らか。

怪我の功名とはまさにこの事。私はこの機に感謝しつつ、まだ見ぬ異色の店に思いを馳せた。

『そう、なら頼むわ。お金なら後で渡すから。もし足りなかったら店主に置いてもらうよう交渉して頂戴』

『了解した』

話を終えるとパチュリーは舞う様に身を翻して出口へと歩き出す。

『じゃあ私は行くけど、貴方は暫くそこにいなさい』

『何故？』

私の疑問に彼女は、自身の真下を指指す。

その軌跡をなぞると、そこには微動だにしないフランドールの姿があった。

静かだと思っではいたが、どうしたのかと思う。

『妹様、寝てるから一緒に居てあげなさい。貴方が擬似的な父親になると望んだところでこの子にとっては紛れもなく貴方は父親なよ。貴方がこの子の安眠を妨げずに移動すればいい訳でも無い。起きた時に居ると信じていた存在がいないと知った時の絶望感と言うのは、幼稚ながらも深いものだわ。吸血鬼だからって生きた年数相應の成長が果たせる訳じゃあない。そんなの貴方だつて理解してるんじゃない？』

少女の微かな寢息を聞きながら、今言われた事を反芻する。

私は彼女が何歳かは知らない。でも少なくとも私なんかよりも生きているのは確か。

しかし、それはあくまで人間の定義でしかない。

幼い身体同等、中身もまた幼いまま。私は似たような人物を身近に置いていたからか、彼女の言葉からは深い重みを感じられる。

生きた年数相應に全てが成長するとは限らない。当たり前、なんて

言葉は魔術士として在る限り決して有り得るものではない。異端として渡り歩くというのは、得てしてそう言うこと。

少女の見た目は本当に幼い。心もそうならば、この時期は不安定になる傾向が強い。

安定した情緒が育まれるには、まず暖かみを知る事から始まる。その大役を担うのが親だ。

この子は私を父親代わりにすると言うことは、本当の彼女の父親は——だから、その空白の時間、唯一の肉親は恐らくは姉だけ。

家族が恋しいであろう時期に、甘えるべき対象がいらないと言うのは辛すぎる。全てを担える程、彼女は成長していない。

そんな中手にした”親”という存在。それは私が感じる以上に嬉しいものだったのだらう。あの過剰な敬愛加減も多少は納得がいく。パチュリーの言う通り、その最中私が彼女に言われた様な行動を取ると言うことは、心を喰い破る様なもの。

私にはそんなことは出来ない。でも彼女に言われなければそれをやってしまう所だったのだ。

『——そうだったな。済まないパチュリー、私が軽率だった。本当に感謝するよ』

感謝の意を出来る限りの笑顔で示す。動けない以上、これくらいしか出来る事が無い。

『…………取り敢えず、貴方はもっと父親としての自覚を持ちなさい。口頭上の関係だなんて勘違いは、今すぐ撤廃すること』

ぶっきらぼうな口調で私に説教をする。彼女へ感じていた苛立ちは最早消え失せ、逆の感情が芽生え出す。

『ああ。私が出来る範囲でフ란の成長を助けるよ』

『それでいいわ。——じゃ、妹様が起きるまでの間、ゆっくりしていつてね』

それを最後に、パチュリーは部屋から出て行った。

私はフ란の被っている帽子を外し、直に彼女の頭を撫でる。触れてる方も気持ちよくなれる様な、とても触り心地の良い触感が感覚を刺激する。

人間と吸血鬼。非なる存在同士がこんな関係になるというのは傍から見ればおかしいことなんだと思う。でも当事者からすればとても真剣なもので、そんな目で見られる筋合いなど欠片も無い。

——私は、世間がこの関係を嘲笑しないような立派な父親になれるのだろうか。

彼女の為にそうなりたいと誓ったのだから、決して悲しみを負わせる訳にはいかない。

空いた掌を強く握り締める。決意を胸に、少女の寝顔を見つめる。

これは正義の味方としてではなく、エミヤシロウ個人の意思のもの。誰にも曲げれない絶対的な意思。

この子がせめて父親という存在が居なくても生きていけるまで、出来る限り共にあろう。そう誓った。

父親として（後書き）

今回くそも話進んでませんね。ごめんなさい。

お詫びに私の性癖を少し暴露します。

前書きにも書いたけど、ニーソっていいと思う。正確にはニーソを履いた女性の脚。

ただ履いてるだけでもよし、靴等を履いて蒸れたそれを、嗅いだりはみはみしたかったり。

素足だけよりも、靴下類を履いているというだけで扇情さが億万倍に跳ね上がる。

合切普通な服を着ていようと、ニーソがあるだけで何でもエロスに感じる。

因みにパンストやタイツもGood。あれってパンツとかも透けて見えるから単品だけでエロいのにもうね、至って健全な絵とか見てもそんな風に見えるからそろそろ末期かもしれない。

足の指とかがこう折れ曲がってたりするとグツときます。

ルーズソックスは邪道です。あれはなんか違うんだよね。だるんだるんだからか、靴下としての醍醐味が一切発揮されていない。ぶっちゃけると不潔な感じしかない。

友達に靴下の良さを布教したら一人信者になりました。やったね！日々そんな紳士を生産するよう少し努力してます。なんなら皆さんも（ry

えーと、上記の発言ですが、全て『ただし二次元に限る』を付けた元読んでください（遅

僅かな時間の僅かな触れ合い（前書き）

スランプです。やばいです。困りました。

内容は短い癖に稚拙で、区切りを考えた結果と言っても普段長く書いてるから納得いつてない自分がいる。

そんな私は東方人形劇でお空の努力値上げを始めてたり（おい

僅かな時間の僅かな触れ合い

『はあ……………』

重い身体を動かしながら家事をこなす。何かに憑かれている感覚というのは、こんなものなのだろうか。

この数日、身体が突発的に虚脱感を憶えるという症状が身体に現れている。恐らく、私が倒れたときにはもうその波が来ていたんだろう。

そこから復活して、大事を取って多めに休んだ私はすっかり元気になつていた。はずだった。

しかし次の日辺り——今現在、再びその症状が浮上している。夜更かしや無理な運動は一切行っていない筈なのに、気がつけば溜息が漏れる程の気だるさで一杯になつていた。

『早苗、大丈夫？』

隣で家事の手伝いを申し出た諏訪子様が此方の様子を心配そうに見つめている。

私の身体は数日前までは病人当然だったせいか、最近事あることに両名が私のやること成すことを手伝おうとしてくる。

お二人が煩わしい訳では決して無い。寧ろ嬉しいくらいだ。

ただ、今までそれを拒んでいた自分が、こうして結果的に助けられている。そんな状況を見て、今までの自分の行動が莫迦らしく感じただけ。

頼ってしまったらその甘さを捨てることはできない。人間とはかく

も現金なものだ。

『大丈夫ですよ、このくらい』

作り笑いで誤魔化そうとする。ほんとはかなり負担が掛かっているけれど、これ以上手伝わせるのは申し訳ない。

しかし、そんな私を見てか諏訪子様は溜息を吐いた。

『早苗。無理するのは迷惑をかけまいと思つてのことかもしれないけど…… やっぱり見てるこっちは心配なんだよ。』

——それとも、まだ私じゃあ早苗を支えるのは無理なの？』

神である少女の目に涙の粒が滲み上がる。それは彼女がよくやる“嘘泣き”なんだって分かつてる筈なのに、弱つてる私はそれに動揺してしまう。

『ち、違います。あともう少しだから手伝つて貰わなくても問題ないだけです。だから泣かないで下さいよ』

嘘を言っている訳ではない。事実、軽い風邪程度のもものだからそこまで苦勞はしていない。手馴れてる行動だから、無駄な動きもそんなにしていないだろうと思うし。

『うん、だからこそ手伝うんだよ！もうちょっとつて所で気が抜けてゝって可能性だってあるし』

やはり嘘泣きだった。明るくなった表情には先程までの哀しげな痕は残っておらず、分かっていたことだけに悔しい。

『——分かりました。私はそろそろ休ませて貰いますから、後はお願い致します』

『任せてくれたまえ！』

ドン、と得意げに胸を叩くその姿は、なんだか体躯的に不相応に見えてしまう。

それでも、その姿は私にとってはとても頼もしく、この人を信仰できる喜びを新たに噛み締めた。

私は踵を返してその場から去る。出来るだけ平静に、息を止めてでも乱れを正さないと諏訪子様を心配させてしまう。噛んだ下唇に血が通わない程の僅かな時間だったが、ようやく自身の部屋付近まで辿り着けた。

『あつ——』

しかし、その安心感故か疲労感一杯の身体に鞭を打った故か、私は突如膝を落とし、訳の分からないままその場に倒れ込もうとした。しかしその痛みとは裏腹に訪れたのは柔らかく暖かい何か。

『——つと、大丈夫かい早苗』

その声が神奈子様のものだと臆気に理解するのには時間は掛からなかった。

神奈子様の顔を覗き込むと、安堵感に満ちた表情をしているのが分かる。助けられたのは偶然か、或いは——

『はい、何とか……。もう少しで部屋かと思ったら少し安心してしまっ』

『全く、だから仕事は私達に任せて早苗は寝てなってあれほど……』

呆れ混じりの説教が聞こえてくるが、それは決して厭なものではなく、逆に心配されてるんだという事実喜びを感じる。

『はい、諏訪子様にも言われました。迷惑かけてすみません』

『迷惑とは思っちゃいないさ。
けど出来ればこんな無茶はしないで欲しい』

私は、力無くその言葉に頷く。

『はい……』

『そうと決まれば……！』

突如、身体が意思とは反対に浮き上がりそのまま何かに支えられる様に体重を預けた。

回らない頭で何とか今、お姫様抱っこをされてるんだと理解する。

『か、神奈子様——』

その言葉の続きは、出なかった。
だって、今の神奈子様の表情がとても嬉しそうだったから。

『何も言わないで、今は甘えなさい。
大丈夫、早苗は軽いから全然苦じゃないよ。だから——ね？』

その言葉ひとつひとつが、まるで泣きじゃくる子供をあやす時の様な蕩ける感覚を帯びている。それは彼女は本当は蛇の神ではなく、慈愛の神ではないのかと勘繰ってしまうぐらい。

その優しさに私は色々なものを吸い取られた気分になり、ただひとつ、肯定の頷きを返すだけで精一杯だった。

それに対する言葉は聞こえず、微かに上下する動きから、ただその場から歩き出していると言うことだけ理解する。

部屋までの距離が、まるで近づくに連れて離れてるみたいに長く感じる。疲労のせいで神経が過敏になっているのか、はたまた今の状況をもっと味わいたいと思うが故の錯覚なのか。どちらにしても思考が矛盾してて、我が事ながら笑えてしまう。

『着いたよ早苗。さ、眠りなさい』

神奈子様の腕の中から、柔らかな蒲団の上へとゆっくり移行する。起きてから時間は経っていないのに、まるで瞼は睡眠を欲せと必死に私を堕とそうとする。

しかし普段ならすぐに委ねるであろう快楽に、今だけは抗う。たった一言言うだけで、時間も掛からない。

いや、時間云々の問題ではない。これは私自身がそうしたいからやるのだ。時間が無いならそれだけの間を提供すべく理性と戦うだけだ。何も変わらない。

『ありがとう、ございます』

そう、たったこれだけ。別に言わなくてもさしたる問題もない、当たり前という言葉。でも、お互いに理解^{わか}っているからと言って疎かにして良い訳ではない。

これは、気持ちの問題なのだ。

当たり前の方、やるのが難しい。当たり前——つまりは常識。常識として存在するのならば、それがそうである限り世界はそれを当たり前やっていかなくてはいけない。当たり前として世に伝わるには、そういった歴史がないと成立しない。

でも続けるというのは、たとえどんなに根付いたものでも容易いものではない。それよりも自身に都合がいいものが目の前にちらつけばそれを優先する。生物である以上欲求を満たそうとするのは自然なこと。喻え大多数がその常識に根付いてるとしても、必ず綻びはある。

でも、私にはそれが寂しく感じて堪らない。

ありがとう、たったこれだけの言葉を優先できない関係なんて私には窮屈すぎる。

こうやって今苦しんでいたとしても、感謝の念が伝わってるとしてもだ。

自己満足と言われればそうかもしれない。これも所詮欲求を満たしたいと思った結果だと罵られても反論は出来ない。

それでも、私はそれが正しいんだって信じている。

常識に囚われないこの世界には、私の思想に理解が及ぶ人は少ないかもしれない。いや、もしかしたら一人も存在しない可能性だってある。

でも、孤独だからといってやめる気は毛頭無い。これは私の勝手な考えだから。

——でも、こんな私の勝手に誰かが笑ってくれるなら………こん

なに嬉しいことはないと思います。

私はゆっくりと瞼を閉じる。あの一言を言えたお陰か、身体が幾分か楽になった気がする。これもある意味、病は気からの定義に当てはまるかもしれない。

意識が落ちていく感覚が、虚脱感として全身に伝わる。抗っていた分、そのスピードは先程のを上回ったものになっていた。

そんな間もない数秒の中、額から頭にかけてのなぞられる感覚が走る。ゆつたりと、味わうように流れるそれは、泣いてしまいそうな位幸せを増長させるものだった。

ゆつたりとした時間がどれ位経過したのだろう、フランは相変わらず私の腰を固定したまま眠っている。そして私は、それを邪魔せんと出来るだけ動かないよう勤めている。

パチュリーに頼まれてからも二時間は経ったと仮定し、外を見ずとも紅が後光として床を染め上げている。これは明日になってしまっただろうか。

パチュリー自身が傍にいたと言ったのだから遅れてもあちらからすれば文句を言う権利は無いのだから焦りはないが、そんなことよりもフランがこの体勢で寝ていることで身体を痛めないか、ということの方が気がかりだった。

風邪とかに關しての心配もあるにはあるが、投影した毛布を掛けてあるので恐らくは大丈夫であろう。

普通行動を制限されるとなると、人間は不便さよりも窮屈さの方が強く感じるもの。しかし、その条件に一致している中でも例外はある。それが今の状況だ。窮屈にも感じなければ嫌悪感も無い。逆に自然と頬が緩んでしまうくらいだ。

——それとも、これが父性なのだろうか。私には分からない。ただ言えることといえば、彼女の幸せを奪うなんて莫迦な真似は、私には出来ないということだけだ。

『ん——』

この空間だからこそ聞こえた程度の微かな呻きが聞こえる。それに呼応するようにフランの身体も少しずつ色んな方向に動き出す。その数秒後、眠たそうな顔が此方へと向けられた。

『おはよう、フラン』

『あ——うん、おはよう』

意識が混濁してるのか、気の抜けた返事が返ってくる。まああれだけ寝ていれば逆にスッキリはしないだろう。

フランが眠気眼を擦りながらその場から立ち上がると、背中に掛かっていた毛布が静かに落ちる。そのせいかフランはそれに連れて自分の身体を抱きしめて震える。

『ほら、寒いなら毛布は被っておきなさい。風邪を引いたら遊べなくなるぞ？』

『う、うん』

慌てて落ちた毛布を拾い上げ、毛虫の様にそれに包まると強張った

表情が碎ける。ここまで分かりやすく喜ばれるとやっておいた甲斐がある。

『もしかして…………私のせいでずっとここに居たの?』

『いや、私の勝手だよ。私がここに居たい、君を見ていたいと思ったからだから気にしなくていい』

『そう、なんだ…………えへへ』

照れくさそうにするフラン。しかしこの会話に照れる要素があっただろうか。

フランはよちよちと不恰好に私の隣まで来ると、そのままベッドに腰掛ける。

『少しね、怖かったんだ』

突然の語りに、私は静聴する。

『寝て起きたんだって分かった時、さっきまでのことは夢だったのかもって思えて…………少し戸惑っちゃった。

でも違った。お父様はお父様のままで、何も変わってない。そんな実感を持てただけで本当は飛び跳ねたいくらいだったの。変、かな』

自分で言った事が恥ずかしいのか、話すに連れて声は小さくなっていった。

変かもしれないと言う自覚は、他人からの視線で気付くもの。彼女の場合は変に見られたく無いが故に順序が曖昧になっている。更には臆病になっている節も見られる。変だと思われたくないから、自

然と声も小さくなる。事実を突き付けられるのを恐れて。

——だが、彼女の考えは全くの杞憂だ。

失礼かもしれないが、その程度の事を気にしてる様では私の胃は当に穴だらけだ。

寧ろ可愛らしいとは思わないか。夢を見てそれに怖がって勇気を出して問いかける。

何でもない事なのに、その問いに嬉しさを感じてしまう位だ。

『そんなことは無い。誰にだって人肌恋しさはあるものだ。君の反応は自然だよ』

——パチュリーの言うとおり、この子は私に対して強い執着がある。何だか恐ろしいくらいに。

敬愛してくれるのは嬉しい。しかしこれから彼女は私が居なくなつた場合どうするのだろう。別のところにバイトに行くとき、純粋に別行動を取るとき、ずっとついて来る訳にはいかないだろう。

仮について来るのだとしても、彼女は吸血鬼。行動は夜に制限される種族がついて来るとなれば、それはおのずと枷になる。

どうにかして彼女を説得できないと、どうにも動きにくくなる。どうにかしなければ。

『フラン、私はパチュリーの指示で香霖堂なる場所に行かないといけなくなった。遅くなるかもしれないが、大人しく待っててはくれないか？』

『うん、いいよ』

——む？やけにあっさりとしたな。それともただの杞憂だったのだろうか。執着があるとは言っても月並みで、少し彼女に失礼な考えを持っていたのかもしれない。

『そうか、助かるよ。じゃあ、いい子にしてるんだぞ』

恐らくはこの状況ではこう言うのだろう、と過去の記憶から抜き出す。何だか冷静に考えると恥ずかしい気分になる。

『うん！』

元氣よく返事をするフランと共に部屋から出る。

廊下は少し赤みのかかった灯りが付いており、ここが本当の姿を現すのも時間の問題なんだと分かる。

靴音だけが響く廊下を歩く中、反対から影が訪れる。

『あ、シロウさんに妹様。お二人でどうなされました？』

影の正体はこあで、何かの作業をしたあとだったのか、眼鏡をかけたいた彼女の姿はまるで別人にすら感じた。

『ああ、ちょっとパチュリーに頼まれたことで本人に会いに行くところなんだ。どこにいるか知らないか？』

『パチュリー様なら図書館に籠もってますけど………どんな入り用で？』

『香霖堂で何かしらの物資を買って来い、ないしは憶えて来いと言うな。だが買うには金があるからな、本人も了承済みだから取りに行く所だ』

『分かりました。それなら私が立て替えておきましょうか？』

そう答えると彼女はポケットからがま口財布を取り出し、それを手渡してくる。

『いいのか？』

『ええ。お互いに了承済みなら問題は無いでしょう。それよりここから図書館は遠いですから手間ですし』

柔らかに微笑んで手渡された手を重ねるように両手で包み込ませる。彼女の厚意を今は受け取っておこう。

『ありがとう。今度人手が必要なら遠慮なく頼ってくれ。貸し借りではなく、気軽に構わない』

『ええ、頼っちゃいますね』

言葉を交わし終わると、二人は礼、フランは手を振る動作で見送った。そのすぐ近くにあった他とは違った装飾の扉を開くと、玄関へと辿り着く。

『では、行って来るよ』

『いつてらっしゃーい！』

大手を振ったフランに見送られ、私は重い扉を開いた。

『あ、シロウさん。もう動けるんですか？』

門の前まで歩くと、そこには門番をしている紅美鈴が立っていた。

『何とか支障はない程度にはな』

『よかった。倒れたって聞いたときは心配したんですよ？でも驚きました。まさかあの魔理沙に勝負して勝ってしまうだなんて』

尊敬の念を込めた声で賛美する。この言い方だと、彼女は魔理沙に勝ったことが無いのだろうか。いいのかそれは門番として。

『別に闘いをしていた訳では無い。彼女は逃げる為に、私はそれを阻止するべく動いていたに過ぎない。』

そこにはただ、結果として目的の為にぶつかり合う道しか選べなかった脳の無い獣が二匹いただけのこと。闘いと呼べるにはあまりにも単純過ぎて、綺麗過ぎる』

『はあ……………』

言葉の意図を理解していないのか、生返事を返す美鈴。しかしそれを悠長に説明し直すには少し余裕が足りない。

『それはそうと、私はパチュリーの指示で香霖堂へと出かけるんだが』

『あ、はい。分かりました、開けますね』

重圧な音と共に鉄の柵が内側に開く。私は美鈴に一礼し、そのまま
目的の場所へと歩き出した。

僅かな時間の僅かな触れ合い（後書き）

話が進んでないなあ、やばい。ただでさえ長い予定なのに無駄に引き延ばしてる気がする。これも多分東方人形劇が再燃したせいだ！（お

東方人形劇とはなんぞやと言う人に

ポケットモンスターの世界観を元に、ポケモンが東方キャラの人形に変更されたオリジナルのゲーム。萌えもんってのもありますから気になる人はチェック。

冷静に考えると、人形とはいえ草むらに早苗さんとかが居るって考えたらスグにでもポケモン（人形）マスターになるべく旅立ちますね。んで好きなキャラでメンバー組んで（それは今もやってる）……うん、自然二ート撲滅運動だね。

話は変わりますが、いつの間にやら小説の閲覧数が110万にもなっていました。流石は人気のある東方とFateの小説、サムネクリック余裕でしたレベルの吸引力がありますね。

でも蓋を開ければ、みたいな駄筆ですいません。今回のとか特に。私も出来る限り頑張っていきますのでご容赦を（´・ω・`）

絆？（前書き）

さて皆さん、如何なクリスマスをお過ごしですか、または過ごしましたか？

私はこうして小説を書いています。あと男友達と遊びました。

小説内でも、男二人というむさい内容になっております。いい思いはさせねーぜ。

いや、私にはゆうかりんがいるじゃないか。さあゆうかりん、寒いだろう？だからこっちにおいで（ピチューン

絆？

只管に地を蹴り、前に進む。人間の里と魔法の森の合間に存在するという知識だけを頼りに、私は今奔走している。

紅魔館を出てから時間はそこまで経過していない。意外と強化した足で走れば距離が無いことに気づき、私が今まで行動した範囲がどれだけ狭いのが窺い知れる。

初めてこの周辺に来た頃は、道なぞともに憶えている余裕はなかった。それに魔法の森に居たと知ったのは、その特徴でもある胞子を認識できない程の夜中で、どこからが境目なのかすら理解していなかった。

今にして思えば、軽率だったと悔やまれる。

『ふう』

足を止め、一息吐く。

目が利く私であろうと、月の光の恩恵が薄い森林内ではその効力は薄まる。

強化は出来ても、超越は出来ないのだ。暗がりに目が利きにくい人間には程度が知れている。

あまり意味を為さないかもしれないが、近くの木に飛び乗り辺りを見回す。

月の光を一身に浴びる。なんとも疲労した身体に染み込む様な感覚に、高揚感を感じる。レミリアやフランの様な吸血鬼は、やはり月の味というのは好きなのだろうか。

目を閉じ、想像する。悠然と月夜を舞う姉の吸血鬼と、無邪気に月

夜を泳ぐ妹の吸血鬼の姿を。

飛んでいる最中の表情は幸せそうで、お互い違った動きをしているのにも関わらず、何故だかそれらが全てシンクロしてる風に感じさせるのも、二人が月夜の一部となっているからだろう。

美しい舞と元気な舞。どちらも見惚れるには十分な動きを私の頭の中で続けていく。

人間には到底不可能であるその動きは、まさに神秘。夜の女王と呼んでも相違ない。

気がつけば息は整い、疲労も薄まっていた。どれだけここで妄想に耽っていたのだろうか。

私は意識を再び探索に向ける。

探すべきは上から覗くことで分かる程度の空間。そこだけ木の本数が少なければ、何かしらの建造物があると踏んでいい筈。

『あれ、だろうか』

ほんの少しだけ拓けた場所を確認する。それよりも更に遠くにある空間は、見覚えのある館が見える。あれは確かアリスが住んでいる所だ。つまりはあそこは魔法の森だ。

そこから目線を落としていくと、僅かにだが木々が薄くなっている境界を発見する。先程確認した拓けた場所も、その下の範囲に確認できた。どうやらあそこからが境目になっているのだろう。

私はそこへと木々を伝って向かう。距離にしてその場からそれ程遠くなかったのに気がつかなかったのも、この世界の夜の暗さ故か、森の深さ故か。

ぽつかりと空いた空間へと飛び降りる。するとそこには、なんとも形容しがたい風貌の物が存在していた。

大きさにしては一軒家にも満たない小さな家で、その周囲には人間

大レベルの大きさの狸の置物や、道路標識といった見覚えのある物体で埋め尽くされている。

そして入り口の上には、でかでかと香霖堂と書かれた看板が掛けられていた。

窓からは光が差し込んでおり、家主が寝てはいないことが確認できた。

私は横引きの扉を音を立てて開く。その感覚が、なんだかとても懐かしい。

『いらつしゃい………かな？でも悪いね、今日は店仕舞なんだ』

カウンターと思わしき場所に座り込んでいたのは、純粹な銀のショートヘアに青色の着物、そして目を引くのが眼鏡、という男性だった。

青年は少し眠たそうな表情をしながら、読んでいたのであろう本を閉じる。そのまま視線は私へと向けられる。

『夜分遅く訪れたのは謝罪する。しかし私にもあまり時間が無い故に、このような時間に来る形になってしまった。僅かでもいい、時間をもらえないだろうか？』

『へえ、礼儀正しいんだね。うちに来る客は基本礼儀知らずだから少し感心したよ。』

あい分かった。こんな店のものでよければ見ていくといい』

『感謝する』

了承を得たところで私は玄関口から歩き出す。

店の中も、外にあったものとあるものはそこまで変わらない。外と

は違って小物を中心に並べられている程度の違いしかない。

しかし、妙に違和感を感じる。分かっている気がする、程度の違和感。

そうだ、ここに商品として陳列されているものの殆どに見覚えがあるのだ。自分にとって当たり前過ぎたものばかりで、違和感としか認識できなかった。

しかしここはその当たり前の世界ではない。逆にこういった物質は行き届かない世界であり、ここにある物質はまさに異分子といったも過言ではない。

私はそのひとつである腕時計を手取る。しかしそこには電子表記される筈の時間は表示されておらず、用途を一切果たせていない。

『それは腕時計といってね、手首に巻いていつでも時間を確認できる様にするものだよ。しかしどうにも時間を見ることが出来ないんだ』

店主がその用途を説明する。ここに住まう者ならば新鮮に聞こえるであろう言葉も、私には当たり前すぎて聞くことすらなくなった説明。

しかし、時間が表記されないのは壊れているのか、電池が無いだけなのか。

『トレース・オン
同調、開始』

外部損害——正常。しかし多少の綻びはある。駆動の際の障害はなし。

機能——正常。しかし駆動させる為のボタン電池が二個不良。

『なるほどな。店主、ドライバーはあるか。出来るだけ小さなプラスチックドライバー』

『え？ドライバーならたしか……………これかい？』

カウンターの後ろの棚を物色して数分、ようやく見つけたようで疲れ気味に手渡してくれる。

私はその合間を縫って隠れて正常なボタン電池を投影しておいた。最近剣以外のものばかり投影してる気がする。

手馴れた動きで螺子をはずし、中のものと交換させて再び蓋を閉める。すると電子パネルには、ゼロの数字が四つ刻まれた。どうやら時間はリセットされている模様。

『ほう……………凄いね。見ただけで動かない原因が分かったのかい？』
その作業を観察していた店主が、感心した様子で腕時計を眺めている。

『まあ、ある意味見たただけだな。取り敢えずこれは返すよ』

手渡されたそれを、店主は早速手首に巻き用途を果たす。ご満悦な表情を見て、やってよかったと思えてくる。

『お礼といっただけど、僕のコレクションを見るかい？とは言っても、有効活用できそうだから非売品にしたものなんだけど』

非売品にしたもの。つまりはこの世界でもなんら問題なく使用できるもの。

もしかするとパチュリーの眼鏡に適うものもあるかもしれない。と

は言っても譲ってくれる確率は低そうだが。

『いいのか？ならばお言葉に甘えとしよう』

『そうと決まれば上がって。今から君は客じゃなくて客人だ。もてなすよ』

カウンター奥にあった道を抜けて、居間らしき場所へと上がる。併用しているせいか、居間の方が少し狭い気がする。

しかし決して散らかってる訳ではなく、男一人にしてはきちんと整理された生活感を醸し出している。

『この部屋に飾ってあるのは基本非売品だね。このストープとかはこれから寒くなるだろうから重宝するよ』

楽しそうに説明をする姿はとても初期の印象からは計れない。凜に紅茶等について語った際に子供っぽいと言われた経験があったが、今の店主の状況がまさにそれなのだろう。傍から見ればなんだが変人。自分と重ねることで恥ずかしく思えてくる。

そんな一般用品の中、隠れる様に埋もれていた”それ”を発見する。

『これ、は——』

突き立てられていたそれを引き抜く。無防備に晒されていたにも関わらず、それは一片の汚れなく凜とした姿を保っていた。

アマノムラクモノツルギ
『天叢雲剣——だど？』

恐らく日本人ならば知らない者はいないであろう、有名な剣。

三種の神器のひとつで、素戔鳴尊が八岐大蛇を退治した際に尾から
出てきたそれを天照大神に献上されたという剣。アマテラスオカミ草薙剣、都牟刈の
大刀、八重垣剣とも称されることもあるが、その名はあまり浸透さ
れていない。やえがきのつるぎ

この剣を持つものの上には雲が押し寄せ、頭上にはいつも雲がかか
っていたのでその名がついている。

雨とは、天とも読める。この剣の持つものの周囲だけが雨振りだと
すれば、ここに天が下る、つまり天下があるという意味にも取れる。
気象が世界にとっての矛盾を起こしてでも思惑通りに動かない――
それはつまり、世界を揺るがす力がこの剣には込められていると
いうことだ。そんなランクAクラスの剣が、何故こんなところに……。

『君にもその剣の凄さが分かるのかい？』

後ろから聞こえてきた店主の声に我を取り戻す。実物を拝見したの
は初めてだったから、見惚れてしまっていた。

『私は武器に関してはそこそこの知識を持っている。そしてこの剣
が天叢雲剣だということも一目で理解したよ』

『へえ………僕は能力を使ってその正体を看破したというのに、
君はどうやってその知識を得たんだい？』

慧音曰く、彼の能力は物の名前と用途が分かるものらしい。確かに、
その様な能力がなければこの剣を非売品にしようとは思わないだろ
う。鑑定眼の無いものからすればこの剣は切れ味がよさそうには見
えない、儀礼用の青銅剣だとして判断しない筈。

しかし、この剣は恐らくこれ本体で切り付けるものではない。これ
程の剣の投影にはかなりの負担がある為一度も造ったことは無かつ

だが、この手の武器に関しては例が何個として丘に突き刺さっている。これもその類なのだろう。

『なに、大したことはしてない。この手のものが好きな奴ならば、自然と識る機会はあるものだよ』

『と、いうことはだ。君はこれ程の武器を幾つも知っていると捉えてもいいのかい？』

期待した眼差しで此方をじっと見つめてくる。私という存在に興味を持ったらしい。私としても、看破能力だけなら私と近い彼に興味はある。

『私が知り得る知識をひけらかせ、ということかい？』

『はは………まあ、そういうことになるかな』

照れ笑いを浮かべる彼は、子供みいだと思った。私も久しぶりに男性との会話を楽しんでいる。

女性への会話とはまた違った無遠慮な雰囲気、同姓同士にはある。最近ドタバタが多かったから、少し楽しませてもらうとうとうか。

『了解した。では、話すでしょう』

私は天叢雲剣を元の場所に返し、彼と向かい合い言葉を切り出した。

『凄いな………そんなに武器の種類があつたなんて』

あれから数時間。パチユリーの頼まれごとなんぞは記憶から消え去り、私は会話を楽しんだ。相手である彼——森近霖之助と対話の中名乗っていた——もまた、同様に楽しんでいる風に見えた。

最初は武器だけの話だったが、横道に逸れて彼の持つ知識も聞くことができた。大半が外に対する知識だったが、興味深い話も聞くことが出来た。

どうやら幻想郷には、斬られた者の迷いを断つことが出来る刀と一振りで幽霊十匹分の殺傷力を持つ対の刀が存在するらしい。しかもそれは白玉楼にいる剣士が持っているとか。

白玉楼といえば、バイト先のひとつだ。確か剣術指南役を募集しているらしい。そう考えればこの情報は嘘には聞こえない。

これは僥倖かもしれない。私はここに訪れる切っ掛けを与えてくれたパチユリーと、彼の知識と教えてくれた事に感謝した。

『私自身、書物から得た知識も大半だから実物を拝見した数は五分五分だな。先程の天叢雲剣のように、な』

私が投影できるのは、実物を見たか細部に渡って情報が公開されており、それを識っているという範囲だけ。

名前を知っているだけでは投影は不可能。英雄王の持つエアがそれだ。あれは謎が多すぎて投影するには至らない。あれを看破しようとしても、人間の脳ではその膨大な情報量を全て理解することは不可能。いや、例えどの様な知恵を持つ者——人間を超越している妖怪や魔法使いであろうと、いち生命体である以上原初の記憶を脳に刻もうとすれば発狂ものだ。

それほどまでに、あの剣は恐ろしいものなのだ。そして、それを所持するあの男もまた。

『まあ流石にそこまで上手く事は運ばないさ。この剣だって、僕の知り合いが拾ってきたジャンクに紛れていたひとつで、偶然手に入れたものに過ぎないし』

『それは不幸だな。このようなもの、そうそう手に入れる機会はないというのに』

『まあ、魔理沙には色々と店の物を持ってかれてたりもするし、これからもそうなると考えれば先払いで丁度いい位だよ』

最近聞いたばかりの名が、彼の口から発せられたのを私は聞き逃さなかった。

紅魔館で対峙し、その折彼女の大事にしていた炉を破壊した事実が、再び重く押し掛かる。

『……………魔理沙はこの常連なのか？』

自分でも魔理沙の名前を呟いていたのに気づいていなかったのか、霖之助は目を大きく見開かせ此方を見やる。それ程までに、彼にとって魔理沙という少女は自然な存在なのだろう。

『ああ。彼女とは産まれる前からの知り合いみたいなものかもしれない。とは言っても、ただ単に僕が彼女の両親が営んでいた道具店で働いていたからってだけなんだけど。』

それが切っ掛けで彼女とは擬似的な兄妹みたいに世間では見られていたんじゃないかな。彼女自身、僕のことは慕ってくれていたし、僕もまんざらではなかった』

懐かしむように一語一句をゆっくり紡いでいく。

彼は指を絡めて両肘を卓袱台に乗せ、目を細めた。

『彼女はとても大人しい子でね、まともに他人と会話すら出来ない位に引つ込み思案だったんだ。そんな子だ、友達もそう簡単に出来る訳もなく、話すのはもっぱら家族が僕くらいのもだった。

でも、僕的能力を活かすには普通の道具店では駄目だ、そう思い立ってそこから出て行った。それに伴って彼女に会う回数はこちらと減った。

必然的に彼女の抛り所を奪うということも考えずに、僕は彼女を見捨てたも当然の行動を取った』

彼の絡めた両手で表情を見ることは出来ない。しかし、見ずとも理解出来る。そして語ることもおこがましい。

私は何も言わずに、次の言葉が紡がれるのを待った。

『——僕も若かったからね。何でもやりたかったんだと思う。目先の欲の怖さを思い知るいい切っ掛けになったといえ、卑屈的な』

顔を上げたときの彼の笑みは、涙を誘いかねんほどに憂いに満ち溢れていた。

後悔と自責の念が混ざり合ったそれは、彼の苦悩を伝えるには十分なものだ。た。

『生きている以上悩み、苦しむものだ。時には自虐的になることもある。そういう意味では、君は前向きなのではないだろうか』

『だいいいがね』

憂いが晴れることはないが、ほんの少しだけ笑ってくれたことが嬉

しかった。

『君は——魔理沙をどんな子だと思っている？』

突如、話題が変わる。先程とは違った真剣さが私へと向けられる。父親が娘と交際している男に聞く質問みたいな静かな剣幕がひしひしと伝わってくる。

『最初は……活発で笑顔を絶やさない、そんな子に思えた。でも、その折垣間見えた表情が、まるで雷に脅える子供みたいに、為す術なく震えているしかない無力な自分を無理矢理奮い立たせようとしている、そんな風に見えてね。』

——何だか無理をしている風に思えてならなかった』

私は正直な感想を述べる。

壊れた炉を拾い上げる前に見せたあの表情……あれは負けたことの悔しさによる睨みなんかではなく、圧倒的な武力で蹂躪される人間が見せる最後の抵抗のひと睨みにしか見えなかった。

戦争の真ん中に常に居た私だから一瞬で見分けれるレベルの僅かな差。しかしその中に込められた想いの桁は、天秤が軽く揺らぐぐらいの差だ。

そんな目に見えない大きな痛みを、私が与えてしまったのだ。

『君の言っていることはあながち間違いでは無いと思う。』

話の最中、小さな頃はとても大人しい子だったと言ったけど、僕も驚いたよ。まさか約十年近く経ったある日突然ここを訪れた彼女は、まるで別人みたいに生き生きしてたのだから。

最初は安心したさ。引っ込み事案だった少女が、色んな人にフランクな接し方を出来る子になってたんだから』

言葉とは裏腹に彼の声は低くなり、影が射していく。それだけでも、次に話す内容の重さを報せてくれる。

『——でも、解せない事があった。彼女が魔法使いになった理由が、稚拙過ぎるんだ。

魔法使いと言うのは、適正がある人間でもなるのは困難、と言うか、高みを目指す彼女らが最後に行き着く先と言うのが、人間からの昇華——つまり人間をやめて妖怪に至ると言うこと。それが人間の魔法使いとしての限界を超える手っ取り早い手段だからね。

でも彼女はそれを嫌っている。それでいてあれほどの魔力を秘めているんだ。彼女が培った努力が想像を絶するものだと言うのは理解出来るだろう。

彼女は魔法使いが何だかカッコいいからと言う理由でなったと話していたが、間違いなく嘘だ。そんな子供染みた理由で、あそこまで努力を続けれる訳がない。

——彼女は私からすれば無理をしてる風にしか見えない。常に心も体も疲弊し切っている筈なのに鞭を奮って……痛々し過ぎるよ』

不謹慎かもしれないが、彼も痛々しさでは負けてはいない。本気で苦しんでいる姿をこうして傍観しているが、私には話を聞くことしか出来ない。

こんな事で晴れる様な問題では無いのは分かっている。しかしこんな無力な私に苦悩を打ち明けることで、彼の気が少しでも楽になつてほしい……そう思う。

『彼女自身何も言わないが、魔法使いになった本当の理由は僕にあるんじゃないかって、最近思うんだ。

幼い記憶ながら理解してたのか、成長した後聞いたのかは分からないが……僕がこういった物を取り扱いと言う決意の元独立した

のを知って、自分が魔法使いの様な特別な道具を取り扱う人種になれば、何の弊害もなく会うことが出来る——そう解釈して。

もしそうだとしたら、お互い莫迦だよ。そんなことしなくても彼女を拒む気なんか毛頭無いのに、そんな事をしてまで僕に会いにくるなんて。そしてそんなことの為に彼女を苦しませる行動を取ってしまった僕が、ね』

ふう、と溜息を吐いた彼はそれ以上は何も言わなくなった。これで終わりなのか、これ以上言うのは憚られたか。どちらにせよ、私に出来ることはもうなくなってしまった。

『後悔するなとは言わないが、縛られてはいけない。どんな結果になったにしろ、今の魔理沙がホンモノなんだ。そして後悔するぐらいならば、責任を取って支えてやればいい。』

——人は決して過去には戻れやしない。仮にその術があつたとしても、そんな労力を使うぐらいならば前を向いて現実を受け入れる方がよっぽど利己的で、強いと私は思うな』

教科書通りの慰めしか言えない自分に腹が立つ。

やはり私はこういった事ですら不器用だ。誰にでも言えるこんな言葉になぞ、何の意味も無い。

これは自己満足だ。何も出来ない自分が悔しくて、せめて足掻きたかったのか、正義の味方としてなにかしてやりたかっただけか。

『強さなんかいらないけど……支えることくらいになら、僕にも出来るのかな』

『出来るさ、絶対に』

『……だいいいな』

会話は再び途絶え、小さな部屋には耳を劈く静寂だけが響く。しかし間もなく、霖之助が口を開いた。

『そういえば、魔理沙とはどこで会ったんだい？』

そういえばすっかりここに来た目的を忘れていた。私は心の中で安堵する。

『そうだな、私は現在——というか一昨日から紅魔館で働くことになったのだが、図書館に案内された折、彼女が侵入している所に出くわしてしまってね。私は皆が彼女を数の暴力で律されることを恐れ、私との一騎打ちに持ち込むことを提案したんだ』

『それで、了承されたのかい？』

『ああ。勝負の結果は……私の勝利ではあった。しかし、その時に私は彼女の持ち物である小さな炉を破壊してしまった。今でも悔やんでるよ、もっとましな手段があったのではないか、とね』

先程とは打って変わって、私が彼に話しをする番になった。まったく、これでは偉そうに説いたところで説得力が皆無だな。

『その炉って、もしかしてこんな形をしてなかったかい？』

徐に立ち上がった霖之助は、先程天叢雲剣があった箇所を念入りに探し出し、ひとつの丸まった紙を取り出し、卓袱台に広げた。

私は驚いた。彼が出してきた紙は、私が破壊した炉の詳細を事細かく書いていた設計図だった。

『どうやらそうらしいね。これはミニ八卦炉といって、僕が魔理沙のために作成した万能の炉なんだ。』

水を沸かす程度の火も出せば、攻撃用にも使えるほどの超高熱だ
って出せる自信作さ。外の世界の道具を溶かして混ぜることによっ
て、魔除けや開運などの機能も付加されてる。

一度緋々色金で作り直して欲しいと魔理沙から要望があつた際にこ
うやって書いておいたんだ、何せまた無茶な要求をされたとき楽に
なるしね。

——しかし、こんな形で役立つことになるとはね』

『すまない。大事にしていたであろう彼女のものであり、君の自信
作を………』

『仕方ないさ、ああいった使い方をしていればそうなるのは必定だ。
寧ろ今まで無事だったのが信じられないくらいさ』

彼女が使い古していた時期の程度は分からない。しかしそれまで壊
れることが無かったのは、間違いなくそれを大事にしていたからだ。
恐らく、どんなものよりも。

いわば、八卦炉は絆の象徴。二人の在り方を具現化させた、どんな
宝にも代え難い代物。

『——こんなことを言える立場ではないのは重々承知している。
でも、言わせてくれ。』

その設計図を貸してくれないか、壊した責任を取りたいんだ』

彼があゝの八卦炉を作ったというのならば、私も同じ手法で作りたい。
魔理沙はそれで満足しないだろうし、結果が覆る訳でもない。これ
は私の勝手な我が儘だ。

投影を用いずに、あれを再現するには途方も無い労力と時間が必要

になるに違いない。

それでも、これだけは自分の手で造り上げたい。下らない意地かもしれないけど、もう決めたことだ。

『別に構わないけど……これを造るのは素人には無理だよ。第一材料が繊細かつ貴重なものが多いんだ。それを探すだけでも苦労するんじゃないかな。』

なんだったら壊れた八卦炉を魔理沙から譲って貰えば——』

『それでは駄目だ。それじゃあ、意味がないんだ』

これは全て私が招いた結果だ。ならば他人の助けを求めていい筈がないんだ。

それに、仮に魔理沙に八卦炉を譲ってくれと言って素直にそうしてくれる訳がない。いや、即却下させるのが目に見えて明らかだ。

『まあ君が言うなら僕はこれ以上は言っても無駄なんだろう。』

——でも、本当に材料が見つからなかったらもう一度ここに来るといい。もしかすると魔理沙が八卦炉の修理を要請してくる可能性があるから、その部品を保管しておくよ』

『気持ちは有り難いが……もし彼女が修理を頼んできたのなら、私のことは気にせずやってくれ。』

これは私の勝手な独り善がりだ。君が心配してくれる必要もなければ理由も無い』

冷たい言い方になったかもしれないが、彼の厚意はとても嬉しかった。それだけでも、私は頑張れる気がする。

『……ならせめて、前報酬として何かひとつマジックアイテムを』

持っていくといい。本来はその目的で来たのだろう？』

『前報酬？何を訳の分からないことを——』

意図する意味を理解出来ない私の声を、彼の声が制する。

『君が八卦炉を作ってくれるならそれは僕にとっても有り難いことなんだ。さっきも言ったけどあれの作成及び修理するのは難しいんだ。そんな重労働を任せるんだ、多少のマジックアイテムくらい安いものさ』

『待て、だからこれは私の勝手な——』

『いいんだ。じゃあ君が眼鏡にしたマジックアイテムが、僕と君を繋いだ証、そう思ってくれれば』

——ああ、この男は気付いてるのかもしれない。私がこの出来事に躍起になっている理由を。頑なに決意を固めた視線から逃れられない。彼の魔理沙に対する思いはホンモノなんだって事がとても伝わってくる。

『……………分かった。ならば遠慮なく受け取らせてもらう』

『うん。でも一個だけだからね』

私は部屋の中を再び物色してみる。そもそもマジックアイテムとは触媒のことを指しているのだろうか。それとも天叢雲剣の様な物質もまたそれに該当するのか、判断に困る。

多少の魔力が籠った程度のもものではあの魔女は満足しないだろうし、だからといってあの剣を貰っていくなんて厚かましい真似は出来ない

い。

『……………これは？』

そんな中、一冊の分厚い本が出てくる。

埃に塗れた、いかにも年代物だというその中身を開く。書いてあったことは、予想だにしないものだった。

『魔術教本、か』

魔術を極めるにあたって魔術師ならば誰もが目を通すような、いわば入門書の類だ。大体魔術師の家系の本棚には一冊はひっそりと置かれている、価値もそこまでのものではない。しかし魔術の情報を細部に渡って執筆されている、という点ではこれも立派なマジックアイテムなのではないだろうか。

私も読んだことはあるが、要所要所だけだ。何せ真面目に読んだところで他にも魔術を習得できるか？という分かりきった疑問には、最初から答えが出ているからな。

だが、知識を求めるのを是とするパチュリーにはいい暇潰しにはなるのではないか。これならばどちらの世界だろうと大した価値はない。

『そんな本がいいのかい？僕としては有り難いくらいだよ。何せ途切れ途切れにしか読めなかったしね、魔理沙も興味本位で読んだだけで訳が分からないってばやいてた』

魔法使いである魔理沙が匙を投げたという事は、やはり魔法と魔術では色々と異なる、ということなのだろうか。ならば尚更彼女は興味を持つはずだ。

『問題ない。なにせ頼んだ本人はこういったものが好きらしいからな』

『ならどうぞ。といっても、価値の程度が何だろうが一個は一個だから』

『分かつてる。感謝するよ』

私は本を手に立ち上がる。ただでさえ真夜中だったのに、最早丑三時くらいにはなっているのではないだろうか。

『それでは、失礼した。夜分遅く、本当にすまなかった』

『そうだね、まあ店を開ける時間が少し遅くなるだけだからいいさ。どうせまともな客人は来やしないしね』

皮肉めいた言動ではあるが、根底からの気持ちではないのか楽しげにも見える。

『最後に——ひとついいか？』

『なんだい？』

『どうして私に話してくれた』

霖之助は考える姿勢を数秒取った後、こう呟いた。

『さあ、ね』

彼の真意は分からない。しかし、その時に垣間見た暖かい笑みに秘

めたる想いだけは、決して悪いものではないと確信できた。

『今度は、用事など関係なしにいききたいものだ』

『ああ』

軽くそう言い合つと、私は部屋から出て行き、店を後にした。

絆？（後書き）

東方内では希少種の男のひとり、森近霖之助の紹介です。微妙に気が乗りません（お

もりちかりんのすけ
森近霖之助

種族：半人半妖

能力：未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能力

二つ名：香霖堂店主

人間の里と魔法の森の中間に座している香霖堂こうりんどうを経営している。

ハーフであるため、人間よりも長寿で妖怪よりは短命と分かりやすい寿命をしている。

原作は東方香霖堂という小説で、今では現物を全て持っている人も少ない。よって価値は高いと思われる。

原作ではとても常識人で、常に冷静な雰囲気醸し出しているいわゆるクールガイ。しかし二次創作では禪一丁になりたがる所謂変体キャラになっている。

本名よりも、店名である香霖という名で呼ばれることの方が多い。寧ろみんなこーりんって呼んでる気がする。魔理沙すらも。

外から来たさまざまな商品を扱うが本人にあまり売る気が無い。有効に扱えるものだと判断すれば非売品にする、という強かさ（セコさ？）もある。

この小説内では、性格は英霊エミヤみたいな奴だって捉え方でいい

です。ファンディスク（番外編）で暴走するところも、ね……。

異端な者達の騒がしくも暖かい朝（前書き）

明けましておめでとうございます。こんな小説ですが、今年もご愛読の程をお願いします。

異端な者達の騒がしくも暖かい朝

『これが魔術というものを記した本なの？』

紅魔館へと戻った私は、真っ先に図書館へと向かいパチュリーに魔術教本を手渡した。

予想通り彼女は大いに興味を持っているらしく、喋りながらも視線は片時も離れることはない。レミリアの喻えた本の虫という言葉に納得してしまう。

『基本的なことが書いてあるに過ぎないがな。だが君にとっては嗜好の一部ではないのかね？』

『まあ、本は好きよ。幾らあっても困らないわ』

彼女を満足させた事で、一応ここで働く身としての役割は果たせた。雇主を差し置くのはどうなのだと言われればどう返せばいいかわからないが。

『ねえ、魔術って私にも使えるのかしら』

ようやくといった所か、彼女は私の方を向き質問を投げかける。

『………難しい質問だな。魔術師にとって必要不可欠な魔術回路は君には存在しないだろうし、だからといってなら魔法を使っているのはどう説明するかと聞かれれば私には答えは導けない。何せ魔法を見たのはほんの数回だけだからな。よって、まず魔術とこの世界の魔法がどれほどの差異があるのかが分からない限り、断言は無理だろうな』

『そう………』

残念かつつまらなさそうに目を細める。説明書だけあって、玩具を持つていない時の心境もこんな風に見えるのだろうか。

『まあ君は魔力の使い方を理解している様だし、やってみればいいのではないか？幸い魔力に関しては共通してるらしいからな。環境は整ってる』

『………そうね。やるだけやってみましょう』

椅子から重い腰をあげると、つかつかと図書館の開けた場所へと歩を進める。

『魔術っていうのは、貴方の世界の文明の劣化版って考えて問題ない？』

『そうだな。だが君達の——と言うよりは、にとりという河童の少女の技術力も外に劣るものはなかったぞ。………いや、もしかすると越えていると言っても過剰ではないかもしれん』

何せ恐竜の等身大ロボットを恐らく一人で作ったのであろうからな。効率云々を考えなければ外の技術力以上なのは間違いない。

『ふうん……。それはいいとして、魔術はそういった技術の前では遥かにコスト、キャパシティが劣るんでしょ？なんでそんなものを使おうとするの？』

『そうだな。魔術師が魔術を以てして目指すもの、それは根源に至

ることだ。根源とは、世界の大元の様なものだ。余談になるが、全ての物質、生命はこの根源が一定の方向性を持つことよって発生するらしく、その最初の方向性を起源と呼ぶ。例えば単純に”愛”という起源を持ったものがいたとしよう。その者は、どんな形で生まれても愛という事柄に惹かれてしまうのだ。——そうだな、君の起源は”知識”という捉えでいいのかな」

「——貴方の言葉が本当ならば、そうなのかもしれないわね。じやあ貴方自身の起源は理解してるの？」

見透かされた感覚が厭だったのか、多少むくれ面になり口調も棘棘しくなる。だが、もし起源とパチュリーの事を両方知っている者がいれば確実にその考えに行き着くのではないだろうか。

「私の起源は恐らく——剣だ」

「剣——？　なんだか私と違って妙に具現性が強いわね。じゃあ貴方は剣に惹かれる傾向にあるってことよね」

「そうだな、私の生きてきた時間の中、剣という存在に触れ合う機会はかなりあったな。——そしてそれらは私の世界の色を常に塗り替えていった。善い方向にも、悪い方向にもな」

私の言葉にパチュリーはハツとした後、私から目を逸らす。

そう、剣という人を殺める為の物に惹かれるということは、この身は常に戦いの中にあつたという事。誰もが簡単に行き着く答えであり、だからこそ想像するのも容易だ。

切っ掛けは些細なことでも、一度それに気付いてしまえば二度と元には戻れない。

産まれたものの全てが起源に覚醒する訳ではない。私みたいに常識とはかけ離れた世界に身を投じていない限りは、余程身近な起源でない限りは覚醒には至らない。せいぜいそれに関わる学者や仕事に就いたりするぐらいだ。そう言った意味では、私がここにいるのは偶然であり、必然なのだろう。

——そう、私が今こうしていられるのは偶然が重なりあつた結果に過ぎない。そしてエミヤシロウが世界喪失者となつたのは、偶然の始まりに触れてしまった瞬間、必然になってしまったからに過ぎない。

だがそれは決して運命などではない。偶然も必然も運命という枠からはかけ離れた、ただの確率性だ。

力の持たなかつた私は、人為的に変化させることの出来る可能性に振り回されるしかなかった。

——いや、力があつたところで何が変わった？

所詮私の取つた行動も、生きる死ぬの確率性のひとつに過ぎない。だから宗教などというものに救いを求める者が出てくる。確率性の枠の外にいと勘違いした絶対の存在に、希望を見出そうとする。宗教自体は良いものだ。しかし、それを悪用しようとする輩が現れるのはどこの世も変わらない。そしてそこから対立や紛争が起こり、行き着く先は弱者の死。

そら、これでも運命などというものを信じたいと思うか？

『とは言つても確認した訳でもなし、結論から言つてしまえばこれに関しては不確定要素が殆どだからな。もしかすると全く異なる起源の可能性だつてある』

結局はそこに回帰する。絶対にこれだという要素が僅かにしか無いのだから、全ては私の妄想であり願望なんだろう。

『貴方は……起源に覚醒したことを後悔してる？』

『後悔はしていない、と言えば嘘になってしまふな。だが後悔したところで意味は無いだろうさ。何せ戦いに身を置く頃には、自身でも知らない内に起源が覚醒していたのだろうから。確かに悪いことだってあったが、決してそればかりではなかったんだ。それを否定してしまえば、私の人生に関わったものの全てを否定することに他ならない。——私がこうやっていられるのも、皆のお陰だからな』

俺が魔術を使えなければ間違いなく聖杯戦争には勝ち抜けなかっただろうし、ましてや参加することすら無かっただろう。

こんな形で誰かを救うことも出来なかった。たとえ救えた存在が世界にとっては手の平に収まる程度のものだとしても、決して悔やみはしないし、後悔だつてするのはやめた。

——否、元より後悔すること事態が間違いなんだ。それを間違いだと思えないのは、やはり狂っているからに他ならない。

でも、それでいいじゃないか。少なくとも俺は良かったと思ってる。今なら、自分の生き様に少しは誇りを持てるかもしれない。

『——いい顔してるじゃない。普段の堅苦しい表情より、ずっと素敵よ』

魔女が微笑む。ほんの少しの頬の動きしかしない、よく観察しないと判断できないレベルのもの。

私は何も言わず微笑み返す。周囲の堅苦しい雰囲気は削ぎ落とされ、僅かながら温かみのある雰囲気を訪れる。それは私の心に吹いた風と呼応してるせいか、よく染み渡る。

『そうか？いつも通りだと思うが』

『貴方の見せる表情の殆どは仏頂面よ。或いは嘲る様なものとかね』
呆れた様に呟く魔女。折角見せた柔い微笑みはどこ吹く風だ。

『まあいいわ。それより、基礎的な魔術を行うにあたって魔術回路なるものが必要らしいけど、それって先天的なものに近いんでしょ？それでも私は魔法を使えるのだから、魔術回路はあるって捉えていいのかしら』

『さてな。定義が不明瞭な以上明確なことは言えないが、魔力の使い方を知っているのならば、仮に魔術回路が無くてもそれに準ずる魔術なら使えるかもしれないな。例えば、宝石に魔力を籠める、とかな』

『なんで宝石なの？』

『…………私も殆ど憶えてはいないが、恐らくは魔力を通しやすいとかそこらへんだった気が。とにかく、宝石に魔力を籠め触媒とする事で短い詠唱で魔術を行使することが可能となる』

そんなことを凜の前で言えば間違いなく怒られる。何せ擬似的な師の得意分野の魔術形式を忘れたと言っただから。

『だが魔術にも得意不得意が存在してだな、もしかすると君は宝石魔術と相性が悪い可能性だってある。そこは属性が関わって来るんだ。先程起源の話の際に私が起源が剣だと曖昧に言ったのは、私の属性が剣だという事から連想した結果なんだ』

『属性が、剣？そんなの聞いたことが無いわ』

『そうだろうさ。属性には稀に特殊なものを持つものがいてな、そういった奴等以外の魔術師では到達出来ない場所へと足を踏み入れるらしい。私自身、普通の魔術師では何の役にも立たない投影魔術を、我が物としてしまったのがいい証拠だ』

だがそれ故に普通の魔術師に出来ることが出来なくなっている辺りが、普通に恵まれない人生を沸々と語っている。

『属性を除いてならば、流動・変換の魔術が得意ならば宝石魔術はお逃れ向きだな。それは君が魔術師でなかつと一度は経験したところのある初歩の初歩だろうから語るべくも無いだろう』

パチュリーは何も言わず頷き、それを合図に話を続ける。

『属性を知るなら私の魔術を使って君の身体を調べれば容易に調べることが可能ではあるが、それは不愉快だろう？』

『……………まあ否定はしないわ。でも大丈夫、なんとなくだけど予想はついている』

『ほう、流石は魔法使い、とでも言えればいいかな』

『茶化さないで頂戴。恐らく——私は五大元素ね』

内心驚いた。確証がないとは言え、それなりに希少な五大元素使いをこの目で三人目を拝むことになるうとは。

『貴方みたいな言い回しだけれど、私の能力は火水木金土日月を操る程度の能力——つまり、自然の魔力を最大級に活用出来る能力。』

私はこれを魔法に応用してるのだけれど、それならこの五大元素つてのが私には一番近いんじゃないかしらって思ったのよ』

パチュリーは本を捲りながら説明をしている。意識はどうやら再び本へと向けられたらしい。

……彼女が本当に五大元素使いの素質があるのだとすれば、これはもしかすると第二魔法に到達するのではないかと思ってしまう。しかも助力無しで。

或いはこの世界の魔法と魔術を組み合わせた、全く新しい何かを構成する可能性だって無きにしも非ずだ。改めて、この世界の規格外っぷりを目の当たりにした。

『宝石魔術、か。この本によると自身の血液を以ってして魔力変換を行ってるけれど、流動・変換を用いるのなら他のものからの移し替えでも問題ないんでしょ？』

『そうだな。魔術師の血液が最も身近にあり一番馴染むものであるから例として喻えられているのであって、魔力のある物質からの変換も可能ではあるだろうさ。ただし、それに比例して難易度も跳ね上がるがな』

凜曰く自分の血で行う流動・変換ならば、身体の一部を使っている故に扱いが楽らしい。それに対して、自身とは全く異なるものからの変換——ましてや取り出すような形となると難しくなる。初めてつけた義手義足が思い通りに動かないように。だから血を触媒にする、という手法が記載される。

『ただ、それだけではない。自身のキャパシティ以上の魔力を取り出したりすることは身体に大きな負担を掛ける。しかし、自身の成長と共に肥える魔力が流れる血液ならば、そんなことを考えず実行

に移せるというのもあるんだ。これによって自身の熟練度を測ることも可能だし、損は絶対にしないという面でも重宝される』

『……………』

『ん、どうした？』

ふと気がつくと、パチュリーが訝しげな視線を送っていた。彼女のことだから、説明が理解できないという訳ではないと思うが。

『いえ、ただ——ずいぶん饒舌になったものね。魔術の話になっ
てから』

『そうか？』

『まあそれより、貴方がそれほどまでに深い知識を有してるのが驚
きだった』

『……………莫迦にしてるのか？』

『そうじゃないわ。ただ、少し悔しかっただけ』

私に向けられた視線は地面へと落ちる。哀愁が漂うその姿の出現に
内心戸惑う。

『産まれてから殆どの月日を知識の習得に費やしていた私が知らな
くて、違う誰かは知ってるって事実がね。それは僅かな片鱗でし
かないかもしれないけど、私にとって知識は数ではなく、全てが同
じ価値のあるものだって考えてるから』

——やはり彼女の起源は知識で確定かもしれないな。

取るに足らない知識のひとつですら強く渴望するこの姿勢。書物だけでは完全に理解は出来ないであろう概念——死という知識を得る為には、死ぬことも躊躇わない死狂いともなるのではないかと不安になる。

大袈裟な喩えかもしれないが、起源覚醒者というのは言葉だけの生温いものではない。実際に完全に覚醒した者を知れば、そのタガの外れ具合が理解できるだろう。

『でも、逆に嬉しくもあるのよ。知らないことを識るという楽しさと、まだ私の生きる楽しみは存在しているんだってことが分かって』

『…………それは何よりだ』

でもどうやら、彼女は起源覚醒には至ってない。しかしこのまま知識を追い求めれば確実にそこに行き着く。

それを止めることは私には出来ない。生きる楽しみが識ることだというのなら、それを奪い取れば抑圧した心が暴走して覚醒してしまう。

——目の前にいても、救えない。そんなもどかしさを何度も味わってきた。そして今もまた。

一生逃げることの出来ない現実を背負い歩くと決めたとはいえ、そんなものに慣れる筈もなく。

拳を握り締め、ただ行く末を見守るしかできない、それが嫌で嫌で、どうしようもないんだと割り切ることも出来なくて。

不治の病を宣告された人間と同じだ。医者 of 癖に治せないのかと八つ当たりするしかできなくて。どうしようもないって分かっているのに、そうやって足掻くことしか出来なくて。

結局のところ、神ではないのだから何をするにも当たり前は存在し

ないのだ。私には、誰かを救えるだけの力が他の人よりもほんのちよつと多かった、ただそれだけなんだ。それも物理的なものだけ。

『——もしかして、私が起源覚醒者になったら、みたいな事考えてるんじゃないでしょうね』

『——！』

パチュリーの的を射た疑問をぶつけられ、驚きを隠せない自分だった。

『その様子じゃ、そうみたいね。侮らないで頂戴。私は貴方みたいな人間とは違う。人間なんかよりも遥かに丈夫に出来ている妖怪の精神を舐めないで』

静かに彼女はそう切り捨てるように答える。

言葉通りならば怒りを露にしている風があるかもしれないが、彼女は平静そのもの。いや、いつもより大人しくすら感じる。

いや、視線は私から逸れているし、よく見れば平静な表情には僅かに赤みが掛かっている。そしてその状態から動こうともしない。

『まさかとは思うが——慰めてくれたのか？』

『——！』

そうではないかと思ひ言葉にした刹那、強烈な衝撃がジャストで脛に響き渡り、その痛みに私は無様に転がり回る。

痛い、物凄く痛い。強化も掛けていない私の身体は通常の人間のそれと大差無い。弱点ともなれば尚更だ。

意識が痛みで霧散する中、衝撃を与えた正体を苦悶の表情で睨みつける。そいつもまた、逆上せ上がったみたいに赤くなっており、息が乱れていないのに肩は上下を繰り返していた。

『何をするんだ君は！』

『五月蠅い！莫迦！』

『莫迦とはなんだ！こっちは訳も分からないまま蹴られてるんだぞ！』

『察しろ莫迦！』

『まだ言っか！』

ギヤーギヤーという喧騒がただ広い図書館を埋め尽くす。喻えどそんなに離れていようとこの声だけは聞こえているんじゃないかって程に。

そんな言い争いをしてるにも関わらず誰も来る気配がない。ここには正真正銘私達二人しか居ないのだろう。

暫くこんな不毛な言い争いを繰り返し、いつしかお互いに息を乱していた。

地下故の遥か高くに位置する窓からは、知らず朝日が差し込んでいた。

『うつ——ゲホッ、ゲホッ！』

『ど、どうした！』

突如咳き込むパチュリーへとすぐさま近づき、背中を摩る。

長い咳き込を終え、押さえていた手からは数滴の鮮血が付着していた。

『平気………いつもの喘息だから。ただ、ちょっと大声を出しすぎたせいで喉を痛めたようだけど』

そして再び咳き込む。先程までの気の強さは最早どこにもなく、あ
るのはただ病弱な少女の姿だけ。

『すまない……。大声を出させるような真似をしてしまって……
……』

『謝る必要はないわ。寧ろ御免なさい、悪いのは全面的に私なのに
謝らせちゃって』

『そんなことはない。君の体調事情さえ知っていればこんな結果に
はならなかったかもしれないのに』

『そんな過ぎたことを言っても仕方ないじゃない。それに私自身、
最近体調が良かったのもあったから油断してたせいよ』

延々と謝罪と否定の言葉が繰り返えされ、先程と同じ轍を踏むと思
った矢先、彼女の番で言葉は止み、代わりに軽く吹き出すような笑
いが漏れて拍子抜けを起こす。

『ど、どうした？』

『いえ、ただ………さっきまであんなに喧嘩腰だったのに、今では
お互いに謝り合ってるって状況が何だか可笑しくて』

確かに。冷静に大局を見るとこれほど莫迦げた茶番は無い。

些細で子供じみた口論は、お互いの知らない内に正当性の譲り合いという真逆のものとなっているのだから。

そんな姿を客観的に想像して、私も思わず笑ってしまう。

『くっ——。確かにこれは滑稽だな』

『これじゃどっちが莫迦なんだか』

『両方、だろ』

お互いの笑いが細やかに木霊する。

ひっきりなしに変わる図書館の雰囲気の仕事さにも、ようやく終わりが訪れた。ただ残ったのは、優しい笑顔だけだった。

『それじゃあ、いつでも来なさい。とは言っても、擬似借金抱えたまま逃げたりでもすれば、お嬢様が冥府の先まで追いかけてくるでしょうけれど』

朝日が完全に立ち昇った快晴の空の下、私は咲夜と美鈴の見送りを受けている。

あの後、私はパチュリーを休ませるべく彼女の部屋へと抱えて移動しようとしたが全力で拒否され、逆に私に次の仕事を探すべく後押しされた。少し負い目はあるものの、彼女のことを思えば素直に従

つておくのが良いと判断した。彼女自身、詠唱の為に喉を傷つけるような真似は、魔法を使うことを主としているのならないだろうし。

そして咲夜に一言掛けると、見送りにまで来てくれた。その際に外にいた美鈴も含めこうしている。

『……………なんだか喋り方が違う気がするのだが』

『あれはお客様用の。今の貴方は客人ではなくて一緒に働く者同士なんだから、あんな喋り方じゃ肩が凝るでしょ』

『まあ、そうだろうが』

仕事とプライベートをきつちりと分けているという点では、彼女はいいメイドだと思う。失礼かもしれないが、仕事ぶりを見ていた訳ではないからそれ以外は答えるには早いだろうけど。

『シロウさん、体調には気を付けてくださいね。そろそろ秋の兆しが見えてきましたからね。だから外に居るのは辛いです……………』

『それが貴方の仕事なんだから我慢しなさい』

弱気な美鈴を叱咤する咲夜。この二人は仲が良いのか悪いのか良く分からない。

『やはりレミリア達は寝ているのか？』

『ええ、お嬢様は昨日珍しく朝起きていたから暫くは起きないでしょうね。妹様は、寝不足な姿を見られるのは嫌なのか自分から会うのを躊躇ってたわ』

気まぐれに朝活動する吸血鬼か。そんな常識外れな奴はいくらでもいるものだな。

フランのことだから引き摺ってでも付いて来ると思っていたが、そこまでではなかったようだ。

『まあでも、そんな気まぐれは暫く続くんじゃないかしら。何せいつ貴方が来るか楽しみにしてらっしゃったから』

『は——どうやら玩具として見られてるようだな私は』

『理解してるならいいわ。精々お嬢様を楽しませてくれると助かるわ』

『これはこれは、随分と難題を押し付けられてしまったかな』

彼女達と会うのも暫く先か。人数が多い分ドタバタが多かった分、何だか寂しさもそれ相応だ。とは言っても、いずれまた訪れるのだ。不都合もなければ後ろ襟を掴まれることもない。

『それじゃあ、また会いましょう』

『お元気でー！』

二人の挨拶に見送られ、その場を後にする。

真紅の館から真紅の青年が立ち去るその姿は、単純な構成にも関わらず、どこか神秘的な要素を含んでいた。

次に目指すのは白玉楼。新たな友となった青年の言葉を信じて、まだ見ぬ剣を拝むべく遙か遠くを見据えた。

異端な者達の騒がしくも暖かい朝（後書き）

久しぶりのおまけタイム

遙か遠巻きでは、我が紅魔館に随分と昔から住み着いているパチュリー・ノーレッジと、新たにここで働くことになり、戦闘も出来るという執事エミヤシロウがなにやら熱心に会話をしている。内容までは聞こえないが、近づきすぎると下手をすればバレる。

私一人ではそんなことはないのだが、何せ――、

『お嬢様………こんな品性の疑われるような事をしてていいんですか？』

『むー、私もお父様と遊びたいのに………』

『パチュリー様、何だか楽しそう』

『いつの間にあんなに仲良くなったんだろう………』

上から咲夜、フラン、こあ、リトルと、まるでトーマスボールみたいに頭を段々と乗せた状態で覗き込んでいる。腹立たしいことに私は一番下だ。お陰で見辛いつたらありやしない。

『うつさいわねえ……。五月蠅くするだけなら帰りなさいよ。』

私はこんな面白そうな状況を見逃すつて方が品性を問うわね』

『流石お姉さま、外道の道まっしぐらだね』

『しばくわよ』

普段なら喧嘩上等だが、今騒ぐのはよろしくない。ここは大人の対応で口上だけに留めておく。

『あ、なんか騒ぎ出した』

『ほんとですわね。この角度じゃあよくわかりませんけれど……取り敢えず彼がのた打ち回っているのは面白いですわね』

意識をフランに向けていた為決定的瞬間は見逃したが、どうせパチユリーがシロウに不意打ちでも仕掛けたのだろう。魔理沙を倒す程の実力はあるのだから、余程油断が無い限りそんなヘマはしないと
は思うが。

それ程に、シロウはパチユリーに対して心を許しているのか。或いはパチユリーがシロウに敵意無く接しているからか。
何にせよ、家主としては関係に障害は無いのは上等だ。

『それにしても、フランの次はパチユリーか』

あの男は、無意識的にせよ意識的にせよ物凄い速さでここに住む者達を懐柔している。これは、私の能力を以ってしても読めなかった運命だ。

運命の輪から外れた行動を取る男、エミヤシロウ——ますます面白みが出てきたわね。

『今度は大人しくなった……。パチユリーが咳き込んでからかな』

『パチユリー様の喉をを早く休ませないとせつかくの美しい声が台無しになってしまいますよー！』

ああ、五月蠅い。

言葉にしてやりたいが墓穴を掘る真似だけはしたくない。それこそ恥晒しだ。

唇を噛み締めて怒りを抑制する。うん、私は大人だ。

『二人とも、凄く楽しそう……。いいなあ』

『私もあんな風に男性と喋ればいいんだけどなあ』

『大丈夫、貴女なら出来るわ』

『お嬢様、そろそろご就寝なさらないとお身体に障りますわ』

—— あ、やばいもうだめだ。

私の怒りが天界まで昇らんとした瞬間、私は目にした。

『やばっ—— 逃げるわよ』

沸騰した頭が一瞬で冷静になるのが理解する。遠巻きにいた筈の二人が遅めに、だが着実に此方へと詰め寄ってくる。

会話が聞こえた訳ではなさそうだから、これもまた偶然だ。冷静だと思っていた自身だが、そういうえば運命を探るのを忘れていた。面白さを優先した結果がこれだよ！

運命操作をするにも、これでは予定調和にまで持っていけない可能性がある。自分の力の限界を知っている以上、悪足掻きにしかなら

ない。

私達はあたふたとしながらも、迅速に図書館から脱出した。

桜を守護する剣士と世界を守護した騎士（前書き）

友達に小説を書いてるのがバレ、なんか春を題材にした東方の短編を書かされる羽目になりました。

サークルのようなもので発行され次第このサイトにも投稿しようと考えています。

桜を守護する剣士と世界を守護した騎士

『ここが………白玉楼なのだろうか』

空の白みも消えぬ頃、天を穿つ程の石造りの階段が地平線を作り上げた神秘的な、そんな光景を石段の始まりで眺めている。

周囲はまるでこの場を隠さんとする様に霧に覆われており、元より寒かった空気がここに来るが否や更に冷え込んでくる。まるで生き物の存在を拒むかの様に。

それでもその霧を否定するように石段は自己主張をしており、まるでその意味を成している様には感じない。それとも、これにも意味があるのか。

一段、足を踏み出す。

硬く無機質な一段は、ここを表しているのでは沸々とさせる。

——ここには、人の気配が感じられない。その代わり、私………というよりも、サーヴァントに似た気配は大量に渦巻いている。

英霊と比べるまでもない——それこそただの魂だけが無法に漂っているだけに思えば、逆にそれとは明らかに異なった力を二つ感じ取れる。

ひとつは、まるで虚無を思わせる程に静かな、その癖最も力を内包している——荒れ狂う嵐を身体の中に封印しいつでも開放できる、そんな喻えが思い浮かぶ。

もうひとつは対照的に、まるで抜き身の刃を思わせる。鞘のない刃が、獲物という名の鞘を求めるかのように殺気をちらつかせている。そしてその殺気は今、門を潜り抜けた私へと向けられている。更に言わせれば、それは物凄い速さで接近してきている。とても人間に

は不可能な速度でだ。

私は干将・莫耶を投影し臨戦態勢を取る。

誰であろうと、敵意を向けてくるならば相応の対応を取るだけ。

遙か上を睨みつけると、一点が星の煌めいた。私はそれを無意識に何かを感じ取り、その場から力強く後ろへ跳んだ。

刹那、足元に光刃が通過した。

何の躊躇いもない必殺の一撃。洗練されたそれは、石段を容易く破壊した。

魔力は一切感じられない、まさに気合の様な一撃。力技だけで先程の一撃を造り上げたというのか。

身体が反応した。無意識に殺気を感じた私の身体は、目の前の双刀を空中で受け止めている体勢を取っていた。

そんなものよりも私の意識が向いたのは——目の前の刀の持ち主が、年端もいかない少女だったということだった。

肌は死人の様に白く、綺麗に切り揃えられた白髪のおかつぱに、黒のヘアバンドとリボンを装飾しているという至ってシンプルな飾りつけ、上下揃った深緑のブラウスとスカート、襟元にまた黒のリボンとこの位の年の少女が着る服としてはまるで例に入らない地味なチョイス。にも関わらず何故かそれが不恰好にはなっておらず、違和感なく着こなされている。

『貴様、何者だ！名を名乗れ！』

その幼い肢体とは正反対に、私を捉える目付きはまるで鷹。獲物を定めた鷹の眼光を放っている。
子供とは思えない力で刀を押し付け、空中で押し込もうとしてくる。しかし大人の男、ましてやサーヴァントである存在に力で敵う筈も

なく、それに対抗して押し出すと、彼女も不利を察知したか鏢迫りを止め、お互い地面へと着地する。

『いきなり切り掛かって来ておいてその言い草はどうかと思うがな。しかも君の一撃——完全に私を殺す気で放ったものだろう？そんな相手に教える程お人好しではないよ』

『何を偉そうに……。どうせ貴様も幽々子様を付け狙う下郎だろう、そんな相手に容赦などするものか』

……幽々子？付け狙う？まるで予想もつかなかった言葉に多少戸惑いを覚えるも、剣を握り直し少女の姿を見据える。

『何を勘違いしてるかは知らないが、私は幽々子などという人物も知らなければ付け狙う相手もない。ここに無断で入ったのが気に食わないのなら謝る。だから——』

『黙れ、私は騙されないぞ。油断させておいて隙を突く気であろう、そこまで未熟ではない！』

宥めるつもりだったが、逆に怒らせる形になってしまった。というか、最初から頭に血が昇っていて私の声など話半分なのだろう。

『その首、貰うぞ！』

瞬間、少女が爆ぜた。

サーヴァントに引けを取らない疾走で一瞬で目の前にまで来ると、右手の長刀で切り掛かる。それを私は受け流し同じように切り返すも、左手の短刀でいなされる。

お互いに双つの獲物を持つ以上、こうなることは予想していた。片

方で切り掛ければ片方で防がれ、もう片方でやろうとも同じ末路を辿る。

必然的に、今の獲物は防御にしか使えない。極端な実力差があれば隙もあるだろうが、彼女の出す隙は私の隙でもある。

同じ種類の鋼ぶきを用いる以上、お互いに弱点は看破されているに等しい。

剣戟が幾度となく響き渡る。重なり合う鉄同士が擦れ合う度に火花が散り、鬨の空間が造り上げられる。

少女は的確にダメージを与えるべく、僅かな隙を狙って横薙ぎを放つ。反撃を誘う為の隙とはいえ、油断すればやられるのは此方だ。

それほどまでに彼女の動きは常人には真似できない所にまで至っているということだ。

的確に隙を見分け一瞬で判断する戦闘用に塗り替えられた思考回路、それに見合った剣術。彼女は間違いなく強くなる。

このまま膠着状態でいるのは神経を磨り減らすだけ。それではいざという時に油断を生む。

相手の出方が分からない以上、長期戦は不利。

——ならばここ以外を使えばいい。

私は力押しで威力を相殺させ、直後容赦の無い蹴りを放つ。荒々しい、槍の様な中段蹴り。身長之差で蹴りは顔面への直撃を覚悟したが、少女はよるめいた身体でそれを刀の鐔で防ぐ。

しかし力の差に耐えられなかった身体は宙を舞い、石段に背中を直撃させる。

『がつ、は——！』

少女は苦悶の声を上げるも、目は決して死んではない。こんな年

頃の少女がするはずもない痛みを堪え、私という名の敵を排除しようとしている。

『——やめたまえ。君の力じゃ私を圧倒することは出来ん。君の剣技が、じゃない。純粋な体格の違いだ』

『五月、蠅い……。それがどうしたというんだ。
力で敵わないなら、これでどうだ！』

少女は懷から一枚の符を取り出すと、それを空へと放り投げた。
すると、石段に埋もれていた少女が突然視界から消え失せる。

そして、二方向からの殺気が私の身体を貫く。ひとつは上空、ひとつは背後。

このままでは防ぎ切れない、そう勘が告げている。
咄嗟に私は干将・莫耶を背後へと投げ付け、意識を上空だけに集中させる。

空中には、先程の長刀を両手で構え、光を纏った刀を重力と共に振り下ろさんとしていた少女がいる。その姿は、まるで騎士王の宝具を連想させるものだった。

そんな一撃に右手を突き出し、一言、告げる。

『——I am the bone of my sword .
』

瞬間、手の平から巨大な花卉が盾となり現れる。赤く光るそれは、まさに幻想と言わんばかりに辺りをその色で侵食していく。

『なっ——』

表情は見えないが、間違いなく少女は驚きを隠せないでいるだろう。何せ彼女からすれば何もない所から巨大な何かが現れた風にしか見えないのだから。

しかし、詠唱破棄の熾天覆う七つの円環であれに堪え得るかは全く別の問題だ。

対投擲には絶対の防御力を誇る盾ではあるが、あの謎の力に対してどれだけ効力を発揮するか…………。

轟音と共に光が爆発した。眩しさに目を細めるも、敵の姿だけは決して逃さない。

衝撃が花卉を通り越して骨身に響く。が、ランサーの一撃に比べれば軽い。

後ろにある殺気も霧散しているのを感じる。原理は知らないが、衝撃に体勢を保っていられたのだらう。

一枚二枚、と花卉が剥がれる。それに比例して、私の身体もまた傷を負っていく。

即席であるにも関わらず一撃で二枚……………ということは、あれは投擲の部類に入る一撃なのか、或いは見掛け倒しでしかないのか。

三枚目が散る。簡易的なつくりのお陰か傷に関してはそれほどものではない。

しかし……………明らかにあれは剣から放った一撃であり、それ以外には到底思えない。

それに、少女の実力は本物だ。多少荒削りで直情的ではあったものの、洗練された動きは努力を怠らなかつた証。

四枚目、剣からの衝撃が減退するのが分かる。外套の中はそれなりの傷が出来てしまっているに違いない。

彼女は、私と違って才能がある。自分と異なるというものは、得て

して見分けやすいもの。
自分には決してない華が、彼女にはある。

五枚目、最早先程までの威力は消えうせている。
消えた花弁の先には脂汗を出し、苦しそうな表情をした少女だけが
あった。

『はっ、あ——っ』

息も絶え絶えに私を睨みつける。先程までの鋭い眼光は、今では弱々しく光が失われつつある。
衝撃に耐えた花弁を蹴りつけ距離を取るも、着地で苦悶するようでは最早勝負にならない。

『負けられ、ない……絶対——！！』

しかし彼女は諦めなかった。
実力差を承知で、死ぬことを厭わず、障害である私を倒すことだけに全力を注いでいる。

——思い出す、自身の人生を間違いと決めつけ、王の選定をやり直す、ただそれだけの為に世界に死後を捧げ、負わなくても良い傷を背負い戦った騎士王の姿を。

そんな莫迦げた目的の為に、信じてくれた家臣のことと考えずただ自己嫌悪に支配された可哀想な少女を。

目の前の少女の目付きは、そんな彼女の戦いに赴くときのものそのままだ。

そんな目を子供がしていると考えただけで、腹が立ってきた。

『いやあああああつ——！！』

全力の叫び声と共に疾走。長刀を両手で握り締め、袈裟切りの一閃を放った。

今までの中で一番弱々しく、型もなにもない力強い一撃。

避けるのは容易い。避ければ力任せに振った一撃の反動に負け、地に伏すだけ。

私はそんな無駄に等しい一撃を、何も言わず受け入れた。

『え———？』

鉄の削る耳障りな音と、肉の削げる厭な音がした。

今この状況を理解できず間抜けな声を上げる少女。やはりこの一撃は当たるとは思っていなかったのだらう。

鮮血が胸から迸り、その痕が少女の顔を彩る。

そんな少女を尻目に私は長刀の刃を掴み、手元から引き抜いた。

呆然としていた少女は、最早添えているだけの刀をするりと捧げた。

『満足———か？』

少女は答えない。いや、答えられない。

それもそうだ、彼女は私を斬ることだけに死力を尽くしていたのだから。

そこには満足というものは存在しない。あるのは結果だけ。

彼女は目的の為に私を切りつけたのであって、それ以外にはなににもないのだ。

そんな相手に満足を問うても、沈黙しか返らないのは当然のこと。

それでも、聞いておきたかった。彼女がただの辻斬りのような道を歩まないようにする為にも、これだけは彼女自身から聞きたかった。

『そうであるならば、私の話を聞いて欲しい』

『は、え——』

放心状態のまま立ち尽くしている少女だったが、突如前のめりに倒れだす。

少女の刀を離し、肩を支える。胸元では寝息を立てている相応の姿が残っていた。

『——気が抜けたのか』

血に濡れた頬を軽く拭い私は彼女を背負った後、落ちた刀を拾い上げ鞘に納める。

改めて持つことで理解する。この刀は、まるで重量感を感じない。

固化した空気を持っている感じた。

筋肉もまるでついていない華奢な身体で人を殺める道具を振り回すという規格外さに驚いていたが、これで納得した。

一段踏み出すごとに全体の傷が広がるのが分かる。

出血では死に至ることはないが、苦痛は何も変わらない。

唇を噛み締め、出来るだけ早く到達するよう勤める。背中への存在は重荷にはならないが、この階段が何よりも強敵だ。

どんなに歩こうとも地平線は変わることなく存在している。他人の侵入を拒否している姿勢が嫌という程に伝わる。

『これは軽率な行動だったかな』

思わず自嘲するも、そう言う表情は後悔も何もない潔白そのもの。

この苦勞が、私には似合っている。

誰もが通らない道だからこそ、最善の可能性だってある。私はそれ

を模索しながら、愚直に信じた道を進むのがお似合いだ。
それが喻え、死に至る結果だとしても。

地平線を眺めているのにも見飽きた頃、もうひとつの門が鷹の目で視認できた。

目的地が見えると逆に安堵して力が抜ける人もいるだろうが、私の場合そうも言つてられない。

気絶した少女を早く安静になれる場所へ移動させなければいけない。
自ら手がけた結果であれば、尚更だ。

私は齒を食い縛り、強化した足で渾身の跳躍をした。

傷口の開くスピードが何倍にも増すがお構いなした。多少揺れてしまつが、我慢してもらうしかない。

出来るだけ彼女への衝撃を緩和しようとする痛みが増す。痛みに関しては妥協したくても身体というものは正直で、身体は常に悲鳴を上げている。

ゆっくり行くとしても傷口の侵食が止まる訳もなく、挟まれるような痛みが延々と続くだけ。

安全に行くか早めに行くか、どっちを取ったところで何も変わらないのなら急いだほうが何倍もいい。

急いでみれば何のこともなく辿りつけてしまった。

目の前には、まるで衛宮士郎が住んでいた家ぐらいの大きさと広さを兼ね揃えた屋敷が威風堂々と存在していた。

今まで変わらない視界ばかりだったただけあつてこの光景には新鮮さを感じさせると同時に懐かしさを引き起こした。

縁側があると思わしき方向へ足を運ぶ。

砂利を踏む感覚は、まるで平安時代の土地を歩いているかを彷彿とさせる。

広い庭を進み縁側が見えた先、そこには着物を纏った女性が腰を降ろしていた。

桜色の肩ほどもである柔らかな髪が風が靡き、本人はそれを気持ちよさそうに受け入れている。たったそれだけの行動なのに、まるで生きた美術品を思わせるその姿は、まさに大和撫子。

そして、彼女がこの屋敷の中で最も力のある存在だということが放たれる気から察知できた。

『あら、お客様？』

此方を振り返った女性はとても柔らかに微笑んで迎え入れてくれた。童顔であるにも関わらず身体全体はとも女性的に豊満なつくりをしており、そのアンバランスさが彼女の魅力でもあるのかもしれない。

何故だか額烏帽子を被っており、薄い青で彩られた着物は彼女の肌に張り付くように彼女のボディラインを強調させている。

そして一番気になったのは……彼女の周囲には形容しがたい小さな白い物体が泳いでいる事実についてだ。

生き物かと思えば、まるで生物としての命の鼓動、とでもいうべきかそういったものが一切感じられない。しかしここにいるのは間違いない機械でもなんでもない存在。その矛盾した事実には内心頭を悩ませる。

『あらあ、妖夢を連れて来てくれたの？有難う』

私の傷を意に介さず、おっとりとした口調を崩さない。

普通女性は傷等を見れば悲鳴のひとつは上げると思っのだが、どうにも拍子抜けが続く。

『感謝されることはしていない。寧ろ傷つけたのは私なんだ、疎まれこそすれ感謝することはないんだ』

『いいえ、貴女はそんな傷を負わされた相手をこうやってここまで運んでくれた。それだけで疎ましく思う理由なんか無いわ』

怒気の一切ない暖かい笑みがなんだかくすぐったくてしょうがない。普通はそんな理由では許されないと思うのだが。

『それに、ね——』

斜めに斬りつけられた胸元の傷を人差し指でゆっくりとなぞり出す。少女を背負っているせいでその行動に抵抗が出来ない。

痛くはないが、何だか居心地が悪い。それは、彼女の拳動のひとつひとつが妖艶さを醸し出しているせいだ。

私は決して男好きな部類の人間ではない。だから女性がこういった行動をすれば反応に困ってしまうのは当たり前だ。

『この傷……わざと斬られたものでしょう？妖夢を倒せる程の殿方が、こんな堂々とした怪我をする筈なもの』

まるで全て見られていたかのように正確な事実を口に出していた。見透かされた感覚がとても不思議で、決して厭な感じもしないということも何だか恐ろしさを感じさせる。

『どうだかな、油断していたせいかも知れんぞ？』

『強がっちゃって。可愛いわね』

——っ、かわっ、いい………？

大の男に向かって可愛い……こんなこと言われたのはこの姿にな
ってから初めてだ。

『それよりも、妖夢を返してくれないかしら』

身体の内側の疼きに近いもどかしさに頬がひくつく私を尻目に、変
わらないペースで話を突如変更する。

背中にいる少女は妖夢というのか、憶えやすい名前だ。

『いや、私が責任を持って運ぼう。この少女が軽いとはいえ女性に
は少し堪えるだろう。』

なにより、ここで手渡すのは責任放棄というものではないか？』

『女の子の部屋に殿方が入るものではないわよ』

そう言われてしまうと、此方も引き下がるしかない。

妖夢という少女を桜髪の女性にゆっくりと手渡す。辛そうには見え
ないが、それでも心配にはなる。

『お客様は、ここでゆっくりしていなさい』

『し、しかし——』

『この屋敷の主の許可なんですから、お言葉に甘えるのが礼儀とい
うものよ？』

まるで子供を優しく諭す母親みたいなことを言われ、逆に申し訳な
さで萎縮してしまう。

なんだろう、この人には勝てない気がする。戦いとかそういった面
ではなく、もっとこう、生活面で。

『それに、貴方の怪我也治療しないと身体に悪いし』

『怪我に関してなら自分で処置出来る。だから君は彼女を休ませてやってくれ』

『そう……。じゃあ私は行くわね』

そのまま女性は襖の奥へと消え去っていった。

私は改めて自分の傷を確認する。

単純な袈裟斬りの傷であるが、疲労と少女の腕力で繰り出されたものであった為か出血量に反比例した傷の浅さで留まっている。それでも鎧だけは貫通しているのだから見上げたものだが。

他にも、刀の刃を直に掴み出来た掌の傷。この手の傷は慣れているから対して気にはならないが、少女を抱える際その部位を血で汚してしまったのが悔やまれる。

喻え出血が夥しくとも、エーテルで構成されたサーヴァントには全く関係ない。魔力が原動力である英霊は、人間よりも遥かに生命力が強い。だから世界にとって都合がいいのだ。

……いけない。このことを考えるとどうにも後ろ向きになる傾向があるから自重しなければ。

包帯を投影し、壊れた鎧を乱暴に脱ぎ捨てる。

一応見栄えだけでも治療したことにしておかないと、後で何を言われるか分かったものではない。

普通包帯をひとりでに巻くのは技術がいるが、慣れとは恐ろしいもので今では下手な医者なんかよりも手早く正確に出来る自身がある。

やることをやってしまった後は暇を持て余す。下手に庭の散歩をす

るのも気が引ける。

取り敢えず私は縁側に腰を降ろし、一息吐くことにした。

『ん…………あれ？幽々子様、どうして……………』

ぼんやりとした意識のなか、目の前には私が敬愛し、従属する白玉楼の主である西行寺幽々様優しい笑みで覗き込んでいるのを確認できた。

『やっと起きたわね妖夢。心配したわよ？』

まるで心配してる風には思えない声色と素振りだが、これがいつもの幽々子様であり、それが崩れることは殆どない。

『……………っ！そうだ、あの男！』

先程剣を交えた男のことを思い出し立ち上がろうとするも、吹き飛ばされた時に頸椎と背骨を傷めたらしく、まるで自分の身体ではないみたいに動きが拳動不審になる。

千鳥足な私を幽々様が支えてくれた。

そしてそのまま私の腕を引っ張り、蒲団の上へと戻される。

『えつとね、貴方が言ってる男ってのは白髪のオールバックの方がしらっ。』

『え、どうしてそれを……………』

『だって、怪我した貴方をここまで運んでくれたのはその方だもの』

『——はあ！？』

思考が上手く回らない。

敵である筈の男が私を運んでくれたってことはつまり……………白玉楼に入られたってことじゃないか？

『駄目よ動いちゃ。人の話は最後まで聞く』

『し、しかし——！』

『だゝめったら』

力の差は無い筈だが、まるで力の入らないこの身体では子供の力にすら抗うのは難しい。

案の定私の身体は幽々子様が掴んだままの腕を振りほどく力もなければ、反動に耐える術もない。

必然的に、私の身体は幽々子様の胸元へとダイブしていった。

『ゆっ、幽々子様——！！』

暴れもがくも、頭を押さえられてしまい身動きが取れない。

女性的に熟れた身体が私を窒息させようとする。私には無いその身体に殺されてしまえば、まさに羨ま死になってしまう。

『こうすれば妖夢も逃げないでお話できるわね』

『きつ、聞きます！聞きますからやめてくださーい！』

抱きしめるだけに留まらず私の頭を撫で始めた頃、羞恥も一杯で最早折れるしかない状況まで追い詰められてしまった。

意図的なものではなく、天然でやってるものだから怒ったところで効果はないのが辛いところ。

パツ、と意外と簡単に放してくれたお陰で無駄に体力を使わなくて済んだ。というか、暴れたことで身体が物凄い痛い……………。

『それでね、その男の人のことなんだけど……………昨日、紫が遊びにきたことは憶えてるかしら』

『え、あ、はい。珍しく玄関から入ってきたことが珍しくてよく憶えています』

いや、昨日のことなんだから忘れていたら結構ヤバイ。かなりショックを受けること間違いなし。

『その時にね、その殿方が来るかもしれないよって話してたの』

『——はい？』

何故そうなったのかが思いつかない。

あの男は紫様の知り合いだったのだろうか。

でもそれで幽々子様が知らなかったというのも変な話だろう。殿方という表現を使っている以上、名前も知らない関係なのは明白だ。

『な、なんですか……………？』

『えっとね、確か妖夢の剣の指導をしてくれるって言ってたわよ』

ぴし、と自分がまるで石になった様な錯覚を覚えた。
そして直ぐに、わなわなと何かが込み上がって来る感覚で一杯になった。

『な、なんでそんなことを勝手に決めるんですか当事者抜きで！！』

『だってそうしないと妖夢絶対断るんだもの』

『当たり前です！だいたい何故私が見ず知らずの人間に剣術を指南して貰わなくてはいけないんですか！』

そうだ、私の師は魂魄妖忌——私の祖父ただひとり。
行方不明になったとはいえ、その事実が覆ることはない。

『妖夢、貴女は勘違いをしてるわ。彼は剣術を指南するわけではないわ』

『え、ではどういう——』

『彼は剣を使った戦い方を指南するらしいわよ。紫曰く、彼は戦い方しか教えないって言ってたわ』

『は、はあ……………』

冷静に考えれば、師匠に師事していなければ同じ戦い方はできないし、何より自分の目である男の剣は見た。

確かにあいつは強かったかもしれない。でも、同じ剣を使うものとしてはあいつの戦い方は納得できなかった。

『で、ですけど私は……………』

『妖夢、よく聞いて。私は妖忌が失踪してから貴女が剣の修行を怠ることなく励んでいたのを見ていたわ。』

だからこそ思ったの。貴女にはまだ師事してくれる人が必要なのが分かったの。』

まだ若い貴女だから、独りで妖忌の影に囚われることなく、もっと広い目で見つめて欲しいのよ。剣にしる、世界にしる——ね』

突如真面目な顔をして語りだした幽々子様。

普段の温和な表情とは打って変わった凜としたそれを、私はほんの僅かにだがお目に掛かったことがある。』

その時に話す内容は、私には理解できないものばかりで幽々様の小莫迦にされるばかりであった。』

今回に関しては理解は出来たが……………意図が読めないのは相変わらずだ。』

何故そんなことを唐突に言い出すのか。紫様が絡んでいるということとも気になる。』

今回もまた二人してなにか企んでいるのではと疑念を抱かずにはいられない。』

『——はあ。分かりました、少しだけの期間なら妥協してあげますよ』

それでも許可してしてしまうのは、私が甘いのか幽々様の人柄故か。』

でもいつもそうだったから慣れてしまった。彼女の我が儘も、最後の最後で受け入れてしまうのは、どこことなく憎めないせいもあるのかもしれない。』

『そうと決まれば、まずは傷を癒す為もう一度眠りなさい』

『え、でもその男は——』

『そんなの気にしないでいいのよ。貴女はまずは英気を養うことを第一に考えなさい』

『でも……』

『それに、彼に与えた傷。忘れてるわけではないでしょう？』

『あ——』

すっかり忘れていた。

そういえばあの時、あの男は当たるはずも無い悪足掻きの一刀を無抵抗で受け入れていた。

あの時の意図の読めない行動。敵を前にして剣を収め、甘んじて斬られた後に発した言葉が満足かという問い。

やる事成す事の真意が全く読めない。紫様も、幽々子様も、あの男も。

だから、知りたくなった。

彼に教えを請い、時間を費やしていくことでもしかしたら何かが掴めるかもしれない。

これは、未熟な私に課せられた試練なのだ。そう解釈すれば、硬く考えることもない。

『——分かりました』

私は幽々子様の指示通り再び蒲団へと潜る。

覗き込む表情は最初のときと同様の優しさを内包しており、なんだか安心感を引き寄せられる。

『でも勘違いしないで下さいね。あの男が信用に値するか、見極めるのも兼ねていますから』

『そりゃあ私だって完全に信用してる訳じゃないけど、紫のお墨付きなんだからもう少し柔らかく行きましょう?』

……確かに紫様は殆どが謎に包まれて掴みどころの無い人だが、決して悪い人ではない。

そりゃあ、幽々子様と合わさって悪戯なんてことは日常茶飯事的なものではありませんが、今回はそんな悪戯にしては手が込みすぎている。

安心、とまではいかないが警戒を緩めるくらいならいいかもしれない。

『まあ、今は眠りなさい。積もる話はその後、ね』

髪を撫でられ、気持ちよさに瞼が重くなる。

主に対して無礼な感情なのだろうけれど、こうして目を閉じていると、まるで母親に見守られているような気分になる。

そんな彼女だからこそ、守りたいと思えるのかもしれない。

意識を落ち着け身体の力を完全に抜くと、あっという間に眠気が襲ってきた。

意識の堕ちる最後まで、頭部に集中した優しい感覚を忘れることはなかった。

桜を守護する剣士と世界を守護した騎士（後書き）

今回は二人の紹介ですね。西行寺幽々子と魂魄妖夢の紹介です。

西行寺幽々子さいぎょうじゆうけいこ

種族：亡霊

能力：死を操る程度の能力

生前：死霊を操る程度の能力

死後：人を死に誘う程度の能力

二つ名：幽冥楼閣の亡霊少女

冥界に住む西行寺家のお嬢様。

生前にはとてもシリアスな出来事があつて儚い末路を辿ったが、亡霊となつてからは性格は陽気になり、生前の記憶は完全に失っている。

結構能力を使うことを楽しんだりするらしいが、今小説では恐らく出番なし。危ないもん。

死体の埋まっている場所と熟成具合が分かるらしい。

妖夢のことを頼りないと思っているからか、守られている側なのに手を掛けている部分が多い。

二次創作では、ルーミアのときも語ったが大食いキャラ化している。これは恐らく、原作で妖怪を食べる発言等をしたことによる弊害かと。

あと、私は東方キャラの中で一番オパイが大きいのは彼女だと思ってる。多分そう思ってる人は少なくない筈。

魂魄妖夢こんぱくようむ

種族：半人半霊

能力：剣術を扱う程度の能力

二つ名：半人半霊の庭師

西行寺家に仕える人間と幽霊のハーフ。

特徴として周囲には自分の半身でもある人魂が漂っている。

人間よりも寿命は長く、1000年は生きれるらしい。

彼女の仕事は白玉楼の庭師と幽々子の剣術指南なのだが………どうにもそんなことをしてる描写はない（未熟な人に教えられたくないとかで逃げてる？

魂魄妖忌という叔父であり剣術の師匠がいるが、いつの間にか行方不明になっておりそのせいで妖夢は成長を足踏みしている。

二次創作では、性格が一貫しない多感キャラとして色んな妖夢が生まれています。

今小説での彼女は、セイバーみたいな性格です。セイバーみたいな～と言われても分からない人もいるかもしれないが、ぶっちゃけて言えば糞真面目で融通の利かない頑固者。起こったら剣で制裁とかするかも。

みょん、という言葉がある。

これは公式でも存在しており、妙とひょん、を合体させた言葉であるらしい。

妖夢が何度もそういった発言をしているせいで、転じて妖夢のことを指す語となった。

なんとも広い言い回しと感嘆符で用いられたり、地味に有効活用できたりする。

亡霊少女は騎士を見つめ何を思つか（前書き）

この小説で最も時間がかかりました。

理由はみつっ。

ひとつ、現実で少しだけ時間が取れない状況が多くなりました。もう少しすれば解消しますが。

ふたつ、前に言ってた友達のための小説作成に花が咲いた。でもまだ作り終わってない。

みつっ、戦場のヴァルキュリア2おもしれえ
w w w w w w w

……投稿が遅くなったのは明らかに私の責任だ。

だが私は謝らない（キリッ

うそですごめんなさいごめんなさいごめんなさいゆるしてもっとぶってゆるしてごめんなさい

亡霊少女は騎士を見つめ何を思うか

この館の主であろう女性が妖夢という少女を連れて奥へと消えてから四半刻程だろうか。私は縁側に大人しく座って二人が戻るのを待っている。

剣の鍛錬でも行おうかとも考えたが、地面が砂利である以上少し激しく動くだけで荒れてしまう。それは、まるで天然記念物のようなこの風景を崩してしまう愚行に他ならない。

それに、部外者が主の見ないところで好き勝手しているのも気が引ける。というか失礼だ。

僅かな時間ではあったものの、傷の回復には十分なものだった。

傷が浅かったのもあるが、傷跡に雑さが無かったのが大きい。下手な傷跡というのは得てして傷口が広がりやすいもの。逆に上手い傷は傷も塞がり易いし、痕も目立たないものとなる。

骨だって折り方次第では以前よりも丈夫になるのと一緒に。何事にも上手い下手があり、反する者同士の出来栄えを比較すれば一目瞭然。

そう、それは私と妖夢の剣の腕も然りだ。

『お待たせ。傷の具合は如何かしら？』

伽藍の世界へと響く声に心臓が軽く跳ね上がる。振り向くとそこには、この屋敷の主であろう女性が相変わらずの笑顔で佇んでいた。気配が完全に断たれていた。まるで最初から気配なんてものを持ち合わせていないかの様だった。

いや、それ以前の問題がある。と言うのも、ここに身を置いた僅かな時間の間で感じ取ったことなのだが——ここには命が大量に内

包されていると同時に、生命がほぼ存在しない。

最初にも感じたが後ろの彼女然り、ここまで隣接されてもまるで居る感覚が沸いてこない。イノチはそこに在るのに、セイメイは存在しない。

それに、彼女の頭に装着している額烏帽子……疑問には思ったが、そんな訳がないと無意識に自己否定をしていた。その答えを、問いただそうと思う。

『傷なら問題ない。それより——君は一体何者なんだ』

『何者、って。化け物にでも見える？』

開いた扇子で口元を隠すも、目は口程に物を言うとは言ったもので、妖しい目付きは明らかに話をはぐらかそうとする事で此方の反応を愉しもうとしているのが分かって、それがどうにも試されてるようで氣にくわない。

『茶化さないで貰いたい。』

——とは言っても、これは個人の勝手な自己満足に導く質問ではない。もし言いたくないのなら別に詮索も深追いもしない』

『別にいいわよ。』

それに……貴方も理解したうえで聞いてるみたいだし、ね』

『——』

やはり、彼女には全て見透かされている感がある。

そして、それを否定できない程に彼女が得体の知れない存在でもあるということ。

威圧感、にしては雄雄しくもない。殺気でも無ければ存在感でもな

い、表現し難い何か。それを彼女は放っている。

『私は亡霊、そしてここ白玉楼は——冥界へと至る者への憩いの場であり、絶望の場。』

死者が行き着くのは天国と地獄の二択。そこへ至るまでの執行猶予の具現された空間がここよ』

彼女は生きてはいない。本人がそう言ったのだ、間違いは無いだろう。それなのに、こんなにもカタチはしっかりとっていて、まるで生命が在る錯覚を視覚的に感じてしまう。

死者であり生者。生命の素養である、ただひとつの証、魂だけが存在しただけの生き物。

矛盾しているようで、決してそうではない。

だからこそ、得体が知れないと思ってしまうのかもしれない。

『ここは死者の集う場所か。それならば私が居るのは場違いだな』

『あら、そうでもないわよ。貴方だって立派な死者だもの』

『……………どうにも調子が狂うな。』

確かに、私は君に近い存在かもしれない。だが根本は異なる』

——彼女はどこまで私という存在を看破しているのだろう。

確かにサーヴァントだって、死者を魔力という魂で繋ぎ止めているだけに過ぎない。

私も彼女も、抜け殻だ。

生きている、という証拠が提示出来ない中途半端な存在。魂だけの存在と、魂から造られた存在の何に違いがある。

——何度思い耽った事だろう。何故私はここに居られるのだろう

か、と言う自問自答を。

私を繋ぎ止める為の魔力の流れ、パスの対象、それらが相変わらず一切伝わってこない。ここに来てから数回、膨大なまでの魔力を消費したにも関わらず、私はこうして現界していられている。

単独行動ではそれは有り得ない。だから魔力の供給者が居るのは明白なのだが……何故感知できないのか。

悩んでも答えは導けない。それでも、無視は不可能な重要な問題。

——何という歯痒さだろう。

いつ消滅するかもしれないと言う状況に怯え、それでも魔力を温存しないと云う矛盾に肉体は疲労を絶やす事は無い。

せめて、誰が私のマスターとして縛られているのかを理解出来ない、いざと言う時に全力を出せない。

『そんなことは置いといて、貴方はどうしてこんな所に来たのかしら？』

『その事だが……ここでは剣術指南をバイトとして掲示してたよな？』

剣術指南は出来ないが、戦い方ならば少しは指南出来ると思って訪れた。

目的がズレてしまっているがそれで構わないのなら志願したい』

『別にいいわよ。実力なら妖夢を倒したことで証明されてるし、何よりあの子は未熟なのは剣術だけじゃないし、色々教えて貰えるなら大歓迎よ』

『そうか。いきなりの訪問とあの少女を傷付けたことを謝罪し、貴女の広い心に感謝しよう』

私はその場を立ち上がり、一息吐く。

これで第一課題はクリアだ。後は妖夢の回復を待つだけだが……
そこが心残りではある。

加減無く蹴り飛ばし石段に背中を打ち付けたのだ、身体がしばらく
麻痺したっておかしくはない。

『心配しなくてもあの子なら大丈夫よ。』

さつきちよつと起きた際に結構わたたしてたし』

『……さつきから思うのだが、そんなに私はわかりやすい拳動や
表情をしているか？』

この姿になってから、なるべく本心を包み隠し、拳動からもバレな
い様努力をしていたつもりだったが、やはり私は造ること以外は駄
目駄目なのか。

『分かりやすいわ、まるで好きな子にツンケンな態度を取る子供
みたいだね』

……… 喩えがよく分らないが、取り敢えず駄目なのは理解した。

『まあいい。取り敢えず今更だが自己紹介をしておこう。』

私はエミヤシロウ。人間だ。

本来ならばあの少女と共にやるのが望ましかったのだが』

『西行寺幽々子です。この白玉楼の主と、冥界の管理人をやっ
ています』

お互い礼儀正しく一礼し、微笑む。

彼女のそんな一連の動きは、予想していた以上に優雅で、美麗だっ

た。

『今日は挨拶だけになりそうだな。いきなり押しかけて済まなかった』

『あらゝ挨拶だけだなんて勿体無いわ。せめてお話とかはしないのかしら』

踵を返し、この場から立ち去ろうとするも、緩やかな声が私を制止させる。

『貴女がそう言うのなら構いはしないが………それも気が引けるというものだ』

『それはお仕事で来てるから？』

『そうだな』

簡潔に答えると、幽々子は顎に手を乗せ考える素振りを見せると、数秒後には閃いたらしく目を見開かせた。

『なら、ここの庭師を体験してみない？』

『庭師………庭の手入れをして造り上げるあの庭師か』

『それぞれ』

私は軽く溜息を吐き、呆れた風に彼女を見据える。

『失礼なのは承知で言うが………自分の庭を会って間もない男に手

入れさせるといふのはどうかと思うぞ』

『大丈夫よ。私が教えるから』

『そうじゃない。』

普通家内の物を無断で触らせるなんてことはしないぞ。それが重要なものなら尚更だ。

それはこの空間を彩るのに貢献している庭を崩すことに他ならない』

それに……この美しい風景なんかに触れるといふのは普通考えられない。

衛宮邸も似た様な庭を持つてはいたから庭師紛いの事はやったことはある。だが、見様見真似、知識を模倣しただけのそれは稚拙で、この景色と比較するだけでもおこがましいと思える程の差を露呈していた。

そんな自分には到底不可能な領域にあるものを侵すなんて事は可能性ですら拳がらない。

『ん……でもね、この庭を管理、手入れしているのは妖夢なのよ。』

さつきは元気だったけど、もしそれが空元気で、私を心配させまいと張った虚勢だったとしたら……そう思うだけで私、心が痛いわ……』

ワザとらしい身振り手振りで悲しみを表現するその姿は、まさに大根役者。

しかし動きは嘘だらけだが、彼女の言葉は否定出来ないものがある。重症まではいかないだろうけども、生活に軽い支障が出ないとも言いきれない。

少女は恐らく、幽々子の身の周りの世話等を一任してるのではない

かと予想してみる。そうでなければ、彼女達に近い気配を捉えられる筈。

考えすぎかもしれないが、ここまでの筋書きが、彼女の思惑通りの結果だとしたら――

『……………恐ろしい娘だ』

彼女に聞こえない程の小さな声で感想を呟く。

……………この掌で踊らされてる感覚。あかいあくまと呼ばれた少女に近い小悪魔的な素養を彼女は持ち合わせてるのではないか。

凜は私の事を知った上での行動だったが、さて、目の前のピンクのあくまは天然か意図的か。何にせよ質が悪い事に変わりはないが。

『仕方ない、こうなったのも私の責任だしな。断る訳にもいくまい』

そう答えると、幽々子の表情に華が開いた。

『じゃあ、早速やりましょうか』。

こつちに鉄とかの置いてある物置があるからいらっしやい』

揺れる様に浮遊しながら庭を進み、此方へ来ることを促している。

彼女が何を思っこの様な提案をしたのかは分からないが、任された以上は出来るだけこの場景を崩さない努力をすることだけに集中しよう。

築何年と言うべき程の古さの物置小屋へ辿り着くと、幽々子は鍵を開け徐に中を弄り回し始める。

……………私が弄るといふ結論には至らないのは分かっているが、普通こういった作業は主がするものではないのではないか。

本当に二人しか住んでいないというのなら、こんなに広い屋敷で庭師をしている妖夢に同情する。広さこそ違えど、似た形式の屋敷を

構えていた身であつたからこそその仕事量は何となく分かつてしま
う。

それに、セイバー達と出会つたことで仕事量は倍加した負担とイコ
ールと仮定すると……………言葉も出ない。

『はい、どうぞ』

手渡された枝切鋏はなかなかの年季を誇っているにも関わらず、刃
だけはきつちりと砥がれており手入れを怠つた様子は無い。
こういうところが徹底しているところを見れば、妖夢は結構几帳面
な性格なのだろうと予想がつく。

『しかし、まさか剣術指南をしにきたのに初仕事がこれとは……………』

『あら、勿論お金なら増やすわよ』

『いや、別に構わない。これは自営業だと思えばいい。それに、金
を払える技術を求められても困るしな』

『欲がないのね』

『そうか？』

事実、仕事と言つのは相応の活躍が無い相手には同質の金額しか与
えられないか、首を切られるかというシビアなものだ。

今みたいに専門家でもない相手に金を払う行為どころか、庭を弄ら
せるという行為自体どこかズレている。それとも、幻想郷では金の
価値が外よりも薄いのだろうか。

『じゃあ取り敢えず教えるから、行きましよ』

再び雲のように浮遊し通った道に戻る姿を僅かに眺めた後、その背中に引っ張られる様に追いかけた。

闇で包まれた視界を開けば、また闇。蒲団の暖かさと、それに包まれていない顔から感じる冷えた空気。

それで理解する。今は夜で、電気も点いていない自分の部屋で誰にも邪魔されることもなく熟睡していたのだと。

身体の痛みはない。

この身は人と幽の混ざったもの。人間よりも遥かに痛みには抵抗があり、それなりに丈夫でもある。

とはいっても純粋な妖怪よりも丈夫でもないし、幽霊みたいに感覚が存在しない訳ではない。半分というのはいいいことでもあり、悪いと思えたりもする。

贅沢なのは承知しているが、持たざる者の我が儘というのは結構根強いものなのだ。

それは時に嫉妬となることもあり、そんな雑念を振り払うなんてことも常だ。

蒲団を退け、整えることなく襖を開く。

月明かりが太陽みたいに世界を照らし、それを肴に背伸びをする。

私は、太陽よりも月の方が好きだ。

こうやって直視しても、拒まれず美しさを眺めることも出来れば、カタチは常に変わり続け飽きることもない。

静かになったこの瞬間、こうやって外を眺め、この月を眺めている人は一体幾らぐらいいるのだろうか。

生物の性質上、基本夜は寝るものとして定義されている故、これを当たり前のように眺め続けるということは不可能だ。

それとも、見られないからこそ美しいと感じるものなのか。

常に日の下に姿を晒して当たり前として肉体が認識してしまうより、こうやってほんの少し味わえるだけの方がいいのかもしれない。

見納めとばかりに目を閉じ、そのまま廊下へと向きを変え、少しずつ視界を開きながら歩き出す。

そういえば、今は何時なのだろうか。夜だと言うことは明らかだが、明確な時間を証明できるものは身近には存在しない。

いつもなら、幽々子様が空腹を訴えて寝ていようがなんだろうが支度させられるから、それよりも早い時間なのだろうか。

——いや、あの人のお腹は不規則過ぎてそんなの当てにはならない。ブラックホールと比喻しても誰もが納得してしまうクラスのあれは、容量に際限があるのかどうかも怪しい。

『ん——何だろう、あつちが騒がしいけど』

この白玉楼には、私と幽々子様以外に喋れる者は存在しない。

幽霊も住んではいるが、死人に口無しとは言ったものでただの幽霊が喋ることはなく、喧騒の糧になることはまずない。

幽々子様だつて独りでに暴れるような人じゃないし、どういうことなのか。

『ああ………これ、いいわあゝ。貴方がこんなに上手だとは思わなかったわあ』

喧騒の方向へ歩を進めている内に、幽々子様の声が聞こえてくる。

明らかに誰かを対象とした言葉に疑問を感じ、近くの柱に寄りかかるようにして聞き耳を立てる。

自分でも何故そうしたのかは分からない。別に堂々と襖を開けてしまえば何も事無く過ぎる筈なのに。

『それはどうも。しかし、貴女は先程といい今といい、どうしてここまで大胆なんだ』

『――！――』

この声は、先程の男の――
刀を構えようと腰と背にある刀を掴もうとするが、そこにはいつもの愛刀は存在せず、ただ空を掴むだけ。

しまった。自分で置いた記憶が無かったせい、か、装備しているものと脳が勘違いを起こしていたらしい。腰も背中も、寝るには邪魔なものなのに気付かなかったのは不覚。

しかしそれが功を奏し、少しずつだが冷静な思考を取り戻す。

そうだ、あの男は私の剣の指南役を任されたんだった。

そして私は床に着いていたのだからその責務を果たすことは出来ない。そう考えれば彼が居てもおかしいことではない。

でも、それならとつと帰ってしまう可能性だってある。寧ろその方が高い。

もしかして、幽々子様の我が儘に付き合っていたのだろうか。

――そう考えると、申し訳なさが募りあがる。あの人は誰彼構わずズバズバ言うから、結構負担になるであろうに。

『あら、私がここまで殿方相手に大胆になったのは、貴女が初めてよ』

『取り敢えず褒め言葉として受け取ってはおう』

『そうそう、素直でよろしい。』

だから——ね？もつと頂戴？』

なんだか今の言葉が、とても妖艶に聞こえてならない。

一体、二人はなにをしているんだ。いや、なにをしようとしているんだ。

想像できない。いや、想像することを否定している。

この襖を開けて確認すればいい。そうすればその光景を目に焼きつけ、状況を容易く理解できる。

なのに、私の身体は動こうとはせず、思いとは反比例して硬直を解かず聞き耳を立てることに集中している。

『…………致し方ないな』

息をすることへの集中も途切れ、心臓が跳ね上がりそうになる。

辺りは静寂。故に二人の言葉はこんなことをせずとも鮮明。

分かっているのに、どうして——

言葉に出来ない疑問は、ただ空回りを繰り返すのみ。

『あつ…………きたきたあ。』

んつ——これもなかなかねえ』

『——ここまで褒め倒されると、何でもいいのではないかと勘繰ってしまっな』

『そんなこと…………んつ、ないわよ』

…………この会話のノリ、もしかしてもしかして——！

そう結論に至った瞬間私は聞き耳を離し、明らかに顔が紅くなっているであろう自分を力強く押さえ、叱咤する。

襖越して行われているであろう行為を想像し、ブンブンと首を振る。

もしそうだとすれば、止めないといけない。何故って……駄目でしょう？色々と。

拳を強く握り締め、残心のときに行う深呼吸をする。

いつもの呼吸法で頭を空にし、カツ、と目を見開き襖に手を掛けた。

『お二人とも！何をなさってるんですかあ！』

怒号と共に勢い良く開けられた襖の奥に広がっていた光景、それは

『あら妖夢、どうしたのそんな怒鳴っちゃって』
『もう動けるのか？ならば胃に物を入れたほうがいい。丁度、彼女に作っていたところだからついでに作ってやろう。座って待っている』

そこにあった光景は、卓袱台に置かれた大量の料理と、それを嬉しそうに食べる幽々子様、そして——私を打ち負かした男の割烹着姿があった。

『は、あれ……………？』

予想外の光景に、思考がフリーズする。

何故あの会話でこんな光景が広がっているのか。

ということは、私はあんなはしたない勘違いを起こしたというのか。回復した思考回路は反動で慌しく動き出す。そして、オーバーヒートした。

もはや、何も考えられない。

取り敢えず、言われたとおり大人しく座るとしよう。うん、それがいい。

正座する自身の身体が強ばっているのが分かる。

横目で主の姿を覗くと、私の動揺なぞ眼中に無いらしく、嬉しそうに目の前の料理に舌鼓を打っている。

この料理……あの男が作ったものなのだろうか。俄には信じ難い。ただ自炊するだけのレベルなら誰だって出来る。しかし、幽々子様がこつも嬉しそうに食べると言うことはその腕前はかなりのものであることは間違いない。

偏見かもしれないが、一応女である私が男の料理の腕と同等ないしは——だと言う事実には嫉妬を覚えてしまう。

『あの、幽々子様。先程は何を話されていたのですか？』

経験上、間違いなくこの発言は墓穴を掘るものだ。

それでも聞いておかないと、とある拍子に思い出してしまふ。それだけは絶対にいけない。

『ん、何処からのことかは分からないけど、彼が作ってくれた料理が物凄く美味しいって褒めてたのよ』

『では、大胆と言う発言は——』

『それについては少し愚痴らせてもらおう』

声がした先から、男が盆に乗つけた食事——私のものであろう——を持ち、ゆっくりと近づいてきていた。

——これも嫉妬の要因かは定かではないが、何故彼はこんなにも割烹着が似合っているのか。

身体つきは整った筋肉質で肌は褐色、果ては背も異様に高く表情は厳格にすら見える。

そんな台所に立つに相応しく無いとすら思える風貌なのに——

『君が寝ていたことで私は本来の責務を果たすことは出来ないという事実を呑んだのか、彼女は私に庭師の仕事をやらせようとしたんだ。

それだけならいい。私には庭師の才能はないからな、駄目っぷりを見せ付ければ何も言わなくなると思っていたのだが……次は雑草の処理、屋敷の掃除、洗濯、今の料理、と予想を遥かに超える多忙を押し付けられた。

私のことはいい。でも君からも言ってくれ。部外者を容易く屋敷に迎え入れるどころか、備品に触らせるといことがどれだけ愚かしいのか』

溜息を吐きながら私の目の前に料理を丁寧に並べていく。しかしその落胆の表現と表情とは裏腹に、語る口調はとても楽しそうに聞こえる。

鼻腔に入り込む食欲をそそる匂いが脳を刺激する。

しかもそのレパトリーは消化に良いものを中心としており、私に対する気配りの念が伺える。

『確かに、それは大胆……というより訳が分かりませんねそこま

で行くと』

『——苦勞してるようだな』

『はい………』

頭にポン、と置かれた手は暖かく、同時に同調——というか、彼からは私と同じ性質を感じ取ってしまった。

認めたくはないが、私の性質は………弄られと苦勞人だと思う。あと私なら、主がどうにも——なところとか？

『口に合わなければ残してくれても構わない。とは言っても、食材はここのものだな』

言われた通り私は箸を取り、料理のひとつ——切干し大根を一撮みし、口へと運ぶ。

『——！』

旨い。味付けも私なんかと異なっており、悔しいが私のものよりも旨い。

同じ料理人として、ここまで負けを突きつけられると落胆や怒りを通り越して、口に運ぶことばかりに集中してしまう。

勝敗云々なんかより、この食事を純粹に楽しもうとすら思えてしまう程。

『美味しい、です』

『そうか、それは良かった』

それだけの受け答えを終えると、彼は幽々子様の平らげた食事の皿を黙々と下げ始める。そして尚もまだ主の箸は止まらない。出来るだけ早く食べてお手伝いしないと、流石にマズイ。申し訳なささマッハで増えていく。

『ねえ妖夢、一体なんでそんなこと聞いてきたの？』

彼が奥へと消えた直後、見計らった様に話しかけてきた。

『なんでっ、て……………』

どうにも目を合わせれない。

勘違いだったとはいえ、破廉恥な想像を自身の主を対象にやってしまったのだ。変に気まづくなるのは仕方ない——と思う。

少なくとも、私はさっぱり忘れられるほど単純じゃない。寧ろ記憶に根強く残るタイプだ。

『ふうん……………んふふ』

焦点を合わせずとも気持ち悪い声の出し方で幽々子様がどんな表情、思考をしているかが分かってしまうのは、それだけ彼女が私へどんな扱いをしていたかを物語っている。

恐る恐る合わせていくと、細目で頬をニヤつかせた主が予想通り存在していた。

『な、なんでしょう……………』

『あらあら〜妖夢ったら、エ・ツ・チ・ね』

『ッ———』

こつこの人はやつぱり確信犯だったのか……！！

でも、あの人が共犯な風には見えなかった。なのにあの受け答えが生まれたのは、幽々子様が上手いのか、あっちが天然なのか……。なんにしろ、羞恥で全開になった思考はそんなことを考える暇もなく、混乱を落ち着かせようと必死になることしか出来ない。

『違います！そんなことを考えてません！』

『あら、私は貴女の考えてることなんて何も言っていないわよ』

墓穴は掘る為のもの。そうじゃないとそんな言葉は産まれないからだからって、掘りたい訳がないじゃないですかー！！

——いや、墓穴掘るって理解してたから自業自得なんですけどね。

『騒がしいな、一体どうしたと言うのだ』

『聞いてよ、妖夢ったらね』

『言わなくていいですー！』

がー、と吼えるように言葉を制すると、幽々子様はつまらなさそうにその場に落ち着いた。

『それにしても——君の近くにいたそれは一体なんなんだ？』

視線を辿ると、その先には私の半身が悠然と漂っていた。

そして、私が意識を向けたことによってそれが私の周囲を回りだす。

『ああ、これは——って、その前に私達自己紹介してませんでし

たね。

私は魂魄妖夢、半人半霊という人種で、これは私の一部です』

『霊……つまり、それもまた君の一部なのか』

興味深そうにジロジロと見られると、やはり恥ずかしいものがある。それにしても変だなあ。こんなここじゃあ極端に珍しいものでもないと思うけど。

『しかし、君と初めて会ったときはそれは近くにいなかった気がするのだが』

『それは——ああ、今度実際に御見せします。謎はそこで明らかになるかと』

明らかな疑問符を浮かべる彼の姿は意外にも肉体年齢よりも若く見える幼さを醸し出していた。

あれはそう簡単に人に見せるべきではないものだ。手札を晒すことは、闘いに於いては最も不利になる行為だから。

『っ、と——すまない。私はエミヤシロウ。この度君の戦闘指南を承ることになった、よろしく頼む』

手を差し伸べられたので、それを握り返す。

ゴツゴツとした、男の掌。お師匠様もこんな感触をしていたな、と一瞬思い耽る。

この力強さにもう一度触れることができるなんて思わなかった。些細なことだけど、少し嬉しい。

『よろしくお願いします』

嬉しさの残滓である笑顔で、私は彼という存在を受け入れる。
少なくとも、彼が悪い人間ではないことだけは分かったから、それ
ならば拒む理由はない。

とは言つても、警戒するに越した事はない。彼が居る時は目を光ら
せておこうとは思っている。

『ご馳走様』

此方の決意なんか知らない主は、呑気な声で満足そうに食事を終え
る言葉を告げていた。

それに毒気を抜かれてしまった私は、一人虚しく溜息を吐いた。

『では、失礼するよ』

『じゃあね』

『では、今度会うときはよろしく願いしますね』

最早深夜になろうとする時間、私は白玉楼の門の前で二人の霊に見
送りを受け、その場を後にした。

見送りの内の一人、西行寺幽々子には泊まっていけないかと誘われ
ましたが、これ以上長居をすれば流石に彼女の意味であれ罪惡の念
が込み上げて来る。

それに——彼女の隣に静かに佇んでいる魂魄妖夢が私を監視して
いるのもある。

別にそれ自体は何の問題は無い。主を守る者としては当然の思考であり行動だ。

だが、私が居るせいで彼女の心休まる時間を奪ってしまつくらいならば、誘いを断り野宿でもなんでもしていたほうがマシだ。

それに、病み上がりかつその原因である私を彼女が快く歓迎する筈が無い。

主の命とあれば心を押し殺すことも已む無し、なんてことを常々考えていそふな子だから、私から後手に回らない限り苦しみ続けるだけだ。

高望みかもしれないが——そんなぎくしゃくした関係ではなく、普通に語り合える仲ぐらいにはなりたい、と思つてしまふ。

彼女は絶対に笑つていたほうがいい。感情を押し殺して生きれる程若くはないのだから、甘えたつて構わないのに。

だからせめて、私の居ないところだけでも少女らしくあることを望もうと思う。

暗く、何も見えないほどの闇が石段の下から迫り上がってくる。

最近、夜間に活動する機会がかなり増えた気がする。

サーヴァントの身体でなければとくに寝不足と過労で倒れていそふな活動量だ。

さて、次はどうするべきか。

これ以上仕事を増やせば何処かで都合が合わせれなくなつてしまふ。また天子のところへ行こうか………そんなことを考えていると、視界に明らかな違和感を感じた。

視界に含まれる闇が——侵食するように覆い、黒を満たしていく。背後を振り向くも、全く一緒。幸い、ほんの僅かではあるが周囲はさつきと同等の明るさが残っていたのが救いだ。

失明したわけでは無いようだし、何が起こつたのか。

『お兄さん、こんな夜遅くに外を歩いてたら危ないよ』

声と羽ばたく様な音だけでその声の方向にいるであろう何者かへ視線を送る。

こんな音を出せるのは、人ではない証。

恐らくは妖怪——それも鳥類に部類するものであろう。

『あはは、こっちだよこっち』

今度は後ろ……どうやら、私の目が見えていないことが分かっているのだろう。
と言うことは、この闇を造り出した張本人、と認識しても相違ないだろう。

『一体、何が目的だ』

『ん、なら簡潔に言うけど。』

——お兄さん、大人しく食べられてくれる？』

無邪気そうに残酷なことを告げる存在に、私はルーミアの姿を重ね合わせる。——直感だが、彼女もルーミアに近い存在なのではないか。

『残念だが私はまだまだ多忙な身でな、余生を終えるにはまだまだ遣り残したことばかりなんだ』

『ふゝん、そうなんだ』

無関心そうにそう返す。

『だから見逃してくれ——と言っても叶わないのだろうな』

『まあ、私も妖怪だし。獲物を逃すつてのは結構不名誉なことなんだ。

——だから、諦めてね』

冷淡にそう告げると、明らかな空気の変化と共に幾多もの風の裂ける音による旋律を奏で始めた。

亡霊少女は騎士を見つめ何を思つか（後書き）

さーて、何も書くことない。

今回初めて（だっけ）完全な区切りではなく、微妙に話を先走らせた感じのオチでゎました。

皆さんは完全に区切ってしまうのと、今回みたいな手法、どちらの方が繋ぎ的には薦めますでしょうか。

文庫の小説みたいに一気書きではないから今回みたいな感じのがやはりしっくり来ますかねえ。

次回は、原作を知っている人ならば誰が出るかは分かりますよね。作者はこのキャラは普通レベルです好き程度。好きな人サーセン。

妖怪の存在定義（前書き）

みんなー！ハッピーバレンタイン……イン？

家族と姉からはチョコ美味しいです出来たけど、ゆうかりんからは貰えなかったお。はっはっは、ツンデレめ。別に君が渡さなくても、ホワイトデーは無償で倍返しだあああああ！（CV・勇者王

不思議の幻想郷なるローグライクゲームをやってます。トルネコやチョコボの不思議な系のゲームです。

………拠点に戻るにはクリアないしは死なないと戻れないってなにそれって思ったね。倉庫のスキマってアイテムで拠点にアイテム戻せるけど、数に制限はあるわ拾えるのは運だわ拾ったときに限って戻す価値のアイテム無いわで結構ヒイコラしてたり。

まあDMな私には丁度いいです。さーて、今日も敵キャラの理不尽配置と罠に挑む仕事が始まるお。

妖怪の存在定義

茶の間で妖夢の淹れてくれた緑茶をゆったりと飲み、思考を過去に遡らせる。

紫が告げた可能性とやはら現実となった。そして、紫が言った人相にひとつも嘘は無かった。

——とても、面白そうな人。予想を裏切らなかった彼も含め、私の類は僅かに緩む。

『——幽々子様？』

正面に私と同じ体勢で身体を休めている妖夢。

どうやらこんな僅かな笑みでさえ気付かれてしまったらしい。これもまた、長い付き合い故か。

『なんでもないわ。それより、おかわり貰えないかしら』

『あ、はい。急いでお持ちしますね』

空になった湯飲みを手渡すと、妖夢は台所へ戻っていく。

その間に、私はほとんどん思考を遡らせる。

どこまで遡りましょうか……。そうね、私が紫に事を告げられるよりちよつと前、ぐらいかしらね。

語ってあげるわ。そこで思考を覗いている貴方達の為に——ね。

あの時も確か、こんな風にお茶を堪能していたわね。
違いと言えば、その時は日は昇っていた位の差程度。気にする程の
事でもない。

暖かさも寒さも、この身体には大した意味を成さない。それを不便
に思うことは無いし、意識することすら稀だ。

そんな時だったかしらね。妖夢が少し急ぎ足で廊下から現れたのは。

『幽々子様、紫様がお見えになられています』

『あら、いつもならスキマとか使って堂々と上がってくるのに』

『ですね……。私も予想外すぎて驚きました』

私と紫はかなり古くからの親友で、もう無礼も笑って許せる仲には
至っているのではないか。

神出鬼没な土足進入が常識になっており、それを咎めようとしない
時点でその傾向はあると思ってもいいわね。

『まあいいわ。取り敢えず上がらせて頂戴』

『大丈夫よ、もう上がってるから』

そんな声と共に妖夢の背後から現れた紫。やはり遠慮の無い行動が
当たり前になっている。

『幽々子久しぶり〜』

そんな在り来たりな言葉と一緒に飛びついてくる紫。
そしてそれへと、まるで甘えた子供にするように優しく頭を撫でて

やる。気持ちよさそうに目を細める仕草はまるで猫。

彼女の気紛れな性格も災いしてか、その意識に拍車が掛かる。

こんな過度なスキンシップをするのは、彼女が心を許した存在だけにするものであり、それは私を除いて彼女の式神と博霊の巫女だけだ。

ただ一人ではない、というのも少し不満だが、その中では一番の位置に座しているのは私だ。異論は認めない。

『と、取り敢えずお茶をお持ちしますね』

逃げるようにその場から去る妖夢。

第三者から見れば私達の行動は同性愛者のそれに近い。あの子が逃げるのも無理はない。

それは嫌悪感からではなく、羞恥を逃す為。半人半霊であるあの子は人間からすれば妙齡である筈なのに、精神年齢は見た目相応である。だからからかい甲斐があるんだけどね。

『取り敢えず紫、話があるんじゃないの？』

紫を引き離し、私も体勢を整える。

付き合いの長さ故か、なんとなくだが彼女の仕草や雰囲気は何をしたいのかが分かってしまう。

因みに外れた回数は最初は多かったが最近では外れ無し。絶賛連続正解率記録更新中。

『ええ。取り敢えずこれを———と思ったけど、ちょっとだけ待って』

何かを取り出そうとする仕草を中断し、再びごろごろし始める。

こういう時は——明らかに私を除いた他者を警戒している。妖夢がお茶を持ってくる際に話を聞かれたくないのだろう。

『お持ちしました』

緑茶の渋い匂いと、羊羹のほのかな甘い匂いが部屋に浸透する。それを卓袱台に静かに置いていくと、寂しくなったお盆を抱え、一礼して去っていくとする。

『待つて妖夢』

紫が切り出す前に、私が告げることにする。

なんとなく、証拠みたいなものを見せたかったのかもしれない。私と紫が、どれだけ強い絆で結ばれているかを。他の誰でもない本人に。

……どこかで恐れていたんでしょね。今までの意識が嘘だった——と知ってしまうのが。

だから自分で結果を出そうとした。自分から告げたほうが、どちらの結果が訪れたとしてもダメージも見返りも損をしないから。

『これから私がいいと言うまで、この部屋に入ること及び周辺を歩くことを禁じます』

『——分かりました』

彼女は何も問いだそうとすることもなく、そのまま襖を閉じ姿を消した。

分かったと言ったのなら、彼女は余程のことがない限りその命令に背くことはない。

生真面目だから、柔軟に物事を考えない。ただ言葉に従うだけ。

こういつた時は便利だけど、普段からそうだから結構窮屈だったりする。

『流石幽々子ね。私がする前に意思を読み取ったようね』

『——当たり前じゃない』

これで満足だ。私と紫の絆に嘘はない、それが分かればそれ以上の詮索も疑問も無意味。

高望みはしないし、この暖かさが私には心地よいのだ。それを進んで崩す真似は愚行でしかない。
ぬるま湯だと嘲られても構わない。個人的にはそんなぬるま湯に浸かれる特別な存在で在れるなら、それこそ万々歳なのだから。

『そうよね、長い付き合いだし。』

——取り敢えず、これで心置きなく話せるわ』

紫は正座で私と向き合う。

表情はいつも通りのものだが、その瞳の奥底からは力強さが伺える。普段は何事も飄々とした態度で臨む彼女が、こんなにも我を露にするというのは珍しいことなのだ。

一体、何が彼女をそこまでさせたのか——話の内容を含め気になるものがある。

『これ、見て頂戴』

渡された一枚の紙を覗くと、そこには聞き覚えのある名称の地名、館等が仕事を募集しているという内容が記載されていた。
そしてその中には——白玉楼の名も連なっていた。

『剣術、指南？』

『そう。これはとある人物だけを対象とした広告なの。天狗の協力もあって、この情報は彼以外の殆どが知らないわ。

とはいってもこれはあくまで広告だから、絶対にここを訪れるって保障はないけど』

『あの天狗が……。それにある人物って、一体』

別に名前とかが聞きたいんじゃない。

ただ——紫がそんな特定した人物に対して執拗になるなんてことないから、少し……。嫉妬してるのかもしれない。

そして同時に、そんな彼女を動かす程の存在を知っておきたかった。紫を一番知る人物として。

『名前はエミヤシロウ。人間であり、亡霊であり、神の様な”特別”を内包した存在でもある、外来人よ』

言葉を区切ると、紫は羊羹を頬張り、幸せな表情をする。

外来人……。幻想郷に外から訪れる存在は、確実と言っていい程彼女が関わっている。

彼女の能力は空間や次元や事象すらにも干渉出来る究極のそれだ。

だから喻え結界がどんなに丈夫な時期であろうと、彼女にしては空気がよりも質量の無いものとして扱われる。

簡単に言ってしまうえば、彼女の能力を持ってすれば結界で隔てある世界であろうと無いに等しく扱われる。

外から訪れる存在は、九割の確率で紫が関与しているのだ。

彼女が世界征服を企めば、恐らくその瞬間世界は崩壊しても笑い事

ではない。

まあ絶対やらないでしょうけど。彼女は快樂主義者だから。

『その言葉から察するに……そのエミやって人は剣を使えるのよね』

『ええ、才能はないけど彼は妖夢の遙か上をいつてるのは確かね。妖忌とも剣術だけなら互角なんじゃない？』

妖夢の師匠でもあり、祖父である妖忌。

正直、彼が強いのかは分からなかった。

何せ比較対象が居ない。屋敷へ侵入する不屈き者が居たところで、私とその状況を見れる身分でもないのは想像に難くない筈。

妖夢の稽古をしていた姿は見たけど……比較すら適わない實力差じゃ意味が無い。

だから……少しだけ思ってしまった。紫が言うように妖忌と同等の實力を持っているんだったら、實力不足の妖夢にして見ればお誂え向きな存在なんじゃないかって。

『人柄に関しては？』

『そうねえ、皮肉屋で現実主義者だったのは昔の話だから……、多分誰にでも無意識に優しく接する、スケコマシでヘタレな奴って憶えておけばいいんじゃない？』

『ヘタレ……』

莫迦にした口調で語るその姿を見て、シロウという男に執着してる理由が更に分からなくなる。

『まあ、少なくとも彼にとっての敵とならない限りは人畜無害と
思っているわ』

そんなのは承知している。

紫が私にとつて不利になる様な結果を連れてくるなんてことはま
ずない。それは彼女にとつても同じ結果しか齎さないだろうから。

『因みに妖夢がこの話を聞いてないんじゃない、間違はなく彼を敵と
みなし襲うわね』

『それが、妖夢をここから遠ざけた理由？』

『ええ。あの子は頑固だから妖忌以外の存在を師匠として敬うこ
とは無いでしょうから、それならいつその事実力差をその身に叩き
つけちゃえば少しは柔らかく思考するかなって』

紫の言うとおり、さっきも述べたが妖夢は石頭だ。

やれ自尊心だ、やれ妖忌の教えた剣に泥を塗るだの言つのは目に見
えてる。

ならいつその事、自分の剣に対する自信を叩き折った方がいい。
下手なプライドを保持してたら、何事も成長なんかする訳が無い。
剣術然り、心然り。

今までの子が敗北してきたのは、決して剣同士の戦いではなかつ
た。だから悔しさこそあれど、そこから繋がるものはない。

でも、今回は違う。剣を扱う者同士の対決ならば、どんな形であれ
ど妖夢の成長に繋がる。

それであの子の頭が柔軟になってくれれば言うことは無いんだけど
…………正直、こっちの方が矯正に手間取りそう。

『まあ、勝手にこんなことを計画してたのはいいけど………それならもうちょっと早めに聞いてくれれば良かったのに』

『ちょっと、こっちにも色々あってね。時間を合わせるのが厳しかったの』

反省するように愛想笑いをする紫。

どこまでが真実なのかは定かではないが、まあ問題はない。

『あ、あと………彼には絶対に、私のことを口外しないでね。暫くは絶対に会わないって決めてるから』

『あら、どうして』

『………弾みで挑発しちゃったのよね。暫くは会うことは叶わないと思いなさいって』

『それだけ？』

無言で頷く。

………なんか拍子抜けする回答だ。

『まあ妖夢はこの会話を聞いてないだろうし、口外する人は居ないと思うけど』

『頼むわよー本当に』

紫の引き攣った笑みの苦しさと言ったら無い。

知らず怒られることをやってしまった子供がする何かに脅えてる表情は、妖怪の賢者と謳われる存在とは思えないほど幼さを醸し出し

ていた。そのギャップが、彼女の魅力でもあるんだけど。

『じゃあ、用件はそれだけだから』

そう伝えると、手に持った扇子で空間を横に薙ぎ、別次元を構成する。

これが彼女の能力を応用したもののひとつ、スキマ。

異次元と現世を繋ぐことで、全く別の場所から場所へと道を作れる、究極の移動手段としてとても重宝するものだ。

因みに、これを使うから結界などお構いなしに移動できる。

唯一の弱点と言ったら、中の不気味さくらい。

夥しい数の眼と地に足の着かない感覚、そして一面紫の背景。生物の精神には結構キツイものがある。

まあ、移動手段としては殆ど彼女しか使わないから、問題は無いんでしょうけど。本人は慣れてるらしいし。

『もう行くの？』

『ええまあ。最近昔に比べて寝てないから、少しでも寝ておきたいのよ』

……やはり、分らない。彼女が自分の生活リズムを狂わせてまで何を成そうとしているのか。そして、シロウという男にどれほど期待しているのか。

それほどまでに、彼は特別だとも言うのか。

——私じゃ、役に立てないのか。

『そう。じゃあおやすみなさい』

スキマに身体を乗り込ませ手振りだけで挨拶を済ませた紫の姿は、

境界と共に点ごと消えた。

——取り敢えず、ひとつだけ誓ったことがある。

そのエミヤシロウという男を使つて、出来る限り遊ぼう、と。

私としても、彼がどれほどの存在なのかを見極めたいってこともある。

でも、一番の理由はやはり——嫉妬だろう。

私のむしゃくしゃを知らず本人は解消される為に動かされる。哀れとは思わない。これは私がやりたいことでもあるし、一方的な、子供じみた八つ当たりだ。

ならとことん子供になってやろうと、そう決めた。

私は、どうやって未だ見ぬ相手を弄り倒そうかをわくわくしながら考え始めることにした。

私は反射的に跳躍した。段々と何十歩にもなるであろう距離を僅かな目測だけで捉え、一気に駆け下りる。

目も見えなければ遮蔽物も無いこの空間では守りに徹する事すら困難。ならば多少強引であろうとこの場から脱する必要がある。

はつきり言つて賭けだ。敵に背を向けた時点で私は格好の的なのだ、いかにそれを揺さぶろうと無傷は有り得ない。

風を切る音は正面を除いて依然として響き続けている。

直撃だけは運よく免れているが、掠り傷は数箇所に出上がつている。どうやら相手は機関銃に近い形でば撒く攻撃法を用いてるらしい。

相手が対策を立てる前に、一気に進まなければいけない。

最初ここを上った時の感覚を思い出し、これで最後にせんと先程の倍の脚力で跳躍をし、空中で身を捻りながら地面へと突っ込んでいく。

そして、着地間際干将・莫耶を投影。身を捻る反動でそこに存在するであろう敵へ投擲する。

『きゃっ！』

反応からするに、威嚇程度にはなっただけ。その証拠に、弾幕の音が明らかに静かになっている。そのお陰で、勢い良く着地するもそちらに意識を集中できた。

そしてそのまま一直線に駆け、白玉楼の門を抜け、近場にあった木々の中へと逃げ込み、息を潜める。

『まさか反撃してくるなんて思わなかったけど……あんなものを沢山持つてる風には見えなかったし、万策尽きたんじゃない？』

敵は虚を突かれつつも、余裕そうに高らかに声を上げる。

確かに相手側からすれば、今の私が取った行動は食われる者の精一杯の悪足掻きにでも見えてもおかしくはない。

だが、油断しているこの瞬間こそ好機。視界を制限された今、この期を逃せば下手をすれば勝てないかもしれない。

私はその言葉を返すことなく、思考を相手をどう一撃で無力化させるかを考えることだけに回す。

確実に、短時間で、魔力を出来るだけ抑えて、どれだけ相手を傷つけないか。この四つを全て遂行することは簡単じゃない。

場合によっては傷つけることも已む無しだが……どうにも私の思

考はその結論には至らない。どうにもここに来てから甘さが生まれ
てきたらしい。

妖怪は人間ではない。よって私が守るべき対象ではないし、逆に仇
名す者として倒すべき存在なんだろうと思う。

だが、にとり、文、ルーミア……彼女達は人間と何も変わらないの
ではないか。

技術を持ち、集団の中で生活し、笑ったり憂いだり……それらは
人間と何も変わらず、仇名す者には到底思えない。

しかし、それは私からすれば数時間程度の出会いでのみ紡がれた情
報に過ぎず、本当は私を捕食しようとしている妖怪同様の思想思考
を持ち合わせている可能性の方が強いのだ。

——だがそれでも、信じたいのかもしれない。彼女達が見せた多
種多様の感情、それらは本物であり、対話していた時の姿は、純粹
に楽しみを以って確立していたんだと。

そして、そこにいる妖怪もまた、彼女達と一緒にだと信じたい。

だから、聞き出したいのだ。何故人を襲うのかを。何を以ってその
意味を成すのかを。

『——声を出さなきゃバレないと思ったの？そうやって息を潜め
ていても、正確には私の姿を捉えられないであろうし、少し時間が
あれば簡単に見つけられちゃうんだから』

そう、一番のネックは視界を剥奪されたことにある。

一撃で無力化するならば、当然二度目は無い。つまり、二度目を許
されない状況の中、成功させるにはかなり相手に接近しなければい
けないのだ。それがどんなに無謀で過酷かは、容易に想像できるで
あろう。

自分もどれだけ莫迦な真似をしようとしてるかは何重々承知だ。だが、これぐらいの気概が無ければ何も成すことは出来やしない。

自身の信じた道を進むにあたって誰も志を同じくしないのならば、全て自分の力で何とかしなければいけない。

生涯がそうであつた私にとって、この位の危機は幾度となくあつた。そして常に私は自身を犠牲にする選択をしてきた。

今までも、そしてこれから変わることもないのなら、何を迷う必要がある？

無謀であろうと確率の低い選択であろうと、そこに自身にとっての嘘がないのなら、命を掛けるに値すると私は思う。

逆にそこに自身を偽るものが僅かにでもあるのなら、そんなものを貫き通す価値なんかない。少なくとも私にとっては。

だから、私は自分を偽らない。

だから、私は常人にとつての最悪な選択を取る。

だから、私は自分を傷つける事を厭わない。

木々に隠していた身体を、敵へと晒す。

とはいっても声、翼の羽ばたく音で場所を判断してるに過ぎないが。

『ようやく諦めたの？』

予想通り、正面から声が響いてくるのが分かる。

下手な小細工をするタイプではないようで、正直安心した。

もし、相手が小汚い戦法を平気で使う様な相手ならば考えもしただろぅが——これで更に自身を傷つける選択に抵抗が無くなった。

『まさか。私は君に捕食される気は毛頭無いよ。——そして、逃げる気も、な』

瞬間、私は再び干将・莫耶を瞬時に投影、投擲する。

その後横に全力で飛び退き相手の射線上から逃げ、そのまま側面へと走り出す。

目が見えないとはいっても、完全な盲目ではない。周囲一帯が木々であるうと、僅かにさえ見えていれば反射で避けるのは容易い。

私は、今からある作戦を決行する。

真っ向勝負で勝てない状況下、その状況を更に制限された中覆すのは普通なら不可能。

『くっ、まだ逃げるの！？』

だが、私にはそれを打開する策と手段を持っている。

しかしそれには、相手を窮地に追い込む必要がある。

戦闘による窮地は、一発で仕留めるのだから出来ない。というかその確率を上げる為にこの作戦を考えたのだから。

だったらどうするか？

単純だ、痺れを切らせればいい。

何も窮地というのは自身が不利な状況ばかりを指すのではない。相手が籠城等の防衛戦に出て、此方の戦力を地道に削がれ逆転されようとも、それが窮地であることに変わりはない。

私は、その状況を創り出すことだけに一身を振るう。

どうやら相手は策略とかには疎いらしい。ならば冷静さにも欠けるのではないだろうか？

ならば只管牽制と回避だけを繰り返していれば、いずれは本気で仕留める為に大技か何かを仕掛けてくる筈。その時が好機。

仮に逃げる私を襲うのを止めるならそれでもいいが、先程の彼女の

発言からすると恐らくそれは無い。

見えない視界の中、相手の発する音目掛けて干将・莫耶を定期的に投げ付け、私はその間も走り続けることを止めない。
時には逆方向へ急転換したり、跳躍したりと不規則に相手を翻弄する。

その際に相手から漏れる唸り声と攻撃による僅かに吹く風で、位置は簡単に特定出来た。

木々や地面に刺さった跡を見る。

そこには大量の球体の窪み跡しか存在せず、どういった攻撃手段かはそこからでは分からない。

だが——変化も小細工もなさそうなそれ自体は、やはり警戒する必要はやはり無い様だ。

特徴的なのはこの視界の制限だけ。それが分かれば恐れるものはない。

『うう、ちょこまかとすばしっこい！』

段々と熾烈を極める弾幕だが、やはり単純。冷静さを失いつつある状態では此方が勝ったも当然。

早く——早く大技を出せ。私はその期を一日千秋の思いで耐え忍び、待った。

突如、しんと静まり返る。

——確信する。機は熟した、と。

『……………もういい、こうなったらこんなまどろっこしい事なんか終わり。これで貴方を仕留めるわ。』

——せいぜい逃げなさい』

そんな言葉を聞いた瞬間、私は投影する。この状況下で最も効率の良い武器を。

相手を一撃で静めるには余りにも脆く小さなそれは、迎撃礼装という部類のもので、発動条件は“相手の攻撃より後に攻撃を行う”という、カウンターに特化した宝具である。

先手で使えばその質は何ランクもダウンするが、後手ならばAランクを我が物にするとても恐ろしいものだ。

攻撃の順序を逆転し時間という絶対的な秩序に護られて先手必殺という帰結を作り出す。そんな無茶苦茶を押し通せるそれは、まさに切り札。

因みに殺したい訳ではないので、勿論わざとその質は落としてある。まあ元々贋作なのでランクは現物よりも劣っている筈だが。

『——後より出でて先に断つもの《アンサラー》』

鍵となる言葉を詠唱。それと共に空中で静止し、私の前に漂う。

これで準備は完了。後は——

『——そんな距離で格闘の構えなんかしても無意味だよ』

そんな言葉は意にも介さず、私は攻撃の瞬間を待つ。

この宝具の使用者は格闘をメインとした魔術師だった。よって私もそれに習う。

私がこれをともに食らったのは——ジャンケンで使われたときだったな。今にして思わなくても、そんな理由で貴重な宝具を使つたアイツは確実に莫迦だ。

『じゃあねお兄さん。少しは頑張ったみたいだけどこれでお終い』

相手へ向かったそれが相手を貫き、視界が戻るまでの時間が偶然に交叉した故か。

どさり、と再び訪れた静寂の中に響く音。

そこへ目を向け、気付く。まるで暗闇に慣れた目の様に視界が鮮明になっていくのを。

そして、私が相手にしていた敵の正体が——幼い雀の様な少女だったということ。

髪は顔と統一した長さで薄いピンク色をしており、対照的に帽子とドレスは地味目の薄茶色で統一されている。

背中には特徴的な大きな羽が生えており、彼女が人間ではないことを示している。

『ひつ———！』

少女に近づこうとすると、まるで親に叱られた子供みたいに両腕で頭を抱え、すくみ上がる。

肩から流れている血は、私が引き起こした結果。

喻え相手側が一方的に悪くても、被害者が納得しなければそれはただの虐めだ。

私は何も言わず、投影した救急用に使われる応急処置の道具を少女の肩へと当てがう。

駄々を捏ねる子供の様に左右に身体を振るわせるも、ここで引く訳にはいかない。

『大人らしくしてくれ。傷の手当てが出来ん』

『傷の………手当て？』

『ああ』

少女の服の肩部を少しはだけさせ、血止めをする。
失礼かと思ったが、菌が入る可能性は一秒でも早く取り除きたかった。

『——おかしいよ。変だよ。どうしてこんなことするの？
私は貴方を殺そうとしたのよ？食べようとしたのよ！？
なのにどうして………そんな表情で敵を治療なんかするの！？』

叫ぶように問いかける姿は、痛々しくて堪らない。

『表情は知らないが………これは私が引き起こした結果だ。後始末をするのは当然だ』

『当然？何を言ってるのよ。』

私は妖怪よ？人間に負けたって事は、退治されたって事よ。敗者には尊厳も何もなく、ただ悪者として吊るし上げられる。

——こんな事される権利なんて、毛ほども無いんだから』

今にも泣き出しそうな位くしゃくしゃになった少女の顔は、何を思
ってそんな事になっているのだろう。

人間に負けたという事実に？
敵に情けを掛けられた事に？
彼女の述べた敗者の定理とは真逆の行為をされた事に？

私は幻想郷に於ける人間と妖怪の暗黙の了解の様なものを知らない。
人間は、妖怪に食べられるのを拒む為に妖怪を倒す。それは想像出
来る範囲だ。

ならば妖怪は、何の為に人間を食おうとするのか。

美味いからか？

そんなの古き時代じゃあるまいし、今では美味しいものなんて腐る程存在する。別に人間に拘る必要性なんかない。退治されるリスクを背負ってまでする事には到底思えない。

彼女は、何度人間を捕食し、何度人間に退治されたのだろう。

敗者は絶対悪として吊るし上げられる……歴史と一緒にだ。勝てば官軍。事実なぞ幾らでも改竄できる。

そんな屈辱を当たり前に受けていた少女が、今こうして同じ敗者として辛酸を舐める事無く、逆にこうして同情に近い扱いを受けている。

それは彼女からすれば偽善行為にしか見えないだろう。或いは意図を掴めず混乱してしまうか。

『ならば敗者は大人しく勝者の権利とやらを受けている。私は勝利の証として君を治療する権利を貰う、それだけだ』

『……………訳が、わからないよ』

それ以降、先程までと打って変わって大人しくなった。

応急処置をしている間、顔は終始俯いたままで言葉も発しなかった。そんな居心地の悪い静寂のまま数分後、処置は完了した。

『怪我をさせた本人が言うのもなんだが、暫く動かさない方がいい』

『……………っん』

相変わらず暗い雰囲気を出してる少女を見て、内心溜息を吐く。

傷のケアはともかく、心のケアは専門外だ。どうにかしてやりたくてもそう簡単にはいくまい。

『君に聞きたいことがあるんだ。』

何故君は——いや、何故妖怪は人を食べようとするんだ？』

その言葉を聞くと、少女はゆっくりと顔を上げ私の眼を見た。

『妖怪が、何で人間を食べるか？』

うわ言の様な呟きに、私は疑問を感じる。

まるでこの少女は、何故人間を食べているかという理由を知らないかのような、そんな表情をしていた。

『……………分からない。何で自分でも疑問に思わなかったんだろうつてくらい、それが当たり前として私の中で確立してたから、疑問を感じる隙間なんかなかったんだろうけど……………。人間はまあ美味しいよ？でも、それはリスクな結果がついてきてそれでプラスマイナスゼロになるかって言われると……………私はそう思えない、かな。本当、そんな理由も考えたことも無かったなんて、莫迦みたい』

乾いた笑みが私が初めて見た少女の笑顔とは、どうにも心が痛む。

『それはどうだろう。人間だって牛や豚、魚の様な生き物を当たり前の様に食事風景に取り込ませているが、どうしてそれらを食べているのかなんて疑問を持ったことのあるのは稀なんじゃないか？それほどこまでに過去の時代から浸透してきた人間の習慣は、最早遺伝子レベルに刻みつけられた常識に至っている。妖怪が人間を食べるというのもまた、同じ道理なのではないか？』

『…………お兄さんはそれが知りたいんじゃないの？自分で仮説立てちゃってるけど』

『いや、私が知りたいのはもつと根元の部分。どうして妖怪は人間を食べるなんて考えに至ったのか、だよ。獅子や虎——がここにいるのかは知らないが、人間よりも圧倒的に力を持つ存在ならば人間だろうと食うだろうな。弱肉強食に根付いた行動だ。生きる為ならば食えるものは何でも食う、最もな行動だ』

妖怪だからって、人間を絶対に食べなければいけない訳ではない筈だ。ルーミアも猪を美味そうに食べていたしな。

『だがどうだろう、幻想郷というこの世界、人間が圧倒的に妖怪よりも劣っていると言われたら、君はどう答える？』

うーん、と喉を唸らせ真剣な顔つきで考えてくれている。

たったそれだけの事だが、ほんの、ほんの少しずつ彼女との距離が近づいている様で嬉しくなる。

『そうだなあ…………人間は妖怪と違って群れを成すことを好んでいるから、それは時として力が強い妖怪であろうと圧倒してしまう。そして例外的に、お兄さんみたいな個として強力な力を持つ人間だっている。だから絶対に妖怪が最強とは言えないかもね』

私を除いても、圧倒的火力で攻撃してくる魔理沙がいい例で、あれ程の力があれば下手な妖怪ならば勝ち目はない。

彼女もまた、そういった人間に倒された経験もあるのだろうか。

『そうか。その言葉からすると、妖怪は単独行動を好むのか？それなのに群れを成している人間を襲うというのは、イマイチ思慮

に欠けると思うが』

『……確かにね。妖怪は個としての実力があるせいで、協力関係を築いたりすることは稀なんだよ。

多分、妖怪も人間みたいに群れを成す事を好む存在だったら話は違っていたかもしれないけど』

人間は弱い。故に孤独であることを恐れ、仲間を求める。

そうやって数を増やし、妖怪のような人間には無い強さを持つ存在と戦えるようになる。

バランスは取れているが、崩そうと思えば容易く崩せる泥の橋で作られた均衡だ。そんなものに頼っていればいずれその重さに耐え切れず沈んでしまうのは必然。

この世には、群れを成してでも絶対に勝てない存在はいるのだから。

『——でもさ、そんな人間達と実力も均衡していて、人間を除いて食事だって何も変わらない。だったらさ……その人間を食べるって行を行わない妖怪って、妖怪と呼べる存在なのかな』

——何故か、その言葉が全ての疑問の確信に近付いている、そう直感で感じ取った。

『それ、は——』

こればかりは答えようがない。

妖怪と呼ばれる前提条件。それが曖昧過ぎると言っのを今気付かされる。

妖怪にだって種類がある。

吸血鬼、天狗、鬼、河童——誰もが知る妖怪の代名詞。しかしそ

れはあくまで代表例に過ぎず、種族も曖昧な——それこそ名前が無いかもしれない——妖怪だって居る筈だ。

しかし史実等でそれらが共通している部分。それは、人を襲うということ。

人を襲わない妖怪は、妖怪として扱われない。しかし人間にもなれない。

そんな半端な位置に座していれば、どちらの種族からも敬遠されるのは必定。

——妖怪が人を襲うのは、本質的にそれを畏れているからなのだろうか？

『——分からないよね。私も分からない。でも、こうやって考える事で、その答えに近付いていけるかもしれない。それだけで進歩だと私は思うな』

『そう——だな』

今は導くことは敵わない答えかもしれない。
だが、こうやって悩み、思索し、仮説を立てるを繰り返していく事で、その答えに近付いていける可能性はある。

ならば、焦る必要はない。

重要な事ではあるが、功を急くと曖昧と矛盾が混ざったものしか生まれない。ならばじっくりと時間を掛ける方が効率は大きく違う筈。

『ねえ、お兄さん。』

——私が人間を食べているって知った時、何を考えた？』

真剣な眼差しが私を貫く。

先程の会話から彼女は何を考え、何を識りたいと思ったのか。その纏めが、この質問に注がれている気がした。

『……正直な所、辛かった。同族である人間が食べられたという事実なんかよりも、人間となんら変わらず、ほんの少しの違いしか無い存在が、カニバリズムを行使しているという事に』

『ほんの少し、か。どうだろうね、私にはこんな羽もあるし、人間よりもずっと生きられる。これが僅かな差でしかないなんて——』

私は、抱きつく形で彼女を支配した。

『えっ、え——！？』

戸惑う少女を尻目に、私は言いたい事を全て吐き出す。

『——こんな羽があっても、君は私達とは何も変わらない。生きられる年数が違う？そんなもの、人間同士にだって存在する事象だ。全ての存在が違った運命を背負っているからこそ、人生を全うしたいと思える。他人と異なるからこそ、その価値は誰にも評価出来ないものなんだ。』

君が妖怪で、私は人間だ。たったそれだけの区別で価値観を奪った。りする権利は無いし、介入する権利だって存在しない。——少なくとも私は、君を妖怪としてではなく、ひとりの少女という平等な視点で見ているつもりだ』

背中に生えた羽に幾度となく触れる。

優しく、愛玩する様に、ゆっくりとその線をなぞっていく。

『ひとりの、女の子として？』

『ああ。出来れば人を食べるのは止めて欲しいがそれを強要する権利はない。私達人間だって動物の肉を誰の赦しも得ず命を刈り取り、糧としているんだ。それを人間だけ特別、なんて都合のいい逃げ道なんてある筈がない。——でももし、もしも人間を食いたいという衝動に駆られたのなら、私を探して欲しい。君の舌に合うかは分からないが、私の全力を以てして君を満足させる努力をしよう』

『——』

少女はその問いかけに答えることはない。

当然だ。今まで人間に対して醜悪な迫害を受けていたのだ。人間と言う存在をこんな言葉ひとつで簡単に受け入れられる訳がない。嘘八百並べ立て、と思われても当然のことだ。

だから、私は答えを求めてはいない。

ただ、伝えたかったのだ。人間全てが君達妖怪をを忌み嫌っている訳ではないという事実を。

『——嬉しい。今まで人間からそんな優しさを受けたことなかったから』

『………いいのかそんな易々と信用して。私は君を虐げてきた人間のひとりなんだぞ？』

『そんな切り替えしをする時点で貴方が嘘を吐いてないってことは分かるよ。——そんなこと言っちゃったら、何度でも会いに来ちゃうよ？』

身体を離すと、少女の涙交じりの笑顔が迎えてくれた。

彼女にとって、私の言葉はどれだけ意味を成したのだろうか。

この涙は、一体何に対して流しているものなのか。

『何度でも来るがいいさ。この身は決して君を拒むことはない』

私もまた、笑顔で今の心境を曝け出す。

こんなにもいい子なのだ、それを無意味に拒否するなんて酔狂な真似はしない。

突然、胸元に暖かさを感じた。

それは、今度は少女から私に抱きついてきた為。どうしてこうなった。

『えへへ……………』

———どうにも調子が狂う。

先程まで敵対していた筈なのに、今ではよくわからない程懐かれてしまった。

嫌われるよりは何倍もいいのだが、こうも入れ替わられると対処に困ってしまう。

少女は私から離れ、一歩二歩とスキップをした後その場で舞うように一回転をし、再び微笑んだ。

その姿は少女さながら、まるで天使のような姿に思わず見入ってしまった。

『有難う！お兄さんが料理を振舞ってくれるなら、その時に私もなにかご馳走してあげるから楽しみにしててね』

『はは、それは期待するしかあるまい』

少女は、その羽で高く空を舞った。

月夜を後光に背負い、今夜この一瞬だけ少女は空の王となった。

『じゃあねお兄さん。またいつか、絶対に会いにいくから！』

私に向かって怪我をした肩で思いつきり手を振り、そのまま夜の闇に消えていった。

……どうにも理由と目的が摩り替わってた気もするが、まあそんなことは別段問題ではない。

私も向かうとしよう。やることは山積みだ、立ち止まっていられる程暇な生き方はしていない。

まあこれも自分や早苗達の為だ、別に苦だとは思わん。

戦いばかりに身を置いていた前の生き方とは違い、こつも安らぐ時間が多い余生を送れるなんて思いもしなかったからな。

降ろしていた腰を持ち上げ、私は天界へ赴かんと歩き始めた。

妖怪の存在定義（後書き）

今回は二次でネタよく酷い扱いが多い少女の紹介。小説内では名前を聞いてません（聞く雰囲気じゃない）が、ここではきちんと表記しておきます。

ミステリア・ローレライ

種族：妖怪（夜雀）

能力：歌で人を狂わす程度の能力

二つ名：夜雀の怪

愛称はみすちー。

歌で人を狂わせる能力や、人の視界を奪って鳥目にしてしまう能力を持っており、それを使って人間を襲ったり戦闘を有利にしたりと補助能力は強いが、本人は大して強くない。

歌が好きなのだが、若さというスタイルのせいか古い妖怪には敬遠されている。逆に若い妖怪には人氣が根強かったり。

焼き鳥の撲滅を掲げており、「焼き鳥屋」ならぬ「焼き八目鰻屋」を経営している。二次でたまに見かける琥珀さんみたいな服装に和服スキーマ私はもうヒヤッホイなんだが。

幽々子の捕食ネタの第一人者。二番目は衣玖さん。

てかそれなのに白玉楼の近くにいた彼女って（というかそれを考えた私）一体……

鳴き声がちんちん。

卑猥なこと考えたそこ、バケツ持って廊下に立ってなさい。

夜雀は特定地域では蛾の妖怪として伝えられている。

スperlカードにもそれを彷彿とさせるものがあり、原作会話でもそんなことを示唆するものがあった。

本人は鳥だと言っている模様。公式ではどちらか断言している表記は無い。

まあ私は彼女「夜雀」って妖怪だと思ってるからモーマンタイ。

因みに耳も羽のような形。犬の耳っぽい感じの。

一途な鞘（前書き）

エロイ妄想や変態的な妄想をしてる時に誰かが近くにいると、『思
考読まれてないよな？』とか思ってしまう。

そんな経験のある人は先生と一緒に廊下に立ちましよう。

一途な鞘

眼についた景色は、雲ひとつ無いまっさらな空。そしてその中で自己主張をする、満月に近い月と小さく散りばめられた無数の星々。在り来たりな風景、とまではいえないかもしれないが特別珍しいとも思わない、そんな夜空。

私はそんなものは気にも留めない。代わりに、ある男性と少年が私の意識を集めた。

理由は、その二人に見覚えがあったから。夢に出てきたから。

私とは何の因果もない彼らが、何故二度も私の記憶に存在しているのだろうか。

確か前は———と思い出そうとし、ハツとする。

思い出せない。彼らが何者だったかを。前にどんな夢の世界で出会ったのか。

記憶に残るは、彼らという存在が確かにいたという記録に近いものだけ。

そんな都合のいい記憶の欠如に当然違和感を覚える。だから必死に思い出そうとした。

けど、まるで記憶の引き出しに幾重にも施錠が掛けられているかの様に思い出せない。

記憶の保持者は私である筈なのに、その鍵は手元に存在しない。私が単に失くしてしまったのか、意図的に手元から消えてしまったのか。

ズキリ、と頭が痛む。まるで素手で鍵を抉じ開ける———そんなのは無駄な行いだと嘲笑うかの様に、そんな私の行動を邪魔するかのように。

……痛みのせいか、僅かに苛立ちを覚える。普段はこの程度のことなんかじゃ揺れることなんかないのに。自分のモノじゃないような記憶。自分のモノじゃないような感情。思わず自信が何者かを再確認する程に、自分の中は矛盾で満ちていた。

男性と少年は武家屋敷の縁側に腰を掛け、何やら楽しそうな雰囲気です話をしている。

遠巻きに眺めているから声は上手く聞き取れない。けど、声の抑揚や表情であらかたの概要は掴める。

赤錆色の短髪の少年は、屈託のない笑みで男性へと何かを伝えている。ボサボサ黒髪の男性は、柔和な笑みでそれを受け止めている。

確か——この二人は家族ではなかった筈。だけど、年離れた二人がここまでそれに近い雰囲気を出しているということは、疎遠だった本当の父親の知人とか？

——違う。

思い出せ思い出せ思い出せ。私は大事なことを忘れている。決して忘れてはいけなかった大事な記憶。

それはとても熱くてとても怖くてとてもヒトがたくさん■んでいて——世界はアカくてヒトもアカくてスベテがアカくて、夢なのにユメじゃなくて■んでいるそれは醜く何モカモが歪んでいて、キモチ悪くて気持ちワルくて、眼を背けても世界はアカいから意味はなくて、目を閉ジても瞼なんてないみたいに脳裏に焼きついていて、アカくて、アカアカアカアカアカアカアカ——

『は——はっ』

全身から溢れ出す汗。涙腺が崩壊したように流れ出す涙。呼吸もままならない程に胸を締め付けられ、莫迦みたいに開いた口からは涎

が滴る。

思い出した。あの二人は、あの地獄の世界の住人だ。男性があの少年を助けたんだ、訳の分からない方法で。

ということは……これは夢の続きなのか。

あの地獄の世界とは打って変わって、この世界はとても静かだ。とても、あんな地獄を造り上げた世界とは思えない程に。

血の繋がらないであろう二人が未だに顔を合わせているのは、男性が少年を引き取ったからだろう。あんな地獄にいたんだ、少年の身内も恐らく生きてはいまい。そう考え、納得出来る結論に至った。

深呼吸を数回繰り返し、落ち着きを取り戻す。未だに震えだけは止まらないが、仕方ない事だと甘んじて受け止める。寧ろ、あんな世界を体験して正気でいられる人間の方がどうかしてるのだ。

一歩ずつ、二人へと近付いていく。

私はこの世界の住人では無い。けど、知る権利だけはあると思ってる。

あの二人がどんな想いでこれから生きていくのか。あの世界で息を引き取った者達の代わりに、目を逸らさずに見つめていかなければならない。そんな気がして。

会話が鮮明に聞こえる距離に至った頃、私は少年の言葉に耳を傾ける。

それは、男性が叶わなかった夢を自身が受け継ぐと言う言葉。

子供らしく、その意味すら分かっているのかすら怪しい位に真っ直ぐに答えた少年。

男性は、そんな姿を見て柔らかく微笑んで、そうだったらいいなと

願望を静かに吐き出した。

夢——か。

私の夢は、立派な現人神となってあの御方らと共に在る価値のある存在となること。

でも、それは私の周囲の環境がそうさせた結果であり、そこに自分の意思が全てを司っているかと言われれば、昔だったら違ったと言う。

私だって女の子だから、そんな生まれだけでやりたいことを投げ出してでも神に仕えるなんて真似は嫌だと言うに決まってる。

流行のお洒落とか友達付き合いとか恋愛とか——私は神に仕えることを決めた時点で全て放棄した。

そんな決断をする切っ掛けになったのは、失恋が原因だ。いや、失恋ではないか。私が一方的に一目惚れをし、相手はそれを知らずそれ以降出会うことがなかった、ただそれだけ。

別にそれが心の傷となった訳ではないが、気持ちを切り替える大きな切っ掛けとなったのは確か。

だから今こうして私は現人神として生きている。煩惱を捨てる為に修業しているって、僧侶みたい。

だからもう恋なんてしない、そう思ってたのに。それなのに彼は現れた。

身長は私の頭二つ分位高く、雪の様な白髪は短髪のオールバックとなっていて、着ている物は正に騎士を連想させる人。

それだけだったら、強くなった筈の心は揺るがなかったと思う。

でも彼が開口一番に私に聞いてきた、大丈夫かという言葉。それに続いて語られた私の内側を見透かした言葉の連続。

心の何処かでまだ自身の在り方を否定したがっていた私の心は、どんな嚴重な金庫も裸足で逃げ出すものだった。

でも彼は、一瞬で私の内側へと入ってきた。

金庫という嚴重な壁に覆われた中身ほど脆いものは無い。私は糸が切れた様に彼にばかり意識が向くようになってしまった。

霊夢さんは同姓だったから驚いただけでした。何より彼女のスペックの高さは幻想郷の人達に結構知れ渡ってるであろう程なので、驚きよりも納得してしまう方が先かと思うくらいだった。

二度目の恋、とはまた違う気がする。

それは支え合っていていく間柄を指すものだが、私の場合完全に依存してしまっている。

神に仕える者としてあつてはならない、祀るべき神よりも彼を優先してしまうというレベルにまで到達してるくらい。

はつきり言つて病気だと思う。

いや、彼が病気の核なら掛かるのも悪くはない。ていつかもう手遅れかこんなこと考える時点で。

お二方との関係も最近やっと良くなって来たからこんな事を考えるようになったのかな。

今までは身近のことで手一杯。取り付く島もなかったから当然だけど。

——会いたい。

会つて抱き締めたい抱き締められたい一緒に話したいご飯を食べたい料理をしたい買い物に行きたい我が儘を言いたい私を見て笑つて欲しい私だけを見て欲しいどこにも居なくならないで欲しい未来

永劫彼を感じていたい――

『――はっ！』

頭を殴って思考をクリアにする。

無意識の内に彼のことはかりが頭の中で一杯になっていた。重症を乗り越して末期患者に近い。

――でも、あの人だって悪いんだから。

私が暴走したせいで戻って来ないらしいからそこらへんは反省しました。けどもう一週間経過しようとしてるのに音沙汰ひとつ無いのは正直どうかと。

御二人も私を気遣ってか口には出さないけど、心配してるのは拳動で分かります。

女性三人を放って家を空ける亭主なんてあつてはならない事です。

だから彼が帰って来た暁には両手を縛って手綱をずっと握ってようかしら。ふふっ。

――っといけない。二人の会話をすっかり忘れてた。

男性は瞼を閉じたまま微動だにせず、少年は先程までの決意の余韻に浸ってるのか笑顔を崩さない。

そんな時間が暫く続いて、私は異変に気付いてしまった。

――この人、息してない。

悔いの無い最期を迎えたと思わせるその表情は、本当に透き通っていて、まるで眠るみたいに動かなくなったそれは、あまりにも不自然な最期を迎えていた。

彼のどこにこうなる要因があつたのだろう。

外見は確かに痩せてはいるが、病気持ちのそれとは考えにくい。だいたい、病気なら苦しみ悶えるのが普通だ。

致命傷なんかがあればこんな場所で少年と話していられる訳もない。

——ひとつだけ納得出来ない。

何故、この少年を置いて逝ったのか。

まだまだ誰かに依存しなければ生きていけないであろう年齢の少年を拾って、最後は彼を孤独にしまった。

それは、どうなのかと。確かに少年を助けたのは正しいことではある。けれど結局こうして残され、孤独となって、ココロは錆び付いてしまう。

それに——男性のあまりにも未練のないこの表情。身勝手すぎるでしょう？

自分だけ満足して、逃げる様に輪廻から外れていった彼を、出来ることなら叱り飛ばしてやりたい。

けど、これは所詮夢。

これが過去に本当にあった日常的一幕だったとしても、私にとっては虚像でしかない。

故に運命を変えることも敵わなければ、道を示してあげることも出来ない。

この身は所詮傍観することしか出来ないガランドウのもの。

第三者である私には、世界を動かせる力なぞ存在しない。

分かってはいる。けれど、悔しさだけは募り続ける。

損な性格だな、と自嘲する。

私は、少年の隣に腰を下ろす。

少年には私のことは見えてない。喩えこんなに近くにいても、決し

て干渉することはない。

——この男性の身勝手な行動のせめてもの代わりとして、この夢が覚めるまでだけでも傍にいてやりたかった。全くもって無意味で偽善な行為。その果ては自己満足しか残らない。私が傍にいても、彼にはそうであるという事実すら記憶に残らない。誰もがこの行動理念を理解出来ないだろう。

少年は、何も語らない。

彼がもうこの世に居ない、という事実を知ってるからなのだろう。けれどその表情は悲しみを帯びてはおらず、まるで彼の遺した夢の果てを見透かしてるかの様に、しっかりと前を見据えていた。

強いな、とっても。

こんな歳の子供では到底持ち得ない強さをこの少年は持っている。それともあんな地獄を体験した時点で普通の範疇から外れているのか。

何にせよ、少年はこれから沢山の苦勞を強いられることは間違いない。

誰かに甘えることも出来ないし、支えてくれることも無い。拠り所なんかどこにもない、自分の力だけが唯一頼れる存在。

そつと、少年の手の甲に手を重ねる。

触れている感覚はないけど、何故か暖かさを感じる。

錯覚なんだろうけど、まるで私もこの世界に認められたかのような気分になり、少し嬉しくなった。

……まあ、実際はそうじゃないんだけどね。

『——俺、絶対に爺さんの叶えれなかった夢を実現するからな』

独白による決意が、静かな世界を揺るがす。
噛み締めるかの様に力強く、意思の籠った重く呟いた。

——やはり死して尚こんな少年を縛るこの男に対して、私は怒りしか覚えられない。
喻えこれは少年がひとりで決意したものだろうとしても、要因となつたのは彼だ。

死者に対する手向けというのは、決して依存することでは無い。
そして死者に対して依存してしまうと、この少年は足踏みを繰り返すのみの人生になってしまう。

人並の生活は送れても、その何処かで破綻した行動を起こしてしまい、敬遠されたりする。

——私も、そんな人間と同類だから分かつちゃうんだよね。

いない者に対して依存するということは、一生その依存した対象の為に動いていくこと。

その道程にブレーキは存在しない。ストッパーとなる存在がこの世に居ないのだから、当然ではあるが。

死者の意思を継ぐというのは、終わりの見えない洞窟を歩くのと何ら変わらない。

その生涯で第三者に功績を讃えられたとしても、本当に認めて欲しい存在がいらないのならば、結局は自分の中では何も変わらない。
終わりが無いループに足を入れた瞬間、その人生は終わりを告げたも当然なのだ。

そしてこの少年はそんな道を歩もうとしている。いや、もうとつくに歩んで何年も経っている可能性だってある。

こんな現実味のある非現実的な夢、普通なら見れる訳がない。どう

してかは知らないけど、私はこの少年の過去を第三者視点で見せられている。

誰かが作為的にしたのか、もっと別の要因が働いたのかは知らないけど、作為的ならば何でそんなことをしたのかが分からない。だって、私はこんな少年なんか知らないもの。

『ああ、絶対なつてやるさ』

——正義の味方にな

『え』

正義の、味方？

何だか最近聞いたことのあるフレーズに、私の思考は停止する。

聞いたことがある、それだけは確信と言える。

でもそれだけ。誰が？とか、どうやって？とか、重要な部分は霧が掛かっている。

『があつ——！』

それを探ろうとすると、さっきの比では無い頭痛が襲いかかってきた。

今度は万力で容赦なく締め付けられる様な感覚。それが物理的なものならば、私の脳はおぞましいモノとなっていただろう。

思考拒否しろ、さもなくば死ぬぞ。そう警告するかの様に痛みが引くことはなく、逆に鈍痛が倍化していく。

それでも、私は思い出すのをやめなかった。

痛みで頭が回転していないから無意味だと分かっているけど、どうし

ても止まらない。

自分でも理解不能な判断だと思うけど、確実に言えること、それはその答え導くことは、絶対に諦めちゃいけない大事なことなんだってこと。

まず、痛みで意識が――

とは言っても限界は簡単に訪れるもの。人間は痛みには強い生き物じゃないから、ショックが強ければ当然身体はもたない。

別に痛みには慣れているような生活は送っていない自分では、一瞬で昏倒してしまうのは語るまでもない事実。

縁側を横になるように倒れる。前のめりに倒れたら死にかねん、夢だけ。

そして見計らったように、背後から何か近づいてくるのが分かった。

プレスシャー……とは違うけど、かなり力を持った存在だったのは理解する。凡人な自分では、気配なんて大層なものを感ぜられる訳もないし。これくらい力が露出されていないと肌で感じるには到らない。

『全く……貴女気絶するまで思考を止めないなんて、どっかの誰かさんと同じく無茶ね。ま、似たもの同士ってのもなんとなく納得しちゃうけど』

綺麗な女性の声が、ほぼ真上から聞こえる。

完全に背後を取られたんだろう。とは言ってもどうこうする気力もなければ、自分では適わないのも承知している。抵抗する気なんか起こる筈もない。

少年は、女性の存在には気付いた様子はない。

つまり彼女もまた、夢の外の住人だということ。そして、この夢を見せているであろう存在だということ。

そうじゃないと、あの全て視てました的な発言は些か理に適わない。

何故、こんな虚言の世界を私に見せたのか。何故、私がその対象になったのか。

聞きたいことは果てないけれど、口も思考も意思とは無関係に動くことを許してくれない。

『取り敢えずあんな無茶をしたんだから身体も動くことを拒否するわよね。』

どうせまた私が記憶を封印するんだけど、一応聞いておきなさい。

今回のイレギュラーを含め、やっぱり貴女は力に目覚めつつあるわ。私の能力を全力でとは言え跳ね除けたのだから。』

イレギュラーって……私が前の夢を思い出したことを指しているのかな。

確かに、今思えば現実を生きている私はそんな夢を見たという記憶すらなかった気がする。

それに、力に目覚めるってどういうこと？

私がいかに力を持った相手を打開し得るほどの力があるとでも？

——想像もつかなければ、理解も及ばない。

自身の力量は自身が一番把握しているつもりだ。

卑下していなくても、自分は幻想郷では弱い部類の存在に入と思う。

そして背後に立つ女性は……霊夢さんくらい、いや、それ以上の力量を誇っている。霊夢さんにもまるで歯が立たない私が、この人

の力に一瞬でも勝てただなんて考えに行き着く訳がない。

『何故こんな世界を見せるか、何故それなのに記憶を封印するのかに關しては、ひとつ目の必要だからとしか言えないわ。二つ目は余分なものを吐き出した状態でこの世界を見て欲しいから。自己の曖昧な感情だけで物事を判断しても意味が無いし、断片的に見る事でその時その時の貴女の考えが知りたいから』

——分からない。彼女が私に何を期待しているのかが。話すことも要領を得ないものばかり。話すと言っておきながらはぐらかす事を前提に置いた曖昧な言葉の繋ぎ。

——完全な偏見だが、彼女は他人を突いての反応を楽しむ質の悪いタイプの存在だと思った。

『それに、こんなに早く片鱗を見せるなんて私も予想外だったから、それに期待して今度はもう少しロックを強くしておくわ』

くすくす、と陽気に笑う。

……こっちは話を聞くのに精一杯な体たらくなのに、あっちは余裕全開。打開したと言ってもあっちからすれば些細な事象だったのが丸分かりだ。

これだけの力の保持する存在が私なんかを構う理由……やっぱり分からない。

ふと、頭を撫でられる感覚。

まるで母親にされるようなそれは、否応無しに意識を剥離させていく。

『今はお休みなさい。取り敢えず、貴女の知りたい真実には近付いてるわ。そして真実を知りたいのならば全力を以て私の力に勝ちなさい。いや——貴女は絶対に勝つ。私が保証するわ』

私は夢から覚めようとしているのだろう。

落ちる瞼は暗闇を移すことなく、反する色が眩しく輝きを放っている。

『では、また会いましょう。』世界を護りし剣の鞘？よ』

最後の放った言葉の意味を考える暇などなく、それが合図の言葉と言わんばかりに私の意識は現世へと昇っていった。

何故だろう。とてつもなくだるい。

何時も通りに家事をし、買い物をし、寝た。

何も変わらない毎日だった筈なのに、なんで今日に限ってこうも……。

——いや、前にも似た感覚を覚えたことがあった気がする。

それは、神奈子様と諏訪子様と少しだけ距離が縮まったあの日。起き抜けからひと騒動あったので気付かなかったけど、その後急激に頭痛と気だるさに襲われて再び寝てしまった。

御二人は病み上がりだからと勘違いをしてたけど、これはもっと別な原因があると、直感に近い何かが告げている。

頭のなかに、イメージが浮かぶ。

それは太陽の様に暗闇を掻き消し、他を決して寄せ付けぬ孤高さを醸し出している、黄金の鞘。

けど、鞘には剣は付き物。

こんなに気高く在る鞘に選ばれる剣なのだ、それは鞘にとって”特別？な剣なんだろう。

この鞘には、そんな剣がない。

単に鞘のみが写ってるだけで、本当はちゃんと対になるものはあるのかもしれない。

それとは逆に、未だふさわしい剣を見つけていないのか。

私のイメージとして意味深に現れた黄金。

こんな意図や意味を理解できない状況……最近体験してる気がする。

具体的な情景とかは思い出せないけど、その確固たる事実だけは信じていることができるのは何でだろう。

自分が自分じゃない感覚に溺れそうになるも、蒲団から身体を無理矢理引き剥がすことで意識を寒波に向ける。

寒い。もう少しで雪でも降るのかな。

その寒さに意識が嫌でも明瞭になっていく。

パジャマ越しに寒さが伝わってくることで秋の終わりを実感する。これからが大変な時期だ。雪掻きも大変だし、参拝客とも疎遠になつてしまうので里まで行って信仰活動を活発にしないといけない。

『シロウさん………』

そして、あの人と年を明かしたい。彼と初めて会った年の冬を共に満喫したい。

炬燵で蜜柑を食べるのもいいし、童心に帰って雪だるまやかまくらを作って一緒に入るのもいいかな。

クリスマスケーキは……キリスト的にどうなんだろう。

まあ、日本人はそういった信仰とか関係なしに祝い事は祝い事と別物に考えてますし、大丈夫かな。無教徒が殆どを占めてますし。

……なんか自爆した気分。

まあ、これからもっと増えますよね、うん。

目一杯背伸びをし、漏れた吐息が白く染まっているのを認識する。

御二人はシロウさんが自分で帰ってくるのを待てと言いましたが、せめて情報だけでも集めようかな。そうでもしないと、いざという時足取りを掴めなくて予定に狂いが出るでしょうし。

『——よし、今日からでもやろう』

そうと決まれば即行動。私は僅かに心を踊らせ、とっととやることをやってしまおうと意気込んだ。

一途な鞘（後書き）

本当はいつもみたいに別視点も書く予定でしたが、予定以上に一個が長くなったので分割。結果として微妙に短くなりました。なんか短編の方で29ページ分くらい書いたせいか尚更短く感じる。

あと書くことない。

眠い。

だるい。

久しぶりのバイオ0面白い。

酒吞童子と身分に囚われない天人（前書き）

遅れた理由を、1を一番の理由で、と説明するのならば

- 1・課題やつてた
- 2・父の為にバイオハザードのおまけ武器取ってた
- 3・FF11で青魔道士が楽しい

です。殆ど1が理由です。

とは言っても読者様には二週間以上待たせたダラズにしか映らない訳で…………。

ほんとにね、最近更新が滞っててまじヤバイ。モチベーションください。

酒吞童子と身分に囚われない天人

再び早苗達に見つかる事に怯えながらも天界に辿り着くことが出来た。

……いつもこんな心労を抱えてここに来ないといけないというのも辛いな。少なくとも働くことなんかよりは辛い。

やはり私と言う存在は異質なのか、不器用な視線をちらほらと感じる。前は衣玖が隣にいたからかこれほどまでに感じはしなかった。

此方が視線を向けると例外なく慌てて逸らす。

見世物気分で見ておきながら分が悪くなれば知らない振り。生物の本能に近いものとはいえあまりいい気分にはなれない。

取り敢えず前回天子と出会った所まで向かう。

相変わらずの桃の木ばかりの景色。

天子の帽子にも付いていたが、何故桃なのだ……？
正直飽きないのだろうか。いや、飽きるだろ。

そんな莫迦な自問自答をしてると、一様に大きな桃の木の下に二つの影を見掛ける。

目を”強化”し、正体を探ろうとする。

ひとりは、明らかに見覚えのあるオーロラの装飾のあるドレスに丸く黒い帽子。そいつは初めて会った時の様に仰向けに寝転がって居た。

そしてもうひとり——そいつは初めて見る顔だが、誰もがその外観を見れば何者かは判断出来るのではないか。

それは、力の体現。

頭部に角を持ち、人を攫うことで有名な存在。

人間にも異形にも持ちえない腕力を保持し、それ故に畏怖の対象とされ御伽では悪として存在していたそれが、今まさに目の前に存在していた。

——私の予想を遥かに超越する力タチで。

『ん……………？あんた誰だい？天人には見えないけど』

確かに角はある。

側頭部に対を成す様に生えているそれは、力の象徴とでも言わんばかりに捻れ狂っている。

それだけで確固たる証拠になるのだが……………どうにも私はそれを否定したがっている。

だって目の前にいるそれが——鬼というには余りにも幼い肢体で、可愛い少女の姿をしていたから。

『あ、ああ……………。私はそこにいる少女の家庭教師として派遣されたエミヤシロウと言う者だ』

動揺しつつも自己紹介をすると、何を思ったのか少女は一瞬目を見開いた後すぐ不敵な笑みを浮かべる。

『へえ、アンタが。私は伊吹萃香って言うんだ、見て分かるだろうけど鬼だよ』

やはり鬼なのか。失礼千万な考えなんだろうが、事実を知った今で

も鬼とは思えない。

『いやゝすまないね。アンタみたいなのが来るなんて知ってたらコイツ酒なんか吞ませなかったのに』

『いや、これは私の都合を考慮した結果なんだ。不定期にじゃないと来れない身分なんでな、彼女も私が来ることは知らなかった筈だ』

ちらりと眠っている天子を一瞥する。

顔は紅く染まっており、明らかに酔っているのが分かる。

『……………こんなに小さい頃から酒を吞ませるのは感心せんな。脳の神経細胞を破壊し能萎縮を早くもたらす危険性の他、二次成長にも性ホルモンを例として悪影響が出るんだぞ』

私がそう言うが否や、彼女は小馬鹿にする様に肩を竦めた。

『おいおい、まさかコイツが見た目通りのちびっこだと勘違いしてるんじゃないか？天人ってのはね、抽象的に言えば天人となった瞬間から肉体に老いが起こらなくなった奴等のことだよ。少なくとも人間のお前さんなんかよりはずっと妙齡だよ』

少女は手に持った瓢箪をラッパ呑みする。

プハア、と景気良く息を吐き出すと酒独特の臭気が辺りを覆う。中々にアルコールのキツそうな臭いだ。流石は鬼、と言うべきなのか。

『そうだったのか……………。しかし家庭教師として呼ばれたのだから年下を想像するのが定石だろう？』

『まあね。ま、年齢と知慧が比例しないなんて人間同士にだってあ

るだろ?』

『だが今回に関しては極端過ぎるのではないか?』

『違う』

少女は愉しそうに笑う。

鬼が笑っているのだから普通は豪快なものを想像するだろうけれど、その身は似つかわしくない少女の身体。豪快と言うよりも、活発な印象の方が多く見える。

『んっ……と。ホラ、座りなよ。どうせコイツは暫く起きないだろうし、何より起きた所で勉強が身に付くような体調でもないんだ。これも何かの縁だし、盃を交わそうじゃないか』

手招きと地面を指し示すジェスチャーで、此方を促してくる。

酒を吞ませた事に対しての罪悪感など毛頭無いらしい。まあこれに関しておあいこだから、仮にそんな念を抱いてたのなら徒労だと解きほぐしていたであろう。

『しかしだな、私も仕事をしにきた身分であり、彼女がこんな状況であろうと身を崩す訳にはいかないのではないか?』

クライアントである衣玖も近場にはいない様子。

此方は雇われの身なのだ。独自の判断はともかく、身勝手な行動を起こすのは得策ではない。

と言うよりも、やる気が無い風に見られるのが一番の痛手だ。

『かつ、話には聞いてたけど本当に堅い奴なんだな。あい分かった、なら世間話くらいなら構わないだろう?コイツから聞いただけ

の情報じゃあアンタを計ることは難しいだろうしね』

天子が、私の事を彼女に話したのか。

どうせマイナスの所位しか言っていないだろうしな、何よりプラス面を見せた記憶が無い。

『世間話、と言う名目からはみ出た他人を計ると言う言葉。それを聞いて喜んで話すなんて、余程のお人好しでなければしないぞ？』

『ん？コイツから聞いた話じゃあ、アンタコイツが分からなかった部分を何枚ともある紙にびっしりと文字を敷き詰めて渡したらしいじゃないか。普通は知識を与えと言う面に於いてなら、自分である程度調べた方が頭に入るもんだろ？でもアンタはそれを無視し、細部に渡って疑問を解消させる苦勞を自分のみが背負った。半端なものだったら毒にしかないけど、コイツはどうやらきちんと理解してる。教えるという行為の難しさは承知してるからね、アンタがどれほど苦勞したかは想像に難く無い。そんなアンタはお人好し、と言うよりアマちゃんと言った方がしっくりくる位さ』

べらべらと第三者意見を述べた少女は、どや顔で此方を見つめて来る。

——ものを教えるという行為を主にやっている訳では無いから、そこまで頭が回ってなかった。

でも、あの時出した部分はこの世界に浸透した知識なのかと問われると判断に困る。それを念頭に置いたならば、私の行動は間違っていない——筈。

そんな言い訳染みた下らない問答よりも、目の前の少女の洞察力に少し驚いた。

見た目酔っているにも関わらずここまで思考が働くと言うことは、本人のスペックが高いと解釈しても早計ではない筈。

鬼としての能力の高さなのか、彼女自身の能力の高さなのか。何にせよ見かけで判断は出来ない奴ではあるのだけは分かった。

『甘い、か。確かにそうかもな』

ある意味今更なことではある。

甘さ、自己愛護精神の無さ、普通とは違うという事実。何もかもが今更だ、それこそ聞き飽きたくらいに。

この世界でも、やはりこんな在り方は異質なのか。
この世界を、居場所の無くなった存在が集う世界、と私を導いた存在は言った。

私は、まだあの場所に居場所があったとしても言うのか。或いはそんな世界すら受け入れてくれない私になんて価値はないとも言うのか。

それが辛いとは思わないが、虚しくはなる。

異物は異物である限り馴染めない。異質だからこそ私なのに、それがなくなったら私には何も残りはしない。

普通を望む、なんて現金なことはいないが、抜け道がないんだと分かると逆にスッキリする。

横道も存在しない、愚直な直線路。今まで通り莫迦みたいに理想を突き詰めていけばいいだけの話。

一度は壊れた私の存在理由りゆうだけれど、今度は決して迷わない。後ろも向かないし、逃げることもしない。

『ああ、俺は甘い。だけど、別にそれで構わないと思ってる。苦勞するのは自分なんだから人にどうこう言われたって気にしないさ』

いつそ開き直るのもいいかもしれない。

過度に声を荒げる真似はしないが、こうやって口に出すことで改めて自己認識ができるし、他人にも伝わる。

少しは意識改革をしたほうがいいのかもな。生まれ変わる、とまではいかないが過去の自分に引け目や負い目を覚えてるようでは結局のところ全てが無為になってしまうだろうし。

『――』

ふと、萃香が豆鉄砲を食らったような表情をしていることに気付く。

『どうした？』

『いや……さっきまでのアンタとなんか雰囲気が変わったからさ。いや、雰囲気なんてレベルじゃない。別人かと勘違いしたくらいさ』

……それは有り得ないだろ。意識したとはいえ、別人というのは勘違いに決まっている。

だいたい私を変えたいのは考え方であって、性格や口調――詰まるところの外郭の変化ではない。

ましてや雰囲気なんて簡単に変えられるものか。そんな楽に変えられるのなら、本当の自分なんてものは証明できなくなる。それでは意味がない。

『それは完全に勘違いであろう。そこまで極端に雰囲気を変化できるのならば、私は暗殺者にでもなってるであろうよ』

『あ、戻った』

『またか……………』

思わず溜息を吐いてしまう。

なんだか振り回されている感が否めないせいか、妙に疲れてしまう。彼女にとってはそう感じたのだから嘘ではないのだろうけど、自覚がない当人からすれば霧を掴まされてる気分だ。

『おいおい、溜息なんか吐いたら不幸しか残らないぞ。気を晴らすんなら、やっぱ酒が一番！』

そう言つてズイと再び盃を突き出してくる。単に酒呑み仲間が欲しいだけなんだろうが。

……………だが、少しだけでもいいか、と考えてしまう自分に情けなさを感じる。

『別に構いませんよ？総領娘様がこれでは無理なのは見て取れますし』

突如背後から聞き覚えのある声が聞こえたので振り向くと、案の定そこには衣玖がいた。

『いつの間にそこに』

『気にしないで下さい』

『いや、タイミング良すぎであろう』

『空気を讀んだ結果です』

『ではずっと見てたのか？』

『いいえ、さつきまでずっと別件で席を外していました』

此方の質問を、まるで作文を読むみたいにつらつらと述べていく。

まさにナイスタイミングと言わんばかりに登場した彼女だが、言動には矛盾が生じてる。

いや、矛盾とかではなく、出来過ぎていると言ったほうがいいのか。別件で席を外していたのにも関わらず、空気を読んだとまるで謀ったような言い方をした。

偶然というにはまるで予め予測されていた台詞。席を外す、という言葉に嘘があるのかもしれないが、サプライズ以外にする意味のないものだ。

これで会うのは二度目だが、なんとなく彼女はそういった趣向とかは凝らさないタイプだと思う。

別につまらない人間と言うのではない。単にユーモアをひけらかす様な風には感じないだけだ。

『……………まあいい。だそうだ伊吹萃香よ、これで大手を振って酒の肴を捕まえられるぞ？』

『うん、許可も貰ったんだし、出来うる限り付き合ってもらうからなー』

皮肉はその耳には届いていないようで、目の前の欲望のみが彼女の意識を支配している。

それとも酒呑み相手にまともな反応は期待するなとでも？ある意味納得はできるがな。

『では、私は失礼しますね』

まさに子供の笑顔で酒の入った盃を渡してくる。

これでも鬼なのだから、世の中分らないものである。

前に神奈子達と出会った際にも酒を勧められたが、私のための席であつた筈なのに二人の方が異様にテンションが上がつて逆に私が杓をする立場になつており、殆ど呑む立場にはなれなかった。早苗もそんな光景を見て苦笑してたのが懐かしい。

………て言つか衣玖がまさに空気のようにその場から去つたことに誰も突つ込まないのか。

まさに空気を読んだ、というべきか。

サーヴァントは戦いの道具として再構成された存在だ。試した記憶はないが、酒を飲んでも酔わない可能性はある。

余分なものを削ぎ落とした存在ではあるが、元が人間である故その面影はきちんと存在している。勿論内臓器官も含め、だ。

食事をしなくてもいい存在なのに味覚はきちんと存在しているし、量を満たせば排泄だつてする。

実際、私も凜の食事を作る際味見程度ならばしたことはある。塵も積もれば、なんて言葉にもある通り、回数を重ねれば当然その行為に至る訳だが。

………まあそういうことだ。この身を以つてそれは実感しているが、酒で酔わないのかまでは知らない。

病気に掛からないのは間違いない。肉体が生前と変わらないとは言え、構成する素体はエーテルだ、人間の常識は当てはまらない。

アルコール中毒、なんて言葉もあるからもしかすると酔わない可能性もある。私はそれでも構わないが、目の前の鬼が満足するかどうかは別だ。どうせ酔わない酒に意味は、とか、下手をすれば酔わな

いからって度の強い酒をどんどん拝借、または強奪してくるかもしれない。それは困る、色々な意味で。

酔った振り、なんてものも出来る筈なく、結局はなるようになるしかないのだ。

手に盃を受け取り、出来うる限り一気に飲み干す。

ここでちまちまと飲んでいたら女々しいだと茶々を入れられるだけだ。

酒は大して嗜まないが、こういった席で憂いを抱えたままというのは相手にも失礼だというのはなんとなく理解している。

……美味しい、のかはよく分からないが、異常なまでに度が強いというのだけは分かった。

顔を近づければ更に理解出来た酸っぱい臭いに、涙目になりそうなくらいの蒸発したアルコールが顔一杯に触れたりと呑むだけでもかなりの覚悟が必要だった。

結論としてサーヴァントの身体で酔いは起こらないらしい。そうでなければ、人間が呑んだら酒豪でもない限り一瞬でリタイアしかねんものに、普段から嗜むことのないこの身体が耐えられる訳がない。

『おう！男らしい呑みっぷりだねえ！なんでか知らないけど鬼の酒を呑んでもケロッとしてるってことは、人間としてはかなり酒に強いのかねえ？』

『——さてな。それよりも鬼の酒と定義したそれだが、半端無いアルコールだったぞ。鬼にとってはそれが当たり前の純度なのか？』

『ん？まあ普通、と言う訳ではないけど、普段から持ち歩いてるからそうなのかな』

ひよい、と紫色の瓢箪を見せてくる。どうやらさっきの酒はこれに入っていたものらしい。

『聞いたことはないかい？ 鬼や河童から無限に酒や小判が出てくる物を渡される、っての。それは決して嘘じゃないよ。これもまた、酒が無限に——でもないか。永久機関とまではいかないけど、この瓢箪の中には水を酒に変える虫が入ってるから、水さえあればいつでも酒が吞めるって優れ物さ』

平安時代の文献だったかに、確かにそういった記述が書き込まれていた気がする。

私の生涯戦い続ける相手であるイメージ。それに負けない為に武器の歴史とかは大量に読破した。この知識も、そこから派生したものに過ぎないが、まさか再び掘り起こされることになるうとは。

『なるほど、酒の純度はその虫が操っているから自分の意思では変えられないのか』

『うん。だから飽きるんだよね。本当に。なんかいい酒知らないかい？とは言っても、私が味わったことはなくても知らないって酒は無いとは思っけど』

……外の酒はどうなんだろう。言ってしまうと取り返しがつかないだろうし言わないが。
喰いついたら最後。間違いなく用意するまでひつついてくるのではないか？

『期待に添えず申し訳ないが私は酒には詳しくない。ここ最近まで酒とは無縁な生活をしていたものでな』

生前も、聖杯戦争のときもそんな娯楽に手をつける余裕などなかった。

前者は理想を突き詰めることばかりに行き急いでた為で、後者は過去の自身を殺そうと躍起になっていた為。

自分でもそんな人生になるとは理解していたから後悔などは別にしていないが、そのせいかそういったものの楽しみ方というものを忘れてしまったのかもしれない。

凜からすればそういったものを取り戻すことを望んでいたのだろうが、取り敢えず今のところ期待には添えていない。

『それは残念。ま、大して期待はしてないけどさ』

口ではそう言っているが、微妙に影が射しているのがバレバレだ。

そして再び酒を口に含んだ。

満足そうな表情を見ていると、先ほどまでの憂いなどまるで完全に忘れてしまったのではないかと言わんばかりの悦しそうな顔になっていた。

『それにしても……正直少しだけ気になることがあるんだけど』

『ん？』

『いやね、アンタが知ってるかは知らないけど、天人ってのは簡単に言えばプライドの塊で出来てる貴族様って奴なんだけど、今爆睡してるコイツもかなーり我儘で唯我独尊だからさ、家庭教師なんて相手に下手になるような関係なんて絶対に拒否すると思ってたんだよね。だからよく承諾したなって』

天界の様子からなんとなくは察していたが、やはり裕福な生活をし

ている者ばかりなんだな。

着ている物や華美な装飾をふんだんに使用している辺りが、人間の里の暮らしと比較するとまさに雲泥の差だ。

まあ確かに、優雅な生活をしている人間というのは外見で優雅に振舞っているか、自分が金持ちだということを余すことなく自慢したり、それこそ一般市民を見下すのが常な奴もいるしな。全種類と面識があるというのは珍しいんじゃないか？

……その分苦労しているということも分かって欲しい。

『確かに彼女に振り回されたりもしたが、最終的には彼女の出した勝負に勝ってこの位置に落ち着くことができた。とは言っても本当に嫌だったのなら、なにがなんでも拒否しようとするのではないか？衣玖の口振りでは私はお役御免では無い様だし、私は彼女を聞き分けの良い素直な子だと今は思っているがな』

これは素直に思っていることで、もし彼女が言うように天人として染まってしまうのなら、自分より地位の低い相手なんか意にも介さないうに決まっている。

しかし、彼女はそうしなかった。我儘で唯我独尊なのは認めるが、性根は天人なんてものに染まっていけない——それこそ普通の人と何ら変わらないのではないかと推測している。

『……………やっぱアンタはお人好しだと思うよ。そんなに簡単に誰かを認めるなんてのは、疑り深く嘔吐きな人間には出来ないことだ。でも、アンタの言葉からは嘘は欠片ほども見えない。嘘に敏感な鬼が言うんだから、それこそ嘘はそこに存在しない。可笑しな奴だね、ホント』

呆れるように語る萃香だが、その言葉ひとつひとつには抑揚があり、嬉しそうにさえも感じ取れる。

鬼は嘘が嫌い——か。

嘘は確かに悪いものが殆どではあるが、そうでない嘘というものも存在する。

彼女ならそんな嘘はないと言い張るのだろうか……もしそんな状況でも彼女なら真実を告げたりするのだろうか。

……いや、思想が根本で異なるのだ。鬼からすれば愚問なのだろう。

人間の間でだって思想の食い違いなんて当たり前に存在する。だから悲しいというよりも、仕方ないことだと淡泊にしか考えられない自分がいる。

人間という存在が、どれほどまでに愚かしいのかを私はこの身を以って体験したからな。他人との違いなんてものは私からすれば当たり前前のことであり、その意識が根強く働いてるからこそ妖怪や神と呼ばれる者と顔を合わせても、過剰に驚くなんてことはしなかったんだろう。

元々常識とはかけ離れた生き方をしてたお陰でここで順応出来ているのだと考えたなら、自分の人生も捨てたものではないかなと少しだけ前向きになれるかもしれない。

『——あれ？なんでアンタがここにいるの？』

物思いに耽っていると天子が起きたらしく、いつの間にかいた私に対して疑問符を浮かべている。

『単純な話だ。私は君の家庭教師としてここを訪れ、君は酒を呑み酔い潰れていた。仕方なく同伴していた萃香と少し酒を交わし、語らい合っていただけだ』

『ふうん……。仕事に来たのに酒とはいい度胸じゃない』

『君こそ私が来る可能性を考慮せず酒に溺れていたのだ、おあいこであるっ』

『なんでいつ来るか分からないアンタのことなんか気にしなきゃいけないのよ』

『心構えの話だよ。まがりなりにも君は教えを請う立場なんだから、意識さえしていれば酒の量を控えることも出来たのではと言ってるんだ』

『だーかーらー、そんなの不定期で来るのを頼んだ奴の台詞じゃないと思いますけどー』

『そうやって自分を棚に上げるのは勝手だが、そんな事ばかりしていたら足元を掬われるぞ？前みたいに、な』

起き抜けなのに元気な天子を見て、口論とは裏腹に安心する。目の前にいるのは天人という粹で語れる存在ではなく、比那名居天子という個の存在であるということによる満足感が私を支配していた。

ここにいるのは、ただ純粹に私に対して不平不満を持っている一介の少女。貴族なんてしがらみはそこにはない、自然体そのものだ。

『くっ、はははっ！なんだ天子よう、毛嫌いするようにコイツのこ」と語ってたくせに、本当は仲良いんじゃないかい』

『なっ、ななっ——！！』

かんらんらと笑うのは、蚊帳の外の鬼の少女。

彼女からすればこの軽い騒動は肴なのだろう。いい身分なものだ。

『ちちつ、違うわよ！なんで天人である私がコイツみたいな地上の人間なんかとそんな関係になんないといけないのよ！』

『ん？そんな関係って、どんな関係よ。私は単にそうやって愉しそうにしているなと思ってただけだけど、これは――』

『うるっさい！この莫迦鬼が！』

湯で蛸のように顔を紅くさせ激昂する天子は萃香へと覆い被さるように襲いかかるが、萃香はそれを冷静に横にずれて回避し、天子は地面へと叩きつけられた。

『アハハ、んじゃこわい天人様もいることですしそろそろおいとまさせて頂きますか。シロウ、アンタは結構面白いからまた会いに行くよ』

そんな無様な姿を晒した天子など意に介さない様子で私へと向きあい、僅かに頬を歪めた。

『私は多忙の身でな、各地を練り歩いているし会えた所で仕事もある。構ってやれるかはわからんぞ？』

『いいよ、その時はどうにかしてアンタにちょっかい出すから。異論は認めない』

『反抗はしていいのか』

『してくれないと面白くないじゃん』

鬼の少女は、本当に愉しそうにそう答えた。

そんな表情をされては、嫌とは言えなくなってしまう。そのくらいに眩しかった。

……… 本当、女性の笑顔は卑怯だと思う。断れない自分もまた、弱いと思う。

これはなんだ？ 遺伝子レベルにでも女性に勝てないという何かが刻まれているとも言うのか。

—— そうだとしたら、私の遺伝子はどれだけヘタレなんだ。情けない、というよりも我ながら呆れて何も言えない。

『ではさらばなり』

そう言うと、比喻などではなく文字通り身体が霧散し、跡形もなく消え去った。

一体どういうことなのかと問いただそうにも、今や目の前にいないであろう存在に聞くこともできる筈もなく、仕方ないので放置されていた天子を起こすことにした。

『大丈夫か？』

『うう〜…………… あんにゃろ〜！』

『そんな言葉遣いはやめたまえ、はしたない』

『だって——』

『何が勘に触ったのかは知らんが、そういちいち怒っていては身が持たないぞ？受け流す度量を身につければ少しは楽になるさ』

『――』

冷静さを取り戻したのか、天子は何も言わず此方の言葉を聞こうとしている。

やはり、聞き分けはいい子だ。ただ、天人という立場がそれを隠しているだけであって。

『自尊心を保ちたいのなら、常に落ち着きのある行動を心がけた方がいい。なんなら私が微力ながら助力してやることもできるが』

『何でアンタに――』

『一時の恥と、永遠の恥。どちらを望む？』

天人としてのプライドを捨て自身の力とするために頭を垂れるか、プライドを優先し塗り固められた嘘を着たまま一生を過ごすか。彼女がどっちを選ぶかによって、価値が分かれる。

とは言っても、私が信じた理想の彼女ならば、どう決断するかは聞く必要はない。

信用ではなく、信頼。

会って間もない相手にこのような感情を持つのは間違ってるのは言われなくても分かっている。

でも、やはりこれが私なんだ。

自分でもわかるくらい莫迦でお人好しで――どんなに痛い目を見ても最後にはこうなってしまう。

逆に言えば、これらが私を象徴するものであり、欠けてしまえばそれはエミヤシロウではなくなる。

凜が幸せになることを望んだエミヤシロウで在り続ける為には、何が欠けてもいけないんだ。

だから、私は――

『……………分かったわよ。どうせ何か教えてもらうんだったら、実用的なものを教えてもらうのが合理的よね。そうやって言っただけからには、私に恥の文字を抹消する気概で教えなさいよね！』

ふん、と鼻を鳴らし目を逸らした表情は、酒のせいか羞恥のせいか、終始紅みを残している。

私は満足げに頷くと、彼女の頭を撫でていた。

『うむ、期待に添えるよう身を粉にして働こう』

『ちよつ、離しなさいよ！』

『別に良いではないか。今は教え子と家庭教師の立場なんだ、そこには天人もいち市民もないのだから気にしなくていい』

『そうじゃなくて……………もういいわ』

撫で回していた腕を剥がそうとしていたが、すぐに諦めたらしく今度は項垂れた。

……………少しは彼女に信用されたのかな？と解釈する。本人が言えば間違いなく否定するので、心の中に留めておこう。

天を貫く世界で、不器用に触れ合った二人の別の生き物。
ほつれただけだけれど、そこには種族や身分を越えた一本の細い絆
があつた。

酒呑童子と身分に囚われない天人（後書き）

正直、サーヴァントが酒に酔うかって部分は原作表記なかった（筈）ので、自己解釈してます。人間とは異なる身体だし、まあ大丈夫だと信じて。

今回は初登場の時からラスボスのカリスマがなかった伊吹萃香の紹介。

いぶきすいか
伊吹萃香

種族：鬼

能力：密と疎を操る程度の能力

二つ名：小さな百鬼夜行

つるぺた幼女。これだけ分かってたらしい気がしてきた。

ではなく、鬼です。怪力を持ってます。鬼を語る上で欠かせないものですね。

小さな身体ではあるけど、その力は恐らく幻想郷いちを接戦するかもしれないかってレベル。多分一番は同種の鬼キャラがいるからそいつかも。

彼女がいつも手に持っている瓢箪は伊吹瓢と呼ばれるもので、「酒虫」と言う水を酒に変える虫を入れてただの水を酒にしたもので、瓢箪自体は見た目どりの容量しか無いため、一度に出せる酒は限られている。あと、適量しか出ないようにストッパー付き、便利だ。武器としても使用するというところから分かる通り、かなり丈夫。

両手と髪に三種の分銅を付けており、各々は下記の意味を表してい

る。

右手：赤色の三角錐 「調和」を司り、「密」の力を意味する。

左手：黄色の球体 「無」を司り、「疎」の力を意味する。

髪：水色の立方体 「不変」を司り、自分自身を意味する。

性格は、勝負事が好きで、嘘を嫌い、酒飲みで、豪快な性格をしている。情にも厚く、仲間を裏切る事は決して無いが、敵に対しては寧猛で容赦がない。

彼女自身は、そんな鬼とは僅かに異なり、鬼も多少は嘘を吐くだろうと言葉を濁している。

そのせいかイレギュラーに扱われている部分もあるらしい。

鬼は古くから幻想郷の地に住んでおり、人間に勝負を挑んでは負かした人間を攫っていたが、人間と鬼ではあまりにも力の差があるため、普通の人間では滅多に勝つ事は無く攫われる一方であった。

鬼は普通の妖怪とは違い、専門家による専門の方法でないと退治が出来ない。昔は人間にも鬼退治の専門家があり、妖怪と妖怪退治の専門家のような関係が存在したが、現在は鬼が幻想郷から姿を消して久しく、鬼退治の方法は失われてしまっている。

昔は幻想郷の地にも多くの鬼がいたが、次第に数を減らして行き、博麗大結界が創造され幻想郷が外の世界と隔離されたあたりではほぼ見かける事がなくなった。鬼退治家に根絶されてしまったと言いつ訳では無いようだが、姿を消した詳しい理由は不明である。

幻想郷の地に住んでいた頃は、鬼は妖怪の山に住み、天狗や河童を使役して縦社会を築いていたと言われる。鬼がいない現在は妖怪の山は天狗を頂点とした社会であるが、その基礎は鬼が築いたものである。

今は鬼がいない構図で妖怪社会が定着しているとは言え、鬼が元上

司であつた事、戻ってくれば鬼を頂点とする社会に戻らざるを得ない事は未だに残っているようで、射命丸やにとりは萃香達に対しては頭が上がないらしい。

でもやっぱり、つるぺた幼女つてのを分かってればいいよ。うん。

自覚する変貌（前書き）

感想で多大な疑問点や改善点を書いてもらい、とても力となりました。後日修正を図っていききたいと思います。

自覚する変貌

『君に必要なのは冷静さだと思う。先程みたいに、激昂し挑発に乗り無様な姿を晒さない様にするには、些細な事では動揺しない心の強さが求められる』

今回はホワイトボードは使わず、二人とも座り目線を合わせた状態で説明をしている。

物覚えが良いのは前回で理解しているので、口頭だけでもなんとかなると判断した。

と言うよりも、この手の内容を書いて説明した所で大した意味は持たない。こういうのは彼女が感覚的に理解しないと身につかないのだ。

『冷静さ、かあ。アンタが私にどれだけを求めるかによっては、面倒臭さもだいぶ解消されるんだけど』

『恥の字を無くす勢いで来いと言ったのは君だろう』

『そうだけど、やっぱりダルい』

天子は地面を適当に弄り回し、遊んでいる。

こう言った仕草を見るに、落ち着きが無いのもバレバレだ。中々に骨が折れそうだな。

『こつちも仕事なんだ。ある程度は働かないと金が貰えないのだよ』

『金ねえ。こんな身分になっちゃった時から、そんなもんに興味なんかなくなっちゃったわ』

本当に興味無さそうにそう呟く。

高貴な身分な立場だと、それは湯水に等しいものであり、当たり前
に身近にあるものに興味が沸かないと言うのはどこでもあることな
んだな。

凛は結構身分ある立場だったけど金に関してはかなりがめつかった
な。多分宝石の消費量とかも馬鹿にならないからなのだろうけど。

『——ん？ なっちゃった、とはどういう意味だ？』

ふと、引つかかった疑問を投げ掛ける。

まるで最初からこの地位に座してはいなかった様な口ぶりだ。

『——あ、』

しまった、と言わんばかりのバツの悪い表情をした後、何故かジト
目で此方を睨んできた。

『そんなの、アンタには関係ないでしょ』

『まあ、そうだがな』

『ならさっきのは忘れなさい』

……彼女は先程の話題に触れることを嫌がっている。それは明白
な事実だろう。

別にそれは構わない。私には無理強いしてまで興味をそそられるも
のでも無ければ、強要する権利も無い。

しかし、だ。

彼女がこれ以上の介入を拒んだ時の表情——そこには一瞬だが、影が射していた。

彼女が有利になる事柄が内容だったならば、そんな表情どころか話を拒むなんて事もしないのではないか？偏見かもしれないが、自分の高い者と言うのは得てして自慢好きだと思っている自分としては、そんな表情をした時点でその内容が彼女に取ってどの様なものなのかは理解出来てしまう。

だから、私は詮索はしない。

彼女の家の事情も含まれているだろうし、部外者が口を挟む余地は無い。

……しかし、彼女から何か語るのであれば、私もまたそれを拒むことはしない。

軽い気持ちで話せる内容ではないのだ、決心を以て私を頼って来たならば——それに全力で応えるだけだ。

『了解した。では、先程の話に戻そうか』

『ああ、そうだったわね』

再び面倒臭そうに息を吐きながら呟く。

こんなやり取りをしていても埒が明かない。よって、多少強引にでも始めよう。

『そうやって逃げてばかりだと前みたいな痴態を晒す羽目になるぞ？まあ、恥を晒すのは君だから私には関係無い事だがな』

『ぐっ』

言葉に詰まった天子は、恨めしそうに此方を睨みつけてくる。

お門違いも甚だしいが、言った所で無駄に怒らせるだけなので無視を決める。

『——分かったわよ、今度こそ腹を決めたから、お願いするわ』

『うむ、やはり素直が一番だな』

『勘違いしないで、私は私の為にアンタを利用するだけなんだから』

『私としては君が頑張ってくれるならば前向上も建前もどうでもいいんだがな』

『たっ、建前なんかじゃないわよ！』

『いやいや、君の発言がそうだった訳では——』

つと、また話が脱線してしまった。戻そうとしている立場の人間がこれでは、人の事を言えたものじゃないな。自重せねば。

『——よし、では始めよう』

パンパンと両手で乾いた音を響かせ、仕切り直しの合図とし、気持ち切り替える。

いきなりの行動に天子は驚くも、何を意図するものかは読み取った様子で、それ以降押し黙った。

こうして、やっと私達は家庭教師と教え子の立場へと復帰した。

山道をゆったりと歩くと、やはり心地よい。空を飛ぶのもまたそれで趣きがあるんだけど、やはり慣れた感覚と言うのが一番馴染むものなんだろう。

今朝シロウさんを探そうと決意し、今それを始めた。

家事全般も早く終わらせ、出来る限り探す時間に当てる。

空を飛ばないのは、見落とすを無くす為。シロウさんは何故かうちに戻らない理由は分からないが、多分私があんな事をしちゃったせいなんだろう。

下手をすれば怪我では済まなかった行為。簡単に赦されるとは到底思わない。

彼が私を見て逃げる、なんて可能性は非常に高いと判断し、私は出来る範囲で彼にバレない様に近付かないといけない。

謝りたい。

赦されたいからではなく、彼には枷になって欲しくないから。

私のせいで不自由に生活してるんだって思うと、心臓を握られるみたいな苦しさが収まらない。

守矢に帰って来て、なんて高望みはしない。ただ、それならそれで彼を束縛するものを解いてあげるだけ。

でももし、彼がまた戻ってくれるなら、その時は――

「ん？貴女は確か山の神様に仕えてる――」

突然の声に身体全体で驚く。

声の先には、ここ妖怪の山に住んでいる河童の河城にとりさんがいた。

『ど、どうも。東風谷早苗です。貴女はにとりさんですよ？』

『あら、名前を覚えてくれてるなんて少し嬉しいかな』

相変わらずの大きなリュックを背負い、悠々と目の前まで歩いて来る。

見た目は私より幼く見えても、やっぱり妖怪なんだなあって実感出来る。

『何をされてたんですか？』

『いやあね、最近限りなく本物に近い動物を作ったんだけど、暴走しちゃってね。その改善策が思い浮かばないから、こうやって練り歩いてインスピレーションを働かせる何かを求めているってこと』

彼女達の技術力は、外の世界のそれと同等かそれ以上だとか。

信じられなかったりもしたが、何度か使えなくなった機械を持っていたら意外と簡単に修理、再構成してくれたので嘘では無い。

『インスピレーション、ですか。それにしても凄いですね、限りなく本物に近い動物って、想像つきませんよ』

外でもいいとこ外観が明らかに機械なものぐらいしか無いし、限りなくなんて銘打つんだから、見た目もAIもかなりのスペックを誇るんだろっなあ。

『まあ……………その暴走した時に人間に助けられてね。放置してたらそこら中大惨事になってたね』

『大惨事……………？』

『外から来たんなら知ってるでしょ？ ティラノサウルスっての』

『——へ？』

ティラノサウルスって——あの恐竜の？

嘘、そんなのがこの近くで暴れてたならすぐに分かると思うのに……。

……あれ？ 確かシロウさんが初めて一人で出掛けた日の直後に地震が一瞬だけあったかも。

確信は出来ないが、本物に近い恐竜を止めた人間と、シロウさんの出掛けた時間に、地震の発生した間隔の短さ。これらが全て繋がっているのならば、理に適うんだけど。

恐竜を倒せる人間なんてここじゃあ限定されるし、もし霊夢さんとかなら人間と言うカテゴリーではなく名前で呼ぶだろうし、他のタイミングも含め一番納得がいく結論はこれしかない。

『あの、もしかしてその人間と言うのは、白髪で紅い外套と黒い鎧を着けていませんか？』

的を射たのか、そう告げるとにとりさんが明らかな反応を示した。

これで全て合致した。

『もしかして知り合いなのか？ ああ確かにそんな風体の男だったな。シロウって名乗ってたよ確か』

『そうだったんですか……』

これは嬉しい誤算だ。彼女ならシロウさんの行方に関する情報を持

っているかもしれない。

『ああ。ビックリしたよ、何せまるで妖怪——いや、それ以上かもしれない動きで的確に弱点を狙う姿は、鷹を思わせたね。正直な話、私じゃあ勝てる気はしないね』

アハハ、と喝いた笑い声が響く。

僅かにだけど、そこからは悔しさを垣間見る事が出来た。

シロウさんの強さに関しては何も聞いていない。聖杯戦争なんて代物に参加してたんだし漠然とは想像出来たけど、まさか妖怪を凹ませる程強いなんてやっぱり凄いな、シロウさんは。家事も出来て人当たりも良いししかも妖怪にも引けを取らない強さを持つてるだなんて、パーフェクトじゃないですか。

……やっぱり、こう言った人は色んな人に好かれるんだろうなあ。

私は知らず、拳を握り締めていた。

『——あのつ、私はその人を探してるんです。何処に行ったかとかはご存じありませんか？』

『いや、分からないね。シロウに会ったのは一回切りだし、それからだいぶ日も経っている。特別親しい訳でもなし、期待には到底添えないよ』

『そうですか………』

彼の情報を掴めなかった悲しみと同時に、彼女が彼の情報を知り得なかったと言う事実喜んでる自分がいる。目的と矛盾した、醜い思考。

今一番大事なのは彼に会う為の情報を得る事で、そこに私の身勝手な感情など介入する余地は微塵も存在しない。それに、彼女も言っていた通り二人は親しい間柄では無いのだ。何も焦る必要は無い。

——焦る？ 一体何に焦る必要があるの？

別に彼が誰と何をしていようが私が関与するものなんて何一つありはしないのに。

これは一般的な人付き合いの枠を出ていない行動に過ぎない。

なのに、私はこんなにも醜い感情を渦巻かせている。彼女がシロウさんと知り合いだと言っただけで気が変になる錯覚を覚える。

妹紅さんとの会話の時と同じだ、私はまた我を忘れそうになっている。

『分かりました。それでは失礼しました！』

私は逃げる様にその場から闇雲に走り出した。

にとりさんが静止を促す言葉を言っていた気がするが、それを無視し走り続ける。

いけない。そうすれば間違いなく矛先はにとりさんへと向けられる。自制出来る自信が無いのなら、その場から立ち去るのが正しい選択だ。

にとりさんには少し悪い事をした気分になってしまいが、本当に悪い事をする位なら多少変に見られる方がいい。

最近の私は変だ。

それは分かっていたつもりだったが、それを改めて認識した事で下手に混乱を産むだけの結果となってしまった。

まるでその瞬間だけ、自分が自分じゃない様な感覚に襲われる。

気持ち悪い。

醜い感情を押し出そうとする自分が。

誰かを平気で傷つけようとした自分が。

—— そんな感情に抵抗出来ない自分自身が。

『はあっ—— はあ』

息もたえだえに立ち止まる。

…… ここに来てから昔よりも体力が落ちた気がします。自由に空を飛べる世界だから、こうやって歩くななんて事自体が無意味になつていたせいだろう。

シロウさんは飛べないんだから、彼と共に往くなら足腰を少しでも強くしておかないと。

—— なんて、彼が戻って来る事を前提に妄想を爆発させてる訳だけど、事が済めば虚しさしか込み上げて来ない。

独りよがりで浅ましい、自分勝手な理想。

それを壊したのは私なのに、都合の良い世界を望んでいる自分がいる。

—— 人間は自分勝手だ。それは例に漏れず私も範疇に入る。

欲望には際限が無い。それらを叶える為に生きてると言っても過言では無い私達。

でも、それを叶えるには圧倒的に個の力が弱すぎる。

故に、人は利害の一致した者協力する。

…… いや、協力なんて友好的なものではない。利用し合っている、というのが正しい。

内心で否定しようとも、心の奥底では他人を蹴落とし自分が有利に働く結果をもたらそうと算段しているものだ。

別にそれを否定する気は無い。

私にだって野心はある。テストで高い点数を取ることだって、他人より高みに行くことであり、それは同時に他人を蹴落とす行為でもある。

その他にも知識や技術がものを言う社会では、弱肉強食が当然。裕福な生活を送りたいのならその地位に昇り詰めるまでの過程で邪魔な存在を利用し、蹴落とさないといけない。

深刻な例えではない様に見えるが、生きる上で必要な行為の殆どは自分のみが幸せになるもので、他人は逆に不幸になる。

極端な変異が見られないものもあればあからさまなものまであり、些細な部分に関しては大して気にも留めなくせ、明らかな変化が見られるとそれを悪意と認識する。自分だって、幾度となく他人を貶めてきたくせに。

そんな自分勝手が当たり前に蔓延る世界。そんな世界に浸食された私。何の因果か、私はそんな世界に囚われていない存在を知ってしまった。

自分のことは二次、他人を常に優先し、そんな他人に一度殺された悲しい人。

なのにあの人は私達を見て笑っていた。醜悪で他人を貶めるだけの存在である私達を見て、怒ることも憎しみをぶつけることもしなかった。

それどころか彼は殺した人を憎むことはせず、過去の自分を否定し続けた。

狂ってる。と誰もが思うだろう。

私も最初は少し思ってしまった。当然とまでは言わないけれど、そこまで他人に固執すると言うのは、人間の在り方と大きく反しているから。

ただあの人と一緒に生活してる内に……彼のそんな姿を、美しいとまで思うようになっていた。

影響、よりも感染、が正しいかもしれない。それは彼の在り方が余りにも病的で、そうでもないとなんか莫迦な人間がこの世に増えるとは到底思えないからだ。

……常識に囚われないこの世界でも、多分この考え方は異質なんだろう。皆が外よりも自由に生きている分個としての我は強まっているだろうし、他人優先の考え方は逆に外よりも異端視されてるんじゃないだろうか。

正直、彼がそんな人だと誰かが知って迫害するような扱いなんかされたないだろうかと不安になってきた。

彼は何も言わずあるがままを受け入れるだろうし、それをいいことにどんどん過激になっていく可能性だってある。

もし本当にそうなら……シロウさんに嫌われるだろうけど、そいつら全員■しちゃおうかなあ、フフツ。

彼が手出ししないことをいいことにそんなことする屑には、生きてきた年数分の後悔をくれてやりましょう。

仏教には輪廻転生なんてものもありますし、次世代の記憶にも残る様な苦痛を与えて、何度も何度も後悔させてやるんです。勿論、並大抵の事では許しませんけどね。

『クツ——ハハハツ——！』

あれ、おかしいなあ。いけない事だって分かっているのに、どんな痛みを刻もうか考えるだけで背筋が鳥肌で一杯になる。

あの人を否定した奴等の返り血で化粧をした自分の姿を想像して、エンドルフィンが活性化したみたいな戦慄を覚えたりもした。

考えるだけでもこれなのに、もし実行したものなら一体ドンナ快樂

ヲ得ラレルンダロウ――

ばさり、と羽ばたく音が聞こえた。

その方向を見ると、空中で静止して何か考え事をしている妖怪の姿があった。

よし、あの人にも話を聞こう。何事も情報が大事だとさっきので理解しましたからね。

『あのー少しよろしいでしょうか？』

『え？はい、何でしょう？』

刺激を与えない様にゆつくりと飛翔し話かけるが、特に私の介入を気にした様子もなかったらしく至って普通に対応してきた。

『あれ、貴女は射命丸さんでしたっけ』

『はい、私は清く正しい新聞記者の射命丸文ですよ？』

これは運がいい。普段文々。新聞を発行している彼女ならば、外から来た彼と接触を図っている可能性が高い。

飯に無いとしても、どうにかして懐柔させて探りを入れる手伝いをさせる事も出来そう。

『俗世の流行の知識網羅してると思われる貴女に聞きたい事があります……』

『え？あ、はは………そんな、それほどでも無いですよ』

恥ずかしそうにはにかむ姿を見て、内心ほくそ笑む。

何ともおだてりや木に登る、ですね。こんな分かりやすい社交辞令に反応するなんて、単純。

これなら幾らでも利用価値があるかもしれませんね……

『えっと、髪は真っ白なオールバックで紅い外套を纏った男性を知りませんか？背も結構高いので、結構目立つと思うのですが』

『えっ——ああ、うん、そうですねえ』

彼女の一瞬の動揺を、私は見逃さなかった。

明らかに濁した言葉、先程とは違い覇気の無い言動、僅かに逸らした視線。

彼女が何か知っているのは確定した、が——何故隠そうとしているのか。

別にそんな風体の男を知っているだけならばそんな事をする意味も無いし、逆に私との関係辺り取材のネタにしようと食いついてくるに決まっている。

それなのに今の彼女は、まるでいたたまれない空気の中自然に逃げ出す言い訳を考えている子供みたいに人目を気にし、ソワソワしている。此方に食ってかかる雰囲気はゼロだ。

これを不審と思わず何で思うのか。

『あれ、もしかして知っているんですか？』

『えっ！？いやあ……うん、知りませんよそんな人』

取り繕った笑顔と渴いた笑い声が木霊する。

こんなの語るに落ちているに等しい。こんなんで記者なんか出来るんでしょうかねえ。

しかし……弱りましたね。彼女がどんな意図でシロウさんの情報を秘匿しようとしているのかは知りませんが、私には彼女から聞き出す手段は持ち得ていません。

霊夢さんみたいに気に入らない事や知りたい事があつたら実力行使、なんて荒事は好きじゃないですし、力もありません。

しかも彼女は天狗と言う、妖怪の地位ではそれなりに高い種族だ。妖怪の社会は結構分かりやすく実力主義のピラミッドで出来ているとか。

つまりは、位と比例して実力もあると考えていい。そんな奴と戦つて勝つと言うのは、流石に夢物語であろう。

私はそんな無謀な真似はしない。と言うか出来ないのは承知している。

『知ってるんですね？』

故に、私は穩便に事を運ぶ道を選ぶ。

今にも飛び付きたい衝動を抑え、表情は笑顔で染める。

彼女からの印象を出来る限り上げ、そこはかとなくでも聞き出せる様な立ち位置に登る。外の社会での大事な基礎だ。

自慢することではないが、自身を偽って生きてきた私としてはこれ以上とない特技とも言える。

自由人ばかりの世の中では大して意味を為さないものだが、また役に立つとは思わなかった。

『え、いや、しかしですねえ………』

しどろもどろにその場凌ぎを続ける彼女を見ていて、少しイラツと
してしまった。

普段はマスコミ的立場で新聞を取り上げている彼女は、あらゆる情
報を網羅している点では強者だろう。彼女を敵に回せばある事ない
事ばらまかれるのだ、これ程恐ろしいものは無いと言ってもいい。

しかし今の彼女はどうか？

その情報が仇となって弱者の立場となっている彼女の姿は、滑稽の
一言だ。

いざ弱者となると何をすればいいか、どうしたらいいのかも分から
ず、強者の立場で培ったプライドが下手に出る事を許さず、結果黙
秘権を行使する。

なんかいつそのこと——握り潰してやりたい位に弱々しいですね。
小動物みたいな可愛らしさがありますね。

『ひつ——』

一瞬、小動物が啼いた気がしました。

おかしいなあ、私はただ彼女に笑顔を向けているだけなのに、どう
してそんな声が漏れるのかな。

天敵でも後ろにいるのかな、と思って振り返っても誰も居ない。更
に訳が分からなくなりました。

次は背後から、風を斬る音が響いて来たのでなんだと思い振り返る
と——そこには誰もいなかった。先程までそこにいた存在を含め
て。

『逃げられちゃいましたか』

言葉に落胆の色は無く、事務的に発せられたそれはまさに彼女個人への興味の薄れを物語っている。

——それにしても、結局情報はなしですか。全く、使えませんか。

『——あれ？』

それは、スイッチが切り替わるが如く。

肉体に別の魂が入り込んだが如く。

意識が暗雲に飲み込まれていた本来の彼女は、突如覚醒した。

『えっと………どうして私飛んでるんでしょう』

記憶が混濁している。世界が曖昧に感じる。

確か私は………にとりさんと会ったんですね、それで理由は思い出せないけど私はにとりさんと別れ、次は………誰かとお話していた様な気がします。

しかし、その時の記憶だけはまるで空の玩具箱みたいに——玩具が無い玩具箱は名を冠する意味を為さない様に——信憑性も核心も証拠も不明瞭で、他人の記憶を見せられてる様な感覚に襲われる。

明確な証拠が無い記憶を、どうやって自分の物と証明出来る？

例えばある個人の存在を証明する事を目的としよう。一人一人に”ここにきちんと誰か居る様に見えますか？”と質問したとしよう。

答えは四択。全員がはい、全員がいいえ、大多数がはい、大多数がいいえ、だ。

悪ふざけで嘘を吐いたと言う可能性は抜きにして考えてみても、色々思う事があるのではないか？

全員がはい、なら何も問題は無い。

全員がいいえ……それは、質問をした人が個人を用意していなかったのか、本人のみが個人を視認する事が出来たのか。

ここで質問するとすれば、では個人は本当に存在しないと言う証明は？となる。

変に聞こえるかもしれないが、質問者からすれば個人が見えているならばそれがれっきとした証拠になりうる。しかし見えない者からすればどうか？だって見えないんだから〜と言うだけならばどちらが正しいのかは分からない。

仮に証明の為に他の誰かも立ち会わせたでしょう。それではいと答えようがいいえと答えようが、何も変わらないのだけれど。

だって、それを証明出来ない奴等、出来る奴を含めて狂ってないなんて証拠が何処にある？どちらか一方だけが狂人だと決めつけれる？本当に存在するのならば、見えない者が狂っている風に見え、しないのなら見える者が狂っていると扱われる。

ならばその判断をする第三者もまた、狂っていたらどうする？と聞かれたらどうする？

……そう、こんな門答が繰り返されるだけ。

これは、哲学なんだろう。悩んで悩んで悩みぬいて——それでも未来永劫その答えを出すことは出来なくて。

結局の所、見える者が真実なのだからお互いに確実な証拠を出すことは出来やしないのだ。

私の今の記憶が、それだ。

証拠がない。証明できない。

その誰かが分からないのだから、会ったと言う人が居てもそれが本人とは限らない。嘘の可能性もあれば、真実を含んだ嘘、その逆も

有り得る。

自分の記憶は自分の真実。しかし、それすらも曖昧なら自分を証明なんか出来やしない。

——そう、にとりさんの時に襲われた感覚。あれはまるでもうひとつの人格が現れた様な感じだった。

自分の意思とは裏腹に行動を起こしそうになる身体。突如抜け落ちた曖昧過ぎる記憶。

そして行き着く結論——私はもしかして、多重人格者なのかな……
……と思ってしまうてもおかしくは無い。

『……………どうしよう』

今の私がそれに該当する存在だ。

病は気から、意識した事でまるで自分の身体がムズ痒くなったりと、異物感を感じてしまう。

人格なのだからこればかりは過剰反応なんだろうけれど、多重人格では無いと言う証明にはならない。

『……………そうだ、お医者さんの所に行こう』

ネガティブに染まった頭で、そう結論づける。

永遠亭と言う、竹林を抜けた先にはとつても凄いお医者さんがいるらしい。そこならば私が多重人格なのかを看破してくれるかもしれない。

この自分自身すら信用できない状況でどれだけ鵜呑みに出来るかは分からないけど……………シロウさんと接触するならこれだけは治しておかないと最悪二度と目に掛けてくれることすらなくなるかもしれない。

そんなのは、嫌。絶対に嫌。

藁にも縋る思いで、私は幻想郷初の医者にかかる決意をした。

自覚する変貌（後書き）

おまけ……………だよ

爆ぜる様にその場から逃げ出した私は、人気の無い場所でうずくまっていた。

震えの止まらない身体、恐怖で働かない思考。妖怪であり鴉天狗である私が、こんな無様な姿を晒したのだ——人間の笑顔ひとつで声すら出す気になれない。出したらバレる。その時は最期だ、と必死に言い聞かせる。

正直、今でも信じられない。信じたくない。

博麗の巫女との戦いでも、私は常に我を失う事は無かった。自身よりも強い相手だと理解していても、それが恐怖へと繋がる事はなかった。

しかし、彼女は違った。

博麗の巫女に大した事も出来ず負けた實力ならば、少なくとも此方が下手になる様な相手ではないと余裕を見せていたのが間違이었다。

—— あれは、そう。獰猛な野獣を目の前で目覚めさせてしまった状況と例えれば分かりやすいだろう。

立ち向かう気概も逃げ出す足もなく、ただ捕食される立場と言う決して変わらない運命を呪うしかない弱者の私。

幸い私には逃げ出す足があった。これ程までに自身の速さに感謝したことはなかったかもしれない。

—— しかし、私が持つ彼女の印象と先程の彼女は、まるで別人だった。

温厚で笑顔を絶やさない一歩引いた立場を是とした影で支えるタイプで、アグレッシブな雰囲気は微塵とも感じなかった。

しかしそれがどうだ？

いざ蓋を開けてみれば、鴉天狗が畏怖の対象として認識する程の得体の知れないオーラを放ってしまう、そんな人間だった。

博麗の巫女は、実力で敵わないだけ。それなら私にも幾らか対処法はあるが、山の巫女は、戦いとかそれ以前の問題だった。

戦うなんて選択肢を与えない、関わる事すら嫌になってしまふ、それほどのものだ。

実際戦えば勝てるのかもしれない。けど、彼女の不気味な笑顔を見ただけでどうだ？

足はすくみ、身体の震えは衰えず、無様にも恐怖で軽い悲鳴を上げる始末。

そんな相手と対峙するですって？—— 有り得ません。天地がひっくり返ってもそれだけは。

これからどうしましょう。

間違いない、私は彼女に目をつけられた。自分に仇なした存在とし

て。

逃げ続けられるとは思えない。どこかで彼女と再び面を合わせないといけない日が来る。

そうになったら、私は――

『――謝ろう』

そうだ、それしかない。

プライドなんかかかなくり捨てて、何処でだろうと土下座でもなんでもしてやろう。そうしないと私に明日は無い。

でも今は危ない。もう少し日を改めていかないと、絶対に話すら聞いてもらえないだろう。

あの般若を鎮めるには、刺激を加えないのが一番。

私は、震えが収まるその間まで、荒ぶる神を鎮める為の口上文を命がけで考えた。

変化する者達（前書き）

幽遊白書の仙水編見ながら書いてたせいでテンション上がった。結果無駄に長くなった。ほんと無駄に。結

変化する者達

私は急ぐ。

永遠亭を遮る様に佇んでいる竹林の遥か高みを飛び、そこへと急ぐ。シロウさんに見つかる可能性の考慮すらこの頭には些末事として扱われている。

ただただ、必死だった。

自分の中に潜んでいるやもしれない悪魔を恐れ、名医と呼ばれる人に助けを請う為だけに、今の私は必死になっていた。

彼を純粹に探すだけのつもりが、とんだ道草を食ってしまっている。しかし、こればかりは誰が悪い訳でも無いのだから愚痴を溢しても何の意味を為さない。

自分自身の事を他人に聞かないと分からないなんて、滑稽とかのレベルを超越してる。

自分の事を理解してるのは自分自身——それは嘘なのかな。

私が特別なんかではなく、皆がそうで、皆似た苦しみを背負ったりしてるのかな。

……自分の痛みは分からないのに、他人の痛みが分かるなんて莫迦な話は無いだろうけど、あくまでそれは仮定の話に過ぎないし、結局の所悩む事が徒労なのだ。

全てなるようにしかない。

物事を大きく動かせると過信もしなければ実力も無い事も承知している。

そんなのは特別な存在がする事であり、凡人である私には夢物語だ。所詮外からの厄介払いみたいな形でここに訪れたただの人間である

私では、今を平凡に生きる事だけで精一杯。

全てに流され、それに逆らわず、ゆらりゆらりと終わりの見えない決められたレールを呆然と進んでいくしかない。

……今にして思えば、我を本気で表に見せたのもシロウさんが原因だ。

別段言われたからでもなく、ただ純粹に、今までずっとそうしてきたかみたいにならざらと吐き出した。

——つくづく、私にとって彼は”特別”なんだと思い知らされる。だからこそこんなにもシロウさんに対して過敏になってたり、意識してたりしてるんだ。

神奈子様や諏訪子様だって特別な存在だけど、それとはまた違う——そう、まるで彼は私の心象風景を塗り替えてしまった、ある意味神様のな存在だ。それも私限定の。

自分にとって、世界にとってのたったひとつ。それがどれだけ価値のあるものか。それを誰にも渡したく無い、独占したいと思うのは、罪なのだろうか。

『——って！シロウさんはモノじゃ無いのに独り占めにしたいだなんて、そんな』

口に出し、言葉に詰まる。

ここでそれを否定した所で、この感情は私自身のもの。例えこれは別の私から滲んだものだと言いつても、それだって結局は自分には他ならない。

——それに、それを否定したくないと思う自分の方が明らかに強いと言ったことも理解している。

……自分が二重人格かもしれないと考える様になった事で、思考、言動、行動全てに信憑性が感じられなくなった。

これはどっちの私が望んだ結果なの？

それは本当にその私のなの？

じゃあもうひとつの私はそれを望んでないとも言うの？

考え出したらきりが無い。無駄だと分かっているでも考えてしまう程、まいつているのか。まあその為の医者頼りなんだけど。

ぽつかりと穴の空いた様に竹が切り取られた中心にある、平安時代とかにありそうな建物を見つける。

あれが永遠亭か。直接来るのは初めてだけど、なんか普通の病院と違って普通に家つぱいからどうやって入っていいものやら。

取り敢えず入り口と思わしき場所に着陸。

インターフォンは当然無いから戸を叩くが、こんな大きな建物の中きちんと聞こえるのか不安になる。

……返事が無い。まあこればかりは聞こえない可能性の方が強いし、根気強くないかないと。

『すいませーん。誰かいませんかー？』

声を上げながら再び戸を叩く。

インターフォンみたいな近代的なものでは感じない気恥ずかしさに、少し語尾が小さくなる。この羞恥の理由だけはどうにも表現し難い。

数秒待つと、突如横引きの戸が音を立てて訪問者を迎える。

しかし目線の先には誰もおらず、この戸は実はセミオートの要素を含んでいるのかと勘繰る。

そんな風な事を考えてたら、袴を引つ張られる感覚を覚えたので、慌ててその方向を見た。

——そこには、まあ見るも愛狂しい兎の耳を生やした小さな子供が上目遣いで何かを訴えたそうにしていた。

『あ、ごめんね。君が出てくれたんだね』

目線を合わせるべくしゃがむ。近くで見ると更に可愛さが細部に渡って実感出来る。

少年なのか少女なのか判別がつかない兎の子供は、私の言葉に頷いた。

たったそれだけの行動なのに、その必死な挙動を見るが否や、誘拐犯の気持ちと言つのを物凄く実感してしまった。

これは——いい。

頭をぐしゃぐしゃになるまで撫でてやりたいし、飴があつたら嫌と言うほどあげてるだろう。

兎の子供は今度は私の手を引つ張った。

何回りも大きな相手を案内すべく力強く引つ張ってる姿がとてもいいらしい。

私はその力にされるがまま、中を歩く。

内装も外と真逆なんて事もなく、純和風で構成されている。

そして歩く度に鼻で感じる刺激臭——今でも好きにはなれない薬品の臭いで一杯になる。

この臭いを嗅いでると自分が病氣だと勝手に自覚してしまう為か、

例えそうじゃなくても頭痛や倦怠感で満たされちゃう。まさに逆ブラシーボ効果かな。

突然ピタリ、とある部屋の前で立ち止まるとその子は手を離れた。

『えっと、ここが――』

その子は私が言い終わる前に目の前の扉を開け出した。心の準備が出来ていなかったせいか、思考が定まらないままその先を見つめるしかできなかった。

『あら、貴女が患者かしら？』

そこに居たのは、言葉を失う位に綺麗な女性だった。

紺色のナースキャップみたいな帽子には赤十字が描いてあり、その地味めな色が白銀の様なポニーテールをコントラストに仕立て上げている。服はとても印象的な色合いをしており、形だけなら外のナース服とそこまで変わらないのに、私から見て右が紺、左が赤色で真ん中からばつさりと色分けされている。スカートはそれとは真逆の配置となっており、その抑えられた服装にも関わらずその女性の美貌は衰える事なく、一層映えている。

女の私でさえ溜め息を吐いてしまう程に、目の前の女性は美しかった。

『……………どうしたの？ぼうつとしちゃって』

『えっ！？ひ、ひゃいつ！』

いきなり話しかけられて、身体全部で驚いてしまう。

……見惚れていた、なんて女の私に言われても嬉しくないだろうし、何より引かれるだろうから言えない。

『そんなに驚かなくても……まあいいわ、座りなさい』

落ち着いた様子で回転椅子に座るよう促された。

一人取り乱してる姿を想像して、顔が更に紅くなる。

『で、貴女どこか気分が悪いのかしら。見た感じ健康体そのものだけど』

座った後、すぐに質問される。

あれだけ大きな声を出したら健康にも見られるのは当然だ。それに、別にそれは嘘ではない。

私のは精神面のものであって、こればかりは専門医に期待するしかないのだから。いや、彼女が専門医だと決まった訳じゃないけど。

『えっと、その……笑わないで下さいね』

『笑うなんてまさか。医療とは話を聞くことも職務のひとつよ、患者の話を巫山戯て聞けるほど安い人生送ってないわ』

怒気を孕んだ低い声と真剣な瞳でそう告げられ、自分の愚かさを悔いる。

どんな理由であれ私は彼女を侮辱したんだ。医者と患者の関係じゃないのならとくにこの場にいられなくなっている。

『す、すみません』

『……いえ、少し此方も熱くなっちゃったわね。おあいこにしま

しょう』

大人な対応に、内心ほっとする。これからはもう少し言葉を選ばないと。

『えっと、私……最近、自分に違和感を感じるんです』

『詳しくお願い』

先生は私から目を逸らしカルテを書くのに集中し始める。

私もそれを理解し、話を続けることにする。

『はい。自分の考えてること、話していること、動いているということ全てが、たまに他人ごとのように思えちゃうんです。そんな違和感を覚えるときに、必ずと言ってもいい程に記憶に曖昧さを感じてしまうんです。なにかしていた筈なのに一部の記憶だけボヤけてしまっていて……もしかしたら私、二重人格なんじゃないかって思ってます』

話せば話すほど恐ろしくなり、嫌な汗が背中から噴き出る。

もしそうだとしたら、その抜け落ちた記憶の中で私はなにかとんでもない事をしてしまった可能性だってある。それが他人に知られることで、私と言う存在に対する嘘を植え込まれるのはマズイ。

私は神に仕える身。この身は神の為に粉骨碎身しなければいけないのに、その私がか何か粗相をしたことで神の名に傷が付いてしまったかもしれないのだ。これを恐れずして何に脅えればいいのだ。

『———そう』

此方の状況を知ってか知らずか、表情を変えずにカルテに書き写し

ていく。

そして一息吐くと、ペンを置き椅子を回転させて此方へ再び向いた。

『貴女がそれを知ったのは、自覚症状ってことでいいのよね』

私はそれに無言で頷く。

『二重人格——解離性同一性障害というのは、幼い時に繰り返した強い心的外傷を受けた場合、自我を守るためにその心的外傷が自分とは違う”別の誰か”に起こったことだとして記憶や意識、知覚などを高度に解離してしまう症状なのよ。独立した人格というのは、文字通りそれも個であり別のものにはなりえない。人格が交代している時の記憶を保持してられる確率というのは、とても稀なケースなの。』

『……まあこれを纏めて疑問をぶつけるとすれば、普通独立した自我というのは、そういった自我を守るという行為以外では生まれることなんて無いのよ。だってそんなものあったって不便なだけじゃない。都合の良い世界を創りたくて犠牲になる人格なんだから、本人の世界が平和そのものなら存在する意味がない』

『……一気に捲し立てられたせいでまるで頭の中で纏めれない。と
うか、難しい言い方で言われてもさっぱりだ。』

『質問するけど、貴女最近強い心的外傷——詰まる所のトラウマ
を受けた様な出来事はあった？』

『いえ……そんなことは無いです』

心労が祟る様な出来事は沢山あったけれど、別にトラウマとかそんなものとは関係ない。

『さつきも言っただけど、二重人格というのは自我を守る為に存在するものであり、それに準ずる出来事が過去に起こっていない発生しないものなのよ。もし幼い頃にそんなのがあったのならとくにそうなっているだろうけど、貴女はこの出来事を最近と述べた。しかも自覚症状有りで。言いたいことは分かる？』

『え、えっと………』

いきなりそんな沢山ものを言われても此方としては困るだけだ。

私は特別頭が良いわけじゃないし、どちらかと言えば回数を重ねて覚えるタイプだったから一回言われただけではそんな要約するなんてことは難しい。

『まあ、つまり貴女が自分の症状を二重人格と定義するには、あまりにも継接ぎだらけなのよ。矛盾に天文学的な確率の記憶保持、そんな奇跡みたいなケースの患者なんて初めてなのよ。だから今は貴女の症状を仮定するとしたら、仮病と言われても文句は言えないのよ』

『そ、そんな………』

あまりにショックだった為に頭がぐくと頂垂れる。

先生がこう言ったところで、私の中で違和感があるのは決して嘘じゃない。

彼女はプロだから、間違いなく型に嵌った考え方ではそれが正しいのだろう。だけど、そうじゃないケースだって存在するのかもしれない。

自分を特別だ、とは言わないけどそうでも思わない限り私の中でモ

ヤモヤは晴れてくれない。

『だけど、ね。私はそうとは思わないわ』

『え———？』

続いた予想外の言葉に、間拔けな声が漏れる。

『言っただでしょ？ 安い人生送ってないって。それは別に仕事ばかりではなく、人間関係も含んでの事よ。』

貴女は嘘を言つてない。目、声、挙動、どれを見ても嘘には捉えられないわね。だから私は貴女を信じるわ』

頭を上げると、そこには女神の様な笑顔で迎えてくれた先生の姿があった。

それを見てしまったせいで、目頭が一気に熱くなって、しまいには声をあげて泣いてしまった。

そんな私を、彼女は優しく撫でてくれた。母親の様に、慈しむ様に。

『落ち着いた？』

『は、い』

うう、情けない。こんな事で泣いてしまうなんて、最近涙腺が緩くなっている気がする。

『とにかく、これは医学的に解決するのはとても難しいからあまり力にはなれないかもしれないけど、話を聞くだけなら幾らでも出来るわ。勿論無料よ、友達感覚で来てくれて構わないわ』

『え、でも』

『年上の厚意には甘えるものよ、特に若い内はね』

ウインクしている先生の姿は、年上と定義した割にとっても若々しく思えた。というよりも、私よりほんの少ししか年上に見えないけどこの落ち着いた雰囲気……何者なんだろう。

『分かりました。では、お願いします』

『少し硬いけど……まあいいわ。なら自己紹介しないとね、私は八意永琳よ』

『東風谷早苗です。妖怪の山で巫女をやっています』

握手を交わし、互いに微笑む。

なんだかほとんどん拍子に話が進んだけど、結果オーライなのかな。まあ医者である彼女にカウンセリングしてもらったから、成果は期待できそうかも。

『じゃあまずは世間話としましょう。貴女は最近身の回りで変化とかあった？』

『変化、ですか。結構ありましたよ』

『差し支えなければ教えてくれないかしら？』

永琳さんは診断の為、とは言わなかった。私を気遣ってか面目上のものかは知らないけど、悪いことじゃないし素直に答えよう。

『——多分、ここから始まったんじゃないですかね。私の住まう守矢神社に、ある日居候の男性が出来たんですよ。その人はとても優しくてカッコ良くて、料理も上手いし——』

と話して気付く。これじゃまるでノロケてるみたいじゃないか。

永琳さんの表情を伺うと、案の定と言うべきか何やら楽しそうにしている。神奈子様や諏訪子様が私をからかう時とそっくりだ。

『あ、あああのですねーこれは………』

『若いつて良いわね。本当』

『そんなんじゃないですよー!!』

『あら、そんなんってどんなにかしら。私は単に若いことを羨ましがってただけよ?』

う、墓穴掘った。

こんな状況になると決まってこうなってしまうのは悪い所かもしれない。

『なんて、冗談よ。それにしてもそんな人がいるなんてねえ。お姉さんにもどんな人が教えてくれない?』

ここでだんまりを決めてもいじられるだけなんだろうなあ。

まあ私の責任でもあるし、覚悟を決めよう。

『えっと、身体的特徴は、褐色の肌に、とても背が高く、丁度永琳さんみたいな色の髪色のオールバックをしています。私実はその人を探してるんですけど、最後に見た時の服装は、紅い外套に黒い鎧

を着ていました。

そうだ、永琳さんはその人を見ませんでした——』

言い終わる前に、彼女が物思いに耽っている事に気付く。

先程診断していた時のそれと一緒にだ。

『……………その人、見掛けたわ。紅魔館で、私が怪我をしていた彼を診たわ』

『え———』

怪我？

どうして？

なんで？

分からない、分からないなんでどうして怪我なんかしたの？

それに、紅魔館って……………吸血鬼の館と噂された場所じゃない。

なんでシロウさんがそんな所にいるの？

『怪訝そうな顔してるわね。貴女達にどんな事があつたのかは知らないけれど、彼は今そこで執事として働いているらしいわ。私が見た時は丁度雇われたばかりらしいわよ』

『執事……………なのに怪我？』

医者に頼る様な怪我をするなんて、執事と言う仕事では有り得ない。特に家事を一通り万能にこなす彼がそんな初歩的なミスで怪我をするなんて思えないし。

『……………ここからは医者としてあちらのプライベートを守る義務が

あるから深くは語れないけど、彼が負った傷は自らが望んだものだったらしいわよ』

自らが、望んだ？

傷を負うことを甘んじて受け入れる理由があつたとも言うの？

——いや、あの人の事だ。必要の無い傷の可能性だつてあるに違いない。寧ろその方が強いんじゃないか。

他人の為に自らを常に犠牲にし続けた薄幸の騎士。そんな人生を彼はまだ歩もうとしているのか。——そんなの、彼が許容したつて許さない。

彼がここに来たのは絶対運命だ。もう充分頑張つたんだから、ご褒美に樂園に連れてつてあげる、ととんでもない力を持った人に飛ばされたに違いない。

なら、めいいつぱい彼は幸せにならないと嘘だ。

護ろうとした者に殺され、その代償として縛られる羽目になった青年が解放されたのだ。もうそんな枷に囚われる必要なんか無い。

思い立つた様に私は立ち上がり、シロウさんに会つべく紅魔館へと向かおうとした、が——

『待ちなさい』

反発する身体にバランスを崩しつつ後ろを振り返ると、私の腕をがっつちりと掴んで離そうとしない永琳さんがいた。

『離して下さい！シロウさんに会わないと——』

『ねえ、そのシロウって人は貴女が二重人格疑惑なのを知ってるの

？
』

その言葉にハツとした。

私が違和感を覚え始めたのは、シロウさんがいなくなってからだ。

いや、正確にはいなくなる直前だけど、そんなものに意味は無い。

シロウさんと会った時にあんな事になってしまったら………幻滅されるかもしれない。それどころか会うこともできなくなるかもしれないし、今の想いを伝えられない可能性だってある。それじゃあ本末転倒だし、私も絶対立ち直れない。

『——その様子じゃ知らない様ね。厳しい言い方をするけれども、もし知られたくないのなら彼と会うのは止めなさい。彼にとっての理想の貴女で居たいのなら、今の貴女は虚像でしかないのよ』

『——』

深く、ナイフの様な事実を突き立てられる。

私が今彼に会うと言うのは、背水の陣を敷くのと変わらない。私はそんな賭けに近い行動をとれる程シロウさんの事を軽んじてはいない。

『——分かり、ました』

唇を噛み締め、急いだ身体を休めるべく再び回転椅子に座る。

それと共に永琳さんも私の腕を離してくれた。

『…………心配？』

『え？あ、それは勿論』

心配じゃなきゃこんな我先にと言わんばかりの勢いで飛び出そうと

する訳が無い。

『——私に考えがあるんだけど』

『考え？』

突然の提案に私は首をかしげる。

『ええ。確かに今の貴女はその彼に会うことは叶わないけれど、どうにかして安否を確認したいのよね？』

無言で頷くと、彼女は人差し指をピンと立ててこう告げた。

『幸か不幸か、エミヤシロウと東風谷早苗は私と言う接点のもと繋がってるのよ。二人とも私の患者として、ね。』

私は医者である以上患者に対して煙たがれる位に身体を気にかけないといけないの。自身の沽券にも関わるし、何より不備があったのに何もしなかったなんて周囲に知れたら、お客さんも来なくなるしね』

『つまり——？』

『つまり、私は彼に何の疑問も抱かせる事なく近づけるの。しかも身体の事に関してなら医者が聞くなら何の問題も無い』

そう言われた瞬間、私の中で何かが大きく膨らんでいくのが分かった。

それは絶望の淵で希望の光を見つけたが如く鮮明に個を自己主張していて、衰える姿を見せない。

これはシロウさんと僅かにでも繋がりを得られた事による喜び？
それともその環境を与えてくれた永琳さんに対する感謝の気持ち？

——恐らく二つともなんだろう。彼女の言う通りなら、直接的手段では無いとしても彼の情報を入手出来る。

この猫の手をも借りたい状況下で、永琳さんとの出会いはまさに神の思し召しとしか言い様がない。

『あつ——ありがとうございます！』

思わず私は永琳さんの腕を取り千切れんばかりにブンブンと腕を上下に振った。

それに彼女は苦笑するも私は気にしない。それほどの感謝をこれに籠めているのだから。

『——まあ、過度な期待はしない方がいいわよ。彼と親しい訳じゃないし込み入った部分には入り込めないからね』

『それでも構いません。本当、何から何まで有り難う御座います』

『いいのよ、別に。それに——私も彼に思う所があるし』

言い終えると共に彼女はカルテにまた何か列ねていく。

思う所って、なんだろう。本人曰く親しい訳じゃないらしいし、シロウさんの身体に関してかな。

シロウさんは、人間だけどそうじゃないらしい。

英霊という過去、現代、未来と時間軸に関係なく英雄として功績を遺した亡霊に近い存在だとか。

正直な話、今でも信じられない。私の住んでいた世界でそんな戦い

があつた事も、魔術という特殊な力が少なからず浸透していた事も神様を近くで見てる奴の台詞じゃないんだろうけど、やっぱり驚きは隠せないものだ。

幻想郷に来て大して経ってないせいか、まだそんな異質の常識化に馴染んでなかったっぽい。

『取り敢えず今日はもう帰った方がいいわ。ここからじゃよく分からないでしょうけれど、もう結構な時間よ』

『そうなんですか。なら失礼しますね』

彼女に言われた通りこのまま退散しようとする、何故か永琳さんも一緒に立ち上がった。

本人は、見送るわ、と簡潔に述べると有無を言わずついてきた。嫌では無いのだが、何から何まで負担を掛けるのに、こんな些細な部分でも苦勞を掛けていると言う事実がなんだか申し訳なかった。私が何を言おうと簡単に言いくるめられるだけだから、結局の所素直に好意に甘えるのが負担を減らす唯一の方法なんだよね……。

廊下を歩いていると、再び小さな兔子供がいるのを見掛けた、が――その数に呆然としてしまう。

皆個性に違いがあつて、何やら仕事をしたり遊んでいたりする。その中にはさつき案内をしてくれた子もいて、呆然とした思考は朗らかなものにすぐ変わった。

『あの……聞き忘れてたんですけど、この子達は一体』

『因幡のこと？あの子達は通常の兎だったものが長生きをした結果妖怪として昇華したものよ。まだなつて日は浅いせいか言語は介さないけれど、此方の言いたい事は問題なく伝わるし、この因幡のリ

「ダー格は喋れるから、彼女を通じて仕事を頼んでるのよ」

「へえ、そうなんですか。と言うことはこんなに可愛いのに――」

「貴女よりは何十倍と歳上ね」

そう悪戯っぽく笑うと、微妙に歯痒い気持ちになる。

人間はすぐに見た目が変化してしまうから、その望んだ美貌を保ち続けることは出来ない。そういう点では、女性である身としては羨ましい限りである。

美貌、と言えば――そんな少女の様な笑みを浮かべる永琳さんは、自身をまるで老婆の様に自虐する。

「あの、こんな事聞くのはなんですけど……永琳さんは人間ですよね？」

「ん？ええ、人間かと聞かれたならそうよ」

人間と妖怪では微妙に雰囲気異なる。

それは個人的なものではなく、種族の違いから沸き上がる形容し難いものだ。勿論永琳さんからもそれが発せられてる。

だからこそ、疑問に感じた。

人間の雰囲気がある彼女は、私と肉体年齢に差異はまるで無い。にも関わらず、そんな私を見て彼女は私を若いとひがんだ。

悪戯に言ったにしては心の籠り様が演技のそれを越えているし、彼女の肉体年齢と比例しないその落ち着き様。

何より――彼女は安い人生は送っていないと真面目に答えた。そんな事をあの目で言えるのは、失礼だけどまさに年配者じゃないと

無理だ。

『あらもしかして、ずっと貴女を若いって言ってたから気になったの？』

『あ、はい……。永琳さんとっても美人だし、私から見てもそんなひがんだりする位歳は取ってない筈なのにつて』

『あらあら、嬉しいわねえ。こんな可愛い子に言われるなら、満更でも無いわね』

そう言うと、頭を優しく撫で回してくれた。

やっぱり、この大人の余裕に違和感しか感じない。疑ってる訳ではないけれど、矛盾しか頭に残らないせいで中身が熱暴走でも起こしかねん勢いだったから困ってる。

『……………そうね、じゃあ教えてあげましょうか？』

『そんな、女性が歳を言うのは流石に——』

『いいのよ別に。異性なら抵抗あるでしょうけれど、女同士なら問題無いわよ。それに、こんな私を美人だって言ってくれたお礼よ』

そう彼女は諭し微かに微笑んだ。

『……………そんな風に言われたら断れないじゃないですか』

対して私は、まるで子供みたいにムスツとしてしまう。勝ち負けとかではなく、彼女には勝てないと理解してしまった故にひがんでるのだ。

ひとつ足音が消えたのに疑問を感じ振り返ると、彼女は後ろ手に構え立ち止まっていた。

偶然なのか、私達は丁度玄関と外を隔てる境界で分けられていた。勿論私が外だ。

『私の年齢だけどね——』

彼女は告げる。

『——私も正確な数字は忘れちゃったけど、億単位は優に越えるわ』

『——へ』

冗談にしか聞こえない台詞を、変わらぬ笑顔で。

『じゃあね』

余りにも予想を超えた数字に頭の中がまっしろになっていた。そして当の本人は、何事も無かったようにヒラヒラと手を振り視界を境界で隔て、姿を消した。

『えっ、ま、待ってください!』

慌てて追おうとするも、引き戸は何故か開かない。つつかえ棒とか置かれたのかもしれない。

力づくでやると、私の腕がおかしくなるのが先か引き戸が壊れるのが先か……。なにせよ、万策尽きた私は力なくその場にへたり込んだ。

やられた。恐らく彼女は今に至るまでの動作は全て計画通りのものだったんだろう。

……では彼女が言った億単位という年齢は嘘で、あくまで私をからかい続けるが為に颯爽と消えたのか？

答えを導き出せる自信は毛ほども無い。だって、あまりにも壮大過ぎて思考がついていかない。

嘘にしては誇大過ぎて簡単に嘘だと分かってしまう。それではからかう意味の大半を失う。こういったのは相手の反応を見て楽しむんだろ？ 一瞬で終わる花火みたいなものじゃあ満足しないと思う。

それに、なんというか——あの言葉には罪悪とかを感じなかった。悪意ある言葉というのは、重かるうが軽かるうが文字通り悪が染み込んでいる。それが彼女の嘘としか言思えない言葉には無かった。

悪意を感じない程に彼女が嘔吐きなのか？なんて思いたくもない。

『感情論で否定した時点で悩む意味なんか無いよね……………』

身体を持ち上げ、空を仰ぐ。

緋色に染まった世界は驚く程静かで。

ちらほらと飛び始めている雪虫が次の季節の訪れを歓迎している。

『——あ、御二人にご飯を作らないと』

しかし、私の望む冬の訪れには些か材料が足りない。
けれど焦る事は無い。

私には色んな人がついていてくれている。その人達が私を見捨てない限り、私は頑張っでいられる。

焦燥の果てには絶望しか無いのなら、歯を食いしばってでも耐えてやる。

その為には皆の助けが必要不可欠。自分だけでは何も出来ない赤子のような自分には、育ててくれる周囲の環境が目まぐるしく動いてると言うことが重要になる。

——なら、その環境を私自身を変えないと。

幸い私は自身を赤子と例えたが、肉体はそれなりに成長してる。それはつまり、全てに於いて人並みには成長してると言うこと。

自分にとって有利な環境それは——私を理解してくれて、同意してくれる仲間みたいなもの。それを私自身の力で作っていかなくてはならない。

勿論全員が私を理解してくれるなんて思っではいけないけれど、受け身でいたって何も変わらない。

シロウさんみたいに傷ついて裏切られてでもやらないといけない事ではないけど……それを恐れ、自分の世界を破壊してしまうのは嫌だ。

地面を這い、無様になろうとも、逃げてはいけない。

今を甘んじて最後に酷い目に会うよりも、今の過酷に耐えハッピーエンドを迎えれた方が何倍も良い。

その為には、もっと色んな人と会わないと。

永琳さんに話を聞いてもらうのも大事だけど、もっともつと可視範

囲を広げるならそれは後回しだ。

地面を軽く蹴り、柔らかに空へと浮かぶ。

明日は人間の里にでも行こうかな。情報収集の基本は人の多い所と相場は決まってるし。

夕陽に抱かれた身体を飛ばし、私は地平線へと消えていった。

『……………もう勘弁して下さい』

時刻は最早夜になろうとしている。日が明らかに沈んでいるのは見なくても理解出来る程に、視界は緋色で支配されていた。

『そうだな……………確かにもう日も落ちてるし頃合いだな』

天子への授業は、かなりの難航を見せた。

社交性なんてものは自尊心の前では紙当然らしく、私の一念が岩をも通す結果となるには異常なまでの時間が必要だった。

その結果がこの時間まで付きつきりだと言つのは言うまでもないだろう。

『だからもう夜になるからやめようって何度も言っただじゃない！』

『言葉遣い』

『あ——う。私は貴方に日も暮れる頃合いだと何度も申しました

のに、頑なに拒むんですもの。それは怒りたくなるのも仕方ないのでは無いでしょうか？」

異常なまでに引きつった笑みで言葉を列ねていく。

——彼女が社交性を得るにはカタチから入った方が良いと判断した私は、まずは言葉遣いを正す事を念頭に置いた。

勿論それが簡単に通用する筈もなく、こんな時間になったのも単にそのせいだ。

『嫌味はやめてくれ。別にそこまでやれとは言っていないだろう』

『ふん！自業自得よ』

果たしてどっちが悪いのかはいいとして、無計画に自己判断した結果がこれだったのならば、これは私の落ち度なんだろう。

しかし、それをしてなければもっと酷かったかもしれないし、逆に意外とその後スムーズに行ったかもしれない。

可能性を突き詰めた所で時間は戻らない。結局なるようにしかならないものなんだろう。

『総領娘様がそんな言葉遣いをするのは何だか寒気がしますね……』

……

『なっ——衣玖う！』

『冗談ですよ』

そして毎度の如くいつの間にかいなくなったり出てきたりする衣玖。彼女は天子が何かを愚痴っぽく要求したりすると現れ、その不満を

解消する材料を提供してくる。まるで気配遮断のスキルを所持しているのかと疑う位に彼女を視認するまで存在を感知できなかった。サーヴァントとして、英霊として戦いに身を置いていた私が全神経を凝らしても、だ。

『——私はこれで失礼するよ』

彼女達の冗談混じりの痴話喧嘩の輪に入る気は起きなかったので、静かにその場から立ち去ろうとした。

『あ、待って下さい。お送り致します』

天子がギャーギャー騒いでる中呟くように言った筈の言葉は、予想外にも返事が返って来た。

『いや、大丈夫だ。それに君は彼女の保護者だろう？私なぞ気に留めず、彼女の機嫌を宥める事に集中すべきだ』

『保護者ってなによ！』

まだまだ元気の有り余った天子の姿を見て、もう少しスパルタにするか？と頭の隅で考えた。

『私は貴方に話があるんです』

静かに、しかし力強く答えた。

『——そうか』

私はそれを拒む気にはなれなかった。

特別事情もなければ、彼女の真剣さを見透かせない程鈍感でもないつもりだ。

『……………なによ二人して勝手に。んじゃあ邪魔者は帰るとしますかね』

明らかな不平不満を孕んだ言葉がのしかかる。別に悪いことはしてないだろうに。それともそんなにあのしごきに嫌気が差したのか。

『——いいのか？』

ノシノシと大腿ではしたなくその場から立ち去る天子。そんな彼女の消えゆく姿を見て衣玖へ問いかける。

『いいんですよ。たまには』

我が子を見守るような目で遠目に天子を見つめている姿は、ただ保護者として任命されたから仕えてるとは思えない優しさを内包させていた。

私はそれにつられる様に笑顔になっていた。

『では、歩きながら話しましょう』

此方を向いた衣玖はそう促し、天子とは逆方向へ歩き出す。私は黙ってそれに従った。

『正直な話、貴方は凄いと思います。出逢って然程時間は経ってない筈なのに、総領娘様は貴方になついています。天人としてのプライドを抱えるあの人が、です』

歩を進めて少し。彼女は静かに語り始めた。
独白に近いそれは、何だか少し寂しそうに感じた。

『それは単に美化し過ぎてるだけではないかね？あの反抗されようを見て、どこが好かれてる風に見えるのやら』

肩を竦め自嘲する。

天子の在り方は凜みたいだ。猫、と言っても差し支え無いだろう。
手を差し出せば問答無用で引つ搔かれそうな雰囲気をちらほらと感じさせる彼女が懐くだなんて見えるのは、些かどうかと思うぞ。

『そうでもないですよ。あの人は興味の無い事柄全てに対して無関心です。貴方だって例外では無かった、筈なのに——それこそ特別な出会い、行動があつた訳でも無いのに、彼女の殻に籠った心はどんどんその姿を現しています』

『——とは言つても、こちらとしては実感が皆無なんだが』

『それは貴方が鈍いだけです』

躊躇いなくバツサリと斬られた。いつそ清々しい位に。

『他人の話だつてそうです。貴方の事を話す時、とっても楽しそうなんです。見た目莫迦にしてる風にしか見えなくても、本質では心踊っているんですよ』

『——』

『それは嬉しくもあり、悲しくもありました。まさに子持ちの母気分なんですよ、今の私は』

老成さを出すかの様に鼻で溜め息を吐く衣玖。しかしそれは男を惑わす艶やかな雰囲気しか醸し出さなかった。

『君みたいな若い母なら周りから羨ましがられるだろうな』

『あら、お上手ですね。』

——まあそれはいいとして、総領娘様は変わりつつあります。今は貴方の前でだけですけど、着実にあの人の考え方感じ方は変化しています、勿論良い方向に』

足を止め、こちらを振り向く。

そして、彼女は深々と頭を下げた。

『———お願いします。これからあの子を、総領娘様を支えてあげて下さい』

『———』

———彼女は慈愛に満ちている。

他人を深く思いやり、その為には恥を忍ぶ事もやる。

……— だからこそ、教えてやらないといけない。

『何を勘違いしてるかは知らんが、私には君が期待してる程大層な人間では無い』

衣玖は驚愕と泣きそふな表情を上げた。こんな発言は予想外だったんだろう。

『私には何の力も無い。私だけでは彼女を変える事なんて出来やしない』

それは事実。

私は他人の心境を覆せる様な包容力も無ければ、心を読む訳でも無い。

私は天子の事は殆ど知らないのだ、そんな奴が出来たとしたならばそれは偶然以外の何物でも無い。

偶然は長くは続かない。それは偶然故に必然的に起こり得る事象で、そこに変化は永久に訪れない。

『私は無力だ。私だけでは何も変えられない』

噛み締める様に呟く。

『だからこそ——君の力が必要なんだ』

『——え』

呆然とした表情をした衣玖に、私は軽くデコピンする。

驚きと痛みで口がパクパクとするのみで、本来の用途を果たしていない。

『君は自分が何も出来ないから私を託したのか？それならばその考えは愚考だよ。君がいなかったら、天子があんな子には成長しなかった。確かに我が儘で聞かない子に見えるかもしれないが、本当は心優しい子なんだろ？君はずっとそれを見て、彼女と関わった。これ以上と無い位に、君は比那名居天子という存在を形成していたんだ』

『——そう、でしょうか』

自分で信じられないのか、声には覇気が籠っていない。

『ああ。君が彼女と関わった事で、こんな私でも彼女を変えた様に見えたんだ。謙虚なのはいいが、こればかりは誇りに持った方がいい』

私はそつと彼女へと手を伸ばす。

『私からお願いする。これから一緒に彼女を支えていかないか』

私一人では何も変えれない。

だけど——彼女がいれば別だ。彼女の力があれば、彼女の望みは叶う。

『ふふっ——』

『何がおかしいんだ？』

『いえ、これってまるでプロポーズに聞こえても変じゃないなって』

少々頬を赤らめてそう答える。

ふむ、確かに言い得て妙だな。

『衣玖が天子はまぎを変える為に私という男と再婚する——ああ、最もそれらしいな』

ククッ、と笑う。

こんな優しい女性を伴侶に出来る男は大層幸せなんだろうな。

『そうですか、なら——不束者ですがよろしく願いますね、旦那様』

私の冗談に返された言葉と笑顔。不覚にもそれに赤面してしまった。こんな所私を知る者が見ていたならば、間違いなくとんでもない事になってただろう。私が。

『むう、その言葉は将来本当の夫となる者に取っておいた方がいいぞ』

『あら、嘘に聞こえました？』

『なっ——』

『冗談ですよ』

クスクスと笑ってるその姿を見てみると、からかわれた事なんてどうでもよくなってしまう。
いかな。彼女のペースに完全に惑わされている。

『何だかこうやって面と向かって会話して分かりましたが………貴方、結構可愛い所あるんですね』

『ぐっ』

幽々子に次ぐ可愛い発言に、男の尊厳を砕かれた気分になる。
いや、実質砕かれてる様なものか。

『ち、因みに何処が可愛いと言うのかね？』

『あら、私の冗談に頬を染める殿方——それこそ貴方みたいな正しい方がなるとその差に女性は可愛いと思うものなんですよ。えっと、こういうのをギャップ萌えって言うんでしたっけ？』

『そういつた専門的な言葉を問われてもな……………』

いや、それは少数派ではないか、と突っ込む気にはなれなかった。これからはもう少し気を張った方がいいかもしれない。からかわれ続けると此方の心労に関わる。

『……………ともかくこれで失礼するよ。話に夢中になって気付かなかったが辺りは先程よりも真っ暗だ。これ以上長居は出来んよ』

『そうですね。では私もそろそろ総領娘様の様子を見ないといけませんね』

『ああ。彼女のことだ、寂しがってるやもしれんぞ？』

『——そうだと、いいですね』

衣玖は祈るように胸の前で両手を抱き合わせる。

『ああ、信じる者は救われるなんて言葉があるんだ、君がそれを望み実現しようと努力するならば、絶対に叶うさ』

根拠の無いその場凌ぎの言葉。

だけど、私が見てきた彼女達の上辺の関係なんかより、心ではもつと繋がっているんだと信じてる。

信仰心がある訳ではないが、たまには他人の幸せを神に願うのもい

いだろう？

『…………では今度こそ、ですね』

私の言葉への答えは返ってこない。

まあ一朝一夕で納得出来るならこんな悩みなんか抱えないだろうし、当然ではあるか。

『ああ。今度はいつ来れるかは分からないが、どうにか時間を割く努力をしよう』

『それまでは、あの我儘な人をどうにかたしなめておきますね』

『程々にな。あまり抑圧すると反動が恐い』

そうなってしまった結果を想像し、クツ、と小さく笑う。

暴れつつもどこか愛嬌を残した行動は、本人の怒りなど何処吹く風、可愛げしか感じない。

…………まあこれは妄想の産物なわけで、必ずしもそうなるかは別問題だが。

『大丈夫ですよ。私達が彼女を変えたんでしょう？なら——何の問題も無いですよ』

『——！！ああ、そうだったな。私のしたことが失念していたよ』

心から何かが沸き上がる感じがした。

完全な納得だとは思ってはいない。だけれど、口に出してくれただけでも大きな変化だ。

——天子だけではなく、彼女もまたどこか変わろうとしているのだろうか。

いや、それは私の勝手な解釈か。人が簡単に変わるなんて有り得ない。少なくともこの場合は私だけによる変化なのだから尚更だ。

『では、これで失礼するよ』

『ええ。でも、こういう時はなんて言えばいいんでしょうね』

彼女の発言の意味を捉えれず、首を傾げる。

『なに、とは一体』

『いえ、さようならだと何だか少し変ですし、ピッタリの言葉が思いつかないんですよ』

バツの悪そうに答える衣玖だが——私にはそれが理解出来なかった。

『そんな簡単なことも分からんかな。こういう時は——』
『いつてらっしゃい』
『そんな簡単なことも分からんかな。こういう時は——』
『いつてらっしゃい』
『そんな簡単なことも分からんかな。こういう時は——』
『いつてらっしゃい』

『いつてらっしゃい……ですか。それは先程の冗談から来たものですか？』

『おや、私はてつきり本気だと勘違いしてたが。いやはやこれは失礼』

先程とは打って変わって顔をどんどん紅くさせる衣玖。

よし、これで尊厳は持ち直したかな。

『これは参りましたね。少し嬉しい自分があります』

両手を頬に当て恥じらいを隠そうとしている。

……いかん。思わずニヤけてしまいそうな位その挙動が可愛らしい。

戦いばかりの頃は色事に現を抜かす余裕など微塵も無かった。その反動とでも言うのか。

いや……もしかすると私も変わっていたのかもしれない。

衣玖や天子のお陰でもあるが、神奈子や諏訪子、慧音やアリス、そして早苗。他にも指折りでは無理な位の者達が私を変化させるのに貢献していたんだ。

私は知らず、衛宮士郎でも英霊エミヤでもなく、もっと違う何かへと生まれ変わってしまったのかもしれないな。

少しして平静を取り戻した彼女は、手を胸元に添えて柔らかく微笑んだ。

『では……コホン。いつてらっしゃいませ、旦那様』

それは、本当に夫を送り出すかのような仕草で。

そして、私はそれに受け入れられ、天界を後にした。

変化する者達（後書き）

さて、今回紹介するのは、動画とかでも結構有名であろう八意永琳の紹介です。

やじころ えいりん
八意永琳

種族：月人（蓬莱人）

能力：あらゆる薬を作る程度の能力

二つ名：月の頭脳

所要天才と呼ばれる存在である彼女は、薬だけに拘らずありとあらゆる事が出来るキャラとなっている。

二次で巨乳キャラとして定着されている一人。今度バストの事でここを埋め尽くしたい（お

弓使いでもあり、シロウとは何か繋がる部分があるからネタにはしやすいかも。

弟子みたいな存在もいるけど今回は何も書かない。殆ど無意味なネタバレ防止ですけど。

えーりんはバイだと思ってる自分がいる。

ていうか彼女とかの関連の話はネタバレ無双だからあまりいいこと書けない。本格的な説明はもっと後になるかと。

取り敢えず知らない人は、もの凄くとんでもない人だって解釈でいいです。

誰かの為に（前書き）

最近身近で遊戯王をやってる人が急激に増加した。ゆうかりんのスリーブに入れたスキドレ弾圧デッキで楽しくやってます。その分小説書く時間なくなるアッー！

誰かの為に

衣玖と別れてから半日以上が経った。

時刻は既に朝日が昇る頃合いで、私はそれを無心で眺めていた。

夜分遅くなるという理由から手持ち無沙汰になってしまった私は、何処か静かな場所で腰を下ろす事を考えた。

剣の鍛錬を、とも考えたが闇夜は音が響き易い———と言うよりも視覚的に不自由になる分、自然と他の部分が過敏になるからそう感じるのだが———為、妖怪の脅威が増してしまう。

並大抵の妖怪ならばあしらう自信はあるが決して驕る気は無い。私程度では勝ち目の無い相手だって居るだろうし、何より無益な戦いの火蓋を落とす気は毛頭無い。

今の私は正義の味方を夢見た少年の末路でも正義の味方と言う理想を追い求めるのに疲れた青年でも無い。

ただ突然の無礼な訪問をした男に優しさを与えてくれた少女の為に仕事をしている一般的な人間だ。

戦う理由が無いならば私は決して剣を取らない。

だが、もし私に関わって来た者達に脅威が襲いかかるならば———私は自らの平穏など容易く投げ棄てても戦う。

全てを救えないならば、救える努力をするだけ。

しかし、もし大切な者が救うべき大勢の枠に組み込まれていて、大切な者を救えばその他が死に、見捨てればその他が生き残ると言う不変の苦渋の選択が待ち受けたならば———

衛宮士郎ならばそれでも全てを救う道を探すだろう。

英霊エミヤならば大勢を救う為に大切な者だろうと切り捨てただろう。

——ならば私は大切な者を優先する。

これは人間の思考として一番”らしい”選択なんだろう。

衛宮士郎の選択はあまりにも莫迦げてる。考え自体間違ってるとは言わないが、その果てには伽藍堂のココロしか残らない。

そうやって自らを犠牲にして大切な者の気持ちを切り捨てて、それで全てを救えただなんて欺瞞、吐き気がする。

英霊エミヤの選択は——体験談からのものだが——なんの意味をも成さない。

大切な者を切り捨ててまで大衆を救い、救った者に裏切られ、全てがマイナスイメージにしか働かない。

大衆を否定する気は無い。私のやり方もいかなかったのだろうから、怒りを押し付けるのは間違いなのは承知している。

そう、悪いのは英霊エミヤそのもの。我が儘に理想を突き詰めた事で全てをなくし、我が儘に欲張った事で全て溢れ落ちた。

そんな腐った理想など——そこいらの狗にでも喰わせてしまえばいい。

だがこうやって生き方を罵倒した所で私が選択する道は正しいのかと言われたら、否だ。あくまでそれは人間らしい決断だと言っただけで、道徳的に考えたら只の自分さえ良ければ構わないタイプの人間に過ぎない。

正しい事なんてありはしない。

結局物事の理想なんて、一人一人の身勝手な独裁が殆どだ。自分に有利に働かない理想を掲げる者などいやしないのだから。

衛宮士郎はあのアカい世界で唯一生き残った罪悪感故に。

英霊エミヤは理想そのものが無かった。ただ機械的に過去に縛られる心を振りほどこうと必死になっていただけ。故に自身の過ちに気付く事が無かった。

いや、その過ちを過去の自分が原因だからと衛宮士郎を抹殺し、罪から逃れようとしていたんだ。

——なんて滑稽な。

自分自身そんな醜態を晒していた事にすら気付かない程に過去の自分を憎悪し、嫌悪し、卑下していたんだ。

莫迦莫迦しいな。元より英霊エミヤに——衛宮士郎に罪などありはしなかったのに、過剰に罪悪感ばかりが募り、最終的に元の鞘に収められたのは自身をよく知る人物のお陰だった。

目的の為に深い信頼を裏切ったのに、彼女は笑ってくれた。私の為に泣きそうになってくれた。

——こんな私なんかの為に、最後まで彼女は彼女らしく有り続けてくれた。

それからの私は、こうやって世界の記憶にすら載っていない幻想郷で更なる経験をし、信頼する者を決して裏切らないと誓える程に成長する事が出来た。

氷の様に冷たく、鉄の様に固まった心を溶かし、解してくれた少女の時の過ちを繰り返さない為に、私はこの意思は曲げないと誓う。それがきくと、エミヤシロウがここに来た意味のひとつなのだろうから——

『さて、どうしようかな』

休ませていた身体を軽く動かし、筋肉に酸素を染み込ませる。

——今更だが、この環境を与えてくれた謎の女にも感謝しないとな。今度会えたなら疑念に向けた事を謝罪しよう。

『ん？』

ガサリ、と草がざわめく音が聞こえる。

風でなびく様な周囲から聞こえる爽やかなものではなく、明らかに位置が限定された雑な音。

こんなシチュエーションがルーミアの時にあった気がしたが——さて、今回はどうなるやら。

『あれ、お父さんだ！』

——その声には聞き覚えがあった。

しかし、それには違和感があった。

だって目の前にいる彼女——上海は、前に会った時はこんなはつきりとした発音で喋れてなかったのだから。

『上海——か？』

草影から現れたのは間違はなく上海で、相変わらず小さな身体をふわふわと浮かせていた。

『そうだよ。久しぶりだねえ』

にぱっ、と笑顔が花開く。

表情もこんな人間らしい動きはしていなかった。一体、何があったのだろう。

『ああ——本当に久しぶりだな。蓬萊やアリスは元気か？』

『アリスはちよつと寝不足気味だね。蓬萊なら、そこにいるよ？』

指指された先へ身体を向けようとする前に、頭の上に僅かに重みがかかる。

手探りでそれを探し、掴んで目の前に持ってきたら、そこには案の定蓬萊の姿があった。

『久しぶりだな、蓬萊も』

『……………久しぶり』

対して蓬萊も発音は上海と同様人間らしくなっていたが、以前に比べて大人しくなった——と言うより、失礼だが無愛想になった風に見える。

『蓬萊は恥ずかしがりだからね。本当はお父さんに会えたのが嬉しい筈なのに素っ気ない態度を取っちゃうんだよ』

『うつさい莫迦』

変わらない表情でそう呟くと、何かを上海へと投げつけた。しかし上海はそれを予期してたらくしく簡単にキャッチした。

『これは……………茸か』

上海の手に収まっていたものは、見たことの無い形状、色彩の茸だった。

この二人はこれを取りに来たのだろうか。

そうでもなければ手に持つてる意味が無い。本当に珍しいものだったからつい拾った可能性もあるが。

『うん。マジックアイテムなんだよ。これ。アリスが魔法の研究に使ったって。普段はこんなの使わないのに』

そう言うのと私にその苺を渡して来たので思わず受け取る。そして蓬萊は私の手を離れ、再び頭に座した。

大事なものを渡される事で理解する信頼は、なかなか心に染みるものがあつた。

『ふむ……。それより君達が採集に来てるようだがアリスはどうしてるんだ？』

『アリスは……。寝てるよ。無理矢理寝させた。最近取り憑かれたように魔法の研究に没頭してるんだよ。私達の為らしいんだけど、アリスが無理してまでやって欲しくなんか無いよ……。』

明るかった上海の表情は一気に影を射した。

どうやらかなり思い詰めてる様だな……。お互いに。

『済まないが、案内を頼む。そこまで無理をしているならば協力者が必要だろう？』

詳細なら後で幾らでも分かるだろう。今はとにかくアリスの容態を確認したい。

『分かった。アリスを止めてくれるならなんでもするよ』

『アリスを止めるかは事の次第によるな。そこまで根を詰める理由

があるのなら、私に止める権利など無い。第一そんな声など届かないだろう』

『そんな』

がくりと頂垂れる上海。

蓬萊は変わらないの無表情。だが、先程より僅かに目を細めている姿を見るに心境は変わらないのだろう。

『ならば支えればいい。今の君達みたいにアイテムの採集ひとつするだけでも、彼女にとって負担は明らかな程減る筈。彼女の負担は私達で賄えばいい』

そんな二人の頭を笑顔で同時に撫でる。

そういったタイプが話を聞かないのは経験済み。

我を意地でも通す女性ほど厄介なものはありはしない。だから、下手に抗わず陰で支えるのが正しいのだ。

『……………うん』

『それがいいわね』

別々の反応だが理解してくれた様だ。

彼女達もどこかでこの選択を考えてたに違いない。物分かりが良いのもあるんだろうが。

『あっちへまっすぐ行ったら確か丁度着くと思うけど、ここからじやだいぶ遠いよ』

上海達が来た方向を指さし、早く行こうと言わんばかりに目で訴え

る。

ここは魔法の森ではないただの森なのは知っていた。だから距離的に離れていることも承知している。

『では、行こうか。少し大人しくしてくれ二人とも』

『えっ——きゃっ！』

『——！』

二人を両手で抱き締め、そのまま強化を掛けた足で走り出す。少し苦しいかもしれないが、速度を一括しないと時間も掛かるし私の速さについてこれるにしてもその負担は計り知れないであろう。それに彼女達もまたアリスの手伝いで疲れているのだ。今まで休んでいた私が働かなくてどうする。

『うわぁー！はいはいーい！』

『うう………髪が乱れる』

上海は此方の心配を余所に楽しそうにしていると思えば、蓬萊は風を鬱陶しそうにしている。

ここでも性格の違いがはっきりと分かる。あの時は感情など見えなかったのに……アリスの徹夜の理由と関係あるのだろうか。

上海の指示通り向かうと、少ししてアリスの家の正面に出た。ズレなくぴったりと。

二人に口を閉ざすようジェスチャーをし、ドアを音を立てないようゆっくりと開ける。

すると、謎の臭気が押し出される様にして身体に張り付いてきた。

『これは、彼女の徹夜の理由のひとつかね？』

『うん。スッゴい変な臭いだから、正直入りたくない』

珍しく蓬萊が答える。

上海は——鼻を摘まんで手で団扇をしていた。

臭い、か。

人形である彼女達が臭気なるものを感じれるものなのか些か疑問だが——今はそんな事を考える暇は無い。

私は取り敢えずアリス邸に足を踏み入れた。

『……………これは、まあ』

居間に着くと、そこはまるで惨劇の跡みたいに散らかった。

埃や魔導書らしきものが乱雑されており、余程切羽詰まっていたと見える。

事情を知らなければ独り暮らしにありがちな光景、程度にしか見えないだろうが。

『アリスは寝室か？』

英文字でそう書かれている板を見ながら問いかける。

『うん。起きちゃうかもしれないか入らない方がいいよ』

『そうだな——ならこの掃除をしようか。本等の所有物に触れる訳にはいかないだろうし、二人はその方面を頼む。私は埃とかを

どうかしよう』

『了解です!』

『分かった』

ビシッ!と敬礼をする上海に頷くだけの蓬萊。そして直ぐに作業に取り掛かった。

いい子だな、と思う。

この手の作業は、普通面倒臭いと嫌な顔するものなのだが……彼女達はそんな顔せずはきはきと片付けに勤しんでいる。

それほどまでにアリスの事が好きなんだろう。そしてアリスもまた、彼女達を大事にしてきたのだろう。

彼女達を結ぶ強い絆は、どんな時であろうと切れることは無いのだろう。

それに比べて私は、自己の欲望を叶える為に平気でパートナーを裏切った愚か者だ。

迷いが無かった訳では無い、と盾にした所で他からすれば事実しか映されない。それが辛いとかそういう訳ではない。

仮に彼女が言葉にせず私を許したとしても——私自身がそれを容認しない。出来る訳がない。

後悔からはなにも生まれない。だが後悔しなければなにも変わらない。

だから私は——いや、生ける者全ては、後悔をする為に物事を成すんだ。

どんなに利己的に生きても、悔やむ事ない人生を謳歌出来るなんて有り得ない。

後悔を恐れて足を止めるのも選択肢のひとつだろう。

大切な者が傍にいたり、今の状況が幸福ならばそれがそいつにとつての”後悔の果て”なんだろう。

そうやって線引きされた事によって出来た自身にとっての幸せな空間。それが保たれたまま一生を終える場合もあれば、硝子の様に簡単に砕け散る場合もある。

前者ならば何も言うことは無い。だが後者なら——そいつは再び後悔に吞まれる。それも線を引く前の何倍ものだ。線引きし、自分の世界を護る為に線の外の世界を見ようとせず生きた結果、それによって生まれた後悔の渦に吞まれてしまう。

酷い話だと思う。

そいつは不変を望もうと、世界はそれを容認しない。ちっぽけな価値観を護っていくにはあまりにも個の我は弱いのだ。

どんなに理想的であろうと、変わらないなんて事は無い。

不変と言う言葉があると同時に、必ず対となる言葉だって存在するのだ。そして事象もまた、言葉が存在するならば連なる様に存在している。

それはまさしく世界の意思であり、バランスを保つが故の行為である。いち生物がそんなものに抗った所で徒勞にしかない。

だから私達は何処かで、諦めと言う名の妥協をするのだ。

どうにもならない事は当たり前前に存在する。だったら最初から何もかも諦める姿勢でいれば傷つく事は無くなる。

——英霊エミヤがそうだったように。

『——お父さん？』

呆けていた私を呼びかける声が聞こえた。

目の前には、何冊も積み重なった本で身体こそ隠れているが大きな

赤のリボンから上海であろう存在がいた。

『あ、ああ………すまない。私が指示したのに何もしいのは戴けないよな』

彼女が持つ本を数冊取り除くと、案の定上海の顔が出てきた。多少埃にまみれた頬を指で軽く拭うとくすぐったそうに顔をしかめるが、嫌では無いらしく反射的になってしまっている様だ。

『お父さんなんか悲しい顔してたけど、大丈夫？』

『あ——ああ、何の心配もいらない。さて、私も作業に取り掛かるとしよう』

上海の言葉から逃げる様に話を切り上げる。

全く、あんな小さな子に気取られる様ではまだまだ私も未熟と言うことか。

フックに掛けてあつた箒を手にし、上段から掃除に取り掛かる。今は雑念を払い、上海達の手伝いに勤しまなければ。

アリスの背よりも高い位置にある部分等は埃まみれだと断定していたのだが………それは簡単に否定された。掃いても殆ど埃は現れず、何カ所と試してみるも結果は変わらなかった。

ちらりと二人の姿を一瞥する。

相変わらず休む事なく身体を動かしている。

………これも二人の頑張りなのかな。そう考えると心があつたかく感じた。

それから終始無言で作業を行なった。

喋ると残っていた埃が喉に入ると言う事もあったが、やはり静かにすると言う約束が効いたのだろう。

そのお陰で、昼を跨ぐかそうでないかの時間には殆ど終わっていた。勿論手抜きはしていない。

『腐界の森がなんともまともになったものよ』

『なんで年寄りっぽく言うの』

『だって疲れたんだもん』

テーブルに大の字仰向けで寝転がり、気だるそうに心境を吐き出した。

彼女がこうなるのも理解出来る。肉体的疲労が彼女達にあるかは別として、精神的には黙々と作業したことで疲弊しているのは仕方ない。

『二人ともお疲れ。君達は休んでいたまえ、後は私がやろう』

『えゝなら手伝うよー』

『気持ちは有り難いが………疲れている君達を働かせようと思えるほど鬼では無いのだよ』

上海は言わずもがな、蓬萊も表情に少し疲れが見える。

恐らく二人は私が拒否することを拒否するだろうが………ここは勝たないといけない。

だが、予想外にも背後からドアの開く音が聞こえたので振り返る。そこには、目の焦点が定まっておらず髪はボサボサのパジャマ姿のアリスがいた。

多少はだけ気味なせいで目のやり場に困るが、言えば間違いなく理不尽な一撃が待っているだろうから様子を見ることにした。

『…………おはよう』

『あ、ああ。おはよう』

多少怯えつつも平静を装う。寝起きで頭が回っていないのが救いか。

『あれえ、なんでアンタがいるの？』

力無く棒読み気味で質問してくる。

普段の知的な雰囲気はまるで感じられず、それこそ先程の居間の惨劇の住人らしさすら覗ける。

『私は上海と蓬莱の手伝いをしていただけだ』

『……………そう』

簡潔に答えると、フラフラと此方へ歩いてきた。

そして彼女はそのまま止まることをせず、私にぶつかった。というより、もたれかかって来た。

寝息混じりの鼻息が、彼女がどれだけ睡眠を欲しているかを教えてくれる。

『牛乳飲む』

『分かった』

アリスの言葉に上海が反応し、そのまま冷蔵庫があるのであろう方向に飛んで行った。

……それにしても幻想郷に電気はあるのだろうか。寧ろ電気を伝える機器や発電する機器の方が。

早苗達と生活していた時には大して疑問には感じなかったが、今思えば色々変な話だ。

少なくともとりは電気を行使している。そうでなければあんな大規模な機械を作る及び駆動させるのは不可能だ。

それとも電気とは別の燃料が……いや、あの恐竜に攻撃した際に間違いなく電流が流れていた。ならば電気を使う方法は存在している。

こんな場所で電柱の様なものがある訳もないし、地電流でも用いるのだろうか。謎は深まるばかりだ。

そして遅れること上海がカップに注いだ牛乳を危なっかしく持つて来る。

アリスは何も言わずそれを受け取り、両手で持ったカップを子供がしそうな動きで飲んでいく。

けぶ、と軽く息を漏らし飲み終えたカップをテーブルに置くと、そのまま椅子に腰掛ける。

そうすると蓬葉が何処からか取り出した櫛でアリスの乱れた髪を器用に整えていった。

最早日常なのか、一連の行動に無駄が無い。

『って、なんでアンタがここにいるんじゃ—————!!』

どかーんと、まさに火山の噴火を思わせる程の突発ぶりと規模の爆発がノリツツコミばりの遅さで突如起こった。

髪を整えてた蓬萊はそれに驚き、ぼとりと床に落ちた。上海は予想していたのか耳を塞いでいた。

確かこんなことが前にも———そうだ、凜が衛宮亭の朝の風景に紛れていたのを藤ねえがこんな風に爆発したんだ。
懐かしい———と物思いに耽る暇は無さそうだな。

『あああこんな格好だし隙だらけの姿だったしうあああああ』

『落ち着け』

あまりの羞恥のせいなのか身体を蛸みたいにくねらせていたアリスに、置く様な手刀を額に当てる。

『……………で、なんでここにいるのよ』

額を擦りながらそう質問してくる。

『さっきも言ってたでしょ全く。テンパって普段のブレインは停止してるのかしら』

ゆらゆらと蓬萊が下から上がって来て毒を吐く。

落とされた事を根に持つてるのだろう、言動に明らかな棘が剥き出しになっている。

『うるっさい。はぁ……………』

反論の声は弱々しく、覇気が感じられない。

余程無防備な姿を晒した事が堪えたのだろう。こればかりは私が何を言った所で逆に煽る形にしかないなので、その姿を見守るしか出来ない。

『上海から聞いたぞ。最近寝てなかったらしいじゃないか。何故そんな無茶をしているんだ？』

取り敢えず無理矢理にでも話を切り出さないと、アリスは暫くこのままだろうと考え、実行する。

すると意外にも興味を示したのか、動きは止まり、表情も先程よりは締まったものが私の顔を見つめ返していた。

『——貴方が上海と蓬萊をほぼ完全な自律人形にした日から考えたの。命そのものが魔力で構成されてるのをどうこうする事は無理な可能性があるから、もっと別の部分から着手しようって』

『と、言つと？』

『人形からそれ以上への昇華。貴方も違和感程度は感じてるだろうけれど、上海達の言葉に固さが無くなってよりヒトに近いものになっている。私が貴方と別れてから寝る間も惜しんでやって出来たものよ』

そうだったのか。しかし――

『それがどう不眠に繋がるんだ。そこまで焦ってやる理由があるのか』

『――本人を目の前にして言うのもアレだけど、多分悔しかったんだと思う。嬉しさが喉元過ぎれば、次は私に至れなかった領域に簡単に踏み込んだ貴方への嫉妬、劣等感ばかりが込み上げてきた』

彼女自身何を思うのか、私を見つめていた目を逸らしながら話す。そして私も、黙って彼女の話に耳を傾ける。

『勝手よね。これ以上無い嬉しさを噛み締めた後は、更に高みに至ろうとする。魔法使いとしては正しいんだろうけど……私の力でやった事でも無い癖それを我が物みたいに扱うなんて、プライドが許さないのよ』

気まずい雰囲気――と言っても私がそう感じてる訳ではないが――
――が辺りに漂う。

口数の多い上海もそれを察知してるのか、アリスを心配そうに見つめる以外の行動を取ろうとしない。

『けど私にそんな力はない。だからせめて――ほんの些細な所からでも変えていこうって、そう思ったの。』

でも数日不眠で作業を行なったのに出来たのはたったひとつの欠片となる部分だけ。貴方なら恐らく簡単に変えられる部分なんでしょうね』

自虐する言葉と引き釣った笑みがとても痛々しい。そして、見ていられなかった。

「買い被りすぎだ。君が前に言った事だが、魂の結びつきのある抛り代を改造すると宿る魂が乖離してしまうと。君が私の知らない所で何をやっていたかは知らない。だが、君は自身で言った”不可能”を実現した。私みたいな力技では到底不可能な精密な作業で理をねじ曲げた。君にしか出来ないやり方で、君の実力でだ。だから卑下せず誇っていいんだ」

「つ——」

アリスは反論しようと身を乗り出しそうになるも、拳を握り自身を抑えた。

負けたくない、そう思っているけど何処かで私には勝てない、と勝手に納得してしまっている。

確かに彼女は上海を自律させる事は出来なかったかもしれない。だが、それが自分のスキルでは永遠に追いつけないという解釈に繋がるのは間違いだ。

私で至れた領域に、その専門であるアリスが至れないなんて、それこそ有り得ない話だ。

彼女ならば私みたいな強引なやり方ではなく、もっと精密かつ大掛かりにやってのける筈。いや、絶対出来ると確信出来る。

それこそ、青の魔法使いの姉である人形師程の技術すら行使出来るのではないかと踏んでいる。

だが肝心の彼女のメンタルが私に対しての劣等感に支配されているのなら……これをどうにかしない限り成長も望めないだろう。どうにかして自信を持たせたいが、こればかりは難しい。私が励ましても鵜呑みにはしてくれないだろうし、彼女自身が立ち直る他無い。いいところ私は補助する程度しか役に立てないだろうな。

『今は言葉の意味を鵜呑みに出来ないかもしれない。けど、私の言ってる事に嘘偽りも濁りもありはしない。だからまずは自分の力に自信を持つべきだ。今の君では何を成すにも劣等感が邪魔をして本来の実力を発揮出来ないだろうからな』

『…………貴方に何が分かるってのよ』

私の言葉が癢に触ったらしく、怒気の孕んだ声と共に睨みを効かせてくる。

『はぁ…………。そうやって人の言葉を棚に上げるのは結構だが、そんな押しつけの逃避を何時までもしていられると思わないことだな。子供のように反発し、差し伸べた手も我が儘で払い除けるなんて真似は見苦しいだけだぞ』

『………………！！』

ガタン、と大きな音を立てて立ち上がり、私の目の前まで下向きに近づいてくると、襟元を乱暴に掴んできた。

『…………私と勝負しなさい。貴方のその上からものを言う態度、改めさせてあげる』

『ほう、冷静さを欠いて私に勝とうとな？その自意識過剰をもっと別の所に向けてくれるのなら、私も何も言うことはないのだがな』

『…………少なくともここで鬨いを挑もうなんて考えない位には冷静よ。さっさと表に出なさい』

そう一方的に告げ、ズカズカと外へ肩を怒らせながら出て行った。

『…………勝負する、とは一言も言っていないのだがな』

どうしてこう、この女性は戦うことに関して熱気盛んなんだ。巻き込まれる身にもなってもらいたい。

『お父さん……………』

上海と蓬萊が心配そうに此方を見つめている。

『私の心配ならば結構だ。君達が此方に付いたなんて知れば、彼女の心はズタズタになってしまふ。彼女の事を第一に心配してやってくれ』

『…………そうじゃない。父さんがアリスを傷つけるんじゃないかって上海は心配してるのよ』

…………成程。自分達だって危険な目に合う可能性があるのに他人の心配とは、一体誰に似たんだろうな。

『問題ない。私は彼女を怪我させる為に付き合う訳ではない。少しストレスを発散して欲しいだけさ。勿論、君達を傷つける事もしない』

そう答えると、二人は数秒無言になり、私の言葉を肯定の頷きで返した。

『分かってくれたか。ならば行こうか、これ以上待たせると面倒なことになる』

その言葉に三人で頷き、それぞれの思いを胸に戦いの幕を上げる――
歩を踏み出した。

誰かの為に（後書き）

上海と蓬萊がよりヒトガタに近づいて人格形成がなされたということもあり、その紹介おぼ。（これは作者の妄想の産物であり、原作には性格とかないよ。確か）

上海：明るく活発な性格で、よく喋る。常に元気に振舞っており、それは衰えることを知らない程。だから彼女が大人しくなる時は、余程周囲ないしは彼女自身に何かがあると踏んでいい。

シロウのことはお父さんと呼び慕い、積極的に甘えてくる。アリスの事も同じくらい好きだが、母とは呼ばない（天然だからKYでもある）

蓬萊：口数は少なくもの静か。上海とは真逆で常に冷静に物事を観察して、話すことよりも聞くことが好き。表情は基本的に無表情に近いが、決して無感動な訳ではなく、心の中では喜怒哀楽がはつきりしてるので顔には意外と出やすい。

シロウのことは父さんと呼び、上海ほど積極的ではないものの甘えてくる。寧ろ彼女はさり気なく甘えるので、鈍感なシロウには甘えられてるという自覚がない。

彼女もまたアリスを母と呼ばないが、こっちはわざと。

突っ込み役でもあり、その時は大抵毒づく事が多い。気苦労が絶えないタイプ。

決意の重さ（前書き）

戦闘描写の不得意と周囲の環境が変化したことによる小説への手を付ける時間の大幅な削減により、時間が掛かりました。の割に内容が薄っぺらいのは、個人的なプライド（これ以上待たせるのは不味い）のせいです。

次回から小説が前回までよりも遅くなる確率が大幅に高くなってしまふ事をここに宣言します。

本当はもっと早く言いたかったのですが、活動報告に書くと全員に情報が届かない可能性があるかと判断し、前書きで書かせてもらいました。

決意の重さ

人形師が住まう館の庭に、その人形師と真紅の騎士が対立する様に向かい合っている。

いや、事実対立しているのであって、その証拠に人形師は怒りを籠めた視線で騎士を睨んでいる。

対して騎士はそれを莫迦にする様に皮肉げな笑みで、人形師の怒りを受け流している。

『さて、君の勝手にこうなった訳だが、再度聞こう。そんな状態で私の鼻を明かそうと本気で思ってるのかね？』

『出来るか、じゃないわ。やるのよ』

寝不足で万全ではない体調に、怒りで我を忘れた思考回路。お互いに実力が見えない状況下で彼女が取った行動はあまりにも無謀。

『ふむ、気概だけは結構だが……此方としては弱い者虐めにしかならん』

『っ——またそうやって莫迦にしてっ！』

『君の今の状況を莫迦に出来ない奴の方がどうかしている。私にその気が無いから良いものの、相手がその気なら今の君なぞ戦いの素人だろうとあしらえる。それほどに君のコンディションは最悪なんだぞ。君とてそれ位理解出来る位には頭は回るだろう？』

そして、私自身この会話に意味など無いことも承知している。こうなってしまうば言葉でどうにか出来はしない。倫理や理屈では

なく、信念だけで対立してる様なものなのだから。

カタチとして曖昧な言語での和解が出来ないのならば、もつと現実のあることで証明するしかない。

それが——そう。所要肉体言語と呼ばれるものであり、簡単に言うのなら拳で語り合うと言う、ひどく原始的で単純な解決方法。

原始的故に旧くから浸透しており、単純故にとてもわかりやすい。

彼女も私も不器用なのだろう。だから最終的にこんな選択肢しか選べない様に事が進んでしまう。

莫迦二人が己の信念だけで戦うのだ。そんなもの、誰が止められる？

そして——莫迦程手に負えないものは無いのだ。

ここからは意地の通し合い、泥試合だ。そんな戦いの果てなぞ量れるものではない、が——これしか道が無いのも事実。

平和と戦いとは常に寄り添い合う運命。どちらが表舞台に立っているか否か、そんな些細な切っ掛けで変動する安い運命の悪戯。

私には、それを動かす力も戻す力も無いのだろうか。

『……………そんなの、今更よ！』

空気を叩きつける様に手を振り払うと同時に、数多の人形がどこからともなく出現した。

その数、10あまり。その手にはレイピアや重槍など近接武器を持っているものもあれば、何も持っていないものもある。

軍隊としては不十分な人数だが、彼女の意志で全て自由自在に操れるのならば、これ程恐ろしいものはない。

統率の取れた小隊は、時として一個師団にすら匹敵する。彼女のコンディションが良くない事を念頭に置いて、決して油断は出来ない。

『上海、蓬萊。貴方達は黙って見ていなさい。コイツを相手に動きが鈍られても困るわ』

『アリス……………』

二人を一瞥することもなく、簡単に事実だけを告げる。

……………全く、余裕がないのがバレバレだぞ。

『では、やるなら早くはじめてしまおう。無駄に時間を浪費しては、もとより勝てない戦いが無様な踊りを踏むことにもなるぞ』

『……………っ！！』

私の挑発に鬼の様な形相で返事をする、彼女は一斉に人形を突撃させてきた。

正面から数体の人形で人間には不可能な動きで刺突を隙間なく行い、左右からは容赦ない斬撃の嵐。素手だった人形は光弾の雨を文字通り降らせる。

一瞬にして一人を取り囲む手際の良さ、ひとつひとつの精密な動き、練られた人形師としての兵法。単体で相手をするにはあまりにも脅威がありすぎる。

——だが、それでも。

独りで戦場を駆け、誰の助けも得られない状況下で必死に生き抜いた男にとって、この程度の悪条件は当たり前であり、彼がここに居るのもまた、そんな最悪な状況を打破してきたからに他ならない。

直線から攻めてくる人形を上体を軽くずらして避け、左足を軸に強烈な回し蹴りを浴びせる。その衝撃に数体は身体を持っていかれる。

人形故の軽さが仇になつたらしい。

その余波が左から攻めてきた人形を怯ませ、その隙にソイツと距離を詰め、その勢いに任せた掌底を額に向けて一撃。抜け殻であるそれは、まさに糸が切れた様に慣性の成すがままに吹っ飛び、力無く崩れ落ちた。

そして背後から来るであろう襲撃へ、背を向けたまま低い体勢を取り、片足の跳躍で蹴り上げた。

そして蹴り上げた人形は、そのまま上空から弾幕を張ろうとして間も無い人形へと突撃していき、乾いた音を立てて両者共に沈黙した。

『なつ——』

彼女の驚愕の声が漏れるまでのたった数秒の間に、彼はその脅威を打破した。

幾多の戦いから生み出された研ぎ澄まされた感覚を持っているからこそその芸当。そして迷いの無い一連の行動は正に、死と隣合わせな状況を打破する決定的な決断力の為せる技。

彼は無謀を繰り返すが故に、誰よりも生きる事に貪欲になっていた。目的の為に誰よりも命を犠牲にする覚悟がある癖、その目的は命あるからこそ為せるものだと言う矛盾した環境に身を置き続けた結果——彼の無意識下で行う判断力と決断力、そして防衛本能は、どんな英霊にも劣らない程研ぎ澄まされたものとなっていた。

しかし、皮肉にもその本能は、自分の為ではなく他人を救う為の産物であり、彼自身は常に死を前提とした選択を取り続けていたので良いところプラスマイナスゼロにしかない。

もし彼が他人の為ではないもつとまじな考えで戦いを続けていたのなら——それこそ歴史に名を刻まれる存在となっていたかもしれないのに。

しかし実力を補うには無謀な行動も必要なのであり、故に常に無謀な選択を取らないといけなかった。

彼の身体に刻まれた傷の殆どは、その無謀が身を焼いた結果。不相応な理想を掲げた者が捧げた代償。現に今の一瞬の戦闘の間にも、回し蹴りの時に出来た槍傷や、掌底をする時にカウンターで剣が横腹を掠めたりもしており、圧倒的に見える戦いに見えても、一歩間違えたら致命傷になりかねない状況が多々あった。

それでも最小限のダメージで済んだのは、彼の戦闘経験と彼女のコンディションが悪かった事が大きい。

けれど、もしこれらひとつでも欠けていたなら——どうなっていただろうか。

彼は最早衛宮士郎でも英霊エミヤでも無いのだけど、こんな所ばかりは死んでも治らないのかもしれない。

『さて、まさか弾切れな訳ではあるまい？もしこんな状況になると思っておらず代えを用意してないなんて事があれば——私は相当舐められていたんだろうな』

威圧感を込めた眼で睨むも、アリスが怯むことはなく、無言で先程の倍の数の人形をどこからともなく呼び寄せた。彼女の部屋にあった人形もちらほらと確認出来るということは、完全に余裕がないと判断したのだろう。

『はあああああああっ！！』

両手を振りかぶり、今度は人形そのものを弾幕の様に飛ばしてきた。

『ヤケになったかつ、アリス！』

愚直に飛んできた人形をひとつ殴りつけた瞬間、彼の防衛本能が何かを怖れたが——生物としての反射ではそれに対抗するには遅すぎた。

刹那——轟音と共に空気が振動、視界は閃光に包まれた。

『があつ——！！』

それが人形が爆発したことによる産物だと知ったのは、その直撃を喰らって一秒経つか経たないかだった。

しかしその一秒の思考混濁は、彼を爆発の連鎖から逃さないのには十分な時間だった。

第一波へと突撃してくる人形により、衝撃の後押しがとめどなく続き、彼の身体を砕いていく。

あの時に感じた防衛本能、それは殴りつけた瞬間に人形に魔力が通ったことによる、英霊としての——魔術使いとしてのもの。裏の世界に生きた者故の反応。

直撃する数コンマの世界の中、彼は一瞬でも早く拳を引いたことで重症を避けた。もしそれを怠っていたならば、確実に腕の一本は持っていかれていた。

そしてその腕一本のお陰で、シロウは爆発の連打を強化で耐えるという確実な選択を取ることを出来た。

しかしそれで事態が好転した訳ではなく、防御の選択肢が増えただけであり、巻き返すだけの隙は微塵も存在しない。

闇雲な行動故に油断していた。舐めていたのは、私の方だった。戦いには油断も慢心もなかった過去があったとは思えない醜態。いや、私は私であって、過去は関係無いのだが——それではそれを言い訳にしまいそうだな。都合の悪い結果から逃げる為に、かえって都合の悪い方向へと墓穴を掘る……まるで道化だな。

思考で冷静に悔やんでいる間にも、爆発の雨は止まない。通常の爆発ではなく魔力が通つてあるそれは、Cランクの壊れた幻想を只管に喰らっているのと同等の威力。対魔力の無い私には、それほどのランクであろうと痛手になる。

突然爆風が収まり視界から晴れていく。

正面には両膝に手をついてかろうじて立っているアリスの姿。もう流石に弾が切れたのだろう。或いは魔力が切れたか。どちらにせよ助かったのは事実。

傷は思いの外深い。戦いをするには多少支障はあるが、危惧する程でもない。これも反射的に身を引いたお陰か。

出来るだけ効いていない風に振る舞いながらアリスの前まで歩いていく。

それを阻む力も無いのだろう。私が近づいて来るのを彼女は睨む事でした抵抗してこない。

そして、目と鼻の先にまで近づき、気付く。

玉のような汗を額からとめどなく溢れさせ、息も予想以上に荒い。魔力どころか気力もゼロに等しい。

何故、ここまでするんだ？

私が憎いのは分かる。あれだけ莫迦にしたのだ、怒りに我を忘れるのも分かる、が——流石に考え無しの行動が目立つ。

あの特攻作戦だってそうだ。確かに効果はあったが、私を倒すまでには至らなかった。

そして肉体はボロボロだが魔力は全快に等しい私と魔力も身体も疲弊し切っているアリス。どちらが有利かは誰でも判断出来るだろう。

自分の肉体で戦わず人形による操作のみで戦う彼女は、間違いなく技術や作戦を主とした戦闘スタイルで立ち回っている。蓬萊の憎まれ口にもあったブレインと言う言葉も、それを多少なり裏付けている。

そんな彼女は、戦いの中で常に優雅さを披露していたのだろう。

常に冷静に物事を捉え、筋道を立てた戦術を組み立て、実行する。

そんな軍士に近い立場の彼女は、勿論の事ながら戦術の基本に理解はあるらしく、決して素人な動きはしていない。

その数こそ不明だが、こんな世界である以上場数は踏んでいる筈。

そんな彼女がこうも簡単に憤るのは少々解せない。

一瞬の油断が死の一步になると言うのは彼女だって知らずとも理解してる筈。それなのにこんな安い挑発に乗るものなのだろうか？

『………… チェックメイトだ。君にはもう成す術は無いのだろうか？ 潔く降参した方が身の為だ』

一般的な長剣を投影し、脅す様に突き付ける。

今の彼女はこんなものでも一振りで殺せる。魔力も体力も欠片もありはしない魔法使いなど、一般人と何ら変わりはない。彼女もそれを理解出来ない程愚かでは無いだろう。

にも関わらず——彼女の放つ鋭い睨みが衰える事はなかった。

何故だ？と疑問符を浮かべていると、次の彼女の行動に目を見開いた。

彼女は――私の突き付けた長剣の刃を素手で握り締めていた。

『なっ――――』

慌ててそれを振りほどこうとしても、まるで動かない。彼女の握力が魔法使いと言う名で隠れていたのか、握り締めた刃が肉に完全に食い込んでしまっているのか。

どちらにせよ、このままにしておけば彼女の手は一生残る傷を負う事になってしまう。

脅す為だけに用いる筈だった剣がこうも裏目に出るとは……

『何を莫迦な真似を』

『莫迦なのはどっちよ。敵を前に尻込みする事が正しいとでも言うの？』

『敵かどうかなんてのは、君がこうなってしまった時点で無為になった様なものだ。戦う気力の無い相手を敵と思う気は毛頭無い』

だからその手を離せ、そう言いたい。けれども、言えば彼女は天邪鬼な行動を取ってしまいそうで、恐かった。

形勢は明らかに此方が有利な筈なのに、私は明らかに彼女に圧されていた。

『…………… 外来人の貴方は知らないでしょうけれど、ここではスペルカードルールと言う決闘法が一般的で、戦いと言っても命に関わる事は稀な、俗に言う祭りの行事みたいな感じで執り行われてるのよ。

ただど例外として、スペルカードを用いない戦いを挑んだり挑まれる場合もある。そういう時はね、——殺されても文句は言えないのよ。

法を破ってまで行なった者に対する措置は、法から逃げ出した時点で何もかも無くなるのよ。喻えそれが——自分が申し込み、自分が敗者になっていたとしても変わらない』

……スペルカードルールとやらを用いない戦いは幻想郷ではご法度で、それを承知でアリスはこの戦いを挑んだ。彼女がそこまでして私と対峙する理由があるのか？

何事も命あつての物種であり、一事の感情で殺し合う選択を取ったとでも言うのなら、私はとんでも無い選択をしてしまったのではないだろうか。

ただほんの少し彼女のストレスを発散させる程度と考えるの作戦だったのに、このザマだ。

『どうしてそこまでするのか、なんて考えてるんでしょうけれど、私だって死ぬのは御免よ。死ぬ確率だって高かったのは理解してる』

『ならば——』

『だからって、逃げたくなかったのよ。貴方に——エミヤと言う存在に、これ以上負けたくなかったのよ。』

そうしないと何もかもが否定された様で——貴方に何もかも取られてしまったかの様に思えて、そんなの耐えられなかったのよ』

まるで懺悔するかの様に、思いの丈を吐き出していく。

睨んでいた眼は次第に弛んでいき、それに連れて今度は泣き出しそうな表情に変化していった。

『貴方はこれも否定するんでしょうね。貴方が変に優しいのは少し理解してるつもりだし。

でもね、その優しさが私を蝕むのよ。

その優しさに付け込んだのは私なんだから、自業自得もいいところ。

そして今、私は貴方を殺す勢いで自分で蒔いた種を清算しようとした。憎さこそあれ、優しさを持つのは間違いよ』

彼女の言うことはもつともで、少なくとも今の彼女にとって私は敵であり、慈悲を乞う相手ではない。

しかし私は彼女を敵とは最初から思っていない。

対峙する者同士、想いすら交差しない。

お互いが望む結果に到るには、最早運を天に任せるしかないこの状況は、僅かな救いだけでも良いと生き方を変えようとした私すらも拒絶された様で、辛い。

いや、それよりもこの状況を招き、打開すら出来ない己が憎い。

たまたま偶然、それこそとても低い確率で合致したピースでしかないこの出来事は、もしかするとお互いに非は無いのかもしれない。

ほんの少し運が悪かっただけ。誰にでも有り得る些細な不幸の繋がり。

だからこそ、あとは彼女次第なのかもしれない。

認めたくないが、私がこれ以上何をした所でかえって悪い方向に行きかねない。

唇を噛み切りたい程の悔しさを堪え、私は彼女の全てを容認する。それが今の私が唯一出来る事だから。

『この傷は私の身勝手が招いたもの。貴方の傷も私の責任。

——— だけど私は謝らないわ』

その言葉と瞳に、彼女の決意を垣間見た。
彼女はここでどちらかが完全な敗者となるまで、私の敵である事を決意したのだ。

『今の私では天地が反転しても貴方に勝てないのは理解してるわ。
——ただどね、アンタのその顔に一発でもキメてやらないと、死んでも死にきれないのよっ！！！』

決意の咆哮が辺りを揺るがし、それに呼応するかの如く突風が押し寄せる。

そして気付けば——私の頬は強烈な一撃を喰らっていた。

拳のめり込む音と骨が軋む音が気持ち悪い。

彼女と私の間合いは確かに然程遠くはなかった。けれど、弱った女のパンチを避けれない程度では英霊になんかなれやしない。

それでもこんな結果になったのは、恐らく——彼女の想いの波動に中てられたせいだと思う。

彼女が吼えたあの瞬間、彼女と衛宮士郎を重ねて捉えていた。

決して実力では到底及ばない戦いで、本人もそれを理解しているであろう状況でも、自分の想いを貫く、たったそれだけの事で今にも崩れそうな膝を支え続けた衛宮士郎。

、正式な試合方法があるにも関わらず、敢えて最悪の状況を望んでも私に勝ちたいと躍起になり、結果敗北当然の状況となったが、それでも己が信念を貫く事だけに命を賭けたアリス。

どちらも誰かにとっては度し難い理由で戦っている。にも関わらず、私にはそれが眩しく見えて、羨ましくも思えて——悲しかった。

『ははっ、ザマ、ア——ミ、』

弱々しくも勝ち誇った声を上げた瞬間、彼女は殴った慣性に従う様に此方へと倒れ込んだ。

カラン、とアリスが掴んでいた剣が落ちる。私は彼女の想いを聞き届けた時から先程から柄から手を離してた為、この音が聞こえたと言ふことは、誰もそれを支えていないと言ふことだ。

アリスの表情は疲弊し切っているものの、満足したものもそこに紛れていた。

——結果としては私は彼女の鬱憤を少しは晴らせたのかもしれない。

けど、もっと他に手段があつたんじゃないかと、どうしても考えてしまう。

終わってしまった事をどうこうした所で徒労にしかない。反省はしても後悔だけはしたくない、そう思っていたのに、私の頭は雑念で支配されている。

アリスの腕を持ち上げ手の平を観察する。

剣を握り締めていたそれは、最早傷口が見えない程に鮮血に浸っていた。

想像を絶する苦痛だったろうに、彼女は決して離そうとはしなかった。

その痛みを否定したら、お前は後悔を重ねたまま地に伏すぞ。そう言い聞かせたのではと思う。

『上海！蓬萊！アリスの傷を塞ぐものは無いか！？』

声を荒げて二人へと問いかける。

両者共私達の戦いに呆気を取られていたのか、その姿を見たときにはとても慌てた素振りを見せながら家へと戻っていった。

二人からしても、まさかアリスがあんな奇行に走るとは思っていなかったのだろう。私だってそうだったのだから。

『——完敗だよ。アリス』

だからこそ、私は敗けを認めるしかなかった。

あの時と殆ど変わりはない。信念の重さの違いだけで敗北したあの時と。

ここは戦場ではない。今のは戦いと言うよりも喧嘩と言った方が正しい。

過去に慎二と喧嘩した時に聞かされた言葉だけど、喧嘩と言うのは自分が敗けを認めない限り勝っているんだと。

唾吐きかけられようとどんな酷い仕打ちをされようと、此方が敗けを認めない限り敗けは無い。あの時もその言葉には納得がいったが、そんな事実を今こうやって体感している。

そついった点ならば、間違いなく私は敗けた。完膚なきまでに。

思考を切り替え、改めてアリスの手を確認する。止血するにも難しいので、取り敢えず布か何かで縛って血を止める。

最早感覚も無いのが幸いしてか、痛む気配も無いが………急がないと壊死してしまう。

お姫様抱っこで抱きかかえてそのまま屋敷へと戻る。

自業自得とはいえ、それを理由に見捨ててる気は無い。

彼女は私に勝った。勝者が敗者に看護されると言うのも可笑しい話だが、こればかりは仕方ない。

——彼女は私に劣等感がある。

だが、私からすれば彼女は私に無いものだって沢山持ち合わせてい

る。

所詮私は魔術がなければ何も出来ない無力な存在。だけど彼女は、
喩え魔法が使えなくても、誰にもあるその手、指で上海や蓬莱達を
作れる。それがどんなに羨ましいか。

神秘に頼らずとも生命を宿せる器を創れるなんて、私からすれば規
格外もいいところだ。

元よりある魂を器に移す場合、器が魂と完璧にシンクロしない限り
拒絶反応を起こす筈。違う血液型の血を体内に入れたら起こすそれ
の様に。

つくも神の様にその器の為に魂が構成される場合だって、常人は普
通考えつかない事だ。

それこそ人間の創造と一緒に。肉体は母親の胎内で創られるが、魂――
――つまり精神等の、肉眼では決して見えない部分の神秘をアリス
は行なっている。

彼女は女性であるが故に、その身に子を宿す事も出来る。

更に人形師であるが故に、その手で命を創る事も出来る。

……他者の命を天秤に掛けてなった正義の味方なんかよりも、そ
の在り様は素晴らしい。

所詮私が生み出せるものは、冷たく硬い人をコロす為のもの。それ
に比べて彼女は、二つのカタチで生命を生み出せる。

『……………気付いてくれ。君は私なんかよりもよっぽど凄いことを成
しているんだと』

独白に近い小さな声で呟く。

私が言っても否定するのは目に見える。ならば彼女自身が自力で気
付くしか理解する方法は無い。

それに、こういう事は他人の手を差し伸べるのは相手の為にならな

い。

出来る事は、見守る事のみ。

『いや——まだあつたな』

それは、彼女の神秘のひとつを絶やさない為にその血に染まった手を治す事。

些細な事だけど、とても大事な事。

彼女が彼女で在る為に必要なとても重要な任務。

『全く、世話が焼ける』

そう呆れるも、表情で嬉しそうなのがバレバレであろう。

他人を助ける事でそれを喜びとする感情。

それは衛宮士郎も英霊エミヤも持ち得なかったヒトとしての感情。誰かを救う事を機械的に行なっていた奴等では、そんな感情を持つ余地は無かつたのだらう。

衛宮士郎として生きていた頃が一種のターニングポイント。そこで選択を間違えればエミヤの様な自動殺戮兵器へと成り下がる。そして二度と選択肢を迫る事すら叶わなくなり、負の輪廻を回り続ける。

そう考えると、私が今ここに居る確率とは一体どれだけのものなんだろう。

異常なまでに少ないのは理解出来る。だが、座から溢れ落ちたエミヤシロウを私が認識する事は無理だ。

同じ場所から生まれた可能性の欠片。本人であり本人とは異なる英霊という存在。だから私ばかりが特別な訳ではなく、もしかすると私みたいに英霊の座から溢れ落ちた奴もいれば、過去の聖杯戦争にイレギュラーな存在として介入していた可能性だってある。

そして、その可能性を信じ、願う。

過去の俺よ、どうか呪縛いから解き放たれる時が訪れたのなら――
――苦しんだ分の平穩に身を委ねる道を選んでくれ、と、自分であり
自分では無い存在へと心から祈りを捧げた。

決意の重さ（後書き）

今更なんですが、今回書くことないので言っておきます。

この小説のシロウは最強じゃないよ（キリッ

普通に勝てない人（ガチで本気になれば分らん）は数人は用意します。その中にはとある条件下では、と言う場合もありますが、皆さんが予想外と思える人もその部類に入るやもしれません。

稗田の当主（前書き）

時間がかつたくせにまじつまらん内容です。泣きたい。

稗田の当主

八意永琳さんを尋ねた次の日。私は連続で尋ねるのは医者と言う忙しそうな身分の彼女の負担を高めるだけだと判断し、取り敢えずは自分に来ることをやろうと人里へと降りてきた。

直接シロウさんと会うのは止めた方が言われてしまった今、私が出来ることと言えば、この二重人格らしき私自身の異変に向き合うこと。

常にそれを意識し続け、感情を平常に保ち、もうひとつの自分を出さない様にする。その為にその状況を形成し、その中であらゆる行動をして感情の乱れをなるべくなくす努力をする。言ってしまうえばリハビリに近いものだ。

神奈子様や諏訪子様相手では普段通り過ぎて意味がない。だから他にもシロウさんを知る人物と接触し、会話する事で改善して行こうと思い、今日は藤原妹紅さんと会うことにした。

どこに住んでるのは知らないけど、前は人里に居たんだしきっといるだろう、と樂觀的な考えで今に至っている。場合によっては上白沢慧音さんでもいい。あの人なら間違いなく人里にいるだろうし、探そうと思えばすぐの筈だ。

——私の早とちりが原因で二人には迷惑を掛けてしまったと思う。里を護る者として、被害者として。

だからこそ、一刻も早く治りたい。治らないものなら、せめて抵抗を沢山つけたい。

自分を律する事が出来ない内は、シロウさんにも会えないし、周りの人達にも大きな迷惑を掛けてしまふ。そんなの耐えられない。

『…………とは言ったものの、人里ってこんなに広がったんだなあ』

ここに居住まいを建てていない者としては、この場所は買い物の為に訪れるくらいのもだったから、こんなに隅々まで歩くことなんて無かった。

外の商店街の通りみたいに、必需品とかがある店は左右に並ぶ様に構えてあるから分かりやすかった分、迷うこともなかったから。

まるで都会を知らない田舎娘みたいに目線を左右にばら撒いていると、突然勢いよく背中になにかがぶつかってきた。

何事かと慌てて振り向くと、そこには小さな女の子が反動で倒れそうになっていたので、反射的に暴れていた腕を掴んでこっちへと引っ張った。

『あの、大丈夫？』

肩までで切り揃えた紫色の髪、それを彩る様に付けている大きな白い花のリボン、それと同類の花模様が描かれた黄色の振り袖にその上から羽織る様に着た淡い緑の着物、下は赤い袴みたいな——詰まる所構造がよくわからない出で立ちをしていた。

年は…………私よりも５歳以上は下だと思う。見た目で歳を決めるのは永琳さんの例もあったから自粛するべきなんだろうけど。

『え、ええ。ありがとうございます』

『そ、そう。良かった』

少女は顔を上げると、安心させる為か微笑んでくれた。

予想よりも落ち着いた物言いに多少目を丸くするも、顔には出さず落ち着いた態度で返す。

『えっと、貴女は……東風谷早苗さんですよね』

『え？そ、そうですけど……どうして』

私はこの子知らない。お互い初対面の筈なのに、一方的に知られているなんて変な話だ。

『私は稗田阿求と言います。貴女のことにはここに神二人と訪れた頃から存じております。風貌を人伝に聞いただけでしたけど、すぐに思い出しました』

稗田……？人名にしてはとても珍しい気もするけど、なのにどうしてか記憶の隅に何かが引つ掛かっている。

『そうだったんですか。なんだか恥ずかしいですね、一方的に知られていると』

この子の言動や雰囲気ので、こつちまで敬語になってしまふ。見た目は可愛い女の子ではないのに、永琳さん同様、何かを感じる。流石に考えすぎだと思うけど。

『そうかもしれませんね。では、私のことをお教えすればおあいこですよ？』

『え、ええまあ……そういうことになるんでしょうか』

突拍子のない言葉に疑問符を浮かべていると、阿求ちゃんが私の手を取った。

困惑している私を尻目に、彼女はずんずんとそのまま歩いて行く。

『その茶屋に腰を降ろしましょう。そこでお話ししましょう』

なんだか強引だけれど、どこか逆らえない雰囲気を持った少女。

私の方が年上の筈なのに、どこか敬ってしまう雰囲気を持った少女。稗田阿求と名乗った少女との出会いは、こんな些細なものだった。

『……………』

阿求ちゃんが語った己の事。

私は開いた口が塞がらない気分だった。

稗田という名前に聞き覚えがあった理由。それは、歴史の授業で習って知った稗田阿礼のことだった。彼女はその九代目で、だから求という名を冠していることも理解した。

稗田阿礼は、古事記の編纂者の一人と言われている七世紀後半から八世紀初頭に生きていたとされる人物。

でもどういうことや、年代によっての一般平均寿命を漠然と計算しても、九代目が生きている——いや、九代目までしか代が進んでいないのはおかしい。

幻想郷と外では時間の流れが異なるとでもいうのか。だがそれは、外に戻ることに叶わない私には証明できない問題だ。

でも、そんなことよりも一番驚いたのが、稗田阿求と稗田阿礼が同一人物だという事実。

彼女はだいたい千二百年ほど前から転生を繰り返しているらしく、

前世の記憶こそ完全に覚えてはいないものの、転生者ということに嘘偽りは無い。

そして彼女が転生者である最大の理由——それは、幻想郷の歴史を綴ること。そしてそれを可能とする為に、一度見たり聞いた事柄は決して忘れない能力を保有している事。

昔こそ人間が妖怪に打ち勝つために始めた資料だったが、幻想郷が平和になっていくにつれその意図は失われ始め、只の面白い妖怪読み物となっただけ。確かに聞こえ次第ではとても重要で、尊敬される存在なのかもしれない。けど——

『……………それでいいんですか？』

『え？』

『そうやって書物を書かされる為だけに転生を繰り返し、最初から最後まで書物と共にある人生。そんなのが何度も何度も繰り返されてるのに——辛くないんですか？もつと自由に生きたいと思わないんですか？』

でも、私には彼女が永遠に輪廻から外れない呪いに掛かっている風にしか思えない。

そして、その姿をシロウさんと重ねていたからこそ、聞いてしまったんだと思う。

守護者となったシロウさんは、戦いという運命の輪に捕えられ、世界に手綱を握られ都合のよい掃除屋を演じていたと語っていた。何の因果か彼はその輪廻から外れたけど、座という所にいるシロウさんの本体は捕えられたまま。根本的な解決にはなっていない。ましてや、阿求ちゃんも忘れたいことすら忘れることの叶わない能力のせいで、心に受けた傷は常人の倍以上の時間を費やさないと癒

えない筈。そんなの人生経験次第ではあるけど、下手をすれば気が狂ってしまう。

カタチこそ違えど、抜けられない呪われた輪廻に身を委ねていた者を二人と知ってしまった以上、黙認したくない。

だって——生き方を決められて、ああしろこうしろって命令されたことをこなすだけの人生なんて……悲しいじゃない。

『……味を知らないのなら、それに興味を持ち得ど羨望はしない。貴女の言う自由を知らない私には、この状況は苦痛にはなりません。だって、それが私にとっての”当たり前”だから』

何の感情も帯びていない言葉で語る。

まるで興味の無い詩を読むかのようなそれは、幾度となく問われたことなのかもしれない。

辛くないか、悲しくないか。そんな同情の言葉を、何度も何度も彼女の言う通り、本人にとってその繰り返し重ねていく輪廻は、呼吸をする位に当たり前のことなんだろう。

だから、私のした質問は本来答えることが出来ない。当たり前な事を伝えると言うのは、余程頭の回る人じゃない限り咄嗟に答えるのは難しい。他人の事を説明するのは存外簡単だけど、自分の事となるとそうはいかないのと一緒に。

それでも彼女が答えを吐き出せたのは、私みたいな同情だけでモノを語った非道な人が沢山いたからなんだろう。

『ごめんなさい、私——』

そんな彼女自身も何度聞いたがも分からないありきたりな謝罪を述べようとしたら、動かしていた口にそつと人差し指を当てられた。

『謝る必要はありません。貴女の返答は至極当然のもので、私はそ

れを承知で語ったのです。ですから、貴女が謝罪の言葉を述べるのは間違いですよ』

安心させようと私の行動への否定をしているが、彼女がさっき語った時の声色が脳内で反芻されて、素直にその言葉を受け止めることができない。

はい、そうですかとすぐに思考を切り替える程白状じゃないし、心なく質問してもいいない。

だけど、これ以上この問答を繰り返しても意味がないのは承知している。

納得できない自分とそれを満たすことの出来ないという事実が渦巻き、齒痒さばかりが募っていく。

そんなもやもやを抱えていると、店員さんがここぞとばかりに横から現れ、お盆に乗せた二切れの羊羹と緑茶を二人の隣の空いた場所に置いていくと、客への常套句を述べた後一礼して去って行った。でもおかしいなあ。私はそんなの頼んだ覚えはないのに。

『実はですね、私はここの常連なんですよ。そしていつもこれを注文しているお得意様なので、今ではこうして頼んでもいないのに持ってきてくれるんですよ。恐らくそのついでに早苗さんにも置いてってくれたんでしょう』

阿求ちゃんは恥ずかしそうだけど、どこか誇らしげに話してきた。そこには先程までの暗さを取り繕った雰囲気はなく、見た目相応の笑顔になっていた。

それを見て少し安心した。少なくとも私の力でどうこう出来る自信は無かったから、店員さんのタイミングの良さに内心感謝した。

『そうなんですか……。なんか気を遣わせてしまった感じがしま

す

『いいんじゃないでしょうか。こういった好意には甘えるものですよ』

甘える………か。

私が多重人格紛いの何かを患っているのも、過去に他人をどこか寄せ付けることを拒んでいたことによる事が原因なのかな。

色眼鏡で自分を客観的に見たとしても、確かに私は甘えることをしなかったと思う。

何でも自分で片付けようと躍起になり、他人に悩みも苦労も打ち明けることなく抱え続けてきた。

でも、私にだって悩みを吐き出したいと思うことはあった。私のちっぽけな自尊心がそうさせなかっただけで、多分一度言ってしまうはあの時みたいに滝のように心の中のしこりと共に流し出せた筈だ。結果的にはそうなったけど、遅すぎたのかもしれない。

勝手な解釈だけど、悩みを打ち明けたくても他人には頼れない、そんな思いが交差している中、私の奥底でこんな結論に至ったんじゃないかな。

——他人に頼れないなら、いつそ自分自身に悩みを打ち明ければいいじゃないか——と。

だから私という別の人格を知らずに創ってしまったのかもしれない。

私自身が解決したい悩みを自身に投げ掛けても解決しない。そんな矛盾を解消させる為の措置。そう考えると何となく納得できなくもない。

けれど逆に言えばこれは無理矢理納得したいが為の妄想に過ぎず、

確証は微塵も無い。

でも、もしそうだとしたら……私はなんて莫迦なんだろう。他人に迷惑を掛けないよう頑張っていた自分が、未来ではそれが原因で他人にそれ以上の迷惑を掛けている。

皮肉な話だと、思わず自嘲の笑みを浮かべる。

『……………どうしました？』

『あ、いえ、何でも』

そうだった、阿求ちゃんが隣にいたのにすっかり物思いに耽っていた。

傍から見れば先程の私は気持ち悪いことこの上なかったんじゃないか。そう思うと恥ずかしくなってきた。

気付けば阿求ちゃんは羊羹を戴いてたようで、ならば私も櫛で羊羹を突き刺し、ゆっくりと頬張った。

——美味しい。彼女がこの常連になるのも頷ける。和菓子らしく抑えられた甘み、けど噛み締める毎に鼻から甘い香りが吸い込まれ、味を深めていく。元々洋菓子ほどカロリーもないから、抵抗もそこまで無い。

……………まあだからと言って調子に乗ってたら破滅に追い込まれるんだけど。

スイーツは女の子の宝であり、敵だ。体は受け入れても、心まで許してはいけないのだ。

『……………私はですね、こうやって誰かとお話しながらお茶菓子を食べているだけで十分幸福を噛み締めています。貴女にとっては些細なことかもしれませんが、私にはこれ以上望むべくはありませんよ』

お茶を手にし、天を仰ぎながらそう呟く。

周囲は活気に満ち溢れ、老若男女の声があちこちから聞こえてくる。けど、私と阿求ちゃんを取り巻くこの空間だけは、まるで隔離されているのではと思うくらい静かに感じた。

『私は別に、貴女が言うような幸福を求めた果てを恐れているからこんなことを言った訳ではありません。純粹に、今の生活に文句も不満もなく、寧ろこれ以上を求めるのは身分不相応なんですよ』

『そ、そんなこと——！！』

そこまで言い、ハツとする。

幸福を求めた果てを恐れている訳ではない——彼女はそう言ったけど、心にも思っていないことが言葉になるのはおかしい。間違いなく彼女は虚勢を張っている。

彼女の代まで続けられてきた幻想郷を綴る役目。それは最早、暗黙の了解のレベルにまで到達した一種の枷。

今更辞めたいなんて言えない。言ったら彼女には、” なにも残らない”。

知識としては識っている自由。仮に彼女がそれを得る権利が与えられたとしても、今更どうしろと言うのだ。

千二百年あまりを転生によって生き続けてきた彼女には、自由を得られた所で何をすべきかが分からないのではないか。

今まで機械的に役目をこなして、それを為すことが出来ない身体になれば新しいものに取り換える。そんな人生を生きた彼女には、自由という言葉はあまりにも大きすぎるのだ。

井の中の蛙大海を知らず、なんて言葉がある。

狭い世界で何も知らず一生を終えることよりも、大海を知り、その世界に憧れるも、深い井戸に身を委ねた蛙は井戸を上る力も無ければ、力があつた所で蛙の跳躍力では井戸として目的を果たせない程の浅さじゃないと地上には出られないんだと事実を突き立てられて、そのまま嘆きながら一生を終える方がよっぽど苦痛だ。

阿求ちゃんも一緒だ。なまじ知識だけはある、あまつさえそれを忘れることの叶わないカラダ。

自由を手に入れるには、彼女の脚は衰えすぎたんだ。

だから自分の事を身分不相応と言い、打ちのめすことで、諦めさせているんだ。

ストンと、次の言葉を紡ぐことなく元の場所に座る。

私の莫迦、馬鹿バカバカバカバカバカバカバカバカバカバカ。

やっぱり私はこうやって人を傷つける。私が発した言葉は他人を蝕む。

なんて罪深い。なんて最低な、私。

自分のことで精一杯の癖、他人を傷つける事に関しては意図せずともやってのける。

殴ってやりたい。もうひとつの自分と、私自身を。

でも今そんなことすれば、また周りに迷惑を掛けてしまう。

『シロウさん……………』

体を俯かせながら、助けを求めたい相手の名を呟く。

彼なら、どんな気の利いたことを言えるんだろう。私なんかよりも彼女の隣にいる資格を持てたのかな。

…………… 皮肉にも似た境遇の二人だ。シロウさんが己の事を話さなくても、きっと彼ならその意図を自身と重ね、いいアドバイスが出来たのかもしれない。

でも、シロウさんはいない。

——私が、追い出したようなものだから。
だから彼に助けを請うのはお門違い。いや、それこそ身分不相応だ。

『その人は、貴女の大切な人ですか？』

突然の言葉に顔を上げると、道行く人を眺めている阿求ちゃんがい
た。

そうだよ、私なんかとは顔も合わせたくないよね。

『……はい。私にとって、大事な人です。でも、少し前にここで
少し騒ぎになったじゃないですか。その騒動の原因は私。そして—
——そのせいで彼は私の前から消えました』

普段なら恥ずかしがりながら答えをはぐらかしそうな質問だけど、
今の私にそんな余裕はない。

彼女を傷付けた以上、此方も痛み分けするのは当然だ。
別にそれでおあいこだと言つつもりはしない。

これは、戒め。

罪咎そのものである私には、この痛みは常に背負うくらいはしない
と。

いや、こんなのでは生温い。神経を剥ぎ取られる位の苦痛だって覺
悟の上だ。

『彼の事が大切なのに、些細なことで嫉妬して……頭の中がまっ
しろになって、気が付いたら家で寝ていました。でも、そこに彼は
いなくて、家にも神社にも彼はいなくて——今でも戻ってこない
のは絶対私が嫌いになったからなんです。』

てそのシロウさんという人への罪悪感で今満たされています。けど、少なくとも私は貴女を憎んではいませんし、貴女がそんなに慕うシロウさんだって、きっと怒ってはいない筈です。

だって、貴女の気持ちが伝わってきますから。彼に対しての信頼、敬愛、尊敬の想い……彼にも絶対伝わっているに決まっています」

確証もない慰めの言葉。

けど、彼女の言葉に嘘は無く、私を慰めようという想いは本物だということが伝わってきた。

嬉しい。さっきまであんなに傷付けた私に対してこんな――

「……………そうでしょうか」

「何事も信じることが始まりなんですよ。他人を、自分を信じれないようでは全てが虚しいじゃないですか。それとも、貴女にとってシロウという人物はそんな虚しさの一端にもならない存在なんですか？」

「そんなことはありません！」

彼女の言葉にいきり立ち荒々しく立ち上がると、優しく私に向かい微笑んだ。

「ならいいんです。その気持ち、絶対に忘れないでください。貴女がシロウさんに迷惑を掛けたと思うのなら、彼を信じる自分を信じなさい」

どこかのアニメを引用したような言葉で慰められたせいか、さっきまでの鬱な気分は少し削がれているのに気付いた。

『ありがとうございます……』

私も出来る限りの笑顔で微笑み返す。

無理矢理にでも笑わないと、彼女の想いに応える自信がなくなっちゃうから。

『——今の貴女を置いて行くのは少々忍びないですが、そろそろ仕事に戻らないといけません。許して下さい』

『え、そ、そんな——私こそこんなに時間を食わせてしまつて申し訳ありません』

二人して頭を下げている姿は、結構面白いのかもしれない。

野次馬も事が済んだのを確認したので、そろそろ退散していつて

……。正直な話。彼女に会えたことは幸運だったと思う。

こうやって他人との出会いが私を少しずつ変えていつて。考え方、在り方、その他いろいろな部分全てをひっくりかえす。

でも、私は彼女たちに何も与えない。

悔しいけど、自分のことで精一杯なのは事実。そんな空虚な自分には、誰かに何かを分け与えられる程の余分は無いのだ。

『今は流石にお控願いたいです、是非日を改めて遊びに来てください。出来れば、そのシロウさんと言う人も一緒に』

つまり——彼女は、”早くシロウさんと仲直りして、その姿を見せてください”と言つてゐるんだと解釈する。

『はい！』

彼女の想いに応える決意として、元氣よく返事をする。

こうして奮起しないと、何時までも尾を引き続けてしまう。それは彼女も良しとしないだろうし、何よりこれ以上自分勝手に迷惑をかけたくない。

それに、私も早くシロウさんに会いたい気持ちは変わらない。それこそ彼女に言われなくなつて、それだけは決して揺るがない。ただ、言われなければその目的を達成する過程で誰かに依存する数が尋常じゃなかったかもしれないけど。

やっぱり、自分の尻拭いに他人を利用するのは間違つてるよね。

『では、失礼します』

笑顔で一礼すると、阿求ちゃんはそのまま背を向け、ゆっくりと立ち去っていった。

私はその姿に深々と礼をし、見送った。

そして、自分一人でもうひとつの自分を克服するにはどうすればいいかを考える。

精神修行……………それが妥当かな。でも、ぶっちゃけどうすればいいんだろう。

巫女として修業は何度もしたけど、それとはまた別モノな気がする。どちらかと言うと、お坊さんとかが座禅を組んで？水の一滴！？とか言いながらなんか凄い力に目覚めるノリに近いんじゃないだろうか。

……………それにしても。なーにか忘れてる気がする。

てんやわんやしてたせいで、その引っ掛かりが解消できない。何だろう。重要なことだけど、あまりにも自然だったせいでそれに

稗田の当主（後書き）

原作キャラではないけど、ある意味公式キャラのあつきゅんのターンです。

名前：稗田阿求《ひえだ の あきゆう》

種族：人間

能力：一度見た物を忘れない程度の能力：『幺楽団の歴史1』/ 求
聞持の能力：『求』

二つ名：幻想郷の記憶

里に住んでいる人間の少女。幻想郷の妖怪辞典的存在の「幻想郷縁起」を編纂している。稗田家の当主で、年齢は10歳と少しらしいけれども彼女は彼女は9代目の阿礼乙女（御阿礼の子）、転生者なので、9代目当主ということ考虑すれば妖怪クラスに長生きをしてると言っても過言ではない。名前の部分の“求”は、九代目だからという理由。

一度見た物を忘れない能力を持つが、前世の記憶はあまりない。これは転生の際に記憶の大半を失ってしまったためである。

転生のたびに周りの人間が寿命で入れ替わり、人間関係がリセットされてしまうことに苦悩していた。しかし、阿求の時代では妖怪と人間との距離が近くなっており、そのため人間と比べはるかに寿命が長い妖怪の知り合いも増えたため、転生も以前ほどには苦痛ではないと感じるようになっていく。

八雲紫とは前世以前からの古い知り合いらしく、紫は完成前の「幻

想郷縁起」をチェックするために稗田家を訪れている。

稗田家は里の人間で最も多くの資料を持ち、知識も深い1000年以上続く由緒正しい人間の家系である。その膨大な蔵書には幻想郷のあらゆる事柄が収められており、外の世界の資料なども少なくないとのこと。

性格はオリジナルになりますが、基本物静かで落ち着いた態度を取るが、いざという時は行動的になり、周囲の人を驚かせる。

弱音を直接吐くことはせず、あくまで第三者になったような物言いで語る。それは、時に思う“人間としての生”への自身の在り方との矛盾と、その事実を他者から突きつけられることによる明確性の増す痛みから逃げる為の逃げ道を作る為。

けれど決して暗い訳ではなく、寧ろ社交性も高く周囲の人間からも慕われている（代々の稗田からの積み重ねが、阿求としての人気かは不明）

絆 ？（前書き）

まさかアリスだけで三話使うとは思わなかった。

絆？

「ん…………んう？」

意識を取り戻した私は、身体に感じる違和感に思わず溜め息を漏らす。

指の一本も動かない。いや、動くことは動くのだが、手首が動かないようでは指が動いた所で特別意味は無い。

……………原因は理解してるつもり。無理に無理を重ねた結果、肉体的にも精神的にも限界が来たのだろう。

エミヤシロウとの戦闘。あの時の私は彼に言われなくても最悪のコンディションだった。

正直な話、よくあんなになるまで膝が持ったなと思う。それだけは評価してもいいと思う。

誰もが無謀だと口を揃えて言う状況であつたのに、私は彼に挑んだ。魔理沙じゃあるまいし、勇気と無謀を履き違えるなんて莫迦な真似はしない。いつもなら。

挑んだ理由は、至極単純。嫉妬だ。

彼は上海と蓬萊にほぼ完成形のカタチを授けてくれた。それから私は寝ることも惜しみ、それを本物にするべく全力で研究に勤しんだ。結果は、言語機能の改善とそれによる感情の差別化だけ。

感情の起伏や表現は、外部に伝える場合、言語に左右される。

後は身ぶり手ぶり位だが、言語が共通しているならそれは補助的な役割程度にしか役立たない。

つまり言ってしまうえば、私はひとつしか——それも彼に比べたら大したことない——事を成し遂げていないのだ。

屈辱だった。悔しかった。妬ましかった。

私は二人の為にずっと前から研究をしていた、にも関わらず目標に到達することはなかった。

それなのに、ぽつと出の魔術使いに私の苦勞を一蹴された。その事実が、日が経つに連れ怒りへと変化していった。

お門違いもいいとこだ。

これは私が望んだ結果。私が頼んだ結果。私が逃げた結果。

彼は何も悪くない。寧ろ最良の結果を運んでくれたのだ。感謝されこそすれ、憎まれる筋合いは微塵とも無い。

最低な、私。

自分のプライドと、二人の成長、どっちが大切なのかなんて、分かっていたつもりだったのに。

彼がわざと私を挑発する言葉を選んでいたのも、知っていた。

彼の實力をこの目で見たから言えることだが、弱っていた私を倒すなんて、赤子の手を捻る位に楽勝だったろう。にも関わらず彼は先手を譲り、此方がカードを失ったと理解したか否や、無防備に私の目の前まで歩いてきたのだ。

もし彼が私を始末するんだったら、その場で手に持った剣を投げつけさえすれば、抗う暇なく絶命していた。そうでなくても、戦闘続行不可と判断したなら、わざわざ反撃を受ける可能性のある距離まで接近する必要は無い筈。

舐めていた、なんて事は恐らくない。彼の話聞いた限りでは、戦闘に於いて一瞬の油断が命取りになることは骨身に染みている筈。

それに、人形を爆破させた攻撃——魔符「アーティフルサクリフアイス」のスペル宣言無しバージョン——は、彼に多少なり傷を負わせることは出来たのだ。それで慢心を続けるようでは彼は今生きてはいない。

……何にせよ、彼は私の憤りの理由を漠然とだろうと理解していて、故に私の決闘に乗ってきたのかもしれない。

全てが全て合致はしていないだろうけど、少しでも合っているのなら——私は床に頭を擦りつけて謝罪しなければいけない。

恩を仇の仇で返したのだ。謝った所で許されるとは思ってもいない。いや、最初から許されたいとだって思っではない。

そして、その謝罪は私のプライドや気まずさを解消させたいが為のものでもない。

ただ謝ること、全てをひっくるめて彼に誠意を証明することに意味があるんだ。

その先を求めてはいないし、求める権利はない。

私に、そんな幸福を受け取る権利はない。

『あら、起きたのねアリス』

気落ちしている所に、蓬萊が浮遊しながら此方へと向かってくる。

一見素っ気ない言葉に聞こえるが、普段の口調よりも僅かに上擦っている。

彼女の言語を改善したのは私だからこそ、瞬時にそれを理解出来る。そうでないと上海みたいに分かり易くないこの子は、常に惘然としている風に見られてしまうのが痛い。

こればかりはこの子の魂のせいだからどうしようもない。

『ええ………心配かけたわね』

『ホント、莫迦やったわよね』

『反論の余地も無いくらいにストレートね』

まあ、これぐらいの罵りは甘んじて受け入れるけど。自分でも時間を戻せるなら全力で未来改竄する気満々だし。

『ま、反省してるっぽいし問題はないわね。とにかく大人しく寝てなさい』

……………これではどっちが保護者なのか分かったものではない。寧ろ、立場が逆転するんじゃないか？という危機感すら脳裏に過った。

私は蓬萊の言い分に従い、再び目を閉じる。

まっくらで、なにもない。だからこそ落ち着くんだろう。

母親のお腹の中にいた頃は常にこんな景色らしい。

意識を持った瞬間から居た誰にも介入されない狭い世界と酷似している、それが心を落ち着かせれる最大の理由なんだと思う。

でも、私は赤ん坊ではない。

自我意識や情緒はとっくの昔に成熟した。自己抑制の力だって、比例して成長してるって、そう思ってたのに。

こんなんじゃ、何時まで経っても子供だって母さんに笑われちゃう。

『……………そういえば、シロウはどうしたの？』

ふと、自分のことで手一杯だった思考が落ち着いたことで、彼の存在を思い出した。

思考の題材としては出ていたのに忘れてるというのは変な話だが、実際そうだったんだからしょうがない。

『出てったよ。これ以上迷惑は掛けられないって』

『へ？』

迷惑？一体なんのことを言っているんだ。

『お父さん言ってた。私の自惚れが、彼女を傷付けた、って』

その言葉から、彼の意図したものが理解出来ない。

『私の推測だけど、お父さんは背負わなくてもいい罪すら背負ってるんだと思う。誰のせいでもない、誰のせいにもしたくないから、自分が犠牲になってるんじゃないかなって』

『そんなバカな、なんでそんなこと——』

『そんなの、分かんないよ』

先に疑問を一蹴され、出かかった言葉を飲み込む。

訳が分からない。私があ頭の頭に興味が沸いてしまった程に、彼の思考は常識を逸脱している。パチュリーも彼を知っているなら同じ感想を抱くんじゃないか。

だいたい罪ってなによ。私に彼がなにかしたとでも言うのか。

私自身はそんな出来事があったとは思わない。流石に疲れていたとはいえ、寝ている間に我が身に何かあったなら気付くに決まっている。

だから多分、蓬萊の言うとおり、罪なんかじゃ無いものすら罪として捉え、いらぬ苦勞をしているんじゃないか。

さつきとは別の意味で彼に憤りを覚える。

身体さえ動けば、我先にと飛び出して探し回るのに。そして、その

莫迦な考えを正してやるのに。

『優しさなのか知れないけど……いい迷惑よ』

そう、迷惑なのだ。

私自身が罪を感じたならいざ知らず、逆にそんなものありはしないのに勝手に罪悪感を感じているとか、誤解を解かない限りまともに過ごせないじゃない……。

『——』

蓬萊は何も言わず此方の様子を伺っている。
多分、声を掛けるのを躊躇っているんだろう。

『………そういえば上海の姿も見えないわね』

このまま重い雰囲気のまま過ごすのは耐えられないから、何か話題を切り出そうと思った時、そういえばと思います。

さっきまでいた二人共忘れていたなんて、さっきまで余程キテたみたいね。

『隣の部屋で寝てるよ。カーテン閉めてるから分かんないでしょうけど、もう夜よ』

『嘘っ、そんなに寝てたの？』

『うん。でも問題ないでしょ。寧ろこの程度の睡眠じゃ疲れなんてまだ取れてないでしょうに』

………時間を確かめた訳じゃないけど、あの時はもう太陽は真上を

通りこしていた。

つまり少なくとも私は、一日の四分の一を寝て過ごしたことになる。別段それに問題がある訳じゃないけど、なんか損した気分だ。

『——そうだったわ。お父さんから手紙を預かってたの』

ふわふわと戸棚の方まで飛んでいくと、一枚の封筒を持って元の場所に戻ってきた。

ご丁寧に封までしているそれは、彼の几帳面さを物語っている。

『御免なさい、私疲れてるから出来るだけ動きたくないの。だから読んでくれないかしら？』

本当は指一本ぐらいが限界のボロボロな身体だが、それを知られば蓬萊に要らぬ心配を掛けてしまう。

なら私は、嘘を吐いてもそれを避ける。少なくとも嫌そうな気配はなさそうだし、このまま嘘を通そう、そう静かに決意する。

『それじゃ読むからね』

ガサガサと音を立てて取り出したのは、一般的に用いられる程度の大きさの用紙。

彼の事だから、グダグダと長い文章を連ねてると思ってた。

『「アリス——済まない。君が倒れているのにここを去ることを許してほしい。私がある場にいれば、君がオチオチ休めないと思っただ。過程はどうあれ、先程まで私達は戦っていたんだ、私はともかく、君の場合はそう簡単に割り切れないんじゃないか？推測の域を出ない独断だが、私がある場にいれば君が休めないということだけは一理解わかる。』

……君がどうして怒っていたのか、何となく理解した上で言おう。君は私の事をなんだと思っっているんだ。全知全霊の神だとも？もしそうだったのなら——私は後悔することなく生きただろうな。私は不器用だ。だから君の怒りの矛先を知っているにも関わらず、理想である結末に誘導するなんて芸当は出来ない。必然的に紆余曲折に至る私の判断は、肉体的に君を傷付けてしまった。私はその後悔で今途方に暮れているだろうな。だからと言って君が気に病むことはない。こんな事には慣れていくからな」

ゆつくりと、母が子供に物語を聞かせる様に文章を読み始める。その内容は、まだ始まりに過ぎないであろうに、彼の謝罪と私を一方的に庇うものばかりであった。

予想はしていたけど——何で彼はここまで他人の罪を被ろうとしているのだろうか。

いや、根本的にその考えは間違っていて、彼は本気で私に罪はなく、自分ばかりが悪者だと決めつけているんじゃないかと思えるほどに。

「話を戻そう。私は別に完璧な存在ではない。たまたま私が二人の独立化が出来る魔術を使えただけで、だからと言って全てが全て君の出来る事を私も出来るというのは勘違いだ。それに忘れているだろうが——あの時、君の補助がなければ間違いなく失敗していた。君がいなかったら、二人は今も昔のままだっただろう。しかも君は私がここを去った後寝ずに二人の為に頑張っていたらしいじゃないか。私の魔力量で賄えるとは微塵も思っていなかったのだから、君だって相当魔力を使っていたのではないか？

そんな状態で作業をしても二人の為に頑張ろうとするその姿勢、他人事ながらとても誇らしく思えてしまうよ。そして、二人が君に愛されているという事実が——正直羨ましいよ」

……彼の言う通りではある。

最初この研究を始めた時の私の思考は、二人がヒトと同程度の生命へと至れるなら後はどうでもよかった。

人形師として生きてきた私にとって、人形なんて特別でも何でもない。常に隣に存在し、時としては爆弾にすることだって躊躇わない道具。

けど、上海と蓬萊——二人は違う。二人は私が初めて作った、魂の籠った“家族”。変わりなんて何処にもない特別な存在。

ふと、思い出す。そういえばその初めてだって、お母さんの手伝いがあつてこそだったんだつた。

結局、私は一人では何も出来やしない、無能な魔法使い。私の實力では正に夢物語でしかないこれらの目的を達成出来たのは、単に誰かの助力あつての事で、多分私の實力は反映されてない。

何もかも、他人あつての結果。その癖、彼が二人の強化に成功した後に放つた、後は私の領分という台詞に、数日後の結果——ホント、悲しみを通り越して笑っちゃいそう。

『「結論を言えば、君は二人にとっても愛されている。そして同時に、君も二人の事を愛している。その事實は不変のものであり、君が二人に命を吹き込もうなんて思わなければ、二人は今存在していないんだ。私に偶然それを成せる能力があつた所で、思い立たなければ意味は無い。

君だから、君じゃなければいけないんだ。君の“想い”があつたからこそ、二人は生きている。だから——自分を卑下するのはやめたまえ。少なくとも、二人は君に対して無力だったとか、役立たずだった等とは思ってはいない。これは確実だ。

自分自身の實力不足が心残りだというのなら、これから努力すればいい。しかし、焦ってはいけない。焦燥の果てには虚空を掴む想いしか残らない。二人の事を大事に思うなら、じっくりと、一歩ずつでいい、二人と一緒に歩んで行くんだ」』

蓬萊が顔を上げたのを見て、ここで文章が終わったのだと理解する。そんな蓬萊の表情は、複雑な思いで入り乱れているのがはっきりと分かった。

『…………蓬萊。貴女は私の事、どう思っているの？』

『——大好きだよ。とっても』

『シロウよりも？』

『そう——だね。私の中でアリスの上を行くなんて人、多分一生見つからないよ』

普段の表情が崩れ、暖かい笑みを向けてくる。
喩えこの言葉がその場凌ぎの物でも構わない。
私は、必要とされている。それだけで胸が一杯だから、それ以上を求めたりなんかはしない。

『貴女もでしょ？上海』

蓬萊がその口に出すと、自室の扉がゆったりと開いていく。
そこからひよっこりと顔を覗かせたのは、蓬萊に名を呼ばれた上海で、どこかバツの悪そうにしている。

『たはゝバレてましたか』

いつも通りの笑顔で、蓬萊とは逆の位置——私を蓬萊と一緒に挟むような位置に——に移動し、私を見降ろす。

『当然。私達は同じ魔力いさちから生まれてるんだから、一卵性双生児みたいに自分の考えがアンタの行動に直結するなんて、よくある話よ』

『えゝ私は分かんないよそんなの』

『ハナからアンタに分かるとは思ってないわ、そんな細かい事』

『酷っ！』

私を差し置いてコントをしているその姿を見て自然と笑みが漏れ、私のさつきまでの暗い雰囲気は薄れていった。

二人はそんな私を見てキョトンとしている。突拍子が無かったから無理ないけど。

『で、どうなのよ上海』

『……………うん。大好きだよ』

蓬菜は再び上海へと問いかける。

上海はそれに真っ直ぐな想いを込めて答えた。

『でも、彼が——シロウが一番なんでしょ？』

『そ、そんなこと——』

『別にいいわよ、嘔吐がなくても。二人ともそうだけど、特に貴女はその傾向が強い。彼がいるときはよく行動を共にしていたし、ね』

そうだ。東風谷早苗に出逢ったあの日も、私に付いて来てたのは蓬菜だけ。それを知っていればそう解釈するのは当然であろう。

『――私はね、お父さんも好きだしアリスだって好き。その気持ちに偽りはないし、それを天秤にかけたくはないの』

上海が突如、ぎり、と強く拳を握り締め、独白の様に語り始める。そこにはさつきまでの明るい雰囲気はなく、寧ろ私には、今にも泣き出しそうにさえ見えた。

『別にどちらかを選択した後の可能性を恐れてるんじゃないよ。私の持論だけど、大切なものって、価値を比べれたり出来ないんだと思う。』

だって――自分にとっての大切なら、喻え複数存在したって、それは常に一番なんだもん。私、そんな見定める目で二人を見たくないよ！』

声色が次第に高まっていき、最後には爆発したように想いの丈を私にぶつけた。

その必死な姿を目の当たりにした私は、驚きを隠せずにいた。

私の知っている上海は、いつも明るく、性格も怒りとか悲しみとは無縁なほどお人好しの世話好きだ。

そんな彼女が今、泣き出しそうな表情で懇願している。それがどれほど必死なものなのかは、この姿を見れば一目瞭然。

好きなものに天秤を掛けたくない、か。

私は確かにシロウを恨んではいない、けど――心の隅には劣等感がまだあったんだ。

嫉妬からではなく、純粹に負けたくないと言うライバルに向けるようなそれ。

けどそんな想いが、上海に苦悩と悲しみを齎した。

この子はこんなにも私達を想ってくれてるのに、知らずとは言えそ

の想いを踏みつけていたんだ。

『ごめんなさい、上海』

私は自分の莫迦さを呪いながら、素直に謝罪する。

また私は自尊心とこの子達を秤に掛けたんだと思うと、狂った様に胸を掻き毟りたくなる。

けど、そんなことすれば二人をまた悲しませる。

だから私は、必死にこの己への憤りを拳を握り締める事で堪えた。

『うつん、こつちこそゴメン。これは私の一方的な考えなのにそれを押し付けちゃって』

『そうでもないわ。少なくとも私はそれに納得できるもの。筋が通ってないと納得するまで突き詰める私の性格、知ってるでしょ？』

そう言つて私は安心させる為笑顔を見せる。

そうすると上海だけでなく、横で話を聞いていた蓬菜も柔らかい笑みを浮かべていた。

ああ、紅魔館の図書館で魔理沙やパチュリーと魔法について談義したのを思い出す。自身の魔法の性質が異なる時点で不毛なのは明らかだったのに、互いの自慢ばかり繰り返して、結局最後には何事もなく終わってしまう。

パチュリーは兎も角、魔理沙の“弾幕はパワー論”はパチュリーだつて納得してなかったし、こればかりは精密さを重んじている自分には一生納得出来ないだろうな。

なんだかんだで対立はあるものの、嫌悪感はその間にはないんだつて関係。私はそんな空間に居心地の良さを感じるんだと思う。

そして、エミヤシロウ……彼もまた、そんな私の理想の空間に知らず介入していたんだろう。だからこそ突っぱねたり素直になれなかったり、天の邪鬼な態度を取るのかもしれない。
恥ずかしいんだ、きつと。

『何だか沢山喋ったら疲れちゃったから、ちよつと寝るわ』

少しだけどしこりが取れたせいか、張っていた気が一気に緩み、同時に疲れがドツと押し寄せてきた。
口だけしか動かしてないのにこれとは、いかにその前の疲労が凄まじかったのが良く分かる。

二人は私の言葉に頷くと、まるで計画してたみたいに息の合った予想外の行動を取った。

それは、もそもそと布団の中に無理矢理入ってきて、私を中心に川の水を連想させる形になった事である。

『あつたかいなあ。アリスの体温が伝わってくるよ』

『私はちよつと暑い………かも』

前は上海、後は蓬萊と分かりやすい反応を示す。

その突拍子の無い行動に驚きはしたものの、二人を見るとそんなのどうでもよくなっていた。

私が理想とする魔法の到達点は、正直分からない。

パチュリーは多分、魔法だけに留まらずこの世のすべての知識を得ることで、魔理沙は——さっぱりだ。アイツが何のために魔法を覚えてるのなんて聞いたことないし、どうせ下らない事だろうと歯牙にもかけていなかった。けど私だって、そんな魔理沙となんら

変わりはないのだけど。

そもそも私が魔法を理解したのは、特別目的があつたわけでもなく、幼い頃偶然読んだ魔導書が面白くていつの間にか内容を看破していた、という酷く適当なものだ。

だから正直な話、シロウの言つてた魔術師が根源を目指す、なんて大層な目的なんて持ち合わせていない。

ただ、そんな漠然とした切っ掛けで手に入れた魔法の力——それを無駄にする気は無い。

それに、私にだって、目的とまではいかなくても、この二人を限りなくヒトにするという目標がある。規模や質は根源に至る事よりは劣るかもしれないけど、そこに籠められた想いだけは負けるつもりはない。

そつと二人が私の腕に抱き付いてくる。

それは、まるで私の身体をいたわる風に包むものだった。

お陰で両腕に負担は掛からず、寧ろその力加減のせいか気持ち良さすら覚えた位である。

『もう嫌だよ。幾ら私達の為だって言つても、アリスがこんなになつてまで欲しいものだなんて思つてないよ』

『寧ろそんなもの投げ打つても構わないと思つてるわ。それに、今のカラダだって十分快適なもの』

二人の想いは正直嬉しい。

だけどやっぱり、そう言われたからって諦めることは出来ない。

だって、二人が私を心配してくれるのと同じくらいに、私だって二人の事を想つてこんな無茶をしているんだ。それ程の情熱が、そう簡単に冷めると思つか。

……まあだけど、それで二人を心配させるのは確かに良くは無い。私はただ、二人に喜んでもらいたいという一心でやっているのであつて、それで悲しませては本末転倒もいいとこだ。それを教えられるなんて、ほんとどつちが保護者なんだか。

『……………ありがとう』

上海と蓬萊の言葉を噛み締めつつ感謝の言葉を述べた後、そのまま目を閉じる。

これからは、二人に心配されない程度かつ迅速な作業効率を高めることに力を入れていこう。

そして、アイツに——エミヤシロウに今度会ったなら、怒鳴り散らしてやろう。

理由は言わずもがな。だからこそ、勝手な解釈で勝手に消えたアイツとは、腰を据えて話をしないといけない。

そうしないと、アイツはいつまでも間違い続ける。今はいいかもしれないが、今回のが運命を分かつ程の問題だったとしたら、その愚直すぎる決断は間違いなく破滅を呼ぶ。

アイツがどうなろうと私は知ったこっちゃないけど、二人はシロウを一番じゃないとは言つてても、何か身に災厄があれば間違いなく不安がるだろう。

二人をそうさせない為にも、こればかりは真面目に論議しないといけない。いや、論議なんて平等な立場で事を進めては、あの過剰妄想を矯正出来るとは思えない。少し強引にでも話をつける気概で行くべきだろう。

いろんな決意を胸に秘め、疲れた体を休めるべく意識を闇に落とし
た。

愛する家族を感じながらの睡眠は、無意識に笑みを浮かべる程に幸福な瞬間だった。

絆？（後書き）

一応言っておきますが……アリスが途中でシロウをアイツって言うてるのは間違いではありません。アリスのシロウに対しての認識がより近くなった証拠です。

余談ですが、小説ランキングで、携帯で3の数字を押したら出てくるような位置にいた筈なのに、今では9。少しビビッタ、そして焦った。

奢りはないけど、ここまで落ちてるとちょっと首を傾げたくありません。

ていうか、そのランキング自体どんな基準で計測されてるかは知らんけど、多分一番の原因は更新速度だろうな。それなりに更新してたら比例して目につく回数も増える訳だし。

こんなこといつてるけど、取りあえずペースは崩したくても難しいので、現状維持で頑張っていきたいです。

惹起競々（前書き）

感想で自分のにわか知識っぷりを突かれまくって、現在進行形で反省中。

今回の投稿も結構ビクビクしながらの投稿だったり。

で、もしF a t e及び東方の込み入った部分まで書かれている資料、サイト等があれば教えてください。出来れば携帯出来るものならより勉強出来ると思いますので、こんな作者の手伝いをしてくれる素晴らしい方が居ましたら是非感想で報告をお願い致します。

惹起競々

紅を纏いし青年は、鬱蒼と茂る森の中を歩く。

目的は、出来るだけ早くこの領域から立ち去ること。

しかし、その足取りはそんな雰囲気を出しておらず、寧ろ重くさえ見える。

その理由は、その場を立ち去る理由に対し葛藤していることにあるた。

少女の助けになりたいと思い編んだ計画は、即興故にツギハギだらけで、そのせいで少女は傷を負い、青年の心にも後悔の念が粘着してしまう。

では、青年のその杜撰な計画は全て悪として結論するのかと、青年を悪として解決していいのかと言われれば、NOだ。

彼が奮起しなければ少女は今も吹っ切れることなく、それどころかその傷に深みすら差していた可能性もある。

事実、彼こそそれを知らないが、その少女の心は完全とまではいかないが晴れ晴れとしたものへと回復している。

それを知らない彼は、悩み、苦しむ。

青年だって、この苦悩が徒労だと言うのは理解している。

先程の争いの中に絶対悪は存在しない。一人ひとりが目的の為に突っ走り、ぶつかり合っただけ。

そこに勝者や敗者はおらず、ましてや善悪も存在しない。

だから彼が悪となり、何もかもを一身に背負おうとする事自体無駄なこと。そんな造られた悪なんかは、本当の悪役はこなせない。

それでも、彼はその決断をした。

英霊エミヤが正義の味方として生きた弊害とかではなく、エミヤシロウの意志が、少女の為に何かしてやりたいと決意させた。

喻えそれが空回りなもので、確固たる意志だけは本物で、砕くことは容易ではない。

一度理想を砕かれたこそ、その意志の強さは前回よりも強固となっている。

全てを救う事が叶わないなら、せめて私が救いたいと思った存在だけでも絶対、とまるで呪いの言葉を唱えるかの様に脳内で反芻し続ける。

しかし、皮肉にも呪いに掛かっているのは、唱えている自分自身で。誰かを救うと言う、彼の造り出した勝手な存在意義は、決意と言うにはあまりにも莫迦げていて、現実的ではない。

規模こそ最小限に収まりはしたが、完璧を求める精神だけは揺るがない。

完璧なんて文字は、所詮過去”そうありたい”と願った存在が作った無責任で夢想的なものでしかないと言うのに。

死者の言葉に知らず踊らされるその未来に生きる人々。

正否も史実も定かではない、不定形で中身の無いモノに縛られる人々。

そんな不条理は、生まれたときから常識に隷属された者の定めであり、喻え肉体的に強者であろうとも、今現在常識に囚われない世界に身を預けていたとしても、そう易々と割り切れるものではない。

頭で理解しようとも、遺伝子レベルにまで刷り込まれたそれは、否が応にも無意識に従ってしまう程の強制力を誇る。喻え死して常識外の存在へと昇華しようとも、その理屈は覆せない。

しかしそれは、彼がまだヒトである証でもあるのかもしれない。

『——情けなさにあの場を去ったものの、どうするか』

再び手の空いた彼は、先程とは別の理由で悩む。

丁度この日は紅魔館へ行く日なのだが、時間帯はまだ昼を少し超えた程度。

吸血鬼の館なのだから、夜の方が仕事があるだろうと思いこの時間に行くのは踏み止まるが、そうなれば今の彼にする事は何一つ無い。

そうしてる内に、暗く陰った森の終わりを告げる光が正面から差し込むのを確認する。

その光を求めるように早足になる。まるで、今の彼を取り巻く世界は彼の心境で、暗い心に光を差し込もうとしている様だった。

それは、巨大な湖だった。

洞爺湖くらいの面積のそれは、太陽の光で眩しく反射し、まるで光の粒が水に浮いている風にさえ見える。

機械や汚染された空気が常にある外では到底不可能な神秘が、森を抜けた先にはあった。

『凄い………』

私は感激の余り、思わず溜め息を漏らす。

世界を股に掛けて正義の味方家業をやっていた男でも、ここまで美しい風景を眺めたことはなかった。

湖に近付くと、氷の塊がポツポツと浮かんでいるのを見つける。

恐らく先程の粒とは、この氷が反射し白く発光してる様に見えたのだろう。

湖に手を伸ばし、手をつける。

流石に周囲の空気が冷たいこともあってか、水の中はそれ以上に冷たい。

夏泳ぐには、とても快適な場所だろう。

『あ——————っ!!!!』

突如、どこからともなく大きな声が聞こえ、思わず竦み上がる。

周囲が先程まで静かだったせいで、その声はひと際大きく感じる。

『そのアンタ！何勝手にアタイの場所に入ってきてるのさ！』

次に発せられた言葉は上から聞こえたので、其方へと顔を向ける。

そこには、空中で仁王立ちで見降ろしている青のショートヘアに青のロングスカートを穿いた少女と、それを止める様に隣に寄り添い、緑髪を左に束ねた薄い青色のロングスカートを穿いた少女が居た。

両者共に羽根が生えており、青色の少女はフ란の羽根に近い形状のものを三つずつ対を成す様に、緑色の少女は蝶のように薄っぺらい、いかにも羽根だと理解できるものを持っていた。

『チルノちゃん、やめようよお……………』

チルノと呼ばれた少女に気押されながらも、緑色の少女はそんな姿を止めようと袖を引っ張っている。

しかし彼女はそんな抵抗は意に介した様子はなく、変わらず傲慢そんな態度を態度を取り続けている。

『私に言っているのか……………？』

『そつだよ！ここはアタイの湖なんだから、アタイの許可なしに触るのはいけないんだ！』

そんな事情を知らない身としては、そんな事言われても不条理な子供の言い分にしか聞こえない。

いや、偏見かもしれないが、こんな小さな子がこんな大きな湖をデリトリーに出来るとは思えない。恐らく彼女が勝手にそう言っているだけなのだろう。

『それはすまなかった。では、邪魔者は立ち去ろう』

とは言え、そんな身勝手に憤るほど子供ではない自分は、簡潔に謝罪をしその場を立ち去ろうとした、が――

『待ちなさいよ』

『……………？何かね、まだなにかあると？』

予想外にも引き止められ、やれやれと思いつつも足を止め振り返る。

『まさか、タダで帰れるなんて思ってないでしょうね』

『チ、チルノちゃん』

……………嫌な予感がしてきた。

こつという時のカンは、嫌と言うほど当たるのが定石だ。

『と、言っわけでえ……………！！』

そつ唸りながら答えると、両手を掲げ力を籠め出す。

すると、少しずつ確実に、巨大な氷の塊を生み出していく。

『なっ——！』

『せえ——い——！』

大きく振りかぶり、それを此方へと投げつける。

質量で攻める出鱈目なそれを、サーヴァントとして強化された肉体を持つ私に当たる筈もなく、横へ跳び回避する。

轟音と共に、先程までの位置に氷塊が激突。近くにいたであろう鳥達が逃げ出していく。

『こらっ、避けるな！』

『別に私は自殺願望者ではないよ。流石にこれを食らえば即死だろうに』

あんなの受け止めれるのは、バーサーカー位だろう。

『あ、あの………』

『——君はさっきあの少女と一緒にいた子かね？』

背後から、先程の緑髪の少女の声が聞こえる。

先程まで目の前の少女の隣にいた筈なのに。

——もしかして、瞬間移動か？

もし彼女が私を倒す気ならば、間違いなくやられていただろう。自分の気の緩みに内心舌打ちをする。

『あの、早く逃げないと。チルノちゃん、本気で貴女の事——』

その声色から、明らかに此方を心配した様子が伺える。

——ああ、優しい子なんだな、そう判断する。

『いや、今私が逃げれば恐らく彼女はどこまでも追い掛けてくるだろう。そうなれば、私が逃げた道は彼女の攻撃で荒廃する。それは私が撒いた種であるのに無責任ではないかね』

『そ、そんなことないです。あれはチルノちゃんが勝手に怒ってるだけで——』

『そうだな。あの少女は一方的な意見を押し付け、一方的に攻撃をしてきた。こんな身勝手に唯我独尊な彼女が、ここをトリトリにしていると言う事実すら信じられなくなるよ。故に私が逃げさせた所で、何らかの因果で彼女と再び会ってしまったら——それこそ今の再来だ。結局、根本的な解決にはならんのだよ』

恐らくこの世界は狭い、外に比べれば遥かに。

間違いないここで逃げる選択をしたとしても、そう遠くない時期に会うのは目に見えている。

仮にここに近付くようにしなくても、だ。

縁と言うのは、良くも悪くも深く繋がっているものなのだ。

『そんなの、分からないじゃないですか。確かに、否定できない部分も大きいですけど、無駄に命を散らすよりは』

『ああ——言い忘れていたが』

彼女が告げる言葉を言葉で遮る。

『私は無駄に命を散らすつもりもなければ——』

続けるは絶対の自信。

彼が掲げ続けた理想の欠片。

『——泣きそうな少女を目の前で置いて逃げる程、腐ってはいないよ』

涙腺が今にも崩壊しそうな少女の頭に、ポンと掌を置く。
今だ涙腺は涙を堪えたまま緑の少女は私を見上げる。

——大げさだな、と思う。

だが、この子からすれば私は無力な人間なんだろう。
だからこんな反応をするのは、彼女が心配性なのを含んでも妥当かもしれない。

『——さっきから大ちゃんを人質に取ってなにしようとしてんだ卑怯者——！』

さっきまで静かだと思えば、今度は濡れ衣を着せられた。

……まあ、彼女の攻撃範囲にいないことを考えたら、否定出来ない部分もあるな。

『ち、違——』

『そうだ。私は君みたいに氷を出せはしないただの人間だ。故にこう言った行動も吝かではないのだよ』

敵意を持って、チルノへと睨みを利かせる。

明らかな挑発に、少女は空に浮いているにも関わらず地団駄を踏む

動作を繰り返す。

——成程、中々に単純。見た目相応の子供っぽさが幸いしたか。

『……………君は大ちゃんと言うのか』

『あ、——それはあだ名で、大妖精が名前——というより、呼称ですね』

『大妖精、か。成程、御伽に出てくる妖精の上を行く者か……………』

とてもそうは見えんが……………先程の瞬間移動を見れば、力は本物だ。性格は戦闘向きではないが——別にそれを求めている訳でもなし。敵から逃げるには打ってつけの能力だ。

『残念だったわね。アタイの正確無比な弾幕なら、大ちゃんがそっちにしようと思ったらだけに当てるなんて容易いわ！』

そう豪語すると手を突き出し、前方に氷柱を無数に展開する。

本気の眼だ。余程自身があるのか或いは——何にせよ、このままでは大妖精も巻き込まれる。

『すまない、大妖精。責任は取る、だから少し我慢していてくれ』

『へっ——？』

刹那、氷柱が弾丸の如く突進。

私は咄嗟に大妖精をお姫様抱っこで抱え、疾走する。

無計画に放たれたそれらは、私の軌道を追うように次々と地面を穿ち続ける。

『ひ、ひゃあああああ!?!』

突然の疾走に驚いてるのか、此方に向けられた氷柱に対して驚いてるのか、狂った様に甲高い声を発する。

少しでも失速すれば、次に貫くは我が身と彼女だ。

出来る限りの強化で足を速くし、更に速度を上げる。

本来なら、あの単純さを利用して此方への攻撃を抑制させ、その間にでも大妖精をこの領域から逃す算段だったのだが・・・逆にそれが仇となった。

アリスの時と一緒にだ。私の判断が少女を危険な目に合わせている。

だが、悔やむのは後だ。今は全力を以て、私の腕の中の少女を護り抜く。

それが、今の私がすべき事項だ。

『あ、あの。さっきどうして否定しなかったんですか。言えば不利な立場になるのは明らかなのに』

『それに関してだが——私の落ち度が原因だ。君を盾にするような発言をすれば、少なくともあの少女はすぐには此方を攻撃はしてこないだろうと思った。その間にでも、隙を見て君にはその場を離れてもらおうと思っていたんだが——どうにも、射撃に絶対の自信があるらしいな』

先程から氷柱は軌跡のみにしか命中せず、先読みの行動をする気配は無い。

——そこから察するに、彼女の自信は自惚れからのものだ。実力は恐らく大したことはない。

だが、故に脅威と成り得る。精密性も計画性も求めていないその一撃は、時に予期せぬ動きを見せたり、考えの及ばないような行動に

出たりと、油断は微塵も出来ない。

戦場で狂った戦士が、恐怖に囚われ獲物を敵味方問わず振り回すのと似ている。

そこには、生存本能に塗れた獣しかいない。

生きたい、と。誰でも本能レベルで望んでいること。

なのに、それがちよつとでも増幅しただけで、同じ生物だろうと躊躇いなく命を奪える生き物。それが人間だ。

チルノと呼ばれる少女は——恐らく、この氷柱が私に当たった後の事を理解していない。

いいところ、怪我程度で済むものだと思っているのではないか。

純粹過ぎる故に、命の尊さを理解していない。そこだけを見れば、彼女は快樂殺人者と一緒かもしれない。

だが——だからこそ間違いなく、彼女は今まで誰も殺めていないのが理解する。

それだけが、私の心を安堵させた。

『——チルノちゃんは本当は優しい子なんです。ただ、今回は出逢いが悪かったんです、だから——』

『分かっている。私はこの状況であろうと、彼女を憎む気はない。そうだな、間が悪かったんだ』

物事なんてものは、上手く回る様には出来てはいない。

今までの出逢いの殆んどが良好過ぎただけで、こうなる可能性だつて決して低くない訳ではない。

だからと言って、その出逢いを蔑ろにする気もないし、そんな運命を呪う気もない。

『——なら、これからが本番だろ』

だから、止める。

チルノを最小限の犠牲で無力化させる事と、大妖精を護りながら戦う事——その二つを成し遂げることは、そう簡単なことではない。

『——やってやるさ』

そんなものは関係ない。

元よりこの身は、それを生涯の糧として生きたもの。出来るか出来ないかなんてのは、後で考えればいい。

突如、足を止め、反転。

氷柱は掠めるように左右を通り、道を成していく。

『ふふん、ようやく諦めたって訳ね』

抱いた大妖精を地面に降ろし、私の背後に隠す。

背後には、魔法の森への道。

『……隠れている。そして事が済むまで顔を出すな』

正面を見据えたまま、背後の少女へと告げる。

『で、でも』

『心配なのは分かる。だが、それで君が傷つくなんて真似をしてみろ。本気でないにしろあの子の心には傷がつくぞ』

『——』

そこから少女は何も言わず、私は気配のみでその場から立ち去ったのを理解した。

『さて、邪魔者はいなくなったな。では――反撃といこうか』

「ふん、ただの人間、ましてや丸腰でなにができるってのよ」

少女は変わらず余裕の表情。

寧ろ唯一の心配点が消えたことに、その余裕が強まってすらいる。

かの英雄王を思い出すな。実力まであれだと敵わんがな。

『なに、君の戦法は漠然とだが把握した。丸腰だろうと勝つ自信はあるよ』

「つ——莫迦にしてっ！」

再び氷柱の雨が私へと降り注ぐ。

私はその射線上へと突っ込み、降り注ぐ氷柱を蹴り、飛んだ。

えっ

驚愕の色を見せるチルノを尻目に、私は蹴る。

蹴る、飛ぶ
蹴る、飛ぶ
蹴る、飛ぶ
蹴る、飛ぶ
蹴る、飛ぶ
蹴る、飛ぶ
蹴る、飛ぶ

蹴る、飛ぶ 蹴る、飛ぶ 蹴る、飛ぶ

反する方向へと速度を上げる事からか、中々少女の眼前までは届かない。

飛ぶ勢いを必要以上に上げれば、氷柱が当たる。だが、それを危惧して足の力を抜けば、平行線を辿るだけ。

バランスの取れた力加減で、次の瞬間身体を貫きかねん獲物をかわし、再び踏む。

そして、ようやく――

『届いたぞ』

突き出していた手を思い切り掴み、そのまま引つ張り下ろす。

『う、うわあああああ！』

驚愕に混乱した少女は、一身で抵抗するものの、氷での反撃は行つてこなかった。

それに伴い、足場の途絶えた私達に待っているのは、自由落下という抗えない運命。

幸い下は湖。水に触れたことでまた怒られるかもしれんが――その時はその時だ。

『大人しくしている、舌嚙むぞ』

チルノの顔を私の胸へと埋め、出来るだけ衝撃を担う姿勢を取る。そして次の瞬間、大きな水飛沫と音と共に私達は湖へと落下した。

凄い。いや、最早凄いなんて言葉で表現出来ない領域ではないか。
あの男の人、人間の筈なのに、チルノちゃんを素手で無力化しちゃった。

チルノちゃんは妖精と呼ばれる種族で、人間より劣っている種族とされている。

しかし、チルノちゃんと私はそんな最弱の秤で見られている妖精よりも遥かに優れているらしい。

私はともかくとして、チルノちゃんはある程度の妖怪となら渡り合える実力を持っている。

事実、氷を操る能力は使い次第で強大なものとなる。

ああやって氷柱状にして武器にしたり、相手の手や脚を凍らせて身動き取らせなくすることだって不可能じゃない。

だけど——チルノちゃん、そこまで頭回らないんだよね。出来れば言いたくないけど。

でも、それらを差し引いても、ただの人間には敵わない実力を保持している。

だから、止めた。けど、あろうことが彼はワザとチルノちゃんを挑発したり、私を護ろうとさえした。

一歩間違えれば、命を落とすのは間違いないのに。

チルノちゃん、優しいから。本気で私が人質になったんだって思ってたて、怒ってくれてた。

だから攻撃をやめなかったし、すぐにでも助けようとしてくれた。それは嬉しかったけど——

私は、逃げることしか出来なかった。

もっと、力があれば——こんな惨めで悔しい思いをしなかったのに。

私は森の木陰で、彼が散る様を傍観するしかない——そう思っていた。

けど、予想は良い意味で外れた。

彼は襲ってきた氷柱に、あろうことが突っ込んでいった。

しかも、その雨を踏み台にして、チルノちゃんへの距離を詰めようとさえしていたのだ。

チルノちゃんへ詰め寄る彼と、彼を襲おうとする氷柱。

相反する物理運動から、踏み台にするなんて芸当は不可能に等しい。ましてや不規則な動きの踏み台だ。不可能は最早奇跡の領域にまで到達している。

勿論、彼の速度と氷柱の速度どちらかが遅いなんてことはなく、寧ろほぼ等速といっても過言ではない。

そんな奇跡を、人間の身で成し遂げているという事実が、信じられなかった。

あの人は、人間だけど——人間じゃない。

人間離れた身体能力、動体視力、判断力、そして——命への執着。

躊躇いの無い一連の動作からは、明らかに死への恐怖が覗けない。

人間だろうが妖怪だろうが妖精だろうが当たり前前に持っている、「死」という概念への恐怖。それを持たない者を、果たして生物と呼んでいいのだろうか。

そして遂に——彼の伸ばした腕は、チルノちゃんの腕を掴んでし

まった。

遣って退けた。あの弾幕の雨を掻い潜り、自分は一切の攻撃を行わず、無力化してしまった。

『あつ!!!』

だが次の瞬間、当然と言うべき結果が訪れた。

氷柱を足場に使っていた彼とそれに繋がれたチルノちゃんは、重力に惹かれそのまま自由落下をしていく。

彼は氷柱を足場に使っていたという事は飛べないのだろうし、チルノちゃんが大人一人の体重を支えたまま飛べる訳もなく、無情にも池へと一直線。仮に受け身を取っても、あの落下速度で平坦な水面にぶち当れば、怪我は確定だ。

そんな余裕の無い状況下であの人は、チルノちゃんを落ち続ける最中に胸元に抱きかかえ、自分の背中を水面に向けてチルノちゃんへの衝撃を和らげようとし出した。

……ここまで徹底していると、最早驚かない。彼は本気で、チルノちゃんを傷付けないように必死になっている。

何故そこまでののかは分からないけど……不思議な人もいるものだ。

私がここまで冷静に達観してられるのは、彼ならなんとかしてくれるんじゃないか、と心の中で彼を信用している節があるのだと思う。

道理を無茶で押し通した彼なら、奇跡だろうが運命だろうが、なんだって凌駕してしまう。そんな気がして。

そうして、まるで巨大な石でも降ってきたかの様な音と水飛沫が、湖の周囲を一杯にした。

当然それはあの人とチルノちゃんが湖に落ちた事が原因であり、それ以外の何物でもない。

『チルノちゃんつつつ！！』

私は急いで落ちた方面へと走り出す。

信用しているとは言っても完全じゃないし、そんなものを信じて友達に危機に飛び出せない程言い訳染みていないし、臆病でもない。せめて、弱い自分だろうと手を伸ばせる状況だけでも、チャンスに逃したくない。

チルノちゃんが私を心配してくれた様に、今度は私がチルノちゃんに何かしてやる時なんだ。

湖の先にまで足を運んで、気付く。

—— 浮いてこない。しかも、水泡すら出現しない。

この中には何度か入った事はある。

深さに関しては大して興味が無かったので調べていないが、湖と呼ばれる以上、横の広さと縦の深さは少しだろうと比例していると思って間違いないだろう。少なくとも、軽く潜った際に肉眼では底を捉えられなかったので、不安は募るばかりだ。

一瞬飛び込もうかと思ったが、少し考えて踏み留まる。

私は特別、泳ぎも素潜りも得意な体ではない。そんな体で下手に応援に向かった所で、返ってあの人の迷惑をかけるだけだ。信じるしか、ないんだ。

—— 刹那、鼓膜を大きく揺らす轟音が湖から放たれる。

あまりに突然の事態に驚きを隠せないまま轟音の放たれた方向を見ると、そこには湖を突き破る様に高く舞い上がったあの人と、小脇に抱えられて呆然としているチルノちゃんがいた。

太陽の光で水しぶきがキラキラと輝いて、それに包まれる様に飛翔しているその姿は、まるで御伽話に出てくる様な、お姫様を助け出す騎士を連想させるものだった。

『あ———』

私はそんな美しい光景を目の当たりにし、チルノちゃんと彼が助かったという事実可喜ぶ事も忘れ、ただただ言葉を失い、そんな幻想的な光景に息を呑むばかりだった。

幻想郷、なんて呼ばれてる世界に居る身が、その程度のことと感動するなんて可笑しいと思われるかもしれないけど……慣れとは恐ろしいものである。

この世界には、純粋な強者は存在しない。

皆何かしら特別な能力を持っており、皆その恩恵に預かっている。

逆に言えば、能力が無いなら人間なら脆弱なまま、妖怪なら少し丈夫で少し長生きで少し力強いだけ。

たまに例外はあるけれど、それは稀なパターン。基本的にはその例外に漏れは無い。

幻想郷最強の人間と言われる、博霊霊夢の能力——空を飛ぶ程度の能力だったっけな——もし持ってなかったら、巫女としての攻撃能力のみがいいところで、少なくとも最強と呼ばれる存在足り得なかったらう。

そう考えると——空も飛ばず己の身体能力のみ、更に一切の攻撃を行わず、能力を持ち、空も飛べる相手を無傷で無力化した、そん

な彼こそ“最強”なんじゃないかって、そう思わずにはいられない。何の根拠も意味もない推測だけど、彼の背中に隠れた時に見えたその後ろ姿が——とても大きくて、雄々しくて、頼もしく見えたせいもあるのかもしれない。

軽快な着地音と共に地面へと着地した彼の場所まで、急いで近付く。

『二人とも、大丈——っ！！』

ゆっくりと近づいてきた彼の姿を見て、私の表情は青褪めていくのが分かった。

上半身は五体満足、健康そのもの。だけど、下半身——と言うよりも足が、まるで爆発でも当たった痕のようなものが、くつきりと出来あがっていた。

ただどこかにぶつけた様な怪我ではなく、爆発のような集中された衝撃の痕。そんなものが湖の中で起こり得る筈はない。

『彼女なら安心したまえ。気絶しているだけだ』

しかし当の本人はそんなもの意に介さず、此方に話しかけてくる。その傷はどうしたのか、どうしてあんな危ない行動をとったのか、聞きたいことは沢山あるけど——多分何も答えてはくれないだろう。

恐らく、彼にも何かしらの切り札があるのかもしれない。

でも、それをあんな状況になるまで使わなかったのは——見られなくなかったからか、或いは元より使う予定がなかったが今回は止む無し、というものか。

では見られなくなかったという理由ならば、何故使う気になったの

か。

第二の理由も含め、規制をそんな簡単に破れる程度のもだったのか、或いはチルノちゃんを助ける事が、規制なんかよりも大事なことでたと踏んだのだろうか。

『あ、あの――』

何を言うべきかもわからないまま言葉を切り出した時、チルノちゃんの身体が僅かに脈動した。

『チルノちゃん!!』

思わず私は声を荒げ、チルノちゃんの手を強く握り締める。本人はそれを痛そうにはせず、ゆっくりと私の方へと向く。

『大ちゃん……私、どうして……』

『彼が助けてくれたんです、えっと――』

そういえば、と。

今更ながら私は彼の名前も知らないだった。

私を護り、チルノちゃんを無傷のまま止めてくれた彼の名前すら、知ろうとしなかったのだ。

『ああ、すまない。私はエミヤシロウと言っ』

『エミヤさん、この度はチルノちゃんを助けていただいております。』

『そんな畏まらなくてもいい。私が勝手にやったことだ』

『それでも——ありがとうございます』

深々と、頭を下げる。

チルノちゃんは普段大抵暴れると、幻想郷の秩序がどうのって理由で問答無用で鎮圧される。

本人からすれば些細な切っ掛けなのに、それを退治する相手からすればそんなものはどうでも良くて——少なくとも、こんな丁重な止め方をされたことは無かった。

私は弱いから、そんな不条理からチルノちゃんを護ることが出来なくて。

力が欲しかったけど、そんなの所詮無い物強請りに過ぎず。

どうにかして口で止めようとしても、チルノちゃんがそんな状況を作る時は、頭が熱暴走でも起こしたみたいになってしまい、誰の声も届かなくなる。

無力な自分が悔しくて——だからチルノちゃんの傍に出来るだけ居ようと考えた。

自己満足だ。自己欺瞞だ。

そんなことしたところで、私が満たされることも、チルノちゃんを護ることだって出来やしないのに。

自分の不甲斐無さから、逃げたかったただけなんだ。

『アンタ、さっきのは一体………』

『なに、一種の手品だよ。気にすることはない』

さっきのって、チルノちゃんはあの爆発の正体をしているのだろうか。

いや、こんな疲弊していたんだ。記憶もおぼろげだろうし、チルノちゃんのことから、誇大的に言う可能性も捨てきれない。まさに真実は水の中、か。

でも、そんなもの今はどうでもいいや。

そんなものを知った所で、どうしろと言うのか。

チルノちゃんを護ってください、とお願いでもする？

—— そんなものを易々と受け入れる訳がない。

護る、護衛。つまり、常にチルノちゃんと一緒に居ないといけない。さつきまで襲われていた相手を護衛をして下さい、なんてどの口が言えるものか。

『それにしても、君の氷はなかなか強力だったよ。あれほど無尽蔵に氷柱を出せるなら、大抵の相手ならお手上げものだ』

『当然よ。何たってアタイは最強なんだから！』

その最強が素手に負けたと言う事実は何処へ行ったのか、フンと鼻を鳴らし元気に自慢話している。

そんな姿を見て、いつものチルノちゃんに戻った事に安堵した。

『そういうアンタだって、まさかアタイの氷柱をかわすどころか突っ込んでくるなんて、その度胸と動き、ただの人間の癖にやるじゃん』

『くっ、お褒めに預かり光荣だよ』

いや、どう考えても“ただの”じゃないから。って言っても聞かないんだろうなあ。

『——そうだ！いいこと思いついたわ』

突然チルノちゃんがそんなことを言い出し、何事かと私とエミヤさんは顔を見合わせる。

チルノちゃんは小さく掛け声を出し、エミヤさんの腕から飛び降り、そして向かい合う。

そして次の瞬間、人差し指を彼の前へと突き出し、こんなことを言ってしまった。

『アンタ、アタイの弟子になりなさい！』

——世界がノパーフェクトフリーズノした。

『……………はい？』

私がやっと絞り出した声は、静寂の中では良く響いた。

『だーかーらー、最強のアタイに——まあ、多少手加減していたけど——勝ったんだもん。コイツの実力なら、アタイの弟子になる資格がある、そう判断した訳』

ナニライツテイルンダ。

余りにも何もかもすつ飛ばした解釈に、私はふらつきそうになる。流石にこれは怒るんじゃない——そう思いながら恐る恐るエミヤさんの様子を伺う。

すると、何やら考えているのか、指に顎を乗せている。怒ってない、のかな。

『すまん、私は弟子にはならんよ』

ある程度予想通りの答えが返ってきた事に、逆に安堵する。これ以上、彼がチルノちゃんの起こすゴタゴタに巻き込まれる道理は無い。

『ど、どうして？何が不満だったのよ』

何やら慌ててエミヤさんの言葉に食ってかかる。

『私は多忙の身なので、今も紅魔館への仕事へ行く途中だったんだ』

彼がさらりと言った事に、ポカンとする。

紅魔館って、あの大きな屋敷で吸血鬼が住まう所だよ。

そんな場所に行くことを、彼は嫌な顔ひとつせず、さも当たり前な風に言っただけだ。

本当に、彼は何者なんだろう。

『そ、そんな』

そんな彼の言葉を聞いたチルノちゃんは、先程と打って変わって、がつくりとつなだれる。

そんなに、彼に弟子になって欲しかったのかな。理由は分からないけど。

『だが——紅魔館に行く途中、君に会いに来ることは出来る。その程度で良ければ、そのつど寄り道させてもらうが』

『え——』

しかし、その後続いた切り返しは、私達を呆けさせた。

『エミヤさん、どうして』

そこまでするんです。そう言おうとしたが、飲み込む。

もしかしたら、さっきの悲しそうなチルノちゃんを見て、罪悪感でも感じたのか、最初からこう言うと決めていたのか——どちらにしろ、私の疑問に意味はない。

これは、二人の問題だから。私が関与しても、私の言葉に余程影響力が無い限り結果は変わらない。

『——忙しいって言ったのにここに来たいだなんて、忙しくなければ弟子になつてたの?』

『そうかもしれんな』

あっさりとしたエミヤさんの言葉は、チルノちゃんの表情を一気に破顔させた。

『なら仕方ないわね!アタイが認める奴なんて、そうそういないんだから!』

再びエミヤさんへと元気よく指差し。

うん、やっぱりチルノちゃんはどうじゃないとね。いつも元気なチルノちゃんが元気じゃないと、周りまで元気じゃなくなるもんね。

『それにしても——エミヤさん、ちよつと』

手招きでエミヤさんを此方へ促すと、都合良く前屈みになってくれたので、私はそのまま彼へ耳打ちする。

余談だが、私の倍以上もある背丈の人が迫ってくるものだから、此方からすれば圧巻すら覚えていたり。

『もしチルノちゃんの事で何か思う事があるんでしたら、別に気にしなくてもいいですよ。チルノちゃん、いつもこんなですし』

そうじゃなければ、逆に何故そこまでチルノちゃんに固執するのかと質問を返すしかない。

というか、それ以外の疑問解消法が思いつかない。

『——なに、気紛れだよ』

でも彼は、そうとしか答えなかった。

私にはそうは思えないけど、詮索しても答えてくれるとは思えない。何度そんな状況になったか分からないが、ここまですれば嫌でも学習する。

『また大ちゃんとなんか話してる。ズルイ！アタイにも聞かせろ！』

可愛らしく頬を膨らませたチルノちゃんの姿を見て、私とエミヤさんは柔らかに笑う。

なんかかんやで何時も通り騒がしい一日でしたが、今日は新しく知り合いが出来ました。

その関係は、友達とも仲間とも呼べない至極曖昧なのですが、私は別に気にしていません。

『では——改めて自己紹介しよう。私の名前はエミヤシロウ。チルノ、大妖精、今後ともよろしく頼む』

だって——彼がその時に見せた笑顔は、悪意も打算もなく、清廉潔白でとても優しいものだったから。

惹起競々（後書き）

今回は二人の妖精の紹介。

性格はまるで異なるけど、仲良し。

だからこそ、惹かれ合うのかもしれない。

チルノ

種族：妖精

能力：冷気を操る程度有能力

二つ名：湖上の氷精

湖に住む氷の妖精。常に体から冷気が出ており、彼女の周りだけいつも寒い。触れた物を瞬間で凍らせるため、たとえ彼女が寝ていても触れば凍傷になるおそれがある。サーヴァントであるシロウには関係ないけど。

悪戯好きで、湖の蛙を凍らせては生き返らせたりして遊んでいる。

馬鹿で、どんな簡単ななぞなぞにも答えられないとされるが、新聞記事を読んで内容を批判出来る知識は持ち合わせている。

妖精の中では格段に力が強い。そのせいもあってか、自分に常に自信を持つ傾向が強い。

能力を上手く操れない＝弱いという扱いをされているが、意外とそうでもないかもしれない。上記の蛙を氷にして生き返らせるという行為は、そう簡単に出来るものではない。つまり、そういった技術と方法を知っているとなる。

人間でさえ、細胞一個に対して百年以上も費やしたのに、チルノは個人で、蛙という細胞の何万倍の大きさを誇る物に対して成功させている。

そう考えると、チルノは力の使い方を理解さえすれば、レミリアとかの相手すら可能となるのではないかと思われる。
あとついでに、チルノが馬鹿なら、私達はどれだけ馬鹿なんだよってことにもなる。

大妖精

種族：妖精

能力：不明

「大妖精」とは妖精の中でも強い力を持つものの総称、分類名であり、彼女自身の名前ではない。だが、大妖精は東方原作でも彼女だけなので、実質名前として確立されていると言っても過言ではない。小悪魔と一緒に部類の存在（名無しの意味で）。

愛称は大ちゃん。おはスタを思い出す。

彼女に関しては原作で台詞もなんもないので、性格等は二次設定になる。

そんな私が考える大ちゃんは、チルノに対して押しの弱い姉、って感じ。

チルノの暴挙を止めたくても、どうしてもどこか怯えて一歩引くばかり。だけど芯は強く、いざとなれば大妖精の名に恥じない活躍をしてくれる……かも。

凡天の理想とする道（前書き）

長らくお待たせしました。最早忘れられてる＋失踪しただろうなと思われているであろう私（8/11日現在）。諸事情があり手をつけられない状況でした。

これから暫くはそんな事情に縛られることはないでしょうし、普段通りのペースに戻れるといいなあ。

どうでもいいけどバトルフィールド2モダン・コンバット購入。FPS初心者だけど面白い。これが980円はいいねえと思いながら死にまくってます。因みに箱〇のです。

凡天の理想とする道

あれから私は、さしたる出来事も無く湖から去った。

大妖精は私の足の状況を危惧していたが、大したことないと頭を撫で、誤魔化した。

チルノと共に湖に飛び込んだ時、彼女は衝撃で気絶。

このままでは溺れてしまうと思ったが、湖は思いの外深く、なかなかの高度から落ちた——恐らくは底の半分以上は沈んだ——のだから、サーヴァントであろうと子供を片手で抱えたままでは、泳ぐこともままならない。

そこで私は、一瞬彼女を離し、弓と偽・螺旋剣を投影。すぐさま射出し、壊れた幻想を発動させた。

宝具の爆発は、ダイナマイトなんかよりも強大で、火種も必要としない為、まさにこの状況にぴったりだった。

結果、予想以上の余波に足を軽くやられてしまったが、迅速に地上へ上がる事が出来た。

宝具の爆発は、喻え余波であろうとその威力は尋常ではない。

サーヴァントの肉体を以てしても、無傷と言うのは例外はあるものの、殆ど有り得ない。

まあつまり、大妖精に言ったのはやせ我慢であり、歩く分には問題ないが今戦闘にでもなれば確実に動きに支障が出る。

それに、怪我は決して脚だけではない。チルノを抱えた際に、何故か指が凍傷を起こしていた。

恐らく、氷を操る妖精であるチルノは、その身すらも氷に近い体温なのかもしれない。

そこに、水の中という相乗効果を嫌でも与える状況も重なったのだ。

肉体面で通常の人間より優れているとはいえ、軽い凍傷にくらいはなるものなのだろう。

だが、幸いなことに目的地である紅魔館は湖から遠くはなく、あっさりと到着した。

拍子抜け、というかここ最近歩く度にトラブルに巻き込まれていたのも、また謎のフラグが何かが立つことと思っていた。

紅魔館の門には、壁にもたれかかった美鈴の姿がある。

その横には、シエスタ中という看板が突き刺さっている。

因みにシエスタとは、スペイン語で昼寝を指しており、スペイン語圏を中心に生活習慣として社会的に認められている昼寝を含む長時間の昼休憩の事である、が——中国な風体の彼女がそれをさも当たり前ですみたいな使い方をしてるのはどうなんだろう。

確かに中国に古来から伝わる伝承としては、陰と陽のバランスを保つ——健康でいられる身体になる——為に、陰として21時から23時、陽として11時から13時位の時間帯に二回とも寝ることが必要らしい。

だがしかし、実は陽の時間はとくに過ぎている。

つまり、彼女は睡眠過多であり、ここで無理やり起こされても誰に文句は言えないということだ。

『起きたまえ、寝ているとメイド長やら家主に叱られるぞ』

叱られるどころか、咲夜はあの時みたいに有無を言わずナイフを投げるだろう。そして私も巻き込まれるだろう。それは勘弁願いたい。

『んう……お腹いっぱいですう』

『なんてベタな』

思わず声に出してしまう。

このまま放置して入ってしまおうか。今起こすのも忍びないとも思えると同時に、起こさないまま灸を据えさせようかという鬼な選択をとろうかと葛藤が私を襲う。

……いや、冷静に考えてみれば、こんな立て看板があるという事は、こうやって寝ているのは一回や二回では済まない筈。そして、恐らく毎度の如く咲夜に叱られているんだろう。

『……………厄介だな』

溜息を一つ、彼女の肩を揺すり、起きることを願う。

私の選択は、彼女にとっても益ではない。それでも、たまには叱られない結果になってもいいのではないか、と思った結果、こうしている。

決して、心を鬼にしても意味ないんじゃないか？とか思っている訳ではないぞ。

『あう……………ん、シロウ、さん？』

『ああ、私はシロウだ』

———そういえば、彼女に名乗っていない事を思い出す。

名前の交換を重んじる私だが、あの時はどうもそんな状況でもなかった———というのは言い訳だろうな。語ろうと思えば語れた筈だから。

という事は、レミリアなり咲夜なりから聞かされたのだろう。何せここで働く身となったのだ、名前を知らない間柄では不便だろうし。

『——つて！寝てません！私、寝てませんから！』

壁にもたれていた背中をピシッと伸ばし、あたかも真面目でしたよと自己主張するその姿は、逆に怪しさを際立たせている。

『いや、それはいいのだが……入っても構わんかね？門番である君の承認がなければ、いかにここで働く身であろうと不法侵入者だ』

『あ、はい……わかりました。それでは、ちょっと待っててください』

お咎めでも食らうのを覚悟していたのだろう。私の言葉を聞いて美鈴はぽかんとしていた。けど、慌てて私の要望に応える為、近くにあった呼び鈴らしきものを鳴らしてくれた。

すると、数秒も掛からない内に咲夜が玄関から現れる。彼女の行動の速さは、偶然呼び鈴の近くにいたのか、はたまた——

『いいらしいですよ。私は門番がありますので付き添いはできませんが、頑張ってくださいね』

『お互いにな』

互いに激励を交わし、私は重く開いた門より紅魔館の敷地へ足を踏み入れる。

恐らく、そう遠くない未来には、美鈴は門の前で再び器用に睡眠を取っているのだろう。そうなれば、完全な自己責任でどうにかしてもらえない。

『いらつしゃい。明確な日にちの揭示はしてないから適当かと思っただけど、結構しっかりしてるのね』

咲夜は初対面の時とは打って変わって、気さくな態度で話しかけてきた。恐らく、客と仕事仲間への態度の違いの問題なのだろう。

『私が望んだ仕事だ。手を抜く気も、心構えもありはしないさ』

『そう、悪かったわね疑って。私の周囲って、身勝手だったり適当だったり何も考えなかったりするのが多くなって、ついね』

軽い溜め息を吐く彼女は、どこか見た目不相応に年寄りな雰囲気醸し出している。

苦労しているのだな……私が労った所で彼女は否定しそうなので、心の中でそっと労った。

『あ、そうそう。仕事に入る前に、貴方に客人が来ているから、こちらの用件をまず済ませて頂戴』

『客人？一体どうして、私が目的なのにここへ来たんだ？』

私はあちこちを歩き回っており、その場に留まることは最近はそんなに無い。

根無し草である私に用件があるのなら、自身がそこに居ずとも、知人なりを使い、私を搜索した方が効率が良い。

それに、私を知っている者の殆ど——もしかすると全員かもしれない——が、何かしら特殊な存在ばかりだ。空を飛ぶくらいなら恐らく造作もないだろうし、そう考えると、誰なのかを絞るのが難しい。

けれど、少なくとも私が紅魔館に定期的に来ることをソイツは知っている。そう考えれば絞れる気はするが、情報なぞ漏洩するものだ。私と言う存在を機密にする理由はないだろうし、働いていれば幾らでも人に会う。私を自由にしている時点で隠し通せる訳がない。

結局考えるだけ無駄だと結論付けた私は、思考を止め大人しく咲夜の後に続いていくことにした。

誰かに恨まれることは、一部しか心当たりしかないので大丈夫——の筈。情報の漏洩が無いことを切に願う。

『ここにいるわ。終わり次第私なり小悪魔なりを探して、仕事して頂戴。特にこれとやることを課せることはないから、その時その時必要なことを仕事にするわ』

一般的な客間だろうか、特別装飾も無い木製の扉の前に到着すると、咲夜が私へと振り返り、話しかけだす。

『つまり、無い場合もあるのか』

『紅魔館は広いからそうなる可能性は低いけど、まあ無きにしも非ずって所ではあるわね』

微妙な言い回しをしながら、揉み上げを指にくるくる巻きつけている。

ここに辿り着くまでの過程で、チルノ達のような小さな妖精がメイド服を着て仕事をしている姿を何度か見たが、その手つきは正直上手いとは言えない。

あの偉そうな主のことだ、埃の一片も許さない気概でやれと咲夜に言いつけているだろう。そうなれば、彼女は妖精たちの掃除跡を、更に掃除している筈。そうなると、結局妖精たちはオブジェに等しい扱いで、負担の殆どは彼女に向かうしかない。その姿を想像するだけで、気疲れしそうである。

『そうか、では必要ならば遠慮なく言ってくれ。私はバイトの身だ

からな』

『ええ、期待しないで頼るわ』

そう言つてフツと笑うと、彼女はそのまま何処かへ歩いて行つた。彼女の負担に、更に私の案内という仕事を増やしてしまつたことを申し訳なく思いつつ、その分を仕事で返そうと密かに決意し、そのまま部屋へと入つた。

部屋の中は、真っ白な壁紙に必要最低限の椅子やテーブル、そして椅子に座り白く細い足を無防備に曝け出すように足を組み、そんな客人とは思えない態度で私を待っていた相手が、そこにいた。

『お久しぶり——』とは言つても貴方は私を知らないでしょうし、初めましてにしておくわ、エミヤシロウさん』

赤と青とシンプルに構成した服とロングスカートで、それを腰から色を左右対照に反転させた服装の女性は、そのままの体勢で挨拶をする。

『……………私をどこで知つたのだ？』

『そうねえ、貴方この前ここでお腹に怪我したでしょ？あれ治そうと赴いたのが私なの』

『——なに？』

という事は、彼女は私を診察したのか。英霊の身体は見た目人間のそれと差はないが、素人目でも何かヒトと異なることぐらいは理解できるであらう。

ここでは一応人間として振る舞っている。妖怪と区分される身体ではあるが、人間の方が何かと便利ではあることを後に知り、そこからは人間として活動している。寿命などの問題はあるだろうが、その時に考えればいい。

だが、彼女が私の異常性に気づき他の誰かがそこから情報を知れば、後はなし崩しだ。少なくとも人間の里に入れるかは微妙なところだろう。

『でも、貴方の傷は私が来た頃には、元通りまではいかなくても安定した状況にまで回復していたわ。レミリアの話だと、私がここに到着したのは一時間経ったかそうでないか位の差だったらしいわ。吸血鬼とも蓬萊人でも無い身体だと検査で実証済み、正直なところ貴方の身体に興味があるわ』

『私の身体の謎を知りたくて来たのか？此方は忙しいのだがな』

彼女の言い分だと、恐らく異常性は感じているが特殊な種族としての区別はされていないようだ。

こういった情報はできれば教えたくはない。得はないし損が大きい選択を簡単に選べるほど、莫迦ではない。

『いえ、さっきの興味があることは本当だけど、別の理由よ。医者として、あれだけの怪我をした患者を心配しないことは無いわ。つまり、定期健診みたいなものよ』

確かに、魔力さえあればあの程度の傷は1時間で治ってしまう私だが、その事実を知らない彼女からすれば私と言う患者は懸念対象なのだろう。

『分かった。ならばさっさと検査してしまおう』

一度身体を見られた時点で断る理由もない為、さつさと事を運ぶべく私は女性へと近づく。

十歩以下の距離でしかなかったが、目の前に辿り着く時には、何故か彼女は私の舐めまわすように観察し、顔をしかめていた。

『……………右足の膝の屈折角度が人間の歩行による平均角度より五度浅い。それに伴い右足が地面に着地する事による負担の掛け方も、身体の揺れから見ても明らかに右の方が傾いていない。

——貴方、右足を負傷しているわね？』

淡々と語られたその内容に、私は目を見開く。

戦場では怪我など日常茶飯事。この程度の怪我なんか、常につきまとう。

そして、敵に弱点を晒す真似をしない為にも、痛みに対して抵抗をつけたし、表情からも悟られないようにもした。

結果として、自分でも怪我をしていたという事実すら忘れてしまう程に、私は痛みが無頓着になった、筈だったのだが——

しかし彼女は、この数歩で違和感を看破したと言うのか。

それとも、自分が考えてる程に、私の努力は実っていなかったと言うのか。

どちらしろ、バレているのなら隠す必要もない。もし彼女が今私の敵と成り得るとしても、私は立っていて彼の彼女は座っている。どちらが圧倒的優位な状況かは言うまでもないのだから。

『先程、人助けをしてな。名誉の負傷と言うものだよ』

本当は人じゃないが、誰かを助けたという事実さえあれば、それが

何者かまで話す必要はない。名を出された方も不名誉だろうしな。

『少し待つてなさい、もし貴方の前回の回復力が偶然の産物だとしたら必要ないのかもしれないけど、そんな可能性に縋るくらいなら医者なんかやってないわ』

どこからか包帯やら消毒液やらを取り出し、私の靴などを手慣れた手つきで脱がしていく。

脱がし終えた足を見ると、やはり傷は完治しておらず、多少爛れた痕が残っている。

とは言え、宝具の爆発の余波を喰らってこの程度では済まないの、傷を負った瞬間に確認したものなら、大妖精ならば失神してたかもしれない。自分の我慢強さに少し感謝する。

『それにしても、君は一体——』

『八意永琳よ。呼び捨てで構わないから』

『では永琳。君の観察眼と洞察力は、医者家業で培われたものなのか？』

んー、と指で顎を支えながらにかを考えている永琳。聞かれないことなのだろうか。

『——貴方は乗り越えられない壁つてものに当たったことはある？』

突然、彼女は質問の答えとはまるで違ったことを答え出した。

『そうだな、私はあらゆる面で才能なんてものとは無縁だったから』

な。そんなものは常につきまっていたよ。最も、壁自体が高いものが多すぎて、些細なことでは壁とその時は認識できなかったものすらあったがな』

そう、この身体の殆どは努力という泥臭いもので構成されている。それは才能に恵まれなかったが故の結果に過ぎない。

けれど、仮に才に恵まれていたとしても努力することに変わらなかっただろう。私が目指していたものは、それほどまでに険しいものなだから。

全てを救いたいという想い自体は決して間違いではない。けど結局、私はひとりだ。

小学生でも、いや、園児ですらも書き、読めるであろう一という数字。そして、その簡単な存在が億単位に至る存在を救いたいと本気で思っていたこと自体、莫迦げているなんて言葉すら虚しくなる位に、愚かなのだ。

今この瞬間、飢餓によって数人の子供が死んだ。

今この瞬間、寿命によって数十人が死んだ。

今この瞬間、事故によって数百人が死んだ。

今この瞬間、戦争によって罪もない人が数千人死んだ。

一秒の間に、これほどの可能性で人は死んでいる。不条理や理不尽による死の波動が、まるで息をするかのように世界を揺るがしている。

それに中てられる者の殆どは、地位や力の持たない市民や兵士。しかも王のような絶対的権威を持たない存在であろうと、今では戦争を起こすなど容易にできる。

そして弱者は、そんな奴らに従うことしかできない。

強者の存在が、弱者を貶める。弱者の存在なくして、強者は生まれない。

メビウスの輪のようにどちらも表裏一体。これはヒトという存在が消えない限り、常に起こり得る事象。

私が誰かを救ったとしても、その先彼らが永久に幸福であれるなんてことはない。

所詮私のやっていることはその場凌ぎのものだ。

本当の意味での救いなどありはしない。だからこそ、私は正義の味方になろうとする過去の自分を呪った。

自分のエゴで救った存在は、自分のエゴによって積まれた亡骸を踏み台にした結果で成り立っている。

兵士の殆どは、強制、信仰、狂気のせいで戦場に立っている。彼らを従える者こそ本当の敵なのに、目の前の救いの為に私は躊躇うことなくその兵士を■した。

正義の味方であろうとするなら、彼らだって救うべき対象の筈なのに。切り捨てるべき一は、彼らを私利私欲で操る存在なのに。

その都度感じる、自分の無力さ。

全てを救えるなんてのは無理だと理解しているのに、それでも考えてしまう。

一を切り捨てることに罪悪感を持つくらいなら、最初からなにもしない方がお互いに期待も絶望も味わうことなんて無いのだ。

そして最後には、そんな絶望に飲み込まれ、私の全てを蝕んだ。恐らくこのときが人生最大の壁だったのではないだろうか。

『はい、出来たわ。……まあ普通はそうよね。でも、私は違った。普通の人が壁と思えるようなものは、私にとってはなにもないのと一緒にだった。周囲は私を？天才”と呼んだわ』

物思いに耽っている、いつの間にか治療を完了していた。

医者の名乗るだけがあり、その無駄のない治療跡は素晴らしいものだった。

そして、天才という言葉に私は静かに反応する。

それ自体はそれほど真新しいものでもないのだが、才能のことでネガティブになっていたせいかどうしても必要以上に反応してしまう。

『羨望も嫉妬も込められたそれは、正直いい気分はしなかったわね。大抵は嫉妬だし。まあ、何が言いたいかってことは、私があなたの微細な動きの差を理解できたのは、その天才の力だという事よ』

『…………それは、一種の能力ということか？』

『あらゆる薬を作る程度の能力が私の能力だけど、特別私は医療技術に特化している訳ではなく、万能にいろいろできるから、どうなんだろう』

『いや、知らんよ』

子供っぽい表情で真面目に考えている永琳を見て、毒気が抜かれたさつきまでどこか彼女に対して劣等感を感じていたのだが、そんなことどうでもよくなってしまった。

実際彼女に対してそれらの感情を持ち合わせたところで、特別な変化が齎されるわけでもなし。望んで手に入れたり捨てることが出来

ないものに対して、醜い感情を晒してしまうことほど不毛なことはないのに。

『でも、普通の人に無い能力を持つてわかったことは、予想外なものがあるものに関係していたりとかするってことね』

そういうと、スカートの裏から、紙とペンを取り出してなにかを書き出し始める。

……隠す場所は明らかに見てはいけない箇所だったので、不自然にならない程度に顔を逸らしたが。

『これ、なにかわかる？』

差し出された紙を見ると、縦、横、斜めと短い棒線が適当に散りばめられていた。

隙間なく書かれているせいで灰色と化しているそれは、絵ではあるのだろうが意味があるのかはわからなかった。

『それはステレオグラムといって、目の焦点を意図的にずらすことでとある形に見えるようになるっていう絵なの。本来こういうことは機械がするものらしいけど、私はそれをさも当たり前のように書くことが出来て、その内容も一瞬で看破できるって訳。因みにそれは箱を描いたのよ』

『箱………これが？』

彼女の言葉をヒントに見てみるが、まるでそんな風には見えない。

『そして、こういうのを描くことが出来る人間を、サヴァン症候群——次元変換能力持ちって言うの。これを用いることで、医者で

ある私はヒトの内部を外面を見ただけで理解できるの。手術ではこれのお蔭で必要以上に切開する必要もないし、よく喜ばれたわ』

その時見せた笑顔は、過去に味わった苦労なぞどうでもいいと言わんばかりのものだった。

彼女の無邪気な笑顔に、つられて私も頬を緩ませる。

彼女も、誰かを助けることに喜びを感じている。しかも私みたいに歪んだやり方ではなく、真つ当な方法で。それを少し羨ましく思いながら、自分を叱咤する。

ここで彼女の在り方に吞まれてしまえば、私の今までの生き方を全て否定することとなる。それはつまり、今まで私が救ったもの、救わなかったものの全てを否定するのと同義。そんなことは決してあつてはならないのだ。

『——って、ごめんなさい。仕事があるんだったわね。』

えーっと、もう一ついいかしら。貴方の最近の環境を知りたいの。それ次第では行動に制限を課せる場合もあるわ。貴方は一応病み上がりなんだから、当然過剰な運動は止めてもらうことになるわ』

医者としての表情へ切り替わり、真面目な目つきで私を見据える。この切り替えの良さも、私と似ている。戦場とプライベートでは口調も最初は異なっていたからな。

『……………まあ、善処しよう』

というか、こんなところで働いている時点で過剰な運動が起こらないという事が想像できない。

実際、初日にはいきなり魔理沙が騒動を巻き起こしていたからな。今回も何かしらの可能性は否定できない。

『善処って言葉は、やらない人のその場凌ぎの言葉なのよ。……
まあいいわ、身勝手なのはここの住人ならではね』

『自らトラブルを作ることだけはしないさ』

トラブルに突っ込んでいく可能性は高いがな、とは言えないが。

『……とにかく、教えて頂戴。医者としてこれだけは絶対にやらないといけないことだから』

『了解した』

私はバイト先の説明、かつ仕事内容をプライバシーの侵害にならない程度に掻い摘んで説明した。

私が外から来た存在だとか、バイトをする以前のことは何一つ話さなかった。必要もないだろうし、私自身あの三人に何も言わず消えたことが心残りとなっている為、心苦しくなってくる。

早苗も恐らくもう落ち着いているだろうし、戻ってもいい気もするけれど、今度は私が罪悪感からそれを踏みとどまってしまう。

私も存外、餓鬼なのだろう。

『良く分かったわ。これで私の事情は終わりだけど、もしかた怪我でもしたらここにいらっしやい。とは言っても、地形の構造上一人で辿り着くのは難しいでしょうし、予め人間の里にいる教師をしている女性に会うといいわ。彼女の知人がここまでの道のりに詳しいから』

教師——とは慧音のことだろうか。

その知人となると妹紅か？とは言っても教師が彼女だとも限らない

し、そう上手く事が運ぶとは思えんが……。

『そうか。今は金をレミリアが立て替えているとはいえ、今度礼を兼ねてお邪魔しよう』

『礼はレミリアにきなさいな。私は職務を全うしたに過ぎないわ』

『しかしだな……』

実際、医者の仕事以上の彼女は働きをしている。

私が何も言わずとも、仕事の合間に検診を行おうと僅かな情報のみで私を待っていた。それ自体も望み薄なものであるにも関わらずだ。今回は運よく一回で出会えたようだが、そんな運任せが二度も通用するとは思えない。

医者なんて仕事は常に忙しさ極まるものだ。

症状の軽い風邪でさえ、人間の万全な状態と比較すればその差は歴然。

幻想郷に医者という存在がどれだけいるかは定かではないが、彼女ほどの実力を持つ者はそうそういないだろう。そう考えると、彼女に固定の患者がいても何らおかしくはない。

薬だつて作るのは大変だろうし、彼女のプライベートな時間は皆無であらう。

にも関わらず、私といういち患者に過ぎない存在に構うなんてことは、余程医者としての覚悟をしない限り出来やしない。

ただの医者として在るならば、ここまでする必要はない。だからこそ、私は感謝したかったのだ。

『……意外と頑固なのね。じゃあ、プライベートでいらっしやい。怪我をしてまで会いに来られても困るしね』

どこか諦めた口調で許可が降りた。

けど決して嫌そうではないので、私は素直にその言葉に頷いた。

『さて、私なんかの為に遠出感謝する。私はそろそろ仕事にいかないと何を言われるか分かったものではない。君も仕事があるのではないかね？』

『そこなら心配無用よ。弟子もいるし、余程危険な患者でない限り問題ないわ』

『ほう、優秀な弟子なんだな』

『当然、私が教えたんですもの』

えへん、と自己主張の激しい胸を更に突き出す。

これではどっちを自慢しているのかが分からなくなる。

『そう、か。では、今度は医者と患者の関係じゃなく会いたいものだな』

『そうね。医者としては矛盾してるけど』

彼女は小さく笑い、私は一礼して部屋を後にした。

『…………さて、これで私の役目は終わりね』

私が彼——エミヤシロウの傷の具合を確かめるといっのは口実で、本当は彼の足取りを確実に知ることにあつた。最近患者となつた東風谷早苗という少女の為に、私がひと肌脱ぐことにしたのだ。

彼女は精神面でとても不安定になっている。自分に第二の人格が出来たと錯覚してしまうほどに。

彼女には言わなかったが、彼女の暴走は人格変化によるものではない。一種のストレスによるものだ。

ヒトというのは、我慢が限界に達すると自分の中の常識が決壊する。前頭前野・背内側部が我慢するという信号を出さなくなる、ただそれだけで今まで清く正しく生きていた者すら獰猛な獣となる。

それは人格の変化が理由ではなく、誰もが持ちこたう動物としての本能。

ホモサピエンスといつても所詮、善意・悪意・傲慢・背徳・嫉妬などの機能が付いている猿に過ぎない。

中途半端に善意なんてものを持たせたせいで、ヒトは文字通り中途半端な生き物となった。

劣悪な感情の方が自分を支配しているのに、我慢や自制のお蔭で助け合いの世の中が成立している。

だけど、それと同時に私達は常に爆弾を抱えていることになる。

私は東風谷早苗という存在を、出来るだけ彼女との関わりが少ない者から情報収集した。そうすればかなりの確率でアシがつかない。

小さな情報であれど、積みれば山になる。どれだけ近い者の情報ひとつを聞いたところで、数に勝るものは無い。

結果、彼女は普段とても大人しく、博愛主義者だと言われている。そんな彼女が、最悪エミヤシロウを殺すところだった、という情報すら得てしまった。ソースはその現場にいた村人のひとり。そこからその話をあらゆる人にした結果、真実だと発覚。

彼女をこの目で直接見ている本人としても、そんな事を平気でする子とは思えなかった。

だから私は、彼女はストレスでああなった可能性があるかと踏んでいる。

二人はその時買い物をしていたらしく、仲睦まじく手を繋いでいたらしい。そんな時、一人の少女と出会い、何か会話していたらしい。そして、それが終わったとなると、攻撃をした。

もし途中から入ってきたその少女が原因ならば、矛先は彼女に向くはずだ。にも関わらず、それは彼へと向けられた。

しかも、その少女の特徴を聞いたら——ものの見事に一人の存在と合致した。彼女から情報を聞き出そうにも、私達の関係上簡単に教えてくれるとは思えない。

下手に言及すれば私が調べているという事実が広まってしまう。それだけはいけない。

言ってしまうえば、私が出るのはここまでだった。

エミヤシロウとその少女が不倫関係みたいな構図だったら——と想像するが、とてもできない。

在り得ない、と。それは、その少女のことをよく知っているからこそ断言できるのである。

それに、不倫とは言ったがエミヤシロウと東風谷早苗が付き合っているなんてことが確定した訳ではない。単に、そんなドロドロとした構図で到った結果の末路が、まさにその時早苗が起こした騒動だったから、連想しただけに過ぎない。

『ま、いいわ。これ以上は野暮でしょうし』

とにかく、彼から聞いた情報は包み隠さず早苗に公開する。

これが本当の目的であり、私がしていたことは蛇足に過ぎない。

これは、本人達の問題だ。サブキャラは大人しく事の経過を見守るしかない。

『でも——』

少しだけ、そう少しだけ——面白くなりそうだな、と私は不敵に微笑んだ。

凡天の理想とする道（後書き）

今回は早く投稿したいということもあり、内容は省略させて頂きま
す。そんな書くことないしね。

次は恐らく、紅魔館でドンチャン騒ぎがある——かもね。もしか
するとその場にいた永琳も参加するかも。

紅魔騒動（湯煙編）（前書き）

…… 今回の内容、規制に引っ掛からないか不安だ。
私としては全然問題ない気がしますが、運営側次第ですね。
ギリギリの境界を知りたい。

紅魔騒動（湯煙編）

永琳との別れを惜しみつつ、私は一度玄関ホールまで戻った。

完璧に館の構図や住人の行動パターンを把握していない状態で誰かを探すよりも、一度誰もが通り、かつ開けた場所で待機していた方が効率が良いと判断したからだ。

『しかしまあ………無駄に華美だな』

シャンデリアや壁紙、手すりさえも豪華な金の装飾に変えられているこの空間は、まるで芸術の中に入り込んだと錯覚を起こしてしまうほどだ。

遠坂やルヴィアの屋敷も、こんな感じだったな。俺の家——まあ親父が死んでから便宜上そうなったただけなんだけど——も、確かに和風の屋敷としてはそれなりに金持ちな雰囲気を出しているけど、認識上の問題か和より洋の方が豪華に感じるせいもあってか、自分では特にそうは感じなかった。

というよりも、ぶっちゃけあの屋敷広いだけで、必要最低限のものしかなかったせいもある。

ゲームとかだって確かに少しはしてたけど、内容はレトロなものばかり。最新のに関しては、その頃は魔術の鍛錬があったためそういったものに手をつける機会は無くなった。雑誌だって料理の本ぐらいいしか買うこともなかったし、必要とも感じなかった。

近代の男子らしからぬその生活風景を見て、藤ねえはなんか健全な男子が——とか訳の分からないこと言いながら変な心配してたし、桜は何故か頬を赤らめていた。未だにその理由は不明だ。

結局何が言いたいかというと、人間、というよりも日本人にとって和はとても近い存在だったせいもあってか、洋風の方が豪華な印

象を受けてしまうという事だ。

何も知らない人に絵とかの値打ちを理解させるよりも、その絵と同じ値段でこういった外觀が明らかに派手なものを見せた方が、高いと感じてしまうものだ。

事実、金は富や力の象徴として過去から存在していた。それは日本でも同じことで、中でも金印などが有名だ。

『……………何してるの？』

かなりの近距離からから聞こえた声にハッとすると、殆ど目と鼻の先にまでパチュリーの眠そうに目を細めた顔が近づいていた。正確には、私と彼女の背丈の差は四十センチくらいあるので、近づいてたけれど顔自体は私の胸と腹の中間までしか届いていない。

小脇には本を二冊ほど抱えており、図書館から出たのか、はたまた図書館へ帰るのかはそこからは分からない。

『いや、実は仕事の前に要件があつてな、それを済ませたのはいいのだが、今度は咲夜を探すにしろこの館は広いから誰もが通るであろうこの場所で待機した方が効率的だと判断して戻った。そして考え事をしていただけだ』

『ふーん、能動的だけど受動的って奴かしら』

『給料泥棒になる気は毛頭ないのでね』

……………それにしても、近い。

何故か未だに距離を離そうとはしない彼女の近くに在るせいで、女性特有の匂いが――

『……………ん？』

しない。

するのは、匂いではなく臭い。

汗特有の臭いや、服に染みついたあらゆる臭い。それが強く鼻腔を刺激する。

前回会ったときはここまで近づかなかった為気付かなかった。

まさか、彼女は――

『どうしたの？』

『女性にこう言うことを聞くのは全力で憚られるのだが――パチユリーよ、風呂には入っているか？』

『入ったわよ。一週間前に』

そこからは恐らく、無意識だったんだろう。

私は何も言わず、彼女を肩で担ぎ屋敷を全力で走り回った。

担がれたパチユリーが何か叫んでいるが、私の耳には叫んでいるという事実しか届かない。

ここで待つのはいけない。妖精メイド以外の誰かに今すぐに会って、聞きたいことがあったからだ。

パチユリーに聞いても間違いなく答えないだろう、流れる的に。

一際大きな扉を発見した瞬間、私は迷うことなくその扉を壊しかねん勢いで開けた。

そこにいたのは、この館の主であるレミリア・スカーレットと、その従者である十六夜咲夜だった。

好都合だ、彼女たちなら間違いなくこの地理を把握している筈。

二人して驚愕している姿を無視し、私は叫んだ。

『風呂場はどこにあるんだ!!』

静かに玉座に座り紅茶を楽しんでいる私、レミリア・スカーレット。隣には、私の自慢の従者である十六夜咲夜が不動の体勢で虚空を見つめている。

この時間は、私の時間の前哨戦みたいなもの。夜の王である私が昼に起きている道理は無い。

……因みに夜行性ではないわよ。ただ、生活リズムが普通の奴らと反転してるだけだから。

『…………さて、今日は何をしようかしら』

こんなナリだけど、私は五百を超える吸血鬼だ。

人間の平均寿命の六倍以上生きているのだ。私にとっての一日は、いかに楽しく過ごせるかが一番重要なのだ。

外はもう少しで眠りに就く。それは同時に、外でやることが制限された瞬間でもある。

反転した世界観に介入するのもされるのも、結構辛いものだ。

私が昼に外に出たらキツイのと一緒に、夜に寝るのが常識な人間とかが夜に起きて何かするのは一緒に辛さがある。

そんな中で楽しむのはお互い難しいだろう。私は楽しいことがしたいのだから、楽しくなければ意味がない。

だから、やることといったら館の住人を交えての何かぐらいなのだ。それを私の年へ至るまでとだいたい同じの数で数えるだけで、常人なら気が滅入るのではなからうか。

『お嬢様、今日は彼がここへ来ていますわ』

『エミヤシロウが？』

それはいい。

私にとって間違いなく彼は人生の刺激となる。

最初は、変な奴だと思った。

まず、周囲から畏怖されているこの館へアルバイトを志願する時点で変わり者。

そして、彼がその日起こった図書館騒動で使った槍。パチュリー曰くその槍には、魔力そのものの構成を分解し、無に帰す力があると内包する魔力も、私の槍には及ばないがかなりのレベルだった。

そして、後から聞いた話だが、彼が使ったその槍は過去に英雄として名を遺した存在が用いた槍の模造品らしい。偽物であるの性能なら、本物はどうなのか。そう考えるだけでワクワクしてしまう。

八雲紫が何を企んでいるかわからないが、話に乗って正解だったと思う。

人間の中では強い部類に入る霧雨魔理沙を初見で圧倒したその強さに、私は闘争本能の昂ぶりを覚えたが、パチュリーに止められた。彼女も彼を研究したいの言っていたし、私もせっかく使えそうな

バイトを失うのは惜しい。

でも、彼で遊ぶ分には構わないわよね、別に。

『そうか、じゃあ咲夜、彼を呼んできて頂戴——』

隣の従者に彼を連れてくる命を出した瞬間、乱暴な音と共に眼前の扉が開いた。

突然の事態に私達は驚愕しつつも、そこにいるのが誰かを冷静に見つめる。

——そこには、何やら疲れた様子でパチュリーを小脇で抱えているエミヤシロウの姿があった。

好都合だ、これで手間が省ける、そんなことを考えていると——

『風呂場はどこにあるんだ!!』

なんて、訳の分からない言葉が放たれた。

私はそんな予想だになかった彼の言葉を脳内で反芻しつつ、こんなことを考えていた。

——ああ、今夜は楽しくなりそうね、変な方向に——

『——というわけなんだが、彼女はいつもこうなのか？』

事のあらましを簡潔に、しかし嫌味を当事者に向けて微妙に織り交ぜながら説明した。

レミリアはどこか納得した風に、咲夜は私と同じ心境なのか微妙に苦笑しており、当の本人はむくれっ面で此方を終始睨んでいた。

『そうね。パチュリーは風呂嫌いなよ、まるで猫みたい』

『嫌いな訳じゃないわ、単に必要最低限のことを無理にやる必要はないってことよ』

『いや、二十四時間のうち風呂の時間も割けないスケジュールは在り得んだろう』

彼女の一日が如何なるものかは知らないが、予想の範囲内としてあの図書館に居るのは間違いない。

そこから推測するに、彼女は運動も苦手だろう。この世界の魔法使いが基本どのような行動理念を持っているかは知らないが、それ以前に風呂にすら入る気がないというのは、彼女自身が相当なものぐさなだけとは思えない。

風呂が嫌いではないと言っているが、喻え運動しないにしても一週間も放置は最早必要最低限の域を超えている。

『んで、風呂の場所なんか聞いてなにをするの？』

『勿論、彼女を風呂に突っ込む』

当然、という表情の私を見て、パチュリーが声を荒げる。

『ちよつと、なにいきなり話進めてるわけ！？』

『君は自分が女性だという認識がまるで足りていない。別に洒落つ気を求めている訳ではない、だが風呂にくらい毎日入るのは常識だろう。ではなくばせめて二日に一回には入れ』

『そつちの常識を押し付けしないで頂戴』

『ほう、私だけの常識だと、君はそう思っているのか』

そうなのか？とい第三者である二人に目配せをする。

『お嬢様は吸血鬼という種族の特性もあり、水に対して苦手意識は持ち合わせておりますが、それはあくまで流水という概念の水のみに効果があるのであり、風呂に関してはバスタブがありますので問題ありません。確かに髪を洗う際にはシャワーなりを使わざるを得ませんが、小規模のものであればうちのお嬢様程の格があれば、容易に耐えきることが出来ましょう』

『……まあ、咲夜の話は半分合っではいるが、どうにも私に対しての美意識があるのか、現実が見えていない部分がある。エミヤシロウは吸血鬼の流水に対する概念がどれほど影響を及ぼすか知らないだろうが、あれは中々にキツイぞ。水滴が冷たすぎるとその一滴がまるで針が落ちたような感覚に襲われるのと何ら変わらん。それを一身に受けるというのは、常人ならショック死ないしは廃人化だろうよ』

想像したくはない痛みだが、彼女が言う概念は、恐らく外のものと同一だろう。

儀式や積み重ねた歴史、語り継がれる伝承などにより付与された概念というのは、決して莫迦には出来ないものだ。

世界が記録した、モノのカタチを構成するにあたっての絶対的な意味。

吸血種なら、牙を生やし血を吸う怪物、という風に、その存在を証明する為に必要な条件をそう呼んでも構わない。

過去から継続して継がれていった、歴史の重圧。それがより年季を持ち、世界が”そうである、そうでなくてはならない”と記録していく程に、それは絶対的な意味を持ち、力となると同時に枷となる。

ifという樹形図の根幹に位置し、覆ることのない本質的な意味。それを変えるには、世界のバランスを覆すのと同等の奇跡を成し遂げないといけない。

矛盾すら超越する、それこそ聖杯ほどの魔力の奔流を受け止めるほどの――

――ふと、思考を切り替える。

私をここに呼び寄せた存在。ソイツは？ちよつと、貴方の存在を弄ただけよ。貴方は最早守護者ではないわ？、と言った。

それはつまり、ソイツが私の矛盾を矯正したと考えても差支えない筈。

そんな豪快なことを、まるでおにぎり温めましたばりのあつさり感で言いやがったソイツを、改めて何者なんだと思わずにはいられなかった。

『――つと、そんなことはどうでもいいわね。咲夜だって私の風呂と同じく済ませることが多いし、美鈴だって門番の交代時間に入るよう命じているし、小悪魔の二人は仲良しこよしで一緒の湯浴み。結論から言えば、真面目に風呂入ってないのパチュリーだけよ』

まるで真犯人を追い詰めた探偵みたいに人差し指をパチュリーに突きつける。

因みにパチュリーは逃げる可能性を考慮して、未だに抱えたままにしている。下手に縛ってその場に放置すれば、魔法が何かで逃げるだろうし。

まあなにが言いたいのかというと——そんな二人の絵面はシュール極まりないものだ、ということだ。

そして本人は、苦虫を噛み潰した顔で私とレミリアを交互に睨みつける。

一方は裏切りによる恨みの籠ったもの、もう一方は——多分色々籠められすぎて崩壊しかねんもの。

どちらにしろ、こあやリトルがこの場にいない以上彼女の味方はいない。その時点で彼女の抵抗は虚しいだけに終わってしまう。

『それにしても、どうやって風呂に入らせる気？パチュリーは結構頑固者よ、結構前咲夜や小悪魔が力づくで入れようとしたけど、その普段生かさない謎のバイタリティーによって、一定の時期には入ってもらって制約で踏みとどまった訳なんだけど』

『……………因みに、いくらだ』

『一ヶ月』

『長すぎだ!!』

このミニマム吸血鬼、いくら長く生きているとはいえ、時間の相対性に狂いが生じすぎだろうに！

あまりの常識のなさに、常識という言葉がゲシュタルト崩壊しそう

だ。

『……………因みに入らせる方法だが、こうした前情報を元に導き出した結論は——』

ごくっ、と隣から音がしたのを確認してから、私は静かに告げた。

『——私も彼女の風呂に同伴し、終始監視することにした』

本日、二度目の世界の氷結。

当然だろう、かく言う私もとんでもないことを口にしたと思っている。

だが、言ってしまった以上、流れに身を任せる他はない。

『——っ！！何てこと言ってるのよ、このっ、変態！！』

『その変態と言わしめる過程を作ったのはどこの誰かね？君が誰かの指示を素直に従っていれば、こんな結果にはならなかっただろうよ』

『だから、私は咲夜の言われた通り一ヶ月以内には——』

『咲夜よ、君の素直な意見を聞きたい。君はパチュリーに宣言したそれは、幾重にも重ねた妥協から生まれた産物ではないのかね？』

言い訳をあつさり遮り、救いを絶望へ返る架け橋を繋いだ。

『ええ、それはもう。パチュリー様にはそれこそ毎日入ってもらいたいものですわ。メイド長として、この紅魔館に汚点があつてはいけませんもの。私の仕事が増える要因の一端には、いち早く消えてもらいたいものですわね』

につこりと、邪悪な背景で語るそれは、猛毒を超えた呪い。

彼女も、ストレスが溜まっていたのだろう。ここぞとばかりに放たれた容赦の無い棘は、かのシスターと酒飲み仲間となれるのではと疑うくらいに鋭利だった。

横目で脇の存在を一瞥すると、まさに絶望という言葉が似合う少女の顔があった。

恐らく唯一の良心、と一番彼女に希望を見い出していたに違いない。それが打ち砕かれたとなると、彼女には足掻く気力なんてないだろう。

そうなれば、こっちとしても楽なことこの上ない。

『だ、だからってそんな関係でもない男と女が、一緒に風呂入るなんて………破廉恥よ！』

破廉恥ときたか、また地味に使わない言葉を。

この世界では言動すら過去の存在の流用なのか。

『そのことなら安心したまえ、一週間風呂に入っていない女性に欲情するような、特殊な性癖は持ち合わせていない』

『~~~~~!!』

物凄く何か言いたげにしているが、自分にも非があるのを多少は分かっているのか、全身を震わせるだけに留まっている。

『私としても女性の風呂に同伴だなんて非常識、かつ不本意なことはしたくない。だが、これから君が風呂に入るといふ行為に対して金輪際逃げの体勢を取らないと誓うなら——』

『……………誓うなら?』

『浴場と着替え場を隔てて見張りをする程度で勘弁してやる』

『—————』

『因みに逃げたら次は問答無用で一緒に入るからそのつもりで返答したまえよ』

その数で牢屋を作れるのではと思うくらいに釘を刺しておく。彼女は頭が良い。僅かにでも逃げ道を残そうものなら、いくらでも論破される恐れがある。

故に、傍から見れば残酷な仕打ちに見える一連の行動も、彼女を想つてのことだと理解してもらえれば幸いだ。

『……………分かったわよ。けど、どうしても貴方も一緒じゃないとダメ?』

涙目の上目遣いによる訴えに、一瞬良心が痛むも、ぐっと堪える。本当、ある程度着飾るだけで、周囲の女子が羨む器量を持っている

のに、勿体ない。

まあ、彼女にとっては魔法や知識を習得する行為以外は不要の機能なのだろうけど、それではあまりに個としての存在意義が不明瞭だ。ヒトとして生きている以上、機械が出来ることをする道理はない。機械が繁栄していないこの世界では、彼女の行為は決して無駄ではない。寧ろ無駄な部分がない。

けど——だからといって、機械的な生き方を容認は出来ない。

ひとつの命には、相応の価値が存在する。

比べることの出来ない価値ではあるが、それは他の命とは異なる“可能性”という確率事象を持っているからだ。

才能、努力。それはあらゆる可能性の始点に立つことで初めて理解できるものであり、行為を実行することで初めて意味が付加される。才能があることを理解できるのは、その行為に対して執着した者だけ。努力はその付属品に過ぎない。

そこで才能がなければ凡人。実に単純だ。

パチュリー・ノーレッジにはその脳にあらゆる知識を収容する才能がある。

しかし、その行為に執着したあまりに、彼女は肉体行動に対して常人より意味を求めなくなった。

毎日が記録の人生。その在り方を機械的と思わずなんと思えと？

人間という存在に固執し続けた私が、そんな彼女の在り方に納得できる筈もない。

こんなもの自己満足でしかなく、彼女にとっては迷惑なこともかもしれない。

だが、それでも——せめてヒトとして、ヒトらしい生き甲斐を見つけてほしい。そう願わずにはいられないのだ。

『………… ああ。君は土壇場で力を発揮するらしいと先ほどの発言で理解したからな、男手が無ければ君を押さえるのは難しいと判断した』

だから、お節介と言われようと私は彼女という存在に固執する。別に毎日というわけではないが、漠然とした“魔法使いの少女”認識の仕方ではなく、“パチュリー・ノーレッジ”という個人として認識し、理解していきたい。そして、彼女の助けとなることなら出来る範囲で助力してやりたい。それだけだ。

『だから、諦めてくれ』

『……………』

沈黙が辺りを包む。

仕方のないことだろう。喩え彼女に問題があるとは言え、倫理や道徳を天秤にかけているのだ。理解はできても、納得はしないだろう。

『…………… いいわよ。どうせなにを言ったところで聞かないだろうし、こんな空気で居続けるくらいなら、さっくりと終わらせた方が効率的だわ』

絞り出すように、静かにそう答えた。彼女の中で幾度となく葛藤が押し寄せたのは明白だが、無理矢理にでも踏ん切りをつけてくれたようだ。

『そうか。では行こうか』

ゆつくりとずっと抱えていたパチュリーを降ろし、私の少し前に置く。

殿を務めれば、何があるかと瞬時に対応できる。これ以上彼女を疑いたくはないが、これだけは成し遂げてやらないと、彼女の為にもならない。

『私も案内しますわ。お嬢様、よろしいでしょうか』

『ああ、構わないよ。なら折角だ、咲夜も風呂に入ればいいんじゃないか？』

自分に矛が向いていないからか、楽しそうにそんなイジメめいたことを口にする。

……あれか、ガキ大将か。楽しければそれでいいとか考えている子供めいたあれか。

ふと、彼女と同じくらいの子供——それこそミステリアやルーミア、諏訪子のような——と一緒に遊んでいる姿を想像する。
——似合いすぎてコメントしづらい。周りの子供達は、そんな唯我独尊な少女に振り回されている姿が簡単に想像できる。

『全力で遠慮させていただきますわ』

当然の反応が返ってくる。

好き好んで男が近くにいた状況で風呂に入ろうとは思わない。
私だって出来るなら遠慮したい。風呂は落ちて入るものだ。

『では、どうぞ。案内しますわ』

咲夜に導かれ、私達は風呂場へと向かった。

脱衣所にひとり、私はいる。

浴場と脱衣所を隔てた監視なのに、ここで覗かれたら隔てた意味がないだろうという私の意見に、シロウは納得したのか、今は廊下で待機している。

はぁ、と溜息と吐きつつも、私は衣服を脱いでいく。
音を立てる者が私しかない為、布の擦れる音だけが辺りを支配する。

何とも言い難い淫猥な情景だが、それを観察するものはいない。いたら困る。

普段から被っているお気に入りのキャップも、何もかも全て脱ぎ捨て、私はバスローブを産まれたままの姿に包ませる。

……正直、これからが問題だ。

これをしてはいけないことは、何も始まらない。

妙な緊張感を胸に、私は意を決して声を発する。

『もういいわよ』

静かに、しかし必死の思いを内包した声を脱衣所に響かせると、何の躊躇いもなく彼は入ってきた。

『どうやら、やることは済ませたようだな。いやいや、ドアを開けた瞬間に間髪入れず魔法でも放たれるかとヒヤヒヤしていたものだ』

なんてことを、開口一番に言い出した。

なんかもう、もっと違うこと言いそうなものじゃないか？

女の裸に等しい姿を見ている癖に、そんな内容の欠片も出てこない彼にイラつきながらも、私は踵を返し浴場へと向かう。

『ああそれと、中に入ったらそれは取りたまえよ。不衛生だからな』

『分かってるわよ！！』

二度目の彼の予想とかけ離れた言葉に、思わず声を荒げてしまう。

……彼は悪くないけど、それでも彼は悪い。

矛盾なんて知ったことか。こんな感情、私の知識では知らない――

――！！

ガチャリ、と浴場を隔てる扉を開き、閉じる。

微かな果実臭と、大量の水蒸気が顔いっぱいに張り付く。

咲夜の趣向かは知らないけど、今日は入浴剤がトロピカルなものらしい。

他の家の風呂のことは知らないけど、ここのはかなりでかいと思う。計測はしていないけど、多分一般的な大きさの最低十倍はあるんじゃないかってくらい。

足を滑らせないようにゆっくり歩き、包んでいたバスローブを風呂の角に置き、そのままシャワーで汗を流す。

運動はしないけど、流石に一週間も放置すれば蓄積されるものだ。

……前まで嫌々入っていたから考えることなんてしなかったけど、冷静に浴びてみればこれがなかなか不思議な気分になる。

肉体に直に当たる熱は、少なくとも不快ではなく、胎児を包み込む母体のような温かさがある。

認識というものは、これほどまでに刺激を一新するものなのか。

知識として認識するのと、実体験による意味の付加をするのではまるで違う。

いや、知ってはいた。けど、ここまで革命的な違いがあるとは……
…侮っていた。

ふう、と一息吐きシャワーノズルを閉じる。

読書中にする伸びと同じくらいの快楽を終え、次は頭を洗う。

シャンプーから発せられる甘い匂いを満喫しつつ、作業に没頭する。汚れが溜まっていたせいか、まるで泡が立たない。

仕方ないので二度、三度と行為を繰り返す。すると、これでもかと言わんばかりの泡で髪が埋め尽くされた。

なんだか、楽しい。泡と髪を用いて一人遊びしているだけなのに、変な話だ。

シャワーで泡を流し、リンスを満遍なく浸透させて、流す。

いつもは重いと感じる髪が、軽くなったような錯覚を覚える。

本当に錯覚でしか無いんだろうけど、私がそう認識したと言う事実が、錯覚を凌駕している。

風呂に入っているだけなのに、何故こんなにも不思議が開示されていくんだろう。

書物を漁ることで満たされる知識欲とは違う。

私にはなかった、知識の在り方。

本を読めば、誰かに聞けば、満たされる。

肉体的な行動なんて、最低限のことがあれば十分。

一生がこんな感じで終わっても、それでもいいと思っていた。

けど、ダメだ。

こんな些細なことでも、知ってしまえば甘美な果実になる。
口に入れなければ味を知らずに済んだ。それまでは、美味な果実だ
という認識でしかなかったけど。

記録が記憶に変化したことで、世界が色を変えた。

こんな知識もあるんだと、喜びを感じずにはいられない。

……物凄く当たり前なことなんだろうけど、それでも。

私にとっては、未知への開拓なんだ。

異世界から来た外来人も、こんな気持ちだったに違いない。

洗顔を手の上で泡立て、包み込ませる。

これだってそうだ。

このふわっとした形容し難い気持ちよさ。一連の動作でしかなかった
た行いが、ひとつひとつ意味を持っていく。

マイナスにしか働いてなかったベクトルが、真逆に反転してしまっ
ている。

思わず自嘲の笑みを浮かべる。

皮肉にも、知識を求めようと躍起にいた自分が、求めたいことを遠
ざけていたのだ。

凝り固まった意識が、私の時間を止めていた。

それを回す歯車チャンスを与えようとした皆を、私は否定し続けていた。
本当、愚かだ。

今回だってそうだ。

エミヤシロウが強硬手段に出なかったら、私は今まで通りの考え方を
貫いていたに違いない。

そういつた点では、彼には感謝してもし切れない。もちろん小悪魔や咲夜にも感謝の念は忘れない。

けど——それとさっきの態度は別よ。

乙女の身体を見て何の反応も示さないって、どんな神経してるのよ！
だいたい、薄汚れた女には欲情しないって、デリカシーってものは無いのかしら。

確かに、私にも非があるのは認めるけど——もっと言い方があったんじゃないかと怒らずにはいられない。

顔の泡を洗い流した後、後ろを振り返る。

そこには扉一枚隔てて彼の漠然としたシルエットが映し出されている。

微動だにしないその姿勢で、彼は今何を考えているのだろう。

——って、なんでそんなこと考える必要があるのか。

デリカシーが無いと憤慨しそうになっていた相手だけど、次の瞬間にはもう冷め切っている。

どうしてだろう。あの言葉は許せない、のに——

『訳が分からない………こんなの、知らない』

胸の中でつかえている何かを無視したくて、私は乱暴に身体を洗い出した。

彼女がこの想いに気づくのは、まだ先である。

あれからいくら経っただろうか。

私は扉に背を向けたただ時間の経過を待つ。

女性の風呂は、買い物よりは短いとはいえ、かなり長いことで有名だ。

男は短髪が多いのもあるし、豪快な洗い方をすることも多いからか、意外と風呂に長く入る若者は少ない。中年あたりは、身体は洗っても浴槽に浸かるのが長い傾向がある。

しかし女性は、髪や身体を洗う行為も、浴槽に浸かるのも長い。

丁寧なのだ。自分の身体をいたわっている。美しくあろうと本質では望んでいる。

今のパチュリーだってそうだ。てつきり鴉の行水なんてオチなので、はと警戒していたのだが——例に漏れず、彼女も女性だったという事だ。

私の努力は無駄ではなかったことに喜びを感じつつも、そんな彼女の長風呂に暇を持て余している自分もいる。

ジレンマとなるのは私が出した結果なのだから構わない。

ただ——この空間に居続けるのは精神衛生上よろしくないのだ。

薄い扉一枚隔てた先には、一糸纏わぬ女性が存在する楽園があるのだ。かの光の御子なら喜び勇んで突撃しかねん。

私にその気はないとはいえ、この状況下では不審人物以外の何物でもない。

事情を知らない者がこの場に現れでもしたら——

『あれ………お父様？』

声の先には、私と父と呼び慕うフランドール・スカーレットがポカんとした表情でこちらを見つめている。

その手には風呂道具一式を抱えており、今から風呂に入るのだな、と漠然と理解した。

けど、私の頭の中は全く別のことを考えていた。

——終わった。

この状況では弁明の余地も与えられないだろうと、過去の経験が告げている。

こうなる可能性を考えていなかった訳ではない。だが——純真無垢な彼女が、信じている存在を懸念対象として認識してしまうのは、裏切りと同義だ。

咲夜にでも伝えておけばよかった。パチュリーが入っている間は誰も入らせないように、と。

後悔の念でいっぱいになりながら、罵倒の言葉を待っていた、が——

『お姉様の言った通りだ、やっぱりお風呂入ろうとしてたんだね！』

『——は？』

しかし出てきた言葉は、喜びを孕んだ言葉に、その原因を作った者の愛称だった。

……レミリアよ、ワザとフランを風呂に導いたな。私と鉢合わせさせる為に——！！

『一緒にいろ、お父様』

そう言うが否や、自らの衣服を投げ捨てるかの如き速さで脱ぎ去った。

そこには、未熟ながらも女性として発達した幼い肢体が、その姿を露わにしている。

本人は至って気にした様子はない。私を男としてではなく、父親と見ているからなのか。

どちらにせよ、こっちは非常に目のやり場に困る。

『ちよつ、前を隠せフラン！』

『ほらほら、お父様だって脱ぎなよ』

私の声など微塵も気にせず、服を脱がせようとする。

しかし、外套はともかく鎧はそう簡単にはいかない。手間取っている間に説得を――

『あれ、取れないなー。えいつ』

軽い口調で掛け声を発したと同時に、無機質で、それでいて破壊的な音が自分の胸元辺りから聞こえた。

『あ、取れた』

恐る恐る音の方向へと視界を当てると、そこには私の鎧の半分を持ち、それが外れたことに喜んでいいるフランがいた。

正直、声も出ない。

吸血鬼の力の強さはレミリアに殴られたことで体感していたが、まさか英霊の鎧を容易く砕いてしまうなんて、想像もしたくなかった。確かに、この鎧自体特別なものではないが、英霊となったことでこの鎧には英雄の歴史が多少は付加されている。

なんの特殊効果もないが、それでも握力ひとつで簡単に壊れるものでもない。喻え相手が化け物クラスの英霊の攻撃だったとしてもだ。

フラン……恐ろしい子。

私はもう、考えるのをやめた。

考えても無駄なのだ。この異質な世界で、私の常識は枯葉程度の軽さしか持ち合わせていないのだから。

『あ————もうっ、さっきからうるさいわよ！』

後ろから声がする。

私は漠然と、その正体が誰かを理解している。

『…………貴方、妹様となにしてんの』

ごもつともな質問に、私は答えない。

言っても信用してくれない。こういう時、男の言葉なんてそこらの石ころより価値がない。

だったら、何も言わない方が無駄に疲れなくて済むじゃないか。

『えと、私はお父様と一緒に風呂入ろうとしただけだよ？』

簡潔に、事実のみをフランは伝える。

潔白で、嘘も濁りも無い答え。

しかし、そんな中で私を異物として睨んでいる存在がひとり。

『…………父親の真似事なら、そこまでしないでいいんじゃないの？』

それはどうかは知らないが、少なくとも私が提案したのではなく、レミリアの差し金だ。

——と言っても、私がこれからどうなるかは変わらないのだろうけど。

『——まあいいわ。取り敢えずなんかムカつくから殴らせなさい』

『——って、なんだその感情的な理由は！？』

流石の私も、そんな荒唐無稽な理由で殴られる気はないと声を荒げる。

『本当は貴方に魔法というものがどんなものか、その身を以て実践してあげても良かったんだけど、こんな狭いところじゃ危ないから、特別に殴りで勘弁してあげる。ああそうそう、あれから私魔術の勉強したわよ。』

だから強化を試したいの。

試させてくれるよね？

試させてくれないなんていわないよね？

貴方は実験台になるべきよ。

試させて？

試させてくれるでしょ？

試させてくれないなら……いや、答えに意味なんかないわね。だって——』

——結局、ぶっ飛ばすんだもの。

視界が、目まぐるしく回転する。

いや、回転しているのは私だ。けれど、そんなことに意味なんかない。

重要なのは、私が想像したような結末に、今この瞬間の映像が一ミ

りのズレもなかったということだった。

いやはや——何故私はこういう役回りなのだか。

永久に出ない結論を抱えたまま、私の意識はブラックアウトした。

紅魔騒動（湯煙編）（後書き）

風呂場には、壁にめり込んだ死に体がひとつと、それを造り上げた者、訳もわからずその二人を交互に見つめるものがいた。

『ねえ、どうしてお父様があんな風になってるの？』

『……知らないわよっ』

『だって、パチエが殴ったんじゃないん』

『——っ、それでもっ、知らない！』

フン、とそっぽを向いてそれ以降何も口に出さなくなった。仕方ないのでフランは、どうしようかと思案する。

『そうだ！お父様をお風呂に入れば目が覚めるかな？』

ぴくりとも動かない父と継承する青年への配慮をする。

当たり前だが、彼女は未だに全裸である。対してパチュリーは今現在着替え中。床には真つ二つの鎧の残骸。

あそこでフランドールが鎧を壊していなければ、こんな惨事にはならなかっただろう。

いや、あったとしても、別の部位を殴っていただろうし、結果は不変のものだっただろう。

『—— ああ、いいかもね。いつそ重石でも括り付けて浴槽に沈めればいいんじゃない？』

なんてことを言いだしたが、結局はなににもないままフランは風呂に入り、パチエは死に体を無視して風呂場から去った。

因みに、彼が次に目を覚ましたのはフランが風呂から上がってきた時で、そのせいで彼女に二度風呂でもいいから入ろうとせがまれ、されるがままとなっていたのはまた別の話である。

幼鬼の思惑、従者の決意（前書き）

放置に放置で申し訳ありません。今回内容がつまらない気がして、どうにかならないかと修正を繰り返して、結果良くはならなかった。悲しい。

後書きで、大事に見えてそうでもない報告があります。

幼鬼の思惑、従者の決意

私とフランは風呂から上がり、共に着替えを終わらせてレミリア達の所へと戻った。

『あら、なにその恰好？』

第一声でそう言われるのも無理なかった。

フランは愛用の薄ピンクのネグリジェを着用しているので気にしてはいないようだが、問題は私にある。

外套は畳んだ状態で抱えられており、鎧も存在しない。

それどころか、私が着ていたのは飾り気の無い紺色の浴衣で姿を現したのだ。

その姿の変わり様を見れば、誰だって問いただしたくなるのも頷ける。

頷けるのだが——彼女の思惑通りに踊らされたというのは正直釈然としない。

『君の企みが成功した結果だよ。喜びたまえ』

『あら、それは良かったわね、貴方が。眼福だったでしょう？』

嫌味と皮肉が交差する。

眼福もなにも、私にその気が一切無いにも関わらずやられてもイジメでしかない。

というか、イジメなのは分かっているが。

あのニヤニヤした表情が憎たらしい。

『——これ以上言っても聞かないだろうから話を変えよう。私は

ここに仕事をしに来たわけだ』

『ええそうね。立派にパチュリーを女の子らしくしてあげたじゃない』

因みにこの場にパチュリーはいない。

図書館に帰ったのは明白だ。

だって、彼女がここにいる理由はない。

私によって割かれた時間を、逸早く取り戻したいのだろうか。

『あれ位は彼女が当然すべきことであり、私はそれを無理矢理にでも後押ししただけだ』

『その当然を他人が干渉するつてのは、簡単なことじゃないのよ。普通、我が身の世間体を大事にするものよ』

確かに、私のとった行動は一步間違えれば強制猥褻罪に等しい扱いを受けるものだ。

第三者からすれば、どんな理由があるにせよ、男女が風呂を共にした——語弊は数知れず——という上辺の事実が根強く頭の中に残ってしまい、他の部分はどうでもいいと思ってしまう。

都合のいい解釈とは、大多数の認識が同一化したからこそ成すものだ。

そしてその認識が確率的に同一化する可能性が大きい所、それが上辺の事実。

表面に出された圧倒的存在感は、その他をその大きさに隠してしまふものなのだ。

『……………で、結局君は何が言いたいんだ？』

『アンタのやったことが、喻えパチュリーに対して一生残る心の傷

を残しかねない行動、かつ第三者からすれば非人道的で最低極まりない行為だったとしても、大局的に見れば正しかったってことよ』

『褒めてないな』

『勿論』

あからさまに心の傷辺りを強調していたのが丸わかりだ。

というか、その他にも棘のある言動が明らかに顔を覗かせていたし。

『……………この話はもういいだろう。今度は、この館だからこそその仕事の話しよう』

『まあいいわ。そういえば、アンタって家事できるの？』

『そうだな、家事は趣味の範疇と言っても差支えない程度にはやっている。主に料理関連だな』

私が衛宮士郎であった時代、周囲には二人も料理が得意な女性がい

た。
和が得意な者、中華が得意な者。その時の私では、彼女達の技量には及ばなかった。

特化した個性とはいえ、料理に対して幼稚なプライドを持ち合わせていた私にとって、料理での敗北は屈辱そのものだった。

だがそれゆえに、彼女達を目標とし、乗り越えようと必死になった。そのお蔭で、伸び悩んでいた料理の腕も着実に成長していった。

それだけではなく、ルヴィアの下で執事修行をした甲斐もあり、サーヴァントとして召喚された頃にも、摩耗せずその記憶、感覚が残っていた。

思い返せば、こうした努力すら、私の人生では無意味なものとして切り捨てたのだった。

不器用だからと言い訳し、ひとつの道しか選ばうとしなかった。

いや、その他の道を選ぶという選択肢がなかったのだ。

私の真つ当な人生よりも、誰かを救わないといけないという過去に刻まれた強迫観念が勝ってしまったのだ。

そうして選んだ道を後悔し、過去の自分の存在を否定することばかりを考えて――――― 本当に、言葉に出来ない程の愚行だ。

衛宮士郎と英霊エミヤは全く別の存在だと自分で言っていた癖に、自分だったものに対して矛盾した八つ当たりをした。

最早他人をむしゃくしゃしたから襲ったのと同じこと。私が正義の味方として切り捨てた悪と何も変わらない行動。

なにもかも諦めていたんだ。

希望がないから自暴自棄になり、鏡を見てはそこに移った虚像を殴りつける。

やっていることは子供以下だ。

答えを得ても、そのまま消える筈だった私。

けれど、その先にあつた予想外の展開が、希望だった。

苦しかったこと、辛かったこと、全てが無駄にならずに済む。

繰り返される運命の輪から逃れたのだという事実を、再び噛み締める。

今度こそ、後悔の無い道を辿りたい。

喻え私自身、世界から悪と呼ばれる存在に成り下がろうとも、私自身が本当に正しいと思えることをやりたい。

そして、本当に後悔のない結末を迎えたい。

かつて正義の味方を目指そうと意気込んでいた男とは思えない思考

の変容。

だが、正義の心が消えた訳ではない。

私は、私が本当に救いたいと思った者を救いたい。

厳選的な正義など、偽善でしかないのかもしれない。

でも、私は凜の意思も、私の意志も無下にする気は無い。

中途半端かもしれない。ひとつの道を進んで失敗した癖にと思われ
るかもしれない。

それでも——今度こそ、やってて良かったと、最期に笑えるよう
な人生にしたいんだ。

『——あー、もしもーし。なに人が話してる時にばーっとし
ちゃってんの』

レミリアの呆れた声が、私の思考を振り解く。

案の定、目の前には恥ずかしい奴を見るような目線を此方へと向け
ているレミリアがいた。

『きつとお父様は眠いんだよ』

『いや、そうではないのだが——すまない、心配かけたな』

的外れな意見ではあったが、彼女の言葉からは私を心配する優しさ
が覗ける。

そんな心遣いに報いるべく、仕事を頑張ろうと内心奮起した。

『そういえばアンタは執事経験があるって言ってたわね。それに準
じて、家事全般のスキルはあるって考えていいのかしら？』

『過度に期待されるのも困るが、齧った程度の有象無象に負ける気
はしないな』

『そう』

そう短く答えると、今度はレミリアが何か考える仕草をし始める。どうでもいいことだが、この短い時間の中、フランに肩車を懇願されたので要望に応えていたりしていた。

『ねえ、シロウ——ってなにやってんの』

『見たとおりだが』

『見たとおりだよー』

『……まあいいわ。前に咲夜と勝負しなかったって話してたでしょ？魔理沙のせいで有耶無耶になったけど。それを今回実行するわ』

『——それは仕事と言うのか？』

『実力を知らない奴にここの仕事を任せる気は無いわ。實力不相応のことを任せて失敗でもしたら、私の責任だからね』

全くの正論だ。

他人で遊ぶことばかり考えているのではないのだな、と彼女への認識を改める。

『それはいいが、咲夜はいいのか？』

この部屋に入ってから、まるで空気のように言葉を発せず、動きもしなかった咲夜を一瞥する。

彼女へ意識を向けてようやく、此方を向くという行動を示した。

『構いませんわ。お嬢様がそれを望むのであれば』

『そう、か』

流石メイド長と言うべきか、機械的にレミリアの言葉を容認した。主従関係としてはとても理想的ではあるが、咲夜の意志が否定されていないのか不安にもなる。

咲夜からすれば、私の心配は冒涇でしかないのだろう。表情を見れば、嫌々やっている風には見えないのが分かる。

けどどうしても心配になってしまふのは、ある種の意識改革による弊害なのだろうか。

『そうとなれば、さっそく準備しましょう。とは言っても、掃除や洗濯は咲夜が朝のうちにやっちゃったようだし、実質勝負できるのは料理くらいねえ』

『私、お父様の作ったご飯食べたいよ』

頭上ではしゃいでいるフ란の期待は裏切れない。

せめて全力で、私の料理を振る舞ってやるとしようか――

『さあて、皆に集まってもらった訳だけど、今から咲夜とシロウで料理対決するから味見役よろしく』

『いや、いきなり呼んだと思ったたらいきなりすぎるわよ』

レミリアが簡潔に目的を説明し、パチュリーが冷静な突っ込みをする。

私達は今、無駄に広いダイニングルームにいる。

あれからレミリアは、パチュリー、こあ、リトル、美鈴達全員を強制的にここへ引っ張ってきて、今に至っている。

小悪魔達は困惑しつつも状況を受け入れており、美鈴はこれから起こる未来に目を輝かせている。

ある意味、空気が読めていないのはパチュリーのみという事である。

『まあまあ、お嬢様が唐突なのはいつものことですし……………』

こあが納得していないパチュリーをたしなめると、諦めたのか椅子に深く腰掛け直す。

まあ、彼女の気持ちもわからないわけでもない。

何せ私から解放されたかと思うと、次はレミリアにより振り回されているのだ。反抗のひとつやふたつ、したくもなる。

喻えそれが、暖簾を押すに等しい行為だったとしても、だ。

『シロウさんって料理出来たんですね、すごいです。私は練習とかそんな出来ないから、単純なものしか出来なくて……………』

この中で一番楽しみにしてるのであろう美鈴。

彼女のことはよく知らないが、その女性らしく大人びた体付きからは想像出来ない子供みたいなはしゃぎ様を見て、自然と笑みが零れてしまう。

『料理というのは、喜ばせる為にやるものだ。対象が自分であろうと他人であろうと、美味しいものを食べさせてやりたいと言う思い

があれば、自然と身に付くさ』

門番だなんて荒事を任されてはいるけど、彼女だって女だ。女性的な行為に憧れを持つのは至極当然の事。いつから門番の仕事をしているかは知らないが、少なくとも料理に熱中できる境遇にはなかったのだろう。

料理は回数を重ねれば自然と身に付くものだ。意欲と時間さえあれば、基本どうにかなる。

稀に天性の才能の無さを持つ者もいるが、それは除外する。あれは努力という累乗型ではどうにもならないから酷さだから……

それだけ告げた後、私は咲夜の隣へ立つ。

隣で整然と佇む彼女だが、瞳の奥には闘志の色が見える。

驕りを持たない主義なのか、はたまた私の実力を警戒しているのか……どちらにせよ、私は十六夜咲夜という存在に少しは目をつけられているらしい。

主以外には興味を示しているのかも分からない無機質な瞳、それに色を付ける素質がある人間だと認められた風で、少しだけ嬉しい。

『——さて、じゃあ初めて頂戴。一部納得がいつてないのもいるけど、それを納得させる料理を、私達の下へ持ってきて頂戴』

『承りましたわ』

『非凡の身でどこまで出来るかは分らんが、せいぜい期待に応えるでしょう』

二者二様の言葉を発し、同じ速さで歩みを始めた。
いざ往かん、我らの厨房へ——

お嬢様の一声と共に、戦いは始まった。

時間制限は課せられていない、指定料理もなし。これはつまり、紅魔館の人間すべての舌に合う料理を提供しろ、というお嬢様の無言の課題だ。

隣を歩く青年はそれに気づいているか定かではないが、彼という人とナリを観察し、漠然とその在り方が見えてきた。

それは、愚直なまでに莫迦正直な人間だということ。

霧雨魔理沙との戦闘時、彼は破魔の紅薔薇という槍を用いて彼女を圧倒した。

パチュリー様曰く、彼は理解した物質を創造する程度の能力を持っているとか。そしてその時に創られた槍は、魔力という概念を通したあらゆるモノの効果をキャンセルするという魔法殺しの槍だったとか。

しかもその槍は、神話の人物が所持していた槍そのものを複製したものらしい。

規格外だ、私の感想はそれだった。

だからこそ気になったのは、何故あの槍を使ったのか、という事。確かに魔法をキャンセルするという分にはうつつつけの武装だと思う。けど、そのレンジ、判定の差が覆る訳ではない。

彼は魔理沙がマスタースパークを発動させたと同時に槍を投擲すること、勝利を納めた。けど、一歩間違えばそれは自分への被害が尋常ではないものとなっていただろう。

あれ程の武器を創れるのだから、彼の隠し玉はあれだけでは無いに決まっている。だからこそ、あの武器を選んだ理由が理解できなかった。

でも時間を空けて再度考えたら、彼のやったことは自身への被害以外を除いてとても能率的だった。

マスタースパークはその威力、範囲は人間が出せる力にしては逸脱したものだ。

一発目の余波だけでも図書館内がとんでもないことになっていたのに、二発目、三発目と同じ風に耐え続けていたならば図書館は壊滅していただろう。

だけど、彼は二発目で彼女の魔力を無効化し、それ以上の被害が広がることはなかった。

もし私達が総動員で彼女に掛かっていれば、暴れるように弾幕を形成し被害があれを超えたかもしれない。

けど、意識を彼一人に集中させたことで威力は一点のみに向けられた。そのお蔭で必要以上の被害を被る結果にはなることはなかった。

彼がそこまで考えてあの行動を取ったのかは分からない。けど、犠牲を自分だけに留めようとした精神は評価できる。と言うよりも何を考えてるのがが読めない。

彼は実力を測るという名目で向かっていったが、私にはそれだけではない気がすると頭の中で否定していた。

私の独断と偏見による見解でしかないが、彼の言葉には常に裏があると考えたほうがいいと思う。

何を考えているか分からない笑みに、皮肉的な台詞を吐いたと思えば裏表のない正直な言葉が出てくることもある。まるで、人格が二つあるみたい。

『ここが厨房か。成程、流石にデカイ館だけあるな』

隣で感心してるのか莫迦にしてるのか分からない感想を述べている青年を横目で観察する。

お嬢様は彼に妙に関心があるようだけど、私には得体の知れなさば

かりが表面に出てきてそんな思いは込み上げてこない。せいぜい珍種の動物を初めて拝んだぐらいだ。

お嬢様は力のある者に対して警戒心を持たなくなる。言っなれば友人に接する感覚だ。

自分が認めた相手には寛容。それがいいところでもあるのかもしれないけど、その都度私はその対象に対して重度の警戒を行ってきた。メイド長として、お嬢様の身の安全を護るのは当然の義務。喻えお嬢様が心を許したとしても相手がそうとは限らない。

お嬢様とて全能ではない。相手が強さを持っているなら、無傷で何事もなく終わらない可能性だってある。

だからこそ、私はこの男を許容しない。少なくとも今は。

でも今は作業に集中しよう。

彼の料理の腕は定かではないが、自分を貶める嘘を吐くような人物ではないことは分かっている。だから自分の腕に多少なり自信があるに違いない。

彼の真意は不明だけど、この状況で毒なぞ盛れば私が黙ってはいない。

それに、彼に料理人としてのプライドがあるなら、そんな真似はしないだろう。

美鈴に投げかけた言葉。あれは嘘偽りの無い、料理に対しての思いが込められた心からの言葉だった。

だから、それだけは信じてもいいかもしれない。

『…………… 負けないわよ』

彼に聞こえないような小さな独白。

二重の想いを込めたそれは、自身へ誓い《のろい》を刻むには充分なものだった。

厨房の中は、無駄の無い世界と化していた。

互いに会話をする事もなく、切る焼く煮込むなどの調理音だけがこの場を彩る要因となっていた。

何故だろう。咲夜から発せられているオーラみたいなものが、話しかけてくんなと言わんばかりの威圧感を放っている。

確かに、彼女にとってこの状況で私は敵として認識されてもおかしくない。

けど、なんとなくだけど、それが理由じゃない気がする。

それが何かは分からないが、問題視するほどではない——と思う。だから、今は目の前の行為に集中しよう——そう思ったとき。

『ねえ、貴方はなんでこんなところにいるの？』

『——は？』

それは、あまりにも意図が読めないもので。

私は間抜けに声を出すしかできなかった。

『私には、貴方の存在自体不明瞭にしか見えないの。目的、行動理念、思想、言動、何もかもがひどく曖昧で、それでいて実直で——矛盾してるようにしか見えない』

私は、手を動かすのを止め咲夜の言葉に集中する。

『こんなところへバイトに来る命知らずかと思えば、その特異性で

紅魔館の視線を集中させるほどの実力者だったり、その先々で見せる動きはまるで共通点が一致しないことばかりで——貴方が何を目的として行動を起こしているのか、それが分からない』

『……………』

『別に教える必要はないけど、もし貴方がお嬢様に害を成す存在なら——私は全力を以て貴方を消す。それだけは言っておくわ』

此方を見ようとせよ、作業をしながら淡々とそう告げる。

——なるほど、そういうことが。

『口で言っても信用されないだろうが、私はそんな理由でここに来たわけではない』

『……………それは私が見極めるわ。お嬢様が認めても、私は認めない』

『いいさ。君の思考は全くもって正しいからな』

それを最後に言葉は途切れ、調理音だけに支配される。

十六夜咲夜という存在にとって、私の存在は膿と同等なんだろう。変貌しない理想的な空間にナニかがひとつ増えるだけで、それは自分の知っている世界ではなくなる。それが、どんなに小さなものであろうと。

それを考えると、申し訳なくなってくる。

だけど、それを理由にここを去るのが正しいことにも思えない。どうにかして、私と言う存在を彼女に認めてもらう。それが最良だろう。

時間はかかるかもしれない。その間彼女にとっては苦痛かもしれない

い。

それでも、こうして出会ったんだから、顔を合わせて不快な思い出をいちいち思い出す関係になるのは望ましくない。

これは私の勝手な持論でしかないが、ずっと辛い思いをするよりはいいと思う。

『——でもまあ、今はお互いのやることに集中しましょう。勿論こっちでも負ける気はないけど、フェアな状況で勝ってこそ意味があるから、貴方も私のことを無視して結構よ』

『了解した』

短く切り替えし、今度こそ私達は会話を終えた。

私を敵視してはいるようだが、まだ警戒程度に留まっているのは嬉しいことだ。

私の周囲には基本、感情的になると暴力と言う形で何倍も上乘せして返す人物が多かった為か、こういった自身をコントロールできる人物は好感を持てる。

それはもう、理不尽な切り替えしを幾度となくされた経験のある者にとって、そんな在り方は涙が出そうになる程。

だからこそ、私は彼女を嫌いにはなれない。嫌いになれる要因が無い。

彼女がいくら私を敵視しようとも、私の中では敵という事実の統一化が成されない。

まるで、衛宮士郎がセイバーを召喚したあの夜、無邪気で愚かに凛に告げた言葉を反芻させたみたいに変わらない想いが私の中にある。

どんどん丸くなっているな、と自分自身理解できる。
摩耗していった心を新たな出会いで打ち直していく。

打ち直したところでどう足掻いても現物そのものには戻れないが、私はそれでいいと思う。

過去の自分を踏み台にするからこそ、高みに往けるのだ。今の自分を潔く捨てれる気概が無ければ、最終的に現状維持を選択してしまうのが人間だから。

けど、底にあるものが同一なら——それは創生ではなく変容だ。ゼロをイチとするのではなく、イチを別のイチとするだけなら元になっているものは変わりようが無い。

遠坂——今の俺は、遠坂の言う幸せの定義に当てはまっているのか？

生涯摩耗することの無かった相棒の姿を脳裏に浮かべつつ、私は作業を再開した。

空腹は最高の調味料。誰が言っただかは知らないが、成るほど言い得て妙だ。

こうした無為な時間でさえ、その代償と思えば安いものではある。しかしヒトというものは、空腹になれば最悪死ぬ。そういった運命を刻まれている為か、空腹を心の底から楽しめなくなっている。吸血鬼である私然りだ。

だから今の私は言うなれば矛盾存在。空腹によるその先の幸福を味わいたいと思うと同時に、一秒でも早くあの二人が作る料理を舌に乗せ、腹に収めたいと考えている。

どっちも本心だというのだから、一層質が悪い。そして呆れてしま

『それにしても、レミイらの嗜好を知っている咲夜と彼を勝負させようだなんて、意地が悪いんじゃない？』

さつきまでの不機嫌は収まったらしく、パチュリーは手元の本へ目を向けながら皮肉を言う。

『そうでもないわよ。だいたい私は勝負と定義付けはしたけど、咲夜自身その真意に気づいてるとは限らないけどね』

『――？』

パチュリーは本からは私へと訝しげな視線を向けたけど、敢えて無視。

こういうことは、最後に種を明かすからこそ面白いものだから。

そんなとき、喉を鳴らす匂いが徐々に近づいてくるのを感じた。

何時も通りの風景に少しスパイスを加えただけで、こうも世界は色を豹変するのか。

運命を操り、その先を識ったとしても、それだけでは経験はついて来ない。その瞬間に立ち会ってこそ、それは本当の意味で運命が成立する。

私は今回運命を操ってはいないが、どうなるかは殆ど視えてしまっている。けれど、その時出る食事の味、匂いまでは理解出来ない。すべての五感を用いて体感した瞬間こそ、私は私の能力を実感出来る。

先が見えないからこそ、人生というのは面白いのだと実感出来るのだ。

『あ、来たようね』

厨房からは、ゆつくりと料理を運ぶ二人の姿が現れる。

皆それぞれ分かりやすい期待の感情を露呈させ、今か今かと待ちわびている。

『お待たせしました』

咲夜の言葉を合図に、皆の目の前に皿が置かれていく。

そこには、いかにも高級ですと言わんばかりの150グラム程度のステーキが存在した。

付け合わせとしての人参や芋も匂いを漂わせ、しかしメインより目立たない謙虚な位置付けをキープさせている。

よくある献立のひとつではあるのだが、心なしか普段よりも気合いが入ってる気がする。

『では、いただきます』

伝統の食事への感謝の言葉と共に、一斉に食事へと入る。

口へ運ぶその刹那、皆があらゆる音を発することはなかった。

しかし、咀嚼や飲み込む音すらはつきりと聞こえるその時間は瞬く間に過ぎ去った。

それは、彼女の料理に対する特上の評価によるものであった。

それこそそんな姦しい空間の中、誰もがシロウという殿の存在を忘れつつある程に。

『やっぱり咲夜さんの料理はおいしいですね。咲夜さんほどの料理人なんているんでしょうか？』

『め、美鈴さん………』

何気なしに口にした疑問に対し小悪魔が必要最低限の言葉で諫める。

それに気づいた美鈴は、しまったと言う表情でシロウを見つめる。けれど、当の本人はそんな蔑みなぞまるで気にしていないようだ。

『なに、君の反応は至極当然のものだ。彼女の料理の質は近くにいた私がいた一番理解している。匂いだけでその腕が一級品なものだとな』

同じ料理人としてのその言葉は、とても説得力のあるものだった。しかし、彼の表情は敗北者のそれではなく、寧ろ挑戦者がチャンピオンへ登り詰めるときの様なものだった。

光を失わないその姿に、咲夜も目線で反応している。どんな時でも気を抜くような子では、私の右腕に相応しくなし、それを見誤るほど私も愚かではない。

咲夜にとつては、ここからが正念場なのだ。

『だからと言って自分を卑下はしないし、何もせずして慢心もしない。レミリアは勝負だなんて言ったが——そんなものに囚われる気は最初からない。私はいち料理人として、自分の作った料理を食べてもらいたい。それだけしか考えてなかったよ』

シロウの告白が終わると、彼はすぐさま自分の料理を私達の前に並べた。

皆が料理に集中していた為、私の確信に震えた表情には誰も気づくことはなかった。

『これは——洋梨をワインを漬けている？』

『ああ。量が少なめなのは夜分に胃に重いものは好ましくないと判断したからなのと、デザートにしたのは匂いで彼女の料理の内容を理解したからだ。これなら存分に料理という行為を楽しむことが出

来る』

彼の言葉は、最早料理を差し出された女性陣には聞こえているのかも怪しい。

女性は甘いものを好む傾向が強い。故にメインディッシュの後のデザートは一際輝いて見えていることだろう。

『美味しい……わね。しつこく無い風味にワインは酔わない程度の分量で留められてるから酒を使ってるのに人を選ばないデザートになってる』

パチュリーの説明口調の感想は、私の代弁そのものだった。他の者からも、なかなかの好印象が出ている。

シロウはこの住人の好みを知らないというハンデを持ち、私は料理内容を指定しなかったにも関わらず、ここにいる五人全てに合格を貰ったのだ。

兎にも角にも癖が強いこのメンバー全員を納得させたのだ。実力、観察眼、冷静さ、それらが咲夜を多少上回っている。

手塩に掛けて育て上げた咲夜が負ける悔しさも確かにあるが、それ以上にこんな逸材が私の手中にあると言う喜びの方が大きかった。

『さて……咲夜。残念ながら今回は貴女の負けよ』

『――！――！』

最初から負けを覚悟していなかったからなのか、驚愕の表情が顕わになる。

『貴女は私の勝負という言葉に急かされたのか、何時も以上にいい出来だったわ。だけど、貴女はシロウ程相手の事を考えて行為に勤

しんでいたかしら？私やフランなら兎も角、夜型にはなり切れないパチュリーとかもいるのに肉料理を作ったのはマイナスね』

『いや、美味しかったから気にしてないけど』

咲夜の顔を見つめつつ、パチュリーの靴を踏みつける。余計なこと
いうなアホ。

『……………ではお嬢様、私は彼に劣ると、そう仰りたいのですか？』

『うん』

咲夜の顔が蒼白になっていき、絶望を表現している。

ここではつきり言わなければ、彼女のタメにはならない。死より深い鞭を振るう事も時には必要なのだ。

『……………けど、私の知っている咲夜は、この程度の逆境どうってこと
とないわよね。完璧を常に求める完全なる瀟洒の体現。それこそ私
が求める十六夜咲夜なんだから——』

私は笑みを浮かべ

『だから、頑張りなさい』

親愛なる従者に飴を与えた。

『……………はい。お嬢様の期待に添えるよう、全力で頑張らせてもら
います』

消沈していた雰囲気は、次第に活力へと変貌していく。

そして、瞬く間にいつもの咲夜に戻っていった。

『さーて、これで査定はおしまい。解散かいさーん』

ぱんぱんと、ワザとおちゃらける風に手を叩き解散を促す。

『え、でも私達なにも言っていないよ？』

『言わなくてもいいわよ。どうせわかりきってるし』

『それ、なんで来たのか意味わかんなくなるわよ』

フラン、パチュリーに突っ込まれるが、スルーを決め込む。

私がやりたかったことは、この舞台を用意することだけだったのだ。運命が分かるというのは、そういうこと。

しぶしぶと皆が退散していき少ししてシロウが小声で話しかけてきた。

『君にはしてやられたよ。真逆私をダシに使うとはな』

『あら、気づいてたの？』

『ああ。君が指定した存在となれば咲夜も全力で事に励もうとするだろうし、私が彼女を何かしら凌駕すれば先程の様な対応をし、彼女が勝れば咲夜は向上心に溢れ——結果的にどちらに転ぼうと彼女の為になる』

『……………まあ正しいっちゃ正しいわね。でも、貴方の実力を測るというのは嘘じゃないわよ。この口で、しかと理解したわ。合格よ』

『それはなによりだ。何もせず首を切られたらたまったものではないからな』

とか言っているが、恐らくコイツはそんなこと微塵も思っていないだろう。

コイツは底が見えない。だからこそ、それを手中に収める過程が楽しいのだ。

今は無理だけど、いつかは——と野心に溢れていると、咲夜が話しかけてきた。

『お嬢様、私はまだ完璧ではありません。けど、絶対期待に添えられるメイドになれるよう頑張ります。ですから——』

『見捨てるな、だろ？そんなことする気は最初から無いよ。一度や二度のミスで切り捨てるだなんて、私の器を舐めないでもらいたいわ』

『っ——申し訳っ！』

謝ろうとした咲夜の両手に触れる。

予想外の行動だったのか、今日は咲夜の驚き顔を良く見る珍しい日だと場違いにも思った。

『貴女は私が右腕として認めた人間よ。もっとしゃんとなさい』

『は、はい！』

よし、元気になった。

これで私のミッションはコンプリートな訳で。

『二人とも今日はもういいわ。休むなり遊ぶなりしなさい』

『いや待て、私は仕事をまだしてないというに』

『私だって、まだやれますわ』

シロウはともかく咲夜は生真面目だからこんな反応をするとは思って
いた。

『だーめ。これは主の命令よ』

職権乱用なんだろうけど、これは皆を引つ掻き回した私のせめても
の優しさなのだから、素直に受け取って欲しい。

……面と向かってなんて恥ずかしくて言えないから、こうなるん
だろうけど。

『……………分かりました。お言葉に甘えて今日は床に就かせてもらい
ます』

『なら私は図書館にでも顔を出すでしょう』

二者二様の選択をし、そのまま咲夜は礼、シロウは何も言わず立ち
去った。

私も帰ろう。そして、これからのシロウをどうするかでも考えよう。

戦闘、家事能力にも優れる、しかも男。

そんな今までにない存在を掌握してこそ、吸血鬼としての欲を満た
すことが出来る。

幸い彼自身この住人に何かしらの嫌悪感を持ってはいないし、フ

ランや美鈴は寧ろ彼に良好感。彼がここに来なくなることはない。それまでに彼を懐柔すればいい。ゆつくりと、焦らずに行こう。狩りは、獲物をじっくり追い詰めることも、楽しみのひとつだから。

『楽しみね、本当に――』

不敵な微笑みと幼さと妖艶さが混ざった声は、誰も知ることはない。た。

幼鬼の思惑、従者の決意（後書き）

今回、料理の話として展開しましたが……正直料理の話全然してませんね。意味もないですし。

利点と言えば、シロウと咲夜が二人きりになれる空間の形成が容易だったことくらいですね。それならもっと方法があったらうにと、反省しています。

さて、前書きで書いたことですが、実は私――

即売会に出ることになった、どうしてこうなった。（2010年9月25日現在）

札幌だったかでやる東方北都祭に参加することになりました。これどこらに住んでるかバレますね。ケヒッ。

勿論分野は小説です。絵なんて描けるかばーろー。

でも、私以外のメンバーはイラストを描くらしいです。

MoNo-Coolというサイトも何も無いサークルです。名前とが出るのか分からないけど、もし参加する人がいれば冷やかし目当てで目印にでも。

それにしても、今回が初参加というのもあり、同人誌って幾らで売ればいいのかわかりません。

貧弱サークルということもあり、部数はだいぶ少ないです。リーダーは初期の頃全部売れないと赤字の50円販売するみたいな発言をしていたが、流石にどうなのよと思うので、少し意見をください。

因みに、イラストと小説は別冊になります。

それと、こっちの方に集中するのでメインであるこの小説は一時停滞させてもらいます。

流石に人様に見てもらっただけでなく売りに出すものだから、適当なことはできませんし。

そこらへんご理解のほどをお願い致します。

絆 ？（前書き）

無駄に長い小説書いた後は、この長さも大したことなく感じる。
問題は、ネタがないことっ……………！愚かっ……………！行き当たりばっ
たりの無計画な人生っ……………！！

絆？

レミリアの粹な計らいに甘え、私は宣言通り地下の図書館へ一人で訪れる。

相変わらず古紙の臭いが漂っており、臭いだけで満腹、いや満足してしまいそうになる。

図書館に訪れたこと自体は気紛れの為、特に目的意識は無い。故に、することも無い。

そうやって当てもなく彷徨っている内に、パチュリーが椅子に腰かけ、大量に積み重なっている本と格闘している姿を見掛ける。

こっそりと近づいて何を読んでいるのかを上から覗き見る。

そこには、いかにも彼女が好みそうな――逆に言えば彼女以外は理解出来なさそうな――古代文字の羅列が紙面一杯に刻まれていた。

魔術に精通している私だが、こういうものは正直専門外だ。

この身は一つの魔術のみに特化している異形故、他の魔術を試す意味は殆ど無い。親父に教えてもらった魔術はこういった本を読んで習得したものではないし、この手のモノに関しての知識は素人とそう大差無い。

結局何が言いたいのかというと、何書いてるか分からんと言う事だ。

『パチュリー様はこうなると集中しすぎて視点の先にでも意図的に入らないと反応しませんよ』

突然背後から聞こえた声に振り返ると、そこには数冊の本を抱えたこあが此方を見て微笑んでいた。

しかも、前回は今回の食事の時も装備していなかった筈の眼鏡を掛けて。

『こあか。驚かさないでくれ』

『驚いていないくせに、良く言いますね〜』

………気のせいか、毒を吐かれている気がする。

でも、凜が笑顔で怒っている時とは雰囲気異なる。

そんな今までとは異なる感覚が、私の対応を鈍らせる。

『そ、それにしてもこの本はパチュリーに指示されてか？』

『ええ。まだこんなに読んでない本があるのにですよ。いつもの事ですけど』

『苦勞しているんだな』

『ええ、そりゃあもう。過勞で倒れるかもしれませんねいつか』

………彼女の言う通りパチュリーは此方に反応した様子は無い。

本当に聞こえていないのだろうか、ここまで堂々と主への皮肉を本人を目の前に言えるというのは、かなり肝が据わっているとは思えない。

おっとりとしていて、和室に着物という組み合わせなら大和撫子と評価しても誰も否定しないであろう容姿の彼女だが、意外に強かだという事を知った。或いは天然なのか。

『まだ頼まれた本はあるのか？』

『はい。これ全部魔術の本なんですよ実は』

よいしょ、という掛け声と共に本の壁がパチュリーの前に新たに建

設される。

『——まさかここに魔術の本が置いていたとはな』

『この図書館は異常とも言えるほどに広いです。だから相応の量、質の文献が埋もれていても何ら不自然な事はありません。

私とリトルちゃんはパチュリー様にこの図書館を憑代にして召喚されました。それはこの書庫にある本の情報を即座に検索できるようリンクを繋げる為で、まあ何が言いたいかと言うと私達はこの図書館の本なら調べることが出来るんです』

こあは本棚を手でなぞりながら、ひとつの本を手にする。

他愛のない動きは、彼女が行うことで淫靡な雰囲気醸し出す。

彼女はサキュバスらしいし、存在自体が魅了の魔眼の効果を持っていたもおかしくはない。

だが、間違いなく能力はセーブされているだろう。使い魔として扱うなら、不便極まりないだろうし。

外套があるとはいえ、対魔力の無い私では影響力は大きいに決まっているのに、目視で違和感を感じる程度で留まっている。それが大きな証拠だ。

『それは凄いな……でも、それがどうさっきの内容と関係しているんだ？』

『私には調べる技術はあっても、それ以上の事は出来ません。本を取りに行くにもこの身体ですし、検索を掛けるワードに引っ掛からない本の情報は私でも知り得ません。当然ですけど、知識が無ければ調べる以前の問題です。だからパチュリー様が魔術というワードを知り、検索を掛けなければ、こんなに早く発掘されることは無かったんじゃないでしょうか』

魔術は秘匿されるもの。

妖怪みたいに、現存しているにも関わらず、認知されなくなる事で幻想郷へ辿り着くのなら、魔術だってその枠外では無い。

世界の九割を超える人間は、魔術の存在を知らない。そんなの、存在しないのと変わらない。

現に、こうして少なからず幻想郷に魔術の書物が存在しているのだから。

召還に関しては、私の知識不足もあるかもしれないが、少なくとも魔術の例ではキャスターは柳洞寺を憑代にしてアサシンを召喚していたが、こあみたいにそこにリンクした事でのメリットが付加されているとは考えにくい。

寧ろアサシンはあそこから離れることの出来ない身体となり、デメリットを負う結果となっている。

行使とは別かもしれないが、桜の黒化でセイバーを取り込んだ時はセイバーの能力は上昇していた。そこがメリットではあるが、同時に精神が反転したかのような症状も見られた為、デメリットも同時に発生している。

『——君達はこの紅魔館から出れるのか？』

『出れますよ。それがどうかしたんですか？』

彼女のさも当たり前だと言わんばかりの表情を見て、魔法の凄さを改めて思い知る。

……こうやって魔法と魔術の差を聞かされていると、やはり世界は違えど魔法と名の付くものは魔術よりも優れていることが分かる。まだ一端しか理解していない為確定とまではいかないが、今の所魔法は？万能であり優秀である？という印象で固定された。

『いや、なんでもない。ただ、魔法は凄いなと思っただけだ』

『それを言うなら、シロウさんの魔術だって凄いですよ。曲がりなりにもレミリア様と対等に戦える実力の魔理沙さんを、なんの苦もなく撃退したんですから』

——その言い方だと、ここの主であるレミリアより私の方が強いと言ってるようなものじゃないか？と突っ込みたかったが、止めておく。下手にレミリアの耳に入れば、面倒に巻き込まれるのは明白だからな。

彼女は純粹に私を誉めているが、そんな私の脳内ではあの時の映像がフラッシュバックの様に再生されている。

焼け石と化した壊れた八卦炉を、その手が焼ける事を厭わずに回収する魔理沙。

彼女があの際に浮かべていた涙。それはあの八卦炉が霖之助に貰った、彼女にとっては何物にも変えられない宝物だった事を実に現していた。

……私は彼に頼んで八卦炉の制作図を貰いはした。だけど、私が治した八卦炉は、彼女にとって意味のあるものとなるのだろうか、と今更ながらに考える。

私は贗作者だ。それはナニがあろうとも変わることは無い。

霖之助が作った八卦路を直した所で、それは最早他人の絵に筆を入れたことに変わりはない。それは本人がやらなければ誰がやっても同じこと。

けど、だからってその理屈を盾に私の自己満足を押し付けていい事にはならない。

だけど、私が壊した以上私がどうにかしないとイケない気もする。こればかりは自己満足でしかないだろうが。

『……………どうしました？』

『いや、なんでもないさ』

こあの声で意識を引つ張られた。

相変わらず深く考える癖があるな。自重しなければな。

それに、魔理沙の件もいずれ片づけなければ……………。

『それより済まなかった、工作中だったのにも関わらず引き留めてしまつて』

『いえいえ、元より私が悪戯心に話しかけたのが切っ掛けですし。それに、暫くは持ちますから』

改めて重々しく積み重ねられている本の壁を見るが、減った様子は無い。

あれだけ積んでいるのだから速読の心得でもあるのかと思つたが、どうやらそうでもないらしい。

アレか、安くなるかならないかの瀬戸際で悩んで結局買つて、すぐに安くなった時に「安心を買つたんだ」とか言い訳するタイプか。目の前にある分には越したことは無いのは認めるが、その分こあやリトルが苦勞するのは如何なものかと思う。

『———そういえば、リトルは見ないがどうしているんだ？』

こあが仕事をしているのだから、彼女が仕事をしていない訳がない。だけど、結構話し込んでいる筈なのに彼女は現れない。同じ仕事をしているなら、必然的にここへは戻ってきそうなのだが。

『あの子なら疲れて寝ていますよ。説明してませんでしたけど、私

達はそれぞれ特化している能力が違っんです。私は索敵、あの子は検索に優れています。あの子が全力でパチュリー様の求める本のワードを検索し、私があの子が検索してこの紙に書いてくれた本を、その情報を頼りに集めるんですよ」

『二人揃って最大の力を発揮する訳か。なんというか、らしいな』

『まあ、一応姉妹ですし。ただの概念に近いですけど』

……その言い方だと、まるで二人は姉妹ではないみたいではないか？

発育の違いはあれど、二人とも同じ遺伝子からできたとは思えない位に特徴が一致しているのに。

『——悪魔というのは、人間の想念を被って個体名に成る偽物と、人間が名づける以前に存在していた純粋な悪魔の二種類があります。私達はパチュリー様が自分にとって都合の良い使い魔として想像して生まれた、偽物です。故に、本物であり吸血鬼であるレミリア様やフラン様より力は遥かに劣りますが、雑用だけを求めるなら偽物の方がコストはいいです。まあ、何が言いたいかといいますと、私達が召喚されたときに姉妹のような関係だったのは、個に掛かる負担を減らし効率を高める為で、血縁関係は一切ありませんってことです』

此方の考えを見透かしたかのように、私の疑問を解消していく。

蔵書に関する使い魔として召喚された所以か、本を読むようにスラスラと回答していく。

だが、その内容は自分自身を偽物と宣言するもの。

彼女にとってはそういう意味で言った訳ではないのだろうが、私には彼女が自分を卑下している風に聞こえてならない。

『…………それで、それなら君はリトルに対して一切そんな感情を持つていないというのか？その程度の関係だったとでも？』

『そんなことはないですよ。概念としてだけの姉妹関係とはいえ、パチュリー様がそう望んで私達を召喚した以上、私達は姉妹です。血の繋がりなんて関係ありません』

につこりと、偽りの無い笑みと言葉を返す。

純粹にそう思っているからこそ、莫迦にされても冷静でいられる。他人の言葉なんて意に介さない位に、二人の絆は深いのだ。

『———そうか、済まない。君を試すような真似をして。本心ではないにしろ、君やリトルを侮辱したことに変わりはない。本当にすまなかった』

心から謝罪の気持ちを込め、頭を下げる。

英霊として生きていた頃の皮肉屋な性格が久しぶりに表に出たことで、自分でも戸惑っている。

意識したつもりはなかったが、やはり二者の在り方が混ざれば安定しないのは当然なのか。

出来ることなら直したいが……………矛盾を抱えたままそれを一つにするのは骨が折れる。

個人が大きな組織を相手にするには、衛宮士郎のままではいられなかった。

だから私は過去を捨て、こんな喋り方と共に歪んでいった。だけど、もう自分を偽る必要はない。

他人を傷つけるだけの性格は、もういらない。

口調はともかく、性格は矯正しないと。そう強く誓う。

『——フフッ』

怒号が飛んできてもおかしくない雰囲気の中聞こえたのは、こあの笑い声だった。

幻聴かと思いい顔を上げたら、それは事実であつたと目の前の光景が告げた。

そんな不釣り合いな光景に、私は声を出せないでいた。

『似ているなあ、パチュリー様に』

『似て、いる？』

まさかの似ている発言に、思わず比較対象を見る。

相変わらずページを捲る挙動以外、人形のように動かない。その集中力には感心するべきか呆れるべきなのか。

『普段はぶっきらぼうで冷たい印象があるんですけど、さりげなく優しさを見せる所がです。まあ、シロウさんの方が直接的ですけど』

『非礼は詫びるのが当然だ。そこに優しさは関係ない』

『だから、その考えが優しいんですよ。幻想郷では基本的に人の話を聞かなかつたり、傍若無人な態度で相手と対峙したり、弱肉強食の関係が強く根付いてる傾向があります。そんな中、貴方程の実力の持ち主が謙虚な姿勢でいるというのは、本当に稀なんですよ』

私は幻想郷の事情には疎い故何も言えないが、弱肉強食というのは違う気がする。

何せ人間と妖怪が同時に存在し、かつ均衡を保っていられるなら、その理屈は矛盾している。

確かに人間一人が弱いというのは、戦争を幾度と体験した私はこの身を持って理解したつもりだ。

だが、組織となり統率の取れた軍隊というのは、少数の強者の集まりを時に凌駕する。

人間の強さとは、数。妖怪の強さとは、個。

そう考えると、やはりバランスは取れている気はする。

妖怪の絶対数が少ないという根拠は、単に私がこの目で見かけた数が人間よりも遥かに少なかったからというだけだが。

『あの時は虚を突いたからこそその勝利だった。もし彼女が油断なく私との勝負に臨んでいたのなら、分からなかった』

魔理沙の砲撃は、質量と威力だけなら、青崎の魔法と似たものがあった。

即射性と連射性は劣るが、十分脅威となるレベルだ。正直アイアスで防げたのは、奇跡だったとしか言いようがない。

というか、何故防げたのか今更ながら疑問に思う。

だが、間違いなく解決しない疑問なので今は忘れよう。

『それでもですよ。少なくとも、実力と優しさは具えているんですから、関係なくはありません。自分で言うならともかく、他人の評価なんですから自信を持っていいと思いますよ』

後ろ向きな私の意見に呆れることなく優しく対応してくれる彼女こそ、本当に優しいと思うが………恐らく彼女も私みたいな答えを返すのだろう。

『……………そう考えると、私達も似たもの同士ではなかるつか』

特に言う予定はなかった言葉が口に出てしまい、内心焦る。

私なんかと似ていると言われても、いい気分はしないだろうに。

『私達が、ですか。それはいいですね』

『……………そうか？』

『そうですよ』

変わらぬ笑顔で私の心の不安を拭い去ってくれる。

数々の失言をする中、今の私には彼女の言葉が唯一の清涼剤となっていた。

『——なんか恥ずかしいです。そんなに見つめられると』

『ッ——すまない！』

そんな感じで癒しを貰っていると、無意識に彼女の顔を見つめていたらしく、その頬は羞恥で朱く染まっている。

私は慌てて顔を逸らし、二人して硬直する。

なんだ、この初々しいカップルが手を繋ごうとして失敗したみたいな状況。

『わ、私は仕事を再開します。シロウさんはリトルちゃんの様子を見にでも行つててください。あそこのソファで寝ていますから』

『あ、ああ。頑張ってくれ』

普段ならここで手伝うと意気込む所だが、こんなぎこちない雰囲気の中仕事するのは効率上もよろしくないし、本音を言えば此方も気恥ずかしさで仕事に集中できるか分からない部分もあったからな。

彼女の後姿を見送り、私はこあの言葉に従ってソファで寝ているリトルの下へと向かう。

小さな身体は規律正しく上下に動いている。

擬似的な姉妹とは思えないほど、二人の姿は酷似している。リトルはまさに、こあが小さくなった姿だ。

こあは永琳と同等の大人な雰囲気があり、リトルはチルノ達と同じ位の身長で童顔なせいか、二人はまさに姉妹としか言えない。

これで双子なら成長度に差異がありすぎだと言われても仕方ない位に違う。

分かりやすく言うと、こあがライダーでリトルがイリヤ位の身長だ。軽く40センチは差がある。

なんの為にそんな差を作ったのか。パチュリーは何を意図してこんな風にしたのか、今度聞いてみるとするか。

『んにゅ……………』

しかし……………不思議なものだな。

何の因果かは知らないが、私は他人の安らかな寝顔を眺められる程の安息を手に行っている。

世界と契約するということは、魂が隷属されるのと同義。

それを覚悟して契約したにも関わらずこうしてられるのは、あの時に聞こえた女性の声のお蔭だ。感謝してもし切れない。

喻えホンモノの私は未だ世界と共にあるうとも、ここに欠片は存在している。

無責任かもしれないが、エミヤはこんな平和ボケした自分を喜んで見送っているだろうと信じている。

だって、アイツも私も、結局は同じ穴の貉だ。本質的には何も変わらないんだから、私がそう思い続けていれば、いずれ思考は同調する。いや、私はもう鎖から解放された存在だから、英霊エミヤも衛宮士郎も関係ないんだったか。

『——ん、う』

瞼を僅かに震わせたかと思うと、ゆっくりと開き出す。
半目の状態で眼球は不規則に動いている。意識はまだ夢の中に片足
突っ込んでいるのだろう。

『眠ければ寝てていいのだぞ』

恐らく疲れが残っているのか、或いは私が近づいたせいでノンレム
睡眠中にも関わらず起きてしまったのか。
どちらにせよ、現状から察するに彼女は仕事をする必要はない。な
ら寝ていても構わないだろう。
それに、彼女じゃないと出来ない仕事以外は私がやればいいしな。

『……………??——ッ!』

頭をぐらつかせながら此方を暫く見ていたかと思うと、目には生氣
が溢れ出し、その表情はみるみる驚愕で歪んでいく。

『うわ、うわわわわわわわわ!!!』

驚きの余りにソファーごと後ろへとリトルが倒れこむ。
だが、咄嗟に反応したことでソファーは倒れたものの、リトルは助
け出すことが出来た。

『大丈夫か?』

後ろに倒れこむ形だった為、体勢はお姫様抱っこに似たものとなっ
た。

……ここに来てからこの体勢に縁がある気がしてならない。世界か、世界の仕業か。

『は、はい。らいじょうぶれふ』

未だかつてない程に顔を紅くした生き物が、そこにはいた。

茹でダコみたいな表情に、呂律も回っていない。そこまで私は彼女に嫌われているのか。

『起こしてしまったようで申し訳ない。別に仕事が出来たとかではなく、こあに様子を見てほしいと言われたのでそれに従っただけなんだ。不快な思いをさせてしまったのなら謝罪しよう』

『い、いえ。ちょっとびつくりしただけで、怒っても不快な思いもしていません』

『そうか、ならいいのだが』

逆に気を遣わせてしまっただろうか。

交渉術なら幾度と体験したが、女性への対応は昔からどうにも苦手だ。

こうやって女性との出逢いはそれなりにあるにも関わらず……一体何故なんだ。

『お姉ちゃん、疲れてたりはしませんでしたか？結構平気な顔して無茶をする事があるので、心配なんです』

『ふむ、先程の様子では疲れは然程感じられなかったが、確かにそれなら心配だな』

平気な顔で無謀や無茶を通すというのは、並大抵の精神では成すことは不可能。

自分自身がその例なのでリトルの言葉は私を基準に考えてしまう。流石にそこまではありえないだろうが、無茶というのは自分自身で歯止めやセーブが効かないから起こり得るのであり、意識的にするには余りにも苦痛な行為。

こあが私ほど歪んでいるとは到底思えないし、人並み程度では留まっ
っているだろう。

『ですよ、だから手伝いに行かないと——』

『待ちたまえ』

立ち上がろうとしたリトルの腕をおもむろに掴み、静止を促す。

『ひゃっ、ど、どうして止めるんですか』

『君が手伝いに行くのは確かにひとつの選択肢としては正しいだろう。だが、場合によってはそれが重荷となる事もある。今回の場合、せつかく休んでいた君が彼女の所へ向かうことで、気を遣わせてしまったのではと考えてしまい、逆に気疲れを起こしてしまうという可能性があるな』

『そ、そんなあ』

じわりと目頭に涙を浮かべ出し、私は明らかに動揺を隠せないでいた。

まさかこんなことで泣かれるとは思いませんでしたので、その焦燥たるや、表現し難いものである。

『ッ——そ、そういう可能性があるというだけで、別に必ずしも該当する訳ではないぞ？こあの事だし、君が来ても邪険に扱う事は無いだろうし、寧ろ喜ぶだろう。ただ、あくまで何事にも脊髄反射的な行動は取らず、常に相手の気持ちになって物事を考えて欲しかったのであって——』

身体のあるゆる箇所がジェスチャーでもないのにせわしく動かし
ている私に、話を聞いているのかも定かではなく涙目のままおろ
しているリトル。

傍から見れば何事かと思う状況だ。というか、当事者も何事か分
かっていない時点で收拾がつかないのは明白。

その予想は当たり、暫くは二人してしどろもどろしていたのだが

『楽しそうですね』

第三者の介入が、私達の思考を鎮静化させた。

『お、お姉ちゃん』

『こあ、か………』

ニコニコと先程と変わらぬ笑顔で私達を観察している。
打算の無い笑顔の筈なのに、何故か今はそれが恐ろしい。
まるで、凜に弱みを握られた時の気分だ。

『私も仕事が一段落しましたし、一緒に居ていい？』

『ああ、問題ない。リトルだってそうだろう？』

私の問いに対しこくん、と無言で頷く。

その反応に満足したらしく、こあは私の隣にちょこんと座る。

そしてこあは、自分の隣の地面をポンポンと叩き、来るように促す。リトルはそれに従って、座る。

そうして、弧を描くような感じで図書館の床に座る形となった。

それから、完全な雑談に移行した。

主な内容は、二人の私生活の事だった。

パチュリーの人使いの——悪魔使いだとしっくりこないの——
——荒さを愚痴を交えて私に伝えたり、二人の仲の良さを日常生活での例を交えて自慢してきたりと、中々に充実したものだった。

その途中、私の事も聞かれたりもしたが、ここに来るまでどうしていたか——幻想郷に住んでいた時期だけを抜粋して——程度の内容のみを話した。

こうやって楽しい雰囲気が出来ている中、私の過去を話すなんてことをしてみる。少なくともこの柔らかな雰囲気が保つなんてことは有り得ないだろう。

彼女達と出会って日は浅いが、間違いなく私の過去を聞けば二人は悲しむか哀れむかはするという確信がある。批判よりも同情が上に来る性格、と言えいいだろうか。

とにかく、この場に暗くなるような話は似合わない。然るべき時期に、然るべきタイミングで再び聞いてくることがあれば、その時は包み隠さず答えるつもりだ。

——平和だ。

単純で陳腐な言葉だが、私にとってはとても感慨深く——最も不足していたものだった。

それを謳歌していると実感出来るこの瞬間に、多大な感謝を。そして、この時間が悠久のものであることを、強く願う。

絆？（後書き）

この手の情報は後にまとめて掲示する予定でしたが、一応フライング気味に漠然と説明。

こあの身長ですが、紅魔館の中で一番高いです。ライダー（172cm）より少し低い程度です。私の妄想では170きっかりがウフフな感じ。

エミヤシロウが187？なので、お似合いカップルに見えますね、フヒヒ。

対してリトルは、名前通り小さいです。イリヤ（133？）よりわずかに大きい程度。大体138くらいかな。妄想だt（ry

他のキャラはまだ言いませんが、紅魔館メンツの身長グラフとしては

こあ>美鈴>咲夜>パチュリー<レミリア＝フラン>リトルって感じです。妄s（ry

いずれこんな妄想設定を公開していく（できれば全キャラ出してからが理想かな）気満々なので、まあ変な目で見ながらお待ちしていれば良いと思います（笑）

剣士として、従者として（前書き）

戦闘描写って……なんだろうね

剣士として、従者として

平穏で安らかな時間は、緩やかな時間の流れと共に終わりを告げる。太陽はいつの間にか昇っており、今まで地下にある図書館で団欒していたこともあり、その事に気づいて皆で——パチュリーは未だ本を読んでいるので無視して——外の空気を吸いに地上へ向かう。当然、私達は本来あるべき世界の目の働きをしていなかった為、明順応が働き、視界が白化する。

僅かな時間で目は慣れ、落ち着いたところで深呼吸。数時間にも渡り座っているだけだった為、五臓六腑に酸素が染み渡る気分だ。

『君達はそろそろ休んだ方がいい。睡眠と言う形でな』

『そう、ですね』

私に指摘されたせい、か、今までしていなかった欠伸をこあが漏らす。リトルは仮眠を取ったこともあつてか、欠伸はしなかった。しかし、その表情からは少しだが疲れが見え隠れしている。

生物は、基本的に大多数が日の当たる時間が活動時間だ。

夜を好むと言われている妖怪なら別なんだろうが、彼女達は妖怪そのものではない。

部類こそ近いものがあるが、枠としては別物だ。

と言うより、悪魔が寝るのかとか、彼女達はパチュリーの想像によって構成された存在でもあるから、彼女の常識も二人に依存しているのかとか、可能性を挙げればキリが無い。

何せ私には、悪魔に関しての知識は無いのだから、全て憶測でしか語れない。

故に、今日の前で起こっていることが現実だとしか言えない。欠伸

をするのだが、脳が休息を求めていると考えるのが筋だろう。

『シロウさんは、どうするんですか？』

リトルが私に問いかける。

数時間による言葉の交わし合いの甲斐あってか、リトルは私に対して動揺を見せることは無くなった。

とは言っても、それは平常の時だけかもしれない。調子に乗っているとまた嫌われかねん。

『私はこれから白玉楼に向かおうと思っている。距離からして、歩いていれば良い時間だろう』

私はサーヴァントの身である為、睡眠などを取る必要が無い。

人間や、恐らく妖怪よりも生物の摂理からはかけ離れている為、疲労や睡眠欲などの戦いには不必要な欲求は殆ど撤廃されている。

とは言っても、エーテル体であろうと生物として顕現している以上、その枠から抜け出すことは出来ない。その証拠に、食事を必要としないのにある味覚や疲労だって、少なからず存在する。

検証したことは無いので定かではないが、恐らく聖杯戦争が終結するおおよその日数をぶっ続けて戦闘だけに使っても支障は無いのではなからうか。

いざと言ったときに疲れて動けませんでしたが、なんてことはあつてはいけないのだから、それくらいの措置はあつて然るべきだとは思いますが。

『そうですか。寂しくなりますね』

『別に今世の別れでもあるまいに、大げさだな。それと、レミリア達に会ったなら私は出て行つたと伝えておいてくれ』

ポン、とリトルの頭の上に手を乗せ、そのまま優しく撫でる。リトルは恥ずかしそうにしながらも、私に頭を好きにさせている。前までならこんな些細な事でもうるたえた彼女からすれば、これは大きな進歩と言えるよう。

私には妹というものがいない——イリヤはあんなナリだが、姉であることを改めて確認しておく——せいか、こういう関係には少し惹かれるものがある。

いや、あの災害以前にはいたのかもしれないが、それを確かめる術は無い。

私の場合、弟でも妹でも必要以上に過保護になってしまいそうだな。そうして周囲の人々にそのことで叱られる毎日——うん、悪くない。

『分かりました。そつちも頑張って下さい』

『ああ、いずれまた』

別れを告げる言葉は、お互いの歩みを反発させる。小悪魔は紅魔館に、私はその外へと。

日常に不変は有り得ない。

だが、いずれここへは戻ってくる。

その時、同じとはいかずとも今日のような日常は回帰する。そして、新しい物語が紡がれる。

同じ役者と場所で作る物語でも、監督や演出が異なれば物語は大きく変容する。

さあ、新しい物語を始めようか——

白玉楼の中庭に一つの影。

その陰の正体——半人半霊の少女、魂魄妖夢は三つの音を発している。一つは、摺り足による石の擦れる音。

二つ、覇気の籠った少女の声。

三つ、世界を切り裂く気概で振り下ろされる刀の風切り音。

少女は今、素振りをしていた。

エミヤシロウがここに訪れ、去ってから幾日。彼女は日頃のノルマを倍にした、無茶な修練を行っていた。

理由は、未だ彼女の中で眠るエミヤシロウへの疑念と、彼を師として仰ぎたくないという思いがあるからである。

西行寺幽々子を護ると誓った身である彼女にとって、彼の様なイレギュラーは膿でしかない。

喩え幽々子がここに来ることを容認しようと、妖夢の師として存在を認められても、妖夢自身はそれを容認できないでいた。あの場ではつい認めてしまったが、時間が経つにすれ後悔の念が膨れ上がっていた。

だから、彼女は決意した。

一度は負けたが、次は勝つ。そして、彼との師としての繋がりを断ち切る。

それが、彼女にとって最善の行動だと、そう信じて疑わなかった。ただ、幽々子を護る。それさえできれば、あとはどうでもいい。

今の妖夢の思考は、そんな感じに酷く短絡的になっていた。

そして、彼女が待ちに待った瞬間が訪れた。

『勝手に上がらせてもらったぞ。とは言っても、縁側にいた幽々子には伝えてあるが』

振り返るとそこには、聞き慣れはせずとも忘れもしない声と青年の姿があった。

『……………おはようございます』

一応挨拶はする。敵意も見せてはいけない。

名目上は彼は敬うべき存在。幽々子様に私が彼に不信感を持つていると思われる、色々面倒———というか、説教みたいなものを受ける———なことになりそうだ。

とは言っても、全て終わった後なら何の問題もないのだが、用心に越したことは無い。

『今回初めての指導になる訳だが、前にも言った通り私が教えるのは戦い方だけだ。君の剣術に対してとやかく言える程剣に精通していないし、意味が無いからな』

当然だ。

ぼつと出の赤の他人に、代々受け継がれた誇りある剣術に口出しされたら、正常でいられる自信が無い。

『そうですか、では早速やりましょう』

素振りしたまま抜き身だった楼観剣を握り直す。

時間を置いてしまえば、幽々子様が様子を見に来てしまう。

こんな邪念に満ちた私の姿、私の剣を見て欲しくない。

今の私は、幽々子様の前に立つべき存在ではない。

だからせめて、この立ち合いが終わるまでは彼女に会いたくない。
会うべきではない。

そして、その後にしこりが残らないように、この勝負は確実に勝た
ないといけないんだ。

今の穢れた心を持つ自分と決別し、誇りを持って幽々子様の前に立
つ為にも。

『待ちたまえ、君の状態を見るにだいぶ自主訓練をしていた様では
ないか。少し休むべきだと思うが』

『いいえ、問題ありません。やりましょう』

彼の好意を、語尾を強調してあっさり切り捨てる。

今の彼女にとって、彼の言葉は結果を妨げる雑音でしかない。

一秒でも早く醜悪な自分とはオサラバしたいと思っている中、善意
でやっていることとはいえ妨害されれば苛々も募るというもの。

『……………そうか。ならば、そうしよう』

少し納得できない様子ではあったが、私の言葉を了承する。

そうして、一息吐くよりも早く、彼の右手には長剣が出現した。

特別装飾も特徴も無い、一般的なロングソード。

戦い方を教えるだけなのに本物を使用する辺り、スパルタ教育なの
か或いは彼女に合わせたのか。

逆に考えると、彼は妖夢を気遣う余裕を持ち合わせているというこ
とになる。

……………気に入らない。

一度の勝利で自分より強いと思われ、良い気をする人間はいない。
敗北したことは事実だが、今回の勝利を以て塗り潰せばいいだけの
事。

『…………あの時の白黒の双剣は使わないのですか』

『君だって二刀流だろうに。それに、君の実力を見極めるには、あらゆる戦闘方式で挑まないと理解出来ないだろう？』

『——』

つまり、彼は本気ではない。そう宣言したのだ。

憶測でしかなかったモノが、今事実となる。

その瞬間、少女は何の宣言もなしに疾走した。

距離にして五メートルも無い距離、対して相手は構えもしていない状態。

確実に一撃を与えたと確信していた。避けることも防ぐことも不可能だと。

だが、そうはならなかった。

目の前の敵は、微塵も焦りを見せずに全力の一振りを防いだ。しかも、両手を使わずに。

魂魄妖夢が一刀で戦う場合、柄には両の手が常に存在している。

握力は筋力に依存する。モノを握るという行為は、掌から腕全体にまで力が掛かるように出来ている。故に、単純に考えれば片手で剣を振るよりも両手で振った方が破壊力は増す。

何かしらの方法で力を込めることで、生物は筋肉を怒張させ、ある時は武器として、ある時は護りとしても効果を発揮する。

彼女は両手で一つの刀を持ち、更には自分の体重も掛けて彼を襲った。

だが、結果としてエミヤシロウは片腕でそれを難なく受け止める。

それは、圧倒的なまでに筋力による力の差があることを示していた。

鉄と鉄の擦れる音と共に、妖夢は数歩飛び退く。

罅迫り合いをしても勝てない。そう直ぐに判断出来る思考能力は、戦闘経験のあるもののそれだ。

だが、それだけでは目の前の存在を打倒することは不可能。

少女は知らないが、彼はあらゆる戦場をたった一人で駆け続けた猛者である。

剣と剣での戦いを師としか体験したことのない少女と、一對多を前提とし、理不尽なまでの戦力差でも勝利を掴んできた青年では、絶望的なまでの実力差があった。

だが、少女は止まらない。

力では勝てないと判断した少女は、持ち前の小柄な肉体による攪乱戦法で青年に襲い掛かる。

正面、左右、背後、頭上。攻撃の届く範囲全てに斬撃を叩きこむ。

その動きは、残像を残す程の速さ。常人では躲すどころか、視ることすら不可能な剣の域に彼女は立っている。

——だが、それでも。

『どうした？闇雲に攻撃したところで体力を消耗するだけだぞ？』

『クッ——舐めるなあ！』

幾合と重なる剣戟。しかし、妖夢は彼に有効打はおろか、掠り傷ひとつつけれないでいた。

少女と青年の戦闘経験の差は、実力や才能だけでは埋められない。魂魄妖夢は、剣術に於いては確かに天才だろう。こればかりはエミヤシロウでも凌駕することは不可能だ。

だが、そればかりが勝敗を分かつ訳ではない。

戦いに於いて重要なのは、いかに自分の有利な状況に立てるかだ。

それには確かに才能や実力は依存するだろう。しかし、一番重要なのは経験だ。

あらゆる戦い方、敵、地形での戦闘を経験しない事には、才能がなくてはならないようなもの。

如何に狡賢く、姑息に立ち回れるか。それが生きる方法であり、戦いのあるべき姿。

ある者は騎士道精神なるものを謳うかもしれない。だが、それを常に貫き、生き意地汚くあれる者は稀だ。

誰かはその高潔さに食われ、誰かはそのような在り方と矛盾してでも生きることを望まず、自決する。

そんな中学生延び、英雄となった者は、本当に騎士道精神を尊んでいたのだろうか。

……なんてことを騎士王に問えば、間違いなく極刑だろう。

英雄というのは、決して美化されるべき存在ではない。

あらゆる犠牲を払ってでも生き遂げた者こそ、歴史に名を馳せる。

勝てば官軍。その資格を得た者は、ある程度の汚名も払拭される。

対して負けた者は、勝者やそれを信仰する者にあらぬ汚名すら着せられる事さえある。

それが世の理、死人に口なしとは良く言ったものだ。

だからこそ、目の前の青年は姑息に立ち回る。

挑発し、護るだけで一切攻めることなく立ち回ること、少女は真つ当な精神でいられなくなる。

それこそ、彼が言っていた戦い方の修業の一つ。常に冷静な対応が出来るか、それを彼は見極めていた。

妖夢は試されていることも知らず、彼のペースに吞まれていく。

『これは——なりふり構っていられませんね』

悔しさに下唇を噛み締めながらも、意を決した表情でシロウを睨む。そして妖夢は、腰に携えている鞘に収まった白楼剣を抜き、構えを取る。

一刀流は彼女のスタイルのひとつではあるが、それが在るべき姿ではない。

彼女の在るべき構え、それはシロウと同じ二刀流。

彼みたいならんと腕を下ろした構えと違い、彼女は一刀流の時同様、腰を深々と落としたまま右腕を切り下げた状態で、更に左腕を突き出し、上から見れば十字を成している構えを取っている。

攻撃と防御を分割した、魂魄家ならではの独特の構え。

常人の腕力では、構えることすら苦痛であろうに、少女は平然とその構えを続けている。

そのあまりにも独自性の強い構えに、シロウは警戒するように身を僅かに引き締める。

『疾ッ——！！』

そして、二つの刃がエミヤシロウを襲う。

一刀の時でさえ、獅子を連想させる瞬発力を持ちえたのに、二本に増えたことで手数も単純に倍化。流石に彼も一刀だけで凌ぐのは至難の業だった。

少女の猛攻に青年は顔を歪める。この戦闘内で、初めて見せた苦悶の表情だ。

隙が無い。経験が浅かろうと、それを才能のみで押し通してくる。

彼には出来ない芸当だ。

それでも、実戦で培われた直感も相まって、彼はそれをなんとか凌ぎ切っていた。

『ちいっ！』

剣が交差した瞬間、シロウは全力で踏み込み妖夢を突き飛ばす。唐突に訪れる反動に、妖夢は咄嗟に身体を丸め、一回転したまま着地をする。

そうして少女が受け身を取っている間に、手にしていた剣を捨て、白黒の双剣を投影する。

『——口が達者だった割に、簡単に音を上げましたね』

妖夢は口元を吊り上げ、嘲り嗤う。

一矢報いたのが余程嬉しかったのだろう。誠実な精神を持つ彼女は、こんな莫迦にした言葉を投げかけることは無い筈なのに、今はこうして歪めた表情を維持している。

『そうだな、少々手を抜きすぎたようだ。——では、いくぞ』

そこからは、一方的な戦いとなった。

弓兵としての適性があるにも関わらず、剣での戦いを好むエミヤシロウ。

弓と違い才能の欠片も無いその動き。

しかし、彼が剣に費やした圧倒的時間と努力が、彼の剣技を一つの完成形へと至らせた。

『やはり、速いッ……………！』

先程まで一方的に攻め続けた妖夢だったが、今では真逆の立場にある。

いや、正確にはそれ以上と言った方がいいかもしれない。

何せ同じ二刀流でも、彼には型も無ければ、少女には経験もない。

今まで師を除いて剣を交わらせたことの無い彼女にとって、我流である青年の剣は厄介なことこの上無い。

型に沿った動きと言うのは、あらゆる攻撃に対して、独自の動きを持って対抗するものだが、エミヤシロウのそれは、風林火山の名を冠するに値するものである。

疾きこと風の如く——彼の剣筋は、疾風を思わせる鋭さと速さを誇り——

徐かなること林の如く——しかしその佇まいは整然としており——

侵し掠めること火の如く——その癖一度剣を振るえば、烈火をその身に宿したが如く猛威を振るい——

動かざること山の如し——まるでただの一度も敗走したことが無いと言わんばかりに、その在り方は雄々しく、それでいて底が見えない程に暗闇で覆われている——

改めて思う。何者なのか、コイツは。

何故こんなに強い男が、今までナリを潜めていたのか。

それとも、彼はもしかして——そんな結論を下そうとした時、左手に物凄い衝撃を覚えた。

握っていた筈の白楼剣が、握力の限界から規則的な回転と共に上に弾かれていた。

拙い。そう思ったがその思考よりも速く、無防備になった左の脇腹に強烈な蹴りが突き刺さった。

『じゅっ………はっ——』

余りの威力に胃から込み上げるものを感じながら、壁に背中を打ち付ける。

痛い。物凄く、痛い。

こんな痛み、師との修練の時にも味わったことがない。

師は厳しかったが、やはりどこかで幼かった私に手加減はしていたのだらう。

だが、目の前の男は違う。

容赦なく、無慈悲に、喻え相手が見た目幼い少女であろうと、躊躇いなく一撃を見舞う。

——そうか、慢心していたのは、私だったんだ。

初めての邂逅かいこうの時、あれだけ痛めつけられたにも関わらず、慈悲で決めた一撃のせいで、調子に乗っていたのかもしれない。

或いは、幽々子様への想いが先走りすぎた事も原因だったかもしれない。

何にせよ、膝が震えて立ち上がることもままならない。

どうしようもない中、エミヤシロウは私の目の前まで歩いてきたかと思うと、私の喉元に剣を突きつけた。

『——まだ、やるかね？』

それは、死刑宣告のようにも聞こえて。

だけど、その表情は憂いを内包しており。

そして何より——今の彼の姿に、師の姿が重なったことが決め手となった。

——ああ、未熟者だ。私は。

彼はこんなにも、邪気のない存在なのに——なんて、愚か。

『降参、です』

訓練という立場を利用して、私は彼に襲い掛かった。

その事実には彼が気づいているかは分からないが……いや、あれだけ露骨な殺気を出していたのだ、気づかない訳がない。

そんな私相手に傷を負わせたことを――彼が悪い要素なんて微塵もないのにも関わらず、後悔や自責の念に駆られている。

彼は目の前にいる私を、一介の少女としてではなく、一人の剣士として認めてくれていただけなのに。

それはとても誇らしいことなのに、私は彼を打倒することばかり考えて、彼の心を理解しようとしなかった。

こんなだから、いつまで経っても未熟者と言われるのだ。

『あらあら、こっぴどくやられたわね――妖夢』

そんな気まずい雰囲気の中、ほがらかな雰囲気の声が場違いに響き渡る。

『幽々子、さま』

未だにまともに喋ることは難しく、途切れ途切れに主の名を呟く。シロウ”さんは、先程までの憂い顔を、いつものモノに戻した。

『はい、お疲れ様。シロウ、妖夢』

『……ああ。しかし、本当にこれでよかったのか？』

『ええ、これぐらいしないと、納得出来なかったようだし』

……一体何の話をしているんだ？

困惑したまま妖夢が二人を交互に見つめていると、その視線に気づ

いた幽々子様が私の眼前まで近づき、同じ目線になるよう膝を曲げた。

『当然ながら分かってないみたいだし、ちゃんとして説明するわよ。実はね——』

そうして、幽々子の独白は始まる。

まさか——このシナリオが、彼女の筋書きだったとは、聞き終えるまで少女は思いもしなかった。

昇るのが億劫になるであろう長い階段を昇り終えたエミヤシロウは、いきなり驚く羽目になる。

何せ、入り口には西行寺幽々子が待っていましたと言わんばかりに立っていたのだから。

『こんにちわ、シロウ』

『こんにちわ……って、どうして君がここに？』

反射的に挨拶を返すが、次の句には疑問が続いた。

まあ普通、従者である妖夢が彼を迎えるのが定石だろうし、この疑問は当然であろう。

『その事で話があるの、万が一のこともあるだろうし、こっちに来て』

万が一、という言葉になにか不信感を抱きながらも、シロウは幽々子の後に続く。

到着したところは、初めて彼女と出会った縁側だった。

彼女は腰を縁側に下ろし、その隣をポンポンと叩いて、隣に座ることを強要している。

……多分座らない限り、変に難癖つけられたり、駄々をこねるなど迷惑極まりない行動を起こしそうなので、素直にそれに従う。

会って日も浅い関係なのに、彼女の心理がこういった場面のみ理解できる。物凄く子供っぽい。

そして、その結果に満足そうに頷くと、話を切り出した。

『さつき貴方は疑問に思ったでしょう。何故妖夢ではなく私が貴女を迎えたのか。貴方があの子と師弟関係となった次の日から、あの子はいつもの倍のトレーニングを積むようになったわ。最初は次に会う時の為に張り切っているのかと思った。けど、あの子が素振りをする姿には、憎悪や嫌悪といった感情があった。理解したわ、あの子は貴方を師弟として認めていない、と』

『——』

『普段から緊張した状態で生活も続けているし、まともに寝ているかも怪しかったわ。……あの子は普段は冷静で誠実なんだけど、私の事となると酷く盲目的な行動を取るのよ。今回も大方、突然現れた貴方を師として仰ぎたくないという気持ちと、得体の知れない貴方の存在は私に危害を及ぼす、そんな事を考えていたんじゃないかしら』

『……それは致し方無いだろう。実際私はどこの馬の骨とも分かってぬ存在。君を護る者としては、その行動も仕方ないことではないだろうか』

妖夢が生真面目で誠実なことも、主の為に身を粉にして仕えていることも、僅かな時間の共有で理解している。

良く言えば純粹、悪く言えば愚直な性格なのだろう。

『ええ、普通はそう思うでしょうね。けどね、私は亡霊よ。言うなれば死者、魂を縛られ、白玉楼の主として顕現している。死者を刺客やらから護るなんて、変な話じゃない？そんな矛盾した環境に、魂魄の家系として生まれただけで置かれている妖夢。あの子はそれを是としている———というか、生まれてこの方その為に剣技を習っていたものだし、それがさも当たり前だと思っているのよ』

産まれた時から定められたレール。抗う事の出来ない定め。

運命ともいえる境遇に置かれている妖夢を、幽々子は憐れんでいるのか。

『あの子の生涯の在り方を否定する訳ではないわ。でも、せめてあの子には苦勞に見合った幸福を与えてあげたいの。せめて、自分の時間を増やしたり、友人と話したりでもいいから、普通の女の子と同じ生活をさせてやりたい、そう思ってるのよ』

『———つまり、私にどうしろと？』

『今のあの子は貴方に対する下種な感情で満たされている。だから、まずはそれを払拭させてほしいの。武力と言う形でね。そこからはあの子次第だから、如何ともし難いけど』

『そうしないと、彼女も納得しないから、か？』

『それもあるけど———魂魄の家系には代々伝わる物騒な理念があ

つてね。それは、？切ってみれば理解る？——つまり、相手と対峙し、剣を交えることで、そのあらゆる動きから相手の心理や本性を見抜くという、心眼に近い理屈で相手を理解するという理念よ』

『それはまあ——物騒だな本当に』

そんな脳味噌筋肉な理屈を、一介の少女に押し付けるのは間違っていると思うぞ。

『だから、妖夢と戦ってボッコボコにしてやればいいのよ。単に実力を示すことでも必要だけど、受け身になることで見えるものもあるでしょうし、ね』

そう言つて幽々子は悪戯っぽくウィンクをする。

ボッコボコに、か……主が従者に向ける言葉とは思えんな。しかも邪気が無い分、余計質が悪い。

『あ、でも修練の為に訪れているんだから、それも怠つては駄目よ。最初は念入りに手加減して、貴方もあの子の本質を見極めなさい』

『注文が多いな——まあ、了解した。妖夢はいずれ本気で君を護る時が訪れる。その時までにはせめて、子供でいさせてやりたいのは私も同じだ』

だが、期待はしないでくれよ。そう告げて、私は立ち上がる。

先程から妖夢の規則的な掛け声は聞こえているので、場所は聞かずとも分かる。

幽々子には何も言わないまま、私は醜い感情に支配された少女の下へ向かった。

幽々子はその姿を見送り、呟く。

『貴方なら出来るわ。いや、必ず彼女の助けになる。だって貴方は

』

—— お人よしな正義の味方、ですものね。

一人取り残された可憐な亡霊の独白は、誰にも届くことはなかった。

『つまり、私は嵌められていたと』

幽々子様の話を聞いているうちに、重い打撃を貰った器官も落ち着き、普通に会話出来る程度には回復した。

『あら、心外ね。私は妖夢の為を思ってたことなのに、酷いわ』

よよよ、と扇子で顔を隠し泣いたフリをする。

長年の付き合いで、真面目なのか道化を演じているのかは分かるようになったが——それとこれとは別の話だ。

対してシロウさんは、バツの悪そうな顔をしている。

相変わらず私をボッコボコにしたことで、申し訳なさが込み上げているのだろう。

幽々子様がこんななせいか、余計その真摯な思いが伝わってくる。

『まあ幽々子様はほつという………シロウさん』

酷いっ！と涙目で叫ぶ幽々子様。ほつとかないと話が進まないのですね。

私は石が敷き詰められた地面に正座し、そのまま土下座した。

『申し訳ありませんでした。私の勘繰りで貴方に負担を掛けたこと、それと貴方に殺意を向けたこと、それを誠意を持って謝らせて下さい』

額と足がごつごつして痛い。だけど、一撃も入れてはいないものの、彼に無意味に剣を向けた事実には変わりはない。

これはその罪の証。安っぽく感じるけど、結構痛いんだから。

一歩、石の擦れる音と共に彼が近づいてくる。

幽々子様は移動時は浮いているので、足音を立てることはないから、必然的に彼が向かっていることになる。

一歩、私の胸は動悸で早鐘を打つ。

言葉を以て怒られるか、拳骨の一つでもお見舞されるか。額に頭をつけたままなので、その結果を過程から読み取ることが出来ない。

一歩、彼の靴が見える程の距離。

自然と身体が震える。まるで、悪戯をして親に叱られる子供の気持ちだった。

彼の動く気配がした。意を決して結果に身を委ねる決意を固めた――

が、しかし。

私に向けられたのは言葉でもあり、頭には手があることに変わりはない。

『君が謝ることはない、私はただ、君の稽古に付き合っただけに過ぎないからな。寧ろ稽古なのにムキになって、こっちこそ済ま

なかった』

掛けられた言葉は優しく、私の頭は割れ物を扱うかのように、優しく撫でられていた。

何故、どうして。

理解が及ばない。

思考が追いつかない。

理由が思い当たらない。

思考が混乱する。

『あ、……………はい』

靄がかかったような思考では、心無い返答しかできなかった。

本当は、謝るべきは私だけなのに。どうして逆の立場にいるんだ。

私は自然と、目頭に涙を溜めていた。

あらゆる感情がそれと同時に溢れていくかのように。

全ての罪悪を清算させるかのように。

『うんうん、これで無事解決ね』

『解決、なんだろうか』

『解決よ。ね、妖夢』

『へ？』

まさか振られるとは思っていなかったもので、間拔けな声が出てしまった。

……………解決、というか貴女が仕組んだんでしょうが。

——でも、元はと言えば私の行き過ぎた思考が招いた事態なのだ

から、幽々子様にどうこう言う資格は無い。

二人とも、私の事を思ってやってくれたことなのだ。
なら、せめて私が全てを終わらせないと。

『——はい、これでお仕舞いです』

目に溜まった涙を袖で乱暴に拭い、そのまま出来る限りの笑顔で終焉を飾る。

私ばかりがうじうじしていたら、手を差し伸べてくれた二人に申し訳が立たない。

『そうか。なら良かった』

そしてシロウさんも、少年のような笑顔で私に応えた。

そんな光景を、幽々子様は愉しそうに眺めている。

『これからは、貴方を本当の意味で師として仰がせてもらいます。
こんな未熟な身ですが、よろしいでしょうか？』

そう言つて、私は右手を差し出す。

彼はそんな光景を一瞬眺めたかと思うと、再び柔らかく笑う。

『勿論だ。此方こそ、よろしく頼むよ』

彼も右手を伸ばし、握手が交わされる。

ここに今、本当の師弟の契りが成立した。

『では、早速修練を行おうか。さっきまではなかったことにして、
これからが初めての——』

『ダメっ！！』

シロウさんが改めて修練を行うことを話している途中、幽々子様がいきなり彼に背後から抱きつき始めた。

あまりに突然の出来事に、シロウさんは慌て、私は思考が追いつかないでいた。

『って、幽々子様何を——！』

『ご飯食べたいの——！もうお昼なんだからいいでしょ——？』

お昼。その言葉を聞いて空を見上げる。

日は確かに真上を向いており、昼食には丁度いい時間帯だ。

『…………だからって、抱きつく程か？』

幽々子様の行動にシロウさんの口元が釣り上がっている。

幽々子様程の美貌を持つ者に抱きつかれれば、男性なら嬉しいものだと思っていたのだが、そうでもないのか。

そして、無意識に自分の身体——主に胸元——を触り、発育不全な自分の身体に心の中で涙する。

『死活問題よ——腹が減っては戦は出来ぬって言うでしょ？』

もう死んでますけどね、私がそう突っ込むも、未だに離す様子は無い。

分かっていたことだけど、何故この人はご飯のことになるとこうも子供っぽくなるんだ。

まあ、自分の料理を喜んで食べてくれるのは嬉しいことなのだが。

『致し方あるまい、此方から誘っておいてなんだが、お昼にしよう』

『そうですね』

私はこれから、彼の背中を追う事になる。

師のことを忘れた訳ではない。けれど、意固地に執着していても何も変わらない。

彼を目標にすることで、師を——祖父を超えることが出来るかもしれない。

その時が来たら、私は本当の意味で幽々子様に認められるんだ。

私もいつか、彼みたいな揺るがない強さが欲しい。

いつか手に入れてやる。今は夢想到近い願いだけど、何百年経とうと諦めはしない。

『さあ、行こうか』

再び差し出された手を、私は受け入れる。

いつの間にか、幽々子様もシロウさんの左手を繋いでおり、私達は横一列に並ぶ。

さながらその姿は家族のようで——少しだけ、頬が緩む。

そうして私達の姿は、そのまま白玉楼の屋敷の中へと消えていった。

剣士として、従者として（後書き）

久しぶりに書くキャラステータス、今回は妖夢さん。

当然ながら納得いかない部分もあるかもしれませんが、そこらへんは感想とかで言ってくれば色々模索して修正していきます。何せまだVer.βだし。

魂魄 妖夢

属性：善・秩序

筋力：D-

耐久：D

敏捷：C+

魔力（霊力）：C

幸運：C

宝具（程度の能力）：C

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：D 通常弾幕で傷つくが、威力によっては補正が掛かる。

保有スキル

仕切り直し：C 戦闘から離脱する能力。また、不利になった先頭を戦闘開始ターンに戻し、技の条件を初期値に戻す。

心眼（偽）：B 視覚妨害による補正への耐性。第六感、虫の報せとも言われる。天性の才能による危険予知である。

宝具

剣術を扱う程度の能力：C 対人・対軍 レンジ：0～10 最大補足：1人

剣術を扱うに於いての才能の総称。

その才能は主に刀に対して大きな効果を発揮するが、西洋の剣等のジャンルの異なる剣も初見である程度扱うことが可能。

その力は、斬撃を弾幕として飛ばすことができる程。

彼女の身の丈に合わない刀を軽々と振り回せるのも、この能力があるからこそ。

エミヤシロウとは別のベクトルで、剣という存在に恵まれていると言える。

楼観剣：D～B 対人・対軍 レンジ：1 最大補足：1人

魂魄妖夢が扱う二刀の内の長刀の方。

妖怪が鍛えたとされるこの刀には、一振りで幽霊10匹分の殺傷力を持つという概念が定着しており、対霊に於ける戦闘ではランクが2上昇する。

対してそれ以外の相手にはDランクで固定される。

霊の範囲には、精霊、亡霊、英霊と、霊の名を冠した者全てが該当する。

白楼剣：E～B 対人・対軍 レンジ：1 最大補足：1人

魂魄家の家宝であり、斬られた者の迷いを断つことが出来るという概念により、此方は高位の霊よりも、漫然とした存在である低位の霊に対して大きな効果を発揮する。

幽霊に使えば成仏するという概念から、ランクは一段階上昇する。
それ以外の相手には、ランクが一段階下がる。
魂魄家以外の者が扱くと、ランクが二段階下がる。

笑顔の裏にある願いと嘆き（前書き）

今回の話って殆ど読む価値ない気がする。
簡潔に言えば確認回。しかも穴だらけの。
モンハンとかのせいで放置気味だったとはいえこれはひどい（関係ない）。

笑顔の裏にある願いと嘆き

妖夢の問題も無事解決し、私達はお昼にありついた。

とは言っても、私はただ座っているだけで、作るのも盛り付けるのも配膳するのも、全部シロウと妖夢がやったんだけど。

私は、彼の料理を心底気に入っている。

料理と言うのは、別人が作れば喻え同じモノであろうと異なる味付けになる。

妖夢の料理も確かに美味しい。だけど、彼の料理は私の舌に合っているというか、兎に角私好みの味付けなのだ。

妖夢はまだ料理の知識はそこまでないけれど、紫の話だと彼の料理スキルは類い希なるものだとか。

それ自体は食したことで証明されたが、それに加えて相性も抜群となると、なんて巡り合わせかと、感動で身体が震えてしまいそうである。

いつそ専属コックとして雇おうか、そんな考えが一瞬過ぎったが、妖夢が泣きそうなのでやめておこう。

楽しみは間隔を空ければより熟していく。それに期待しよう。

まあそんなこんなで二人の協力によって出来たご飯をご相伴に預かりました。

敬語になってるのは、それほどまでに美味しかった、という意志表示です。

それはもう本当、さっきの専属コックの件を撤回してしまいそうになる程に。

妖夢も彼の作った料理に感激していたわ。というか、料理の師になつて欲しいと懇願してたわね。彼は二つ返事で了承してたけど。

本当、紫の言った通り、世話焼きで誰かを助けることが生き甲斐なのね。

そんな光景をオカズにご飯が進む。もう、二人とも可愛いわね。

ご飯も食べ終わり、食休みと片づけに並行して時間が過ぎていく。二人の会話の殆どは今の所、料理か剣の話ばかり。やれどこで料理を覚えただの、やれどうやってその剣は出していたのかと、先程までの険悪な雰囲気はどこへやら。

そうなる為に仕組んだ訳だけど、こうも心変わりするとは思わなかった。

やはり、あの子の根は純粹で直情的。思い立ったら一直線な、稀有な心の持ち主なんだ。

それが波乱を巻き起こす原因でもあるのだが、楽しいから問題ない。

『では妖夢、君さえ良ければ始めたいのだが』

『はい！いつでもいけますよ』

いい返事と輝いた目でシロウの言葉に応える。

その元氣っぷりに彼は僅かに苦笑するも、そのまま外へと向かっていく。

『では幽々子様、行つてきますね』

『いつてらっしゃい。後で様子見に行くわね』

ひらひらと手を振り、妖夢の後姿を見送る。

その姿だけでも、あの子が先にある出来事を楽しみにしているのが判る。

やっぱり、未来ある若者の成長を眺めるのはいいわね。

私はもう、不変の存在。

在るべき輪廻から外れ、悠久の鎖に縛られる亡霊だから、そんな姿に憧れると同時に、眩しく見えてしまうんだろう。

自分が生きていた時のことなんか微塵も覚えていないけど、別にそれを取り戻したいとは思わないし、過去に戻りたいとも思わない。憧れとは、僅かにでも可能性があるからこそ強く望むものであり、先が無い事を知っていれば、そんな感情すら湧き上がらない。

だから私は、その姿を愛でるだけで充分楽しめている。というか、そうじゃないと楽しめない。

私は今の人生でも十分満足している。閻魔様のお小言がたまにあるけど、それ以外は概ねのびのびとした人生を送っている。

本当は妖夢にも私の護衛なんてやめて、一人の女性として生きてほしい。そう思っではいるんだけど、魂魄の家系は通して頭が硬く、そんな願いは通らない。

確かに冥界の管理者って点では私の命は重要なかもしれないけど、ぶっちゃけ私死んでるし。

それに——あの子だって、私の実力を知らない訳じゃないでしょうに、全く。

『お茶が美味しいわあ〜』

ご飯の時に用意され残ったままの緑茶を啜り、誰に聞かせる訳でもなくそう呟く。

そんなまったりとした時間を少しだけ堪能していると、突然鉄の交わる音が聞こえだす。

どうやら修練を始めたらしい。不規則に、だけど整ったメロディーとなって白玉楼に響き渡る。

今までは妖夢一人でやっていたから、こんな風にあからさまに訓練しています、なんて雰囲気はなかった。

あの子の顔は見えていないけど、今のあの子はきつと、とても活き活きとしているだろう。

一人でやるより二人、数が多いことがマイナスになるなんてことは決して在り得ない。もしそうなるのなら、それは適材不適所だっただけ。見方さえ変えれば、誰だって役に立つようにこの世は出来ている。

まあ、彼をそんな有象無象のイチとして分けるのは冒涇でしかないんだけど。

『……………そう思わない？ねえ紫』

この場にいない筈の存在に問いかける。

すると、彼女の横に平行線が引かれ、そのまま独特の雰囲気と共に別の空間が露わになる。

そして間もなく、先程問いかけた紫の姿がひょっこりと上半身まで姿を現していた。

『バレてたのね』

『何年の付き合いだと思っているのよ』

少なくとも四桁は到達している付き合いの長さだ。

空間が裂ける瞬間に感じる違和感程度の感覚も、私には彼女が訪れる確信でしかない。

彼女が私の姿を観察していたことに気づけるのも、この付き合いの長さ所以。

彼女のお蔭で、他人の気配とかにはとても敏感になった。その相手が害があるかないかも含めて。実はさつきシロウが来るときに入り口に立っていたのは偶然ではなく、この力のお蔭だったり。

死んでるのに生きる能力に長けているのって、笑い話にしかならない。まあ、便利なんだけど。

『取り敢えずなににきたの？今妖夢はいないからお茶は出せないわよ』

『大丈夫、それを狙ってきたから』

………ということは、少なくとも妖夢がいると不都合な——それこそシロウがここに初めて訪れる少し前の時みたいな——内容を抱えてここにやってきたということになる。

『また、彼のこと？』

私の中で確信に近い質問を紫に投げかける。
紫はそれに頷くのみで、肯定する。

『今回はなに？特に聞くことなんてないと思うけど』

『ええ、実際聞くことはないわ。単に友人のよしみで、彼の事でも教えようかしらって』

『あら、それは面白そうね』

本当はそういうのは自身の目で確かめ、判断していくのがいいのだろう。

でも、私はここから殆ど動けない身。私情で動くとなると、一部の人にお小言を貰いかねないので、頻繁には無理だ。
だから、少しでも判断材料を貰えるのは嬉しい。

彼の人柄はそれなりに理解している。だけど、彼がここで何をしているのかは流石に分かりようがないので、それくらい聞いてもバチは当たらないだろう。

『だったら、最近の彼の動きでも教えてくれないかしら。どうせこっそり監視してたんでしょ？』

『監視とは人聞きの悪い。彼は悪いことをするような度胸のある人間じゃないことは、一応知ってるしね。まあ、保険は掛けてあるんだけど』

だったらそれは監視してるのと変わらないだろう、と私は肩を竦める。

保険がなんなのかはどうでもいいけど、やはり紫が本気を出せば、他人に気づかれずに遠巻きに眺めるのくらい訳ないんだと理解する。そして同時に、その監視に気づける自分を誇らしく思える。

『どこから話せばいいのかしら。じゃあ彼が仕事を始めたあたりからでいいかしら』

『ええ、彼はここ以外の仕事も掛け持ちしているんでしょ？どうせそうでなければここまで間隔が空くとも思えない。

彼、物凄い律義そうだし。待ち合わせの時間十分前には待っていそうな感じ。』

『ええ、彼は紅魔館での執事をやっているわ』

『……………凄いところに平然と行ってるのね』

紅魔館は吸血鬼の巣窟で、他にも数人の実力者が館を護っている。生半可な気持ちでは立ち入ることも、ましてやそこで仕事をしようなどとは思えない。

人間なのに平然とそこに特攻掛けている魔法使いもいるけど、まあ

それはいいわ。

それよりも、私は彼が不思議でならない。

妖夢と彼が出会い、あれだけ頑なだった思考が彼と対峙することであっさりと正された。それ程まで、彼のやる事成す事には影響力があるのかと。

彼はそんな生き方を目指している訳ではないのだろうけれど、現実として私を守護する役目から警戒心が人一番強い妖夢が普段より早く心を開いている以上、影響力自体は本物と言える。

益々彼に興味を抱く。

彼は私の悠久の人生に新たな旋風を巻き起こす存在となるのか、楽しみではない。

『続けるわよ。彼は今の所色々なドタバタがあつてまともに仕事はしていないんだけど、紅魔館の連中に彼という存在にインパクトを与える出来事は初日に起こったわ。偶然にも、彼がヴワル魔法図書館に足を運んだ時に、魔理沙が例の如く本を盗りにやってきたの。運悪くも紅魔館の面子が殆ど揃っている状態で、ね。彼は魔理沙に非があるうと、このままだと皆にボコボコにされると思い、いかにもな理由で彼女と一対一の戦いに持ち込んだわ』

——何とも彼らしい。

エミヤシロウは誰かの為なら自身が傷つくのは厭わない。

初めて妖夢と戦った時と一緒に。境遇は違えども内に秘めた想いだけは変わらない。

誰かを救いたいと強く願うココロ。

歪だけど真っ直ぐで、簡単に折れそうで芯はしっかりしている。

矛盾存在であるのに、まるでそれが当たり前前のように見えてしまう。

彼はその使命を全うする為に生まれてきたと言わんばかりに、正義の味方として在り続ける時間が長かったのだろう。

故に、歪なれどそれを矯正する強いココロを持っている。

理想など簡単に崩れるモノ。

だが、彼は言うなれば鍛冶師と同じ。

喩え剣が折れようと、それを再び溶かして新しいモノを作り、何度何度もハンマーで叩いて鍛えていく。

ヒトの精神なんだから彼だって何度となく挫折を味わい、絶望したに違いない。

だが、彼は今もこうして正義の味方として生きている。

それは彼が優秀な鍛冶師であり、幾度と膝を折るうとも立ち上がる不屈の精神があったから。

そして周りにその才能を開花させる要因が揃っていたから、彼はこうしていられるんだ。

ひとつでも欠けていれば、彼はあんな笑みを浮かべることは出来なかった。

そう考えると、彼はとても恵まれているのではなからうか。

『それで？……って、言われなくても予想はつくけどね』

『結果は彼の圧勝。彼が使う魔法とは異なる魔術という力で、魔理沙のマスターパークを正面から破壊して、カウンターで一発。その前に一回花の盾で防いだんだけど、それもきちんと防いだわ』

『花の盾かぁ。彼にしては随分雅なものを使うのねえ。私も欲しいわぁ』

『貴女は花よりも蝶じゃない？花は専売特許がいるし』

『そういえばそうね』

失礼だけど、彼はそんな華のある武器や防具は持たない主義だと思

つてた。

似合わない、というのもあるけど、やはりイメージが合わないのが一番の理由だったり。

『それにしても……魔理沙のマスタースパークの威力は私も知っているけど、それを真つ向から破壊するなんて、どんな芸当を？』

『それは、彼の使う魔術が大いに関係するわ。彼の使う魔術は投影といつて、物質を魔力で造り上げる力つて所かしら、見た目はね』

見た目は、という言葉に疑問を持つ暇を与えないかのように紫は言葉が続ける。

『まあそれで投影した武器が、魔力で出来たあらゆるものを無効化する槍だったの。それを思いつきり投げて、苦も無く倒したつて訳』

『へえ……普通に腕もあるのにそんな反則めいた能力まであるなんて、羨ましいわ』

『お互いに言えたことじゃないと思うけどね』

『私はこんな能力よりその投影能力で面白いものでも作りたいわ』

私の使える能力——それは死を操る程度の能力。

あらゆる生命を一切の抵抗を許さずに絶命させる能力。何の捻りも無い、凶悪無比な力。

他人が私を恐れる理由の一番の要因であるこの能力。私はこんな危ない能力を使う気は毛頭ないんだけど、やっぱり持っているだけで恐れられるものなんだろう。

死霊を操る程度の能力なんてのもあるけど、こっちはもつぱら冥界

にいる幽霊の統率及び管理に役立つだけで、危ない使い方をしようと思わなければ至って無害な能力である。

だから、彼の投影魔術みたいな面白味も応用性も無いこの能力は、私にとって重荷でしかなく、やたらに使えない能力だということも相まって、彼の力が羨ましいと思ってしまう。

『それはともかく、その時にシロウは魔理沙の八卦路を破壊、そのせいか最近魔理沙は大人しくなってるわ。彼は直してやりたいと思ってるらしいけど、今の所暇が無いからお預け状態なんだけど』

『あの魔理沙が大人しく、かぁ。想像出来ないわね』

『——そうでしょうね。まあ、彼女のやってきた事を思うと、大人しいのは喜ばしいことなのでしょうけど』

そう呟く彼女は、気のせいか遠くを見ているようだった。

幻想郷の均衡を保つ役割を担っている紫からしたら、平和なのは悪いことではない筈なのに……何故こうも悲しそうにするのか。

『他にも紅魔館のメンバーの一部にも心境の変化があったわ。フランドールはシロウのことを父と呼び慕い、パチュリーは彼に魔術の教えを乞い、その使い魔の一人は男性に対する免疫が付いた。レミリアは彼という存在に僅かに執着を見せ、咲夜は彼の存在に嫉妬心を駆られるようになったわ。些細な事でしかないけれど、その変化を与えたのはたった一人のヒト。彼はどこか、他人を惹きつける才能のようなものがあるんでしょうね』

私もその内の一人だし、と茶目つ気混じりの笑みを浮かべる。それを言うなら、私も妖夢も同類だ。彼という存在に何処か惹かれている。

理由は分からない。そんな神秘を内包しているからこそ、興味を抱いたのかもしれない。

……或いは、幻想郷には強い殿方がいないから、自然と皆が花の蜜に群がる蜂みたいになっているのか。

顔立ちは整っており、幻想郷の強者を簡単に倒せる実力者。

そして何より、猜疑心を抱き兼ねない程に他者に甘い性格なのに、女性に悪い印象は与えないその在り方。それが彼の最大の魅力なんだろう。

『……………つと、まあ現状報告はこんなものかしら。細かい部分は端折ったけど、特に問題ないレベルだし。でも気になるところがあるのよね、紅魔館と白玉楼を交互にバイトするなら、もっと間隔が短くてもいいんだけど、彼は微妙に間を作っているのよね。濃い目のキャラがいる場所に連続で行くと、流石の彼でも心労が祟るのかしらね』

『あら、うちの妖夢は手は掛からないし、疲れるんだったら絶対紅魔館が原因よ』

『どうかしらね、妖夢はいいとして、ここに一番手の掛かりそうなのがいるしね』

『むむつ、酷い言われようだわ。紫も同じ状況に立てば、紅魔館メンバーが束になっても貴女の面倒くささには敵わないわよ』

不機嫌に目を細め、互いに視線をぶつけ合う。

何年経とうと、こういう所は変に成長しないなあと心の中で笑う。

『——水掛け論はよしでしょう。それより、彼らの観察でも、ね』

逃げるように視線を逸らした紫の目の前にスキマが現れる。開いた先には剣を打ち合っているシロウと妖夢の姿があった。

状況としては、妖夢の打ち込みをシロウが難なくいなしているばかりの作業。

妖夢もあらゆる手段を用いて動いているようだが、彼の前では無意味だと言わんばかりに、隙あらば容赦なく蹴りを入れ込んだりもしていた。

そんな一方的な状況だけど、妖夢は寧ろ頬を緩ませ、楽しそうにしている。

たぶん、ああやって剣と剣の打ち合いをすること自体が久しぶり過ぎて、敗北感よりも今の状況を楽しむ気持ちの方が上回っているんだろう。

『あれで剣が本気じゃないのねえ。何とも信じがたいわね』

『彼としては本気ではあるんでしょうね。実際彼は剣を好んで使っている訳だし、手加減という訳ではないわ。ただ、それよりも使える武器があるのに使わないのは、まあ理由があるんでしょう』

その理由を知っているんでしょうに、よくもまあいけしゃあしゃあと。

まあ、別にそれを知りたい訳じゃないしどうでもいいんだけど。

『彼との間のわだかまりも取れたようだし……………あの子、これから強くなるわよ』

紫の言葉に私は無言で頷く。

それは私も考えていたことだ。一人でただ自主的に行う練習よりも実践形式——ましてや弾幕ではなく同じ獲物を使う者同士の戦いだ。普段では得られない経験を、ここで一気に積めるのだとすれば、

才能のある妖夢は目まぐるしい速度で成長するだろう。

『そうかもしれないけど……私としてはこれ以上強くなってほしくない、かも』

別に私は妖夢に守ってもらうことを強要したい訳じゃないし、彼女が強くなっても喜んであげることぐらいしか出来ない。

あの子に言えば侮辱になるんでしょうけれど、やっぱり女の子なんだし、料理とかお掃除とかやっていた方がいいのではないかと。

義務なんかであの子の可能性を潰したくない。そう思うのは親心みたいなものなのかしら。

『——ふふっ』

『その意味深な笑いやめてくれない？』

ああ、私の考えていることなんて丸わかりなんだろうな。

付き合いの長さによるアドバンテージは、お互いにあるってことね。

『さて、私はそろそろお暇させてもらうわ』

二人の姿を写していたスキマが閉じていく。

変わり映えしない剣戟を振るう映像を遮断されるのを見送り、紫の方に顔を向ける。

『やっぱり、彼にバレたくないのかしら？』

『ええ、私のイメージは謎の人物Xとして認識されていた方が都合がいいんですもの』

の割にバレル可能性がありそんな行動ばかりやっているだろう、と言いたくなつたが自粛する。

彼女は案外抜けているところがあり、そこを指摘すると怒るのよね。傍から見れば物凄い可愛らしい怒り方で、それを指摘しても怒るし、面倒なのよね。

『彼の前にはいつ現れる気なの？』

『少なくともまだ先の話よ。長くもなく短くもなく、悠久とも須臾とも取れる時間は、彼とその周囲の世界をどう変えるのかしらね』

不敵な笑みを浮かべ、そのままスキマの先へと消えていく。
とたんに静まり返る世界。あの二人の戦う音が聞こえないということとは、休憩中なのかしら。

『さて、私も二人のところへ行こうかしら』

孤独はどんなに長く生きても慣れるものではない。

無音の世界は、孤独の証明。

そんなものに望んで浸る程、人生を謳歌してはいない。

故に私は喧騒を求める。いつか訪れる孤独を眼前にして後悔を抱えない為に。

優雅に、そして華麗に。私は前へ進む。

内に秘めた未来への恐怖を、悟られない為に。

幽玄の少女よ、常に優雅たれ。

笑顔の裏にある願いと嘆き（後書き）

久しぶりに書くこと無い。

でも書かないといけない義務感にかられ、適当なことでも話します。

この小説は4部構成を予定しており、今はまだ1部というところでもな事実。

こんなでいいのか。流石にグダグダが過ぎるんじゃないかと、たまに思ったりもします。

多少の省略（なんも考えてないし）もいいかもなーと思ったり。少なくとも日常みたいな成分は結構導入した気もするし、ストーリー絡みの方面で少し歩いた方が見ている人にもいいのかもしれない。投稿スピード遅いし。

まあそれでも長くはなるんですが。纏めすぎると短くなり、そうしないと長くなる。そんな小説だから、匙加減が難しい。

調子に乗って書きまくる時もあるれば、今回みたいに書く必要性を感じない内容のものを作ったりと、大分混乱しています。

おそらくですが、次の投稿が2010年最後になるかもです。

まあ今のところ新年のサプライズ（んな大層なもんじゃない）もやるかなーとか適当に考えてたりもしてます。

まあ、振っておいてなんですけど期待はしないでください。

心の抑止力、友人の存在（前書き）

あけましておめでとうな時間に投稿です。

前回感想だかで、あと一回投稿すると言ったが、アレは嘘だ。

ていうか、キリがいいだろうと予定を変更し跨いで直ぐに出そうと思っただけですよ。

まあそんな下らない理由ですが、今年もよろしくお願いいたします。

心の抑止力、友人の存在

——同日。

エミヤシロウが白玉楼で剣術を教えている数刻前、私東風谷早苗は自身の症状を克服する為、再び永遠亭を訪れていた。

もう少し日を空けたほうがいいのではと考えたりもしたが、早くどうにかしてもらいたいという気持ちの方が勝った結果、今に至っている。

治してもらいたいという気持ちも大きいけれど、優先度的には永琳さんのシロウさんのことでの報告を聞きたいという部分の方が要素としては強かったり。

彼の姿を視界に捉えることない日々、脳裏に浮かぶその姿は霞むこととはないが、やはり本物が一番なのは当然。

離れる切っ掛けを作った身としては、我が儘を言える訳がないんだけど………やっぱり会いたい。

だけど、会う為には自分の中に眠る謎の症状をどうにかしないといけない。

もどかしいけど、一步步づつ着実に進んでいかないと、逆に遠回りになっっていましたなんて結果にもなりかねない。

この自制心が、症状の改善に繋がれば一石二鳥なんだけどなあ。

『こんにちはー』

玄関の戸を数回ノックし、そのまま入る。

前回とは違って抵抗はない。一応永琳さんに面識はあるし、玄関で待機くらいなら文句は言われないだろう。

『はいはい、今行きまーす！』

返ってきた声は、初めて聞くものだった。

声域からして、私と同年代と予想させる女性のもので、その声の正体がパタパタと足音を立てて目の前に姿を現す。

『えっと、診察ですか？』

私の予想通り、目の前の女性は私と同じくらいの肉体年齢だった。服装も黒のブレザーに薄桃色のスカートと、前まで女子校生だった自分としては親近感が湧くと同時に、医療の場には似つかわしくないものだった。

だけど、そんな姿にひとつ、歪なモノがある。

『あの、どうしました？』

頭部でピコピコとたまに動くウサ耳。それが異物の正体だった。私は目の前の女性の言葉を無視し、無意識に異物に手を伸ばし、触れた。

『っ、ひゃあ！なにするんですか！』

『え？あ、あれ？私なんでこんなことを……………』

驚きの声に私は我に返り、手を引っ込める。

さつき以上に上の耳を動かし、顔を真っ赤にしているウサギの女性。見た目不相応にも、等身大なイメージより、抱き枕にするぬいぐるみみたいなイメージの方が第一印象で強くなってしまった。

『ごめんなさい。あまりにも珍しくて、つい』

前回小さな子供にもついていたけど、あれは本当に小さかったから

違和感はなかった。

別に目の前の彼女の姿に違和感があると言いたい訳ではない。寧ろ似合いすぎて抱きしめたい程だ。

幻想郷なんだし、別に問題はないと思う。だけど、やっぱりまだ少し慣れないなあ。

『い、いえ。こちらこそ怒鳴ったりしてごめんなさい』

深々と謝罪の言葉と共に頭を下げる。

私もそれに倣い、同じ動作を行う。

礼儀正しいいい子だな。いいお友達になれるかもしれない。

『えっと、それで診察ですか？』

仕切り直しと言わんばかりに同じ言葉を問いかけてきた為、私は肯定の言葉と共に軽く頷いた。

『では、ついてきて下さい。今日は患者さんがいませんし、すぐに始まりますので』

通路を歩いている時に色々説明を受ける。

一度来てるから、なんとなくはわかってるけど大人しく聞いておくとは言ってもやはり必要最低限の事項は理解していた部分と同じだったので、退屈な移動時間だった。

程なくして前回と同じ部屋の前まで到着する。

『師匠、患者さんがいらつしやいました』

『そのまま入れて頂戴』

永琳さんのお弟子さんなのか、この人。

薬学に精通している人って、物凄く理知的なイメージが強いけど、永琳さんも彼女も気さくで話しやすい。

そういった接し方が患者とかに対して好印象を与えるんだろうけど、二人のそれは仕方なくというものではなく、自然なもの。

義務などで他人を慈しんだり接したりする外の人間とは違う、打算のない在り方。

私の中には、醜いナニかが渦巻いているのと比べ、なんて清いんだろう。

二人の近くにいれば、この人達みたいになれるかな。

『こんにちは、あれから変化はない？』

『はい、特になにも』

戸を開けた先には、前回と同じ態勢で回転椅子に座っている永琳さんの姿が。

足を組むポーズって、彼女みたいな脚の綺麗な人がやると扇情的なんだろうな、と何気なしに考える。

『師匠はこの人の治療を経験済みなんですか？』

『ええ、丁度貴女が薬の材料を採集しに出ていた頃にね。二人とも自己紹介はした？』

『そういえば、してません』

私は呟くように永琳さんの言葉に答え、ウサ耳さんは私に相槌を打つ。

まあ患者と医師で自己紹介するなんてこと、外ではなかったけど…

……幻想郷は世界が狭いですし、一度切りの出逢いで終わるなんてことそんなに無いのかもしれないね。

やはりまだ外の常識が抜けきってない。ここにいる以上必要でない常識を取捨選択しないと、色々な方面で苦勞する羽目になるだろうし、こっち方面も努力しないと。

『なら丁度いいわ。彼女は鈴仙・優曇華院・イナバ、長いからうどんげって呼んであげなさい。そしてうどんげ、彼女は東風谷早苗、妖怪の山で神社をやっているのは彼女よ』

『うどんげさん、ですか。よろしくお願いします』

『出来れば鈴仙って呼んで欲しいかなあ、なんて。こっちこそよろしくね』

お互いに軽い握手を交わす。

握手って堅苦しい感じが強いかもしれないけど、触れ合う感触で距離が近づいているんだと実感できるから、私は結構好きかも。

『——ってあれ？私永琳さんに住んでいる場所教えましたっけ？』

『言ってないけど……。そうねえ、貴女は自身が思っている以上に有名人なのよ？何せ幻想郷の治安を維持している、博麗霊夢のイメージであつた巫女服を着て颯爽と現れ、同時に異変を起こしたりもすれば、そりゃあ有名になってもおかしくないわよ。まあうどんげは知らなかったみたいだけど』

『あ、あの時の事は思い出させないで下さい……。確かに少しやりすぎだったと反省しています』

あの出来事は、思い出ただけで顔が熱くなる。

外での信仰を得られなくなった神奈子様と諏訪子様。その状況を打開すべく、幻想郷で信仰を得ようと縄張りを広げる目論見を立てていた。

が、当然ポツと出の新参者が世間の厳しさを知るはずもなく、霊夢さんによる多少の八つ当たりも含まれた制裁を貰って解決。

無知は罪、その言葉をこれでもかという位に実感させられた事件だった。

『いいのよ別に。意外とやりすぎ位が丁度いいのよ、ここは娯楽に乏しい世界だから、誰もが酒の肴にでもなりそうな出来事を内心欲しているの。それに、私も異変を起こしたことあるし、貴女を咎める資格はないわ』

『はあ、そうだったんですか』

まさかのカミングアウトに、生返事で答えるしか出来ない。

だって永琳さんのイメージは、誰にでも愛される診療所の先生って感じだったから、まさかそんな事をしていたとは夢にも思う筈もなく、ただその言葉の真偽を聞き届けることしか出来ない。

『私から異変の詳細を言う気はないけど、お互いに気持ちのいいものではないことを理解してるんだし、大目に見てね』

興味がないといえ嘘になるけど、他人の黒歴史を掘り下げて楽しむ趣味はない為、大人しく永琳さんの言葉に頷くことにする。

『ん、了解。では診察を始めるから座って』

永琳さんに促され、椅子に座る。

鈴仙さんは永琳さんの隣に移動してその動きを観察している。

技術は教えてもらうものではなく盗むもの、とどこかの技術屋さんが言っていたが、まさにその通りなんだろう。

まだ大したことをしているとも思えない永琳さんの動きですら、鈴仙さんは真剣に観察している。

これがプロ根性って奴なんだ。凄いな、懂れちゃうな。

『精神的には安定しているようなのは良好だけど、それはあくまでその要因が近くにいないからの安定であって、もし原因と直面すればかなりの確率で症状が浮き彫りになるでしょうね』

『そう、でしょうね。私も薄々分かっていたんですが……どうすればいいんでしょう』

『此方が考えた方法としては、ワザと症状を発症させる要因を起こし、それを貴女が自覚する。それが有効だと思うの。今までは周囲の人達が自覚していなかったから何も変わらなかったけど、今回は違うわ』

『で、でも……やっぱり怖いです。自分が自分で無くなっていく感覚、しかも他人に危害を加える可能性があるとなると——』

想像の恐怖に身を震わせる。

現実に関わりなく近い妄想程、境界が曖昧なものはない。

どちらが妄想でどちらが現実か、分からなくなってしまえば自己の崩壊は免れない。

もっと穏便な方法はないのか、そう問いかけようとしたとき、永琳さんはパン、と手を叩き、言葉を切り出した。

『そういえば、貴女にエミヤシロウの情報を言うのを忘れていたわ、

忘れると困るし、今説明するわね』

瞬間、自分の何かがズレる感覚がした。

この感覚、どこかで――

『彼に再び会ったときには、至って健康そうだったわ。とは言ってもそれは外面的なもので、取り繕ってはいたけど右足が僅かに動作不良を起こしていたわ。本人は人助けの結果だと言っていたから、道中でひと悶着あったことは確かでしょう』

また、私の知らない所でシロウさんは怪我をしている。

人助けだと言っていたが、もしかしたら心配させまいと吐いた嘘かもしれない。

彼は優しいから、相手に非があるうと罪を被る可能性だってある。

だから、そんな彼を見守る存在がいないと、生前の彼の末路の二の舞になってしまう。

不安で胸が苦しくなるうとも、私がその役を買って出ることとは出来ない。

私では、かえって枷になるのは目に見えているから。

『安心して、医者として治療は施したわ。会話からも精神が安定しているのは分かったし、取り敢えずは貴女が気に病む要因は無いと考えていいわ』

『そう、ですか』

『――むしろ充実している風だったわよ。私は紅魔館の当主であるレミリアに聞いただけだから、見解に語弊があるかもしれないけれど、彼の妹であるフランドールは、彼を父と呼び敬愛しているらしく、その仲の良さは実の姉が保証する程らしいわ』

……父？

血の繋がらない親子。

敬愛は愛情へ、愛情は恋へ。

可能性はある。いや、可能性しかない。

外では罪として記されていた行為は、ここでは無意味。
故に、その呼び方に意味はない。

今は安心かもしれないけど、いずれは私の敵となる。

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ——！！

『……』

宥めるような言葉と共に優しい感覚が頭に掛かる。

気付くと永琳さんが私の頭にカルテを置いていた。

置いた、というより叩いた、という方が適切なのかもしれないが、
あまりにも暖かみがあったので意味が違っていた。

『気付いていないでしょうけれど、またおかしくなっていたわよ』

永琳さんの言葉を聞き、慌てて記憶を掘り返す。

……漠然とだけど、普段の私とはかけ離れた思考をしていた、か
もしれない。

あれが、私の本性なの？

そう考えると、恐怖により身体が硬直してしまう。

『こうやって誰かに教えてもらって意識を持つことで、知れなかつ
たことも知れる。単純で医者じゃなくても出来ることだけど、これ
が一番効果的だと思うわ』

『そうなんですか……』

彼女の説明に対し生返事で答える。

今の私には、その自覚によって生まれた恐怖心を表に出さないことで精一杯だった。

『——怖い？』

『っ！』

バレてしまった。

昔の自分だったら恐らくバレないであろう微々たる変化すら、今の私には隠すことが出来ない。

出逢いが私をこんな風にした。ここでこの事実を否定してしまえば、霊夢さんやシロウさん達との出逢いに込められた意味さえ否定してしまう。

だから、認めなくてはいけない。

今の私は、馬鹿正直な人間なんだと。

偽ることで個を保ち続けていた自分は、もういないのだと。

『——怖い、です。二重人格ではないってことは、これは間違いなく自分の中に存在する想いなんです。自分に穢れがないなんて思っ
てはいませんけれど、それでも——どこかで自分はそうではない
と思い、逃げていたのかもしれない。だから、僅かな意識にし
か残らなかった残滓にすら、恐怖を覚えてしまったのかもしれない
ん』

さっきの記憶量ですらこんななのに、これ続けるに連れて思い出す量が増えていけば、どうなるのか分かったものではない。

最悪、負の感情と意識が後退してしまうのでは、そんな事ばかり考えてしまう。

『それを認識するのは、悪いことではないわ。自分の悪い所を理解することで、対策を講じれる。今のようね。辛辣かもしれないけれど、善のみで構成された生物なんて存在しないわ。比率こそ違えど、誰しもが醜い部分、後ろめたい部分が存在するのよ。私だって、うどんげだつてね』

永琳さんは悲しそうな表情を、鈴仙さんにはどこか暗い影が射している。

彼女の言う通り、二人にも誰にも知られたくないようなナニかを抱えているのか。

それを聞いて、少しだけ安心している自分がいる。

他人と痛みを共存している錯覚が、私を落ち着かせる。

『だから安心して、とは言いにくいけど、絶望する必要はないわ』

『はい、ありがとうございます』

今度はきちんと目を見てお礼を言えた。さつきとは精神状態が違う証拠だろう。

『それにしても、私の変化ってそんなに分かり易かったですか？』

『分かり易い、というか、人の変化というのは、目を見れば分かるもののよ。目は口ほどにものを言う、という言葉があるけれど、正にその通りな訳。そうね、貴女の場合——まず視点が途中から定まらなくなつて、まるで死人のような、光の無い瞳みたくなくなつていたわ』

『死人……………』

私はその表現に肩を落とす。

死人みたいな目って、どれだけおかしくなっていたんだか。

『取り敢えず、私以外の信頼できる相手に事情を説明して、症状の改善に協力してもらうことも出来るけど、そこは判断を任せるわ』

『はい』

『さっきも言ったけど、影を持つことは悪いことではないわ。マイナスを理解してこそ、プラスが目立ち、プラスを伸ばすことで、マイナスを改善しようと思う。自分の悪いことを理解してこそ、努力をする意思が湧く。だから、それさえ覚えていれば貴女は悩むことはなくなるわ』

『プラスもマイナスも、互換性によって成り立っている……ってことですね』

あの黒い感情も自分なんだと受け入れることが一番なんだと、そう言いたいのかな。

抑制するのではなく、共存する。

自然体となる方が、否定するよりよっぽど楽なのは分かる。

けど、そう簡単に出来るようには思えない。

それが、次にすべき私の努力なんだろうけど、今度は今回程すんなりとはいかないのではないか。

勘だけど、これを持ち越えたら私は生まれ変わりそうな気がする。

それ故に、飛び越えるハードルは高いって事なんだろうけど。

『解釈は自由だけど、まあその考えで問題ないわ。貴女の努力次第では、次の診察が最期になると思うので、それを踏まえた上で行動

を起こして頂戴。うどんげ、彼女を送って差し上げて』

『はい、分かりました』

それだけを告げると、永琳さんは再びカルテに向かい、此方を見ることは無くなった。

私は鈴仙さんに促され、一礼してその場を立ち去った。

一人静かな空間でカルテを眺めていた永琳は、ふと顔を上げる。

『あの子は余りにもエミヤシロウに依存してしまっている。今彼女がこの問題を解決しても、彼に会わせるのは得策ではないかもしれない。けれど、その事実をあの子に告げてしまえば、また抑圧する形になってしまう。なるようにしかならないって、歯痒いわね……』

…』

どうして東風谷早苗という存在がエミヤシロウに固執するようになったのかは分らない。

だが、あの反応は異常としか言いようがない。

僅かな挑発の意味も込めて告げた事実だったが、視線で貫かれる錯覚すら覚えてしまった。

死んだような目だなんてのは嘘だ。あの時の彼女は、下手をすれば単身紅魔館に乗り込んで原因を取り除くまで止まらないキルマシーンに成り下がっていた可能性すらある。

死という概念とは程遠い私が、死を意識してしまう程に、あの子の瞳は他者を恐怖させる力があつた。

うどんげにはそういったのが効かないし、座っている私と違って視線が高いところにいたから、その事実を知ること無かつたのが幸

いだ。

『医者 of 癖に、これ以上は私に出来ることはないなんて………これじゃあダメね』

私とあの子の関係では、これ以上あの子の事情に踏み込むことは叶わない。

だけど、うどんげは違う。あの子達はいい友達になれる。

だけどまだ絆が完成していない以上、うどんげはあの子の黒い部分を知るのは早い。

そしていつかは、患者と医者という関係を超えて尚、強く支えあう存在になって欲しいと、私は願う。

暗い想いを持っているのは、誰だって一緒なのだから。お互いの闇を理解し、支えあえるような理想の在り方を、二人なら実現出来る気がする。

うどんげにも、私達以外で理解してもらえる——自分の過去を語れるような——存在が必要なのだ。

そういった意味では、今回の出逢いはとても運命的と言える。

『医者が神頼みっていうのも変かもしれないけど、今だけは神にも縋るわ。早苗と鈴仙の絆が強くなることをね』

自分以外誰もいない空間でそれだけ呟くと、満足したように再び力ルテに視線を戻した。

鈴仙さんに連れられて、今廊下を歩いている私達。

肉体的な差が無いせいか、初対面にも関わらず抵抗なく会話が成立していく。

『そうなんですか。鈴仙さんは薬品とかはまだ作らないんですね』

『うん。正確には風邪薬みたいなのは作れるんだけど、もっと込み入った、それこそ荒唐無稽で信じられない様な内容の薬とかは無理』

信じられないような薬、かあ。

夢みただけどあつたら凄い薬も、永琳さんは作れるってことなんだろう。

一番最初にイメージ出来たのは、不老不死の薬。万病に掛からない、医術の境地とも言える状態にする薬。

まあ、それは流石に色々と超越してる幻想郷でも作れないよね。想像つかないし。

『———というかさ』

『何？』

『さん付けはやめてほしいかも。こうやって気兼ねなく喋れる関係なんだし、敬語も使う必要ないよ』

鈴仙さんは——鈴仙は真剣だけど優しい声で、私に提案する。

『……………うん。じゃあ遠慮なく呼ばせてもらうね』

『うん！』

お互いに笑顔で握手する。

さっきのとは違う、もっと心の籠った繋がり。

そつえば、ここでの友達って、霊夢さんを含めたら二人しかないな

いや。

自分の人との繋がり少なさを再認識し、少しだけ困惑する。
一人じゃない分いいのかもしれないけれど、もう少し積極的に友達作りに励んだ方がいい、かも。

『……………ねえ、あの時師匠の会話の中に入っていた、エミヤシロウって人は誰なの？』

『シロウさんはねえ、外来人なの。最近ここに訪れた、とても優しい人。前までは私の住んでいる神社にいたんだけど、私のせいで今は疎遠になっちゃったんだ』

改めて事実を再確認すると、彼といた時間は多いとは言えない。
にも拘らず、私は彼を忘れることは出来ない。

罪悪感とか、責任感とかではない。
もつとこう、胸が締め付けられるけど、その苦しさは決して苦痛とはならない。寧ろ心地よい感じがする、そんな気持ち強い。

『……………そつか。会いに行ったり探したりはしないの？』

『したいけど、今の私じゃ駄目なの。それが理由でここに来たんだし、それに神社の仕事もあるから常についていう訳にもいかないし』

それきり、無言の時間が続く。

意図せず暗い雰囲気になってしまったからどうにかして改善しよう
と意気込んだ時には、もう玄関前にまで辿り着いていた。

『それじゃあ、お大事にね』

『うん。——ねえ、お願い、聞いてもらえるかな』

鈴仙の方を振り向かないまま、問いかける。

ほんの僅かな時間だったけど、この暗い雰囲気を残したまま去りたくない故に、必死で考えたお願い。

『出来る範囲でなら、いいよ』

『なら、さ——今度、いつでもいいからさ、遊びに来てくれないかな。山の頂上にある神社、私の家に』

クルリと振り返ると、そこには呆然とした姿の鈴仙がおり、内心笑ってしまった。

いきなりこんなお願いするなんて確かに予想外かもしれないけれど、ここまで放心するものなのか。

『で、いいかな？』

再び問いかけると、鈴仙は思い出したかのように反応する。

何だろう、多分こんな姿だし私より年上なんだろうけど、今を見てもまるで私のが年上な錯覚を覚えてしまう。

『——っ、うん！是非、喜んで行かせてもらおうよ』

一瞬の間。最高の笑顔と共に、返事が返ってきた。

私はそれに応えるように、同じ笑顔を返す。

私達は今日、友達になりました。

心の抑止力、友人の存在（後書き）

過去に最萌決定戦だったかで一位を取った鈴仙・優曇華院・イナバの紹介です。

鈴仙・優曇華院・イナバ

種族：玉兔（月の兎）

能力：狂気を操る程度能力

二つ名：狂気の月の兎

東方知らない人のためにネタバレは控えたいので、また説明できることは少ないですが、当たり障りのない範囲で。

狂気を操る程度能力とは、物事の波を操るものであり、物質の波、精神の波、電磁波、音波など様々な波を操作し、相手を狂わせるものだと言われる。暢気あるいは狂気へと精神を操り、存在の位相をずらすことで存在を接触不能・知覚不能にし、その振幅によって無限遠方と意思疎通し、あるいは隣の声すら聞こえなくする、といった様々な用途があると言われる、能力だけを見たら最強クラスだが使いこなせていない、そんなキャラ。

能力や二つ名から疑われそうだが、とても純粋なキャラで、いじられキャラです。

周りからは、自分からは人を襲うこともない変り種の妖怪と思われるていたりもする。

頭についている耳はつけ耳なのか本当なのは、不明。尻尾も資料

によつてあるかないかわかれるが、個人的に無い方がいい。

夜雀の願い、継承される能力（前書き）

今月厳しいと言いながらなんだかんだで投稿。

最近なんか安直な内容ばかりな気がして、読者様がマンネリ起こしていそうで不安です。てか、本当自分で書いてて文遣いが適当になりつつある。

もっと小説読むべきかな。厨二文章載ってる小説教えてー。
いや、普通の文章書けるようになってからか。

夜雀の願い、継承される能力

あれから妖夢と日が暮れるまで剣を打ち合うという単純作業をこなした。

教えることは最初から無い。ならば、実践形式でひたすら戦うしかない。

彼女の剣術は師から受けた物であり、それを私のやり方で崩す訳にはいかない。戦い方にしろ、自分に合ったスタイルが私のものと同じという偶然が起こり得ることは稀だろうし、戦いの中で私が見極めたり、彼女自身が気付く他ない。

『今日はこれまでだな。よく頑張ったな』

『あ……………ありがとうございます』

平然としている私に対して、目の前の妖夢は両手を両膝に置いて、やっと立っていられる状態である。

息も汗もかいていない私、打ち合いを何度中断して、服を取り替えたり水分補給を行ったか分からない妖夢。一連の出来事を最初から見ていた者がおれば、実力の差こそあれど私の異常性に気付くであろう。

『お疲れ妖夢。はいお水』

そんな中、マネージャーよろしく妖夢のことを献身的にサポートしていたのは、護るべき対象であり主である幽々子であった。

当然最初は妖夢も抵抗した。プライドとは違うが、やはり奉仕する立場の存在に真逆の行動をさせるのは、外の常識と無縁な幻想郷であろうと、有り得ない事なんだろう。

だが、疲労が蓄積される中、妖夢にはそんな余裕もなくなり、三度目の休憩では結局折れて今みたいな状態に至った。

狙った訳ではないが、これを切っ掛けに二人の関係が堅苦しいものではなくないかな、と考えたりもした。

幽々子はそれを望んでいるし、妖夢も恐らく心の隅では同じ気持ちだと信じている。そうじゃなきゃ、誰の制約も受けない中、幽々子をここまで敬愛し、護ろうとする事もないだろうから。

打算の無い救いを与えるのは、私だけで充分だ。

『……………未だかつて、こんなに水が美味しいと感じた日はありません』

普段は飲み物をそんなに飲むことの無い妖夢だが、今は豪快に一気に飲みをして、一息吐いている。

『君の師との修業では、ここまではしなかったのか』

『は、はい。あの頃の私は心身共に幼かったので、限界を超えた修業は成長に影響が出ると踏んでいたでしょう。倒れるまですることはありませんが、それ以上の無茶はしませんでした』

……………それは偏に、スパルタ過ぎると訴えているのか？

気のせいかな真実か、彼女の見上げる視線はそんな想いが込められているように思えてならない。

あと、成長の阻害が起こる訳ではないが、妖夢の腰を落として剣を構えるスタイルは、O脚が進みやすく女性にとっては喜ばしくない状態に陥ってしまう。

剣士として昔から仕立てあげている癖に、女性を捨てさせる風には微塵も感じない。

その師とやらは、とても他人に気を配れる御仁だったのだろう。

『それでも、こんなに小っちゃいけどね』

おちよくるように妖夢の頭をぽんぽん叩く。

見た目10センチ程差がある二人では、その行動も容易く実行できてしまう。

幾度となく、こんなやり取りがあったのだと分かる位、その一連の動作は自然なものであった。

『やつ、止めてください！汗が、きたな——』

『貴女の努力の結果を汚いとは思わないわ。寧ろ誇らしいわ』

振りほどく力も無い妖夢は、言葉での拒否を図ろうとするが、それは意味なく終わる。

それどころか、わしゃわしゃと乱暴に障り続けている辺り、意地悪なのか本気でそう思っているのか——何にせよ、誇らしいという思い自体に、嘘は無いのだけは分かる。

母親が努力をする娘を見て喜びを覚えているような、そんな雰囲気。慈愛に溢れた、見ている者すら癒してしまう、そんな姿は、まるで

『シ、シロウさん！助けてください！』

涙目になりながら助けを懇願している妖夢。流石に止めないと、休むことも出来ないな。

『そろそろ止めたらどうだ？分かってやっているのだろうが………』

『ちえっ、つまんない』

私が言うと、口ではそう言いながらも簡単に手を引いてくれた。こっちが助け舟を出さない限り続ける気だったな、これは。

『それでは、私はこれで失礼するよ。妖夢は出来る限り休むように、幽々子は今日ぐらい満足の行くまで彼女を休ませてやってくれ』

『しかし、幽々子様の 식사가………』

『それなら心配いらないわ。私、こう見えて料理出来るのよ？ 簡単なだけど』

その事実には、私達は硬直する。

衝撃すぎる事実には、意識が回復するまで10秒は掛かる程。

『心外ねー。妖夢がいるからしないだけで、それでも淑女の嗜みはわきまえているつもりよ』

ぷくー、と幽々子は頬を膨らませ、抗議の意思を示す。

怒る気持ちは分からないでもない。だが、私達じゃなくても、彼女を知る者ならこの事実には驚愕するだろうという確信がある。

『——まあいい、とにかくそれなら安心して休めるだろう。無理をして余計に迷惑を掛ける方が、君には重いだろう？』

『そ、そうですが——』

反抗しようとするも言葉に詰まる妖夢。

頭ではそれが正しいと理解しているが、理性がそれを許さない、そ

んな感じが。

私も、そんな感情に何度も押されたな。若さ故の、と言ったところだな。

だからその気持ちも理解出来るし、容認するまでの苦悩、認めても残るもやもやもまた、経験済み。

『たまには護られたり、支えてもらうのも、悪くないものだぞ?』

——だからこそ、彼女の気持ちを理解り、同調出来る。

自分の経験を参考に、未熟な者へ助言をする。それが大人の仕事なんだ。

『——ッ』

私の言葉がトドメとなったのか、苦い顔をするも、反論はしない。押し付けることだけはしちやいけない。それでは、意味がないんだ。彼女を成長させる為にも、ここまでが私が手を出せる限界点だ。後は彼女次第、だな。

『…………では、さらばだ』

私が答えを聞く必要はない。

それは、幽々子に向けるものであり、私へ向けるものでは断じてない。

それを間違えない為にも、僅かに悩んでいるこの瞬間を利用して、この場を立ち去る。

幽々子は無言で手を振り、妖夢は私の声が届いていないらしく反応を示さない。

『意固地になれるのは、若い頃だけだからな。大人になるとどうも

効率や常識に囚われてしまっていけない』

階段を一人下る中、呟く。

夢や希望が全面に押し出され、可能性は二の次の考え。それを愚行と捉えてしまうのが、大人の悪い所なんだろう。

逆に言えば、正義の味方という妄執に囚われている私も、子供なのかもしれないな。

大人の役目と意気込んでおきながら、この始末か………情けない。いや、不甲斐無いと言う方が正しいな。

だが、私は正義の味方であることを一度諦めている。これはある意味子供から大人へ成長したと言ってもいいのかもしれないが――今の私は過去の理想を取り戻している。

これを、昔に戻ったというべきか、それとも試練を乗り越え、悟りを開いたと思うべきか………判断が難しい所だ。

それにしても、最初はともかく後は勢いで出て行ったものだから、次をどうしようかを全く考えていなかった。

もう間もなく夜になる時間帯。サーヴァントは睡眠を取らずとも問題ないが、ここ最近の習慣のせいか、人間だった頃の生活に順応しつつある。

だからだろうか、夜通し紅魔館で話していたという事もあり、意識しだすところにもプラーシーボ効果の様な眠気と疲労を感じるようになってしまった。

あくまで気の持ちようによるものなので、本当に疲れている訳ではない。

それに、セイバーもやっていた魔力の消費を抑えるという効果もあるようだし、無駄ではない。

魔力と言えば、未だに私とのラインの繋がりが先が何故か分からないという不可解な状況下に身を置いているが、投影を行おうとまるで

最初から使っていないのでは、と思える程に魔力の減りを感じない。もし私が単独行動状態なら、とづくに消えていてもおかしくないのに、こうして現界してられるのは、それ以外に考え付かないから。逆にそれ以外が思いつけばそちらに転ぶ可能性は大きい。

何せ誰とラインが繋がっているのかが分からないのだ。そんな事、有り得ない。有り得たとしても、そうなる理由、意味がまるで理解出来ない。

唯一、ここに来る原因ともなった女性が、タイミングと動機的に一番怪しいのだが……名前も分からなければ、姿形すら知らないときた。

他人に聞こうにも、唯一の情報である声質は、説明付ける方法が口頭では不可能。

こういう時、科学の力は凄いなと思う。人間ではどうしようもない部分を補完出来る、魔術が衰退する理由も頷ける。

魔術を行使する者とは思えない発言だが、生憎私は魔術使い。魔術は目的を達成する為の道具でしかない。考え方としては、科学と同じだろう。

とにかく、身の回りのことが落ち着いたら探してみよう。砂漠に落ちた米粒を探すよりは楽だろうが、手探りになる以上長期戦になるだろう。

別に一人で全てやり遂げる気はない。協力してくれる人がいるならば、喜んでその好意を受け取ろうと思う。

独りで総てを成そうとした結果が私を破滅へと導いたとしたのなら

——今度は同じ轍を踏む訳にはいかない。

凜との——遠坂との約束だからな。

俺はその誓いを生かし続ける為に、死に急ぐ真似はしないと誓ったのだから。

『——む？』

白玉楼の階段を降り切った頃に、ふと食欲をそそる匂いが鼻に入り込んで来る。

その方向に釣られるように森の奥深くへと足を延ばしていく。

僅かに漏れる提灯の淡い光の方向から、匂いの発生源があると理解した私は、迷わずそこへ向かう。

——すると、思いもよらない人物が、そこに居た。

『あ——れ？お兄さん………どうして』

お互いに予想外の出逢いだったらしく、目の前で屋台を開いている少女——ミスティア・ローレイは言葉を失い、私の思考も停止する。

思考停止の理由は、別にそれだけではない。目の前の少女が、初めて遭遇した時の服装とは違い、帽子は青い頭巾となり、茶色の和服を着用している。

そのせいだろうか、見た目はまだ小さな子供でしかないのに、提灯の光の演出も相まって、大人びた雰囲気醸し出している。

『——それはこちらでも聞きたいところだな。何故屋台なんかを？』

『あ、ああ、これはね、八目鰻を焼いてるの』

見ると、初見の者は身の毛も立ち立つ風貌の無顎類動物が、網の上で串刺しで焼かれていた。

『八目鰻とは、またどうして』

『——なんていうか、普通こういった屋台って、こういった形式の調理品って焼き鳥が定番でしょ？鳥の妖怪である私からすれば、

同族を食べているようなものだから、こうして焼き鳥以外のもので舌を喜ばせることが出来たら、必要以上に食べられることは無くなるんじゃないかと思って、少し前から実行してるんだ』

『成程な』

彼女のやっていることは、規模の小さい反抗運動に近い。

公に目的を公開しているかは定かではないが、この僅かばかりの反抗はどこまで通用しているのか。

辛辣かもしれないが、他人にとっては彼女の行動は、腹を満たす効率を上げる手段が増えただけにしか見えていないだろう。

声に出さなければ伝わらない。行動で示すだけでは理解どころか、懷疑心ばかりを植え付けてしまう。

私が破滅への道を進むことになったのも、助けた者達が私の無欲な行動に疑念を抱いた結果故。

『なあ、ミスティア——』

『そうだ！せっかくだし、味の評価をくれない？食事代はサービスするから、さ』

私が言葉を発しようとする、ミスティアのお願いにかき消されてしまう。

別に今すぐに言う必要は無いし、ここは彼女の言葉を優先することにしよう。

『分かった。ただ、私の評価が他の誰かの評価と同一な訳ではないから、鵜呑みにし過ぎないほうがいいぞ』

それだけ忠告して、私は良い具合に焼きあがった八目鰻をひとつ手

に取る。

近くで嗅ぐ匂いからは、泥臭さはほぼ感じない。代わりに甘辛いタレ特有の香りが鼻腔を擽る。

一通りその感覚を楽しんだ後、口に運ぶ。

緊張した面構えでこちらの様子を伺っているミステリアを焦らすかのように、私はその一口を長く楽しむ。

そして喉元を過ぎて、一言。

『——悪くは無い』

平行線な評価だったにも関わらず、ミステリアの表情はどんどん明るくなっていく。

正直、最近始めたのならばこの出来は素晴らしいと言えよう。

蒲焼に似た味付けであり、その食感是全体的にコリコリとしたもので、その新感覚な風味は、受けが良いと思う。

焼き加減もなかなか良い。生焼けでもなく、焦げている訳でもない。

『じゃあさ、どこか問題点はあったんだよね。良くも悪くも一辺倒な答えじゃなかったんだし』

『——そうだな、問題点という訳ではないが、単純に君ならば現状に満足せず、更に高みを目指せると思ったんだ』

これは偽りのない感想。

まさか彼女にこんな特技があるなんて、意外だった。

『そ、そうかな』

『ああ、自信を持ってい。もしかすると、君の目標も達成できる

かもしれない』

『えへへ………』

ベタベタに褒めたせいか、頬は朱に染まり、口元は笑みで歪んでいる。

『けど、慢心はするな。ここで満足するのは、未来ある若き芽を摘むのと同じ愚かな行為でしかない』

『うん、分かってる』

私が釘を刺すまでもなかったようだ。彼女の瞳の奥からは、油断の欠片も見えない。

どれだけ彼女が料理に対して強い感情を持っているのが、それだけで理解出来る。

同じ料理を嗜むものとして、嬉しい限りだ。

『——それにしても、料理の話をしてる時の貴方の顔、なんだか楽しそうだった』

『そうか？』

『そうだよ。もしかして、料理に詳しくったりするの？』

『………よくわかったな』

『だって、他にも知り合いにも似た質問をしたことがあるんだけど、お兄さんの感想は、他の誰とも重複しない、込み入った——特別なものだったから』

ミステリアはそのことが重要だと言わんばかりに、語尾を強調する。彼女の言うことが正しければ、大方他の人には、美味いだのその逆だの好みの問題だの、味の方面でしか感想を言われなかったのだから。

逆に私は、味のことを一切言わず、別の方向で感想を述べている。人によつては簡潔に、分かり易く言えよと思う人も言うかもしれない。だが、料理人だけに限らず、何かを成しそれに対して感想を聞きたい場合、高みを目指すのならば、在り来たりな言葉を欲しがる訳がない。

今までになかった反応、答えこそ、求めるべき意味のある言葉。

キツイ言い方かもしれないが、本当に成長を願う者にとつて、大多数に該当する意見などは無意味でしかない。せいぜい言われて嬉しいとかそうでないか位にしかな意味を持たない。

自惚れかもしれないが、そんな中では私の言葉は彼女にとって価値のあるものだったのだろう。

私も、その事実が嬉しくてたまらない。

『……………ちよつと代わつてもらえるか？』

私は徐に立ち上がり、多少強引だが屋台の中へとミステリアと入れ違いになる。

『な、なにをするの？』

『なに、こういうのは他人から感想を貰うだけでは限界があるからな。私も八目鰻を焼くから、それを食してみたまえ。自分との違いが、何が足りないかが掴めるかもしれないぞ？』

言つてしまえば、私の料理を食べて己の未熟さを知り、技術を盗め

ということだ。

私が彼女より料理が出来るという前提で——私はそうだと確信しているが、彼女は知らないから挑発以外の何物でもないのだが——話を進めているが、私自身この手の調理方法が別段得意という訳ではない。

寧ろ、バーベキューか屋台の出し物以外でこういった形の料理を出すことは稀だ。だから私も、そこまで経験がある訳ではない。

だけど、結局は大体の所は変わらない。仕込み、食材の焼き加減、タレの濃度、食材を選ぶ所からも含め、その順序が狂う訳ではない。

私は、何故かあるクーラーボックスの中で鮮度を保っている八目鰻のひとつを手に取り、手際よく木串を突き刺す。

大量に埋め尽くされていた食材の中からひとつ、長年の経験が生んだ観察眼で選び取る。

料理をする前段階で、料理の質の大半はここで決まってしまうと言っても過言ではない。それ程重要な部分であり、故に一番悩むであろう場面。

ある程度は自分の実力に準じてだが補うことは出来る。けれど、基盤となる部分を改竄することは不可能。

だからだろうか、何度場数を踏もうともこの瞬間は緊張してしまう。

次に、炎で熱が籠った炭焼用焼台の上に置く。

当然だが、炎との距離や燃え上がり方で出来上がるタイミングが異なる。

火が近いと出来上がりが早い分、目測を誤れば一瞬でミスに繋がる。遠すぎれば時間が掛かり、他のも同時に焼く場合は近い方を優先し、遠い方に意識が届かなくなってしまう可能性もある。

他にも今回の場合、長時間による炙りで木串がへたれたり、焦げたりするケースも有り得る。食材に接触している部分である以上、そんな些細な所でも味に変化が生じてしまう。

慣れればそんな失態は犯さないだろうが、あくまで今は彼女のレベルで考えないといけない。

もしこの店が繁盛する程に知名度が上がってくれば、猫の手をも借りたなんて状況になってもおかしくはない。

幸い、この手の店は速さを求めるのではなく、雰囲気や会話を楽しむものである為、ペースが崩れることは余程のことがあろうと無い筈。

『このタレ、使っていいか？』

『うん、いいよ。簡単な自作鰻のタレだけど、大丈夫かな』

鰻のタレか。八目鰻も名前通りの分類だから、何の問題も無いとは思うが——生憎八目鰻を焼くのは初めてなもので、恥ずかしながら模範解答は知らない。

『問題はないだろう。鰻のタレということは、匂いからも分かるが醤油をベースにした甘さのあるものだろう？』

『そうだけど……匂いだけで分かるなんて、プロみたい』

『プロは言い過ぎだが——経験は積んでいるからな。努力すればこの位なら当然になるさ』

重要な場面とは言ったが、それを言うならばどこも同じ。

基礎であることに変わらない以上、程度の差こそあれ、それは誰が出来てもおかしくはないレベルだということだ。

そこからどう発展するかが重要なのだが——今は置いておこう。

そこからお互い会話をしないまま、時間が過ぎる。

私は一本の八目鰻に精神を集中し、ミステリアはそんな私の姿——
——もとい、調理をする様を穴が開くほどに観察している。
その姿勢からは、プロを名乗っていいまでの気迫が見える。
頑なにならず柔軟な姿勢で教えを乞うことは、腕を磨く上で重要となる。凝り固まった素人の意見より、年季のこもった熟練者の意見を鵜呑みにする方が、確実に伸びる。

イメージや価値観を一度崩壊させるのはそう簡単ではない。
口では容易く発せられる音でしかないが、それを現実にフィードバックするとなると、プライドや自分の中の常識が邪魔をする。
だからこそ、子供の頃に詰め込み教育を施す時代もあった。ただやり方に問題があっただけで、幼い頃に知識を仕込むこと自体は間違っていないと思う。

脱線したが、大人になれば当然、子供なんかよりも記憶の吸収効率は落ちる。そして脳のメカニズム上、記憶した出来事を思い出せなくなるうとも、忘れることは無い。

そうになると、新しく知識を入れるのは二重で困難となる。妖怪もなれば、人間よりも長く生きている分、知識量も半端ではないだろうし、それがより顕著となっているに違いない。

結論を言えば、そんな悪条件を三つも満たしているにも関わらず、童心に帰ったように物事を吸収するミステリアは凄い、という事だ。

『——いい匂い』

煙と共に巻き上がる炭火と香ばしい匂いが、屋台を超え、その周囲にまで広がっていく。

ミステリアはその匂いを嗅ぎ、恍惚としている。

『惚けているのはいいが————そら、出来たぞ』

焼き上がった八目鰻に、専用の刷毛でタレを塗り、皿に盛りつける。付け合わせは一切無しの、味一本勝負。

ミスティアは蕩けた表情から真剣な表情へと一変。緊張した様子で串を取る。

……ここまで真剣にやられると、こちらも委縮してしまいそうになる。

こういうのも何だが、もう少し柔らかく挑んでくれないと、本当の意味で味を楽しむことが出来ないのではないだろうか。

だが、それを伝えようにも、彼女の口に運ばれていく八目鰻を見て、ここで止めるのは野暮だと判断し、何も言わなかった。

そんなことを考えている内に、八目鰻は少女の口に運ばれた。

周囲の静けさが、ミスティアの咀嚼音をより一層引き立たせる。

互いに無言の瞬間。世界に二人しかいないかと思わせる錯覚。喉元を過ぎるのを確認して、少女は一言。

『————美味しい』

飾り気も何もない、率直な感想。

だが、その言葉の中に籠められた気持ちを、私は汲み取った。

『工程は私と殆ど変わらない筈なのに、味は比べることすら烏滸がましい格差。あらゆる部分が、言葉で表現できないナニかを内包している。とにかく、美味しいとしか表現しようがないんだよ』

『それは良かった、が——君はこれを食して何か掴んだかい？』

そう、私が伝えたいことがこれで伝わっていなければ意味がない。だが、それも杞憂に終わることになる。

『うん、食感が違うのは純粹に食材の品質に左右されることもあるけど、やはりそれ以外で変える方法があるとするなら、この絶妙な焼き加減なんだろうね。柔らかすぎず、固くならず』

それだけ告げ、再び八目鰻を口に運ぶ。

目を瞑り、唸るような表情で食べることに1分近く。

『——覚えた』

『なっ………』

目を見開いた瞬間彼女が発した言葉に、私は驚きを隠せないでいた。確かに彼女の集中力は稀な才能だ。料理のこととなれば、下手すれば地震が起きていようと気付かないのでは？と思わせる程のそれは、まだ想像の範囲内。

だが、こんな短期間でレシピを看破するとは思ってもよらなかった。単純な料理だからと思う者もいるだろうが、単純だということは、限りなく狭い範囲で味を占めないといけない。

付け合わせや見栄えで旨みを増殖出来ない中で、他人に美味しいと言わせれる料理を作れるということは、その中全てに全力を注いでいるという事。

分割することの出来ない深みのあるレシピは、あらゆる技術がその中に内包していると言ってもいい。

それをたった二口で理解できるのは、彼女の集中力故か、もしくは

『——まあ、いい。君の言葉が虚言でなければこれほど悔しいことはないが、これも時代の流れだ。若い者が次の代を背負っていくのだ』

『何言ってんの』

爺臭い言葉遣いに鋭い突っ込みを入れられる。

同じ志を持つ駆け出しの少女が、私の後を雛鳥の如く追い、成長していく。

嬉しいことではあるのだが、生来の負けず嫌いが祟り、素直に喜べない自分がいる。

顔を我武者羅に横に振り、邪念を払拭する。ここは、笑顔でいなければいけない。

『……… 凄いな、私も確かに君みたいな方法で中身を看破するが、まだ日の浅い君がそれを成し遂げるとは』

『——それは、お兄さんのお蔭だよ』

心なしか頬が赤くなっているミスティアが、俯き加減にそう答える。

『お兄さんの料理だから、ここまで集中できたの。貴方が私だけの為に作ってくれたモノだから、相応の態度で臨んだけ。他の人のでは、ここまで本気になれなかったよ』

『そ、そうか？』

『うん。——だからさ、もっと……… 教えて欲しいな』

上目遣いと提灯の揺れる光が、幼い容姿に艶を加え、思わずドキッとしてしまう。

無意識なのか意図的なのか—— 今回の場合私が立っていて、彼女が座っている以上こうなるのは必然みたいなものだが——、どう

にもこんな状況がよくある気がする。

嫌ではないし、無意識だった場合指摘すれば、ただの変態でしかない。故に、真相を知ることが難しい。

『——ああ、私なんかでよければ、頼ってくれ』

『お兄さんじゃないと、嫌』

何だこの殺し文句。狙っているとしたか思えない。

——全く、まるで今の私は衛宮士郎よりも精神が未熟だな。こんな事で動揺するなんてな。

英霊エミヤの頃のような、機械的な思考が崩れてきたのはいい傾向だが、こんな形での変化は正直お断り願いたい。

そんなこんなで私は動揺を隠すのに必死で、これから一時間弱における八目鰻その他料理の指導の記憶が曖昧となるのは、また別の話。

夜雀の願い、継承される能力（後書き）

アンケート、ではありませんが、前書きで書いたように内容が少しマンネリ化しつつあります。

その為、元々無いプライドをマイナスに振り込んで、読者様にお願いが。

ネタ欲しい。

出来れば既存のキャラの。まだ見ぬキャラのでも全然歓迎します。全てが全て採用出来る訳ではありません（既に決まっている部分もあるのもありますし）。

実際、私ってこの小説以外（短編の春眠暁や、星の章とか）は、実は友人の案を基盤としてめっさアレンジしたもののなんですよ。

何が言いたいかというと、こんなに書いてるくせに、内容組み立てるのは相変わらず下手なんで、と言うこと。

もっとここはこういう言い回しした方がいいよ？っていう部分見つけたら教えてください。

それを参考にして、もっともって良い文章を練り上げていきたいので。

信じるということ（前書き）

短いですが、重要な伏線が二ヶ所ほど。

予め決めていた内容だっただけに、さくさく書けました。その分短いです。

更新出来ないと言ったのは嘘かい？嘘じゃないさ、用事はまだだ！
まだ終わってなあああああい！！！！

信じるということ

太陽は完全に沈み、明かりなしでは歩くことすらままならない森の中。エミヤシロウと私の疑似師弟関係は続いている。

私はまだ料理をして間もないけど、彼はそんじょそらの料理の腕の持ち主ではない。正直、何故店を開いていないのか疑問に思う位、彼の腕は常人ののそれとは逸していた。

素人がこんな雲の上の存在に教えを乞うなんて、贅沢と言われても反論できないだろう。

だからせめて、二人だけのこの時間。過剰なぐらいが普通と思えるくらい、好意に甘えようと思った。

多分、こんな時間を取れるなんて都合の良い展開、もう無いと思うから。

『——もうこんな時間か』

シロウが天を仰ぐ。

今の今まで気づいていなかった、という事かな。

私に集中力云々を言うけれど、お兄さんの方がよっぽどだと思うなと言いますか、お兄さんが隣で手取り足取り教えてくれている時、ちらりと横目で彼を見たら………まるで子供みtainな表情だったなあ。

普段の余裕ある大人の貫録みたいな感じもいいけど、あの時の彼は、なんだか親しみやすさが前面に押し出されていて、まるで本当の意味で同じ目線で立てているみたいで——少し、嬉しかった。

私にとって完璧超人に思える彼は、憧れの対象であると同時に、望んでも届かない雲の上の存在にも思えて。

届こうとしても届かない距離。触れることが出来るのに、触れるこ

とが叶わない。そんなもどかしさがさつきまではあった。けど、そうじゃなかった。

失礼な言い方になるかもしれないけど、やっぱり彼も生き物なんだなって。

博麗霊夢の時も似た感情を覚えた。妖怪に化け物と思わせるその圧倒的なチカラ。

ベクトルこそ違えど、彼に同じ意味合いでの異質な感情を向けたことに間違いはない。

——だからかな。

今でこそ吐息が触れる程の距離にいる彼が、いつか簡単に遠くに行ってしまうそうで。

私の■■■な彼と、こうしていられることも出来なくなる。そんな恐ろしい未来が視えてしまいそうで。

願わくばそんな未来はクソ喰らえだけど………こればかりは私が彼の隣に立つ努力をしないとイケないよね。

願うだけで思い通りになるのは、童話の中だけの空想。現実をもって——リアリティなものなんだから。

王子様とお姫様の関係なんて、起こり得る訳がないんだ。

『ボーっとしている様だが………そろそろ止めたほうがいいかね？』

『い、いえ！だいじよ——』

彼の言葉に慌てて返事をした刹那、意識が一瞬刈り取られる。

予兆もない、予測不能の出来事。

その間私の身体は前に倒れていくが、隣にいたお兄さんが咄嗟に私を支える。

『これで大丈夫と言えるのか？』

『い、いえ——本当に、大丈夫なんです』

そう、大丈夫。

この異常はこれが最初ではない。

もう、一度や二度とは言えない位に体験している。

原因も何となく理解している。理解しているからこそ——解決できない。してはいけない。

『しかしだな……顔色がそんなでは、見過ごす訳にはいかない。君の言うことはこれから一切受け付けないからそのつもりでな』

まるで初めて会った時の焼き増しと思える状況。

私はただ、彼にされるがまま近くの木にもたれるように座らされた。僅かに歪む視界の中、彼は黙々と屋台の片づけに勤しんでいる。自分の持ち物でないにも関わらず、さもそうであるかのようにスムーズな動きを披露している。

この異常と戦う限り、私は彼の隣に真の意味では立てない。立つ資格がない。

身勝手な理由だけ——私のあの姿は、見られたくない。

もしかしたら受け入れてくれるかも、そんな希望的観測が幾度となくよぎるが、分の悪い賭けな事になりはしない。

そんな曖昧な未来を選択するくらいならいっそ、現状維持の方がまだ気が楽だ。少なくともそれならば、彼の姿だけは見ることが出来るから。

私は出来るだけ静かに、息も気配も殺してその場から立ち去ろうとする。

彼にはもう迷惑を掛けたくない。本当は甘えたいけど、それじゃ駄

目。

彼に依存すればする程、最悪の別れを体験するから。

意外にも彼は私の動きに気付かず、私はそのまま森の深い闇へと身を潜ませていく。

『——また、ね』

それは、全てを諦めた少女の、最後の名残だったのかもしれない。別れの言葉とは、繋がり証。

その先を求めるからこそ、僅かな引っかけ。

繋がり続けることで削れ、いずれは鎖よりも強固な繋がりとなることを、心の底では望んでいる。

だけど、もういいんだ。と独りでに呟く。

自分をもっと高位の妖怪だったら分らなかったかもしれない。この異常に対抗できたかもしれない。

でもそれは叶わぬ夢。一朝一夕でどうにか出来る程、都合の良い可能性は起こり得ない。

夢を見るのはもう終わり。

今宵見る夢が、残酷な未来しか写し出さないというのなら、それも一興。

幻想に抱かれ散りゆく事が幸福なんだと、そう言い聞かせ、完全に私は闇に溶けていった。

ミステリアの気配が背中越しに遠ざかっていくのが分かる。

今すぐにも追いかけたいが、それは叶わない。何故なら目の前から突如として現れた少女——ルーミアが、私を拘束していたからだ。

『こんばんわ、罪作りの男』

しかし、拘束と言えるのかは分からない。何故なら彼女は、私から延びる影を踏んでいるだけなのだから。

確かにミスティアに気を取られていた故の結果かもしれない。

だが、私は腐つても英霊。こんな至近距離に来るまで気配を感知できないなど、有り得ない。

腑に落ちないかもしれないが、まるで影の中から現れたと言わんばかりに、目の前にいきなり現れたのだ。

余りにも斬新な不意打ちで、気配を感じるも意識が追い付く前に、私はこうなっていた。

『——一体何の用かね』

敵意を持って少女を睨み付ける。

指の一本も動かせない中、口だけは意のままに使えるということとは、彼女は対話する事が目的なのだろう。

私は内心焦りを隠せないでいる。

こうしている内にミスティアの謎の症状は悪化の一步を辿るかもしれないというのに。

『そうね、強いて言えばミスティアの為かしら』

『彼女の、為——？』

前回会ったときとは違う、彼女を取り巻くねっとりとした空気。

心を委縮させる存在感、一言一言がまるで言霊の役割を果たすかのように、私の耳から脳へと伝わる。

見た目は幼いままなのに、あの時とはまるで別人。何を以てして変態したのか、それとも——これが本当の彼女だともいえるのか。

『あの子の身体の異常はね、一言で言えば貴方のせいなの』

『——なに？』

ルーミアは呆れたように肩を落とし、溜息を吐く。

『心当たりがないのも当然よね。貴方は知らなさすぎるのよ、妖怪と人間が、どれ程存在する目的因子が異なるのかを』

『………ということは、彼女の病の理由は妖怪故の発作ということか？』

『そうよ。まあ、本当はこんな症例起こる訳が無いんだけどね』

蔑んだような目つきと思わせぶりな言い方で私を挑発する。

お前が悪い、お前のせいだと言い聞かせる風に、執拗に、執念深く。

『知りたいでしょうね。自分のせいだと言われたら解決したいに決まってるわよね。そういう奴だったのは、もう知ってるし』

『………ああ』

ゆっくりと、私の伸びた影を伝い、近づいてくる。

その仕草は、子供らしい無邪気な雰囲気醸し出しているが、本質

はそれを覆い尽くすほどに、深い。

『けど、だーめ』

腕を伸ばせば届く距離まで近づき、それだけ告げると、そのまま元の位置まで戻る。

『他人を頼るような弱い奴に、あの子は任せられないわね。真実というのは、無限とも思える糸を手繰る努力をした者に与える価値のあるもので、半端な覚悟の相手に安売り出来るほど、価値の低いものじゃないの。お分かり？』

まるで学の無い子供を相手にするかのように、やんわりとした口調で語る。

前回見せた幼さの片鱗は、微塵も表に出ない。

『——問おう。今の君は本当にルーミアなのか？』

その言葉の返しと言わんばかりに、目の前の少女は悪戯っぽく微笑む。

『ええ、私は正真正銘、貴方の知っているルーミアよ。ただ——この姿は本来のものではないのよね』

『本来の？』

『そうよ。これを見て頂戴』

頭の上に付いているリボンを、顔を動かして私の方へと向ける。

——それは最早、装飾品としての機能美をほぼ完全に失っていた。

『このリボンはね、遙か昔の代の博麗にやられた、一種の封印。妖怪の力を抑えると同時に、悪意を持たせない為に記憶も同時に封印する代物よ』

『……………そんなとんでもないものだったとはな』

『これは博麗特性の符で構成された、対妖怪による妖怪の為の礼装。故に自分の手で取ろうとすれば、腕が消し飛ぶ可能性だつてある。今の身体じゃあ、それはキツイから勘弁願いたいわ。弱点と言えば、害意を持つて触れさえしなければ痺れる程度にしかないってところだけど、対して意味はないわね』

触れただけで腕が消し飛ぶ、か。考えるだけでも悍ましい威力だな。

『——それで、君はなにが言いたいんだ？』

『見て分からない？これだけボロボロになっているということは、封印の力が限界まで弱まっているのよ。私つて闇を操る程度の能力を使えるんだけど、今貴方にやっている影踏みによる拘束、封印された力では成すことは出来なかった。そういうこと』

愉悦を孕んだ笑みで、私を見つめてくる。

何がそんなに面白いのかが分からない。

『……………因みにだが、完全に効力を失えばどうなる？』

『肉体の枷が解き放たれ、本来の姿に戻ると同時に、力が完全に元に戻る。少なくとも、私に対抗できる相手は限りなく少数となるのは確定しているわ』

『…………元に戻ったら、どうする』

『——さあ、どうしましょうか』

不気味な雰囲気吹き出し、不敵に口元を吊り上げる。

……今の少女は、こんなにも恐怖を植え付ける迫力を放っているのに、風が吹けば靄となり消え去りそうな存在の希薄さがある。

希薄、というよりも——虚無そのもの、と言すべきか。

肉体なんて初めから存在しない、まるでホログラムの中の生き物と会話している錯覚すら覚えてしまう。

何故だろう、前まではそんな感じはしなかったのに。これも、封印が影響しているのだろうか。

『復活は時間の問題となるでしょうけれど、それでもいつになるかは分からないわ。——今なら、私が後に行くかもしれない悪行を阻止出来るかもしれないわね』

ルーミアは変わらない表情のまま、影から足を放す。

それと同時に四肢の全てが解放され、一瞬身体がぐらつく。

彼女は何が言いたいのだろうか。

ミスティアの話から脱線し、今は彼女の封印の話。

あれよあれよと話が進んでいたが、身体が解放されたのなら、一刻も早くミスティアを探すべきではないのか？

それが最善だと、頭では理解している。しかし身体はその判断に反応しない。

彼女が告げた言葉が、最終決定を阻害しているのだ。

ミスティアがああなったのは貴方のせい、ルーミアはそう言った。

私を動揺させる手段かもしれないが、そんな都合の良い出来事を瞬時にプランに組み込むなど、確実性が無い。

二人がグルではないのは分かっている。あの時のミスティアの異常は、演技なんかでは表せない本当の弱さがあつたから。

それに、何故ルーミアは私の影を放した？

もし仮に彼女が悪行を成すと言うのなら、情報を知る私は邪魔者ではない。それなのに、わざわざアドバンテージを与える意味がない。

不可解な行動が多すぎる。まるで、未来に起こるそんな可能性を止めてくれと言っている様にしか――

『――そうよね、貴方はなにもしない。何せ私の言葉は全て未来しか語っていない。可能性でしかない出来事、ましてや見た目幼い子供を虚言かもしれないのに刃を向けるなんて、無理な話よね』

踵を返し、背後の木の幹に掌でもたれ掛る。

その背中とは、何故かとても儚く見える。

『甘い、実に甘い。魅力であり欠点であつたであろうその甘さは、今はただの枷だ』

瞬間、背後から無数の気配が迫る。

振り向くことすら許されない速度で迫つたそれは、私の両手足を縛つた。

『――ツツ！影が、紐のように………！――！』

『それだから、こんなにも容易く手玉に取られる。そんなんじゃ、理想も――大切な人も守れない』

少女は振り返り、地面が爆ぜると同時に、肉薄する。
そして、強烈な一撃が腹部に見舞われた。

『ぐあつ！！』

少女の身体から放たれたとは思えない威力の一撃であつたが、固定された黒い紐が衝撃を逃すことを許さない。
動けない身体に容赦なく、拳が何度も襲う。
サーヴァントであるその身にも寸分変わらず刻まれる痛み。これでもだ封印状態だというのか――！！

『つ、――ロールアウト バレット クリア―― フリーズアウト ソードバレ
ルフルオープン 工程完了。 全投影、待機。―― 停止解凍、全投影
連続層写！！！』

瞬時に投影した4本の剣が、黒い紐に突き刺さる。

だが、彼が想像していた結果と異なり、紐は形を崩さないまま、依然として健在している。

『無駄よ。貴方が相手にしているのは影よ。0でも1でもない、1の現象。カタチがあるのに、決してそこには無い矛盾存在。それを、ただの剣ごときが捉えられると思う？』

焦る様子もなく、ルーミアは突き刺さった一本の剣を引き抜く。
そして、何の躊躇いもなく私の喉元に突き付けた。

『力も無い癖に、甘えを持つ。それで自分が傷つくだけならいいけれど、本当に大切なモノを零しちゃうわよ』

首筋から一筋の赤い滴が伝う。

此方の命は、完全に彼女に掌握されている。

『有象無象の雨粒を手につけて零したところで造作もないかもしれない。だけど、望んでコップに入れた中身を溢れさせてまで、有象無象を手にする価値はあるのかしらね』

それだけ告げると、突き付けていた剣を放し、地面に捨てる。そして、再び影からも解放された。

『次に会うときは、私を敵と思いなさい。そうしないと、言葉が現実のものとなるわよ』

ルーミアは再び踵を返すと、今度はその姿は自分自身の影に溶け、そのまま影すら消滅した。

私はその後姿を攻撃することはしなかった。いや、出来なかった。

彼女の言うとおり、私は甘い。その甘さが身を滅ぼし、救えた筈の命を手放したこともあった。

それを後悔することは止めたが、それと同時に甘さが抜けた訳ではない。

自分で甘さを肯定するつもりはないが、否定もしない。美点ではあるかもしれないが、彼女の言う通り欠点ともなり得てしまう。

他人に指摘されるということは、それがとても分かり易いということだろう。事実、セイバーや凜にも何度言われたことが。

自分の大切なモノ、か。

全てを救えると思えるほど自惚れてはいないが、信じた者だけでも救おうと思うのも、身分不相応なのだろうか。

甘いと言うならば彼女だってそうだ。

何の為に私に敵意を向けたにも関わらず、見逃す気になった？

妖怪の生態やアルゴリズムなんてものは分からない。だが、彼女の言い分からすれば人間は喰らうべき相手。それが理由ならばあの行動は無意味だ。

ではミステリアの件か？ならばまず、ミステリアとルーミアの関係はなんなのだ。友人関係ならば、私が原因である以上それ以外は対象としないのだから、私に構わずさつさとフォローに行けばいい。少なくとも、彼女の身の上の状況を話す必要性は皆無だった筈。

『さて、どうするべきか……………』

先送りにする問題が山積みになっている今、出来るだけ手の届く範囲だけでも解決するべきなんだろうけれど、この問題もまた、手を伸ばすべきではないのかもしれない。ミステリアの問題も、ルーミアの問題もだ。

敵と思え。そんな忠告を敵にするような奴がいるか？

少なくとも、あの瞬間はお互いに敵意はあった。敵対、ましてや戦闘で拘束し解放した相手に、再びそう忠告する意味。

余裕の表れか、本当に彼女は止めて欲しいのか。

——俺は彼女の言葉を全て信じたい。敵になるということも、ミステリアの異常の理由も。

俺は、彼女を有象無象の雨粒とは思えない。

もしそれでコップの中から溢れてしまうというのなら、受け皿でもなんでも投影^{くわ}ってやる。

俺は創る者。足りないものは創りだせ。今までだってそうしてきたのだ、これからは出来ないなんて事、ある筈がない。

そうしないと、俺は——間違いなく後悔する。

信念に背いた人生を歩めば、間違いなく答えを得る前に逆戻りしてしまう。

それだけは、やっちゃいけないんだ。

『絶対、阻止してやる。ルーミアの事も、ミステリアの異常も。だから——待っていてくれ』

周囲に木霊する呟きは、この身にしっかりと、決意として刻まれる。いずれルーミアは俺の前に姿を現す。今度は、封印が溶けた状態でその時が正念場だ。

ミステリアの件は、自分から会おうとはしない事にした。だが、もし偶然にでも目に入ったなら——その時は、彼女の見捨てることはしない。助けるまではいなくても、力にだけはなりたい。

俺のせいだというのなら——俺が助けない訳にはいかないだろう。独りで成せる問題ではないのは承知している。だから、出来ることならルーミアの——彼女の友人の力を借りたい。

ひどい先回りだとは思う。それでも、無謀に突貫するよりはいい。今にも飛び出したい気持ちを、拳を握り締め、抑える。

『見ている。——私は絶対君達を見捨てないからな』

呟き、私はミステリアの屋台の片付けを再び開始した。

信じるということ（後書き）

今回ルーミアが強くなってましたね。

それで今回やった攻撃の紹介。

影踏み（特に名前考えてない）

封印が解けてきたルーミアが使える、闇を操る能力の応用。

他者の肉体から発生する影を自らの肉体を以て干渉することで、固定化。肉体と影の形の法則性の矛盾を阻止する為に、干渉された影の持ち主は動きを制限される。

ルーミアの匙加減次第で、動かせる場所を操作可能。口や鼻の動きを抑制すれば、それだけで相手を殺すことも可能。ただし、封印途中の彼女では、そこまでの制御は不可能。

今はリンクを公開しないが、対魔力次第では抵抗することが可能。ちなみにDでは、今のルーミアのスペックでも抵抗は不可能。

黒の紐

ぶっちゃけると性能だけ見れば黒桜のアレみたいなもの。

今回は拘束目的で使っていたが、形状変化で武器にもなる為、言ってしまうばこれは使用方法のひとつとして捉えてもらいたい。

ていうか今のルーミア自体、妖怪と言う部分を除いて黒桜の能力スベック。封印解放されれば、桜の実力を遙かに凌駕するようになるであろう。

紐での拘束は、腕力での破壊は不可能。影そのものを抜く以外の方法では対抗は出来ない。または、ルーミアの様に影そのものに干渉する力があれば別である。

鬼が囚われた幻想（前書き）

地味に50話突破。感慨深さもありはしない。

あと、最近気付いた。

間を空けないで更新すると感想来ない。

鬼が囚われた幻想

ゆつくりと、どこか覇気の無い足取りで歩くシロウ。

片付けを終えたときには、月が西にその姿を傾けていた。

それからミスティアの屋台を何処か安全な場所に隠し、出来るだけ人目を避けた場所を探した結果、太陽が眩しく存在を晒していた。心の何処かでミスティアを見つける事が出来るかも、そう考えていたが、そう都合の良いことが起こり得る筈もなく、やることを終えた彼は当てもなく彷徨っていた。

ルーミアが敵となり、ミスティアは自分のせいで苦しんでいると宣言されている中、普段通りでいられる程彼は人間を止めてはいない。時間が解決する訳でもないが、今すぐに解決できる問題でもない。板挟みの状況で苦悩するだけしか出来ず、問題を先送りにしか出来ない。

彼女達の問題だけではない。八卦炉の修理や、早苗達の安否も気になる。

今は八卦炉に手を出すべきか？それもアリだが、ローテーションでは次は天界に赴く事になっている。

携帯のような便利な連絡手段が無い以上、本当に手が離せない状況でも無い限り何も言わずに流れを乱すのは、信用問題に関わる。

予め不定期だと告げてはいるが、ここで放置すれば次に会うのはまた数日後だ。もし1日の遅れを次の日で挽回しようものなら、全体の動きに支障が出る。

私一人いなくとも別にそれ程気にすることはないと思うが、せめて衣玖に一言告げてから材料探しに向かっても遅くはないだろう。

そうと決まれば善は急げ。私は重かった足取りを切り替え、走り出す。

さつきまでの景色の変わりようが嘘のように、移り変わっていく。それはまるで、私の今の気持ちを表現しているかのようである。

数分後、私は守矢神社の裏側にある、天界と地上を繋ぐ場所に辿り着いていた。

いつも通り、ここで衣玖が気付いて橋を架けるまで待機している。それだけの時間の筈だった。

しかし、その間の静寂は、聞き覚えのある音に阻害された。

『やつほー、久しぶり』

誰もいる筈の無いその空間に、もう一人の出演者。その幼い容姿を忘れる訳もない。

『諏訪子———か』

『変わってないようで何より。ま、数日程度で変わるような人種とは思えないし、当然か』

まるで昨日別れたばかりの友人と会話するかのように、悠然とそこに立っている。

その姿からは、私に対する興味など感じられない。無言家出をした相手に対する対応とは、到底思えない。

『……………いつかはバレる気はしていたが、早かったな』

『気付いているのは私だけだね。早苗も神奈子も、シロウがこんな近くに来ているなんて知らないよ』

ステップを踏むように此方に近づき、目の前で両の足で着地する。

数日見なかったが、彼女だって何も変わってはいない。私の知っている、守矢諏訪子だ。

『シロウには言っ てなかったかもだけど、私は土着神の力を使うことが出来るんだ。諏訪の地に於いて信仰を得ていた土着神、それが私の正体。そして坤を創造する程度の能力を扱える私にとつて、地は私そのものと豪語してもいい存在。だから、普段人気の無い神社の裏山に誰か足を運べば、気付かない訳がないってこと』

言い終え、笑顔を咲かせた後その場で回転しだす。

つまり、彼女は最初から——私が天界に行こうとここを訪れた時点から、私の存在を突き止めていたということになる。神だと説明されてはいたが、そんなとんでもない力を持っているとはな——

天界と言えば、天子も大地を操る力を持っていると言っていたな。操ると創造では、明らかに諏訪子の方が上だろうが、そこら辺あの我儘少女はどう思っているのか。

『それで、気付いていたのなら何故来なかった？私のことがどうでもいいのならそれで構わないが』

事実、私は神社に数日居候していただけに過ぎない、風のような存在に過ぎない。

過ごしていた時間よりも離れていた時間の方が長いのだ。愛想どころか興味が尽きてもおかしくは無い。

早苗も、私の事など忘れて平凡に生きているのならそれでいいしな。

『うんにゃ。前の時は早苗も神奈子も神社にいたから無理だった訳でして。今日は早苗は買物、神奈子は博霊神社に行ったらしいので、こうして会う機会が上手く出来た訳』

『ということは、二人には私の存在を、』

『伝えてないよ。気付いた様子もなし』

『——は？』

それはあまりにも予想外な返答だった。

何せ、黙っている意味がない。私が夜遅くに帰宅したときの早苗の剣幕を想像すれば、数日姿を眩ました私を心配しないとは思えない。諏訪子の言い方では、必要が無いから言わなかったのではなく、わざとこの事実を告げていないように聞こえる。彼女は、一体何を思っているのだ？

『別に意地悪でそうしてる訳じゃあないよ？シロウに言っても理解できないだろうけど、あの子の成長の為なのさ』

『成長？』

『うん、肉体的ではなく、精神的な方でね』

……彼女がなにを考えているのかは分からないが、何日もここを空けていた奴が口出しする権利はないだろう。

それに、彼女が早苗に対して害悪になるようなことは決してしないと確信も出来るしな。

早苗ぐらいの年は不安定な傾向が強いから、それを踏まえての精神の成長を図ろうとしているかもしれないし。

『——しかし、何故それに私が関係しているんだ？』

それだけが唯一理解出来ない。そんなことを考えながら問いかけると、あからさまに馬鹿にしたように溜息を吐いた。なんなんだ一体

『ま、いいけどね。知らぬが華とも言えなくもないし』

『——む？』

嘆息から一転、諏訪子は両手を叩いて話を切り出した。

『とにかく、シロウは今まで通り自分の好きなことをしていればいいの。それも貴方の為になるでしょうし——どうせいつかは、帰ってくるんでしょ？』

全てを見据えたかのような瞳で私を射抜く。

不思議と嫌な感じがしないのは、神と言う存在感がそうさせるのか、洩矢諏訪子といういち少女の人柄がそう思わせるのか。どちらにせよ、私が次に言う言葉は決まっている。

『勿論だ。君達が、私の存在を望むのならば』

こんな得体の知れない存在を迎えてくれた早苗を始め、諏訪子や神奈子にも恩を返していきたいと思っている。

私が皆の邪魔と思われるまでは、精一杯そうしていきたい。

あの暖かな空間にいと、まるで未熟な自分の頃に戻ったような、そんな安心する瞬間が味わえた。

二度と手に入れることが出来ないと思っていた平穩。私はそれを手放したくない。

こう思えるようになったことも、一種の成長なのだろうか。

『その言い方、シロウらしいね』

一瞬、その朗らかな笑顔と仕草から、雪の少女の幻影が諏訪子に重なる。

目の前の少女は、子供のような容姿とは裏腹にとても大人びている。そんな在り様が、どこかイリヤを思わせる。

数ある可能性の中、殆ど救われることの無かった薄幸の美少女。私はその姿を彼女に重ねているのかもしれない。

彼女が不幸だと言うつもりではないが、その点と容姿を除けば、殆ど一致している。

共に暮らしていたときには浮き上がらなかった感情。傍を離れたことで広がった視野だからこそ、気付くことの出来た既視感。

イリヤを救えなかった分、彼女には幸福を与え続けたい。気付いてからはそう思う気持ちが強くなり始めていた。

身勝手に自己満足なエゴだとは思うが、それでも、彼女の為になにかしてやりたいと思う気持ちに嘘はない。

『さ、そろそろお迎えが来ると思うし、私はこれで帰るね。こんなだけで一応神様だし、いつまでも神社を空ける訳にはいかないしね』

『……………そうか』

自分が望んで離れた癖に、いざ出逢ってしまえば後髪を引かれる。私の決意など、所詮風が吹けば倒れる棒程度の強度でしかない、ということを示しているようで、不甲斐無さばかりが込み上がってくる。

……………いや、我が家に帰るという行為にそんな感情を持つこと自体おかしいのか。

そんな堅苦しく考えなくても、彼女らは私を引き離したい訳では無いのだから、もっと気楽に構えても問題はないか。

『次は、いつ逢えるだろうか』

『——願望は望むだけじゃあ叶わないよ。実行しなきゃ』

つまり、待っているからいつでも来いと彼女は言っているのか。そうなら最初からそう言えばいいものの。屈折しているな、全く。

諏訪子の言葉に満足し後ろを振り返ると、希薄な存在感で顕現している、雲を貫くほどの階段がいつの間にか現れていた。それと同時に、背後の気配が途絶える。

さっぱりとした別れだったが、こんな関係もいいものだ。信用ではなく、信頼。

漢字一文字の違いしかないのに、込められた想いは全然違う。

こんな流浪人で身勝手な自分を信頼してくれている。その事実だけですら、私には勿体無い。

『自惚れかもしれないが——私は、彼女達にとっての特別になっているのだろうか』

幻想郷の常識を知らない私は、外の常識で秤にかけないといけない。こんな関係、もしかするとここでは当然かもしれない。外では見限られても不思議ではない振る舞いにも、こうした嬉しい誤算が働いてくれるのは、常識の差違が本当に守矢にとつての特別となれただからなのかしかない。

後者なら一番嬉しいが、前者でも構わない。

それは、こんな私でも受け入れてくれるセカイだと宣言しているようなものなのだから。

頂上の見えない階段を見据え、私はしっかりと足取りで昇り始めた。

頂上についたが、いつもみたく衣玖が出迎えることはなかった。

彼女もいつも私に構っていられる程暇ではないのだろう。

手間を掛けたことに申し訳なさを感じながらも、いつも天子が居る場所へと向かう。

相変わらず周囲の天人に奇異の目で見られながらも桃の木が見える距離まで辿り着くと、天子ではない誰かがその場所に座っているのを確認出来た。

常人では輪郭すら捉えることの出来ない距離でも、私ならありありとその姿を確認出来る。

特徴的なその姿は、一度出遭っただけだろうと脳裏から離れることはない。

『伊吹萃香、久しいな』

相変わらず酒を呑んでいるその姿に声を掛けると、鬼の子は陽気に手を振ってそれに応えた。

何と言うか、鬼とはこう四六時中酒を呑んばかりの種族なのだろうか。

異種族、しかも他を遙かに凌駕する腕力の持ち主と言われている鬼だが、こうして見ると人間と変わらない。角とその異常なまでのアルコール摂取量を除いてだが。

『おゝ久しぶりい………』

『相当酔っているな……………』

萃香は私に合わせるかのように立ち上がるも、重心が安定せずに前後にふらつくばかりだ。

『無理して立たなくてもいい。ほら、座りたまえ』

彼女の両肩を押して彼女を座らせる。

私もそれに続いて目の前にで胡坐をかく。

『天子を知らないか？』

簡潔に、それだけを問いたです。

酔っている相手に掘り下げた質問をしても意味はないだろうしな。

『天子いゝ？私も実はアイツと呑む為に来たんだけど、今日は生憎下に遊びに行つてたつばいね』

以外にもまともな返答が来たことに戸惑いつつ、それならともう少し深く質問をすることにする。

『ならどうしてここに？相手がいないのなら、ここにいる意味はなかろう？』

『まあそうなんだけど面倒じゃん？入れ違いになってもあれだし。お前も天子に用があつたんだろう？ここで待ってたらいいさ』

『しかし、私は君のように娯楽のためにここに来ている訳じゃない。そんな気楽に構えることは出来ない』

喩え今回のように天子の方に問題があろうとも、それを理由に仕事を放棄するのも如何なものか。

『いいんだよ。アイツが下に行くなんて、最近じゃいつものことだし。——それに、お前は天子が楽しんでいるところを、勉強しろという理由で強制的にここに連れ戻す鬼畜外道なのか？』

ニヤニヤと頬を吊上げ、私を試すようなことを質問し出す。
試されているということに良い感情は抱かないが、彼女の言うことも一理ある。

『——外ではそれが当然なのだよ。家庭教師と生徒と言う関係である以上、そこには暗黙の了解とも言える一線が存在する。少なくとも私が彼女に帰る宣言をすれば、立場上天子は従うことが当然となる。だが——』

『だが？』

『ここは幻想郷だ。私の常識で彼女を縛る道理はない。それに、子供は遊んでいる時こそ一番輝いているものだ。勉強なんていつでもできる。家庭教師として、身体を動かして学べることを止める必要性がどこにある？』

そうだ、言葉で伝えることばかりが教養ではない。

自然に触れ、他者と言葉を交わし、感覚で理を理解する。それを蔑ろにしてまで知識を詰め込む必要性は皆無。

そんな当たり前の事を気付かされるとは——私もまだまだだな。

『天人であるアイツを子供扱いか。本当、面白いよお前』

本心から愉しそうに鬼は笑う。
何で笑われているのが理解出来ない。

『前にアマちゃんと言われたが、確かにそうなのかな。こうやって立場の低い相手の意見を尊重する辺り』

『いいんじゃない？他人に対して甘く出来る奴なんてそう居ない。過剰にやれば自分が損をするだけだが、適度なのは他者に好感を持たせることが出来るし、自分が困っている時は助けてくれることもあるかもしれない。情けは人の為ならずって言うのは、そういうことさ』

その甘さが過剰だった時期があったとは、とても言えないな……。他人に言われると、自分の愚かさが改めてよく分かる。見返りを求めない善行など、異端でしかないのに。

だから裏切られ、助けた相手に処刑台へと上らされた。

恨む気は無い。自分の力だけでは気付けなかっただろうし、その時死なずともいつかはそうになっていただろう。遅いか早いかの、それだけの差でしかない。

善を押し付けることが、必ずしも相手が望む幸福とは限らない。

一方的に自分にとっての悪を滅することと、相手の幸福がイコールの繋がりになることが当たり前だと、そう思い込んでいたからこそその自滅。

それなのに、彼らを恨むというのはあまりにも八つ当たり染みている。

それを理解していても、過去の自分を殺すという行いは止めなかった。

もう引き返せないと勝手に諦め、自分の身勝手に仲間を裏切る。そういうことはもうしたくない。

誰かを救うということは、誰かを救わないということ。かつて自分が言った言葉だが、そんなの当たり前だ。だが、そこで救うことを諦めてしまえば、過去の私のような負け犬根性が染みついてしまう。

理想を語ることのどこがいけない。実行して何が悪い。

やらない善に正義を見出し、偽善を嘲笑い自己陶醉するよりも、よっぽど立派だ。

救えない者がいるということを忘れた訳ではない。

だからせめて——私が本心から助けたいと願う者だけでも、取りこぼすことはしないよう誓いたい。誰でもない、自分自身に。

『——君さえよければ、その酒を吞ませてくれないか？』

『お、今回は自分から進んでか。どうしたんだい？』

『なに、呑みたい気分になった。それだけさ』

たまには、羽目を外すのも悪くはない。そう思えるようになったのも、この世界を訪れてから。

切っ掛けは謎の存在との邂逅だった。ソイツの気まぐれか何かは知らないが、チャンスを与えてくれたことには感謝している。

ただ、そんな力の持ち主が、気まぐれで私のような異端者を招き入れる意味が分からない。

こんな閉鎖的な世界に招くことで、何か不備が起らないと思わなかったのだろうか。

それとも、私程度が介入したところで損得の勘定には入らないとでも言うのか。

何にせよ、この状況を有効活用しない手はない。せいぜい利用させてもらおう。

『……………どうでもいいことではあるが、君はこの瓢箪の酒ばかり呑んでいて飽きないのか?』

『ちつつち、虫にだって種族の先に個体差がある。蜂にも働き蜂や女王蜂という区分があるように、この中に入ってる虫も、実は味に変化を齎してくれるのさ。ま、貴重でしかも虫故の短命さから、鬼を除いて所持している奴は見たことないがね』

瓢箪を目の前で見せびらかすように揺らす。

芥川龍之介が書いた小説が有名な伝承元ではあるが、あくまでそれは口伝に基づいた起源から取っている為、歴史の深さは深すぎず浅すぎずといった所だろう。

ただ、その起源が特定されていない為か、あまりにも謎めいた部類の伝承の生き物と化している。ある意味どんな生物よりも幻想に近いと言われても不思議ではない。

そして——目の前で陽気に酒を呑んでいる鬼の少女。彼女もまた幻想種であり、竜と同一である魔獣の烙印を押された存在。

そんな化け物と言われる相手と平然と酒を酌み交わしているというのだから、世の中分らないものだ。

『鬼は、君以外にもいるのかい?』

『いるよ。とは言っても少数になったんだけど。鬼の四天王と言われる四人を筆頭にして、あとはソイツラの数段弱い鬼がひっそりと住んでいるのさ。まあ、四天王なんて肩書は過去のものでしかないんだけどね、何せ徒党を組んでいない以上、そんなものは名乗り口上にしかないしね』

『徒党を組んでいないって……………何かあったのか?』

その問いを掛けた瞬間、へらへらとした表情は一変し、まるで流水の如き静けさを身に纏い出した。

「——さあね。大方人間に失望したんじゃない？」

「失望？」

『過去の時代、鬼と言う存在が絶対強者であった頃、人は徒党を組んで鬼を——悪を倒すことに一念を貫いていた。鬼が人間を攫い、人が鬼を退治する。鬼はそれを愉しんでいた、攫うといっても連れてきた人間には特別待遇と呼べるような扱いで持て成し、助けが来るまで交流を深めていただけさね』

鬼が語る、鬼退治の全容。

それを語る少女の眼差しからは、憂いにも似た感情が見て取れた。

『見た目が人とまるで異なる存在に立ち向かう勇猛さ、私達は人間から溢れるそれに感動を覚えていた。——だが、時を経て人は変わった。勇気を心に秘めた者が、失せていったのさ。人攫いを行えどそれを取り戻しに来る者はおらず、死ぬまで鬼と共に過ごした者も少なくない。そんな彼らの最期を見続けたから当然さね、人間に希望を持てなくなったのは』

信頼していた友に裏切られた気分、それが今の彼女の心境なのだろうか。

絶対不変だと信じていた人の勇気が、知らず風化しているのを見て、我慢できなくなったのだろう。

だから、姿を消した。信じていた力タチを幻想で終わらせたくないが為に。そんな幻想を信じ続けたかったが為に。

『そして鬼が消えた世は、途端に波乱の幕開けを飾った。簡単なことだ、鬼と言う絶対悪が消えた今、人間の中に眠る野心や鬱憤を晴らす矛先はどこへ行くかなんて、想像に容易い』

『それが、人間同士の争いの切っ掛け——』

『そう。よくあるじゃないか、勇者が魔王を倒して世界平和になるってお話。大体は魔王を倒せばそこで物語は終わり。そりゃそうだ、その先にある未来は絶望しかない以上、都合の悪い歴史を投影する必要は無い。現代がそういった夢物語で終わらせれないのに、現実を見せたところで現実逃避になんかなりやしない。物語は、楽しんでこそだしね』

ハッピーエンドは起こり得ない。

一度崩れた均衡は、水の一滴が岩をも通す気持ちで全員が取り掛からない限り、絶対に覆らない。

その証拠に、ヒトは争うことを決して止めない。地位を利用して弱者を熨して君臨すること、僅かな徒党を複数で組みそこで争いを繰り返すこと、もっと身近な部分では、喧嘩だってそうだ。

ヒトは弱者を見下すことでしか自分の存在価値を見いだせない。そういう遺伝子が、遙か昔に刻まれてしまったから。

……その行く末を何度も見届けてきた私には、彼女の言いたいことが分かる。

『——だったら、君はどうしてここにいる？』

だからこそ、これだけは聞かなくてはいけない。
何故こんな人と出会う可能性が大いにある場所に居座ることが出来

る？

私は、彼女の真意を知りたい。

『君は、人間に絶望しているのか？』

『――、』

饒舌だった少女の口は、途端に閉ざされる。

少女は俯き、答えない。

『――話をしよう。とある人間の、人間が大好きだった人間の話』

私は語った。私自身の過去を。

誰かを助けることに命を賭け、ただそれだけを目指した青年の末路。裏切り、謀り、詐欺、あらゆる恩を仇で返され、最後には助けた者の言葉が切っ掛けで処刑台へ。

その過程で世界と契約し、死に絶えた後は問答無用の大量虐殺に身を投じる羽目になった。争いを止める、最善の手段として。

その中で更に人間の醜悪さを垣間見た青年は、度重なる戦いの中で心を失った。擦り切れすぎて、影も形も残らなかった。

そんな心にひとつだけ残った思い。

それは、憎悪。他人にではなく、自分自身への。

自分の目指していた正義は間違っていた。

その手で救えず、その手で殺めた者が多くなればなるほど、理想を口にする事は出来なくなる。

ならば彼の存在意義は？誰かを救うことが存在意義だった彼が殺しに加担しているのならば、その身が存在する価値は無い。

故に、彼は賭けていた。彼が過去に戻る唯一の方法で、自分が生

きていた時代に戻されることを。

そして——過去の自分を殺す。それだけが、彼が生へ執着する理由だった。

そして、その時が訪れる。

それから、どうにかして自分を殺す機会を伺った。

——だが不思議なことに、殺せなかった。一度は身を挺して己の主人達を護り、二度目も身を挺して殺すべき存在を逃すどころか、腕すら与えてしまう。

そして三度目は……諭されてしまった。過去の自分と、己が主人に。

実に滑稽だ。今まで己が心の臓を握り潰したい嫌悪感に駆られた奴が、結局は踊らされただけに終わったのだから。

だが、青年は後悔はしていなかった。

だって——自分が貫いていた正義の味方としての在り方は、決して間違いではないと教えられたから。

『——まあ、こんなところか。実に今の君と酷似していると思わないかね?』

『……それで、その青年はどうなったの?』

『さあな。また正義の味方家業を続けているかもしれないし、もしかするとこうした風に酒を呑んでいるかもしれないぞ?』

私がニヤリと口元を歪めると、少女はそれに呼応するかのように顔を上げた。

『アン、タ——まさか』

少女は私と目を合わせる。

だが私は何も答えず、その姿を捉え続けるだけ。

少女も何も言わず、こうしたやり取りが数秒だけ行われた。

『鬼はね、嘘は吐けないんだ。だから言うよ。今でも人間の臆病さには失望するばかりだし、救いようがないとさえ思っている』

けど、と少女は一呼吸置き、続ける。

『——そんな物語の青年みたいなのがいちゃあ、見限れる訳ないじゃないか………!!』

少女は再び俯き、両手を拳にして肩を震わせる。

彼女もまた、自分の信じた幻想を信じ続けて、今の今までそれに縛られ続けていた存在だったのだ。

何千何万と、それ以上の歳月の間、彼女は信じた正義の味方ニンゲンの姿を壊さないようにしていた。

信じたかったからこそ、逃げることをしなかった。逃げたらその時こそ、全てが終わってしまうと理解していたから。

だが、ここで全てが崩壊した。

価値観や妄質に囚われ続けていた小さき鬼は、全てを打ち明けた。

人に言えば容易く崩れ去る幻想だからこそ、自分の中に閉じ込めて

おくことしか出来なかった呪いに等しき枷。

その泥をやつと吐き出すことが出来たのだ。

一度倒壊したダムは留まることを知らない。

鬼は小さな嗚咽に抱かれ、一筋の滴を垂らした。

私は、そんな少女の訣別の瞬間をただ見届けていた。

鬼が囚われた幻想（後書き）

諏訪子出番すくなっ、ごめんね。

シロウと好感度初期から高くてもっといろんな関係を見たいと言われましたが、難しいですね。

既存のキャラはともかく、まだ出てないキャラをそういった意識でつくるのは難しい人でもありますし、シロウ自身が基本無害なキャラなのでそういった関係になるパターンってどうしても限定される気がします。

それを考えてこそ多少はマシな小説になるんでしょうが、やはりままならないものですね。

暫くはフリーなので、少しは小説多くかけたらなーとか思ったりもしてます。理想を抱いて溺死しそうですが。

特別企画：幻想に訪れた特別な2月14日（前書き）

なんとなくやった。反省はしてない。

登場キャラは原作（50話現在）でシロウに関わったヒロインのみです。

つまり、紫とかうどんげは出ないよ。残念でした。

この小説は、番外編です。本編にはこの内容は絡みません。

だから、この光景は未来の幻想郷かもしれないとか、平行世界の出来事だとか、考えるのは自由です。フヒヒ。

多分この手の企画はいつかまたやると思う。いつかね。

その時にはある程度新キャラいると思うので、新キャラ以外は逆に出さない内容になるんじゃないかね。いつになるかわかんないけど。

と投げやりになってる理由は、普通に内容が濃いからだよ！疲れたよ！働きたくないYO！

なんで短編小説ばりの長さなんだYO！これだから脊髄反射的な行動は控えると………しかも内容本当にやつつけだし。ダメだ私。

2 / 19 白玉楼編追加。内容はそんな長くないよ。

2 / 26 図書館組追加。それに伴い一部の既存文章の修正を行いました。

特別企画：幻想に訪れた特別な2月14日

緩やかに、しかし確かにやってきた、今日と言う日。

世界各地で男女の愛の誓いの日とされる、女性にとっても、男性にとっても、自身の価値を問われる祝日。

『やって来ました、バレンタイン！』

早苗はガッツポーズを取りながら、そう叫んだ。

外の世界ではごく当たり前に行われていた風習であるバレンタインデー。

何故彼女がここまで気合いを入れているかと言うと——いや、誰もが気付かない筈はないか。

『シロウさんに手作りチョコを渡して、ああ、私の為にこんな労力を使わせてしまって申し訳ない。ありがとう。こんな事でしか君に誠意を示せない自分が情けないが、私の愛を受け取ってくれないか。そう告白された私はそのままひと冬のアバンチュールに……きやつ、恥ずかしい！』

くねくねとした動きと、シロウの真似をしてまでの妄想の顕現。端から見れば奇怪な事この上ない。

『さて、数日前からシロウさんに気付かれない様にこっそり作っていたこのチョコを渡しにいきましょう』

奇怪な姿勢から突如引き締まる。人とはこうも容易く意識を変えられるのか。

そしてまさかの袖の下から取り出したそれは、その形は洗練された

ハートの造形を成しており、ラッピングの模様もハートとピンクと徹底している。

これを見れば、相手が自分にどのような感情で接しているのかが普通は分かるだろう。普通は。

鼻歌交じりに陽気なステップを踏んで居間へと向かう。

今の襖の前に立つと、チヨコを後ろ手に隠し、深呼吸をひとつ。意を決してそれに手を掛けた。

『シロウさん、いますかー？』

しかし開けた先には、煎餅を美味しそうに齧る諏訪子の姿のみで、彼女の望んでいた影は形もない。

『諏訪子様、シロウさんを知りませんか？』

『シロウならさっき出掛けたよ。最近この時間にはいなくなってるの知らなかったっけ？』

『え？』

諏訪子もそう言われ、ここ最近の事を思い出す。

ここ数日間、私はシロウさんのいない時間を見計らってチヨコ作りに勤しんでいた早苗。

そのタイミングが重要すぎて、彼がどこに行っているのか、何故こゝも都合よくいなくなってるのかまでは考えようとしなかった。

『もしかして作ったチヨコを渡す気だったの？別にいいんじゃないか、帰ってきてからでも。私もそうするつもりだったし』

そう言つて卓袱台の下から取り出したのは、正方形の箱に包まれた、早苗と一緒に作ったチョコ。

曰く、面白そうだからとやり始めたそれ。日本の神である以上、他の宗派の行事に現を抜かすのはいけないと言つていたのだが、幻想郷に来たことで吹っ切れたらしく、今に至っている。

柔軟な思考を持つのは悪いことではないが………こつも手の平を簡単に返されるのも釈然としないのではないか。

因みに料理経験のある早苗から見ても、そのチョコは良い出来だと思う。

料理本を片手に取り組んでいたのをちよくちよく見かけたが、出来上がったそれはまさに手本に出てくるそれと何ら変わらない出来だった。

その時の諏訪子のセリフで、『マニュアル通りにやってるんだから当然だよ』というのを聞いたとき、思わず殴りたくなったというのは早苗の中だけの秘密である。

『しかしですね……………』

『焦るということは自分の中で負い目があるからだよ。どうせ早苗は他の女の子からチョコを貰うことを懸念しているんだろうけど——お前が作ったチョコは、誰かに負ける憂いを持った半端なモノなのかい？』

『そんなこと——！！』

『なら座りなさい。一緒にお茶でも飲んで、シロウの帰りを待とうじゃないか』

諭すように言われ、早苗は大人しく座布団に腰を掛ける。

諏訪子はそんな早苗の姿を見て、顔を綻ばせる。
成長したな、と親心の籠った視線を向けていると、早苗が首を傾げる。

何でもないよと言い、お茶を啜り、一息吐く。
女の子の一日は、始まったばかりである。

『お邪魔する』

シロウはそれだけ言うと、香霖堂の戸を開けた。

『やあ、いらつしやい』

霖之助に出迎えられ、私はそれに軽く会釈する。
中はいつも通りの雑貨屋だが、その中からほんのり甘い匂いが流れてくるのが分かる。

『済まなかったな、無理な願いだったろうに』

『別にいいさ。僕は必要最低限しか使わないし、見てて面白かったしね』

店の奥にある霖之助の私室にまで足を運ぶ。
そこには、山のように積み上がった梱包されたチョコレートがあった。

私はここ数日間、霖之助の下でこれを作成していた。

幻想郷にバレンタインの風習があるかは知らなかったが、日頃世話になってる身分としては、こういった機会に誠意を示しておきたいと思い、私は行動に移した。

出来ればサプライズとして仕込みたいので、こうして霖之助の家にお邪魔してこっそりとチョコ作りに励んでいたのだ。

『しかし、過程を見ていたから分かるけど、気合の入れようが半端なかったね』

『妥協はしない性分なのでね』

そう、ただチョコを作るだけなら一日もかからず全て終えていた。だが彼は、こと料理に関しては半端を許さない。結果、味、見た目共に満足の行くものとなった。

『霖之助、君は魔理沙になにかあげたりしないのかい？』

『生憎だけど、こっちは普段から持つてかれる立場でね。こっちが欲しいくらいだよ』

重い溜息が響く。

彼の言葉だけで、どんな目にあっているのかが簡単に想像できてしまっただけ、同情を禁じ得ない。

それだけ信頼されているんだと本人も理解しているのだろうか、それでも釈然としない部分はあるのだろう。私だってそう思うときもある。

僅かな重い雰囲気、突然快活な声が響き渡る。

『よーっす霖之助!!』

『噂をすれば、か』

霖之助がカウンターに向かうのに続いて後を追う。

私の姿を確認した魔理沙が、一瞬嫌そうな顔をした。分かっていたが、傷つくな。

『今日はなにかようかい？』

『あ、あ——いや、その』

珍しく歯切れの悪い魔理沙を見て、霖之助は不審がる。そんな中、魔理沙が私にちらちらと視線を送ってきた。恨みがましい念の籠ったそれを見て、納得する。

『さて、私は作業に入るか』

呟くように、私は再び奥へと戻る。

気を使ったのもあるが、この大量にあるチョコを纏めないとイケないというもある。

私は黙々と泥棒の必需品と名高い緑の風呂敷に、丁寧に詰めていく。

『こ、香霖。これっ！』

『こ、これは……………』

二人の会話が聞こえる。これでは気を使った意味が大してない気がするのだが。

『今日って、バレンタインデーっていう日なんだろう？早苗が言って』

た。だから、取り敢えず受け取れ！」

早苗が言っていたということは、バレンタインという風習は伝わっていない訳ではなさそうだ。

なにせ狭い世界だ、噂や情報というものは簡単に行き着く。それならば、いちいち説明しなくてもよさそうだな。

『——さて、と』

荷造りを終えた私は、再び二人の下へと向かう。

『魔理沙、ほら』

私は下から手にしていたものを軽く投げる。

魔理沙はそれに気づき、咄嗟に慌ててそれをキャッチした。

『——おい、これって』

『君が霖之助にあげたものと同列のものさ。こうでもしないと拒否されると思っただのね、少し乱暴に渡させてもらった』

『……………嬉しくもなんともない渡され方だぜ』

ムスツとした表情で睨まれる。

私もこういう手段を取るのは嫌だったが、彼女に良い感情を持たれていないのは承知しているからな。

だからこそ、彼女とは仲良くしていきたい。その為の橋掛けにでもなればいいと、そう思っている。

『礼は言わないからな』

『いいさ。私は君が受け取ってくれただけで嬉しいからな』

『ッ——』

魔理沙は何か言いたそうにしていたが、何も言わず全力で踵を返し、その場を後にしようとした。

そして、乱暴にドアを開けたかと思うと、ゆっくりと此方に振り返り、呟いた。

『…………でも、ありがとな』

聞こえるか聞こえないかのそれは、喧しく閉められたドアの音と共に消え去った。

『…………ま、一步前進したかな』

横でやれやれと嘆息している霖之助を余所に、私は充実感で満たされていた。

驕りかもしれないが、僅かでも彼女に歩み寄れた気がして嬉しかった。

霖之助に別れを告げて向かうのは、アリスの家。

近場から消化していかないと、かさばる上に移動中に形が崩れてしまう恐れがある。

細心の注意を払っていかないと、苦勞が水の泡となってしまう。

そして十分程掛けて到着。

見上げると、煙突から煙がもくもくと浮かんでいる。それと同時に、ほんのりと甘い空気も漂っている。

『……………まさか、な』

とある可能性を胸に秘めたまま、戸を叩く。

『私だ、エミヤシロウだ』

ある程度聞こえるであろう声量で名乗ると、慌ただしい音に続いてドアが開かれる。

それと同時に、咽返りそうな位の甘い匂いが私を覆う。

『い、いらつしゃい。きよ、今日は何か用？』

『あー、お父さんだー！』

『こんにちは』

どこか動揺した様子のアリスの出迎えに続いて、普段と変わらないテンションで上海と蓬萊も現れた。

『ああ、その件なんだが——少し上がらせてもらってもいいか？』

『えっ、それは——』

『いいよいいよ！入って〜！』

アリスが何か言おうとしたが、上海の声に上書きされ、聞こえない。

そして私は、上海に引つ張られる形で家にお邪魔した。

『……………で、その袋は一体なんなの？』

どこか諦めたような様子でアリスが私に問いかける。

まあ、誰が見てもこんなデカい風呂敷を見れば不審に思うだろう。

『それなんだが——受け取ってくれないか』

風呂敷の結び目を僅かに開いて、手探りで取り出したるは3つの長方形の箱。

黄、赤、青の色でラッピングされたそれを、それぞれアリス、上海、蓬萊に渡す。

『……—これって、』

『知らないかもしれないが、外では今日の日をバレンタインデーと言つてな、こうして贈り物をする風潮があるんだ。だから、日頃の感謝を籠めて、贈らせてもらいたい』

アリスは慎重に、上海は乱暴に、蓬萊は静かに梱包を解いていく。しかし、誰もが共通して、緊張した態度で臨んでいた。

シロウはそれを知つてか知らずか、彼女達と同じ気持ちでその場に立っている。

『口に合うかは分からないが……………』

三人同時に箱を開けると、そこには各々の名前が綴られた板チョコと、色んな形をした小粒のチョコが入っていた。

『す、凄い……………』

『わーい、チョコだぁー!』

『女としての自尊心が形無し……………』

三者三様の反応を示した後、それぞれチョコを口に運んだ。数秒の沈黙。幾度と経験した食事をしてもらう瞬間の緊張感。場数を踏もうとも、この一瞬の空気だけは慣れない。

『美味しい……………!』

呑みこむ音すら聞こえる静寂は、アリスの呟きに破られた。

『うん、美味しい!』

『甘いけど、しつこくない。アリスのとは大違い』

私は胸を撫で下ろす。どうやら満足してくれたらしい。

『そうだ!アリスアリス!』

上海が突然アリスの袖を引っ張り、何かを訴えようとしている。

『……………そうね。シロウ、ちょっと待ってて』

意図に気付いたアリスは立ち上がり、それに上海と蓬菜も続いて別の部屋へと消えていく。

私は彼女達の姿を見送り、呆然と立ち尽くす。

程なくして、アリス達が戻ってくる。その手には甘い匂いの正体が

あつた。

『お父さん、これ!』

『あげる……………』

両手を突出し差し出される、ハート型のチョコレート。少し不格好だが、私の為に作ってくれたのかと思うと、涙腺が緩んでしまいそうになる。

『バレンタインのことは知ってたわよ。だから二人共貴方にチョコをあげようって頑張ってたのよ。本当はキチンと紙に包む予定だったのに、タイミング悪いのか良いのか……………』

『そうか……………有難う。本当に感謝している』

二人のチョコを受け取り、口に含む。

甘い。だが、相手を慈しむ甘さだ。

誰かの為を思わないと、こんなチョコは作れない。

新ためて、私は二人に愛されているんだと実感した。

『美味しい……………。よく頑張ったな』

優しく二人の頭を撫でる。

擦ったそうにしている表情が、私にとっての褒美となった。

『ところで——アリスのそれは誰にあげるんだ?』

二人を撫でながら、アリスを一瞥する。

大きさこそ違えど、彼女の手にもまた、同じ形状のチョコレートが

ある。

しかも、二人よりもデコレートされている事から、渡す相手は本命と言ったところか。

『こ、これは――』

言葉に詰まるアリス。

流石に野暮だったか？そう思ったとき、蓬萊が介入した。

『これは、お父さんにだよ』

『――なに？』

聞き間違いだろうか。こんな気合の入ったチョコが私宛だと？信じられないといった顔つきの私に、アリスが声を荒げる。

『ちっ違うわよ！これは――そう！二人の為に見本を作ったんだけど、つい二人の目の前から気合入っちゃって、別に本命とかそんなんじゃないから、勘違いしないでよね！』

『あ、ああ』

物凄い剣幕で捲し立てられ、思わず身動きする。

まあ、彼女にとって上海と蓬萊は娘みたいな存在だ。言いたいことも分かる。

『だけど、せっかくだしあげるわ。味なんて変わるもんじゃないし、二人には味見してもらってるからね』

頬を染めてそっぽを向きながら、チョコを突き出される。

私は無言でそれを受け取り、その欠片を食べた。

『……………美味い。私には勿体ない位だ』

お世辞ではなく、純粹にそう思えた。

完璧とは言い難いかもしれない。本当の料理人には敵わないかもしれない。

だが——彼女がこのチョコに込めた想いに勝る隠し味がある筈がない。

実力を補って余りあるそれは、どれ程までに彼女達のことを思って作られたのか、想像がつかない。

それでも、彼女の二人を思う気持ちだけは、理解出来ない訳がない。

『君が（二人の為に）込めた愛の深さ、しかと理解した。君は、素晴らしいよ』

『なっ……………！』

『おお』

『……………』

照れているのか、彼女の顔は先ほどよりも赤くなっている。

上海はどこか感動した様子。蓬萊は、何も口には出さないが何故か口元が怪しく吊り上っている。

『——つと、済まない。これを配る時間が無くなってしまうので、これで失礼する！』

私は慌てて風呂敷を回収し、皆の言葉も聞かないまま逃げるように

その場を後にした。

家の中では、呆然とその姿を見送る三人だけが残された。

乾いた小気味いい音と共に私の口の中へと侵入していくチョコレート。

私は今、風呂敷を首に掛ける形で支え、空いた両手でアリス達のチョコを持ち、食べ歩きしている。

出来れば味わって食べてあげたいが、食べ歩きは然るべき食べ物であるからこそ許されるものであって、これは私の中ではその分類に入らない。

下品とまでは言わないが、折角作ってくれたのだから相応の態度で食してやりたいという思いがある中、急いでチョコを渡さないと日が暮れてしまうという焦燥感との板挟み。

故に、心苦しいがこうして妥協している。

今日と言う日を逃せば、バレインタインの意味が無い。だからこそ焦っている。

そんな見えない何かに背中を押される中、気配が近づいてくるのに気付く。

私は足を止め、その正体を見据えた。

『あら、いい匂いにつられてみたけれど、大当たりかしら』

まるで偶然を装った風に現れたルーミア。

彼女なら、喻え私がチョコを持っていなくとも容易に見つけ出すだろうに。

『おっ、シロウじゃん!』

『ま、待つてよおチルノちゃん、ルーミアちゃん!』

それに続いて、元気よくチルノが。更に大妖精が息を切らして登場。

『ふむ、都合がいい。少し待つてくれ』

『お、何だ何だ?』

チルノが目を輝かせて問いかけてくるが、それは敢えて無視。
あとルーミア、その全てお見通しだという目は止めてくれ。

『プレゼント、と言ったところかな。食べ物だから、遠慮せず食べてくれ』

三人に専用のチョコを渡す。

チルノのは、雪だるまを模したもの。大妖精には、色んな色で出来たもの。ルーミアは、イメージが正直湧かないので、特別に球体の小粒ビターチョコにした。

『おー! すごい!』

『ありがとうなのだー』

『ほ、本当にいいんですか?』

大妖精以外は純粋に受け取ってくれたが、彼女は申し訳なさそうに上目遣いをしてくる。

『今日は年に一度の、他人に好意を示す日なんだ。私にとって、君達はかけがえの無い存在だという証明でもあるんだ』

『かけがえの、無い』

『そうだ、だから受け取ってほしい。だが、強制はしない』

好意の押し付けだけはしやいけない。

これは偽善でしかない。そうではありたくないとは願いたいが、断られたからと言って押し付けるのは、人道に反する。

妄想だけで済めばいいが——物事に絶対はない。残念な結果も考慮に入れておかないと、傷が深くなる。

『——ありがとうございます。大事にしますね』

『出来れば食べて欲しいのだがな………』

そつと、私の手から離れていくチョコ。

大妖精からは、さっきまでの一歩引いた態度は薄れており、私はそれに満足する。

横目で蚊帳の外の人を一瞥すると、チルノは豪快に口を開けて、ルーミアは普段の彼女を知るものならば驚愕するであろう上品に手で一粒ずつ摘まんで食べている。

私の視線に気付いたのか、ルーミアが此方に視線を写し、手招きをする。

私はそれに従い、彼女の前まで移動して屈む。そうしてルーミアが耳打ちをする。

『まあまあね。及第点と言ったところかしらね』

『これは手厳しい』

と言うか、彼女にしたら肉の方が嬉しいのだろうが、それではあまりにも異色すぎるというか、普段通り過ぎる。

『あのデカイ袋にはこれの似たものがあるんでしょ？耳よりな情報があるんだけど、聞く？』

『ほう、是非』

彼女は無駄なことは話さない。

素の時は、どちらかに常に有利に働くような、合理性のある内容が話される。

つまり、今だ。

『今紅魔館で、何やらパーティをしているらしいのよ。私達がここにいるのも、決して偶然ではないってこと』

『パーティ、か』

紅魔館でパーティ自体、そう珍しいものではない。

レミリアの気分次第で行われるそれには、規則性が一切存在しない。天狗にとってもさして特別な出来事ではない為、記事にもならない。故に、私も今の今までその事実を知らなかった。

『で、何故君がそれを？』

『あら、私を誰だと思ってるの？』

それを言われたら、何も言い返せない。

彼女と言う存在は未知数過ぎて、胡散臭さこそ内包しているものの、その言動は信用に値する重みが含まれている。

一種のカリスマ、という奴だろうか。のほほんとした演技に騙されている者が殆どだろうから、知れば驚くこと間違いなしだろう。

『情報感謝する。ならば、目的地は一緒だな』

『そうね』

この結果もまた、彼女の思惑通りの結果なんだろう。
嫌悪感こそないが、常に掌の上で踊らされている気分ばかりなので、いつかは反撃したいと思っている。

『ルーミアなにしてんの？』

『なんでもないよー』

チルノの問いに、別人になったかのような切り替えで答えるルーミア。
ア。

私の前だけ位でしか素を出せないという現状らしいが、では私は彼女にとつての癒しの場となっているのか。

そう考えると嬉しいが、体よく利用されているようにも感じる。

どこか釈然としない心持ちのまま、子供三人の間で話は進んでいく。
ルーミアが私との会話の顛末を語ったらしく、チルノと大妖精の中でも一緒に行くことが決定したらしい。

『あ、あの、シロウさん』

『何だ?』

どこか決意した目つきで、私の瞳を見据える大妖精。
その姿からは、普段は見られない芯の強さが滲み出ていた。

『私も、今度プレゼントをあげます!』

『プレゼント?』

『はい。私がシロウさんにとってかけがえの無い存在なら、私にとってもそうなんです。だったら、お返しするのも当然ですよね?』

まさかの大妖精の発言に、驚きを隠せない自分がいる。

鼻屑目に見ても、彼女はこういうことを進んでいうような性格とは思えない。

だからこそ、それと同時に感動すら覚える。

『ありがとう。いつでも待っているからな』

『はっ、はい!』

勢いよく頭を下げる大妖精。

なんだかんだでいつもの彼女に戻ったが、彼女の成長は私にとっても嬉しい事実だ。

子持ちの父の気持ちがよくわかる一瞬である。

『ほら、大ちゃんもシロウも早く!』

いつの間にか私達以外の二人は遠くまで移動しており、チルノは両

手を振って意思表示をしている。

私達は、チルノに急かされる形で紅魔館へと急いだ。

程なくして紅魔館に到着。

外からでも、中が賑わっているのが分かる。本当にここでパーティーが行われているようだ。

そして、珍しく美鈴が門番としての定位置にいない。今の紅魔館は出入り自由の無礼講な日なんだろう。

私達は入り口を堂々と開ける。

そうすると、より一層喧騒が押し寄せてくる。一体ここには何人の人達が集まっているのだろうか。

取り敢えず、騒がしさに誘われるように、歩を進める。

『そういえばルーミアよ、ミスティアといたのは珍しいな。まさか知らせていないなんてことはあるまいな』

『当然よ、私が先に伝えて先行させたのよ。色々やることがあるでしょうしね』

『……………?』

ミスティアだけ何故先行させたのか。

その真意を確かめる間もなく、私達はとある部屋の前で立ち止まる。そこは、私もよく知る客間だった。

ここでのバイト経験のある私としては、掃除に手間取った記憶が大

半の部屋。

百人乗っても、ではなく百人入っても余裕で大丈夫な広さを誇る客間。紅魔館を作った奴はさぞお祭りごとが好きなんだろう。そしてその血は間違いなく、レミリアに受け継がれている。

『ここだな、よし！』

チルノが意気揚々と大扉を開くと、眼前には噂を聞きつけた者達が和気藹々としている姿が広がっていた。

『あら、いらつしやい』

横から聞こえた声に振り向くと、そこにはこのパーティを主催したのであるうレミリアの姿があった。

『これは君の仕業なのか？』

『人聞きの悪い言い方ね。去年辺りに山の神社に来た人間が噂してたらしいじゃない、今日と言う日の意味を。まあぶっちゃけ意味なんかどうでもいいんだけど、これに乗じない手はないでしょう？』

相変わらずの幼い姿とは不釣り合いの不気味な笑みを浮かべるレミリア。

私はそんな彼女を見て、軽く溜息を吐く。

周囲を見渡すと、大量に用意された円形のテーブルの上にはチョコレートで出来たお菓子で一杯になっていた。

咲夜が全部やったのだろうが、この量は骨が折れるだろうに、本人は今も忙しそうに給仕をしている。

『素直に騒ぎたいと言えればいいではないか。今日と言う日を免罪符

にする必要はないだろうに』

『うっ、五月蠅いわね。こういったのは皆でやるものなんでしょう？ いいじゃない別に』

つまり、皆で愉しくなにかをやりたかったんだろう。
素直にそういえば、可愛げがあるのだから。

『それよりも、その荷物なによ。不格好にも程があるわよ』

『ああ、これはだな——』

私が説明をしようとした時、腰元に強い衝撃が走った。
何事かと下を向くと、そこには喜びで満ち溢れたミスティアの姿があった。

『お兄さん、来たんだね！』

『君も来ていたとは聞いていたが——その恰好は？』

ミスティアはいつもの服装の上から、白い割烹着を纏っていた。
普段料理をする時は和服の彼女だからか、その姿はとても新鮮味に溢れていると言える。

『あっ、そうそう！ コレツ！』

『こ、これは——！！』

そう言い元気よく取り出したのは、ハート型のチョコレートだった。
それだけならアリスの時にもあったし、特に驚きはしなかった。

う。

だが——デコレートが常軌を逸していたのだ。

どうやって作ったのか、ホワイトチョコレートで出来たI LOVE SHIROU という文字。

私は、頬を引きつらせるといふ反応しか出来ないでいた。

というかレミリア、腹を抱えて笑うな。こっちも恥ずかしいんだぞ。

『う、受け取ってくれますか？初めて作ったから、変かもしれないけど——』

上目遣いでどこか女の色気を全面に押し出しているミステリアの姿に、思わず固唾を飲む。

受け取らないという選択肢は最初から私の中では存在していないが、流石にこれは受け取るのに勇気がいるというもの。

『待ちなさい——！』

そんな空気を破るが如く現れる一筋の光明。

そこには、横で笑い転げている吸血鬼の妹であり、私を父と敬愛しているフランドールの姿が。

それに気づいたミステリアは、明らかに機嫌を損ねた様子で振り返る。

『フラン、邪魔しないで、私は今お兄さんと愛を確かめ合ってるの』

『そんなの許さないんだから！お父様にチョコをあげるのは私だもん！』

ズンズンとお互いに近づき、息の掛かる距離で睨み合っている。

錯覚だろうが、お互いの視線からは電気が迸っているようにさえ見

える。

思う念力岩をも通すと言うが、それを応用すればあんなことも出来るのかと、現実逃避している自分がいた。

『それになにそのチヨコ、まるで形がなっていないじゃない』

『そ、そんなのいいんだもん！愛の深さだったらアンタに負けてないんだから』

『言っわねえ、ちんちくりん』

『見た目だったらお互いどっこいでしょうが！』

まるで子犬同士の喧嘩を見ているような光景を見て、ハツとする。

『こらこら、そんなに怒った顔をするな。可愛い顔が台無しだぞ』

二人の頭を軽く叩いて仲裁を図る。

ミステイアは私の手を上に更に手を乗せて悦に浸っており、フランドールは軽く涙目になって此方に何かを訴えている。

『二人とも私の為にチヨコを作ってくれたんだろう？だったら、その気持ちに優劣はない。どっちが優れているかなんて、そういった事実の前では些末事でしかない。違うか？』

私は笑顔でそう諭す。

聞こえはいいが、単に妥当な事を言っただけに過ぎない。

ヒトは、誰だっが一番を望む。僅かな差でも、醜く醜悪な反応を示す。

彼女達はそこまで執拗ではないだろうけれど、せめて今だけは妥協

してもらいたい。
卑怯かもしれないが、私はどちらかが不幸になる結果なんて見たくない。

『…………ごめんなさい』

『お兄さんがそう言うなら……………』

フランドールは、しゅんと頭を垂れて反省している。

ミスティアはどこか釈然としないでいるも、納得してくれたらしい。私はそれを確認すると、二人の頭から手を放し、今度は袋に手を掛け、下に降ろす。

『私も君達の厚意に応えないとな。ほら、二人とも』

意気消沈した二人の前に、チョコを差し出す。

二人ともそれに驚いた様子で、私とチョコを交互に見つめる。

『君達に比べたら思い入れは足りないかもしれないが——私なりの精一杯の感謝を込めて、贈らせてもらう』

『た、足りないだなんてそんな——！』

『すっごく嬉しいよ！』

二人同時に身体を押し寄せ、我先にとチョコレートを受け取る。共通して二人の目は輝いており、さっきまで喧嘩していたとは思えない息の合いように、微笑ましさを覚える。それと交換するように、私も二人が作ったチョコを貰う。そしてまずは、ミスティアのチョコを頼張る。

齧ったことで初めて分かったが、真ん中に苺チョコが入っており、更に砕いたマカダミアナッツも入っている懲りよう。

彼女の料理の才能は、同じ料理人として目を見張るものがある。あの程度は咲夜がフォローとかしてくれたに違いないだろうが、それでもこの完成度は称賛に値する。

『月並みな答えかもしれないが、美味しいぞ。初めてだと謙遜することはない、胸を張っていい出来だ』

『や、やったあ！』

小さく跳ねて小躍りするミスティア。

次に私は、フランドールのチョコを食べる。

ミスティアの言った通り、形はお世辞にも良いとは言えない。

味に関しても、少し焦げたような風味が舌に残る。匂いからも僅かに焦げ臭さを確認できる。

彼女は料理経験がミスティアに比べて少ないだろう。いや、もしかすると未経験と言う可能性すらある。

それを踏まえて、私は感想を語る。

『——正直に言うと、味は良いと言えたものではない。形も然りだ』

それを聞いたフランドールの姿が、明らかに落ち込んでいく。

その様子は、あれだけ対抗意識を燃やしていたミスティアでさえ、隣で申し訳なさそうにする程である。

私は静かに言葉を続ける。

『だけどな。この不器用さを見て思っんだ。ああ——私は愛されているな、と』

『えっ———？』

顔を上げたフランドールに対し、私は笑みを浮かべる。

『自分で分かるくらい惨めな出来栄だろうと、それは私の為に挑戦をした結果だろう？ だったら、それは見た目でも味でも秤に掛けることは出来ない、素晴らしいものだ。誰が何と言おうと、な』

『ッ———！！』

瞬間、私の胸に抱きついてくるフランドール。

その表情は私の胸に隠れて伺えないが、周囲の喧騒に紛れて聞こえる嗚咽が、彼女の状況を代弁している。

私はそんな彼女の頭を抱き締める。

不安だったんだろう、恐かったんだろう。

拒絶されるんじゃないかと、否定されるんじゃないかと。ずっと、思っていたんだろう。

このチヨコに掛けていた想いがどれだけ深いものだったのかが、改めて分かる。

『フランドール………』

そしてミステアが、フランドールの背中から抱きつく。

フランドールの気持ちに感応したんだろうか。二人から出ている雰囲気は、同一のものと化している。

いがみ合っではいたが、見据えていた先は一緒だからだろうか。確信する。二人はいい友人であり、ライバルになるだろうと。

『———で、いつまでそうしてるのかしら』

『空気を讀みたまえ』

レミリアの介入に即座に突っ込みを入れる。

ここで茶々を入れるのは、流石に同情の余地はないと思う。
シリアスな雰囲気が出過ぎる。

『うん……………もう大丈夫だよ』

フランドールが離れ、私に笑顔を見せてくれた。

ミステリアもそれに気付いて、身体を離す。

僅かに目元に涙の跡があった為、私はそれを指で拭くと、恥ずかし
そうな笑みを浮かべた。

『あと……………ありがとう、ミステリア』

『え？あ、ううん』

フランドールの感謝に恥ずかしそうに頬を書くミステリア。

恐らく、これで万事解決だろう。

私は空気の読めないレミリアの方へ向き直った。

『……………何よその目は』

『自分の胸に聞けばよろう』

彼女はどこか空気の読めないというか——スポットライトに常に
当たっていないと気が済まないのか、除け者にされているのが悔し
かったのか。何にせよ、もう少し自重してくれてもいいと思う。

『はいどいてどいて——って、シロウ?』

『天子じゃないか』

入り口に立っていた私達を避けるように入ってきたのは、比那名居天子だった。

それに続いて、彼女の背後から永江衣玖が謝りながら現れた。

『すみません、総領娘様が迷惑かけてませんか?』

『掛けてないわよ。今来たばかりだし』

『その割には、廊下走ったりと妖精メイドに迷惑を掛けてましたよね? 私が代わりに謝っておきましたので、帰り際にでも出会ったら今度は自分で謝ってくださいね』

『むっ』

衣玖が笑顔天子に突っかかる。

今の彼女の笑顔は、目が笑っていない。最近天子に強く出れるようになったのか、いつにも増して容赦がない。

『こんにちは、皆さん』

『こんにちは竜宮の使い。大変ね、天子の御守りも』

『ええ、そりゃあもう』

衣玖とレミリアが楽しそうに談笑している。この二人、こんなに仲が良かったんだな。

接点があるとは思えない組み合わせに珍しさを感じていると、天子が話しかけてくる。

『風の噂でここでパーティするって聞いたから来てみたけど、うんざりするぐらいチョコレートばかりね』

『仕方ないだろう。そういった趣でやっているんだから。それにしても、知らなかったのか？』

『詳細までは知らないわよ。楽しそうだと思ったから来ただけだし』

大げさに大きな溜め息を吐く天子。

その姿を見て、しまったと私の中で後悔の念が押し寄せてきた。

『そういえば、天子は天人なんだろう？』

『そうよ。当然じゃない』

『だったら、三大欲求も捨てているんだろう？だったら、こういったものは食べれないんじゃないか？』

『——普通の天人ならね。どーせ私は天人くずれですからー、別に少しぐらい食べたって全然問題ありませんよーだ』

被害妄想で頬を膨らませる天子。

自分が天人として浮いた立場にいた自覚はあったんだな。

『それで、それがどうしたの』

『いや、これを作ったんだが………君だけはもっと違うものを作れ』

ばよかったなと』

そうして一応彼女にチョコを差し出す。

『これ、食べ物？』

『ラップを取れば分かるが、君がさっきうんざりと言っていたチョコだよ』

『へー……………』

箱を色々な方向に回転させて観察している。

置物とかの方が、嬉しかったのかもしれないが、もう後の祭りだ。

『うん、ありがとう。折角だし食べさせてもらっわ』

『しかし、いいのか？チョコならあそこらにもあるのだが』

『当たり前でしょ。少なくとも、こうやって大衆の為に用意された料理より、私だけの為に作ってくれたチョコの方が、何倍も価値があるわ。それを蔑ろにするようじゃあ、人道に反するってものでしょう』

君は天人だろう、そう突っ込みを入れたくなかったが、純粹にそう思ってくれている彼女にそれを言うのは、それこそ空気が読めていないというもの。

『ありがとう』

それだけ言うと、天子は笑顔を咲かせた。

私は振り返り、今度は衣玖の元へと歩み寄った。

『あら、私にもくれるんですか？』

『聞いていたのか』

『ええ、総領娘様嬉しそうでしたよ』

『それなら何よりだ』

来年は、今回の反省も生かし、チヨコ以外の贈り物を作る選択肢も考慮しておこう。

反省を胸に秘め、衣玖にチヨコを渡す。

『君は天人ではないし、大丈夫だよな？』

『はい。大事に食べさせて戴きますね。今度天界に来た時には、精一杯のお持て成しをさせていただきますね』

『ああ、楽しみにしていよう』

慎ましい笑い声が客間に響く。

その姿は、隣にいるレミリアよりもお嬢様っぽくて、比較して思わず苦笑してしまう。

『私にはないのかい？』

声が聞こえた刹那、背中に突然重さを感じる。
軽く横から見ると、声から推測した予想通りの人物が背中から掴まっていた。

『萃香、勿論あるから離れてくれ』

あいよ、という言葉と共に私から離れる。

今までで一番心臓に悪い登場の仕方だった為か、疲れた風ながらも彼女用のチョコを手渡す。

『中身はチョコレートボンボンだ。平たく言えば、東洋の酒が中に入ったチョコだ』

『おおーサンキュー』

早速萃香は封を開け、嬉しそうに食べたす。

その光景は、微笑ましいとしか形容出来ない。

ただ、もう少し味わってくれとも思う。

そんなこんなでひとしきり会話を終え、私は風呂敷に手を掛け、傍にいたレミリアにチョコを渡す。レミリアと咲夜の分のである。

『あら、こんなにくれるの?』

『君のは一つだけだ。それは咲夜の分だから、暇なときにでも渡しておいてくれ』

『貴方はどうするの?』

『図書館に行く。見渡した限りパチュリー達がいらないからな、いつも通り籠っているんだろう?』

『恐らくね。パーティするのは知っているから、余程気になる書物

でもあつたのかしら』

確かに、彼女ならあり得る理由だ。
寧ろ、それ以外思いつかない。

『咲夜に直接渡せないのは申し訳ないと思うが、今度埋め合わせを
することで勘弁して欲しいと思っている』

『その必要はありませんわ』

声が聞こえた途端、レミリアの傍らには咲夜が整然と佇んでいた。
相変わらずの登場の仕方だが、それ故の慣れもあるというもの。
そして咲夜はレミリアの手から抜き取るようにチヨコを手を取った。

『一応礼は言っておくわ。折角だしね』

『——そうかい』

そうは言っているが、今の彼女の表情は、凜がたまに見せた素直に
なれない態度の時のそれと酷似していた。

『時間があるなら食べていきなさい。強制はしないけどね』

『——そうだな、後でそうさせてもらうよ』

『そうしなさい』

彼女なりの借りの返し方なのだろう。

まあ、多数に向けられている食べ物貸し借りの対象になるのかは
分からないが、私はそれでも嬉しい。

少なくとも今の瞬間だけは、ここにあるチョコを与える対象は私だけだったのだから。

『だが、まずはパチュリー達の分のチョコを渡さないといけないかな。今は失礼するよ』

『そう、余程後じゃない限りはやっているから、いつでもいらっしやい』

『ああ』

レミリアは私に笑顔を向ける。咲夜は静かな瞳を投げ掛ける。私はレミリア達の視線に見送られながら、客間を後にした。

ヴウル魔法図書館への長い下り階段を抜け、パチュリーの定位置であるテーブルへと向かう。

『——予想通り、と言うべきか』

そこには、絵に描いたように忠実に再現されたいつもの光景が広がっていた。

ここまで変わらないのも如何なものかと嘆息しつつも、私は読書少女へと歩み寄る。

『……………あら、パーティは客間よ?』

『そういう君は、そのパーティに行かず本を読んでいるだけか?』

私の気配に気付いたらしく、パチュリーは気怠そうにこちらへと振り返る。

気のせいかな、目元に黒ずんだ跡があるように見えるが、寝てないのか?

『面白い本を小悪魔が見つけてね、それと過去の書物と比較、照合させたりしたらもう二日は寝ていないなんて結果にね』

『寝なさい。今すぐ』

思わず丁寧語になってしまふ。

声を荒げてでも静止させるべき状態なのに、私は不思議と落ち着いている。

言っても無駄だと内心諦めているのか、逆に信じているからこそ冷静になれているのか。

『今寝たら、頭の中からすっぱり抜け落ちそうなのよ』

『睡眠不足で脳の回転に支障をきたすのも問題だろう。因みに、脳は睡眠時に記憶の再構成をする為、直ぐに寝た方が記憶保持の効率がいいぞ』

『———そうなの?』

『そうなの』

語尾を多少強め、念を押す。

科学的な知識は、幻想郷にはそこまで広がっていないのは確実だろ

うし、知らないのも無理はない。

いや、知っていても信じようとはしなかっただろうし、誰かがこうして強く言わなければ結局は無意味に終わっただろうが。

『そうですよ、パチユリー様は貪欲さが身を滅ぼすタイプなんですから、せめて人に言われたら大人しく言うこと聞いてくださいよ』

突然、ひょっこりと本棚の影から姿を現したこあ。

遮蔽物が充実してはいるが、だだっ広い上にとても静かな空間であるここならば、聞き耳を立てずともこちらの会話は聞こえるのだろう。

『パチユリー様、お姉ちゃんの言うことは素直に聞いた方が……』

更におおずとこあの影から姿を現したリトル。

その諭すような口調は、どこか怯えを秘めている。

『大丈夫よ、今回はきちんと聞くから』

『今回は——って、本当二人に迷惑ばかり掛けて……』

『全くですよ。パチユリー様のせいでこつちも同じ生活レベルに合わせないといけないせいで、今日みたいにパーティにすら出れないんですから、はつきり言って内心イラッとしています。迷惑もいここですよ』

……こあも相変わらず、天然なのか素なのか分からない笑顔で毒を吐くな。

ふと、リトルと目が合う。

彼女が怯える理由も、今なら分かると言うものだ。

『……………はいはい、寝ますよ寝ますったら』

自棄になった口調で、私達に背中を向けてひらひらと手を振る。

『つと、待ってくれ』

私は彼女の前に慌てて回り込み、ここに来た目的のものを差し出す。

『パーティに来た目的は、これが本命なんだ。勿論、こあとリトルの分もあるぞ』

『本当ですか？』

『本当だとも』

そう返すと、小さくガッツポーズを取るこあ。

その姿を見ていると、色んな意味で彼女が分からなくなる。

『……………私の為に？』

小さく、パチユリーが呟く。

『ああ、それは君のものだ。君に渡すからこそ、意味があるんだ』

『……………ッ』

途端、パチユリーは乱暴に私の手からチョコを奪い取り、そのままどこかへと走り去っていった。

余りにも不可解な行動に首を傾げていると、こあが私の隣に立つ。

『気を悪くしなくてもいいですよ。怒ったのではなく、恥ずかしがつていただけですから』

『大丈夫、怒った訳ではない。邪険に扱われていない事ぐらい、分かっていたつもりさ』

本当は少し自信が無かったが、ここで弱音を吐いて彼女に気苦労を植え付ける訳にもいくまい。

私は、彼女達に喜んでもらう為にここにいるのだから。

『それよりも、ほら』

こあにチヨコを渡すと、彼女はそれを胸元で抱える。

『なんだか嬉しいです。男の人にこんなことしてもらったの、初めてですから』

『確かに、紅魔館の男女比率は私を除けば女性だけというところでもないものだからな。ましてやパチュリーに付き合っていると出逢いもあるまいて』

『そうですね。—— そうだ、だったら今度デートしましょっか』

『—— はい？』

なにがだつたらなのか、どうしてデートという発想になったのか。失礼だと思うが、彼女の思考は常人には測れんよ。多分な。

『シロウさんの言った通り、私は男性との出会いなんてありません。だからこそ、そんな私の前に貴方は特別と言っても過言でもありませんよね？そんな特別な出逢いを大切にしたいと思うと同時に――
――まあこれが一番の目的なんです、チヨコのお返しです』

『ああ、成程』

長々と何か言っていたが、結局はそれに行き着くのか。

パチュリー専属の使い魔である彼女らが、今回みたいな状況がザラなのに料理の練習などしているとは思えないし、こういうやり方ではないと恩が返せないのだろう。

そうでもなければ、私とデートだなんて言うはずがないだろうが、エミヤシロウ。

『それとも、私とデートだなんて、嫌ですか？』

『そ、そんなことはないぞ！ただ、余りにも予想外だったのにな、混乱していたんだ』

今の自分を客観的に見れば、とても情けない構図だと思う。
デートという言葉でこんなに動揺して――。
内心でいつもの自分に早く戻れと叱咤する。

『よかったあ、断られたらどうしようかと思いましたよ』

『そんな大げさな』

ほっ、と胸を撫で下ろすこあ。

私はその大げさな身振りに苦笑する。

『そつだ、妹ちゃんも一緒にデートしない？』

『へっ！？』

突然話題を振られたリトルが、あたふたと慌てふためく。

『だ、だってそれはお姉ちゃんとシロウさんの——』

『私がいいって言ってるんだからいいの。あとはシロウさん次第だけだね』

横目で私に問いかける。

彼女が嫌と言っていない以上、私が拒否する理由もないだろう。

第一、これはデートと銘打っているが実際はただ何処かへ出掛ける程度の意味しかない筈。そうじゃなきゃ、妹と言えど誘う筈もないしな。

『私是一向に構わんよ。寧ろ、こちらが頭を下げてでもお願いしたいくらいだよ』

何せ、疑似的とはいえ双子の美少女とデートをするのだ。男だったら懇願してでもこの立場を得ようと思うだろう。

『——はい、それなら是非。私からもお願いします』

小さく一礼するリトル。

そんなに畏まられると、どう対応していいものか分からなくなる。

私は礼をしたままのリトルに近づき、その手にチョコを握らせる。勢いよく頭を上げた彼女の顔は、初めて会った時と同じくらいに赤

くなっていた。

『——さて、私はまだやることがあるので、帰らせてもらつよ』

『やることつて、その風呂敷の中身？』

『ああ、チョコを他にも世話になった人に渡すんだ。時間も押しているから、急がなくてはいけない』

『ふ〜ん。……取り敢えず、いつか背中から刺されないよう注意した方がいいですよ〜』

ぞくり、と全身に怖気が走る。

こあの笑顔が、恐い。

その対象となつてから、本当に知る恐怖。

私が先程理解した恐怖の比率なぞ、蟻の質量にも劣る。

『——はい』

素直にその言葉を鵜呑みにする。

一言でも歪んだ発言をしたらどうなるか。無い筈の直感が、私にそう警告していたから。

私は逃げるように、図書館を後にした。

図書館から速足で去った後、何事もなく紅魔館を抜けれると思っていたが、予想外の出逢いが廊下で待っていた。

『あれ、アンタは——』

そこには、メイド服を着用し、モップ片手に袖で汗を拭うサニーマルクがいた。

『君は、どうして。今日はルナとスターはいないのか？』

『いるわよ。私と一緒に、ここで掃除してるの』

『何故？』

『何故って………ここで掃除したらお菓子食べさせてくれるってこのメイドが言ってたから』

………まさかとは思うが、彼女達は騙されているのか？

ルーミアの言葉を信じるならば、今日の紅魔館は出入り自由の無法地帯の筈。

少なくとも、妖精のみそんな制約付きですとか言うことはないだろう。チルノや大妖精は普通に入っていたしな。

『？どしたの』

『いや………なんでもない』

私の推測が正しいのならば、彼女達が憐れすぎる。

だからと言って、ここでその推測を口に出せば、待っているのは絶望だけ。

知らない方が幸せだろうし、ここは黙っておこう。

『あれ、シロウさん』

『サニー、サボってんじゃないわよ』

顔を上げると、同じくメイド服を着たルナチャイルドとスターサフ
アエアがいた。

『二人こそ仕事したの？』

『したわよ。サニーこそ、終わったの？』

『……………まだ』

あからさまな溜息を吐くルナチャイルド。

まあ、自分が苦勞して終わっても、全体を見てみればそうでもな
かったと思うと、がっかりするのも何となく分かる。

言うなれば、学校の掃除の時間で自分の分担が終了しても他の誰か
が終わってないから帰れませんと言われているようなものだしな。

『そつだ、君達疲れているだろう？』

『そりゃあ、クタクタだよ』

『アンタはまだ終わってないでしょうが』

『この館、物凄い広いですからね……………』

三者三様の反応が返ってくる。

まあ、彼女達の姿を見れば疲勞の色は見て取れるのだが、一応確認
も兼ねて。

『そんな君達に、だ』

用意していたチョコレートを渡す。

『なにこれ』

『君達の頑張りに、メイド長が差し入れをくれたんだ』

勿論嘘だ。

だが、ここで今日と言う日の意味を教えれば、自分達の置かれている状況を勘繰る可能性もある為、嘘で通す。
渡すという目的は達成されるし、過程は問題ではない。

『おおー！！お菓子だ！』

『凄い懲り様ね……………』

『美味しそう……………』

サニーミルクはチョコそのものに感動を、ルナチャイルドはそのデイトールに感心を、スターサファイアは純粹にお菓子が好きなのか三人の中で一番目が輝いている。

『サニーはまだ終わってないらしいが、それを食べてもうひと頑張りしなさい』

『うん、分かった！』

『では、私はそろそろ行くよ』

思いがけない出逢いだっただ、探す手間が省けたのは僥倖と言えただろう。

私は次の目的地へ急ぐべく歩き出そうとするが、腕を引っ張られる感覚に振り返る。

『あの………ちょっと』

その正体は、スターサファイアだった。

彼女は近くで屈めとジェスチャーしてきたのでそれに従う。そうして、耳打ちされる。

『このチヨコ、シロウさんですよね？』

『っ、それは』

『大丈夫、嘔吐かなくても、サニー以外は分かってるから。私達の掃除も、徒労でしかないってこともね』

『ならば、何故』

彼女達の言葉なら、サニーも簡単に従うだろうに、何故そうしなかったのか。

悪戯にしては、損の方が大きいと思うが。

『サニーが言いだしっぺなんだけど、あの子純粹だから、本気で今回の件を信用していたようなの。だから——壊したくなかったの。あの子の信じる、濁りの無い幻想を』

『………二人ともサニーのことが好きなんだな』

『はい、好きです。私達の、大事な友達です』

スターサファイアの柔らかい笑みが、とても眩しく見える。

言葉では言い表せない、お互いがお互いを想い合う関係。その絆は、どんな出来事が起ころうとも決して揺るがないであろう強さを秘めていた。

私は立ち上がり、スターサファイアの頭を撫でる。

擦ったそうにした表情を少し眺めた後、私は今度こそその場を後にした。

次に訪れたのは、白玉楼。

普段聞こえる妖夢の修業の掛け声も、今日は聞こえない。その理由も、大体予想出来るが。

縁側まで何事もなく辿り着くと、そこには幽々子と妖夢がまったりとした雰囲気ですわっていた。

『あれ、シロウさん。こんにちは』

『よく来たわね』

普通ならこんな不法侵入は許されないのだろうが、幾度と足を運んだことが功を奏したのか、今では気兼ねなく訪問出来るようになった。

それだけ、二人が私に心を許してくれているんだと思うと、嬉しさが募る。

『こんにちは。今日は修練していないのか』

『はい。幽々子様の話では、今日はばれんたいんと言っ日で、日頃の恩返しとしてお菓子をあげる日なんですよ。だから、こうして幽々子様に手製の抹茶ケーキを馳走していた所なんです』

幽々子と妖夢に挟まれるようにして、大皿の上に置かれている抹茶ケーキを見つめる。

四等分を想定して切られたその断面には、豆のようなものが混入しており、表面には抹茶の粉末がコントラストとして振りかけられている。

これを食べたくないと思うのは、余程の抹茶嫌いか、甘いものが嫌いな奴だけだろう。

『……………食べたいの？』

私がケーキを眺めていたからか、幽々子が一切れを差し出してくる。

『そんなにも欲しそうに見ていたか？』

『そうじゃないけど——いや、ある意味そうかな。食欲からじゃなく、評論したいという理由からだと思うけど』

……………確かに、妖夢の作ったケーキは美味そうだ。

故に、同じ料理人としてはどんなレシピで構成されているのかに興味がある。

『しかし、それは君の為に作ったものだろう。ならそれは全て君が食べるべきだ』

『大丈夫ですよ。幽々子様の食べてるそれ、もう三皿目ですから』

『なん……………だと……………？』

幽々子ならやりかねん……………と言うよりも、妖夢が嘘を吐ける性格ではないことは承知しているので、彼女の言うことは正しいのだろう。

『だから、いいって言ってるのに』

『——分かった。いただきます』

私は差し出されていた皿を取ろうとすると、幽々子は突然手を引っ込め、代わりに少し切られたケーキが竹串に刺されて差し出される。

『はい、あーん』

『……………』

『あーん』

私も妖夢も、苦笑するしかなかった。

まさかこんな生き地獄を体験させられるとは思っていなかった。

何だ、彼女は狙っているのか。私を弄り倒して楽しいのか。

脳内で愚痴を言っても始まらない。だからと言って竹串だけ取ることは恐らく叶わないだろうし、覚悟を決めることにする。

『——覚えていろよ』

誰にも聞こえない位の小さな声で精一杯の遠吠えをし、差し出されたケーキを食べる。

爽やかな甘みが口内に広がる。豆だと推測していたそれは、どうやら甘納豆だったらしく、二種類の和の甘さがいい感じにマッチしている。

『成程、これは素晴らしい。流石妖夢と言ったところか』

『そう、ですか。えへへ………』

照れくさそうに後頭部を掻く妖夢。

褒められれば誰に言われても嬉しいものだ。特に彼女ほど純粹に物事を捉える子ならば、猶更だろう。

『そうだ、二人にこれを』

ふと、ここへ来て用件を思い出し、手早くチョコを二人に渡す。

『これは………もしかして』

『バレンタインの贈り物さ。味は保証し兼ねるが………』

『そ、そんなこと！シロウさんの作ったものなんですから、美味しに決まっています！』

ぶんぶん顔と顔を横に振り、私の言葉を否定する。

屈折していない、真っ直ぐな意見。そんな必死な姿に、私は自然と笑みを溢す。

『あら、大きいチョコレートねえ』

妖夢と会話していると、いつの間にか箱を開いていた幽々子が、出てきたチョコに感心していた。

『君が沢山食べるのは知っていたからな、単純に量を重視した』

『失礼ねえ、そんなにがつついたりしてないわよ』

嘘だ、絶対嘘だ。

今私と妖夢の思考が確実に一致した。

『そ、それにしてもまさか貰えるなんて思ってませんでした。ありがとうございます』

『ありがとうね』

礼儀正しくお辞儀する妖夢に、優しく微笑む幽々子。

誰かに与えるだけが、贈り物ではない。こうして、温かい気持ちを等価として受け取っている。

幸福は循環する。どんなに回り道しても、いつかは自分の下へ還ってくる。

今回はそれが、異常なまでに早かっただけに過ぎない。

『では、私は行くよ』

『あら、ゆつくりしていけばいいのに』

『そうもいかなのだよ。まだまだチョコを配る相手がいるものでな』

『そうなんですか………大変ですね』

大変だとは思うが、辛いとは思わない。

だって、これは自分の為に使っていること。他人に幸福を配り、自分も幸福を得ようとしているだけに過ぎない。
だから辛くもないし、寧ろ頑張ろうとさえ思える。

『あら、私達だけのプレゼントじゃなかったのね、残念だわ』

『ご期待に添えず申し訳ないな。——では、また今度』

最初から分かっていただろうに、それでも口に出すのは、やはり私をからかっているからなのか。

私は別れの挨拶を済ませると、白玉楼を後にした。

僅かに斜陽に成りかけの太陽を見て、私は急ぎ足に歩く。

サクサク渡すだけで済ませようと思っていたのだが、予想外に手間取ってしまい、焦りを隠せないでいた。

次に辿り着いたのは、人間の里。

慧音、妹紅の分をここで渡し終えても、妖怪の山が残っている。

本当に滞りなく終わるのか、考える程不安になってきた。

私は両の頬を叩き、意識を切り替える。

ここで弱音を吐いている間にも時間は経過していく。不安になっている暇はない。

私は里の中に入り、歩行者の迷惑にならない程度の速さで移動する。途中、風呂敷が原因なのか不審な目で通り過ぎる人間の姿が多々あったが、こればかりはどうしようもない。

そうして辿り着いた、慧音の家。

戸を叩き数秒後、慧音が現れホツとする。

寺小屋にいる可能性もあったのだが、どうやら当たりを引いたらしい。

『どうした？今日は客が多い日だな』

『それなんだが、少し上がらせてもらっていいか？』

『ああ、構わないが………』

そう言われ居間に案内される。

すると、予想外の人物が卓袱台の前に座していた。

『あら、まさかの』

『それはこっちの台詞だよ、永琳』

そこに居たのは、医師として幾度となく世話になった八意永琳だった。

何で彼女が———そう言う考えよりも先に、好都合だという合理性の方が先に出ていた。

『妹紅はどうしたんだ？それに、彼女は何故ここに』

『妹紅は出掛けたよ、永琳がここに来てすぐにな。彼女がここに来

た理由は、単に仕事で来たところを私が呼び止めたのさ、休息も兼ねな」

そそくさと慧音も座りだしたので、私も座ることにする。流石に立つたままでは失礼だろうし。

『ふむ……………』

妹紅に関して思うところがあつたが、それを後回しにして、私は要件を伝えることにした。

『今日は外の世界でバレンタインデーと言われていてね、こうやって贈り物をする日なんだ』

卓袱台を伝つて二人の前にチョコレートを差し出す。
二人とも何事かと思ひながらも手に取ってくれた。

『贈り物……………そうだったのか』

『そういえば、そんな風習あつたわね。すっかり忘れていたわ』

慧音は感心した風に、永琳は思い出したかのように呟く。

『しかし、そうなら私もお返しをしなければ申し訳が立たない。しかし、何もないんだよなあ……………』

『別に構わんよ。見返りが欲しくてやっているのではないからな、その気持ちだけで充分だ』

慧音の申し訳なさそうな姿を、私は宥める。

そこに対価が存在するのなら喜んで受け取るが、無いものを強制する気は無い。

彼女のその気持ちだけでも、私は充分満たされている。

『…………じゃあ、私は今度の診療代をタダにしようかしら』

割って入るかのように出された永琳の言葉に反応する。

彼女と目が合った時、ウィンクで返された。

『しかし、それでは等価ではない。それはこちらも申し訳が立たない』

『いいのよ別に、こういったのは気持ちなんですよ？それとも、私の厚意は受け取れない？』

『…………それは卑怯だろう』

強引に押される形で、私は永琳の厚意を受け取ることにした。でも私の中ではまだ納得がいかないので、今度割増でなにかしてやるうと思う。

『じゃあ私は……………私は……………』

うーん、と頭を抱えながら思考している慧音。

何でもサクサクと行うイメージのある彼女だが、こういうところを見ていると自分達と一緒になんだと実感する。

『よし、夕飯を奢ってやろう！時間的にはまだ早いが、下ごしらえから入るから問題はないだろう』

知恵を絞ってようやく問題を理解した子供のような表情で、ポンと手を叩く。

『……濟まない。せっかく閃いたところ悪いが、私はまだやるこ
とが残っているんだ』

『そ、そんな——』

今度は目を見開いて身体をよるめかせる。

オーバーリアクションにも見えるが、それ故に心苦しさがより助長
される。

『だから、今度時間が空いたときに必ず尋ねに来る。その時でいい
なら、是非ご相伴に預かりたい』

『ああ、いいぞ！』

即答。

待っていたと言わんばかりの反応に、私は思わず身を竦める。

『——っていうか、早く行ったら？乳繰り合っている暇はないで
しょう？』

『乳繰りって——！！』

あわあわと両手を突出し只管に振る慧音。

永琳、間違はなく面白がっているな。気持ちは分からないでもない
が。

『そうだ、妹紅にもこれを渡しておいてくれ。出来れば手渡しが見

ましいのだが、致し方あるまい』

『分かった』

『ありがとう。では、失礼する』

その答えに満足した私は、立ち上がりその場を後にした。
太陽は、今も無慈悲に沈んでいる。
タイムリミットは、あと数刻。

夕闇が影を差す時間。

今まで後ろ手に持っていた風呂敷を両手で抱え、打って変わって全速力で走っている。

今から向かうのは妖怪の山。ターゲットはにとりと文だ。
にとりは住まいを知っているから、最悪留守でも置いておけば良いが、文の住んでいる場所は閉鎖的な天狗の土地。探し当てることはおろか、無駄な時間を食う可能性さえある。

自分の計画性のなさに舌打ちしつつも、私は全力で走り続ける。

そうしてようやく、にとりが住んでいる洞穴の入り口に到着した。
サーヴァントの脚力を以てしても、数十分掛かった。しかも雪で足を取られやすくなっており、より状況が悪化している。

時間に追われている今だからこそ、妖怪の山の広さが良く分かるといふもの。

私はノックすることすらせず、扉を開く。

どうせノックしたところで、先は長い。音が届くことはまずないだ

ろうしな。

近代的な内観に出迎えられた私は、前方に人がいないことを確認しながら出来るだけ速足で進む。

シエルターのような造りが、これほど面倒だと感じたことは無い。最後の扉を開くと、人工的な光と機械的な騒音が押し寄せてきた。騒音に顔を顰めながらも、にとりの姿を探す。

数秒周囲を見渡すと、鉄骨の上にとりの姿を発見。同時に、僥倖とも言える発見も。

私は器用に鉄骨の間を飛び乗り、彼女達の元へ辿り着く。

そして、私の存在に気付いたにとりが、作業の手を止める。

『お、シロウじゃないか』

『あやや、シロウさん』

そう、僥倖な発見とは、射命丸文の存在だった。

何故ここにいるかなんてこの際どうでもいい。これで時間が大幅に短縮できる。そう考えると、柄にもなく胸が躍った。

『実は、これを渡したくてな』

『あや？』

要件を簡潔に告げ、早速目的物を渡す。

にとりも文も困惑している。情報に敏感な文がバレンタインを知らないのか……意外だな。

『今日はバレンタインという、男女が贈り物をして相手に好意を示す日なんだ。だからと言う訳ではないが、日頃世話になっている身

だからな』

『世話だなんて、別に私達はなにかしちやいないさ』

『そ、そうですよ！嬉しいですけど、身に覚えがなさ過ぎて、どうやって返せばいいのやら』

珍しく殊勝な態度の文に珍しさを覚えるも、今回ばかりはその態度が邪魔となっている。

『私がそう思ってるんだから、そうなんだが……… いらなら仕方ないな』

残念ではあるが、こればかりは押し付けていいものではない。

善意の押し付けが愚かなものだという事は、この身で痛いほど痛感している。

行き場の無い気持ちを吐きだせずに、自身を蝕み続けるなんてことは決して珍しいことではない。

余程の大物が俺様な奴で無い限り、何かしらの形で好意を返そうとするだろうし、彼女達が畏まる理由も分かる。

ここに居ても仕方ないと思い立ち去ろうとしたが、その動きはにとりの声に阻まれる。

『ち、違う。 知らない訳じゃないんだ。ただ、シロウがこうして私達の為にしてくれているのに、それをさも当たり前のように受け取るのは間違ってるんじゃないかって思ってる』

『私は—— 今までの行動を思い返して、シロウさんには迷惑ばかり掛けていたように思えたので、そんな資格があるのかって思ったら、委縮しちゃって………』

『……………なんだ、そんなことか』

私は二人に近づいて手を取ると、チョコの入った箱を手で包み込ませた。

『さっきも言ったが、私は君達に世話になった。君達のベクトルでは測れないのかもしれないが、私の中では何物にも代えがたい時間を与えてくれたことに、大いに感謝しているんだ。君達は胸を張っていい。私が保証する』

私の伝えたいことは全て伝えた。

私は踵を返し、鉄骨から躊躇いなく飛び降りた。

しかし、着地して前を向いた先には、先程まで鉄骨の上に居た文が拳を震わせて立っていた。

『……………ずるいですよ、言いたいことだけ言って逃げるなんて。人の気持ちも知らないで』

『べ、別に逃げた訳では——』

『傍から見れば、逃げたように見えてるってことさ』

謎の駆動音に上を見上げると、小さなジェット機を背負ったにりが降りてきていた。

実際、私は時間がないから立ち去ったのであって、後ろめたさ故の逃走を図ったのではない。と誰に言うわけでもないが言い訳する。二人からしたら、そんなものは関係ないのだから、口に出したってしょうがない。

『ま、それはいいんだけどさ。私からも何かお返しがしたいってのがあるのよ。……シロウに世話になってるのは、本当はこっちなんだから』

『そ、そうですね！』

じつと私を見つめる二人の目は、真剣そのもの。

そんな彼女達の意見を聞かぬまま立ち去ろうとした私は、確かに愚か者だな。

危うく、彼女達の好意すら無碍にするところだった。

『——では、いつか私に何かして欲しい。物をくれるのもいいし、何なら話相手になってくれるだけでもいい』

『そんなことでいいんですか？』

『こういうのは気持ちが一番大事だからな。そう言った意味では、私はもうお返しを貰っているのだし、贅沢を重ねるのが申し訳ないという思いを互いに持っている以上、下手に高価なものを提供されたら、ただのいたちごっこになってしまう。だったら、最初から下手に肩肘張らずに、自分の気持ちに正直に従えば、自ずとそれは形になっていく筈さ』

『——』

文は顎に手を当てて何か思案し出す。

彼女に続いて、にとりが納得したように頷く。

『あい分かった。私はなんか日用品でも作って渡すよ。シロウには魔術があるから、あんまり有難味がないかもだけど』

『そんなことはない。作ってくれた暁には、後生大事に使わせてもらっ』

投影は確かに便利だが、所詮はランクダウンした代物。

幻想郷で有数の技術を持った河童の、しかもにとりの作ったものならば、此方が頭を下げる価値がある位である。

『私は……何も思いつきません。私の仕事は、個人に対して宛てるものではありませんし』

『焦る必要はない。何も今日を逃せば一生返せない訳ではないのだ、私はいつでも待っているから、ゆっくり考えたまえ』

『はい………』

申し訳なさそうに肩を落とす文。

本当はもう少し傍にいてやりたいのだが、生憎それは時間が許さない。

『さて、私はそろそろ帰る。押しかけて済まなかったな』

『ん、じゃあね』

にとりと文の手を振る姿を背に、私の今日と言う物語は佳境へと向かい始めた。

早苗は、一人静かに座布団に座っていた。

食事やトイレ、家事を除いて彼女はここを一切動いていない。

ただでさえ緊張している時間は普段より長く感じるというのに、それが半日続けばどれだけ精神にクるか想像に難くないだろう。

だが、それでも。彼女は待ち続けている。

それ程までに、自分の作ったチヨコを渡したい人物がいるということでもある。

それを踏まえても、傍から見れば異常とを感じるが。

『やった！出来たぞ早苗！』

大きな音と共に襖が開かれたかと思うと、そこからエプロンを着用した神奈子が慌ただしく現れた。

『ちょ、驚かさないでください』

『ご、ごめん。嬉しくってつい——』

『出来たのって、チヨコですよね』

『ああ。いつもならやんないんだけど、シロウは最早家族だし、こういう形でしか労えないからな……』

諏訪子以上に宗派とかに五月蠅い神奈子が行動に移しているということは、幻想郷に来た影響もあるが、やはり彼女の中でエミヤシロウという存在が特別になりつつある証拠でもある。

『シロウ、遅いね』

『そうですねえ』

かれこれ半日は待っていたのだ。遅いと言つ言葉だけでは片づけるのは難しい領域にまで至っている。

『来るよ、そろそろ』

早苗と神奈子が声の方へ振り向くと、諏訪子がいつの間にか壁に寄りかかつて立っていた。

二人はその言葉に僅かに呆けていると、玄関側から聞き慣れた声が響いてきた。

『ね？』

『え？ど、どうでしょう』

『おお落ち着け早苗、素数を数えるんだ』

ウィンクをして余裕ぶる諏訪子。

そんな中早苗達は、余りにも突然な彼の帰宅に慌てふためいている。そうしている内に、足音がこの部屋の前で止まった。

『誰もいないのか——って、いるじゃないか』

『お、おかえりなさい』

『おかえりー』

『お、遅かったな』

シロウは何故か動揺している早苗と神奈子の姿に疑問符を浮かべるも、取り敢えず中へと入る。

『あつ、あの！』

最初に切り出したのは、早苗だった。
突然の呼び掛けに何事かとシロウは振り返る。

『これ……バレンタインプレゼントです！』

顔を俯かせながら手だけを突出し、チョコレートを彼に向ける。
早苗の顔は、羞恥で朱く染まっているが、それを知るのは本人のみである。

僅かな静寂。ふと、手からすり抜けるようにして持っていたモノの感触が消え失せたのに気付き、早苗は面を上げる。

『ありがとう。嬉しいよ』

そして今度は、早苗に向けてシロウがチョコを差し出す。
この場にいる彼を除いて誰も知らないだろうが、早苗のチョコは他の誰のよりも大きく、誰のよりも丹精込めて作られていたものなのだ。

いや、それを喻え知っていても——彼女の為に作られたチョコというだけで、彼女は泣きだしてしまうのだから。

『ッ——』

『な、何も泣くことはないだろうに』

早苗の瞳から流れ出る歡喜の滴。

シロウはそれを見て、慌てふためく。

『だつて……………うれしくて……………』

鼻声で涙を拭う早苗をシロウは抱き締め、そのまま頭を撫でる。静かな空間に響く嗚咽を掻き消そうと、強く、強く抱き締める。

『幸せ者だねえ』

『そうだな……………』

諏訪子と神奈子是我が子を見守る目でその光景を見守る。

早苗の心を開く鍵となった青年の後姿は、今も優しさに満ちている。そんな彼の優しさが否定された外を憎らしく思う程度には、彼女達は彼に好意を抱いている。

それ知らぬのは、本人だけだが。

暫くして、早苗が泣き止んだのを見計らい、神奈子がその場を後にする。

諏訪子も、後ろ手に隠していたチョコレートを差し出す。

『私からもプレゼントだよ』

『——まさか君からも貰えるとはな』

『私だけじゃないよ』

諏訪子は目線を後ろに向ける。

それに釣られるようにシロウも目線を向けると、ゆっくりと足取りを彼に向ける神奈子の姿があった。

『シロウ——あの、これ』

おずおずと差し出されたそれは、梱包されていない剥きだしのチョコレートだった。

飾り付けのない、シンプルな丸いチョコ。簡素だが、だからこそ一つのことを突き詰めることが出来る。

シロウはその中のひとつを摘み、口に放り込む。

『ど、どう？』

普段からは想像できないおどした神奈子に、シロウは軽く微笑む。

『良く頑張ったな』

それだけ言い、神奈子のチョコを更にひとつ食べる。

その様子を見た神奈子は、身体を震わせ喜びを静かに表現した。

『では、そんな神様二人に、供物を奉げねばな』

そして、シロウは最後の二つとなったチョコを、それぞれ二人に手渡す。

これで、バレンタインデーは終了だ。

『じゃ、折角だし皆でチョコを食べようか』

『そうですね、名案です』

『夕飯はどうするの？』

『チヨコでいいじゃん』

三人のやり取りを眺め、シロウの頬が緩む。

ああ——やってよかった。全てが終わった今、そんな風に思える光景が目の前にあった。

今日と言う日は、彼にとっても、彼に関わった幻想郷の皆にも忘れられない一日となった。

特別企画：幻想に訪れた特別な2月14日（後書き）

番外編、幾度の指摘による修正、完了。

取り敢えず、暫くGジェネワールドを愉しむよ。

今の所オリジナルを除いて仲間にしたキャラ↓『勇者王』+『嘘だ
と言つてよ』+『世界一グフ・カスタムが似合う軍人』+『諏訪部』
+『ニンジン、いないよ』+『神の掌』

俺得PT過ぎる。てか、この表記で誰が誰だかわかったら脳汁出す
わ。

萃まる想い、散りゆく憂い（前書き）

まさかの二連続の同キャラクター。

たまにはロリコンもいいよねー！（ニッコ

萃まる想い、散りゆく憂い

目の前の少女が嗚咽を止めるまで、私は無言で彼女の肩を撫で続けていた。

世界にとっては認識することさえ出来ない一瞬だが、二人にとっては無限にも思える長さの瞬間だった。

不思議と彼女が泣いている間、遠巻きにですら天人が姿を見せなかった。

運命もまた、今の彼女を祝しているとでも言っただろうか。

『んっ………へへっ、みつともない姿を晒しちゃったね』

『みつともなくなんかないさ。今の君の姿を笑う者がいたなら、私はソイツを絶対に許さない』

『——ありがとう』

鼻を嚙り、腕で乱暴に涙を拭い取ると、極上の笑顔を掲げる。

やはり彼女には笑顔が似合う。そう再認識すると共に、この笑顔を曇らせる真似だけはしてはならないと強く心の中で誓う。

『あーっ、泣いたら酔いが醒めてきちゃった。今日は呑むぞ！勿論お前もだ！』

萃香は途端に声を上げ、瓢箪をラッパ飲み出す。

元気になった姿に笑みを溢しながら、先程まで彼女が使っていた盃にいつの間にか並々注がれていた酒に手を付ける。

『——美味しいな』

酒に詳しい訳ではないが、これは美味い。

それともただ、彼女が酌んでくれた酒だからこそここまで美味しく感じているだけなのか。

何にせよ、美味ければいいさ。彼女と呑んでいるこの時間が愉しめるように、酒を肴にするのも悪くは無いしな。

『私も、毎日呑んでいる酒の筈なのに——今まで呑んだ酒の中で最高クラスの舌触りに感じるよ』

『それは何よりだ』

私達は暫くの間、酒の呑み話に花を咲かせた。

酒と言葉しかない二人の世界。だが、それでも物足りないとは思わない。

人はあれもこれと欲をかくから、その果てに争いなんてものが起こる。

現代も過去にも欲から来る争いを続けた者達は、こうした些細な幸せを知らなかった憐れな存在だったのだろう。

誰もが似た幸福を得られるとは思ってはいないが、それでも一人の愚かな権力の所有者がその幸福を得られただけで、何千、何万にもなる人の幸福が得られたのではと思う。

幸福と不幸は表裏一体に見えるが、不幸になることを望む奴なぞ稀だ。幸せになることを望まない者がいないのに、不幸の方が蔓延る世の中など、間違っている。

だが、そんな間違いは国規模で見れば当然のように存在していることを私は知っている。

それらを救おうと足掻いた男からすれば、個人の力で変えられる他人の運命など知れている。

全て救える訳ではないのはとうに理解している。だからせめて——

——一度幸福を手にとることの出来た目の前の少女のような存在ぐら
いは、再び同じ闇に落とすような未来を創ってはいけない。

『——どうしたの？何か悩んでる風だけど』

『悩んでいる訳ではないが——そんなに顔に出ていたか？』

『雰囲気、ね。こちららアンタより遙かに年を取ってるんだ、そ
ん位看破するのは訳ないさ』

そんな年寄りが若い奴に慰められたんだけどさ、と恥ずかしそうに
しながら人差し指で頬を掻く。

鬼は嘘を吐けないとは言ったが、こんなことを口に出す辺り、そう
いった性質よりも彼女自身の持つ素直さの方が強調される。

『——そうだな、じゃあひとつだけ悩みを話すかな』

そう呟くと、彼女は満足そうにしながら座位を組みなおす。

彼女なりの気合の入れ方なのだろうか、先程よりも私を見つめる瞳
の色が強くなったように感じる。

『まず、霧雨魔理沙という少女を知っているか？』

『知っているよ。アイツとはよく酒を呑んだりするしね』

『……彼女は真正銘の人間だろう。見た目からしても未成年な
のに、酒を呑むか。彼女と深い繋がりでもあるのなら絶対止めさせ
るのだが——それは今はいい。とあるいざこざが私と彼女の間に
あってな、その拍子に彼女の八卦炉を破壊してしまったんだ。直す
技術そのものはそこまで問題ではないのだが、材料がな。ただでさ

え探す時間を割けないというのに、その材料がどれだけこの世界で希少なのかも定かではないんだ」

『ふうん……………』

萃香は唸るように何かを考えだすが、私はそのまま話を続ける。

『どんなにこちらに正当性があるうと、壊した事実が変わりはない。出来るだけ早く直してやりたいんだが、妙齡な君ならそういった材料を知っているのではないか？』

『……………取り敢えず、材料を教えてください。幻想郷で出来たものなら間違いなく材料は存在するだろうしね』

私は彼女の言葉に頷き、霖之助に貸してもらった設計図を地面に広げ、材料の種類、損壊度から見た量の問題などを踏まえつつ、説明をした。

『成程ね……………普段は興味も沸かなかったけど、確かにこの素材ならあの高出力と熱にも耐えられる。更に使用者はその膨大な熱量に苦しむことは無いように、内部には強烈なまでの熱遮断が施されている。それでいてここまで小型に、かつ軽量化が成されている。誰がこんなものを作ったんだい？河童かい？』

『いや、魔理沙の知り合いである森近霖之助という青年の個人的な作品だ』

その返答に、少女は目を見開く。驚くのも無理はないだろうが。

『アイツが、か……………ただの偏屈な店主かと思っていただけ、正直

見直したよ。この手のものに詳しいとは言えない私が断言するが、あの店主——とんでもなく天才だよ。河童はあの種族間で技術を競い合ったり協力したりして、外すら凌駕する技術力を得ているが、アイツはまさに一人の力だけでこれを完成させた。設計図の古ぼけ方から見て、これは店主が書いたものではないことや、もしかしたら河童に知識を提供してもらった可能性を差し引いたとしても、アイツが凡人であることは有り得ないことだけは断定できるね』

正直さを謳う彼女だからこそなのか、濁りの無い称賛の言葉ばかりが並べ立てられる。
だが残念なことに、それを言うべき相手は私ではなく、霖之助になるのだが。

『それは本人に言っただけやね。——取り敢えず、君が設計図を見たいと言ったのは、それだけの為かね？』

『真逆、ちよいと待ってな』

そう答えると彼女は立ち上がり、両手を肩幅程まで広げて何かを呟き始める。

『——対象は八卦炉、種類は素材。密の力を以てして萃を為し、我の手元に収束せよ』

呪文のようなそれが大気を揺らす。
数秒静止し続けた身体を少女は解放すると、こちらを見て親指を立てる。

『これで恐らくは大丈夫さね。取り敢えず少しだけ待っててよ』

『待て、今のは――』

彼女が何をしたのかを問いたですより早く、謎の力の流れがこちらへ近づいてくるのを感じ、周囲を見渡す。

あらゆる方面から力が流れてくる感覚に目移りしている内に、それは現れた。

『おいおい、冗談だろう？』

そのあまりにも信じがたい光景に、思わずそう呟く。

それはまるで、磁石に引き寄せられる砂を思わせるように萃香の下へ集いだす八卦炉の素材の数々。

異質であるが、まぎれもない事実。奇異であるが、まぎれもなく現実。

現に目の前で、萃香が私がやったんだぞと言わんばかりにどや顔をしている。

『これが私の力、密と疎を操る程度の能力。簡単に言えばあらゆるものを収束したり散開させたりとか出来るんだ。今回は密の力で指定したものを呼び寄せたって訳』

『……………色んな意味で、君には敵わないと確信したよ』

程度こそ分らないが、接近戦で鬼に敵う訳もないし、宝具を飛ばしても疎の力を使われたら逆に返されてしまう可能性すらある。

正直、今の所一番喧嘩を売りたいくない相手だな。そんな条件がなくとも、戦うことはしたくないが。

『でさ、さっきの詠唱どうだった？即興で作った割にはそれっぽかったっしょ』

『——あの呪文のようなものはただの気分で言っただけのものだったのか』

『そりゃあそうでしょ。言うなれば能力なんてものは身体の一部なんだから、口に出さなくなっただって効果は発動する。それこそ魔理沙達のような魔法使いとかは、詠唱なんてものを好んで使うけど、あれは結局は自身の限界を口に出しているようなもの。音にして再認識し効果を高めるなんて行為は、想像力がまだ現実から離れていないからやる、言わば無駄な行動なんだ。自分自身がきちんと力を扱えているなら、そんな補助をする必要なんかない。それは、どんな能力にも言えることなんだ』

彼女の言うことだが、だいたい正しい。

魔術の詠唱も、この法則に当てはまる。

呪文なんてものは、個人の為の自己暗示に過ぎない

自己に刻まれた予め性能が決まった力を引き出すには、決められた意味合いとキーワードさえあれば術は発動する。

呪文が長い短いの違いは、自己暗示の延長線に他ならない。

長ければ長いほど、自己にかける暗示が強力なものとなり、威力が増す。私の固有結界も、そういった意味合いでの長さもあるが、純粹に暗示が甘いと世界の修正に耐えられないからというのもある。

短い場合は、必要最低限の暗示しかかけていないか、高速詠唱などの能力を持っているかの二種類だ。

前者は言うことではないが、後者は実力の問題だろう。

高速詠唱はまだ人の範疇だが、キャスターのスキルである高速神言は、人を超え、選ばれた存在だからこそ扱える規格外の力だ。

萃香が言った通り、現実からより乖離した存在だからこそ、その限界も人間と比較しても段違いなものとなっている。

キャラクターを例に挙げるなら、神話の時代を生きた存在である彼女の常識は、神話時代のものが大半を示している。逆に言えば、現代の常識を糧にしている魔術師と、御伽噺の住人の思考や常識では差がありすぎる。

私の本などから得た知識で想像する竜と、神話を生きた存在がその目で見えた記憶から思い出すのでは、イメージの現実感があまりにも違うだろう？

そう言った意味も含めてだが、現代の魔術師とキャラクターのサーヴァントでは、天地がひっくり返っても勝敗の結果に狂いは起こらない。

世の中、実力では補えることのない絶対的なナニかが存在する。

王の子孫は王となる。子の数に差こそあるかもしれないが、その不文律が覆ることは殆ど有り得ない。

そういった意味では、魔理沙のような人間が幻想種である鬼に勝てる訳はないのだが、ここは幻想郷だ。

私の思考の範囲では到底理解できないような絶対を覆すことぐらい、当たり前に行ってしまうそうだ。

事実、博霊の巫女は人の身でありながら数々の怪異に立ち向かい、それを自身の勝利と言う形で終わらせていたらしい。

——いや、私も似たようなものか。

人の身であった時代、最古の英雄王と対峙し、運よくだが勝利を収めた事や、仲間の力と犠牲があつてこそだが、虚数空間に飲み込まれた元自分のサーヴァントを■したりと、常識を度外視したような世界で無いにも関わらず、奇跡を起こしてきた。

絶対に近い運命を捻じ曲げることが出来たのは、偏にこの常識外れのチカラと仲間の協力があつてこそ。

——それでも、全てを救うという不可能な運命は捻じ曲げられなかったがな。

『でさ、材料はこつやって集まったけど、どうするの？』

『こんな簡単に材料が手に入ると思っていなかったから、手元に八卦炉は無い。だから一度霖之助の所へ戻って回収しないといけない』

『回収って、あの店主が直すんじゃないの？』

『違う、八卦炉を壊したのは私だから、私が直す』

『——は？』

萃香は私を珍獣を見るような目でみると、呆れたように溜息を吐く。

『お前さ、八卦炉作ったことある？』

『いや、無いが——』

『じゃあさ、何で自分の力で直すなんて言っただ。私はお前の技術力は知らないが、莫迦だとは思っね』

『——いきなり莫迦とは、心外だな』

『大莫迦が、自惚れるんじゃないよ。お前は何の為に八卦炉を直すとしている？謝罪の意味を込めてではないのか？だったら何故確実な選択肢を選ばない。自分が作ったという事実で悦にでも浸りたいとも言っ様ならさ、直そうなんて考えきっぱりとやめちまいな。そんな自尊心で穢れた作品なんかで、魔理沙が喜ぶ訳がない』

『——』

萃香の捲し立てるような言葉の嵐を、無言で受け止める。

辛辣な言葉の数々が胸に刺さる。だが、不思議と嫌な気分にはならない。

恐らく気付いていたからだと思う。気付いていながら、彼女の言うとおり自己のプライドを優先していた。

本当に彼女の為だけを思っていたなら、最初から霖之助に全て任せ、気概で臨んでいた筈。

自分が壊したから自分で直したい。意欲だけなら立派だが、それが必ずしも実となるかは別の話だ。

自惚れている？まさしくその通りだよ。自分の事ながら愚かで浅ましい。鬱悒いふせいとすら思える。

『——本当にあの子の事を思うなら、喻え他人の力で全てを解決したと、責任逃れだと後ろ指を指されたって気にすることなんてない筈だよ。無謀な行為が最善になるなんてことは絶対にない。だから、シロウがここで本当の最善を選択したならば——私がそんなお前に後ろ指を指す奴を、絶対に許さない。全力で、私はお前の味方になってやる』

強く、決意の籠った瞳が私を射抜く。

嘘を嫌う鬼である少女の言葉と瞳には、正しく偽りのない信念が込められていた。

——ああ、なんて、私は幸せ者なのだろうか。

それに比べて私は、彼女達に報いることさえ出来ていない体たらく。正義の味方として失敗したのには、他人の協力を断り、全て自分の力で成し遂げようとしたからなのに。

何もかもが中途半端だった。決意も、認識も。

また私は、過去の愚行を焼き増しするところだった。

『……………つくづく私は、他人に諭されてばかりだよ。そのくせ学習

しない』

『成長してないもんか。行動を起こせばそれは必ず何かしらの変化を齎す。記憶に残らなくても、肉体には経験が残る。良い事でも悪い事でも、次に繋がる糧となるなら、それは成長だろう？後悔しているってことは、文字通り悔やんでいるんだから、きちんと過ちだと気付いている。私は、それならいいと思う』

『だが、後悔の過程で積み重なった犠牲はどうなる。今回はそんな深刻な話ではないが、そういった後悔だってある筈だ』

後悔すれば許される訳ではない。後悔すれば何をやってもいい訳ではない。

悔やんだからって、犠牲を作ってしまった事実は決して覆らない。だがそう簡単に、仕方ない事だと割り切れるものではない。

『……………そうだな。忘れなきゃいいんじゃない？犠牲になった人達を』

『そんな単純な話では——！！』

『なら、お前は時間でも巻き戻すか？過去に干渉し、事実を捻じ曲げる力でもあるのか？』

『——ッ——！！』

納得できないという意識も、現実と言う刃で容易く切り刻まれる。理想なんてものは、かくも儚いものだと思ひ知っているのに、言わずにはいられなかった。

『冷たい言い方になるかもしれないけど、お前が言っている犠牲なんてのは、所詮人間が牛や豚を食っている時点で今更なんだよ。結局は自分の欲を満たすのと一緒に、人間同士が争う理由だって、我欲に帰結するだろう？王と兵士とかが分かり易いだろうが、地位の高い者は名誉の為に人を殺し、地位の低いものは死にたくないが故に、または地位をより高いものとする為に、敵と言う免罪符を盾に人を殺す。動機こそ違えど、自分の欲望を満たすことを最優先にしている。知的生命体として生まれてしまった以上、誰も自己の欲望に抗うなんて出来やしないんだ』

『——だから、どうしようもないとでも言うのか！』

思わず声を荒げ立ち上がる。

だが、萃香はそんなこと意にも介さず、顔色一つ変えずに淡々と答える。

『お前は、数多の戦争と遭遇して何を見出した。欲望の渦が人間を^{ゲヘナ}地獄へ問答無用で引き摺り込むあの醜悪な現実を見て、そんなことにも気づいていないとでもいうのかい』

何も、言えなかった。

私の人間としての人生の半分に近い割合で占めていた世界のことを喩えに出されては、反論できるわけがない。

網膜に焼きついた景色、耳が腐る程聞いた弱者の阿鼻叫喚、鼻腔を支配する死臭と火薬の臭い、幾多の戦いで味わった自らの血の味。

その場に居合わせた者だけが理解できる現実^{リアル}。人間という存在の醜さを否定できない絶対材料。

人伝や情報媒体なんかでは知ることのできないものを、私は体験しているから。

『希望を捨てるとか、そんなことを言いたいんじゃない。ただ、頭の何処かで見切りをつけておかないと、最悪自分じゃなく、お前の身近にいる誰かが命を落とす結果すら招いてしまう可能性だってある。犠牲になる者のことを考えて行動していたら、後手にならざるを得ないからね』

『分かっている、分かっているさ』

『分かっている。いや、お前は葛藤しているんだ。一度非情な選択をし続ける自分を形成しているから、同じ結果を招きたくないからと殻に籠って耳を塞いでいるんだ。お前の今の言葉は、何気なしに聞こえた音に恐怖を抱き、自己暗示の意味で呟いているに過ぎない。そんな独白になって、誰も答えてくれる訳がない。誰の心にも、届かない』

彼女の言葉は、私の心を貫く為だけに特化した杭となり、的確な言葉での確に私の張りぼての虚栄心を墓石にかかる。

そうだ。私はあの時、衛宮士郎を抹殺することさえできれば、どんな犠牲を払おうと良かったと思っていた。

摩耗した記憶の中で、決して擦り切れることのなかった少女の事さえも、私は躊躇いなく裏切った。

衛宮士郎を殺せば自分の存在は消える。そんな有り得ない夢物語の為に、友と呼んだ相手を踏み台にしていたんだ。

だからこそ、二度と後悔の無い選択をしたいと思っではいた。

だが、私の中にある衛宮士郎の甘さが、それを妨害する。

自分のやろうとしている事が正しいかなんてわからないのに、その過程で築いていく犠牲は必ず出てくる。

とある誰かが店にあった肉を買ったせいで、とある誰かはその肉を買えなかった。そんな喻えみたく、自分の行動ひとつでどことも知

らぬ誰かが不幸になっているのではと考えてしまうと、自分の存在自体が罪に思えてくる。

考えるだけ無駄なことだと分かっているとしても、一度否定的に考えてしまえば簡単には払拭できない。

『——つの、石頭が！』

少女の怒号と共に顔面に冷たい液体が大量に叩きつけられる。

数秒何事かと茫然すると、強烈な独特の臭気が刺激を与えてくる。それが酒だというのに気づくのに、時間はかからなかった。

『何で柔軟に物事を考えられないんだ！この世の中、正しいことなんて何一つありやしないんだ。嘘で塗り固められた、まやかしのよくな世界だ。自分で自分を偽って、それを他人の世界にまで浸食させて、それが当然のようにまかり通る腐った時代なんだ』

少女を見下ろすと、全身を震わせて私を強く睨みあげている。

髪から滴る滴のせいか、少女は泣いているように見えた。

『——だからお前みたいな愚直莫迦は、不幸にしかないんだよ！どこまでも真っ直ぐで……そんなお前の事を平気で利用する奴だっている』

——ああ、知っているさ。

『そこがお前の美德だったのも理解しているさ、ただどお前のは異常すぎるんだ！自分を蔑ろにして、自分だけ苦しんで——』

——それも、凜に言われたことがあったな。

『巫山戯んなよ……！！なんでこんな奴が、不幸になんなきゃならないんだよ——！！』

鬼の叫びと共に揺れる大地。

桃の木から落ちる熟成した果肉が、無残に潰れていくのをただ傍観する。

震源地はここ。原因は、鬼の少女の拳が地面を手加減なしに殴りつけているから。

『止めろ、萃香！』

私は萃香の腕を両手で全力で掴み、やつのことで止める。
どれだけ本気で殴っていたのか、鬼の身である彼女の拳からは、血が滲んできていた。

『——どうやら今頭を冷やすべきなのは、君らしいな』

布を投影し、彼女の手丁寧に巻きつける。

作業が終わる頃には、萃香は叱られた子供みたく縮こまっていた。

『……………顔、洗ってくる』

それだけ告げると、萃香は立ち上がり何処かへ歩きだしていく。

彼女がここまで消沈しているのは、私のせいだ。でも、私には彼女にかける言葉が思い浮かばない。

私自身、整理がついていないのに彼女に何か言ったところで、言葉には何の重みも加わらない。

ただ、彼女の小さな背中を見送ることしか、私には出来なかった。

目の前にある水の溜まった瓶の前に立ち、思い切りその水を両手で掬いとり、顔に叩きつける。

肌に刺すような冷たさが、茹だった思考に強烈に染み渡る。

今日は、おかしい日だ。

酒に酔って我を隠し、飄々とした自分を演じてきた自分が、こんなにも感情的になるなんて。

それもこれも全部、アイツのせいだ。アイツが、私を狂わせる。

色んな生き物と接してきたけど、あそこまで他人に依存している奴は見たことが無い。

多少は我欲の表れが見られるが、その動機の全てが他者の為。誰かを蹴落とし、自分だけが得をするような欲望を、彼は晒そうとしている。

その異常性が、私を疑心暗鬼に陥らせる。有り得ないと、脳が否定を繰り返す。

アイツとは旧知の仲でもないし、私の前だけは偽りの姿を見せていると思う奴もいるかもしれない。

けど、違うんだ。どんなに行動で表そうとも、決して偽れない部分がある、彼が本気だと伝えてくるから。

子供のまま大人になったような——世界の汚濁を知り、それでも純粹であろうとする反抗期の青年。彼の瞳は、まるで硝子球だ。

全ての像を受け入れ、全ての像が硝子球を通り過ぎ、絶対に留まろうとはしない。自分の力だけでは決して色を付けず、外的要因だけが彼の存在意義を決めている。

他人に言い様に使われ、必要がなくなればゴミより酷い扱いを受ける。それが彼の人生の全てだったと確信を持たせようとする。

それが私には許せない。そんな人生を是としているあの男が、一番許せない。

鬼は嘘を容認しない。

だから正直者であるアイツは好きになれる、筈なのに——その事実が素直に喜べない。

胸の中がぐしゃぐしゃになる。頭の中がごちゃごちゃする。喉がもどかしく震える。

私はぶら下げている瓢箪を乱暴に掴み、そのままラッパ呑みする。

こんな自分が自分じゃなくなるような感情を、無理矢理抑える為に。

『……………これが鬼の四天王と言われた者の顔か。情けないにも程がある』

瓶に満たされた水に映し出される自らの顔を見て、嘆息する。

あらゆる感情が入り混じったそれは、角が映っていなければ一介の少女と何ら変わらない儚さを秘めている。

偉そうなことを言っていた私の方が感情的になっているなんて、滑稽の一言に尽きる。

『こんな事してても仕方ない。戻ろう』

酒の効果でさつきよりは頭は落ち着いているものの、未だ完全とは言えない。

いつまた感情的になるかと考えると、アイツの前に顔を出したくなる。

でも、だからといって逃げれば私に残るのは滑稽さだけ。二重にも恥を重ねるなんてこと、喻え誰が見ていなくとも、私自身が許せないんだ。

再びシロウと居た場所へと戻ると、彼は胡坐をかきながら何やら物思いに耽っていた。

『……………どうしたんだ？』

少しだけ遠慮しがちに彼の背中に問いかけると、彼は立ち上がり振り向く。

『君が立ち去っていた間、私なりに考えていたんだ。私の身の振る舞い方をな』

『ふうん——それ、聞かせてくれる？』

自分はまだ怒っているんだぞ、という演技をしながら、私は催促する。

誰かの視線を気にして自然な振る舞いをしようとしないう自分が、どうしようもなく腹立たしくなり、情けなくなる。

『君の言っていた通り、私はあれもこれもと欲張り過ぎたのかもしれない。犠牲のことを気にしては、大切なものを失うと。君はそう言ったな』

『ああ、その意見を捻じ曲げることは無いよ』

『別に言い負かそうとしているのではない。あんな甘い事を言っていたのは、あくまで私だけの問題の時だけの話だ。もし私の大切な人の誰かが秤にかけられている時は——犠牲のことなんて考える気はない。躊躇いなく、その他の存在を蹴落とすさ』

『ふうん……………。だがそれは、今までやってきたことの根底を覆す

ことに他ならない。言葉やその場の意思ひとつで、簡単に不変のものとすることは出来ないぞ。そして、それに知らず巻き込まれる者達を、自らの命を対価とせず守り抜くことを誓えるのか？』

死んでも守るなんて言葉は求めていない。

生きて、生きて、生き抜いて——最後には笑顔でいられる。そんな結末に到らないと、本当に守り切ったとは言えない。

『——ああ、誓うさ。誰にでもなく、俺自身に』

彼の曇りなく力強い瞳を見て、思う。なんて莫迦な男だと。

彼にとつての大切な程度は分からない。だが、人ひとりを背中に隠して戦うだけでもとても大変なことなのに、どこまで本気で言っているのか、まるで底が知れない。

虚言ではないのは分かっている。何せ相手は世界中の人間を救うことを本気で実行に移していた、信じられない莫迦だ。

彼にとつて、数が遙かに少なくなった護衛が任務のようなものだ。決意の重さこそ変わらないが、成し遂げれる確率だけはとんでもなく上昇している筈。

——今度こそ、彼の理想は夢物語では終わらないかもしれない。シロウには幸せを掴んでもらいたい。心の底から他人の幸せを願ったのは、これが初めてかもしれない。

鬼すら呆れさせる程に素直な男。純粹で稀有な存在だからこそ、その輝きを失わせたくない。

『おし、お前の決意は本物だと言うことは分かった。けどどな、ひとつ先に制約を付ける。——一人では解決できないような難関がお前の前に立ち塞がったときは、迷わず私を頼れ。さっきも言ったけど、お前が歩むべき道さえ間違わない限り、私はお前の味方だか

らな』

これは、紛れもない本心。

純粋な気持ちには、純粋な気持ちで応える。それが礼儀だろう。

『お前が正義の味方として動くなら、私はそんなお前だけの味方になんてなつてやる。喩え世界にとってお前の行動が許されないものだったとしても、私だけは決してお前の傍から離れないことを、鬼の——いや、伊吹萃香の名の下に誓うよ』

拳を握り、シロウへと突き出す。

鬼の誓いの儀式は、互いの拳を突き合わせることで成立する。

単純だが、その奥に秘められた契の鎖は、死が二人を分かつまで残り続ける。

彼を裏切り続けてきた者の代わりに、せめて私だけでも傍に居てやりたいと、心の底から強く思えたのだ。

私のこの気持ちは、合理性を一切排出した感情論の塊で出来ている。彼の意思に触発されたから、ただそれだけ。後先なんて考えていない、行き当たりばつたりの精神。

——もしかすると、私達って似た者同士なのかも。だからこそ、彼の行動や言葉が一層私の中に響き、胸の奥に刻んだのかもしい。

『——私の味方、か。今の私にそう言ってくれたのは、君が初めてだよ』

『私の力を、そこら辺の有象無象と一緒にと思わないことね。私一人いれば、百の軍勢程度ならものの数じゃないよ』

『それは頼もしい限りだな』

そう答え、シロウは同じように拳を握り、軽く拳同士で突き合わせる。

其即ち、私を仲間として認めてくれたことに他ならない。その事実が嬉しくて、笑顔が自然と浮かんでくる。

『私はこれからも間違いを犯すだろう。だから、もし迷惑でなければ、そうなった時には道を示してくれ。そうしてくれれば、私は後ろを振り返らずに歩いていける』

『——ああ、勿論さ。遠慮なんてしないでいい、無理難題だって上等だ。この伊吹萃香が、お前の前に立ち塞がるちゃんな壁を幾らでも破壊してやる』

嘘偽りの無い想いを、シロウの前に吐き出す。

それを聞いた彼は、頼りにしていると、それだけ答える。

青年の纏っていた雰囲気は、嵐が過ぎた後の空のようにとっても穏やかだった。

萃まる想い、散りゆく憂い（後書き）

こうやって伊吹萃香のストーリーを連続して書いて思った。

かわいいのう、かわいいのう。って。

ぶっちゃけると、二連続にする予定はなかった。どうしてこうなった。

私の中の伊吹萃香って、普段はふざけたり飄々とした態度で色んな事に臨むが、心を本気で許した相手で、かつその相手が悩みを抱えていれば、激昂して叱り飛ばしたり、全力で慰めてやったりと、他の人には真似できないような、純粹な義の心を持ち合わせているって感じ。

簡単に言えば、すっげー友達思いな子って感じ。自分からは絶対に友を裏切らないタイプ。

健気だなあ、自分で創作してるんだけどね、設定。

魔法少女の苦悩（前書き）

サブタイが手抜きだね。本当に考え付かなかった。

一応まだまだ続くのは確定してるのに、私の知識ではこんなもん。
ヤバイね。

もつと厨二くさいタイトルを思いつきたいな！。

魔法少女の苦悩

前回のあらすじ。萃香が私の味方になってくれた。テレレレッツ
テッテー。

『よし、んじゃあ気持ちを切り替えて。魔理沙の八卦炉の件だけど
謎の擬音が聞こえた気がするが、無視した方が賢明だと判断し、私
も気持ちを切り替えることにする。』

『それに関してだが……私は霖之助の所には行けない』

『お前なあ——』

明らかに呆れた様子の萃香だったが、彼女は誤解している。単に説
明が途中なだけだが。

『違う。私が霖之助と会えないのは、魔理沙に会う可能性があるか
らだ。私が八卦炉の修復に関わっているとすれば、彼女は完成した
としても受け取ろうとはしないだろう。あんなことをしたんだ、嫌
われていたとしても何ら不思議じゃないからな』

『そんなの、別にお前が材料を渡してはい終了じゃ駄目なのかい？』

『いや、実はやってみたいことがあるんだ。それには、私もついて
いないと不可能な仕事なんだ』

『やってみたいこと？』

『それはある程度形が出来たときに説明する。何せ我ながら無茶なことをすると思っていることだからな』

『お前は無茶しかしていないだろうが』

それはそうなんだが、それでも誰も考えようとしなかったことをやろうとしている事に変わりはない。

いや、考えても出来る訳がないような——私だからこそ出来ることなんだが。

『んじゃあどうすんのさ、作業の方は。一人でやろうとはするなんてことはもう言うなよ』

『大丈夫——という程でもないが、技術者に関しては霖之助以外に一人だけ心当たりがある。とは言っても、一度会っただけで親しい訳ではないんだが、腕は確かだ』

『ふうん。それならいいんだけど』

そう言いながら、まだどこか納得はしていない様子。

隠し事ばかりしている以上、納得しろと言う方が無理な話なんだが。

『まあいいさ。一人でやるよりは確実だろうし、何よりお前が信頼している相手なんだ。私が気にする必要はないさね。——つとそうだ、ひとつ言い忘れていたことがあった』

『？』

『この萃めた材料なんだけど、本当にただかき集めただけだから、もしかするとんでもない曰くつきなものも入ってる可能性がある』

んだ。だから、その為のお祓いを先に済ませておいた方がいい』

『お祓いって——巫女にでも頼むのか？』

これを機に早苗に会うのもいいと思ったが、今戻ったら間違いなく暫くはこんなに自由な行動は出来なくなるだろうし、もう少しだけは我慢しよう。

となると、博霊の巫女か——？

『うんにゃ、巫女なんかよりもその手の仕事に優れた神がいるんだ』

『神？』

『そう、神。鍵山雛っていう、頭にものすごい大きなリボンと、赤いドレス着てる緑髪の奴。妖怪の山に住んでいるけど、かなり目立つから見つけやすいと思うよ』

妖怪の山に関しては色々走り回ったりしたが、そんな姿を見かけたことは無い。

と言うことは、私がまだ行った事がない場所にいると考えるのが妥当だろう。

『その神が、どうしてお祓いに優れているんだ？』

『お祓いというか……彼女は厄神という種族で、厄という生命、物質に問わず付加される可能性のある負の概念を取り払う力を持つ。お祓いとかは、除霊とかあらゆる命が概念化したモノに限定した場合の方法だね。それが喻え架空の生物だとしても対象となる辺り、厄神の能力の下位互換って言う程では無いんだけどね』

東洋の神秘には疎いから、萃香の言葉を素直に聞いておく。
何千という時を生きた鬼の言葉だ。下手な住職の言葉より信憑性があるだろう。

『神にも色々な種類がいるのだな』

と言うより、神が当然のように存在している辺り、忘れ去られたものが集う世界だということを改めて実感させられる。
こうして今話している相手でさえ、鬼だ鬼だと理解しようとしないう限り、角をつけただけの少女にしか見えないのだから。

『神様なんて、ここでは縋っている者以外にとっては、私達と同じ生き物って括りでしかない存在なんだけどね。信仰なんてものは、必要な者にとつては何物にも代えがたい価値があるかもしれないけど、そうでない者にとつては道端の小石よりも価値がない、最悪排斥すべき悪でしかないんだろうさ。私には関係ないけどね』

信仰は人を殺す。私が戦ってきた中で思い知ったことのひとつ。
信仰そのものが悪な訳ではないが、それを利用する奴はごまんといる。

それで信仰の相違による争いが勃発する。排斥すべき、というのはこういった対立した者同士の思想であり、それ以外にとつては空気のようない扱いを受けるのみ。

信仰の数だけ争いは鼠算式に増える。頂点など無いのに、自分の崇拜する信仰こそ最も優れていると信じ、振りかざし、それを理由に弾圧なども起こったりなどざらだ。

不幸になるのは弱い者なのにも関わらず、この不条理な仕組み。早苗のような純粋な信仰を持つ子にとつては、昨今の宗教の悪いイメージに悩まされていたりもするのだろうか。

『誰もが強く在れる訳ではない。そういったモノは、力を持つ者には一生分からない悩みなのかもしれないな』

自分の手の平を眺め、強く拳を握る。

弱い者を救うのは強い者。まさにヒーローの様な存在こそ、弱者にとっては希望なんだろう。

だが、どれだけ正義を説こうとも、正しいと思って突き進んでも、すれ違いは起こる。

他人の心は読めない。それこそ友人などの繋がり of 深い者同士ならばその限りではないが、関わりの浅い者同士では、砂漠に落ちた米粒を探し当てるぐらいの確率でしか成立しない。

万人にとつての正義や幸福が共通するなんて甘い考えは、流石にもう捨てている。

だからこそ、私は繋がりを大事にしたい。

そして目の前にいる鬼の少女みたいに、共に歩んでいきたい。

『——それはともかく、その厄神つてのは人間に友好的な存在だから、快くやってくれると思うよ。最近は見えないけど、基本元氣な子だから気さくに話しかければいいと思うよ』

そうか、と私は答え後ろを振り返る。

しかし、思い出したかのように再び彼女へと振り返る。

当然、少女は何事かという表情と共に首を傾げていた。

『萃香、頼みがあるんだ。君を仲間と——友人としての頼みだ』

『お？早速頼ってくれるんだね！どんなことでもやってやるよ、材料運び、道案内、何でも来いさね』

意気揚々としながら萃香は自分の胸を叩く。

私に頼られるのがそんなに嬉しいのかと、私は顔を綻ばせる。いや、私も同類か。

『いや、それよりも面倒かもしれないが——君は霖之助を知っているらしいし、呼んできて欲しいんだ。もし魔理沙がその場に居たりと、何かしらの不都合が彼にありそうならば強制はしない。あの子に感づかれるのだけは戴けないからな』

『それは、敵だったから？』

『そうだ——と言うよりも、彼女自身が私をどう思っているか分からない以上、下手に出れないんだ。好意を抱いているなんてことはまず有り得ないし、普通が最高基準と考えても良い感情を持っていない事だけは確かだろう？』

『それなら、私がそれとなく聞き出しておこうか？』

『それは遠慮する。君と魔理沙の関係は、少なくとも劣悪なものではないようだ、私の事を嫌いだと魔理沙が言った場合、聞いた理由から色々と言及され、最悪君達二人の間にまで溝が出来てしまうのではと思つてな』

『自分のことなのに他人の心配、か。まあお前がそこまで言うならこれ以上は何も言わないよ。いらぬ善意は、時として悪意になるつてのはお前が一番分かっているだろうし』

『すまないな』

私は軽く礼をすると、堅苦しいなと突つ込まれた。親しき仲にも礼儀あり、という言葉があるが、彼女相手には不要の

長物なんだろう。

彼女みたいに、強引ながらも他人の心に干渉出来れば、どれだけ人に好かれるのか。それを少しだけ、羨ましいと思ってしまう。

『ただ、私と君が分かれることで、居場所が完全に分からなくなってしまうんだ。漠然とした位置は言えるかもしれないが、私自身も正確な位置を忘れてしまっているの、道に迷わしてしまう可能性が遙かに大きいのだよ』

『それなら問題ないよ』

悩む素振りすら見せず、手を突き出して静止の意思を示す。

そしてその場に屈み、長めの雑草を引き抜いたと思えば、私の手を取りそれを人指し指に巻きつけた。

『私の力はただ萃めたり散らしたりするだけじゃあないんだ。今この草に萃の力を一時的に譲渡することで、私が草を引き寄せるのではなく、この草が私を引き寄せるようにしたんだ』

『そんなことも出来るのか……。でも、何故草なんだ？目印と言う役割なら、それこそさつき集めた材料のどれかでも構わないのでは？それに目印が絶対に必要なのか？』

『意味はないよ、単にこっちのが近かったから。因みに目印ではなく、条件をしぼる為なんだ。エミヤシロウを対象としてしまうと、お前以外の同姓同名、または音読みが一緒の漢字が異なる別人も対象となる恐れがあるんだ。だからこうして？伊吹萃香が人差し指に草を巻きつけたエミヤシロウ？と萃める対象を限定し、確実にお前だけがターゲットになるようにしたって訳』

正直、驚かざるを得ない。

能力の譲渡なんて理解の及ばないことだけではなく、自らを能力の対象に変換するだなんて、新しい自分と分身がドッペルゲンガーのように存在しているのと同義ではないだろうか。

人の身では到れない領域。人が造りし魔術であろうと、そこまで到るには、恵まれた才を持つことや——人であることをやめるぐらいししないと決して届かないだろう。

『とにかく、そんなことが出来るから安心していいよ。今から行くんだったら、急がないと日が暮れちゃうよ』

『……………そうだな。天子達に一目会っておきたかったが、そうも言ってられないな』

あれもこれもと手を出していると、本来の目的を達成できない。それに、天子はともかく衣玖は用事があったから会えなかったのだろつし、こればかりは勘弁願いたい。

『では、私は先にその厄神の下へ向かう』

『あいよ。私は適当なタイミングで向かうことにするよ』

萃香の姿を自らの背中では隠し、材料が入りきるぐらいのサイズの布を投影。そのままそれを床に敷き、早々と上に乗せて包み込む。

投影の存在を隠す理由は無いが、下手に質問されて時間を食う羽目になりそうだったので、今は秘匿しておくことにした。

——今度この能力を見せる時が、戦場で互いの命を補完し合うような状況でなければいいが。

そんな不透明な未来を想像しながら、私は下界への階段に足を踏み入れた。

木々が葉を枯らし始め、木枯らしが私の肌を刺す季節。私の心もまた、どこかぼつかりと穴の開いたように空虚で、何をしても満たされない気分だった。

『はあ……………』

今日で何度目の溜め息か分からない。いや、あの日から私は口から溜め息しか出ていないと言っても過言ではない程に、嘆息ばかりの毎日を過ごしていた。

こんなに自身を腐らせていたことなんて、多分今までなかったと思う。

『——溜め息吐くだけなら、出て行ってもらえない？ 魔理沙』

顔を上げると、明らかに迷惑そうに腕を組んで立っているアリスがいた。

そう、私は今アリスの家にお邪魔している。まさしく、邪魔しかしていない。

『……………』

アリスの怒りは理解している。私に原因があることも、原因が大木の如く根を張っていることで、その怒りが余計に湧き上がっていることも。

しかも、ここに来て私は一言も発していない。何を聞かれても、だ

んまりを決め込んでいるだけ。

ならどうして、私はここにいるの？

悩みを聞いてもらいたいのか——なら何故私は何も言わない？

友人の付き合い故察して欲しいのか——なんて自分勝手に、独善的な思考。

何もかもが受動的な在り方。こんなの、霧雨魔理沙を知っている者ならば、絶対に許容しない。

皆の目に映る私は、他人を押しつけてまで我を通し、他人に非難されようと己を崩さない、まるで真夏の太陽のような在り方こそが真実の筈。

それが喻え、偽りだらけの器だとしても。

『……………ほら』

金属の擦れる音と共に私の目の前に置かれるティーカップ。私の好きな、紅茶の匂い。

無言でそれを手に取り、胃に流し込む。

——熱い。内側から焼き鏝でも当てられたかのような位に。それでも声を出さなかった私は、余程声を出したくないらしい。

『しおらしいなんてアンタらしくないわね。言いなさいよ、暇つぶし程度には聞いてあげるから』

『暇つぶし……………』

それは嘘だ。

私がドアを開けた時、魔法薬の匂いがした。それもとても濃色された。

アリスは魔法使いだけど、あの匂いは好かないらしく、作業が終わ

つたら次は消臭するのに忙しいらしい。当然、保管する際にも匂い漏れには細心の注意を払っている。

そんな彼女が、部屋にこの独特の匂いを満たしているということは――魔法薬の作成中に、私がお邪魔してしまったからということになる。

彼女はいつもそうだ。

忙しくないと言えば実は忙しい。平気だと言う時は大抵苦勞を背負っている。

隠しているつもりなんだろうけど――実に分かり易い。

傍から見れば滑稽かもしれない。だけど、私はそんな分かり易さに憧れていたりもする。

嘘が裏目となり真実を隠しきれない少女、アリス・マーガトロイド。嘘という真実で自らを塗り固めている私、霧雨魔理沙。

似た者同士に思えて、こうも違う。不思議だけど、納得はできる。

だって、アリスの嘘は清い嘘。私の嘘は穢れた嘘。嘘であることに変わりはないけど、彼女のは赦されるべき嘘だ。私のは――赦されてはいけないもの。

どんなに類似していても、根っこは同じでも……決して交わらない、水と油のようなカンケイ。

『――わかった。話すよ、嘘偽りなく』

アリスは満足そうに私の言葉に頷く。

それを見届けた私は、話し始める。紅魔館で起こった、私の憂いの原因となった出来事を。

誇張も隠蔽もせず、ただありのままのことだけを、書物を音読するように淡々と話す。

数分後、話し終えた私は再び頭を下げ、どこぞの燃え尽きたボクサーのような体制になる。

アリスは一言、予想通りの言葉を私に投げつける。

『自業自得ね』

『——かもな』

アリスはそうあっさりと切り捨てた。

この期に及んで、まだ私は自分にも正義があることを望んでいる。そうやってかもだなんて言葉で濁したところで、私が一番悪いことは変わらない。

普段から紅魔館に侵入し、パチュリーの所有物である魔道書を持つていく。それが祟って私の八卦炉が壊れる原因にまで至った。

予想外だったことは、あのタイミングで図書館に主要の住人が居たこと。そして、私を倒した男の存在。

そのイレギュラーが無ければ、恐らくはいつもと同じで本を手に入れることは出来ただろう。

——でも気づいてた。

悪党にはハッピーエンドなんてものは存在しないって事ぐらい。

ただ、それが現実として目の当たりにしないと認められない。そんな人間の業のようなものが邪魔をしているから——そんな言い訳ばかり口になっているから——、人間は愚かなんだ。

『寧ろ八卦炉の破損と破壊された図書館の整備だけで済んでよかったじゃない。アンタは他人に恨まれるようなことばかりしてるんだから、たまには他人の苦勞を理解するべきよ。命があるだけめつてもんだと思いなさい、アンタのやってきたことはそれだけ罪深いのよ』

——偽りの自分では聞かせることは出来ないけど、正直アリスはいい女だと思う。

口ではなんだかんだ言いつつも、こうして話を聞いてくれる。気丈な態度を崩すことなく、常に自分を見失わない。

故に、こういったカウンセラー的立場になると、とても的確な判断をしてくれる。実際、それに救われたことは少なくない。

決して感情論で答えを出さない、それを冷酷だと言う人もいるだろうけど、それは人の感性次第だ。

否定的な奴は、大抵自分の都合に合わないからという理由で蔑む。

自分の益とならない存在に対する態度など、それが無関心ぐらいだ。それは、どの生命にも有り得ることだ。けど——人間は他の種族に比べてそれが顕著だ。吐き気がする程に。

アリスは妖怪の魔法使いだ。人間の私とは比べ物にならない程の潜在能力を秘めている。それに、寿命も人間とは比べるべくもない程に長い。

見た目こそ私より少し年上に見える程度だが、恐らくは最低でも倍は年を取っていると思う。

魔法使いのような何かを突き詰めることに喜びを感じる者にとって、時間は幾らあっても足りない。そういう意味では、私のような人間の魔法使いにとっては、望んで手に入るなら是非欲しい代物である。でも、私が一番望んでいるのは——

『——聞いているの?』

『……………ごめん、聞いてなかった』

考え事に没頭していたらしく、アリスの声に顔を上げると変わらない呆れ顔を見せていた。

だが、少しだけ——一瞬、何故か悲しそうな雰囲気を感じていた気がした。

『まあいいわ。言いなおすけど、罪悪や罪とかはもういいわ。それよりさつき言ってた、赤い外套の男？だっけ。ソイツに負けたのよね』

『ああ』

その答えを聞いて、しばしアリスは考える仕草をする。赤い外套の男が気になるのかな。

自惚れに聞こえるかもしれないが、私を圧倒できる實力を持つ奴がいるなら、私達が知らない訳がない。特に、どこぞの天狗が確実にネタにするだろうし。

ならば彼は外人か？それなら納得はいく。

だけど、彼は何故紅魔館にいたんだ？レミリア達のあの男へと態度を見ても、険悪な関係ではないことは分かる。

でも彼は實力を測る舞台を提供してもらいたい、とあの場で言っていた。

理由はなんだ？気まぐれか？私を嘗めていただけか？

可能性は尽きないが、考えたところでどうしようもない。

『その男は魔理沙に一騎打ちを申し込んできた。そして、魔理沙が負けたと。それも正しいのよね』

私は無言で頷くと、どこか腑に落ちないという表情で私を見つめる。

『それにしても、よくパチュリーがあの場でその条件を呑んだわね。正直な話、あの図書館を荒らされるのを望まない彼女が、その男に全てを任せた理由が分からない。パチュリーだけじゃない、紅魔館

自体を荒らされるような状況を前にして、レミリアや咲夜は何故黙っていたのか』

『それは、自分の实力を示す為だって——』

『もしそうだとしたら、リスクが高いわ。实力を示すということは、被害を抑えることも評価の内に入るのではない？ そうだとすれば、図書館が舞台となれば明らかに自分が劣勢な条件を強いられるのは目に見えているわ』

『それだけ自分に自信があつたってことなんじゃないのか？』

『——まあ、その場に立ち会っていない私は憶測でしか語れないんだけど。それでいいなら、二種類の可能性があるんだけど』

『それは？』

アリスは一息吐いた後、自信満々に答えた。

『一つは本当に自分に自信があつたから。もう一つは——魔理沙を助ける為ね』

『——たず、ける？何を莫迦な』

どうしたらそう言う結論に至るんだ？

助けたい相手と戦うことが助けることだなんて、矛盾している。

『否定的になる理由も分かるわ。私も同じ立場だったらそうなただだろうし』

『だったら、何故』

『今の魔理沙にとって、赤い外套の男は自分と戦った相手という認識しかない。それに加え、八卦炉までその時に壊れたらいい感情を持たないのは仕方ないこと。だけど、見方を変えてみたらこうも捉えられるの。？アンタへの被害をあの状況で最小限に抑える為に、わざと1対1に持ち込んだのでは？ってね』

『……………そんなのいいとこ取りの憶測だ。理になってない』

『そんなの当然じゃない、私はアンタの話を材料にしかしていないもの。睨まれる謂れはないわ』

不機嫌が顔に滲み出ていたらしく、アリスも不愉快そうに眉をしかめている。

『ごめん』

『——嫌に素直ね。本当、アンタらしくない』

本当の私なんて、こんなもの。

自分の弱さを嘘で覆わないと何もできない、臆病者。

他人に依存しないとなにも出来ないのに、他人を平気で見限り、踏みつける卑怯者。

そうして培ってきた魔法使いとしての力。いつか支払う代償は、永遠の孤独か、命の損失か。どちらにせよ、いい方向には傾かないだろう。

自分でもそれだけのことをしてきたって理解してる。

それでも——独りになりたくない、死にたくないと思うのは間違っているのかな。

『でも確かに、私の言ってることは根拠も何もないものだし、自分にとって敵だった相手を介護するような言い方をされるといい気はしないでしょうね。でもね、多角的に物事を考えられないようでは、魔法使いとしては二流止まりよ。今回の事件を切っ掛けに、その練習でもすることね』

——多角的に、か。難しい注文をする。

固定概念を取り除くなんて芸当は、人間には難しすぎる。

敵となった相手が、もしかしたらいい奴なのでは？なんて考える奴は、どうしようもないくらいお人好しか、莫迦だけだ。

アリスは私に莫迦になれと言っているのだ。それが出来ればどんなに楽か。

『——頑張ってみるよ。ありがとうな、話聞いてくれて』

『別に、暇だったって言ったでしょ』

『それでも、だよ』

『……………そう』

妙に居心地の悪い静寂が辺りを支配する。

単に恥ずかしがっているだけなのだが、それにお互いに気づいていない。

感謝するのめされるのめ、気恥ずかしいもの。それが当たり前関係でも、決して消えることはない。

だからこそ、人は繋がりを求めるのかもしれない。

『——もう帰る。これ以上は本当に邪魔だらうつし』

『そうね。取り敢えず冷たい風にでも当たって、冷静に考えてみなさい』

『分かったよ。じゃあなアリス』

私は重い足取りで家から出る。

待っていたと言わんばかりに突き刺さる寒風に身震いする。

だが、意識は強制的に覚醒していく。さっきまでうじうじしていた過去なぞなかったことにしたのではと思う位、私は叫ぶ。

『よっし、どっか行くかー!!』

両腕を強く突き上げ、身体を伸ばした後、家の前に立て掛けておいた箒を取り、そのまま飛び上がる。
風の向くまま気の向くまま、いつも通りの？なんとなく？で今日も幻想郷を駆ける。

魔法少女の苦悩（後書き）

最近、本当に後書きに書くことないなー。次回は新キャラ出るからいいけど。

んじゃあ、なんとなく萃香のステータスでも書くな。いずれ戦闘に参加させるだろうという伏線みたいなもんだけど。

まあ、前々回にもあったけど、このステはないわー、って思う部分もあるかもしれないけど、そこらへんは現在確定ではないので、バンバンお声をどうぞ。

伊吹 萃香

属性：中庸・善

筋力：A（B）

耐久：B

敏捷：B（C）

魔力（霊力）：C

幸運：C

宝具（程度有能力）：A

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：C 通常弾幕に対し高度の抵抗力を持つが、スペルカードなど大がかりな攻撃は防げない。

保有スキル

泥酔：B＋（40～80）酒の力により威圧・混乱・幻惑といった精神干渉をある程度無効化する能力。また、一部のスキルとステータスをランクアップさせる。

思考透視：D（20）相手の考えを言葉を通じてある程度理解出来る能力。ランクDなら、相手の言葉の正否の判断が出来る。つまり、嘘が見抜ける。

カリスマ：D（20）～C（30）～大軍団を指揮・統率する才能。だが、泥酔の効果によりワンランクダウンしている。

宝具

密と疎を操る程度 of 能力：A 対人 レンジ0～50 最大捕捉：100人

物を萃めたり散らしたりする能力。戦闘に直接関係する能力ではないが、その汎用性の高さは他の追隨を許さない。

物質から精神に至るまで、あらゆるものを萃めたり疎めたりすることが出来る上に、自分自身を散らして分身を作ったり文字通り霧散したり、能力を草や木などの、動物を除いた生命体に一時的に譲渡し、自分そのものをその譲渡したものから引き寄せたり離されたりすることも出来る。当然、解除しない間は能力は使用できないどころか、空も飛べなくなるとデメリットも大きい。

ていうか、本編書くよりステータス書いてた方が楽しい。あるえー？

悲劇の流し難（前書き）

久しぶりに独自解釈があります、自分で言うのもなんだけど、だいぶ原作と比較して暗い話だな。その手のキャラ好きに殺されそう。

悲劇の流し難

再び守矢神社の裏へと辿り着くと、天界まで続く階段は粒子化して消えていく。

今までは衣玖の力で出していたと思っていたが、今日彼女とは一度も会っていないので、作業が出来るとは到底思えない。

最早私だけしか通らないような廃れたモノだからこそ、私が往復すれば自然と消える仕組みにでもしているのかもしれない。

それが事実だとしても、優越感よりも不信感の方が高まる辺り、まだ完全に精神は錆びついていないらしい。

辺りを見回し、記憶を頼りに未開の地へと足を踏み入れる。

私が自ら踏み入れた妖怪の山の範囲など、半分にも至っていない。

それなのに多少の情報のみを頼りに手探りに人探しなど、正直無謀だったかもしれない。

萃香に仕事を頼んでしまった以上、最低でも鍵山雛なる神を探し出し、厄を取り除くだけでもしないと申し訳が立たない。

『それにしても……まるで人の通った跡がないな』

地面から生えた草は腰元まで生い茂り、隙間なく植えられた木々は秋と言う季節でなければ光が差し込むことすら許さなかっただろう。どこを見回しても、どこまで歩いても同じ景色。何故、これほどまでに人が通った跡がないのか。考えられる可能性は幾つかあるが、どうにもいい展開を想像できない。

私はより警戒を強めて歩みを進めていると、微かに呻き声のような音が聞こえる。それも複数。

人間が通らないということは、それだけ獣にとって最良の環境であ

るということだ。逆に言えば、人がいるからこそ、獣はどんな行き場を失くしている。

そういった環境の場所が制限されれば、必然的に同じ穴の貉は集う。恐らく私が想像している以上に、ここには獣が縄を張っているのだろ

う。

だがそれにしても、私を警戒するにでは声が遠い。

それこそ私が視認できない位に距離が離れているのだ、同じ条件下である以上野生の動物に私を捉えられる筈がない。

それとも、獣のように人間よりも危機管理能力が優れている存在にとっては、サーヴァントはいるだけで畏怖の対象となっているのだろうか。

謎の不安が脳裏に過る。

その瞬間、私は走り出していた。

まるで過去の経験が後押ししているかのように、迷いなく進んでいく。

——そうして辿り着いた先は、悪夢の具現そのものだった。

眼前に迫るはナニカに群がる無数の獣。

そのナニカを中心として地面に展開するは、夥しいまでの血液。

私に気付いたからか、もしくは飽きただけなのか、獣はナニカから離れ、此方を警戒するように唸る。

獣の殆どの口元と爪に付着した血液が、ナニカに対して行っていたことを容易く想像させる。

そしてとうとう露わになったナニカの姿は、所々食いちぎられたように欠損し、元々は緑の髪だったのだろうがその殆どが赤に浸食されている。

そして、気付く。そのナニカの上部に装飾されているのは、過剰と言える程に巨大なりボン――

『あ、――あ』

そう、目の前のナニカ――それは、鍵山雛だ。初めて見たにも関わらず、彼女がそうだという確信だけはあった。

絶望的な光景に声を出せない。突然の出来事に混乱しているだけののだろうか……

脳が焼き切れる。意識が擦り切れる。喉はカラカラだ。

吐き気がする。目の前の光景ではなく、こんなにも近くにいたのに救えなかった自分自身に。

『貴様ら――！！』

怒りに身を任せた怒号が山を震わせる。

そしてそのまま全力で踏み切り、瞬時に投影した剣で一閃する。

まるで八つ当たりをする子供のように、その動きは我武者羅。技術も何もない、力任せの薙ぎ払い。

そんな攻撃だろうと、なんの特殊能力も持たない獣風情がサーヴァントであるエミヤシロウに敵う筈もない。息をする間も与えんと結果で示すかのように、目の前にはその場から一切動かないまま絶命した獣の無残な死体が転がっていた。

剣を手放し、鍵山雛の隣で膝を折る。

また、また私は救えなかったのか。

もっと早く気づいていれば届いたかもしれないのに。もっと急いでいれば、注意を多少向けるぐらいは出来たかもしれないのに。

全てが後の祭り。死者を蘇生する力は、私には無い。いや、そんな力、神であろうと持っていない。

私は彼女の頬をそつと撫でる。誰にも看取られずに逝くよりはましだと自分に言い聞かせながら。
だが——その想いは叶うことはなかった。

『——あ、う』

風の音に吹かれそうな程僅かな音。だが、私は決して聞き逃さなかった。

ヒュー、ヒューと、喉から漏れる命ある証。
彼女は、生きているのだ。

『ッ——
トレス・オン
投影、開始！！』

絶望するにはまだ早い。
可能性があるならそれに縋りつく。
喻え塵にも満たない可能性だろうと、そこに希望があるなら、エミヤシロウは決して諦めない。

『——創造理念、鑑定』

頭に浮かびあがるは、癒しの神と謳われた男の弓。
そのの矢に射抜かれた者は、呪いを除いたあらゆる物理的な傷が瞬時に癒される。

しかし使用者は代償としてその恩恵に預かれない呪いをかけられてしまふ、他人による他人の為の宝具。

『——基本骨子、想定』

より確実に、より可能性を底上げする為に、呪文を手を抜かずに焦れば先に待つは目の前の命の消失だけ。それは、エミヤシロウに

とつての死と同じ。

失敗は決して許されない。そんなことに現存^なってはいけない。

正義の味方を名乗るなら、せめて手の届く範囲だけでも絶対救って
見せろ——！！

『——トレース、オフ、投影、完了……！！』

その手に生まれた弓と矢を即座に構え、狙いを定める。

隙間の一切無い射程距離であるにも関わらず、私は内心外す恐怖に
怯えている。

——らしくない。これでは弓兵の名が泣くというもの。

冷静に呼吸を整え、意識を集中させる。

対象を殺す為ではなく、生かす為に射る矢など、これが初めてだ。
願わくば、これを使うのは最初で最後であることを——

『ヒラー——
傷を負った——
ウー・パウ
癒し手の弓ッ！！』

真名を叫ぶと共に雛の身体を貫く。

瞬間、身体全てを包み込む光が矢を中心に展開されていく。

そして光は失われた肉体部分を補完するかのように傷に触れていき、
瞬く間に傷を塞いでいく。

みるみる顔色も良くなっていくのを見て、私は安堵の息を漏らす。

『私は……彼女を救えたのだな』

鍵山雛の手を握り、その暖かみを実感する。

先程に比べて格段と顔色は戻ってはいるが、元々^{くま}なのか目元の隈と
肉付きのなさばかりはどうしようもなかった。だが、それでも私が
彼女にやれたことは大きなものだったと思う。

熱から生命の鼓動を直に感じる。生きているという、確かな証拠。

感覚を深く味わっている内に、彼女に刺さった矢は役目を終えたと
言わんばかりに音を立てて消滅した。

『――』

そして突如として鍵山雛は覚醒した。

首だけを左右に振った後、私の顔と繋がれた手を視線だけで交互に
眺める。

『気が付いたのだな。よかった』

力なく彼女は胴体を起き上がらせ、項垂れるような体勢で座る。
どんなに傷は完治したとはいえ、精神面まではどうしようもない。
傷を負ったという事実に苦しんでいるのだろう。

『――して』

か細く美しい声が静かな空間に響く。

私はその声をより確実に聞くために、耳を欹てる。

喋るのも辛いのだろう。何せあれだけの怪我をした後なのだから、
瞬時に治ったとはいえ気怠さは相当あるに違いない。

『どうして――放っておいてくれなかったの』

耳を疑うような言葉が、鮮明に聞こえた。

『何を、言っている』

『あのまま死ねたらよかったのよ。私は、それを望んでいたのに』

『死ぬだなんて、莫迦なことを言うな!』

私は雛の肩を乱暴に掴み、叫ぶ。

しかし彼女はそれを意に介した様子もなく、私の手を払いのける。

『何よアンタ。私の命をどう扱おうと私の勝手でしょ』

『勝手なものか。何か辛いことがあったのかは知らないが、苦しみから逃げると言う意味で死ぬ気なら、やめておけ。それは、幸ある未来も一緒に投げ捨てているのと一緒にだぞ。そんなの、勿体ないではないか』

『未来にある幸福の度合いと不幸の度合いが最低でも同じ線上にあるとは限らない。未来なんて分からない以上、それは希望的観測に他ならないわよ』

『なら、それを確かめる為にも死ぬべきではない』

『今死のうとしていた相手に言っても無駄な台詞ね。そんなものが見たいと少しでも思ってるなら、自殺なんて図らないわ』

お互いに一步も引かない口論が続く。

どんなに強く熱弁しようとも、彼女は柳のように受け流す。

冷静に頑なに意見を変えない者ほど、質の悪い相手はいない。悪い考えを根に持っているのなら、尚更である。

『——まず落ち着こう。落ち着いて、互いの名前を紹介しよう。』

私はエミヤシロウという』

『私は充分落ち着いてるわ。——鍵山雛よ』

やはり、彼女がそうだったか。きちんと答えてくれる辺り、根本が捻くれている訳ではなさそうだ。

だが、今はそれは大して重要ではない。今は、彼女の歪んだ考えをどうにかするのが最重要事項だ。

『雖よ、君は何故そんなに死を望んでいる。そこまで君を追いつめるものはなんなんだ？』

『そんなの、何故アンタに話さないといけないの』

『話せば気が楽になるかもしれないと言うのもあるが、君の悩みに対して何か力になれるかもしれないからだ』

『なんで今知り合ったばかりの相手に悩みなんか言わなきゃならぬのよ。それとも私の命を救った程度で私の全てを知った気でいるのかしら。自惚れも大概にしなさい』

『ッ——君こそ自分を過大評価しているのではないか？君にとってその悩みは命を絶たなければいけない程のものかもしれないが、私からすればちっぽけなものかもしれない。何も語らずまま悲劇のヒロインぶるのは構わないが、端から見れば大根役者もいいとこだな』

『なら私は独り善がりで孤独に舞台を演じるだけよ。観客如きが役者の苦勞を理解しようだなんて、自分を上に見るのもいい加減にしなさい』

『残念だが、このままでは君の舞台は完遂せずに終わってしまう。主人公が死ねば終わる物語も存在するが、君のそれは台本作りの段

階で苦悩しているに過ぎない。この時点では、私は観客にすらならないのだよ。君の演じる舞台を楽しみにしている者にとって、それはとても悲しいことではないかね？」

「——楽しみにしていた？私の名前すら知らなかった男が、よくもまあ平気で嘘を言えるわね」

「私だけの話じゃないさ。君にだって友人或いは知人はいるだろう？その者達は私のような気持ちかもしれないではないか。それに友人に悩みを打ち明ける事で、何か変わるかもしれないぞ」

互いに一步も引かない意見の衝突が繰り返されていたが、それは離れの沈黙で終わりを告げる。

友人、と言う言葉が出た時、彼女は僅かに眉を潜めたのを私は見逃さなかった。

彼女の悩みの根元は、そこにあるというのか——？

「——」

離れの持つ悩みに対して憶測を立てていた時、突然彼女は立ち上がり、無言でどこかへと歩き出す。

私は慌てて彼女の隣まで歩を進めると、明らかに厭そうな顔でこちらを一瞥する。

「ついてこないですよ」

「さっきまで喋っていたのに、いきなり無言で立ち上がったどこかに行こうとする相手を黙って見送るような真似をする位なら、最初からあんなに語ろうとは思わないさ」

再び彼女は無言になる。

たださっきの静寂とは違い、少しだけだが彼女に纏わりつく空気が刺々しいものではなくなっている。

だが、代わりにそれとは違った意味での拒絶の雰囲気彼女から出ていた。

『……………髪』

『ん？』

『こっちに泉があるの。そこで髪とか洗うから、ついてこないでって言ってるのよ』

『ああ……………成程』

納得したように私は頷くが、それでも歩みを止めようとしないうつろいを見て雛は更に睨みを利かせる。

『私の裸を堂々と覗こうとするなんていい度胸じゃない。アンタは知らないかもしれないけど、私は厄神よ。気持ちひとつでアンタを不幸のどん底に落とすことが出来るのよ』

『君を放置すれば水深自殺でもしそうだからな。それに、今の私にとつての不幸は君が死のうとすることだ。私を不幸にするために自殺など、馬鹿馬鹿しいと思わないかね』

『——それもそうね』

その時、雛が一瞬だけ笑みを浮かべた。だが、すぐさま無表情に戻ってしまい、残念に思う。

だがそれ以上に、少しは心を開いてくれた気がして、嬉しかった。

『こっよ』

そんな会話をしている内に、泉へと辿り着く。

泉の部分だけ一切遮蔽が無いせいか、太陽の光が反射してより美しく魅せている。

大きさにすれば人が百人入れれば一杯になる程度のものだが、一人が入るには余りにも広大だ。

まるで鍵山雛のみが触れるのを許された神秘的な泉なのではと思っ
てしまう位に、この泉は穢れなくカタチを保っていた。

『——なあ、君が泉に入っている間、脱いだドレスを貸してくれないか？そんなボロボロでは不便だろう、修繕しておいてやる』

『……確かにそれは願ったり叶ったりだけど、正直渡すのに抵抗はあるわね。無い方がおかしいんだろうけど』

雛は自分の今の姿を身体を交互に捻って観察する。

はつきり言って、今の彼女の恰好はとんでもないことになっている。その殆どが怪我をした際に千切られたので、都合よくギリギリな部分は隠れていること以外は、最初から作り直した方がいいのではというレベルの被害を被っている。

『こればかりは自業自得とさえいいのかもな。後のことを考えていないのは当然だったのだろうが、死ぬ決意をするよりは簡単だとは思っぞ？』

雛は暫く悩んだ後、溜息を吐きながら乱暴に頭を掻いた後に、諦めたように告げた。

『——分かったわよ。ただし、こっち見たら殺すから』

こちらに力強く指を突出し、釘を刺す。

頬を僅かに染めている雛は、美しいというよりも可愛げの方が前面に押し出されていた。

『そんなことはしないさ。約束しよう』

それだけ言い終え、適当な木の陰に移動して、腰を下ろす。そして雛もそれに続くように場所を移動する。

私達は今、木を介して背中合わせになっている。壁ひとつ隔てて女性の裸体があると考えると、興奮すると言っよりも妙な罪悪感の方が湧き上がってくる。

覗こうとしている訳ではないのだが、この場にいるだけで許されないような、神聖な空間に足を踏み入れているようで。

静かな世界に絹の擦れる音だけが響く。

それだけでも淫靡さがとんでもないことになっているのに、雛の肢体を余すことなく表現している影を見てしまったせいで、目を閉じても頭の中で鮮明に浮かび上がってしまう。

投影魔術はイメージの強さがモノを言うので、想像力は鍛えられている。——もっとも、そのせいで脳裏に焼き付いて離れないのだが。

『ほら、丁重に扱いなさいよ』

しなやかな腕と共に突き出される雛のドレス。出来るだけ後ろを振り向かないように受け取ると、影が泉の方向へと消えていく。

私は一度呼吸を整えた後、雛のドレスを解析する。

どれだけボロボロになるうとも、ある程度形を保っていれば解析で完全な形を頭に叩き込める。

赤い色が9割を占めているドレスならば、マルティーンの聖骸布を素材にしても問題はなさそうだ。やるなら徹底的にやるのが私の主義だからな。

別段この聖骸布のせいで体調が悪くなるなんて事はないだろうし、別に許可を取る必要もないだろう。

——— いったそのこと投影した方が楽な気がしてきたが、気にしないでこつ。

『ねえ、エミヤシロウ。ひとつ聞いてもいいかしら』

『ん、なんだ？』

あれからさっさと投影を行い、作業を続けていると、突如雛から話しかけてきた。

『アンタ——— 一体何者なの？』

『何者かと聞かれても、何から説明するべきか———』

『アンタの想像していることと私が言いたいことは違うでしょうか。続けるけど、私は厄神だとさっき言ったけど、私は他人を識別するのにその種族特有の厄の色も見るのよ。人間は灰色、動物がベースの妖怪は紫。どの種族も決して同じ色にはならない。……… だけどアンタの厄の色は、最早厄とは思えない色をしていたのよ』

声色からでも、未だに信じられないという気持ち可以理解できる。平坦な声色からは、私を恐怖しているような雰囲気すら感じる。

『して、その色とは？』

『——白。他人の負を象徴する厄としては決してあってはいけ
ない、潔白の証。にも関わらず厄としての雰囲気は決して損なわれて
いない。意味不明を超越して不気味だわ』

——白、か。私に随分と不釣り合いな色が出されたな。

この身は潔白なんかではない。自分のエゴを成し遂げる為に——
誰かを救う為に——、結果と矛盾した行いを繰り返してきた——
——誰かを切り捨ててきた——。自分の都合で救う者と救われない
者を取捨選択し、仕方ないと割り切り切ってきた。
現実を直視せず、それでもいつかはと犠牲を増やしてきた私が、白
？光すら通さない黒がお似合いだろうに。

『私も、その色には納得できないな』

『でも、それが現実。今でもアンタの周りにはそれが纏わりついて
いるわ』

『厄神である君でさえ、見たことがなかったのか』

『ええ、はつきり言ってイレギュラーもいいところよ』

——私にはその厄を確認する術がないから何とも言えないが、彼
女がそんな無意味な嘘を吐く理由も思いつかないし、真実なのだろ
う。

疑問は尽きないが、プロでも分からないというなら私はどうするこ
とも出来ない。

それに、別段それが私にとってのマイナスになる訳でもなさそうだ

しな。

一瞬、この会話の雰囲気に乗じて自殺の理由を探ろうかと思ったが、やめておいた。

折角機嫌がよさそうなのに下手な刺激を起こせば、同じ末路を辿るだけだ。

ずっと一緒にいてやることは出来ないし、別れた後は彼女が過ちを繰り返さないことを祈ることしか出来ない。

——中途半端だな。自分ではそうは思っていないが、傍から見れば半端もいい所なんだろう。

一度彼女の事情に介入したのだから最後まで責任を持つのが当然だろうが、私はそんな事をあちこちでやっている為、結果としてどれも平行線で物事が進んでいく。

私の力ではこれしきの数ですら身に余るのか。その事実が、たまらなく悔しい。

『厄というのは、言うなればそのヒトに纏わりつく不幸ね。その厄が纏わりついている限り、何かしらの形でヒトは不幸に遭う。箆笥の角に小指をぶつける程度から、落盤事故に巻き込まれる程の大きな不幸と千差万別なのよね。私の仕事は、そんなヒトの厄を背負い、儀式を行うことで不幸を循環させるの』

『——よくわからないが、大変なんだな』

『大変とは思わないわね。なにせ私はそれだけに生まれた存在なんだから』

淡々と語られるその言葉に、私は胸を締め付けられる。

逆説的に言えば、彼女はヒトが勝手に背負う不幸を消し去る為だけに生かされているということになる。

まるで機械のような扱い。彼女は紛れもなく生きているのに、その仕打ちはあんまりだ。

それならいっそ、機械として生まれた方が幸せだったかもしれないのに、世界はそうはしなかった。

何か意味があると信じたいが、もしただの気まぐれで鍵山雛という薄幸の存在を作ったのだとしたら——私はこの怒りを抑えられる自信は無い。

『——待てよ？君が先程獣に襲われたのは、もしかして他人の不幸を一身に背負っていたからか？』

『そうよ。ま、半分はそれで合ってるわね』

『半分？』

『…………エミヤシロウ、アンタはこの幻想郷には厄がどれだけあると思う？』

『そんなの、分かる訳ないだろう』

『——私から見れば、この世界は厄で満たされすぎている。それこそ、空気が色を持ったらこうなのかって思う位、そこに存在しているのよ。アンタには綺麗に映った泉も、私からすれば泥を見ているのと何ら変わりはないわ』

『な——』

私の疑問に答える雛の声は、どこか弱々しい。

私は彼女の見ている世界はあまりにも残酷だと言っ現実を突き付けられ、返す言葉が思いつかないでいた。

『厄を持つのはヒトだけじゃないわ。物質にもそこらに生えている雑草にも、当然のように存在している。しかもそれは消したところでいつか復活するときにいる。——私だけの力では、とても手が回らないのよ』

厄神としての苦勞。それは、ただ少しだけ変わった力を持った存在程度ではどうしようもない、大きなものだった。浅はかだった。これは、私がどうこうできる問題ではない。

『でも不思議なのよね。何故かアンタの歩く所は、厄が離れていくのよ』

『——なに？』

『アンタの白い厄と何か関係があるのかしら、なんてね』

雛のどんどん声が近づいてくる。どうやら水浴びは終わったらしい。こちらもある程度の修繕は終わった為、取り敢えず投影したタオルを後ろ手に差し出す。

『ありがと。——因みに自分ひとりじゃ厄をどうしようもできないってのが、自殺の理由じゃないから』

『そうなのか』

では何故、と聞き返しそうになったが、私は慌てて口を噤む。それを誤魔化す風に、直したドレスを続けて渡す。

『ありが………え？』

続けてくるだろう感謝の言葉は、疑問符と乱暴に奪われたドレスの感触と共に遮られた。

『ちょっと、これどういうことよ』

『す、すまん。直し方が悪かったか？』

『違うわよ莫迦。——私のドレス、穴の開いた箇所だけ厄を通さないのよ』

『——なに？』

雛は急いでドレスを着たかと思うと、そのまま私の目の前に現れる。興奮する彼女を尻目に、血の取れた絹のような緑髪を美しいと考えていた。

『一体なにをしたらこんなことになるのよ。説明しなさい』

彼女は興奮しているが、怒っている訳ではない。寧ろゴールの見えたマラソンランナーのように、希望に満ちた表情を浮かべている。

a

『心当たりがあるとするば——修繕に使った素材のせいだな。マルティーンの聖骸布、使用者が生きている限り通る魔力を遮断し、痛みと反動を防ぐ効果がある魔力殺しの力を持つ概念武装の——
贗作だ』

『魔力を？でも厄もきちんと遮断されている。どういうことなの…』

……』

雛が謎が謎を呼ぶと悩んでいる時、私は理解した。厄と言うのは魔力のことなんだと。

いや、魔力以外にもあるのかもしれないが、確実にそうであるという証拠は彼女の言葉から実証されている。

彼女は変換されていないマナやオドを色として認識できるんだ。それが本質ではないのかもしれないが、少なくともそれが可能だということとは分かった。

厄と言うのは、恐らくオドのことだ。生命エネルギーとしてなら魔術師でなくとも持っているし、何ら不自然ではない。

予想ではあるが、オドが不幸を呼び寄せていると彼女が感じている理由は、生物に平等に訪れる死への誘導を、オドを通じて世界がバランスを取ると言う理由で突発的な死として齎そうとしているからではないか。そして彼女が厄を循環させることで、その突発的な死を緩やかな、あるべき姿へと戻しているのではないだろうか。

そう考えると彼女という存在は、この世に欠かすこの出来ない、まさに神と呼ぶに相応しい行いをしているんだ。

私の誰かを救うという物理的な行動よりも、確実に平等な救い。私が望む、理想の体現。それが、目の前にいる。

『とにかく、不都合がないならよかったよ』

『不都合どころか、このドレスがその聖骸布？だったかで完全に作られていたら、循環しきれなかった厄を外に投げ出さなくて済むし、この聖骸布自体が厄を祓う力があるからかなり助けになるわ』

出遭って初めての、純粋な笑顔。

それは、まさに神の恵みと呼ぶに相応しい天然素材だった。

『——なら、今度完全な聖骸布だけのドレスを作ってやろう。とは言っても、私もやることがあるから後回しになってしまおうが』

『……………いいの？』

『それで君の笑顔が見れるならでお釣りがくるくらいだよ。——それに、もう死ぬなんて考えは頭にないだろうしな』

『あ———』

自分でも今気づいたと言わんばかりに驚いた表情をしている。あれだけ自暴自棄になっていたのだ。自分でもこの変わりように驚くのも無理はない。

『そうね、今はそんな真似はしないわ。——でも、どこかの誰かが約束をすっぱかしそうになったら、その限りではないけど』

『はは———これでは絶対に約束を守らないといけないな』

出逢いが最悪でも終わりも最悪とは限らない。

エミヤシロウは今日、救いたい者を救うという目標を、初めてある程度のカタチとして成し遂げたのだ。

悲劇の流し雛（後書き）

さて、今回は鍵山雛の紹介と、ぼくのかんがえたほうぐの初めての紹介。ほうぐに關しても独自解釈なので、ある程度の疑問はスルーでよろしく。メインで使う気はないし。

かぎやま ひな
鍵山雛

種族：厄神様

能力：厄をため込む程度有能力

二つ名：秘神流し雛

二つ名からわかるように、流し雛から神様になつたらしい。厄払いで払われた厄を自分の周りに集め、人間に戻らないようにしている。周りに厄を集めているだけなので雛自身は不幸にはならないと言われているが、この世界ではあまりにも厄が充満している^{オト}のでその限りではない。近くに居ると人間でも妖怪でも關係なく不幸な目に遭う。

厄神らしく人間が好き。

性格は原作では強氣元氣っこ。二次創作では大人し目のお姉さん。この世界觀では、萃香曰く元氣な少女と言われていたが、何故か物凄く不健康で陰鬱な雰圍氣を出している少女となっている。その理由はいずれ明かされます。

身体的特徴としては、背丈は170cm位。胸とか腰回りもライダーレベルのスレンダーさとオパイを兼ね備えたおにゃのこ。

顔は美人なのだが、目元の隈と妙に鋭い目つきがそれを霞ませている。ただ、笑顔とかは国宝もの。

せっかくだしステータスも書こう。彼女はメインで戦闘要員にはならない予定だし、先延ばしにするのもあれなので。

属性：混沌・善

筋力：E

耐久：D

敏捷：D

魔力（霊力）：A+

幸運：E-

宝具（程度の能力）：B+

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：B 通常弾幕に対し高度の抵抗力を持ち、スペルカードなど大がかりな攻撃にもある程度の耐性を得る。

陣地作成：D→B+ 厄神として有利な陣地を作り上げる技能。身体に付与されている厄を放出することで形成可能。陣地の性能は、溜め込んだ厄に依存する。

効果としては、自身の強化ではなく他者の弱体化。範囲内の敵味方問わず、幸運をC E-までランクダウンさせ一部スキルを使用不可にする。使用後は厄が空になる。

保有スキル

不幸体質：厄神故に付きまとう厄のせいで幸運がE-まで強制ランクダウンさせられる。

魔力放出：B 彼女の場合は魔力は厄を指す。元々の身体能力故肉弾戦では無意味だが、純粋な放出のみでランクB以下の耐魔力の相手のステータスをワンランクダウンさせることが可能。

神性：B+ 神霊適性の高さ。高ければ高いほど、神との交わりが

深いことをしめしている。世界が生み出した純粋な神なので本来は A + だが、周囲に展開する厄がランクダウンさせている。

宝具

厄をため込む程度の能力：B + 対人 レンジ 0 ～ 50 最大捕捉：50 人

あらゆるものに付与されている不幸の概念を自らへと収束する能力。その力は自分にとってプラスにもなればマイナスになる時もある。名義としてはため込むと書かれているが、放出も可能。効果はスキル参照。

厄を取られたものは、一時的に幸運がランクアップする。ある意味幸運の女神。

キヤスターより脆い雛。物凄いいサーヴァントとして出たら勝てないね。完全支援系。

んじゃあ最後に、ぼくのかんがえたほうぐの紹介。これもまた独自解釈ヒヤッホーなので、突っ込みいれてるとキリないぜよ。あと名前は適当だよ。

傷を負った癒し手の弓：《ヒーラー・ウーン・バウ》

ランク B 対人宝具 レンジ：1 ～ 50 最大補足：一人

ケンタウロス族の賢者であるケイローンが持つ弓。他者を射抜くことでケイローンの癒しの力を与えることが出来る。その効果は、呪いで負った傷以外を瞬時に完治させる程。

生前、不死であった彼が自分だけは癒すことが出来なかったという逸話から、この弓を一度でも使用した者は、「この弓から発生する

ヒーリング効果の対象とならない及び事前にこの弓で癒された傷は元に戻る」という呪いに掛かる。完全に他人を癒す為だけに特化した宝具である。

攻撃に転用することも可能。その場合威力は今まで癒した傷に依存するが、一度でも攻撃として使用した場合、弓はそのまま消滅し、自身に掛かった呪いは消えると同時に今まで治してきた他者の傷が復元すると言うデメリットもあり、武器としては三流品。

因みに突っ込みどころとしては、別にケイローンは弓使って人癒してたわけじゃねーだろk sってところかな。そこらへんはセイバーの風王結界みたいに元ネタはないけど後付でそれっぽくしとけばいいよ的に、深くは追及しないで欲しいかも。

可能性の片鱗（前書き）

実は今回、ワザと更新を引き延ばしました。

至極下らない理由ではありますが、個人的にはそれなりに特別なことなので……。

理由は後書きに。

可能性の片鱗

私達は来た道を引き返し、今は先程の獣の死体の場所に立っている。無言で後を付いて来た雛は、その死体を指でなぞり、呟く。

『思えばこの子達には可哀想なことをしたわね。死のうと思っていた者と生きようと思っていた者が、皮肉にも結果としては反転していたなんて、この子達からすれば不条理以外の何物でもなかったでしょう』

『……何事もままならないのが世の常なのだよ。希望や理想を強く抱いても、突発的な事故で潰えてきた人も少なくはないだろうし、今回の場合は極端であつたとはいえ、そんなサイクルの中の出来事でしかないと言えない』

『冷たい言い方ね』

『生憎死者に説教を出来るようなありがたい言葉はないのだよ。理想まで捨ててはいないが、現実から目を背けたい訳ではない。私からすれば、野生の世界からすればこんなことは日常茶飯事以上、この者達だけ特別扱いする訳にはいかない』

——理想だけでは何も救えない。

それを理解してるからこそ、救おうと心から強く望んだ相手以外は切り捨てる。

今回の場合、彼女がその対象だった。ただそれだけなんだ。

私の心ひとつで幾多の命が散っていくのは、胸が張り裂けそうなくらい辛い。

だけど、それが私の選んだ道なんだと。
だからこそ、逃げちゃいけないんだと思うんだ。

『なら私は——甘いのかしら』

『そんなことはない。寧ろ自分に対しては厳しすぎると思うがね』

『けど、こうして生きている。本気で死にたいと思っていたくせに、周りにいたこの子達が死んだだけ。自分で利用したにも関わらず、結果を出せずに、それどころか協力してくれた子達が死ぬなんて、私には納得できない』

『………なら、私を憎め。私がこの者達を殺した張本人である以上、君はそうする権利がある』

『………違う、そうじゃないのよ。私の周囲にいると皆が不幸になる、それが最悪の形で現実になっただけなのよ。アンタは、悪くない』

震える自らの身体を抱きしめる雛。表情は見えないが、背中からは哀愁がひしひしと伝わってくる。

………今の彼女は、英霊エミヤに似ている。

自分のやろうとしてしている事が空回りしている所、怒りも悲しみも自分自身にだけ向けられ最終的には自分を殺めてしまおうと結論づけてしまう所が。

彼女の自殺の原因は、周囲の人間を不幸に陥れることから逃れる為なのか？

いや、結論を急ぐのは止めよう。憶測で考えても意味はないのだから。

彼女が金輪際自殺をしないようになれば、それで解決なのだし。

でももし、暫く経つてもその感じが抜けないようなら話は別だが。

『——ん？』

雖は何かに気が付いたらしくおもむろに立ち上がる。

彼女の目線の先には、私の荷物があつた。

『ああ、それは私のだ。君のことですっかり忘れていたよ』

『ふうん』

私のだと理解したからか、遠慮なく荷物を持ち上げる。

『ちよつ………重いわよこれ』

『そうか？そう思うならもう少し鍛えた方がいいな』

重そうにしている彼女の隣に立ち、荷物を受け取り、そのまま降ろす。

余程辛かったのか、首を左右に傾けたり腕を回したりを繰り返している。

神だからといって腕力がサーヴァントクラスとは限らないんだろうが、やはり妖怪のような存在がいる世界の目線で考えると、それを当然とは考えにくかったりもする。

『んで、これはなんなの？』

『これは私の知人に厄神に厄を被ってもらえと言われた物だ。私はその為に厄神のいるこの山を歩いていたのだが——まさかそんな山の中で助けた女性が厄神とは思うまいて』

『あらそう。間が悪かったってことね』

『私からすれば間が良かったんだがね』

もう少しここに来るのが遅ければ、もし萃香が厄を被うことを提案していなければ、彼女は——そう思うと、ゾツとする。

私程度の幸運も、たまには働くということか。

『とにかく、これは私の仕事のようなね。ちょっと待ってなさい』

雛は荷物を開き、布の上にまんべんなく広げるように動かす。

邪魔をするべきではないと判断し、私は数歩後ずさり彼女の様子を眺める。

今やっていることは児童と大差ないが、彼女の目は真剣そのもの。

妥協を許さない、仕事人の目。

そんな雛の姿に見惚れている間に、彼女は何か納得した風に頷き立ち上がる。

そして、それは始まった。

演舞、というものがある。

大衆に見せる為に存在するそれは、芸術の体現と言っても差し支えないものだ。

踊る者が雰囲気を作り、自然と同調し、世界を彩る。その美しさはまさに、魔法と言ってもいい。

そんな大衆に見せるべき素晴らしき演武を、今私は独り占めしている。

なんて、贅沢な身分だろうか。

雛は今、私の前で踊っている。

見る目がない者からすれば、ただ回転しているだけに見える動きかもしれない。

しかし、彼女の踏むステップや回転する拳動ひとつひとつを眺めている内に、自然と目を逸らすことを拒んでいる自分がいることに気付く。

くると廻る。

彼女の動きに呼応するかのように風が吹き、草木が揺れる。

彼女は今、自然と一体化している。

廻る、廻る。

彼女は自分の近くにいれば不幸が訪れると嘆いていた。

ということは、誰もこの踊りを見たことがないのではないか。

何せ今やっていることは厄を一点に集める行為らしいから。そんな余計不幸を増長させる可能性のある空間に誰かを置くことは、彼女が許さないだろうから。

誰にも見られることのない、孤独の舞。

舞とは他人に見せることがその存在意義なのに、彼女にはそれが出来ないのだ。

——なんて悲壮感漂う、舞なんだろう。

間接的に誰かを幸福にしている舞ではあるが、彼女はそれを目に捉えることは叶わない。

確かに厄という形では見えるかもしれない。

だが、そこにあるのは無機質な色だけ。感謝の言葉も、喜びの笑顔も、なにもない。最悪彼女の存在を知らない者だっているだろう。それはなんて、悲しいことなんだろうと思う。

彼女に支えられているのにそれを知らずに、感謝せずに生きている

奴らがいるんだと考えると、彼女が報われなさすぎる。

——ふと、理解した。

私は彼女を、過去の自分と重ねているんだ。

似ているとかそんな曖昧なものではなく、完全な同調。

誰かの為に尽くしているのに、それが報われることはない。それどころか——さっきのような、最悪な結末を辿る可能性だってあったのだ。

客観的に自分を見て初めて理解できる、哀しい人生。

だが——まだ取り戻せる。

彼女は生きているんだ。私みたいに、戻れないところにまで墮ちてはいない。

ならば……救うのは当然じゃないか。

正義の味方としてもあるが——彼女を救うことは、私も救われることに繋がりそうだから。

永遠に不可能だと思っていた、自分自身への救いを与えるということ。

それがこんな形で実現するかもしれない。そう考えると——なんて自分は恵まれているんだと、認識させられる。

『終わったわよ。これでこの持ち物に憑いていた厄は全て消えたから安心なさい』

『ああ——ありがとう。君がいなければ私はこの先不幸を抱えて進むことになっていた、本当に感謝している』

『——』

出来る限りの笑顔で彼女の仕事ぶりに応える。

今の私にはこれぐらいしか出来ないけれど、せめて——君を知らない者達の分まで感謝を送れたらいいと、そう思っている。

『…………で、用は終わったんでしょ？ だったらここにいる意味はないわよ』

返ってきたのは刺々しい言葉。

別にいいさ。この程度で全て伝えきれるとは思っていないし、何より私自身言い足りないくらいだ。

だけど口に出し続けているだけでは、それはいずれ本当の意味を失う。

感謝の意を行動で示したりと、鸚鵡返しのように感謝を感謝で返すことで、それはより深く実りをつけ、熟した果実のような価値のあるものとなる。

そんな結果を実現するには、必然と彼女との付き合いは長いものとなるだろう。望むところではあるが。

『それもそうだな。他にもやることもあるしな』

『ならさっさと行きなさい。こんな辺鄙なところでブーツとしてんじゃないわよ』

——心なしか、さっきよりも棘が増えた気がする。

いや、気ではなく、絶対増えてる。私がなにをしたというんだ。

『——では、言われた通り退散するのでしょうかね』

『今度来るときはドレスを土産に持ってこないと門前払いするからね』

『それはそれは。これは余計に忘れる訳にはいかないな』

ドレスを愉しみにしているならば、少なくともその間は同じ過ちを繰り返すことは無い筈。

それにかこつけて先延ばしにする訳ではないが、その後の事も来る前に考えておかないといけない事だけは確実だ。

今でこそ安定はしているが、こういった鬱に近い精神の持ち主には、そんなの関係ないと言わんばかりに、どんなときでも簡単に気持ち起伏してしまう。

それこそ私の言葉ひとつで、彼女の命運を左右していると言われても決して過剰ではないのだ。

『…………じゃあね』

『ん、何か言ったかね？』

『何でもないわよ』

ボソツと誰が何か呟いた気がしたが、そっぽを向きながらそれを否定する。

漠然と聞こえたのは一言程度のものだったし、大したことではないんだろう。

『では、また会おう』

私は誰に別れの挨拶を済ませ、浄化された材料と共に森を駆けだした。

あれから更に数十分。薄れかけた記憶を頼りにとある場所へと辿り着く。

私が幻想郷に行き着いてから初めて訪れた守矢神社以外の場所。出逢いは騒然たるものだったが、とても充実していた。幻想郷と外との差異を知る先駆けとなった出逢いでもある。

そんな彼女の――河城にとりの力を、私は今借りようとしている。一度きりの邂逅ではあったが、私が持ちかける内容に彼女が食いつけばふたつ返事で協力してくれるだろう。

いや、食いつくことを確信しているからこそ、萃香に霖之助を連れてくることを深く説明せずに私は頼んだんだ。

そうして彼女の工房に到着する。

相変わらず入口はただの洞窟にしか見えないが、この地下には想像を上回る広さと設備を備えた工房が広がっている。

彼女が恐竜を作っていたのは間違いなく工房内だ。そうなるとその時に発生する振動たるや、地盤崩壊を促すことも容易いレベルだろう。それでも数日経った今でも何の変化も見られない辺り、補強の仕方や掘削する際のやり方が計算し尽されたものなんだと分かる。同時に、それだけの技術力があれば私の要望も叶えられるかもしれないという期待が高まる。

長い洞窟を手早く降りる。

最深部へと近づくに連れて壁を伝って響く機械音が、にとりの存在を確信させる。

扉を開けたら容赦なく騒音が襲い掛かってくる。鉄を切る音や孔を開ける音のせいで聴覚がおかしくなりそうだ。にとりは大丈夫なんだろうか。

より音の響く場所へと視線を向けていくと、何段にも重ねられた足場の遙か上にとりの姿を確認できた。

普通なら上るのにも一苦労するであろう場所だが、この身ならば数回の跳躍で簡単にたどり着くことが出来る。

テンポよく足場を飛び移り、颯爽とにとりの隣まで行き着くと、ようやく気配を察知したのか溶接の手を止めシールドで隠していた顔をこちらに向ける。

『おや、君はいつぞやの恩人じゃあないか』

『勝手に入って申し訳ない。インターフォンもないから直接赴く他なかった』

『別にいいよ。インターフォンはこんな作業してたら聞こえないだろうし最初からつけてないんだ。それに、幻想郷の住人にとってここにあるものの価値を知る奴は少ないから、泥棒にも入られないし』

確かに、知識の無い者がこれらの設備を見たところで目を回すだけだろう。なんとなくの知識を得ていてもそうなるだろうしな。

私は知識はあるが……識っているからこそ、盗もうとは思わない。こういうのは、個人で使うには邪魔になるものだからな。

それを個人で使いこなしているであろうにとりの凄さは、語るまでもない。

『そういえば君には名前を告げていなかったな。無礼を許して欲しい』

『そんな、いいよ。私も自分の興味に意識が向いてて気を回してなかったのもあるし』

『ありがとう。では改めて、エミヤシロウという者だ』

『んじゃあ私も。河城にとりだよ』

にとりが差し出してきた手を握り、握手をする。

二度目にして初めて名前の交換が成立するだなんて、その行為に強い執着を持っていた自分らしくないと思う。

『で、どうしたの？まさか私の顔を見に來ただけって訳じゃないでしょ』

『そうだな。単刀直入に言えば、君に協力を仰ぎに來たんだ』

『協力？』

『ああ。前回君に投影のことについて説明しただろうが、それ関係の話なんだ』

『それって、私が役に立てることなの？』

『寧ろ、君の協力なくしては基盤すら出来ないかもしれない。それだけ君の技術に精通しているということでもあり、その難易度を示していると思うてくれて構わない』

にとりが顎に手を当てて何かを考える仕草をする。

唐突に難易度の高い仕事を持ってこられても、簡単には領けないか。流石に私も自惚れが過ぎたか。

『——うん、いいよ。最近は自分のやりたいことばかりやってたし、たまには人の頼みも受けて気分を変えるのもいいかもしれない』

『ありがとう、感謝する』

『いいっていいって。でさ、その内容なんだけど詳しく教えてくれないかな』

『ああ、それは他の協力者もここに来る予定だから、その時にまとめて話す予定だったんだが、どうしたものか——』

そんなことで悩んでいると、静かになった洞窟内に鉄の軋む音が響く。

音の聞こえた方向へと振り返ると、そこにははかったかのように現れた二人の協力者が立っていた。

『やつほー、おまたっせー』

『やれやれ、インドア派の僕には山登りは堪えるよ』

萃香は愉しそうに、霖之助は腰を叩いたり足首を回したりしながら此方へと近づいてくる。

霖之助は空を飛べないのか………なんだか申し訳ないことをしたな。

『紹介するよ、協力者の森近霖之助と、伊吹萃香だ——』

二人を紹介しながら振り返ると、にとりが口をポカンと開けたまま硬直していた。

それだけでは終わらず、少し待って今度は身体を震わせながらゆっくりと萃香へと指を向ける。

『お、おおおおおお鬼の四天王！！な、なんで貴女がここに――』

――』

『んー？シロウの言った通り、今回コイツがやろうとしていることの協力者だよ。まあ、恐らく私の出番はもう無いんだろっけどね』

にへら、と可愛らしく笑うもにとりの震えは止まらない。

『何故そんなに怯えている？別に彼女は敵ではない』

『いやいやいや、だってだって』

『あー、それに関しては私が説明するよ』

動揺の収まらないにとりでは駄目だと判断したのか、手を上げて説明を買って出た。

『昔、鬼はこの山に住んでたんだ。天狗や河童よりも、遙かに位の高い扱いでね。――とは言っても、勝手に誰かがランクを作っただけなんだろっけど。今でこそ数も減り散り散りになったから関係ない筈なんだけど、未だにその弊害が残ってるらしくて、こんな対応を取られるんだよ』

『成程な……。恐れられていたということは、随分勝手をやらかしていたのではないか？』

『うーん、他種族からのその方面での干渉はそんなになかったし、大丈夫だと思ってたんだけどな』

――自分達を恐れて強く出れなかったことを自覚していないらしい。

本人としては対等に振舞っていたのかもしれないが、妖怪の様な動物をベースに派生した生き物ならば、刷り込まれた絶対的实力差の前に委縮するのは仕方ないことではある。

人間なんかよりも危機察知能力に優れているからこそ、こういった考えの行き違いが成立してしまっているのだ。

そんな弊害が今回のような出来事を産んでしまったというのなら――
――解決するには第三者の介入、それも種族間のしがらみに囚われない立場の存在が必要となる。

『にとりよ、彼女はああ言っている以上悪気はなかったんだ。そして、君達を下に見ていた訳でもないようだし、改めて仲良くしたらどうかね』

『で、でも』

『私は一向に構わんよ。酒呑み仲間が増えるのは嬉しい限りだしね』

少女達は互いに平行線の意味を体現する。

一度定着した考えや在り方を変えようとするのは至難ではある。だが、それを理由に諦めてしまえば、いつまでも良くも悪くも同じままだ。

せっかく生きているんだ、固定概念に縛られて生きるより、一時のノリでもいいから後悔しない選択をした方がよっぽどいいに決まっている。

もし、にとりが本気で彼女との付き合いを否定するようなら、私がこれ以上何かを言う権利はなくなる。

『――』

うんうん唸ったりへの字口になったりと、かなり悩んでいる様子。メリットデメリットなどの問題が答えを出させないようにしているんだろう。

今まで畏怖の対象だった相手に、打算なしでいきなり仲良くなれと言われても疑うのは仕方ない。こればかりは、彼女の答え次第で生まれた未来に掛かっている。

『……………分かった、分かりました。正直な話苦手意識が今もありますけど、鬼の貴女が言うんだ、その想いに偽りはないんでしよう。』

——なら、その清廉な在り様を肯定し、信じましょう』

『固いなあ。ま、そこらへんはおいおい直しておけばいいか』

にとりの言い回しに微妙に不満を残しながらも萃香は頷く。

これで一步前進、か。過程はどうあれ、結果が一番大事だ。ここからは、彼女達の問題だ。経過を見守っていくとしよう。

『……………で、僕は蚊帳の外かい？口は挟まないでおいていたけど、忘れられたらそれはそれで困るしね』

話の区切りに目を付けたかのように霖之助が喋り出す。どうやら筋肉疲労は治まったらしく、腕を組んで静かに立っている。

『ああ済まない、では本題に入るとしよう。——今日君達に集まってもらったのは、とある少女の持ち物の修繕を行う為なんだ。ただ、少し意匠を凝らす予定ではあるが』

『持ち物？それって誰のだい？』

『霧雨魔理沙という少女の所持している、八卦炉だ』

魔理沙の名を口にした途端、にとりが再び考える動作をする。

『——魔理沙の、八卦炉』

『知り合いなのか？』

『うん、最近出遭って最近ちょっと協力して異変を解決したんだ』

『ほう……。今回私の過失で彼女の八卦炉を破損してしまった為、彼女に承諾は得ていないが非礼を詫びると言う理由で治すことにした。因みに意匠を凝らすと言っていたが、それにはこれを使う』

目の前にひとつの槍を投影する。

黄金で出来ている訳でもないのに光を燦然と放っており、その光は槍そのものから放出されている。

誰が見てもこの槍の神秘性の強さは理解できるだろう。

『これ、は』

『そういえば二人には説明していなかったな。私の能力で、魔法とは別のカテゴリである魔術を使用して投影した、ブリューナク轟く五星という槍だ』

ブリューナク轟く五星——ケルト神話に出てくる太陽神ルーが所持していた、投擲に特化した槍。

太陽神の名の通り、その槍に籠められた力は太陽の光と同等の神秘性と威力を誇っている。

5つに分かれた穂から放たれる一撃で5人の相手を死に至らしめたと言われており、更にはこの槍そのものに意思があるとも言われて

いる、極めて異色の武器である。

『す、凄い。君にこんな力があつたなんて……。これなら武器に詳しいのも納得だよ』

『……………うん、この槍に籠められた力、はつきり言つて並大抵の妖怪じゃ消し炭になる程のものだね。正直、私でも無事じゃ済まないだろうね。そんなものを一瞬で作れるなんて——アイツばりの反則じゃないか』

二者二様の反応を見た後、そのまま言葉を続ける。

『これを八卦炉のギミックに取り入れる。これは見本として出したから関係はないが、投影の際にこの槍の原型を一度完全に崩す。そこから加熱などで鍛造をし、私が部品を作る。八卦炉の作成に関しては君らに任せようと思っている』

『てーことは、やっぱり私はいらない子かい』

明らかに自分は専門外だと理解したのか、萃香が一人こちる。

『残念だな。これ以上は何もないし、帰っても構わんのだよ』

『それはそれで除け者にされたみたいで嫌だから、最後までいる』

『そうか。——そして、この溶解から鍛造にかけてが一番の難所、というよりも未知数な所なんだ。私がこの槍に求めているのは、この凄まじいまでの神秘性だ。それが原型を失くす程の形の変化を齎した場合、きちんと神秘性が残ったままなのか、それが一番の問題なんだ』

偽・螺旋剣の場合、弓として効率のいい形に改造してはいるが、原型自体はそこまで変化してはいないので、そんな結果にはなっていない。

私の着ている聖骸布も然り、布であること自体は変化していない為、それが喻え衣服になろうとも神秘性は失われることはなかった。

だが——今回は違う。今までとは異なり、原型を完全に崩してそこから改造をするという、前代未聞の行き当たりばったりな計画を実行しようとしている。

槍としての歴史が培ってきた神秘性である以上、原型を完全に失えばただの変哲もない素材へと成り果ててしまう可能性だってある。仮に崩した状態では残っていても、また別の物になったことで消えてしまうなんてこともあり得る。

私が欲しいと思っているのは太陽神の加護であり、五つの穂が——という部分の神秘はおまけのようなものだ。付与されれば汎用性が高まるだろうが、そこまで高望みはするつもりはない。

勿論、神秘性が失われてしまえばその時点で終わり。何も始まることもなく、彼らに集まってもらったことも全部徒労に終わる。

『ふむ、そこらへんは僕は専門外だから君に任せることしか出来ないが——僅かにでも出来る可能性があるからこそ、企画したんだろっ？』

『ああ、別の形ではあるが、似たことをしたことはある』

『なら僕がとやかく言うことはないし、その点は干渉するべきではないな。——にとりちゃん、だっけ。君もそれで構わないよね？』

『え、あ、はい。私は私の仕事をするだけだし、シロウはシロウなりに頑張ればいいと思うよ。別に失敗したからって怒る気はないし、

試行錯誤を繰り返すのだって、機械製作とかではよくあることだもん」

『私はただの傍観者』

萃香はともかく、にとりと霖之助が私のやることに賛同した所で、早速やろうと思う。

ここからでは分からないが、もう夜になろうとしている時間帯と予想する。そこまで皆を付きあわせるのは流石に我儘が過ぎる。

『――トレース・オン
――投影、開始』

ブリュナク
轟く五星の完成図を頭に浮かべ、それをインゴットへと変換するよ
うにイメージする。

完全に元の形を変ええるということは、相応の世界の修正に耐えない
といけない。半ばで気絶でもしてしまうかもしれない苦痛を伴う可
能性も否めない。

だが、不思議と。自分が何もできずに終わるイメージは沸かない。
強がりなんかではなく、確信。出来るといふ、絶対的な自信。

常識に囚われない、とはこういうことなんだろうか。昔の自分は、
最強の自分をいかにこの身に投影しようとも、人間だった頃の常識
に縛られて、完全にイメージを信用することが出来なかった。

いかに最強を設計しようと、現実そのものは変わらない。

今でもセイバーと剣の打ち合いで勝てる気はしないし、そんな彼女
も最強のサーヴァントではなく最優のサーヴァント。今の自分は、
最強なんて称号からは遠い。

最強と言うのは、どんな状況でも必勝を創り上げることが出来る存
在をいうのであり、ひとつでも勝算が揺らぐ状況があれば、それは
最強ではない。

勝てる状況を作るのにだって限界がある。どんなに最善を尽くしたって、どうしようもない時はある。

——そんな諦観した思考こそ、常識に縛られているということなんだろう。

今までの私ならば、試すことはあっても心の何処かで有り得ないと自分を馬鹿にしていたに違いない。

けど今は——彼女の持つ聖剣すら投影出来そうな程に、イメージが常人のそれを逸していた。

出来る、可能だと、当然だと。一切の疑いの自分の心に持っていない。

それはまるで——子供のような、穢れの知らないココロ。

幻想を現実のものと信じ、それに向かって突っ走る。後に現実を知ろうとも、その時はまだ無垢なまま。

不思議だが、私の思考はそんな子供時代に戻ったかのようだった。

自分でも何故こうなっているのかが分からない。

なんでもこうも都合よくそんな事が起こっているのか、投影に集中しながらも混乱を隠せないでいる。

だがすぐさま冷静になり、好都合だと自分に言い聞かせる。

考えるのは後だ。今は、彼女達の期待に応えるべく、投影を完遂させなければ。

可能性の片鱗（後書き）

はい、では前書きにも書いたように、何故引き延ばしたかの理由を説明いたします。

私、花極四季ですが、4 / 17日を以て誕生日を迎え、二十歳——つまり、聖人に、じゃなかった、成人になりました。わーわーぱふぱふどんどん。

はい、くっだらねエですね。なんだなんだ、なんですかア？って感じですね。

成人したからってタバコ吹かしたいとは思っていませんし、酒にも興味なし。ぶっちゃけなつたからって特別自分に何か大きな変化が起こった訳ではありません。

でもまあ、心の何処かでおめでとうなり言ってくれたら、ニユータイプが如く通じるかもしれません。

んじゃあ気を取り直して、今回登場した武器の紹介。ランクとかは相変わらず個人的解釈だお。とはいっても、基盤はあるんですけど。

轟く五星：《ブリューナク》

ランクA + 対人宝具 レンジ1 ~ 40 最大補足：五人

ケルトの光神ルーの所持する槍。

五つに分かれた切っ先から放たれる光の槍は、同時に五人の相手へと向かい、死に至らしめる。

光の正体は太陽の光やら雷光だと説が色々浮上しているが、真実は不明。

突けば必ず相手を貫くという因果逆転の呪いを秘めており、世界の調律を乱し、因果を狂わせるそれは、高い幸運を持ってしても決して覆すことが出来ない。

こんな感じです。ランクAは高い気がします、神霊の武器であり、性能はだいたいガイ・ボルクの上位版と言っても問題ないものなのに同ランクなものも変だなと思い、こうしました。

因果逆転の呪いに関しては、史実で意思を持った槍で自動的に当たる的な事が書いていたので、採用。

神霊クラスの持つ武器故に、幸運のランク関係なく必中が約束される代わりに、必ずしも心臓にあたる訳ではないので、一概に強すぎて訳でもないかと。まあ、槍そのものの威力はガイ・ボルクより高いと公式で書かれていた気がします。

大人な子供、子供な子供（前書き）

最近思った。だいたい投稿する時、いい出来とそうでもない出来の日が交互に繰り返されていると。

でも、前回結構良かったと思いつつも、今回も後半は決して悪い感じにはならなかった。

結局、物事はそう簡単に思い通りにはいかないということだな、うん。

大人な子供、子供な子供

『そうだ、にとりの所へ行こう』

突発的に、そんなことを私は思った。

京都へ行くのと似たノリ——京都ってなんだ？——の思い立ちが、私の心機一転の本格的な動機となった。

アリスに密かな激励を貰ってから、私は当てもなく愛用の箒に跨り空を飛んでいた私は、まさに手持無沙汰だった。

自分の家に帰って魔法の研究をする気にはなれず、仕方なく空を無意味に飛んでいたら、ふとそんなことを考え付いた。

霊夢の所でも早苗の所でも地霊殿でもなく、にとりの家。ただ思いつくだけならいいが、何故彼女の所なのかが分からない。

普段彼女の所へ行くとしたら、機械を見せてもらったり、譲ってもらいとか、明確な理由がちゃんと付いてきていた。

だが今日に限っては、何故か目的も考えてないのにも関わらず、彼女の方へ行こうと思い立っている。

なんとなく、で済ませるのは簡単だけど、なんていうか——違和感を感じる。既視感とも言うべきか。

前にも一度、こんな感覚を味わったことがある。その時は気付かなかったけど、この肉体ではなく魂が吸い寄せられている気持ち悪さ、一体なんなんだろう。

その気持ち悪さから逃げようと必死に意識を逆のベクトルに変えようとすると、今度は突然の体調不良が私を襲う。

身体を委ねればそれも収まるが、訳が分からないことに変わりはない。

『——私じゃなかったら、耐えられたのかな』

自分の弱さにひとり愚痴を零す。

悩んでいても何も解決はしない。取り敢えず大人しく従わないと、ずっとこの状態が続きそうだ。

軽く溜め息を吐いてから、私は身体が気持ちよくなる感覚に身を任せ、空を駆けだす。

案の定私の気分は良くなっていく。油断すれば寝てしまいそうだ。初めて空を飛んだ時と同じ幸福感に満足していると、その感覚がぶつとりと途切れる。慌てて周囲を見渡すと、丁度真下にはにとりの工房の入り口があった。

気持ち良さが消えた途端、また疑心が膨れ上がる。

こんなピンポイントで誘われているとなると、もう違和感じゃ説明できない。

明らかに、私を誘っている。

『私の武器は………こんなものしかないな』

今の私には、八卦炉という強力な相棒がない。あるのは、自分が開発した数少ない魔法だけ。

マスタースパークだって立派な魔法ではあるが、あれは理論もへつたくれもない八卦炉で魔力を放出しただけの代物だ。制御も全部八卦炉任せだし。

裏を返せばその単純さ故に、こんな私でも火力だけは誰にも負けないうと自慢できる位高いと言うことではある。

恐らく私〃マスタースパークって定義が色んな人には染みついていると思われる。それが根付きすぎて、マスタースパークを取ったら私に何が残るのかと思われても何ら不思議ではない。

——それはどうでもいいんだが、そんな代名詞と言えるくらいに使いこなしている武器を持たずに、嫌な予感のする場所へ向かうの

は餌になりに行くようなものじゃないか。

一方通行であることがこんなにも恐怖だなんて、思いもしなかった。

『つつてもずっとここにいるなんて出来ないし………はあ』

何度目かの溜め息の後、ふと考える。知り合いの家から嫌な予感つて——にとりは大丈夫なんだろうかと。

彼女が危ないかもしれない。そう思ったとき、私は動き出していた。

友人への思いが、恐怖に打ち勝つ。誰だって我が身が一番と考えるのが普通な以上、他人の為に疎む身体を震わせるということは、並大抵の精神力では成しえないことだ。

彼女をそこまでして動かすのは、純粹な好意によるものか、はたまた打算あつてのものか。それは彼女自身も理解していない。

先程とは違った意味で息の詰まる感覚に苛まれながら、階段を降りていく。

緊張で心臓が早鐘を打つ。脂汗も徐々に滲んでいくのが分かる。今まで避けられる最大の危険だけは避けて生きてきた。脆弱な人間である私には、そうしなければ生きていけない環境だったから。逃げてばかりではいられないから、立ち向かう努力はしてきた。だからこそ、嫌な予感というのには敏感な体質になった。

最下層まで辿り着き、目の前には無骨な扉が重苦しくに待ち構えていた。

機械の駆動音がこの先から聞こえる。ということは、にとりは無事なんだろう。

そう思うと少しは緊張が取れたが、この目で確認しない限りは完全には落ち着けない。

唾を呑みこみ、取っ手に手を取る。

意を決して開けた、その先には――

『お、ようやく登場か。やつほー』

酒を豪快に呑んでいる、伊吹萃香がちょこんと座っていた。

『――』

絶句。自分の予想していた光景とは遙かに斜め上を行った平凡さがそこにあっただ、呆けるのも仕方ない。

それよりも気になったのが――彼女の隣にある盛り上がった布きれの存在。

真ん中辺りが規則的に上下していることから、誰かが寝ている者だと推測できる。

だが、私の知り合いにこんな大きな布にギリギリ収まる身長の奴など限られてくる。

『なあ、それ――』

『言いたいことは分かってる。覗いてみな』

続く言葉を静止し、見ることを促してくる。

私はそれに従い、言われた位置まで進む。

『――ッ！コ、コイツ………』

そこに居たのは――私の八卦炉を破壊した男だった。

『おい！なんでコイツがここにいるんだよ！』

『まあまあ落ち着けよ』

『五月蠅い！説明しろ！』

親の仇当然の相手が目の前にいるのだ、冷静でいられるほうがどうかしてる。

いきり立っている私を見て萃香は溜め息を吐く。

『取り敢えず座りなさい。アンタの知りたいこと答えるからさ』

『……………ああ』

叫んだせいか逆に冷静になったお蔭で、彼女の言葉にも素直に従うことができた。

あのままだったら、無駄に膠着状態を続けるだけだっただろうし。

『んじゃあ——魔理沙も何となく想像ついてると思うけど、ここにお前を引き寄せたのは、私』

『やっぱりか。何のためにそんなことを』

『——それは敢えて話さない。私と話を追っていく内に気付くだろうしね』

そう言っただけで笑う。私からすれば、今の彼女の陽気な雰囲気は、苛立ちを増長させるだけのものでしかない。自分でもかなり心の余裕がないのが分かる程だ。

『んじゃあ、さっきから聞こえるこの機械音は何だ？』

『今にとりと霖之助が、隣の個室で作業をしているんだよ』

『香霖が——？』

にとりが居るのは予想出来ていたが、何で彼もここにいるんだ？
ますます訳が分からなくなっている私を尻目に、萃香は続ける。

『まあいいや。二人のことはともかくとして、コイツだよ。何でいるんだ』

『今にとりと霖之助のしている作業の協力者だからだよ』

『協力者——？』

協力だなんて言っているが、この男は寝こけているだけにしか見えない。

『何考えてるかは分かってるよ。もう彼は仕事を終えたんだ、それこそ、気絶する位必死にやったんだ』

『気絶、だって？』

これで会うのは二度目だが、常に澄ました顔で他人と触れ合い距離を置いている風な印象を受ける彼が、そんな必死になってまで他者に協力をしたって事が信じられない。

『だいたいなんだよ気絶するまで辛い労働って。レミリアが一目置いている奴が、生半可な体力の持ち主とは思えないし』

『彼の擦り減らしたのは精神だよ。恐らく、自身に掛かる負担を脳

が限界を超える前にシャットダウンしたんだろうさ』

私も、魔法を使う時は精神力を要する。

魔法はどんなものであるかと根本が一緒だから、使おうとすればどんな属性のものだって使える。それこそ、パチュリーの魔法や、媒体さえあればアリスの魔法だって使える。

でも、それとは別物として適正が存在する。相性と言ってもいい。

私は細かい作業とかが苦手だから、パチュリーのように術式構成が念密なものや、アリスのように常に繊細な作業を強いられる魔法は向かない。

恥ずかしい話だが、私は自分の中に眠る魔力の量を頼りに——それだけはアリスやパチュリーに感心された程——、高密度の弾幕を張ることしか芸がない。一応星型の魔法も撃てるけど、それは適性の賜物だからであって、別に得意な訳ではない。

精神力を使うと言うことは、集中するということ。イメージを現実に投影する感覚で、ああいった形を形成しているのだ。

言ってしまうえば、魔法の才能と言うのは一種の妄想癖の強さでもある。どれだけ非現実的なことを思考できるかが、威力に関係してくる。

他にも妄想の強化という名目で詠唱もあるが、最近はスペルカードルールが適用されているから、見た目だけを意識するなら詠唱はいらないので使っていない。

話が逸れたが、精神力を使ったということは、彼も魔法使いなんだろうか。他にも精神を使う力はあるんだろうけど、私はそれくらいしか知らないからそう推測を立てることしか出来ない。

『……………それにしてもだ、私ですら気絶するまで魔法を行使したことはないのに、コイツは一体何をやらかしたんだ？』

『それに答える前にだ、こっちの質問にまず答えてもらつよ。魔理

沙はどうしてコイツを嫌っているんだ？』

『そうだな、こんなことが前にあつたんだが――』

私は彼と出遭った時の事の顛末を話した。

少し誇張しているかもしれないが、それぐらい憎んでいるってことだ。

話を終えた後、萃香は一言告げた。

『それ、お前が全部悪いよ』

『――』

半ば予想はしていたが、ここまでばつさり言われると反論する気も起きない。

いや、鼻屑目に見ても自分が悪い部分があるのは確かだが、人と言うのはどれだけ相手に正当性があるうとも、認めたくない、反抗しなきゃ気が済まないと思ってしまう生き物だ。

自尊心の問題ではなく、自分の中の正義に他人に干渉されるのが嫌だから。

否定されてしまえば、今の自分を見失いそうだから。

『前提条件として、紅魔館に物盗みにいって無傷で帰れるというのが間違いだよ。というか、盗みを働くな』

『……………借りてるだけだよ』

『契約というのは互いに認知していなければ成立しない。一方的なものになれば、それはただの詐欺でしかない。反感を買うのも当然』

だ
』

彼女の言葉は、罪を背負う自分に容赦なく突き刺さる。

別に幻想郷に法律なるものが存在する訳ではないけれど、モラルなどの暗黙の了解のルールは存在する。

常識に囚われないとは言うが、そういった都合の良いものだけは採用されている。それなら、プライバシーの侵害の件も採用して欲しかったが。

詐欺とかの問題以前に、自分の大切にしているものを取られれば誰だって怒る。その感情に理由は必要ない。

それはとても辛く、悲しいこと。その痛みを私は知らない訳じゃないのに、何故続けるのか。

理由は分かっている。分かっているけど——それを解決してしまえば、その瞬間私という個は死んでしまう、確実に。

他にも手段はあるのだろうけど、それを成すにはあまりにも才能も時間も足りない。

皆と肩を並べるには、喻え外道に走ろうとも、その道を突き進むしかないんだ。

『私は紅魔館のことは良く知らない。ただ、パチュリー・ノーレッジという奴が本を大切にしているのは知っている。肩を持つ訳じゃあないが、誠意を持って頼んだところで本当の意味で貸してくれるとは思えないな』

『ああ。私が産まれるより前から存在する図書館だし、蔵書の多さも異常なレベルだ。——それは同時に、種族の違い、産まれた日の違いだけでこんなにも差が出来てしまう、ということを実に表している。それって、理不尽以外の何物でもないよな』

持つ者と持たざる者。正と負のように常に対極に存在するそれは、決して崩れることのない均衡の象徴として存在している。

どんなに理不尽でも、不条理でも、その事象は覆ることはない。

差別化を図ることで個性を作るといえるのは何となく納得はできる。

でもそれは同時に、本当の意味での自由を剥奪されていることもあるんだ。

手先が器用な人間がいたとして、ソイツは一生の内その才能を開花させることなく人生を終えたとする。

そして手先は不器用だけれど、そういった類の行為にとっても執着している奴が、凡才のまま人生を終えたとする。

その二つを比較して、誰もが思うだろう。――ああ、何でこんなに世の中はままならないんだろう、と。

有り得ない、そう思う人は多いだろう。あまりにも限定的過ぎる以上、そう結論付けられても仕方ないと思う。

しかし考えてもみる、生きている奴なんて外も含めて人間だけでもどれだけいるのか分からないってのに、幻想郷には妖怪だっている。そう考えると、決して妄言や狂言で簡潔させるには惜しい気がする。

『――そうだな。それとは直接は関係ないけど、そういった意味では私が人間として生きていた？可能性？だってあったのかもしれない。そしてそんな自分は、弱い自分に辟易し、強い？可能性？の自分を崇拜していた、なんてこともあったんじゃないかな』

『強い自分、か――』

不思議と、そんなことを私は考えたことはなかった。

想像するのは、常に現存し肌で理解した強さだけ。妄想であろうと、最強の自分を描いたことだけはなかった。

我武者羅にただ強くなりたい、そんな漠然とした気持ちだけを持って、進んできた。

目的は確かにある。強くなりたい、という漫然としたものが。だけど所詮、それは他人ありきの願望。無自覚に他人に動かされているのと何ら変わらない。

そして、ふと思う。

私は、自分から本気で何かをやりたいと思ったことなんて、一度だろうとあったのだろうか。

『……………どうした、ぼうつとして』

『ん？ああ、悪い。話を続けよう』

まるで鐘に頭を突っ込んだ状態で、そのまま鳴らされたような衝撃が脳内に走っていたせいで、暫く意識がトンでいたらしい。

私は慌てて話を元の路線に戻し、意識を切り替える。

『お前の言いたいことだって分かるよ。本当に欲しくなるというものは、それだけ魅力があるということ。当然そんな素晴らしいものなら、必然的に他の誰かだって惹かれてるだろう。その場合お前の言った通り、出生のタイミングがアドバンテージとなってしまう。———けどな、それを言い訳にしても、正当性が生まれることはないぞ。だって、そんな？可能性？は誰にだって起こり得ることだから。自分だけ特別だと、自分だけが不幸なんだと勘違いすんなよ』

『———特別じゃないから、平等だから、抗うことすら赦されないというのか！—』

『そうじゃない、脆すぎるんだ。世界に抗うには、お前も私も、脆すぎるんだよ』

何故か悔しそうに下唇を噛み、膝上で拳を強く握る萃香。

彼女もまた、世界に抗い、挫折した一人なのだろうか。そうだとすれば、いち人間では確かに不可能なんだろう。

『——まあそれはいいんだ、話を根本に戻そう。お前は紅魔館に盗みを働いた結果、代償として八卦炉が破壊された。何かを求めるということは、相応に何かを失うかもしれないことだ。今までの行いの罰だと思うのもいいが、お前が求めようとしているのは、幻想郷では決して少なくない個人の未来のひとつだ。試練と言ってもいい』

『試練——』

『人間と言うのは寿命が短い。お前はあくまで人間の魔法使いとして生を全うしようとしているんだろう？ならば、それは己が望んだ枷だということだ。そして、そのハンデを背負うということは、紅魔館に盗みを働くという選択をするということも已む無しなのかもしれない』

だがな、と萃香は言葉を強めながら続ける。

『それならば覚悟を決めることだ。お前が望む未来には、苦難に満ち溢れている。それでも進むというなら、今回みたくうじうじしたり、その過程で起こった出来事に対し文句を口にするな。それは、お前が背負うものであり、他人に秤を持たせるべきことじゃあない。都合の悪いときだけ他人のせいにならず、全部がさも当然のことだと』

受け入れるんだ。そうじゃないと——お前はいつか壊れてしまうぞ』

『——』

肉体から力が抜ける。

言い包められた感じと、そう思うのに納得してしまった感じが同時に訪れたせいかな、何も言葉に出来ない。電流が走る、とはこういうことを言うんだろう。

自分の心の在り方を否定されたのに、何故かこんなにも心地いい。

何故か、だって？自分でも理解している癖に、白々しい。

——そうだ、私は常に他人のせいにしてきた。

弱い自分のせいだと現実を直視しようとせず、難癖つけてでも誰かが悪いとしてきた。

私は——醜く、愚かなそんな自分が大嫌いだった。そうしないと我を保っていけない自分が。

だけど、納得させられた。また他人ありきの結果だったけど、それでもいいと思っっている。

今はまだ未熟だから、いつか本当の意味で独り立ちできるまで、皆を頼ることにする。

その過程で何が起ころうとも、私は逃げたりしない。こんな私の背中を押してくれた人たちの思いを、無駄にしたいくないから。

『ありがとう、ありがとう萃香』

少しだけ涙目になっているのを隠す為、俯いて感謝を告げる。

そうしていると、頭に優しく何かが降り立つ。そしてそのままそれは、ゆっくりと私を撫でる。

萃香の手。確信に近いそれに気付いた途端、顔が熱くなってくる。

姿はこんなにも幼いのに、まるでお母さんに包まれている感覚。こ
んなの、本当の母親と■■■■以来だ。

『——よし、固い話はここまでだ。こっからは、私の推測話だけ
ど、聞ukai?』

頭から離れる温もりに後ろ髪を引かれつつも、萃香の誘いに静かに
頷く。

何となくだが、私はこの先彼女に逆らえないんじゃないかと思う。
身体ではなく、心が抵抗を拒みそう。

明確に理由づけは出来ないけど、そんな気がしてならないんだ。

『うん、聞く』

だからだろう。普段の飾った言葉づかいをせず、素の自分の言葉が
自然と漏れていたのは。

『んじゃあ始めるけど——推測ってのは、魔理沙の語った内容と、
そこで寝こけているコイツの性格から符号させたものなんだけど』

『性格から符号って………やっぱり彼とは知り合いなの?』

『ああ。魔理沙からすればあんまりいい気はしないかもしれないけ
ど、コイツとは友情の誓いを今日した仲なんだ』

『………そう、なんだ』

自分の中の出来事は完結したとはいえ、まだ彼を許した訳ではない。
八卦炉が壊れたという事実ばかりは、嘘ではないのだから。

『取り敢えず黙って聞いていてくれ。確か、魔理沙とコイツは一对一の戦いをしたんだよね。んで、その切っ掛けを切り出したのは誰だっけ？』

『彼、だよ』

『自分の実力を示す為、という名目でだよ。大きく出たもんだよね、失敗すれば雇用問題だけではなく紅魔館を敵に回す可能性だってあった選択だ。私は彼の人と成りがある程度理解しているが、そんな無謀な行動を起こすようには思えないんだな、これが』

『そうなの？』

『悪評しかない魔理沙には想像つかないかもしれないけどね。——
——そしてここからが推測になるんだけど、私思うんだ。彼の行動の理由、それは魔理沙の為なんじゃないかってね』

『——私の？』

どうしてそう解釈出来るんだろう。アリスも似たようなことを言っていたし。

でも、その時のような解釈では、私だって満足しないつもりだけど。

『ひとつは、一対一になることで被害を最小限に抑える為。まあ、そんな理由なら魔理沙も予測済みだろうけど』

『うん。とはいっても、友達の助言だけだね』

『ふうん。じゃあ他にも色々言ってるだろうし、私が気になってい
る部分を聞くよ。コイツは魔理沙に対して傷を負わせたかい？八卦

炉を壊したのは、彼が直接破壊したからかい？」

『それ、は』

あの時、私は高い所から尻餅をついただけで、直接的な怪我は自ら望んでつけた手の平の傷だけだ。

八卦炉に関しても、あれは私が手を放したに過ぎない。確かに目の前で何かが爆発はしたが、問答無用で破壊する気なら、右手を持つていく位はされていたと思う。それがどうして爆発で留まったのかは知らないけど、私も解釈してみるとするなら、あくまで攻撃する意思を削がせるという意味の爆発だったのかもしれない。

それでも壊れる過程に関わっていないといえは嘘になる。だけど、手を放したのは私だ。別に無理矢理こじ開けられた訳ではない。

それに——あの状況下で五体満足であそこから出られた時点で奇跡なのだ。あれもこれもとがめつくのは、お門違いだ。

『——恨むのは筋違い、感謝しろってこと？』

『なんか自己完結してるけど、それは魔理沙次第だね。私はあくまで推測してるだけだからね』

『…………意地悪』

プウ、と頬を膨らませて抗議する。絶対分かってるくせに。

『因みに、だ。そんなコイツだけど、八卦炉が壊れたことに関して酷く後悔していたよ。お人好しだからね、背負うべきでない罪すら背負う。そんな不器用な奴なんだ』

静かに眠る青年の顔を見る。

そうか……私は知らずに彼を苦しめていたんだ。自分の都合だけにしか目をくれず、大局的に物事を見ようとしなかった結果がこれ。アリスにも多角的に物事を考える練習をしろと言われる理由が分かる。

『今日ここにいるのだって、八卦炉が関係してるんだよ。結局ネタ晴らししちゃうとね』

『——へ？』

『さつきから聞こえる機械音と霖之助にとりの存在。これでなんとなくは分かるしょ？』

話に集中していて忘れていたけど、確かに五月蠅く今も響いているそれは、萃香の言葉を紐解くと自然と答えを導いてくれる。

『じゃあ、あそこでは』

『八卦炉を必死に作ってるんだな、これが』

自分の愚かさに肩をがっくりと落とす。眠る彼だけではなく、にと霖之助にすら迷惑をかけていたなんて……。

二人はこんな不幸しか生み出さない奴のことを、どう思っているんだろう。迷惑な奴だなんてのは当然として、豚を見るような目で見られた日には生きていけない。

『——なにに混乱しているのか知らないけど、落ち着け』

頭を抱えている私に軽くチョップを入れる。

その一発で冷静になると、次はそんな奇怪な行動を取った自分に対

して羞恥心を覚える。

再び転げまわりそうになるが、二度目は怒られると思ったので必死に深呼吸して、落ち着きを取り戻す。

『オーケー、続けるよ。今はにとりと霖之助が作業しているんだけど、一番の貢献者はコイツだよ。まあ、貢献するかどうかは完成次第なんだけど』

『……………何をしたの？』

『俄かには信じられないかもしれないけど、彼は創造したのさ。魔理沙にぴったりの力をね』

『———？』

抽象的過ぎる回答に首を傾げる。

また意地悪か———そう思った時、大きな音と共に奥のドアが開かれた。

『かーんせーい！！でーきたーよー！！……………てありや、魔理沙いつの間に』

『本当だな。まさか君がここに来るとは、何たる因果か』

大きな声と共ににとりが、いつも通り澄ました表情で霖之助が出てくる。

私はその姿に手を振ることで答えた。

『丁度いいや、こっち来なよ！八卦炉が完成したんだ』

『ほ、本当か？』

『勿論さ。我ながらかつてない程の最高傑作になったと思うよ』

『僕も手伝ったがね』

魔理沙は嬉しそうに立ち上がり、二人に導かれるまま奥の部屋へと消えて行った。

萃香はその背を無言で見送る。そして見えなくなった途端、後ろ手で身体を支える体勢になり、呆れるように呟く。

『覗き見は下種のやることを黙認するつもりはないし、覗かれるのも嫌いなんだ。——出てきなよ、紫』

言い終えた瞬間、彼女の眼前に波割れたように空間が裂け始める。音も無く開かれる異界への門。虚と実が曖昧な現実と乖離した世界。そこから現れる奴は、決まっている。

『——善を肯定し、悪を許さない。嘘を否定し、正しいことを是とする。その定義は誰が決めたものなのかも分からないのに、あたかもその定義が全てだと盲信する。所詮、正否なんてものは霞よりも曖昧なカタチでしかないのに』

人を苛つかせる語りと不敵な笑みと共に、ゆっくりとそれは姿を現す。

八雲紫。コイツは、気持ち悪いとしかいえない存在だ。それを説明できないことも、その気持ち悪さの理由のひとつでもある。

あまりにも掴みどころが無さ過ぎて、同じ生物の筈なのに、まるでそれよりも上位の存在——それこそ言語なんかでは表現できないような——にすら感じてしまう。

『……………何の用だ。私の説教を晒いに来たのか？』

『そんなつもりじゃないわ。確かにらしくないとは思っただけだね。……………何せ、彼女の影を祓うのは彼の役目だと踏んでいた訳だし』

『ふん——』

そんなの、自分でも分かっている。こんな小さなナリで大人びたことを語っているのだ、ミスマツチなのは誰が見ても思うだろう。だからと言って、やるなと言われている訳でもない。私は私の信念に従って行動したまでだ。

『貴方を観察していたんじゃないわ。私は彼を見ていたのよ』

『エミヤシロウを、か。……………成程、全てはお前のシナリオ通りということか』

『シナリオ？何の事かしら』

『とぼけるなよ女狐。——最初から何か引つかかっていたんだ。ただの人間が、天界に来れる訳がない。ただの、ではないとしても空を飛べないコイツが天界に来るには、長らく封じられていた道を辿るしかない。しかもそれは、天界からでしか解放することが出来ない。天子や衣玖とも会って間もない風だったし、その程度の間柄の為に解放出来る程安いもんじゃない。つまり、第三者の介入があつてこそ、彼が天界に入れるということだ。それも、権力など当てにならないレベルの実力の持ち主の、な』

『貴女を騙していた、なんて選択肢はないのかしら？』

『はっ——身近にこんな訳の分からない奴がいるんだ。それで培われた感性が告げてるんだよ、コイツはシロだな』

『…………ふうん』

どこか満足したように口元を扇子で隠しながら紫は笑う。見えないけれど、コイツは確実に何かの意図を以てして笑みを浮かべている。そうじゃなきゃ、隠す必要性がないからだ。

この解釈の結末も、コイツのプランの内なんだろう。気に食わないつたらありやしない。

『今回、シロウの能力を見てはつきりした。コイツの力は異常だ。それこそお前と似た、世界に喧嘩を売っているとしか思えない異端の能力を、平然とまでは言わずとも使いこなしている。答える、お前はエミヤシロウを——この力を使い、何をする気だ』

『——私は常に幻想郷の為にしか行動してないわ。彼を使うのは正しいけど、決して貴女が思ってるような方向には行かないわ』

『…………お前の唯一信用できるのは、その幻想郷への愛ぐらいだな』

納得は出来ないが、目を見れば嘘を吐いていないのは分かる。それは信用していい。

だが、その本心がエミヤシロウの利用に直結しているかはまた別だ。これは、私が目を光らせていないといけないようだ。彼がこの女の悪道に導かれないように。

それが、友人としての務めだろうから。

『んじゃ、バイバイ』

『待て！お前は結局何をしに――』

静止の言葉は紫の耳には暖簾に腕押し。そのまま何事もなかったかのように空間は元に戻り、彼女の姿は消え去った。

私とシロウだけになった空間で、盛大に溜め息を吐いた。

アイツとは会話しているだけで疲れる。多分一日中叫ぶのとさっきの数分の会話の疲労は相当するに違いない。

……ていうか、コイツはこんなに騒いでも起きる気配がないとか、どれだけぐっすりなんだか。

『――さて、私も完成品を拝みにいきますかね』

私はシロウに掛かっていた布を整え、それから魔理沙達のいる部屋へと向かった。

大人な子供、子供な子供（後書き）

伊吹萃香というキャラは、書いてて物凄く動かしやすいです。

ギャグでは酔った雰囲気で、シリアスでは萃夢想のラスボスのカリスマ（本編ではそんな雰囲気なかったけどね）を用いることで極端に二分化することが出来ます。

紫やレミリアといったキャラは、私の中ではシリアス方面の色が強いです。レミリアの場合崩壊ネタはありますが、あまりにも極端すぎてこの世界観には合いませんし。

なんとなく分かったとは思いますが、エミヤシロウsideにおいて伊吹萃香は中心人物となります。守矢家がその立場に来るのは、完全な再会を果たしてからになります。

そして、彼のsideがあるということは、勿論早苗sideの中心人物もいます。今はまだその芽を出してはいませんが、接触は果たしています。

誰だろう、と妄想するのも楽しいかもしれませんね。

絶望をこの手に（前書き）

世の中には色々な性癖の人がいるなー、と最近実感。

色々な友人がロリ、シヨタ、眼鏡、メイド、グロ、サド、マゾ、年上とか個性的な性癖を持ってて、やっぱり同じ穴の貉だなーとか思ったりする。

作者はドMでロリシヨタ（女装が似合う系）メイド年上ニーソ靴下あんよ厨二病等が好物です。

絶望をこの手に

私は今、にとりと霖之助が作業をしていた部屋にいる。

さっきの話を聞いていた限り、二人は八卦炉を作っていたらしい。

それは分かった。

だけど、一体これは何なんだ。

『なんて、魔力の奔流——』

部屋に入った瞬間から理解出来る程の、途轍もない量の魔力の波が私を覆い尽くす。

それは一点から集中しており、魔力の起点となるものを特定するのは容易かった。

『これが、私達三人の努力の結晶——新生・八卦炉。ぶっちゃけネーミングに関しては思いつかなかったただけだから』

『正確には、カッコつけようとして陳腐なものになったから、僕が却下したんだ』

『これが、私の——』

ゆっくりとした足取りで八卦炉に近づき、恐る恐る手に取る。

温かい。物質を通して得られる熱ではなく、まるでこれの周囲に常時熱気が展開されているみたい。

それになんだか、これを持っているだけで何かに護られているような、そんな気分にさせられる。

『私も詳しいことは分かっていないんだけど、取り敢えず従来の八

卦炉と外部の素材は同じにして、内部にとある物質を組み込んだの』

『物質？』

『うん。魔理沙なら本読むし知ってるかもしれないけど、太陽神ルーが使っていたブリューナクって槍。それをインゴットという形で再構成させたものなんだ』

太陽神ルー、見たことある気はするが、正直覚えていない。ただ、そのルーという奴はとんでもなかったんだらう。この八卦炉がそれを物語っている。

『だけど、そんな凄そうなモノどうやって』

言って、気付く。

先程三人で作ったと言っていたのに、ここには私を除いて二人しかいなかった。

そして、先程萃香が私にぴったりの力を創造したと言っていた。それはつまり――

『あの人が、その素材を』

『うん。正直驚いたよ、何せ現物を一度見ているから、それがあんな小さな物質になるとは思わなかったしね』

『それに、彼がそれを作った直後に倒れたこともな』

それが、彼の現状。彼がここにいる理由。

恐ろしいまでの魔力を放つ八卦炉。それを十割構成するであろう物質を創造したとなれば、倒れるのも納得いく。

それに、図書館でのあの出来事も納得がいく。盾や槍がどこから出てきたのかと思えば、その場で作っていたんだ。

『あ、因みにこの力強い気迫のようなものは、ワザと放出してるだけだから。側面を見てみな、縦横ひとつずつ、計四個の穴があるんだけど、これを開閉することで抑えることが出来たり解放出来たりするんだ。閉じていれば暖炉程度の使い方も出来るし、開いてマスタースパークを撃てば——最悪射線の跡からは暫く草木は生えないんじゃないかな』

『なっ——』

驚いてはいるが、内心どこかで予想はしていたのだろう。そんな恐ろしい可能性を宣言されても、ここまで冷静でいられる。

確かに力は欲しい。けど、これは余りにも手に余る。自分ひとりの力で何かを変革出来るなんて驕りはない。だけど、人どころか妖怪すら簡単に■せてしまう力が、目の前にある。それだけで、身体の震えが止まらない。

『……………どうしたんだい？いつもの魔理沙なら喜んで飛びつくと思っただのに』

にとりは首を傾げ当然の疑問を口にする。

先程の萃香との会話で間もないせいか、未だ普段の自分に戻れていない。

臆病な本性が、この存在を危険だと警告している。私風情が持っていてよい代物ではない、と。

『——怖いかな？』

突然の背後に身をすくませる。そして振り返ると、そこには萃香が扉によっかかる体勢で静かな笑みを浮かべていた。

『そんな、こと』

『懼れるなどは言わない。寧ろ、その膨大なる力を目の前にして我を失わないことを誇りに思うんだ。我欲に憑かれた者の末路は破滅のみだが、お前は違う。お前ならその力の本質を理解し、道を踏み外すなんてことはしないさ。鬼の私が保証する』

『……………買いかぶりすぎだよ』

『私はね、不利益になる嘘がすごく嫌いなんだ。——それに、何の意味も持たない嘘もね』

萃香は私がこの力を手にすることで、絶対に不利益な末路を辿らないと言うのか。

——どうして。どうしてそこまで信頼できるの？

訳が分からない。理解が及ばない。常軌を逸している。

鬼はヒトに失望したから、姿を消したと聞いている。そんな種族のひとり、そのヒトを信頼している。

どこかで心変わりでも起こったのか。いや、そんな簡単に変わるくらいなら、集団で消えるなんて結果にはなっていない。

一人や二人の話じゃないのだ。少なくとも、種族と称せるぐらいの数はいたのだろう。集団心理の可能性を考慮しても、それはあまりにも過剰だ。

種族全体の心が合致する程に、ヒトは愚行を繰り返してきた。過去に互いの絆が逸話として語られた時代から生きている者からすれば、裏切られたという気持ちで一杯の筈。

それなのに、まだ私を——ヒトを信ずるというのか。

『………… お前が考えていることは想像つくよ。だけどね、それはお前が気にすることじゃあない。何せ私は鬼の中でも異端だしね、考え方が他の鬼とはズレてるんだよ』

だから、私は信じているよ。そう笑って答えた。

………… 彼女がそう言うのなら、私は何も言わない。納得するしないに関わらず、彼女は答えを覆したりはしないのだから。

『だけど、それを強制はしない。でもな、アイツ——エミヤシロウも、お前が外道に走らないと確信していたからこそ、この力を与えたに違いないさ。そうでもなきゃ、無理をしてこんなカスタムをする必要性なんてないんだから』

『魔理沙。君が何を迷っているのかは知らないが、迷っているということは心が揺らいでいるということだ。揺らぐということは、その八卦炉持つメリットだけでなく、デメリットのこともキチンと理解した上での迷いなのだろう？ 何も考えずに未知の力を振るうならば、彼女の言うとおり破滅が待ち受けているだろうが——魔理沙なら大丈夫だ。幼馴染の僕の言うことは、証明できないかな？』

『——皆が何を言ってるのかよくわかんないけど、魔理沙が危ない目に会ったり、危ない事をしようとするなら、私が止めたり助けてあげるよ。八卦炉の設計者は私だしね、もしもの時の対策は元より作る予定だったから、手間とか苦労とかは気にする必要ないよ』

皆の励ましが、私の中の恐怖心を和らげてくれる。

心の中で罵倒しているのでは、なんて考えた自分が莫迦だった。

私はこんなにも愛されているというのに。それに気付かず、ネガティブな事ばかり考えて、そしてそれこそ皆に失礼なんだと言うこと

にも——本当、どうしようもない。

『——ありがとう、皆』

反省は後だ。今は皆に幾ら言っても足りない感謝を伝えることが最善だ。

言葉とは便利だと思うが、誠意を表現するにはあまりにも当たり前になり過ぎた。

ありがとう、ごめんなさい。感謝や謝罪の意味が籠ってるとはいえ、それらはあくまで表面上でのものでしかない場合だつてある。口ではそう言つてても、腹の底では気持ち悪い笑みを浮かべているなんてざらだ。

だつたらどうするか？単純な話、行動で示せばいい。

皆が困っている時には手を差し伸べたりして、感謝を形にする。そうすれば相手も嬉しいだろうし、私も伝えられたと納得できる。

だけど、それを口にはしない。言葉にしてしまえば、強い決心も陳腐なものになってしまいそうだから。

と言つのも理由のひとつだけど、一番の理由は感謝を伝える相手にある。

何せ相手は普段から悪名が絶えない私に対し、無償で助けを与えるようなお人好しだ。私が恩返しをしようと云つてしまえば、間違いなく断られる。

それならばいつそ、細々とでもいいから彼女達に気付かれない様に支援をしていけばいい。

当然、とまでは言わないけど、その対象にはあの男——エミヤシロウも含まれている。

彼はこの事態を引き起こした張本人でもあり、一番の功労者だ。わだかまりもそれなりに解消できた今なら、助けてあげることゝ吝かではない。

——なんて上から目線になる権利はないんだけどね。私から言っ
た訳じゃないけど、助けられたことに変わりはないんだし、それに
……嬉しかったし。

『取り敢えず、今日はお開きにしないか？ここからでは分からない
が、確実に夜になっているだろうしな。僕も疲れたから、とつと
帰りたいのが本音だけど』

『そうだね。私も片付けとかしないといけないし』

という提案が出たので、私達は逐次解散することになった。

取り敢えず、家に帰ったらこれの使い方を勉強しよう。皆の期待を
裏切らない為にも、暫くは徹夜をしても覚えないと。

そういえば先に帰ったから分かんないけど、萃香が未だ寝ているエ
ミヤシロウを見て、コイツどうしよう……とか言ってたけど、結
局どうしたんだろう。

目を開けると、そこは真っ白な世界だけ。いや、正確には靄がかか
っているだけと言っべきか。

私は、どうしてここにいるんだろう。これ以前の記憶がまるで思い
出せない。

私の疑問を余所に、少しずつ靄が晴れていく。ゆつくりと視線の先
にある十二かの輪郭が露わになっていくのを、ただ見守る。

そして、完全に視界が晴れた時——私は驚きを隠せなくなった。

『シロウ——さん』

西洋のお城らしき場所の二階越しの吹き抜けの一階に、シロウさんと見たことも無い化け物と、小さな女の子がいた。

まるで化け物は後ろにいる少女を護るようにシロウさんに立ちはだかり、二人は敵意を持った目で睨み合いをしている。そんな彼の背後には、逃げ道はないと言わんばかりに入り口を塞ぐ無数の瓦礫のみ。化け物とは違い、彼の守るべき者は存在しない。

—— なんとなくだが、これが彼の話していた聖杯戦争なんじゃないかと推測する。いや、何故かそうだと確信を持って言える。

サーヴァント同士でのコロシアい。マスターを勝利に導く為だけに、二人は対峙している。逆に言えば、そんなマスターの都合で召喚され、消えゆく程度の存在価値しかないと言われているようで、腹立たしかった。

良く言えば召使い、悪く言えば奴隷同然の扱いを、過去に英雄と呼ばれた存在にしている。なんて、浅ましい。

自分達はそんなに偉いのか？ 良くも悪くも英雄と呼ばれ、世界を揺るがした存在に対して生き死にを強制出来る程、偉いというのか。

—— 私だったら、生死を共に迎える覚悟で召喚する。召喚したからと言って偉ぶるなんて以ての外、畏まるのが当然な態度で臨む。自分の運命を託す相手なのだ、それ位しても感謝を伝え足りない。

脱線したが、もしこの推測が正しいとすれば、これが起こっているのは幻想郷の中ではなく、間違いなく外での出来事となる。

あんな化け物をあんな少女が従えている—— 幻想郷ならまだ不自然ではない光景だが、外となれば異常だ。

周囲を見渡した限り、シロウさんのマスターらしき相手はどこにも見当たらない。どういう経緯でこんな状況が出来上がったのかは知らないけど…… シロウさんの背中から、強い意志と同時に僅かな哀愁を感じられる。

…… もしかしてマスターがいないのは、この場にシロウさんだけ

残して逃げたなんてことなのではないか。

ギリ、と全力で歯を噛み締める。もしそうだとすれば、何様なんだと思う。道具当然の扱いをし、最後は自分の名誉や命の為に簡単に切り捨てる。

こんな化け物を相手にするのだ。勝てたとしてもただでは済まないのは目に見えてる。

そんな状況に置かれた彼は、何の後悔もなくこの場にいられているのだろうか――

状況を確認している内に、突如として戦いは始まった。

化け物が咆哮と共に、手に持つ鉄塊らしきものを軽々とシロウさんへと振り下ろす。それを躲し、再び化け物の追撃が迫る。その繰り返しは何度もあった。

回避には成功しているが、鉄塊を振りぬいた衝撃が、シロウさんを消耗させていく。

私は彼の名を叫ぶ。しかし、それは届くことは無い。

夢の招待チケットを持たない私には、この世界に介入する権利はない。

そして、シロウさんの手にもCGの制作過程を見るような過程で、二対の剣が現れる。

彼もそれで応戦しようとするが、化け物の圧倒的な猛攻がそれを許さず、攻撃の軌道を逸らす役割しか果たせないでいた。

化け物の一撃に耐えきれなくなったのか、双剣は弾き飛ばされ地面へと突き刺さる。

危ない、そう喉が裂けるくらいに叫んだ私が見た次の光景は、予想だにしないものだった。

弾き飛ばされ、突き刺さっている剣と全く同種のそれが、彼の手元に再びあったことだ。

これには化け物のマスターである少女も驚きを隠せないでいた。と

いうことは、これは聖杯戦争のような異端な世界での出来事で、それ以上の異端だったと言うことなのだろう。

初めて見る、彼の能力。本質は掴めないが、これならいけるんじゃないか――

しかし、そんな願いは届かない。

何度弾かれても再び出現する双剣は、確かに恐れの対象かもしれない。

でも、相手がそんなアドバンテージを凌駕する存在なら……彼の行動は化け物にとって向かい風が吹いた程度の阻害感しかない。

単純な身体の大きさもさることながら、シロウさんがあれをまともに喰らえば即死、対する相手は数度双剣で切られた程度じゃモノともしなさそうな雰囲気がある。

状況は絶望的。逆転のチャンスも考え付かない私は、ただ心にある明確な苦しさに耐えながら、見守ることしか出来なかった。

そうして、化け物の一刀がシロウさんを襲う。

躲しきれないと判断したのか、双剣で受けるが、当然と言わんばかりの勢いで壁まで吹っ飛ばし、壁を砕く。

苦悶の声を上げる彼の頭部からは血が流れ、服も顔もボロボロ。

そんな彼を見下すように、彼の宝具――あの剣のことだろう――を莫迦にする。

私がこの場にいたら、确实それに耐えかねず少女を引っぱたきに行く。こんなに憎たらしい子供は初めてだ。

だが、当の本人は余裕のある笑みで化け物を賛辞する。私には、彼の考えてることが理解できないでいた。

死の一步手前にいるのに、どうしてそうしていられるの？どんな人生を歩めば、そんな達観した在り方が出来るんだろう。

次の瞬間、シロウさんは2階部分の手すりに飛び退く。

それを追撃せんと化け物はその巨軀をもともしない跳躍で眼前に迫る。

『—— I am the bone of my sword』

謎の英文を静かに呟く。

言い終えた瞬間、シロウさんの手に再び何かが握られる。

それは、真つ黒な弓と、巨大で螺旋を描く鏃の付いた、剣のようにも見える矢。それを番え、冷静に化け物に向かって構える。

『—— カラドボルグ
偽・螺旋剣！』

叫びと共に指から離れる矢は、化け物の心臓を捉え、そのまま爆発。その威力は城の城壁を貫き、天をも染める光の渦を創り上げる。あまりの眩しさに閃光から目を逸らすも、あれだけの一撃を与えたのだ、あの化け物とお終いだと、そう確信していた。

煙と閃光が徐々に止んでいき、化け物の姿を確認する為に辺りを見渡す。

——あの少女以外、そこには誰もいない。何処へ行ったのかと思いい、天井に空いた穴を見る。

月光を城内に差し込むそれに気付くと、まるで映画のシーンが変わっていくように、私の身体も勝手にその穴へと吸い込まれていく。

外へ誘導された私が見たのは、今まさにテラスからジャンプしてきたであろう化け物の巨軀が私に向かってきていた。

避けれない、と思っていたらまるで分り切っていたかのように身体が後ろに引つ張られ、化け物はそのまま穴に嵌る。それよりもあの爆発を喰らって無傷だなんて、やっぱり相手は真正銘の化け物だ。横目に見えるのは、先程よりも傷ついたシロウさんの姿。その表情

からは余裕が消えている。

『——Steel is my body, and fire
is my blood』

腕を交叉して再び白黒の双剣が手に生まれる。

それをそのまま腕を天へ振り抜き、二つの剣は空を踊る。

弧を描いて化け物の近くに突き刺さる剣。それに続き、再び英文を
呟く。

『——I have created over a thou
sand blades』

同じ要領で生まれた全く同じ双剣を再び空へと放ち、それに呼応す
るように先陣を切った剣も、空に還る。

化け物の周囲を踊るように回転したまま突撃し、再び大きな爆発が
襲う。防御の体勢も取れないあの状況では、流石にダメージは通つ
た筈。

『Unknown to Death. Nor known to
Life』

化け物に向かって疾走し、何度目か分からない双剣の創造が行われ
る。

『——心技^{ちから}、泰山^{やまをぬき}二至り……心技^{こころわざ} 黄河^{みずをわかつ}ヲ渡ル!!』

だが、それは誤りだった。剣は徐々にカタチを変え、まるで巨大な
一枚の羽根を思わせる姿へと変貌する。

そしてそのまま彼は跳躍する。月光を背負い、羽根を構えるその姿

は、まるで天使と悪魔が混ざったような存在が降臨したかのような
——そんな幻想的な光景を連想させた。

飛んだ勢いをそのままに、重力に身を任せ化け物へと剣を全力で一撃を叩き込む。そしてそのまま、追撃と言わんばかりに爆発が起くる。

流石の化け物からも耳を破壊するような雄叫びが上がる。今度こそ――倒れて。そう願わずにはいられない。

膝について左腕を抑えるシロウさん。あんな奴に全力で切りかかったのだ、腕が折れていたところで何ら不思議ではない。

でも、これだけやれば———そんな思いは簡単に瓦解する。

化け物を包む炎の渦からは、未だ健在のその姿がある。
炎は火の粉となりて散る。まるで自然すら、この規格外の存在を畏れているかのように。

そこからは、一方的な暴力が待ち構えていた。最早ともに動かない相手に何の躊躇いもなく襲い掛かる化け物。どんなに助けを懇願しようとも、届かない。仮にこの場に立ち会っていたところで、耳に入るとも思えない。

— 22 —

シロウさんが再び城の中へと落下していくのが、スローモーションで流れていく。

とうとう耐えきれなくなつた私は、両手両膝を地面に付け、涙を流す。

彼は どうしてここまで傷つかなきゃいけないの？ そこまでして何で

マスターに従うの？

それがルールだから？制約に縛られてるから？

——巫山戯るな。何の権利があつて、こんな運命を遺したんだ。

他人を犠牲にしてまで、何を成し遂げたいんだ。そんなに自分のやつていることは崇高だとも言つのか。

他人を犠牲にして出す結果など、そこらにある小石よりも価値が無い。

綺麗事なのは承知している。だけど、納得できる訳がない。してやるものか。

『——これで、少しは後悔してくれたかしら？』

少女が階段を降りながら、そうシロウさんへ問う。

後悔？何を以ての後悔だというのか。

あの化け物に単身立ち向かったことが？そんな化け物を従える自分に反抗したことを？

何が後悔だ。何様なんだ。

他人を蹂躪して、踏み台にして………そんな光景を笑っていられるこの少女を、私はユルさない。

でも、私にはどうすることもできない。夢の住人でない私では、運命を変えられない。

憎い、憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎いクイニクイニクイニクイニクイニクイニクイ——！！

『う、ああああああああああああああああああ——

——！！！！』

少女が憎い。彼のマスターが憎い。運命が憎い。——何も出来ない自分が一番憎い。

どうすることも出来ない絶望を、ただ我武者羅に叫ぶことで世界に訴える。

魂を摩耗させ、精神を生贄に捧げ、肉体を悪魔の供物にする。それ程の覚悟を持って、叫ぶ。

ダレか、ダレかカレをタスケテクダサイ――

『――あああああつ！！』

覚醒と同時に、勢いよく身体を起き上がらせる。

息も絶え絶えに、呼吸という行為だけに神経が行き渡る。

――何か、ヒドく辛い夢を見た気がする。妙な吐き気、身体全体から吹き出す気持ち悪い汗が、それを証明しているかのようだ。

そんな夢だけど――やはり、思い出せない。余韻すら脳裏に残っていない。

前にもこんなことがあった気がする。あの時は確か……倒れたんだっけ。それで、神奈子様達に看病されてた筈。

ガリガリと頭を掻いて以前の事を思い出す。服は巫女服のまま、身体は布団の中。

こんな恰好で寝る訳ないし、また気絶でもしたのかな。

最近、原因不明の失神が多いような気がする。失神だけではなく、原因不明の立ち眩みや疲労などもある。

何か原因があるからこそ結果が出るんだろうけど――気絶してしまえばそれを探すことは出来ない。

『——永琳さんに診てもらおうかな』

あの人には別の部分でお世話になっているのに、二重で面倒を持っていたのは如何なものかと思うけど、このままじゃあ誰の助けもない場所で気絶、だなんて事も有り得てきそう、それが一番恐ろしい。

取り敢えず明日にでも行こう。取り返しのつかないことになるのは遠慮したいし、あの人なら分かりそうという信頼感もあるから、極端に畏まる必要もないだろう。

——神奈子様達には悪いけど、このままもう一眠りさせてもらおうとしよう。

ご飯とかが心配だけど、頑張ってもらうしかない。下手に病人が厨房に立つ訳にもいかないし。

若干の二人への後の不安を抱えたまま、再び私は瞼を閉じた。

絶望をこの手に（後書き）

——別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？

見事な死亡フラグだ、うん。

分かる人は分かると思いますが、今回後半に書いた戦闘は、アニメ版 Fate のアーチャー、バーサーカー戦です。

あれ結構好きなんですよね、挿入歌のヒカリとか持ち歌だし。アーチャー SEED とか言うなし。

因みに内容は完全再現ではなく、細部を独自に変更してます。台詞のカットとか、戦い方とか。

望んだものは此方へと彼方へと（前書き）

更新が遅れたよ。ごめんね、たえちゃん。（おい

半分は相変わらずの惰性が原因だけど、仕上げ段階に入った頃に風邪引いたよ。投稿した現在も引いてるよ。喉が痛いよ。

一部熱ある状態で書いたから後半おかしくなってるそう。ごめん、ただのいつも通りだね。

望んだものは此方へと彼方へと

——おぼろげな視界が次第にクリアになっていく。

最初に理解したのは、純白の色。それだけが私の世界の全てだった。

『あ、目が覚めたんですね』

突如耳に届いた声の方向に首を向ける。そこには、永江衣玖が笑顔で私を迎えるように椅子に座っていた。

それを切っ掛けに思考をフル回転させ、再び首だけを動かして周囲を見渡す。

純白だと思っていたのは壁紙のものだったようだ。窓やカーテンがひとつだけしかない辺り、ここは個室だろう。

今度は、自身の境遇を顧みてみる。

私はベッドに眠っているらしい。私に掛けられている掛け布団も、意識するように真っ白だ。

そんなことはどうでもいい。問題は——私は何故こんなところにいるんだ。いや、どこにいるのか自体明確には理解していない訳だが。

確か、萃香達一緒に魔理沙の八卦炉作成に取り掛かろうとし、二度目の投影を行った後——後？

『昨日の夜中ぐらいでしょうか。萃香さんが貴方を担いで私の下へいらしたんです。そして、貴方を寝かせて欲しいと言って、彼女も寝てしまいました。勿論、別の部屋を用意しましたよ』

……………萃香が私を運んだ？

私の記憶は、彼女達三人の前で二度目の投影を行った辺りで途切れ

ている。

大方、無茶な投影を連続したせいで気絶でもしたんだろう。何せ、神が所持している槍を二度も投影したのだ。それだけで魔力が空になつても不思議ではない。

エキスカリバー

約束された勝利の剣は星が鍛えた剣と言われているが、担い手は人間——完全にではないが——である以上、力に喰われない程度には抑えられている。と言うよりも、人間でも扱えるレベルで造られている、と言った方が正しい。

轟く五星は、神が扱ったとされる槍だ。それ故に、その力の限界は人間のイメージでは到底追いつけない所にある。人間が扱えるように凝縮させたところで、それは変わらない。

それでもランクだけ見れば、約束された勝利の剣の方が上。知名度の差が如何に大きなものが分かる。

……ふと、冷静になつてみると、疑問が浮かんでくる。

私は、約束された勝利の剣は投影できない。いや、出来るといえば出来るが、それはエミヤシロウではなく衛宮士郎だったからこそ出来た所業だったのかもしれない。

それを差し引いたとして、轟く五星は約束された勝利の剣と違い、剣ではなく槍で出来ている。固有結界を展開していた訳でもないのに、連続して二度も轟く五星を投影した。それは明らかにおかしいのではないか？

『——私がここに来たとき、身体に変化はあったか？』

『いえ——至って正常でした。静かに寝息を立てていましたよ、余程疲れていたんでしょうね』

衣玖から返ってきた答えに、ますます頭を捻らせる。

少なくとも、五体満足でこの場にいること自体が信じられない。そ

んなリスクを忘れていた自分は阿呆だが、これも精神が衛宮士郎に浸食されているからなんだろうか。

——自分の知らない間に、自分の存在が歪んでいく錯覚を覚える。錯覚ではないのかもしれないが、自分の与り知らぬところで異常が起こっているのなら、不安になるのは当たり前だ。

私は内心で舌打ちをする。ある程度の無茶が可能になったことを喜ぶのも選択肢にはあるのだろうか、生憎とそんな樂觀視出来る程純粹ではない。早苗達との問題が解決したら、本格的に原因を探りに行った方がよいかもしれない。割と本気で。

……やはり、変わったなと思う。

誰かに頼ったり深く触れ合ったりする機会が増えたからだろうか、昔に比べて危険に対して確実に鈍感になっている。

何とかなるか、と樂觀視する傾向が強くなっているのは、心に余裕があるからなのか、もしくはただ腑抜けただけなのか。

——それとも、自分を顧みず、他者の為に生きようとする衛宮士郎としての本質が浮き彫りになり始めたからなのか。

だからといって簡単に命を投げ出すなんて真似はしない。自惚れだろうが、私が死ねば早苗達は悲しむだろうから。

『——ボーっとしています、やはり疲れが溜まっているんですね。私のことは気にせず、ゆっくり養生してください』

『あ、いや、私は——』

考え事に耽っていたら、衣玖が何やら私の状況に関して自己完結したらしく、それを否定しようとするも、いつの間にかドアの前で会釈をする彼女の姿をただただ見送るだけに終わってしまった。

密室に虚しく響く行き場の無い音が消えると、私は半身だけを起き上がらせて軽く溜め息を吐く。

衣玖の考えは的外れとはいえ、ここで出て行こうとしてもここに戻されるに違いない。

何も言わずに出ていくのは却下。余計な心配を掛けたくはない。

別に借りを作りたくないだなんて思っている訳ではないが、彼女にだって彼女の事情がある筈なのに、私の事で時間を割いてしまうことが申し訳なかった。

結論から言って、私はここで暇を持て余すことしか出来ないでいた。

ここ最近、休む暇なく走り回っていた気がする。睡眠する必要がないから問題ないのであって、普通ならとつくの昔に倒れている。

それに、疲労に関してはきちんと蓄積されている。ただ、体力は常人のそれとは比べる価値のない程の差がある為、大抵そのことで倒れるなんてことはない。

聖杯戦争だつてずっと戦い続けている訳ではないし、そういった部分でのマイナスが表に出てこなかったただけだ。

——だが。今回倒れた理由は、それに該当しない。

先程の通り、これは過剰な投影の負荷が原因。本来動物に備わっている、本能的なりミッターが恐らく存在しないであろうサーヴァントにとって、今回の出来事は本当にギリギリの行為だったことを強く物語っている。

……これは憶測でしかないが、今回の気絶は誰かが私にリミッターをかけたか何かしたか事よつて、必然的に起こったことなのではないかと思う。今回だけではなく、同じく前に起こった事も、同じ理由なんじゃないだろうか。

これも恐らくだが、私を幻想郷へ導いた存在、奴が絡んでいるのではないかと踏んでいる。

最後に告げた言葉——貴方と私は、虫籠の中に居る虫と飼い主みたいな関係。それはつまり、立場の違いだけでなく、常に掌握されている立場にあるという解釈もできる。同時に、監視もされている

と考えた方が自然だ。

非情に気に喰わないが、今こうして倒れている姿も覗かれているんだろつな…………。

『私のような奴を気に掛けるなど、随分時間に余裕があるんだな。もつと他にすることがあるのではないかね？』

恐らく聞いているであろうその？何者？かにむけて皮肉をぶつける。私なりの、出来る範囲での反抗だ。

一日中ストーリーカーをしている相手に同情する気は一切ない。別に私のプライベートなどどうでもいいが、その時に周囲に誰かがいれば、その者のプライベートは知らず侵害されていることになる。そればかりは許容できることではない。

……………それにしても。こうして落ち着いて思考に耽れるだけで、こんなに情報を整理することが出来るのか。

このカテゴリに入る内容に悩んでいたのはいつだったか、そう思える程前に感じる。それだけ充実していたのは言わずもがな——しかし、本当にそれだけなのか？

私を監視している奴が、私にその思考に至るまでのパーツを隠せる——即ち、他者の深層心理にまで干渉出来る存在だとしたら？

疑い出したらキリがないのは分かっている。だが、ソイツの言葉が正しければ、私を座から解放したのは、間違いなくソイツの能力か何かのお陰だろう。そんな奴ならば、記憶操作位出来そうに思えてしまう。

相手は此方を遙かに上回るナニかを持っているという前提で行動しないと、簡単に足元を掬われてしまうに違いない。アドバンテージが相手の方が上な以上、過剰と言える位の疑心を持って掛からないと、それこそ同じ目線にすら立てない。

……………何故そこまで私に干渉するのはともかく、最低限監視者の

正体だけは確認したいところだ。

思考に一段落を与えた時、純白のドアが音を立てて開く。そこからゆっくり姿を現したのは、天子だった。ノックもせず開ける非常識さの時点で、ある程度予想はついていたが。

『あ、起きてたんだ。つまんない』

『ご期待に添えず申し訳ないが、私はこうして起きている。悪戯でもする気だったのなら、出直してきたまえ』

口元を釣り上げ、莫迦にした態度を天子に向ける。
それを見てムツとした辺り、本当にやらかす気だったらしい。……
… 本当に年上なのか、彼女は。

『そんなことしないわよ………アンタ、倒れたんだって？』

天子は被っていた帽子を取り、近場の棚に置く。
そして先程まで衣玖が掛けていた椅子を回転させ、背もたれに腕を乗せる体勢で座る。

『ああ。過労、といったところだろう』

嘘は言っていないが、かすりもしていない、と言ったところか。
サーヴァントを普通の生物と同じ秤で計ることは出来ない。常識に収まりきらないこの世界だが、個人が全く別の物質で構成でされている奴など、前代未聞だろう。

特に魔理沙達みたいな魔法使いは、私が君達にとって身近な存在である魔力で構成されているなんて知れば、意地でも信用しないか、腰を抜かすかはするだろう。

アリスは魔力を通すことで疑似的に生命として確立させているが、肉体は既存の物質を使っている為、サーヴァントとかと比べたらまだまだ低次の存在だ。上海達には申し訳ないが、嘘は吐けないからな。

パチュリーは、一応低級の悪魔であるこあとリトルを召還しているが——彼女達はどちらかといえば、吸血鬼の様な生命体を別次元から引き出した、という解釈をした方が納得が出来る。雰囲気が、と言っても分かんないだろうが、規格外の存在に立ち会った時に働くあの直感を知る者なら、理解出来るだろう。

とは言っても、幻想郷では妖怪の存在がデフォルトである為、そんな経験はしないだろうが、初めてサーヴァントという存在を視認した瞬間のあの怖気と未知の感覚は、そうそう忘れられるものじゃない。

『過労………ねえ。そんなぶっ倒れるまで働いてたってこと？』

『そういうことだな』

『きちんと寝たりご飯食べてる？』

『食事は問題ないが、睡眠はもう最低三日はしてないな』

『みっ………！？』

天子が明らかに驚いた様子で絶句している。

確かに、三日寝ないなんて余程の事情がなければ有り得ないしな。これは失言をした。

『——アンタ、そんなにお金ないの？』

『まあ、無いと言えば無いな』

『そんなにお金が必要なの？』

『必要かと言われれば絶対ではないが、あるに越したことはないだろう？』

私が働いている理由は、早苗達の下へいつか戻ることが出来た時、詫びも兼ねて家に入れる為。自分の懐にいれる気は微塵もない。

早苗のことだから受け取ろうとは思わないだろうが、神奈子や諏訪子なら大人の対応をしてくれるに違いない。無償の善意の先にあるのは、猜疑心などの穢れた感情の浸食・蔓延だけというのを、私は身を持って理解している。皆にそんな感情を持たせたくはない。

家族と言うほど近しい関係でもないんだし、何でもおんぶにだっこという訳にはいかない。ある程度の遠慮や謙虚さは持つておかないと、礼節に粗が生まれてしまう。

親しき仲にも礼儀あり。それを忘れてしまえば、円滑な人間関係は築けない。

『——苦勞してんのね』

物凄い同情された目で見られてる。彼女の中で私は藁の家に住む豚と同じ境遇なのだろうか。

『苦勞しているとは思ってないよ。そうでなきゃ、倒れるまで仕事なんてしないさ』

『そうかしら。倒れるまで仕事してるから、苦勞しているんじゃないの？』

『望まない仕事は苦でしかないが、私はこれを望んでやっている。その差だな』

『金がないとか言ってる仕方なく、じゃなかったの？』

『それはひとつの要因でしかない。仕事を選ぶ自由がある以上、興味が沸くものかしょうとは思わんな』

職業選択の自由、なんて言葉があるが、そういうのはここみたいな自由な世界にこそ相応しい。

現実問題、働く以外に生きる術がない以上、自由だなんて言葉は甘え、もしくは虚言だ。

いや、確かに選択する自由はある。だが、それが実現する保証がない。

望まぬ仕事がないからその年を諦めたとして、世間はその決断をした人間を見下す。社会も、雇用するなら出来るだけ若い層を望んでいる。

そういった意味も含め、私達は職選びという行為に暗黙の了解の脅迫観念を植え付けられている。

間が空けば空くほど不利になる。それが分かっている先延ばしにすることを簡単に容認できるわけがない。

……電波を受信して途中から愚痴っぽくなってしまったが、続ける。

とにかく私は今の職場に何ら不平不満もない。それに、今回倒れたのは仕事外の問題だ。

魔理沙達のプライバシーに関わる以上それを彼女に伝えることはできないが、私は恵まれているということだけは理解してもらいたいな。

『仕事なんてのは意外と楽しいものだぞ。肌に合えばの話ではあるがな』

『うえー、しんじられない』

器用に椅子の前足を軸にして前後に揺れながら、気怠そうにそう返す。

働いたことの無い者に説いても、大人の都合の良い洗脳としか考えられないのも無理はない。

事実、これは私個人の意見であつて、それが別の相手に通じるかは別の話だしな。

『だいたい、私はお金に困っている訳じゃないしね。働くことはないわよ』

『…………ふむ。やはり天人ともなると、金は湯水のようにあるのか。羨ましい限りだな』

ぶらぶらさせていた椅子を突然止め、ピクリとも動かなくなる天子。何だか話しかけづらい雰囲気を出しており、私も彼女にそれ以上干渉出来ないでいた。

『羨ましい、と思えることはある意味幸せなのかもね』

天子の一声が静かになった部屋を微かに響かせる。

短い文章から感じ取れたのは——後悔の念と自らを嘲る感情か？

『…………君は今の境遇に不満があるのか？』

『不満とか、そんなんじゃないわよ。——ただね、その時望んで

いたモノが手に入ったとしても、その時手にしていた望んでも手に入らないモノを知らず手放すことの恐ろしさを、思い出していただけ」

まるで何かに怯えるかのように、右手で自らの肩を抱く。

そこには、普段の気丈な比那名居天子の姿はない。まるで捨てられた子犬のようだ。

『——世界の理とはそういうものだ。等価交換だなんて後盾は人生には存在しない。手に入れたものがちつぽけだとして、失ったものは倍以上だなんてことは有り得ない話ではない。わらしべ長者はゼロからのスタートだから失うものはないように思えるが、都合よく藁が巨万の富へと導いてくれる前に、手元にある交換材料すら失って終わる可能性だってあるんだ』

『——だから？』

『悲観に溺れるな、とは言わない。だが、失うことを恐れて前へ進まないようでは、その辛い経験すら無駄になる。どこかで妥協しない限り、君は苦しむだけだ』

言いたいことを全て言い終えると、天子が俯きながら無言で立ち上がり、近場の壁に額と手の平を当ててもたれ掛る。

『流石私の専属教師ね。事情も知らない癖に、私の事何も知らない癖に、分かった風な回答をべらべらと……』

突如、壁に添えていた手を強く握り、壁に叩きつける。

鈍く響き渡る音に続き、今まで見たことも無い彼女の憎悪の表情が私へと向けられる。

「——ッざけんな！！！アంతに何が分かるっていうのよ！失ったことに気付いた時の喪失感、戻らないと知った時の絶望感、後悔、焦燥。夢の中でまるで？視せられている？かのように何度も再生される、あの光景。現実でも夢の中でも苦しみ続ける私の気持ち、分かるっていうの！？」

感情が、爆発する。どす黒い感情が、一斉に私へと向けられる。

私はそれに対して、何かを返すことが出来なideいた。

ここで何か言ったところで、彼女の怒りを買っただけだから。

「…………ごめん。今までの仕事代は衣玖に出すようっておくわ。だから、もう来ないで」

解雇宣言と共に乱暴に自分の帽子を掴み、そのまま部屋から去っていった。

去り際の彼女の背中、見た目以上に小さく見えた。

あれから何分経っただろうか。

誰もいなくなった空間で、私は一人悩み続けている。

彼女から吐き出された激情を、私では受け止めることが出来なかった。それどころか、彼女のトラウマを掘り下げるだけ掘り下げ、苦しめるだけに終わった。

知らなかった、で許されることではない。

それに、私は自惚れていた。教師と言う立場も相まって、たった数回の邂逅で彼女のことを分かった気になり、偉そうな口を平然と叩

いた。そしてこのザマだ。

追いかける、という選択肢はあったが、今の彼女には私の言葉なぞ火に油となるのは確実。

自分のあまりの愚かさに辟易していると、遠慮しがちにドアが開かれた。

『——衣玖、か』

そこには、普段の余裕のある笑みを絶やさない永江衣玖ではなく、悪戯を隠してバレた子供のような顔をした女性がいた。

彼女は一礼すると、先程まで天子の使っていた椅子を元に戻し、そのまま腰かける。

『…………総領娘様に、貴方の解雇を告げられました』

『そうか』

彼女の第一声は、予想通りのものだった。

普段の天子の様子だったら、気まぐれかなにかと受け流しているに違いない。

だが、あの状態のまま衣玖と会話をしたのなら——確実に何事かとは感じるだろう。

『あの人は横暴ではありませんが、無意味に他人と距離を測ろうとしたり、ましてや遠ざけたりしようとする人ではありません』

『——』

『——聞いたんですか？総領娘様を苦しませる根底となることを』

今までにないくらい真剣な眼差しが、私に向けられる。

彼女は、天子を苦しめるナニかを知っている。故に、これ程までに本気になっている。

『そこまで大げさではない。ただ私は、彼女の泥の一部を受け止めただけに過ぎない』

……受け止めた？笑わせるな。貴様はそれすら出来ていないではないか。

エミヤシロウ、貴様はまだそんな希望的観測で免罪符を——逃げ道を作ろうとしているのか。

少しでも天子の力になれたという妄想に逃避し、傷を最小限にしようとしている。

——吐き気がする。何故こんな見栄を張るような言葉を平然と出せるのか。

交渉の場面では優秀だが、関係の無い部分で発揮されても、本位では無い為苛々するだけだ。

『何も知らずに仕事が終わればそれでいいと、そう思っていました。けど、貴方は知ってしまった。どんなに小さな事実であろうとも、彼女の闇を』

『……………そう、だな』

『なら、お話します。貴方の事ですから、総領娘様を苦しませる原因を、知りたいのでしょうか？』

『ああ』

『そうですか——。脅迫するようですが、これを聞いたか

らには傍観者でいることは許しません。私なりに、総領娘様を心配しての警告です。それでも、聞きます?』

『……私は、知らなかったとはいえ天子を傷つけてしまった。同時に、自身の無知と無力さを思い知った。今回の内容を聞いて、もし彼女の為に何か出来るという手段を知れるというのなら、してやりたい』

『……本当、不思議な人ですね。明らかに余計な重荷を背負おうとしているというのに、それを進んで行くだなんて』

『確かに、そうかもしれないな』

口元を微かに緩ませ、自嘲気味に笑う。

確かに、これ以上は家庭教師としても、いち人間としても介入する必要のない領域かもしれない。

必要以上の苦労は身を滅ぼす。そんなの、私は理解している。

『だがな。君も言ったよな、私と君の関係は夫婦。そして、天子はそんな二人の娘だと。娘のことを知りたいと思わない父親など、いないだろう?』

『で、ですがあればあくまで——』

『黙って聞いてくれ。——私はな、昔誰彼構わず助けてきた。善悪なんか関係なくだ、笑えるだろう?』

『——』

『故に良いように利用され、捨てられた。それでもよかったと思っ

てたし、その者たちが救われているなら、自身がどうなろうと、どうでもよかった』

『そんな………』

『だが、私は変わった。経緯は省くが、私はそれを切っ掛けに考え方を改めていき、私を信じてくれる者

達を——私が心から救いたいと思った者達だけを、救う道を選んだ。私は、口上の契とはいえ、家族を見捨てるなんてことは、出来ない。したくないんだ——』

『………』

衣玖は、顔には出さないが、ほんの少しだけ驚愕する。彼の過去にもだが、あんな飯事のような関係を認めておきながら尚、その関係を善しとし、総領娘を助けたいと思っている。

どうしてそこまでするのか。固執する理由は聞いたが、そんな簡単に決めたりできることではない。

それに、彼の目は嘘を一切吐いていない。天人という存在を間近で何度も見ている私は、彼らの上辺だけの笑みに隠されたどす黒い欲求を見ると言うことに慣れている。

だからこそ、断言できる。エミヤシロウの眼差しの先に見据えているものは、とても清いモノ。清廉過ぎて、簡単に別の色に染められてしまうモノだということを。

——だからこそ。信用できるのかもしれない。というよりも、信用したいんだ。

総領娘様の闇を理解しているからこそ、せめて彼だけでも——そんな願望に望みを託したくなる。

『——分かりました。そこまで言うのなら、お話ししましょう。』

そして……出来れば、あの子を救ってください』

衣玖は膝に置いていた両の拳を握り、彼に望みを託すことを決意した。

望んだものは此方へと彼方へと（後書き）

一応追い込みつて程でもないですが、一章も終わりが見えてきたのでシリアス度が高まっています。

登場したキャラ全員ではありませんが、より深く関わった人達の苦悩を、シロウは目の当たりにしていくことになります。

一部はきちんと考えてるんですが、一部決まっていらないですよ。どうしよう。

やはり×に行くんですし、きっちり構想は練りたいですよ。

だからまた更新遅くなります、と言つのもありますが――

8/28にある東方神居祭に向けて、物語を考えていけないといけない、というのも大きな理由です。

西瓜（萃香じゃないよ。私は騙された）がテーマらしい。小説で西瓜メインの話とか結構ふざけてるよね、お題的に。厳しすぎるぜ。

シリアスしか書けない人間ですし、いつそシリアスギャグというものに手を付けてみようかなと思ってる。至極真面目な文章でふざけたことを言ってる、というイメージでよろしく。

まあ、書けたらなんですけどねー

天人の身体と人間の心（前書き）

久しぶりに何の盛り上がりもない、語るだけの内容です。

一応次回への伏線回（ていうか下地？）、という扱いなので、次話は盛り上がると信じて！

……信じて（ゝ・ω・ゝ）

天人の身体と人間の心

「——まず、天人とはいったいどんな存在か、貴方は理解していますか？」

衣玖が話の切り出しとしたのは、比那名居天子を構成するひとつのファクターである、天人という種族のことだった。

「私が知っているのは、私より彼女が年上だという事実から長寿なのだろうと言う憶測と、基本的に天人は富豪だと言うことぐらいか」

「半分も満たしていませんね。まず天人と言うのは、天界に住む人だからその名を付けられています。そして富豪、というのとは少し違いますね。天人は一応、悟りを開いたり、高い業績によつて神靈化した人々が成る、いわば神と似た存在です。生物の枠を超えた存在が集う場所故、地上の民が手に入れることは到底出来ないようなあらゆる欲求の果てが集っているのです。その中に、貴方の言った長寿——条件さえ満たせば不老不死な身体さえ、天人なら手に入られるのです」

「不老、不死——」

まさか、そんな大業な能力があの子に携わっているだなんて、思いもしなかった。

確かに何でもありな世界ではあるが、まさか天人全員が不老不死なのか？——こんな世界じゃなければ、天人のような存在が世界を征服してそうだな。死なない兵隊ほど、厄介なものはないしな。

「条件と言うのは、簡単に言えば死を誘う存在である死神を迎え撃

てばいい、と言うことです。逆にそれに失敗すれば、天人五衰がその瞬間から発生し、そこから人間と同様の緩やかな死を迎えることになります。寿命に関しては、人間と同じくらいですね』

天人五衰——確か、仏教用語のひとつだな。天人が死を迎える際に出る5つの兆しの総称だった筈。

中身は確か、生物ならば当たり前に起こる生理現象のことだった気がする。逆に言えば、天人にはそんな生物的要素が欠落——本人達は進化だと思っていそうだが——しているということでもある。

『死神を倒す、か。力づくで不老不死を得ているようなものだな』

『そうですね。自らを穢れない高位の存在と謳っておきながら、下位の存在である死神のお陰でその立場に居られるんですから、滑稽の一言ですね』

クスクス、と口元を抑えて笑う衣玖。

彼女にしては珍しく、他人を貶めるようなキツイ言動。天人に対して、良い感情は抱いていない、と言うところか。

それでいて尚天子を見限るようなことをしていない辺り、天人という種族の枠を超えた絆が、二人にはあるのだろう。

『それはまあいいです。取り敢えずそんな天人なんですが——総領娘様は、その中でも異端の存在なんです』

『異端？』

『はい。彼女は——というより、彼女の一族である比那名居の一族は、本来人間だった者が天人になった、例外中の例外の存在なんです』

『彼女が、元人間——』

……確かに、本当に天人が高位の存在なら、私のような奴は相手にすることは確実にない。本当に自尊心が強いなら、教えを乞うなんて関係は、まかり間違っても成立することはない筈。ましてや、こちらが教える側なら、尚更である。

『総領娘様とは、天人となった当初からの関係なのですが、昔はとも素直な女の子でした。私にもよく懐いてくれて……本当、可愛らしかったです』

『昔は——か。大方、ここの天人達に毒されたんだろうな』

『それを含めて、ここからが重要です。人間と言うのは確かに環境に適応する動物ですが、性格までは簡単には変わりません。あんな風になった切っ掛けは間違いなく——自分が孤独であると理解したから、だと思えます』

『孤独……？』

『先ほども言いました通り、彼女は人間から成り上がった天人、俗称として天人くずれと言われています。その為、同じ天人からも疎い目で見られ、友人らしい友人は今でも出来ていません。それと同時に、人間の頃にいた友人は、自らが天人になった途端——正確には、親辺りが促していたんでしょうけれど、近づかなくなりしました。喩え総領娘様からどんなに歩み寄ろうとしても、彼女を知る者達は彼女を高位の存在として認識し、腰を低くした態度を取るようになりました。幼い世間の認識しか持たない彼女からすれば、変わる筈のないと思っていた関係が、たったひとつの選択肢のせいで崩

壊したんです。心が壊れても、仕方ないと思います』

……天子が今何歳かは不明だが、三桁は間違いなく超えていると踏んでいいだろう。

そんな時間の間、彼女は友人を持つことが無かった。近所からは疎まれ、元の居場所は別の世界に変化している。彼女にとつて、本当の意味で心が安らぐ時間なんてのは、ただの一度もなかったのではないだろうか。

小さな頃は、周りの影響を一身に受けて成長する。正直、こんな最悪な環境下でよくもあそこまで歪まずに成長できたものだ。

恐らくだが、これも衣玖という存在が傍にいたからなのと、天子自身が昔の自分を忘れたくない、と強く思っていたからなのかもしれない。

『そうして、そんな関係が何年と続くと、当然人間は年を取ってきます。それに対して、天人は肉体の変化を起こしません。自分の知っている人達の変化を見守り、自身は変わることなくただ見知った人達の死を眺めるだけ。それは、どんな気分なのでしょうね』

自分だけが置いて行かれる感覚。同じ人間だった筈なのに、少し道を外しただけでこつも命の在り方が変わってしまう。

あらゆるモノから置いてきぼりを食らい、最後には自分しか残らない。

望まない孤独。渴望しても帰ってこない過去。体感する時間が異なる人間関係。種族という壁。

世界は、彼女をどこまで苦しめようとすれば気が済むのだ。

『——だが、それでも。不本意かもしれないが、彼女は決して忘れられた訳ではない。彼女は輪に入ろうと必死で頑張っているのだろっ？ならば、いつかは』

『そうですね。ですがそれはあくまで、比那名居天子という存在の認知にしか過ぎません。それでは、意味がないんです』

『……………どういうことだ？』

『総領娘様には、人間だった頃の名前があります。地子、という地上の民らしい名前ですね。地に住まうことを訣別し、天人になった時から、天に住まう者として相応しい名として、天子という名がつけられたらしいです。単純に、名前で苛められることのないように改変したのだろつとは思いますが——その結果が、今回彼女を苦しめる原因となっているんです』

『地子……………。いい名前じゃないか、今の名前を否定する訳ではないが、元の名に誇りを持つてもいい位だ』

『子供の時に名前を変えられたんです。愛着や誇りなんて大して程あつたとは思えませんが、最終的に親の決断に従うのが子供と言うものです。この結果は、必然と言えるものでしょう』

親は天子のことを考えたからこそ、名前を変える決断をしたんだ。それを否定はできない。

だが、親はその名前の事で今彼女が苦しんでいることを知っているのだろうか。

個人的な見解では、あの時彼女のあの叫びから拾えた嘆きの音は、決壊したダムを思わせるものだった。

たまりにたまつた水が、小さな切っ掛けで砕け、水圧と連鎖して崩壊し、他者を巻き込んでいく。

捌け口があれば、あそこまで苦しむ結果にはなっていないのではな
いか？だとすれば――

『——だが、君は彼女の真名を知っている。あの子は孤独でもな
んでもない筈だ』

『私は例外ですよ。家族も然りです。私達は、地子も天子も知って
いながら、天子として彼女に接している。それは、変えようのない
事実です。彼女が望んでいるのは、自分を地子として見てくれる存
在。地子として共に笑い、泣いたり出来る。そんな関係が欲しいん
でしょう』

——家族や衣玖では捌け口にはならない、ということか。

彼女が望んでいるのは、しがらみが一切無い、真つ新たな関係。それ
は、心の底で人生のリセットを望んでいる彼女故の望み。

今の人生がある以上、その望みが叶うのは困難を極める。だが、彼
女にはそれしかない。
生きる目的をどうこうなんて第三者が出来る問題ではない以上、行
く末を見守る他ない。

『でも、もしかしたら貴方なら——総領娘様にとっての光になれ
るかもしれません』

『……それはどうだろうな。あの子にとって私は？比那名居天子
の家庭教師？でしかない。それに、一度意識してしまえば、その印
象を抜くにはそれ以上に濃いイメージで上書きする他ない。後は何
ヶ月か会わない内に私が変わるぐらいか』

『現実的なのは、前者ということですね。でも、それも厳しい、と
いうのが現実ですね』

うーん、と二人で頭を捻らせる。

だが、考えたところで都合よく答えが浮かぶ訳もなく、時間だけが過ぎていく。

『——取り敢えず、そろそろお昼になりますし、ご飯を食べましょう。色々考えるのは、その後でもいいでしょう』

『そうだな。では私が——』

『貴方は寝ててください。何度も言わせないでくださいね？』

ニツコリと微笑む衣玖に謎の恐怖を覚えた為、素直に従うことにした。男として、立場の危うさを少し感じながら、私は衣玖の料理に思いを馳せた。

放心状態で力無く歩く天人の少女。

亡霊よりも生気の無いその姿は、逆にその存在を際立たせている。エミヤシロウに怒りをぶつけ、永江衣玖に勢いに任せた彼の解雇宣言を伝え、今に至っている。

——確かに彼が知った風な口を聞いたことで怒るのは仕方ないことだとは思う。しかし、その口から出た答えは、決して的外れなものではなかった。

だからこそ、なのだろうか。自分の中で何年も渦巻いていたモノが、数日の付き合いでしかない奴に看破されたと錯覚し、自分の悩みなどその程度のものだと否定されたみたいで——だから、ついあんな口を利いてしまった。

正直なところ、私が子供過ぎたせいで、こんな心にもないことまでも口に出してしまったのだ。解雇宣言だって本意ではないし、私の怒りだって、冷静に考えれば自業自得でしかない。

今まで目を背けていた部分を曝け出されて、そのせいで逆切れして……ふざけているのは、私だ。

『全部、元通り。少しは変わったと思っていた世界だけど、それを自分で壊してちゃあ世話ないわね。莫迦野郎、愚者、屑、産業廃棄

物———」

自分を罵倒する呼称をただひたすらに連呼する。その自虐的な言動は、普段の彼女を知る者なら何事かと思うだろう。

精神的にまいっているからというのもあるが、彼女の本質は元よりそんな強いものではない。

あくまで強く在ろうとふるまっているだけで、彼女の精神そのものは、天人になってからそこまで成長していない。

虚勢や本当の自分を隠していくことでしか、あの環境で自我を保つ術はなかった。

人間は孤独では生きていけない。その事實は、今は天人であろうと、元は人間な天子にとつては大きな問題である。

存在レベルで孤独を嫌う性質の人間の意識が刷り込まれている彼女が体験した百年単位はあろう独りの時間。精神に異常をきたしていないのは、新しく生まれ変わった天人という種族の力なのか、またはそんな孤独に打ち勝てるほどの何かを彼女が有していたのか。

何にせよ、今までは耐えることの出来た孤独だったが、博麗霊夢達との邂逅を始めとして、彼女は他者と触れ合う機会を多く得るようになった。

今まで使っていなかった蛇口は固くてそう簡単に回らなかったが、回数を重ねるごとに馴染んでいき、最後には元に戻る———

そんな都合よく行けば、万々歳かもしれないが、現実はそうじゃない。

あまりにも固すぎる蛇口を開けるにしても、無理矢理力を込めて開けるのが普通だ。そうして開いたはいいが、勢い余って大量の水が噴出してしまうことを経験した人も少なくはない筈。

今回のエミヤシロウに対しての怒りが蛇口を開ける力だとすれば、流れ出る水は吐き出された感情、蛇口は天子そのもの。

他人との交流自体が希薄だった人生の大半の中、他者と接する際の力加減が理解できていない彼女にとって、今回の出来事の結果はある意味必然と言えたかもしれない。

大量に溢れた水が、今の心地よかった関係ともども流してしまったという後悔で、彼女の頭は一杯だった。

一度加減を間違えてしまえば、次からは過剰なまでに警戒しながら蛇口をひねろうとする。

その感覚が定着してしまうと、二度とあの頃と同じ、積極的な姿勢で接することは出来なくなる。

彼女が本当に望んでいたモノは、そんなおっかなびつくりな態度で形成出来る程、単純なものではない。

その感覚の弊害が今回の出来事だけで済むなら、まだ救いはあったかもしれない。

しかし、記憶と経験は継承され、同じような状況に対して、冷静に挑もうとする気概よりも、同じ苦しみを味わいたくないという逃げの姿勢の方が先立ってしまうのが、人間の考え方というものだ。

だから、この問題をどうにかして修復しない限り、彼女は一生孤独に苛まれてしまうという、最悪の結末を辿ってしまう。

だが、彼女自身にそんなことを考える暇はない。

今の彼女には、大局的な視野どころか、自分の殻に閉じこもって自らへの呪いを反響することしか考えられない。

この瞬間彼女を支える存在がない以上、そんな悪循環な思考はどんどん泥沼と化していく。

しかし、そんな思考を中断させる切っ掛けが訪れた。

『ここ、は――』

無意識とはかくも恐ろしく、時に予想外な運命を選ぶ。

呪い事を呟きながらも足を動かし、無気力ながらもそれを止めることをしなかった結果。

天子は、昔の故郷である、人間の里の門前に立っていた。

突然の事態に、頭が混乱する。

彼女は天人になって暫く経ってからは、ここに来ることはなくなっていた。

それは里の皆に自身を否定されたからというものもあるが、一番の理由は、その否定されたという事実を否定したかったからである。

あの時の出来事は間違いだったんだとどこかで期待し、そんな都合の良い妄想を固定化させる為に、現実から目を背けていたのだ。

愚かだと思う輩もいるだろう。しかし、そうでもしなければ、彼女の精神はとくに崩壊していたに違いない。

喻えそれが、本人が奥底ではそんなものの幻想に過ぎないと理解していても、だ。

天子は迷っていた。

ここに来たのはただの偶然だ。それに門の前にいるならば、引き返すことも可能。彼女もそれを望んでいる。

しかし――それは彼女の望んだことではない。正確には、比那名居天子がそれを望んでいないのだ。

地子は今では彼女のトラウマの記憶を持つ弱い自分に過ぎない。

天子は逆に唯我独尊で誰かを振り回すのが得意な、強い自分。

どちらも彼女を形成するに於いて必要不可欠な存在だ。

決して二重人格とかではないが、種族の枠を超えた時点で彼女は生まれ変わったのと大差ない。いわば、前世の記憶を持って転生した、と言っても差し支えない境遇だ。

前世の弱い自分を否定したいが為に、天子は前へ進もうとする。

対して地子は、淡い幻想を護ろうと必死で後ろへ下がろうとする。

そんな反発する意思が、簡単には決断を迫らせない。

——と、思っていたが、

『——折角だし入ろうかな』

思ったよりあっさりと決断をした。

天子の意思が勝った。だが、地子の意思が弱かった訳ではない。

地子としての彼女も、故郷に思いを馳せていたというのもあるし、先程の通り彼女は幻想だと理解していながらもそれを突っぱねていたに過ぎない。

今の今まではここに辿り着く前に心が折れていたが、今回は無意識のお陰で彼女が望んでいた結果に辿り着けた。

純粋な想いだけが働いた結果、この軌跡を生んだ。ここに帰りたいと、小さいけどとても大きな願いが、今実現したのだ。

だからといって、全部が全部天子の一人勝ちという訳ではなく、地子としての想いもまた、行動に反映していた。

何かと言うと、あれから門を通ったまではいいが、堂々と大通りを歩けるほど鈍感ではない天子は、すぐさま近くの裏通りに入ったのだ。

こそこそするのは性分ではないが、彼女の中の地子が恐れをなしている以上、その感覚は天子にもフィードバックされる。肉体は同

じなのだから当然だが。

表の騒がしさに比べて圧倒的に静かな裏通りに、天子は軽く身震いする。

彼女の幼い記憶には、こんな暗がりの記憶は無い。親の目が光っている内は、こないかにもな場所に行かせようとはしないだろうし。何にせよ、幼い時に行くと言われた場所に今立っているのだ。精神的にもまだ幼い彼女にとっては、過去の親の忠告や噂も相まってより恐怖感が募るばかりである。

ならばとつと戻れと言われそうだが、恐怖と同時に好奇心も掻き立てられているから手に負えない。

幼い時の記憶もあつてか、怖れを覚えながらも好奇心が勝ってしまった。本人も、自分は天人だから襲われてもそう簡単にはやられないだろうと踏んでいた。

——しかし、それは慢心だった。いや、久しぶりの帰郷で浮ついていただけかもしれない。

どちらにせよ、その考えは、彼女に不幸を齎す結果となる。

『——ッ！——！』

ゆっくりと前へ進み、裏通りを進んでいく内に、異変は起こった。突然、天子の背後に現れる気配。彼女が何事かと振り向こうとするも、それは口に布のようなものを当てられたことで中断させられる。反射的に暴れようとするも、それを予知していたのかあっさりと手首を掴まれてしまう。

天人は長寿で丈夫な存在ではあるが、筋力に関しては人並みしかない。手首を掴む何かは、大きな手。恐らく成人男性ぐらいはあるそ

れは、敵の唯一の情報となった。

どうするかと必死に案を巡らせていると、頭がボーっとする感覚が彼女を襲う。

布から変な匂いもするし、もしかしてこれが関係しているのか。そんなことを考えている内に、天子はその場に力なく崩れ落ちていった。

衣玖と共に策を思案して数時間が経過。日が傾きつつある中、衣玖はポツリと呟く。

『……………総領娘様、帰ってきませんね』

『まだ夕方にも達していないではないか。このぐらいの時間なら、帰ってきてなくてもおかしくないだろう』

『そうでもないですよ。総領娘様の親の教育が良かったというものもありますが、表面上ある程度は天人らしくないとその分奇異の目で見られるので、時間などに関しては彼女は意外としっかりしているんですよ。地上の何処かで一夜を過ごそうだなんて考えるのもマインスの対象になりますし、それを踏まえての発言と思ってもらっていいです』

『本当に意外だな……………。まあそれはいいとして、そうだとした場合の遅れぐらいはあるのではないか？』

『あり得たことはないですが———確かに、あんな事を言った

手前、帰ってきづらいというのも分からなくはないですが』

あんなこととは、解雇の件だろう。

感情に任せてのひと時の発言だったのかもしれないし、本心からだったかもしれない。どっちにせよ、再び顔を合わせる可能性もある場所に簡単に帰ろうとは思えないのだろう。

『だとしても、心配だな』

『ですね……。あの人のことですから、何か危険に巻き込まれても自力で乗り越えられるとは思いますが』

『可能性に賭けて行動するのを放棄するのは愚かな選択だ。本当に心配ならば、草の根分けて探す気概で挑むのが普通ではないかね？』

『——そう、ですね。ごめんなさい』

『謝られても困るのだから。取り敢えず意見が一致したところで、天子を探そうではないか。私が地理を完全に理解しているのは、ここから人間の里周辺までだ。妖怪の山にいられたら、殆どお手上げだろうがな。草の根を分けるよりも困難な作業になるだろうし』

探す対象が生物である以上、常に動いていると考えないと下手な希望を持つてしまう。

人通りの良い場所ならば、誰かに聞けば見たという者が出るだろうが、山、森のような人通りの少ない場所では、運が良くない限り簡単に見つかるなんてことは有り得ない。

最悪、全力で探して日を跨いでも見つからないなんてこともある。考えたくはないが、自然が多く連絡手段に乏しい幻想郷では、最初から覚悟しておくべき結果ではある。

『なら、貴方はその付近の探索をお願いします。私は――』

『待つてくれ、君はここに残ってもらいたいんだ。誰か一人でも彼女を待つ者がいなければ、入れ違いになってしまふからな。連絡手段が無いのが痛い、どちらかが天子を見つけさえすればいいのだから、この方が確実性はある』

『ですが、それでは貴方ばかりが苦勞をしてしまいます。そういう判断をするなら、探しに行くのは教育係である私の務めです』

『それならば私も家庭教師と言う名の教育者だ。この仕事が彼女に教育者として接する最後の機会になるだろうし、少しは格好つけさせてくれないか？』

『……………何を言っても無駄ですか』

『私は彼女に教えてきたことなど知れている。このような形でなければまだ教えることもあったのだろうが、こればかりは成るようになっていかならないからな。だからせめて、最後に彼女の悩みを解消すること、花を飾りたいのだよ』

大層な発言をしてはいるが、大体はただの方便だ。

衣玖は薄々理解しているようだが、単に天子を探しに行く役を買って出る為の言い訳が欲しかっただけだ。

エーテル体である私ならば、疲勞を気にする必要は無い。長丁場になる可能性がある以上、こういうのは私の方が適役だ。

体質の事を説明しても簡単に信用してくれるとも思えないし、その分の時間が無駄になる。ならば、多少強引だろうと話を完結させる方が建設的だろう。

『分かりました。ですが貴方も病み上がりなんですから、決して無理はなさらぬよう』

『ご忠告、痛み入るよ。では、吉報を期待していてくれ』

外套を勢いよく翻し、私は家を後にする。

家を出た瞬間、私は全身に強化を掛け、疾走する。

衣玖に今回の出来事を任せなかったのには、先程の理由もあるが、私の中で不安が渦巻いていたからというものもある。

話を聞いていく内に募る妙な感覚。内容は極端に不安がるものではなかったが、それを否定するかのように胸のもやもやは誇大していく。

この嫌な感じが、杞憂では終わればいいのだが――

天人の身体と人間の心（後書き）

今回の回を持って、一度小説更新を中断します。

8/28日にある東方神居祭での新刊（んなたいそうなもんじゃない）を作成する為です。

早いと思われるでしょうが、今回リーダーがPixivの知り合いから私の小説に挿絵を入れてくれるよう働いてくれるとかくれないとか言ってたので、なるべく早めにある程度進めておかないと、絵師様の方にも迷惑がかかるので、ここら辺は理解してください。

内容が早く書き終えれば、8/28前からでも執筆を再開しますので、気長に待っていただけたら嬉しいです。

ていうか次が盛り上がりポイントなのになんだこの不完全燃焼。もしかしたら次の回だけは合間を縫って書きちゃうかもしれません。

弱者の覚悟、強者の驕り（前書き）

超お久しぶりの投稿です。忘れ去られている頃ですが、やめることはしません。何年かかつて。

そんなこんなしている内に、東方神霊廟が製品が出たね。また完結から伸びたよ。これっていたちごっこな気がしてきたが気にしない方向で。

しかし今回、区切るところに迷っていたら異常なまでに一本が長くなりました。ボリウムだけは一級品で、中身は伴ってないね、何年書いてるんだよってね。

為、騙された等の歪んだ思考に到ることは滅多にない。

故に、極端に絶望したりはしないと思うのに……何故こんなにも哀しそうな音を吐けるの。

怨嗟に中てられ、脳を大鐘の中で鳴らされたような痛みと吐き気を感じながらも、冷静に事態を把握するべく、周囲を見渡す。

目を開いて最初に移ったものは、予想通り無数の子供の姿だった。それも、後ろ手に縛られた状態の。

何故か私だけ手は前にあるが、それで状況が好転するようには思えない。天人とはいえ、筋力人間の女性と同程度しかないから、当然この縄を千切れはしない。

窓のような光を差し込む為の措置は一切しておらず、ランプとかもない。恐らくここは倉庫のような用途で使われていた場所だろうと推測する。

『お姉ちゃん、気がついた？』

話しかけてきたのは、一人の少年だった。

赤錆色をした短髪が特徴的で、他の子供達が絶望をしている中、この少年だけは芯の通った目つきをしていた。

『ええ。ちよつとクラクラするけど』

『そつか。多分それは睡眠薬とかその類のもののせいだと思うけど。俺はその手口で連れてこられたんだ』

『確か私も、口に何か当てられてそのまま意識が………』

あれが睡眠薬だったんだ。天人にそういうのって効くんだなあ。

『ねえ、皆はなんでここに閉じこめられているの？』

『……………最近、里で失踪事件が多発しているんだ、子供を対象とした奴。知らない？』

『ごめんなさい、私里に住んでいないから、そういうの分かんないの』

『そんな事件に巻き込まれた子供達が、ここに閉じこめられているんだ。俺は、ちょっと違うんだけど』

『……………多分、私も違うと思う。ここにいる子供達と比べて、私ぐらいの子供は誰もいない事を考えると、私がここに連れてこられたのは何かしらの理由があるんだと思う』

例えば、私が先ほどまでいた場所が、実はこの場所と距離が離れておらず、見張りのような奴に口封じとして連れてこられたとか。

あり得なくはないけど、里での失踪事件なのに里に隠れているというのは、少し無理がある気がしなくもない。

木を隠すには森の中というけど、猿轡もつけていないなら、余程の奥地じゃないと子供の声が聞こえてしまうのではないか。

気落ちした状態で歩いていたせいで、自分がどこをどう歩いていたかなんて記憶にないし、下手に声を上げて助けを期待するのは無謀だろう。

逃げるとしても、誘拐犯の人数が分からないのに大人数で動くのは得策ではない。

建物の構造も不明となると、地の利は相手側にある。そうとなると、無事にここから逃げ果せるには、五体満足では済まないと思う。

———私の中で、誰かが囷になるか、戦える者が立ち向かうかという選択肢が一番現実的だという結論に達する。

後は、それを実行する、勇気だけ。

『……………ねえ、ここにはいつからいるの?』

『二日前。とは言っても、この事件自体まだ一週間も経ってないんだ』

『搜索とかはしていた?』

『大人達は頑張って探していたようだけど、手掛かりも掴めていなかったっぽいね。俺は……………攫われた子供達を助けようと、こっそり行動していたら、ここに居たんだ』

『それが、違う理由ってことね』

程度が分からないとはいえ、大人が血眼になって探しているのに足がかりすら掴めないというのは、裏がある感じがする。

誘拐犯の誰かが実は里で結構人徳のある奴で、ここから遠ざけるように発言をすることで、強い抑止力として働かせていたり、ここがまさかの地下室で、入り口に蓋をしてカモフラージュすることで、完全犯罪を成立させているのか。

後者がもし現実ならば、私達は恐らくどうすることもできない。そして、それを知るには行動を起こすしかない。

どっちに転んでも不幸は免れないならば、僅かにでも希望がある方を選択するべきなんだろう。

『私は……………ちょっと前に自己嫌悪する出来事があってね、家から飛び出してきたんだ。家出ではないけどね。それでボーッと人里の路地裏を歩いていたら、このザマって訳』

『なんかあつたの？』

ここでも躊躇いなく私の領域に踏み込もうとする者がいる。ただ、あの男の時に比べて遙かに落ち着いていられるのは、間も開かずの二度目というのもあるだろうけれど、相手が子供だから怒るのは大人げないという、ある種の見下した姿勢が私の中にあつたからなのかもしれない。

『私に家庭教師がついていたんだけど、私の今の境遇を知った風な口で語るもんだからさ、解雇だーって言ってそのまま飛び出してきたの。別に私が逃げる必要なかったんだけど、勢いに逆らえなくてね』

冷静になつてからあの時の自分を思い返すと、なんともまあ恥も外聞もなく怒鳴り散らしたものだと思う。

デリケートな部分だと分かっていたからあなるのも仕方ないと納得しようとする反面、分かっているながらも覚悟が足りていなかった為にあんな醜態を晒した自分に情けなさを覚えている自分がいる。

『……………そっか。その家庭教師には悪いことしたね』

『え？なんでアイツに悪いなんて感じなきゃいけないのよ』

『うーん、だってその人はお姉ちゃんの事を思ってたんだろ？それがお姉ちゃんを怒らせる原因になったのは確かにやりすぎたからってのがあるんだろうけど……………本当にお姉ちゃんの事を考えていなければ、そんな事口に出す訳ないよ』

『そうかしらね。どんな理由でも、許されないことはあると思うわ。君だって、親にあれやれこれやれとか言われるのは苦痛でしょ？方

向性は違っけど、領域に踏み込むという点では一緒だし、思い当たる節はあるんじゃないかしら」

「分かるよ。だけど、必要がない事だったらそんな事言っかな。お姉ちゃんの知っているその家庭教師ってのは、虐める為だけに平気で人の心を抉ろうとする非道な人間なの？」

「それは――」

「そうだ、とは言えなかった。」

「例えばそれが事実ではないとしても、目の前の少年にはそれを確かめる術はない訳で、ストレス発散と理由で幾ら謂われのないこと言おうとも何の問題もない筈なのに。」

「あれだけ啖呵を切った行動を取った癖に、覚悟は半端のまま。嘘を吐いてまでアイツを批判したいと思えないのは、何故？」

「違っんだね。だったら、その人のやったことを全部否定するのは、間違っていると思うな」

「何がどう間違っているのよ」

「だって、お姉ちゃんは逃げているだけじゃん」

「グサリ、ときた。」

「私の中に渦巻き、エミヤシロウに対して、これ以上強く出ることの出来ない根幹となる部分を貫かれた。そんな感じがした。」

「逃げているだけの人が、説教をしてきた人に対して反論するだけで、流石に甘えすぎだよ。許されないからって批判して、後ずさるだけしかない。そんなんじゃないし誰も変わらないし、救われない」

『……………』

『絶対に正しい、なんて理想的な選択肢があると思っっているなら、それこそ甘えだ。干渉されるべきではないっという常識的な考えを盾にして、お姉ちゃんが困るだけなら勝手にすればいい。だけど、お姉ちゃんを心配してくれる人を体よく利用して、都合が悪くなれば切り捨てるなんて真似をするのは、絶対に間違ってる』

目の前の少年が、とても大きく見える。

言葉のひとつひとつが重い。子供の姿をしたそれは、その形に不相応な言葉を並べ立てている。

適当なことを言っただけなら、そんな錯覚を覚える訳がない。いい感じにそれっぽい文字が繋がっている感じもしない。

明らかに人間の風貌をしている少年だが、まるで大人——それも相当年季の入った——を相手にしている気分だ。

ただ愚痴を言うだけの筈だったのに、何故ここまで追い詰められているんだ。

いつ立場が逆転した？そもそも立場が本当に逆転していたのか？

私は出逢った瞬間から、少年の足元で這っているだけの、小さい存在だったのだろうか。

私は、無意識にこの少年を畏れている？

だからこんなに卑屈な状態でも、反撃の糸口を掴もうとしない。するという前提が見当たらない。

それでも、ちっぽけでしかないけれど、抵抗は止めない。

止めてはいけない、そう直感が告げている。

『それじゃあ、私が全部悪いっというの？』

『言っただろ、正しいなんて言葉は幻想に過ぎない。お姉ちゃんにも僕にも、曲げられない信念、正義がある。それには当然個人差が存在し、同時にそれは、一種の溝を生み出す。自分にとって正しい事が、相手にとって必ずしもそうでないように、正しいという言葉、意味に正解はないんだ』

『それって、この誘拐犯の中に貧困に喘いでいる人がいるから、この誘拐という行為が間違っていないとも言えるんでも？』

『そうだね、残酷かもしれないけど、ここにいる子供達は不幸に巻き込まれたに過ぎないんだ』

『そんなふざけた話が通るとでも――』

『だったらさ』

少年は強く、私を睨み付け、告げる。

『自分が正しいと信じてやってきた行動って、誰が正しいと証明してくれるの？信念に基づいた正義は、淘汰される側からしたらどんなに理不尽でも、その他の大衆が救われるなら正当化されて当然なの？教えてよ、ねえ』

完全な、正義の否定。

現実を知った大人ではなく、年端もいかぬ子供が、そんな哲学めいた事を言っている。

おかしいよ。変だよ。有り得ないよ。

子供の見える目じゃない。子供が言うような内容じゃない。

何もかもが矛盾して歪んでいるのに、どうしてその状況を真っ先に

否定しようとしないうだろう。

些末な事だと切り捨ててしまえる程に、この少年の言葉に聞き入っているのか。

『…………君は、ここに居る皆を助けに来たんじゃないの？それなのにどうして誘拐犯にも同情の余地があるみたいな事を言うの？』

少年は答えない。変わらない目力で私を捉えるばかりで、微動だにしない。

まるで、私の二の句を待っているかのように。

『私は、許せない。相手側の事情がなんなのかなんて、どうでもいい。助けたいと思った範囲以外で、それを邪魔をする奴がいたら、それは悪だ。私にとつてのね。結果悪側が苦しもうが知ったこつちやないわよ、誘拐は殆どの人が肯定する悪行だと確信して言えるし、こつちが同情する気はさらさらないわ。私は正義の味方でもなんでもないの、だから独善的と言われるように、やりたい様にやらせてもらうわ』

言いたいことは全部言った。

そうして私は自分の帽子の鰐を口でくわえ、縛られた腕の縄に足を掛け、左手の人差し指を利き手で思いつ切り握る。

『見てなさい。私の身勝手で、アンタ達全員家に帰してあげるから実行する恐怖とは、切っ掛けを得るための一歩であり、同時に大きな代償を齎す事を指している。』

口の中一杯の唾を一気に飲み込む。

季節は夏を通り越しているにも関わらず、汗が止まらない。

今にも震えそうな身体を、覚悟で押さえつける。

少女はその華奢な指に力を込め——一気に関節を外した。

『——ッッ！！』

体感した事の無いぐらいの激痛が私を支配する。

だが、そんな中でも無意識に私の足は、縄から抜けようとする為に力を緩めない。

指を離し即座に腕を引っ張り出し、ようやく痛みに構う段階に入れた。

その数秒にも満たない行程だが、その一瞬の痛覚の認識しなかった時間のツケを支払うかの如く、私の身体は地獄へと浸かり出す。

痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い——！！

地面に無様に転げ回りながらも、叫ぶのを堪える為に歯を必死に食いしぼる。

帽子の鍰をくわえる事で緩衝材の役割を持たせるも、予想を遥かに超えた激痛のせいで、口の端からは歯茎からの血が垂れていく。

普段の自分なら、痛みに負けて叫ぶのを躊躇わなかっただろう。

それをしなかったのは、単に覚悟が後押ししたからなのか、少女が知らずの内に成長していたからなのか。それを知る術はない。

ひとつ言えるとするなら——彼女の覚悟は、決して無駄にはならなかったと言うことだ。

『ッハア——なに驚いた顔しているのよ。さっきまでの毅然としていた態度はどうしたのよ』

『いや、だって、その、指』

『なあに、こんなの、全然平気、よ』

誰でも分かる虚勢を張り、よろよと立ち上がる。

いつの間にかあの騒がしかった子供達は静まりかえり、全員が私を何事かという目で見ている。あれだけ暴れれば誰だって興味を引く。

『……………そんな身体でどこへ行くんだ？』

『言っただけでしょう、アンタら皆纏めて助けてあげるって。でも、この人数を隠れたまま逃がすなんて考えられないでしょう？ならやることはひとつしかないじゃない』

救援も期待できない、黙ってても状況は好転しない。

ならば多少強引だろうと、立ち足はかかる敵を排除して進まない限り、絵に描いたような幸せな未来は訪れない。

縋ってばかりで理想の未来が訪れるだなんて、ハナから思っていない。

頑丈なだけ取り柄で、得意の獲物も何もない状況。それに加え不明な敵の総数。強引を通り越して、無謀だと言われても何も言えない。

だけど、私がやらなければ、子供達は救われない。

善人ぶる訳じゃない。偽善だと言われても結構。

そんな言葉では私は揺るがない。

助けたいから助ける。そこに深い意味なんて必要ない。

そんな身体より先に頭が働くような行動に、自分の純粋な意志なんて存在しない。

そんな複雑化した行動理念なんて、何ら価値はない。少なくとも私は、この思想を曲げる気は絶対にない。

『待つて』

『止めないで、下手に時間を取られるのはそれだけ不利に繋がることなんだから』

『そうじゃない。その扉は何かしらの方法で施錠されているみたいなんだ。だからこっちから開けるには破壊しかない』

『破壊つて———それじゃバラしてくださいって言うようなものじゃない』

『そこで止めた理由だよ。犯人の一味は定期的に此方に見回りに来るんだ。出来る範囲で調べた限りでは、扉の先は通路かなにかだけしかない。推測ではあるけど、さっきまで結構な声量があったにも関わらず誰も来なかったっていうのは、それだけ犯人が遠くの部屋にいて、そこに行くまでに何枚かの壁がある———つまり、それだけ犯人達とは距離があるということだと思う。子供が相手だから、油断しているんだろうな。そして、見回りにくる奴は常に一人だった。これも子供相手だからって理由だろ。見回りは定期的に変わっていて、俺が確認した限りだと五人は別人が来た。最大数は分らないけど、最低数が分かってればそれだけでも安心出来るんじゃないか？』

『———そう、情報ありがとね』

私を心配してなのか、あくまで目的遂行の円滑を図ってかは知らないけど、この情報は有り難い。
これで僅かにでも成功率が上がれば、それだけこの子達を危険に晒さなくて済む。

私の取ろうとしている行動に不安があるも、何も言えず縮こまるだけの様子の子供もいるみたいだが、私の我儘に付き合わせてしまうのに安心させる言葉が思いつかない自分が恨めしい。

与えてあげられる安心は、やはり無傷での生還が全てだ。

最初から失敗は許されない事は承知だが、子供達の事を想うとより緊張が高まって来る。

『ここに時計はないから確証はないけど、感覚的にもうそろそろ見回りが来ると思うから、やるんだったらドアの死角に隠れてないと』

『そうね、そうさせてもらうわ。——後ろ向きな発言になっちゃうけどさ、もし私が居ないときに犯人の誰かが来ても、下手にかばわなくていいわ。寧ろ売るぐらいの気概で責任を全部押しつけて頂戴。これは私の独断で、貴方達は全く関与していないの一点張りです。通せば、被害を被る事はないでしょうし』

それだけ告げ、私は言われたとおりドアの死角に隠れる。

壁に耳を当てて、外の音を拾おうとする。

静かになった倉庫の外から、等速で音が近づいてくるのが分かる。

私は唾を飲み込み、息を止める勢いで気配を消す。

勝負は一瞬。不意打ちが失敗すれば子供達が危ない。

音が止み、硬い音が軽く響く。

そしてゆっくりと、軋みを響かせながら開いたドアが開き、一步、

一步とソレは倉庫へと足を踏み入れたのを確認し——私は低姿勢で駆けた。

犯人に向けて、全力の水面蹴りを当て、前へとバランスを崩させる。倒れ込むソイツに向けて、私は機能する手で下から昇るような掌底を浴びせる。

苦悶の声を上げるソイツを尻目に、私は跳躍し、頭部に踵落としを

一発入れて、昏倒した。

ワァッ、と子供達の歓声が上がりに出した所に反射的に、静かにしろとジェスチャーする。

危ない危ない、これで気付かれたらたまったものじゃない。

さっきの掌底は普通なら手首をおかしくしても可笑しくない力の加え方だが、そこは丈夫な天人だから成せる技。痛くも痒くもない。

間接外しは内部からのダメージであり、骨が砕けたとかそう言った方向でのダメージではないので、痛みを感じるときは感じる。

あくまで丈夫なだけで、無痛症とかではないのだ。

『やるね、お姉ちゃん』

『なーんか驚いている風には見えないわね。っと、こんな物騒なもののは没収しなきゃね』

犯人の一味が腰に備えていた折りたたみナイフを失敬し、自分の縄を切り落とす。

そして切ったそれで犯人の手をきつく縛り上げる。

本当は足も縛りたい所だけど、ここで子供達の縄を切れば共犯扱いされる可能性が増えてしまう。

代わりはないものかと辺りを見回していると、少年が提案してきた。

『俺の縄を切って、それを使えばいいよ』

『……………どうしてそう、私が考えている事が分かるのかしら』

『この状況だったらそれぐらいでしょ、思いつくの。普通に手だけ縛っただけじゃ危険なのは分かるって』

『はいはいそうですね。でも駄目よ、さっきも言っただけですけど共犯って証拠を残すと面倒になるって』

『俺はいいんだよ、最初からお姉ちゃんと同じ目的でここに来たんだから。今更大人しく捕まっていたところで、共犯なのは変わらないよ』

『そんなの、自分の都合じゃ——』

『そう、自分の都合だ。だから俺はお姉ちゃんの見解なんか関係なしに、自分の意志を貫く。これは、俺の信念に対するけじめだ』

本当に、分らない。

少年のこの意志の強さは、一体どこから来ているの？

人の事言えた口じゃないけど、子供がここまで一つの目的に対して確固たる信念を露わにするなんて、あり得ることなんだろうか。

いや、そんな事今の大人でも簡単にはできない。いや、やろうとしない。

誰もが自己保身に走り、狡猾に、狡猾く生きる方法ばかりに進もうとする。

我が身可愛さに平気で他人を犠牲にしたり蹴落したりする癖、他人に擦り寄って甘い汁を吸うことばかり考えている。それが大人——
いや、知的生命体の本質だと、そう思っただけで疑わなかったのに。

この少年みたいな正義感溢れる姿は、どんな人生を歩めば産まれるというの——？

『分かったわ。但し、縄は切るけど絶対に付いてきては駄目よ。君は犯人が万が一を起こさないように見張るの。貴方の仕事は、とても重要なものよ』

『…………分かった。お姉ちゃんの方こそ、一人なんだから無茶しちや駄目だぞ。捕まればお姉ちゃんの力じゃ大の大人には抵抗出来ないんだから』

『ええ、努力するわ』

少年を縛る縄を切り、気絶している犯人の足を縛り終える。

私は子供達を一瞥し、笑顔を浮かべる。

大丈夫だよ、安心して。そういう想いを込めて。

それを最後に私はドアを閉め、前を向く。

先程何かないと見回していた時に発見した、一本の木の棒を手に取り取る。

ドアの作りを見る限り、どうやらこれは門のようだ。硬い音がしたのは、これを置いた音だったんだ。

取り敢えず、非力な私でもこれがあるだけで大人にも勝ち目が広がる。

無策で啖呵切った訳じゃなかったけど、やはり武器がなかったのは心許なかった部分ではあったし、大助かりだ。

『落ち着け、私。気圧されるな、臆病風に吹かれるな、背筋を伸ばせ、前を見る』

ブツブツと自己暗示を込めた言葉を言い聞かせる。

弾幕遊び以外で明確に戦いと呼べる動きをするのは、死神との戦い以来だ。

死神に比べたら圧倒的に相手は弱い、それは確信を持って言える。

だが、複数人を相手にするのは初めてだし、お気に入りの武器もないこの状況で、更に失敗すればそこで終わりというプレッシャーが、私への恐怖の後押しを増長させている。

自分の為以外の、誰かを守る為の戦い。

想いを背負うって、こんなに重たいものだったんだ。

漫画とかに出てくるヒーローと違って、いつもこんな思いしてたのかな。

こんなに苦しくて辛いのに、どうしてあそこまで頑張れるのだろう。私みたいな一度きりの勇気とは違い、何度も何度も悪に立ち向かうその姿は勇敢で眩しいものがある。

でも、何度も何度も傷ついて、苦しくても立ち上がって——結果的に誰かを助けることが出来ても、それを讃える言葉は、救った人数とイコールになるとは限らないのに。

そこまで苦勞して、彼らは何を得ているのだろう。

『ッ——下らない事考えてないで、いかないと』

その下らないことを考えていたお陰で怖気が解消されていたことに気付かないまま、私は通路の最終地点にまで辿り着き、ゆっくりとドアを僅かに開ける。

三人程度のばらけた会話が展開されているらしく、癪に障る笑い声が聞こえたりと、酷く不快感を煽られる。

会話の内容の中には、子供を攫って売り払えば暫く遊んで暮らせるだの、吐き気がするものも含まれていた。

——少年、この会話を聞いてもまだ、相手の都合を考えてこの身を犠牲にする選択肢が浮かび上がると言えるのか。

私は死んでもお断り。こんな奴らの糧になるくらいだったら、舌を噛み切ってやるね。

こういう奴らが平気でのさばっている世界なんだと改めて理解させられる。

幻想郷は全てを受け入れる——ですって？こんな奴らに手を差し伸べて、何になるっていうんだ。

過ちを犯しても更正すればいいみたいな話を聞くが、そんな犯罪者に手を差しのばすというのは、つまり何の罪もない人達が再び危険に巻き込まれる可能性を高めている事に他ならないのに。

下手に甘さを与えるから、犯罪に手を染めても笑っていられる奴らが増えていくのに。

そして何より一番悲しむのは、被害者なのに。

それが分からない偽善者共は、モホロビッチ不連続面辺りまで埋めてやりたいね。

『行きますか』

木の棒を強く握りしめた私は、思い切りドアを蹴破り、近くで目に入った犯人の頭部へとフルスイングをぶちかました。

突然の事態を理解する間もなく、一人はそれで沈む。

椅子に座っていたもう一人の男は、慌てて立ち上がり距離を取ろうとしているが、遅い。

前に傾くように疾走し、そのまま胸部に横薙ぎの一閃を入れ、片足を軸に回転してそのまま後頭部に一撃。当然ダウン。

どこぞの庭師みたいに剣術を習っている訳ではないけれど、剣を使つて今まで戦ってきたというのは共通している。

自己流だったり、本を読んで見よう見まねで体得したものなど、練度こそ本物に劣るけど、実戦で使える？戦い方？を会得していたのだ。

さっきの一連の動きだって、剣道というのを真似したりしていたもので、なんとなく身体が動いたからやっていただけ、いい感じた。

残り一人。そういつて振り返ると、犯人の物凄い形相でナイフを振り下ろしている姿があった。

その刃は私の肩に向かって振り下ろされ——簡単にへし折れた。

『悪いわね。私、そういうの効かないの』

困惑している姿を他所に、股間に思いつきり膝を食らわし、短剣道よろしく突きを腹に食らわせて倒した。

悪びれず、もう一押しと言わんばかりに顔に蹴りを入れておく。

取り敢えずいい感じに長い縄があつたので、三人を背中合わせに固めてそのまま縛ることにした。

これで四人。言われた限りでは五人が最低数らしいけど、外に監視が一人でもいると考えれば、それだけで最低数は突破される。

安心は出来ない為調べるのを止める気はないが、その前に武装解除しよう。

『まったく、こんなか弱い女の子に平気で刃物振り回すとか、頭おかしいわね』

刃物だけじゃなく自動小銃まである。流石にこれで撃たれたら痛かったかも。

珍しいものだし、一応もらっておこうかしら。俗物だけど、河童となら面白いものと交換してくれるかもだし。

弾は数発入ってるし、切り札にもなり得るかも。

『さて、次行きましょう』

そう勇んで新しいドアを開けた、が――

『ちょっと階段があつて、その先は行き止まり、か』

遠目だからいまいち分からないが、行き止まりの所は恐らく地下の入り口みたいな扱いで蓋がされているのだろう。

そうなれば外にいてもこっちに来るのには時間が掛かる筈。

ならば一度皆の所に戻って状況報告するべきだろう。
そう思って振り返り、戻ろうとした瞬間。

『さつきはよくもやってくれたじゃないか、嬢ちゃん』

先程倉庫で倒した筈の犯人が、少年にナイフを突きつけて立っていた。

『お姉ちゃん、ゴメン。油断してた』

申し訳なさそうに項垂れるその姿からは、あの時の力強さは見あたらない。

『あれだけ痛めつけて徹底して縛っていたのに、どうしてこんなに早く』

『理由としては不十分だろうが、まあ言っしまえば俺が丈夫だったっただけよ。縄だって嬢ちゃん達が気付かない所に刃を隠していただけだしな。そうでなきゃリーダー務めるなんて無理だったの』

余裕な態度で説明を始めている辺り、人質が抑止力となっているのをちゃんと理解しているらしい。

ここからアイツの所まで踏み込むのと、少年にナイフを突き立てるのでは、どちらが早いかなんて考えるまでもない。

一人だけだからって油断していた、私の責任だ。

あの時の成功に驕らず、もっと念入りに持ち物検査しておくべきだったのだ。

『さて、言いたいことは分かるよな？大人しくあそこまで戻って欲しいんだわ』

『…………仮に戻ったとして、子供達はどうなるの?』

『そんなの、分かっているだろう?』

犯人の返答に舌打ちをし、冷静に状況打開に思考を巡らせる。

こうなってしまった以上、相手側に油断は消えた。不意打ちは効かないだろうし、真っ向勝負では人質が盾となっている。

どうする?

ひとつの選択肢としては、私が逃げて助けを呼びにいくかがあるが、少なくともそうなれば少年の身の安全は保証されない。

そして、戻ってきたらもういないだなんて結果だって有り得る。何せ相手は一週間近く隠れるのに成功している抜け目ない奴らだ。逃走用の手段を幾らでも持っていると考えた方がいい。

——私だけ逃げる?

ここでの出来事は何も関与しなかったと目と耳を塞ぎ、天界で悠々自適な生活に戻る?

確かにそれはアリだろう。結局の所あの子達とは他人に過ぎない。そこまでする義理はないし、ここで下手を打てば誰も助からない可能性だってある。

それだったら、私だけでも逃げたって、罰は当たらないんじゃない?

『——なんて、考える訳ないじゃない』

キツ、と犯人を睨み付け、状況打破の一声を上げる。

『ねえ、交渉しない?』

『交渉？』

『私が売られるのを享受する代わりに、あの子達全員見逃して欲しい』

これが、私が考えつく中で、一番救われる数の多い選択肢だった。

『——お姉、ちゃん？』

『おいおい、そりゃあ笑えない冗談だな。あそこの子供はせいぜい二十はいる。それを売り払った値段と自分がイーブンになるだなんて、本気で思ってるのか？』

『ええ。——だって、私は人間じゃなくて、天人だから』

それを聞いて、犯人の目が微かに見開く。食いついたわね。

『貴方も知っているでしょう？天人の存在を。不老不死であり頑強な肉体を持ち、普段はその姿は天界に有り、滅多にその姿を地上に現すことがない。そんな高位の存在だって』

『その説明だと、俺なんか目の前にその天人様が現れるとは思えないがね。それに、天人だって証拠がねえ』

『ま、そういうと思ったから………見てなさい』

私は一度左手を見せた後、もう片方の手で先程の拳銃を構え、左手に押しつける。

安全装置を外し、私は躊躇いなくその引き金を引いた。

大きな火薬音と共に左手は慣性に従い思いつきり引っ張られる。

左手の痛みと、両肩が外れる痛みに耐えながらも、先程と同じように左手を見せる。

そこには、火薬による焦げ跡こそあれど、普通なら出来ているであろう穴が存在しなかった。

『成る程ね、妖怪でもそこまで頑丈な奴はいないだろうし、信じてやるよ』

『じゃあ、約束してくれるわね』

『ああ。子供共が束になったところでアンタの存在以上に価値になるものなんて稀だろうし、そのぐらいでケチケチはしねえよ』

私は犯人の下へ歩いていき、少年と交差するように位置を入れ替わる。

『ごめんね、怖がらせちゃって』

交差する直前、私は少年に小さく呟く。

少年はそれに驚いた様子で振り返るが、私はそれに気付かない振りをする。

これでいいんだ。元々私が無茶をした結果でこうなったんだから、償いするのは当然なのだから。

『さて、こっちに来てくれたところ悪いが………さっきのお返し、させてもらっぜ』

そう言うが否や、犯人は私の腹に全力で拳を振り抜いた。衝撃で軽くふらついている所を、今度は顔面に向けて同じ動作を繰り返した。

私は軽く宙を舞い、そのまま背中から倒れ込む。

『結構本気で打ち込んだんだがなあ、鼻血のひとつも流さないとは、流石と言ったところか』

頭がぐらぐらする。

衝撃が脳に伝わったのだろう、軽く吐き気がする。

だが、ここで弱音を吐くわけにはいかない。

あの子が、見ているから。

『お姉ちゃんっ！』

『来ないで！』

私の下へ近づこうとする少年を、全力で制す。

これは、受けるべき罰。

犯人も人の子だ。あれだけの事をされて平然といられる訳がない。

その矛先を少年に向けない為にも、この痛みは私が受けないといけないんだ。

丈夫さが取り柄だし、こういうのは私が適材適所って奴なんだ。

だから、こんなの痛くないし、怖くもない。

『俺の分はともかくとして、仲間の分はきっちりとお返ししとかな
いとな。こんな奴らでも、仲間だからな』

『そんな奴らだって分かっている癖に、どうしてアンタは――』

――

『さてね。最初は愛着も何もない、ただの目的達成の都合がいいからって間柄でしかなかったけどよ、なんだかんだでつるんでいれば』

情が沸くものさ。やってることは外道だが、身内には優しい奴とか、無口だが人情に厚かったりと、個性も見えてくるし、余計にな」

『同じ外道に走るアンタらを見ると、傷の舐めあいをしていたって言われた方がしっくりくるわね』

『否定はしねえよ。こうして子供を攫った理由だって、結局の所自分自身の為だしな』

子供達にしてきた事に対して、負い目を感じないその口調に、怒りの前に疑問が浮かんでくる。

『なんで、こんなことしたのよ。アンタなら、もっと綺麗な形でお金を稼げるんじゃないの？』

これは、紛れもない本心。

身内に優しく出来て、仲間の為に怒ることが出来る。そして、リーダーとしての資質。

彼ならば、誰にでも慕われる村の人気者になれると思うのに。

『それは買い被りつてもんだ。こういう下等な奴らの上に立っているからそう見えるだけで、俺なんか他の一般人に埋もれるモブではない。そんな俺らが一生を賭けて稼ぐ金なんてのは、しょぼくねたもんだ。嬢ちゃんみたいに恵まれた環境にある奴には分からないだろうが、短い人生で働く時間の割合ってのは、だいたい六、七割ぐらいなんだ。そして残りだつてある程度の制約があつて自由に生きるとはままならない。冷静に考えて、生きる為に働いているんじゃないくて、働く為に生きてるなんて馬鹿馬鹿しいだろ？』

『だから、他の人はどうなってもいいと？』

『倫理観で物事を考えるなよ。結局手を取り合ってだなんて理想的な事は有り得ないんだよ。そうじゃなきゃ格差なんて生まれなし、貧富の差も出来はしない。誰かが誰かを蹴落とすから、ソイツは一步段の上になれるんだよ。そして、その本能は誰だって持っている。聖人君子なんて、物語の中の存在でしかないんだよ』

……欲望に忠実に。

非力な人間は、必然的に社会に縛られる為、余計にその憧れが強まるのかもしれない。

私も元人間だけど、天人で居た時間の方が長かったから、彼ら寄りの思考が出来ないでいるのか？

私の意見は、物持ちの良い箱入り娘の戯れ言に過ぎないのだろうか。

『——本当にそうなのか？』

自身の信念に対する喪失感を感じつつある私の耳に、少年の言葉が入り込んでくる。

犯人もその言葉に反応し、少年の方へと首を向ける。

『確かに他人を踏み台にしてのし上がったリ、他人より裕福でありたいとか思うのは正しい人間の心理なのかもしれない。だけど、決してそれだけで終わる存在じゃない！』

『——』

『人間は獣じゃない。考えて、学習して、改善することが出来る。貴方自身が人間の闇を理解しているのなら、貴方が変える努力をしないでどうするの！勝手に絶望して、その淵に未来ある子供を巻き込んで——こんな世界を嘆いているなら、その未来を変える片鱗

となる子供の存在は、何よりも尊い筈。貴方は結局、自分の無力を、本能や環境のせいだと言いついて、逃げていただけよ！』

少年の口調が、まるで女性みたいなものに変化している。

しかし何故か、それを違和感として感じない。まるで、彼は元々こんな口調だったかのような、それぐらい自然な音。

だが、今はそんなことはどうでもいい。

彼に言われて、目が覚める。

彼の揺るがない意志が、私の憂いを吹き飛ばしてくれた。

そうなれば、ここで尻込みなんてしてられない。

『そうね、やっぱりアンタの言うことは間違っている。他人を犠牲にしてお金を得たって、心は貧しくなる一方。そうやって得たお金で享受する幸せってのは、歪だと思う。少なくとも私だったら、後悔の念で一杯になって、後々廃人になるか自殺するわ』

『そういうところが倫理観に囚われているっていうんだ。他人の人生を蹴落としているという点では、テストでいい点取ったり、就職試験に合格するのだって一緒だ。自分で手にかけてないかそうでないかの違いでしかないんだよ。そんなのいちいち気にするんだったら、牛や豚だって食えやしないぞ。俺達はさっきの例と同じ事を、毎日繰り返してるんだ。今更善人面するなよ』

『正しいかそうでないかはこの際問題じゃないのよ。私はアンタのやり方が気に入くない、むかつくから意見しているんであって、別に善人でもなんでもないわ。寧ろ、アンタとの対立で私が悪という立場に置かれようとも、そんなの気にしないわ。ただ私は自分の意志を貫く。生きる為に、後悔して生きていけない為に』

犯人はどこか悲しそうな目を伏せながら、しかし揺るがない声色で

答える。

『……………そうかい。後悔しない生き方なんて、そりゃあ魅力的ではあるが、結局もう手遅れなのさ。俺は悪事を働き、お前はどこぞの変態富豪に買われる、その運命は変えられない。平凡な日常なんて、もう届かないんだよ』

そう。私達がどんなに御託を並べても、それだけはどうしようもない。

私が真つ向勝負で彼に勝てる保証はないし、ミスをすれば折角安全が保証された子供達に危険が及ぶ。

ここでもし全く別の運命を紡げると言うのなら、それは私でも少年でも、ましてや目の前の男でもなく――

『そうでもないさ、ただ――その平凡とやらの貴様が存在しないだけだが』

『――え？』

――第三者の、介入。

『グッ、アアアアアアア！！』

ここに居る筈のない、聞き慣れたテナーボイスと共に、犯人の絶叫が響く。

肩には木製の矢が突き刺さっており、私はその射線上を目でなぞり、使い手の正体を確認した。

『シ、ロ——ウ?』

そこには、ぶつきらばうで癪に障る言動が特徴で、ただ言葉の節々に優しさを見せたりと、どこか憎めなくて——そして、先程喧嘩別れした筈だった青年、エミヤシロウが弓を片手にそこに立っていた。

『そこで見ていたまえ。これで全て終わった』

『ッ……おいおい、外には見張りが数人いた筈なんだが、どうやってここに来た?それに、ここは隠し通路経由でしか来られないんだが』

『見張りと思わしき男共だが、襲いかかって来たので適当に気絶させた。この場所が分かったのは、そこにいる少女達の叫び声を辿って、偶然辿り着いたに過ぎない。私は、目も耳も優れているので、容易だったよ』

『それが本当だとしたら……俺達はもうおしまいだな』

地面に片膝をつき、シロウを見上げる犯人。

意外にもその表情は悔しさで歪んではおらず、どこか安心した優しい顔つきになっていた。

シロウはその青年の腕を縄で縛り、この事件は終わりを告げた。

数時間ぶりの日差しを浴びられると思いきや、太陽は半分沈んでお

り、眩しいオレンジと黒が世界を覆っていた。

意識を失った時もこんな景色だった気がするし、もしかして私、だいたい一日近く眠っていたってことよね。そう考えるとお腹空いてきた。

後に聞いた話だと、私達がいた倉庫は、里の裏道にある、今にも壊れそうな小屋の地下に出来ていたものだったとか。

作られたのも一世代前ほどらしく、この地下の存在を知っているのはごく少数、しかも時代背景的に知っている人は皆老人なので、必然的に盲点となっていたらしい。

それにあのリーダーがいい感じに根回しをしていたのもあり、今回のような結果を招いたということになる。

『……………良かった。子供達は全員、家族の下に戻ったらしいわよ』

『それは何よりだな』

隣に佇む青年を見上げ、表情を覗く。

どこを見ているのかも分からない、しかし虚ろな訳でもない。

普段から何考えているか分からないけど、今回は何時にも増してそう感じさせる。

『……………ねえ、どうして助けに来たの？私、アンタにあれだけ怒鳴り散らしたばかりなのに』

『助けるだなんて大層なことは考えておらんよ。私はただ、君が帰ってくるのが遅いから衣玖に頼まれて探しに来たに過ぎない』

『……………そうよね、頼まれなきゃ、私のことなんて探そうとも思わないわよね』

その返答に、シロウは答えず、ただ無言で変わらない景色を眺め続ける。

苦しいぐらいの静寂が私達の間で広がり、それに逆らえない私は同じく無言でその苦しさに耐えている。

そして、一瞬だったのか、それとも数分と経っていたのかも分からない時間は彼の言葉で終わりを告げる。

『私こそ問うが、何故あんな無茶をした』

『あんなって、さっきの事よね』

『それ以外に何があるんだ』

シロウの言葉へ、徐々に覇気が込められていく。

表情こそ変わらないが、心なしか怒っている風を感じる。

『……簡単な話よ、あしなきや私は助からないって思ったからよ。大人しく捕まったら、どうなるか分かったもんじゃないもの』

『私は、か。それにしても随分と強引な手段を取ったものだな』

『何が言いたいのか？』

『君？だけ？が逃げるのなら、いざ連れて行かれる時まで大人しくして、外に出た瞬間暴れれば済む話だったのではないか？あの惨状を見る限り、捕まっていた中で君以外が年端もいかぬ子供だったのも分かっているし、君が中の犯人を殆ど仕留めたと考えるのは必然だろう。何故強引な手段を取ったのか、それは自分自身を犠牲に少しでも子供達を助けたいという意志があったからではないのか』

『――』

どうして、こうもあっさり見破られたんだ。

私達の会話の全てを聞いていたとは考えにくいし、流石の私もその為に待機していたなんて莫迦な考えを持つ奴とは思ってはいいない。私みたいな奴と会ったことがある。これが一番の可能性。

それにしても見透かされ過ぎている感じもするが、今はそれは重要なことではない。

『それに、この指だ』

『痛っ――いきなり触らないでよ』

シロウはとても優しく触れてくれてはいたのだけれど、それでも痛みを感じてしまい、つい突っぱねた態度を出してしまう。

――決していきなり触られたことにドキッとして、自分で指を動かしたせいではない。断じて。

『指が青くなっているぞ。形状からして間接を外したのだろうか？』

『そうよ、悪い？』

『悪いに決まっているだろう。この状態で激しい運動をしていたのなら、初期の頃よりもだいぶ悪化が進んでいる筈だ。ちょっと待っている』

そう言うと、シロウは親指サイズの木と包帯を出してきた。

あの時のホワイトボードといい、何故か彼なら望んだものを出してくれる髭のお爺さんのイメージが定着しそうだ。色もいい感じに赤主体だし。

外れている指に木の板を番え、それを包帯で押さえるように巻き付ける。

締め付けられる感じがなかなかきついけれど、ブラブラさせていた時より痛みの波が一定なので、案外楽だ。

『骨折の治療みたいな扱いで済まないが、下手に動かすよりはよっぽどいい。指を冷やして、病院ですぐに診てもらった方がいい』

『そうね、そうさせてもらうわ。——だけでもう少し、話さない？』

『しかし、それでは——』

『お願い』

シロウの服の裾を掴み、懇願する。

ここで引き留めなければ、もう会うこともなくなるかもしれない。そうさせたのは私だ。どの口が言うかと思うだろうが、罵声を浴びさせてしまった以上、もうあんな関係には戻れないに決まっている。だからこそ、ここで言いたいことを言えないままで終わるのは、嫌だ。

それが喻え、一方的な会話になろうとも。最後まで身勝手な女だと思われても。

『——アンタの思っている通りよ。私は端から見れば正義の味方のように見える行動を取ったわ。結果的にそうなった訳じゃないくて、私がそう望んだから。つまり、金持ちの世間知らずなお嬢様が、物語に出てくるようなヒーローみたいな事をしたってことよ。笑えるでしょう？』

自嘲するように語る私を、無言で見つめるシロウ。

何か言ってくれればいいのに。莫迦野郎とか、愚か者だとか、罵ってくれてもいいのに。

そうしないと、私が彼にした事に採算が取れないのに。

……いや、それは甘えなのか。結局それも、私が救われたいからであり、そこに彼の意志はない。

なら、このまま何も言われない方が、私にとって戒めになるのか。

『でも、それは客観的に見たらっただけ。私は自分の為に、自分が満足する為に助けたに過ぎない。それは最初から分かってたし、理解した上で行動を起こしていた。だけど、犯人の一人に言われたの。他人を蹴落とすのがヒトの本質であり、手を取り合うのは莫迦げているって。その時不覚にも納得しちゃったの、一瞬ね。あの時一緒にいた子の言葉がなければ、一生間違っただままだったかもしれない』

私はその場にしゃがみ込み、そのまま膝を抱え込む。

『——犯人の言葉を肯定する訳じゃないけど、私みたいに半端な覚悟で誰かを助けても良いものじゃなかったのかもしれない。もつと芯の強い、本当にヒーローと呼べる存在に助けてもらった方が、あの子達も良かったんじゃないかって、ずっと考えてた。こんな、私なんかより——』

突如、頭に軽い感触が降り掛かる。

帽子越しにも感じる暖かさが、荒んだ私の心を優しく包んでくれている気がした。

『……私には君の苦しみは分からない。悩みを解消出来るとも思えない。そんな私が言えることと言えば——その子供達は、君の言う通りのことは考えてない、ということだ』

『――』

『気休めの言葉にしか聞こえないだろう。虚言としか思えないだろう。だが、私も根拠もなしにこんな事は言ったりはしない』

『…………じゃあ、根拠って』

シロウの姿を見ると、ゆっくりと腕を上げ、真っ直ぐ指を指す。その先を見つめ、私は驚きで目を見開いた。

『あれが、私の根拠だ』

指を指す先からは、倉庫にいた子供達が、手を振りながら走っていた。

呆然とその姿を見つめている私に、シロウが言葉を続ける。

『子供というのは純粹だ。善意にも悪意にも敏感だし、だからこそ周囲の環境に性格が影響する事が多い。逆に言えば、君のように深く物事を考えたりはせず、自分の信じた現実だけを頼りに行動を起こす。あの子供達の笑顔を見る、あの笑顔に偽りがあると思うか？』

『あれは、アンタに向けられたものだって可能性も――』

『君が奮起したからこそ、子供達は希望を持ち、絶望の淵から生還出来たのだ。私がおもしろいところを取った構図だから勘違いしているのか、自分が信じられないからなのかはこの際どうでもいい。だが、君がどう思おうと、それは曲げようのない事実。君は、子供達にとっての正義の味方なんだ。それは、誇りこそすれ、決して否定してはいけない。それを否定すると言うことは、子供達の無事に生

還した時の喜びも、子供達が助かったという喜ばしい事実すら、否定することになるんだぞ。それでも、君は――』

『いい。もう、いい』

私はシロウの手を払い、その場から立ち上がる。

そして、それと同時に私は子供達に囲まれるように抱き着かれる。皆がしきりにありがとう、ありがとうと感謝の言葉を述べている。単純だけど、心に来る一言。

私は知らず、頬から涙を伝わせていた。

『衣玖から聞いた。君は元人間で、その頃の名は地子と言い、その存在の二面性で悩んでいたということも』

『――そう、子供っぽい理由で悩んでいると思ったでしょう？』

『悩みは人それぞれだ。他人からしては特別気にしない様な事でも、自分にとっては人生を揺るがす程重大な出来事になり得る。だから、それをどうこう口出しするつもりはない。だが、私が思う限りでは……今のこの状況こそ、君の望んだ理想の世界なのではないか？』

『だと、いいわね』

『それを判断するのは君自身だ。君の見る世界が変わるだけならば、私もいらぬお節介はしない。ここからは、君自身が物語を創るんだ』

シロウはそれを言い終えると、躊躇いなく振り返り、どこかへ立ち去ろうとする。

子供達に囲まれて動けない私は、首だけ彼の方向に向け、呼び止める。

さつきは迷ったけど、やっぱり言おう。

『待って！』

『何かね？折角邪魔者は去ろうと空気を読んだんだが』

『——あの、さ。あの時はついカツとなって言っちゃったけど、家庭教師解雇の話、やっぱり——』

『その件だが、そろそろ私も他の事で忙しくなりそうな時期でな。天人の家庭教師を務めるのは難しくなってきたのだよ』

『——そう、なんだ』

ああ、避けられているな。そう瞬時に納得する。

何だかんだ言っているけど、明らかに都合がいい位出来た話だ。

露骨すぎて、逆に清々しいや。

淡い期待を抱いていたけど、自ら崩した砂の城は、皮肉にも崩した自分では建て直すことが出来ないという事が。

シロウは無言で振り返り、再び歩き出す。

彼の後ろ姿を虚しい気持ちのまま見送っていると、静かに呟く声が聞こえる。

『次に会うときは私達は他人だ。再び顔を合わせても、天人である比那名居天子の家庭教師はそこにはいないし、その下で学んでいた天人の少女との関係も然り。だから、今度会う時は、君を一介の少女として認識し、接触させてもらう。家庭教師の時のよしみは通用しないから、そのつもりでな』

そう言つて、彼は雑踏の中へ姿を消した。

……気を、使ってくれたのかな。私が入間の頃の環境に憧れを抱いていた事を知つて、自分もその輪になろうと、ワザと今の状況を利用して――

いや、これも推論でしかない。こういう時まで何考えているか分からないような奴だったし、言葉通りなのかもしれないし、私の予想が的中しているかもしれないし。

体よく逃げられた感じもしなくもない、が――どうせ分らないし、勝手にそう思つておこつ。

身勝手なら身勝手なりに、都合良く解釈してしまおう。

うだうだ考えるのは、もう止めよう。とは言つても簡単に決別は出来ないだらうけど。

だからせめて、今だけは――この子達の温もりを、感じていよう。この無垢な暖かさに、天人としての疲れ切った私の心を癒してもらふ為に。

この暖かさを、迷いの果てに捨ててしまおうと思わないくらい、強く、強く掴んで、離さないようにしよう。

『ありがとうね、みんな』

キョトンとしている子供達を見る私の表情は、天人として産まれて初めての、本当の笑顔を生み出していた。

人里の、少し人通りの少ない小脇の道。そこに赤錆色の少年は静かに立っている。

通りかかる人が何事かと彼を横目に観察しようとも、それに気付か

ぬ振りをし、毅然とした態度でその場を動かない。

まるで、誰かを待っているかのように。

——誰かが通りかかるのを、知っているかのように。

今まで微動だにしなかった少年が、僅かに伏せていた顔を上げる。

それは、少年の待ち人が訪れた事を暗に示している。

少年は笑みを浮かべ、通り過ぎようとする待ち人に話しかける。

『その赤いお兄さん』

『ん？君は——！？』

青年は驚愕を隠そうともせず、露骨に感情を表情に出す。

少年は、それを見て内心ほくそ笑む。少年は、彼の驚く理由を識っているから。

『こうやって顔を合わせるのはこれが初めてだよ。あの時はお姉ちゃんを助けてくれてありがとう』

『あ、ああ………礼には及ばないよ。それより、君はあの時青髪の少女と一緒にいた子で間違いないか？』

『うん。俺がドジ踏んだせいで人質に取られて、迷惑かけちゃって………』

『気に病む必要はない、と私が言える立場ではないから………君も彼女に会いに行けば良からう。そして謝ればいい』

『いや、いいんだ。俺はお姉ちゃんより、お兄さんに会いたかったんだ』

『私に？』

少年は頷き、年齢にそぐわない笑みと共に口を開く。

『——お姉ちゃんは悩みとか全部抱え込んで、最後に破滅するタイプだから。お兄さんみたいな人がついていないと、他人を巻き込んで自滅していく。だから、しっかりと手綱を握っておいてあげてね』

『いや、握るも何も私は彼女とはもう他人で——』

『お願い。アンタじゃないと、駄目なんだ。他の誰でもない、エミヤシロウじゃないと』

『——！、君は、一体』

『じゃあ、伝えたからな！』

青年の言葉を遮るように少年は声を上げ、そのまま人気の無い地へと走って消えていく。

周囲に誰もいない程の奥地。あんな目にあつたばかりでそんな行動を取る神経を疑われそうだが、彼にとって、その危険を示すグラフは意味を成さない。

彼にとつての危険とは、常人には推し量る事が出来ない領域にあるのだから。

『さて、もういいかしらね』

静かにそう呟くと、少年の形に歪みを生じ始める。

無定型にぐにやぐにやと音を立てて動く様は、妖怪が当然のように存在するこの世界ですら、不気味と定義されるであろう異常性がそこにはある。

質量保存の法則を完全に無視し、横、縦と共に成長していく。

刺々しい短髪は柔らかい長髪へと変わり、美しいまでのブロンドを靡かせている。

少年であつた筈の肉体は女性的に変化し、形容できない程完璧なプロポーションに。

服装はどこにでもある特徴のない平凡なものから、道士服とフリルドレスを組み合わせたような、独創的だが美しさを損なわない造りのものを着こなしていた。

結論を言えば——あの少年の正体は、八雲紫が境界の力を使い化けていた姿だったのだ。

何故そんなことを？と思うだろう。

少年の姿の時に、子供達を助けようとして捕まつたと語っていたが、それは半分正しく、半分が嘘。

正確には、助けようとしてワザと捕まつたのだ。

人間の里で、失踪事件が起こっている事を知つたのが事の始まり。人間達で、更には里を守護する白沢ですら未だ解決できていない事を知り、重い腰を上げたのだ。

幻想郷のパワーバランスに固執する彼女は、妖怪である自分が人間の子供達を助けることが、揺らぎとなる可能性を恐れた。

その為彼女はいち人間の少年に化けることで、人間の姿をした自分が内部から戦い、人間側の問題として処理しようと踏んだのだ。

彼女の力を以てすれば、そんな回りくどい事をせずとも労無く助け出せる。

肉体は変化していようと、能力の行使は出来る為、死角から秘密裏に倒すなんて事は造作もなかった。

故に彼女は道楽に走ってしまった。労無く助け出せるからこそ、こ

んな無駄な行動を取っても助けるといふ結果に何ら支障をきたさないという確信があったからこそ。

しかし、イレギュラーが発生した。比那名居天子の存在である。

八雲紫が忌み嫌い、ここ最近で異変を起こしたばかりの天人の少女が、何の因果か自分と同じ目線に立つことになってしまったのだ。

当然、彼女は良い思いはしなかった。だが、異変当時の頃に比べ怒りが収まっていた為、冷静に彼女に話しかける事が出来た。

正体がばれることに警戒しつつ、彼女の頭の体操も兼ねて他愛のない会話をしていると、彼女の悩みらしき内容を聞いていた。

その中の家庭教師という言葉聞き、エミヤシロウがどの選択をしたのかを知った。

紅魔館や白玉楼に行ったのは知っていたが、天界に関しては彼女の自分勝手な都合で確認しようとはしなかった為である。

事情は何も知らないが、やはり世間知らずな子供であるということには変わらなかったと認識した彼女は、説教をした。

八雲紫では聞く耳も持たれないであろう言葉の羅列は、少年の姿が功を奏してか、多少の反論こそあれ聞いてくれた。

天人を嫌悪してはいるが、彼女自身の人柄を否定するつもりはない。世間知らずなだけなら、幾らでも更正させようがある。だが、私が動いた所で余計に反抗されるのがオチだ。

彼女が天界に仕事を与えるようし向けたのは、エミヤシロウを利用した比那名居天子更正計画の引き金とする為だったのだ。

別にそれは必須項目では無いので、選択肢のひとつに組み込むだけに留めていたのだが、理想的な展開になっていてなによりだとその事実を喜んだ。

犯人の視点で物事を考えろ、と遠回しに説教していたが、実際の所それは彼女の思慮の足りなさを改善させようとする為の方便であり、

八雲紫本人は言ったことと真逆の考えを持っている。

正義なんて言葉は甘えだという考えに嘘はないが、誘拐という行為は無関係な人間に害を及ぼす行為である事に変わりはない為、情状酌量の余地はゼロだ。

どんなに相手側に同情するような過去、経緯があろうとも、他人を踏み台にした時点でそれも消え去る。

正義は存在せずとも、悪は淘汰される。それだけは絶対に歪むことのない世界の意志として、確かに存在するのだ。

一方的に意見をぶつけ、そろそろ怒るか落ち込むかするだろうと踏んでいた頃に、それは起こった。

紫は聞いた、天子の意志を。

自分が手の差しのばした範囲だけは救おうと言う、強い決意。

自分の為だと言い訳していたが、そんな訳がない。

そんな訳がないと確信できる出来事が、次の瞬間に起こったから。

指の関節を外し、彼女は無理矢理縛られていた両手を解放したのだ。不老不死で肉体が硬いというだけは人間と変わらない存在が、躊躇いなくそれをやったのだ。

当然、少女は苦しみにのたうち回る。同時に、理解できなかった。意固地になったと言うだけで、そこまでするだろうか。私を見返すという理由だけでそこまでやろうと思うか？

………そこまで現実を否定はしない。天子は、先程彼女が否定したばかりの正義の意志で、行動を決意したのだ。

天子が犯人を討伐せんと倉庫を出てから、彼女の行動を自分自身に置き換えてトレースしてみた。

………出来なかった。イメージの中でさえ、彼女と全く同じ行動を取る事が出来なかった。

そして、気付く。自分の弱さに。甘えに。

彼女の能力は最強だ。これは曲げようのない事実であり、自他共に認めれる程だ。

その境遇に甘え、最強の能力に縋り付き、高みに自分を置き――
無意識の内に、彼女の中に慢心が生まれていた。

最強の力に頼り切りで、自分自身はこんなにも弱い。肉体も、心も
事実、あそこまで躊躇いなく自分自身を傷つけずとも、能力さえあれば彼女の苦勞を何工程も飛ばせるのだから、そうなるのも当然だ。
使われなくなったモノは、風化する定め。忘れ去られたモノは消え
ゆく運命。幻想郷へ行き着くものに該当する条件であり、彼女が定義したルールだ。

その創始者が幻想の中で自らを風化させているなんて、ある意味それらしいと思うか、皮肉るべきか。

射命丸文の時もそうだった。

私は絶対的勝利を約束された立場にいるにも関わらず、同士討ちという結果で終わった。

慢心していたから。能力に頼り、その地位は揺るがないものだと思
じて疑わなかったから。

今も鮮明に覚えている。あの天狗の手の甲から露出した骨、擦り傷等。

自らの肉体をあそこまでボロボロにしてまで、勝利を手にしうと思えるか？彼女のように徒手空拳で立ち向かう勇気が、今の彼女にあるのか？

『――駄目ね、私。いつからこんなに弱くなったのかしら。いえ、最初から弱かっただけなのかもね』

自問自答し、自らを嘲る。

これではあの天人を説教するだなんて偉そうに言えない。逆に説教されても文句は言えない位だ。

あの子を見下してばかりいたけど、自分だってそんな大層な奴じゃない。

強者という立場以外から自分を客観的に見ると、天子や文にも劣る存在だと気付いてしまう。

私になくて、彼女達が持つもの。それが欲しくてしょうがない。

『……………暫く、修行でもしようかしら』

強者となつて久しく忘れていた、努力。

もう一度弱かった頃の自分をなぞることで、弱さを克服したい。

今までシロウに構ってばかりだったけれど、それを言い訳に自身身のことを疎かにしてはいけない。

幻想郷を守る賢者として相応しくなる為、彼女は境界の入り口に踏み込み、消えた。

誰一人として知らず、その姿を消した八雲紫。

それにより彼女を知る一部の存在が大騒ぎし、小さな異変へと発展するのはまた別の話である。

弱者の覚悟、強者の驕り（後書き）

公式装備とか今回一切出してないけど、比那名居天子のキャラ紹介します。

ぶっちゃけ、終盤まで彼女が臨戦態勢になる予定ないんで、ずっと紹介出来ないから、もうやっちゃえてことで。

比那名居 天子

属性：中立・善

筋力：D -

耐久：B +

敏捷：C

魔力（霊力）：C

幸運：C

宝具（程度有能力）：B

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：B 通常弾幕に対し高度の抵抗力を持ち、スペルカードなど大がかりな攻撃にもある程度の耐性を得る。

直感：C 戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。敵の攻撃を初見でもある程度は予見することができる。

保有スキル

戦闘続行：A 往生際が悪い。瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

不滅の肉体：A 周期的に発生する条件を達成することによって得

られる不老不死。一種の世界との契約。

天界の恵み：C 天界に生えていると言われる桃を定期的に食べる
ことによつて得られる鋼の肉体。一切の概念が付与されていない純
粋な武器に対して、絶対的な耐性を得る。

宝具

大地を操る程度能力：B 対軍宝具 レンジ：1～1000 最
大補足：1000

文字通り、大地を操ることが出来る。地震を起こしたり、地形を変
更したり等、戦場では敵味方問わず恐れられる。
土の柱を造つたりする場合、周囲の土を媒体として生成する。
質量保存の法則と、発動場所が地面であるということ以外に制約は
なく、その能力の本質はランクでは推し量ることは出来ない。

緋想の剣：C～EX 対人宝具 レンジ：1 最大補足：1 対軍
宝具 レンジ：1～99 最大補足：1000

天人専用の武器。この武器そのものが、気質を見極める程度能力
を内包している。事実上の彼女の第二の能力。

敵によつてその性質を常に変え、弱点を的確に突くことが出来る究
極の宝具。

相手の気質を霧に変え、霧は天候へと到り、 気質の弱点である性
質を自ら纏うことで効果を発揮する。

周囲の気質を極限まで萃めることで、対軍宝具として使用も可能と
されている。

天人以外も所持は可能だが、効果は一切発動せず、その際はランク
C程度の剣となる。

エアと並び、エミヤシロウが解析不可能とされる宝具。

要石：C 対人宝具 レンジ：1～10 最大補足：1

注連縄つきの岩。大地に挿すことで地震を鎮めることが本来の用途だが、思念で自在に動く空飛ぶ岩の為、武器としても盾としても扱うことの出来る、汎用性の高い宝具。宝具というよりも、概念武装に近い。

能力と宝具見て、強すぎだろって思われそうですが、なんだかんだでラスボスを務めていたこともある訳で、創作以外を見ても、実際公式チートな気がします。特に緋想の剣とか。シロウ使えるんだったら無双出来ますね。パワーバランス（笑）

私のイメージだと、能力は凄く秀でているけど、まだ使いこなせていないって感じ。だけど、小説内での描写の通り、戦闘における才能はとても優秀なので、まさに磨けば光るってタイプ。だけど本人は自堕落なので、半端に留まっているみたいな。慢心王みたいに良い感じにバランス取れているという解釈です。

紫クラスの実力者じゃないと、本当の意味で負けさせることが出来ないって、ヤバイよね。これが個人じゃなくて種族としてそういう存在だから質が悪い。

誰よりも幸せに（前書き）

前略、読者様

この前書きを読んでいる頃には、私はもうダークソウルで山賊人生を謳歌している頃でしょう。

前作からのファンとしては、これは間違いなく暫く楽しめるゲームです。

生粋のMな私御用達のゲームですし、間違いなく今回もはまりにはまるでしょう。

何が言いたいかと言いますと――

ゲームのせいで更新遅れたらゴメンねっ（テヘペロ

誰よりも幸せに

天子の元を去り、少年と再び出会い、一瞬で別れる形となり――
私は今、森の中で歩いている。

足取りはゆつくりとしており、歩幅も狭い。顔は気持ち下に向いており、意識も考え事で散漫としている。

考えているのは――先程の少年の事だ。

天子に対しての心配事もあるにはあるが、彼女は子供じゃないんだし、あれ以上干渉するのも無粋というものだ。事実、私が干渉し過ぎたせいで天子は傷つき、怒りをぶつけてきたのだ。

それに衣玖だっている。私がいなくとも彼女さえいれば、今の天子は問題ない筈。

……だが、衣玖に事後報告もせずこんな所にいる自分は間違いなく、今度会う時には酷い目に遭わされるだろう。
無責任に思えるだろうが、今の私にはその方面の事で思考を回す余裕がないのだ。

それよりも、あの少年だ。

最初に出会った時は後ろ姿しか確認していなかったし、その後も犯人の後始末等で彼のことを気に掛ける暇はなかった。だから最初に見たときの既視感を忘れかけていた。

だが、今度は顔を真正面から合わせる形で邂逅を果たす。

そして、既視感確信へと変わる。

どんなに記憶が摩耗しようとも、決して忘れることのない顔。

一時は狂気じみたまでに執着し、追い続けた存在。

……いや、そんな事をせずとも忘れる道理がない。

――何せ少年の姿形は、過去の自分をそのまま幼くしたものだっただけだから。

昔の自分の姿までは流石に思い出せないが——あの少年はどう見ても、衛宮士郎をそのまま子供にした風体だった。穴が開くほど客観的に観察していたのだ、特徴を間違える筈もない。

この世には同じ顔が三人はいると言われるが、実際に会うと奇妙なものだな。私の存在自体が奇妙の塊ではあるのだが。

嫌味なことに、口調も心なしに似ていた気がする。別に特徴的な喋り方をしていたつもりはないので、被るのは当然ではあるのだが——

——何故だか疑ってしまう。

何を、と言われたら自分でも分からない。

何というか、ズレと言えはいいのだろうか。幻覚を見ているような、まさにそんな感じ。

天子にも捕まっていた子供にも少年は認識されていた以上、霊の類ではない。それ以前に、ここでは霊も平然と見えているし、広い意味で私だつて霊だし、そんな喩えは間違いだな。

私にだけ衛宮士郎として視せ、他の者には変わらない姿でいたのかもしれない。

ただ、そんなことをする動機は？私にそんな事をして得をするのは誰だ？

それに、第三者から彼の身体的特徴を確認していない以上、私だけに向けた幻視とは限らないし、幻視というのは私の妄想で、本当に奇跡の産物の可能性だつて大いにある。

『——馬鹿馬鹿しい。一体私は、何を気にしているんだ？』

自分自身を理解し、一方的に納得してはいたが、根本にある幾重にも絡まった負の感情は、そう簡単には拭えないということなのか。他人の空似かもしれないのに、姿が似ているというだけでこんなに動揺して……負い目があるから、無意識に衛宮士郎に苦手意識を持っているのか？

自分自身を恐れるだなんて、普通しないぞ。どんなに非常識な世界

に身を置こうとも、こればかりは特殊も特殊だ。

衛宮士郎も、凜も——あの時の私がいなければ、もっと簡単に聖杯戦争を終結させられていただろう。

逆に言えば、あの出来事なくして、今の私は生まれていない。非情に思えるだろうが、あの時の自分の行動も、間違ってはいなかったんだと思う。

たったひとつでもピースが外れていたら、私は今でも間違えたままだった。

一人勝ち、という言葉が私には似合う。あの聖杯戦争で誰が一番得をしたかといえば、波乱の中心である私だったのだから。

『後悔はしていない。あの過程なくして、私は救われることは有り得なかった。喻えそれが大きな被害を生み、膨大なまでの負の感情の渦が螺旋を描いた結果となってしまったとしても、その犠牲を踏み台にした者として、そこから目を背けてはいけないんだ』

どう足掻いても、結果を巻き戻すことは出来ない。

どんなに悲観したところで失ったものは戻らないし、イフの世界を妄想しても、それは妄想の域を出ることのない、虚しい逃避でしかない。

だったらせめて、その犠牲を無駄にしないように今を精一杯生きることが、私に出来るまともな偽善だ。そう信じるしかない。

『——何独り言呟いてるの、気持ち悪い』

突然の罵声に声のした方へ振り返ると、そこにはルナチャイルドが腕を組んで見上げている姿があった。

『ああ、君か』

『君か、じゃないわよ。図体の大きさからは考えられないような事
呟いて、通行の邪魔なのよ』

『別に私なんか気にせず別の道を通ればよかるう。定められた道が
存在するわけでもあるまいに』

『なんでアンタに遠慮して遠回りしないといけないの。独り言にし
ても声は大きいし、気にするなという方が無理あるわよ』

それは君の都合だろう、と言おうと思つたが止めた。
下手に反抗したところで、無駄に会話の本数が増えるだけだ。

『——後悔だの救われるだの大層なこと口にしていたけど、アン
タが思っているより、アンタの存在なんか誰も気にしちゃいないわ
よ。責任感があるのはいいことだけど、他人の人生は他人のもので
しかない。アンタが他人の人生引っかき回したんだとしても、アン
タはアンタの人生を全うしてただけだし、そこで他人がどうい
う道を選ぶことになるうとも、気にする必要はないのよ』

『随分と薄情な言い分だな』

『そんなもんでしょ。結局自分以外は他人でしかない。友人も、親
兄弟だって、自分じゃないなら他人という枠に全部収まる。自分の
やりたいように生きたいと思うのは誰だって一緒だし、自分だけ被
害者ぶるのはおかしい話だと思うわ。自分が気付いていないだけで
自分の行動で他人の運命が変わっているだなんて結構有り得るんだ
し、今更だと思つわ』

『——それでは、喻え人の生死にが関係したとしても、同じ
事が言えるのか?』

『言えるわ』

キツパリと、淀みない声でそう答える。

一切の迷いのない、強い眼差し。

……昔の私も、こんな目で正義の味方を志していたんだろうか。辛辣な態度ではあるが、彼女は良くも悪くも純粹なのだろう。だから自分の意見に揺るぎない自信を持っているし、発言に対する負い目も感じさせない。

それが悪い訳ではないが、この真っ直ぐな意志が何かの拍子に折れてしまえば、私のようになりかねない。

信念に縋り付き生きていたものにとって、それがなくなってしまう後の世界なんてものは存在しない。考える必要がないのだ。

言ってしまうえば、私達が五体満足で生まれてくると一緒に、無いと不便とかではなく、無いというのが考えつかないのだろう。

だが逆に、それがなくなってしまった時の反動は計り知れない。己が信じていた道とは全く逆の行為に走る可能性だってある。――

私のように。

出来ることならそれは止めてやりたいが、いつどこでそうなるか分からないのに彼女についている訳にもいかないし、なにより確実に彼女が頑なに拒否をする。

彼女と私の思考回路は似ている。

違いと言えば、絶望を体験しているかそうでないかぐらいか。

彼女の考えが如何に頑なだろうと、単純な事でそうになっているのなら別に問題はない。

だが――彼女の考えは、いつか誰かを殺す可能性がある。その誰かとは、自分である可能性すらも有り得る。

他人を他人と割り切るということは、どんな境遇でも一人で生きていくと言っているのと同義だ。

他人がどんな状況に置かれても決して干渉せず、無関心を貫き通す。だが同時に、彼女自身にも同じ枷がはめ込まれてしまう。

危険なのだ。彼女が本気でこんな事を考えているのなら、あの二人は――

『……………サニーミルク、スターサファイア』

『――！』

『彼女らも、他人だと。君はそう言い切れるのか』

『――ッ、そうよ。確かにあの二人とは友達だけど、私は所詮妖精。本来自由に生き、生と死なんて概念に縛られずにいられる存在なのよ。だから、彼女達がどんな目に遭おうと、いつの間にかケロツとした顔でまた私に会いに来るの。……………喻え、私が死にたくないと思い、恐怖から彼女達を見捨ててしまっても』

下唇を強く噛むその姿は、とても痛々しい。

この様子だと、この喻えは咄嗟の思いつきではなく、実際に体験した事実なんだろう。

『おかしいわよ。確かに私達は死んでも死なない存在だけど、そんなことしてなんで次には平然と私の前に来られるのよ。狂ってるんじゃないわ。私だったら絶対、そんなこと』

『……………いつの間にか立場が逆転しているな』

『……………何がよ』

『？アンタが思っているより、アンタの存在なんか誰も気にしちゃ

いない？。君が先程言っただけの言葉な訳だが、それと今回の君の発言に矛盾が生じているな。私には君が他人の人生に負い目を感じているように見えない」

『……………』

『君は自分が思っている程、非情には成りきれていないらしいな。どこでそんな考えになるに至ったかは知らないが、いいんじゃないか？』

『何がいいのよ』

『他人は所詮他人でしかない。この言葉には同意が持てるが、だからと言って全ての人間、妖怪、妖精をはね除ける必要はないんじゃないか？君で言うところのサニーやスターだけでも思想の枠から外したって、誰にも咎められたりはしない。少なくとも私は好感を持つ、今の私がそうだから余計に共感を持てるんだ』

『アンタも、私と似たことを考えているっていうの？』

『昔と今では随分と変わってしまったがな。……………私が守りたいと思った全ての存在を守りたい。不特定多数の誰かではなく、本気でそう思った者だけ。君なんかよりも夢物語に思える信念だ。だが、この信念だけは絶対に曲げる気はない』

『……………そうね。捨てるよりも拾う方が明らかに面倒が増えるし、重圧も増える。それなのに、どうしてもそこまで真っ直ぐでいられるの？』

少女は顔を上げ、問う。

似た境遇の者として、重圧から耐えられる方法を知る為に。

『——多分、歪みに歪んだ結果小さな円が生まれ、そのまま先端だけは真っ直ぐに見えるようになっただけだ。一線超えてしまえば、非常識が常識になるのと似ている』

『アンタは、歪んでいるの？』

『君が私と触れ合う機会があれば、嫌でもそう思うさ。まあ、今の私はそこまでもないだろうがな。自覚すると結構変わるものだよ』

自嘲気味にわざとらしく肩を落とす。

そんな私を見て、ルナが少しだけ微笑んだ気がした。

だが、気がついた時には先程のような仏頂面に戻っており、少し残念に思う。

『——とにかく、アンタが言いたいことは分かった。二人が気にしていない素振りをしているなら、私も気にしない振りをする。もしそれでぶつかり合うことがあれば、その時に思いの丈をぶちまけるつもり』

『それもいいだろう。進んで険悪な関係になるのは私としても賛成し難い』

取り敢えずは安定した、と思えばいいのか。

その場凌ぎの方便かどうかまでは判別出来ない以上、彼女の言葉そのものを信用するしかない。

彼女自身に、と言えるほど私は彼女を知らない。それで過剰なまでに信じようとしても、結局上辺だけの薄っぺらい言葉でしかなくなる。

ここで純粹に彼女の事を信賴出来なくなつたというのも、一種の歪みなのか。

過去の自分がアレだつたからな、歪んでいるのかそうでないのかがいまいち判断出来ない。

『……………ねえ、今は暇かしら』

『一応、時間には余裕がある』

『ならさ、ちよつと手伝つてよ。薪拾い』

『薪か。暖を取る用かね』

『一応それがメインね。まあ枯れ木でもいいわ、燃料として使うから』

それだけ言つて、ルナは近くにある木々を集め始める。

やる、とは言つていないのだが、彼女の中ではもう確定しているらしい。

確かに拒む理由もないし、やる気はあつたから問題はないのだが………こんな小さな子にも尻に敷かれるとは、男としての面目丸つぶれだな。

そして、この状況を嬉々として受け入れている自分もまた、救いようがないのか、だからこそそのエミヤシロウなのか——己が事なのに図りきれない。

取り敢えず、彼女に言われた通り薪でも枯れ草でも拾つてやるとしようか。

二重人格疑惑を持つてから数日が経過。あれから定期的に永遠亭に通い詰めているが、自分でも行き過ぎだと思うぐらい往復を繰り返している。

いつも通り私は回転椅子に座り、目の前で永琳さんが色々見たり聞いたりしてカルテに書くという作業を行っている。

一度症例を言われてからまだ日は浅く、イエスという答えが返ってくるまでまだ遠いであろうに、こうして足繁く通ってしまう。

こんなことしても、私が変わらない限り事態は進行しないのに、無駄にこういう部分でせっかちになって……

前に永琳さんに言われた自身のマイナスを、日常で深く意識する訓練を自己流で意識的にやっているけれど、成果があるのかすらイマイチ分からない。

ただ、過去の自分を振り返ってみて、自分の二面性が露わになる瞬間から推測してみたことで、どうして成果がないのかが薄々理解してきている。

——シロウさんが関係する事柄全てに対してのみ、例の症状が発症している。共通しているのは、これだけ。

依存しているとより理解したことで、自分は何か変わったのか。

自分の無意識を知ったことで、一歩でも前に進めたのか。

醜くて下劣で狡猾で卑しい自分を理解したからって、受け入れることは出来るの——？

『——そうね、貴女が証言してくれた限りの事を纏め、私なりに解釈するなら、これ以上は私の出る幕はないわ』

ふと永琳さんが話しかけてきたかと思うと、そんなことを口に出した。

『つまり、どうしようもないって事ですか……………？』

『半分正解。正確には、私にはどうしようもないってだけ』

残念そうに答えながら、永琳さんは私へ向き合う。

いつもみたいに自信に満ち溢れた表情も、揺るぎない真っ直ぐな意志も感じられない。

失礼だけど、彼女と出逢ってからこんなにも頼りないと思えたのは初めてだ。

『それって、どういう』

『——天才だろうと秀才だろうと、他人の心理を完全に理解するのは不可能。前例を使った推測、対処法等は揭示できても、その人の心はその人だけのもの。絶対に同一の例と合致する事はない。それこそ心が読めたとしても、それは結局見聞で得た知識と何ら変わらないもので、そこから伝える言葉には結局私の意志、理念、思想が不純物として入り込んでしまう。それでは結局、前例の時に何も変わらない』

永琳さんは足を組み替え、頬杖を机でつく。

私の心は私のものでしかない。他人に理解してもらおうと考えるのは間違いだと、そう言いたいのかな。

確かにそうなんだろうし、私だって今の今まで俗世に触れてこなかった訳じゃないし納得も出来る。

だけど、それって悲しいことだよ。

上辺だけの喜怒哀楽を観察し、それに合わせて自分も態度を変えたりとかして生きるって、そんなことするぐらいなら、コンピュータに向かい合ってネットワークを通じて会話するのと変わらないよね。

言葉の羅列を浮かべると、真意を隠した会話。心が見えないなら
楽な方を選ぶのは誰だって同じの筈。

私だって誰にだって心を許して会話している訳じゃないし、こんな
事言う権利無いんだろうけど——本気で心を許せる相手が
一人や二人誰だっているだろうし、あらゆる部分での機械化を肯定
するのは間違っているとは断言出来る。

——そして、心を理解して欲しい相手には理解してもらえない。
どうして、こんなに理不尽なの？心を開く練習をしていないからそ
うなるのは必然だとも言うの？

『…………医者を名乗っておいて、最後まで面倒を見きれないなんて
本当駄目ね、私』

『そんなことありません！感謝してもし足りませんというのに、貴
女がそこまで悩む必要なんてありません！』

『そうもいかないのよ。私は医者として、誰よりも優れていなければ
いけないの。いえ、優れているだけでは駄目、この世のあらゆる
病と呼べるものを治せるようにならないといけないのよ』

『…………どうして、そこまで』

『——ごめんなさい、今はそんなことどうでもいいのよ。とにかく、
貴女の心理状況は安定しているし、揺らぎの原因を理解してい
ても、それ以上を突き止めるには、私の制約を解除する必要がある
わ』

明らかに露骨に話を逸らしたが、彼女の言葉に反応した私はすぐさま
そつちに気が向いてしまう。

『制約つて、もしかして』

『エミヤシロウに会うことを、許可します』

それを聞いた途端、私はその場から勢いよく立ち上がる。

座っていた椅子がけたたましく倒れようと、気にならない。

私はあまりの興奮でまた我を忘れそうになるも、直ぐさま身体を抱きしめて自粛する。

『えらいえらい、ちゃんと抑えられているわね。どうなることかと思っただけれど、この数日の成果は無駄じゃなかったって事ね』

なんだか褒められている気がするが、この昂ぶりを抑えるのに必死でいまいち聞き取れないでいる。

今の私は、水が一杯入った風船に穴を空けられたので、必死に手で穴を塞いでいるような、本来抑えの効かない流れに悪あがきの如く逆らっているに過ぎない。

偉くなんかない。ここで抑制出来ないなら、シロウさんに会った時には失神してしまう。

『——私は、私の欲望に従って、無我夢中で行動しているに過ぎません。永琳さんに迷惑掛けたくないとか、シロウさんに対して同じ過ちを繰り返したくないからとか、そんな善い人みたいな行動理念じゃなくて、ただシロウさんに会いたいから、こうして必死になっただけなんです。誰かを救済する為の道標たる巫女が、こんなにも俗っぽいなんて、あっちゃいけないのに——』

他人に褒められても嬉しくなんかない。

私にとって、エミヤシロウという青年に会えるという既成事実を得られたという事以外に意味はなく、それ以外は雑音に過ぎない。

私の巫女としての人生は、彼との出逢いの時点で終わっていたんだ。こんな欲に塗れた存在が、誰かに手を差しのばしたところで救いを与えることなんて出来やしない。

『俗っぽい事の何がいけないのかしら』

『え?』

『欲望がない生き物なんていないわ。俗世を捨て、欲を捨てた仙人なんて存在もいるけれど、結局それも、そうありたいという欲望の延長線から零れた結果でしかない。現象や概念、つまりは知性どころか思考する手段を持たない無機質な物でも無い限り、欲は自然と生まれてしまう。行動理念の中には、必ず欲求が指針となり動いているものよ』

それにね、と続ける。

『欲を持たない者が欲の塊であるヒトを導けると思って?与える者ならば、その欲求に対し理解がなければいけないわ。つまり、貴女は誰よりも欲望に忠実に生きるべきなのよ』

言っても、貴女の先輩みたくなるのは流石に駄目よ、と苦笑混じりに注意される。

『でもそれじゃ、標たる在り方を保てません。現に今も、自分の事で精一杯なのに』

『だったらいつそ、巫女としての仕事をしばらく休業したら?そうして、自分を見つめ直すの』

『そんな勝手な事、出来る訳——』

『勝手もなにも、救いを与える事も導く事も、全部自分勝手な行為でしょう？ いわば自由業なのよ、宗教ってのは』

『だから休んでいいと言う結論は少し安易です』

言うこと言うことに反論し続けていると、永琳さんは頭を乱暴に掻いて、溜息を吐いた。

『キツイ言い方になるけど、成果が出ないなら何を頑張っても無意味なの。貴女がやりたいのは、がむしゃらに動いてちゃんとやっていますと言う意思表示ではないのでしょうか？ だったら、何もしない方が他人に迷惑掛けない分余程利口だわ』

『——』

私は永琳さんの言葉に、深く押し黙ってしまふ。

独り善がりで頑張っても、空回りを繰り返す。それも本質を見誤った行動だとすれば、余計に要領を得ない為に空回りは加速する。

それで損をするのは私ではなく、悲劇にも巻き込まれた第三者だ。半端にそういうのを気にするだけの常識は持ち合わせていたお陰でこうしてしおらしくなっているが、傍若無人で唯我独尊な人だったら、こうはいかない。

いや、そういう人は悩みとかないから、空回りだと気付かず前向きに進み続けるのか。

在り方としては有りなんだろうけれど、そればかりで生きられるなら苦労はしない。

何事も抑え抑えに、いい塩梅で。それが理想なんだろうけれど、理想は理想なんだよね。

事実、今の私がそれを成せると思っていない時点で、この問答は無意味だ。

『貴女はもう少し、自分の生きたいように生きるべきよ。私には貴女の事情は知らないけれど、どうせ生粋の巫女だったんだろーし、他人に奉仕するのが当然の生き方をしてきたんでしょー？だから自分のやりたいようにやろーとしても振る舞い方は分らないし、その癖気持ちの昂ぶりは異常な数値を出しているときた。言ってしまった、数日前までまともに走ることが出来なかった人がいきなり全力で百メートル走を走るようなものよ。貴女にだって、それがどれ程無茶なことだか分かるでしょー？』

『……………はい』

『起こってしまったものはしょうがないし、一度タガが外れてしまえば昔のようにには絶対に戻れない。なら、自分が苦勞して道を正すしかない。境遇に理不尽だと嘆くのは自由だけれど、それだけでは絶対に幸せにはなれないわ』

『——私は、自由に生きていいんでしょうか』

『私が許可するわ。貴女のように他人の為に生きる者こそ、一番に幸福を掴み取る権利があるのよ。幸せを掴むための手伝いは出来ないけど、もしその道を阻む者がいれば、私が味方するわ。それでも私、少しはデキるのよ？』

『——ありがとうございます』

永琳さんの笑顔を見た途端、私はボロボロと泣き出してしまった。それを隠そうと両手で顔を覆い、身体を丸めて伏せる。

永琳さんに撫でられる感触がとても暖かくて、宥めようとしてくれているのだろうけれど余計に涙が溢れてしまう。

幸せになってもいい。誰かにこうやって言われるのが、こんなにも嬉しいことだとは思わなかった。

別に自分は幸せになる権利がないとか、そんな卑屈になっていた訳でもないのに。

……でも、他人を優先した生き方をしていた節があったのは認めざるを得ない。そう、シロウさんに会うまでは。

無意識に我欲を抑えた生き方をしていたから、突然欲望に従った生き方をしたいと感じた事で歯止めが効かなくなってしまった。

シロウさんに再び会うまで、自分がきちんと成長——それこそ、自分で納得できるくらいには——しているかさえも図りかねる。

だから、怖い。

許可を得たことで彼に再び会ったとして、初めて会った時と同じくらいには平静でいられるのか。

また、彼に刃を向けてしまうんじゃないかと、そんなマイナスの未来ばかりが浮かんできってしまう。

一歩歩いてもいいと言われたからって、私自身がその決意を持たない限り、結局言われてないのと変わらない。

結果を出せなければ、意味は、ない。

『——行くの？』

目頭を乱暴に袖で拭き、そのまま立ち上がる。

永琳さんは分かっていたみたいに、自然とそう答える。

『まずは、神社に帰ります。明日から彼を捜すのを始めようと思います』

『そうね、それがいいわ。もう一度布団の中で気持ちの整理をつけて、納得したなら探しなさい。これは、私が出る最後の助言かしら』

『……………今まで、ありがとうございました！』

反動がつきそうなくらいに強く、私は頭を下げた。

今までの感謝を力に変えて、愚直に。

それでも足りないけれど、足りないなら何度でも繰り返そう。何度でも、何度でも。莫迦に思われても可笑しくなくらいだろうと。

私にとって、彼女の存在はとても大きかった。いや、大きすぎて感謝の形が思いつかなかったから、こうして頭を下げることしか出来ないでいるのだ。

『貴女は患者なんだから、そんなに畏まらなくていいのよ。寧ろ、これから壁に当たったら何度でもいらっしやい。何度でも、助けてあげる』

『はいっ！』

今の私は、笑顔を作れているだろうか。

偽りの仮面ではなく、きちんとした真心で、笑えていますか？

自分じゃ分からないなら、教えてもらうしかない。鏡なんて無機質を使っても分からないような部分を。

今一番に会いたい人に、見せに行けたらいいな。

誰よりも幸せに（後書き）

今回ルナだけの登場でしたが、前회가同時登場だった為、今回のような分割する形式を取りました。

当然ですが、サニーもスターも個別で出します。三人で行動し、ふと感じる疑問や悩みを解決していくって感じですね。んで、知らない内に三月精の仲は深まっていく、みたいな。

今回で早苗さんは限定解除されました。というわけで、そろそろ終局に向かっていきますのが予想出来る段階までは進んできた訳です。まあ当然ながら波乱はありますよ。ただ、構想こそ温めているが文章力がついてこねー

感動だなんて背中が痒くなるもんは書けないし、まだ一章なのもありますし謎を残す形で終わる、とだけは言っておきますか。

歪み始めた歯車（前書き）

ゲームのせいで〜と前回言っただけ、普通に書くので悩んでた。
これから2章の始まりまでかけてシリアス一本で行く+本気出して
厨二出していきたいので、取り敢えず奈須作品である空の境界読み
直す。

終盤ぐらい文章矯正しないとあかんよなマジで。

歪み始めた齒車

『ふう、まあこんなものかしらね』

一息吐いてその場からルナは立ち上がる。その手には溢れんばかりの枯れ草が抱えられている。

あれから黙々と言われたままに作業を私達はこなした。

私はいつぞやで活躍した風呂敷に限界まで詰め込んだ結果、彼女の身体を優に超える大きさになってしまった。

やり過ぎた感が否めないが、彼女の持つ量を考えたら釣り合いが取れて——ないか。

『お疲れ様、後は全部私がやるからもういいわよ』

『もういいって、これはどうするのだ？』

『別に、これ置いてきてからまた取りに来るわよ』

そう言つて風呂敷を指さすと、事も無げにそう言つてのける。

『いやいや、それは面倒だろう？ここに男手がいるのだから、自然に最後まで付き合わせればいいものを』

『こっちの都合なんだからそれもこっちの自由でしょ。別に遠慮はしてないけど、サニー辺りにでも持たせるつもりだったのよ。私ばかりこの役回りだなんて、そんなの絶対許さない』

『それで私の行動を止めなかったのだな……私が言うのもなんだ

が、酷いな』

『こういうところで立場を均等にさせていないと、共同生活なんて出来ないわよ』

『——一緒に住んでいるのか』

『そう言えば言っ てなかったわね。ただの友達関係って訳じゃないのよ』

確かにそうでなければ、サニーに運ばせる道理はないな。

ただの嫌がらせ、または借りを返す等という理由もあるにはあるだろうが、先程の彼女の会話を参考にするなら、逆に手緩いと感じてしまう。

いや別に彼女が腹黒いとかは思っていないぞ？寧ろそういう発言を躊躇いそうな内容も平気で言いそうだと思える辺り、ただの外道……いや、言うまい。

『だからこそその気まずさ、というのもあるのか』

『そうね……。妖精は基本的に記憶力が良くないけど、流石に毎日顔を合わせてりゃその都度流石に忘れないでしょ？多分』

『お互い様、なのではないかね？君も彼女達と顔を合わせる度に、自分の過ちとも対面してしまう。故に、必要以上に気に留めてしまう。死に対して真剣なのは良いことだが、君達が半不死生物である以上、君達の間ではその頑なな思考を緩めてもいいと思うぞ。でなければ、余計に彼女達の負担となるかもしれない』

『心配されるってこと？』

『そうだ。君達と会ったのは君だけを除けば一回だが、仲が悪くないのは分かっている。それに同居する間柄ならば、同居人の些細な違いにだって気付くものだ』

『経験者は語る、って奴かしら？』

『そんなところだ。経験者の言うことは鵜呑みとまではいかずとも、参考にはするべきだ。虚実差違こそあるだろうが、それは当然なのだから什么的が外れていても私に当たるのは止めてくれよ』

『予防線貼るくらいなら言わなければいいのに、非効率的な思考回路ね』

『褒め言葉として受け取っておこう』

私は抱えていた風呂敷をその場に下ろす。

彼女が助力を拒むというなら、私の役目もここまでだな。

『では、私は失礼するよ。あまりあの二人に無理をさせるなよ？』

『それは彼方の態度次第ね。………ねえ、アンタはまだ紅魔館で働いてるの？』

これで全て終わり、と思いきや質問によって再び関係が繋がる。

ルナの表情はどこか陰りを見せており、先程と明らかに違う雰囲気
に私は少し目を細める。

『そつだが、それが？』

『それがつて平然と言う辺り今のところ問題はないようね。それでも精神状態が正常とは思えないけれど』

『紅魔館が危険だと言う噂から、心配してくれているのは嬉しい。しかしこの通り息災だ』

『……………今がそうであつたとしても、これからもそうである保証は無いわ。私は貴方の見てきた紅魔館の姿は知らないし、興味もないけどね、悪魔の住む城という名が広まるには相応の経緯が必然的についてくる。火のない所に煙は立たないのよ』

『そんなのは承知の上だ。だが、噂というのは尾ひれが付くのが定石。謂われのない内容のものだつて必ずある』

『それが貴方の危惧している、彼女達の負の側面に対する内容とは限らないわよ。いえ、それだけは有り得ないと確信を持って言えるわ』

『———』

分かっている。分かっているつもりだ。

私と紅魔館のメンバーとの繋がりなど微々たるもの。彼女達の事をそんな短期間で理解しただんて烏滸がましい事を言うつもりはない。

——— だったら、私が見た彼女達は全て嘘だったのか？

レミリアが不敵に笑いかけてきたのも、フランドールが父親と呼んでくれたのも、全て私という存在がいた時だけに行われる周到な演技だったと？

信じたくない。こんな感情論で事実がどうこうなる訳ではないが、ここで私が信じようとしなければ、嘘か真かも分からない情報に踊らされて本質を見誤る羽目になりかねない。

『…………いや、私は私の見たものだけを信じる。不確定で出所も分らない情報を信じるのが危険な事は、嫌と言うほど経験しているのでな。君の言葉であろうとも、そう簡単に聞き入れる訳にはいかない』

ルナの確信を持った発言に押されそうになっていたが、私だってこの目で見た現実がある。

ルナの話は、噂の悪い部分ばかりを例に挙げたもののようには聞こえない。いいところがひとつも挙がっていないのがその証拠。

吸血鬼だからといって、悪行ばかり行っていると考えるのは偏見だ。魔法使いだからといって、危ない研究ばかりしているのも然りだ。

悪い情報が先立つて出てくるのは、吸血鬼という種族故のものか、或いは私の知らない彼女らが過去に何か大々的に行ったからか。どちらにしろ、そういう所が関係しているのは間違いないと思われるが、そこまでだ。

結局の所、それを理由に彼女達の全てを批判する理由は一切無い。負の側面しか見ようとせず、次第にそればかりが募り、悪というレッテルを貼られるなんて、理不尽もいいところだ。

誰だって聖人君子にはなれない。善悪がバランス良く保たれているからこそ、生物は進歩をするのだ。

良いところを伸ばし、悪いところを改善する。当たり前の事だが、当たり前であればあるほど、記憶からは遠のいていく。そして、記録を頼りにする。

感性や経験が、無意識に肉体を通してそれを行動に示そうとする。無意識故にそこには思考が入り込む余地はなく、そして遺伝子に刻まれた記録を記憶だと勘違いをする。

言ってしまうえば、辞書から言葉の意味を検索しているようなものだ。

文面上では意味を理解したつもりになっても、それはありふれた誰もが知っているような知識であり、本当に必要な情報を読み取る力は身についていない。

噂が常に物事の本質を語っている訳がないのに、あたかもそれが全てだと錯覚し、我が物顔で語る。

それすらも当たり前と認識してしまっているから、ヒトは疑う事を前提とした態度で接しようとするのではなからうか。

私にだってその節が無い訳ではない。だから偉そうに語る資格はないのかもしれない。

偽善と罵られようと、よく知りもしない相手を批判するのだけは許容出来ない。それも、自分の知り合いが相手なら尚更だ。

『悪いが、間接的な情報だけしかない君の言葉を優先する義理はない』

私ははつきりと、拒絶の言葉をルナに投げつけた。

すると彼女の表情は、明らかまでに悲しみで歪んでいく。

否定された事に対してなのか、私の最悪の結末を想像してなのか。

彼女がこうも本気で心配をしてくれているのに、この態度は不味かったかもしれない。

『——分かってはいたけど、強情ね』

『君を疑っている訳ではないが、噂とは歪んで伝わるのが定石だからな。これぐらい突っぱねた態度を示しておくのが丁度良いのだよ』

『忠告はしたわよ』

『警戒はするぞ』

短い受け答えが終わると、それ以上は語るまいと踵を返し、紅魔館へ向けて歩き出す。

——彼女の言いたいことは痛いほどに理解している。

吸血鬼という存在の強大さ。それ故に畏怖されることもあるが、畏怖の対象となるきっかけがあったからこそ、史実で語られているのだ。

多少の歪みこそあれど、根本はどんなに小さくとも真っ直ぐに形を保っている。すげ替えでもしない限り、その事実を否定することは出来ない。

ルナの言うところの火のない所に煙は立たぬとは、恐れられる切っ掛けを火として喻えているのだろう。

外の世界でも、吸血鬼は恐怖の対象であり、圧倒的な力を持った種族として君臨していた。史実だけに留まらず、文明が発展した現代に於いても、だ。

……私だって、客観的に観ているだけならば、吸血鬼は人類の敵、という認識を崩すことはなかっただろう。

だが——受動的とはいえ、そうは言えない立場になった。

私は、レミリア達を否定したくはない。喻えどんな事実を突きつけられようとも、距離を置きたいとは思えない。

偽善で無理矢理信用しているつもりはない。あくまで私が彼女達と数日と関係を持ち、観察した事で信用するに値すると結論を出しただけ。

個人の視点が介入している時点で、感情論を抜くことは出来ないが、数多の感情によって歪まされた言葉よりは信用出来る。

しかし、警戒をするに超したことがないのもまた事実。

人知れず命を落としても『ああ、そうなんだ』程度の話で済むようならば、その限りではないのだが……最低でも一人、悲しんでくれる人を私は知っている。

『早苗………』

幻想郷で初めて出逢った少女の姿を脳裏に過ぎらせながら、天を仰ぐ。

太陽が沈みかけ、緋色の空を彩っている。

しかし、青年は気付かなかった。緋色の空に隠れて、ひっそりと月が雫を零しそうな程紅く染まっていた事に。

『じゃあ、紅魔館の清掃の手順だけど———』

夜分遅く仕事に訪れたエミヤシロウに対し、清掃の手ほどきを行っている。

普段の鎧姿を止めさせて、執事服に着替えさせたが、結構様になっているわね。着慣れている感が出る。

というか、この執事服貸しものではないんだけど、彼の持ち物なのかしら。或いはあの時の槍みたいに自作？

羨ましい能力だわ。私の能力にそれが合わされば無敵よね。

執事とメイドでコンビ組んで、あの赤い巫女を出し抜くつても面白そうね。怠惰な癖にプライドだけは人一倍な彼女の事だから、少しは対抗意識を燃やして修行のひとつはするでしょうね。

………守られる側じゃないからいまいち分からないけれど、あんな自堕落が裸足で歩いているような奴に命救われているのって、苦痛じゃないのかしら。

別にだから自殺しろとは言わないけれど、私の見解では彼女は幻想郷を守りたいという気持ちは一切無いと思う。

言ってしまったえば、生まれが生まれだったから惰性で続けているようなもので、本人だって自分にとって都合の悪い異変を優先して解決しているって言うてたし。

実際、花の異変の時には明らかな異変であるにも関わらず、速攻で解決しようとはしなかった。

業務に忠実であるうとするなら、等しく解決されるべきなんだろうし、そんな博打で命が秤に掛けられているって、なかなか安心出来ないのでは？

人間の場合、異変だけに留まらず妖怪という驚異がある。しかも条件こそあれ、妖怪に襲われても個人の責任、という形での暗黙の了解が成立してしまっている。

バランスを保つ為とはいえ、殺される事を認めているという事実は、人間側からすれば理解は出来ても納得は出来ないものですね。

妖怪側に付いている私が言っても何の慰めにもならないでしょうけれど、同情するわ。

『——って感じだけど、質問はあるかしら』

一通り説明を終え、質問を投げかける。

シロウは腕を組み、無表情のまま、ないと簡潔に述べる。

……なんだろう。彼の普段見せる無表情とは違う感じがする。

彼を観察する趣味はないし、付き合いも短いからどこがどう、と説明は出来ない。

でも、なんて言うか——心ここにあらず、と言えはいいのかしら。受け答えこそしっかり出来ているけれど、恐らく細かい所を復唱させようとすれば答えられないであろうというレベル。

やらせる事は単なる埃落としやら水拭き程度の楽な作業なので、聞き流していても問題はないのだけれど……一応仕事なんだし、そっちの事情はどうあれ真剣になってもらわないと困るわ。

『私は忙しい身だから貴方に付きつきりである訳にはいかないのよ。だからきちんと聞いてもらわないと、後で分かりませんってなつて困るのは貴方なのよ?』

忙しいと言つてはみたが、普段はお嬢様が起床する夜までには全て仕事を済ませている。

当然、今日だつてその限りである。なので彼がやろうとしてることは、私の通つた獣道を歩くという楽な作業に過ぎない。

よつて、今の私には多忙という言葉とは疎遠にあるのだ。普段ならば。

しかし、今日は特別な日。別に周期的に行われているような恒例行事ではなく、突発的にそうなたただけ。

その特別を遂行する為に、私は向かわなければならぬ。お嬢様の下へと。

私にとっては、国を挙げてのお偉い様を祝う日より、お嬢様の突発的に作つた特別な日の方がよっぽど大事。

だからそんな我が儘に思える突拍子の無い行動も、私にとっては至福の一言で片付いてしまうのだ。

『…………私は暫く貴方に会うことが出来ないし、ミスが発覚すればその分給料引くからそのつもりで』

自業自得ではあるが、一回のミスでそれはないだろうと思える罰を告げる。

彼の意見を尊重する前に、お嬢様の敷居をいかに綺麗にするかの方が大事だ。

そういつた目的で仕事をしに来ているのだし、文句は言わせない。

『じゃ、頑張つて』

淡泊に別れを告げると、私はお嬢様の下へと向かう。
背後で彼が何か言っているようだが、どうせ恨み言か何かだろうと
無視を決め込む。

長い長い廊下を一人歩く。

その異常なまでの距離は、外観からは想像も付かない程。
外から見た紅魔館の全体の面積と、実際に歩いて感じる面積には
明確なまでの差がある。

それは錯覚とかで片付けられる出来事ではなく、嘘偽りない事実で
あると言われて、そう簡単に信じる者は少ないだろう。

八雲紫クラスの実力者を知っていればそれが関与していると考え
だろうが、生憎と的外れもいいところ。

この現象は、私が引き起こしたものだ。一介の人間である私が、空間
に干渉する力を手にしている。

博麗のように血によって継承された力もなければ、妖怪の持つ先天
的なポテンシャルも私にはない。

そんな私が、紅魔館でお嬢様の右腕として有り続けれる理由の八割
が、この能力のお陰と言える。

とは言うものの、空間の距離を引き延ばすというのが私の能力の本
質ではないのだが。そんなのどこぞの死神でもやれるし、そんなの
ではそこまで登り詰める事は出来ない。

『お嬢様、入ります』

でも今はそんなことはどうでもいい。

いずれ語る日は来るだろうけれど、少なくとも今はその時ではない。
いきなり独白しておいて、と思うだろうけれど、独白だからこそ言
うも聞かせるのも自由な訳。

『入りなさい』

許可を得、私は華美な大扉を開ける。
元々幼い姿をしているお嬢様の姿が、米粒に見える程広い部屋。
ここだけは私の力の干渉を行っていない、純粹な世界。
いつ創られたのかは知らない、古き城。過去のスカーレット一族が
遺したものなのか、全く別の所有者がいたのかは知らない。
だが、この空間を意図して創らせた者は間違いなく、お嬢様と同じ
嗜好の持ち主だと頷ける。

『咲夜。今夜の月はとても紅いわね』

『……………そういえば、そうですね』

お嬢様はおもむろに指を窓に向け、不気味に色をつけた月を指す。
あれを眼球に喩えるとして、今にも血の涙が溢れて来そうな程に、
月が揺れているように見える。

『懐かしいわね。あの時もこんな月だった』

『紅霧異変と呼ばれているあの戦いの時ですね』

『ええ、あの時は随分とやんちゃしたものだわ。そして、自分の力を疑っていなかった』

どこか遠くを見るような視線で虚空を見つめるお嬢様。
吸血鬼という絶大なる力を振るい、幻想郷を手中に治めんと暴れに
暴れ尽くした。

しかし、その蛮行は一人の少女に止められる。それも、貧弱で脆弱
な人間の少女に。

その少女の肉体の中には、妖怪も裸足で逃げ出す程の靈力をガチガ

チに詰まっている。

そんな妖怪よりも人外染みた存在——博麗霊夢。数少ない、お嬢様が認めた存在。

お嬢様の心の中には、常に彼女の存在が陰りを見せている。

思考の中での出来事だろうと、霊夢の存在がお嬢様の中にあるのが許せない。

いつそ彼女を倒すことが出来ればこの苦悩も終わるのだろうが、それが出来ないからこそ悩んでいる訳で。

そんな弱い自分すらも憎く思えてしまう辺り、お嬢様に酔っているのだということを再認識させられる。

『再び霊夢と戦うことがあれば、お嬢様の勝利は間違いないでしょう』

『それはそうだろう。だが、私はこの数年間で幻想郷をより一層気に入った。故にそのバランスを壊すような、無粋な真似をしようとは思わんよ』

あの戦いは、良くも悪くも視野を広げるいい機会となった。

夜がお嬢様にとっての世界であり、それ以外は無駄なものという思想だったからこそ、あの異変を起こした。だが、今では積極的とも言えないが、昼にも日傘をこさえてどこかへ行こうとするようになった。

色々な所へ向かう度、新しい発見をする度、お嬢様は笑顔になる。

五百年生きた者とは思えない程、屈託なく。

お嬢様の喜びは私の喜びでもあり、怒り、悲しみも然り。

お嬢様が喜んでくれるのならば、私は何も言わない。それが私の全てであり、それ以外は些末なものでしかないから。

……故に、博麗霊夢に嫉妬しているこの心も、隠し通さなければならぬ。

私の我儘でお嬢様の世界が壊れてしまえば、私の存在価値など無に等しくなる。

お嬢様に必要とされる為、お嬢様と共に在る為ならば、喜んで無機物にしろとなんだろうとなってやる。私には、その覚悟がある。

『つと、本題に入らないとね。貴女をここに呼んだのは……私が視た運命の事を話しておこうと思ってるね』

『運命、ですか。久しぶりですね』

お嬢様の能力である、運命を操る程度の能力。

私にも、お嬢様にすらその本質を見極めるに到っていないじゃや馬な力。

操る、と銘打っているが操れる範囲はとても狭く、もしかすると条件が存在するのかもしれない。

但し、視るという事に関しては制限はないらしく、あるとしても視られる範囲が固定されているという事だけ。

名称に多少齟齬を感じるが、お嬢様曰く、操れることは操れるのだから別にいいじゃない、と言われてこうなってしまったが、その時ばかりはお嬢様の見栄張り様に溜息を吐いた覚えがある。

それはともかく、お嬢様の運命を視る能力は意識的に発現するものであり、無意識で発動するものではない。

意図は不明だが、運命を読んだことで話があるってくれば、その内容が深刻な物だということはおのずと理解出来る。

別の可能性として、面白い未来を視たので教えてくれるというものもあるが、お嬢様ならば敢えて話さず、その結果まで誘導すると思うし、何よりお嬢様の真剣な表情が一番の否定材料となっている。

『一言だけ告げる。明日の夜、気を引き締めておけ』

『——了解致しました』

あまりにも抽象的で漠然とした指示。

普通ならば呆れるか怒るかするだろう。城の主とあるうものがなんと適当な、と。

だが、それは所詮忠義を持たない雑兵の意見。真に忠を尽くす者ならば、主の言葉が何であれ付き従うもの。

己が欲を満たす為だけに地位の高い者に媚びへつらう。そんな卑しい者と一緒にしないでもらいたい。

『ああ、それと——』

お嬢様が何か言おうとしたその時。部屋と廊下を隔てる大扉が轟音と共に粉碎、煙を上げる。

煙に紛れて現れたのは、いつもの紅い外套を身に纏い、心臓を鷲掴みにされるようなプレッシャーを放つエミヤシロウだった。

『あれは……あれは一体なんなんだ、説明しろレミリア・スカーレット——！！！！』

『絶対に手出ししないで頂戴。少なくとも、今はね——』

そう呟くお嬢様の微笑は、不気味さと深い悲しみで歪んでいた。

歪み始めた歯車（後書き）

流石に今年中には一章終わるよね……………割と怪しい。

怠け癖と遅筆が身についてしまつて情けない限りです。前は一週間遵守していたのに。

私の中でも進まない話が延々と続くせいで、アニメのDBばりの無駄な延ばしが定着してしまっていますね。なんていうか、8000文字は最低でも行こうぜっていうノルマ（というよりも今更短いのをぼんぽんと出す形には出来ない）みたいなものがあるから、無駄に語っている部分とかあるし……………本家本元の小説家さんを見習いたいものです。

血の繋がりと目に見えない絆（前書き）

三週間ほど間が空いたかと思えば次は一週間以内投稿とか、気まぐれすぎる。

血の繋がりと目に見えない絆

咲夜の毅然とした後ろ姿を見送り、仕事に取り掛かる。

新品同様の雑巾を手に取り、咲夜が埃を落とした部分の拭き掃除を始める。

赤のコントラストを基調とした壁は、水を吸い込みより一層色を濃く輝かせる。

中も外も赤ばかり。赤が好きな自分としては何とも思わないが、普通の者ならば鬱陶しくて堪らないに違いない。

それと、前に来たときは気にしていなかったが、明らかに妖精なメイドがちらほらと私と同じ作業をしている。

咲夜ばかりがこういう雑務をこなしているとはかり思っていたが、流石の彼女でもそれは困難なんだろうな。

ただ——妖精メイドの作業を見ると、非情にもどかしくなる。緩慢で要領が悪い。誰しもが完璧に出来るだなんて莫迦な事を言うつもりはないが、やはり手慣れている身としては気にもなってしまう。

教えてあげるべきかとも考えたが、私はここでは新参者。恐らくは彼女達の方が先輩に当たる。それなのにいきなり偉そうにお節介をしても、相手側は気分がいいものでは無い筈。

取り敢えずは自分のやることを片付け、それから色々考えようと決める。

『ある程度は理解していたつもりだが、やはり広いな』

広い、圧倒的なまでに広いのだ。

この館を外から見た限りだと、ここまで広くは見えなかった。

パチュリー辺りが魔法とやらで広域化を図っているのかもしれないが、何故そんなことを。

有り得そうな点では、レミリアが見栄が何かで頼んだとか——というより、それしか思い当たる節がない。

数度の邂逅のみの関係ではあるが、彼女の人となりはある程度理解したつもりではある。

絵に描いたような我儘お嬢様。それが見解だが外れてはいないだろう。

咲夜を見ている限り、そんな彼女に望んで従事しているということは、余程彼女に対して特別な感情がある、と見ていい。

過去を知りたいとかそんなつもりではない。しかし、彼女の目を見ていると——まるで自分を、ひとつの道のみ生きることを選択し続けた自分を見ているようで、少しだけ苦しくなる。

衛宮士郎が狂ったのは、被害妄想による強迫観念のせいだ。

あの大災害の中唯一の生き残り、奇跡的な確率での生還。

望まれない死を殆どの者が遂げた中、一人だけ生き残ったことによる罪悪感。それは日を重ねるにつれ、呪いの如く少年の精神を浸食していった。

そうして到った結論。誰かの為にこの命を使おう、という奉仕の心聞こえはいいが、その時に少年の中にあつた行動の糧は、あまりにも行きすぎたものだった。

ボランティアとかそういうのに留まらず、命そのものを賭けるようになってしまった。

それは、逃げだったんだろう。そうでもしないと、あの時の煉獄の呪縛から解放されることはないから。

何だかんだで自分の為ではあつたのだろうが、結局のところ勘違いでしかなかったそれは、ただただ己を壊すだけの行為にしかならなかった。

咲夜と私では境遇がまるで違う。それどころか、この感覚もただの気のせいという可能性だってある。

だがもし、私のように何かの強迫観念によって突き動かされている

節があつたならば——道がそればかりでは無いことを教えてやるう。

最悪の結果になるとは思えないが、頑なに生き方を一本に絞るということがどれだけ下らない事なのか位は教えてやらないと、もし——もしレミリアが不幸にも彼女よりも先立つような事があれば、彼女も同じく命を絶つだろう。間違いなく。

彼女の信ずる者の言葉を聞くことが出来なくなってしまうえば、一番説得力ある言葉が消えるも同義。

レミリアが命を絶つことをやめるように言えば間違いなく聞くだろうが、それ以外の言葉では効力は薄い。パチュリーや美鈴がどんなに叫ぼうとも、最終的には……。

そんな難題に、部外者である私が挑むのはどうかしている。しているが、今の内に手を打っておかないと、後悔してしまう。

徒労に終わるならそれでいい。だが、そうならないかも、という希望的観測を信じる等という博打だけはしてはいけない。

二人が死んで悲しむのは、私だけではないのだ。

——ふと、意識を周囲に向ける。

ちらほらと見えていた妖精メイドの姿は、陰も形も無い。

喧噪も物音も聞こえない。ここに在るのは、異物である私のみ。

気持ち悪いまでに消失した生命。まるで私がここに居ることこそ異常だと言わんばかりに、この通路には無駄がなかった。

よく見ると、他の場所に比べてこちら一帯は少し汚れが目立っている。

咲夜が仕事を放棄するとは思えない。となると、私のように二度目の掃除を行う者が、意図的にここに来ることを拒否していた、ということになる。

咲夜もこの状況を知らない訳がないだろうし、彼女自身もここに来ることを良く思っていないのだろうか。

そう思わせる？何か？がここにはある、という事なのか。

私は仕事を中断し、廊下を進む。
代わり映えない景色には目もくれず、ただ一点のみを視界に捉える。

そうして、ついにひとつの変化を、階段を見つける。

だが、それを視界に収めた瞬間——私は、その場に膝をつく。

吐き気が込み上げてくる。不快なまでの怖気が身体から離れない。
なんなのだ、アレは。

聖杯の泥と比べれば大したものではないが、それでも、言峰教会の地下よりも遥かに多く籠められた負の常念がそこから漏れ出している。

『…………なるほど、これなら誰も近づかない訳だ』

忌々しそうに、そう呟く。

どうやら私は、このような現象に好かれていているらしい。

それは、正義の味方として生きていた自分に課せられた、呪いのようなものか。

一度背負ったものは簡単には捨てることはできない。より密接に関わってきたものならば、尚更。

生命の持つ負の感情からは逃れられない運命なのだと、まざまざと見せつけられた気分だ。

折った膝を立たせ、私は一步一步と暗闇へと足を運ぶ。

その都度、脳に警告が走る。近寄るな、と壊れたレコードのように。だが、危険だという警告は聞こえる気配がない。

では何故近寄ってはいけないと、本能が警告しているのか。自分の事ながら、理解ができないでいた。

私は暗闇に一步踏み出し、地下へと続く階段を歩き出す。

——私は、どうして進もうとしたのだろうか。

明かりもなにもない、地獄へ続くかのような空間に、進むに連れて増していく怨念が肌に張り付く。

——そうしていれば、変わらない日常が明日からも続いたのに。感覚的に下へ下へと降りていき、ようやく階段が終わったかと思うと、目の前から僅かに差し込む光の道が出来ているのを発見する。

——いや、だからこそだったのかもしれない。

それは、扉の隙間から差し込まれるもの。大した光量でもないにも関わらず、今まで暗闇に慣らしていた視界では、眩しく感じてしまう。

——私が信じている者達の屋敷に、こんな醜い世界があつてはいけない。故に、それを取り除かんと無意識に動いていたんだ。

徐々に光に慣れていく視界。少しずつ、光の奥にあるものが輪郭を取り戻していくのが分かる。

——ずっと見えなかったほうが、幸せだったのだろうか。

——そうして、見てしまう。

——そうして、見てしまった。

後悔する、見るべきではなかったと。

——歓喜する、見ておいてよかったと。

まるで猛獣が暴れたのかと思わんばかりに破壊された壁。

抉られたような痕、綺麗に空いた穴ばかりで、壁として見られる部分は殆ど存在しない。

そして、そんな廃墟に似つかわしくないまでの洒落たベッドがひとつ。これだけは傷一つ付かず、新品同様の輝きを見せている。

——そして、そんなベッドの中心ですやすやと寝息を立てている、一人の少女。

『フラン……………？』

呆然と、そう口に出していた。

何故、こんな場所に？

私は思わず彼女を視界から外し、扉を確認する。

そして、絶句する。

暗くて扉だと推測していたそれを確認するべく、ランタンと種火となるものを投影。着火する。

確かにそれは扉だった。

だが――少女が住む部屋の扉としては、あまりにも無骨過ぎた。まるで囚人を――いや、そんなものより酷いが、形容しようがない――入れる為に作られた、脱獄をさせない為の扉だった。

厚さ10cmはあり、イリジウムをふんだんに使って作られたそれは、人間では開けるのが不可能な重量を誇っている。私でも強化を使わなければ、片手で開けるのはキツイ。

それに――この扉に込められた魔力。念には念を入れて強化を施しているのか。

名札も何も掛かっていない。まるでフランの存在を認めるのを頑なに拒んでいるかのように憤りが湧き上がってくる。

再び部屋の中を覗き込む。

廃退的な世界で、穏やかに眠る少女。

それはまるで、世界の終わりに舞い降りた天使のように美しく、儚い。

しかし、周囲に蠢く呪いは無情に存在し続けている。しかしそれは女神を否定する為のものではなく、寧ろ女神そのものが吐き出した呪いに見えてならない。

……彼女がそんな呪いを吐き出した理由なぞ、この状況を見ればある程度予測は付く。

レミリアみたいに真つ当な造りで、真つ当な場所に造られた部屋に住んでいる姉を妬んでいるか、こんな場所に部屋を構えさせた姉を憎んでいるのか。

少なくとも、こんな場所に好き好んで居ようと考える者は稀だと言

い切れる。

フランのように明るい子が、吸血鬼と言う部分を差し引いたとしてもこんな辛気くさい場所に居るのは、あまりにも不自然。

何かの意思が働いているとしか思えない。——そう、彼女にこんな過酷な命令をでき、かつそれに強制力を持たせられる人物が犯人だ。

そして、やはり考えられる結論は、ひとつしかなかった。

瞬間、私は駆けだしていた。向かうは勿論、レミリアの下。

フランのあの状況について、懇切丁寧に説明してもらわないと、この内に滾る怒りが収まる気がしない。

私のようなお人好しでなくとも、あれを見れば多少なり不快な感情を覚える筈。

あんなの、まともな精神をして成せる所業ではない。

レミリアだけが知っている事情とは思えない。咲夜は勿論、パチュリーや美鈴も、恐らくは知っている。

それでいてあんな莫迦げた現状が維持されているということは、皆が黙認しているか、承認していると言うことになる。

ぎり、と力強く歯を食いしばる。

そうでもない、紅魔館の壁という壁を破壊して、真っ直ぐレミリアの下へ向かいかねん。

妖精メイドが走る私に驚いているが、まともに気にしている余裕はない。

そして、心の中で謝罪する。——すまない、もしかすると君達に迷惑を掛ける行動を取るかもしれない。

そうして、ひとつの部屋に辿り着く。

他の部屋と比べて扉が倍以上の大きさを誇るそこからは、気配が二つ感じ取れる。

その中にいる者達が誰か、私は確信していた。

故に。私はこの大扉を破壊することを躊躇わなかった。

夫婦剣をこの手に握り、全力で扉へと投げつけ、告げる。

ブロックン・ファンタズム
壊れた幻想。小さな言霊が起爆装置となり、二対の剣は扉を粉碎した。

粉々に砕け散り、硝煙が視界を遮る中、私は進む。

目の前にある障害が何であれ、私は歩みを止めるつもりはない。

少なくとも、この先にいる莫迦者に物申すまでは、絶対に。

煙が晴れる。

視界に収まる二つの陰。一人は先程まで私に仕事の説明を説明してくれていた、負けず嫌いで、何でもそつなくこなす人間のメイド。

十六夜咲夜。

そして、もう一人。幼い姿からは想像出来ないような不気味な羽を生やし、不釣り合いなまでの邪悪な笑みが似合う少女。

『あれは……あれは一体なんなんだ、説明しろレミリア・スカ―レット――！！！！』

少女の名を力強く叫ぶ。

今の今まで耐えていた怒りが、爆発した。

これでもう、後戻りは出来ない。

運命は加速する。それが幸福か不幸に繋がるのか、今は誰にも分からない。

そう、誰にもだ。

『いきなりご挨拶ね、尊大な物言いはともかく、扉を壊すだなんて

『礼儀以前の問題よ』

破壊された扉の跡を眺めても尚、レミリアは姿勢を崩さない。
あくまで自然体に、その有り様を崩さないのは一種のカリスマとも言えよう。

だがそれは、今のシロウにとって、怒りを加速させる要因にしかない。

『礼儀以前に道德を欠いている貴様に言われたくはないな』

『あら、なんのことがしら』

『とぼけるなよ。フランドールのことだ。何故あんな場所に閉じ込めているんだ』

先程爆発した怒りは、篝火の如く落ち着いた燃え上がりとなり、彼の心が少し冷静になったことを証明する。

だが、それはあくまで一時的なもの。本人が望みさえすれば、いつでも周囲を焦土と化す業火として降り注ぐことも出来るのだ。

それを知ってか知らずか、レミリアの口調は変わらぬまま、おどけて見せる。

『貴方には関係ないでしょう？貴方はここではいち従者でしかない。ましてや年季も浅いとくれば、そう易々と秘密を明かす訳ないじゃない』

『………関係ない？あんな巫山戯た光景を見て、関係ないと頭を振れる奴はどうかしている』

『あらそう、なら結構よ。これは貴方如きが解決できる問題じゃない』

いわ。貴方の杞憂もいずれ解決する、だからさっき見たことは忘れなさい』

『———いずれって、いつだ。百年か、それとも倍か？君達の時間間隔で図るのなら、その間あの子を苦しめると言っているようなものだぞ』

『—————』

初めてレミリアが口を閉ざす。
それを善しと思ったシロウは、まくしたてるように言葉を続ける。

『あの場所に辿り着くまでの階段で、私は吐き気をする程の負の念を一身に浴びた。自慢ではないが、私はあのようなモノに触れる機会は結構あつてね、並大抵の呪いでは片膝をつかない程の抵抗を持っていると自負している。だが、あれはなんだ。人間の一生を五回使っても、あんな怨嗟は吐き尽くせない。貴様はどれだけの年月、彼女をあの場合に閉じ込めていたのだ！』

『……………もう、忘れたわ。途方もない時間、としか言えないわ』

『貴様—————！！』

シロウが駆け出そうとすると、咲夜が腰を落とし臨戦態勢に入る。しかし、レミリアがそれを手で制する。その意外な行動に、彼も足を止めた。

『ねえ、貴方はフ란の何を知っているの？私が何の理由もないまま、あの子に幽閉紛いなことをしているとでも？』

俯き、怒気を孕んだ言葉でそう問いかける。

悠然とした余裕はそこにはなく、あるのは一人の姉の立場として語る少女だけ。

『………… とても明るい子だ。笑顔を絶やさず、肉体年齢相応の悪戯心もあり、活発な様子が見受けられる。ピーマンが嫌いなようだが、私が作ったものはきちんと食べてくれた。とりとめて何も問題もない、いい子だ』

『そうね、それは認めるわ』

『なら——』

『でも、それは表面上のものでしかないわ』

『表面上…………？なら、フランは私に対して演技を行っているとも言うのか』

『いいえ、あれはあの子の素よ。紛れもなくね』

『では、何なんだ』

その問いに、レミリアは一呼吸置き、答える。

『あの子は、吸血鬼として生きるにはあまりにも精神と肉体の成長速度が違いすぎた。あくまで比喻だけだね。私はこの主として君臨する以上、精神的に強くならざるを得なかった。だけど、あの子は違う。寧ろ私が強く在れば在り続けるほど、あの子は幼い精神を成長させることはなかった。そんな時期、私も館主として忙しく奔走していたせいで、あの子にまともに構う暇もなかったせいで——』

「運命が決したわ」

顔を上げたレミリアの表情は、酷く後悔した風でぐちゃぐちゃになっていた。

彼は、レミリアの弱った表情を見て、過去の自分と重ね合わせる。今の英霊エミヤが出来上がる前に、何度もあんな表情をした。救えなかった事実、弱い自分に向けて。

後悔して後悔して後悔して――しかし、その思いが報われることはなく。

だから、歪んでしまった。多少なり彼に救いがあれば、運命は違ったのだろうか――それを後悔しても最早どうすることも不可能。

「あの子に能力が生まれたのよ。一般的で取り留めもない能力だったらこんな結果になることはなかったでしょうね」

「――その能力、とは」

「……ありとあらゆるものを破壊する程度の能力。万物に存在する？死？を掌に収束させ、それを握りしめることで無条件に破壊を成立させる、最低最悪の能力よ」

「なっ――」

シロウの表情が驚愕に染まる。

無理もない、あんなあどけない少女が、直死の魔眼の上位互換に等しい能力を持っているだなんて、誰が想像できようか。

「それだけで済めばまだいいわ。さっき話した通り、あの子は精神的に幼かった。そんなあの子にそんな能力があると本人が知ったことで、精神的におかしくなってしまった。根本はとっても優しい子

だから、そんな他者を傷つける能力を畏れたのでしょうか」

「……………なんて、酷い」

「そうね、酷すぎる話だね。だから私はこんな運命を呪ったわ。同時に、運命を知ることができれば、あの子の不幸を回避することができたかも、って幾度と嘆いたわ。その時に、私も力に覚醒したわ」

「——まさか」

「運命を操る程度の能力、それが私の今の力。皮肉よね、本気で視たかった運命を終えた後に、こんな能力を得るんだもの。世界は余程私達を苦しめたいと見えるわ」

「——ッ」

思わずシロウは、レミリアから顔を背ける。

あまりにも残酷すぎる仕打ち。彼女達が何をしたというのか。

「狂ってしまったあの子は、私なんかよりも遥かに強くなっていた。いえ、狂ったことで肉体のリミッターが外れたのかしら。なにせよ、心を固く閉ざした彼女を元に戻すにしろ、私では力不足だった。故に、決死の覚悟で一度あの子を倒し、あそこに幽閉したの。恐らく、四百年は確実にそのままだったわ」

最初の頃ならば反論のひとつは言えたかもしれない。

だが、あんな理由を知ってしまえば、彼も簡単に偽善を口にはできなかった。

「最初はその部屋一帯に、対象の身体能力を著しく下げる結界を張

つていたけれど、パチュリーが来てからは部屋の破壊点を隠す魔術と、扉に幾重もの防御陣を敷いたわ。そうなるまでの間、フランはずっと衰弱し切っていたわ。けれど、結界の中に三百年近くいてそれで済んだ辺り、あの子の潜在能力は計り知れないわね』

けれど、それでよかつたと、小さく呟く。

彼女としても、本意ではなかったのだというのは嫌でも理解した。

『そうして美鈴や咲夜との出逢いを果たし——そしてあくる日、ひとつの異変を私は起こした。紅霧異変って、有名よね？』

シロウはそれに答えない。

当然だ、彼はその異変のことを一切知らない。だから話を合わせる事が出来ない。

『別にそれそのものが重要という訳ではないわ。ただ、フランはこの時期になるとだいぶ安定していたわ。今の今まで閉じ込めていたから恨まれてはいたけれど、暴走するような下手を打つことはなくなった。少なくとも、平時ではね』

『と、言うത്？』

『赤い月。今外で燦然と輝いている血の杯が満ちた時、吸血鬼は例外なく吸血衝動に駆られるようになる。私はそこまではないけれど、あの子の場合元々精神的に脆いから、今回のような事例では確実に狂うわ』

窓の外からは、小望月と満月の境目の形をした月が存在感を醸し出している。

外では確か、あのような月は千年後でないと訪れない筈だが、幻想

郷ではその限りではないというのか？

単に結界によって隔てられた世界だと思っていたが、何やら思い違いをしていたらしい。

噂でもこの世界の話は聞かなかった辺り、その秘匿性は疑うべくもないが……逆にそれが異常だと感じさせる。

『……………あの子の問題を解決するにしろ、この状況ではやめておくのが正解よ。あそこにいるのだから、この月が近づいてきているからであって、普段はきちんとした部屋に寝かせているわ。本人もそれを納得して、あの場にいる』

『そ、そうなのか……………すまなかった』

早計な態度を謝罪する。

エミヤであった頃ならこんなミスはしなかっただろう。

現金ではあるが、そういった部分は残ってて欲しかったと切実に思う。

『とにかく、これから一週間ほど、紅魔館は閉鎖するわ。フランだけでなく私にも被害が出る以上、あの月が収まるまでは部屋に対吸血鬼用の結界を張ってやりすぎすわ。だけど万が一ということもあるから、貴方は来なくていいわ。大丈夫、有給休暇みたいな扱いにするから』

優しい口調でそう諭す。

彼はそれに反論することなく、無言で頷いた。

『よし、そういうことだから。下手に心労を掛けて悪かったわね、今日はもう帰っていいわよ。咲夜、送ってあげなさい』

『畏まりました』

静観を貫いていた咲夜は、命令によって再び稼働する。

そつしてシロウの手を取り、そのまま破壊された扉の奥へと消えていった。

だから、彼は気付かなかった。

レミリアが背後で、歪んだ笑みを以て彼の背中を見送っていたことを。

『……………なあ、咲夜よ』

『何かしら』

私の言葉にそつけなくそう答える。

本当、スイッチのオンオフが激しいな彼女は。美点ではあるが、こつ心的にシヨツクが大きい今だと、もう少し柔らかい対応が欲しかった。

『レミリアの言っていたこと、あれは全て真実なのか？』

『私がここに来てからのことだけならば、そうだと言えるわ。そこからは貴方次第よ』

『そう、か』

貴方次第、つまり私が信じれば真実となり、そうでなければ虚偽と

なる。そういうことか。

……それにしても改めて実感させられると、より一層気が沈むなあ。あの二人が歩んできた人生の波乱の限りを聞かされ、心が苦しくなる。

そして、そんな苦しみのことなど知らず、ひとつの視点を以て感情を爆発させて、レミリアの傷を抉るだけ決って、私は何もできない。

——なんて、無様。

拳を力強く握りしめる。己が身に対しての怒りを抑えるべく。無力な自分を戒める為に。

『気に病む必要はないわ。貴方は所詮部外者でしかないのだから』

『確かにそうかもしれない、が………』

自分でも分かる程に、声が小さい。

せめて表面だけでも強く在るべきなのに、それすらも成せない。弱い。弱すぎる。

私という存在は、こんなにも弱かったのか。

『ほら、ついたわよ』

玄関前にいつの間にか辿り着いていた私は、咲夜に見送られて外へ出る。

そうすると、門番をしていた美鈴が心配そうに私の下へ駆け寄ってきた。

『大丈夫ですか？ 顔色が優れないですが………』

『ああ、心配ないよ』

弱々しくはあるが、笑顔でそう答える。

やはり納得できないのか、美鈴の表情は困惑で歪んだままだ。

『何かあつたんですか？先程の大きな音も、それに関係があるとか』

『——美鈴よ』

はい？と軽く呆けた様子で返すと、私は思いの丈を吐き出した。

『私には、何もできないのだろうか。レミリアやフランが苦しんでいるというのに、見ていることしか出来ないのだろうか。彼女の五百年近くの重みを支えるには、私では力不足なのか？』

『——知ってしまったのですね』

『……私はあの話聞いたとき、自分でも信じられない程に動揺した。本来私という個はこんなに精神的に脆弱ではなかった筈なのに、最近になってこんな状態がよくあるんだ。だから、今の私は冷静に物事の正否を判断出来ない。そんな私の代わりにこの疑問に答えてくれ、頼む』

『——そうですね、確かに貴方はお嬢様達と知り合つたばかりの、絆といえる繋がりも出来ていない赤の他人であり、そんな貴方があの二人の問題に割って入るのははつきり言つて無粋以外の何物でもありません』

ですが、と美鈴は続ける。

『忘れていませんか？貴方は妹様に——フランドールお嬢様に、お父様と呼び慕われていることを。便宜上の関係ですが、二人の間』

には確かに絆が存在する筈です。こんな事を言うのは問題なんですよけれど、レミリアお嬢様のことなんか気にせず、自分に出来ることをすればいいんですよ』

『……………詭弁だな。そんな単純な話ではない』

『詭弁が正論に劣るなんて法則はありませんよ。それに——レミリアお嬢様は、今の状況に甘えている節があります。ここまで回復した妹様が、自分の鶴の一声で再び壊してしまうのではないかと、内心では脅えている。だから、誰かが奮起しない限り、妹様は本当の意味で救われることはいつまで経ってもありませんよ』

『——君には、その気はあるのか？ フランを助けたいという想いが』

『あります。ですが、私では完全に力不足なんです。それは自分が一番理解しています。……………そして恐らく、お嬢様ですらその限りでしょう』

『そんな莫迦な話があるか。二人は姉妹だぞ、れっきとした血で繋がった、産まれた瞬間から絆が存在する関係なんだぞ。それが赤の他人の言葉の方が勝ると言うのか』

『それは、やってみないと分かりません』

『そんな博打に付き合える程、私は強運ではない』

『勿論私だって、何の根拠もなくこんな提案をしている訳ではありません。シロウさん、妹様が貴方に向けてきた笑顔に嘘偽りはありましたか？』

『それは、』

語るまでもない、あの笑顔は本物だ。

柔和で優しく愛くるしくて——私なんかには勿体ないぐらいに満たされた笑顔だった。

少なくともあの笑顔からは、彼女の置かれている苦痛の日々の片鱗を探し出すことは出来なかった。

ということは——フランは私と会っていた時、そんな出来事すら忘れられる程に満たされていたとでもいうのか？

——それが事実だったらどんなに父親冥利に尽きることか。喻え仮初めのそれだとしても、あの子の支えになれていたというのなら、こんなに嬉しいことはない。

『…………貴方にも分かつている筈です。絶対ではありませんが、妹様にとって貴方は、レミリアお嬢様と同じか、それ以上の救いなんです』

美鈴の言葉が、重い。

正義の味方として生きていた時は、こんな期待を持たれることはなかった。

せいぜい体よく利用し、しゃぶり尽くしたら捨てる。そういう扱いが定番だったから、自分の信じた風に動くことに躊躇いを持つことはなかった。

だが、他人の期待が募れば募るほど、何故か身体が竦む。この身は確かに正義の為に動いていた筈なのに、いざ他人に頼られればこのザマだ。

自分がどれだけ独り善がりな生き方をしていたのかがよく分かる。他人が関わらなければ責任は全て自分が被るという、一種の理想型に慣れすぎたんだ。

『——今日の所は失礼する』

『ちよっ——待ってください!』

頭の中がぐちゃぐちゃ過ぎて、結論どころか纏めることすら出来ない。

彼女の想いに答えず、逃げるようにしてその場を去った。

美鈴の呼び止める声も、今の私には鬱陶しくて堪らなかった。

血の繋がりと目に見えない絆（後書き）

なんか、シロウが精神的に弱くなりすぎた、反省してる。

書いてる途中でやりすぎ感がばりばり出てきましたが、本編で描写されていない、抑止の守護者として人を殺めていた時の、心の折れる手前みたいなイメージで考えてくれると嬉しいです。

ていうか最近 Fate の二次創作とかの SS を毎日読んでいるのですが……面白いと思う度に心が折れていきます。自分の文章の稚拙さや、内容の薄さなど。本当 Fate と東方の人気で生きているようなものですね、この小説。

変革の前日に太陽は輝く（前書き）

誰か私の為に、東方キャラを武内崇さん絵風（トレスも可）で書いてくれたら、それはとっても嬉しいなって

変革の前日に太陽は輝く

気がつけば、私は白玉楼の長い階段を歩んでいた。

ここまでの過程の記憶がスッパリ抜け落ちている。僅かほどにも脳裏に引つかかる感覚はあらず、我が身の事ながら気持ち悪いと感じる。

恐らくここに到るまでの私の姿は、食人鬼と相違無かったに違いない。紅魔館を出る前からそうだったのだから、意識すら定まっていない状態なら余計にらしく見えたであろう。

情けないな。ここまで精神にキていると、逆にそれが正常なんじゃないかと錯覚してしまう。

——いや、そもそも今の私は一体なんだというのだ？

衛宮士郎のように正義という概念に盲進するでもなく、英霊エミヤのように究極的なまでに達観した姿勢を貫く訳でもない。

どちらともない半端な位置に存在し、その結果精神的な弱体化をしてしまっだなんて、笑い話にもなりはしない。

……今思えば、私は酷く適当な生き方をしていたと思う。

凜のように魔術師としての甘さはあれど、腹の中に決めた一本の意志を曲げずに貫き通す、そんな生き方を私は出来なかった。

私の中に刻まれた記録の中には、桜と結ばれ、正義の味方としてではなく、一人の少女を守ることを決意した自分がいた。

今の私は全を救おうとはしていない。しかし一桁に収まる範囲で救いたい者の数が収まる訳でもない。

救いたい者以外を切り捨てる事に躊躇いはないが、救いたい者のみで切り捨てなければいけないとする選択が表れたとして——私は絶対に、選べないだろう。

数こそ減ったが、結局のところ大して意味はなかったのかもしれない。

切り捨てたくない者を切り捨ててはいけない、そんな選択肢が目の前でちらついている以上、今の私の立場は、全てを救おうとした衛宮士郎と大差ない。

有象無象を度外視しようとも、救いたい者という枠から切り捨てなくてはいけないという条件下ならば、絞りを掛けたところで意味がなくなる。

頑固と精神の強さは比例しない。寧ろ勘違いを引き起こす可能性が大いにある、間違いに見えない間違いだ。

私がああ災害に巻き込まれず、平穏な暮らしをしていたならば、今の私のように脆く、ごくありふれた人間として生きたのだろうか。

……いや、これは逃げだな。可能性に縋り、今の自分を否定したいが為に創作した物語の一片。

現実と物語は違う。それを理解しているからこそ、より一層空想の世界に恋い焦がれる。

今の私こそ御伽の具現そのものなんだが、やはり現代に生を受けた以上、喩えどんなに神秘に触れようとも意識は常識に引っぱられるのものなのだろう。

そうやって思考に耽っていると、今度は白玉楼の屋敷が視界に入ってきた。

今更ながら、ここに何故足を運んだのだろう。習慣のせいかな？

存外、ルーチンワークが板に付いてきたのかもしれない。まだ三度程しかループしていないのだがな。

空を見上げる。朝焼けが目眩しい。

紅魔館を出たときはまだ深夜だった筈。それに白玉楼との距離はそこまで離れていないにも関わらず、太陽の位置的に低く見積もつても二時間は経過している。

季節も冬が近いという事もあり、日が昇るのが早いというのも要因

となっているのだろうか、それにしたって色々と変だぞ。どれだけ牛歩で歩いていたんだ。

こんな些細な変化にも気付かないなんて、妖怪に見つかっていたら間違いなくタダでは済まなかったろう。異様に低い幸運が、こんな所で働くとはな。

砂利の擦れる音と共に、白玉楼の敷地に足を踏み入れる。

小鳥の囀り以外にこの場を彩る効果音は無い。否、元よりそれ以上を求める必要がないのだろう。

喻え無音だろうとも、そんな事でこの世界が美しく在らざることとは決して有り得ない。

普段はまばらに確認出来る幽霊も一切見かけない。それが拍車となり、美しさを増している様に感じる。

『流石に誰も起きていない、か——』

一瞬立ち去ろうかとも考えたが、それにしたって行く当ても無い。行動の指針も無いままに暇を潰していても、大した時間稼ぎは出来ないだろうし、ここに留まった方が効率的ではある。

自然と私の足は庭へと向かう。

誰もいないならいいで、剣でも振っていよう。さすれば、この心の奥の靄を少しは晴らせると思ったから。

『トレース・オン
——投影、開始』

静かに、しかし白玉楼全体に響かせるように、告げる。

干将・莫耶を手に顕現させた瞬間、幾重にもその刃で空を切る。

才能を持たない者が極限まで自分をいじめ抜き会得した、才有る者には到れない剣戟の極地が、私の一刀には籠められている。

美しく魅せる為でも、戦いに華やかさを持たせる為でもなく、ただ

己が理想を体現する為の道具として、この力を扱ってきた。

だが——そんな無骨な力では、あの子は、フランは救えない。

魔術さえあれば、肉体的な救いを与えることは可能かもしれない。

しかし、心はどうだ？

その道一本で貫いてきた私は、誰かの心を救う手段を持たない。今のこの状況は、命を救うことばかりを念頭に置いて、それ以外を蔑ろにしてきた罰なのか。

——喧しく砂利が擦れる。空気を切り裂く音がけたたましく鳴り響く。

今この瞬間も、あの子は苦しんでいるに違いない。

表にこそ出さなくとも、自分ですら理解できない領域では、間違はなく苦痛で満たされている。もしかすると、最早麻痺してしまっているだけなのか。

いずれにしろ、他者を救うことを生きがいにしてきた私が、こうして無様に二の足を踏んでいる。

——美鈴が語っていた、レミリアの心境。

現状を破壊した先にあるものが、最善ではなく最悪かもしれないと言う可能性を恐れ、一步を踏み出せないでいる。冷静な今ならば、痛いほどに理解できる。

私の行動で彼女から笑顔が消えるかもしれない。そう考えた瞬間、剣閃にブレが生じる。

それを機に私は動きを止め、一息吐く。

『……………これもすべて、自業自得なのかな』

過去のものとなった口調と共に、自嘲の言葉が漏れる。

本気で救いたいと願った少女に手が届かない。半端な気持ちで他者を救い、八方美人を是としてきた俺が、今更一人の為に動くことを

世界が善しとしていないのかもしれない。

この身はいつまでも、心を救うことが適わない殺戮者でしかないのか――

『――シロウさん？』

突然の背後からの背後からの声に振り替えると、困惑した様子で見上げている妖夢が立っていた。

『すまない、起こしてしまったかな』

内心の憂いを仕舞い込み、話しかける。

しかし妖夢の方は切り替わる様子がない。何かあったのだろうか。

『いいえ、普段からこのぐらいの時間に起きる習慣をつけているので、関係ありませんよ。――それよりも、いいですか』

『何かね？』

『――どうして、そんなに寂しそうなんですか？』

心の隙間を、挟られる。しかしその焦燥感を顔には出さない。

これは私の問題だ。彼女にいらぬ心配を掛けたくはないからだ。

『――何のことかね？』

『失礼ながら、遠目から貴方の剣舞を観察させてもらいました。率直に言って、あの時の後ろ姿からは、普段私と打ち合いをしていた時のような覇気を全く感じませんでした。動きこそ変化はない筈なのに、私には貴方がまるで、身体に纏わりついた蜘蛛なやみの巣を必死に

振り払おうとしているようにしか見えませんでした。我武者羅で、憑かれたのではと錯覚してしまう程に』

『——』

『何が、あつたんです？不躰かもしれませんが、悩みは抱えている時間に比例して膨れ上がっていくものです。最初から個人で解決できないからこそ、悩みという概念で苦しめてくるんですから。ですから——』

『いや、大丈夫だ。君が心配するようなことは何一つない』

出来得る限りの笑顔で、答える。

言葉の中の一字一句が、私の本心とは真逆にある。

それを取り繕う為の笑顔。苦し紛れの、逃げの一手。

『———そうですか』

伏し目がちにそう呟く妖夢。

しかしその瞬間、私の眼前には刀の切っ先が突きつけられていた。

『こんなに隙だらけなのに、何もないと言い張りますか。普段の貴方なら、その手にある剣で容易く返していたでしょうに』

『———ッ』

一瞬の油断。それが王手となった。

無意識の内の思考停止。それを突かれた結果が、これだ。

内心舌打ちをする。表面を取り繕ったところで、彼女には無意味だと看破出来なかった私のミスだ。

いや、侮っていたと言つべきか。

『……私には貴方を説き伏せられるほどの学はありません。誇れることがあるとすれば、祖父から継承されたこの剣術のみ。しかも、これもまた中途半端。ですが――』

凜とした瞳が私を射抜く。

その愚直なまでの視線が、私には堪らなく――

『だからこそ、私はこの剣術で貴方の心を理解します。剣客同士お互いに刃を合わせれば、言葉を交わさずとも心を通わせれます。――斬れば理解る。これは私の戦いにおける行動指針であり、決意です』

言い終えた刹那の時、突きつけていた刀を首を獲らんとする気概で振りぬく。

私は地面を蹴り、背後へと跳躍する。しかし、それを予測できないほど彼女は未熟ではないことを私は知っている。

彼女も同様に地を蹴り、同等の速さで間合いを詰める。そして、剣戟が始まった。

『問答無用とは、胆力のある行動だな』

『こうでもしないと、貴方は戦いを放棄したでしょうからね』

妖夢の繰り出す一閃を迎撃、同じ拳動で反撃する。

模擬戦の時とは違い、互いに殺気を隠し通そうとしない。

常に狙うは一撃必殺。確実に相手の首、心臓を獲らんと躊躇いもなく剣を振る。迎撃を強要させるそれは、彼女と対峙してきた中で最も鋭く、美しい。

勿論、私にその気はなかった。だがしかし、そうしないと——間違いなく、こちらが殺られる。

彼女の眼は本気だ。まるで辻斬りのような、剣を以て相手の肉を削ぐことに愉悦を得たいが故の一撃。

それは錯覚だと、確信を持って言える。だがしかし、この気迫に嘘は無い。

覚悟の違い。それが、現状に於いて状況を有利にさせる絶対条件となっていた。

『チィ——！』

『どうしました、剣が鈍いですよ』

焦燥に駆られる私を尻目に、涼しい顔で妖夢は袈裟切りを放つ。

それをいなし、刀の根本を狙ってそれを落とさんとする。

繰り返し繰り返し。しかし、状況は決して同じ時間を繰り返さない。着実に一歩ずつ、私は後ろに下がっていた。正確には、下がらざるを得なかった。

力では勝っているが、それを物ともしないまでの技量で押し切られる。

バーサーカーのように、誰も対抗しようと思わないまでの暴力を持ち得ているなら、まだ勝負は分からなかっただろう。

そうして——遂に、私の手に握られていた双剣は、彼女の持つ二刀に敗北した。

ものの数分、あまりにもあっけなかった。

『——』

双剣は空を舞い、地に突き刺さり墓標と化す。

無手となった私に、両刀とも健在な妖夢。勝敗は、明らかだった。

『勝っちゃいました、ね』

『そうだな………』

本人も些か信じられないのか、私へ問うように呟く。
私はそれに静かに答えた。

『………ですが、貴方は十全の状態じゃないですし、勝利というには余りにもお粗末ですね』

『十全なぞ、望むべくして得られるものではない。戦いはそんなものを待つてくれない。例えそれが決闘だろうとな』

この敗北を自身の気の迷いのせいにするつもりはない。
終わったからこそ言えることだが、彼女がもし本気の本気で私の殺そうとしていたならば、私はもうこの世にはいない。

確かに必殺を狙ってはいたが、そこまでしないと勝利にありつけないからこそその判断であり、同時にそれを私が防ぐことを前提に動いていたというのも大きな要因となっている。

おかしい話だが、命を奪いたくないのにそれストレスの行動を取り、結果は全て私に押し付けていたという、何とも理不尽な扱いを受けていたのだ。

信頼されているからこそその行動だったのだろうが、やられる方はたまったものではない。

『ではせめて——いつか、貴方が十全の状態を得、再び刃を交わす時まで、この勝利預からせて頂きます』

『いや、だからこの勝利は実質ともに君のものでありだな』

『私が納得していないだけです。だから、この決意も身勝手極まりないものであり、なんの利もありません。だから、シロウさんが気にする必要はありません』

そう言われたら、返す言葉はない。

私は溜息一つで、この会話に終止符を打った。

『……………刃を交え、何か理解したか？』

切り出したのは、私。

不必要な質問。先程まで頑なにその情報に関して口を閉ざしていた私が、何故今更自分から踏み出すのか。

『はい。漠然とではありますが、その中で一際印象強く根付いていたのは——苦悩でした』

『——正解だ』

『何を悩んでいるかまで理解できるほど、私は強くありません。だから明確な意見を出せないとは思いますが、個人的な感情で言わせてもらおうと——らしくないですね』

『らしくない？』

『ええ、貴方はもっと芯の強い人だと思っていました。決して碎けることのない、鋼のような精神の持ち主だと。だからこそ、そんな感想を持ちました』

『……………買い被りすぎだよ。私の心なぞ硝子に等しい脆さしかない。

鋼とはほど遠い、吹けば飛ぶ程度の重さしかない、脆弱な心だ』

『——例えそうだとしても、それを言い訳に行動を躊躇っている
とすれば——それは間違いだって、そう言い切れます』

『何が間違いなんだ？現状の先にあるものが破滅かもしれないし
ても、君は同じ言葉を口にできるのか？』

『はい』

はつきりと、揺るぎ無い瞳で語る。

その真っ直ぐな意思是、直面していない者の戯言として切り捨て
るほど、安いものではない。

純粹すぎる。かつての衛宮士郎のように、幸福な未来を信じてい
るからこそ、こんなに正しく在り続けられる。

それを愚かしいと感じながらも、羨ましくも感じてしまうのは、嫉
妬心が無意識に働いていたからなのか。

『現状維持を否定する訳ではありません。しかし長い目で見ればそ
の先にあるものは衰退だけでは？上に伸びないなら後は下がるしか
ない。至極当然の帰結だと思いますが』

『——』

『なら、最悪に至る前に行動を起こした方がよっぽど利己的です。
だいたい、確定した未来なんて無い以上、私達は常に等しく選択を
迫られます。いっそ開き直ってみてはいかがですか？なるようにな
る、と』

『それだけ楽観的でいられればどれだけ楽か』

『そうでもしないと、貴方は動きそうにありませんからね。最善を夢想するあまりに、一時現実を忘れ、その刹那の内に後悔の瞬間が訪れる可能性すら忘れてしまう。そうなれば、本当の意味でもうお手上げです。貴方は、そんな結末が上等なものだと宣いますか？』

ニツコリと、邪悪な笑みで持論を語る。

脅迫めいたように見えるそれは、恐らく私があまりにも不甲斐ないせいに違いない。

苛立ちで人を殺せたら、間違いなく私は当に臨終しているだろうな。

『そんな巫山戯たことを言うつもりは無い』

『だったら、うじうじしていないで身体を動かして下さい。貴方がそんなだと、それに師事している私は一体なんなんですか。蛆うじじゃなければ水蚤みじこですか？』

『いやいや、そんなに卑屈にならんでも』

『誰のせいだと思っているんですか』

『それは流石に理不尽過ぎるだろう………』

静かな庭で、二つの笑い声が響く。

一際笑った後だと、悩んでいた自分が莫迦らしく思えてきた。

ここまで言われて逡巡しっぱなしでは、励ましてくれている妖夢の想いを無駄にしてしまう。

こんなに親身になってくれる相手がいるのに、腐っているだけに終わるのはいけない。そんな事すら今更気づくとはな。

『まだしこりが取れた訳じゃないが——ある程度は吹っ切れたよ』

『やっつとですか。まったく心配掛けさせて………これで失敗したら承知しませんよ』

『それは保証しかねるが、少なくとももう引き返さないことは約束しよう』

もう、尻込みはしない。もう、躊躇わない。

私はフランを救う。結果はどうなるかは分からないが、視えない結果ばかり気にするのはもう止めたのだ。

一体何を勘違いしていたんだ。そうだ、私は元より戦う者ではなかった筈だ。

この身は所詮、徹頭徹尾まで創る者でしかない。救う手段が限りなく無いと言っのならば、それを底上げするものを創り出せばいいだけの話。

己の力を過信するな。あくまで本質は投影した物にあり、私はそれを担う者として動けばいいのだ。

『……さて、妖夢よ。君さえ良ければもう一度試合おうではないか』

『え？いいですけど、急に元気になりましたね』

『君のお陰だよ。だが、吹っ切れた途端に身体を動かさなくなっとな、其方から来ないなら此方から行かせてもらっぞ』

そう言うが否や、私は地に刺さった双剣を即座に手に取り、彼女の眼前に振り抜く。

『ちよつ——ひゃあ！危ないじゃないですか！』

『さっきのお返しだ、遠慮無く受け取りたまえ』

『ぎゃ—————！！』

妖夢の絶叫と、私の笑い声が白玉楼に木霊する。

——ありがとう、妖夢。こんな弟子を貰って、私は果報者だな。昇り切った日の光が、まるで今の私の心を表しているかのように、眩しく輝いていた。

『……………で？それがこの結果ってこと？』

『はい、申し訳ありませんでした』

『反省している。ああ、もうこんな莫迦な事はしない。約束する』

初めて見る幽々子の邪悪な笑顔の下、私と妖夢は砂利の上で俯き加減で正座をしている。

あれからいつまででああしていただろうか。気がつけば白玉楼のあらゆる箇所は乱れ、風情なぞ糞食らえと言わんばかりに状況を物語っていた。

それに気付いた時は既に遅し。いつの間にか起きていた幽々子の目にこの惨状が目にとまり、今に至るという。

一方的に私のせいなのだが、何故か妖夢も巻き込まれる形となっていた。曰く、食事を作っていなかったかららしいが、なんか体よく

纏められて可愛そうになってくる。今更そのことを進言したところで意味はないので言うつもりはないが。

ハア、と大げさに溜息を吐く。

何というか、締まらないな。さっきまでの真面目な空気が嘘みたいだ。

……まあ、それも含めて私の心を解す要因となっているのだから、人生とは分からないものだな。

『妖夢は庭を直しなさい。シロウは私の朝ご飯を作りなさい。拒否権はないからね』

『はい、分かりました』

『誠心誠意勤めさせて頂こう』

誰も、この状況で彼女に逆らおうとする愚か者はいない。

彼女の笑顔に隠された殺気には、作らなければ貴様を喰うと言わんばかりの気迫が籠められていた。

——そうだな、こんな一日の始まりも悪くない。

日を跨ぐ頃には、私はこんな安らかな時間に身を委ねることは叶わなくなっているだろう。

だからせめて、今この瞬間を大事にしよう。

時間は巻き戻らない。それは今もこの先にあるであろう運命に対しても言える。

故に、後悔のないように生きよう。妖夢に言われ思い出した、自分の在り方を貫く為に。

変革の前日に太陽は輝く（後書き）

今回、普段より文字数少ないけど、割と綺麗に纏められたしこれで通した。最後を除いてな！

最後はぶっちゃけ悪ふざけ。どうしてこうなった。シリアス一辺倒とか嘘かよ。

もっと戦闘パートを事細かく書けばいいのですが………なんか駄目なんですよね。

次からは多分エピソードまで戦闘パートが八割を占めるでしょうし、試行錯誤して頑張って内容構成しますので、今回みたいな早投稿は無理です。

救いの在り方（前書き）

戦闘パート八割と言ったな、結局あれも嘘だ。

救いの在り方

朝の騒がしさは何処へやら。気が付けば太陽は沈み、運命の時が近づいていた。

あの後朝食を食材のある限り調理して、幽々子のご機嫌を取することに成功し事なきを得た。その食事量と言ったら、本当に騎士王しか連想させない。白玉楼の財政が逼迫するだけだから構わないが、いつか財政難に陥るぞ。

そんなけたたましく過ぎた朝。それからは、妖夢の作業を手伝うのが殆どだった。というか十中八九私が悪いのだから、彼女には休んでいてもらおうとも考えたが、それを幽々子を知らないということ进行し出し、共同作業となった。

夜に備えて必要以上に疲労はしたくないので何も言わなかったが、別に幽々子が恐ろしかったからではないぞ。

ほぼこの時間まで作業をしていたが、下手に時間を余して雑念が混じるよりは全然良い。

決意とは揺らぎ易いもの。どんなに堅牢に固めようとも、ちょっとした隙間から瓦解する。そして最終的に崩壊に導くのは、誰でもない己自身。

逃げと思われるだろう。決意が揺らぐことを恐れて目を背けようとしている弱者だと。

別にそれでいい。現実を見るなんていつでもできる。ならば、奇跡に縋りたいと願う今だけでも、一つを妄信したって誰も咎めないだろう？

『……………行くんですか？』

『ああ』

私の出す雰囲気だけで理解したのか、そんな妖夢の問いに、短く言葉を返す。

周囲は余すところなく闇が覆い、空の杯は今にも満たされそうに紅を円形に変化させている。

急がなくては。今このときを逃せば、フ란の全てを受け止めることは叶わなくなる。

吸血鬼が狂うであろうこの瞬間。それから目を背けて、彼女に手を差し伸べることはできない。

危険なぞ知ったことか。ここで二の足を踏み続け、取り返しのつかない事態になるぐらいなら、この身に消えぬ傷が残ろうとも、悔いは無い。

それに、玉碎覚悟で挑む気は毛頭ない。必ず生きて帰る、私を慕ってくれる者達に別れも告げずに消えるつもりはない。

『———ご武運を』

ただそれだけに、彼女の想いの全ては乗っていた。

全容を知らない彼女はただ一つ。再び相まみえる事を願う。

死地へと赴くのだと直感で理解しているであろう。だからこそ、私の背中を見送る視線は鋭い。

それでも止めようとしないのは、私がこの先に縋る願い片鱗を垣間見たからだろう。

苦悩に苦悩を重ねている姿を直に見たことで、背負っているものの重さも同時に理解する。

言葉を交わさずとも伝わる——彼女の言う、剣で語るといふのは存外莫迦にできないな。

私は歩き出す。信じてくれる者の姿を背に。

私は振り返らない。未練を残さない為に。

私は信じる。——他でもない、自分自身を。

己が信念を貫くため、弓兵は紅魔館へと凱旋する。
運命は流転する。最早誰にもこの加速する時間を止めることはできない。

暗雲すら払拭するまでに輝きを保つ空を紅の城は抱え、雄々しく存在を主張している。

見慣れた世界にひとつ異質が混じると、こんなにも感性を揺さぶられるのか。

私の中にある感情。それは——恐怖。

結果に対してのそれではない。ただ、この館から溢れる途轍もないまでの拒絶の感情に、私は気圧されている。

万物を否定せんと躍起になっている様にも見えるそれは、レミリアの言葉を思い出せる切っ掛けとなる。

——これから一週間ほど、紅魔館を閉鎖する。そこまでの意味を、理由を。本当の意味で今理解した。

誰も傷つけたくないが故の措置。刹那の時に封を掛ければ、後に待つのは何事もなく代わり映えのない毎日だと、そう信じて。

これから私は、その未来を壊す。不確定な未来に手を伸ばし、新たな未来を掴む為に。

それが正しいことなのか、間違いなのか。そんなことを考えるのはもう止めた。

いつまで続くかも分からない先延ばしに終止符を打つ。その一念だけで私はここに居る。

フランを助ける。その為なら、立ち向かう者は例え彼女が慕う姉であろつとも容赦はしない。

『…………君はどうなんだ、紅美鈴』

その第一の障害となるであろう中華娘に問う。

門を守る者として、今の紅魔館の状況を知らないとは思えない。ならば今、呼ばれてもいない私がここを通るということは、侵入者として扱われる事を前提とした行為となる。

だが、できることなら戦いたくないというのが本音だ。

私の予想では、あの地下に至るまでに一切の妨害がなくとも——フランとの戦闘は避けられないだろう。

故に、体力魔力共に温存しておくに越したことはない。

刃を向けることには躊躇いは無い。反逆者と罵られようとも、あの子を助ける為なら汚名も着よう。

だが——やはり、私の中に存在する衛宮士郎はそうあって欲しくない願っている。

『来てしまったんですね』

『ああ。もう私は迷わない。私を父と慕い、笑顔を向けてくれたあの子を救う。その道を阻むというのなら——』

『いえ、そんなことはしませんよ』

美鈴から発せられた言葉は、私の予想を覆すものだった。

だが、極めて冷静にその答えに問いとして返す。

『…………いいのか？君はこの門番だろう。ここを護る役目がある君がこんな容易く通してしまうのは、仕事放棄ではないか？』

『そうですけど、これは最初から決めていたことなんです。もし貴

方が迷いを捨てて再びここを訪れた時は、何もせずに通そうって。言ったでしょう？ 私は妹様を助けたいと思っているって。』

……そういえば、そんなことを言っていた気がする。

あまりにも自分のことで手一杯だったから、その時の記憶が曖昧だ。

『私にはあの子を救うことはできません。だから、貴方に託します。』

そつと、私の手を両手で包み込む。

寒空の下ずつと門の前に立っていた彼女の手は冷たい。しかし、心は熱を持って満たされていく気分だ。

期待が重荷に感じていた時が嘘みたく、身体が活力を生み出している。いや、分け与えてもらっていると言ったほうが正しいのか。

『館の殆どの人がそれを願っているでしょう。しかし——咲夜さんはその限りではないでしょう。心の底ではそう思っていないようにも、あの人が優先するのは常にレミリアお嬢様。お嬢様の幸福を阻害する者は、例えそんなお嬢様と血を分けた妹様であろうとも、容易く切り捨てるでしょう。』

——その在り様が、酷く心をざらつかせる。

やっていることは今私がやろうとしていることと変わらないのに、何故こうも苛つくのだ。

自分のやろうとしている事に踏ん切りがつけられていない証拠なのか。心の端では誰も傷つけないと願っている自分がいるから、似ているようで違う咲夜の在り方に嫌悪を抱くのか。

——なんであるかと関係ない。彼女が立ちふさがるというのなら、この胸の靄と共に払い除けてやる。それだけだ。

『私はそれでも前に進む。ここで立ち止まれば、二度と自分自身を

信じられなくなる』

『———そうですか。では』

美鈴の手で門が開かれる。

門が軋み、不気味に吼える。これが最後の警告だと言わんばかりに、高く声を挙げる。

『私ができるのはここまで。門番の役目を放棄しちゃったし、クビになるかもな』

ハハハ、と乾いた笑いを浮かべる美鈴。

無理に笑顔を浮かべてくれるのがひしひしと伝わる。最後の最後まで暗い雰囲気で終わらせない為に。

『もしそうなら、全力で職探しを手伝おう』

『はい、その為にも———生きて帰って来てくださいね』

『了解した』

新たな約束を背中に乗せ、私は紅魔館へと堂々と侵入した。

しん、と静まり返る館の中を彼は無心で歩く。

あの地下前の廊下を彷彿とさせるこの感覚、己が異物なのだと実感させられるこの疎外感に嫌悪感が募る。

それは、なによりもの拒絶の証。否定の現出からくる感情。

今の彼は、まさに籠の中の鳥。侵入者には扉に鍵をして出迎え、も^たてなし終えるまでは、決して解放されない。

——その執行者が、迫っている。

こつん、こつん。

突如奥から響く音。

廊下の先から響く、他愛もない靴の音。

明確な殺意を内包したそれは、音と共に膨らんでいく。

弓兵は眼前を見据え、そこにいる敵を見た。

『——貴方はどこまで、愚かなのかしらね』

身に纏う白く揺れるメイド服に、手に握られる不釣り合いなナイフ。

手に持つナイフと同じ色の銀の髪が、赤い月に浸されて血濡れに妖しく光る。

スカートを僅かにたくし上げて淫靡に魅せる太腿には、ナイフホルスターがびっしりと装着されている。

視線は逸らされることなく、一点に弓兵を見据えている。

そして、理解する。彼女は名実ともに敵となったことを。

『そこをどけ、十六夜咲夜。人の身で私に敵うと驕ったか』

『そういう貴方はまるで人間ではないと言いたそうね。——そうだとしたら、貴方を見る度に感じた違和感にも納得がいくけど』

『そんなことはどうでもいい。私の力の片鱗をその目で見た君が、何故この場に居るのか。理解に苦しむよ』

『そんな——単純なこと』

咲夜は両の手に余すところなく、ナイフを挟む。

獲物を追う狩人の目。メイドはメイドでも、彼という塵芥を排除する為の掃除屋に、今彼女は変態した。

『勝てると確信しているから——よ！』

彼女の手からナイフが疾走する。

人間の技術とは思えないほどに正確な投擲は、エミヤシロウへ死を内包させて迫る。

だが、そんな愚直な一撃を避けられない訳がない。

所詮人間の、ましてや女の筋力で放たれた投擲なぞ、サーヴァントにとつてはあまりにも遅い。

躲すまでの一瞬の間に、弓兵はナイフを解析する。

一切の神秘を持たない刃ならば、英霊には刺さることはない。

だが、この世界でそんな真つ新な物質があるとは思ってはいない。

証拠に、看破し終えたナイフには神秘が付加されていた。いや、最早概念武装へと昇華している。

その内容は——銀の弾丸と同様、狼男を滅し、悪魔を滅する反逆の牙。

『——おかしな話だな、悪魔に忠誠を持つ君が、その在り方にそぐわない武器を持っているだなんて』

『これはお嬢様から託されたもの。もし私が道を間違えた時、この手で終わりを与えさせる為に。故に、これはまごうことなき忠誠の証。私とお嬢様を繋ぐ、契約の鎖』

『ふん、御大層に饒舌に語っているが、君にそんな度胸はありはしない。レミリアに刃向うぐらいなら、君は率先して自身の死を選ぶ。そんな偽りの忠誠で、私の前に立ち塞がるな——！！』

黒鍵を指の間に投影、瞬時に咲夜の眼前へ振り抜く。

急所を的確に外した一投は、人間では対応不可能な速度で喰らい付いていく。

だが、それはエミヤシロウの予想を超える方法で回避される。

『^{速度}Time ^{変更}accelerate —— ^{二倍}double gear』

音が紡がれた瞬間、咲夜という個体にブレが生じる。

生物として有り得てはいけない拳動から成される瞬発力。人為的には不可能なそれを成し遂げる方法を、彼は知っている。

『時間操作の魔術だ！』

『——魔術とは何かは知らないけれど、これは物心ついた時から使えた能力よ。制御方法はパチュリー様仕込みだけど』

冷静な答えと共に咲夜は肉薄する。

取り乱しはしたが、それでも彼女の速さは英霊には遠く及ばない。

一撃離脱を繰り返す撤退戦を、弓兵は受け流すだけに留める。

戦いの最中、彼の意識の淵には、僅かな躊躇いが渦巻いていた。

人並みの速度の状態ならば、近距離だろうと被害を抑えた制圧が可能だったが、半端に速度が向上したせいで、攻撃と防御を切り替えるタイミングにズレが生まれ、それが困難となった。

元より彼はアーチャー。弓を番え射る者。

剣術の心得はあれど、極みにその身を置いている訳ではない。

搦め手等がきちんと存在している型を持たない彼には、直接的な方法による鎮圧しかできない。

だが、弓を射れる程互いに距離は離れておらず、距離を取ろうとすれば接近される。

故に、様子見。無意識が生む甘さに身を委ね、事態は膠着する。

『君は、外の世界の住人だったのか？』

『さて、どうでしょうね。生憎と私にはそこんところの記憶がないのよね』

『……………そうか』

会話が交差する中、ナイフと黒鍵の弾き合う音が響く。

仮に外の世界からやってきたとしても、今は関係ない。

その筈なのに、何故気になってしまったのだ？

記憶がざらつく。残滓が意識を掻き乱す。

それでも、迎撃に支障をきたさないのは、歴戦の勘のお陰か。

『貴方の疑問に答えることはできないけれど——代わりに、こんなのはいかがかしら？』

一足の跳躍で距離を取り、指を弾く。

——再度、ブレが生じる。今度は先程よりも激しい。

一呼吸置いた一瞬の間。そうして——まるで世界そのものがすぐ替えられたかのように、弓兵の眼前にナイフの雨が姿を現し、無慈悲に音を立てて降り注いだ。

気付いた時には身体が動いていた。

一度歪みを体感したからか、反応は先程よりも遙かに速い。

しかし——今度は先程のように、一本や二本で済む話ではない。数にして、凡そ五十。どこにそんなに隠し持っていたかなんて考える余裕はなく、同じように投影による迎撃をするにはあまりにも距離が近すぎた。

二十、十と迫る距離に、エミヤシロウは焦燥する。

「このツ！」

掌を天に翳し、七つの花弁を投影する。

無詠唱による熾天覆う七つの円環の投影に、身体が軽く悲鳴を上げる。

質はお粗末なものだが、概念武装にも劣る質のナイフに対抗するには、これで充分。

しかし――それすらも、彼女の罫だとは気付かない。

d Sand solidifies. □
 □ 砂は固まる The second hand stopped. 秒針は止まり

無機物の奏でる演奏会の中、透き通るような声が響く。

o e s n o t s p i n s o u n d .
 は W a t e r c h a n g e s w i t h i c e , w i n d
 水は 氷 紡がず と 成り 風

言葉が紡がれた瞬間に感じた怖気が、エミヤシロウに警告する

——あれを完成させてはいけない。戦場で培われてきた直感がそう告げている。

on in the eternal world like a
 の at orthodoxy not move on
 は I am before dancing the
 不変 の 世界 で 私
 独り 踊る 動かぬ 観客 の

『Pierrot』

しかし無慈悲にも詠唱は続く。

この時点でエミヤシロウは、誘導させられたのだと理解する。

一度彼女の目の前で熾天覆う七つの円環を使っている為、そうせざるを得ない状況に追い込めば先読みは容易い。

彼自身も使い慣れた盾と言うこともあり、それ以外の選択の幅が瞬時に思いつかなかったのは、彼女にとって知らずの内に生まれた嬉しい誤算となった。

——いや、これが運命さだめられた道筋だとするなら、幾度と運命に翻弄された彼では抗うことは不可能に等しい。

『Let's invite you to such a stage.』
そんな舞台に貴方を招きましよう

なんてもどかしいのだろうか。分かっているけど回避できない未来なら、知りたいとは思わなかっただろう。

理解していても変えることのできないものを運命と言うのなら——
——その運命の従者である十六夜咲夜は、一人の身でどの領域にいるのだろうか？

『I welcome by the best recipe.』
最高
持て成して
歓迎致し
ます

咲夜はポケットからおもむろに、月の模様が描かれた懐中時計を取り出した。

僅かにだが魔力が籠められているそれを、彼女は強く握り締める。

射貫くような視線が、エミヤシロウに向けられる。

牽制として放ったナイフは、全て地に叩き落とされる。同時に熾天覆う七つの円環は役目を終え、輝きを放ちながら霧散する。

それに続くように、エミヤシロウは爆ぜる。詠唱を止めんと、慣性を使った黒鍵の投擲で、懐中時計を狙う。

この場で意味もなくあんなものを出すような性格ではないことは彼だつて確信に近い推測で理解している。あれが無ければ、この詠唱は完成しないのだと。

しかし——英霊であろうと、確定された未来を覆すことは叶わない。

刃向かったところで、上位の存在である自然の摂理を超えられる訳がないのだと、まざまざと見せつけられることになる。

『Welcようこそome to ————— Flowering N
igh世界へt world.』

開幕の言葉と共に月時計は役目を終え——同時に、世界から色が消えた。

空間が円状に広がる。

全てがモノクロの世界にあるのは、古今東西の時計の数々。

それらはまるで、この世界を区切るかのようにドーム状に彼女達を包み込む。

足下には十六夜咲夜が握っていた月時計があり、それは空間の誇大化に比例して面積を広げていく。

空も地面までもが時の象徴で埋め尽くされる。

それらは共通して命を吹き込まれておらず、ただのアンティークとしてしか意義を見いだせないでいる。

しかし、それがこの世界では常識。

この世界は、万物が胎動する事を決して許さない。生命も、現象も、事象すらもこの世界では動きを止める。

人間でも、ましてや妖怪であろうとも身に余る、時間停止能力。魔法の域にあるそれを体現する者が、ここにいる。

「——一瞬でも遅れていたら、腕を持って行かれていたわね。」

そう呟きながら、一寸程度の間隔で静止している黒鍵を手取る。

この世界の創造主たる彼女は、時の鎖に縛られることはない。

彼女の使用する空間の広域化、時間操作もこの能力から零れ落ちたものでしかない。

この空間内ならば世界すらも欺くのは容易い。

だが——行き過ぎた力には当然代償がつきまとう。

「——ッ」

突如訪れる目眩。

肉体限定の時間操作、先程エミヤシロウに向けてやってみせた無詠唱の時間停止、極めつけの結果状に昇華させた時間停止のフィード。

これらの短時間での連続使用は、喩え幾ら彼女が時間に対しての適正があるうと、無事では済まない。

寧ろこれだけで済んでいるのは、時間停止を途方もないまでに繰り返していたからであり、初めてこれを発動したときは、軽い昏睡状態に陥るまでのフィードバックが彼女を襲っている。

好奇心程度で操れるほど、この力は無色ではない。

代償を前提とした、命削りの宝札。この身を贄とし、触媒と化す異端の力。

そこまでして力を求めるのも、全てはレミリア・スカーレットと共

に在ろうとするが故。

しかし、人間が吸血鬼と肩を並べるには、それぐらいしても足りない。

彼女の理想としてレミリア・スカーレットは、それこそ天上の存在。逆位置に存在する神よりも上に居る。

当然事實はそうではなく、彼女の妄誕が生み出した偶像ではない。だが、彼女にとってはそんな妄想こそ世界の全て。他者の認識が介入する余地のない、ある意味純粋な世界。

故に物事に疑問を抱く必要もないし、させたくてもそれは並大抵の労力では済まない。

何が彼女をそこまでさせるのか、それは本人のみぞ知る過去の出来事。

『……………さて、やりましょうか』

そうして拾った黒鍵をエミヤシロウに向けて投擲する。

二人の距離は十メートル近く離れており、その半分ほどで黒鍵は静止する。

これは彼女が意図している訳ではなく、彼女の手に握られたことで一時制御下に戻った為、投擲することで慣性が一瞬だけ働き、それを保持したまま静止したに過ぎない。

それだけでは終わらず、静止した黒鍵はその刃を彼に突き付けたまま、囲う様に？増殖？していった。

この世界は、常にゼロ秒で固定されている。

それなのに物質が動くというのは、矛盾が生じる。

故に、この世界がその矛盾を解消する為に、先ほど物質が存在した場所には全く同一な物質が再構成される。

結果として、疑似的な投影がこの世界では実現可能となっている。しかしこの世界が消えれば、当然矛盾も発生するようになる。

幾度とこの力を行使したことで掴んだ、消滅までの時間。凡そ五秒弱。

それだけあれば、弾幕としては機能する。彼女の弱点でもある獲物の数すら克服する、まさに彼女の為の能力。

そうして次第に黒鍵は数を増していき——エミヤシロウは剣のドームに包まれた。

その数、二百。いかに英霊であろうとも、この数を前に無傷ではないられない。

『——そろそろね』

感覚的に理解る、世界の終焉の瞬間^{とき}。

この世界を創りあげ、維持するにあたつて魔力は必ず空になる。

世界の消滅は、魔力の供給が断たれた時のみ起こり、意図的に解除することはできない。それがこの能力の最大の弱点。

とどのつまり、この一撃で沈められなければ——事実上、彼女の敗北が決定する。

時を操れない彼女は、ただナイフ投げが上手い一般人と大差ない。そんな彼女が素面で英霊と対峙して勝てる道理は無い。

咲夜は月時計を覗き込む。

慈しむようにその造形を眺め、心を落ち着かせる。

彼女の半身といっても差し支えない、唯一の相棒。

これなくして時を操るなんて真似は不可能だった。幾ら彼女に適正があろうとも、世界を無条件に騙せる能力を人間の力のみで行使するのは無理がある。

この時計は、曰く月の破片が埋め込まれているとか。時間を表現する原初の方法として、太陽と対を成す存在を触媒としているとすれば、確かにこれ程の無茶もある程度はまかり通る。

欠片ほどの大きさでそれなのだから、本物の月にはどれ程の魔力が秘められているのか。

カチリ、と秒針が音を立てる。

それはこの世界の終わりを告げる音。

呼応するように天井がひび割れていき、周囲を巻き込んでいく。

消える直前、アンティーク同然だった時計達が悲鳴を上げる。命が失われる瞬間に奏でられる、悲しい音楽。

時計達の悲鳴を一身に受け止め、世界は元に戻る。

モノクロの世界から、紅く美しい世界へと身を預ける。

そして——突如目の前に展開された異常な数の黒鍵に、エミヤシロウは目を見張る事となる。

『う——おおおおおおおお！！』

絶望的な状況に悲観する余裕などない。

視界に収まる範囲全ての黒鍵を迎撃すべく、同じ数の武器を投影、射出する。

正面はそれに任せ、今度は背後の迎撃に当たる。

しかし、振り向いた先に迫る黒鍵の距離は、最早目と鼻の先。先と同様の方法では圧倒的に遅い。

思考をすぐさま切り替え、干将・莫耶を投影する。

幾多の戦場を超えてきた剣術で、死の雨を叩き落さんと只管に振るう。

『ガアッ——！！』

圧倒的なまでの物量の差。それは英霊にさえも辛酸を嘗めさせるに至る、まぎれもない戦術。

事実、彼は向かう全ての黒鍵を防ぎ切ることはできずに、あらゆる

箇所痛々しい傷痕を残している。

だが、勝敗を決する決定的な傷を受けていないのは、彼の實力が、はたまた意地か。

数秒にも満たない瞬間的な戦争は、そうして終わりを告げた。

ただ一本を残して、黒鍵は音もなく消滅する。

地面に痛々しく刻まれた傷痕は、紅魔館の造形美を著しく破壊している。

『ハアツ——ア——ッ』

エミヤシロウはボロボロの肉体に鞭を打ち、咲夜へと近づく。

魔力を使い切った咲夜は、無茶な能力の行使も相まって、地面に伏している。

地に伏す者としっかりと大地に根を張り立つ者。明確なまでに勝敗は決しており、それは揺るぎないものだ。誰もが疑わない現実。

しかし、彼女は立ち上がった。

忠義の為ならば、動かぬ手を切り落とし、付随な足を滅多刺しにしても機能させようとする。それが十六夜咲夜の忠誠の示し方であり、恐らく一生変わることのない現実だ。

だが、そんな生き方がエミヤシロウには不快でしようがない。英霊エミヤの陰が、咲夜からちらつく。あれは、理想を諦め妥協した者の眼だ。

レミリアに忠を尽くすが故、そんな彼女の世界を揺るがす不穏分子たるフランを切り捨てたのだろう。

だからこそ私達は対峙しているのであり、そうでなければ刃を交える意味が無いからだ。

『君はそこまでして、フランドール・スカーレットを否定したいか』

『……………彼女には、貴方だけではなく美鈴達だって味方している。

紅魔館の住人は、フランお嬢様がしがらみから解放されることを切に願っているわ。故に——意見が対立すれば、レミリアお嬢様の味方は私一人になる。可能性に縋り、より良い未来に進むことは悪いことではないのは理解しているわ。だけど、最良の未来は理想が故にとても尊く、非現実的なもの。夢想到にふけり、足下を見ないのは莫迦のすることよ。それだったらいつそ、現状維持を選択した方が誰もこれ以上傷つく必要はないし、余程建設的だと、思うわ』

最後は齒切れが悪そうにしながらも、彼女は己の意見を吐き出す。一を切り捨て、十を救う。その在り方が間違いだとは言わない。

理想に夢想せず、堅実的な生き方を選択するのが普通なのだ。いや、誰しもが理想の前に膝をついたからこそ、そういった選択肢しか残されていないというだけなのだろうが。

確かに間違いではない、が——同時に正しくもない。

『——それが君の選択か』

私は地に刺さる黒鍵を拾う。

彼女は彼女なりの考えがあつてその結論を出したのだろう。

もしかしたらかなり葛藤したのかもしれない、忠に生きているとは言え、同じ屋根の下で住まい、更に切り捨てるべき相手が仕える主の妹となれば、選択肢の幅は自然と広がった筈。

姉妹で肩を並べて笑い合う光景を彼女は理想とし、憧れたに違いない。それがレミリアにとっての最良ならば、彼女がそれを無視でき

る筈もないからだ。

だが、彼女もまた、理想を前に膝をついた。故に妹の方を切り捨て、心を氷のように冷たくし、非情に徹する事を選択した。

同情はしよう。しかし、憐みを持って彼女に手を差し伸べることはできない。

そんなことをすれば、私にフランの開放を託した美鈴の想いを無駄にってしまう。そして何よりも——もう、自分に嘘は吐きたくないんだ。

『……………仕方ない、君には眠ってもらおうでしょう』

瞬間、咲夜の懐へと間もなく入り込む。

肉体的にも立つのがやっとな彼女では、その速度を目で追うことも叶わない。

私は黒鍵を構え——刃が刺さる直前に持ち方を反転させ、腹部を柄で殴った。

数メートルは吹き飛び、今度こそ咲夜は動かなくなった。

『——難儀なものだな』

過去の自分を体現したような存在、十六夜咲夜。

その在り方は過去の自分と対峙しているようでもどかしく、そして苦痛だった。

しかし、身から出た錆をありありと見せつけられたことで、決意は改めて固まった。

本当に正しい選択なんて、この世にはきつと無い。

だから皆が手さぐりで前に進み、道を誤れば後悔し、反省する。

だが人間は幾多の後悔の前に、我を保つことは難しくなる。

よって、過去の選択を倣い、成功例に縋り、より安全で確実な道を選ぶ。

そういつた意味では確かに正しいのかもしれない。だが、成功すれば正義だなんて結論、私は容認できない。

歴史は常に勝者の都合のいいよう改竄されてきた。そのすべて知っていれば悪となり得たであろう存在でも、知らなければ世界を救った英雄や王という枠に収まる。

性善説を長々と語ろうとは思わないが、喻え私は悪と周囲に蔑まれようとも、フランを助けたい。今の一番は、彼女だ。

フランの救済はレミアアの、次いでは紅魔館全体の救いにも繋がる。この選択も正しくはないんだろう。堅実に生きたい者にとって、私は言わば嵐のようなものだ。破壊しか齎さず、誰にとっても害悪でしかない存在。

そう思ってもらっても構わない。だが、私は決して歩みを止める気はない。

何が正しいかで悩み、手をこまねくのは元々柄じゃない。

あくまで自分に正直に信じた正義を貫く——それが衛宮士郎の在り方そのものであり、今の私にも継承されている、尊き意志だ。

『しかし——まったく、君には驚かされるよ』

突如目の前に現れたナイフに黒鍵。瞬きもしていない筈なのに、場面を一気にすり替えたかのように現れたあれらは一体どんな原理でやっていたのだ？

——分かれている筈だ。どんなに荒唐無稽な推測であろうと、証拠が散りばめられていれば、それが真実となる。

時間制御の魔術のような動き、黒鍵を大量に展開させた——あればかりは原理が全く分からない——時の、テンカウントクラスの長詠唱。

あの詠唱の長さ、前述の能力との関連性から推測するに——
——彼女がやってのけたのは、時間停止だ。

莫迦げているとは自分でも思っている。だが、時間が止まっていたならばあの挿げ替えたように現れたナイフにも説明がつく。

人の身に余る能力を行使すれば、たった二度とはいえ限界がくるのは無理はない。

どうして彼女が時間停止なんてものを使えるのかなんて、この際どうでもいい。

脅威ではあるが、彼女はもう動かない。死んではいないだろうが、動けるようになるには数日はかかるだろう。

私は咲夜の身体を壁に預けるように寄りかからせ、再び前へと進む。月は変わらず、血のように赤い。月の杯が満たす血は、一体誰のものなのか。

その答えを知ることができるのは、生き残った者のみ。

救いの在り方（後書き）

さーて、終局に近づきある中、久しぶりのステータス紹介だよ。咲夜さんでつ。

ただ、一度彼女のステータス以外の部分は紹介したので、そこは端折ります。

十六夜咲夜

属性：秩序・悪

筋力：E＋

耐久：D

敏捷：D＋

魔力（霊力）：B＋

幸運：C

宝具（程度の能力）：A＋

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：D 通常弾幕で傷つくが、威力によっては補正が掛かる。

直感：C 戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。敵の攻撃を初見でもある程度は予見することができる。

気配遮断：B 気配を絶つ技能。完全に気配を絶てば発見することとは非常に難しい。

保有スキル

千里眼：D 純粋な視力の良さ。遠距離視や動体視力の向上。高いランクの同技能は透視・未来視すら可能にするという。

投擲（短刀）：C 短刀を弾丸として放つ能力。彼女が保有するナイフは30余り。

紅の魔眼：C 一定条件下で発動する、肉体強化の兆し。発動時は全ての能力が1ランク上昇し、Dランクレベルの魅了の魔眼が付与される。

月時計：B 月の破片が埋め込まれているとされる、月を象った懐中時計。所持しているだけで時間という概念に対して耐性を得、所持者が時間を操るに於いては無限使用可能な触媒となる。

宝具

時を操る程度 of 能力：A + レンジ0～100 最大捕捉：50人

時間の加速、遅延を主とした時間制御能力。

しかしこの能力の本質は、完全な時間停止を可能とした魔法に匹敵する固有結界の展開。

空間内部は白と黒の二色のみが色を司り、見渡す限りあらゆる時代、種類の時計が上空に配置されており、それらは共通して針が動いておらず、彼女の心象風景を表している。

地面は固有結界展開に於いて必須となる月時計に代わっており、唯一これだけが時計として機能している。これは、発動者のみがこの世界で生きること許されている証であり、証明。

固有結界を発動しても、発動者以外には発動を知覚することは出来ない。喩え効果範囲外であろうと、それは例外ではない。

発動から消滅まで事実上ゼロ秒なので、発動が成功すれば完全な発生活保障がつく。

結界内では彼女以外は絶対不動を約束されるが、彼女が肉体的に干

渉する間のみ、動くことを許可される。但し人間などに触れたとしても、触れた部分だけが動くだけで、直接脳に触れない限り意識してこの世界を知覚することは不可能。

無機物に触れ、別の場所に移動させた場合、時間が経過していない空間で同一の物質が動くというのは矛盾となる。その矛盾を固有結界そのものが解消する方法として、結界展開時に存在した物質が移動した際、その起点に新たに全く同一の物質を再構築するという修正が成され、疑似的な投影を可能とする。

ただし、その修正が発動すれば発動者の魔力はその分差し引かれる。修正対象となる物質がより神秘を内包していればするほど、魔力の消費も加速する。

弱点として、一度固有結界として発動してしまうと、魔力が空になるまで解除不可能なところと、自分以外の生命を結界内で動かせるようにできないこと、そして時間停止状態では物理的な変化を行えないようになっていく。

物理的な変化とは、例として時間停止状態でナイフを敵に刺そうとしても一切傷付かないし、解除後にもダメージが反映されない事を指している。

幕引き、そして……（前書き）

——終局は、近い

幕引き、そして……

傷ついた肉体を引きずり、私ははフランの居るであろう地獄に向けて足を運ぶ。

ドームが収縮するように迫ってきた黒鍵は、とんでもない驚異だった。

英雄王に比べて威力も速度も劣るが、逃げ道を封鎖され、全く同一のタイミングで降り注ぐ攻撃というのは厄介な事この上ない。

事実、頭部を除いた部位を最低一箇所は貫かれており、掠り傷は数えるのも億劫な数。一秒でも選択を躊躇っていれば、あのアインツベルン城の焼き回しとなっていただろう。

初動のタイミングが分かる宝具の雨に対しては相性は良いが、予備動作もなければ瞬きひとつで包囲できるような攻撃に対しては、相性は最悪と言っていいたいだろう。

一点集中で突破するにも、それを可能とする程の射出までの工程を編めないとなると、必然的に防御に回るしかない。

自らの甘さが生んだ傷みとはいえ、この後に迫る戦闘のことを考えると、溜息が出る。

実力が未知数な点は先程と変わらないが、相手が吸血鬼だということ実ははつきりとしている。

吸血鬼。それは恐怖の象徴のひとつであり、御伽ではなく今も尚現世に存在している、強者。

彼女達の出生は不明だが、先のレミリアとの会話を聞いている限りでは、死徒ではないのではと推測している。

そうなれば真祖か？とも考えたが、もしそうならば——私に勝機はあるのだろうか。

人間に対して直接的な自衛手段を持たない星が、人間を律するために生み出した？自然との調停者？、精霊が受肉した存在。

空想具現化なる、固有結界を超えた世界干渉の術を持ち、星のバツクアップも受けている。そんなとんでもない相手なら加減はできないだろう。それどころか、勝算すら見いだせるか。

しかし——真祖というのはそう易々と生まれるものではない筈。だいたい、女性という形で真祖が現出することは稀だと言われているのに、それが姉妹でだなんてあまりにも現実味を帯びていない。となると——判断材料もなにもないに等しい、完全な憶測でしかない。彼女達は御伽の吸血鬼のイメージが具現化された存在なのではなからうか。

幻想郷とは、廃れた存在が流れ着く場所らしい。それなのに未だ裏の世界では知覚されている吸血種が、この世界に存在しているのは、少しおかしい。

そうなると、御伽のように血を吸うことで相手を吸血鬼にし、ニンニクや十字架を酷く嫌う、そんなありふれたイメージが具現した存在と言われた方がまだ納得がいく。

真祖ではないという結論を捨てられたことで、勝機が見えてきた。勿論これらは私の勝手に出した結論であり、正解だとは限らない。だが、戦う前から尻込みして十全の力を発揮できなくなるというマイン要素を取っ払うことはできたならば、問題はない。

そうしてあの地獄への入り口が視界に入るところまで来ると、その付近の壁に寄りかかっているパチュリーも同時に目に入る。

彼女も敵だろうか、そんな考えが一瞬よぎったが、美鈴にパチュリーはこちら側だという事を事前に聞かされているので、その言葉を信じて彼女の前まで無手で近づく。

私に気が付いたパチュリーは、特に驚いた様子もなく私の接近を許す。

『……………その程度の傷で済むなんて、ホント貴方は未知数ね』

『褒め言葉として受け取っておこう。——それより、君は』

『敵じゃないわよ。この館内で貴方に刃向おうと考えているのは、今では妹様だけよ。どうやらレミイも貴方に害なす気はないような、ここにいないということは』

『——レミリアが何もする気がないだと？大事な妹が壊されてしまつかもしれないというのに、静観を決め込むだなんて、一体何を考えているんだ』

『さあね。私が動いても未来は変わらない、と言ってたから、なんか考えがあるんでしょうね。彼女の能力は知っているんでしょう？』

私は無言で頷くと、パチュリーはそう、と小さく返す。

『彼女の考えは分からないが、戦いを避けれるに越したことはない。今でもこんな状態だしな』

英霊の肉体だからこそ生きているのであって、これが人の身であれば出血多量で死に至る傷なのだ。

そんな状態であと二戦あると考えると、はつきり言っただけ絶望しかない。

『……………ちょっと大人しくしてなさい』

パチュリーはポケットから宝石を取り出し、私の身体に添える。すると宝石が内に秘めた魔力を解放させ、力強く発光すると共に私の肉体を癒していく。

『これは――』

『貴方が前に教えてくれた宝石魔術を、独自に勉強したのよ。こういった修復魔術は魔力さえ込められていけばそう難しいものじゃないって分かったし、魔力に関しては結構楽に込められたわ』

幻想郷は外に比べて魔力が蔓延している。

一度に込められる量は言わずもがな、魔術に関しては素人とはいえ此方の世界での魔法を運用してただけはあり、効率も比較にならない。

だが、それでも所詮一週間かそこらで込められる魔力は高が知れている。

サーヴァントというエーテル体で構成された存在だから結構な回復が見込めるのであって、通常ならばまだ実用段階ではないであろう。私の正体は知らずとも、実用段階で無いことは彼女も承知している筈。それなのに貴重であろう宝石を私に使ってくれるということは、余程私に期待しているらしいな。

『そうか……。ありがとう』

『礼はいいわ。これぐらいしかできない以上、私以上に働く貴方に感謝されても、それに見合う働きができないんだもの』

そんなことはない。傷が塞がっただけでも、どれだけ助けになったことか。

だが、私の知り合いの女性というのは、そういったところが謙虚か当然とふんぞり返るかの二択で分類される。

彼女の場合前者なのだろうが、普段の彼女を見てみると、後者にしか思えないと思ったのは秘密だ。言ったら無意識にガンド撃ちを体得されそうだ、我が身を持って。

『フランはこの中にいるのか？』

『その筈よ。恒例行事っていうと皮肉に思えるでしょうけれど、この時期になると妹様はあの部屋に引き籠もるのよ。極力私達とも関わり合おうともしないし、食事だってまともに摂ろうとはしない。出来得る限り外界からの情報をシャットダウンしようと必死になっているのよ』

……… 周期的に訪れる狂気という名の運命。

赤い月を前にして、我を保てない程に心弱い少女。

自分の存在が他人を不幸にする。そんな間違った認識を覆すことさえ出来れば、あの月に—— 自分自身に怯える必要はなくなる。

そうすれば、あの子は本当の意味での笑顔を作ることができる。そして、あんな薄暗い世界からも抜け出せる。

私は一步その場から踏み出すと、止めるようにパチュリーが声を上げる。

『もう行くの？もう少し休んでから行っても——』

『そうはいかない。あの赤い月が色を失う前に、全て終わらせる』

『……… なんでそこまでして危険に首を突っ込むのか知らないけれど—— 死なないで』

困惑の色を孕んだ言葉が、

『ああ、約束しよう』

振り返ることなくそう告げ、私は深い闇へと身を沈めた。

深淵に深く深く、沈んでいく。

自分自身の輪郭すら捉えられないほどに深いそれは、まるでこの先に待つ少女の心理を表しているかのよう。

等速に刻まれる足音は心音のように聞こえ、そんな乾いた足音は空しく、悲しい。

フランを救う、しかしその過程で確実に傷つけてしまう。その二律背反に心が痛み、決意が揺らぎそうになる。

何の犠牲もなしに救いを与えられるとは思ってはいないが………だからといって刃を向けても良いなんて道理は通用しない。

そんなものが救いだなんて胸を張っては言えない。しかし、誰かがやらなければいけないことであることもまた事実。

ならば、喜んで汚れ役となろう。非道と蔑まされ、侮蔑の視線で見られることになろうとも、私の信じた理想が実現できるのならばそれで構わないさ。

これも傍から見れば自己犠牲のひとつなのだろう。だからと言って他人任せにして、傷つくことなくぬくぬくとした生き方は、私にはもうできない。

やろうと思っても、魂が許容しないのだ。今まで肉のみを食してきた動物が肉無しでは生きられないように、この行動理念は最早一朝一夕で変えられるものではないのだ。

手探りで階段を降りても、闇は晴れることは無い。

光が射す唯一の要素である部屋の光が届いていない。それは前回のようなミスは許されないと慎重に慎重を重ねた結果。

何人たりとも近づけさせない、そんな確固たる意志が見えない扉から感じ取れる。

逆に言えば、そんな他人と関わろうとしない否定の意志こそ、彼女の優しさであり、精一杯の抵抗なんだろう。

彼女の意志に関係なく一定の時期に訪れる、狂気という名の病。その前ではあらゆる感情も意味を成さないだろう。

あの子にとって日に日に迫ってくる紅い月は、周期的に訪れる処刑日と同義。なぜならば、この日フランドール・スカーレットという少女は一度死ぬから。

代わりに生まれるのは、狂気を内包した悪鬼。吸血すら望まず、破壊のみがレーゾンドールの吸血鬼。

そんな悲しみに満ち溢れた存在に、私は終止符を打つ。肉体的にも精神的にも、その悪魔を——殺す。そして、元の優しいフランドール・スカーレットを返してもらう。

『——投影、開始』

ただ静かに、魔術回路を起動させる。

鉄に熱を帯びさせ、硝子^{こしろう}を幾重にも補強する。

傷つけることに対しての躊躇いを捨てろ、迷った瞬間が最期だと知れ。

敗北とは、フランドールの救済とこの身が生き長らえる、このどちらかが欠けた瞬間に訪れる。

命を賭した勝利は、敗北と大差無い。不特定多数を相手にしている時とは違い、この背に背負う期待は計り知れない。

孤独の戦いでは自分の行動の全てを自分の責任で背負う分、自分の死に価値を見出さなくても済む。

しかし今、こんな私の命でも価値が生まれた。他者の期待と希望を背負い、守るべき者の命すら天秤にかける権利を与えられた。

……重い。あまりにも、重い。

独り善がりの無責任な生き方は、ここでは通用しない。それはつまり、今までの行動すべてを改めなければならないということだ。そんな余裕は無い。無いのだが、やるしかないのだ。

馴染みの夫婦剣の感触が、無意識に戦いの鼓動を内に鳴らす。

重い扉を剣の柄で二度叩くと、見た目に相応しい音が反響する。

返ってくる言葉は無い。当然といえば当然だが、だからといって歩みを止める気は毛頭ない。

一呼吸置いて、扉との間隔を開ける。そして、あの時と同様に扉に向けて夫婦剣を投擲、壊れた幻想を発動した。

轟音と共に周囲の壁もろとも粉碎し、黒に白が文字通り光速で浸食していく。

そんな眩しさに目を細めつつも、視界を慣らす為に決して目は逸らさない。

破壊によって生成された塵と光が晴れていく。

そして目の前に新たに現れたのは、私を父と呼び慕う、心優しき少女。

しかし——そんな少女の表情は、私の知るそれとは大きくかけ離れていた。

『あれえ、お父様どうしたのお？こんなところにいちゃいけないよお』

口元は常に歪に歪み、目はカッと見開かれた状態が当たり前。

言葉も何かに酔い痴れているかのよう、甘美で妖艶。おおよそ私の知るフランドールの姿とは、あまりにも異なっていた。

『それは君もだろう。君はこんなところにいるべきではない』

『へえ、そんなことを言うためにここに来たんだあ。………もし

かして、お父様って莫迦？』

ケタケタとベツトの上で笑うフランからは、邪氣の一切を感じない。あるのは楽の感情のみ。喜びも、怒りも、悲しみも含まれない、余りにも純粹な笑い声。

無駄を排斥した、混じり気の無い感情。それはあまりにも眩しくて――不気味。

そんな心の底から恐怖を煽るような光景は、彼女が狂氣に身を委ねている何よりの証拠でもあった。

『…………言質を取らずとも、ここに居るのが何よりの証拠となるだろう？それにな――私の人生に於いて、莫迦ではない行動はひとつもないのだよ』

――運命と出逢ったあの日から、私の人生は狂いに狂った。命を賭けた行動なぞ当たり前、それが自身の欲求を満たす行動の過程ならば言うことはないが、それが他人の為だというのはだから質が悪い。

そんな生き方をしてきた衛宮士郎も莫迦だが、その成れの果てである英霊エミヤは、過去現在未来に於いて情報として登録された自分を抹消する為に、たかだかひとつの平行世界に存在する過去の自分を殺そうとした。

小数点の下が無量大数の桁に至ろうとも、ゼロ以外の桁を確認出来ない程の確率でしかその願いは実現出来ないというのに、本当の莫迦じゃないとこんなことは出来ないな。

莫迦でなければ到底やろうとは思わなかったことを当然のようにやってきた時点で、フランの問い掛けは私にとっては今更である。

『あ、そ。じゃあそんな莫迦なお父様は、本当にそれだけの為にここに來たの？』

『…………言葉だけで解決できれば万々歳だが、そうはいかないらしい。気付いているか？今の君は、普段とは言動も挙動も表情も普段とは異なっていることに』

『うん、分かってるよ』

『私はな、いつものフランに戻って欲しくて今ここにいる。これといった解決策を持っている訳ではないが、居ても立ってもいられずこうして参じたのだ。…………君だって、望んでこんな場所に居る訳ではないだろう？望まない環境で生きるなんて、そんな苦行を君が背負う必要はないんだ』

説得が彼女の狂気を抜く切っ掛けになるかは分からない。だが、やらなければ効果も証明できない。

顎に手を当てて数秒フランは考え込み、それから言葉を口に出した。

『ねえ、本当に今の私が狂気に身を委ねていると思う？』

『…………何？』

『お父様が普段見てきた私こそ実は狂っていたのかもしれない、今の狂ったと断定された私が正常なのかもしれない、ってこと』

『言葉遊びに付き合うつもりはないのだがな……………』

『だって私は吸血鬼だよ？狼男よろしく対で描かれる存在が、月を前にして狂うっていうのはおかしいと思わないの？だから狂気を克服するってことは、今の私を殺すのと一緒になんじゃないかなあ』

つまり、月とは吸血鬼の本性を現す為の増幅器のような意味合いを持つ、と言いたいのか。

故に本性と狂気がイコールで結ばれ、私の言う正常が異常なのだとフランはそう言いたいのか。

『確かに君の言うとおりなのかもしれないな』

だがな、と続ける。

『私は王のように万人を受け入れる器を持つてはいない。あれもこれもと手に抱えても、零れてしまう。だから捨てることを選択する、狂気を孕むフランドールを切り捨て、心の底から私を父と慕うフランドールをこの手に残すという選択肢を。だから、私は君を消す。喩えエゴだと言われようと、この意志を曲げる気はない』

夫婦剣を再び手に握り締め、迷いの無い瞳で悪魔を睨み付ける。

『……………そつか。お父様だったら私も受け入れてくれると思ったのに、なあ』

小さく、感情の起伏の無い言葉が響く。

しかし僅かに細めた目の奥からは、狂気よりも先に哀愁が浮き出てきており、あの一瞬だけは、意識がクロスしたのではと思う程に、狂気が薄れていた。

しかし、やはり一瞬は一瞬。紅い月が増幅する狂気の前では、そんな奇跡すらも容易く踏みにじられる。

『でも仕方ないか。でもね、私だって死にたくない。お父様の勝手で私を殺すんだったら——私が同じ事したって、文句は言われな
いよね？』

瞬時に空気が凍り付く。

それが戦闘開始の合図だと、直感で理解する。

ゆっくりと、スローモーションのようにフランの腕が上がっていく。足にありつたけの強化を施し、その手が握られるよりも早く、フランの背後へと疾走した。

背後に到達するのと、握られたのは同時。しかし、何かが壊れるような音はいつまで経っても聞こえない。

『…………… どうして、私の能力の弱点を知ってるのかな？』

その問いに、私は答えない。

何せこの一連の行動は、事前に得た情報を紐解き、そこから弱点と思われる可能性を信じた結果に過ぎないのだから。

死の点を掌に収束させ、握り潰すことで破壊を成就させる。厄介な事この上ないが、解せない部分もあった。

死を掌に収束させるだなんて、本来そんなことは不可能だからだ。

万物が持つ死の形を移動させるというのは、言ってしまうえば心臓を全く異なる箇所に移動させるのと同じだ。

概念としての死であろうとも、命の形が変われば全てが狂う。ましてや一つの生命の全てを殺す点を移動なんてさせれば、人間が吸血鬼になっても不思議では無いほどの生態系の狂いが生じる筈。

人間という個体で大きく纏めていても、細分化すればいろんな個性が浮き彫りになる。男や女、太っているか痩せているか、背が高いか低いか。誰しもがどこかに差違を持ち、同一の存在とはならないように出来ている。

魂だってそうだ。きちんとした差別化が図られている以上、それらが移動をしまえば、肉体、精神共に変化——最悪、その瞬間に死んでいても可笑しくはない事態になりかねない。

ならば彼女の能力の本質は何だ？そう思案すると、私はある一人のサーヴァントを思い出した。

……ハサン・サッバーハ。第五次聖杯戦争に於いて、ザバーニヤ妄想心音という、掌に敵の心臓の模造品を作り出し、それを潰すことで本物の心臓をも破壊するという呪術の宝具を使用したアサシンのサーヴァント。

あの男の宝具とフランの能力は、あまりにも類似点が多い。だが、全く同じではないというのは、先の会話から予想はついている。

妄想心音は心臓の破壊のみだったが、フランの破壊は例外無く全てを壊す。

二重存在の投影ならば、掌に集まるのは破壊する物質と同一のコピーでなければならぬ。だが、彼女の場合は知覚不可能な死そのものを壊しているらしい。

そんな不明瞭な概念を壊すとするならば、破壊する対象のイメージが異常なまでに必要になる筈。

投影に関しては熟練している私の意見を言うならば、魂レベルの概念を完璧に投影するには、視覚的な情報だけでは圧倒的に情報不足。何せカタチが残っている物質でさえ、情報を読み取ることができないものだってあるのだ。それを差し置いて、不定形な概念を視ることもせずに投影するなんて、どだい無理な話だ。

心臓のようにある程度イメージが固定化されている物ならいざ知らず、死そのものをコピーするならばその死そのものをきちんと視た上で模倣しないと、間違いなく情報不足で発動しなくなるだろう。

……もしかして、彼女は幾度となくこの能力によって死に触れたから、狂ってしまったのではなからうか。

死とは、根源に近い領域にある概念だ。万物の始まりにして終焉、この世の始まりでもあり終わりでもあるそれに近づけば、精神が病んでも不思議ではない。

寧ろ、未だに我を保つ要素が残っているというのが奇跡だ。
それほどまでに、彼女の視ている世界が残酷で、条理が通用しない
次元のものなのだ。

賭けではあった。

これらの判断材料を持った上で彼女の虚をついた結果、これ以上と
ない証拠を得ることが出来た。

しかし、もし推測が外れていれば、間合いに入った時点で私は死ん
でいた。

故に、賭け。命をチップに、結果脅威の打倒に成功した。

無謀にも程がある。だがそうでもしないと勝てない相手なのだ。少
なくとも、英霊如きが同じ目線に立てる相手ではないことは確か。

——それがどうした。我が娘が道を踏み外そうとしているのなら
ば、それを正すのが父親だろう。

本人からすれば望まない形だとしても、意地を通して孤独になつて
しまえば、決意も何も意味がなくなる。

誰かが隣で見ていてくれるからこそ、決意や意志が尊重されるので
あつて、終始独りで在ろうとするならば、本能に従って生きればい
だけのだから。

……私は、彼女の笑顔、心の優しさを尊重したい。

優しさも笑顔も、傍らに誰かが居ることこそ意味を成すものだ。

そんな彼女が孤独に生きるなんて——あまりにも勿体無い。

純粋な心は稀有だ。打算で生きるのが当然な現代に於いて、それは
より美しく映える。

今でこそ狂気に塗り潰されているが、決して根本から消え失せた訳
ではない。

だったら、再び染め上げればいい。優しさに満ちたあの頃のフラン
に。

『…………でも、関係ないよね。何度でも繰り返せばいいんだし!』

フランは裏返った声で叫ぶと、再び破壊の掌を私に向ける。

同じように彼女の背後に回ろうとするも、やはり学習しているのか
そう簡単には取らせてくれない。

だが、ギリギリ視界からは外れているらしく、一向に掌握されるこ
とはない。

しかし途中で破壊できないことにつまらなさを覚えたのか、隙を見
ては壁や地面を破壊している。

——遊ばれている。事実、一撃貰えば終わりだなんて反則を前に
しているのだから、劣勢になるのは致し方ない。

とはいえ、そればかりが理由でもない。

躊躇っているのだ、攻撃することを。

『どうしたの？逃げ回ってるだけじゃつまんないよお』

どんなに狂気に満たされていようと、彼女はフランだ。

意識こそ別物に等しいとはいえ、肉体は彼女のもの。咲夜の時とは
違い、親愛の情が強い相手では、そういったことも気にしてしまう。
切羽詰まったこの状況でも、やはり私は私なのだ。

だが、この状況に甘んじていられるほど余裕がないのもまた事実。

『そうだな……では、流星に攻めさせてもらう』

そう宣言して、私は夫婦剣を離し無手で突貫する。

フランは突然の行動に目を見開き、慌てて私に焦点を合わせようと
するが、遅い。

凜や言峰を見て脳に焼付いた掌底で、胸を穿つ。

ベッドまで吹き飛んだフランに間髪入れず詰め寄り、足を掴む。そ
してそのまま反対側の壁へと投げつけた。

吸血鬼の丈夫さは私も知っている。この程度、然したるダメージに

壊れたレコードのように同じ言葉を繰り返す。

大凡生物が出しているとは思えない、無機質な音。

最早言葉に籠められた意味などどうでもいいかのように、淡々とループする。

しかし、恐怖心を煽るという意味では、これ以上とないものだった。

『フラン——』

声を掛けようとした刹那、私はフランを離し、反射的に横に飛んでいた。

先程まで居た場所に、強烈なまでの熱を持ったナニ力が振り下ろされるのを、横目で確認する。

しかし——私は、そんなものよりもんでもないものを目の当たりにしてしまう。

『四人の、フラン——？』

そこには、文字通り四人のフランドール・スカーレットが立っていた。

無言で私を睨み付けるフランが私に攻撃したらしく、右手には噎せ返る程の炎を纏った大剣を握り締めている。

無意味に笑顔が絶えないフランが最初のフランの鎖を破壊し、消沈したような表情のフランは、何もせず私を見つめている。

『……いつからかな、私はこういうことが出来るようになったんだ』

締め付けられた手首を回しながら、最初のフランが語り出す。表情こそ違えど、全く同一の存在が一齐に私を見ているという現実が、未だに信じられないでいた。

『理由は知らない。だけど、予想はつく。これらは間違いなく私。決して虚像を映している訳でもなく、きちんと肉体もあり、個別の自我もある。どれかがハズレとか、そういうのは無い』

『全部が私。換えの効かない、独立した生命。生物の持つ代表的な四つの感情が、カタチとなった存在』

『喜、怒、哀、楽。それぞれがその役目を担っていて、個体に該当しない感情は決して湧き上がらないようにできているの』

『不気味？ だけどね、こんなでも私なんだよ。お父様のことを慕った、フランドールなんだよ？』

楽、怒、喜、哀と順に語っていく。

独立しているとは思えない程に統率された言語回路。

分裂体だから成せる、意志の疎通。元が同一の存在だという、何よりの証明。

だが——本当にこのフラン達は、幻影でもなんでもないのか？ もしそれが事実だとするならば——実質、サーヴァントクラス、いやそれ以上の能力を持った存在が三体増えたことになる。

……考えるのはよそう。絶望的だが、今更後には引けない。いや、その意思があるうとも、こんな状況では逃げられる気がしない。

腹を括れ、エミヤシロウ。お前は一对多に於いて、生き残ることに特化した存在だろう？

殲滅が勝利条件ではないのだ、ならばまだ希望はある筈だ。

『私は私だけど、』私 じゃない。そして、エミヤシロウが望むフランドールは、ただ一人』

『貴方が救いたいフランドールはどれかな？』

『間違つて殺しちゃったら、二度と取り戻せないかもね。貴方の望む、優しくて子供っぽいフランドールはどれかしら』

『それでも、貴方は私に刃を向ける？』

『出来る訳ないよね。だつてお父様は優しいから』

『そして優しいが故に、ここで死ぬの』

燃えたぎる大剣を不器用に構え、突きつけてくる。
それが合図となり、再び死合いが開始した。

『はあつ———！！』

掛け声と共に振り上げられた大剣を、転がるようにして回避する。
そのまま振り下ろされた剣が、地面を抉り、地面を焦がす。

『そんな細腕で、よくまあ……。流石は吸血鬼といったところか』

そうごちりつつも、追撃で振るわれるそれを必死に回避していく。
風を切り、壁に命中する度に鳴る轟音。それは最早剣ではなく、鉄塊と言っても差し支えない威力。

バーサーカーの一撃には劣るが、それに準ずる破壊力を秘めているのは、一目瞭然。

しかもこんな狭い空間で振り回されては、反撃もままならない。

……だが、それが全部不利益を買っている訳でもない。
行動を制限されているのは彼方も同様らしく、分裂体の主立った行

動は見られない。

その代わりに、合間を縫って炎のような弾を放ってくる。

元は同じ肉体から分裂したのは伊達ではないらしく、絶妙なまでのタイミングで放たれるそれは、大剣を回避するので精一杯な私は、地味ながらも確実にダメージを受けていった。

『ほらほらあ、逃げてるだけじゃあつまらないよ？』

挑発には耳を一切貸さず、一瞬の隙を待つ。

……しかし、解せぬ。

先に比べて格段に行動を制限されているのに、あの破壊の掌を何故使わない？

今なら簡単に仕留められる筈の私に、悪手ばかり仕掛けるとは。先程までの容赦のなさからは想像がつかない。

何か理由があるのか？例えば、分裂した副作用とか。

意図的なものではなく、欠点としての理由ならば安心できるが……

…証明しようがないのでは、推測止まりだ。

寧ろ、それが油断に繋がる可能性すらある。

——そう、こんな風に。

『ボーツとしてたらいけないなっ——とお!!』

フランの叫びによって思考が遮られ、気付けば鉄塊が眼前にまで迫っていた。

反射的に投影した夫婦剣で防御を試みるが、案の定身体ごと吹き飛ばされ、壁をも砕く威力で叩きつけられた。

苦悶の声を上げる余裕がすら与えてくれない、絶対的な一撃。

フランを救いたいという強い意思がなければ、確実に気絶していたであろうが——意識があるだけで、身体は思うように動かない。

それを遠目から理解したのか、フラン達は揃って此方へと近づいて

くる。

その内の二人が私を左右から持ち上げ、鉄塊を持つフランは、それを最後の一人に渡したが否や、胸部を全力で殴りだした。

サンドバック同然の扱いから脱することも抵抗することもままならず、ただただ耐え続ける。

秒間十を超えるラッシュを余すところ無く叩き込まれ、フランが一息吐きだした頃には、混濁した意識を繋ぎ止めるだけで精一杯になっていた。

『苦しい？苦しいよね？……でも私は楽しいよ？普段は感情のひとつが必死に抑えてるんだもん。おあずけを沢山食らった動物が、よしと言われた時みたいになれに素直になれるんだもん。それを自意識で我慢する理由なんて、どこにもないでしょ？』

演劇の役者のように大げさな身振りで語り出す。

掠れた意識の中、言葉に籠められた感情が耳を通して私の中へ浸食していく。

衝動は、誰しもが持つもので、特別なものではない。

そして、衝動の殆どは意識的に抑制される運命にある。

長生きしていくには、本能なんてものは邪魔でしかない。そういつたものの大半は、自分自身の利にしかならないように出来ているからだ。

力を持たない存在が本能に従えば、自然と淘汰されていく。出る杭は打たれる、集団に身を寄せている事だけに限らず、ヒトというのは自分より優れた者、つまり頭一個飛び抜けた存在を許容しない。それは嫉妬や強欲などのヒトが持つ醜い感情が、弱者を欲している故に起こる椅子取りゲーム。

絶対的強者に束縛されることが、生まれた瞬間から運命づけられているのが生物だ。社会性を持たずとも、それは弱肉強食という力タチで実現する。

だからせめて、自分の手の届く範囲だけでも優位に立ちたいと切に願ひ、その結果ヒトは上辺だけでも善人ぶり、陰で他者を蹴落とす裏でしか晒せない下劣な感情。普段は抑えられている分、自然と反動は大きくなる。

特にフランのように精神的に幼い子が感情を抑圧すれば、発散する手段を見いだせないまま、暴走することだって決して稀な話ではないのだ。

分かっている。誰が悪いわけでもないのだ。

我が身を恋しいと思うことも、自分の世界を護ろうとすることも、我を守ろうとすることも、間違いではない。

ただひとつ憎むべきなのは——望まない運命を押しつけた、世界だ。

『——つまんない。言葉を交わす気力もないんだったら、もういらないよね。さ、貴方がトドメを刺しなさい』

反応を示さなかったことに不満を持ったらしく、玩具に飽きた子供のように、足下に落ちた剣を拾ひ、フランの一人に渡す。

……未だ身体は動かず。無茶をすれば瞬間的には動けるかもしれないが、こう腕を掴まれたままではそれも無意味。

——我ながら莫迦なことを考える。最後の最後まで無様に足掻く、そんな在り方が当然だったエミヤシロウが、今更諦めるだと？

指が動かないからなんだ。身体が石のようだからなんだ。その程度の苦行、今まで幾度と経験しただろうが——！！

『さて、遺言はある？愛しい娘に看取られるんだし、少しは気の利いた言葉よろしくね』

『……残念だが、何も言うことはない』

何せ、こっちは敗北を受け入れてはいないのだから、それを言う理由は何処にもない。

『……………そう。最後までつまんない』

それだけ言って、踵を返し壁へと歩いていく。

相對するのは、哀しそうな表情のフランのみとなる。

フランは無言のままゆっくりと大剣を振り上げ、静止する。

一瞬の隙を突き、この危機を脱する。その為にいつ振り下ろされるかも分からない剣先に意識を集中させる。

余裕ぶって一人離れたことで、逃げ道は確保できた。後は、堪え忍ぶのみ。

『……………けて』

時間にして十秒は経っただろうか。一向に振り下ろされない剣に不信感を抱きつつ、哀のフランの表情を覗き見ると、口元が僅かに動き、何か呟いているのに気付く。
そんなことをしている余裕はないというのに、私は何故かその呟きに意識を集中させていた。

——そして突然、フランは瞳の色と同じ紅の雫が頬を伝う。

『お父様……………助けて』

それは、叫びだった。

小さく紡がれたそれは、今までのどんな救いを求める声よりも、重く深く私に刻まれていく。

本能に抗えない吸血鬼の少女が取った、精一杯の抵抗。精神力のみで肉体に反抗し、自身の思いの丈を伝えたのだ。そんな彼女の言葉を聞いた瞬間——私は悟りを開いたかのように、無心になっていた。迷いとか躊躇いとか、そんなものを超越した意識が、私の全てを満たしていた。

——トレース・オン
“ 投影、開始 ”

言葉にしたのか、心の中の呟きだったのか。
突如背後のフラン達の頭上に展開される、無数の剣。それらは間もなく目標に向けて降下し、脳天から深々と突き刺さる。

「■■■■■■■■■■——！！」

大凡少女が出すものではない、聞くに堪えない絶叫が響く。
それと同時に手の拘束が取れ、瞬時に手に干将・莫耶を投影し、背後に振り向く遠心力で、突き刺さった剣ごと二人のフランの首を刎ねた。

絶叫が消え、血飛沫の飛ぶ音が絶えず聞こえる中、諸悪の根源はようやく現状を把握する。

楽の感情のみが全ての筈のフランは、歯をカチカチと鳴らし、震える身体を必死に抱き締めている。

そんな姿を尻目に、私は最後の敵へと疾走する。

干将・莫耶を投擲し、それに気付いたフランが両腕でそれを弾く。

——それが、罨。

フランが剣を弾き飛ばした頃には、両者の間合いは一寸にも満たない程に接近していた。

再び投影した夫婦剣を、容赦なく腹部に突き刺し、同じ工程をもう一度繰り返し返す。

計四本の剣が痛々しく身体を侵し、突き刺した衝撃で少女は壁に礫となる。

そして、再び投影したのは干将・莫耶。しかし、その姿形はあまりにも変化していた。

魔力を極限まで注ぎ込み、耐久性を無視し、威力を底上げた翼のような形の二対の剣。

干将・莫耶オーバーエッジ。それが、この戦いの幕を下ろす一手だ。

『や、やめ——』

ボロボロになりながら、必死に懇願する声も、最早届かない。全てを言い終える前に、少女の肉体は斜めに交差するように一閃された。

役目を終えたと言わんばかりに、オーバーエッジは硝子細工のように砕け散り、灰すら残さず消滅した。

『あ、あ——……』

振り返ると、未だ剣を構えたまま震え涙を流す、私が望んだフランドールがいた。

私はゆっくりとした歩みで近づく。しかし、それに対して彼女は覚束ない足取りで後ずさりしていく。

……彼女は間違いなく、いつも私に笑顔を向けてくれるフランドールだ。

だが、哀の感情という本質のみを摘出した今の彼女にとって、分身体を殺した私は、恐怖の対象でしかないのだろう。

何せ自分を殺されたのと同義なのだ。それを恐れない理由はない。悲しくはあるが、それを嘆いている暇はない。

徐々に距離を詰めていき、ついにフランは壁に背を預ける形になった。

『あ——ああああああ！！』

フランは迫りくる恐怖に耐え兼ね、鉄塊を振り下ろすように投擲する。

私は避けない。当たらないという確信があつたから。

事実、それは私の頬を掠め、風切り音と破碎音を鳴らすのみで終わった。

憂いは消えたと言わんばかりに私は歩みを加速させ——我が娘をきつく抱きしめた。

『お父——様』

『……すまなかつた、こんな不甲斐ない父親で。私は所詮、誰かを傷つけることでしか救いの道を見いだせない愚か者だ。君を救うために、私は別の君自身を殺した。あんなのは君じゃないと否定し、目を背けることで自分の理想を押し付ける形になってしまった。どれも君自身であることに変わりはないのに、切り捨てることしかできなかつた。私がつと、他人の心に敏感だつたならば、和解できたかもしれないのに——』

懺悔の言葉を唱えている最中、背中に細く柔らかい感触が得られた。それがフランの腕だと理解するのに、時間は要さなかつた。

『ごめんなさい——私が弱いから、お父様をこんなに苦しめていたんだね。お父様は最初、名ばかりの関係を望んでいたのに、いつのまにかこんな親身に接してくれて……わかつていたのに、私はそんな境遇に甘えていた。それがこんな結果を招くなんて知っていたら、私は——』

その次の言葉は言わせないと、フランの身体を更に強く抱きしめる。私は彼女を追いつめたいわけじゃない。ただ、自分は悪くないのだと、知ってほしかっただけなんだ。

『もう、怯えなくてもいいんだ。自分にも世界からも、逃げる理由なんてないんだよ。確かに君の持つ破壊の力は恐怖の対象ともいえる。だが、そんな些末なことで君の人格が否定されていい筈はないんだ。傷つけることに怯え、俗世から存在を遮断して、自分だけが犠牲になれば済むと目をつぶって——そんな犠牲心、レミリアも咲夜達も望んではいない。勿論、私もだ』

『でも、でも——！！』

『分かるさ、今回のように気持ちが昂ぶり、衝動を抑えられなくなることを懸念しているんだろう？ だったら、その都度君を止めてやろう。一回や二回だけじゃない、百や千の数字に至るうとも、決して君を見捨てたりはしない。何故なら——私は君の父親だからな』

抱きしめる腕を解き、フランの頬を撫でる。

こんなにも愛しい娘を、どうして見捨てられようか。

純朴にして純粋な少女に襲った、破壊の力という不幸。

消し去ることができないならば、使わせないように尽力すればいいだけ。

そして、その役目は肉親や知人にこそ相応しい。いや、そうでなければ任せることができない。

『う——わあああああん！！』

慟哭と共に、私の胸に顔を押し付けだす。

泣き叫ぶ瞬間に見えた雫は、紅ではなくしつかりと透明な色をして

いた。

……この雫が、彼女の杞憂を晴らす切っ掛けとなればいいと、切に願う。

後押しはできても、意思決定権は彼女の一存に任せられる。彼女自身が変わりたいと願わない限り、何も変わらない。

だが——それすらも杞憂なんだろうな。

彼女は変わる、間違いなく。

——ゾクリ、と背後に悪寒が走った。

私は反射的にフランを突き飛ばし、振り向いた。

——そこには、礫にされていた筈のフランが、鉄塊を振りぬいて
いる姿があった。

『が——』

グチャリ、と下品な音を立て、私の肉体を切り裂く。

力を使い果たしたのか、それを最後に楽のフランは膝から崩れ落ち、
動かなくなった。

ゆつくりと腹部を覗くと、そこにはあるべきものが半分、ごっそり
と失われていた。

理解した瞬間、口内から大量の血が噴き出す。

そしてそのまま、前のめりに倒れていくのを、スローモーションで
体感した。

『い——いやあああああああああ——！』

残されたフランの叫びが、虚しく部屋中に響く。

『お父様！お父様あ——！しっかりしてよお——！——！』

必死に私の身体を揺さぶるのを客観的に理解する。

先の一撃で、痛みすら感じなくなっていた。

元々肉体的にも限界だったのもあり、言葉すら紡げないほどに弱っているらしい。

……こんな幕引きとはな。

まあ、私がいなくとも、レミリア達がフランを支えてくれる。それに関しては心配いらないだろう。

だが、ひとつ後悔があるとすれば——早苗と別れたまま、最期を迎えることになってしまったことか。

喧嘩別れのような形だったから、彼女のことで、心配してくれていないに違いない。

せめてもう一度、顔を見たかった。

途切れ途切れの意識の中、扉の前に誰かが立っていたのを見る。

そこに立っていたのは——ついさっき会いたいと願っていた少女、東風谷早苗だった。

まさか、幻覚を見るとはな……余程会いたかったんだろうなと、自嘲する。

だが——幻覚でも、満足だ。幻影だろうとも、こんな醜態は晒したくなかったが、文句は言えまい。

憂いがなくなった途端、意識が急速に闇に堕ちていくのが理解する。私はそれに抗うことはせず、静かに意識を闇に委ねた。

幕引き、そして……（後書き）

フランドール・スカーレット

属性：混沌・善

筋力：B

耐久：C

敏捷：B

魔力：A

幸運：D -

宝具：A

クラス別能力（キャラ別能力）

耐魔力（霊力）：C 通常弾幕に対し高度の抵抗力を持つが、スペルカードなど大がかりな攻撃は防げない。

狂化：E 筋力のパラメーターをランクアップさせるが、理性的思考が困難になる。

保有スキル

自己改造：D 自身の肉体に、まったく別の肉体を付属・融合させる適性。このランクが上がればあがる程、正純の英雄から遠ざかっていく。彼女の場合、疑似的なレーヴァティンを現出させる為の触媒を、仙骨部に接続させている。

自己修復：B 生物の持つ自己修復能力がより優れた吸血種は、外面的な傷だけならば瞬時に回復する。膨大な時間は要するが、頭部や心臓を除く部位が破壊されても、自己再生を可能とする。

フォーオブアカインド：EX 発動者の肉体を媒体とし、完全同位

体を三体まで生み出すことができる。ステータス・クラス別能力・保有スキル共に劣化することはなく、それは最早魔法の領域にある。系四体にまで分裂する際、個別に単純な感情のみを分け与える。それは喜怒哀楽という形で表現され、本体の感情が、その者の本質を担っている。

分裂体が死滅しても、感情は本体へと還元される。但し、再発動には一度全ての感情を回収する必要がある。

宝具：ありとあらゆるものを破壊する程度の能力：A 対人 レンジ0～100 最大捕捉：1人

万物が持つ死を掌に投影し、握りつぶすことで破壊に繋げる能力。直死の魔眼のように、死そのものが見えているわけではなく、死の点はいくまで彼女のイメージに依存する。どちらかといえば、妄想心音に性質が似ている。

概念を投影するには膨大なまでの集中力を要する為、イメージを補助する為に、工程が終了するまで対象の視認することが絶対条件となっている。

条件さえ揃えば、どんな強力な死への耐性を持った存在であろうとも、例外なく破壊する。

レーヴァテイン（偽）：B 対人 レンジ0～10 最大捕捉：5人

仙骨部に装備されている尻尾のような物質を用いて、炎に包まれた大剣を具現化させる。

形状はイメージに依存し、状況次第では槍や弓としても扱うことが可能。

あくまでイメージで創り上げたものなので、本物のレーヴァテインとは性能は全く異なる。

本人曰く一番イメージしやすいのが大剣であり、それ以外に変化さ

せる場合、ワンランク低下する。
その威力は魔力で防御された物質すらも容易く砕く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9415g/>

Fate/Fantasy lord [Knight of wrought iron]

2011年11月22日13時42分発行